
バカとテストと召喚獣～文月学園のカラス～

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜文月学園のカラス〜

【Nコード】

N6134L

【作者名】

クロ

【あらすじ】

2年の春、烏丸大貴 通称ヒロは文月学園に編入した。

持ち前の運の悪さとお人よしな性格のせいで平和に過ごしたいという願いとは裏腹にどんどんトラブルに巻き込まれていく。

その中でヒロは人とどう関わりどう変わって行くのか？

真剣にバカをやるおなじみの文月学園の生徒たちと繰り広げる笑いあり、涙ありの青春コメディ！！開始します！

主人公設定

主人公設定

名前 烏丸大貴 16歳

身長 165cm 体重 55kg

趣味 人間観察、運動

特技 家事全般、剣術 他にもどこからともなくハリセン小烏丸を取り出す、動物を虜にするナデナデなど100の特技なるものを持っている。小細工も割と得意

モットー 【人生は慣れと諦めが肝心】 【恩も恨みも忘れない】

好きな物 一生懸命な人間、人に対する思いやりのある人間 甘いもの

嫌いな物 一生懸命な人間をバカにして笑う人間 烏丸本家 父

海とプール 辛いもの

容姿 童顔以外に特徴のない顔。イメージとしてはサモンイ
ト3のイストラ

黒い衣服を好んで着用する

イメージCV 鈴 健一さん

好みの女性のタイプ 年上の巨乳（これ重要）美人

本編の主人公。面倒見のいい常識人で自分から相手に危害を加える事は滅多とない。

しかし自分や自分が大切にしている人に危害を加える相手には容赦のない報復を行う。

性格は良く言えば義理固い、悪く言えば執念深い。若干捻くれてい

自他共に認める堅実派。

やたらと運が悪く、明久同様酷い目に逢う事もしばしば……。人当たりはいいが、それは人間関係を円滑に進めるためのポーズであり、滅多と人に心を許す事は無い。

しかし優子との触れ合いやFクラスの面々の影響で少しずつ変わってきており、現在は完全に吹っ切れた様子で周りと接している。従来の面倒見の良さもあつて最近隠れファンが少しずつ増えてきている。

木下優子に行為を抱いており、彼女に頭が上がらない。

根っこの考え方はシビアで現実的な為、常に一步引いていて物事を見ている。

(と言うか踏み込んで物事を見る事が出来ない)
意外にナイーブで傷つきやすく最近優子の前ではそれが顕著に出る。自分を斜めに構えて見ているところがあり、自らの性格を『偽善的で打算的なエゴイスト』と分析しているが、周りからはお人よし認定をされている。

地元の名家、烏丸家の出身だが妾の子だった為、周りから冷遇され、苛烈な虐待を受けてきた。

その為、烏丸本家の人間に激しい憎悪を抱いている。

その地獄のような日々から救ってくれた腹違いの姉、烏丸千鶴とその夫、沖田絃馬には多大な恩を感じている。

姉の忘れ形見の静馬を誰よりも大事にしている極度の伯父バカ。

他にも腹違いの兄と妹(同い年)がいるが面識がない。

現在本家から離れ、祖父の家に居候中。祖父制作のトラップの実験台にされたり、家事全般をやらされたりでこき使われているためよ

く殴り合いに発展するが、全敗……。祖父へ対応は他の人間に比べぞんざいだが、本心では慕っている。育った環境のせいか『家族』というものに強い憧れがある。

非常に多芸で高い水準を誇っているが、どれも極めるまでには至っていない器用貧乏。

(良く言えば使い勝手の良い万能タイプ)
泳げないため海とプールが大嫌い。

学力 姫路瑞希に及ばず
策略 坂本雄二に及ばず
身体能力 ムツツリー二に及ばず
行動力 吉井明久に及ばず

密かに自分の器用貧乏や一歩引いてしか物事を見る事が出来ない事をコンプレックスに思っている。

本人は気が付いていないが生い立ちの影響で培われた非常に高い洞察力を持っており人間の言動を観察し、心情を想像してパズルのように組み合わせることで相手の本質を見抜く能力がずば抜けている。そしてその能力は周りの人間に対する処世術や喧嘩の調停などで真価を発揮する

得物を使った格闘戦が得意で、徒手空拳での格闘術は今一つ……(それでも十分強いのだが)

天源無想流 目録を最年少(後に静馬に塗り替えられる)で取得した天才児と言われていたが、自分は努力型の秀才で本当の天才などではない事を自覚している。

中でも動体視力と回復力が非常に優れており、見切りの腕は一級品。剣術のスタイルは見切り、先読み、防御、返し技を重視した後の先をとるタイプ。

攻撃を捨て、守りに徹したら祖父である修介や大貴の師でもある竜馬でさえも大貴の防御を抜くことが出来ない。

策略家としては高い能力を持っているが、堅実故に『ルールの中で最善の手段』しか策を練る事が出来ず、ルールの裏をかいて思いもよらない方法で勝利をもぎ取る雄二には及ばない。

戦闘では綿密に戦略を立てて相手を確実に追いつめ、確実に勝利をする事を好むが、最低限通すべき筋は通す。

前の学校ではある事件から【西橋のカラス】と呼ばれ、【カラスの首を獲れ】などと言われ喧嘩をよく集団で吹っかけられていたため喧嘩はそこそこ強いが、本人はそれが原因で付き合っていた彼女に振られたり、祖父に殴られたりとそんな生活に辟易していた。

【西橋のカラス伝説】というものがあ、暴走族を一人でつぶした、怒るとビルをさら地にするほど暴れる、眼からビームを出す、など様々な噂がある。

昔、秀吉を含めて会ったことがあるのだが3人ともそのことはすっかり忘れている。

召喚獣

装備は日本刀、剣道の袴と胴を身に付けている。

腕輪能力【自爆】 日本史、世界史、現代国語、化学の時のみ発動可能

自分の全点数と引き換えに相手の召喚獣を必ず殺傷できるとい、やや反則臭い能力だが、爆破範囲が残り点数に比例して広がる為戦闘中の調整が非常に難しい。味方を巻き込む可能性が高くなるため、乱戦には不向き。

代償も大きく使った後は必ず鉄人こと西村教諭の補習を受けないといけない。

文字通りの一発技なので、攻撃を外せば無駄死。

自爆を使わなくても強いのだが、大貴自身が召喚獣の扱いが拙い為、どうしても自爆に頼った戦法が多くなる。

成績

文系で歴史関係が得意で日本史と世界史の点数が非常に高い。

他の教科の点数も高く、バランスがいい。

理系は化学のみ400点オーバー。(家でのトラップ解除などで培われた)

数学、物理、英語の3つは200点台と若干低め。

毎日コツコツと積み上げる努力型のため、急激に点数が向上することはないが、逆に落ちることもない。

各キャラとの関係

木下優子

ヒロにとっては現在唯一身内以外で安心して接する事の出来る人物。要するにベタ惚れ。

大貴は優子に絶対の信頼を寄せており、精神的に依存気味。

秀吉同様よくサブミッションの餌食にされる事が多いが周りには2人でじゃれていると認識されている。

吉井明久

災難仲間。よく大貴と一緒に災難(人災)にあう。

割と相性が良く、一緒にいる事が多い。

大貴の面倒見の良さは主に明久と秀吉に対して発揮される事が多い。

意外に勘が良く、ヒロが周りと壁を作っている事に気付いていた。

坂本雄二

人格的にも能力的にも自分の大将として認めている。

ただし翔子に対する煮え切らない態度については口には出さないが、あまり快く思っていない。

木下秀吉

常識人仲間。優子の双子の弟で優子に瓜二つ。

ツッコミを手伝ったり、女子と間違えられるたび慰めたりしている。ちなみに大貴は秀吉の事を【男】として認識している。

優子との見分け方は大貴曰く『何となく気配が違う』らしい。

優子によく制裁を加えられているためある意味災難仲間でもある。

土屋康太：ムッツリーニ

エロ仲間。大貴はムッツリーニを【エロスの伝道師】として尊敬している。

よく調査などの時は一緒に行動しており、割と仲がいい。

意気投合したきっかけは【巨乳談議】なる謎の会議から……

最近は大貴の売れ筋をつかむ能力が高い事に目を付けムッツリ商会でアルバイトとして使っている。そこそこバイト代は良いようだ……。

姫路瑞希

明久の彼女候補として認識。明久にお仕置きをするときなどには彼女から明久を庇う事が多い。必要以上にお互い干渉しないため、あまり親しくないが、お互いに人格を認め合い尊敬している。最初常識人と思っていたが、最近Fクラスの危険思考に染まってきているため若干心配している。

島田美波

明久の彼女候補その2として認識。明久にお仕置きをするときなどには彼女から明久を庇う事が多い。明久関係でフォローを入れる事が多く、静馬と葉月繋がりで仲が良くお互い友人として信頼している。

プロローグ

春、満開の桜も散り葉桜に移り変わる頃、オレカラスマヒロキ烏丸大貴は他の人より1週間遅れの新学期を迎えている。

思い返せばついていない。料理をしている最中に調味料を切らしてしまい、買いに行ったはいいがこの店も品切れ中。

仕方ないから自転車で1時間近くかかる隣のスーパーまで足を伸ばし定価より少し高い調味料を手に入れた後、自転車の鍵を落とした事に気が付いて探し回る事30分・・・。

結局鍵が見つからず、仕方なく鍵を壊している所をお巡りさんに見つかり職質をかけられる・・・。

拳句の果てが急いで家に帰る途中信号無視してきたトラックに撥ねられて1週間の入院生活を余儀なくされる始末・・・。

神様、オレなにか悪い事しましたか？

不幸の神様、そんなにオレの事が好きかい？

オレはあんたなんか大嫌いだ、バカ野郎！

しかしオレトラックに撥ねられたのによく全身打撲程度の怪我で済んだよな・・・。

あれ？そう考えるとこれってむしろついてないか？

そうだ。そうに決まっている！

時速60キロのトラックに撥ねられて3m位吹っ飛ばされたのに今生きている！

これはむしろ物凄くついているに違いない！

ありがとう神様！

オレ今日からこの幸せ噛みしめて生まれ変わった気持ちで生きていくよ！

オレはネガティブ思考を無理やりポジティブ思考に切り替えて軽い足取りでスキップをしながら学校に向かい足をすすめた。

そう、着地点にバナナの皮が捨ててあるとも知らずに・・・。

プロローグ（後書き）

こんな感じでやって行きたいと思います。

このような駄文を読んで頂き本当にありがとうございます。

第1部開始 第1話 バナナの皮を使ったボケはもう古い？

第1部開始

オレが今日から編入することになっている文月学園は、世界で初の試験召喚システムという物を採用している。なんでも昨今の著しい学力低下に対する対策らしい。

試験校で多くのスポンサーが付いているという事もあり、学費は非常に安い。(これ重要)

他にも、オカルトと化学と偶然が重なって出来た召喚獣やら試験召喚戦争やら様々なシステムが導入されているらしいが、たいして興味がなかったため、よく覚えていない。

まあ、知らなければ死ぬって訳でもないし、必要だったら覚えればいいだけの話だよな。

オレはそう考え大きなタンコブの出来た頭をさすりながら予定より1時間遅れで職員室に入ったのだった。

H I D E

「失礼します。」

職員室に入ると浅黒い肌をした短髪の筋骨隆々という言葉がピッタリ当てはまりそうな大男がオレを出迎えた。

「生活指導の西村宗一だ。ずいぶんと遅かったな、烏丸。待ちくたびれたぞ。」

「すみません。西村先生バナナの皮で滑って転んで1時間ばかりのびてました。」

オレは起こった事を正直に話し謝ったが、西村先生に真面目な顔で嘘を付くんじやない！と、言われ鉄拳制裁を食らい、本日2つ目のタンコブにさすがにオレも落ち込んできた。

まあ、普通は信じないよな。オレが先生でも信じない。

終わった事はしょうがない。次行こう、次。

「それで振り分け試験はこれからですか、先生？」

「いや、お前は振り分け欠席という事でFクラス行きと言うことになった。当日までの体調管理も実力の内という事になっている。悪く思っちな。」

「そうですか。そういう事ならしょうがないですね。」

「何だ。あっさりしているな。もっと食い下がるかと思っていたぞ。」

「学校の方針に文句言ってもしょうがないですしね。それに人生渡つていくには【慣れと諦めが重要】というのがオレのモットーですから。」

「深いのか、浅いのか、思い切りがいいのか、怠惰なのか、良く分らないモットーだな。」

「ええ、オレもそう思います。それじゃあ失礼しました。」

会話を切りオレはFクラスなる教室へ担任の福原先生と共に向かった。

さて鬼が出るか、蛇が出るか。楽しみだ。

明久SIDE

教室はBクラス戦の話をもつちのけで今日入ってくる編入生の話で持ちきりだ。

なんでも振り分け試験の日に病気で試験を受けられなかったらしいから間違いなくFクラスに来るだろう。須川くんが遠目から確認した情報によると結構かわいい顔をしていたらしい。女子が3人(?)しかいないこのFクラスに潤いが出る事に僕はワクワクしていた。

「ねえ、雄二」

「何だ、明久？」

「今日って編入生が入ってくるって聞いているけど少し遅すぎない？」

僕は隣の悪友の雄二に聞いてみた。

「そうだな、大方初日のお前みたいに寝坊か何かだろう。それよりCクラスへの挑発も終わった。後は根本のクソヤローの息の根を止めるだけだ。編入生の事が気になるのは分かるが、それで足元をすくわれなよ。」

「分かってるよ。自分から言い出した事なんだし、しっかりやるよ！」

「そうだ、編入生の事も気になるけど姫路さんのために頑張らないと！僕がそう改めて決心した時、Fクラスのドアが開き福原先生と一緒に見知らぬ生徒が入ってきた。」

ヒロSIDE

Fクラス、最低クラスと言うだけあって想像を絶するボロさだ。魔窟と言ってもいいだろう。こんな中じゃ勉強する気もおきないんじゃないか？

「はい、それでは烏丸君自己紹介をしてください。」

おっと余りのボロい教室・・・訂正、趣のある教室に、軽くトリップしてしまつたよ。

危ない、危ない。えつと自己紹介、自己紹介。

「はじめまして。烏丸大貴カラスマ ヒロキです。気軽にヒロと呼んでください。」

趣味はスポーツと人間観察、特技というほどでは無いですが、剣道と野球と家事全般がそれなりに出来ます。これから1年間よろしくお願いします。」

うーん、我ながら面白みに欠ける自己紹介だ。

「気軽にヒロ」の部分で「気軽にダーリン」ってしといた方がよかつたかな？

まあ、いいか。ここでもし全員から「ダーリン」なんて呼ばれたらショックで立ち直れないかもしれない。奇抜な事は避けておこう。そんなことを考えながら担任に促され適当に席に着きHRを終えた。

今年1年平和に過ごせますように・・・
そんなオレのささやかな願いは編入初日から砕かれてしまった。
それはもう、木っ端微塵に・・・。

第2話 嫌よ、嫌よも好きの内と言うが嫌な物は嫌だ！

ヒロSIDE

今俺の前には非常におぞましい物体がいる。これが「目が覚めたら今までの事がすべて夢だった。」そんな三文小説のような落ちだつたらどれだけよかつただろうか。

しかし現実はその甘くない。オレが認めようが、認めたく無かろうが「ソレ」は確かに現実としてオレの・・・いや、オレ達の前に確かに存在しているのだ。

なんでだ？なんでこうなつた？

落ちつけオレ！こうなつた原因を突き止める！

そう、あれは遡る事少し前Bクラスとの試召戦争の前・・・すなわちオレの自己紹介のすぐ後に遡る・・・。

自己紹介も無事終了してクラスの奴らと交流を深めていた。

後ろで須川とかいう奴が「女子だつて言つたのに嘘つき！」と言つてボコられているのは気にしない事にしよう・・・。

まず最初に話しかけてきたのは、吉井明久と木下秀吉と言う男？だった。

「僕は吉井明久。よろしく。「観察処分者つていうキングオブバカつていう肩書を持っているよ。」つてやめてよ、秀吉！僕のセリフみたいに後ろで話すの！」

「何を言うのじゃ、明久。これでお主の正当な評価が正しく伝わつたじゃろう？」

わしは木下秀吉じゃ。よく間違われるがワシは男じゃからのう。よろしく頼むぞ。」

おお、芸達者な奴らだな。それに面白そうな奴らだ。仲良くやれそ
うだ。

それにしてもこっちの木下って良く間違われるって言われて納得できるほどかわいい顔しているな……。

突っ込んだ方がいいのかな？いや、しかし本人気にしてるなら聞いたらまずいだろうし、やめておこう……。

「ああ、よろしく頼むよ。」

次に後ろから背の高い男とカメラを持った男子が自己紹介をする。

「オレはこのクラスの代表の坂本雄二、そっちのカメラをもっている奴は土屋康太こと寡黙なる性識者だ」ムツリーニ

「……！！」ブンブンブン！！

「後ろですごい否定しているけど……。」

「奴はシャイなんだ。」

「……そうなんだ。」

深く突っ込むのはよそう。人には誰だって知られたくない事の100個や200個はあるはずだ。決して突っ込んだら負けだと思つた訳じゃないよ！

そして最後に女子二人

二人ともかなりかわいい。

「ウチは島田美波。海外育ちで日常会話は出来るけど読み書きが苦手です。趣味は……。」

嗚呼、心が洗われる。こんな魔窟にこんなかわいいのが二人。きっと趣味も可愛らしいんだろうな。

「アキを殴る事です。」

一瞬でオレの思考がフリーズした。彼女は魔窟の中の魔王だったよ。うだ……。

吉井が何か言っているが今オレは自分の思考を整理するのに精いっぱいだ。

「えーと、結構な御趣味をお持ちで……。」

「待って、ヒロ！その返しは何かが違う！！」

うん、吉井が何か言っているが気にしない方向で行こう。

さて、あと一人だがこの子も一癖、二癖持っているんだろうな。

もうここまで来たら腹括ろう！さあ、バッチこい！！

「あ、あの姫路瑞希といいます。特技は料理です。よろしくお願ひします。」

なんかスミマセン。身構えてしまってスミマセン。すごく常識のあ
るいい子だ。

良かった。まともな子がいたよ。

あれ？なんで吉井達は青い顔して固まっているんだ？何か姫路が変
な事言っただかな？

思い当たらない。まあ、こいつら変わり者みたいだしな。

オレが考えても分からないだろう。

自己紹介も終わり、今FクラスはBクラスと試験召喚戦争の真つた
だ中だと説明を受けた。

どうやらBクラスの代表はかなりの卑怯者の様だ。

オレは今回試験を受けていないから参加できないが、せめて勝利を
祈っておこう。

そして、結果は根本に何かされたのか、ご立腹の吉井の壁粉碎によ
る奇襲とムツツリー二の窓からの奇襲によりFクラスが勝利を収め
た。

うん、ここまででは壁粉碎などの問題はあるけど問題無い。

肝心なのはなぜこのおぞましい物体、すなわち根本が女装するなん
て訳の分からない事態になっているのかだ。

「坂本！このおぞましい物体を今すぐ夢の島に埋めに行こう！この
ままじゃオレを始め、周りの人たちの精神衛生上非常に好ましくな
い状態に陥ってしまう！」

「落ち着け、ヒロ。これはAクラス戦の為の布石だとさつき説明し
ただろう。」

それにこんな埋めてしまったら環境破壊もいい所だ。」

「そんなこと言っただってこのままじゃ夢に出てくるよ！ほら、向こ

うで誰かが嘔吐してるし!!」

「分かった、分かった。じゃあこれはオレが責任もって処理しといてやるからお前は明日の回復試験に備えて今日は帰っていいぞ。」

「分かった。なんだか後始末を押し付けるみたいで気が引けるけどよろしく頼むよ。」

「気にすんな。その代わり次のAクラス戦では暴れてもらうからな。」

「了解。任しとけ!」

後の事は雄二に任せてその場を後にするオレの耳に「撮影会」などと言う単語が聞こえてきたが空耳に違いない。と言うか空耳であつてくれ!!

第2話 嫌よ、嫌よも好きの内と言つが嫌な物は嫌だ！（後書き）

キャラがうまく動かせません・・・。

精進します・・・。

次話でヒロイン登場させます。

第3話 吊り橋効果って本当に効果あるんだね・・・

夕暮れ時の商店街、カレーやらコロッケやらの匂いが空腹時の胃を刺激して空腹に拍車をかける。

「さて、今日の晩飯の食材も買ったし、帰るか・・・。」

オレはあの後晩飯の食材を調達して帰るところにふと見た事のある姿が目にとまりそいつに呼びかけた。

「おーい、木下！」

振り向いた木下は重そうな買い物袋を提げ何だか眉間にシワをよせて何やら不機嫌そうだった。

「誰？」

「おいおい、冷たいな。同じクラスの烏丸大貴だよ。もう忘れたのか？お兄さんは悲しいよ。」

さっきまで一緒に教室で勉強していたのにもう忘れられるなんて・・・。

内心ひどく傷ついたが、おどけて見せた。

「ふふ。」

あ、笑った。やっぱりこうして見るとそこらの女子を寄せ付けないほどかわいいな・・・。

って何考えてるんだ、オレ！木下は男だぞ！ダイクサイド暗黒面に堕ちるな、烏丸大貴！！フォースを感じるのだ。って何処のスターウォーズやねん！

よし、落ち着いた。取り乱してごめんなさい。

「ちよつと大丈夫？」

「・・・ああ、すまない。大丈夫。木下の笑った顔がかわいかったからちよつと取り乱しただけ・・・。」

「え、ええ！そ、そう？・・・ありがとう。」

やらかしたー！男相手にあれは無いつて！そして何処のホストのセリフやねん！

絶対引かれた！グッバイ、オレの平和な高校生活……。

「あー、この辺人通り少ないから送って行くよ。荷物貸して。重いだろう。」

「え？うん、じゃあお願いするね。ありがとう、ごめんね……。」

「……気にしなさんな。」

誤魔化せたかな？なんだか空気が微妙に重くていたたまれないな……。

優子SIDE

あの気持ち悪いBクラス代表が試召戦争を仕掛ける準備があると交渉に来たあと私はあのインパクトのある光景を忘れるため商店街で買い物に没頭していた。

そして烏丸君と言う人に声をかけられ今にいたるんだけど、こんな人Aクラスにいたかな？

それになんだか妙な雰囲気になったわね。

けど悪い気はしないのはなんでだろう……。

男はみんな秀吉の方をちやほやするけど私の事を面と向かって褒めてくれたのは、本当に久しぶりで嬉しかったのかな……。

それなのに私この人の事同じクラスらしいのに何にも知らないな……。

すごく申し訳ない気分だわ……。

この時、私はこの人の事少しづつ知っていきたくと思った。

そうこう考えているうちにあっという間に家に着いてしまった。

「荷物持ってくれてありがとう。また明日学校でね。」

「ああ、また明日な。」

小さくなっっていく烏丸君の背中を見送りながらわたしはもっと話をしてみたかったと思った。

明日も学校で会うんだし、その時に話せばいいよね……。

翌日、Aクラスに烏丸君の姿は何処にも無かった……。

昨日のことがあるから木下と顔を合わせ辛い。

くそ、朝から鬱だ……。

「おはよう木下、吉井。」

「おはようひじゃ〜ヒロ」

木下と顔を合わせるのが少し気まずかったけど昨日の事を何も触れてこないという事は誤魔化せたという事でいいのだろうか。

しかし今思うとあの時の木下と今の木下と比べて何か違和感を感じるのはなんでだろう……。

いや、考えるのはよそう。

今は、Aクラス戦に向けて集中する時だ。

昨日坂本にこの試召戦争は振り分け試験の日に高熱を出して途中退場で無得点になった大好きな姫路の為に吉井が言い出した事だと言う事を聞いた。

オレはその吉井の考えは自分のことしか考えていないオレには無いとても尊いものだと感じたよ。

坂本も木下もムツツリー二も島田も姫路もそれぞれ大切な物の為に戦っている。

吉井たちといればオレも変わるかもしれない。

オレは試召戦争に興味が無かった。だけど友達が大事な物の為に戦っている。

オレは自分の事しか考えられなかったオレと決別したい。

それならオレが吉井たちのためにやる事は決まっている。

あいつらが勝利するために全力を尽くす。ただそれだけだ！

そう決意しオレは回復試験に挑んだ。

第3話 吊り橋効果って本当に効果あるんだね・・・(後書き)

すみません。少し変えました。

第4話 上履きつて匂いとぶつけられるのどっちがダメージが大きいんだろう

ヒロSIDE

Bクラス戦から2日、Fクラス全員の補給も終えて僕たちのAクラス戦への気力はみなぎっていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにもかかわらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってこそだ。感謝している。」

「ゆ、雄二どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ、自分でもそう思う。しかしこれは偽りのないオレの気持ちだ。そしてヒロ。なし崩し的にオレ達に協力することにしてしまつてすまない。」

「よしてくれ、坂本。オレはオレでちゃんと考えてこいつに参加するんだ。それに今回の事でオレは無理を現実にするために行動することをお前たちから教わった。礼を言いたいのはこっちの方だよ。だから勝とう。無理な事を現実に、実際に出来るんだと言う事を証明するために。」

「ああ、もちろんだ。ここまでできた以上勝って生き残るためには勉強すればいいつてもんじゃないつて事を周りに見せてやろうぜ!」

「ooo!」

さすがだな、坂本。この集団をここまで纏め上げるなんて・・・。オレ達なんかとは格が違う。

まあ、オレ達はオレ達で出来る事をやるとしますかね。

「皆ありがとう。しかし残るAクラス戦団体による5対5で決めたと思う。オレはAクラス代表の翔子と戦う。」

「バカの雄二が勝てるわけ無いじゃなあああ!」

吉井の失言対しに坂本がカッターを投げつけ威嚇する。

・・・威嚇だよな?

「次は耳だ」

本気だったんかい！

「さ、坂本何か手があるんだろ。それを教えてくれないか？」

「チツ。それじゃあこれから作戦を説明する。」

要約すれば作戦は坂本までに最低でも2 - 2に持って行って坂本が小学生レベルの日本史に大化の改新が出れば確実にAクラスの代表は必ず間違えると言う物もちろん最終戦までに勝負を決めてしまっても問題ない。

という2段構えだ。

それにしても坂本Aクラスの代表とずいぶん親しげだな。

「あの坂本君」

「ん？どうした姫路。」

「坂本君はその・・・霧島さんと仲が良いんですか？」

「ああ、あいつとは幼馴染だ。」

ああ、なるほど。親しげなものなずけ

「総員狙えええ！」

うお！なんだ？吉井の号令で全員が上履きを脱いで坂本を狙っている？

「吉井、落ち着け。何やってんだ！！」

「止めるな、ヒロ！Aクラスの前にあいつを殺す！！待て、須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後口に押し込むものだ。」

「さっきまでのまとめりは何処に行った？そして須川も了解じゃないだろ。止めようよ、この状況を！」

「あの吉井君。」

「ん、何？姫路さん」

おお、姫路この状況を何とか

「吉井君は霧島さんのような人が好みなんですか？」

「そりゃ、まあ美人だし」

「え？なんで姫路さんは僕に攻撃態勢を取るの？そして美波はなんでそんな危険な物を僕に投げつけようとしているの？」

してくれそうになかった。嗚呼、これどんなカオスだよ！さっきまでのオレの感動は何処に持っていけばいいんだよ！

その後木下が何とかその場を収め事態は何とか解決した。

第5話 関節技は少しきつめのストレッチと・・・思えるか！

ヒロSIDE

あれ？ 何でオレ関節極められてるんだろう？

オレ何か悪い事したっけ？

不幸の神様お久しぶりです。出来れば二度と会いたくなかったよ、ド畜生！

オーライ、オーライ順を追って説明しよう。あれは上履き事件（勝手に命名）の後Aクラスへ交渉と宣戦布告へ向かった時に事件は起きた。

「あれ、木下いつの間にAクラスに来たんだ？しかも女装までしてお前の趣味をどうこう言うのは気が引けるけど、自分の事男だって豪語するんだっいたらそういうのは控えた方がいいぞ。」

そうこの事から分かるように事もあろうにオレは木下の姉、木下優子を女装した木下「弟」と間違えてしまったのだ。

しかもこの前商店街で会ったのは姉の方だと言うではないか。

そのうっかり発言がもとでオレは坂本たちがAクラスと交渉している間ずっと関節を逆に曲げられ続けていた。死ぬかと思った・・・。

優子SIDE

全く腹が立つわね！よりもよってアタシを女装姿の秀吉を間違えるなんて！

しかもこっちが探していた事も全く知らなかったなんて。

アタシと秀吉を比べないで見てくれる人がいたと思ったら結局ソレ？！

まあ、いいわ。もうすぐFクラスとの試召戦争だし秀吉ごと完膚なきまでに叩きのめしてあげるわ。
待ってなさい烏丸君、秀吉！

「・・・優子、Fクラスとの試召戦争は5対5の一騎打ちになったから。」

「ええ？そんな！」

ヒロSIDE

「まさか姉上とヒロが知り合いだったとはのう、世間は狭いものじやのう。」

「そうだな、なんだかえらく嫌われているみたいだけどな。」

この前の事をあんなに不愉快に思っていたとは・・・。

拳句の果てには女装木下と間違える始末・・・。

木下姉には悪い事をしたな・・・。

反省点だ。うん、決めた。試召戦争が終わったらちゃんと謝ろう。

態とじゃ無いにしても、きつと木下姉を傷つけただろうし・・・。

・・・骨の1,2本は覚悟しておこう。

「両名とも準備はいいですか？これよりAクラス対Fクラスの試験召喚戦争を始めたいと思います。先鋒の方前に出てください」

Aクラス担任の高橋先生の言葉によりオレ達の最終決戦は始まった。交渉の結果よりオレ達に科目の選択権が与えられているらしい。

坂本、グッジョブ！

さあ、楽しい戦争の時間DEATH。

先鋒戦は秀吉と木下さんの姉妹(?) 対決だ。

秀吉がどれだけお姉さんの集中力を乱せるかが勝敗の鍵になるだろうね。

「秀吉、ちよつといいかしら?」

「なんじゃ、姉上?」

「あなたCクラスの小山さんって知ってる?」

「はて、誰じゃそれは?」

あれ? 小山さんって確かBクラス戦で秀吉がお姉さんに変装して挑発したって言うあの人のよね。

「ふーん、ちよつと来てくれるかしら?」

「何じゃ、姉上。なぜワシの腕を掴むのじゃ?」

「あんたCクラスでいったい何を言ってくれたのかしら? どうして私がCクラスの人たちを豚呼ばわりしたことになるのかしら?」

「はっはっは、それはじゃな姉上の本性をワシなりに推測して・・・ちが、姉上! そっちの関節はそっちには曲がらな・・・ギャアアアア!」

「秀吉急用ができて帰るだつてさ。烏丸君出してくれる」

返り血を拭いながら最高にいい笑顔な木下さんは最高に怖かった。

「吉井、次鋒は頼んだ。姫路にいいとこ見せてやれ。健闘を祈る。」
そう言つてヒロは木下さんと相対した。あれ? さっきの言葉つて死亡フラグ?

「教科は日本史でお願いします。」

「承認します。」

「試験サモン召喚獣召喚」

烏丸大貴 VS 木下優子

402点 398点

「バカな!? Fクラスに姫路さん以外にあんな隠し玉が!?!」

「拙いんじゃないか!?!」

「いや、しかし点数はほぼ互角だ!」

Aクラスの生徒に戦慄が走る。

日本刀に剣道の袴と面と小手を除いた防具を付けているヒロの召喚獣とは西洋鎧にランスを持っている木下さんの召喚獣が向かい合った。

点数はほぼ互角、腕輪を持っている分だけヒロが少しだけ有利かな?

「行くぞ、木下姉。」

「来なさい、返り打ちよ。」

こうして最終決戦の火ぶたは切って落とされた。

第6話 相手に期待しているから怒るのだ

雄二SIDE

ヒロと木下さんの戦いは周りの予想を裏切ってヒロがかなり追い込まれていた。

「クソ、攻撃が当たらない。」

そう、ヒロの召喚獣の攻撃はことごとく木下姉の召喚獣にかわされ、いなされ、受け止められていた。

「確かに烏丸君の学力はAクラスレベルだけどそれだけじゃ、勝てないよ。」

木下姉は自信満々に言い放つ。

「雄二、なんでヒロは追い込まれているの？」

明久がオレに聞くがオレにも分からない……。ん？明久？

「しまった。そういうことか！ヒロはついこの間編入してきたばかりだ。と言う事は観察処分者の明久の逆で召喚獣の扱いに全く慣れていないんだ。」

「そんな、それじゃあ」

「ああ、あのままじゃ木下姉の餌食だ。」

烏丸大貴 98点

木下優子 324点

「畜生！すべてはオレの作戦ミスだ。」

2段構えの最初の1つ大将戦までに決めるといっのはヒロの勝利が絶対条件だ。

オレ達は早くも追い込まれてしまった事になる。

「勝手に負けると決めなさんな。まだオレは死んでないぞ。」

落ち着いた声でヒロはオレ達に声をかける。

「けどその点数差じゃもう・・・」

「残念ながら明久の言う通りだ。棄権しろ、ヒロ！今なら補習室行きは免れる事が出来る！」

「味方もそう言うてるし、棄権したら・・・烏丸君。このまま行けば間違いなく補習室行きよ。」

「全く・・・。木下姉少しタイムもらえるか。」

「いいわよ、別に」

「坂本、吉井、心配してくれるのはうれしいが情けない事を言うな！勝って生き残るためには勉強すればいいってもんじゃないって事を周りに見せてやるんだろう。だったらそこでどっしり構えてろ！」

ヒロの言葉を聞いてオレはハツとした。

そうだ、そうだったな。オレの言葉をみんな付いてきた。それなのに代表のオレが先に泣き言言ってどうするんだよ。

「それになこのままじゃ終われないんだ。死んでいった木下の為にも！！」

「秀吉はまだ生きてるぞ、ヒロ！かつこいいこと言ったのに台無しじゃねえか！」

SIDEヒロ

「さて待たせて悪かったな。」

「どうしても棄権してくれないの？」

「ああ、オレが補習室送りにならないように気を使ってくれたのに悪いな。」

「・・・バカ。もう勝ち目なんてないじゃない！」

「そうだよ。オレ達はバカだ。確かにこの点差じゃオレの勝ちはもうないだろうな。」

「だったらどうして！」

「勝てなくても負けなければいいんだ。オレがやられても後ろには

あいつらがいる。だからオレはここで泣き言だけ言ってやられるわけにはいかないんだ。」

「・・・分かった、それじゃあ私も本気で行くわ。」

「ああ、受けて立つ！」

大丈夫だ、オレはまだやれる。

木下姉の猛攻をオレは防ぎ続けたがどんどん点数は削られていく。そしてとどめの一撃を放とうと大振りになった所にオレは木下姉の召喚獣に自分の召喚獣に取り付け腕輪の能力発動の為のキーワードを唱えた。

「自爆！」

木下姉の召喚獣はオレの召喚獣の自爆を受け戦闘不能に勿論オレの召喚獣も戦闘不能となり、先鋒戦は引き分けとなった・・・。

第7話 古今東西老若男女嫉妬に狂った人は恐ろしい・・・

優子SIDE

何が起こったの？烏丸君の点数はもうほとんど残っていない状態で私の勝ちは動かなかったはず・・・。

そっぴいえば烏丸君は腕輪の能力を一度も使っていないかった。と言う事は、これは腕輪の能力なの？

けど1回の能力の行使であの点数差がひっくり返るなんてありえない。

「いったい何の能力だったいの？」

「オレの腕輪の能力は自爆、自分の全点数を引き換えに相手の召喚獣を必ず道連れに出来る。点数が残っていれば残っているほど効果範囲は広がる。」

「そんな能力反則じゃない！」

「その代わり代償は大きいぞ。敵味方問わず範囲内の奴は巻き込んでしまうから使う場所はかなり限定されるし、戦闘中に有効範囲を決めるための点数調整をにやらないきゃいけないからかなり大変だし、もし観察処分者の吉井なんかを巻き込んでしまったらフィードバックでどんな召喚獣の攻撃よりもすごい痛み吉井にが襲ってくるだろうし、使った後は必ずに西村先生の鬼の補習（拳固もあるよ？）を受けなくちゃならない。文字通り最後の手段なんだ。だから出来るなら使わずに済ませたかったけどな・・・。

まあ、そういう訳だから悪いけど補習に付き合ってもらうぞ、木下姉」

「っ、付き合っ・・・」

どうしよう。今の私絶対に顔が赤い。

「どうした、木下姉。急に固まって気分でも悪いのか？」

「・・・な、何でもないわよ。バカ！」

「ちょ、待て！オレの関節はそっちに曲がらな・・・！ギヤアアアア！」

「とりあえずこの前の事はこれで許してあげる。良かったわね、軽い罰で済んで。」

「か、関節を逆方向に曲げる罰は軽い罰とは言わない！あ、ごめんなさい。もう口答えしないから十の字固めは勘弁・・・グアアアアアア！」

・
・
・

ヒロSIDE

「とりあえず口答えした罰として、今度暇な時に私の買い物荷物の持ちをすること、いいわね。」

「・・・了解です。」

うう、ひどい目にあった。ボロ雑巾になったオレに木下姉はそう告げると、軽い足取りでAクラスの陣地に戻って行った。相当オレの事ご立腹だったんだろうな。すぐすつきりした顔で笑っている。

けどまあ、ああいう顔が見れるんだったらまあ、荷物持ち位お安い御用だな。

そんなことを考えながらオレはFクラスの陣地に戻って行く。

その時オレは知らなかったんだ。

あんな恐ろしい団体がFクラスの中にあるなんて・・・。

「諸君、ココはどこだ？」

「最後の審判を下す法廷だ！」

「異端者には？」

「死の鉄槌を！」

「男とは？」

「「愛を捨て、哀に生きるもの！」」

「よろしい。これより 2-F 異端審問会を始める。」

あれ、何この空気？この声須川だよな？しかも異端審問会って何？
確か異端審問って中世では死刑確定の拷問裁判として知られている
よな。つまり、それって・・・

「罪状を読み上げたまえ。」

「被告烏丸大貴（以下甲とする）はFクラスの教理に反した疑い
がある。甲の罪状は脅迫罪及び背信行為である。本日甲がAクラス
の女子生徒である木下優子（以下バイオレンスとする）を脅迫して
いた所を我ら全員が目撃現在に至る。今後甲とバイオレンスの関係
について十分な調査を行ったあと、甲に対して甲に対して然るべき
対応を」

「御託はいい、結論だけ述べたまえ。」

「いちゃついた後にデートの約束をしていたので羨ましいであります。」

「よろしい、判決・・・死刑！」

やっぱりそういう内容か！殺されるとわかっていてむざむざやられ
てたまるか！

・
・
・

何とか凌いだな・・・。

FFF団だった物体を積み上げオレは額の汗を拭う。

前の学校ではカラスの首を獲れとか言われてよく集団でケンカを吹
っ掛けられたおかげでケンカはそこそこ強い方だ・・・。

自慢にも何にもならないけどね・・・。

おかげで付き合ってた彼女に振られるし、じいさんには殴られるし
散々だったよ・・・。

邪魔が入って脱線しまくったけど、次は次鋒の吉井だ。
と言うか吉井お前FFF団に紛れ込んで襲ってきただろ。
次鋒だったから、とりあえず見逃したけど後でオボエテロ……。
オレは人から受けた恩は忘れないが、恨みも忘れないんだぞ。
コノウラミハラサデオクベキカ？

第7話 古今東西老若男女嫉妬に狂った人は恐ろしい・・・（後書き）

感想などご意見などがありましたら受け付けております。

あと、バカテストはやった方がいいんでしょうか？

第8話 人を呪わば穴二つ、バカにつける薬は無い、昔の人はうまい事言う物だ

「それでは次鋒戦を始めます。」

Aクラスからは佐藤美穂さん、Fクラスからは「我らが愛すべきバカ」吉井が戦う。

姫路も島田も心配そうに吉井を見つめている。

ああ、クソ恨めし・・・もとい羨ましい。

こんなかわいい娘2人に好意を寄せられるなんて・・・。

「明久、やってこい。大丈夫だ、オレはお前を信じてる。」
坂本が吉井にエールを送っている。

普段ケンカばかりだけどなんだかんだ言っただけこいつら信頼し合っているんだな。

「ふう・・・。やれやれ、それは僕に本気を出させてこと?」

「ああ、もう隠さなくていいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ。」

なんだ、吉井は今まで実力を隠すためにバカの振りをしていただけなのか？そうだとしたら、

あいつ底が知れないな・・・。

「吉井君、でしたか？あなた、まさか・・・」
思いもよらぬ伏兵に対戦相手もうるたえている。

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃいない。」

吉井は静かに言い放つ。オレもさっきからその迫力に冷や汗が止まらない・・・。

「それじゃ、あなたは・・・。」

「そう君の言うとおりだ。今まで隠してきたけれど実は僕まるで吉井と佐藤が対峙している空間だけ凍ってしまいそんな緊張感を出していた。」

緊張が全体に伝わる。オレもその場から目が離せない。

「左利きなんだ。」

そう、その時確かに空気が凍った……。

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係無いでしょうが！」

「み、美波フィードバックで傷んでるのに、さらに殴るのは勘弁して！」

吉井は島田の島田による島田の為の制裁を受けていた。

「助けて、ヒロ！このままじゃ殺されちゃう！」

「すまない、吉井。さすがに庇えないよ。それにさっきFFF団の襲撃に紛れてオレもお前に殺されかけたしな。と言う訳だから島田オレの分までしっかり頼む。」

「任せて、烏丸。さあ、アキ観念しなさい。」

「嫌アアアア！」

さて次はムツリ・二の出番だな。

ムツリ・二は保健体育だけなら教師にも並ぶ実力者らしい……。お手並み拝見と行こうか。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからはボーイッシュな可愛らしい女の子が出てきた。

「1年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね。」

どうやら外見どおり明るく屈託のない性格の様だ。

「教科は何にしますか。」

「………保健体育」

「土屋君だっけ？ずいぶんと保健体育が得意みたいだね？でもボクだっけかなり得意なんだよ。………君と違って実技で、ね。」

大きな爆弾を投下された気分だよ、ホント。

「吉井君だっけ？勉強苦手そうだし保健体育で良かったら僕が教え

てあげようか？勿論実技で。」

あ、吉井が誘惑されている。どう出る吉井、一歩間違えれば島田が制裁加えに来るぞ。

「フツ、望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強な
んていらなのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔してんだが……………」
哀れ吉井。一生必要無いとか言われてしまつて男としてのプライド
は粉みじんだろつな。

「ふーん。じゃあそつちの烏丸くんはどう？」

うお、矛先がこつちに向いた。落ち着け。ここは冷静に……………」

「はは、魅力的な提案だけど遠慮しておくよ。」

後ろで何故か木下姉がすごい形相でオレを睨んでるし……………」
残念だが、命には代えられない……………」

「そろそろ、召喚を開始してください。」

「はい、試験^{サモン}召喚獣召喚」

「……………試験^{サモン}召喚獣召喚」

ムツツリー二の小太刀二刀流と工藤に大斧を持った召喚獣が召喚さ
れた。

しかも工藤の方は腕輪を持っている。こいつはまずいか？

「実践派と理論派どつちが強いか見せてあげるよ。バイバイ、ムツ
ツリー二君。」

「……………加速」

「な……………！」

さすがにオレも驚きを隠せない。攻撃していたはずの工藤の召喚獣
がいつの間にか倒されている。

「……………加速、終了」

保健体育

Aクラス Fクラス
工藤愛子 土屋康太
446点 572点

「……敵じゃなくて良かった。ホント心の底からそう思うよ。」

「そ、そんなこのボクが……。」

工藤が床に膝を付いている相当ショックが大きいようだ。

「これで1対1ですね。次の方は。」

「あ、は、はいつ。私です。」

「いよいよ姫路の出番だ。対するは」

「それなら僕が出よう。」

学年次席 久保利光 実力は姫路と同じ位だと聞く。ここで姫路が負けるならば、オレ達の勝ちは無くなる。クソ、あの時オレが勝てていれば……。

「心配するな、ヒロ。姫路は負けない。」

「坂本どういう。」

「見れば分かる。」

「「試験召喚獣召喚」」^{サモン}

始まった、科目は総合科目どう出る？

Aクラス Fクラス

久保利光 姫路瑞希

3997点 4409点

うわ、すご！点数差400点オーバー！いつの間にこんな実力を……。

逆境か？逆境が姫路を強くしたのか？

「く……、姫路さんいつの間になんかに強くなったんだ……。」

「私、Fクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいるFクラスが。」

「だってさ、良かったな。吉井。」

「うん！つてなんでそこで僕に振るの？」

「気づいて無いとでも思ったか？」

「ぐ……。皆には内緒にしといてよ……。」

「勿論。オレは馬に蹴られたくないからな。」

さてと、これで2対1後は坂本次第だ。

あの作戦がうまくハマるといいんだけど……。

第9話 一致団結しているときはテンションがおかしくなる

さすがに追い込まれてきて焦っているのか、Fクラスがここまでやるとは思っていなかったのか、高橋先生の表情に変化が見て取れた。普段ポーカーフェイスの人はここぞという時にどういった表情を見せるかによってその人がどのような人間であるか見えてくる。

察するに高橋先生は分かりにくいが自分のクラスの味方をしたいが自分の立場を理解し中立を保っている。つまり情が深く真面目で責任感が強い性格であるとオレは予測する。

おっと、まずい。試召戦争の最中だったな。

いよいよ坂本と霧島の一騎打ちが始まる。

ここで負けたら延長戦としてそれぞれ戦ってない生徒を1人ずつ出して決着を付けるらしい。要するにこの勝負ですべてが決まる。

「最後の1人どうぞ。」

「・・・はい」

Aクラスからは最後の難関霧島翔子がそしてFクラスからは当初の予定通り坂本がでる。

「教科はどうしますか？」

AクラスもFクラスも異様なまでに静かだ・・・。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

Aクラスが坂本の言葉を聞いて沈黙を破った。

あちこちから戸惑いの声が聞こえてくる。

「分かりました、そうなると問題を用意しなくてはなりませんね。

少しそのまま待っていてください。」

そう言っつて高橋先生は教室から出て行った。

「雄二、後は任せたよ」

「ああ、任された。」

吉井が坂本の手を握り激励の言葉を贈る。

そして激励の言葉に応えるように坂本も吉井の手を強く握り返す。

「……………」

ムツツリー二は無言で坂本にピースサインを贈る。

「お前の力にはずいぶん助けられた。感謝している。」

「……………」

ムツツリー二は軽く笑い元の位置に戻った。

「坂本君、あの事教えてくれてありがとうございます。」

「ああ、明久の事か。気にするな。あとは頑張れよ。」

「はい！」

いいな、こういう光景。皆で1つの事に向かう為の団結力。こうやって信頼しあえる仲間ってというのは他の何より価値ある物だオレは思う……………」

「行って来い、坂本。お前が目指した目標のために！」

「応！お前たちが繋げてくれたこの勝負を無駄にはしない！」

「それでは問題を配ります。制限時間は50分、満点は100点です。不正行為は即失格になります。それでは、始めてください。」

頼む、大化の改新出てくれよ……………」

平城京、平安京、鎌倉幕府、大化の改新……………」

あった、出ていた！よし、これでオレ達の勝ちだ！

「よ、吉井君」

「うん」

「そうだ、これでオレ達の卓袱台……………」

「……………」

「最下層の僕たちの歴史的な勝利の瞬間だ！」

「……………」

教室はこれ以上ないくらい沸き立っていた。

日本史限定テスト

Aクラス Fクラス

霧島翔子 坂本雄二

97点 53点

そして延長戦で須川が負け、Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。
・
・
・
。

第9話 一致団結しているときはテンションがおかしくなる(後書き)

次で原作1巻終わりです。
頑張ります。

第10話 これにて一旦お開き！

「弁明を聞こうか・・・、坂本。」

「・・・雄二、私の勝ち。」

「殺せ。」

「言い覚悟だ、殺してやる。歯を喰いしばれ！」

「姫路と島田。話が進まないから、とりあえずその狂犬を捕まえ
といてくれ・・・。」

「はい、吉井君落ち着いてください。」

そう言いながら姫路が吉井を後ろから抑えている。

「この点数の事なんだけど・・・。」

「いかにも、オレの全力だ。」

「この阿呆があ！」

後ろで吉井が怒り狂っている。

「アキ、落ち着きなさい。あんだたったら30点も取れていないで
しょうが。」

「それについては否定はしない！」

否定しないんだ・・・。

「それなら坂本君を責めちゃだめです！」

「くっ！何で止めるんだ、姫路さんに美波！このバカには喉笛を引
き裂くと言う体罰が必要なのに！」

「それは体罰じゃなくて処刑です！」

「そうだぞ、吉井。それに負星の中にお前が含まれている事も忘れ
るなよ。オレだって引き分けなんて不甲斐ない結果になっているし、
どうしてもやるというのならオレ、お前、須川も制裁の対象になる
事を忘れるなよ。」

「雄二、ドンマイ！次があるさ！」

こ、こいつは・・・

「・・・けど危なかった。雄二が所詮小学生レベルの問題だと油断

していなければ負けていた。」

「言い訳はしねえ。」

あ、凶星か……。

「……所で約束」

「????吉井約束って何の事だ?」

「そうだよ! 姫路さんの貞操が危ない!」

どうしよう、話が全く見えない……。

ムツリーニは後ろですごい形相でカメラの手入れをしており吉井と予約がどうかの話をしている。

「なあ、木下姉どうい事だ、これ?」

「私も良く知らないけど試験教科指定の権利をFクラスに渡す代わりに負けた方が言う事を聞かって約束らしいわよ。」

見えてきた……。霧島は数々の告白を断っていることから男に興味がない同性愛者と言つのは編入してきて日の浅いオレでも知っている有名な噂だ。

それで、姫路が狙われていると吉井達は思っている訳か。

オレは同性愛者の噂事態怪しいもんだとおもっているけどな……。普通に考えたらすでに好きな人がいると考えるじゃないか?

「分かつている、何でも言え。」

「……じゃあ、雄二私と付き合つて。」

ほうら、やっぱりすでに好きな人が……。つてえええええ?

「やっぱりか、お前まだ諦めてなかつたのか。」

「……私は諦めない。ずっと雄二の事が好き」

「その話は何度も断つただろ? 他の男と付き合つ気はないのか?」

「……私には雄二しかいない、他のひとなんて興味無い。」

「拒否権は?」

「……ない約束だからこれからデートに行く。」

「ぐあ! 離せ! やっぱりこの約束は無かつた事に」

霧島は坂本の首根っこを掴んで教室から出て行ってしまった。

オレ達の精神状態を表すとしたら おいてけぼりポンポン (

竹中 人風に)

と言ったところだろうか。

そんな中生活指導の西村先生が入ってきた。

「さてFクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ。これから我がFクラスに補習についての説明を始めようか！」

ん？我がFクラス？

「おめでとう、戦争に負けたおかげで福原先生からオレに担任が変わるそうだ。良かったな、これで1年間死に物狂いで勉強できるぞ。」

「あらら、思わぬ所でしわ寄せがきたな。

生活指導の西村先生こと鉄人は鉄拳制裁と鬼の補習で生徒たちに恐れられている。

かく言うオレも編入初日に鉄拳を食らっているのですその威力は良く知っている。

周りでFクラスのみんなが悲鳴を上げている。

「いいか、確かにお前たちは良くやった正直Fクラスがここまでやるとは思ってもみなかった。しかし「学力がすべてではない」と言っても人生を渡って行く上で強力な武器の1つなんだ。すべてではないからと言ってないがしろにしている理由にはならん。」

ごもつともです……。耳が痛い。

「吉井に坂本お前たちは特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の観察処分者とA級戦犯だからな。」

「そうはいきませんよ。何としても監視の目を掻い潜り今まで通り楽しい学園生活を

送って見せますよ。」

「……お前には悔い改めると言う発想はないのか？」

西村先生は呆れてものも言えないという感じだけど吉井の目にわずかにやる気が出てきているのをオレは見逃さなかった。吉井みたいな奴は本気になったらとんでもない結果をだすぜ。注意しなよ、西村先生。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を2時間設けてやるう。」

わあ、きつそう。まあ、決まった以上やるとしますか。

「さて、アキ補習は明日からみたいだし約束通りクレープでも食べに行きましようか。」

「え？美波それは週末って話じゃ・・・」

「だめですよ、美波ちゃん明久君は私と映画を見に行くんです！」

「僕の食費がー！生活費がー！」

おうおう、ほほえましいやり取りだな。独り身のオレには若干殺意を抱くような光景だけだな・・・。

「に、西村先生明日からと言わずに今すぐやりましよう。思い立っただが仏滅です」

「吉日だ、バカ。お前がやる気になったのは嬉しいが無理する事は無い。今日だけは存分に遊ぶといい。」

あ、確信犯だ、この人。

「おのれ、鉄人僕が苦境に立っている事を知った上での狼藉だな。

こうなったら卒業式の日伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待っ！」

「斬新な告白だな、おい」

吉井が釘バットを持ったくらいで勝てる相手なんだろうか・・・？

「さて、オレもそろそろ帰るかな。」

「あ、待って。烏丸君」

「どうした、木下姉？」

「その「木下姉」って言うの、秀吉と区別がつきにくいから私の事は優子って呼んで。」

私もヒロって呼ぶから・・・」

「同い年の女の子を呼び捨てか・・・。少し恥ずかしいな。ちなみに参考なまでに聞くけど、呼ばなかったらどうなるんだ？」

「知りたい？教えてあげるわよ、実践で。」

そう言っただけ腕を掴んだ。

これは呼ばなければ殺られる!!

「わ、分かった。これからはそう呼ばせてもらつよ。ゆ、優子。」
うわ、すごく照れくさい!

「う、うん。ヒロ。」

うわ、優子の方も顔が赤い。けどなんかこの子かわいいな……。
もうちょっと優子の顔を眺めていたい気もするが、そろそろ忘れ去
られている木下を回収して帰りますかね。

「さて今日の晩飯何にしようかな。」

完

第1部

外伝 烏丸家の日常

Aクラス戦から1夜明けて雀のさえずる音でオレは目を覚ました。寝覚めのいいさわやかな朝だ。こんな日は何かいい事がある気がする。

そう胸を躍らせながらまだぼやけている思考を切り替え、朝飯を作るため階段を下りて台所に向かおうとする。次の瞬間オレは階段から落ち地面とキスをしていた。

「ジジイー！」

オレは頭に大きなタンコブをこさえてオレがこんな目にあつた元凶を作つたであろう人物の所へと向かつた。

「おお、ヒロ。朝飯ができたのかのう？」

「てめえのせいで朝飯どころじゃなくなつたわ！階段にトラップを仕掛けるのをやめると何度も言つただろう！何でいきなり階段が急な坂に変わるなんて言う吉本のコントみたいな仕掛けをするんだよ！頭打つて滅茶苦茶痛いじゃねえか！」

このジジイ、烏丸修輔は一応オレの保護者と言う事になっている。趣味が武道全般とトラップ作成と言う迷惑極まりない人物だ。

「何じゃ、情けない。あの程度の罠に引つ掛かるなんて修行が足りん証拠じゃ。」

「日常生活を送る上であんなトラップに遭遇するなんて普通はありえねえよ！」

「自分の修行不足を棚に挙げて、何を言うか。ほれほれ、未熟者さつさと飯を作つてこんか。ワシは腹が減っているのじゃ。」

その言葉を聞いてオレの堪忍袋の緒（鋼鉄製）がついに切れた。

「ぶっ飛ばす！今日こそオレの平穩な日常の為にてめえの息の根止めてやる！覚悟しろ！ジジイ！」

「やれるものならやってみるが良い。愚か者め。」

こうしてオレとジジイの仁義なき戦い（どつきあい）が幕を開けた。

「修行してから出直してこい、ヒロ。」

「く……。クソ、相変わらずの出鱈目人間め……。」

開始10分、オレは物の見事に敗北した。しかも一回もジジイに攻撃を当てる事も出来ずに……。

「さつさと飯を作ってこんか、敗北者よ。」

「うう……。覚えてろ、クソジジイ。」

オレは痛む体を引きずるようにしながら悪態をつきその場を後にした。

「……。お、おはよう。お、おじさん……。」

朝飯を作っていると台所に小学生の甥っ子沖田静馬が台所に入り、おどおどしながら挨拶をてきた。

「やめる、何度も言ったがオレをおじさんなんて呼ぶな。」

オレは冷たく拒絶の言葉を言い放ち、静寂が場を支配しどうしようもない重い空気なが流れる。

静馬はますますオドオドしながら口を開いた。

「……。お、おはようございます。に、兄さん。」

「ああ、おはよう。静馬。よく眠れたか？もうすぐ朝飯ができるから、食器と箸を準備してもらえるか？」

え？さつきと態度が違いすぎだっ？当たり前だ。この年でおじさんなんて普通に呼ばれたらなんかへこむぞ。それに、伯父バカかも

しれないが静馬は目に入れても痛くないほど可愛い。

なんでもあんな性格破綻者だった姉貴からこんないい子が生まれてきたのか不思議でならない。

絶対旦那の弦馬さんに似たに違いない……。

まあ、甥っ子自慢を始めると5時間くらい普通に話せてしまうので割愛するが、静馬はこの狂った日常の中でのオレの唯一の癒しだ……。

静馬は10歳違いだったオレの姉貴の子だが、訳あってオレの家（正確にはジジイの家だが）で預かっている。

まあそのあたりの事情は複雑なんだ。詮索しないのがデリカシーと思ってくれ。

飯を食い終わって、洗濯物を干して、ゴミを出して、近所のおばちゃんとか話して学校へ向かう。今日は姫路が皆に弁当を作ってきてくれるらしい。

女の子の手作り弁当に胸を躍らせない男はいないだろう。

オレはバナナの皮を踏まないように注意しながら、スキップして登校した。

それが地獄の1丁目への入口であるとも知らずに……。

オレは昼休みになぜ姫路の自己紹介の時吉井達が青い顔をして固まっていたのか身をもって知るのであった……。

第2部開始 第11話ナーバスになっている時ほど明るい話題は必要です・・・

「ごめんね、ヒロ・・・。」

「なんで、謝るんだよ。姉さんは今までずっとオレのせいで受けなくてもいい中傷を受け続けてきたんだ・・・。だから姉さんは結婚して今までの分まで幸せになってくれないとオレが嫌なんだ・・・。」

「でも私がいないと、この家にはあなたの味方は誰もいないじゃない・・・。まだ7歳なの子供になんであんなにひどい事が出来るの！」

「大丈夫だよ、オレは来年からじいさんの家に世話になる事になったから・・・。」

もう烏丸の本家にはもう戻らないよ。」

「そう、おじいちゃんが・・・。それなら少し安心できるわ。ヒロは昔から私がいないと何もできないから・・・。」

「その分トラウマもたくさん植えつけられたけどね・・・。プールに突き落とされたり、無理やりコーラを一气飲みさせられたり、カツコイイ髪形にしてやるって言って

キューピーちゃんにされたり・・・。」

「ふふふ、今になってみるといい思い出ね・・・。」

「冗談じゃないよ、全く・・・。」

「それじゃあ、私と絃馬さんが旅行に行っている間静馬の事よろしくね。おじいちゃん、ヒ口。」

「うん、任せてよ！オレは静馬のお兄ちゃんだからね、ちゃんと面倒をみるよ！」

あ、あと、お土産よろしくね！」

・・・ヤメロ！

「ふふ、分かっているわよ。それじゃあ、行ってきます」

・・・イッテ ハ ダメダ！！

「行ってらっしゃい！」

・・・ダメダアアアアアアア！！

「ハッ！はあ、はあ、はあ！」

目が覚めてあたりを見回す。夜中の3時、まだ日も昇っておらず、かと言って寝直そうとする気も起きない・・・。

「久しぶりだな、あの時の夢を見るのは・・・。」

誰に向けた物でもないオレのつぶやきは静寂な部屋の中に消えていった・・・。

オレが文月学園に編入して早い物でもう1カ月、肌寒かった気候もだんだん暖かくなってきて暑いくらいになった。

新学年最初の行事【清涼祭】の準備で活気立つ中オレ達Fクラスはと言つと・・・

「勝負だ、須川君！」

「来い！吉井、お前の球なんて場外に飛ばしてやる！」
「言ったな！？意地でも打たせるものか！」

準備をそつちのけにして野球をしていた……。
キャッチャーの坂本からのサインを吉井が受け取る。
えーっと、何々？

『次の球はカーブをバッターの頭に……。』
つて危ねえ！なんてやばいサインを出すんだ、あいつは！

「貴様ら学園祭の準備をサボって何をしている！！」
マズイ、西村先生だ。怒られない（鉄拳を食らわない）うちに安全圏に……。

「吉井！貴様がサボりの主犯か！」

あ、吉井がターゲットとしてロツクオンされた。すまない、吉井……。助けてやりたいが、1人の為にクラス全員を危険にさらす訳にはいかない。お前の犠牲は無駄にはしないよ……。

「ち、違います！どうして僕をいつも目の敵にするんですか!?!」
どうしても、こうしても普段の行動の結果としか言いようが無いんじゃない……。

「ゆ、雄二です！クラス代表の坂本雄二が野球を提案したんです！」
あ、あいつアツサリ友達を売りやがった……。なんて奴だ、極悪人め。ん？坂本が何か吉井にサインを送ってる……。吉井を助けるための起死回生の策でもあるのか？

えーっと、何々？

『フォークを鉄人の股間に』
……。見なかつた事にしておこう。

「全員教室に戻れ！この時期になって学園祭の出し物が決まって無いのはうちだけだぞ！」

西村先生の遠吠え……。訂正、怒声でオレ達は全員魔窟に強制送還されてしまった……。

「さて、そろそろ春の学園祭【清涼祭】の準備をしなくてはならないがとりあえず議事進行及び実行委員に誰かを任命する。そいつに全権委ねるので、後は任せた。」

面倒になったから投げたな……。

まあ、いいけどね。オレは清涼祭を優子と一緒に回る約束をしているから、暇な方が何かと都合がいい。

「吉井君も学園祭に興味が無いんですか？」

「うーん、別にそこまで何かをしたいって訳でもないかな……？」

「私は吉井君と一緒に学園祭の思い出を作りたいです……。」

ああ、クソ。今すぐ吉井を絞め殺したい……。

何でここまであからさまなアプローチを受けているのに気付けないかな、このバカは……。

こう、引っ付きそうで引っ付かない所を見てると……。

ああ、イライラする！！（注：自分のことを棚に上げてます。）

「吉井君は知っていますか？うちの学園祭では幸せなカップルができてきやすいつて噂が……ケホケホッ」

「姫路さんどうしたの、風邪？大丈夫？」

「はい、大丈夫です。」

これは、風邪じゃなくて恐らく設備が不衛生過ぎて姫路の体に良くない影響を与えているんじゃないか……。

「そのうち何とかしないとなあ……。」

どうやら吉井も同じことを思った様で教室の設備を見渡している。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田と言っ事でもいいか？」

「え、うちがやるの？うーん、ウチは召喚大会に出るからちよっと困るかな……。」

「あれ、実行委員なら美波より姫路さんの方が適任じゃないの？」

「いや、姫路の性格上全員の意見を丁寧聞いて回るだろうから、この場合少し強引にでも皆をきっちり締めれる事が出来る島田の方が適任だと思うぞ。時間も無いことだし速度重視ってことだろう、坂本？」

「そういう事だ。」

「それにね、瑞希も召喚大会に出るのよ。」

えっと確か試験召喚システムを外来に見せびらかすための大会で学校の宣伝が目的なんだよな。確か優勝賞品は今話題の「如月グランドパークのプレオープンチケット」と試験召喚システムの技術の粋を集めて新しく開発した【白銀の腕輪】だったっけ？

「え？そうなの？」

「はい、お父さんがFクラスって理由だけで皆の事を何も分かってないのにバカにするんです！許せません！召喚大会で優勝して見返してあげるんです！」

「……………」

気持ちは嬉しいがオレを含めFクラスはバカの集まりだと思っぞ…………。

そこに変人の巣窟という評価をプラスしてもいいと思う…………。

「話を戻そう。島田、実行委員の話だけど引き受けてくれないか？」

「ああ、召喚大会との両立が大変だったら副実行委員を付けよう。」

「ん…………。副実行委員次第で受けてもいいけど…………。」

そう言っつて島田は吉井を見た。

オーライ、面倒を押し付けられるんだ。それぐらいの役得はあってもいいよな。

喜んで協力させてもらおう。

「吉井やってくれないか？」

「ワシも明久が適任じゃと思うぞ。」

「ちょ、ヒロに秀吉！僕を人身御供にするつもり？」

「なんだ？人に面倒を押し付けて自分だけ逃げるつもりか？ああ、けど確かにそれはオレ達にも言えることだな。それじゃあ皆に候補を挙げて貰っつてその中から投票で決めるっつて言うのはどうだ？」

「それならいいけど…………。」

「それじゃあ、皆意見を聞かせてくれ。」

「吉井がいいと思う。」

「やはり坂本に……」

「ヒ口でもいいじゃないか？」

「いつそのこと須川でも……」

「姫路さん、結婚して」

「なんだか1人おかしいのが混ざってたけど気にしない……」

結婚発言を聞いて吉井の顔がすごい事になっているのも気のせいに決まっている……」

「それじゃあ島田今の中から候補を2人選んでくれ」

吉井ともう1人は須川あたりを選べば吉井の方に票が入って行くだろう。

候補？吉井、候補？明久

すごい……。さすがにそう来るとは思ってもみなかつたよ……」

世界はまだまだ謎に満ちている……」

「どっちがいいと思う？」

「どっちもクズだしなあ……」

「こらあ！真面目に悩んでいるふりをするんじゃない！あとクラスメイトを平然とクズ呼ばわりするなんて君たちは人間のクズだ！」

その理屈でいくと結局お前はクズの烙印を自分と周りとで二重に押されることになるのを気付いているか？吉井よ……」

「ほらほら、アキ。ウチとあんたでやる事に決まったんだから前に出て議事をしないと。」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされているような気がするよ……」

諦める、吉井。お前は最初からマナ板の上の鯉だったんだよ。（島田だけに……）

そしてその程度で貧乏くじを引いたつもりか？片腹痛いわ！

「可愛い女の子と一緒に実行委員」などと言う甘酸っぱい環境のどこが貧乏くじだ！

本当の貧乏くじと言う物を近々お前に教えてやらなきゃいけない！
そう思っているうちに清涼祭の出し物を決める話し合いが始まった。

第12話 斬新なネーミングセンスとは遠回しにネーミングセンスが無いと言っ

「ウチが議事進行をやるからアキは板書をお願いね。さあ、さつさと決めるわよ。クラスの出し物でやりたい物があれば挙手してもらえ。」

あ、ムツツリーニが手を挙げた。

「……写真館」

「土屋の言う写真館ってかなり危険な香りがあるんだけど……。」
何を言うか、島田！古来より危険な香りは男の香水コロンと言われてきた！

(注：言いません)

別に【検閲削除】で【検閲削除】な【検閲削除】や【検閲削除】みたいな店を開く訳じゃないしいんじゃないか？

おお、吉井。さすがに分かっているな！

写真館【秘密の覗き部屋】素晴らしいネーミングセンスじゃないか！！

……あれ、オレこんなキャラだったっけ？

もつところ、Fクラスの良心、ブレイキ役みたいなキャラだったよ
うな……。

オレもだいぶFクラスの影響を受けているよな……。人の道を踏み外さないように注意しよう……。

あ、いつの間にかもう1つ案が出ている。

ウエディング喫茶【人生の墓場】

吉井、お前のネーミングセンスにオレは神がかった才能を感じるよ……。いやホントに。

「はい、須川」

「オレは中華喫茶を提案する。」

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていつの？」

男ばかりのクラスでチャイナドレスは無いだろ……。

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な恰好をして稼ごうという訳じゃない！」

「そもそも食の起源は……略……近年ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰……略……本来食と言う物は……以下省略。」

中華喫茶【ヨーロッパ人】

「はっはっは！拳句の果てが中華喫茶なのにヨーロッパ人か……。どっちやねん！中国なんかヨーロッパなんかはつきりせえっ！ちゅうねん！！」

「皆、出し物は決まったか？」

「そう言っつて西村先生が教室に入っつて来た。」

「今のところ黒板に書いてある3つです。」

「……補習の時間を倍にした方がいいかもしれんな。」

「えっと、今が2時間だから2×2で4時間か……。」

「と言うと家に帰るのが8時過ぎるから晩飯の支度に差し支えるな。」

「ジジイの方は飢えて死のうがどうでもいいが、静馬にひもじい思いをさせるような事はあつてはならない！すまない、吉井。オレの脳内会議でお前を犠牲にしてオレ達全員の平穩を買う事にすると決まった。恨んでくれて構わないよ……。」

「なぜならオレの脳内には 静馬>優子>その他>越えられない壁>ジジイ と言う揺るぎない法則が立っているのだから……！」

「西村先生、違います。それは吉井が勝手に書いたものであつて決してオレ達がバカな訳ではありません」

「ちょ……！ヒロ！僕を売る」「烏丸の言うとおりです、決してオレ達がバカな訳ではありません！！」「」

「ナイスタイミングだ、心の友と書いて心友たちよ……。共に目指そう、恐怖からの脱出を！圧政からの解放を！」

「バカ者！みっともない言い訳をするな！」

く……！やはり人の道を外れた作戦は西村先生には通じないのか！？

「先生はバカな吉井を選んだこと自体を頭の悪い行動だと言っているんだ！」

「……先生、吉井を売ろうとしたオレが言うのもなんですが、あなた吉井に対して良心と言う物を持っていないんですか？」

その切り返しは予想していなかった。ごめんな、吉井。オレは今お前に対する罪悪感でいっぱいだよ……。後で何かおごってやるから畳に涙の水たまりを作るのはやめてくれ。

水分で畳が腐ってしまう……。

「全くお前は……。稼ぎをだして教室の設備を向上させようとは思わんのか？」

「……その手があったか……！」

え、それっていいの？ありなの？

「お化け屋敷にしよう！」「カジノを作ろう！」「焼きトウモロコシを売ろう！」

……

「静粛に……話し合おうか……。」

結果無難な所で中華喫茶に落ち着いた。少し揉めたがオレと島田が多少強引な手

(恐怖政治)で纏め上げた。

姫路をホールに回すための説得に吉井が骨を折ってくれたのには本当に感謝だ。

そのあと吉井をどついていた島田の説得にオレは骨を折ったが……。

「すまない、島田、吉井、木下、ムツツリー二少しいいか？」

そう言っただけはみんなを廊下まで連れ出した。

「何とか坂本を喫茶店経営に引つ張り出せないか？今日は何とかまとまっただけで本当に成功させるにはあいつの統率力は必要不可欠だ。

・成績優秀なのにFクラス（バカクラス）

・劣悪な設備による姫路の体調悪化

・競争相手の不在

・本人には全く非が無い

こんな環境だったら確かに転校させた方がましかもしれない。

けれど、本人が望んでいないのに無理やり転校させるといいうり方は気に入らない！

「吉井、何としても坂本を引っ張り出そう！そんな横暴許してあげるか！」

「うん、勿論だよ！ヒロ」

「けど、どうやって引っ張り出すのじゃ？」

「大丈夫、何も相手の考えが読めるのは雄二だけじゃない。」

「何か考えがあるのじゃな？」

「まあね」。

そう言って吉井はニヤリと笑った。

悪い顔してるなあ・・・。

第13話 濡れた服は重いです・・・

P r r r r

『はい、もしもし』

「あ、雄二ちよつと話が・・・」

『明久か、ちよつどよかった。悪いがオレのカバンを後で届けに
げ、翔子・・・!』

ツー、ツー、ツー

「よし、ちよつど都合のいい状況だ。それじゃあ吉井の作戦通りに
事を運ぼう!」

作戦は至ってシンプル坂本をオレか吉井で確保して霧島の声真似を
した木下に電話をつなぎ「協力しなければ霧島にお前を売る」と脅
しをかける。

簡単なだけに効果は高い。

オレは作戦の第一段階を完遂するために体育館近くを、吉井は体育
館の中を捜していた。

「先生!覗きです!変態です!」

この声は優子か?優子を覗きに来るとはいいい度胸だ、変態め。ボコ
つて簀巻きにした後、引き吊り回して西村先生に突き出してやる!
オレがそう考えて体育館に向かうと逆方向から西村先生に追いか
けられた吉井と坂本が走ってきた。

「ヒロ!作戦は成功だよ!撤収しよう!あと、頼まれたビデオは後
で渡すからね」

「ビデオ?何の話だ?」

「いいの、いいの。じゃあね。」

そう言うと吉井は全速力で逃げて行った。・・・訳が分からない。振り向くとそこには、すごくいい笑顔の優子がいた。

もう一度言おう、【すごくいい笑顔】の優子がいた。

オレはこの顔の時の優子が何を考えているのか、不幸にもここ数日のやり取りのおかげで手に取るようになってしまった。

「ヒロ、ビデオってどういう事かしら？あんたも覗きに一枚噛んでたの？」

「待て、優子話せばわかる！」

そう、つまりこれは・・・

「ゆっくり聞いてあげるわよ。あんたの関節を逆に曲げながらね！」

「ち、違！優子！そっちの関節をそっちに曲げたら大変な事に・・・ギヤアアアア！！」

オレに容赦ない制裁を加えようとしている時の顔だ！

「うう、酷い目にあつた・・・。」

やっとのことで優子から解放されたオレは痛む体を引きずりながら教室に向かっていた。

吉井、次会った時がお前の命日だ。月夜ばかりと思うなよ・・・。

・
・
・

吉井を軽くボコって優子の所に引きずって行って誤解を解いてもらった後、設備の不衛生を何とかしてもらったために、学園長に交渉に行くことにした。

優子の誤解を解く際に吉井が優子にサブミッションをかけられボロ雑巾になっていたが、そんなの関係ねえ！前にも言ったが、オレは人から受けた恩は忘れないが、恨みも忘れないんだからな！

さて、オレ、坂本、吉井は学園長室に着き中に入ろうとしたら何やら中から不穏な会話が聞こえてきた。

『……商品の……として隠し……』

『……こそ勝手に……如月ハイランドに……』

「どうしたの？ヒロ」

「いや、中から何か怪しい会話が聞こえてきて……」

「つまり学園長は中にいるって事だな、無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ。」

「あ、おい！」

「失礼しまーす！」

言つと同時に吉井と坂本は学園長室に入って行った。

返事ぐらい待とうよ、2人とも……。

「本当に失礼なガキどもだねえ。返事ぐらい待つ物だよ。」

ごもつともですが、失礼はお互いさまの様な気がする……。

出迎えた学園長、藤堂カヲルは試験召喚システム開発の中心人物らしい。

噂ではずいぶんとぶっ飛んだ性格をしているらしいがなるほど噂も案外当てになる物だ……。

「やれやれ、取り込み中だと言うのにとんだ来客ですね、これでは話を続けることもできません。……まさかあなたの差し金ですか？」
どうやら不穏な会話の相手は教頭の竹原だったようだ。

オレがこの学園で最も警戒している人物の1人である。

烏丸の本家にも度々出入りしているらしい……。

そして何よりあの野心的な眼……。

この手のタイプは自分の目的の為に善悪関係なしになりふり構わず、仕掛けてくるから出来ればあまり近づきたくない。

「それではこれで失礼します。」

しばらく学園長と腹の探り合いの様な会話をして、竹原は出て行った。

出て行くときにオレに向けた冷たい視線にオレは寒気を覚えた……

「んで、ガキども何の用だい？」

「今日は学園長にお話があつて来ました。」

「私は今忙しいんだよ。学園の経営に関する事なら教頭の竹原に言いな。それとまず名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えときな。」

「失礼しました。オレは2年F組代表坂本雄二、こつちは同クラスの……」

「烏丸大貴です。」

「それでこつちが……2年を代表するバカです。」

「ほう……、そうかい。あんた達がFクラスの坂本、烏丸、吉井かい。」

「ちよつと待つて、学園長！僕はまだ名前を言つてませんよね！」

「吉井すまないが話が進まないから少し静かにしてしてくれ。」

「気が変つたよ。話を聞いてやるうじやないか。」

「ありがとうございます。」

「礼を言う暇があつたらさつさと要件をいいな、ウスノ口。」

さつきまで礼儀をどうこう言つていたとは思えない口の利き方だ。

しかもこのバアサン、家のジジイと似たような匂いがしやがる。

このバアサンにも警戒が必要か？

そう思っているうちに坂本と学園長の交渉が始まった。

第14話 ジャック・スパ ウってかっこいいよね

「要するに隙間風が吹き込むような教室のせいで、体調を崩す生徒が出てきているから、さっさと直せクソババア、と言っ訳です。」

…前略、バアサンのあまりの口の悪さについて坂本がキレました。

「あの、学園長？」

吉井が不安そうにバアサンの顔色をうかがう中オレは学園長が何かを小さくつぶやいたのを見逃さなかった。

「よしよし、お前たちの言いたい事は良く分かった。」

「え？それじゃあ直してもらえるんですね？」

「却下だね。」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨てて来よう。」

…明久、もう少し態度には気を使え。」

ああ、もう見てらんねえ。

「お前ら少し落ち着け。後はオレに任せてくれ。」

「え、何とかできそうなの？」

「やってやれない事は無いと思う。」

「それじゃあ、ヒロ任せた。」

「任せられた。」

さあ、準備はいいか？始めようか、化かし合いを！！

明久SIDE

「連れの失礼をお詫びします、学園長。差し支えなければ、却下した理由をお聞かせ願えますか？」

ヒロは交渉の席に着いた途端雰囲気が変わった

学園長もまるでヒロを品定めするように見ている……。

「理由も何も設備に差を付けるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ。なまっちろいガキども。」

こ、このババア…！取り付く島もない。こんなの相手にどう交渉する気なの、ヒロ？

ヒロSIDE

「理由も何も設備に差を付けるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ。なまっちろいガキども。」

試されている…。態と高圧的に振る舞いこっちの出方をうかがっているようだ。

上等じゃないか。そちらがどんな思惑でオレを試すのかは知らないがあえてその思惑に乗ってやる。

「それでは、言い方を変えましょう。この文月学園は試験校でありとあらゆる所から注目を受けています。その中には学園の利益を少しでも奪い取るうとする所も少なくないはずです。そんな中もし、教室の設備が悪いことが原因で生徒が倒れたりなんかしたらそう言ったハイエナのような連中はここぞとばかりにパッシングを強めるでしょうね…。」

そんな事態になって学園の運営が傾いた時あなたはきつとこう思うでしょう。

あの時…、直訴してきた生徒たちの要望を…、もつと真剣に聞いておけばよかったと…。」

沈黙が流れる。

バアサンはオレから視線を外そうとしない…。

オレもバアサンから視線を外さない…。

「クツクツクツ」

先に沈黙を破ったのはバアサンの方だった。

「文月学園最大のスポンサーの1つの烏丸家の出身である事を傘に着たバカガキかと思ったら…。なかなかどうして…。」

「やめましょう、今は烏丸の家の事は関係なく、オレは1人の生徒として学園長にお願いをしに来ているんです。お分かり？」

「気に行つたよ、クソガキ。こちらの頼みを聞くんだつたら相談に

乗ってやるうじゃないか。」

学園長の出した条件とはこれだ。

条件は如月グランドパークのプレオープンチケットの回収なんでも如月グランドパークは文月学園の注目度を利用し、『ここを訪れたカップルは幸せになれる』と言うジंकウスを作りだそうとしている。

そのジंकウスを作るためなら多少強引な手も構わず使ってくるらしい。

つまり『プレミアムオープンチケットでやってきたカップルを強引に結婚させる。』と言う事だ。

後ろで坂本が「翔子との約束が…。」とか言っただけで何やら咳いているが不気味でしようがない…。

バアサンの考えとしては、「可愛い生徒の将来を本人の意思を無視して決定しようとする計画が気に入らない」と、言う事らしい。

しかも、これは学園長に経営に関して一任されている教頭が結んだ契約らしい…。

契約する前に気付けよ、バアサン…。

「かわいい生徒にこんなことさせるのは本当に心苦しいけど…、よろしく頼むよガキ共」

よく言うよ、最初からこの展開に持って行く気満々だったくせに…。

「それじゃあ、そのチケットをオレ達が回収できたら教室の修繕をやってくれるという事でいいですね、学園長？」

「ああ、けどやるのは教室の修繕だけ、設備についてはうちの教育方針だから変える事は出来ないよ。」

「はいそれで結構です。戦争に勝ってないのに設備が向上なんてしたら真面目にやっている奴らに申し訳ないですからね…。」

よし、言質取った。

「言っとくけど、優勝者から強奪なんて真似するんじゃないよ。自分の力で優勝してチケットを回収するってことが絶対条件だからね」
「勿論ですよ。」

「ふん、分かっているならいいさね。」

「それじゃあ、坂本。後の交渉任せていいか？そろそろ優子と待ち合わせの時間なんだ。」

「おう、任せとけ」

「ああ、そうそう言い忘れたけど、出場するのは吉井と坂本であんたには、サポートに回ってもらってからそのつもりで頼むよ。」

「なぜですか？どう考えても吉井よりオレが出た方が効率が良さそうなのに……。」

「外来の観客にあんたの自爆なんてエゲツナイ能力を見せるのかい？」

「う……、それを言われると否定できない……。」

下手すりゃ子供なんかトラウマ物だもんなあ……。仕方ないか。

「分かりました、それでは失礼しました。諸君、今日という日を忘れるな」「いいからさっさと帰れ！」「」

最後まで言わせてくれたっていいのに……。
某海賊の名ゼリフなんだぞ……。

・
・
・

「クッククック、あのジジイ。面白い奴を育てたもんだ……。これは先が楽しみさね。」

「どうしたんだ、ババア？」

「ああ、何でもないさね。さてと、交渉を再開しようじゃないか。」

学園長室を後にしてオレはさっきの取引について色々考える。

どうも引つかかる。あの野心家の教頭があ程度の事で本当に動くんだろうか？

それに何より解せないのはバアサンの方だ。

あのバアサンが家のジジイと同種の人間だとしたら『可愛い生徒のため』と言うのは余りにもらしくない…。

もっところ、自分の不利益を被る内容があっても良さそうな物だが話を聞く限り、そう言った物も見えてこない。

さっきの召喚大会の出場権にしたってそうだ。

オレの自爆を禁止するっていう縛りを付けるか、設定を変えてオレの腕輪の能力を使えないようにすればいいだけなのにそれをしないのは何故だ？

まあ、7割方オレの勘の様なものだしオレ達の第一の目的は教室修繕と姫路の転校阻止だから詮索せずに受けたけど…。

まあ、警戒するに越したことはない。

隠すってことは知られたら困るってことなんだからそこにオレ達に対する不利益が隠れているかもしれないしな…。

って、さすがにそれは考えすぎか…。

そう思いながらオレは優子との待ち合わせの場所へ向かったのだった。

第14話 ジャック・スパ ウってかっこいいよね（後書き）

脳内麻薬がダダ漏れでかきつづけました。

よろしければ感想、リクエストお待ちしております。

第15話 夫婦喧嘩は犬も食わないと言うが付き合う前の男女のケンカはどうな

優子SIDE

「え？優子たちも召喚大会に参加するの？」

「そうよ。」

「え〜と、目的ってもしかして…。」

「うん、代表は如月ハイランドのプレオープンチケットを狙っているみたい…。」

ヒロと一緒に帰っている時に私は召喚大会に出場する事を話した。

「えっとね…、ヒロ、もしよかったら…。もしよかったらでいいんだけど！」

その…、私の事応援してくれると、嬉しいな…。」

私はありったけの勇気を振り絞り今にも消え入りそうな声で頼んだ。すごく顔が熱い。顔が真っ赤になっている事が自分でもよく分かる。ヒロならきつと応援してくれるって言うてくれるはず…。

「…すまない。応援は出来ない…。」

「え？どうして？」

「応援しなくちゃならない奴がいるんだ…。」
体中から血の気が引く。

「それってもしかして同じクラスの…。」

「ああ、そうだ。だから今回は…。」

間違いない…。Fクラスで出場するのは姫路さんと島田さんだけだ。と、言う事はヒロの応援しなきゃならない人って言うのは、姫路さんか島田さんと言う事になる…。

足が震えていて立っているのが精いっぱいだった。

「そんなに姫路さんか島田さんがいいの？」

確かに私は姫路さんみたいにスタイルが良くないし、島田さんみたいにスリムじゃないけど…！

「え？優子、ちょっと待て！話を聞いてくれ。」

「聞きたくない！」

「優子、お前泣いて・・・」

「ヒロのバカ！大っ嫌い！」

「グア！」

そう言っつて私はヒロの鳩尾に一発ポディーブローを入れ走っつてその場を後にした…。

ヒロSIDE

何処でどう間違っつた？オレは優子を怒らせるよつな事を言っつてしまつたのか？

しかもどうして姫路と島田の名前が出てくる？

しかも拳句な果てが「大嫌い」つて…。

「大嫌い」つて言われた…。

「兄さん、待っつて！味噌汁に砂糖を入れたら味がとんでもない事に！」

「そうですね…。」

「ヒロ待つのじゃ！それ以上塩を入れたらワシが糖尿病への階段を一気に駆け上る事になっつてしまっつ！」

「そうですね…。」

「兄さん、手！包丁で手を切っつてる！危ないよ！」

「そうですね…。」

「ああ、畏に引っ掛かっつても何の反応も示さんとは！どっつたのじや、情けない！」

「そうですね…。」

その日オレはシヨックのあまり家事が全くはかどらなかつた…。

静馬SIDE

「兄さん、どっつしたんだろっつ？帰っつてきてからずつとあの調子だよ。」

「ふむ、いつもなら罨に引っ掛かった所にワシに文句を言いに来るのに今日はそれすらも無かった。確かにおかしいのう。」

「…おじいちゃんが余りにも罨に嵌めすぎるからおかしくなったんじゃないよね…?」

「ホツホツホツ！大丈夫じゃ、いつも奴が耐えられるギリギリのラインで仕掛けておるからのう。」
どこからその自信は湧いてくるんだらう…。

「そうなると学校かな…？まさか！いじめ？…そんな訳ないか。兄さんならいじめをする人たちごと潰してしまいたいそうだもんね…。」

「けど、学校から帰ってからああなった。つまり学校に原因があるという事じゃ。ちようどもうすぐ学園祭じゃ。原因を探り解決に導くぞ、静馬よ。こんなおもしろ…ゲフン、ゲフン！大変なこと放っておく訳にはいかんじゃろう！」

「今面白そうって言ったよね？しかもすごくいい笑顔だよ。本音を隠そうって気ゼロじゃないか！」

「まあ、いいではないか。ワシとお主で学園祭の日に文月学園へG
Oじゃー！」

それぞれの思惑を孕み清涼祭の幕は開く……。

第16話 羊の皮を被った狼にご注意を！

明久SIDE

学園祭初日

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力はすごいわね。」

「ホントいつもはただのバカなのにね。このテーブルなんてパツと見は本物と区別がつかないよ。」

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。何処からかきれいなクロスを持ってきてこう手際よくテキパキと」

「ま、見かけはそれなりの物になったがの、クロスをめくるとこの通りじゃ。」

「この汚い箱を見られたら、評判はガタ落ちね…。」

「大丈夫だよ、美波。こんなところまで誰も見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にはまっとうといってくれるさ。」

「そうですね。わざわざテーブルクロスをはがしてアピールするよ
うな人はいませんよ、きつと！」

来たら営業妨害が目的としか思えない。

「室内の装飾もきれいだしきつとうまくいくよ。…それはそうとこの前から気になってたんだけど…」

「アキも気になってたの？」

「そうですね。確かに気になります。」

僕たちはそう言って気になっている人物、すなわちヒロの方にめを向けた。

「どうしたんだろう。ここ数日話しかけても上の空、返事が返ってきて『そうですね…』以外返ってこない。準備をしても失敗ばかりだし…。」

「この前なんか何も無い所でこけていたわよ。」

「私は、ぶつかった電柱に謝っていた所を見ましたよ。」
本当にらしくない…。何かあったんだらうか？

「姉上の様子もなんだかおかしかったしケンカでもしたのかのう…？」
「……ヤムチャ 飲茶は完璧。」
そんな中ムツツリーニが飲茶を持ってどこからともなく現れた。
「あ、試作品が出来たんだ。ちょうどよかった。秀吉これを持ってヒロの所へ行こう。」
「うむ、了解じゃ。」

「ヒロ、どうしたの。ここの所変だよ。」
「そうですね…」
「姉上とケンカでもしたのかの？」
「そうですね…」
だめだ、会話になっていない…。ここは少し荒療治と行こう。

「ムツツリーニ、スタンガンを」
「……（コク）」
威力を最大にしてヒロにスタンガンを当てた。

「そうですね…ギヤアアア！！」
「…で、眼は覚めた？」
「結構な威力じゃったが大丈夫かの、ヒロ？」

「…ボク、ヘイキ」
まだ駄目みたいだ…。
「ムツツリーニもう一回」
「……（コク）」
「待て、待て、待て！もう眼は覚めた！それはもう！パツチリと！」

「それで壊れていた理由を説明してくれるかの？」
「…ああ、実は…」
ポツポツと壊れていた理由を話し始めたヒロはなんだかいつもより憔悴して見えた…。

「…と、言う訳なんだ。」

「通り説明を聞いて僕が思った事はただ一つ…。」

「どういう事？」

全く意味が分からないと、言う事だった。別に僕がバカだからって意味じゃないからね。

ヒロの説明が分かり難かったからに決まっている！だから秀吉たちも分かっている無いに決まっている！

「要するに、ケンカの原因は全くの誤解なんじゃない？」

「そう言う事。何とか誤解を解いて仲直りしたいんだけど避けられて…。」

穴があつたら、入りたい…。なんだか世界中の人が僕を笑っている気がするよ…。」

「怒っている手前、話をし辛いんじゃないだろう。きつとすぐに話せるようになるじゃろう。」

「そうだな…。もう10日間も避けられているけどね…。すぐってあとどれ位だろう…。」

「…」「…」「…」「…」「…」

さすがに全員言葉を失った…。く、空気が重い。何とかしないと！

「だ、大丈夫だよ！ヒロ、学園祭が終わったら僕らも仲直りの為に力を貸すから！」

「ホントか!？」

「勿論だよ。だから学園祭がんばろう！」

「ありがとう、吉井！よし、今まで壊れていた分もオレ頑張るよ！」

「うん、その意気だよ！あ、さっきムツツリーニが飲茶の試作品を持って来たんだ。食べよう。」

「…」（グツ）自信作

「ありがとう、吉井、ムツツリーニ。それじゃあ遠慮なく頂くよ。」

「ワシも、いただきますかの。」

そう言ってみんなゴマ団子を口に運んだ。

「うん、表面はゴリゴリでありながら中は粘々甘すぎず辛すぎる味わいがまた…んごは！」

「よ、吉井？こ、この反応は、まさか！！」

「あ、それはさつき姫路が作ったものじゃな。」

「やっぱりイイイイ！」

「…！！（グイグイ！）」

「ムツツリーニ！どうしてそんな脅えた様子でゴマ団子を僕の口に押し込もうとするの！？無理だよ！食べられないよ！」

「大丈夫だ、吉井！オレは昔武道をやっていたから蘇生の方法はバツチリだ！安心して逝って来い！」

「武道で鍛えているんだったらヒロが食べるべきだよ！」

「バカ野郎！いくら体鍛えたって内臓は鍛えようがないんだぞ！それにオレがいなくなったら誰が蘇生をするんだ！」

「殺られてたまるか！死ぬのはヒロ君の方だ！」

「うーす、戻って来たぞ。ん？なんだ、うまそうじゃないか。どれどれ？」

「「あ！」」

「大した男じゃ…。」

「…（コクコク）！」

「さらば坂本！」

「雄二。君は今最高に輝いているよ！」

「？お前らが何を言っているのか分からんが…。ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中は粘々甘すぎず辛すぎる味わいがまた…んごは！」

あ、なんか既視感^{デジャヴ}

「さ、坂本、大丈夫か？」

「ふ、何も問題ない…。あの川を渡ればいいんだろつ。」

「雄二！その川を渡っちゃだめ！戻れなくなっちゃう！」

「吉井、急いで蘇生の準備を！！！」

「うん！わかったよ。」

「6万だとバカを言え！普通は渡し賃は6文だと相場は決まって…」
「1・2・3！クソ！助かれエエエエエ！！！！！！」
学園祭の和やかな空気から一転地獄の阿鼻叫喚へと姿を変えたのだ
った…。

第16話 羊の皮を被った狼にご注意を！（後書き）

難産でしたができのいいものに仕上がったと思います。

ご意見、感想、リクエスト、質問などがありましたら遠慮なくお願いいたします。

律さん感想をありがとうございました。

この場を借りてお礼を申し上げます。

第17話 実際に体験した事は良く覚えている・・・

「・・・で、教科の指定の話し合いは終わったのか？」

何とか坂本の蘇生に成功して召喚大会の打ち合わせに移る。

「ああ、バツチリだ。」

「気付いてるか？たぶんあのバアサン何か隠している。一応こっちでも予防策を練っておくけど気を付けるよ。」

「やっぱり、お前もそう思うか？わかった。肝に銘じておこう。」

「オレは今日午前中は厨房担当だからあまり手伝えないけど頑張れよ！」

「ああ、まかせとけ！」

「で、誰と行くつもり？」

ん？なんだ？吉井は何を聞かれているんだ？

「私も聞きたいです。吉井君、誰と行くつもりなんですか？」

あ、チケットの事か…。マズいな、嘘がつけないのは吉井のいい所だけこの場ではむしろマイナスだ…。バアサンに取引の事は他言無用と言われているから何とか誤魔化さないといけない。

「明久はオレと行くつもりなんだ。」

…坂本、フォローするのはいいがもうちょっと他に無かったのか？その言い方だとお前から出来ていると誤解されるぞ…。

「吉井君男の子なんですから出来れば女の子に興味を持った方が…」
ほら、やっぱり誤解された…。

「それができれば明久だって苦労はしないさ」

「雄二、もっともらしくそんなこと言わないで！全然フォローになつて無いから！」

ここまで来ると笑うしかないな。ハッハッハッ！

「っと、そろそろ時間だ。行くぞ、明久。」

「くっ、とにかく誤解だからね！」

もう何を言っても手遅れの様な気がするぞ、吉井。そしてお前は何処の小悪党やねん！

・
・
・

吉井達が召喚大会に行ってから1時間、迷惑な客が来た。

何やらやたらと因縁を付けてくるので、オレが応対している…。木下にはその間坂本を呼んで貰いに行った。

「お客様他のお客様のご迷惑になりますので、お静かにお願いいたします。」

「ハア？迷惑？こんな不衛生な環境で物食わされる方が迷惑じゃねえか？」

どうしよう、ぶっ飛ばしてしまいたい！あ、坂本が帰って来た。それじゃあもう我慢しなくていいよな。

「そうですね、残念です。お客様に酷い事をしなければならぬなんて…。」

「あん？お前何言ってるんだ、責任者出せ！責任者！このクラスの代表、コペツ！」

「お客様、何かご不満な点が御座いましたか？」
あ、モヒカンが蹴られて吹っ飛んだ…。これってGOサインだよな

！よし、それじゃあ遠慮なく逝ってみようか、お客さん！
「不満も何も今連れが蹴り飛ばされたんだが…！」

「それは私のモットー『パンチで始まる交渉術』への冒瀆ですか？」
「ふ、ふざけんなよ、この野郎！何が交渉術：「続いて十の字固めで繋ぐ交渉術をお楽しみください。」ぎゃあああ！」

優子直伝のこの洗練された業を見よ！

「わ、わかった。こちらからは夏川を交渉にだそう！お、おれは何もしないから交渉は不要だアアアア！」

「そうですか。そちらの方が交渉相手ですか。これは失礼しました。」
「チツ、暴れたりない…。」

「そう思いながらオレはジリジリと夏川とか言う坊主頭に対し間合いを詰める…。」

「ちよツ！常村オレを売る気か？」

「それで常夏コンビ。まだ交渉を続ける気か？」

「い、いや、その必要はない！もう撤退させてもらう！」

「そうですか、それでは。」

坂本が夏川の方の腰を持ちあげる…

「バックドロップで締める交渉術でお終いです。」

「ちよつと待て！おれは何もしていないのに何でそんな大技フギヤアアアア！！」

「お見事！技ありの一発だ！」

「「お、覚えてるよ！」」

「そう言い捨て、常夏コンビ（坂本命名）は出て行った。」

「しかし常夏コンビの残っていた影響は大きく、店の客はほとんど出て行くこうとしていた。」

「クソ、常夏コンビめ！お前らのせいだ…！」

「お客様、失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたので、暫定的にこの様な物を使ってしまいました。ですが、たつた今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください。」
坂本の機転で演劇部のテーブルと入れ替える事によりその場は何とか収まった。

「やっぱり、こいつはすごい…。」

「ありがとう、坂本。助かったよ。」

「気にするな。」

「お疲れ、雄二」

「お疲れ様です」

「何があつたか分からないけどお疲れ様」

「姫路に島田か。その様子だと勝ったみたいだな。」

「そう言うお前らは勝ったのか？」

「勿論だ！オレを誰だと思ってる！」

坂本はふんぞり返る。

「誰って、観察処分者とA級戦犯。」

「…そうですね。」

あ、へこんだ。

「ウソウソ、次も期待してるよ。大将。」

「分かれば、よし！」

「復活速いな。所でテーブルなんだけど入れ替えるのはいいんだけど演劇部にあるだけじゃとてもじゃ無いけど足りないと思うんだけど…」

「それについてはもう考えてある。行くぞ、明久。」

「あ、うんでも何処に行くのさ？」

「決まってるだろう、テーブル調達だ。」

「それって、まさか！」

「そう、そのまさかだ！」

そのあと吉井と坂本がいるんな所のテーブルを調達した（パクツた）為、鉄人こと西村先生との地獄の追い駆けっこをする羽目になってしまっていた…。

吉井、坂本生きて帰ってこいよ…。

第18話 敵に塩を送ると何かいい事があるらしい…

坂本たちの2回戦の相手は根本、小山ペアのようだ…。

坂本が例のおぞましい物を収めたアレ（出来れば気のせいであつてほしかった…。）を持って教室を出て行くのを見たから間違いないだろう。

…アレを使われるとは敵ながら同情するよ、根本。

休憩時間も終わりそんな事を考えながら教室に戻っていると前から根本と小山さんが歩いてくるのが見えた。

「よう、根本。」

「ゲツ！お前はFクラスの烏丸！何の用だ、坂本の差し金か？」

「そう警戒しなさんな。オレに敵意は無いし、何もしやしないよ。ただこれだけは伝えときたくてな…。」

「な、なんだ…？」

「うん。大したことじゃ無いんだけど、ごめんな…。」

「へ？」

「それじゃあ、それだから召喚大会頑張れよ！」

「ちよ、ちよつと待て、烏丸！今何に対して謝った？おれはこれから何をされるんだ!？」

「それじゃあ、そう言う事でオレそろそろ交代の時間だから教室に戻るよ。もし気が向いたら、来てくれよ。ゴマ団子の一個位はサービスしてやるからさ。」

「いやな疑問を残して行くなアアアアア！」

根本が何か喚いているけど、もう交代の時間まであまり無い。根本には悪いけど無視してさっさと行く事にした。

その後、坂本吉井ペアが勝利した事、根本が小山さんに振られた事、根本は女装趣味だという噂がまことしやかに流れた事は、言うまでもないだろう…。

「ただいま。」

「おう、お帰り。勝ったみたいだな。」

「雄二の姿が見えないようじゃが、どうしたのじゃ？」

「うん。トイレに行ってくるってさ。あれ、なんだかお客さんが少ないけどどうしたの？」

「ワシはずっとここにおるがあれ以来妙な客は来ておらんぞ。」

「恐らく営業妨害を店外でしているんだろ。ケツ、卑怯者め！」

「なんだかヒロ、ヤサグレてるね…。」

「そうじゃのう。働こうとして張り切っておったのに店は閑古鳥じや。無理もないじゃろう…。」

「お兄さん、すみませんです。」

「いや、気にするな。チビツ子S」

「チビツ子じゃないです、葉月です。」

「ぼ、ぼくは静馬です。」

ん？この声は…。」

「んで、探しているのはどんな奴だ？」

「おかえり、坂本…ってやっぱり静馬だったか。」

「あ、兄さん、よかった。探してたんだ！」

「よく来たな。一人で来たのか？」

「ううん、途中までおじいちゃんと一緒にだったけどおじいちゃんが途中で『ミニスカがワシを呼んでおる！！』って言うって何処かに行っちゃって…。」

「あのクソジジイ…。」

呆れてものも言えない…。うちのジジイとかけてドアのつつかえ棒と説く

その心は・・・開いた口が塞がらない・・・。

「坂本、静馬を連れてきてくれてありがとう。で、そっちの子は？攫ってきたのか？」

「あ、あの葉月はお兄ちゃんを探しているんです。」

「お兄ちゃん？名前は？」

「あう、分らないです・・・。」

「？家族のお兄ちゃんじゃないのか？何か特徴は？」

「えっと、バカなお兄ちゃんでした！」

「・・・・・・・・・・」

すごい特徴だ・・・・。思わず絶句してしまったよ・・・。

「そうか。・・・たくさんいるんだが・・・？」

坂本、その中にオレは入っていないと信じていいんだよね？

「あ、あのそうじゃなくてその・・・すっごくバカなお兄ちゃんでした！」

「・・・吉井だな」

うん、間違いない。簡潔かつ非常に分かりやすい特徴をありがとう。

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い・・・！」

「あ、バカなお兄ちゃんだ！」

そう言つて葉月ちゃんは吉井に飛びついた。

「絶対に人違い、ねえ？」

「人違いだといいなあ・・・。」

諦める、吉井。お前の長所も短所もすべてバカな所から来ている。

すなわちお前が認めようが、認めたくなかろうがお前はバカな事は決定事項なんだよ・・・。

「つて君は誰？見た所小学生だけど僕にそんな位の知り合いはいないよ？」

「え？お兄ちゃん・・・。知らないなんて、ひどい・・・！」

あ、まずい！泣きそうだ！

「バカなお兄ちゃんのバカア！バカなお兄ちゃんに会いたくて葉月

一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

「エ、エゲツない……。悪気無く無邪気に吉井の急所を抉っている……。あの子は間違いなく、将来大物になるな……。そう思いながらオレは静馬と一緒にゴマ団子を頬張りながらウーロン茶を流し込んだ。」

「明久 じゃなくてバカのお兄ちゃんがバカでごめん……。」「

「そうじゃ、バカのお兄ちゃんはバカなんじゃ。だから許してやってくれんかのう……。」「

「でもでも、バカなお兄ちゃん葉月と結婚の約束までしたのに！」「ブー！！ゲホゲホ！！」

「思わぬ爆弾にオレはウーロン茶を噴き出してむせてしまった。」

「瑞希！」「美波ちゃん！」

「「やるわよ！」「」

「「ぐぶああ！」」

「流れるような動きで島田と姫路は吉井の首を極めていた。アレは痛い……。」

「姫路に島田どうやら勝ったようだな。」

「瑞希、このまま首を逆方向に捻って！ウチは膝を逆方向に曲げるから！」

「はい！えっとこうですか？」

「おいおい、このまま放っておいたら死人が出るぞ……。仕方ないそろそろ止めて」

「ちよつと待って！結婚の約束なんて僕は全然」

「ふええええん！酷いです！ファーストキスマであげたのに！」
「やろうと思っただけだよっぱりやめた。」

「どう考えても吉井が悪そうだし……。」

「坂本、包丁持ってきて！5本あれば足りると思うから！」

「吉井君、悪い事をする口はこの口ですか？」

「ほへはいへふ！ははひほひいへふはははい！（お願いします！話を聞いてくださいー！）」「

「仕方ないわね、2本差したら聞いてあげるわ！」

「ちょよ！美波包丁は1本刺さるだけでも致命傷なんだよ！お願い、助けて！ヒロ」

「島田、姫路。オレは静馬を連れて外にいるから、終わって処理が終わったら教えてくれ。」

「嫌アアアア！」

静馬に殺人の現場を見せる訳にはいかない…。さよなら、吉井。君の事はたぶん一生忘れない…。

「兄さん！いいの？あの人友達なんでしょ！？」

「オレにロリコンの友達はいない…。」

そのあと葉月ちゃんが島田の妹である事、吉井とやっぱり知り合いで会った事を思い出しその場は何とか収まったのだった。

「で、この客の少なさはどういう事だ？」

「そう言えば葉月ここに来る途中色々話を聞いたよ。」

「ん？どんな話だ？」

「中華喫茶は汚いから行かないほうがいいって」

「営業妨害か…。犯人はやっぱりあの常夏コンビか？」

あの野郎共！地獄の底まで追いかけて報復してやる！

「葉月ちゃんその噂どこで聞いたの？」

「えつとですね、短いスカートをはいたきれいなお姉さんがいっぱいいるお店…」

ん？ミニスカート？まさか！？

「どうしたの、兄さん？急に頭なんか抱え込んで」

「いや、ジジイのいる場所に見当がついて頭痛がするだけ…。これ以上恥をさらす前に今からポコって回収しに行こうと思う」

「雄二、僕らも一緒に行こう！」

「そつだな！我がクラスの成功の為に（低いアングルから）偵察に行かないと…！」

「アキ最低……」

「吉井君酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ……」

そんなに責めないでやってくれ。3人とも……。

この反応は男として当然と言えば当然の反応なんだから……。

第18話 敵に塩を送ると何かいい事があるらしい…(後書き)

次回はついにあの人の登場です！

第19話 シリアスな空気は長く続くと体に悪い…（前書き）

今回は少し内容が重いです。それではどうぞ。

第19話 シリアスな空気は長く続くと体に悪い…

優子SIDE

ヒロとケンカ（と言うより私が一方的に怒っていただけ）をしてもう10日も経っていた。

今回はどう見ても私が悪い…。

私とヒロは付き合っている訳ではなく、まだ友達でしかない。

それなのにヒロが気になっっている人（姫路さんか島田さん）に嫉妬してヒロに当たってしまうなんて本当に最低だ…。

ヒロが私に向けている優しさを私が勝手に勘違いして甘えている…。それでもヒロと話をする、ヒロが私から離れていってしまう気がする。

そう思うとヒロと話しをするのが怖かった…。

「ハア、最低だな。私…。」

「ホッホッホ、娘さんどうしたのじゃ？隙だらけじゃよ。」

そう言っただけで誰かが私のお尻を撫でた。

・
・
・

「す、すみません。関節を外してしまっただけ…。」

私はセクハラを働いた犯人である目の前のおじいさんに謝っていた。なぜなら、全身の関節を外すという過剰な防衛行動を働いてしまったからだ…。

「よいよい、所で娘さんどうかしたのかわかる？」

「え？」

「いやいや、どうも浮かない顔をしておったからのう…。」

普通なら初対面の人（しかもセクハラを働いた犯人）にこんなこと

を打ち明けるのはおかしいんだけど、私は何故かこのおじいさんに嫌悪感を抱かなかった…。
そして今までため込んできた物を全部打ち明けた…。

「と、言う訳なんです…。」

「ふむ、娘さんの好きな相手に好きな人がいるかもしれないという事でいいかの？」

「はい…。」

改めて言いなおされると気分が一気に重くなる…。

「ふむ、この場合問題は相手の気持ちでは無く、娘さんの気持ち次第じゃとワシは思うぞい。相手が誰を好きであろうと、関係無い！
一気に押せ押せ！じゃ。一番いかなのが、その気持ちに蓋をして一生後悔することじゃと思うぞい。」

「けどそれじゃあ相手に迷惑と思われませんか？」

「何を言うか！娘さんは器量が良く、性格も良い。そんな女子おなごに迫られて迷惑がる奴など男では無いわい！それに今まで友達づきあいをしてきたのならば、そ奴は娘さんの事を憎からずと思っているはずじゃ！」

「そんな物なのですか？」

「うむ、そう言う物じゃ。人生の酸い甘いを体験してきたワシが言うのじゃ。間違いない！」

私はこのおじいさんに相談して良かったと心から思った。

この数日重かった心がウソのように軽くなったのを感じた…。

「ジツジツイイイイイイ！！！」

「え？ヒ、ヒロ！？」

「優子、無事か？この妖怪ジジイに何もされてないか？」

「え？えつと「何じゃ、ヒロお主もこの娘さんの尻を撫でたいのかの？」

「ためえ！ジジイ、優子にセクハラを働くとはいい度胸だ！積年の恨みを含めて今日ここでためえを殺す！！！」

「ホツホツホ、やってみるが良い！未熟者め。」

「行くぞ！ジジイ！」

そうしておじいさんとヒロの乱闘が始まったのだった…。

開始3分ヒロは地面に沈んでいた…。

このおじいさん何者？

「娘さん、この未熟者が迷惑をかけたの。」

「い、いえ！そんなとんでもない！えっともしかしておじいさんつてもしかして…」

「ホツホツホ、いかにも！この未熟者はワシの孫じゃ！不躰な質問をするようじゃが、

さっきの相手と言うのはもしかしてこの未熟者の事か？」

「あ、あの！えっと！そ、そうです…。」

「ふむ、やはりの…。娘さん、名前を聞かせてくれんかの？」

「は、はい。木下優子です。」

「ふむ、ワシは烏丸修輔じゃ。よろしくの、優子さん。」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。」

「さっきの話じゃがな、心配せんでもヒロは優子さんに十分心を許しておる…。」

仮にもし『優子さんか好きな人がどっちかを取れ。』と言われたら迷わず優子さんを取るはずじゃ。」

「なぜそんな事が分かるんですか？」

「呼び方じゃよ。」

「え？」

「ヒロは表面上の人当たりは良いが人に滅多に心の根っこを許す事は無く一步踏み込もうとはしない。こやつは妾の子での、早くに母親を亡くし、烏丸の本家に入ったがそこでのイジメも非道いものじやった…。親に守ってもらえるはずの幼少の頃に姉以外の誰もヒロを助けてやらなかった。唯一の味方だった姉もヒロが8歳のころに事故で死んでヒロが気を許すのはその姉の息子の静馬だけになって

しまった。これは一重にワシを含む烏丸家全員の責任じゃ…。じゃからワシら以外を下の名前で呼ぶ事は今までに一度も無かった…。

それが今日優子さんを下の名前で呼んでいた。」

「それは、私が無理やりそう言ったから…」

「そうだとしても名前を呼ぶ事を選んだのはヒロ自身じゃ。それにそれくらい強引でないとヒロは心を許さん。優子さんはヒロの姉に何処となく雰囲気似ておるからかも知れん。」

「……………」

「だから、優子さんに頼みたい。ワシはもういつまで生きていられるか分からん…。だからヒロをの傍にいて見守ってやってくれんか？今のままでは、ヒロは痛みをこらえすぎていつか壊れてしまうのではないかと思うんじゃ…。」

「……………」

「どうか、この通りじゃ。」

そう言うとおじいさんは私に頭を下げた。正直言っただけにそんな大事な事が出来るかどうか分からない…。けど、それでも私はヒロと一緒に居たい。

ヒロは初めて秀吉と比べず私自身を見てくれた人だから…？

一緒にいると本当に安心できるから…？

たぶん、どれも正解でどれも間違いなんだと思う。

私はたぶん理屈抜きでヒロが好きなんだから…。だから…

「分かりました。私に何処まで出来るか分からないけどヒロの傍にいてヒロを見守り、そしてヒロの事を守ります。」

「ありがとう、優子さん…」

そう言うとおじいさんは帰って行った…。

第19話 シリアスな空気は長く続くと体に悪い…（後書き）

バカテスにあるまじき重さになりました。
不快に思ったのならすみません・・・。

第20話 検閲削除って言葉は便利だね！

ヒロSIDE

「明久、ヒロ、ここはやめよう！」

「何言ってるんだよ、雄二。」

「そつだぞ、いい加減腹括れ」

Aクラスを前にオレ達は坂本の我がままに手を焼いていた。

「頼む、ここだけはAクラスだけは勘弁してくれ！」

「そつか、ここつて坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね。」

「だめですよ、坂本君。女の子から逃げ回っちゃ…。」

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから」

「兄さん、坂本さんはどうしてあんなに嫌がつてるの？」

「うーん、何といったものか…。このクラスには坂本の彼女が居てな、その彼女に会うのが照れくさいんだよ。」

「そうなんだ！坂本さん、うちのおじいちゃんが言っていました。」

男ははつきりしないとだめだつて」

「あのジジイの言葉にしては、まともな言葉だな。」

「こつも言っていました。【検閲削除】は【検閲削除】とも…」

「静馬その言葉は今すぐ忘れなさい。お前にはまだ早い。」

あのジジイ、子供に何という言葉を教えているんだ！あの歩くわいせつ物め！

「お姉ちゃん【検閲削除】ってなに？」

「え、え〜と…。」

すまない、島田…。うちのジジイのせいで…。

「……………（パシャパシャ）！！」

「何やってるの（るんだ）？ムツツリーニ」「」

「……………人違い。」

「何処からどう見ても土屋でしょうが。あんた何やってんの？」

「……敵情視察。」

「駄目じゃないか、ムツツリーニ。盗撮なんて撮られている女の子が可愛そうだと。」

「……1枚100円」

「2ダース買おう。可哀そうだと思わないかい？」

説得力が皆無だぞ……。吉井。

「普通に注文してるわよアキ……」

「ハッ、いつの間に！」

「……そろそろ当番だから戻る。」

「全くムツツリーニにも困ったものだね……」

写真を後生大事そうにポケットに入れながら言っても説得力は皆無だぞ、吉井……。

「吉井君その写真どうするつもりなんですか？」

「やだな……。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それより早く入ろうよ。」

はい、ダウト！！お前がそんなお宝を処分する訳ないだろうが。

まあ、後で見せて貰いたいから黙ってるけどね……。

「あ、そうですね。入りましょうか。」

「うん、うん。って映ってるのは男の足ばかりじゃないか！畜生！」

「やっぱり見てるじゃないですか。」

「いひゃい、いひゃい！つねらないでください！」

ケツ！いちやついてんじゃねえよ、畜生！オレが優子に避けられると分かってやってんのか？腹立つから後でFFF団にチクツといてやる！

などと僻みっぱい事を考えながら店に入った。

「……お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様」
扉をあけるとそこは別世界でした……。

メイド服を着た霧島がオレ達を出迎えてくれた。

「……チツ」

坂本も最後に渋々入って来た。

「・・・おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」
えらく大胆だな、おい…。」

「・・・では、メニューをどうぞ。」

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれでいいです。」

「あ、わたしもそれがいいです。」

「葉月もー!」

「僕は『水』で、付け合わせに塩があると嬉しい」

「…吉井、ちよつと其処に座りなさい…。」

「え？もう座ってるよ。」

「違う、違う。言い方が悪かったな…。」

「え？」

「ちよつと其処に正座しなさい…。」

覚悟しろ、吉井!ここからはオレのスーパー説教タイムだ!

「高校生の時期とはしつかり栄養をとり体を作らなければならない時期だ。それなのにお前は…」

ガミ……」

…クドクドクドクド…

…そう言う訳だから今後はきちんとした飯を食いきちんと栄養を取ること!いいな!」

「けどそれじゃあ趣味に費やすお金が…」

「なんだ？まだ説教を受けたいのか？」

「はい!これからはちゃんとした食事を摂ります!」

「分かれればよろしい!それじゃあここはオレが奢ってやるから、もうちよつとちゃんとした物を注文しなさい。」

「え?いいの？」

「その代わり500円以内で頼むぞ…。」

「ありがとう、ヒロ!じゃあ、僕はこのサンドイッチセットで!」

「僕もそれで…」

「オレはクリーム大福セットで…」

「……なんだ？なんでみんな信じられない物を見るような眼でオレを見る……。」

「いいじゃないか、甘いもの好きなんだから……。男が甘いものを好きで何が悪い！！」

「んじゃ、オレは」

「……ご注文を確認します。『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『サンドイッチセット』を二つ、『クリーム大福セット』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ、以上でよろしいですね。」

「全然よろしくねえぞ！」

「……では食器を用意いたします。」

「し、翔子！これ家の実印だぞ！どうやって手に入れたんだ？！」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください。ついでに坂本もFFF団にチクツツといてやる。」

「ミンナコワレテシマエ……。」

「ハッ、いやいやいや！何考えてんだ、オレ！」

「それより、ここに来た目的を果たさないと……！」

「霧島、ここに迷惑なエロジジイを見なかったか？」

「……あそこで優子と話をしている人の事？」

「そうそう、あのジジイの事……って優子と話し中？！まずい！」

「優子がジジイの毒牙にかかる前に何とかしないと……！」

「そう言つてオレはジジイと優子の所へ向かった。」

「ジツジツイイイイイ！！！」

「え？ヒ、ヒロ！？？」

「優子、無事か？この妖怪ジジイに何もされてないか？」

「もし何かされていたらジジイを生かしてはおくまい……！」

「え？えつと「何じゃ、ヒロお主もこの娘さんの尻を撫でたいのかの？」」

「判決！有罪！！！」

「てめえ！ジジイ、優子にセクハラを働くとはいい度胸だ！積年の

恨みを含めて今日ここでめえを殺す!!」

「ホッホッホ、やってみるが良い！未熟者め。」

「行くぞ！ジジイ！」

結局オレは開始3分で地面に沈む事になり、しばらく意識を手放すことになるのだった…。

第21話 口は災いの元とはよく言った物だ・・・

暗い空間の中オレは自分の意識が宙を漂っているような錯覚を覚えた・・・。

なんだか心地よく暖かい感覚だ・・・。

そしてひどく懐かしい・・・。

このままずっとこうしていたい・・・。

何で、こんな所にオレはいるんだっけ？

そうだあれは確かジジイが優子にセクハラを働いた事に怒ってジジイに飛びかかって・・・。

そうだ、そうだった！早く起きないと優子が再びジジイの毒牙にかかってしまう！

そう思つてオレの意識は一気に浮上して行つた・・・。

「ハッ！」

「あ、ヒ口眼を覚ました？」

そう言つて優子はオレの顔を上から覗きこんだ。

「優子？」

あれ？この体勢つてもしかして・・・？

そう、この時優子はソファアの上でオレの頭を膝の上に乗せていた・・・。

俗に言う『膝枕』と言う奴だ・・・。

急いで起き上がり周りの様子を見て見る。

そこには・・・

『頭にブラジャーを付けたどっかで見た事のある変態』と『メイド服に着た何処かで見た事のある吉井』が居た・・・。

夢か・・・。夢に違いない！そうに決まっている！というかそうであつてくれ！

「優子オレまだ寝ているみたいだ・・・。おかしい物体が2つ見える・・・。」

途中の優子の膝枕までいい夢だったのに何という上げ落とした、これは！

「ヒ口、吉井君はともかく、あんなの見たら現実逃避したくなるのも分からなくはないけど残念ながらこれは現実よ……」

夢であるように、何度も願ったよ（BYEEN）

「じゃあ、幻覚……」

「そんなに信じられないんだったら信じられるようにしてあげる」
そう言っつて優子は【すごくいい笑顔】でオレの関節を極め始めた・

「優子、待て！オレの関節はそつちには曲がらな……ギヤアアアアアアアア！」

こうしてさらなる悪夢が幕を開けたのだった……

・
・
・

「逃がすか！追っぞ、アキちゃん！」

「了解！でもその呼び方は勘弁して！」

そう言っつて坂本と吉井はこの店で中華喫茶の悪評を触れまわっていた常夏コンビを追いかけるため外に飛び出して行った……

え、オレ？オレは行かないよ。荒事は苦手だしね！（注：大嘘）

あれ、そう言えばあの二人の分の会計はどうするんだ？

オレの財布の中には諭吉さんが1枚と500円玉が1枚しか入って無いぞ……

学祭で諭吉さんなんか出したら死ぬほど嫌な顔されるのは目に見える。

さて、どうしたものか……

「……お会計は野口英世が1枚か、坂本雄二が1名でお願いします。」

「坂本雄二1名でお願いします。」
「オレは間髪いれずにそう答えたのだった……。仕方あるまい。坂本が素直になるための手助けだとメイドさんへの気遣いだ。」
決して諭吉さんを野口さんに崩してしまつのが惜しくなつた訳じゃない！」

会計も終わったし優子とちゃんと話をする事にした。

「なんだかこうして話すのは久しぶりだな」

「そ、そうね……」

「この間はごめん……」

「え？」

「オレのはつきりしない物言いが優子を傷つけた……」

「なんでヒロが謝るのよ……。今回は何処からどう見ても悪いの

は私じゃない……」

「そうなのか？」

「そうなのよ……」

「じゃあ、お互い悪かつたって事で仲直りだな。」

「そ、それでいいの？私は今回の事で嫌われても仕方ないと思つたのに……」

「オレが優子を嫌うなんてありえないよ。オレは今回の事で優子に嫌われてしまう方が辛かつた……」

「……ごめんね」

「謝るのはもうなした。」

「うん、ありがとう。」

こうしてオレ達は10日ぶりに話し、和解出来た……。

・ ・ ・

「あ、優子！明日は学祭一緒に回ろうな！」

「うん！それじゃあまた放課後にね！」

さて、オレの中の問題も片付いて久しぶりに晴れやかな気分だ・ ・ ・

はて？何か忘れてるような気がする・ ・ ・。

「あ、そうだ！優子、あのジジイは何処行った？」

「え？もう帰ったと思うけど・ ・ ・」

「大丈夫だったか？あれ以上どこもセクハラされてないか？」

「う、うん。大丈夫」

「そうか、そうだよな！優子のない胸じゃジジイもあれ以上・ ・ ・
『ブチッ！』』つと言う音がオレの耳に届いた・ ・ ・。

振り向けば本日2度目の【すごくいい笑顔】の優子がいた・ ・ ・。

「ま、待て優子！すまん！今のはオレが悪かった！だから関節をあらぬ方向へ曲げるのはやめ・ ・ ・ アンギャアアアアアア！」

その後関節技のフルコースをくらったオレは土下座して今度一緒に出かけるとき有名スイーツ店の限定シュークリームを奢るといふ条件で何とか許してもらえたのだった・ ・ ・。

第22話 バカと素直は紙一重！

「で、3回戦は不戦勝じゃったと？」

「うん、相手が食中毒で棄権だつてさ・・・」

あの後常夏コンビを取り逃がし、仕方なく召喚戦争に向かった吉井達を待っていたのは不戦勝と言う拍子抜けな結果だった。

と言つか食中毒って姫路の【アレ】のせいじゃないよな・・・

吉井達を見ると皆同じ事を考えていたようで、不安な顔をしている。空気が重い・・・。こういう時はアレだ、話題を変えよう！

「な、なら次はこつちの立て直しを考えないとな！」

「そ、そうだな。1度失った客を取り戻す為にも何かインパクトのある事をしないとな！」

「ふむ、それで何をするかじゃが・・・」

「雄二、何か考えはあるの？」

「任せておけ。中華でコレは安直過ぎる発想だが効果は絶大なはずだ。」

そう言つてチャイナドレスを取り出した

「奥の手を使うんだな？」

「ああ、これを 明久が着る。」

「・・・吉井、さつきと言いまと言いまお前ついに目覚めたのか？」

「ちよ！やめて！お願い、許して！メイド服の次にチャイナ服まで着たら、きつと僕はホンモノだつて皆に認識されちゃう！」

もう手遅れの様な気がするけどな・・・。

「冗談だ。これは姫路と島田と秀吉に着てもらおう。」

「あ、なんだ。よかつた。」

「ワシは冗談ではないのかのう？」

「心中察するよ、木下・・・。」

「ちよつと何で私たちが！」

「吉井のメイド服のコスプレを見ただろう？それにな吉井もチャイナ服は大好きだぞ、なあ？」

「大好 愛してる！」

「・・・本当に嘘をつけない奴だな。」

「し、仕方ないわね！店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ！」

「そ、そうですね！店の売り上げの為ですしね！」

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い・・・？あ、うん！葉月も手伝うから、葉月にもあの服ちょうだい！」

吉井お前ずいぶんもてるのな・・・。オレなんて、もてた事すら無いというのに・・・。

ああ、クソ！恨めし 訂正、羨ましい！

「ごめんね。気持ちは嬉しいけど葉月ちゃんの分の服が」

「・・・！！（チクチクチクチク）」

「うお！ムツツリーニ！お前何処からわいて出た！」

何処からともなくムツツリーニが現れすごい勢いで服を縫い上げていた。

「・・・オレの嗅覚をなめるな」

そうだった。お前はそういう奴だったよ・・・。もっとそのエロ力を他の事に向けたらいいのに・・・。

「・・・出来た。」

「わ！このお兄ちゃんすごいです！」

「兄さん」

「ん？どうした、静馬？」

「葉月ちゃんが手伝うなら僕も手伝うよ。」

「え？手伝ってくれるのはありがたいけど、服のサイズが・・・」

「・・・ウェイターの服で小さいのがもう1着ある。」

「...いつの間に作ったんだ？」

「……………(フツ)」

ムツツリーニ恐るべし…。

「それでは着替えるとするかの。」

「ここで着替えるの？駄目だよ、秀吉！きちんと女子更衣室で着替えなきゃ！」

「落ち着け、吉井。木下は男だ……………」

「……………最近明久がワシの事を女として見ておるような気がするんじゃないが……………」

「気にするな、秀吉は秀吉だろ。」

おお、なんかいい事言ってるぞ。

「そうだよ！秀吉は性別が『秀吉』でいいと思う！男とか女とかじゃないさ！」

「…オレが言ったのはそ言う事じゃない」

……………台無しだよ、吉井。

「んしょ、んしょ！」

「……………(ポタポタ)！」

「うわあ！ちよ！ムツツリーニが出血多量で死にそうだ！」

「葉月ちゃん、こんな所で着替えないで！このお兄さんが死んじやうよー！」

その後チャイナドレスに着替えた木下と葉月ちゃんとウェイター服に着替えた静馬を連れて校内を歩きまわった。

「しかしこうして見るとお前本当に優子と似てるよな。」

「前から思っていたのじゃがヒロは姉上とワシをどうやって見分けておるのじゃ？最初の時以外は間違えた所を見た事が無いのじゃが……………」

「うーん、何と言った物か……………。感覚的な物だから説明が難しいな…。あえて言うとしたら違和感があるのかな？まあ、外見だけなら判断が難しいけどな…。安心しろよ、オレがお前の事を女として見る事は間違ってもないから……………」

「本当かのう？」

「本当、本当。普段優子見てると、どうしてもお前が男にしか見え
ないから。」
そんなバカな話をしながら帰ってくると店は異様な盛り上がりを見
せていた。

どうやら姫路と島田がチャイナ服で召喚大会に出て勝ったのが大き
かったらしい……。

ん？吉井が教頭と何か話している……。

その後島田に何か言われて吉井は外に出て言った。

何で教頭が吉井に接触してきたのか気になるな……。

吉井は教頭のスパイか……？いや、ありえない。

あいつの素直は筋金入りだし、姫路の転校がかかっているのに裏切
るなんて事は無いだろう。

それにあいつは自分が損しようとする他人の為に動く人間だ。スパイの
可能性は絶対はない……。

と、なると何か他の理由か？嫌な予感がするな。少し付けてみるか・
……。

第22話 バカと素直は紙一重！（後書き）

silverさん感想ありがとうございます！

作者は泣いて喜んでおります！

これからもがんばります。

第23話 普段おとなしい奴が怒ると怖い…

嫌な予感がして吉井を付けてきたが正解だった。

吉井が3、4人に囲まれて襲われていた。

「逃げんなコラ！大人しくしてろ！」

仕方ない、あまり荒つばい事は好きじゃないが助けるか…。

「てめえ！ちよろちよろすんじゃ ぐお!!！」

「よう。無事か、吉井？」

「え？ヒロ、何でここに？」

「嫌な予感がしたからつけてきたんだけどどうやら正解だったな。」

「てめえ！人を蹴飛ばしといてシカトしてんじゃ コペツ!?!」

チンピラが掴みかかって来たからとりあえず投げ飛ばしといた…。

背負い投げ、一本！

「さて、あなた達には2つの選択肢があります。おとなしく黒幕の名前を吐く。この場合その情報が本当ならこれ以上あなた方に何もすることはありません。もう1つは力づくで黒幕を吐かされるか…。この場合少しばかり痛い思いをして頂く事になります。さあ、どうします？」

「な、なめんじゃねえ！」

「あゝ、分かりやすい反応だな…。吉井ちょっと手伝ってもらっぞ。」

「う、うん！分かったよ。」

しばらくお待ちください

「で、黒幕は誰ですか？」

ボコボコになって顔の形が変わったチンピラにオレは黒幕を問い詰めた。

「はひ、ははらはいんへふ（はい、分からないんです）……。」

「もう1発逝つとく？」

「ほんほうへふ（本当です）！ひらはいんへふ（知らないんです）！」

「本当みたいだよ、どうするの？ヒロ」

「…仕方ないな。もう行っていいよ。くれぐれも言っておくけど吉井や周りの人に手を出すなよ。今度やったら問答無用で叩き潰すから、その所よろしく。」

「はひ！ふいはへんへひた！（はい！すみませんでした！）」
そう言ってチンピラは去って行った。

うーん、やっぱり何度やっても人を殴るのは嫌な物だな…。

「ありがとう、ヒロ。助かったよ。けど何で僕を襲って来たんだろう…。」

「大体の見当は付いている。恐らく教頭の差し金だ…。」

「え、教頭の？けど何で？」

「恐らくけど、バアサンとの取引…。けどそうだとすると、府に落ちないこともある。」

なぜ教頭はここまで【如月ハイランド】との契約にここまでやるんだ？

あの教頭が企業の陰謀の手先になっているだけとは考えにくい…。

ここまで手段を選ばずに来ると言う事はそれに見合うだけの旨みがあるはずなのにそれすら見えてこない。

だめだ、どうしてもここまでやる理由が見えてこない……。オレは何か見落としていないか？

「何？府に落ちない事って？それに犯人が分かっているのなら捕まえないと・・・」

「まあ、大したことじゃないよ。それに教頭が犯人だって動かぬ証拠がある訳じゃない。お前と坂本は今まで以上に警戒しておくんだ。いざとなったらオレが奥の手を使うけど、これは代わりに支払う代償がとつもなく大きい最悪の手だ。出来れば使いたくない。絶対に1人で行動するのは避ける事！いいな？」

「うん、わかった。」

「よし、じゃあ用事済ませてさっさと戻ろうか。」

オレの奥に手とは『バアサンを教頭に売り、周りの身の安全を買う』と言う物だ・・・。

そしてそうなった場合バアサンとの約束は無かった事になり、姫路の転校は避けられなくなるだろう。何とか吉井達の身の安全を確保し、なおかつバアサンとの取引を成立させる事が出来る状況を作らないと・・・！

そう考えながらオレ達はその場を後にした。

・
・
・

それから2時間が過ぎた。

「明久、そろそろ四回戦だ。」

「え？もうそんな時間なの？」

「あれ？アキ達もそろそろ出番なの？」

「そうなんですか？実は私たちもそろそろ出番なんですよ。」

「お兄ちゃん、葉月を置いて何処かに行っちゃうの？」

そう言つて葉月ちゃんは吉井のズボンの裾を掴んだ。

うん、少し昔にあった某CMのチワワを思い出す・・・。

「チビッ子、バカなお兄ちゃんは今から大事な用事があるんだ。だからおとなしく待っていないとダメだ。」

「うう。でも…」

「その代わりいい子にしてたらバカなお兄ちゃんがオトナのデートを教えてくれるからな」

「葉月、お手伝いして来るです！」

「吉井……。お前のロリコン疑惑はやっぱり本当だったのか？」

「ヒロ！『やつぱり』って何？『やつぱり』って！それに違うんだよ！葉月ちゃん！僕には君が期待している様な財力は……。って痛ア！」

静馬が吉井の足を思いつき踏みつけた。

静馬、今すごく怖い顔してるぞ…。

そしてお前にこんなバイオレンスな一面があつたなんて兄さんビツクリだよ…。

「アキ、ちよつと校舎裏まで来て…。」

「美波ちゃん、ちよつと待ってください。次の対戦相手は吉井君達の様ですから、召喚獣でお仕置きした方が遠慮なく出来ますよ？」
あ、これは死んだな…。

「ちよ、ちよつと待って！僕の召喚獣はダメージのフィードバック付きなんだよ！姫路さんの召喚獣に攻撃されたら僕自身も酷い目に…。」

「フン、望む所だ！」

「雄二、お願いだから勝手に僕の生命を左右しないで！」

「上等よ。早く会場に向かいますようか。アキがどんな声で啼くのが楽しみだわ。」

「いいだろう。そこまで言うのなら、明久にどこまで大きな悲鳴を上げさせられるのか、じっくりと見せて貰おうか。」

「やめてー！お願い、ヒロ！助けてー！」

「すまない、吉井…。オレは無力だ…。せめて戒名位は考えといてやるからな。」

「嫌アアアアア！…！」

ついに四回戦が幕を開けるのだった…。

第23話 普段おとなしい奴が怒ると怖い…（後書き）

ayk92さん感想ありがとうございます。

これからも一層精進しますのでよろしくお願いします。

第24話 賽は投げられた！あさつての方向に…

『それでは四回戦を始めたいと思います。出場選手は前にどうぞ！』

「それじゃあ」

「……試^{サモン}獣召喚！」

『それでは四回戦を』

「ちよつと待つてくださいますみませんが少しマイクを貸してください。」

そう言つて坂本は先生の返事も聞かずにマイクをひったくつた。

前にも言つたが、返事くらい聞こうよ…。

『清涼祭にご来場の皆様こんにちは！ここにいる僕らは本格飲茶を提供する2・Fの中華喫茶で働いています。このように可愛らしい女の子も一生懸命働いているので、よろしければどうぞお立ち寄りください。』

「……よろしくお願いしまーす！！！！」

そう言つて召喚獣も一緒に頭を下げる。

抜け目がないな。けどこれで中華喫茶の方の客も増えるだろう。

『それではCMも終わりましたし、四回戦を始めます。Fクラスの4人共良い試合をお願いします。』

「アキに坂本、よくここまで勝ち上がつて来たわね。けどウチらに勝てるとはさすがに思つてないでしょう？」

「甘いな島田。お前たちは確かに優勝候補だが、それゆえに勝ちあがつてくる事も容易に予想が付いた。つまり対策がいくらでも打てるという事だ。」

その通りすでに細工は施してある。バレないかと内心ヒヤヒヤしていたけど大丈夫だったようだ。

Fクラス Fクラス

古典 姫路瑞希 島田美波

399点

6点

「こ、古典？四回戦は数学じゃ無かったの？」

「お前らに渡した対戦票だがアレはオレが提案し、ヒロが作った物だ。」

「だ、だましたわね！」

「すまない、島田……。オレ達は何としても勝たないといけないんだ……。そしていまさら気付いても、もう遅い。賽は投げられたのだから……。Fクラス Fクラス」

古典 坂本雄二 吉井明久

211点 9点

こ、これは予想外だった……。吉井、お前は本当に良くも悪くもオレ達の予想をことごとくひっくり返してくれる奴だよ……。

「……明久、正直悪かったと思ってる……。」

「……………」

「……………」

沈黙がきつい！頼む、誰か喋ってくれ！

「よし、雄二！ここは前の様に個人戦で行こう！僕は美波を受け持つから雄二は姫路さんを頼む！」

「待て！それだとオレの負担が大きすぎる！」

「分かってる！だからそこは得意の頭脳プレーでカバーするんだ！」

「なんて無茶言いやがる！」

「ストップ！坂本、吉井！コントやってる場合じゃないぞ！」

「……こっちは死活問題なんだぞ【よ】！」「……」

駄目だ……。聞いちゃくれねえ……。ここは坂本に任せるか……。

「分かった。そこまで言うのならお前の言う通り頭を使ってやろう。島田に姫路」

「はい？」「何よ？」

「明久が【如月ハイランドのペアチケット】を手に入れようとしているのは話したよな？一緒に行こうとしている相手がオレだと話したがアレは嘘だ！」

「えええっ！」

吉井、お前とんでもない誤解を受けていたんだ…。同情するよ、ホントに…。

「そ、それじゃあいったい誰を…」

「決まっているだろう…。明久が誘おうとしている相手は島田。お前」

島田を懐柔するつもりか？けどその策だったら姫路を懐柔した方が効率が良くないか？

「の妹だ。」

・
・
・

「どうしたんですか、静馬君？怖い顔しちゃって」

「ううん、なんでもないよ。ただ無性にバカなお兄さんの足を踏みたくなっただけ…。」

・
・
・

「殺すわ。」

「吉井君やっぱりお仕置が必要みたいですね。」

「さよなら、吉井…。君の事は忘れない…。」

「待つんだ、美波！僕は別に葉月ちゃんをどうこうしようなんて思っ
つてない！」

「瑞希はアキの召喚獣をボコにしなさい！ウチはアキの本体をボコ
にするから！」

「わかりました！」

「分からない！2人の言ってる事が分からない！」
カオスだ…。オレこの大会に出なくて良かった…。

「アキ！大人しく殴られなさい！」

「美波！それは反則だよ！」

ああ、なるほど。ここであっちに反則行為をさせて勝ちをもらおうって事か。

『反則はありません。』

……どうしよう。万策尽きたぞ、坂本。

姫路の召喚獣が吉井の召喚獣を襲う。

それを何とか吉井の召喚獣は姫路の召喚獣の大剣を構え直せない様に抑え込んだ。

何とか振りほどこうとして暴れる姫路の召喚獣が吉井の召喚獣にダメージを与えていた。

吉井の本体の方も島田（本体）の無慈悲な攻撃と召喚獣による痛みをフィードバックで相当きつそうだ…。

そういえば坂本の召喚獣は何処に行った？

「今だ！雄二！」

「おおおおおおお！」

吉井の合図と同時に今まで視界の外に消えていた坂本の召喚獣が姫路の召喚獣の頭上に姿を現した。そして渾身の一撃が放たれた。無防備な状態で攻撃を受けた姫路の召喚獣は成す術も無く消滅した。

吉井の召喚獣ごと…。

「瑞希！」

「よそ見とは余裕だな、島田。」

「しまっ！」

「これで決まりだ！」

そう言っつて坂本は島田の召喚獣に一撃を加え、島田の召喚獣も消滅した。

『あゝ、えっと…。姦計を巡らし味方ごと相手を葬った坂本雄二君の勝利です。』

……勝ったのはいいけどこれ完全に手口が悪役じゃないか？そんな釈然としない気分のまま召喚獣のフィードバックで気絶した

吉井を担ぎその場を後にした。

余談だがその試合の宣伝効果もあり、中華喫茶の客が増えた。さて、次はいよいよ準決勝だ。次の策の為に動くのでしょうか…。

第25話 ご利用は計画的に

次の試合の為の策を実行するためにオレは木下を連れてAクラスへ向かっていた。

「やあ、烏丸君じゃないか。」

嫌な奴にあつた…。

「こんにちは、教頭先生。すみませんが急いでいるので失礼させて頂きます。」

「まあ、そう言わないでくれたまえ。少し位話を聞いてほしいな。」

「…木下、悪いけど先に言ってくれるか？それとオレと教頭先生が話をしていた事は誰にも言わない様にな…。」

「？分かつたのじゃ。先に行つておるからの。」

そう言つて木下は去つて行つた。

「さて、こうして接触してきたという事は『交渉の余地あり』と取つていいんですか？」

「ああ、そうとつて貰つて結構だよ。」

「それではお話を伺いましょうか。」

「ああ、単刀直入に言つと私の為に働いてくれないか？」

「僕にとつてのメリットは？」

「フツ、学園生活を送る上でのあらゆる優遇を約束しようじゃないか。もちろん協力してくれるならすぐにもAクラスに入れるように手配しよう。もともと君にはそれだけの学力があるんだしね。」

「1人の生徒を優遇すると色々怪しまれますよ。それに他にも先生の為に働いている生徒もいるんですよ。その人たち全員にこんな破格の条件を約束しているんですか？」

「いや、君は特別だよ。烏丸の家の出身である君はね…。」

「……………」

やっぱりか…。こいつはオレを懐柔して烏丸家に取り入ろうとしている。

万が一の時はオレも切り捨てるだろうな…。

しかし吉井達の身の安全を保証するための取引に教頭とのコネクションは必要だ…。

ここで無碍に断る事は出来ない。

「そうですね、Fクラスの不衛生な教室の修繕と言つのも条件に入れてくれるのなら”前向きに検討”しますよ。」

日本語って便利…。完全に敵対の姿勢は取らずそっちに寝返るのもやぶさかではないという旨を含めてそう伝えた。

「そうかね。出来れば”今すぐ”に答えが欲しかったけど、仕方ないね。色よい返事を期待しているよ。」

そう言つて教頭は嫌な笑みを浮かべて去って行った。

さて、だいぶ時間をロスしてしまった。さっさと行くとしますかね。

・
・
・

明久SIDE

「すでにヒロと秀吉が作戦の為動いている。狙いは秀吉の姉『木下優子』だ。」

いい加減に雄二も素直になればいいのに…。

「明久、その不愉快な視線をやめろ。」

「え？何の事？」

心外な言い方だ。まるで弟分を心配するかのような慈しみの眼を向けたのに…。

とにかく気合いを入れろ！ここで負ければお前は大好きな姫路を失うし、オレは今後の人生を失う。命がかかっていると見え！

「その”大好きな”って言うのはやめてほしいけど、了解！絶対負けるものか！」

「おっしや、いくぞ！」

「おう！」

『お待たせしました！これより準決勝を始めます。出場選手の入場です！』

良かった、時間ギリギリだったけど間に合ったみたいだ。

「…雄二、邪魔しないで。」

「そうは行くか！オレにはまだやりたい事がたくさんあるんだ！」

「…そんなに私と如月グランドパークに行くのがいや？」

クツ！何という攻撃だ！涙目の上目使い！これでひどい事が言える奴は人間じゃない！

「ああ、嫌だね。」

人間じゃない。

「…やっぱり一緒に暮らして分かりあう必要がある。」

霧島さんも負けていない。やっぱり2人ともお似合いだと思う。

「ハッ！残念だったな！準備は万端だ！頼むぞ、秀吉！」

「………フツ」

「秀吉？もう木下さんの演技はいいからはやく僕らと…」

「秀吉？秀吉ってあのゴミの事？」

促されるままに眼を向けるとそこにはボロボロにされた拳銃手足を縛られた秀吉がいた。

「秀吉！？何でそんな姿に？」

「バ、バカな！」

「く…！すまぬ、明久。しくじった。」

「………！！（パシャパシャパシャパシャ）」

「ムツツリーニいつの間に！」

「撮影なんかしてないで、早く縄をほどいてあげてよ（その写真後で売ってほしいよ）…！」

「………了解」

「明久、本音が混ざってるぞ！後ヒロは何処に行った？」

「…ここにいるよ。」

声のした方向に眼を向けるとそこにはロープでグルグル巻きにされて簀巻きになっているヒロがいた…。

「驚いたわ、ヒロの好きな人が坂本君か、吉井君だったなんて…」
心なしか木下さんの顔が嬉しそうにも、悲しそうにも見える。

「そうだったの、ヒロ!？」

「誤解だ!オレはノーマルだ!あえて言うなら、好みのタイプは年上の巨乳(これ重要)美人だ!！」

「ブチッ!！」

あ、木下さんが【すごくいい笑顔】でヒロに迫って行っている。

「ハッ!いや待て、優子!簀巻きにされている状態で逆エビ固めは勘弁!ギヤアアア!！」

「よし、明久。今の内に翔子を叩くぞ!」

(雄二、ぼくに考えがあるから指示通りセリフを言って欲しい。)

(考え?いったい何を)

(今は迷っている時間は無いよ。とにかくよろしく。)

(お、おう)

(翔子、オレの話を聞いてくれ。)

「翔子、オレの話を聞いてくれ。」

(お前の気持ちは嬉しいがオレにはオレの考えがあるんだ)

「お前の気持ちは嬉しいがオレにはオレの考えがあるんだ」

「雄二の考え?」

(オレは自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして胸を張ってお前と幸せになりたいんだ。)

「オレは自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして胸を張ってお前と幸せになりたい。ってちよつと待て!」

「…雄二」

霧島さんはうつとりした表情で雄二を見ていた。

(だからここは譲ってくれ。優勝したら結婚しよう。)

「だ、誰がそんなこと言うか!ボケエエ!」

「くたばれ!」

「クペッ!」

そう言っつて頸動脈を押さえた。これで少しは聞きわけも良くなるだ

るう…。

(秀吉、よろしく！)

(うむ、了解じゃ。)

「だからここは譲ってくれ。優勝したら結婚しよう。愛してる、翔子。」

「…雄二、私も愛してる…。」

「霧島さん、僕らの勝ちでいいよね？」

「…私たちの負け。」

『…それでは吉井、坂本ペアの勝利です。』

観客は拍子抜けしたような表情で僕らを見ている…。

「それじゃ、僕らはこれで！」

一礼してその場を後にした。

「明久、なかなかの機転じゃったの？」

「…作戦勝ち」

「ありがとう、秀吉とムツツリー二の協力があつてこそだよ。」

「ところで雄二とヒロをそのままにしておいていいののかの？」

「え？別にいいんじゃない？ヒロと木下さんはじゃれてるだけだし、

雄二もたまには素直になるべきだと」

「いや、ヒロは姉上の折檻で白目を剥いて泡を吹いておるし、雄二

は霧島に一服盛られて持ち帰られそうになっておるから心配になっ

ての。」

「霧島さん、木下さん！ヒロと雄二はまだ喫茶店もあるからそれ以上は勘弁してあげて！」

第26話 最低な奴はとりあえず吊るしとけ！

「明久、今日という今日は貴様をクロス！」

「あはは。やだなあ、雄二。眼が坐ってるよ？」

「うう、酷い目にあつた…。」

「……雄二」

「どうした、ムツツリーニ？」

「……ウエイトレス達と静馬が攫われた」

「なっ！静馬が攫われた！？どういう事だ！」

「落ち着け、ヒロ。これは予想の範疇だ。」

「どういう事だ、坂本！？この状況を予測していたのか！事と次第によつてはお前でも許さんぞ！！」

「落ち着け。予測していたのにオレが何も対策を立てていないでも思つたか？」

「そうだよ、ヒロ。それよりも今はみんなを助けに行かないと…。」

「……そうだな。取り乱して悪かつた…。けど静馬に何かあつたらオレは…。」

死んだ姉さんの代わりに守って行くと誓つたのにオレは何をやつて
いる…！」

「大丈夫だ。ムツツリーニ！」

「……（コクツ）行先は分かっている。」

「よし、それじゃあ救出に行くぞ。」

「ああ！」

無事でいてくれよ！静馬！

・

静馬SIDE

目の前にいる人たちは僕らを縛りあげて、目の前の男たちは何か話

しこんでいた。

「さて、どうする？坂本と吉井だったけか？そいつらこの人質を盾に呼び出すか？」

「いや、待て。吉井つてのは知らないが坂本の方には下手に手を出すとマズイ。今はあまり聞かないが中学時代は相当鳴らしていたつて話だしな。」

「坂本つてまさかあの坂本か？」

「それにあいつらの近くにいた烏丸つて奴も相当ヤバイ。なんでも【西橋のカラス】とか言われていたらしいしな…。」

「【西橋のカラス】つてあれか！？カラスの首を獲れ』とか言われた！？」

「ああ、できれば事を構えたくんだが…。」

「気持ちに分かるけどそうはいかないだろう。依頼は吉井と坂本を動けなくする事なんだから…。」

「灰皿をお取り換えします。」

「おう。で、このお姉ちゃん達どうする？ヤツちゃつていいの？」

「だったらオレこの巨乳チャンがいいな」

「あ、ズリー！それならオレ2番ね」

「お、お姉ちゃん…。」

「あんた達今すぐ葉月を話しなさいよ！」

「『お姉ちゃん』だつてよ、かつわいいー！」

「やめるー！！」

「あん？何だ、ガキ？」

「葉月ちゃんが怖がつてるからやめろと言つたんだ！」
バキッ！

「グアッ！」

「静馬君！」

殴られて僕は吹っ飛んだ。

「カツコつけてんじゃねえよ、クソガキ。そこでおとなしくバカみたいに震えてろ。」

「ギャハハハハ！」
うう、く、悔しい…。情けない…。思えば僕は兄さんやお爺ちゃんに守られてばかりで僕一人じゃ何もできない……。

「子供相手に何するのよ！」

「あー、もううつせえ女だな！」

ドカツ！

「きゃあ！」

「やめるー！」

「おい、クソガキまだ殴られ足りねえのか？ああ？」

足が震える…。そうだ、確かに僕は兄さんやお爺ちゃんに守られてばかりで自分だけじゃ、何もできない！けどそれを理由に逃げちゃ駄目だ！！

なぜなら僕は葉月ちゃんが好きなんだから……！

「葉月ちゃんやお姉ちゃん達は僕が守るんだ！」

「いい度胸だクソガキ、よく言った！静馬！」グオツ！」

「死にくされやアアア！」

「ほごおお！」

そこには兄さんとバカなお兄さんこと吉井さんが居た…。

ヒロSIDE

『さて、どうする？坂本と吉井だったけか？そいつらこの人質を盾に呼び出すか？』

『いや、待て。吉井つてのは知らないが坂本の方には下手に手を出すとマズイ。今はあまり聞かないが中学時代は相当鳴らしていたって話だしな。』

『坂本つてまさかあの坂本か？』

『それにあいつらの近くにいた烏丸つて奴も相当ヤバイ。なんでも』

【西橋のカラス】とか言われていたらしいしな…。』

『【西橋のカラス】つてあれか！？カラスの首を獲れ』とか言わ

れた!?!」

『ああ、できれば事を構えたくないんだが…』

『気持ちは分かるけどそうはいかないだろう。依頼は吉井と坂本を動けなくする事なんだから…』

(雄二、この連中って…。)

(ああ、黒幕に依頼されたそこのチンピラだろうな。)

「灰皿をお取り換えします。」

「おう。で、このお姉ちゃん達どうする? ヤッちゃっていいの?」

「だったらオレこの巨乳チャンがいいな」

「あ、ズリー! それならオレ2番ね」

「お、お姉ちゃん…」

「あんた達今すぐ葉月を話しなさいよ!」

「『お姉ちゃん』だってよ、かつわいいー!」

「ぎゃははははは!」

(クソツ! あいつら今すぐ皆殺しにしてやる!)

(手伝うよ、ヒロ!)

(待て。明久、ヒロ。気持ちは分かるが)

「やめる!」

『あん? 何だ、ガキ?』

『葉月ちゃんが怖がってるからやめろと言ったんだ!』

バキッ!

『グアッ!』

『静馬君!』

『カツコつけてんじゃねえよ、クソガキ。そこでおとなしくバカみ
たいに震えてろ。』

『『ギヤハハハハハ!』』

『子供相手に何するのよ!』

『あー、もうつつせえ女だな!』

ドカッ!

『ぎゃあ!』

何かがおレの中で切れた…。

コイツラ イマ ナニヤツタ？

「あいつらもう許せない！乗り込もう、ヒロ！」

「ああ！」

『やめるー！』

突入しようとした矢先に静馬の声が聞こえてきた…。

『おい、クソガキまだ殴られ足りねえのか？ああ？』

『葉月ちゃんやお姉ちゃん達は僕が守るんだ！』

子供は知らない間に成長しているんだな…。嬉しいような、寂しいような…。

静馬の言葉でおレは冷静さを取り戻す事が出来た。

さあ、行くぞ！覚悟しろ！

「いい度胸だクソガキ！よく言った！静馬！」グオツ！」

「死にくされやアアアア！」

「ほごおお！」

「てめえら！いきなり出でて来てヤスオに何しやがる！」

「イツシャアアアア！」

「グエツ！」

「てめえらよくも美波と静馬君にてをあげたな！全員ぶち殺してやる！」

「ああ、楽に死ぬると思うなよ！」

「こいつら吉井と烏丸だ！」

「どうしてここが？」

「ちようどいいい！ぶち殺せ！」

「たった2人で調子くれてんじゃねえ！」

「やれやれ…この阿呆どもが。少しは頭を使って行動しろ っての！」

「！はっ！」

「貸し1つ、だからな。」

「てめえら！動くんじゃねえ！このおじょうちゃんが酷い目に」

「……………遭うのはお前。」

ゴイン!

「あがぁ!」

「と言う訳で人質は無事奪還出来たし、もう手加減はいらないよな……?」

「ああ、もちろんだ。それにしても言いストレス発散相手が来てくれたな!生まれてきた事後悔させてやるぜ!」

「……あわわわ!助けてくれえ!」「」「」

「心配するな、今に殺してくれと頼むようになる……。」

「……い、嫌だアアア!……!」「」「」

オレと坂本の容赦無い制裁によって汚い悲鳴が部屋に響き渡ったのだった……。

第27話 処世術にはオブラートに包んだ表現が必要だ…

誘拐騒ぎも解決し、喫茶店も終了終了したFクラスの教室…。

オレ達とはある人物に会うためにそこで待っていた。

「明久、ヒロそろそろくる時間だぞ。」

「来るって誰が？」

「バアサンだろ？」

「ああ、この一連の妨害は全部バアアに原因がある。」

「え？だってヒロは妨害してきた奴らは教頭の手先だって言っただよ。」

「ああ、恐らくバアサンは原因ではあるが黒幕では無い。」

「どうしてそんな事が分かるの？」

「教頭と接触して探りを入れた。あの時教頭は『私の為に働け』と言ってきた。つまりバアサンと協力関係にあるオレを味方につける事で一気にこの状況に片を付けるつもりだったんだろう。」

『烏丸の本家に取り入ろうとしている』と言う事は黙っておいた。言えば巻き込むことになる…。

「けど、どうしても分からない事がある。何故たかが企業の陰謀如きで教頭がこんな犯罪紛いの方法をとるんだ？どう考えてもリスクが高く、教頭に対しての旨みが無さ過ぎる。【如月ハイランドのペアチケット】にはバアサンが言っていた事以上の意味があるんじゃないか？それに召喚大会にしたってオレ達に言うよりAクラスの奴らや3年の優秀な人たちを推薦と引き換えに抱き込んだ方が効率がいいはずだ。それをしないのは何でだ？」

それにチケットだけで烏丸の本家に取り入れるほど甘くない…。

オレは何か大事なことを見落としていないか？

「ヒロ、恐らくだが根本的な所で思い違いをしている。」

「?????どういう事だ？」

「ババアの狙いはチケットじゃなく、もう1つの方だ…。」

もう1つの方…。【白銀の腕輪】…。確か特殊能力が付くとか何とかという代物だったよな？

「その通りさね…」

「来たか、ババア！」

「やれやれ、わざわざ来てやったのにずいぶんと御挨拶だねえ、ガキどもが」

「あなたに礼儀を払う必要は無い。あなたのせいで静馬や吉井達が危険な目に遭ったと言っても過言じゃないんだからな…」

「オレ達に対して話す事を話してないのはオレ達に対する裏切り行為と言えるぞ。洗いざらい話してもらおうか。」

「やれやれ、賢しい奴らだと思っていたがまさか私の考えに気付くとは思ってなかったよ。」

「最初からおかしいとは思っていた。ヒロの言った通りオレ達を擁立するなんて効率が悪すぎる。」

「話を引き受けてきた教頭の手前おっぴらに妨害する事ができない、とは考えなかったのかい？」

「それも最初ヒロが交渉で言った通り、学園の評判が落ちる要素があるのにババアが生徒の健康状態を損なう恐れのある設備の改善を渋る訳が無い。」

「ああ、オレもそこでこのバアサンが坂本と吉井を召喚大会に出す為に態と渋ったと考えた。」

「あの時、ヒロが帰った後あなたに科目選択の提案をした。それを飲んだつてことはオレ達に優勝してもらいたがっているという事だ。そしてあなたは『点数の水増しだったら却下していた』とも言った。つまりあなたの目的はオレ達の様な優勝する可能性のある低得点者であるオレと明久に召喚大会に出場してもらい、商品の【白銀の腕輪】を回収してもらう事だと判断した。」

確かにその理屈で行くとオレの出場を禁止した理由も辻褄が合う…。最初に聞こえてきた怪しい会話が如月ハイランドの事だったからオレはその先入観に囚われすぎていたのか…。

「はあ、アタシの無能をさらすような話だから伏せて置きたかったんだけどねえ…。」

その通りだよ。アタシの本当の目的は【如月ハイランドのペアチケツト】なんかじゃない。

アタシにとって企業の企みなんかどうだっていいんだよ。アタシの本当の目的は【白銀の腕輪】をあんたらに優勝して勝ち取って貰いたかったのさ…。」

「勝ち取る？回収してほしいって訳じゃなくて？」

「あんな…。回収が目的ならオレ達に依頼する必要はないだろう？そもそも回収なんて事は極力避けたいだろうし…。」

「本当にあんたは頭が回るねえ…。そうさ、出来れば回収なんて真似はしたくない。新技術は使ってみせてナンボのモンだからねえ。」

デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体疑われることになる。」

「でも何でその【白銀の腕輪】を手に入れるのが僕らじゃなくては駄目なんですか？」

「…欠陥品だったってことか？」

「そのとうりさね」

「その欠陥って言うのは吉井と坂本だったら問題無いのか？」

「そうさ、こいつらが使うなら暴走は起こらずに済む。不具合は入出力が一定水準を超えたときだけだからね。」

「なるほど、ヒロミみたいな高得点者を使えない訳だ。」

「え〜と、つまり…。」

「坂本の言う通り【優勝する可能性のある低得点者】ってのが一番都合が良かったってことさ。」

「よく分からないけど褒められているのかな…？」

「えつと要約すると吉井は少し成績が良くないけど、高得点者と張り合えるだけの実力者だったから都合が良かったって事だよ…。」
物は言い様だ…。しかし人には時には知らないほうがいいという事もある…。」

「いや、そんなあ…。照れるな「いや、お前はバカだと言われているんだ。」

「なんだと！このババア！」
坂本…。せっかくオブラートに包んだ表現を選んだのに台無しだよ…。

「うち片方の召喚フィールド作成用はある程度まで耐えられるんだけど、もう片方の同時召喚用は平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと。」

「これは褒められていると取っていいんだよね？」

「…よかつたな、吉井！“ある意味”お前にしか扱えない代物だぞ！」

物は言い様だ…。しかし人には時には知らないほうがいいという事も（以下略）

「いや、そんなあ…。照れるな「いや、バカにされている物凄い勢いで」

だから、坂本…。せっかく誤魔化す事を選んだのに（以下略）

「目的はバアサンの失脚、及び学園の乗っ取りか？」

「その通りだよ…。あんたらが受けた妨害や誘拐は恐らく黒幕の教頭が仕掛けた事だろう。」

なるほど、やつぱりか…。これで分からなかった事も含めてすべてに納得がいった。

この騒ぎに乗じて試験召喚システムを自分たちの物にして、利益を独占しようと考えた訳だ…。相変わらず考える事がせこいな、本家は…。

「まさか、連中がこんな強引な手段で来るとは思わなかったからねえ…。アタシの考えが甘かったせいだよ。すまなかってね。」

そう言つてバアサンはオレ達に頭を下げた。

「頭上げてくれ、自分の非が分かつて謝ってくれる人間を責める趣味はないよ。」

それに一番腹立つのは教頭だしな…。

「けど、それならいざとなったら優勝者に理由を説明して回収させてもらったら…」

「いや、そいつは無理だろう。決勝の相手はあの【常夏コンビ】だ…。」

妨害に回っていたという事はあいつらは間違いなく教頭の手先だ。嬉々として暴走を引き起こすだろう。恐らく見返りは推薦あたりだろう…。

「悪いが、あんた達には優勝してもらうしか手は無いだよ…。」
バアサンの表情も硬い…。事態はかなり深刻だ…。

「学園長、質問です。」

「なんだい？」

「腕輪の暴走って総合科目が平均点に行かなければ起こらないんですか？」

「そうさ、1つ、2つの科目が高得点でもその程度なら暴走は起きないよ。」

「そうですか、それは良かった。雄二、ヒ口聞きたい事は聞けたし、今日はもう帰ろう。」

「そうだな、家に帰ってやることもあるし 明日も早いしな。」

「じゃあ、3人共。特に坂本と吉井頼んだよ…。」

そう言っただけバアサンは学園長室に戻って行った。

さて、オレもオレで計画の為に動くとしますかね…。

第27話 処世術にはオブラートに包んだ表現が必要だ…（後書き）

主人公は能力的に策は雄二に一步及ばず、行動力は明久に一步及ばずの器用貧乏という設定です。

第28話 人への好意は積極的に表に出しましょう

「アキ、烏丸おはよ」

「おはようございます、吉井君、烏丸君」

「2人ともおはよう。あゝ昨日はぐっすりと眠れた？朝ご飯食べてきた？」

「ふふ、吉井君気を遣いすぎですよ。大変でしたけど不思議なくらい落ち着いてますから。それにまた何かあったら吉井君が助けてくれますから…」

「アキと言うより坂本、土屋、烏丸かもしれないけどね。」

「元気そうでよかったよ。今朝は変わったこと無かった？」

「……異状なし」

「不審な連中はおらんかったぞ」

「そっか、ありがとう。秀吉、ムツツリーニ」

「何これ位は当然じゃ。昨日ワシは余り役に立てなかったからのう……」

「木下、人には得て不得手がある。あまり気にするな。」

そんな感じで二日目はスタートした。

「さてと、それじゃあ僕たちは決勝戦に行ってくるけど後頼める？」

「後で私たちも応援に行きますね。」

「ここまで来たんじゃ、抜かる出ないぞ？」

「……優勝」

「分かってる。試召戦争の時の様なへマはしないよ」

「やれやれ、耳が痛いな……」

「くれぐれも気を付ける。相手が相手だけに何をしてくるか分からない。」

「ああ、それじゃあ行ってくる！」

そう言って坂本と吉井は決勝の会場へと向かって行った。

さて、作戦開始だ。

コンコンコン

「入りたまえ。」

「失礼します。」

そう言つてオレは教頭室に入った

「やあ、烏丸君。今日はどんな用事で来てくれたのかな？」

「そうですね…。昨日のお話の返事をしに来ました。」

「そうかい、まあ掛けたまえ。今お茶を入れてあげよう。」

「いえ、お構いなく。すぐに終わりますから…」

「そうかね。それでは本題に入ろうか。考えてくれたかね？」

「ええ、もちろん。こんなうまい話そうそうありませんから…」

「それでは…」

「お断りします。」

「…理由を聞こうか？」

「ええ、教頭先生はご存知ですか？昨日Fクラスの生徒と一般で来ていた子供二人が拉致されました。幸いその子たちに大した怪我はありませんでしたが…。その中の一人が僕の甥っ子でした…。」

「ほう、それは災難だったね…。」

教頭は椅子から立ちあがつて窓際から外を見ていた。

「ええ、全くです。しかしここからが面白い話で雇い主が教頭だという話をとある人から聞きました。」

「それは面白い話だね。しかし私はそのような事はしていないよ。」

「そうですね、しかしそれを証明するだけの証拠は教頭先生にはありませんか？」

「…ふむ、残念ながら無いね。」

「そう言う事です。要するにそんな信用できない人のもとで働くのは真つ平御免です。」

「…後悔するよ。」

「それは脅しですか？」

「いや、忠告だよ…。」

「貴重なご意見ありがとうございます。それでは失礼します。」
そう言うてオレは教頭室から出て行った。

さて、教頭室に遠隔操作式の爆竹を大量に仕掛ける事は出来た。後はある程度後に作動させて騒ぎを起こせばいい。そうすればバアサンは調査の為と言う大義名分を引つ提げて教頭室にガサ入れに入るだろう…。

そろそろ召喚大会の決勝が終わるところかな？

そう思いオレは教室に向かうのだった。

・
・
・

吉井と坂本は常夏コンビ相手に見事に勝利を収めたようだ。

オレはクラスの喫茶店である程度働いた後、優子と学祭を回っていた。

「あゝ、久しぶりにのんびりできる…。」

「何よ？ずいぶん疲れてるじゃない…。」

「そりゃ、そうだ。昨日だけでえらく密度の濃い体験をさせて貰ったからな…。簀巻きにされて臨死体験とか、な…。」

「そ、そう言えばこの前言った『召喚大会で手助けしなくちゃならない人』って言うのは坂本君と吉井君のどっちなの？」

「なんだ？藪から棒に…。」

「いいから、答えて。」

「両方だよ。当たり前じゃないか。」

「え？坂本君と吉井君で二股かけてるの？」

「ちよつと待て！何でそうなる！」

何処でどう解釈したらそんな恐ろしい事になるんだ！

「昨日も言っただけオレはノーマルだ！」

「それなら何で召喚大会で坂本君達の味方をしたの？」

…仕方ない。学園長との取引の事を除いて説明するか…。

優子SIDE

「そうなんだ、姫路さんの転校を阻止するために…」

「ああ、と言う訳だからオレには男色の趣味は無い！」

少しホツとした様な、残念なようなそんな複雑な気分ね…。

けどこの機会に前から気になってた事も聞いちゃおう…

「ヒ、ヒロ！あ、あの前から気になってたんだけどヒロには好きな人って誰がいる？」

「え、えらく唐突な質問だな、おい」

「いいから、答えて…」

「…いるよ。」

その答えに心臓を掴まれた様な気分になった。

大丈夫、ヒロに好きな人が居ても私は負けない。絶対に振り向かせて見せる！

「誰なの、それは？」

「…教えないよ」

「教えてくれると嬉しいな」

そう言っただけはヒロの腕を掴んで”お願い”した。

「わかった！特徴だけ教えるからそんな【いい笑顔】でオレの腕の

関節を逆に曲げようとするのはやめてくれ！」

そういつてヒロは観念した…。最初からそう言えばいいのよ。

「そいつの特徴は普段は明るく社交的で愛想の良い優等生で可愛い

顔してるけど、意外に凶暴で、努力家つてところかな…。」

そこに昨日言っただけ巨乳の年上美人が入るから総合すると

【上級生で明るく社交的で愛想の良い優等生で可愛い系の顔で凶暴

で努力家で胸が大きい」ということになる…。

「そんな人うちの学校にいたかな？」

「ハアアアアア…。」

「どうしたの、ヒロ？盛大にため息なんかついて…。」

「いや、ままならない物だなんて思ってたさ…。」

「???？」

第29話 テロリストにご用心！

『ただいまをもちまして清涼祭一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください。』

「お、終わった…。」

「な、長かった…。」

「さ、さすがに疲れたのう…。」

「……………(コクコク)」

放送を聞いた途端オレ達は地面にへたり込んだ…。

さすがにキツイ…。優子と学祭を回り終わってから休憩らしい休憩も取らず、ぶつ通しで働いていたから当然と言えば当然だが…。

「そう言えば姫路さんのお父さんどうしたんだろっ？」

「なんだ？未来のお義父さんが気になるのか？」

「な！べ、別にそう言う訳じゃなくて！」

ニヤニヤしながら吉井に聞くと吉井は面白い位慌てふためいてくれた。

「後夜祭の後に話しに行くと言っておったからのう。結論はその時じゃな。」

「そうか。まあ、やるだけの事はやったんだ。悪いようにはならな
いだろうよ。」

「そ、そうだよな。」

吉井はまだ不安そうな顔をしているが、オレはそんなに心配して
ない。

吉井、坂本の召喚大会の優勝（バカクラスでも姫路の刺激になる存
在がいると言う証明）

設備の改善（バアサンとの取引の成立）

姫路の成績向上（前回の試召戦争時に実証済み）

この3つの条件がクリアされている。よほどの問題が無ければ転校
は阻止できるだろう。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ。」

「ええ？どうして!？」

「どうしてって言われても恥ずかしいからに決まってるでしょ。」

「すみません、すぐに戻りますので。」

「待って、2人も考え直すんだ！カムバーっク!!」

「諦める、吉井。学祭の間着ていてくれただけでも御の字なんだから……。」

「ふむ、ならばワシも」

「させるか！せめてせめて秀吉だけでも着替えさせない!!」

「な、何をするのじゃ、明久!」

「……（フルフル）」

そう言つて吉井とムツツリーニは木下の腰に巻きついた。つて言うかお前ら木下は男だつて……

「フッフッフ！これで着替えに行く事は出来ない「ええ加減にせんかい!」

「スッパーン!!スッパーン!!」

どこからともなく取り出したハリセンでオレは吉井とムツツリーニの頭をシバいた……。

うん、いい音だ……。

「おい、明久とヒロ。遊んでないで学園長室に行くぞ。」

「学園長室じゃと？3人共何か用事があるのかの？」

「ちよつとした取引の清算だ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな。遅くなつたが今から行こうと思う。」

「ならばワシはその間に着替えを」

「そうは行くか！秀吉も一緒に連れて行く!!」

「……（コクコク）」

だからお前ら木下は男（以下略）

「困つたのう、雄二、ヒロ。なんとか言つてやってくれんか？」

「ん、いいんじゃないか？明久を説得するのも面倒だし……」

「そうだな、これ以上ハリセンでどついても効果無さそうだし……」

は我慢してやれ。」

「仕方ないのう、ワシのこんな姿を見ても何の足しにもならないと思うのじゃが…」

「ホントに同情するよ、木下…」

・
・
・

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

「失礼します。」

「お主ら全く敬意を払っておらん気がするのじゃが…」
オレは一応ちゃんとしたぞ…。」

「学園長優勝の報告に来ました」

「言われなくても分かってるよ。あんたらに賞状を渡したのは誰だと思っんだい。」

それにしてもずいぶん仲間を引き連れてきた物だねえ…」

「こいつらもババアのせいで迷惑を被ったからな、元凶の顔位挿んでもバチは当たらないはずだ。」

「…ふん、そいつは悪かったね。」

「それで白銀の腕輪は返却した方がいいんですか？」

「それは後でいいさね。どうせすぐには不具合は直せないんだ。」

「明久、不具合とはなんじゃ？」

「ああ、秀吉は知らなかったね。この白銀の腕輪はちよつと欠陥品でね、得点の高い生徒が使うと暴走しちゃうんだよ。だから教室の修繕と交換条件として僕らがこれをゲットするっていう取引を学園長と」

「待て、明久！その話はマズイ！」

「どうした、坂本？」

「……………盗聴の気配」

「な……………！」

「やられたか!」

「マズイ!今の会話を公表されたらオレ達のやって来た事が全部水の泡だ!」

「あいつら追うぞ!」

「ああ、二手に別れよう!木下、ムツツリーニ、オレと外を!坂本と吉井は中を頼む!」

「了解じゃ!」

「……(コク)明久、持っていけ。」

「ムツツリーニ専用の双眼鏡?」

「……予備」

「ありがとう!借りて行くよ!」

・
・
・

「見つけた!あそこだ!」

遠目からも良く分かるモヒカンと坊主頭だ!間違いない!

「木下!坂本と吉井に連絡を!」

「了解じゃ!!…明久、新校舎の屋上!部室棟じゃ!」

『分かった!後は任せて!』

「…明久と雄二に何か考えがあるようじゃ。」

「…そうか、あいつらがそう言うんだつたら大丈夫だろう。オレはちよつくら教頭に仕返しをしてやるうかな。」

「何じゃ?そのスイッチは…」

「面白い仕掛けをしいてな…。まあ、見てのお楽しみって所で…スイッチオン!」

ポチつとな!

ドッカーーン!!!!!!

『大変だー！新校舎の屋上が爆破されたぞー！』

『生徒が二人巻き込まれたぞー！』

『放送機材も滅茶苦茶だ！』

「……………」

「……………」

ふ、2人の視線が痛い……。

「ち、違うぞ！オレは教頭室に少し多めに爆竹を仕掛けただけだ！

これは何かの間違いに決まってる……！」

そう言っただけはもう一度スイッチを押した。

カチツ

ドッカーン！！！！

『今度は教頭室が爆破されたぞー！』

『大変だ！教頭が泡を吹いて倒れてる！』

「……………」

「……………」

ふ、2人の視線が痛い……。

「ち、違う！オレは決して爆弾なんて仕掛けて無い！だからそんな

テロリストを見るような眼でオレを見るな……！」

「……ヒロ、姉上の折檻でそんなにストレスがたまっていたとは

……。」

「……………気の毒。」

「だから、違うんだってー！」

ああ、クソ……。オレの常識人というイメージが音を立てて崩れていく……。

常夏コンビ許すまじ！

しばらくして爆破の犯人は吉井と坂本である事がわかった。

放送を阻止するために花火を打ち込んだそうだ。（教頭室のは誤射）

無茶するなあ…。そんなでもってなんてタイミングの悪い…。
まあ、そのおかげで放送は阻止できたけどな…。
そんな事を考えながらオレは後夜祭の会場へ向かった。
途中で西村先生に追いかけられてる吉井と坂本を見たけどあいつら
なら何とかするだろ…。
助けなかったのは決してオレがテロリスト扱いされた原因を作った
報復じゃないからな!!

第30話 これにて一件落着！！なのか？

明久SIDE

「痛ててて…。随分と殴られたよ…。」

「くそっ！鉄人め！あの野郎は手加減を知らないのか」

結局逃げきれずに捕まってしまった。

良くて停学悪くて退学 と思っていたけど、実際は嚴重注意と言う拍子抜けする位軽い罰だった（それでも顔の面積が倍になるほど殴られた）

「ババアが手を回してくれたんだろっな。これでババアも助かったんだ。」

感謝する気なんてサラサラないけどな。」

「僕は学園長を救ったんだからギブアンドテイクだよな。」

とは言っても、一応心の中で感謝しておこう。取引の一環でも感謝の気持ちは忘れちゃいけないだろうから…。

これで教頭の部屋に修繕と言う建前を持って堂々と調査に入れるだろう…。

僕らが花火を教頭室に打ち込む前に教頭室で爆竹が爆発してちょっとした騒ぎになっていたから僕らが花火を打ち込んだ意味があったのか？って少し思うけど…

「む。やっと来たようじゃな。遅かったのう。」

「…………先に始めていた。」

「ああ、ゴメンゴメン。鉄人がしつこくてさ。ってヒ口はどうしたの？」

「…………ヘソを曲げている」

「え？なんで？」

「まあ、ちよつとのう…………」

「どうせオレなんて…」

「?????」

「今度喫茶店ステイの限定レアチーズケーキ（1個580円）が食べたいんだけど…」

「はい！奢らせていただきます！」

「買ひ物の荷物持ち（10kg分）してくれる？」

「はい！喜んで！！」

「じゃあ、許してあげる。」

「は？」

「約束だからね。ケーキと荷物持ちよろしくね。」

え？これって…。まさか…。嵌められた！？

「ゆ、優子！おまえいつからそんな悪女みたいなスキルを！」

「ふふ、あんたが私にそんな態度とるからよ。」

「う…！すみません。」

「分かればいいのよ。」

「それで、一体オレが凹んでる間に何があつたんだ？」

周りを見渡すとそこには…

吉井に抱きついてる呂律が回って無い姫路と後ろに阿修羅が見える

島田が居た。

姫路が飲んでいたグラスに眼をやった。

「…これは酒か？学校で酒なんて何考えてんだ！優子、ここにある

物は飲んじゃ…」

「ん…、なひよ？ヒロ」

遅かった…。顔を真っ赤にしている。呂律も回っていない…。

「え〜と、優子…？あの「ヒロ！」」

「は、はい！」

「抱っこ！」

「はい？」

何を言っているんだ、この子は？

「さっさとしなさい！」

「いや、けどな優子…。ここは学校で周りの目もある訳で…」

「い〜や〜！」

そう言つて優子はオレに抱きついてきた。

「あつたか〜い」

「待て！優子！頼むから離れてくれ！」

このままでは恥ずかしさの余り死んでしまふ！

「…ヒロは私の事嫌い？」

涙目の上目遣い…

頑張れ、オレ（の理性）！

「いや、好きだから余計に困るんだ。昨日も言つたけどオレが優子を嫌うなんて何があつても無いから大丈夫だよ」

「…本当に？」

「本当だ」

「…良かった」

そう言つて優子はオレに抱きつく力を強くした

その行動にオレの理性は脆くも崩壊した

こゝこれは大人の階段を登れつてことか？天国にいる姉さんごめん
なさい！今日でオレは大人になります！！（混乱中）

「すう…。すう…。」

「あれ？…寝てる？…。はあ、仕方ないな…。まあ、たまにはこ
ういうのも悪くないか…。」

そう言つてオレに抱きついたまま眠っている優子の頭を撫でた。

そのようにして学祭の二日目は終了した…。

後日オレがFFF団に襲撃されて仁義なき戦いに発展したのは言う
までもないだろう…。

・
・
・

本家が迷惑をかけて悪かつたのう、カヲルちゃん」

「ふん、全くさね！」

「ホッホッホッ！詫びと言つては何じゃが、今回の件の首謀者には

地位の剥奪、協力者にも厳罰を下しておいた。そして学園に手を出すという事はこのワシを【烏丸家 先代 当主烏丸修輔】を敵に回すことだと言つ旨を本家に伝えた。これで本家は文月学園に手を出せないはずじゃ。」

「ふん、とりあえず礼は言っておくよ。ありがとよ、クソジジイ」「どういたしまして、クソババア」

第2部 完

第30話 これにて一件落着！！なのか？（後書き）

第2部終わりました！

長かったー！

自分の力量不足を痛感させられました…。

シリアスとか陰謀戦とかって難しいですね。

ご意見、感想、表現がおかしい、設定で分からないことがあるなどの事があれば遠慮なく言ってやってください。

お待ちしております！

それでは読んでくださった方ありがとうございました！

次は外伝です。お楽しみに！

外伝2話 『リアル鬼ごっこ』になるのかな？コレは…

昔、姉さんが言っていた…

『ヒロ、男なら誰かを支え、守れるような人間になりなさい…』

姉さん、本当にこれで良かったのか？

校内いい人ランキング1位

お兄さんに欲しい上級生（1年対象）ランキング1位

弟に欲しい下級生（3年対象）ランキング1位

お嫁さんに欲しい生徒ランキング1位

以上4冠を達成した『いい人はもてないを体現した男』烏丸大貴さんのコメントでした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

桜もすべて葉桜に変わり、まだ少し肌寒かった気候もだんだん暑さを帯びてきた。

Aクラスとの試召戦争を終えてしばらくたってオレは平和な学校生活を活を満喫していた…。

これだよ！これ！この平和な学園生活こそオレが求めた物なんだ！神様ありがとう！これは普段頑張ってるオレへのささやかなご褒美なんだね！この【平穏な日常】が少しでも長続きするようにオレもつと頑張るよ！！

などと、考えていた。

この時オレはまだ気付いていなかったんだ…。

この平穏が嵐の前の静けさである事に…。

「工藤」「はい」「久保」「はい」「近藤」「はい」「斎藤」「はい」

始まりはそう、朝の出席の時の坂本の発言だった。

「坂本」「…明久がラブレターを買ったようだ。」

『殺せえええつ!!!』

相変わらず嫌な団結力だ…。ここ数日Fクラスで過ごすうちにこの程度の事では動じなくなっていた…。【人生は慣れと諦めが大事だ】と言うオレのモットーを覚えている人はいるだろうか？そう、オレはそのモットーに従ったままで！決してこの連中の行動原理を考えるのが面倒になった訳ではない！！

『どういう事だ！吉井がそんな物を貰うなんて！』

『それならオレ達だって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の席近くを探してみる！』

…探すのはいいけどもし出てきたらお前もターゲットの仲間入りだぞ。

『駄目だ、腐りかけのパンと開封済みのパンしか出てこないしか出てこない。』

食い物を粗末にするな！この大馬鹿野郎！

『もつとよく探してみる！』

『出てきた！未開封のパンだ！』

『お前は一体何を探しているんだ！』

『静かにせんか！バカ者共！』

繰り返されるコントについて西村先生がキレた…。

この暴徒達を一瞬で鎮静化する一喝はさすがとしか言いようがない

…。

『それでは出席確認を再開する。手塚』『吉井クロス』

…聞き間違いかな？ありえない返事が聞こえたような気がする…。

そうだよな、西村先生が何も反応していないし聞き間違いに決まってる…。

『藤堂』『吉井クロス』

聞き間違いであって欲しかった…。オレの平穩が…。

『戸沢』『吉井クロス』

『みんな落ち着くんだ！何故か返事が【吉井クロス】になってるよ！』

「静かにしないか、吉井！」

「先生！この場合注意するのは僕じゃないでしょう！このままだとクラスの皆は僕に殴る、蹴るの暴行を加えますよ！」

「それだけで済めばいいけどな。このクラスなら、【検閲削除】やら【検閲削除】などの拷問に加え【検閲削除】とか【検閲削除】ぐらいはやりそうな気がする…。」

「よし、遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように！」

「待って、先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

「吉井、間違えるな。お前は不細工だ。」

「不細工とまで言われるとは思わなかったよ、バカ！」

「授業は真面目に受けるように！」

「待って、先生！行かないで！せんせーい！」

哀れ、吉井…。前から思っていたけど西村先生は吉井に容赦がないなあ…。

まあ、吉井の普段の行動が悪いから仕方ないかもしれないが…。

「アキ、ちよ〜つと話聞かせて貰える？」

「あ、あはは…。美波、顔が怖いよ。」

話しを聞くだけで済めばいいけどな…。

「手紙もらったの？誰からのの？どんな手紙なの？」

「あー、えつと、その…。」

「いいからおとなしく指の骨を じゃなくて手紙を見せなさい」
……折る気か？

「あの、吉井君」

「ん？何？」

「その…できれば、ですけど…私にも手紙を見せてほしいです…。」

「その…ごめん」

「でも…！でも…！」

「いくら姫路さんの頼みでもこればかりは…」

「私吉井君に酷い事をしたくないんです…！」

「ちよつと待って！姫路さんまで僕に暴行を加える事が前提なの？」

……姫路も最近思考がデンジャラスになってきたな。優子や島田と
いい勝負だ……。

「皆ちよつと落ち着け！いま問題なのは明久の手紙を見る事じゃない」

いい加減収集が付かなくなってきている所に坂本の声が響く。

今までだったらここで【制止をかけるのか？】などと思っただろう……
しかしこのFクラスで過ごすこと早い事で2週間こいつの性格は何
となく掴んできた。

そうこのパターンは

「問題はどう明久をグロテスクに殺すかだ」

異端者に対する処刑パターンだ……。

「前提条件が間違っただよ！畜生！」

言うや否や荷物を持って教室から逃げ出した……。

『逃がすな！追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！吉井を殺せ！』

『『サーチ&デース！！！！』』』

……あえて同じことをもう一度言おう。……嫌な団決力だ……。

・
・
・

教室から出てしばらく走るとそこにはネットに巻かれて気絶してい
るFクラスの集団が居た……。

ネットが濡れている……。この手口はスタンガンか？うーん、惨いこ
とをする……。

「烏丸！」

「須川か……。どうした？木刀なんか持って」

「吉井せん滅の為に前前の力を借りたい！」

「……あんまりオレ荒事は好きじゃないんだけど……」

「もちろんタダとは言わない！オレの秘蔵のコレクションを贈呈し

よう!!」

「……内容は？」

「巨乳のお姉さん系を3冊!!」

「乗った!さあ、行くぞ!同志須川よ!」

「ああ、勿論だ!同志烏丸!」

「すまない、吉井…。オレもFクラスの一員なんだ。だから皆の為に
オレはお前を倒す!

決してお宝本に釣られた訳ではない事をオレの名誉の為に言ってお
こう!!」

・
・
・

明久SIDE

どうにかムツツリー二を買収し、美波も退けて僕はひたすら逃げて
いた。

「吉井!無事か!？」

「ヒロ!良かった!ヒロは敵じゃないんだね?」

「ああ、とりあえずここは危険だ。安全な所へ避難しよう。」

そう言っつてヒロは僕を3階の廊下に連れて行った。

「お前はこれから何処へ行こうとしていたんだ?」

「うん、落ち着いて手紙を読むために屋上に行くつもりだったんだ。

けど良かったよ。ヒロが味方についてくれて…」

「それでもないぞ…」

「え?」

「吉井、待っていたぞ」

振り向くとそこには木刀を持った須川君が居た…。

「ご苦労だった。同志烏丸よ。」

「お褒めに預かり光栄だ。同志須川」

これは…!まさか…!

「須川君！まさかヒロに裏切りを仕向けたな！！」

「いや、吉井。お前自身が招いた事だ…。」

「ラブレターは僕のものだ！！」

「お前のもてたいと言う願望を女子に付け入れられ、その結果本来倒すと誓った物（異端者）に自分がなつてしまった…。」

「説教なら聞きあきた…。君と違ってFFF団は怖くない。味方にならないなら敵と見るしかない！」

「独裁的だな…。オレ達はオレ達の義務を果たす…。」

「…果たせるかな？」

クツ！そうは言っても2対1…。須川君はともかくヒロ相手にケンカして勝てるとは思えない…。状況は絶望的！どうする？

「安心しろよ。オレは須川がやられるまで手は出さない。」

「な！どうしてだ！？同志烏丸！共に悪（吉井）を滅ぼそうと誓ったじゃないか！あの誓いは嘘だったのか？」

「いや、嘘じゃない…。けどな2対1なんて卑怯な真似は好きじゃないんだ。もしかして木刀まで持つてるのに吉井が怖いなんて事言うんじゃないだろうな？」

「なめるな！」

良かった…。とりあえず相手は須川君1人みたいだ…。

けど、木刀が相手でこちらが不利な事には変わらない。

「そつえばコレがあった！」

さつきムツツリー二を買収した時に貰った刃物が入った袋を取り出す。

「くつ！丸腰じゃなかったのか！？」

袋から刃物を取り出し須川君との間合いを一気に詰める。

「オレはまだ負けた訳じゃない！」

須川君が木刀を振りおろしてくるが紙一重で届かない。今なら須川君は無防備だ！

このタイミングを逃さず僕は手に持った爪切りで須川君を「って爪切りで勝てる訳ないじゃないか！バカア！」

そりゃ刃物は刃物だけどさあ…。

「吉井…。お前って本当にバカなんだなあ…。」

「言うな、須川…。吉井も好きでバカになった訳じゃないんだ…。」
2人に憐みの視線が物凄く痛い…。

「こうなったら爪切りでもやってやる！素手よりはマシのはずだ！」

「いや、明らかに素手の方がマシだろ」

「黙れえええ！」

・
・
・

「ぐうう！爪が！爪があ！」

廊下に倒れ伏し手を押さえる須川君を見下ろす…。まさか本当に爪切りで勝てるとは思わなかった…。

「まさか爪切りで須川を倒すとは思っていなかったよ…。」

「ヒロ、どうしてもやるの？」

「ああ、お前にも譲れない物がある様にオレにも譲れない物ラブレター（報酬のお宝本）がある…。…おしゃべりはここまでだかってこい！吉井！」

そう言つてヒロは構えた…。

隙が無い…。勝てる気がしない…。クツ！こうなったら奥の手だ！

「戦略的撤退！」

「バカめ！逃げ切れると思つたか！？」

うわ！速い！鉄人に及ばないまでもそれに近い速さだ！まともに逃げたんじゃあ勝ち目がない！

そう思つて僕は3階の窓から、雨どいをつたつて窓から飛び降りたように見せた…。

「ハッハッハッ！3階の窓から飛び降りた位でオレから逃げ切れると思つたか？片腹痛いわ！見よ！オレの生き様を！オレは鳥になるうううう！」

そう言つてヒロは3階の窓から勢いよく飛び出した…。

落ちて行く瞬間に雨どいにしがみついている僕と眼があつた。

「おのれ！吉井！謀つたなあああ！！！！」

そう叫びながらヒロは落ちて行つた

…今日のヒロは何処かおかしいな…。

「この程度でオレを退けたと思うなよ！フン！」

ズダン！！

うわ！すごい！3階から飛び降りたのに着地して無傷だ！

ヒロが戻つて来ないウチに急いで屋上に向かおう！

・
・
・

ヒロSIDE

まさか吉井に出し抜かれるとは思わなかつた。

烏丸大貴、一生の不覚！恐らく吉井は屋上だろう…。急がないといけない！

そう思いながら屋上のドアを開けるとそこには坂本と姫路と吉井がにらみ合いをしていた。

「トイレに行けば誰にも邪魔されずに読めると思つんだがな。」

「…雄二、ぼくちょっとおなかが痛いからトイレに行つて来るね。」

「吉井君今まで気付かなかつたんですか？」

「逃がすと思うか？」

「うわ！ヒロ！もう追いついてきたの？」

「…当たり前だ…。…お前自分で…屋上に…行くつもりだつて…言つてただろう…。」

ノンストップでダッシュしてきたせいで息が切れてるけどな…。

「雄二、ヒロ！そこまでしてどうして僕の幸せを邪魔するのさ！そんな事しても何もメリツトなんかはないはずなのに！」

「…悪いな、吉井…。さつきも…言つたけど…オレもオレで…譲れ

ない物（報酬のお宝本）が…あるんだ…。」

クソツ！息が苦しい！この状態で吉井に襲われたら、確実に負ける！頼むぞ、坂本！

「確かにお前の言う通りこんな行動オレにとって何のメリットも無い…。いや、それ以前にオレには彼女が欲しいなんて気が全くない！」

「ならどうして！」

「そういう問題じゃないんだよ、明久。オレはただ純粹に お前の幸せがむかつくんだよ！」

「あんたは最低の友達だ！」

「うん、オレもそう思う…。って言うかそもそも友達なのか？コレ…」「さて明久『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮は言わねえ。本気でかかってこい！」

「吉井君やめておいた方が…」

「心配してくれてありがとう。けど、僕はやめる気はないから！悪いんだけど僕の上着持っていてくれる？」

「あ、はい」

「ん？あれ？確かあの時吉井が手紙を入れていた場所って…」

「明久、お前バカだろ…」

「へ？」

「あ、あのポケットに手紙が入っていたみたいなんですけど…見ちゃっていいんですか？」

「だ、駄目だよ！戦わないでそれをみるのは反則だよ！」

「お前がバカなだけだろうが！やれ！姫路！手紙を始末するんだ！」

「オ、オレの苦労って一体…」

「…あれ、これって…まさか！」

「なんだ？姫路の様子がおかしい…」

「姫路さん」

「え？あ、はい！なんですか？」

「僕には分かってるよ。優しい姫路さんは手紙に込められた人の気

持ちを踏みにじる事なんてできないってこと。だからおとなしく、その手紙を細切れにするんだ！」って違う！そうじゃない！卑怯だぞ、雄二！そうやって人のセリフみたいに繋ぐのは反則だ！」心配しなくても姫路がそんな真似する訳

「はい！わかりました！」

「つて、えええええ？やぶるの？本気でやぶるの？しかも絶対読めない様に懇切丁寧にやぶってらっしゃる！姫路に一体何があったんだ？まさか姫路が本当にやぶるとは思わなかった。すまん、明久…せめてもの詫びだ…。」

「そう言つて坂本は手紙の残骸を全部拾い集めて吉井の前に置いた。」

「ありがとう、雄二。最後の可能性に賭けてこの紙くずをつなぎ合わせ」

「未練を絶つてやる…。」

「シュポ！メラメラメラ…。」

「つてうそお！ここまでやった拳句容赦なく燃やすの？もうこれ100パー読めないよね！」

「明久お前は知らなかっただろうが、オレはお前の幸せが大嫌いなんだよ！」

「知つてるよ！バカア！チクショー！！！」

「吉井の消火活動の甲斐なく手紙は灰になって消えてしまった…。」

「坂本、少しやりすぎ…。」

「やるからには徹底的にだ。」

「坂本君は手紙の主が誰だか気にならないんですか？」

「興味ないな。オレは明久の幸せを妨害出来たらそれでいい。」

「オレは少し興味あつたぞ…。」

「まあ、でも誰からの手紙だか目星は付いたがな。」

「「え…！？」」

「他人の書いた手紙を破り捨てたら問題あるよな？」

「他人の書いた手紙…。そう言う事か！あの時姫路の様子がおかしかつたのは！」

「雄二！その話もつと詳しく！」

「ああ！吉井君は聞いちゃ駄目です！」

「コペツ！」

「うわあ！く、首が曲がってはいけない方向に！」

「ああ！ごめんなさい！私なんて事を！」

「気にするな。どうせ生かしておいてもあの連中に殺されるだけだ

…。」

『アゝキゝ！あんたよくもやってくれたわね！』

『吉井い！絶対殺すうっつ！』

『ガンホー！ガンホー！』

……吉井の明日はどっちだろう。

外伝3話 女の方は笑顔がいいよね！【前篇】

「明久」

「ん？何、雄二」

「そういえば例のチケットはどうした？」

「例のチケットって如月ハイランドのプレミアムチケットの事？ちよとど身近に結婚を考えてる人がいたからその人にあげたよ」

「そうか。そんな奴がいるのなら都合がいいな。如月グループも大喜びだろうよ。」

「そうだね。うまくいけば全員が幸せだもんね。」

「その連中上手くいきそうなのか？」

「うん。後は時間ときっかけの問題だと思うんだ。」

「そうか。うまくいくといいな。」

「大丈夫。きつとうまくいくよ。」

・
・
・

「デルタ4よりデルタ1へ」

『デルタ4どうぞ』

「こちらの準備の9割は終了した。これより最終調整に入る。」

『了解した。引き続き任務を続行せよ。』

「デルタ4任務了解。」

『P r r r r r P r r r r r r』

「デルタ1、何の音だ？」

『ごめん、僕の携帯だ。非通知設定？誰だろう？はいもしもしどちら様ですか？』

【・・・キサマ ヲ コロス】

『え？なになに？本当に誰？メチャクチャ怖…』 プツッ、ツー、ツ

「ッー」

「…デルタ1、生きていたらまた会おう…。」

「ちよっ！ヒロ！洒落にならないから今はそういう冗談やめてよ！」

「デルタ2ターゲットの様子はどうか？」

「…これから如月ハイランドへ向かう様だ。」

「了解した。引き続きターゲットの監視を頼む。デルタ3、そつちはどうだ？」

『こちらデルタ3じゃ。お化け屋敷の仕込みも完了した。これよりデルタ1の援護へ向かう。のう、ヒロ。所でなぜこんな面倒な呼び方をするのじゃ？』

「決まっている。その方が面白そうだろう。」

『そんなもんかのう？』

「そんなものだよ。さて、デルタ5、デルタ6準備はどうか？」

『デルタ5いつでもいけるわ！』

『デルタ6準備は万端です！』

「よし！これより我々は重要任務に就く。この任務には【ターゲット】の一生がかかっていると言っても過言じゃない！我々は何としてもこの任務を成功させなきゃいけない。全員覚悟はいいか？」

「…はい（ああ）」

「よし！約30分後、デルタ1からの通信をもってミッションスタートする！各自抜かるなよ！」

「…了解！」

30分後

「いらつしゃいマセ！如月ハイランドへようこそ！」

「本日はプレオープンなのですがチケットはお持ちですか？」

「…はい。」

「拝見しマース」

「…。」

「…そのチケット使えないの？」

「イエイエ、そんなことないですよ。少々お待ちくだサーイ！」

デルタ1からデルタ3へ…例の連中が来た。ウエディングシフトの準備を始める。確実に仕留める！」

『デルタ3任務了解じゃ！準備が完了次第作戦のフェイズ4へと移行する。』

「おいコラ！待て、なんだその不穏当な会話は！」

「オーウ、ニホンゴ難しくよく分かりませーん」

「…ところでそのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場させてくれたら後は放っていてくれればいい。」

「そんなこと言わずにお世話させてクダサーイ！」

「不要だ！」

「お願いします。」

「断る！」

「断ればアナタノ実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろ！そんな事をすれば我が家は食中毒で大変な事になってしまっ！」

腐ったザリガニを食卓に上げる訳ないだろうに…

何をそんなに焦っているんだ？

「それでは最初に記念写真を撮りマース」

「デルタ2カメラを頼む…」

「…記念写真？」

「ハイ、サイコーにお似合いの2人の愛のメモリーを残しマース！」

「…雄二とお似合い…」

「悪いがその前に電話をさせてくれ」

「わかりました」

P r r r r r r P r r r r r r

「ああ、すみません。僕の携帯ですね。はい、もしもし？」

あ、マズイ…。

『よう、明久。てめえ随分と面白い事してるじゃねえか…。』

「……………」

「…人違いです！」

「あ、待て！ええい離せ！係員！」

「彼はここの従業員のエリザベート・ハナコ（35歳）通称ステイブです。明久と言う人ではありませんよ。」

「黙れ！人種性別氏名年齢すべてにおいて嘘をつくな！そしてどう考えてもその名前でステイブは無いだろう！ん？この声、まさか！お前、ヒロか！？」

「いえいえ、違います。自分はレイヴン丸・ダ　グイ日系三世（27歳）です。」

レイヴン　カラス　丸　大貴　ダ　グイ（中国語読み）

「思いつきり当て字じゃねえか！」

「それでは記念写真をどうぞ！」

「無視か！てめえ！クツ！翔子すまん！少しだけ我慢してくれ！」

そう言つて坂本は霧島のスカートに見えるかどうかギリギリの所までまくりあげた。

「……！！（パシャパシャ）」

「やっぱりムツツリーニも来ていたか！」

「……雄二エツチ。」

「なっ！違うぞ！オレはお前の下着になんて微塵も興味が無い！」

「……それはそれで困る。」

「理不尽だああ！」

霧島の指が坂本のこめかみに食い込む…

アレは痛い

そんなほほえましい？やり取りをしているうちにムツツリーニが写真を撮りプリントした。

「…なんだ、この写真は！」

アイアンクローを食らわされてる坂本とアイアンクローをにかけている霧島

の写真写真が出来上がった。

「サービスでハート型に切り取って【私たち結婚します】の加工を

入れておきました。お気に召していただけたでしょうか？」

「・・・ありがとう。すごく気に入った。」

「それではこの写真をパークの写真館に飾ってもよろしいでしょうか？」

「キサマ正気か？これを飾ることでここに何のメリットがあると言
うんだ！」

「・・・雄二、照れてる？」

「この写真に照れる要素は見当たらない！」

『ああ、写真撮影してる！ねえねえ、リユータ！私たちも撮って貰
おうよ！』

『オレ達の結婚の記念に、か？おい、係員！オレ達も写ってやんよ』
偉そうなチャライカップルの2人組が来た。どっちも頭の悪そうな
顔をしている…。

「申し訳ありません。こちらは特別企画ですので…。」

「ああ！？いいじゃねえか！オレ達はオキヤクサマだぞ！コラあ！」

「キヤー！リユータ、カツコイイー！」

うわあ、ウザいのが来た…。お客様は神様って精神はあくまで客に
対する従業員の心構えだと思っただけ…。

まあ、いいや。これ以上ゴネられるとウザいし、さっさと撮って終
わらせよう…。

そのようにアホなカップルに絡まれてる間に坂本達をを取り逃がす
という失態を演じてしまうのだった。

外伝3話 女の人は笑顔がいいよね！【中編】

ウザくてアホなカップルから解放され、オレは吉井達と合流するた
めにお化け屋敷に向かっていた。

遊園地か…。懐かしいな。昔姉さんに連れてきてもらって以来か…。

…回想…

『姉さん、アレ何？』

『アレはジェットコースターって言ってとってもおもしろい乗り物
なのよ。』

『本当？乗ってみたい！』

『それじゃあ、行ってみましょう』

…

『ぎゃああああああ！』

『あはははは！あはははは！』

『もう無理！もう嫌だ！遊園地怖い！』

『もう一回乗るわよ！ヒロ！』

『無理！絶対いやだ！！もう帰るー！』

『ふふ、逃がさないわよ…』

『嫌だー！！！！』

…回想終了…

ブルブルブル…

そうだった、アレ以来遊園地に絶対に近寄らなくなった。嫌な
こと思い出した…。

さっさと吉井達と合流しよう…。

…

…坂本と霧島の姿を見つけてそっちに行くところには如月ハイラン

ドのマスコット【ノイン】が居た…。

ただし頭の方向が前後逆の…。

なんてシュールな光景なんだ！アレじゃあ首の骨が折れた狐みたいじゃないか！

ああ、向こうでノインの姿を見た子供が泣いている…。

ごめんな、見知らぬ子よ…。吉井がバカなばかりにトラウマを作ってしまった…。

『そこまでだ！その不細工な男！フィーをイジめる奴はこのノインが許さないぞ！』

言葉はかっこいいけどそのシュールな恰好のせいで台無しだから…。

「この頭の悪そうな格好は…明久か！？」

『失礼な！僕…じゃなくてノインの何処が頭の悪いつていうんだ！』
ごめん、吉井…。今のお前は何処からどう見ても【バカ】に見えるよ…。

「黙れ！頭部を前後逆につける奴をバカと言って何が悪い！」

的確すぎるツツコミに吉井に対するフォローの言葉が見つからない

…。

「…雄二、ノイちゃんはすっかり屋さんだから」

「すっかりで頭部が前後逆になる生物はいない！」

アレをすっかりで片付けるあたり霧島も相当大物だな…。

「こちらデルタ4、デルタ6、デルタ1のフォローを頼む。」

『分かりました。…明久君！頭が逆です！』

『ああ、しまった！どうりで前が見えないと思った！』

前が見えないのにどうやってここまで歩いて来たんだ？悔れない奴

…。

『速く直さないと坂本君にバレてしまいます！』

…残念ながら姫路、もう坂本にはバレてると思うぞ…。

「ところで明久、女子大生とはもういいのか？」

女子大生？坂本は何を言っているんだ？

『明久君…。さっき女子大生に声をかけられていたって聞きました

けど？この大事な作戦中に他の女の人と？」

『え？何の事？僕は別に何も あれ？どうして』携帯電話を取り出すの？誰を呼ぶ気？』

『美波ちゃんもすぐ来てくれるそうです。お話ゆっくり聞かせて貰いますね…。』

『だ、ダメだよ！オープン初日に刃傷沙汰なんてここの評判に ひいいッ！なんだかすごい勢いで誰かが走ってきてるみたいなんだけど！？お願い！殺さないで下さいっ！！』

路… きぐるみで携帯電話を操作できるなんて器用だな、姫

仕方ない、吉井は取り込み中みただしオレが実行するか…。

「申し訳ありません、お待たせしました。坂本雄二さんお化け屋敷に行つていただけますか？」

「断る！どうせお前たちが変な仕掛けをしているに決まっている！バレとるがな…。さて、どうしたものか…。ん？吉井からサイン？その通り言えいいのか？けどそんな脅しが本当に効くのか？

まあ、他に手が無い訳だし試しに…

「断ればあなたの家に大量のプチプチの梱包材を送ります。」

「やめろ！そんな事したら我が家の家事がすべて滞ってしまう！」

効いたよ…。こんな脅しが効くなんてビックリだよ…。

もう一手打っておこう。

「坂本翔子さん、お化け屋敷に行けば坂本さんに抱きつき放題ですよ。」

「…雄二、お化け屋敷に行きたい。」

「汚いぞ！ヒロ！翔子を使って罠に嵌めようなんて！あとオレと翔子を勝手に入籍させるな！」

「お客様が何をおっしゃっているのか私には分かりかねますが？あと私の名前はヒロではなくレイヴン丸です。」

「…大丈夫、すぐ坂本に変わるから」

そう言つて霧島は関節を極めて坂本を逃げられない様にした。

これで計画通り事が進む…

「それではこちらにサインをお願いします。」

「なんだ、これは？」

「アトラクションに入っていたたく為に必要な誓約書です。」

「そんなに危険なのか？まあ、面白そうではあるがな。」

そう言つて坂本は誓約書に眼を通した。

.....

1 私、坂本雄二は霧島翔子を妻として迎え、生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。

2 婚礼の式場には如月ハイランドを利用することを誓います。

3 どのような事態になつても離縁しない事を誓います。

.....

「……はい、雄二。実印」

「朱肉はこちらです。」

「オレだけか？この状況がおかしいと思つてるのはオレだけなのか？」

「冗談です。誓約書はいいので中へどうぞ。」

「……うん、冗談」

「カーボン紙を入れて移しまで用意しているのに冗談と言ひ張るのか？」

だから九分九厘冗談だつて…。全く人を信用しない奴だ…。

「それでは邪魔になりそうなのでその大きなカバンをお預かりします。」

「……うん、お願い。こぼれちゃうから、横にしないで欲しい。」

「かしこまりました。では行つてらっしゃいませ。」

「……雄二、行こう」

「イテテテ！腕がねじ切れる！」

.....

「デルタ4からデルタ3へ…ターゲットがお化け屋敷に入った。デルタ1の計画通りに事を進める。」

「デルタ3、任務了解じゃ！演劇部としての腕が鳴るのう！」

「ああ、存分に頼む。」

その後、木下が坂本の声で【姫路の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし】と流したため、霧島の制裁で坂本が真の恐怖を味わったようだ…。

なんだか趣旨が若干ずれてるような気がするけど面白いからまあ、いいか…。

外伝3話 女の方は笑顔がいいよね！【後編】

「お疲れ様です。どうですか？結婚したくなりましたか？」

「アレと結婚を結び付けて考える事の出来るのはお前と明久位だ！」

「やっぱりですか…。まあ、危機を共にした男女は絆が深まるって言いますしいんじゃないですか？」

「絆が深まるのは襲いかかってくる危機が結ばれる相手じゃなければの話しだ！逆に溝が深まった気分だよ！畜生！」

「まあ、見ている分には面白かったしどうでもいいや。それではお昼ですのでレストランへご案内いたします。」

「お前！今剥がれた！仮面が剥がれたぞ！」

「それではこちらへどうぞ！」

「・・・あ」

「無視か！キサマ！・・・ってどうした、翔子？」

「・・・何でも無い…！」

「????？」

「それではこちらでランチをお楽しみください。…デルタ4より総員へ、ターゲットが到着した。これより作戦の最終段階に入る。準備はいいか？」

『『『『はい！』『』『』『』』』』

「よし！ラストミッションスタートだ！」

ノリのいい仲間をもってオレは幸せ者だ…。

.....

「いらっしやいませ。坂本雄二様、翔子様」

「…ボーイの真似事が、秀吉」

「秀吉？何の事でございましょうか？」

「違うと言っのなら確認させておらうぞ！」

そう言っ坂本が携帯を取り出した。

マズイ！

「ああつと！手が滑りました！」

そう言つて木下は自分の携帯を噴水のある方向に思いっきり投げつけて水の中に沈めた。

き、木下！お前なんて男らしい奴なんだ！オレはお前を本当に尊敬するよ！

電源切つた方がいいのでは？と言うツツコミはなしの方向で！木下の心意気に水を差す！

「そ、そこまでやるか！？アレもう確実に壊れたぞ！」

「何の事でございましょうか？それではこちらへどうぞ。」

「あ、ああ……」

「それでは、ごゆっくりどうぞ……こちらデルタ3じゃ。ターゲットを席に案内した。」

『こちらデルタ4。了解！これより作戦のフェイズ2に入る。デルタ1頼む！』

《皆様本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加いただき誠にありがとうございます。なんと、本日はですがこの会場に結婚を前提としてお付き合いを始めている高校生のカップルがいっぱしゃっているのです！そこで、当如月グループではそんなお二人を応援するための催しを企画させていただきました！題して【如月ハイランドハイランドウエディング体験】プレゼントクイズ！》

「それでは坂本雄二さん、霧島翔子さんステージへどうぞ！」

「嫌だ！断固断る！」

「……断ればあなたの家に大量に出前が届きます。」

「この極悪人！」

そう言つて坂本は霧島と一緒にステージに上がって行った……。

《それではクイズを始めます！ルールは至ってシンプル！出題されるクイズに5問正解したら、商品としてウエディング体験をプレゼント！それではお二人とも頑張ってください！！第一問！お二人の結婚記念日はいつでしょうか！？》

ふっ！問題の意味が分からないって顔してるな！そうとも！これは正解もなければ間違もない問題！つまりこちらの判断で強引に正解へ持つてくることが出来るのさ！さあ、観念して結婚してしまいなさい！坂本！

ピンポン！

「・・・毎日が記念日」

《正解です！それでは第2問！お二人の結婚式は何処であげるのでしょうか？》

ピンポン！

「鯖の味噌煮！！」

あ、問題無視しやがった！クツ！悪あがきを！そっちがその気なら！

《正解です！結婚式の会場は【如月グランドパーク鳳凰の間】！通称【鯖の味噌煮】です》

「待て！絶対その命名はその場でしただろう！」

気にするな。たいした問題じゃない…。

《それでは第3問！お二人の出会いは何処でしょうか？》

「・・・させない」

ブスッ！

あ、嫌な音が聞こえた…。

「ぎゃあああ！眼が！眼が！」

「・・・小学校」

《・・・》

あまりの光景に啞然となつてしまった…。

《正解です！お二人は小学校の頃からの長いお付き合いで今日の結婚にまで至ると言う中睦まじいカップルなのです！》

茫然としているオレの代わりに吉井が答えた。

危ない、危ない。吉井に感謝だな…。気を取り直して…

《それでは第四問！「分かりません！」

フツ！その程度の妨害で間違えたつもりか？！片腹痛いわ！その回答は予想していた！

《正解です！問題は『坂本竜馬を暗殺した真犯人は誰でしょう』と
言う物でした！》

まだまだ詰めが甘い！このまま考えさせる暇は与えない！一気に勝負を決めるぞ！！

『ちよつとおかしくな〜い？あたしらも結婚するつもりなのにどうしてそんなコ　コーサーだけが特別扱いなわけ〜』

この声は…まさか…！

『お客さま、イベント中ですので』

『グダグダうるせえぞ！コラあ！オレ達はオキヤクサマだぞ！』

うわあ…、やっぱり…。さっきのウザくて頭の悪そうなカップルだ

…。

って言うか客である前にオトナだろ、お前ら…。

TPO位わきまえろよ…。

『あたしらもウエディング体験やってみたいんだけど〜』

『で、ですが』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだ！コルアっ！オレ達もクイズに参加してやるうってんだ！このポケが！』

…ぶっ飛ばしてしまいたい！誰も頼んでねえってんだ！このポケが！

『うんうん、じゃあこうしよーよ。あたしらが問題出すから答えられたらあの二人の勝ち、答えられなかったらあたしらの勝ちって事
で。』

『そ、そんな…』

スタッフの制止をものともせず、勝手に話を進め、KY野郎はオレからマイクをひったくった…。

完全に予想外だ…。坂本はこの【検閲削除】コンビを使って、この状況から逃げ出す気満々だ！どうやってこの窮地を乗り越える！？
考える！考えるんだ、オレ！

『じゃあ、問題だ』

クソ！時間が足りない！すまない、皆！作戦は失敗だ…。

『ヨーロツパの首都は何処だ！』

…それでいいのか？大企業…

《それではいよいよ新婦のご登場です！》

そういつてBGMが流れ、スポットライトが照らされた…。そこには

《本日の主役、霧島翔子さんです！！》

この世のものとは思えないほど綺麗な霧島がいた…。

あまりの神々しさに会場は静まり返っていた…。

「…雄二」

「翔子…か？」

「…うん。…どう？…私、お嫁さんに見えるかな？」

「…ああ、大丈夫だ。少なくとも婿には見えないな。」

「…嬉しい。ずっと夢だったから。…小さなころからずっと…夢だった。私と雄二、2人で結婚式を挙げること。…私一人じゃ叶わない、小さなころからの私の夢。」

この告白に坂本はどうこたえるんだろう？ここまで女の子に言わせただ。いい加減腹を括って男を見せる！

「翔子、オレは『あーあ、つまんなーい人のノロケなんかどうでもいいからさあ、早く演出とか見せてくれな〜い？』

『つてかお嫁さんが夢ってお前いくつだよ？なに？キャラ作り？このスタッフの脚本？ぶつちやけキモイってーの！』

『純愛ごっこでもやってんの？そんなもん観るために貴重な時間割いてる訳じゃないんだケドお〜。あのオンナ、マジで頭おかしいんじゃない？ギャグにしか思えないんだけどお？』

『そつか！これコントなんじゃねえ？あんなキモイ夢ずっと持つてる奴なんていねえもんな！』

『え〜！？これってコントなの？だとしたら超ウケるんだけど〜！』
アイツラ…！もう我慢の限界だ…！

オレがこの世で一番嫌いな物はな…！【一生懸命な人間をバカにして笑う事】なんだよ…！

《何だこの野郎！テメエらもう一遍言ってみやがれ…！》

《あ、明久君落ち着いて！ステージが滅茶苦茶になっちゃいます！》

オレがキレる前に吉井がキレた…。

オレはそれを止める気はない…。頭の中はあの最低最悪のクソ野郎共の死体処理の方法を考えてる真つ最中だ…。

《花嫁さん？花嫁さんは何処ですか？》

司会の声で我に返った…。霧島がいない？シヨックを受けて何処かに行ってしまったのか？あんな奴らに構ってる暇はない！急いで探さないと…！

「坂本雄二さん！急いで霧島さんを一緒に探してください！」
顔を真つ青にしながら、スタッフの一人が坂本に詰め寄った。

「悪いが、パスだ。面倒だし便所にも行きたいしな…。」
そう言つて坂本は外に出て行つてしまった…。

傍で見ていた吉井が怒つて坂本に飛びかかるうとするがオレはそれを制止した…。

「ヒロ！なんで止めるんだよ！あいつ！」

「落ち着けよ。トイレが中にあるのに、わざわざ外に出て行く意味が無いだろうが。それにあいつさつき霧島の落として行つたベールをわざわざ拾つて、預かつていたカバンも受け取っていた…。と言ふ事は坂本のやろうとしている事は一つだろ…。」

「え、それって…。」

「あいつは素直じゃないってことだよ。ここから先はオレ達の出る幕じゃないだろう。」

「そういう物かのう？」

「そういう物だよ。」

……翌日……

「おい、明久」

「ん？おはよう、雄二。どうしたの？」

「如月ハイランドでは色々やってくれたな。」

「あははっ！何言ってるのさ。僕は一日ゲームをやっていたんだよ？如月ハイランドになんていけるはずないじゃないか。」

「シラを切るならそれでもいいだろう！そんなお前にプレゼントだ！」

「え？なにになに？」

「今話題の映画のペアチケットだ。【気になる相手】でもいれば誘ってみるといい」

「え？ペアチケット？こんなの貰っても使い道に困って」

「アキ！そう言えばウチ週末に映画を見たいと思ってただけ！」

「明久君！私もちょうど見たい映画があつたんですけど！」

「え？なにになに、2人もそんなに殺気立ってるの！？このチケットは換金して生活費につて痛だああ！人体に必要なパーツが色々ともげちゃうよ！」

「ヒロ」

「どうした、坂本？オレにもペアチケットをくれるのか？」

「もしもらったとしてもオレは吉井のように色々マズイ事にはならないだろう…。」

「いや、お前には別の仕返し方法を考えている。」

「仕返しされるような覚えが無いけど…」

「シラを切ると言うのならそれでもいいだろう！後ろをしてみる！」

「後ろに何かあるって言うん・・・優子さん？どうしたんですか？」

「そんな【いい笑顔】で…」

この笑顔はマズイ！！さっきからオレの本能が『ニゲロ』と警報を鳴らしている…！！

いや、落ち着け。なんで怒っているのかわからないが理由を聞いてちゃんと謝れば優子も許してくれるはず！！

「ヒロ？【秀吉と一緒に】如月ハイランドのプレオープンに行ったつてホントなの？」

「待て待て待て！【確かに行った】がたぶん優子の考えてるような

事は何もないぞ！って違う！その関節はそつちには曲がらない！・

・ギヤアアアアア！！」

「あんたやっぱり私より秀吉の方がいいのね！！」

「誤解だ！そしてやっぱりって何だよ！！あつ！ごめんなさい！もう口答えしないから脇固めは勘弁・・・！！ギヤアアアアアアアア！！！！」

・・・・・・
「余計な事を企むからだ。バカ野郎共め……。」

外伝4話 やった方は忘れていてもやられた方は忘れない！【前篇】

.....

『ヒロ、あなたまだ泳げないのね……。また私が泳ぎを教えてあげる』

『無理！ 絶対いやだ！ あんな教え方でオレが泳げるようになるはずがない！！』

『大丈夫よ、きつとあと3、4回溺れたら泳げるようになるからそれじゃあ行くわよ』

『！』

『待って！ オレを持ち上げてどうするつもり！？ ここの水深1.5mなんだよ！？ オレの身長（108cm）より深いんだよ！？』

『だからやめて！ お願い！ 降ろして！！』

『それ〜！！！！』

ブン！

『嫌アアアアアアアア！！！！！！』

ドッポーン！！！！！！

ぶくぶくぶくぶく.....

嗚呼.....、川の向こうに綺麗なお花畑が.....。

.....

先週末に行われた坂本と霧島の【プロポーズ大作戦】も無事終わり
いつも通りの平穏な週末の夜……
買い物帰りにオレ烏丸大貴は甥っ子の静馬と一緒に学校の校門の前
に居た……。

なぜなら課題に使う問題集を学校に忘れると言うポカをやらかした
事をさつき思い出したからだ。

「悪かったな、静馬。すぐ終わると思うから」

「ううん、気にしないで。それに夜の学校ってなんだかワクワクす
るし……」

「オレはゾクゾクするよ……」

夜の学校ほど不気味な物は無い……。さつさと用事を済まして帰る
う……。

そう思い、宿直室に向かった。確か今日の宿直は西村先生だったよ
な……。

「失礼しまーす」

宿直室の扉をあけるとそこには

「……でいい訳はあるか？」

「「こいつが悪いんです！」「」

大きなタンコブを作った吉井と坂本が正座させられていた……。

「って明らかに悪いのは雄二じゃないか！ 雄二がまともな差し入
れを持ってきてくれていればこんなことにはならなかったのに！」

「それは違うだろ！ 元はと言えばお前がガス代をまともに払って
いなかったからだろうが！」

「……お前ら何やってるんだ？」

「どうした、烏丸？」

「教室に問題集を忘れてしまっ……。こいつら何やったんですか？」

「夜のプールに不法侵入だ……」

「ああ、それは……大変ですね……」

吉井と坂本はまだ不毛な言い争いをしている……。

「……もういい！ 良く分かった！」

「分かって頂けて良かったです。あれ、ヒロ？ いつの間にかいたの？」

「ついさっきな……。しかしお前らも懲りないな……。この間補習をエスケープしようとして怒られたばかりだろうに……」

「あ、あれはもう習性として染みついているんだってば……！」

「はいはい。それじゃあ補習頑張ってたな……」

「逃がすか！ ヒロ、君も補習を受けるんだ！」

「その通りだ！ お前だけ逃げようたつてそうは行くか！」

「離せ！ 吉井！ 坂本！ オレは何も悪い事をしてないだろうが……！」

「烏丸お前もついでに補習を受けていけ。こいつらの相手をオレ一人でするのは骨だ……」

「とばつちりだ！ 勘弁してください！ こつちとらまだ用事が終わってないんですよ！ それにこんな小さな子も一緒なんです！ だから帰らせてください！」

「僕なら大丈夫だよ。兄さん。さっき電話をしたらおじいちゃんがこつちに迎えに来てくれるって！ だから大丈夫！」

「と言う訳だ。良かったな。人より多く勉強できて」

「理不尽だ……！！！」

オレの叫びは夜の学校に木霊した……。

.....

「吉井、坂本！ 『私は所有者の許可なくプールを使ったことを反省しています。』を英訳しろ！」

「ひ、ヒロ？ なんだかキャラが違う……スーパーン！！……って痛いよ！ 何処からハリセンなんか出したの！？」

「黙れ！ その便所のような薄汚い口から【検閲削除】垂れる前と後に『サー』と言え！ 分かったか！？ 【検閲削除】虫ども！！ 貴様らは補習が終わるまで【検閲削除】虫だ！ 地球上で最下等の生物だ！ じっくり可愛がつてやる！ 泣いたり笑ったり出来なくてやる！ 分かったらさっさと訳せ！ この【検閲削除】共！！」

「サー！ イエスサー！」

「声が小さい！！ ママの腹の中に【検閲削除】を忘れてきたのか！？」

「サー！！ イエスサー！！！！」

.....

「サー！ 出来ました！ サー！」

「よし！ 坂本！ 吉井の英文を訳してみる！」

「サー！ イエス！ サー！ 『私は所有者の許可なく貧民層の人たちを使った事を反省しています』」

スーパーン！！

「貴様は何処の奴隷商人だ！！ 奴隷商人になる前に【検閲削除】から人間に進化してこい！！」

「サー！ イエスサー！」

「もう一度最初からやり直した！ 分かったか！？ 【検閲削除】共！」

「ちなみに姫路と島田も誘うつもりだ」

「……………ブラシと洗剤を用意しておけ。」

なんて扱いやすい奴……………！

「ワシもご相伴させて貰うとするかの。無論ワシも掃除を手伝うぞ」

「え？ 結構大変だけどいいの？」

「うむ。お安い御用じゃ。」

「木下、いい奴！ ご褒美に撫でてあげよう。」

ナデナデナデナデ……………

「うむ、これは…。なかなか……………。心地いいのじゃ……………」

そうだろう、そうだろう。

これがオレの100の特技の1つ【心地よい撫で撫で】（そのま
ま）だ！

的確なツボを絶妙な力加減で相手を撫でる事によって相手を虜に
してしまう必殺技デス！

本来は動物限定の業だけど、まあ気にするな。たいした問題じゃな
い！

「んじゃ、後は向こうの二人だな。おーい、姫路、島田！」

「どうしたの、坂本？ 何か用？」

「呼びましたか、坂本君？」

「2人とも今週末暇か？ 学校のプールが貸し切りで使えるんだが、
良かったらどうだ？」

「「え……………？」」

あ、2人の表情が凍った……………。

「あ、さては2人とも用事があったりする？」

「い、いや。別に用事は無いんだけど。その、どうしようかな……？ プールって言うことやっぱり水着だし……」
「そ、そうですね。水着ですよ……。そのえっと……」

そう言っただけでそれぞれ自分の気になっている部分に眼をやる……。若いつていいねえ。

「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだらうけが……。ちなみに秀吉は来るぞ。明久に水着姿を見せにな。」

「ひ、卑怯よ木下！ 自分は自信があるからって！」

「そうですね！ 木下君ずるいです！」

「お、お主らは何を言っておるのじゃ？」

だから、お前ら木下は男（以下略）

「行くわ！ 色々準備して！」

「そうですね。準備は大事ですよね！」

まあ、そんなこんなで女子も行く事になった。おっと大事なことを言うのを忘れていた。

「坂本、霧島も誘っておけよ。樹海の土の栄養になりたくなかったらな……」

「……そのつもりだ。」

「ところでヒロ。姉上は呼ばなくて良いのかう？」

「ん？ いいんじゃない？ オレプール掃除の時間にしか来ないから」

「え？なんで？」

「……用事」

「嘘つけ、どうせ泳げないとかそんな理由だろ……」

「ソナナコトナイヨ」

「眼が泳いでいるぞ」

「何故片言なのじゃ？」

「キニシナイデ……」

「そうかそうか、お前泳げないのか。それはいい事を聞いた。秀吉、木下姉を誘っておけ。こいつにはこの間の補習の仕返し……ゲフンゲフン、日頃世話になってるから泳ぎを教えてやる……！」

「了解じゃ！」

「無理！ 絶対ヤダ！ 人間は浮くようには出来ていない！！ っ
て言うか水の入ったプールには近づきたくない！！」

「さて、週末が楽しみだな、ヒロ」

「嫌だああああああ！！！！！！」

.....

プール掃除当日オレは逃亡を図ったが坂本といつの間に関結託していたジジイに捕まってロープでグルグル巻きにされた状態で静馬に連行されてしまった……。

オボエテロ！ あのクソジジイ！！

「おはよう、ヒロ、静馬君」

「おはようございます。烏丸君、静馬君」

「おはようございます、吉井さんに姫路さん」

「……おはよう……」

「なんだか不機嫌ですね。」

「朝逃走しようとしたらおじいちゃんの新作トラップ10連発を食らって捕獲されたんです」

「……そうなんだ……。なんだか可哀そうになってきたよ……」

「同情するなら金を……じゃなかった。この縄解いてくれ！」

「ダメだよ、兄さん。いつも兄さんが言ってるじゃないか。苦手な事からいつまでも逃げてちゃいけないって」

「うっ！ それを言われるとキツイものがある……」

「そうそう、これを機に苦手を克服しよう！」

「……ハア、そうだな。いつまでもこんなんじゃダメだよ……。分かった……出来る限り頑張るよ……」

そう言っていると木下と優子が来た。

「おはようじゃ、明久、ヒロ。絶好のプール日和じゃの。」

「おはよう、ヒロ、吉井君。今日は誘ってくれてありがとう。……」

何でヒロは縛られているの？」

「……黙秘する」

「？ まさか変な趣味に目覚めたんじゃ……」

「目覚めてないから！朝逃げようとしたら、捕まって縛りあげられただけだから！」

最近優子の思考がおかしな事になってきているような気がする……。

「それはそうとムツツリーニは何をしているんだ？」

「……（カチャカチャ）」

視線をやるとそこには鬼気迫る表情でカメラの手入れをしていたムツツリーニの姿があった…。

「……今忙しい！」

「準備を怠らないのはいいけど無駄に終わる気がするぞ。」

「……何故？」

「いや、だってムツツリーニどうせ鼻血で倒れちゃうじゃないか。」

「そう、吉井の言う通りだ。チャイナドレスでも生命の危機に瀕していたのに水着なんて耐えられるのか？」

「……フツ、甘く見て貰っては困る」

そう言ってムツツリーニは大きなクーラーボックスをオレ達の前に

置いた。そこには

「・・・・・・・・・・・・・・・・輸血の準備は万全」

大量の輸血用の血液パックが用意されていた…。

「最初から鼻血の予防を諦めているあたり男らしいよね…」

「っていうかどうやってそんな物手に入れた…?」

「ヒロ、この光景に疑問を覚えるのって私だけ?」

「…こいつらの行動に疑問を持つのは時間の無駄だ。どうせオレらが考えても分からないんだから…」

そう、こいつらの行動は良くも悪くもオレの想像の斜め上に行く事をここしばらくの付き合いで嫌と言っただけほど理解させられた…。

「ところで秀吉、新しい水着を買ってってたよね。どんなの勝ったの?」

「うむ、ワシの水着じゃがな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・(クワッ)!!」

「トランクスタイプじゃ!」

「バカなあああ!」

「最近お主らはワシを女として見ておるようじゃらな。ここらで一度ワシが男だという事を再認識させようと、って2人も聞いておるか?」

「酷いよ秀吉! 君は僕の事が嫌いなのかい!??」

「・・・・・・・・・・・・・・・・見損なつた……」

「な、何じゃ? なぜワシは責められておるのじゃ?」

「気にしちや駄目ですよ、木下君」

「ああ、きつとコイツら来る途中に頭を打って可哀そうな事になっているに違いない。」

「ヒロ！ 君は秀吉の水着姿（女物）が見れなくてもいいって言っ
かい！？」

「何度も言うが、木下は男だって言ってるだろう！ いい加減目を
覚まして現実を受け入れろ！！」

「違う！ 秀吉は秀吉だよ！【秀吉】っていう性別なんだ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）！！」

「正常になれ、吉井、ムツツリーニ！ 今ならまだ戻って来れる！」

「…本当にFクラスって分からないわ…。」

テツテツテツテツ！

「おはようです！ バカのお兄ちゃん、静馬君！」

「あ、おはよう、葉月ちゃん、美波」

「おはよう、アキ。坂本はまだ来てないの？ てつきりウチが最後だ
と思っただけけど…。」

「いえ、もう来てますよ。今職員室に霧島さんと一緒に鍵を借り
に行ってる所 ちょうど戻ってきたみたいです。」

「でたな！ 極悪人！」

「ハハハ！ 面白い格好じゃないかヒロ。」

「やかましい！ ウチのジジイと結託なんかしやがって！ 卑怯だぞ
！」

「フツ、ヒロまだ分かってないようだな。」

「？ 何がだ？」

「卑怯、汚いは敗者の戯言だ！」

「お前ホントに最低だぞ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

オレと坂本の言い合いも終わり、着替える事になった。

「んじゃ、女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるから、付いてってく

れ。」

そう言つて男女別に分かれた。約一名を除いて…

「ダメだよ葉月ちゃん！ 女の子は女子更衣室で着替えないと！」

「そうだよ！ あと秀吉も女子更衣室に行かないと！」

「えへへ、冗談です」

「ワシは冗談ではないのじゃが…」

「ほら、遊んでないで行くわよ、木下、葉月」

「島田さん、秀吉は男だつてば！」

「し、島田ついにはお主までワシをそんな目で見るように！？ 嫌

じゃ！ワシは男じゃから男子更衣室で着替えるのじゃ！」

「だから、秀吉は男…」

「諦める、優子。こいつらに何言つても無駄の様な気がする…」

「じゃあ、秀吉を女子更衣室で着替えさせろつていうの！？」

「違つて。木下だけ別の場所で着替えればいいだけだろう…」

「むう、得心がいかぬ…」

「大人になれ。男だつたら細かい事を気にするな…」

少し可哀そうな気がするが向こうが木下を男と認めない以上ここで押し問答しても時間の無駄だ…。

「はあ、仕方ないのう…。まあワシの水着姿を見ればきつとみんなもワシを見る目が変わるはずじゃ…」

木下から哀愁の様な物が漂ってくる…。

「よし、決まつたならさつさと行くうぜ。時間がもつたない。」

そう言われてオレ達はそれぞれ更衣室に向かうのだった…。

外伝4話 やった方は忘れていてもやられた方は忘れない！【後編】

優子SIDE

秀吉の誘いでヒロ達と学校のプールで泳ぐ事になったけど、肝心のヒロがまだ来ていない…。着替えてもう20分はかかっている。

この中に知り合いが余りいないから少し居心地が悪い…

代表は坂本君にかかりきりだし、島田さんと姫路さんとは余り話した事が無いし…。

ああ、もう！秀吉かヒロ早く来てよ！

ブシャーアアア！！

「ギヤアアアア！眼が！眼がああ！」

変な音と妙な悲鳴ががしたのでそこに眼を向けるとそこには

鼻血で鮮血に染まっている土屋君と代表に眼潰しされている坂本君が居た…。

……………お願いヒロ、早く来て…

このままじゃ正気の糸がキれてしまいそうだわ…。

と言うかあの子…。島田さんの妹？なんで小学生なのにあんなに胸が大きいのよ！

私より大きいじゃない！！

「コ、コラ！葉月、お姉ちゃんのそれ勝手に持ってちゃ駄目じゃない！」

胸パット！？良かった…。普通に考えたらそうよね…。

小学生があんなに胸が大きい訳ないものね…。

「美波の胸小さいね。」

「あんたの眼潰すわ。左右均等に丁寧に！」

「吉井君！女の子を胸で判断するなんて最低よー！！」
しまった…。他人事とは思えなくて思わず口が出てしまった…。

「木下さん…。ありがとう！」

「島田さん、私の事は優子って呼んで！」

「分かったわ、優子。私の事も名前で呼び捨てていいから！」

こうして胸が小さい物同士の友情が育まれたのだった…。

「待たせてすまぬの。」

「！ (ううん、全然待ってないよ！秀

吉！)」

「落ち着くのじゃ、明久。ここは地球じゃぞ！」

「な、なんて恰好してるのよ！秀吉！それ女物の水着じゃない！」

「な、なんじゃと！」

「き、木下…、あんた何処までウチらの邪魔したら気が済むの…！」

「木下君は卑怯です！トランクスタンプだと言って私たちを油断さ

せておいて、最後の最後に裏切るなんて！」

「秀吉！やっぱり僕らの気持ちを察してくれたんだね！」

「……………永遠の友情と劣情をその水着に誓う。」

「あんた、そんなことしたら私まで変な眼で見られるからやめなさいって言ったでしょ！」

「ま、待つんじゃない！！ワシは確かに店員に『普通のトランクスタイ

プが欲しい』と、言ったのじゃ！！姉上、そっちの関節はそっちに

は曲がらない！……………アアアアア！！」

しばらくお待ちください……………

……………

「お待たせしました！皆さん！」

秀吉への折檻も済んだ頃ヒロの甥っ子の静馬君が来た。それにしてもヒロは遅いわね…。

「静馬君、遅いです！」

「ごめん、葉月ちゃん。兄さんが準備に手間取って…」

ペタペタ、ガシャガシャ、ガチャガチャ……………

あ、ヒロが来たのかしら？

「シューコー、シューコー、シューコー、シューコー」

眼を向けるとそこにはヘルパーを両手足と腰につけて、ビート板、浮輪を2つ、シュノーケル、フィン（足ひれ）をフル装備した赤いハーフの水着に黒いノースリーブのジャケットを羽織ったの異様な恰好の男が立っていた…。

余りに暑いから幻覚を見たのね…。眼をこすって深呼吸、ゴシゴシ、スーハー、スーハー。

よし、もう一度…。

「シュコー、シュコー、シュコー、シュコー（シュタ）」（手を拳げて挨拶）

「み、美波！変質者！変質者が居るわ！」

「お、落ち着いて、優子！！アキ！坂本！不審者よ！助けて！！」

「わわわ！違うよ！優子さん！葉月ちゃんのお姉さん！コレは兄さんだよ！！」

「え？か、烏丸！？」

「ヒ、ヒロなの？」

「シュコー、シュコー、シュコー、シュコー（コクコク）」

「なんて変なカツコしてるのよ！ビックリするじゃない！」

「…兄さんは泳げないせいかプールが大嫌いなんだ…。だからこんな恰好を…。」

「ああ、やっぱり不審者扱いされたか…」

「ヒロ、その格好はやっぱりやめようよ…。」

「シュコー、シュコー、シュコー、シュコー（ブンブンブン）」

「い・い・か・ら、外しなさい！！」

そう言っただけはヒロにサブミッションを極めた…

しばらくお待ちください…

「酷い奴だ！なんでオレの命綱を切るような真似をするんだ！！」

「さすがにあれは恥ずかしいわよ！いくら泳げないって言ったってここでは足が付くのよ。溺れるなんて事はまずないでしょ！」

「無理！子供のころプールに叩きこまれて死にかけて以来プールはオレの鬼門なんだぞ！」

「大丈夫よ。さあ、一緒に入るわよ。」

そう言っただけ私にはヒロにプールに入る様に促した。

ヒロは一旦入ろうとして足を少し水につけた後固まった…。

「やっぱり無理…。」

そう言っただけ私にしがみついた。その腕は小刻みに震えていてヒロがどれだけプールを怖がっているか良く分かった。

「ほら、大丈夫よ。私と一緒に入りましょう。手を離しちゃ駄目よ。」

「え？」

「ほら、早く」

「う、うん。」

そう言っただけヒロはやっとプールの中に入る事が出来たのだった。

「絶対に離さないでくれよ…」

「大丈夫よ…。絶対に離さないから」

………

「はい、バタ足して」

バシャバシャバシャ…。

水に入って1時間ヒロはやっとプールに慣れてきた様で、泳ぎの練習をしていた…。

さすがに運動神経がいいだけあってかなり上達が早い…。

あとの課題はプールの中で一人で動けるようになるだけね。

「ちょっと休憩しましょうか。」

「分かった…。」

「だいぶ慣れてきたじゃない。これならもう一人で泳げるようになるまで時間はかからないと思うわ。」

「本当か!？」

少しこのヒロに頼りにしてもらってという状況を手放すのは少

し寂しい気がしたけどヒロが苦手を克服できるなら仕方ないよね…
他の人たちは何をやってるのかな？

.....

静馬SIDE

プールに入ってから兄さんはずっと優子さんと一緒に泳ぎの練習を
している…。

「お兄ちゃん、静馬君！葉月と遊ぶです！」

「いいよ。何して遊ぶの？」

「じゃあ『水中鬼』をします！」

「水中鬼？吉井さんは聞いたことありますか？」

「ううん、聞いたこと無い。水中でやるおにごっこの事かな？」

「違います！水中鬼は鬼になった人がそうでない人を追いかけるん
です。そして鬼が他の人を引きずりこんで溺れさせたら勝ちです！」

「鬼だ！それは確かに鬼だ！」

「ダメだよ、葉月ちゃん！そんな遊び危ないよ！」

「静馬君の言う通りだよ！じゃあ今からその遊びがどれだけ危険な
んだ。今からそれを教えてあげるよ。」

え？教えてあげるってどうやって？

「おい、霧島さん！！！」

「……何？」

「雄二と水中鬼って言う遊びをやってみたいんだ。ルールは簡
単で雄二を水中に引きずりこんで、溺れさせて人口呼吸をしたら霧
島さんの勝ち。」

「……行ってくる。」

「行っちゃ駄目だって！坂本さん！早く逃げてー！」

「ん？どうした、静馬？（ガゴガボ）い、いきなり足が！」

「……雄二、早く溺れて。」

「ぶはあ！しょ、翔子！？なにをトチ狂って？（ガボガボガボ…

）」

「さ、坂本さー！ーん！！」

「ね？危険でしょ？」

「はいです。水中鬼は諦めるです…。」

「ね？じゃないでしょう！早く坂本さんを助けないと！！」

「明久！テメエの差し金だな！」

「うわああ！」

「うわ！ダメだよ、霧島さん！しっかり捕まえといてくれないと！」

「・・・ごめん」

「わっ！お兄ちゃん達泳ぐの速いです！」

「…坂本さんや兄さんも大変なんだね…。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ヒロSIDE

「あれ？プールを使ってるのは誰かと思ったら代表と優子だったの？」

「・・・愛子？」

プールから上がって休憩していたら何処かで見た事のある女子がやって来た。

たしかAクラスとの試召戦争の時にムツツリー二との保健体育勝負で負けた保健体育実践派……

確か名前は

「Aクラスの工藤か。どうしてこんな所にいるんだ？」

「そうそう、工藤愛子だ。すっかり忘れていたよ。」

「ボク？ボクは水泳部だから」

「あれ？今日って水泳部は休みじゃなかったっけ？」

「そうじゃなければオレ達に使用許可が下りる訳が無い。」

「うん、すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだけど、プールから人の声がしたから寄ってみたんだ。ねえ、ボクも混ぜて貰っていい？」

「ああ、別にかまわないぞ。別にオレ達のプールってわけじゃない

し それにすでにもう1人誰か増えてるみたいだしな」

「え？」

坂本の指をさした方向を見るとロールパンの様な頭が特徴的な女子がいつの間にか混ざっており、島田に迫っていた…。

『お姉さまっ！どうしてプールに行くのならミハルに声をかけてくれなかつたのですか！？ミハルはこんなにもお姉さまを愛してくれますのに！！』

『ミハル？あんたどうしてここに居るのよ！？プールで遊ぶなんて誰にも言わなかつたはずなんだけど！』

『ミハルにはお姉さまを害虫から守るためのトクベツな情報網がありますから！！』

………。

色々と問題のある発言なんてオレには聞こえていない…。聞こえていないっいたら聞こえていない！！これ以上濃い人物と知り合いになつてオレの平穏な生活が壊されてたまるか！オレは今の面子だけで腹いっぱいだ！！

「何やらにぎやかになつて来たのう…。」

そう言つて木下が危なげない泳ぎでこちらへ向かつてきた。

「あれ？優子が2人？あ、弟君か…」

「うむ、そうじゃが。お主は姉上の友人かの？」

「ええ、同じクラスよ。」

「あのさ、僕も泳いでいいかな？」

「ん？遠慮する事は無かるう。ここは学校のプールじゃからな。」

「うん、ありがとう。それじゃあ水着に着替えてくるね」

そう言つて工藤は更衣室に向かつて行つたかと思えば途中で振り向いて

「あ、覗くならバレないようにね」

と言つ爆弾発言を残して行つた…。

………。 静馬と木下以外の男性陣全員の動きが止まつた

…。

「集合！作戦タイム！！」

「どうする？あんなこと言われたら男として動かない訳には…」

「そうだよな。珍しく分かっているじゃねえか。明久…」

「お前ら落ち着け。今ここで下手に覗きに行こうとすると」

「・・・雄二、動いたら捻り潰すから…」

「明久君余計な動きを見せたら大変な事になりますよ。」

「ヒロ…、行ったらプールに重りつけて投げ込むからね。」

「なんて事になるぞ…。ここはオレ達の身の安全の為に我慢するのが一番だと思う…」

「そ、そうだよな。覗きはいけない事だよな！つてあれ？ムツツリ

ーニが居ないよ？」

「ムツツリーニなら、ほれ。向こうで血液補充に忙しいようじゃぞ。」

「…難儀な体質だなあ」

.....

プールサイドに腰掛けながらオレ達は女子の水中バレーを見物していた。

「あのさ、気のせいかもしれないけど美波と姫路さんやけに険悪な雰囲気でビーチバレーをやってない？」

「大丈夫だ、オレにも険悪に見える」

「賭けてる物が賭けてる物だけにお互い譲れないんだろ…」

ちなみに2人の賭けている物とは以前坂本が吉井に渡した【ペアチケット】でどちらが吉井と映画を見に行くかである。2人の勝負はかなりヒートアップしており競技に使われているビーチボールを割れんばかりに打ちあっている…

「これは姫路・霧島ペアが優勢だな。」

「意外じゃのう。運動勝負なら島田が勝ちそうじゃが…」

「そうね、1対1なら美波の勝ちだろうけどパートナーに恵まれていないわ…」

『ミハル！あんた絶対手を抜いてるでしょ！』

『そんなことありませんお姉さま！ミハルはお姉さまの為に全力で（手を抜いておりま）す！！』

『あのロールパンの本音が手に取る様に分かるんだけど…』

『そうね、美波も可哀そうに…』

『これにはウチの大切な物がかかっているんだから本気でやりなさい！』

『はい！ミハルもお姉さまの為に全力で（手を抜いておりま）す！
！あんなのとデートなんてお姉さまの為になりませんから！』

『ロールパン…。為になるか、ならないかは島田本人が決める事だと思っぞ…。』

『言うかあんな強引な方法で良く島田に嫌われないな…。』

『あんたまさかウチを負けさせるためにこつちに来たわね！』

『ほら！お姉さまボールが来ましたよ。』

『ああ、もう！早く言いなさいよ！』

『はい！1セット目は代表・姫路チームの勝ちだよ！』

『お姉ちゃん！ファイトです！』

『姫路さんと霧島さんも頑張つてー！』

『静馬と葉月ちゃん、せめてお前たちはこの険悪な雰囲気には気付かないでくれよ…。』

『それじゃあ2セット目始め！』

『ああ、手が滑ってしまいました！』

『はい、これで1対0』

『…ミハル、もう一度言うけど次のサーブから本気を出しなさい。』

『お姉さま、信じてください！ミハルはお姉さまの為に全力で…』

『下手な演技はいらないわ。これが最後の警告よ。』

『そろそろ島田がキレるか？そうなら子供たちは避難させなきゃいけない…。』

『遊びに来てトラウマを作つて帰る事は無い…』

『信じてくださいお姉さま！ミハルはお姉さまに嘘をつく事なんて』

ありません!」

『いい?ここまで行ってまだ本気を出さないというのなら』

『ですからミハルは本気を出していますと何度も』

『ウチは明日からミハルの事を【清水さん】って呼ぶから』

『……………』

「ねえ、今のサーブ見た?」

「ああ、垂直に変化していたな…」

「どうしたらビーチボールであんな芸当が出来るのじゃ?」

「さすがに翔子もあれは取れないな。」

『お姉さまごめんなさい!ミハルは嘘をついていました!』

『いいのよ、ミハル!これからも友達でいきましょうね!』

なんやねん、この妙な寸劇は…。

パアーン!

なんだ?何の音だ?

「むう、すごい威力じゃ。まさかビーチボールを割るほどとは…」

「え?今のボールが割れる音なの?」

「どんなバカ力だよ、一体…」

『あ、ごめんなさい。ミハルちよつと力を入れすぎてしまいました。代わりのボールを探してきますので皆さんはその間休憩しててください!』

そう言っつてロールパンは用具室の方に向かって行った。

「…………少し疲れた。」

「そうですね。代わりのボールが見つかるまでお言葉に甘えさせて貰いましょうか。」

「お疲れ様、皆気合いが入っていて見ていて面白いよ。」

「あ、はい。ありがとうございます。私も皆さんと一緒に遊べてとても楽しいです。」

「あはは。それは良かったよ。」

「ところでどうしてプールを借りれるようになったんですか?」

「あー、実はなこいつらが夜中にプールに侵入して「ま、まあ!ち

よつと色々あつてね！！プール掃除を引き受ける代わりに1日貸し切りにして貰ったんだ！！」

ああ、なるほど。【大好きな姫路】の手前体裁の悪い事は隠しておきたい訳か…

「プール掃除？それなら私達も手伝うわよ」

「いや、大丈夫だよ優子。お前の水着姿を見られる代価と考えたらむしろプール掃除は軽すぎる位だ。」

「……バカ……」

優子は顔を真っ赤にしてうつむきながら呟いた…。

うわ、メツチャ可愛い！！この可愛さはなんだ！？お前はオレを悶え死にさせるつもりか！？……失礼、少し（かなり）取り乱した。

「でもやっぱりお手伝いします。遊ぶだけじゃ悪いですし…」

「ありがとう。でも掃除は僕らだけで十分だよ。道具も5人分しか借りてないし…」

「そうですか…」

「うーん、道具が無いんじゃないわね…」

「あ！そうでした！それならっ！」

何だろう…。寒気が止まらない。オレの第六勘が危険だと警報を鳴らす…。

「ちよつと失敗しちゃって人数分用意できなかったから黙ってたんですけど」

頼む！オレの勘よ！外れてくれ！！

「実は今朝作ったワツフルが4つ…」

「第1回」（吉井の声）

「最速王者決定戦」（坂本の声）

「ガチンコ水泳対決」（吉井、坂本の声）

「『イエーツ！』（木下とムツツリー二の合の手）

「『イエーツ！』じゃねえ！お前ら何言ってるの？何言っちゃってるの？オレを殺す気か！？」

「ヒ口、勝負とは時に非情な物なんだ…」

「明久の言う通りだ、勝負事で相手の弱点を攻めるのは基本中の基本なんだ。」

「テメエら、こんなときだけ結託してんじゃねえ！！助けて、木下！ムツツリーニ！」

「ヒロ、お主の事は忘れないのじゃ…」

「……冥福を祈る。」

「お前らみんな敵か？オレの敵なのか！？」

「明久、ルールの説明だ！」

「オツケー！ルールは簡単！このプールを往復して最初にゴールした人が勝ちと言う至極簡単な水泳勝負です！」

つまり1位の奴だけが姫路の殺人ワツフルを回避できるという事だ…。

泳げない（と言うか優子と一緒にゃなければプールにも入れない）オレは最下位（殺人ワツフルの餌食）が決定しているような物なのである…。

クソツ！どうやってこの窮地を乗り切る！考えろ！考えるんだ、オレ！！

ハッ！そうか！こうすればいい！この勝負なぜやるのか女性陣は気付いていない！

つまり【一位の人間だけが殺人ワツフルを回避できる】という事ではなく、【最下位の人間だけが殺人ワツフルを食べられない】という風に周りの情報を操作してやればいい。

奴らは姫路本人に料理の腕を知らせたくないようだからそのルートで逃げ道は塞げる！

よし！この作戦で行こう！

「……仕方ない。オレも男だ。その勝負受けてやる…！」

「さすがだよ！ヒロ！男の中の男だよ…！」

吉井がニヤニヤしながらオレを褒め称える。

憎たらしい面だな…。まあ、今のうちにいい気になってる。その憎たらしい面今に絶望した表情に変えてやる。

「バカなお兄ちゃんたちどうしたですか？」

「そうだよ、急に水泳勝負なんて…」

「葉月ちゃん、静馬君男には大切な物を賭けて戦わなければならぬ
い時があるんだよ…。」

「カツコイイです〜！」

「うん、さすが僕のライバルだけあります！」

この間の学祭以来静馬が妙に吉井をライバル視しているような気がする…。

まあ、いいや。相手が吉井なのが不安要素だけど、誰かをライバル視する事は静馬の成長につながるだろうし…

それより作戦の為の仕込みをしないと…

「姫路、ああは言ってるがこの勝負は『オレらの中の誰が姫路の（殺人）ワツフルを食べるか』を賭けているんだ…」

「え？そうなんですか？」

「ああ、だからこの勝負で勝った”上位4人”が姫路の（殺人）ワツフルにありつけるんだ…」

「そんなに楽しみにして貰えるなんて嬉しいです！けどそれじゃあ
烏丸君が…」

「フツ、そうかもしれない。けど勝負は勝負！もしオレが負けても情けは無用だ…。勝者4人にその（殺人）ワツフルを振る舞ってや
つてくれ。」

「…はい、分かりました。烏丸君も頑張ってくださいね。」

「ああ、力の限りやらせてもらおうよ…。」

ミッションコンプリート！！テレットテ〜レ〜レ〜

さあ、仕込みは完了した。後は結果を待つだけだ…。

「それじゃあボクが審判をやるよ！よーい！ドン！！」

「くたばれー！！」

スタートの合図と同時に吉井と坂本がお互いを目掛けてとび蹴りを放っていた

「やっぱり雄二も同じことを考えていたね！この外道が！！」

「てめえこそ卑怯な真似をしてくれるじゃねえか！この恥知らずが！！」

「その言葉そっくりそのまま返してやる！」

「ちょ！お前ら何やってんの？なにやっちゃってんの！？」

「止めるな！ヒロ！こいつをつぶせば僕の勝利は確実なんだ！！」

「そうだ！オレが勝つためにもこいつはここで消しておかなきゃならねえ！！」

オ、オレの作戦が…、ここまで見事に目論見を外されるとは思ってもみなかった…。

やっぱりこいつらの思考は良くも悪くもオレの斜め上に行く…。

そう思いオレはプールサイドに打ちひしがれていた…。

「3人共木下君とムツツリーニ君はそろそろ折り返しだよ。」

「「何い！！」」

「そうは行くか、明久！お前は秀吉を！オレはムツツリーニを止める！！」

「了解！ここは一時休戦だね！！」

「な、なんじゃ？明久！お前は隣じゃろう！！」

「ダメだよ、秀吉！ここは通さない！！」

「明久！離すなのじゃ！！」

「逃がすもんかああ！！」

ズルツ！

んあ？何の音だ？

音がした方に目を向けるとそこには吉井に水着の上が取られた木下が居た…。

「あ、明久君！何してるんですか！！」

「へ？」

「それです！それ！！」

「ああ、これ？秀吉の水着に似ているね…ってこれ秀吉の水着の上！？」

「んむ？そう言えば胸元が涼しいのう…」

「ぐぐぐぐぐぐごめんなさい！！神に誓って僕は何も見ていないから！！」

いや、だから木下は男だって

「・・・・・・死してなお一片の悔いなし！！」

ブシューウウウウウウウ！！！！

「ムツツリーニイイイイイイ！！！！！！」

「うお！！大丈夫か！？ムツツリーニ！その出血量はやばくないか！？」

「・・・・・・大丈夫！むしろ本望・・・」

「き、木下！とにかく胸を隠しなさい！土屋の鼻血が止まらなくなるから！！」

「い、嫌じゃ！！ワシは男なのじゃ！だから胸を隠す必要はないのじゃ！！」

「木下君！！わがまま言っちゃ駄目です！！土屋君が死んじやいますから！！」

「お前らとりあえず落ち付け！！優子！救急車って何番だっけ！？」

「ヒロ！まずあんたが落ち着きなさい！」

「・・・愛子、救急車の手配をお願い。」

「はい、やっぱりFクラスの人たちは面白いね。」

「バカなお兄ちゃん達いつも楽しそうで羨ましいです！！」

「あわあわあわあわ！プールがどどん血まみれになって行ってる！！」

「お姉さま愛しています・・・」

結局ムツツリーニはオレ達と救急隊員の必死の延命措置の甲斐あってどうにか一命を取り留めたのであった。。。

.....

「吉井、坂本、烏丸。ちょっと聞きたい事がある。」

「断る」

「黙秘します」

「勘弁して下さい…」

「どうして掃除を命じたはずのプールが血まみれになって汚れているんだ！！鉄拳をくれてやるから生活指導室で詳しい話を聞かせろ！！」

「説教なんて冗談じゃねえ！！むしろ死人を出さなかった事を褒めて貰いたい位だ！！」

「そうですね！本当に危ないところだったんですからね」

「すみません、話すとトラウマが掘り起こされて正気を保っていられるか分からないんです！！」

「貴様らの日本語はさっぱり分からん！！拳で語り合った方が早い！！」

「ええい、この暴力教師め！逃げるぞ、明久、ヒロ！！」

「了解！！」

「貴様ら！今度は反省文とプールの掃除だけでは済まさんぞ！！」

「理不尽だー！！」

そもそもオレは何も悪いことしていないのに！！

殴られてあの衝撃的な映像のフラッシュバックに耐えながらも一応事情を話したら西村先生はため息交じりに

「今度の強化合宿の風呂は木下だけ別にする必要があるようだな…」
と呟いていた…。

外伝4話 やった方は忘れていてもやられた方は忘れない！【後編】（後書き）

外伝は一旦ここで終わりです

次から原作3巻の合宿編に突入します

あと、PV1000000、ユニーク100000を突破しました！

読んでくださった方々本当にありがとうございます！

第3部開始 第31話 ゴミの分別は意外に細かい

オレが編入してから、2ヶ月たった。季節も初夏にさしかかり、暑くなり夏の訪れを感じていた…

そんなさわやかな朝の一幕オレはムツツリー二と巨乳談議に華を咲かせていた。

そして事件は起こった…。

「……………違う、ヒロ。巨乳と言うのは」

「そうか！その解釈は考えた事が無かった！さすがだ！ムツツリー二！オレはお前を心から尊敬している！！ならこつという解釈は」

「助けてくれ！ムツツリー二、ヒロ！」

「……………どうした？」

「どうした、坂本？顔が青いぞ。まるで【霧島との結婚が秒読み段階に入った】っていう風な顔してるぞ。」

「……………。」

え？当たり前？

「と、とりあえず話を聞こうか？」

ちよつと真剣な話のようだ…。茶化すのはよして、真面目に聞こう…。

……………

「助けて！ムツツリー二！ヒロ！僕の名誉の危機なんだ！」

お前ら二人してそんな【助けて、ドラ もん】みたいなノリで来るなよ…。

「後にしろ、今はオレが先約だ。」

「ムツツリー二、何の話？」

「……………雄二の霧島との結婚が近いらしい。」

「そんなの今さらじゃないか！！そんなことより、僕が校内の皆に女装趣味の変態と思われる事の方が問題だよ！！」

根本と同類か…。そら、へこむわ…。

「何だと！？お前が変態だなんてそれこそ今さらだろうが！！」

「黙れ、この帯妻者！人生の墓場に還れ！」

「うるさい、この変態！さっさとメイド喫茶に出勤しろ！」

「……………」

「……………」

「……………傷つくならお互い黙ってればいいのに」

「泣くな、2人とも…。そのうちいい事あるさ…。」

「な、泣いてなんたないやい！これは朝食食べた塩と水が眼から

あ！」

「ほう？塩と水か…。この間の説教だけじゃ、まだ足りなかったと見える…。」

「あ、いや！ヒロ！これには深い訳があつて…。」

「そうか、そうか。」

「ヒロ！分かつてくれたんだね！？」

「ちよつと其処に正座しなさい…。」

「い、嫌だ〜！！」

しばらくお待ちください……………

……………

「以上！わかつたな！！」

「は、はい…」

「で、話を戻そうか。」

「そうだね。で、何の話だっけ？」

「坂本と霧島の結婚が秒読み段階に入りそうだった話」

「そうそう、そうだった。でもまだ結婚の話位で済んで良かったじゃないか。僕はてつきりあのペースだともう子供が出来た事にされているかと」

「明久、笑えない冗談はよせ…」

「…そこまで言うのなら一応話を聞くよ。何があったの？」

「一応って言うのが癪に障るがまあ、いいだろう。実はな、今日機

械音痴のはずの翔子がMP3プレイヤーを持ってきていて怪しく思
ったから没収したらそこには何故か捏造されたオレのプロポーズが
録音されていたんだ…。」

「……………」

「…き、霧島さんは可愛いね！そんなセリフを記念にとっておきた
いなんで」

「そ、そうだな！別にそれをネタに既成事実を作る訳でもないんだ
し、別にいいんじゃない」

「婚約の証として父親に聞かせるつもりのような…」

「……………」

思わず絶句してしまった…。お、恐ろしい…。」

「MP3プレイヤーは没収したが中身は絶対コピーだ。そこでムツ
ツリーニに盗聴器を仕掛けた犯人の特定を頼みたい。機械音痴のあ
いつがこつそり盗聴器を仕掛けるなんて出来るはずがない。絶対に
他に盗聴に長けた実行犯がいるはずだ。」

「……………」で明久は？」

「実は僕のメイド服パンチラ写真が全世界にWEB配信されそうな
んだ！」

「……………」

こつちも随分厄介事の匂いがする…」

「……………」なにがあった？」

「ごめん、端折りすぎた。要するにね」

話を聞くと脅迫犯の要求は【吉井の周りの異性にこれ以上近づかな
い事】らしい。

と言うと犯人は姫路、島田、木下（男性だがそう認識していない人
が大半のため）狙いの生徒、後考えられるのは可能性は低いけど吉
井狙いの生徒と言う事になる。

「そんな訳でこの写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。」

写真を撮られた覚えなんてないから盗撮が得意な奴がこつそり撮影
したんだと思う」

「なるほど、お前ら脅迫仲間か…」

「………気の毒。」

「こんなことで仲間が出来てもな…」

「遅くなつてすまない。強化合宿のしおりをまとめるのに手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ。」

おつと西村先生がやって来た。席に着かないと鉄拳が飛んでくる。

「………とにかく調べておく。」

「じゃあ、オレはまず吉井の【身の周りの異性】の線から洗ってみるよ。」

「すまん。報酬に今度お前らの気に入りそうな本を持っていくる。」

「僕も最近仕入れた秘蔵コレクションその2を持ってくるよ。」

「………必ず調べておく」

「よし！張り切つてやりますか！」

オレ達の返事に満足したように吉井と坂本は自分の席に戻つて行った。

全員が席に着いた事を確認して西村先生は強化合宿の説明を始めた。

「明日から始まる【学力強化合宿】だが大体の事は今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので眼を通しておくように。まあ、旅行に行く訳ではないので勉強道具と着替えさえ持つていけば問題ないが」

3泊4日で勉強か…。やる気が出ないな…。それにオレが居ない間静馬は問題ないにしてもジジイの方に問題がありすぎるから心配だ…。

あのジジイときたら、ペットボトルを燃えないゴミに出すわ、柄物と無地の服と一緒に洗濯機に入れるわ、キャベツとレタスを間違えるわ、で不安要素だらけだ…。

静馬、4日間踏ん張つてくれよ…。

「集合場所と時間だけはくれぐれも間違えない様に！」

そういえばクラスによってこういうイベントの待遇が違つんだっけ…。確かAクラスはリムジンバスで快適に向かうみたいだし…。

となるとオレ達は普通のバスかな？

そう思いオレはしおりをめぐって集合場所と時間の項目を見た。

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは」

集合場所 卯月高原 時間 16:00

「現地集合だから！」

『『『案内すらないのかよ!!』『』『』』

あまりの扱いに全級友が涙した…。

クツ！これが格差社会と言う奴か!!

第3部開始 第31話 ゴミの分別は意外に細かい(後書き)

PV1000000、ユニーク100000を突破しました！

読んでくださった方々本当にありがとうございます！

第32話 「怒らないから正直に……」と言うのは死亡フラグだ！

強化合宿当日いつものメンバーで固まって卯月高原へ向かっていた。退屈だ……。景色を眺めるのにも飽きたし、持ってきた本はすべて読んでしまった……。

いつそのこと眠ってしまえば良かったのだが、あいにく全く眠気が無い……。

トランプでも持ってこれば良かったな。さてどうやって暇をつぶさうか……。

「雄二、ヒロ何か面白い物は無い？」

この退屈に耐えきれず吉井はそう言った。よし、暇つぶしのカモが来た。

「鏡がトイレにあつたぞ。存分に見て来い。」

「それは僕の顔が面白いと言いたいのかな？」

「いや、お前の顔は割と 笑えない。」

「それじゃあこれから笑える状態にしようか。」

「ちよつとヒロ！？マジックなんて持ってどうして僕に迫ってくるの!？」

「安心しろよ。今なら額に【肉】と書くだけで勘弁してやる。」

「安心できないから！お願いやめて！嫌アアアア〜!!」

しばらくお待ちください……………

……………

「うう、酷いよ。肉だけじゃなくて、ナルトほっぺにカイザー髭まで書くなんて……」

「はは、悪かったって。そのマジックは水性だから洗えばすぐに落ちるよ。」

「お、覚えてる!?!」

「すまない、もう忘れた。」

「うわ〜ん!?!」

そう言つて吉井は泣きながらトイレに走つて行つた…。少しやりすぎたかな？

後で何か埋め合わせしてやるう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「美波、何読んでるの？」

「ん、これ？これは心理テストの本。100円均一にあつたから買つてみたんだけど、意外と面白いの。」

「へへえ、面白そうだね。僕にも何か問題出してみてよ。」

「オレも混ぜてくれ。」

「いいわよ。それじゃあ、いくわよ。」

次の色でイメージする異性を答えなさい。【？ 緑 ? オレンジ ? 青】それぞれ似合うと思う人を挙げて貰える？」

あれ？オレ発想が貧困なのかな？優子しか思い浮かばない…。

「えへつと、つて美波。そんなに怖い顔で睨みつけられると答えにくいんだけど…」

「べ、別にそんなんじゃないか、烏丸はどうだった？」

「あへ、どうもオレは発想が貧困みたいだ…。優子しか思い浮かばなかつたよ。」

「…いいな、優子。好きな人にちゃんと想ってもらえて…」

「???何か言つたか？」

「何でも無いわよ。でアキどうなの！？早く答えなさい!!」

「えへつと、【緑 美波 オレンジ 秀吉】」

突つ込まない！オレは断じて【木下は男だ!】と言うツッコミは入れないぞ!!

オレは空気が読める男だ!!

「【青 姫路さん】つて感じかな」
ピリッ!!!!

うわっ!すごっ!!本を真ん中から引き裂いた!!つて言うか何で

？今の吉井の発言の中に島田を怒らせるような要素は無かったはず！何で島田は怒ってるんだ？

「み、美波さん？どうして本を真ん中から引き裂いてらっしゃるんですか？」

「どうして…？」

「はい？」

「どうしてウチが緑で瑞希が青なのか説明してもらえん？」

尋常じゃない殺気だ…。これは答え方を間違えたら即、地獄行きだな…

「ど、どうしてと仰られましても…」

「怒らないから正直に話してみても…」

このセリフを言った相手に対して正直に答えるのは愚の骨頂だ。相手の求めているセリフを言うのが一番生存率が高いとオレは思う…。って言うか、この殺気を何とかしてくれ…。集団でケンカを売られた時ですらこんな圧迫感を感じた事は無かったぞ…。気が変になっ
てしまいそうだな…。

「前に下着がライトグリーンだったから」

あ、これは死んだな…

「坂本、窓開けて」

「捨てる気！？僕を窓から捨てる気！？」

「落ち着け、島田！さすがの吉井でもそれは死ぬ！死んでしまっから…！」

「島田、窓からゴミを捨てるな。」

「雄二、止めてくれるのはありがとう。けど今僕をサラッとゴミ扱いしたよね…！」

「大丈夫よ。ゴミじゃなくてクズだから！」

「落ち着けて！さすがにその仕打ちは非道すぎるから…！」

「…うっ、味方がヒロシかない…。ここまで酷い扱いを受けるのは久しぶりだよ。」

「クズはきちんとクズ箱に入れるべきだ。」

「雄二、クズ扱いは否定しないんだね」

「…ドンマイ、吉井。そのうちいい事があるさ…。」

「…ホントに？」

「…そう思っただけなくちゃやってられないだろ…。」

「それもそうだね…。」

吉井を慰めていると、坂本が島田からさっきの心理テストの本（だつた物）を取り上げた。

「あ、ちよつと！」

「なになに？ 緑は【友達】、オレンジは【元気の源】 青は なるほどなあ。」

「え？ 青は何？ なんだつたんだ！？」

「気にするな。」

ええ？ そう言われると気になるんだけど…

「さ、坂本！ 返しなさいよ！」

「悪い悪い、面白そうだったからつい借りちまった。」

「そう思うんだつたら雄二も参加したら？」

「そうだな、オレもちよいと混ぜて貰おうかな。」

「それはいいけど…さっきの問題には別に深い意味は無かつたんだからね！！」

「わかつてるって」

「一体何の問題だつたんだ…？」

「ワシも参加させてもらえるかのう？」

「別にいいけど…」

なんだか口調に棘があるな…。木下が元気の源で自分が友達だったのがそんなに不満だったのか？ けど、結構普段の吉井への対応を見ていると自業自得の様な気もするが…

「それは有難い…。ところで明久よ、さっきの問題じゃが【次の色でイメージする”異性”を答えなさい。】なのじゃがオレンジでイメージするのは誰じゃ？」

「秀吉」

「少し嬉しいから困る…」

だんだん女子扱いされる事に違和感を覚えなくなってきたので、木下…

「ところでムツツリーニは参加しないの？」

「あつちで寝てるよ。相当疲れが溜まっているみたいだから寝かしておいてやるう。」

「うむ」

「あの私もいいですか？」

「そうだね、皆でやるうよ。」

「ところで美波ちゃんさっきの青色の答えって…」

「オレも気になる。青は何を表していたんだ？」

「…教えない、絶対に」

「そ、そんなあ…」

「真相は闇の中か…」

「ハア…、まあいいわ。第2問いくわよ」

【1～10の数字で今あなたが思い浮かべた物を順番に答えなさい】

吉井 1・4

姫路 3・9

坂本 5・6

木下 2・7

オレ 10・8

【最初に思い浮かべた数字はあなたの普段見せている顔を表します】

坂本 クールでシニカル

姫路 温厚で慎重

木下 落ち着いた常識人

吉井 死になさい

オレ 面倒見が良い気遣い上手

「ふむ、なるほどな」

「温厚で慎重ですかあ」

「常識人とは嬉しいのう」

「ねえ、僕だけ罵倒されなかった？」

「あまり気にしなさんな……」

【次に思い浮かべた数字はあなたが余り見せない本当の顔です】

坂本 公平で優しい人

木下 色香の強い人

姫路 意志の強い人

吉井 惨たらしく死になさい

オレ シビアで現実的な人

「秀吉は色っぽいのか……」

「姫路は意思が強いそうじゃのう」

「坂本君は優しいそうです」

「ねえ、僕の罵倒がエスカレートしていなかった？」

「そう言う時もある……」

「どづいつ時!？」

「……(トントン)」

「?あ、ムツツリーニ。悪いな起こしてしまったか？」

「……(フルフル)空腹で起きた。」

「あれ?もうそんな時間？」

時計を見ると13:15を示していた。

「確かに良い頃合いじゃの」

「そうだね、あまり遅いと夕飯が入らなし」

「あ、お昼ですね。それなら」

ハッ!嫌な予感が!

「実はお弁当作って来たんです。良かったら皆で……」

ヤッベエエエ!!やっぱり来たあ!!落ち着け、オレ!大丈夫だ!

こんなこともあるのかとちゃんと対策を練ってあるじゃないか!シ

ミュレーション通りにやれば問題ない!!

「すまない、今日は自分で作って来たんだ。」

「姫路、悪いな。オレも自分で作って来たのがあるんだ。」

「すまぬ、ワシも自分で用意してしまったの。」

「……調達済み」

皆考えることは同じか……。という訳で栄えあるスケープゴートは
「と言う訳で明久にでも御馳走してやってくれ。」

吉井明久君に決定いたしました！皆さん拍手！！

「ごめん、実は僕も惣菜パンを」

「おっと手が滑った（パシッ）」

「……足が滑った（グシャ）」

「ああ！パン！僕のパンが！！気を付けてよ。全く食べ物を粗末に
」

「してはいけないからこのパンは責任を持ってオレが処分させても
らおう明久は姫路の弁当を分けて貰え。」

「……（ガンのくれ合い）」

「おっとゴメン雄二、僕も手が」

「滑らない様にきっちり掴んでおいてやるからな」

「……（メンチの切り合い）」

「吉井」

「ヒロ！ヒロなら僕を助けて」

「昨日説教された事を反省して食生活を改めようとする姿勢は立派
だと思う。しかし惣菜パンだけではやっぱり栄養が偏ってしまうと
オレは思うんだ……。だから”お前の体の為”に惣菜パンより栄養の
バランスがいい【姫路の弁当】を分けて貰う事をお勧めする。」

「……」
完全な理論武装だ……。事態の予想さえ出来ていればこんな物だ……。

さあ、おとなしくオレ達の為に犠牲スケープゴートになってくれ……。

「あの、明久君良かったら……」

「あの、その、えっと……」

「アキ、良かったらウチの弁当も食べてみる？」

「ありがとう！美波も分けてくれるんだね！それなら皆でお弁当を
広げて少しずつ摘まもうよ……」

こ、こいつ悪あがきを！死なばもろともでも言うのか……！！

マズイ！何とかしないと…

「ワ、ワシとムツツリーニは向こうの席なので遠慮させてもらおうかの…」

「……………（コクコク）」

そこまで言うならオレも一緒に助けてくれ…！

「オレも遠慮させてもらおう。明久から貰ったパンがあるしな…」

「雄二、そんなこと言わずに」

「そうか、明久！オレの弁当も食いたいか！それなら好きだけ食べ…！」

「もがぁぁ…！」

モグモグモグモグ…ゴツケン

「ウマい…。これ雄二が作ったの？」

「悪いか…？」

「いや別に…」

へえ、坂本は料理上手か…。意外だな…。って違う！今はそんなこと考えている場合じゃない！！目の前の脅威を退けるためにオレのとるべき行動は

「ヒロ！君は」

「はい、あ〜ん」

「むぐう…！」

今のうちに話を進めよう…

「吉井、オレ達に気を使わなくてもいいだ。お前の貴重な栄養源を奪るなんて真似オレには出来ないよ…。だから姫路と島田の弁当を心行くまで堪能させて貰え。」

モグモグモグモグ…ゴツケン

「ヒ、ヒロ！ちょっと待って」島田、吉井に弁当をやってくれ…！」

「う、うん。それじゃあはい、ウチのもどうぞ。」

おお！良かったな、吉井。島田の弁当はとてまつまそうだぞ！地獄の仏とはまさにこの事だな…！」

「え？あ、うん。それじゃあさっそく…！」

そう言って吉井はシューマイを手づかみで摘まんで口の中に放り込んだ。

行儀が悪いとは思ったが空気を読んで黙っていた。

「あのね、その…、勇気を出して言うけどね…。そのシューマイ、アキに食べて貰おうと思ってる…」

お？独自の工夫でも加えたのか？島田は料理がうまそうだし、後で教えて貰おうと

「2つに1つは辛子を入れてみたの…」

と思っただけどやっぱりやめた…。やっぱり島田は島田だな…。

思考が優子と同じ位デンジャラスだ…

「モグモグ…ブハッ！！ゲホゲホ…！！君はバカかい！！辛あ！とんでもなく辛い！！水！水！！」

「明久、ある意味ラッキーかもしれないぞ。」

味覚が破壊されてるからか？けど姫路の料理って確か味じゃなくて成分に問題があつたような気が…

「姫路さん、お弁当貰うね！！」

「はい、いっぱい食べてくださいね。」

「うん、行っただっきまーす！！」

…とりあえずいざという時の為にとってきた薬湯を準備しておこう…。

………

強化合宿1日目の日誌を書きなさい。

自分の状況予測の甘さのせいで大切な友達が危うく命を落とすところだった。

幸い一命を取り留めたがこの事を反省点として、今後一層の鍛錬を積んでいきたいと思っています。

教師のコメント

あえて何があったのか聞きませんが、失敗を教訓にして成長しようとする姿勢は非常に好感がもてます。

第33話 猫を撫でるときは顎のあたりを優しく撫でてやると良い

所変わって合宿所…

時間も20:00を過ぎ合宿の1日目が終わろうとしていた夜、オレ達は割り当てられた部屋で姫路の弁当の餌食となった吉井明久の蘇生を行っていた…。

「申し訳ありません、殿！この吉原重郎太兼次、殿より頂戴いたした城と5000の兵をすべて失ってしまいました！かくなる上は、手前の十字割腹にて」

「しつかりしろ！吉井！お前はまだ死んじゃいけない！！」

「明久！戻ってくるのじゃ！」

「持って来たぞ！！」

そう言つて坂本はAEDを持って部屋の中に入って来た。

「坂本、こいつを取り付けるのを手伝つてくれ！！」

「ああ、分かった！！死ぬんじゃねえぞ、明久！」

「1・2・3！」

ドン！！

「雄一郎よ、介錯を頼めるか…？」

「脈が戻らんのじゃ！！」

「もうダメなのか！？」

「諦めんじゃねえ！！まだ死んでないだろう！！」

「もう一回じゃ！」

「1・2・3！」

ドン！！

「ハッ！」

「明久、起きたか。良かった…。電気ショックが効いたようだな…」

「全く心配掛けやがってこの野郎…」

「…電気ショックって冗談だよね。僕の命がそんな一か八かの状態になつてたなんて…」

「冗談なら良かったんだけどな…」

「良かったのう…。お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めた時にはもうだめかと思っただのじゃ…。」

「ハハハハ、心配してくれてありがとう。ところでここは合宿所？」

「ああ、全く贅沢な学校だよな。この旅館文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ。」

「そうなんだ…。ところでヒロと秀吉もこの部屋なの？」

「うむ、ムツツリー二を含めた5人でこの部屋を使うのじゃ。」

「？ムツツリー二は何処に行ったの？覗き？盗撮？」

スパコン！

「友達に向かってお前は何を抜かしとんねん！」

「痛ッ！痛いよ、ヒロ！いつも思っていたけどハリセンなんて何処から出してるの！？」

「企業秘密だ。これぞオレの100の特技の1つ【何処からともなくハリセン取り出し】だ。」

「長いうえにそのまんまじゃぞ…」

ガチャ

「……………ただいま」

「あ、おかえり、ムツツリー二」

「……………明久、無事で何より」

「あ、心配してくれたの？ありがとう」

「……………情報も無駄にならずに済んだ。」

「ああ、吉井も眼が覚めたし依頼された情報をまとめようか。」

そう言ってオレは姫路、島田、木下、吉井のファンのリストを畳の上に出した。

「とりあえずオレの集めた情報はこれだけだ。姫路、木下、吉井【女装Var】のファンは男子が中心に組織されていて、島田のファンはこの間のロールパンを筆頭に女子を中心に組織されている。特に木下のファンの男は数が多くて情報を纏めるのに苦労したよ…。」

「ワシは男なのじゃがのう…」

「お前が認めようが、認めたく無かろうが実際にお前を女子もしくは第3の性別【木下秀吉】として認識している人間がこれだけいるってことだ…。気の毒だと思うけどな…。ムツツリー二の方はどうだった？」

「……………昨日犯人が使っていると思われる道具の痕跡を見つけた。」

「おお、さすがだね。2人とも」

「……………手口や使用機器から明久と雄二の件の犯人は同一人物の犯行だと断定できる。」

「そうなのか。まあ、そんな事をする奴なんて何人もいないだろうし、断定しても間違いなさそうだな。」

「何人もいてたまるか…。けど良かったよ…。機材の位置をムツツリー二に特定されるって事は犯人はムツツリー二より数段階格下だ。すぐに御用となるだろう…。」

「最もその道でムツツリー二に敵う猛者なんて世界中探してもそういないだろうけどな…。」

「それで犯人は誰だったの？」

「……………(フルフル)」

「あ、やっぱり犯人はまだ分からないんだ。」

「……………すまない」

「ああ、さすがに1日の調査じゃこれが限界だ。悪いな。」

「そんな協力してくれるだけでも本当に感謝だよ！」

「……………犯人は【女生徒でお尻に火傷の跡がある】位しか分からなかった。」

「……………。」

「…君は一体何を調べたんだ…。」

「思わぬ情報に思考がフリーズしてしまっただよ…。」

「……………校内に網を張った。」

「そう言ってムツツリー二は小型録音機を置いて、スイッチを入れた。」

『……………雄二のプロポーズをもう一つお願い』

翔子！？あいつもう動いてやがったのか！

『毎度！2度目だから安くしておくよ！』

『・・・値段はどうでもいいから早く』

『さすがはお嬢様、太っ腹だねそれじゃあ明日　と言いたいところだけど明日から強化合宿だから引き渡しは来週の月曜日で』

『・・・わかった。我慢する。』

「あ、あぶねえ……。強化合宿があつて助かった……」

「タイムリミットが来週の月曜日まで伸びたな。」

「実質あと4日だな……」

「……………ここからが犯人のヒント」

『相変わらずすごい写真ですね。こんなの撮ってるのがバレたら酷い目に遭うんじゃないんですか？』

『ここだけの話前に一度母親にバレてね。』

『大丈夫だったんですか？』

『文字通り尻に灸を据えられたよ。全くいつの時代の罰なんだか……。乙女に対して酷いと思わないかい？』

ブチっ！

「……………分かったのはこれだけ」

「なるほどね、それで尻に火傷の跡か……」

「口調が芝居がかつていたけど女子なのは間違いない。」
となると犯人は島田のファンあたりか？

「さすがにスカートをまくっても分からない可能性があるしね……」

「赤外線カメラでも火傷の位置なんて分からないだろうしなあ……」

「待て、お前らだんだん思考が犯罪寄りになってきているぞ！」

「お主らさつきから何の話をしているのじゃ？」

「秀吉、実はね　（説明中）」

「そうじゃったか。それにしても尻に火傷とは……」

「そうだ！そう言えばもうすぐお風呂の時間だし秀吉の見てきてもらえば」

スパーン！！

「落ち着け、木下は男だ！」

ハリセンを取り出し吉井の頭をドツいた。なんだか恒例になって来たな、このやり取り…

「それは無理だ、明久。」

「どうして無理なのさ？」

男だからだよ…。

「3ページ目を開いてみる。」

.....

木下秀吉 20:00～21:00 個室風呂

.....

あ、そう言う事が…。そう言えばこの間西村先生が【木下だけ別に
する必要がある】って言ってたっけ？

「どうしてワシだけ個室風呂なのじゃ…」

「…よしよし、元気出せ」

ナデナデナデナデ…

「むづ、心地よいのじゃ。ゴロゴロゴロゴロ…」

木下が猫っぽくなってきたな…。

ドパン！！

「全員手を頭の上に組んで伏せなさい！！」

「な、何事じゃ！」

「木下はこつちへ！そつちのバカ4人は抵抗をやめなさい！」

先頭に立った島田が窓から脱出しようとした吉井達の行く手を塞ぎ
機先を制した。

「なぜお主たちはとつさの行動で窓に向かえるんじゃ？」

「って言うかバカ4人ってオレも頭数に入ってる…？」

比較的常識人でいたはずなのに少なからずショックだ…。

「仰々しくぞろぞろと…、一体何の真似だ…。」

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あんた達が犯人だって事位すぐに分かると言うのに…」

「え〜と、確か女装趣味の根本の彼女でCクラスの代表の小山友香さんだったよな？犯人ってどういう事？」

「根本君とはもう別れたわよ！ってそうじゃなくてこれよ！」

そう言うてオレ達の目の前に機械を見えるようにかざした。

「……………小型集音機とCCDカメラ」

「これが女子風呂の脱衣所に設置されていたのよ！」

「それって盗撮じゃないか！一体だれがそんな事を！？」

「とぼけないで！あんたたち以外にだれがそんなことするって言うの！」

「おいおい、少し冷静になってくれ。確かにオレ達は日頃からバカばかりやっているから、今回の事で疑われるのはある程度仕方ないと思うけど、いきなり犯人扱いは少し酷くないか？」

「そうじゃ！ワシらはそんな事はしておらん！覗きや盗撮なんて真似は」

「そつだよ！僕たちはそんな真似はしないよ！」

「……………（コクコク）！！」

そうやって小山は反論する吉井とムツツリー二に冷ややかな視線を送った。

「そんな真似は？」

「……………否定…できん！」

「ええっ！信頼足りなくない!？」

「お前ら話をややこしくするな！潔白なんだから堂々としているよ！」

「まさか本当に明久君たちがそんな事をしていたなんて…」

「アキ、信じていたのにどうして…」

「姫路、島田落ち着いてくれ。吉井を含めここに居る全員無罪だ。」

だからそんな物騒な拷問器具は向こうにやっておこう。」「

石畳なんて一体どこから持ってきたんだ？

「そうだよ、美波！信じていたなら拷問器具は用意してこないよね！それと姫路さん違うんだ僕たちは本当に」

「もう怒りました！よりもよって夕飯を欲張って食べすぎちゃったときに覗きをするなんて！…いつもはそのまま少しス、スリムなんですからね！」

「待て！容疑者のオレが言うのもなんだが、怒るポイントが少し違いやしないか！？」

「ウチだつてもうちよつと胸が大きいんだからね！」

「それは嘘」

「吉井！この状況でそんなこと言ったら…」

「皆やつておしまい！！」

「ご、ごめんなさい！つい本音が！！」

「吉井イー……！！！」

こいつは何だつて状況をややこしくする発言ばかりするんだ！

「雄二頼む！この場を何とか収めて…」

そうか、まだ坂本がいた！頼む、一発逆転の策をオレ達に！！

『……雄二、浮気は許さない。』

『待て！翔子誤解だ…ギャアアア！！』

「……………」

ダメだ！坂本はもう助からない！！

「さて、真実を認めるまでたっぷり可愛がつてあげるからね。」

それは自白の強要だぞ、島田！人権侵害もいとこだ！！

「あのね、僕今まで美波ほどの巨乳は見た事がぎゃあああああああ

！！！」

ご機嫌取りはいいけどお前のその発言はかえって皮肉になつてるから！！

「明久君。まさか美波ちゃんの胸を見たんですか…？」

「あははっ！やだなあ。優しい姫路さんはそんな重そうな物を僕の

膝の上に載せたりなんてふぬおおおお!!」

「質問にはきちんと答えてくださいね？」

ダメだ! 吉井ももう助からない!! ムツツリーニは向こうで女子による私刑リンチを受けている。木下は周りに女だと認識されているから身の安全は確保できている!

次はオレの番だ! どうする、オレ? どうやってこの状況で制裁を回避する?!

「ヒロ? あなた覗きをしたの...?」

「優子が...。お前もオレを信用してくれないのか?」

「え?」

こうなつたら情に訴えるしかない! 優子は本質的には優しいからきっと大丈夫だ!

「そうだよな、オレの言葉なんてお前にとっては信じる価値なんてないんだよな...。周りが皆オレを信じてくれなくても、お前だけはオレを信じてくれると思つてたのに...信じてくれないなら、もう...いいや...。どうにでもしてくれ...。」

「ほ、本当にやってないの?」

「信じてくれるのか?」

「ヒロがやってない言つのなら...私はヒロの味方であり続けるから!」

「ありがとう、優子!」

やっぱり優子は優しいな...。オレみたいなバカの言つ事も聞いて信じてくれる...。

「もう一度聞くわよ、ヒロ。やってないのね?」

「ああ、勿論だ! オレは覗きなんてやる位なら優子を押し倒すね!」

「.....」

あ、しまった。安心してたらつい本音が...

「え〜つと優子?」

「な、何を言つてるのよ! あんたは〜!!」

「ちょっと待て! オレの関節はそっちに曲げたら大変な事に...」

・ギャアアアア！！」

こうしてオレ達4人は女子による理不尽な（約1名は自業自得）制裁を受けたのであった…。

うう、ひどい目にあつた…。

第34話 やる気が無い時は何をやっても無駄だ…

「なんか今日はいつもより更に生命の危機が多いよ…」

「うう、酷い目に遭った…」

「ヒロのは自業自得の様な気がするのじゃが…。しかしすごい濡れ衣じゃったのう…。何故だかワシは被害者扱いじゃたのも解せぬが…」

「ホント酷い濡れ衣だったよ…」

「……………見つかるようなへマはしないのに」

ムツツリーニ、その返答は覗きを肯定しているように聞こえるぞ…。それにしてもさつきから坂本が黙ってる。心なしか怒っているように見える…。

「雄二、大丈夫？さつきから黙ってるけど…？」

「上等じゃねえか…」

「は？」

「え、雄二どうしたの？」

「ここまでやられたんだ！本当にやってやろうじゃねえか！！」

「やるってまさか！？」

「ああ、そのまさかだ。あっちがそう来るのなら本当に覗いてやろうじゃねえか！」

「…雄二、そんなに霧島さんの裸が見たいんだったら個人的にお願いしたらいいじゃない？」

「バ、バカを言うな！オレは翔子の裸になんか興味は無い！」

嘘つけ…。興味が無いならそんなに慌てる事は無いだろ…

「うむ、もしや例の尻に火傷のある犯人捜しかのう？」

「そうだ、さすがに覗きなんて真似はやりすぎかと思って遠慮していたが…向こうがそんな態度で来るのなら遠慮は無用だ！」

「……………さつきのカメラとマイクは脅迫犯の使っていた物と同じものだった。」

「何じゃと？それは本当かの、ムツツリーニ？」

「それは嬉しい事実だな。」

「つまり、どういう事？」

「あゝっと、つまり要約するとお前を脅迫した奴、坂本の声を録音した奴、今回の覗きの真犯人はすべて同一人物だつて事だよ。そんなでもって覗き犯には尻に火傷のあとがある訳だから……」

「ああ、なるほど！尻に火傷の跡がある人を探したら全部解決する訳か！」

「まあ、そう言う事なただけど……。坂本オレはこの作戦は反対だ！ミイラ取りがミイラになつてどうする！」

「お前に何が分かる！！オレにはもう時間が残されていないんだ！あいつの家にはもうオレの部屋が……。あの状態であんなセリフを聞かれたら間違いないオレの未来は……！！たとえお前が抜けてもこの作戦は実行するぞ！」

「けど……！」

「ヒロ、言いたい事は分かるのじゃが今は共の危機なのじゃ……。手段を選んではおれん……。」

「……………（コクコク）」

「ハア……。分かった。仕方ない……。オレも協力する……。」

「そうと決まればさっさと行くぞ。もうあまり時間が無い。」

「……………後半組の入浴時間あと40分」

「時間が無いね。急ごう。」

「了解じゃ。」

「……ハア、了解」

「気が乗らない……。けど仕方ないよな……。まあ、最低限の協力はするとうしょうか……。」

……………

「……………この階段を降りてしばらくしたら女子風呂」

「…なんでそんなに詳しいんだ、ムツツリー二？」

「………一般常識」

どんな一般常識だ、それは…

「よし、時間が無い。一気に突っ込むぞ。」

「………（コクン）」

坂本がそう言いオレ達は一気に廊下を突っ切ろうとした。

「君達止まりなさい！」

振り向くとそこには化学の布施先生が立っていた。

あ、見つかった…。そりゃそうか。こんな厳戒態勢で正面から行けばこうなるわな…。

「更衣室にカメラが設置されていたと聞いて警戒してみたら…まさか本当に覗き犯がやってくるとは思いませんでした。」

「雄二どうする？」

「投降する事をお勧めする…。」

「ここまで来てバカ言ってるじゃねえ！構わん！ぶちのめせ！！」

「待て！それは色々と拙いんじゃないか！？」

「了解！！一撃でケリを着ける！！」

「吉井君も了解じゃないでしょう！」

「これは覗き犯の汚名を晴らす為！正義は我にあり！！この間の補習の恨みを喰らえええええ！！」

「思いつきり私心で行動していませんか！？」

吉井の拳が布施先生に届きそうになっただが

「ヒイヒイヒイ！試験召喚^{サモン}！！」

小さな体が吉井の拳を阻んだ。

「し、試験召喚獣！？」

「クッ！教師用の試験召喚獣は物に触れるのか！」

「ふう、間に合いましたか。まあ、吉井君が観察処分者に認定されるまでは自分達で雑用をこなしていましたが物に触れられる方が色々便利なんですよ。こういった君達の暴走を止めなければいけない場合もありますし」

「ひ、卑怯じゃないですか！自分たちの作ったテストで召喚獣を呼びだしたら強いにきまっていますよね！」

「吉井、前に坂本が言っていた…。卑怯汚いは敗者の戯言だって…」「ヒロ！君はどっちの味方なのさ！？」

そんなこと言っただってなあ…。

「そうですよ。正式な勝負じゃない物に卑怯も何ありませんよ。それ以前に自分達が一方的に暴力を振るおうとした事を棚に上げていませんか？」

「大人って汚い！！そうやっていつも詭弁で僕らを騙そうとする！！」

「お前らも普段から似たような事やってるだろうが…」

「それに教師もちゃんとテストを受けているんですよ。他の学年の先生の作ったテストで」

「え、そうなんですか？」

「はい、『教える側にもそれに相応しい学力が必要だ』と言うのが学園長の方針ですからね」

「諦める、人間的にも点数的にもオレ達が負けている…」

「さて、おとなしくして貰いましょうか…」

「ああ、もう勝ち目ないからおとなしく投降しようや…」

「ヒロ！諦めてんじゃねえ！いつもみたいに策の1つや2つ出して見せる！！」

無茶仰る…。そんなにポンポン便利な策なんて出てこないぞ…。

「仕方ない…。じゃあ、作戦を言うぞ…。全員耳の穴かつぽじって良く聞けよ…」

「…」「了解！！」「…」

「まず、坂本と吉井とムツツリーニが布施先生に飛びかかる…」

「…」「ふむふむ…」「…」

「その間にオレと木下が逃げる…」

「…」「バカか！貴様は！！」「…」

「いくらなんでもそれは酷すぎじゃぞ、ヒロ…」

「真面目にやれ！ぶっ飛ばすぞ！」

「分かったよ…それじゃあ」

「それじゃあ？」

「諦めよう…」

「もついい！今回お前は当てにならない事が良く分かった！！」

「分かってもらえて何よりだ…」

「こうなりや徹底抗戦だ！布施センを召喚獣ごと叩きつぶすぞ！」

「その意気だよ！雄二！」

「明久、一応化学の点数を聞いておこうか…」

「…あと1点…。あと1点で二桁だったんだ…」

「ヒロと一緒に先に行ってる、生ゴミ共！」

いくらやる気が無いからって生ゴミは無いだろ、生ゴミは…

「教師相手で1人は辛かろう…。ワシも手伝おう。ヒロとムツリ

！二と明久は先に行くときよい…」

「すまないな、秀吉…。試験召喚！」

「何、友の疑いを晴らす為じゃ…。試験召喚！ヒロ！2人を頼んだの

じゃー…」

「木下の頼みなら仕方ない…。やるだけやってみるよ…」

「行こう！ヒロ！ムツリーニ！」

「こ、こら！待ちなさい、3人共！」

「布施先生、申し訳ないのじゃがここを通す訳にはいかんのじゃ！」

「そう言う事だ。しばらくオレ達と遊んでもらおうか！」

………

「そこで止まれ。」

「………大島先生」

立っていたのは保健体育の大島先生だった。これってまずいんじゃないか？

ムツリーニは保健体育に特化した存在だ…。保健体育勝負に持ち

込んでしまえば勝てる相手はいない…。しかしそれはあくまで同じ
”生徒”ならばだ。けれどムツツリー二の保健体育が通じない相手
が居たら…ムツツリー二は…

「ムツツリー二」

「……………（コクン）」

ムツツリー二は真剣な表情で頷き、大島先生と向き合った…

「……………大島先生、これは覗きじゃない。」

その言葉に召喚を開始しようとした大島先生は動きを止めた。

「それなら何だと言うんだ」

「これは 保健体育の実習」

「…そのいい訳はアウトだろ…。ムツツリー二」

「サモン試獣召喚だ。」

「……………サモン試獣召喚」

保健体育教師 大島武 Fクラス 土屋康太

保健体育 663点 424点

「ダメだ！ムツツリー二！その人と戦っちゃいけない！ここはオレ
の召喚獣の腕輪の能力で！」

「……………（フルフル）先に行け。後は頼む」

「けど…！」

「ヒロ、行こう…」

わかっているんだ…ムツツリー二は自分の保健体育に誇りを持って
いる。

だから例え勝てない相手でも退く事は出来ないってことも…

「…わかった。生きてまた逢おう、ムツツリー二」

「後は任せたよ！ムツツリー二！」

……………

「来たな、吉井。しかしまさか烏丸まで一緒とはな…」

「出たな！鉄人！」

「西村先生と呼べ！」

「成り行き上仕方なく、でしたけどね…。やるだけやると木下に約束しましたし、ムツツリー二にも頼まりましたしね…。そこを通して貰います。」

「鉄人…。先生達あの点数はまさか点数操作とか…」

「オレ達教師がそんな真似するか！教師は教師で勉強をしているんだ。よりよい教育者になるためにな。」

「そうなんですか。大変ですね。」

「ああ。教育者と言うのは大変なんだ。」

「ちなみに西村先生はどのくらいの点数を？」

「この前の担任のゴタゴタのせいで試験を受けそびれてな。今は点数が無いんだ。」

「嫌な予感がする…。吉井の召喚獣は点数が低いと言っても生身の人間よりはずっと強い…。」

「オレだってそこそこの強い方だと思っている。それなのに西村先生のこの余裕はなんだ？」

「そうですね。ないに等しい点数ですか。さすが筋肉バカの西村先生ですね。」

「吉井、念の為に血液型を聞いておこう」

「油断するな。相手はあの西村先生だ…。何かあるぞ…。」

「と、とにかくそこをどいて貰います！試験^{サモン}召喚！！」

補習教師 西村宗一 Fクラス 吉井明久

総合科目 NONE 929点

「かかってこい」

「そう言っつて西村先生は拳を構えた…」

「そう言っつ事か…」

「まさか僕の召喚獣が人に触れる特別製だって事忘れてません？」

「阿呆、我が校唯一の問題児事を忘れてたまるか。」

確か観察処分者って教師の雑用などを代わりにこなす為に召喚獣が人や物体に触れられるようにしてあるんだっけ？その代わり痛みや疲れの何割かが召喚者にフィードバックするんだったよな…。

「でもだったら…」

「さつきも言っただろう。俺には今点数が無いと」

「要するに西村先生は召喚獣が出せないから生身でオレ達を相手にしようって事だ…」

「そうと分かれば日頃の恨みも込めて　くたばれ！鉄人！！」

「待て！うかつに飛びこむな！！」

「フン！！」

吉井の召喚獣が西村先生に叩きつけようとしたが西村先生にたたき落とされた…。

「そ、そんなバカな！生身で召喚獣に勝てる訳が…！」

「吉井、どうしてオレがお前の召喚許可を取り消さないか分かるか？」

「ほえ？」

「いやはやお前が観察処分者で良かった。召喚獣相手なら殴っても体罰にはならんからなあッ！！」

「ええ！？今まで一度も体罰なんて気にした事なんだ　」

「歯あ喰いしばれえ！！」

「ごぶああ！！」

吉井の召喚獣が西村先生に殴り飛ばされ、消滅した。吉井自身もフィードバックで相当苦しそうだ…。

「クソッ！やらせてたまるか！！」

そう言っただけは西村先生に向かって渾身の拳を放ったが

「この程度か！烏丸ああ！！」

「グア！！」

一撃で沈められてしまった…。

「ク、クソ…！こんなにあっさり…」

「フン！そんな信念のない拳など俺には効かん！まあ、男らしく正

面から来た気概に免じて停学は勘弁してやろう。心優しい西村先生に感謝だな。なに俺も鬼では無い。指導が終わったらきっちり解放してやる。そっちの3人もな…」

「・・・なっ！」

「へ？」

そこには捕えられた坂本、木下、ムツツリーニがいた…。

「さて、まずは英語で反省文でも書いて貰おうか！文法や単語を間違えていたら何度でもやり直しだ！終わった者からシャワーを浴びて眠ってよし！！」

そんな西村先生の怒声の中オレは自分の事なのに何処か他人事のように感じていた…。

ただ、ただ自分の情けなさを噛み締めながら…

第35話 うかつな発言は生死を左右する…

「・・・雄二、一緒に勉強できてうれしい」

「待て、翔子。当然のようにオレの膝の上に座ろうとするな。Fクラスの連中が靴を脱いでオレを狙っている。」

強化合宿2日目…。今日はAクラスと合同学習となっていた…。

学習内容は自由、質問があれば教師に聞いてよしと言う感じの自習形式だった。

「何で自習なんだろう？授業はやらないのかな？」

「いいんじゃない？こっちの方が楽だし…」

「授業なんてする訳が無いだろう」

「やらない？どうして？」

「ヒロはともかく明久、お前はAクラスの授業を聞いて理解できるか？」

「む、失礼な僕にとってはAクラスもFクラスの授業も大差ないよ。」

「威張って言うなよ…」

「・・・この合宿の趣旨はモチベーションの向上だから」

「ああ、なるほど…」

「?????どういう事？」

「翔子、それだけじゃ明久にはわからんだろう。つまりAクラスはFクラス見て『ああはなるまい』FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そう言ったメンタル面の強化が目的だから授業はさして問題ではないと言う事だ。」

結婚を嫌がって逃げ回っている割には息がピッタリだな、こいつら…

「あ、代表ここにいたんだ。それならボク達もここにしようかな？」

「いいよね、ヒロ？」

「優子と工藤か…」

「そつだよ、君達は吉井君と烏丸君だっけ？久しぶり！」

そう言つてニカツと笑う仕草はボーイツシユな外見と相まつてとて
もさわやかに見えた…

「それじゃあ改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子
です。趣味は水泳と音楽鑑賞でスリーサイズは上から78・56・
79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ。」

特技にありえない物が混ざっていたような気が…

まあ、いいや。突っ込むとまた厄介な事になりそうな気がする…。
ここはあえてスルーの方向で会話を進めよう…

「ほう、シュークリームか…。ちなみ何処の物が一番好きだ？」

「うゝん、迷うけどやっぱりあそこかな。【セレナーデ】のシュ
ークリーム」

「あの幻の限定シュークリームか！？クツ！羨ましい！オレはさす
がに男一人であるの店に入るのが恥ずかしくって食つた事が無い…」

「へえ？あの店をチエックしてるなんて烏丸君も通だね。シュー
クリーム好きなの？」

「大好きだ！シュークリームだけではないぞ！甘いものならオール
OKだ！」

「そうなんだ。それじゃあ今度一緒に【セレナーデ】に行つてみる
？ボクと一緒にだつたら入りやすいだろうし…」

「いいのか？ありがとう、工藤！オレとお前は今から心の友と書い
て【心友】だ。って優子！ダメだつて！そのままやったらその関
節が外れてしまう！…ギャアアアア！…」

「諸君ここは何処だ？」

「…最後の審判を下す法廷だ！…」

「異端者には？」

「…死の鉄槌を！…」

「男とは？」

「…愛を捨て、哀に生きるもの！…」

「よろしい。これより 2-F 異端審問会を始める。」

「無理無理無理！これ以上はやつたらオレが死んでしまうから！…

ギヤアアアアアアア！！」

「…ヒロのバカ…。言えば私が付き合っただけなのに…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うう、酷い目に遭った…。」

「だ、大丈夫だった？ヒロ」

「吉井、オレこの合宿来てからいいとこなしの様な気がする…」

「ドンマイだよ！ヒロ！僕達には明日があるじゃないか！！」

「…そうだな、そうだよな！どんな不運も生きてれば何とかかなるよな！」

「そつだよ！その意気だよ！ヒロ！」

うう、吉井の気遣いが骨身に沁みる…。基本的にはいい奴なんだよな、こいつは…

「アハハハ、Fクラスの人たちは面白いね」

あれを面白いで済ませるあたり工藤も相当大物だ…

「ところで工藤さん、さつきから気になってたんだけど特技で言っただけ…」

ああ、バカ…。せつかく厄介事を避けるためにあえてスルーしていたのに…

「別に工藤さんの特技を疑ってる訳じゃないんだ。ただその…」

「あ、疑ってるね？なんならここで披露して見せようか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・。後ろから尋常じゃない殺気を感じる…。

この気配は姫路と島田と優子か…？霧島はいつものように坂本に対して眼つぶしを働いたようだ…。これはマズイ。オレの生存本能が警報を鳴らしている…。

吉井は工藤の発言にときめいた顔をしていてこの危機に気付いていない

どうするオレ！この危機を乗り越える方法は何か

「……明久、ヒロ、工藤愛子に騙されない様に」
「ムツツリーニは随分冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしているんだからとつくに鼻血の海み沈んでるのかと思ってたよ。」

免疫のないAクラスの奴らが鼻血の海に沈むムツツリーニを見て正気を保っていられるかが心配だ…。

「……奴はスパッツを穿いている」

「そ、そんな！工藤さん僕を騙したね！畜生！ガツカリだ！」

「そんなに凹むような事かよ…」

「あはは、ばれちゃった？さすがはムツツリーニ君。けど特技って訳じゃないけど最近凝っているのはコレかな？」

そう言つて工藤は小さな機械を取り出した

「……小型録音機」

「うん、コレとっても面白いんだ。例えば…」

ピッ！《工藤さん》《僕》《こんなにドキドキしてるんだ》《やらない？》

「わあああ！僕こんなこと言っていないよ！変な物再生しないでよ！」

「ね？面白いでしょ？」

「…ええ、最つつ高面白いわ。」

「…本当に、面白いセリフですな…」

後ろを見ると姫路と島田が微笑みながら佇んでいた…

これはマズイ…。吉井の生命が今存続の危機に瀕している…。

「待て待て待て！落ち着いてくれ！2人とも！これは吉井が言ったセリフじゃない！」

いくらなんでもこれで罰を受けるのは理不尽すぎる…

「瑞希、ちよつとアレを取りに行くの手伝ってくれる？」

ダメだ…。聞いていない…。

「分かりました。アレですね？喜んでお手伝いします…」

そう言つて姫路と島田は教室の外に出て行った…。

それと入れ違いに木下が入ってきた。何故か首をかしげて…

「どうしたの、秀吉？」

「いや、先ほど姫路と島田に石畳を運ぶのを手伝って欲しいと言われたのじゃが…」

「吉井、お前の身の安全の為に今すぐ逃げる事をお勧めする…」

なんだか姫路の思考は最近デンジャラスな方向に向いてしまっている気がする…。

第一印象が常識人だった為か余計にそう感じてしまうのかも知れない…。

これはアレか？白い物は染まりやすいつて言うアレなのか？

「…工藤、お前の悪戯けのおかげで尊い命が一つ散りそうだよ…」

「アハハハ、ごめんね。それじゃあ違う物にするね！」

《オレは》《工藤》《ならオールOKだ！》《工藤》《大好きだ！》

「ギヤアアアアアア！何やってんの！？何やってくれちゃってんの！？オレを殺す気か！？」

「ヒロ、ちよつといいかしら…？」

「ちよつと待て！優子、これは違う！工藤が音声を合成したものだつて！だからそんな【いい笑顔】でオレの関節を逆に曲げようとするのはやめ　ギヤアアアアア！」

オレにサブミッションのフルコースをかけた後優子は怒って

何処かに行ってしまった…

.....

「ヒロ、大丈夫だった？」

「…吉井、生きてるって素晴らしいね…」

「…そうだね」

なんだか今日は生きて部屋に帰れるような気がしない…。

ん？坂本からのサイン？なににない？

（工藤が例の犯人かもしれない。奴が犯人かどうか確かめてくれ）
確かにさっきの合成音声の手際は見事なものだった。けど工藤が犯

人？

何だろう？少し引つ掛かる物を感じる…。まあ、それは後で考えるとしてカマかける位はやっておくか…

（吉井、行くぞ）

（了解だよ、ヒロ）

「工藤さんキミが…」

（待て、ストレートに聞くな！警戒されるぞ！）

（ハッ！そうだった。危ない、危ない）

「ん？なに、吉井君？」

「え〜っと、そのキミが…」

「ボクが？」

「キミが 僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！」

スパーン！！

「その発言は色々アウトだ、吉井！」

ハリセンを取り出し吉井にすかさずツツコミを入れた…。

テレットテレット〜

吉井は【ワイセツ小僧】の称号を得た…

「あははは！吉井君はお尻が好きなの？それともボクの胸が小さいから気を使ってお尻にしてくれたの？」

「なんだか居た堪れない…。仕方ない、フォロー位は入れてやろう…」

「工藤、誤解だ。吉井はお尻が好きな訳じゃない…。こ、これはアレだ、言い間違いだ。そうだろ、吉井？」

「う、うん！勿論だよ！」

「へえ〜、じゃあホントはなんて言おうとしたの？」

「え〜っと、その、あ〜」

「アレだよ！『お尻を見せてくれると嬉しい』じゃなくて、『工藤とお知り合いになれて嬉しい』って言おうとしたんだよ！なっ？吉井！」

かなり苦しい、言い訳だ…。

「う、うん！そうだよ！そう言おうとしたんだよ！」

「流石だな、お前ら…。まさか録音機を目の前にしてそこまで言うとは…」

「へ？」「ハッ！」

「ごめんね。せっかくだから録音させて貰ったよ」

ピッ！《キミが 僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！》（吉井の声）

ピッ！《お尻を見せてくれると嬉しい》（オレの声）

「ひああああ！これは合成すらされていない分ダメージが大きいよ！お願い、工藤さん！今は消してください！」

「やってしもたあああ！オレからも頼む、工藤！それは消去してくれー！」

フォローのつもりが墓穴を掘ってしまいました…。しかもうっかりとびきり深いのを…

テレッテテレッレッレ

オレは【ワイセツ野郎】の称号を得た…。

「君達ってからかい甲斐があって面白いなあ。ついつい虐めたくなっちゃうよ。」

ピッ！《お願い、工藤さん！》《僕にお尻を見せて！》

「うわあああん！ボクがドンドン変態になって行くよー！」

ピッ！《オレは》《工藤》《の》《お尻》《が》《大好きだ！》《工藤》《の》《お尻》《ならオールOKだ！！》

「殺せよー！いっそひと思いに殺してくれー！！」

直後、背中に激しい悪寒が走った…

「…何なんだろうね、美波？」

「…今の何かしらね、瑞希？」

「…何なんでしょうね、木下さん？」

ははは…、優子、何処に行ったかと思ったら姫路と島田と一緒に石畳を取りに行っていたんだね…。オレはもうダメかもしれない…。

「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されてるのにこれ以上問題を起こす発言をしたバカ達がいるのかしらね、瑞希？」

「困りましたね、そんな人たちがいるのなら、厳しいオシオキが必要ですよ、木下さん？」

「そうね、公序良俗に反する発言には厳しい罰が必要よね、美波？」
「待って！3人共！これは誤解なんだ！僕は問題を起こす気は無くただただ純粹に《お尻が好き》ってだけなんだ！って違う！今のは途中に音を重ねられただけなんだ！お願いだから僕を後ろ手に縛らないで！他の皆も笑ってないで助けてよ！特に雄二！」

「よ、吉井イ！ちょっと待った！いくらなんでもそれはあんまりだ！オレ達は《工藤》《の》《お尻が好き》ってだけなんだから！ってうわ〜！工藤！これ以上状況をややこしくしないでくれ！ちょっとやめて！石畳は勘弁して〜！！」

「……工藤愛子。おふざけが過ぎる。」

「ムツツリーニ！助けてくれるの？」

「……うまくやってみせる」

「ありがとう！ムツツリーニ！この恩は忘れない！」

よし、ムツツリーニがこっちについてくれたら百人力だ！作戦開始！

……

「姫路さん、美波よく聞いて。さっきのは誤解で僕は《お尻が好き》って言おうとしたんだ。《特に雄二》《の》《お尻が好き》ってムツツリーニ！後半は貴様の仕業だな！うまくやるって僕をうまく追い込むって事なの！？」

「……吉井、雄二は渡さない」

「アキ、そんなに坂本のお尻がいいの……？ウチじゃダメなの？」

「前から分かっていた事ですけどハッキリ言われるとショックです

……

「吉井君、やっぱりそうだったんだ」

優子……。なんでそんなに嬉しそうなんだ……？

「……工藤愛子、お前はまだ甘い。」

「クッ！さすがはムツツリーニ君！」

「ム、ムツツリーニ…。オレの時はちゃんとやってくれるよな…？」
「……………任せておけ。」

「本当に頼むぞ…。ゴホン！優子、オレの話を聞いて欲しい…。色々と誤解しているようだけど《オレは》《吉井の》《お尻が》《大好きだ！》ってムツツリーニイイ！！テメエ！なんて事をしゃがる！ちゃんとやるってちゃんとオレも追い込むってことか！？この恨みは忘れんぞ！！」

「ヒロ、あなた秀吉だけじゃなくて吉井君にまで…？」

「違う！優子！オレ達はノーマルだ！そして何でそこで木下が出てくる！！」

「そつだよ！みんなして僕らを同性愛者扱いしないで！僕らにそんな趣味は」

「同性愛をバカにしないでください！」

ああ、また変なのが来た…。確かあいつは島田の熱狂的なファンのロールパン…

「み、美春？あんた何でここに！？」

「お姉さま！美春は愛するお姉さまに逢いたくってコッソリDクラスから抜け出して来ました！！」

「ちよつと美春！こんな所で愛してるとか言わないでよ！アキに勘違いされちゃうでしょ！」

お前も吉井を同性愛者と勘違いしてるんだからオアイコだと思っぞ…。

「君達少し静かにしてくれないか？」

あ、え〜っとなあいつは確か試召戦争の時に姫路と対戦した久保利光だったっけ…。

「あ、ごめん久保君」

「すまない、久保…」

「吉井君と烏丸君か…。全く姫路さんと言い島田さんと言いFクラスは危険人物が多くて困る…」

ん？なんだか引つ掛かる物言いだな？こいつ姫路と島田に何か恨み

でもあるのか？

「それと同性愛者をバカにするような物言いはどうかと思う。彼らは別に異常者ではなく、個人的な思考が世間一般と少し食い違っているだけなんだから…」

「あ、うん。そうだね…」

「確かに少し配慮に欠けた発言だった。不愉快にさせてしまったすまない…」

「なんだ？久保から哀愁の様な物が漂ってきている…」。

「ほら、美春。あんたもくだらない事で騒いでないで自分の学習室に戻りなさい。」

「くだらなくなんてありません！美春はお姉さまの事を愛しているんです！性別なんて関係ありません！お姉さま、美春は本当にお姉さまの事が…」

「はいはい、ウチにその趣味はないからね？」

「性別なんて関係ない…か…」

「なんだ？意味深な呟きだな？」

「性別なんて関係ない…ですか…」

「あのね、姫路さんそのセリフを呟きながらボクと雄二を交互に見るのはやめてくれないかな？知つての通り僕は《秀吉が》《好きなんだ》からってちよつと！」

「哀れ、木下…。とばっちりだ…」。

「誤解しないでね、姫路さん僕は秀吉の《特に》《お尻が好きなんだ》ってこれだと余計に誤解を招くじゃないか！」

「お前ら木下まで巻き込むなよ…」

「性別なんて関係ない…ね…」

そして優子、複雑そうな顔してオレと吉井と木下を見渡すのはやめてくれ！好きな子にそんな誤解を受けたらオレは死にたくなってる…。

「優子、誤解するな…。オレの好きな子は《木下》なんだから…つておい！ムツツリーニ！工藤！いい加減にしろ！誤解がドンドン解

きにくくなるじゃないか!」

「そうだよ!とにかくその機械をこっちに渡しなさい!僕達を取り巻く環境が変わらないうちに!」

「あ、明久、ヒロ…。ワシはどのような返事を返したらいいのじゃ…」

「木下!誤解だつて言ってるだろ!お前までぶつ壊れるな!」

「クツ!もう手遅れ!?こうなったら《久保君》《雄二と》《交互に》《お尻を見せて》違う!どうしてこんな場面で久保君のお尻を見る必要があるのさ!」

「吉井君そう言うのは少々困る。物事には順序と言う物がある…。」
久保…。その返しは天然か?

「分かつてる!順序云々の前に人として間違ってる事も!」

「アキ、やっぱりあんた女より男の方が…」

「だからどうしてみんな僕をソツチの人にしようとするの?落ち着いて僕の話聞いてよ!」

「そうだ!特に優子!オレの話しを落ち着いて聞いてくれ!お前に誤解されるのがオレには一番辛い!」

「…分かった、ちゃんと聞くから話してみて…」

「ああ。優子オレは《優子》《の》《お尻が》《一番》《見たい》つてコラ!工藤!ムツツリニ!勘弁してくれ!今オレの死亡フラグが…」

「何言ってるのよ!あんたはー!」

「待て!誤解だ!離せば分かる!見たいか見たくないかと言えば確かに見たいけど…って待て!そっちの関節はそっちには曲がらな
ギヤアアアアアア!」

結局この騒ぎは西村先生が怒鳴り込んでくるまで続いたのであった…。

第36話 仲間は何に変えても護りきれ!

地獄の様な折檻タイム…もとい勉強タイムも終わり、夕食後オレ達は犯人捜しの為の作戦を練っていた…。

「僕は工藤さんが犯人だと思っただけど…」

「その可能性は高いだろうな。」

「それじゃあ工藤さんを一気に取り押さえる？」

「……………それはやめといた方がいい。」

「だな、チャンスは1度失敗すれば犯人は見つからない。もし取り押さえて犯人じゃなかった場合真犯人は警戒して証拠の隠滅を図るだろうからな。」

「けど、あんなに怪しいのに手が出せないなんて…」

「……………。」

「どうしたのじゃ、ヒロ？さつきから怖い顔をしておるようじゃが…。」

「ん？ああ、悪い。ちょっと気になる事があってな…」

「何かあったのか？」

「何というか…。オレにはどうしても工藤が犯人だとは思えないんだよな…」

「え？どうして？あんなに怪しいのに…」

「そう、確かに怪しい。けど吉井の脅迫文の内容を思い出してみろ」

「え…つと『これ以上身の周りの異性に近寄るな』だったよね？」

「そう、そこからオレ達は犯行の動機は吉井に対する嫉妬だと思っただ。つまり犯人は『吉井の身の回りの異性』に好意を抱いていてなおかつ脅迫なんて鬱屈した手段も平気で使ってくる奴と考えられるけど工藤はどうだ？あいつが脅迫なんてする理由もないし、そんな手段を選ぶとも思えない。なぜならそんなことしなくても吉井を手玉に取れるからだ。」

以上の事からオレは工藤が犯人じゃないと考えている。」

「うん、ますます混乱してきたよ…。」

「とりあえず工藤は一応容疑者に上げておこう。怪しいのは事実だしな…。」

「……確認するには女子風呂を覗くしかない。」

ああ、やっぱりそれしか手が無いのか…。気が進まないな…。

「ああ、オレの翔子からの解放と今後の自由の為にはそれしか」

「待った、坂本。その前に聞いておかなければならない事がある…」
少し嫌な話になるけどこれだけは聞いておかなければならない…

「なんだ？」

「お前は本当に霧島との今の関係が嫌なのか？」

「当たり前だろうが！今さら何言ってるやがる！」

「その割にはやり方が徹底してないなと思って…。」

「……何が言いたい？」

「オレにはお前が本当に霧島を拒んでいるようにはどうしても思えないんだ」

「え？でもいつもデートに行くときとか抵抗しているじゃないか？」

「確かに…。けどな、本当にその結婚が嫌なら霧島を徹底的に突き放すべきなんだ。お互いの為にも…。如月ハイランドの時とかはそれが顕著に出ている。あの時はお前はわざわざ落として行ったヴェールを拾い、霧島を慰めに行っていた。こういう事を言うのは最低だと思うけどあえて言わせてもらおう。お前が本当に結婚が嫌ならそこで容赦なく突き放すべきだったんだ。」

気分が重い…。こういう最低な考えしか浮かばない自分に反吐が出る…。

「なぜ嫌だと言うならそんな行動にでた？お前が霧島との今の関係を否定するのは何でだ？それを今、この場でハッキリさせてくれ」
気持ち悪い…。腹の底から嫌な感覚が込上げてくる…。

けどこれを知らなければ、オレは本気で手を貸す事が出来ない…。

「……………」

しばらくの沈黙の後、坂本は口を開いた…。

「翔子のオレに対する好意は勘違いから来る物だ…。」

「どういう事だ？」

「…そのままの意味だ。あいつは過去の話しに対する責任感を好意と勘違いしただけなんだ…。オレのせいであいつはオレみたいなロクデナシに時間を費やす事になってしまった。だから、これ以上無駄な時間を過ごさせないためにその誤解を解く必要があるんだ…。」

「そうか…。こいつはやっぱり霧島の事を一番大切に思っているんだ…。だから冷たく突き放す事が出来ないし、その勘違いを抱えたまま霧島と一緒にいる事は出来ないと考えている…。」

「お互いがお互いを一番大切に思っているが故のボタンの掛け違い…全く、不器用な奴だな…。でもそう言う奴は嫌いではない…。」

「軽いノリで覗きなんて提案したのかと思っただけで呆れていたけど、これだけ真剣に坂本が霧島の事を考えて起こす行動ならオレが多少泥を被る価値はある。」

「ヒロ、オレは…」

「ストップ、もう十分だよ。」

「え？もういいの？」

「ああ、もう十分だ。嫌な事聞いてしまっただけで悪かったな…。そして話してくれてありがとう。そう言う事なら昨日の様な『一応』の協力じゃなく、『全力』で協力すると約束する。」

「…恩に着る、ヒロ。」

「気にしなさんな。誠意には誠意で応えないとな。作戦を練ろう。」

「作戦と言うがあの場合所はただの広い一本道じゃったからのう。正面突破しかないと思うぞい。」

「そうだな、作戦を立てる時間もないし、基本は正面突破から攻める以外にないな。」

「昨日の今日で警戒レベルは引き上げられてるだろうし、このままじゃ難しいぞ。」

「まあな。けど方法が無い訳じゃない。」

そう言つて坂本はニヤリとシニカルに笑つた。

悪い顔してるなあ……

「え？何か作戦があるの？」

「作戦なんて立派なものじゃないけどな。正面突破しか方法が無いならそれを成功させるだけの戦力をそろえたらいい。質は向こうが上でも数で上回れば勝機はある」

「要するに覗き仲間を増やすってことかな？」

「その通りだ。」

トントン…ガラ！

見計らつたようなタイミングで須川を筆頭にFクラスの面子が部屋に入つてきた。

「オレ達に話して何だよ、坂本。」

「ああ、ちよつとした提案があつてな。」

「提案？」

「今度は何だよ？正直疲れてて何もしたくないんだけど」

「早く部屋に戻つてダラダラしてえな」

全員がダルそうにしている。好きでもない勉強を一日中やらされたのだから仕方がない。

本当にこれで協力を取り付けられるのだろうか？

「皆、女子風呂の覗きに興味は無いか？」

「『『『詳しく聞かせろ！』『』『』』』」

この計画に協力しているオレが言うのも変だけどお前らモラルと言う言葉を知つてるか？

と思つていたが口には出さなかつた。なぜならオレは空気の読める男だからだ！

「昨日オレ達は女子風呂の覗きに向かつたんだが卑劣にも待ち伏せをしていた教師達の妨害にあつたんだ。」

「『『『フム、それで？』『』『』』』」

坂本のセリフに誰も突っ込みを入れないのか？と思つたが口には出さなかつた。

「まさか懲りるところか数を増やしてくるとは！これだからあの連中は！総員第一級戦闘配備！一人として通してはいけません！！」
「は、はい！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「吉井！ムツツリー二！大丈夫か！？」

「ヒロ、ごめん！助かったよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫だ」

作戦を開始して予定通り布施先生を突破したが、オレ達の倍近い数の女子が召喚獣でこの廊下を陣取っていて状況は最悪だった……。

「清水さん、そこをどいて欲しい」

「ダメです！そうやってお姉さまのペツタンコを堪能しようなんて神が許しても私が許しません！」

あれ？今の時間ってFクラスの島田は入って無いんじゃない？……ってあれ！！マズイ……

「違うよ！僕の目的は美波のペツタンコじゃない！」

「待て、吉井！後ろ、後ろ！！」

「ペツタンコは所詮ペツタンコなんだ！今の僕には美波の地平線の様なペツタンコより大切な事があって腕が千切れる様に痛い！！」
背後に居た島田が吉井の腕を極めていた。アレは痛い……

「黙って聞いていればペツタンコ、ペツタンコと……」

「み、美波、今は入浴時間じゃ……」

「忘れたの？ウチと瑞希はFクラスだから後半組なのよ。最も

前半組のAクラスからも参加している人がいるみたいだね。」

「ヤッホー！吉井君、烏丸君、ムツツリー二君。何を見に来たのかな？ボクを覗きに来てくれたなら嬉しいんだけど」

「・・・・・・・・・・工藤愛子！」

「く、工藤さん？どうしてここに居るの？」

「・・・・雄二、浮気は許さない」

『翔子待て！落ち着け　ギャアアアア！！』

前には女子連合、後ろには霧島か。万事休すだな……。どうやって犠牲を最小限にして退をするか……

「ヒロ、あなた何やってるの？」

「優子、お前も警備隊に参加していたのか……」

「そうよ。あんたのバカな行動を止めるためにね。覚悟しなさいよ。じっくりとお仕置きをしてあげるから……」

「マズイな……。あの顔は本気で殺る気満々の眼だ……。誰かが犠牲にならないと女子側も収まりが付かずに後に禍根を残す事になる……」

「この場合主犯格のオレか吉井かムツツリー二が犠牲になるのが妥当だろうな……」

「さてどうする？」

「あ、さてはボクからこれを取り戻そうとしているのかな？」

「そう言っただけで工藤はオレ達に見える様に昼間の小型録音機を取り出した。」

「工藤さん、どうしてそんな物を持つてるの？」

「もちろん、先生の授業を録音して後から復習をするためだよ。」

「恐らく嘘ではない。工藤は保健体育の方が目立っているから忘れられがちだが、Aクラスの一員なんだ。他の科目の方もかなり勉強しているんだろう。」

「それより吉井君達の目的はまさか脱衣所の盗み撮りとか？」

「く……！……」

「なら、一ついい事を教えてあげるよ。」

「そう言っただけで工藤はオレと吉井に近づいてきた。」

「脱衣所の中にまだ見つからないカメラがあるよ。ボクが仕掛けた訳じゃないけど偶然見つけちゃってね。」

「……工藤さん、君は！」

「落ち着け、吉井！工藤は恐らく犯人じゃない！」

「????何の話なの、ヒロ？」

「……こっちの話だよ。」

「さて、おしゃべりはここまで！始めようか？ムツツリー二君」
そう言つて工藤はムツツリー二と相対した。

「……………」

「お前ら！女子の召喚獣なんかじゃオレ達は止められない！無視して突つ切るぞ！」

そう言つて須川が突つ込んで行つた。

マズイぞ！須川は近くに居る西村先生に気付いていない！

「教育的指導！」

クソツ！間に合え！

オレはとつさに須川と西村先生の拳の間に割つて入つた……

「グウウ！」

なんて威力だよ！防御した右腕が痺れてしばらく使い物にならない

「烏丸！お前大丈夫か！？」

「ああ、何とかな……。けど利き腕が痺れてしばらくは使い物にならない……」

『て、鉄人だと！』『バカな！奴を生身で突破しないとイケないのか？』

『そんなの無理に決まつてるだろう！』

西村先生の登場に部隊は浮足立っている。ここまで来たら立て直しはオレや吉井じゃ無理だ……。

「吉井やはり貴様は危険人物だったな。今日は念入りに指導してやる。そして烏丸。お前が今日も来るとは思つてなかつたぞ。だんだん吉井と坂本の影響を受けてきたようだ。考え方をしっかりと矯正してやる。」

「褒め言葉として受け取つておきます。」

状況は絶望的。こうなれば最後の手段だ。

「須川……………」

「ああ、烏丸。オレも恐らく同じことを考えてた……………」

「ああ、悪いな。」

恐らくこれが現時点で最善の策だ……。

「全員聞け！これよりオレ達は吉井の撤退を全力で援護する！現時点で西村先生に勝てる可能性があるのは【観察処分者】の吉井の召喚獣だけだ！何としても、どんな手段を使っても吉井を護り抜け！」

『『『おおおおおおおおお！！』』』
「そんな！無理だよ！皆を見捨てて逃げるなんて僕には出来ない！」

そんな顔するなよ、吉井。犠牲になる奴が決まった。それだけの事なんだ……。

「須川！烏丸！指導の邪魔をするな！」

「そうはいかない！吉井はオレ達の希望なんだ！オレ達には欠かせないエースなんだ！だから頼む！生き延びてくれ！」

「須川の言う通りだ！今、オレ達が全滅しても吉井が生き残れるのならそれはオレ達の勝ちだ！だから吉井！オレ達に勝利を！……全員召喚を開始しろ！教師の召喚獣をここから一步も通すな！！」

『『『了解！試験召喚！！！！』』』

「クツ！皆、ごめん！！必ず！必ず鉄人を倒すから！！」

生き延びろよ、吉井……。

「逃がすか！待て、吉井！」

「行かせませんよ、西村先生！！」

「烏丸、片腕で何が出来る！？」

「あなた相手の時間稼ぎ位なら出来るつもりですよ。おっと他の先生方も動かないください。オレの召喚獣が【自爆】を使ってここに居る全員を道連れにしますよ。」

「ヒ口、あなた……」

「卑怯だと思うか、優子？けどなここは何としても譲れないんだ！オレは吉井を生かす為には手段は選ばない。そうじゃなきゃここにいる全員に示しが付かない！」

「ほう？ならお前を倒して先に進むとしよう……」

「やってみてくださいよ。オレはしぶといですよ。」

そう言つてオレと西村先生はお互いの間合いを探り始めた…
集中しろ。相手の間合いはオレより広い……。

なら、懐に入り相手を翻弄するやり方が最善だ。

そのためには

「フツ!!!」

先手を取る!

そう考えオレは西村先生の懐に一気に飛び込んだ。

西村先生はそれを読んでいたようで拳を振りおろす。

それを体を捻り何とか紙一重でよけ何発か牽制の拳と蹴りを放つがそれをすべて受け流されてしまいオレは慌ててバックステップをして間合いを取つた……。

「ほう? 昨日とは随分と違うな……。」

「昨日はやる気がまるでありませんでしたからね。」

「なら何故、今日はやる気になっている?」

「それは男の子の秘密ですよっと!!!」

そう言つてオレは再び西村先生の懐に可能な限り体制を低く保ち突つ込んで行つた。

これなら拳を当てにくいだろう。

「低く来たか! だがまだ甘い!!!」

そう言つて西村先生は蹴りを繰り出した。

当たつたら一撃でアウト……

だけどその分隙が大きい!!! タイミングを合わせる!!! そして

「アアツ!!!」

突つ込め!!!

蹴りに向かつて踏み込み、足の下を前転をして、潜り向けた。

これで背後を獲つた!

「喰らええええ!!!」

渾身の拳を放ち確かな手ごたえを感じた。左腕だから決定打にはならなくても少しはダメージを与えられたはずだ……。

「ふふふふ、なかなかやるようだがまだまだ甘い……。」

「なっ！？ば、バカな！！確かに手ごたえがあつたのに！！」

「確かに普通なら倒されていただろう。だがオレにはお前の攻撃は効かん！！」

オレの放った拳は西村先生の鎧の様な筋肉のせいで余りダメージを与えられなかった……。

「そ、そんな出鱈目な！」

「フン、確かにお前は強い。だが構えを見てる限りお前の本当のスタイルは剣術だろう？それゆえに徒手空拳の格闘技術は中途半端だ！そんな物でオレを倒せると思うなよ！」

当たりだ。確かにオレは素手の格闘戦より剣や獲物を使った方が実力を発揮する。

しかし素手の相手に獲物を持ち出すのはオレの信条に大きく反する。

「まだだ！まだ負けた訳じゃない！」

そう言つてもう一度西村先生に突っ込んだが

「踏み込みが浅いぞ！烏丸！！」

あっけなく捕まえられて投げられてしまった……。

「グアツ！！」

受け身もまともに取れずダメージが体にきてオレは意識を手放してしまつた。

意識を手放す瞬間に聞こえた優子の心配するような声がやけに遠く感じた……。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

合宿2日目の日誌を書きなさい

昨日は7回死にかけた……。

教師のコメント

何故勉強合宿で死にかけるのか非常に気になりますが、聞けば猛烈に色々後悔しそうなので辞めておきます……。

第37話 万が一の保険は掛けておくべきだ

オレが西村先生に気絶させられて一夜明けた。

オレは自分に割り当てられた部屋で眼を覚ました。

誰かがオレを布団に運んでくれたんだろう。後でそいつに礼を言うておこう。

そう考えながら布団から起き上がるうとするところにはよく見知った顔がオレの腕を枕にしながら眠っていた……。

「ゆ、優子!? …… じゃないな。木下か?」

ああ、ビックリした……。

「おい、木下。起きろ……。自分の布団に戻れ。」

他の奴を起こさない様に小声で木下を起こした。

「ふあああつ。なんじゃ、ヒロ? …… おお、済まぬの。夜中に布団を間違えた様じゃ。」

「気にしなさんな。それよりあの後どうなったんだ?」

「うむ、結論から言うると失敗じゃ。明久は何とか逃げ延びた様じゃが、その後指導室に呼び出されてすっかりと指導を受けておつた。」

よくよく考えれば当たり前か……。あの時は気付いてなかったけど吉井は面が割れてるんだもんな……。

「それでオレを布団まで運んでくれたのは誰だ?」

「うむ、雄二と明久が2人で運んでおつたのじゃ。」

「そうか。後で礼を言うておかなくちゃな。」

「それと姉上にも謝っておくのじゃぞ。」

「優子に? 覗きの事をか?」

「違うのじゃ。姉上はヒロが気絶している間ずっと心配そうにヒロに付いていたのじゃ。昨日もヒロを部屋に運んだあとなかなかヒロの傍を離れようとしなかったのじゃ。」

「……そうか。それは確かに謝っておかないといけないな。」

ちよっと……いや、かなり嬉しい。

「前から思っていたのじゃが、ヒロは姉上の事をどう思っているのじゃ？」

「え？え〜っと、答えないとダメか？」

「答えないとダメじゃ。」

「参ったな。まあ、木下になら言っても大丈夫か。」

「……ふう、分かったよ。オレは」

「雄二、起きろ！コラア！！」

「グフウ！！」

「なんだ？なにがあつた？何故吉井は怒ってるんだ？」

「なんじゃ、雄二はまた自分の布団から離れた場所で寝ておつたのかの？」

「秀吉『また』ってどういう事？」

「いや、別に大したことはないのじゃが……。雄二は随分寝相が悪いようでのう明け方にはワシの布団の中に入って　ってやめるのじゃ、明久！花瓶なんかを振り回してどうするつもりじゃ！？」

「殴る！こいつの耳からドス黒い血が流れるまで殴り続ける！」

「落ち着け、吉井！殿中でごさる！！」

「離して！せめて一太刀！武士の情けで一太刀だけでも！！」

「落ち着くのじゃ、明久！そう大した事では無いじやろう！ワシもさつきヒロの布団に紛れ込んでいたのじゃから！」

「ヒロ！君も敵か！？」

「うお！何をトチ狂っていやがる！花瓶を下ろせ！危ないだろ！」

ガチャ

「オイ！お前ら！起床時間だ　ぞ……？」

「死ぬ！雄二！ヒロ！死んで詫びるんだ！！」

「何だ！？朝から明久がキまつてるぞ！？持病か！？」

「待て待て待て！何でオレまで標的になつてるんだ！？や、やめっ

うおっ！危ねえ！」

「ええい！落ち着くのじゃ！明久！西村先生済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」

「……………!!」(コクコク)

「……………お前らは朝からの何をやっているんだ」

西村先生の制止もあってどうにか吉井の暴走は止まった……
何で朝っぱらから殺されかけなければならぬんだ……。

……………

朝の騒動が一段落してオレ達は朝食を摂っていた。

「雄二。そう言えば昨夜妙な事を言われたよ。」

「ん？なんだ？」

「『脱衣所にまだ見つからないカメラが一台残ってる』って」

「なんだと？」

「怪しいよね？やっぱり彼女が犯人じゃないかな？」

「お前まだ工藤を疑っていたのか？」

「そうじゃぞ、明久。そうとは限らんじやる。犯人ならわざわざ疑われるような事を言うとは思えん。」

「そう言う事だ。それを逆手に取るって事も考えられるけど、それを考えると切りがないから工藤が犯人って先入観はとりあえず置いておこう。犯人を確定するには」

「……………確認するしかない」

「やっぱりそれしかないか……」

「早く犯人を見つけたいって言う気持ちは分からなくもないが焦るな。チャンスは一度。しくじればお前は変態のレッテルを、坂本は霧島と結婚って言う事になる。ここぞという瞬間を待て。千載一遇のチャンスは必ず来る。」

「そうだ、明久。それに工藤の情報はありがたいぞ。」

「え？カメラがまだ残っている事が？」

「ああ、それを工藤しか知らないってことは女子の着替えが盗撮されている可能性が高い。ならそれを手に入れば入浴していない女子の特定が出来るからな。」

「……………隠し場所なら5秒で見つける自信がある」
うん、なんて不穏当な会話なんだ……………。

「けどそんなカメラが本当にあるかって言うのも怪しいよ。」

「いや、最初にカメラが脱衣所で見つかった方がおかしいんだ。あれだけ盗撮や盗聴に長けた犯人なら素人に見つけられるなんて考えにくい。そうなる」と

「……………二段構え」

「用意周到じゃな。」

「よくもまあ……………。こんなアホな事にここまで頭を使えるものだよ、全く迷惑な奴だ……………。」

「でもそれならお風呂の時間を避けてカメラを取りにいけば解決だね。」

「……………それは無理。時間外だと脱衣所は嚴重に施錠されている。」

「なら、女子が先生に事情を話して協力してもらって手はどうだ？」

「ヒロ、初日の事を忘れたか？」

「……………そうだった。この方法は無理だな」

見つけたとしてもオレ達が犯人扱いされるに決まっているか……………。実際覗きに参加している以上言い訳は出来ない。

「諦めて今まで通りの方法を貫けってことか。」

「それじゃあ、昨日の敗因を踏まえて作戦を立て直すぞ。」

……………

昨日の敗因は防衛隊に女子の大半が回っていた事だ。それならこちらの戦力を増やすと言う事でABCクラスも覗きに巻き込んでしまおうと言う事になった。

「作戦は分かったけどこの作戦いつもの雄二らしくない気がするんだけど……………」

「ほう？明久もだいぶ頭が回る様になつたじゃないか。その通りだ。この作戦にはもう一つ狙いがある。それはオレ達の保身だ。」

「僕らの身を守る？何から？」

「今のところ未遂に終わつてるから大した問題になつていないが覗きは立派な犯罪だ。女子風呂に至つたとしても真犯人が特定できなければオレ達は処分を受ける事になる。そこで人数を増やして特定を難しくする。向こうだつて戦いながら全員の顔を覚えるのは無理だからな。」

なるほど。木を隠すなら森の中つて奴か……

中途半端に面が割れている奴ら（つまりオレ達Fクラス）だけを処分したら出来のいい生徒だけ鼻屑しているとパッシングがさらに強くなるだろう。そんな真似をあのバアサンがするはずが無い。

「流石雄二！汚い事を考えさせたら右に出る物はいないね！」

「知略に富んでいると言え！」

「となるとまずはAクラスの説得か？」

「そつだ。Aクラスなら久保を説得するのがいい。と言う訳で明久行つて来い。」

「うむ、明久なら適任じゃろう。」

「………任せた」

「なんで吉井なんだ？交渉だつたら坂本が一番だと思つんだけど……」

「……」

「………」

「な、なんだか嫌な感じがするんだけど本当に大丈夫なの？」

「そ、そうじゃな。久保は絶対にお前に悪意を抱いていないと断言できる。」

「………彼に悪気はない。」

「何で2人ともそんな奥歯に物が挟まつたような物言いをするの？確かに昨日の様子を見る限りでは久保は常識人に見える。吉井に酷い事をするとは考えにくい……」

「大丈夫だ。この中ではお前が一番久保に好かれている。自信を持

て！」

「え？う、うん。」

「けどまあいざという時はこれを使え」

そう言つて坂本は吉井に強力そうなスタンガンを手渡した。

「そして万が一の保険の為にヒロ、明久の護衛に付けてやってくれ。」

「あ、ああ。それは構わないけど少し警戒しすぎじゃないか？昨日見た限りでは久保は常識人みたいだったぞ？」

「ヒロ、世の中には知らない方が幸せつて事もあるんだ……。」

「???何だか良く分からないけど了解した。」

知らなければいい事つてなんなんだろう？

そう考えながらオレと吉井は久保の所へと向かった。

.....

「久保君、ちよつといいかな？」

「吉井君に……烏丸君か……。どうしたんだい？僕によつなんて珍しいじゃないか。」

「オレの事は気にするな。久保に用があるのは吉井一人だ。」

「そうかい。それじゃあ、吉井君座りなよ。」

そう言つて久保は自分の一人用の椅子にスペースを作つた。

やっぱり昨日思つた通りこいつ天然なんじゃないだろうか？

向かいに空いている椅子があるのに……

「それじゃあ、こつちの空いている椅子を使わせて貰うよ」

「そうか。君がそうしたいと言つのならそれでもいいが……」

「ところでお願いがあるんだけど」

「引き受けよう！！」

「つて速っ！！」

こいつは絶対天然だ。せめて相談の内容くらい聞こうよ、久保……

「いや、すまない。少し冷静さを失つていた。話を聞こうか。」

「うん、実は 女子風呂の覗きに力を貸してほしいんだ。」

「断る！」

まあ、普通はそうだよな……

「女子風呂を覗く？君達はそんな事を本気で言っているのかい？」

「うっ！こ、これには訳があつて……」

「見損なつたよ、吉井君。人と人との集まりにはルールがあり、それを守ることで社会は形成される。だから人として間違つた行動に出ようとすると君は社会に不適合な人間だと言える。もうすぐ社会に出ようとしようのにそんなことでもいいのかい？そもそも入浴中の女子の裸を見ようとすると考え自体が不潔だよ。」

徹底して正論だ。反論の余地が無い。けどなんだろう？久保に違和感の様な物を感じるのは……。

「邪魔してゴメン……。それじゃあボク達はここで……」

「人として間違つた事か……」

去り際に聞こえた久保の言葉がやけに気になつた……。

そう言えばあいつ確か調べたリストの中に名前があつたような……？
少し調べてみるか……。

……

「ヒロ、ここで何してるの？」

坂本達と少し離れた所でリストに眼を通してしていると優子がこつちに来た。

「……ちよつとな」

「また悪巧み？全く覗きなんてやらないって言ってたくせに結局覗きをやつてるじゃない。何考えてるのよ、一体……」

「まあ、訳ありでな……。誓つて下心による行動じゃない。」

「本当に？」

「ああ、それと優子。少しマークしておいてほしい奴らがいるんだ。」

「よくよく考えたらあいつが犯人だとしたら一応の辻褄が合う。」

吉井の身の回りの女性に近づいて欲しくない理由も納得できる。容疑者が1人になれば後は特定するためには行動を洗えばいい。

「え？何？この子が何したの？」

「静かに……。理由は”まだ”言えないが協力してほしい。」

「まだ？」

「そう、『まだ』だ……」

「……重要な事なのね。分かった。あの人を見張ればいいのね？」

「ああ、特に合宿最終日には島田、姫路に協力を仰いで一緒に片時も目を離さずに見張っておいてほしい」

「……わかった。」

「頼んだ……。っと忘れる所だった。昨日は心配かけてごめんな。」

「……いいよ、別に。けどあんな無茶はあまりしないでね。」

「……善処する。」

「無茶する気満々じゃない。」

そんなこんなで協力を取り付ける事が出来た。これであいつが盗撮犯だったら解決できるはずだ。

さあ、覚悟しろ。変態め！オレを敵に回した事後悔させてやる。

そう考えてオレは坂本達のいるテーブルに戻った。

.....

勉強タイムが終わり、夜になって恒例の作戦会議を行っていた。

「結局協力してくれたのはD・Eクラスだけじゃったな」

「仕方ないだろう。Bクラスは代表が代表だけに纏まりが無いし、

Cクラスの代表はあの小山だから男連中は尻込みしているしな。」

「けどD・Eクラスが協力してくれただけでも昨日より状況は良くなってるよ。」

「まあ、そうじゃな。」

女子の方は入浴もあるし最大で半数しか出て

来れんしもの」

「けど、ここまで騒ぎを大きくして入浴が中止にならないかな？」

オレとしては作戦の為には騒ぎが大きくなった方が都合がいいけど

な……

「それは無いだろう。教師側にもプライドがある。『覗きが阻止できないかもしれないから入浴を控えて下さい』なんて言えると思うか？」

「ああ、そつか。」

「あと、これは憶測だが教師側はこの騒ぎを好ましく思っている可能性がある」

「このバカ騒ぎをか？何でだ？」

「どう考えても覗きなんてバカな真似を好ましく思う理由なんて考え付かない。」

「あくまでこの合宿の目的は『生徒達の学習意識の向上』だからな。召喚獣を使って戦う以上勉強せざる得ない。防衛に回る女子にも同じ事が言える」

「それでいいのか、文月学園……。もし突破されてしまったら学園の評判が落ちるぞ……。」

「まあ、オレ達にとって好都合ではあるけどさ……。」

「よし、時間だ。作戦を開始しよう。」

「そうだね。他のクラスも待つてるかもしれないし」

D・E・Fの連合で人数も100人近くになった。昨日のように簡単に

「みんな大変だ！」

「どうしたんだ、須川？血相を変えて」

「やられた！敵は大食堂で待ち伏せをしていたんだ！今は戦力が分断されて散り散りになっている！」

「なんだと！？」

「こつちの情報が漏れたのか！？」

「……情報が漏れる事はない」

「それもそうか。ムツツリー二がそんなへマをするはずが無い。」

「となるとこつちの考えを読まれたか！？」

坂本の考えを読める奴なんて向こうには1人しかいない！

「霧島翔子じゃな。流石は学年主席は伊達ではないな」

「のんきに言ってる場合か！救出に向かおう！」

「ああ！出るぞー！！」

「「「了解！」「」」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『観念しなさい！スケベ共！』 『覗きなんてさせないからね！』

『クソツ！何でこんな所に女子が！』 『知るか！とにかく応戦しろ！』

何とか持ちこたえてはいるものの点数差は圧倒的だった。

「皆落ち着け！召喚獣はオレ達に触る事が出来ない！鉄人がいない今なら無視して突っ切る事が出来る！」

そう言つて須川は集団に突っ込んで行つた。

「いけない！須川君！気をつけなければいけないのは鉄人だけじゃないんだよ！」

「Fクラスの須川亮君ですね？特別指導室に連行させて貰います。試獣召喚！」

女子の陰から布施先生が出てきて須川を捕まえ、連行して行つた。マズイな。この密集地帯じゃ自爆を使う事が出来ない。

「全員聞け！この地帯を一点集中で突破する！オレの後に続くんだ！」

「雄二！ここは一番敵の層が厚いよ！」

「層が厚いからこそだ！薄い方を突破するとその先に罠が仕掛けられている可能性が高い！ここは苦しくても一番苦しい方向へ進むんだ！」

『坂本に続け！先生を迂回してこの場を逃れるんだ！』

『一気に行くぞ！』

そう言つて皆同じ方向に向かって駆け出した。

すると何故か道を譲るかのように女子の集団が2つに割れた。

なんだ？アツサリいきすぎている？

そう思ったが今は考えている場合じゃない！

そうしてオレ達は学習室の前まで走り抜けた。そこには

「・・・雄二待ってた。浮気は許さない。それを体に教えてあげる。」

「

「クツ！翔子、やってくれたな……」

「アキ、昼間はよくもやってくれたわね。おかげでいらぬ恥をか
いちゃったじゃない！」

「明久君、そんなに見たいならどうして相談してくれなかったんで
すか？」

「姫路さんと美波か……」

吉井、お前島田に何やったんだ？随分とご立腹だぞ……。

そして姫路、吉井が相談覗きの相談を女子にするはずないだろ……。

「あなた達には社会のルールについてじっくりと指導する必要があ
りそうですね。」

「高橋先生か。これはちょっと厳しいな……。」

「雄二、ここは撤退を」

「ごめんね。そう言う訳にはいかないんだよね」

「……………工藤愛子……」

「ヤッホー！ムツツリー二君」

「ヒ口、秀吉！覚悟しなさい！」

「あ、姉上！？」

「優子までいるのか……。」

やけに追撃がアッサリしていたのはこう言う事か…

ははっ！前門の虎、後門の狼ってか？

撤退が出来ない以上進むしかないよな……

「皆！最後まであきらめずに戦うんだ！試獣^{サモン}召喚……」

そう言つて吉井は召喚獣を召喚した。

「先生、アキの召喚獣は見かけよりずっと強いですから」

「大丈夫です。島田さん、下がっててください。」

「余裕のつもりですか？僕だって召喚獣の扱いには少々覚えがある。」

「甘く見ないでください。」

「吉井君、あなたには失望しました。少しは見所のある子だと思っ
ていたのですが」

吉井の召喚獣が木刀を正眼に構え、一気に突っ込んだ。

「獲った！誰もがそう思ったが次の瞬間鞭で吹き飛ばされていたのは
吉井の召喚獣だった。」

「痛ッたあああああ！これはすごく痛い！さすが拷問用の武器
だよ！鉄人とはまた違う痛みがあああ！！！」

学年主任

Fクラス

高橋洋子

VS

吉井明久

総合科目 7791点

902点

「あの明久を一撃で……。噂に違わぬ才女だな……」

「坂本、オレが召喚獣で高橋先生に特攻をかける。オレの能力なら
島田と姫路ごと排除できる。その際にお前達は先に進め。」

「やれるのか？」

「分からない。けど打てる手はすべて打っておこう。」

「分かった。任せたぞ。」

「任された……。高橋先生、次はオレが相手になります。」

「烏丸君ですか……。あなたまで参加するとは思っていませんでした。
普段ならこの暴走を止める側に付くはずなのにどういう風の吹
きまわしですか？」

「うーん、なんと言いますか……。最初は成り行きだったんですけどね
どね……。今は『仲間の誠意に応える為』って所ですかね。」

「誠意ですか……。それでこんな軽拳に出たのですか？」

「軽蔑してくれて構いませんよ。とにかくオレはこの計画は自分が
泥を被る価値がある物だと考えています。だからそこを通して貰い
ます！試獣召喚サモン！！！」

学年主任

Fクラス

高橋洋子 VS 烏丸大貴
 総合科目 7791点 3632点

相手の点数はオレの約2倍！けど取り付いて【自爆】すればこの点数なら前の敵は壊滅状態に追いやることだって出来るはずだ！

「行つけええええええ！」

「その動きはお見通しです！！」

動きが読まれていてオレの召喚獣は射程まであと3歩ほどの距離で消滅した……。

「クソツ……。ダメか……。」

「あなたの召喚獣の能力は発動したら私の召喚獣でも消し飛びますからね……。【自爆】を使う前に無力化させて貰います。」

そうしてオレは高橋先生の召喚獣に捕まり縛りあげられた。

「ヒロの【自爆】まで効かないのか！？こつなつたからには各自の判断で行動しろ！！」

『『『了解！！』『』』

事実上の撤退命令が下された。

『『『……かなりシユールな光景だ。（全員土下座）』』』

「吉井君と坂本君は彼らのように土下座はしないのですね。指揮官としての矜持と言うものですか？」

「違うな、高橋女史。オレ達には分かっているのさ。」

「雄二の言う通りです。僕らには分かっているんです。そんな事をする必要が無い事が」

「まさか助けが来るとでも……？」

「違いますよ。高橋先生こいつらが土下座をしない訳はそんな物じゃないんですよ」

「どういう事ですか、烏丸君？」

「こいつらは土下座をしない訳は」

「……雄二、浮気は許さないと言った。」

「明久君？覗きは立派な犯罪なんですよ？」

「アキには昼間のお礼をたっぷりとしないとね」

「ヒロ、秀吉……。覚悟しなさい。」

「土下座しても許してもらえそうにないからですよ……。その後優子によるサブミッションのフルコースを喰らった……。流石に今回ばかりは死ぬかと思った……。」

第38話 悪巧みは慎重に

明久SIDE

「まさか、高橋先生まで参戦してくるとはな」

「あの人本当に反則的なまでの強さだったよ……」

「まさか【自爆】を使う前に沈められるとは……」

勝負云々の次元では無かった。あの人にタイムマンで勝てる人なんてまずいないだろう。

思い出すと全身が痛くなってきた……。

当分姫路さんと美波の笑顔が夢に出てきそうだ。もちろん悪夢で……

「じゃが、どうする？このままじゃお主らは脅迫犯の影に脅える事になり、且つ覗き犯と言う不名誉な称号を得る事になるぞい」

「諦めるつもりは毛頭ない。残るチャンスは明日だけが逆にいえばまだ明日が残っている訳だ。向こうの戦力はもう頭打ちだ。アレ以上は戦力を増やせない。口惜しい事に今日は負けたが相手の戦力を知る事が出来た。これは大きいぞ。」

「そうだね！戦力差があるのはいつもの事だし逆境をひっくり返すのが僕達の真骨頂だよな！」

「……このままじゃ引き返せない」

「ああ、真犯人に眼に見せてやる！」

「そうじゃ！こんな事はFクラスに入ってから慣れっこじゃ！」

「雄二、それで今度はどんな作戦を考えているの？」

「正面突破だ！」

「……もうダメだ。」

「そんな絶望した顔をするな。正面突破のスタンスはそのままだがその分事前の準備に時間をかける。」

「持って回った言い方するなよ。つまり向こうが戦力を増やせない以上こっちの仲間を増やして防衛隊を叩くって事だろ？」

「そう言う事だ。向こうの布陣は教師を中心とした防御布陣だが色々と弱点がある。それがなんだか分かるか？」

「微塵も分からないね！」

「チヨキの正しい使い方を教えてやる。」

「ぎゃあああ！眼がつ！眼がああつ！！！」

「吉井！しつかりしろ！傷は浅いぞ！！！」

なんて奴だ……。雄二め、覚えてろ……。！！

.....

要するに、教師が呼び出す召喚フィールドには《干涉》と言う物がある。

これは一定範囲内でそれぞれで別の教師が召喚フィールドを展開すると科目同士が打ち消し合って召喚獣が消えてしまう。つまり教師は開けた場所でしか複数展開する事が出来ないと言う事らしい。

「教師側としたら避けたい事態だろうな。召喚獣がいなくなれば男子高校生を止める術なんてないんだからな。」

ヒロが雄二の作戦を分かりやすく噛み砕いて僕に説明してくれた。

「ムツツリー二が調べてくれた今日の配置図を総合して考えると明日の布陣はこんなところだろう。」

「あれ？今日とは布陣が違うんだね。」

「そうだな。けど明日は恐らく総力戦になる。それならば必ず通らなければいけない場所に主力を配置するのは当然だと思うぞ。」

「その通りだ。その中でも鉄人、高橋先生、大島先生の存在はかなり厄介だ。オレ達の勝利のためには明久もしくはヒロを無傷で鉄人の前に連れて行く事だ」

「僕の召喚獣は人に触れられる特別製だから分かるけど、ヒロまで？」

「ああ、お前が二日目に鉄人から逃れるときに単身で足止め出来たのはヒロだけだ。しかもあの時は片腕が使えない状態だったし、両腕使える状態ならかなりいいとこまで行けるはずだ。」

「待った、坂本。確かに”足止め”は出来るけど徒手空拳で勝つ事は出来ない。」

「そうなの？」

「ああ、西村先生の強さは家のジジイに限りなく近い。と言う訳で西村先生にオレが勝利する事は現時点では不可能だ」

「じゃが、今まで無理だった事でも今回頑張れば」

「今まで一度も出来なかった事が今回に限って出来るなんてそんな都合のいい事は起こらない！だからこそ確実に勝てるように策を巡らせなければならぬんだ。」

「……」

ヒロの現実的すぎる意見に皆黙ってしまった。

「そうだな。鉄人の突破の策はとりあえず後に回すとして現状の戦力では大島先生を突破して高橋先生にたどり着くことさえ出来ない。だからこそA・B・Cクラスの協力が要だ。」

「その事だけど、久保の説得はちよつとオレに任せてくれないか？」「やれるのか？」

「分からない。考えはあるが、うまくいくかは正直五分五分って所だ。だけど試す価値はあると思う。」

「……そうか、お前がそこまで言うのなら任せる。」

ヒロの考えって何だろう？なんだか寒気が止まらない。

「残るB・Cクラスはどうするの？」

「それを何とかするのがオレ達の仕事だ。」

そう言つて雄二は備え付けてあつた浴衣を掲げた。

「これを秀吉が着てムツツリー二に写真を撮つて貰う。それをA・B・Cクラスに回して野郎共の劣情を煽る。」

スパン！

「坂本、木下は男だつて」

出た！久しぶりの【何処からともなくハリセン取り出し】だ！どこからハリセンを取り出ししてるんだらう？ヒロに聞いても『企業秘密だ』って言つて教えてくれないし……

「雄二の作戦っていつもそんな感じだよね……。まあでもやる価値はあるよね。と言う訳で……はい、秀吉。」

「……またワシが着るのかのう……」

「安心しろ。秀吉だけじゃない。姫路と島田にも着て貰う」

「ワシ一人が着ると言うのが不満とかそういう訳ではないのじゃが……」

つまり不満は無い訳だ。

「明久は姫路と島田に連絡を取ってくれ。ムツツリーニはカメラの準備を頼む。ヒロは木下姉に連絡を」

「やめろ！木下が殺されるぞ……」

「????何でだ？」

「優子は木下が女装するのを快く思っていない。女性用の浴衣を着ている所を見たら木下の命は……」

「そ、そうじゃな……」

ガクガクブルブル……

そう言っただけでヒロと秀吉は顔を真っ青にして震えだした……

うん、見なかった事にしよう……

気を取り直して僕らは作戦を開始した。

.....

TO姫路さん

【ちよつと話があるから僕らの部屋まで来てくれないかな？】

【分かりました。お菓子とか持って遊びに行きますね。】

写真云々抜きにしても嬉しい返事だ。今度何かお礼をしないといけないな。

.....

TO美波

【ちよつと話があるから僕らの部屋まで来てくれないかな？】

【別にいいけどこんな時間にどうしたの？】

ろうし『振った相手とは気まずい』だろうから部屋に来てくれない
だろう。作戦失敗の拳句、予期せぬ失恋！今日は厄日か！？
とにかく訂正のメールを送らないと！！

「どうした、明久？」

「いろいろ大変な事になっちゃったんだ！今は邪魔しないで！！」

「大変な事？それは　つとと！！」

ツルン（雄二がバナナの皮で滑る音）

ドタ！（雄二が僕を巻き込んで倒れる音）

バキツ！（雄二が僕の携帯を踏みつぶす音）

「明久、大変なこととは何だ？」

「…… たった今キサマが作り出した状況だ！！」

「ん？これはお前の携帯か？すまん。今度修理して返す。」

今の僕には誰が何と言おうがコイツをシバキ倒す権利があるだろう。

「いや！今はそんな事どうでもいいから雄二の携帯を僕に貸して！

！」

「あ、ああ。別に構わんが……」

いかにも雄二が好みそうなシンプルな携帯電話を受け取り、アドレ

ス帳を開く。

.....

坂本雄二アドレス帳登録1件・・・霧島翔子

.....

「む。翔子の奴、また勝手にオレの携帯を弄りやがったな。メカ音

痴のくせに……」

「.....」

僕の中で何かが終わってしまった。

「明久、そんな深刻そうな顔してどうしたんだ？まるで島田に告白

ともとれるようなメールを間違えて送ってしまったて弁明しようとした所でオレに携帯電話を壊されて何もできなくなってしまった。って言う風な顔をしているぞ？」

「はははは、まさか……」

「そうだよな。さすがにそうだったら携帯電話を壊したオレが極悪人みたいだもんな？」

「全くだよ。あははははは！」

カチカチカチカチ……。送信つと！

ＴＯ霧島翔子

【もう一度きちんとプロポーズをしたい。浴衣を着てオレの部屋に来てくれ】

「ん？オレの携帯で誰の送信して　ゴフツ！キ、キサマなんて事してくれたんだ！」

「黙れ！貴様も僕と同じように色々な物を失え！どりやあああ！」

「おわあ！オレの携帯をお茶の中に突っ込みやがったな！これじゃあ壊れて弁明も出来ないじゃねえか！なんてことしやがる！クス野郎！！」

「そう！それだよ！今僕が雄二に抱いてる気持ちだよ！」

「何を訳の分らん事を！と、とにかく翔子の部屋に行って誤解を解かないと　」

ガラッ！（雄二が廊下へと続くドアを開ける音）

ドカッ！（雄二が鉄人に殴り飛ばされる音）

グシャベキグチャ！！（雄二がテーブルを巻き込んで壁に激突する音）

「部屋を出るな。」

「了解です。」

ピクリとも動かない雄二の代わりに僕が返事をした。

「ちなみに秀吉とムツツリーニはまだ携帯を買ってないの？」

「うむ、特に必要ではないからのう。」

「……………いざという時になりだすと困る。」

最近の高校生としては珍しいと思う。片方の理由は特に……

「あれ？ヒロは何処行つたの？」

「トイレに行つておるぞ。」

「ツイてだ。ヒロも巻き込んでしまえ……。だって僕達は”友達”だものね……。」

辛い事は分かち合わないといけない……。

ガチャ！

「どうしたんだ、吉井？そんな思いつめた顔して」

「あははは！ちよつとね。ところでヒロちよつと携帯を貸してくれないかな？」

「ん？ああ、いいぞ。ほら」

そう言つてヒロは僕に携帯を渡してくれた。

カチカチカチカチ・・・送信つと！

TO木下優子

【優子に大事な話があるんだ。悪いんだけど浴衣を着てオレの部屋に来て欲しい。】

「何だつたんだ？いつたい・・・つてお前！何やつてるんだ!？」

「ふふふふふ！ヒロ！悪いけどキミも道連れだよ！！セイツ！！」
グシャー！！

「ああ！テメエ！何をするんだ！これじゃあ壊れて使い物にならないじゃないか!!！」

その後僕はヒロにボコボコにされてしまった事は言うまでもないだろう……。

.....

HIRO SIDE

「……で、なんでこんな事したんだ？」

「はひ、ひふは（はい、実は）・・・カクカクジカジカドツタンバツタン、ジユゲムジユゲムゴコウノスリキレカイジャリスイギョ・・・つて言う訳なんだ。」

「……………ハアアアア!!」

それで坂本が気絶してるのか……。全く次から次へと騒動を起こす奴だな……。

「どうしたの、ヒロ? 大きなため息なんか付いて」

「あのさ、オレの携帯で島田に連絡を取って誤解を解くって方法があっただろうに……」

「あ!!」

気付いてなかったんかい!!

「……………とにかく合宿明けにオレの携帯を弁償してくれるよな?」

「そ、そんな!! 今月の僕の食費が!! ヒロ! 君は鬼なのか!!」

「……………お前自業自得って言葉を知ってるか?」

「ところでこの部屋を片付けないとまずいのではないかのう?」

「そうだね。とりあえず片付けて秀吉の撮影を始めようか」

そうしてオレ達は撮影の為に部屋を片付けに入った。

片付けている最中に起きた坂本と吉井がまたケンカをしていたがいつものことだったしそのまま放置しておいた……。

第39話 夜の会合

コンコン

控えめなノックの後に姫路が部屋に入ってきた

「あ、姫路さん。いらっしやい。廊下で鉄人に絡まれなかった？」

「西村先生はいましたけどお菓子をあげたら通してくれました。」

そう言つて姫路は手作りと思われるお菓子を見せた。

「さらば鉄人……。安らかに眠れ。」

西村先生のご冥福をお祈りします

あの危険物は西村先生にも有効なのか……。役に立つかもしれないから覚えておこう。

「ところで明久君。どうして浴衣なのですか？」

「これ？部屋にあつたのを着てみたんだけど似合うかな？」

「はい！とつても似合ってます！特に綺麗な肌や細かい鎖骨が色っぽくて！」

……。それは男の子を褒めるとき言葉として正しいのだろうか？

「姫路、良く来てくれた」

「こんばんは、坂本君。お邪魔していますね。」

「早速だがプレゼントだ。」

「浴衣ですか？ありがとうございます。ところで話つて……。？」

「話と言つか、姫路さんにお願ひがあるんだ。その浴衣を着た姫路さんの写真を撮らせてほしいんだ！」

「え……。？」

そう言つて姫路は眼をパチクリさせた。

つて言つか覗きの上にこんなこと頼んだら確実に変態扱いなんじゃないか？

「あゝ、えゝ、そのなんて言つか……。？」

吉井も自分の発言のまずさに気付いたようで慌ててうまい言葉を探しているようだが一向に見つからない様だ。

仕方ない、フォローしてやろう。普段吉井は人の為に貧乏くじを引いてばかりだし、たまにはいい事があってもいいよな。

「姫路、吉井が言いたいのは『姫路と一緒にぜひ写真を撮りたい』ってことだ。」

「え！？そんなんですか、明久君！？」

「え！？あ、そうそう。そう言いたかつたんだ。」

「よし。これで吉井は大好きな姫路と2人で写真を撮る事が出来る。いい事した後って気分がいいよな！こう、晴々した気持ちって言うかさ」

「……………えつと……………その……………。明久君と一緒にならいいですよ。」

「ありがとう！僕も秀吉も写るから！」

……………せつかくのオレの心遣いが台無しだよ。何でこいつは肝心な所でこんなに鈍いんだ？

姫路、そんなに落ち込まないでくれ。オレまで落ち込んでくる……………。

「まあ、明久君だから仕方ないですよね……………。それじゃ、ちよつと着替えてきます。」

あ、そうだ。忘れる所だった。

「吉井、写真を見せて回る事を姫路に教えておかなくちゃ拙いんじゃないか？」

「あ、それもそうだね。……………姫路さんちよつと待って。」

「あ、はい」

「実は撮る写真なんだけどさ、友達とかに見せてもいいかな？」

「え？それは少し恥ずかしいです……………。」

「姫路、オレからも頼む。吉井が会長を務める【姫路瑞希の素晴らしさを伝えようの会】の活動でどうしても姫路の写真が欲しいんだってぞ。」

「ちよつと、ヒロ！何言って」

「え？あの、ありがとうございます、明久君……………。えつと……………その……………。すごく嬉しいです。」

「え？え〜つと、どういたしまして？」

「あ、明久君がそういう活動をしてきているのはとても嬉しいのですがやっぱり恥ずかしくって……」

「何言ってるんだ姫路。その程度で恥ずかしいなんて言ってるなら明久の存在はどうなる。バカなうえに変態なんて、生きていけないほど恥ずかしいじゃないか。」

「離して、秀吉！雄二の頭をかち割ってやるんだ！！」

「お、落ち着くのじゃ、明久！ここで暴力沙汰を起こしてはならぬ！！」

「坂本！何でいつもそう言う事ばかり言うんだ！！」

「ヒロ、ありがとう！僕の為に怒って」

「吉井が【バカ】なのは今さらだが【変態】扱いはあんまりだろう！！」

「やめて、ヒロ！悪意が無い分余計に傷つくよ！！」

「ああ、確かにそうだな。すまん、明久。【変態】扱いしてしまつて……。お前は【変態】ではないよな……。」

「良かったな、吉井。【変態】扱いされなくなつて」

「2人とも【バカ】の方は否定しないんだね……。」

「あ、すまない。つい本音が……。」

「離して、秀吉！ヒロの頭をかち割ってやるんだ！！」

「お、落ち着くのじゃ、明久！お主がヒロに勝てる訳なかるう！！」
まあ、それはさておき……

「どうする、坂本？思った以上にガードが固いぞ」

「まあ、オレに考えがあるから任せておけ」

坂本の考えって何だろう？

「姫路、何もタダで頼もつて訳じゃない。もちろんそれなりの礼はさせて貰う。……明日の朝…明久の寝顔写真を……」

「本当ですか？……ならいくらでも……」

「買収かよ……。しかし何と言うか……。オレの周りには賄賂に弱い奴らが多いな……。」

え？ラブレターの騒ぎの時にオ宝本3冊で釣られたのは誰だつて？

……過去の事に囚われてばかりでは前に進めないんだよ！覚えて置きな！

「交渉は成立した。問題ないそうだ。」

「はい！少しくらいなら浴衣の裾をはだけでもいいです！！」

恐るべし、坂本マジック！こいつが敵じゃなくて良かった……。

ムツツリーニは姫路の言葉を聞いてさらに気合いが入ったのか一心不乱にカメラのレンズを磨いている。

「ムツツリーニ」

「……………？」

「吉井と姫路の２ショットを一枚だけ撮ってやってくれ。あいつには明日西村先生と対峙して貰わなくちゃならないからこれ位の役得はあってもいいと思うんだ。」

「……………わかった」

そう言つてムツツリーニは小さく笑った。

「ありがとう。ムツツリーニ」

その後ムツツリーニが鼻血の海に沈んだり色々騒動はあったけど無事に撮影会を終わらせる事が出来たのだった。

……………

時刻は12時を回り同室の奴らは皆眠りについていた。

そんな中不意に誰かが部屋に入ってくる気配を感じた……。

なんだ？誰が入ってきたのか？

眠りが浅かったオレはすぐに眼を覚まして、気配の主に気取られない様に様子を伺った……。

だんだんこちらに近づいてくるのが分かる……。

一体誰が何の目的でこの部屋に入ってくるんだ？

……まさか礼の脅迫犯が新しい脅迫のネタを掴むために侵入してきたのか！？

もしオレが目星をつけている奴が犯人なら大いにあり得る。無駄な行動力で周りに迷惑を掛けまくる様なタイプだったからな……。

まあ、何にしても隙を見て取り押さえるか。

そう考えているとオレの枕元で人影は止まった。

そうしてオレの頭に手を伸ばそうとした所でオレは起き上がり、侵入者の腕を掴み一気に関節を極めて動けない様に床に押さえつけた

「そこまでだ！脅迫犯め！覚悟しろ？」

そこに居たのは脅迫犯などではなく、浴衣を着た優子だった……。

「ヒロ！痛い！痛いから離して！」

「あ、ああ。すまない、優子。何処も怪我していないか？」

「ええ、大丈夫。こつちこそごめんね。こんな時間に押しかけちゃつて……」

「いや、それは全く構わないんだけど……。とりあえずここから移動しよう。」

幸いみんな相当疲れていたのか熟睡していたためこの騒ぎでも誰も起きなかったが、もし誰かが起きてにこの状況を見られたらオレは明日の朝日が拝めるかどうか怪しくなってしまう……。それだけは何とか避けなければ！

そう考えオレは優子を連れて別室に移動した。

「で、こんな時間にどうしたんだ？西村先生に見つかったらお前まで大変な事になってしまうぞ。」

「うん。このメールに書いてあった事なんだけど……」

TO木下優子

【優子に大事な話があるんだ。悪いんだけど浴衣を着てオレの部屋に来て欲しい。】

「この”大事な話”って何？」

「ここは下手に誤魔化すより本当の事を話して謝ろう……」

「あゝ、それはな実は」

「……それはな実は……」

「……と言つ訳なんだ。」

「……あんた達本当にバカなことばかりしてるわね」

「返す言葉もない……」

「……バカ。私は何のためにこの部屋に来たのよ……」

「心なしか優子の顔が泣きそうに見えた……」

「けどいい機会だ。前から言おうと思つていた事を言う事にするよ。」

「前から言おうと思つていた事？」

「事の起こりは吉井の悪戯でもこの機会を逃す手は無い。」

「ここでちゃんと告白して、宙ぶらりんの優子との関係に決着をつけよう！」

「優子もオレに対して悪い感情は持っていないはずだ！！」

「優子、オレの話を聞いて欲しい。これから話す事は冗談や嘘じゃない。」

「ない。」

「え？うん。……分かった」

「心臓がバクバク言っている……」

「こんなに緊張するのは本当に久しぶりだ。」

「優子、オレはお前の事が」

「拒絶 サレタラ ドウスル？」

「ふとそんな考えが頭によぎった……」

「それを皮切りに過去の記憶がフラッシュバックする……」

「……」

『ナンデ 千鶴 ト 絃馬サंगा 死ンデ オマエミタイナ ウス』

ギタナイ 妾腹ガ 生きテイル！」

「オマエヲ 庇イ続ケタセイデ 千鶴ト絃馬サンハ ロクナ人生ジヤナカッタ！」

「千鶴ガ 本家ニ 居ラレナクナッタノハ オマエノ 所為ダ！」

「オマエノ 所為デ 静馬ハ 両親ヲ 亡クシタンダ！」

「オマエ ナンカ 消エテシマエ！」

「『オマエ ガ 死ネバ ヨカッタノニ ！』『』『』」

「……………」

「ヒロ？ヒロ！？」

「ハッ！」

「どうしたの？いきなり黙って」

「い、いや……。何でもないよ……。大丈夫……。話の途中で悪いけど少し外の空気を吸ってくる。」

嫌だ……。！拒絶されるのが怖い……！

ハヤク ヒトリニ ナリタイ ！！

そう考え逃げる様に席を離れようとした……。

「大丈夫な訳ないじゃない！顔が真っ青よ！？」

そう言っつて席を離れようとしたオレを優子も椅子から立ち上がり、肩を押さえて強引に押さえつけ座らせ、オレの頭を抱き抱えた。

「ゆ、優子？」

「話したくないなら話さなくていいから、辛いと思う時に1人になるうとしないで！」

暖かい……。何だかすごく安心する……。

「……………」

「……じゃあ、少しこのままいさせて……」

「うん。大丈夫だから……。お願い、一人にならないで……。」

拒絶を恐れたオレには優子の言葉が本当に嬉しかった……。

オレは今まで拒絶を恐れ人に心の根っこを許す事は無く常に人との間に壁を作っていた……。

けど本当は心を許したかった……。

壁を壊してしまいたかった……。

けどその一步が踏み出せなくてずっと苦しかった……。

今日優子の言葉を聞いて心を許してもいいんだって思えた……。

『壁を壊してもオレはやっていけるんじゃないか？』って思えた……。

……。

そうだ……。オレはもう1人じゃないんだ……。

オレの周りには静馬がいて、ジジイがいて、吉井が、坂本が、木下

が、ムツツリーニがいて、Fクラスの奴らもいて、Aクラスの奴ら

もいて、そして何より優子がいる……。

オレは1人にならなくていいんだ。

優子の言う通り辛い時に頼っていいんだ……。

大丈夫だ……。皆となら……。優子となら……。

きっとこれからもやっていける……。

オレはきつとやっていける……。

そう思いオレは優子の背中に回した腕の力を少しだけ強くしたのだ

った……。

……

……

「落ち着いた？」

「ああ、すまない……。」

「謝らないで。私がやりたいと思ったからやった事よ。」

「……分かった。」

「それでいいのよ。」

「……優子」

「なに？」

「……あ、ありがとう」

「……どういたしまして」

……

それからしばらくしてまた誰かが部屋に入ってくる気配を感じた。
今度は2人だ……。

「優子、静かに」

「どうしたの？」

「部屋にまた誰かが入ってきた。」

「え？」

「怪しい動きを見せたら確保する。お前は隙を見て逃げた方がいい。
こんな所見つかったら停学ものだぞ。」

「う、うん。分かった。」

そう言いオレは襖をそつと開けて部屋の様子を伺った。

『起きなさいつての』

ゴキッ！ゴキントツ！

なんだ？聞き覚えのある声だな？

そしてさつき聞こえた関節を外してまた嵌め直したような音は何だ
つたんだろう……？

『……………』

何かボソボソ喋っている声が聞こえる。

『ああ、美波か……。それなら納得だよ。ってどうして美波がムゲ
ウ！』

侵入者は島田が……。どうりで聞き覚えのある声だと思った。

「何で美波までこんな所に？」

「たぶんさつき説明した吉井の悪戯が原因だろ？面白そうな事にな
りそうだからもう少し様子を見よう。」

「全くもう仕方ないわね……。」

優子はそう言っていたが完全に顔がニヤけている。

面白がっているのが丸分かりだ。

『あれ、やたらと単純！？』

『アキ、邪魔者が起きちゃうでしょ』

『ムゲウ』

もう起きてますとはとても言えない状況だ……。

『美波、せめて苦しまない様に頼むよ……。』

『あんたどういふ思考回路してるのよ……。』

「本当にどういふ思考回路してるのかしら？ってヒロ？どうしたの？引きつけ起してるわよ？」

「クツクツクツクツクツ……。死ぬ……。笑すぎて死ぬ……。吉井の奴、島田が自分を暗殺しに来たと思ってる……。は、腹痛てえ……。」

「そう言えばもう一人の侵入者は誰だろう？」

「まあ、ここまで来たら大体予想が付くが……」

『困った。今の僕に役に立ちそうなものが無い』

『その前にオレを助けようとする気はないのか！？』

「ああ、やっぱり霧島が坂本を襲っていたのか……」

『ちよつと木下と烏丸以外は全員起きてるの！？』

「そろそろ出時だな。」

ガチャ

「残念ながら島田、オレも起きてるぞ」

「え？烏丸に……優子？何でここに！？」

「たぶん美波と同じ理由よ……。」

「ヒロも暗殺されかけたの？大変だったね……。」

「やっぱり島田が暗殺に来たと思ってるんだな……。」

「起きてるなら早く起きてるって言いなさいよ！」

「いや、オレ馬に蹴られるの嫌だし、それにこんな面白そ　ゲフ

ン、ゲフン重要そうな事を邪魔するなんてオレには出来ないよ！」

「言い直すのはいいけど本音を隠せていないから！」

「酷いよ、ヒロ！僕の命が危ないのに面白そうだなんて！」

「……………」

「哀れ、島田……。お前の一世一代の大勝負は【奇跡のバカ】である

吉井の勘違いによって空振りに終わってるぞ……。」

「バアンツ……！」

「お姉さま！美春が助けに来ましたよ！」

うわあ、厄介な奴が来た……。

「みつ、美春！？どうしてあんたがここにくるのよ！」

「さつきお姉さまの布団に入って誰もいないからもしかやと思っただけ……！やっぱりにここに捜しに来て正解です！」

「……なんて危ない奴だ。モラルの欠片も見当たらない。島田も大変だ。こんなのに付きまとわれて……。」

「あ、危なかったわ。昨日で懲りたと思って完全に油断していたものの……。」

訂正、危ない奴じゃなくて犯罪者予備軍だ……。

嫌だな、相手にしたくない。

こういふ手合いはこちらの話をまともに聞いてくれない上に自分の都合のいいように歪曲して捉えるから会話が成り立たない事が多いけどこれ以上騒がれたら西村先生に気付かれてしまうだろうし、誰か一人でも見つかったらオレ達全員指導を受けなくてはならなくなる。

それだけは避けなければ……！

「し、清水とりあえず落ち着いてくれないか？」

「気安く話しかけないください！豚野郎！豚野郎は豚野郎らしく大人しく【検閲削除】でもしててください！」

……心が折れそうだよ。何で大して面識もない相手にここまで罵倒されなければならぬんだ……。

頑張れ、オレ！負けるな、オレ！大丈夫だ！オレはまだまだやれる！
気を取り直してもう一回！

「あつと清水、島田を口説くのはいいけどこの騒ぎが西村先生にバレたら拙い事になるから」

「お姉さま男の部屋に来るなんて不潔です！大人しく美春と一緒に裸で寝ましょう！勿論色々するので寝かせませんけど！」

見事に無視された……。

オレの心がボキリと言う音を立てて折れたような気がする……。

「優子、オレはもうダメだよ……。」

「気にしちゃだめよ。あの子はたぶんちよつと色々と変わってるから……。」

「やめるんだ、清水さん！これ以上の会話はムツツリー二の命にかかわる！」

吉井の声の方を見るとムツツリー二の布団が鼻血で鮮血に染め上げられていた……。

それでもシャッターを切り続ける奴の姿にオレは感動さえ覚えた。

「……雄二、続き」

「翔子、お前は本当にマイペースだな！」

「何じゃ？何が起こったのじゃ？なんで眼が覚めたら女子がいるのじゃ？それに姉上！何故ここに居るのじゃ？」

「……色々あつてね。」

うん、とりあえず状況を整理しよう。オレの周りに見えるのは

・ 島田に迫る清水

・ 坂本に迫る霧島

・ 大量の鼻血を吹いているムツツリー二とそれを看病する吉井

・ それを茫然と見つめるオレと優子と木下

……カ、カオスだ……。

「あああああつ！皆そんなに沢井じゃダメだよつ！このままじゃ鉄人に気付かれて」

『なに事だ？吉井の声が聞こえたぞ！？』

「……」

「え？なに？なんで皆『吉井が声を出したせいで見つかったじゃないか』みたいな眼で僕を見るの？」

「いや、実際西村先生に聞かれたのは吉井の声だし……」

「クソツ！明久のせいで厄介な事になった！とにかくお前らは見つからない様にここから逃げろ！」

「何だか納得いかない物言いだけど雄二の言う通りだ！とりあえずここは僕らに任せて！」

「で、でも！」

「お姉さま、躊躇ってる時間なんてありません！とりあえず服を脱いで美春の部屋に行きましょう！」

「あんたは黙ってなさい！」

この状況でなおおのれの欲望を優先させるか……。呆れてものが言えない。

『吉井に坂本！お前らだと言う事は分かっているんだ！その場を動くなよ！』

そう言うって西村先生の足音がだんだん近づいてきた。

「鉄人の声だ！もうかなり近いよ！」

「時間が無い。こうなったらオレが【必殺アキちゃん爆弾】で注意を引きつけるからお前らはそのすきに部屋を出ろ！」

「うん、わかった！」

「美波！そこは分かっちゃ駄目だ！」

「まず僕と雄二とヒロが飛び出して鉄人の注意を引きつける。そのすきに4人はドアから出て一気に部屋まで走るんだ。いいね？」

「うん。……ごめんね、ウチらの為に」

「……ありがとう」

「お姉さま、愛しています。」

「3人共気をつけてね。」

「ああ、お前らも気をつけるよ」

「2人とも！行くよ！」

「しょうがない！付きあってやる！」

「応！」

バン！ガス！

「フヌオオオオ！吉井！キサマ！！！」

「ゲツ！鉄人が扉で頭を痛打したみたいなんだけど！？」

「それはフラインプレーだ、逃げるぞ！明久！」

「了か」

「待て！このままじゃヤバイ！」

西村先生が部屋の中を覗き込もうとしている。このままじゃ中にい

る優子達が見つかったてしまふ！何とかしないと！

そう考えているうちに吉井は着ている浴衣を西村先生の頭に巻きつけて帯で縛りつけた。

チャンスだ！オレは穴のあいたゴミ袋を取り出し、浴衣が巻きついている西村先生の頭に被せた。これで帯を取る事は困難になるはずだ！

「今のうちだ！」

吉井の合図を受けて女性陣は全員無事に逃げる事が出来た。

「吉井、キサマはつくづくオレの指導を受けたいようだな……！」

「明久、後は頑張れよ！」

「健闘を祈る！」

「おっと！逃げようとしたってそうはいかないよ？西村先生すみません！坂本雄二がこっそり持ち込んだ酒を隠す為に注意を逸らせと言ってきた物ですから！」

「キサマ！何てことを言いやがる！」

「アハハハ！普段の行いが悪いからだよ、坂本！」

「ついでに烏丸大貴がこっそり持ち込んだ保健体育エッチなの参考書30冊を隠す為に注意を逸らせとも言ってきた物ですから！」

「吉井！テメエ！何言ってるの？何言っちゃってるの！？」

「吉井……、坂本……、烏丸……、覚悟は出来ているんだろうな！」

「「出来てません！！」」

こうなりや地の果てまで逃げてやる！！

「どうする、雄二！？何とか鉄人を撒かないと！」

「どうするも何も、普通に走っていたら逃げ切れないのは目に見えるだろうが！」

「だよな！向こうはほとんど化け物だもんね！」

「何だつてこの学校にはあんな反則級の人がゴロゴロしてるんだろうな！」

「だから鉄人の入って来れない様な場所に逃げ込む！」

「オツケー！」

となると狭い場所か？いや、それは無いか……。狭い場所って事は袋小路に追い込まれるってことだ。逃げ込んでいる所に他の先生が救援にきて召喚獣が来たら即アウト！そんな事は坂本だって分かっているだろう。それにこの合宿所に狭い道なんて遠い所に一つだけしかない。そこに辿り着く前に捕まる可能性だって高い。

だったら他に西村先生が入る事の出来ない所って言うところ……

『吉井！坂本！烏丸！逃げられんぞ！観念して指導を受ける！』

ああ！考えている場合じゃない！ひたすら逃げろ！無心で逃げろ！マツハで走れ！！

「ところで、雄二！何処へ向かう気なの！？」

「男で教師の鉄人には入る事の出来ない場所！つまり　女子部屋だ！」

「なるほどっ！」

「吉井！『なるほど』じゃないぞ！お前自分の格好を良く見てみる！！」

吉井はさっき来ていた浴衣を西村先生の頭に巻きつけて足止めに使ってしまったため今パンツ一丁だった。そんな恰好で女子部屋に入らんかしたら

「　死は免れない……！」

「いろんな意味で大惨事だな……。」

「行くぞ！明久、ヒロ！」

「絶対に嫌だ！」

この場合はどつちがマシなんだろう……。

1．パンツ一丁で女子部屋に乱入する＝変態のレッテルが洩れなく付いてくる

2．諦めて西村先生の指導を受ける＝あれだけ怒っているのだから生きて帰れるかどうかも怪しい

……どつちも最悪だ。

「この期に及んでまだそんな事を！仕方ない！明久！これを着ろ！」
そう言っつて坂本は吉井に向かって何かを投げた。

『着ろ』つて事は服か？

「流石は雄二！以心伝心！」

「いいから早く着ろ！」

吉井は急いで渡された服を着た……

「雄二！セーラー服装着完了したよ！」

「……………」

この極限状態でそんなボケをかますとは……。ある意味底が知れない奴だ……

「坂本、霧島とのプレイはそこまでマニアックなのか？」

「よし、これで逃げ込めるな！」

あ、無視しやがった。

「待つんだ、雄二！この格好はある意味全裸より致命的だ！」

1 . パンツ一丁で女子部屋に乱入する「変態のレッテルが洩れなく付いてくる

2 . 女装して女子部屋に乱入する「やっぱり変態のレッテルが付いてくる

3 . 諦めて西村先生の指導を受ける「あれだけ怒っているのだから生きて帰れるかどうかも怪しい

最悪の選択肢が増えただけじゃないか……

「よし、此処からは別々に逃げるぞ！オレとヒロは右から明久は左側からだ！」

大急ぎでセーラー服を脱ぎ、再びパンツ一丁になった吉井に坂本が冷酷に言い放つ……

「バカ言っちゃいけないよ、雄二！逃げるなら何処までも一緒さ」

「断る！そんな姿の変態と並ぶ気はない！」

「黙れ！それが嫌なら大人しくキサマのズボンを寄こせ！」

「貴様！やはりそれが目的だったか！」

ああ、この流れは拙い……！

「脱げ！又ゲエエー！！！」

「脱ぐものかあああああ！！！」

「落ち着け、お前ら！この状況を第3者が見たらどうなる」と

「……………お前ら何やってるんだ？」

振り向くとそこには西村先生が立っていた……

対してオレ達の様子ほと言つとパンツ一丁の吉井が坂本のズボン
を脱がそうとしておりオレが吉井を押さえ込んでいると言つモザイク
をかけられても文句が言えない様な見苦しい状態だった……

「……………まあ、女子に縁が無いのは分かるがな、そ
う言つた事は出来れば人目に付かない様にだな」

「……先生！指導を受けますから言い訳をさせて下さい！」「……
流石にゲイの【検閲削除】プレイと思われるのは嫌だ！

オレ達はそう考え大人しく西村先生に投降したのだった。

……………

強化合宿3日目の日誌を書きなさい

土屋康太の日誌

『前略。（坂本雄二に続く）』

教師のコメント

今度はリレー形式ですか次から次へと良く思いつくものです。

坂本雄二の日誌

『そして翔子がオレの前で浴衣の帯を緩めようとした。オレは慌て
てその手を押さえつけ、思い止まる様に説得した。ところが隣では
島田が明久に迫っていて妙な雰囲気になっており、ヒロはヒロで隣
の部屋で木下優子と（吉井明久に続く）』

教師のコメント

君達に一体何があつたのですか？土屋君が略した部分が気になりま
す。

吉井明久の日誌

『後略（烏丸大貴に続く）』

教師のコメント

そこでそれは無いでしょう……

烏丸大貴の日誌

この日誌はフィクションです。実際に起こった事ではありません。誰が何と言おうとフィクションです!!

教師のコメント

落ちが非常に気になります。

日誌はノンフィクションで書いてください。

あとそこまでフィクションである事を強調しなくても……

第40話 野生のエネルギーは止められない!

「ふぁ……、あふっ……」

「さすがに眠いぞ、こら」

「zzzzzz……」

「お主ら災難だったのう……」

「災難と言えば災難だったかも……。ふわああああ」

「zzzzzz……」

「弱ったのう。お主らがそんな様子では今日はとても……」

「別に全く寝てないってわけじゃないから気合が入れば眼が覚める
と思うけど　ふわああああ」

「zzzzzz……」

「オレもダメだ。全く気合いが入ら　ふおおおおお!？」

「なんだ!?何の声だ!？」

「ビックリした……。何なんだ、一体……。せつかく気持ちよく寝て
たのに……」

「ど、どうしたの、雄二!？」

「……効果は抜群」

「あ、ムツリーニ、おはよう」

「ムツリーニ、今しがた雄二に見せたのは何じゃ?偉く興奮して
おる様に見えるのじゃが?」

「……魔法の写真」

「そうか、魔法の写真か……」

「どれ、ワシらにもその写真を見せてくれんかの?」

「……(スッ)」

ムツリーニはオレ達3人に見える様に写真を置いた。

「魔法の写真だって?何言ってるんだか。僕らもう高校生なんだし

たかだか写真程度で気合なんか入る訳が　　ふおおおおお！！」

「ほう。これはまた……」

「確かに気合いが入る写真だな。」

「僕生きていてよかった……」

1枚目には昨日撮影した姫路と木下の浴衣姿が写っていた。

「明久、2枚目は何が写っておるのじゃ？」

「えっと……」

2枚目の写真には浴衣姿で迫る霧島とハーフパンツ姿の島田が写っていた……。

「す、凄い！これはすごいよ、ムツツリーニ！今僕は君を心から尊敬している！」

「まだあるぞ。次は……」

3枚目は浴衣姿の優子と木下の2ショットが写っていた。

「……（スッ）」

「ダメだよ！ヒロ！そつと懐に忍ばせちゃ！これは人類の宝なんだから皆で見なくちゃ！」

「チツ！バレたか……」

「……後で焼き増しは可能。」

「「言い値で買おう！」「」

オレの理性をこうも簡単に崩してくれるとは……！
ムツツリーニ恐るべし……！

「して4枚目は？」

「あ、うん。4枚目は」

吉井が4枚目をめくるとそこにはセーラー服姿の吉井が写っていた……。

「……………綺麗に撮れていたからプリントして見た」

「離して、秀吉！このバカの頭を力手割ってやるんだ！！」

「落ち着くのじゃ、明久！よく撮れておるではないか！」

「って言うか良く西村先生に見つからずに撮影できたな。何処に隠れていたんだ？」

「……………（フツ）企業秘密」

「驚いたぞ。ムツツリーニまさかここまで凄い写真を撮るとは」

坂本の眼がキラキラしている。坂本でこの効果なら他の男子ならイチコロのはずだ……。

事実オレの理性もあっさり崩された訳だし……。

「これで増援も期待できると言う訳じゃな。」

「……………この写真他の皆にも見せないとダメかな？」

「それについては同感だ。せめてこの3枚目……………。3枚目だけでも……………！」

「明久、ヒロ。オレ達の目的を忘れるな。大局を見誤る人間に成功は無いぞ。」

「クツ！悔しいがその通りだ。すまない、坂本」

「ごめん、確かに間違えていた。この写真は目的の為の手段だし、そんな未練は断ち切る。後でムツツリーニ1グロスほど焼き増しして貰うだけで我慢するよ」

「1グロスは多すぎだろ」

「バカ野郎！未練は断ち切ると言っただろ！オレは西村先生突破の報酬としてネガを要求する！」

「流石だよ、ヒロ！それは考えてなかった！」

「ああ！一緒に西村先生を倒そう！友よ！」

「うん！勿論だよ！友よ！」

「未練タラタラじゃな……」

ほっといてくれ……

「よし、それじゃあ早速」

坂本がペンを取り出して写真の裏に何かを書いていた。

『この写真を男子全員に回す事。女子及び教師に見つからない様に注意！なおパクった奴には【Fクラス代表】坂本雄二及び【FFF団特別処刑執行人”カラス”】こと烏丸大貴の名のもとに私刑を執行する。』

なるほど、盗難防止策か……。

ところでとても気になる事が書いてあるんだけど……

「坂本、何だ？この【FFF団特別処刑執行人”カラス”】って？そんな物になつた覚えは無いんだけど……。」

「ああ、この前のラブレター騒ぎのときにオレと須川が勝手に任命した。」

……勝手に人に変な名前を着けて、変な集団に入れなくて欲しい。

「おい、須川。これを男子に順番に回しておいてくれ」

そう言って坂本は近くにいた須川に写真を回した。

「ふおおおおおおおおおおおおおお!!」

凄気合いの入り方だ……。これなら今夜の作戦はうまくいくかもしれない

「ところで雄二。僕の写真は抜いておいてくれた？」

「安心しろ。あんなの流したら士気がガタ落ちだからな。ちゃんと抜いておいた。」

「そっかそれなら良かったよ。」

そうそう、安心しろよ。オレがバッチリ持っているから……。これさえあれば成功率も格段に上がるだろう。

「うん？ムツツリーニお主他にも写真を持っておったのか？どれどれ、何が写っているのじゃ？」

「あ、僕にも見せてよ!!」

あ、拙い……。ムツツリーニ頼んでおいた説得用の吉井の写真が……。

「」「」「」「」「」「」「」「」

凄い……。オレが頼んだのは吉井の滅多に見れない様な写真なのに……。
そこにはセーラー服姿の吉井（パンチラ edition）が写っていた……。

「……………ヒロに頼まれた。」

「……………ああ、ありがとう。オレ達の勝利の為の布石とは言えこんなものを撮らせてしまって……」

「離して、秀吉！こいつらの脳髓を引きずり出してやるんだ！！」
「見ておらん！ワシは何も見ておらんから落ち着くのじゃ、明久！」

さてそろそろオレも動こうか……。勝利の為の布石を置くために！

.....

「やあ、久保」

「.....烏丸君か。何か用かい？」

「ああ、昨日の話なんだけどな」

「断る。君達はまだそんな事を言っているのかい？何度来ても僕は覗きなんて下劣な行為に力を貸す事は出来ないよ。」

「そうか。せつかく久保が喜びそうな物を持って来たんだけどな.....」

「？なんだい？僕の喜びそうな物って？」

「これだよ。」

オレはそう言っただけで久保の机に学祭の時の吉井のメイド服女装写真を置いた。

「こ、これは.....！」

「悪いとは思ったけど、お前の事を色々調べさせて貰った。お前吉井の女装姿のファンなんだって？」

「.....僕を脅迫する気かい!？」

「いや、そんなつもりは全くないよ。オレはこの交渉が決裂してしまってもこの事を他言する気は一切ない。そこだけは理解しておいてくれ。」

流石にこいつがそっち系の人間だって昨日リストを見て知った時は

驚いたけどDクラスのロールパンに比べたらずっと良心的だし好感が持てる。

第一吉井の女装姿のファンはDクラスの玉野を筆頭に結構いるみたいだしな……。

変態だらけのFクラスに比べたらこっちの方がまともだろ……。

「……話を聞こうか？」

「ありがとう。さて、まずこの写真はプレゼントだ。受け取ってくれ。」

「……いいのかい？」

「ああ、もともとそのためを持って来たんだ。」

「それじゃあお言葉に甘えて……」

「オレの要求は昨日も言ったように覗きに力を貸してほしいと言う事だ。もし力を貸してくれるなら久保にこれを贈呈しよう。」

そうやってオレは先ほどのセーラー服姿の吉井（パンチラEdition）が写った写真を久保に見える様に置いた。

「しかし僕は……！」

「まあ、世間体が気になるのも分かる」

いくらそつち系でも女子風呂の覗きに力を貸したとなればれっきとした変態扱いだろう。

「ただこの作戦には吉井の身の安全がかかっているんだ。頼む、協力してほしい！」

「吉井君の身の安全が？どついう事だい？」

「ああ、実は」

.....

.....

「　　と言う訳なんだ。」

「それで君はそこまで覗きに必死なのか？」

「まあ、そう言う事だ。」

「けどいいのかい？その写真の流出を止めるためにこんな事をして
いるのにその肝心の写真を僕に渡してしまつて……」

「久保なら大丈夫だと判断したんだよ。お前は良識を持ち合わせて
いそうだから絶対に写真をばら撒く事はしないだろうと思つてな。」

「僕は随分と信用されているんだね……。」

「ああ、そして吉井もお前の事を『いい人』だと思つている。」

「『いい人』か……。」

「そう『いい人』だ。『いい人』は悪印象ではないが逆に言えば友
達じゃない。お前はそれでいいのか？」

「.....」

「オレはこう思つんだ。『共に同じ目的の為に進む仲間は他の何よ
りも尊い』と……。もし今回力を貸してくれるなら吉井はそれを決
して忘れないだろう。久保、吉井の為に力を貸してくれないか？」

オレだつたら優子が危なくなつたら世間体なんてかなぐり捨てて助
けに入る。だからこそこいつにはこの理屈で交渉するのがいいと考
えた。さあ、どう来る？

「それでも……、それでも僕は……。」

効果はあつたようだし、そろそろ引き時だな……。

「今すぐに返事が欲しいとは言わない。だけと少しだけでいい。考
えておいてくれ」

さて、やるべきことはやっただし戻るとしますかね。

Aクラスが協力してくれるといいんだけど……

一応優子に頼んで保険は掛けておいたけどなるべくなら今日中に決着をつけたい。それには何としても高橋先生、西村先生の2トップを突破しなくてはならない。

さあ、ここが博打の打ち所だ！吉と出るか凶と出るか……！勝負だ！脅迫犯！

.....

カチツ、カチツ、カチツ……

時計の針の音が大きく聞こえる……

周りは静寂を保っていた……

そしてオレもひたすら黙想をして集中を高めていた……。

泣いても笑ってもこれが最後のチャンスになる。

初日はただ単に成り行きで協力することになっただけだった。

2日目は坂本の霧島に対する想いを聞き、その誠意に応える為に協力した。

3日目は協力してくれた仲間達を助けるために戦った。

そして今……4日目は

「明久、今さらジタバタするな。補充のテストも全部受けたし写真も回した。やるべき事はすべてやったのだから後は何も考えずに戦うだけだ。」

「D・E・Fクラスは昨日に続いて全員参加のようじゃ。あとはA・B・Cクラスが協力してくれるかどうか、じゃな。」

「……今日こそ大島先生と工藤愛子に借りを返す」「作戦開始も近い。最後の打ち合わせを開始するぞ。」

坂本がそう言ったと同時にオレは黙想をとき、坂本の話に耳を傾け

た。

「オレ達がいるのは3階だから3階、2階、1階、女子風呂前を突破しないと目的地にはたどり着けない。それぞれ部屋割は3階はE・Fクラス、2階はC・Dクラス、1階はA・Bクラスと言うようになってる。それに応じて3階の敵はE・Fクラスの仲間が押さえてくれる。2階の敵はDクラスが押さえてくれる手筈になっているが……」

「Dクラスだけでは厳しいじゃろうな……。」

確かに自分達より格上の2倍の戦力を足止めするのは相当難しいだろう。

「でもここまで来たらやるしかないよ」

「もちろんそのつもりだ。それで2階を突破すると」

「……高橋先生」

「そうだ。学年主任の高橋先生率いる1階教師陣だ。恐らくここに姫路、翔子、工藤愛子、木下優子もいるだろう。」

この作戦の一番の不確定要素だ。

「明久とムツツリー二を通す為の一瞬の間はオレが作る。高橋先生の足止めはヒロをメインにオレ達がやる事になっているけど、昨日の圧倒的な強さを見る限り持って2、3分つて所だろう。」

「大丈夫さ、何とかやってみる。昨日の様に簡単に負けてなんかやらないよ」

そうだ。昨日の敗因は明らかになっている……。同じ失敗を何度も繰り返しはしない！

「そうじゃな、足止め出来ねば……」

「ああ、明久とムツツリー二は前後を挟まれて終わりだ。作戦は失敗。オレは残りの人生を翔子に奪われ、明久は変態として生きていく事になる。」

「作戦が失敗しても大して現状と変わらん気がするのじゃが？」

「身も蓋もない事を言うなよ……。」

「とにかく高橋女史は根性で何とかするしかない。A・Bクラスが協力してくれば何とか勝機はあるんだが……。」

「AクラスはともかくBクラスは大丈夫じゃろ。きちんと全員が特に代表格が女に興味を持っておるからの。あの写真が効くはずじゃ。」

「Aクラスの方もやるだけはやった。あとは立ちあがってくれる事を信じよう……。」

「けど秀吉の言い方だとAクラスの男子の代表格は女に興味がないみたいだよ？」

「……」「……」「……」「……」

「え？なんで皆気まずそうに眼を逸らすの？」

「……吉井、世の中には知らない方が幸せって事もあるんだよ。」

「そ、そうなんだ……。」

「話を戻すぞ。そこまで行ったら後はお前たちの仕事だ。分かっているな？」

「……大島先生を倒す」

「そして僕は鉄人、だね。」

「状況によつてはオレは吉井の援護に入るがあまり期待はするなよ」

「うん、わかった。」

「ここまで厳しい作戦は今までで初めてだろう……。皆の顔が緊張で強張っている。」

「……大丈夫、きつとうまくいく」

「うん」

「当然だな」

「じゃな」

「やってやるぞ」

初日はただ単に成り行きで協力することになっただけだった。

2日目は坂本の霧島に対する想いを聞き、その誠意に応える為に協力した。

3日目は協力してくれた仲間達を助けるために戦った。

そして今……4日目はそれらすべてと自分の為……。

自分の中の皆と自分の間に作り続けてきた壁をぶっ壊す為に戦おう……。

ピピッ

電子音が20:00を告げた。作戦開始の合図だ。

「……よし。てめえら、気合いは入っているか？」

『『『おつ。』』』

「女子も教師もAクラスもFクラスも関係ねえ！男の底力、とくと見せてやるうじゃねえか！」

『『『おつ！』』』

「これがラストチャンスだ！オレ達5人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外にはありえねえ！」

『『『当然だっ！』』』

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣^でるぞ！！」

『『『よっしやあああああ！！』』』

強化合宿4日目、20:00 覗きを巡った漢達の戦いの火蓋が切つて落とされた……！

第41話 仲間のカミングアウトで士気が落ちる事なんて滅多とない・・・

『いたわっ！主犯格5人組よ！』

『長谷川先生！向こうの5人をやります！』

「ふん、雑兵共が！オレに敵うと思うなよ！ 試獣召喚！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

数学

Eクラス

古川あゆみ

83点

源涼香

77点

VS

Fクラス

坂本雄二

224点

・・・・・・・・・・・・・・・・

「勉強してから出直して来やがれ！」

『キヤアアア！！』

うっん、毎度のことながら悪役オーラ全開だな……。

「坂本君、待ちなさい！」

拙い、長谷川先生が追ってきた……！！

「長谷川先生、ここは通しませんよ。」

追ってきた長谷川先生の前に須川を筆頭としたFクラスの面子が立ち上がる。

「吉井、坂本、烏丸！ここはオレ達に任せて先に行け！試獣召喚！」

化学

化学教師

布施文博

663点

V S

黒崎トオル

144点

野口一心

132点

.....

「Cクラス！来てくれたんだね！？」

「Cクラス・Dクラスの野郎共！協力感謝する！2階は　オレ達の

背中はお前達に任せるぞ！！」

「協力なんざ、つたりめえだ！」

「女子風呂覗かなくて何のための男でえっ！」

「てめえらこそしくじるんじゃねえぞ！」

「べ、べらんめえ口調になってる……」

ホントにノリがいいな、こいつら……

「あのさ、こう言うのってすごく嬉しいよね」

「そうじゃな、仲間が増えていく喜びと言っべきじゃろうかの」

「ああ、協力してくれた仲間のためにもオレ達は負けられないな」

「そのぶん仲間だった女子が敵だけどな」

「そこはまあ、気にしない方向で」

C・Dクラスのおかげで2階は突破できそうだ……！！

次の1階が最後の綱渡りになる。頼むぞ、久保！

.....

「クソ……メだ！圧倒的……きる！」

「援護……てくれ！」

「1階でも戦闘が行われてるな……」

「けど何だ？様子がおかしい……」

「やった！賭けは僕らの勝ちだ！これで1階の制圧もうまく」

「待て！様子がおかしい！」

踊り場を折り返して廊下の様子を見た。

そこには

.....

総合科目・

霧島翔子

4762点

姫路瑞希

4422点

VS

加西真一

1692点

.....

圧倒的な力でBクラスの仲間を蹂躪する学年主席と次席のコンビが立ちほだかっていた。

「……雄二、悪戯はここまで」

「翔子か……！」

「明久君、ここは通しませんよ！」

「姫路さんっ！」

「Aクラスがおらんようじゃな」

木下の言う通り周りにはBクラスの姿しか見えない……

「大丈夫だ！久保は必ず来る！」

「待っていたわよ、ヒロ！」

「優子……」

「覗きなんてバカな真似はやめなさい！今降参したら関節を逆に曲

げるだけで許してあげるから」

「そんなこと聞かされて投降する奴がいると思うか……?」

「そうね、それじゃあ力づくで止めてあげる!その後あなたの関節を抱きしめながらゆっくりと反省させてあげる。」

ヤバイ……!優子は殺る気満々だ……!

「随分と用心深い布陣だな、クソ!」

忌々しげに坂本は呟いた。

今の1階の廊下の布陣は姫路、霧島が正面に構え、優子がオレの前に、そして奥の階段前には高橋先生が陣取っていた……!

状況は絶望的……!どうする?考える!考えるんだ、オレ!

『もうこれ以上は無理だ……』

『霧島に姫路に高橋先生なんて勝てる訳ないじゃないか……』

ここまでなのか……?もう……だめなのか……?

「あきらめちゃ駄目だ!」

ここまで絶望的な状況でまだまだ諦めていない奴がいた。

ハツとしながら声の方向に眼を向けた……。

「僕達はこれまでも様々な困難に打ち勝ってきたはずだ!まだ僕は負けていない!」

「明久。なぜここまで絶望的な状況に陥りながら諦めないのじゃ?

お主は《観察処分者》じゃ。痛みのフィードバックもある。そこまですべて写真を取り戻そうとして、苦しい思いをする必要はないじゃろう?」

確かにここまで悪評が広まった以上写真がバラ撒かれてもバラ撒かれなくても変態扱いは大して変わらないだろう……。それに召喚獣のフィードバックで痛い思いをするのは吉井自身だ。ここで諦めるのが賢い判断なんだろうな……。

「秀吉違つよ。そうじゃないんだよ。」

「そうじゃ、ない?」

「確かに最初は写真を取り戻すつもりだった。真犯人を捕まえて覗きの疑いを晴らすつもりだった。……でもこうして仲間が増えて、

その仲間たちを失いながらも前に進んで初めて僕は気がついたんだ
！」

「明久、お主何を言つて
何だか嫌な予感が」

「例え許されない行為であろうとも僕は自分の気持ちを偽れない！正直に言おう。僕は 純粹に欲望の為に女子風呂を覗きたい
！！」

「……………」

「ヒロ、写真つて何のこと？真犯人つて何？ ってどうしたの！
？急に頭を抱え込んで！？」

「いや、あまりの吉井のバカさ加減に軽く頭痛がするだけ……………」

「明久！お主は何処までバカなんじゃ！！」

「明久君、そんなに私じゃなくて美波ちゃんの裸を見たいんですね
…………！もう許しません！覗きは犯罪なんですからねっ！」

「世間のルールなんて関係ない！誰にどう思われようと僕は自分の
気持ちに正直に生きる！！」

「スッパーン！！」

「吉井！本来の目的を忘れてアホな事を声高に叫んでんじゃねえ！
！」

「ヒロ…………、ハリセンなんて何処から「企業秘密だ！！」

『よく言つた、吉井明久君！』

「だ、誰ですか！？」

「待たせたね、吉井君！君の正直な気持ちはこの久保利光が聞き届
けた！」

「久保君！来てくれたんだね！？」

「到着が遅れてしまつてすまない。踏ん切りがつかず準備しながら
もずっと迷っていたんだが…………さっきの君の言葉を聞いて決心が
ついたよ！」

「決心がついたつて、それじゃあ…………！」

「ああ、今この時よりAクラス男子総勢24名吉井明久の覗きに力

「く……！吉井君と土屋君は逃がしましたが、あなた達までは通しません！」

そう言つて再び召喚獣を呼び直していた。

「クツ！流石は高橋女史！判断が速い！」

とにかく吉井とムツツリー二を通す事が出来た。

さてこつちもこつちでやる事やるとしますかね……。

「さて、優子。悪いけど相手になつて貰うぞ。」

「ヒロ、最後にもう一度だけ聞くわよ。覗きを辞める気は無いの？」

「そうだな、吉井の方はもうどうなつてもいいけど、西村先生を突破しないと坂本の方に問題が出てくるからな。それにここでオレ達を信じて後を託してくれた仲間を裏切る事はオレの信条に反する。」

そう言う訳だから悪いけど辞める事は出来ない！」

それにこの行動には自分と他人との壁をぶつ壊すつて目的もあるしな……！

一歩引いた所から物を見るんじゃなく、一歩踏み込んでみんなと一緒に【真剣にバカ】をやるつ……。

「わかつた。じゃあ私も本気で叩き潰すから覚悟しなさい！」

「上等！試召戦争のときの雪辱戦だ！行くぞ、優子！！」

「来なさい、ヒロ！！」

「「試^{サモン}獣召喚！！」」

.....

総合科目

Fクラス

烏丸大貴

3698点

VS

Aクラス

木下優子

3420点

第42話 勝利の代償はとてつもなく大きい…

ヒロSIDE

「……………」

優子の武装はランス、間合いでは圧倒的に不利。うかつに飛び込めば召喚獣の扱いがあまり上手くないオレはあつという間にやられてしまうだろう……。

落ち着け。優子の動きを読んで後の先を取るんだ。

動きの読み合いと見切りの眼ならオレの方が優れている。やってやれない事は無い！

先に間合いを詰めたのは優子だった。

ランスの間合いの広さを有効に活用して矢の様な突きを連続で繰り出した。

それをヒロは自分の武装の日本刀の鎧の部分でひたすらいなし、紙一重で避けていた。

このままじゃ埒が明かない……！

そう考えヒロはランスの突きをいなした後バックステップをして間合いを取った……。

NO SIDE

言うだけあって召喚獣の扱いがうまくなってるじゃない。

優子は驚いていた。最初の連続の突きであつという間に沈むか【自爆】するかと思っていたが、優子の予想に反してすべての攻撃を防がれてしまったからだ。

最初に自爆を使って来なかったとはいえ、次はどう出るかわからない。次はヒット&アウェイで戦うのが得策……。

優子の召喚獣がランスを構え再びヒロの召喚獣に突進する。

ヒロの召喚獣はランスの穂先を刀の鎧で撫でる様に軌道を逸らし地面に押さえつけた。

拙い！離れなきゃ！

慌てて後ろに下がろうとするが、ヒロの召喚獣はピッタリ張り付いて離れない。

自爆される！

しかし優子の予想はまた外れ、ヒロが繰り出した攻撃は日本刀による横薙ぎの一閃だった。

優子の召喚獣はそれをまともに食らい、点数をかなり削られた……。

「な、何で自爆を使わないのよ!？」

優子の考えた戦法はほとんど自爆への対策だった為ヒロの召喚獣が刀で攻撃するという事に驚きを隠せなかった。

「今までオレは自爆と言う能力に頼りすぎていた。」

「????いきなり何を?」

「昨日、高橋先生にアツサリ負けたのもソレが原因だ。」

そう、自爆はあくまで攻撃方法の1つであり真正銘の最後の手段なのである。それが来ると分かっているのなら防ぐ事なんて簡単なのだ。

「自爆を使わなくてもオレの召喚獣にはたくさんの攻撃方法がある。たくさん選択肢があるから防御の方法も迷う。今のお前じゃ、オレには勝てない。降参してくれ、優子」

ヒロの言う通りだった。事実優子は自爆の対策しかしてきておらず刀による攻撃に対する対策が全くできていない。

対してヒロは優子の召喚獣がランスを繰り出すタイミング、癖、繰り出した後に何処に隙が出来るのかをすべて把握していた。

そんな状態で点数もかなり削られて優子にはもう勝ち目がなかった。優子もそれはよく分かっていたが

「それでも私は負けない！ヒロに負けたくない！」

もう一度優子の召喚獣はランスを構えてヒロに向かって突進した。

「無駄だ！もうその動きは見切った！」

そう言っただけでヒロは優子の召喚獣のランスを捌き、胴を抜き、背中からもう一閃斬りつけた。

優子の召喚獣はヒロの召喚獣の攻撃を受け消滅した。

.....

ヒロSIDE

どうにか勝てた……。

優子は負けたのがショックだったのか膝について落ち込んでいた。

「今回はオレの勝ちだ」

「.....」

よく見ると優子の眼に涙が溜まっていた……。

「泣かないでくれよ、優子。オレはお前に泣かれたら困るよ……。」

そう言っしてしゃがみこんで優子の頭を撫でた。

「な、泣いてないわよ。」

優子はそう言っして慌てて涙を拭っていた。

負けず嫌いだなあ……。まあ、そう言っ所も可愛らしいけどな。

「.....悔しい。」

「これで1勝1敗でイーブンだ。」

「.....前は引き分けのはずよ？」

「あんなのは負けたも同然だ。自爆を使った時点でオレの負けなんだよ。」

「.....そう言っものなの？」

「そう言っものだ。」

「.....わかった。次は私が絶対勝っからね！」

「そうはさせるか。」

そう言ってオレ達は笑い合っした……。

.....

雄SIDE

ヒロと木下姉の勝負の決着がついた。

どうかヒロが勝利を収める事が出来たようだ。

しかし状況はいまだに互角……。いやわずかにこちらの方が不利……

…。
木下姉がやられても翔子と姫路の2トップは全くAクラスの男子を寄せ付けないほど強い。

それだけじゃない。階段の前には依然として高橋女史の召喚獣が陣取っている。

このままじゃオレ達はジリ貧だ。

「久保、坂本、オレに一応考えがあるーか八かの博打みたいな方法だけだな。」

そうやってヒロがこっちに来た。

「その考えと言つのを聞こうか？」

「そうだね。まずはそれからだ」

「ああ、それじゃあ説明するぞ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ヒロSIDE

「 以上がオレの考えてきた作戦だ。Aクラスの何人かは確実に犠牲になってしまううえに確実に仕留められるかどうかも怪しい。

だからもしAクラスの奴らが嫌ならこのまま 」

「 いや、やろう！」

「 いいのか、久保？」

「坂本君も気付いているだろう？このまま行けば僕らは確実に手詰まりだ。それなら烏丸君の作戦に賭けよう！」

「久保がそう言うのならオレが反対する理由は無いな。 Aクラ

ス2番、3番隊下がれ！」

「これより1番隊の君達には高橋先生に特攻して貰う！まとまって攻撃したらダメだ！必ずばらばらに波状攻撃を仕掛けるんだ！いいかい！？」

『 『 『 おう！！ 』 』 』

「すまないな、久保。」

「何、お安い御用さ。それに吉井君の救援に速くいかないとまずい

だろう？悔しいが坂本君が動けない今、吉井君の助けになれるのは烏丸君だけだ。お願いだ。吉井君を助けてやって欲しい。」

「了解、力の限りやってみるよ。」

「ありがとう　　1番隊、突撃!!」

『『『おおおおお!!!!』』』』

「波状攻撃できましたか……。なら各個撃破するだけです!」

そう言つて高橋先生はAクラスの生徒一人一人の召喚獣に向かって鞭を放つた。

『クソ!やっぱ強い!』

あえて固まつて攻撃せずに必ずバラバラに攻撃を仕掛けて欲しいんだ。

『簡単にやられてたまるかよ!』

そうすることで高橋先生の注意はオレから外れる。

『速い　クソオオオオオオ!』

そしてオレは気付かれない様に高橋先生に接近して

「これで突撃部隊は全員終わりですね。」

「いや、終わりじゃないさ!」

「なっ!烏丸君!?!」

オレの召喚獣が高橋先生の召喚獣の後ろから取り付いた。

「上手くいってよかったよ。これであなを倒す事が出来る……。」

「クッ!離れなさい!!」

「そうはいくか!皆が繋げてくれたこのチャンス無駄にはしない

!【自爆】!!!」

そうしてオレの召喚獣は高橋先生の召喚獣ごと光に包まれて消し飛んだ……。

第42話 悪い事は出来ないものだ

明久SIDE

「ぐ……、ふう……。」

「どうした、吉井！この程度か！？」

鉄人の猛攻を僕の召喚獣が受けフィードバックで鳩尾に強烈な痛みが走る。

痛みのみならず、僕は膝をついていた……。

召喚獣による攻撃も鉄人の筋肉の鎧の前に大したダメージを与えられていないようだ……。

ここまでなのか……？皆が体を張って作ってくれたチャンスを僕は

……

「諦めてんじゃねえ！」

絶望しかけた時、不意に僕の横を何かがすごいスピードで通り抜け鉄人の顔面に向かって飛び蹴りを放っていた……。

「ぬおっ！烏丸、貴様か！」

かろうじてヒロの飛び蹴りをガードした鉄人がヒロの足を振り払った。

ヒロは振り払った力を反動に飛びあがり一回転して僕の横に着地した。

「ヒロ、どうしてここに？高橋先生と大島先生は！？」

「高橋先生は久保達Aクラスの協力もあつて仕留める事が出来た。

大島先生はムツツリー二の相手を手いっぱいだよ。あと坂本たちは後ろから来た教師の援軍と残存勢力を潰している。」

「じゃあ！？」

「ああ、ここを突破出来ればオレ達の勝ちだ！」

「フン！突破させると思うか！？」

「オレは勝ち目のない戦いはしません。オレ一人では無理でも吉井と2人ならきつと出来ます。」

「舐められたものだ。いいだろう！2人纏めてかかってこい！その思いあがり粉々に砕いてやる！」

「とは言った物のどうする、ヒロ？鉄人に普通の攻撃は効かないよ？」

相手は召喚獣の攻撃でさえ無効化する頑丈さだ。ただ人数が増えただけじゃ勝てないだろう。

「まあ、任せろ。『我に策あり』ってな。」

確かに昨日ヒロは『確実に勝てるように策を巡らせる。』って言うてた。

ならきつと対鉄人用の対策も練ってきているはずだ。

さっきまでの絶望的な気分が嘘のように僕の気持ちは晴れ渡っていた。

頭の中にあるのはもう『勝つ』事だけだ。覚悟しろ、鉄人！！

.....

ヒロSIDE

「.....そうか、確かにそうだね！」

「ああ、これを決める事が出来ればオレ達の勝ちだ！」

「さて、作戦会議は終わったか？」

「ええ、随分と余裕ですね。」

「どんな小賢しい策であろうとも真っ向から打ち砕いてやる！」

「僕達の力を甘く見るなよ、鉄人！」

「ちがうな.....。慢心でも見くびっている訳度も無い！オレ達教師は生徒の模範となる存在だ！向かってくる生徒を正面から受け止めるに何が教えられる！」

そうか.....。逃げずにまっすぐに受け止めるのはこの人の教師としての在り方なのか.....。

「西村先生、あなたがオレ達の担任で良かった.....。」

「見直したよ、鉄人.....。」

「「そう言う事なら全力で行くぞ（行きます）！.....」」

「フン、かかってこい！吉井、烏丸！！」

NO SIDE

基本的な陣形はヒロが前衛、明久が後衛で西村先生の攻撃をヒロが捌き明久の召喚獣がその後に来る隙を突き攻撃と言うシンプルな戦法だ。

集中できていないな。

流石に3連戦でヒロの体力は残り少なかった。ヒロ自身も集中力が切れてきているのがよく分かっていた……。

それでもやるしかない。感覚を研ぎ澄まして慎重に相手の流れを読み切れ……！

そうしないとあつと言う間にやられるぞ！

両者の間合いがジリジリとを詰められていく。

「フン！」

西村先生が拳を放つ。

ヒロがそれを手刀でなんとか捌く。

なんつう威力だよ！まるでハンマーじゃないか！これが人間の筋力で出来る事なのか！？

捌いた時に出来た隙をついて明久が召喚獣を繰り出して木刀を袈裟切りに放つがその木刀は咄嗟にバックステップをした西村先生には届かず空を切った。

「ほう？手刀を刀に見立ててきたか。動きが良くなっているぞ？」

「ええ、刀は手の延長線です。手刀にすれば攻撃の威力は落ちますがど代わりに相手の攻撃を捌く技術を格段に上げる事が出来ます。」

とは言った物の長期戦になれば勝ち目はないな。さっさと勝負を決めないと……

「どうした？集中力が切れてきているぞ？所詮下心による集中力なんてそんな物だ。おとなしく指導を受けろ！」

「いいや、鉄人！僕達は諦めない！そう、僕たちはあんたの弱点を知っているんだ。」

「オレの弱点だと？」

「そう、確かに僕達の攻撃はあなたの鎧の様な筋肉に防がれてほとんど効かない。けど一か所だけあなたがどう頑張っても鍛えようがない所がある事をヒロが教えてくれた！」
「なんだと？」

「あなたの言う通り『集中』させるんだ。今から放つ攻撃のすべてを　鉄人！あなたの股間に集中させる！」

「き、貴様ら何と言う恐ろしい事を考えるんだ！」

明久の召喚獣が西村先生の懐に突っ込みローに見せかけての金的狙いに变化するキック、木刀で足元を狙うと見せかけての股間を突き、拳を鳩尾から下腹部へと狙いを变化させる。

執拗に股間を狙い続けた。

「又オオオオオオ！！！」

西村先生は負けじと応戦しようとするがヒロの手刀による防御により攻撃は召喚獣に届かず、すべて受け流される。

西村先生の顔から余裕が消えた。

「こ、これほど執拗な急所攻撃をする奴は初めてだ……！！！」

「まだまだあ……！！！」

攻撃はひたすら西村先生の股間へ……！！

気が付けば西村先生は防御で手いっぱいだった……！！

「今だ！やれ、吉井！」

「悶絶しろ！鉄人！」

「ク……！！！」

吉井の召喚獣が股間へと攻撃を放つと同時にヒロが西村先生の頭に拳を放った。

そう、最初から股間狙いはフェイク。わざわざ『自分は防御しかない』『股間を狙う』と宣言したのは西村先生の注意を逸らす為の布石だった。が

「甘いわ……！！！」

ヒロの頭への一撃、明久の召喚獣の股間への攻撃は二つとも防がれてしまった。

「狙いは良かったがな……！お前らの負けだ！」

「いや、まだ終わらない！」

そう言つてヒロと明久の召喚獣はそれぞれ防御している西村先生の腕を動かせない様に封じた。

そう、この同時攻撃もフェイント……。

最後の一撃に繋げる為の……、勝利への布石だった。

「やれえー！明久アーーーーー！」

「行くぞ、二重^{ダブル}召喚！！！」

「まさか白銀の腕輪の同時召喚！？」

吉井のすぐそばにもう一体召喚獣が現れ、西村先生の無防備な首を木刀で攻撃した……！

「ぐ……！吉井、烏丸、貴様ら……！！！」

ドサリと音を立てて西村先生は床に倒れ伏した。

.....

HIRO SIDE

「勝った？」

「ああ、オレ達の勝ちだ……！」

「鉄人に勝てた……！」

「ああ、さすがにもう限界だよ……！」

「ありがとう、ヒロ！君のおかげだよ！」

「バーカ。決めたのは吉井、お前だろ？今回のMVPは間違いなくお前だよ。」

そう言つてオレは吉井とハイタッチをした。

「.....」

「なんだよ？」

「さつき鉄人に攻撃を仕掛けるとき『明久』って言わなかった？」

「……気のせいじゃないか？」

「気のせいじゃないよ！いいじゃないか、下の名前で！何だか今まで余所余所しさを感じたから嬉しくつて」

うん、鋭い……。オレが今まで一步線を引いていた事を無意識に見抜いていたのか……。
やっぱりこいつ侮れないな……。

「まあ、そうだな。『友達』相手に余所余所しいのはよくないよな、明久？」

「そうだね、ヒロ。さて、待ってるよ。美波のペツタンコ……。」

「結局覗く気満々かい……。」

「いいじゃないか。それともヒロは女の子に興味がないの？」

「興味深々だけどさ……。何と云うか人の道を踏み外す様な気がして……。」

「何言ってるんだよ、ここまで来て覗かないなんて女性に対して失礼だよ！」

「……そうなのか？」

「そうだよ！」

うん、何だか言いくるめられている気がする……。
まあ、いいや。疲れて考えるのが面倒になってきた。

そう考えて女子風呂の扉を開けた

ガラッ！

「ハッ！」

殺気？後ろか！？

バチバチバチ……！

「あ、危ねえ……。！スタンガンか……。！明久、無事か！？」

「う、うん。何とか……！」

「お姉さまの操は渡しません！」

「清水さん！」

「ゲッ！お前は島田のストーカーのロールパン！」

「誰がストーカーのロールパンですか！？この豚野郎！礼儀をわきまえなさい！」

「やかましい！初対面の人間を豚野郎呼ばわりする人間に礼を尽くす必要なんてない！」

とは言った物のこの状況はヤバイな……。あのロールパンが持つてるスタンガンは20万ボルトのやつだ……。触れたら最期、意識を一気に刈り取られてしまう。

「清水さん、そこを退いてくれ！」

「いやです！この時を待ち望んでいました！昨日からお姉さまの元気がないのも、お姉さまが美春に振り向いてくれないのもすべてあなたのせいです！死んで美春に詫びて下さい！」

そうやってロールパンは明久に向かってスタンガンを振り回したが

「このっ！このっ！このおっ！！」

「ホイ、ホイ、ホイ」

明久は余裕で避け続けた。

それもそうか……。さっきまで西村先生みたいな怪物を相手にしていたんだ。

あの程度の動き見切るなんて造作もないだろうな。

「この……！言う事を聞かなければこの写真を公表します！」

「うわっ！僕の恥ずかしい写真！？」

それを持っているってことはやっぱり

「清水さん、もしかして僕の事好きだとか……？」

「吐き気がします！」

「明久、状況を見てものを言え……。やっぱりお前が脅迫犯だったか、ロールパン！」

「フッフ、その通りです！いつから気が付いていたんですか、豚野郎？」

「確証は無かった……。最初は島田のファンのリストの中に入っていた要注意人物程度の認識だったんだけどな。明久の周りの異性つまりは島田に好意を寄せている人物、脅迫なんて卑怯な手段も平気でやりそうな鬱屈した性格、そしてお前プールの時に『自分には特別な情報網がある』って言っていたよな。それが校内の盗聴だとしたら犯人として当てはまるのはお前しかいなかった。」

「その通りです、豚野郎！お姉さまのチャイナドレスを撮影しようとしたらちよūdい脅迫のネタが通りかかったので撮影しました！」

「って言う事は清水さんのお尻に火傷の跡があるの？」

「な、何故それを！？まさか盗撮や盗聴をやっていますね！？許せません！そこを動かさないでください！写真をばら撒きますよ！」

そう言つてロールパンは明久にスタンガンを押し付けようとしたが

「よつと！」

「ああ！返して下さい！」

逆に明久がスタンガンを奪い取り、出力を最低にしてロールパンに押しつけた。

バチバチバチ……

「し、痺れますっ！！！」

ロールパンは呆気なく気絶した……。

「お前は甘いな。この合宿に入ってからからの災難のほとんどがこいつが原因なんだからもう少しキツイお灸をすえてやっても良かっただろうに……」

「え、だつて一応女の子だし……」

「まあ、そう言う優しい所はお前のいい所かも知れないけどな……」

「ありがとう、ヒロ。さてこれで全部片付いたかな？」

「……明久、ヒロ」

「ムツツリーニ！無事だったんだね？」

「……当然。ヒロも間に合つてよかった。」

「どうにか、こうにかだけどな。」

後ろから坂本を筆頭に各クラスの男子の面々がやってきた。皆それぞれ『やってやったぜ』と言う様なすつきりした顔をしていた。

『吉井、よく鉄人を倒してくれた。』

『お前が今回のMVPだ』

「ありがとう！けどヒロや皆が力を貸してくれたから勝つ事が出来

「たんだ。」

「謙遜するな、明久。オレは少し力を貸したただけだ。西村先生を倒す事が出来たのは、ほとんどお前の力だよ。」

「それじゃあ、そろそろ行くか」

「待った、坂本。その前にカメラを探さなくていいのか？」

「フツ、ヒロ。お前この期に及んで覗きに反対なのか？そんな事だから明久や秀吉の尻が好きなんて噂が流れるんだぞ。」

「な……！嘘だろ！そんな噂が！？」

「やっぱり吉井と出来ていたのか？」

「そうだろ、ここまで来て覗きを反対する理由なんてそれぐらいしか……」

「待て待て待て！オレはノーマルだ！女の子の方に興味深々だ！」
特に優子に興味深々です！

「え、嘘だろ？」

『どうせ言ってるだけだ……』

『そうそう、あいつはやっぱりそっち系だ……』

『そこそこかわいい顔してるもんな』

その言葉はオレの頭に血を上らせるのに十分だった。

「上等だ、テメエら！そこまで言うならオレがノーマルだって事を証明して見せてやる！」

「よく言った、ヒロ！皆！これだけ人数がいれば人物の特定も出来ないし、邪魔も排除できる！停学や退学の心配もないから思う存分楽しんでくれ！」

『『『おおおおおおおおお！！！！！！』』』

「全員心して見る！これがオレ達の勝ち取った栄光だ！！」

そう叫んで坂本は女子風呂の扉に手を掛けた。

そこに広がっていたのは

張りのある肌……

しなやかな肢体……

腰まで伸びた白髪……

見知った顔でありながら、衣服に包まれて一度も見ること出来なかつた姿。

この期を逃せば2度と見る事の出来ない様な、そんな

「な、なんだいあんた達は!? 雁首そろえてこんな老人の裸を見に来たのかい!？」

そんな学園長ハアサンの艶姿だった……

『『『割に合わねえーっ!』!』!』!』

余りの光景に全男子生徒が涙した……。

.....

この強化合宿についてのまとめを書きなさい

烏丸大貴のまとめ

色々と生命の危機が多かったがある事をきっかけに自分の精神的な弱さと向き合う事が出来た。仲間達と一緒にたくさんの思い出を作る事が出来た。

この合宿に参加して本当に良かったと思う。

教師のコメント

先生は自分の中の弱さを認め前に進もうとする人間は必ず成長出来ると思つています。

烏丸君がそう思えたのならそれは烏丸君が成長するための第一歩だと思ひます。

第42話 悪い事は出来ないものだ（後書き）

気づいたらお気に入り登録が100を超えていました……。
ヒヤッホー！ やったぜー！

……すみません、取り乱しました。

読んでくださった皆様本当にありがとうございます！
引き続き頑張りますので、宜しくお願いします！

第43話 停学とは公欠を言い変えただけのものだ！

.....
処分通知

文月学園第二学年全男子生徒総勢149名
上記の者達を一週間の停学処分とする。

文月学園学園長 藤堂カヲル
.....

停学一日目オレは静馬と一緒に腐界の森と化した我が家の片付けに
勤しんでいた.....。
どうやったら4日でここまで汚せるんだ.....。

ペットボトルは後で洗って漬けてスーパ―に持って行って、ト
レーは洗って指定のごみ袋に..... ああ、誰だよ！レジ袋の有料化な
んてアホな事言い出したの！ゴミを袋に入れて小分けが出来ないじ
やないか.....！
半ばうんざりしながら片付けていると.....

P r r r r r r、P r r r r r r r
「もしもし、明久か？どうした？」
『うん、あのさ、あの時覗きの事で頭がいっぱいだったから忘れて
いたけど脅迫の写真を清水さんから取り戻せていないんだけどバラ
撒かれてたらどうしよう.....』
ああ、やっぱり忘れていたのか.....
「心配するなよ。事前に優子に頼んで島田と姫路と一緒にロールパ
ンをマークして貰っていたんだ。それでさっき優子から電話があっ

てロールパンが脱衣所に仕掛けたカメラを回収する所を現行犯で押さえて貰った。明久のネガと坂本の偽プロポーズを回収して島田に『もし明久の写真をバラ撒いたら絶交する』って言って脅して貰ったから脅威は去ったはずだよ。」

『ああ、よかった。これで僕、枕を高くして眠れるよ。』

「安心するのはまだ早いぞ。」

『え？』

「その写真のネガは姫路と島田が持つてるんだからな」

『僕はもうダメだ……』

「あははは！まあ、島田と姫路も鬼じゃないんだし『何か奢るからネガを返して』って頼めば返してくれるって」

『……うん、わかった。そうするよ……。協力してくれてありがとう。それじゃあ、また学校でね』

「ああ、またな」

プツッ、ツー、ツー、ツー……

さてと、片付けの続き、続き……。

ピンポーン

お、誰だろう？新聞の集金か？

「はい！」

そう考えながらオレは玄関に向かった。

ガチャッ……

「こんにちは、ヒロ」

「ああ、優子か。来るなら言ってくれば茶菓子の1つでも用意したのに……」

「ううん、大した用じゃないから……」

「まあ、そんな所にいないであがれよ。」

「うん、それじゃあ……お邪魔します。」

何だろう？何か用かな？

廊下まで言った所でオレは動きを止めた……

「どうしたの、ヒロ？」

「優子、そこを動くな……」

「え？あ、うん」

そっと廊下のとある場所を叩くと

ガコン！

廊下の床が落ちた……

「……………」

「ヒロ……。これって……」

「ジジイ作成のトラップだよ。また新しいの作りやがったな、あのクソジジイ……。でもまあオレには通用しなかったけどな」

オレは勝ち誇った顔で”フフン”と鼻で笑っていると

ガラーン！

上から金ダライが落ちてきた……。

ドリフかよ……。

「だ、大丈夫？」

「……………」あのクソジジイ……。手の込んだ事しやがって……。」

「ヒ、ヒロ、落ち着いて」

「今日と言う今日は許さん！ぶっ飛ばす……！」

そう言っつてオレはジジイのいる今に向かおうとしたが

ガタン！（天井が落ちてくる音）

ゴン！（頭を打つ音）

「キユウ〜」

まさかの3発目のおかげで意識を飛ばされてしまった……。

.....

優子SIDE

「ちよつと、ヒロ？ヒロ！？しつかりして！」

おじいさん作成のトラップのせいでヒロが気を失ってしまった……。ああ、もう！なんで強化合宿での覗き騒ぎの真相を聞きに來ただけなのにこんな事に！

つて言うか何で家の中に普通にトラップが仕掛けてあるのよ！？

「あ、優子さん。こんにちは！」

「静馬君、こんにちは。つてそうじゃなくて静馬君、ヒロが」

「ああ、大丈夫だよ。いつもの事だから……」

「い、いつもの事だからって！？」

「こんな事いつもしてるの！？」

「5分ぐらいしたらまた起きるからこつちに寝かせておいて」

そう言つて静馬君と私でヒロを担いで今に寝かせた。

「おお、優子さん。久しぶりじゃの。学園祭以來じゃ」

「あ、おじいさん。こんにちは」

「久しぶりに優子さんの尻を」

「……おじいちゃん？」

「ハッ！ど、どうしたのじゃ、静馬？そんな怖い顔を……」

「ちよつと向こうの部屋でお話しようか……」

そう言つて静馬君はおじいさんの首根っこを引っ掴んで引きずつて行った……

「待て待て待つのじゃ、静馬！すまなかつた！ワシが悪かつた！だ

から ギャアアアアアアアアアアアアアア！！」

……慌て方がヒロそっくりね……

ヒロは まだ気絶してるし……。

あれ？今ヒロは隙だらけ？しかも周りには誰もいない……？

こ、これはチャンス？チャンスなの？

そう考えて私はヒロの顔を覗き込むように見た……。

うーん、少し可愛らしい以外には欠点らしい欠点も見当たらないけど逆に特徴のない顔よね……。競争率が低いから私には好都合だけどね……。

い、今ならヒロに何をしても気付かれない……

ハッ！けど眠ってる相手に色々するのは人としてどうなの？

いや、けどこんなチャンス逃せばこんな機会あるかどうか……

いや、いや、いいでしょ……

いや、いや、ダメでしょ……

そんな脳内会議が私の中で繰り広げられている間に

「ううーん……」

ヒロが目を覚ましてしまった……。

ちよっと惜しい事をしてしまった気がする……。

「ヒロ、大丈夫だった？」

「うーん、優子？なんでここに？ ってそうか……。あの後上から何か落ちてきて……」

天井がね……

天井がね……

「ジジイは何処行った？シバき倒さねえと……」

「大丈夫よ、おじいさんならあつちで……」

『静馬、お主最近関節技のキレが千鶴に近くなって……。ギャアアア

！……』

「……。……。……。……。大體理解した……。」

「理解してくれて嬉しいわ……。」

「で、どうしたんだ？」

「男子の強化合宿の時の行動の理由と何でヒロが協力したの？清水

さんの行動と何か関係があるの？」

ヒロ達の行動は本当に不可解なことだらけだったし、ここでハツキリしておこう……

「ああ、実は」

「……………」

「……と言つ訳なんだ」

「……………」

「

「返す言葉もない……………」

「けど少し安心したわ……………」

「安心？何でだ？」

「ちゃんと女の子に興味があるようで……………」

「うおお〜い！今のセリフは聞き捨てならないぞ！！」

「え？違うの？」

「オレは女の子に興味深々だって！」

「だって噂では」

「どんな噂を聞いたか知れないけどオレはノーマルだ！」

どんな噂って『ヒロは秀吉の恋人』だとか『ヒロは吉井君のお尻が

大好き』とか……………」

「……………」

「……特に優子には興味深々だぞ」

何かヒロが言った気がする……………」

「え？何か言つた？」

「……………」

「……何でも無いよ」

「……なんだろ？凄く気になるじゃない……………」

「まあ、冗談はこれぐらいにして……………」

「だよな、冗談だよな！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「よかった。ヒロが誰かに心を許す事が出来て……」

「……………気付いてたのか？」

「うん、一応ね……………」

本当はおじいさんに聞いたんだけど……

「何て言うか……………。自分の事を考えてくれる人や心配してくれてくれる人がいるって嬉しいものだよ……………」

そう言っただけでヒロは照れくさそうに頭を掻いた。

本当に良かった……………。

ヒロが変わる事が出来て……………。

ヒロが心から笑う事が出来るようになって……………

吉井君達に若干の嫉妬を感じながらも私は心からそう思った……………

……………

HIRO SIDE

1週間後停学明け……………

オレは秀吉（下の名前で呼ぶ事にした）と優子と一緒に登校していた。

「しかし家にずっといるってヒマな物だな。家事しかやる事が無かったよ。」

「そうかの？ワシはずっと演劇の練習が出来たからよかったがのう」

「あんた達少しは反省したら……………」

「あんなもの見せられて迷惑なのはこっちの方だ！と思ったが黙っていた。」

言えばサブミッションのフルコースを喰らう事になりそうだからだ……………」

「声に出てるわよ……………」

「ハッ！しまった！」

「じゃあ、望み通りにサブミッションのフルコース【Part2】をお見舞いしてあげる」

「ちよっと待て！【Part2】って事はパワーアップしてるのか

！？待った！オレの関節はそっちには曲がらなあああああ！！！！」
「……………。仲が良いのう……………」
そんな惨状を目の前にしながら秀吉は何処か他人事のように小さく
呟いた……………。

……………

教室に入って最初に見た物はFFF団が縛りあげた明久と雄二を囲
んで何か儀式の様な事をしている様子だった……………。

第3部完

第43話 停学とは公欠を言い変えただけのものだ！（後書き）

第3部終了！長かったです……。

そして総合評価が300突破！……まであと1つ

この調子で頑張りますので応援よろしくお願いします！

次は外伝を書こうと思います。

お楽しみに！

外伝5話 沖田静馬の家族

静馬SIDE

始まりは担任の先生の一言だった。

「はい、それじゃあ来週の月曜日に『私の家族と友達』という作文を提出して貰います。あ、沖田君は後で職員室に来て下さいね。」

『起立！礼！』

『さようなら！』

「バイバイです、静馬君！」

「うん、バイバイ。葉月ちゃん」

帰りの会が終わわり葉月ちゃんとも別れ職員室に寄ったら予想通りの話を持ちかけられた

「静馬君、宿題の作文んだけどキミは別に書かなくてもいいのよ。やっぱりね……。」

「なんでですか？」

何となく答えは分かっているけど一応聞いてみる。

「何て言うか……、その……、あなたには少し酷の様な気がして……。」
先生の言った通り僕の家は少し複雑だ。

僕が小さい頃にお父さんとお母さんが交通事故で死んでしまって、今は兄さんとおじいちゃんと一緒に暮らしている。

だからこう言う事で同情されたりするのは結構あったりする
向こうも気を使ってくれてる事が一応わかっているんだけど正直少
しうんざりしている。

両親がいないからって僕が不幸だって限らない。むしろ僕は幸せな
方だと思う。

兄さんは少し過保護な所があるけどいつも僕の事を一番に考えてく
れるし、おじいちゃんは僕に武道や面白い事を色々教えてくれる。

だから僕が不幸だつて決めつけて接しないで欲しい。

「大丈夫です。書けます。」

「そう？沖田君がそう言うならいいけど……。」

.....

さて、まずは兄さんの事から書こう。

『ジジイ！テメエ！また新しいトラップを　！』

『ほっほっほっ！引つ掛かる方が悪いんじゃないよ』

『上等だ！今日がテメエの命日だ！覚悟しろ、クソジジイ！』

『いいじゃろう、かかつてこい！未熟者め！』

下から聞こえる喧騒をいつもの事だと無視して僕は作文に取りかかった

えっとまず……

僕は兄さんとおじいちゃんと一緒に暮らしています。

兄さんと言っても伯父さんですが兄さんに向つて伯父さんと呼ぶと凄く落ち込むから僕は兄さんと呼んでいます。

僕と一緒に暮らしている兄さんの烏丸大貴は一言で言うつと凄い人です。

趣味は野球で以前は有名な野球チームに所属していて今でも時々近所の人と草野球に行っています。

そして高校に行きながら家事全般を難なくこなし、頭も良くて、運動もできる優しい自慢の兄さんです。

特に料理の方はすごく上手で兄さんの作る料理は僕の大好物です。

最近はその込んだお菓子類に手を広げ始めよく台所でシュークリーンやレアチーズケーキなどを作っています。

一見すると欠点が見えない人間に見えますが、実はカナヅチでプールが大嫌い、遊園地のジェットコースターも怖いと言う子供っぽい所があります。

なお少し天然なところもあり、前にテレビのCMを見て冗談で「お菓子の家に住みたい」と言ったら「そんな蟻や虫が喜んで寄って来そうな家はやめておけ」と真剣に返してきたこともありました。

そしていつもおじいちゃん作成のトラップの実験台にされたり、バナナの皮で滑って転んだりおみくじでは絶対に【大凶】以外出て来なかつたりと少し運も悪いです。

最近は凄く綺麗な彼女が出来たみたいでよくその彼女が家に遊びに来ます。

色々な人に頼りにされている兄さんを僕は本当に尊敬しています。次におじいちゃんですが、兄さん曰く【八丈迷惑】が服を着て歩いてるような人らしいですが僕もその意見は的をいっていると思います。趣味は武道全般とトラップ作成、そして作ったトラップの矛先はほとんど兄さんに向きます。兄さんをトラップに引っ掛けては殴り合いのケンカになります。いつも兄さんが負けてしまいます。

他にも色々とバカな事を言っただけ兄さんに怒られています。本人は余り堪えている様子はありませんが、そんなおじいちゃんですがたくさん物を知っていたり僕に武道を教えてくださいと凄く頼りになる存在です。

「うーん、どうしよう……。他に書く事が見つからないや……」

「2人ともいい加減にきなさい！」

「止めるな、優子！今日と言う今日はこのジジイの息の根止めてやる！」

「やってみるが良い！大バカ者めが！」

あ、優子さん来てたんだ。

「やってやるとも！……って優子さん？どうしてそんな【いい笑顔】

でオレに迫って来られるので?……待て待て待て!ごめんなさい!すみません!オレが悪かったから関節をあらぬ方向に曲げるのはやめ……………ギヤアアアアア!」

『ホツホツホツ!目上の者を敬わんからそうなるのじゃ!』

『おじいさんも後でお仕置きして貰うように静馬君に言っておきますから……………』

『申し訳なかった、優子さん!じゃからそれだけは!それだけは平にご容赦を!』

……………うん、ついでだから優子さんの事も書いちゃえ!

最近よく家に遊びに来る兄さんの彼女(本人達によると付き合っていないらしいけど)の木下優子さんは凄く綺麗な人です。それでいて凄く優しくて頼りになります。

おじいちゃんと兄さんがケンカしたときにケンカ両成敗と言って両方に芸術的ともいえるサブミッションを掛けます。最近僕も優子さんにサブミッションを習い、おじいちゃんがバカな事をした時のお仕置きにこれを使います。

優子さんは兄さんととても仲が良くいつも2人でどつき漫才のような事を行っています。

僕も優子さんが大好きです。

おじいちゃんが言うには優子さんは性格や雰囲気死んだ僕のお母さんにそっくりだそうです。

兄さんがいて、おじいちゃんがいて、優子さんがいる僕はそんなこの家が大好きです。

「ふつ、こんなものかな?」

『静馬!晩飯が出来たから降りて来!い!』

「は!い!今行く!」

さて宿題も終わったし、早くご飯を食べよう。

「今日の晩御飯は何かな？」

外伝5話 沖田静馬の家族（後書き）

総合評価300遂に突破しました！

評価したくださった皆様本当にありがとうございます！

第4部開始 第44話 その場のノリは結構大事

さて一週間ぶりの教室だ。少ししか離れていなかったのになんだか久しぶりの様な気がする。

ガラッ

『『『エロイムエツサイム、エロイムエツサイム、我は求め訴えた
り……………』』』

ガラッ！ピシヤッ！（扉を閉める音）

「……………」

何やら信じられない光景を見たような気がする……………
何の儀式だ、一体……………

「……………秀吉、今のなんだと思う？」

「さすがに分からのじゃ……………。と言うかあれは現実じゃったんじやろうか？」

「そうだよな。いくらFクラスって言ったってあんな大それたことする訳ないよな……………。」

「きつとオレ達疲れてるんだな……………」

「そうじゃの……………」

「とりあえず秀吉は保健室に行つてなんともないか見て貰つてこい。」

「分かつたのじゃ。」

さて、秀吉は保健室に行つたしオレはさっきの光景を幻覚と確かめるためにもう一度ドアを開くとしますかね。

深く深呼吸をして、ストレッチ、もう一度心の準備をしてFクラスの教室のドアを開けた……………

ガラッ

『『『ベントラ、ベントラ、スペースピープル！……………』』』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうしよう、今すぐ回れ右をして逃げ出してしまいたい……

って言うか『宇宙人呼んでどうする!?!』とか『何でそんな昔に流
行った事を知っている!?!』とか突っ込みたい所は山ほどあるが黙
っておいた。

なぜならオレは空気の読める男だからだ!決して矛先がこっちに向
きそうだからとかへタレた理由ではない!

『異端者、吉井明久。汝自らの罪を悔い改め裁きを受け入れるか?』

「あのさ、返事をする前に聞きたい事があるんだけど」

『聞いてやるう』

「裁きって何をするの?」

『まず灯油とライターを用意して』

「濡れ衣です!僕ほど教義に順ずる信者はいません!」

どうしよう、教室で殺人事件が起こってしまう……

え?止めてやらないのかって?

・・・・・・・・・・。

バカを言うな。事情もよく分からずあんな集団の中に飛び込んでい
けるか!

オレだって自分の命は惜しい……

「そうか。ならば『告白を強要』するだけだ。」

「言った!今いきなり『告白の強要』って言ったよ!?!この裁判は
無効だ!」

『そうだ!告白を強要しろ!』

『議事録を改竄しろ!』

どうやら日本の憲法とは別にこのFクラスには独自の法律があるよ

うだ……

そうでなければ憲法の全体の3分の1に渡って規定されているの基本的人權の尊重を見事に無視した発言は出来まい……

『ええい、灯油とライターの用意はまだか!?』

「告白させるための拷問もそれなの!? 要するにどっちも処刑じゃないか!」

『違つぞ、吉井。罪を認めない場合は自白用と断罪用の二回あるから一回分お得なんだ。』

またそれは斬新なロジックだな……

「騙されない! 騙されないぞ! そんな洗顔料の増量キャンペーンみたいな売り文句で言われても僕は騙されないぞ! 雄二、黙ってないで何か言つてよ! このままじゃ僕達焼死体だよ!」

「てめえら……、やるならコイツだけやれ!」

「雄二、ありが……つて違つ! そのセリフはよく考えると僕を売って自分だけ助かるうとしてるだけじゃないか! このゲス野郎!」

よく考えなくてもそうだろ。けどその訳の分からない言い分が通る。それが坂本マジックです……。

『男らしいじゃないか、坂本。では望み通り吉井だけをやつてやる!』

「気付いて、須川君! このままだと被害者は僕だけだと言う事に!」

どっちみち明久は殺されてしまう訳な……

『灯油の手配が遅れているようなのでここは吉井に【特別バンジージャンプ】をして貰おう。』

「須川君、一応聞くけどその【特別バンジージャンプ】って何なの？」

「そうだな、多くを説明すると吉井に余計な不安を与えてしまうからヒントしか言えないが　パラシュートのないスカイダイビングとだけ言っておこうか……」

「余計な不安も何もヒントだけで丸分かりだよ！紐無し？紐なしのバンジージャンプをやらせる気！？」

さて連中が暴走を始めない内にブレーキをかけるとしますかね。

「全員落ち着け！」

「おお、異端審問会特別処刑執行人カラスよ……。来てくれたのか？」

「その中二病臭い呼び名はやめてくれ……。一体何があつたんだ？」
「実は」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「と言つ訳だ」

「つまり、明久が島田とキスをしたから妬ましいってことだな……」

「『その通りだ！』『』」

「バツカヤロー……！！！！」

「ヒロ！ヒロなら僕を助けてくれると思ってい」

「バカか、テメエらは！そんな重罪人を一瞬で殺して楽にしてしまつていいのか？」

いや、よくない！（反語）断じて良くない！（さらに強調）ここはじわじわ苦しめて殺すぐらいの残虐さと余裕を見せて見せる……」

『『『『』』』』 おお、流石だ。処刑人！』』』

「やめてえ！ヒロ、お願い、助けて！」

ふっ……ごめんな、明久。お前とは良い友達だけどオレは仕事に私情は挟まない主義なんだ……。決して面白そうとか、妬ましいとか、そういう理由じゃないとオレの名誉の為に言っておこう！

『して、処刑人烏丸。どのようにして裁きを下す？』

「ちょうど逆さ吊りになってるし、五寸釘と蠟燭で土方歳三風、升屋喜右衛門コース行ってみようか」（訳が分からない人は池田屋事件を調べてね）」

「ちよつと、それって池田屋事件の時の！？」

「お、ちゃんと勉強してるんだな。」

「まあね、この間の召喚大会の時に頑張って勉強したから日本史と世界史はちよつとした得意科目になってるんだ」

「よしよし、偉いぞ、明久。ご褒美にキャラメルをあげよう」

「わーい！久しぶりのカロリーだ！って違う！そうじゃない！僕をあんな凄惨な拷問にかける気？」

「ご名答！最近察しが良くなってきたな。と言う訳で須川。手配を頼めるか？」

『了解した。すぐに準備に取り掛かるう！』

『『『『おおおおおおおお！』『』『』』』』

「嫌アアアアアアアア！！！！」

「……停学明け早々何をやっているんだお前達は……？」

「あ、西村先生、おはようございます。」

いつの間にか、西村先生が入ってきていた。

疲れているようで額に手を突いてため息をついている

「あ、先生！ちよつどいい所に！助けて下さい！校内暴力です！」

『『『『違います！これは行内の風紀を守るための聖戦です！吉井は不純異性交遊の現行犯なんです！』『』『』』』

うっん、覗きで停学になった奴が校内の風紀を語ってもな……。

「と言う事だが、烏丸どつちなんだ？」

あ、こつちに振ります？じゃあ

「え〜っと、須川達に一票」

「それじゃあ朝のホールームを始める。」

「せんせ〜い！！」

普段の行いが良いってお得だね

「連絡事項だ。先週から行われている召喚システムのメンテナンスだが予定が遅れている。教師も動員して推進しているが明日まで終わりそうにない。その間は試召戦争が出来ないので注意するように以上」

言うだけ言つて西村先生は教室から出ていった。

『吉井、抵抗するな！往生際が悪いぞ！』

「くそつ！誰か助け　そうだ、姫路さん！優しい姫路さんなら僕を助けてくれるはず！」

そう言つて明久は薄暗い教室を見渡し姫路を見つけると迷わず助けを乞つた

「お願い、姫路さん！僕を助けて！」

「美波ちゃんもしかして明久君の事を……。」

「ええ！？まだそれやってるの！？」

残念、姫路はどっかにトリップしている最中でした……。

「さて明久、覚悟はいいか？」

「クツ！万策尽きたか……！！」

「こ、これは一体何事じゃ！？」

保健室から秀吉が戻ってきた。

「秀吉、良かった。ずっと来ないから今日は休みかと思つてたよ。」

「おお、秀吉。具合はどうだった？」

「幸い何ともなしじゃ！してヒロよ、これは何事なのじゃ？」

『木下、邪魔をしてくれるな。今我々は異端者である吉井明久と坂本雄二の二名を処刑人烏丸の指導のもと拷問にかける所なんだ。』

「……ヒロ、お主も何をやっておるのじゃ……」

「集団生活を送る上でその場の空気を読むこととノリは大事だろ」

「……。まあ、雄二は分からんでもないのじゃが明久は何をしたんじゃ？」

『よく聞いてくれた、木下。異端者・吉井明久はよりにもよって我らが聖域・文月学園の敷地内で朝っぱらから島田美波と接吻などと言ふ不埒な行為を』

ガラッ……

須川の向上の途中に耳まで真っ赤にした島田が教室に入ってきた。

『『『……』』』

噂をすればなんとやら……

妙な雰囲気飲まれ全員静まり返った……

そして

「おはようございます、皆さん。今日は布施先生がお休みなので代わりに私が1限目の授業を　　ってどうしたんですか、皆さん？」

1限眼が始まった……

第45話 悪乗りしすぎた後は反省しましょう・・・

教室内の空気が重く静寂が場を支配していた……。

前では教師が黒板に板書している。

今までこんなに静かな授業があつただろうか？

いや、オレの知る限りでは一度たりともなかった。

この静寂はFクラスの皆が勉強に目覚めた訳ではなく、かと言って全員が眠っている訳でもない……。

皆の表情は真剣そのものだ。

そう、クラス全員が真剣に明久の方を睨んでいた……。

『では須川君、この場合3モルのアンモニアを得るために必要な薬品はなんですか？』

『塩酸を吉井の眼に流し込みます』

『違います。それでは朝倉君』

『塩酸を吉井の鼻に流し込みます』

『流し込む場所が違うという意味ではありません。では有働君』

『濃硫酸を吉井の眼と鼻に流し込みます』

『違います。真面目に答えて下さい。それでは烏丸君』

「吉井を吊るした、塩酸を吉井の眼と鼻に流し込み殺害、その後97%の濃硫酸の中に死体を放り込んで証拠隠滅を謀ります」

『……それだつ！』

『それだ！ではありません。それと答えるときは吉井君の方ではなく先生の方を向くように……』

キーンコーンカーンコーン

『今日はここまでにします。』

呆れたようにそう言って先生は出て行ってしまった。

『吉井の奴、島田と眼と眼で通じあってやがったぞ……………!』

わあ、E・Tみたい……………

『島田は狙い目だと思っていたのにあのクソ野郎……………!』

その言い方は島田に失礼じゃないか？

『畜生……………! 姫路、木下、烏丸に引き続き島田まで持っていかれたら、このクラスの希望はアキちゃんしかいねえじゃねえか!』

鳥肌が止まらないよ……………

アキちゃん、秀吉、オレは男だつて……………

なんでそう言う対象で見られてんの？

そしてオレがいつ明久に持って行かれたんだ？

優子なら持つていかれてもいいが明久に持つていかれるなんて死んでもゴメンだ!

悪ノリして煽りまくった事を今は凄く反省している……………

コレ、どうやって収集つけるんだ？

「あ、アキおはよう……………」

「うん、おはよう……………」

はい、そこ! 火に油を注ぐような真似はやめた方がいいぞ! さつきからFFF団が明久の死体の処理方法を議論しているから怖くて仕方がない……………

この集団はある意味西村先生より怖い……………

「あ、あのね、アキ。お願いが二つあるんだけど、いいかな……？」
「お、お願い？何かな？」

「えっと一つはアキの卓袱台と一緒に使わせてほしいんだけど……」
「へ？卓袱台？」

「うん。ウチの卓袱台先週美春と色々あつて使いにくくなちゃつて……」

島田が促す方向に目を向けると点板が傷だらけになり、足も一本折れているボロボロの卓袱台があつた……
うん、確かにあれは使いづらিদらうな……

「う、うん別にいいけど……」

「ありがとう。と、隣座るね……」

「……」

「な、何よ、アキ。何で黙りこむのよ？」

「い、いや。その、別に……」

参つたな……。本当に妙な雰囲気だ……。

あれ？そう言えばロールパンがないな？

こういう事には真つ先に飛び込んできて『豚野郎を抹殺します！』とか言いそうなのにどうしたんだ？

まあ、来なければ来ないで平和でいいんだけどな……

「それとね、アキ。二つ目のお願いなんだけど……よかつたら、その……お昼一緒に食べない？」

「あ、そ、そうだね。じゃあお昼に水飲み場で……」

どうしよう……。周りの殺気がどんどん膨らんでく……。このままじゃ暴動に発展しかねない……。

神様、オレは今、朝悪ノリしてFFF団を煽りまくった事を凄く反省しています。だからこの状況を何とかしてください！お願いします！

「うっん。そうじゃなくてね、今日ウチがアキの分も作ってきたから」

「お姉さま！何をしているんですか！？そんな豚野郎に密着して！」

あ、やっぱり来た……。これは状況が良くなったんだろうか？悪くなっただろうか？

判断に迷うところだ……。

「当然です！その豚野郎がお姉さまに密着しているところを見て黙ってられるはずがありません！」

まだ懲りずに盗撮や盗聴を続けているのか……。呆れた奴だな……。

「み、密着って仕方ないでしょ！？代わりに卓袱台なんてないし、狭いんだからくつつかないといけないし……」

そもそも原因はお前にあるしな……

「お姉さま、それなら姫路さんの所でいいじゃないですか！どうしてそんな豚野郎の所に行く必要があるのです！？」

「そ、それは……、だって瑞希はきちんと勉強するから邪魔しちゃう悪いでしょ？その点アキなら邪魔になってもならなくてもどうせ成績悪いんだし……」

「美波、僕微妙に悪口言われているような気がするんだけど？」
言葉とは裏腹にあからさまに罵倒されて『ホッ』とした顔をしているぞ？

ついにそっちの趣味に目覚めたのか？

「あの、美波ちゃん。私は別に邪魔だなんて思いませんからこつちに来てください。その……色々と話したい事もありますし……」
「気持ち嬉しいけど瑞希は優しいからウチが邪魔でも我慢しちゃうでしょ？」

「い、いえ、本当に邪魔じゃありませんから！」

「そうですねお姉さま！席を移動して手作り弁当は美春と一緒に食べましょう！お姉さまが昨日お弁当用の食材を買っている姿を確認してから、美春は何も食べずにたっぷりとお腹を空かせてきましたから！」

「でもこれはアキの為に」

「お姉さまが朝4時に起きてワザワザお手製のタレで下味をつけた唐揚げとか、ちよつと奮発して買った挽肉で作ったハンバーグとか、産地に気を使って選んだジャガイモで作ったポテトサラダとか考えただけで美春は、美春は……！」

「島田！110番だ！ストーカーがここにいる！」

「出ましたね！？ 烏丸大貴！ この【検閲削除】野郎！ 黙っていてください！」

「豚野郎からグレードアップしてるじゃねえか！？ この【検閲削除】女！」

ひたすらガンのくれ合い、飛ばし合い……

前から薄々感じていたけど、今はつきりと認識したよ……。オレはこいつが大嫌いだ！

「烏丸、抑えて……。美春、よく聞いて欲しいの。今までは我慢してきたけどこれからはそう言う事やめてほしいの。だってウチは

アキと付き合ってるんだから！」

「畳がえし！」

シユカカカカッ（カッターが畳に刺さる音）

『『『チツ』』』』

うお、カッターがいきなり明久を目掛けて飛んできた！？
危ないクラスだな、ホントに……

「お、お姉さま……。付き合ってるなんて冗談ですよね？」

「冗談なんかじゃないわ、ホントの話」

いつの間に付き合う事になったんだ？

全く明久も隅に置けないな……。

「それじゃあ美春の幻覚だと思っていた朝のキスも……？」

「……うん。だから美春これからはウチの」

「……男なんか」

「あくまで友達として」

「……男なんかが存在するからお姉さまが……！」

「って美春、聞いてる？」

ヤバイな……。冗談抜きで明久を護った方が良さそうだ……

「この豚野郎を始末します！　そして美春が第二の吉井明久としてお姉さまと結ばれるのです！」

「ちょ、ちよつと清水さん！？　かなり錯乱してない！？　僕を始末した所に入れ替わるのはかなり難しいと思うけど……！」

「いいから逃げる、明久！　こう言う奴を説得しようとしても時間の無駄だ！」

「極力体を傷つけない様に始末した後、剥いだ皮を被って吉井明久になり済みます！」

「それ凄くグロいよ！　しかもちよつと本気で考えてそうだし！」

「ちょっと所じゃない！ あの眼は『本気』と書いて『マジ』だ！」
「大丈夫です！ 日本昔話でタヌキさんそうしていました！」

「しかも原点は意外と可愛い！？」

「烏丸大貴ごと葬ってあげます！」

「あれ？ オレまで抹殺対象に入ってる！？」

「調べによると烏丸大貴は1年前まで彼女がいたそうです！ しかも現在はAクラスの木下優子さんと【友達以上恋人未満な関係】だそうです！」

何故オレの経歴を知っている！？ Fクラスの連中をけしかける為に調べたのか！？

『『奴らを殺せ！ 生かして帰すな！』』

「ま、拙い！ 逃げるぞ、明久！」

「うん、了解だよ！ ヒロ！」

Fクラスの奴らまで清水と一緒に襲ってきた。しかも全員統率がとられ、動きが人間離れしてる！

これは吉井と2人じゃ厳しいか！？ それなら救援を呼ぶだけだ！

「ムツツリーニ頼む！ 手を貸してくれ！」

「……………今練り消しを作るのに忙しい。」

友人2人の命く練り消し

「クソオオオオオ！ 覚えてるよ、ムツツリーニ！」

「練り消しを作ってるふりして飛び回ってる清水さんのスカートを目で追ってるムツツリーニなんて大嫌いだ！！」

「……………！！」（ブンブンブン）

否定のポーズをとっているがスカートから目を離さない……。
何て欲望に忠実な奴なんだ。隠す気あるのか？あいつ……

「男なんてこの世からいなくなってしまうばいいんです！ お姉さまに必要なのは美春なんです！」

「お前本当にいい加減にしろよ！ 本当に相手の事を好きなら相手の気持ちも考える！」

「待って、清水さん！ 君にだってお父さんがいるでしょう？男なんていなくなればいいなんてそんな悲しい事言っちゃ駄目だよ！」

「アレは誰より先に消えるべき男です！」

なんて奴だ！育てて貰った恩とかないのか！？

「とにかく豚野郎は消えるべきです！ そして美春はお姉さまと結婚して生まれた子供に【未来】と名付けるのです！」

「待つんだ、清水さん！ 男が生まれたらどうするんだ！？」

「男なんか【波平】で十分です！」

「テメエ！親から愛されなかつた子供がどんな気持ちになるかちゃんと考える！生まれる子供を愛せないなら最初から結婚して子供を作るなんてほざいてんじゃねえ！」

「3人共！その前にウチと美春じゃ子供は出来ないって気付きなさいよ！」

そうこう言っている間にすっかり囲まれてしまった。

「さあ、5秒あげます。神への祈りを済ませなさい！」

「く……！」

「万事休すか……！」

ガラッ

「さあ、授業を始めるぞ！今日は遠藤先生がいないからこのオレが
ピシビシ　　ん？やれやれ……また清水か……。授業が始まる
から自分の教室に戻る様に」
西村先生！あんたオレ達にとって救世主だよ！神様、ありがとう！
オレ今日から心を入れ替えて清く正しく生きていくよ！

「きよ、今日は先週までと違って特に大事な用なんです！西村先生、
今だけ美春を見逃してください！」

「特に大事な用？どんな用だ？まさか先週みたいに『邪魔者のいな
い教室でお姉さまと2人でゆっくりと授業を受けたいんです』とか
じゃないだろうな」

「いいえ！今日は『この教室に存在するすべての男子を殲滅する』
と言う特に大事な　　」

「凄え！西村先生に挑戦状を叩きつけたぞ、あいつ！
「今後この教室への立ち入りを禁止する」

ピシャン（ロールパンを教室から締め出す音）

『お、お姉さま！まだお話が！せめてその豚野郎から離れて貞操を

』

追い出されてもなお、扉を叩き続けるロールパン……
その執念だけは認めてやるが、今回は相手が悪い……

「清水、最近のお前の行動には目に余るものがある。そんなに生活
指導を受けたいか？」

ドアを叩く音がピタリと止んだ。

流石のロールパンも西村先生の鬼の補習は怖いようだ……

『お姉さま……！卓袱台だから豚野郎の近くにいると言つのなら、美春にも考えがありますからね……！』

随分引つ掛かる物言いだな？何だか嫌な予感がする……

「さあ、席に付け！遊ぶのなら休み時間にしろ！」

西村先生の怒号を受けクラスの間中はカッターナイフをしまい席に着いた。

(明久、一旦は収まったが休み時間に必ずあいつらは再び襲ってくる。チャイムが鳴ったらダッシュで逃げる)

(了解。けど朝は僕の敵だったのに何でいきなり味方してくれるの？)

(……朝、悪乗りしすぎたからな。少し反省した。まさかここまで尾を引く事になるとは思わなかったから……)

(分かった。ヒロを信用するよ)

(ありがとう、明久)

そして休み時間カッターが飛び交う中オレと明久とFFF団による地獄の追い駆けっかが繰り広げられた事は言うまでもないだろう……

第46話 素直になる事はなかなか難しい・・・

「な、なんとか逃げ切れたね……」

「ああ、今回はかりは本当にダメかと思ったよ……」

なんとかFFF団の追撃を逃れたオレ達は教室に戻っていた……

ガラッ

「たっだいまゝ！ってあれ、どうした？そんな深刻な顔して」

「なに？また何かトラブル？」

「……………（コクリ）」

全く騒動の種が絶えないな、このクラスは……

「ああ、明久のせいで面倒な事になりそうだ」

「明久のせい？どう言う事だ、雄二？」

「……………Dクラスが試召戦争を起こそうとしている」

「DクラスがBクラスに攻め込んでも僕らには問題ないんじゃないの？」

「お主の言う通り標的がDクラスなら問題は無かったのじゃが……」

「Bクラスじゃないの？まさか！Aクラスに！」

「違う、言っただろう。明久のせいだって」

「……………まさかその標的って……」

「……………Fクラス」

なるほど。ロールパン言ってた事はこういう事が……

「ええ！？でも僕達に勝つてもDクラスにとってやる意味がないんじゃない……？」

「明久よ、相手はDクラスじゃ。何か思い当たる節があるじゃろう？」

「……まさか、清水さん？」

「……（コクリ）」

「卓袱台じゃなければ明久と島田が引つ付く必要がないってことか……。まさかあのロールパンがDクラスの代表だとは思わなかったよ。」

「いや、違つぞ。Dクラスの代表は平賀と言う男子生徒だ」

「え？それっておかしくないか？いくらなんでも代表じゃないならクラスを動かす権限はないだろ？」

「本来ならそうなんだが……。今の状況が問題になってくる。今オレ達は集団覗きの主犯だ。普通の女子はオレ達にいい感情を抱いていない。むしろ自分達で罰を与えてやりたいと思うだろうな。」

「Dクラスの代表は男子じゃ。今の覗き犯扱いの状況では発言力は皆無じやろう。怒りに燃える女子と嫉妬に燃える清水を押さえられるとは思えん。」

拙いな。そうなれば学祭でのあの苦勞は水の泡だ……

姫路の転校だつて考えられるだろう

「雄二、勝算はあると思うか？」

何となく返ってくる答えは予想できるが一縷の望みをかけて聞いてみた……

「苦しいな。うちのクラスは朝からの騒ぎの所為で点数補充が出来ていないし、女子も島田と姫路の2人だけ。万全の状態でも作戦が泣けば太刀打ちできないのに点数が残っているのが島田と姫路だけ

となるとよほどの事がない限り勝ち目はないな」

「やっぱりか……。雄二の言う通りオレ達の点数は限りなく0に近い……。オレに至っては文字通り0点なのだ……。そんな状態で攻め込まれたら間違いなく負ける」

「ってなワケで今回の試召戦争は回避する方が賢明だな。」

「え、回避できるの？」

「お前と島田次第だな」

そう言っただけで雄二はキョロキョロとあたりを見回し始めた

「どうしたの、雄二？」

「いや、島田が近くにいないかなと思って」

「美波ならさつき姫路さんと一緒に何処かに言ったけど？」

「………修羅場だな（じゃな）」

「え？あの二人喧嘩してるの？」

「………。」

何を言っているんだ、このトンチキは……。修羅場の原因は間違いなくお前だ……

「それより明久、確認しておきたい事がある」

「ん？何？」

「お前と島田は付き合ってるのか？」

「僕の記憶だと、付き合っていない……かな？」

「じゃが島田の態度は付き合ってる物のソレじゃぞ？」

「うん。それはたぶん僕の送った間違いメールが原因で……」

「あの時のアレか！？」

「なんだ、ヒロ？知ってたのか？」

「ああ、一応な。けど合宿中に誤解を解いたと思って気にも留めてなかったよ」

「一体何があったのじゃ？」

「実は」

.....

「と云う訳なんだ」

「なるほどのう。明久も明久じゃが……雄二お主も素晴らしいタイミングでやらかした物じゃのう……」

「全くだよ。腹を切って詫びるべきだね」

「う……。まあ、確かに悪かった。すまん、明久」

「……………けど元はと言えば明久の確認不足」

「誤解を解くより覗きを優先させるとは……。全く呆れるよ……」

「うっ！確かに……」

「だが誤解だと言っのなら話は早い」

「え、何が？」

「Dクラスの試召戦争の話だよ。ロールパンに誤解である事を伝えて、開戦ムードに水を差すんだ。そうすればロールパンは沈静化、開戦派の核がいなくなりこの騒ぎは解決してめでたし、めでたし。」

「ってことだろ？」

「そう言っ事だ。」

バン！

「明久君！美波ちゃんに告白したって本当ですか！？」

姫路が物凄い勢いで明久に詰め寄っていた。

「え？な、なに！？」

「そ、その……！あ、明久君は本当に美波ちゃんにこ、告白したんですか……？」

「えっと……、その……それなんだけど……」

「待った。その話なんだが島田と一緒にの方がいいだろう。姫路島田は今何処にいる？」

「美波ちゃんならさつきまで一緒に屋上にいましたけど……？」

「よし。それならオレ達も屋上に行くか。」

「そうだね。姫路さんには往復になつて申し訳ないけどね。」

「あ、いえ。私は全然構いませんので……」

「ムツツリーニ」

「……どうした、ヒロ？」

「たぶん屋上にロールパンが仕掛けた盗聴器がある。そいつを無効化して貰えないか？これからの話は島田が恥をかくような内容になる。そんな物があのロールパンの手に渡ったら余りにも島田に酷だ……」

「……任せろ」

「頼んだ」

……

「あ、瑞希　とあんた達も？皆してどうしたのよ？」

「ムツツリーニ」

「……（コクリ）」

頼んだ通りムツツリーニはロールパンの仕込んだ盗聴器を処分してくれた。

さてこれで話しやすくなった。

「どうかしたの、アキ？」

「あー、ええつと……神よ、ご加護を……」
「スパーン！」

「ええ加減にせんかい！腹括って白状しろ……」

「痛いよ、ヒロ！ハリセンなんて何処から「企業秘密だ！」

「うむ。お約束のやり取りじゃな。」

「で、どうしたの？」

「うん。実は強化合宿の時に僕が送ったメールの事なんだけど」

「……………」

「……と言っ訳なんだ」

「……………。そっか、誤解だったのね。ウチもちよつとおかしいなって思ってたのよね……………」

「アハハハ！美波もそっかしいなあ！」

「もうっ！送り先を間違えたアキに言われたくないわよ！」

2人で笑いあっている……………。よかつた……………。島田が怒り狂う事を予想していたけど思ったよりすんなりと事が運びそうだ。
本当に2人がケンカする事にならなくて

「どうしてくれるのよ！ウチのファーストキス……ッ！？」

よくなかつた……………。時間差攻撃か！やるな、島田……………！

「……………ごめんなさい！僕も悪気は無かつたんですつ！」

「……………ごめん済む問題じゃないでしょっ！」

うーん、告白が誤解だって知って島田の怒りは尤もなんだけど、キ

スをしたのは島田の判断であつてそのことで一概に明久を責める事はできないんじゃない？……？

「そ、その……美波？」

「何よ！？」

「僕も初めてだからオアイコつて事じゃダメかな？」

「いや、ダメに決まつてるだろう」

雄二、鋭い突っ込みありがとう

おかげで明久にツツコミを入れようとして大きく振り被つたハリセンを何処に持つていけばいいのか分からなくなつたよ……
クソツ！ツツコミはオレのアイデンティティなのに！

「え？そうなんだ……。え〜つとごちそうさま？」

「うおい！それでいいのか、島田！？」

「あのさ、美波。怒らないで聞いて欲しいんだけど……」

「え？なに？」

「僕と美波が付き合つて話んだけどあれつてもしかして美波が僕の事……その……す、好き……とか……？」

「あ……！そ、それは……！」

お？これを機に明久に告白するか？今なら脈ありだし姫路相手に十分に勝機はあるだろうし……

「あ、あれはね、ほらっ！美春が余りにもしつこいから、彼氏でもいてくれれば諦めてくれるかと思つて、それでタイミング良くアキが告白してきたから……！」

「ああ、なるほど。そう言つ事が」

それでいいのか、島田……？

「やれやれ、苦しい言い訳だな。1人以外にはバレバレだぞ？」

「そうじゃな。告白が勘違いだと分かった以上誤魔化したくなる気持ちは分かんなくてもないのじゃが……」

「……素直じゃない」

「島田がそうだって言うのなら深く突っ込まない事にするよ」

「べ、別に言い訳とかじゃなくて……！誰がこんなバカと……！」

照れ隠しはいいけど素直にならないと後悔することだってあると思っぞ？

お前と明久と姫路の関係は本当に危ういバランスで成り立っているようなものだ。

どちらかがバランスを崩す事によって呆気なく崩れてしまいかもしれない。

今日までの関係がこれから先もずっと続いていくなんて事はないんだ……

まあ、オレがこれを言った所で余計なお世話になるから島田のしたようにすればいいんだけどな

「全く……、それならそうと早く言ってよ。美波が僕の事好きなのかと思っただじゃないか」

「う……！そんな訳ないでしょ！」

しかし明久からしたらたまたまったものじゃないだろうな……

自分のミスが原因とはいえ【少なからず意識している相手に思わせぶりな態度を取られて振り回された挙句それがぬか喜びだった】ってことなんだから……

「だよ。僕もおかしいとは思っていたんだ。美波が僕の事好きなんてありえないし、それに」

「そ、それに何よ？」

「美波があんなに塩らしいなんてありえないしね！」

あ、地雷踏んだ……

「……そうね、全くもってあんたの言う通りね……！」

「み、美波！？僕の関節がいやな音を立てているんだけど！？」

「とにかくこれで誤解は解けた様じゃな。後はこの話を上手く清水に伝えれば問題はすべて解決と言う事で良いのかの？」

「そうだな、これで清水も納得するだろう」

「……………上手く伝えておく」

「本当にこれで良かったのかなあ……………」

一応クラス間の摩擦は避けられるだろうけど島田的にはどうなんだろう？

明久と溝が出来てるような気がする…………

いつもの様な軽いケンカだったらいいんだけど…………

ゴキーンッ！

よし、関節嵌まった！

「明久、どうだ？動作確認してみる」

「うん、大丈夫。うまく動くよ」

「全く……………、いつも一言余計なんだよ。お前は……………」

「アハハハ……………」

明久の乾いた笑いが屋上に小さく響き、そして消えていった。

第47話 ウツカリで身を滅ぼす時がある・・・

『あなたは大好きな彼と2人で旅行に行く事になりました。

ところが、飛行機に乗っていざ出発と言う時に忘れものに気付きました

さて、一体何を忘れてきたのでしょうか？』

木下優子の答え

すっかりしてそうに見えて少し抜けているところがある子なので何を忘れるのか予想が付きません。

教師のコメント

………そうですか。

.....

明久と島田の交際疑惑が誤解だったという情報がDクラスに伝わり、Fクラスは平穏を取り戻した。約二名を除いて……

キーンコーンカーンコーン

「瑞希お昼にしない？」

「あ、美波」

「何よ、アキ？」

「あのさ、今朝言ってたお弁当なんだけど……」

「なあに、アキ？ウチにあそこまで恥をかかしてお弁当をたかろうって言うのかシラ？」

「ごめんなさい！心の底からごめんなさい！」

「全くアキは本当に無神経なんだから……。瑞希、今日は天気もいいしこんなバカのない外で食べましょ」

「あ、美波ちゃん、待ってください。ごめんなさい、明久君。また

あとで……」

そう言つて2人は出て言つてしまった

これは丸く収めるためには時間が必要だな。頭に血が上っている奴に何を言つたとしても聞き入れてくれないだらうし……

「なんだ、明久？島田の弁当は貰えなかったのか？」

「うん。美波がご機嫌斜めで貰えなかった。凄く期待してたのに……」

「まあ、この状況で弁当なぞ渡したらまた清水が乗り込んでくるかもしれないからな。諦める事じゃ」

「それはそうなんだけど……」

「ところでムツツリーニは何処に言つたのじゃ？」

「ヒロが気になる情報掴んでな……。それを確認しに行つて貰つている」

「ガセネタだといいんだけどな……」

ガラッ

「……ただいま」

「おう、おかえり。どうだった？」

「……今朝よりも良くない状況になっている」

「うわ、厄介な事になった……」

「どうかしたの？」

「……聞けば分かる」

そう言つてムツツリーニはボイスレコーダーのスイッチを入れた。

『土屋君、烏丸君、こんにちは』

「いらつしやい。さつそく来たな」
「あ、明久君のセーラー服姿を販売してるって本当ですか!？」
「ああ、大量に入荷してるよ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・1枚100円。二次配布は禁止」
「二次配布は禁止ですか……。残念です……。でも私個人で楽しむだけでも十分に」

ブツッ!

「・・・・・・・・・・・・・・・・再生するファイルを間違えた」
「あつはつはつ、このウツカリさん」
「ねえ、何!?今の会話は何!?僕にとっては今の会話こそ十二分によくない情報なんだけど!？」
「うるさいぞ、明久。つまらん事でガタガタ喚くな」
「全然つまらなくなんかないよ!どうして僕の女装写真が秀吉の写真みたいに裏で取引されてるの!？」
「ちよつと待つんじゃ、明久!今のお主のセリフこそがワシにとってはよくない情報なのじゃが!?ヒロ、お主まで何をやっているのじゃ!？」
「ムツツリ商会でアルバイト」
「・・・・・・・・・・・・・・・・ヒロの売れ筋を読む能力はなかなかの物だ」
「まあ、人間関係を調べるのは得意だからな。そいつが興味を持っている人物のお宝写真って言えば大抵の奴は釣られるだろ。ちなみに最近の売れ筋は明久(セーラー服ver)だ」
「クキーツ!殺すつ!殺し切るうー!!」
「アハハハ!捕まえてごらんなさい」

オレのバイト代が売り上げに比例する以上一切の情は切り捨て利益を優先する!それが真の商人と言う奴だ!

まあ、それはさておき……

「……………こっちが本物」

カチッ

『Fクラスの様子はとうだ?』

『またバカな事をやっていて点数補充もまともにやっていないようだ。あの様子だとこっちの意図に気付く事は無いだろうな』

『そうか。それならいい。当分はオレ達は点数補充に専念して、向こうにこちらの動きを気取られたら即座に宣戦布告を行うぞ』

『了解』

カチッ

「これってDクラス? 誤解がまだ解けていないの?」

「……………(フルフル)」

「Dクラスが大人しくなってるのは確認済みだこの会話は」

「……………Bクラス」

「Bクラス!? どうして!?!」

「理由として考えられるのは仕返し、発言力の回復、自分への非難を抑えるってところかな? 『覗きの主犯のオレ達を肅正する』って大義名分が出来たから攻め込む事に異論は出なさそうだし……………」

「ヒロはこの情報をどうやって手に入れたの?」

「ん? ああ、Bクラスの奴が”快く”教えてくれたよ」

「快く?」

「そう、『協力しないとお前が二股かけている事を彼女にバラす』

って言ったら快く教えてくれたよ。いや、持つべきものは人脈だよな!」

「……………。」「」

「どうした？」

「い、いや……。お前が敵じゃなくて良かった……」

「煽ってたって何も出て来ないぞ？」

「……最近ヒロが腹黒くなってきたような気がするよ」

「……………校内のいい人ランキング一位の名が泣く……………」

「失礼だな。一回働いてくれて、その後秘密を守るのならこの弱みは墓まで持っていくって事で働いて貰っているからそんな極悪ではないはずだぞ！」

「いや、十分極悪だから……………」

「してどうするのじゃ、雄二？今からでも点数補充のテストを申請して……………」

「いや、余計な事はしない方がいい」

「どう言う事じゃ？まさかこの状態でも勝てるっても？」

「いや、この状態で勝てると思うほどオレは楽観的ではない」

「けど、それならどうするのさ？」

「まずは時間を稼ぐ」

「時間を稼ぐ？そんな事して何か意味があるの？」

「いいか？Bクラスに戦線布告されたらオレ達はBクラスと戦うしか無くなる。そうなればオレ達は100%負ける。だが今はまだ宣言布告を受けていない。つまりまだ戦争を回避できるってことだ。」

「けどさつきヒロが言った通り根本君が戦争を起こす理由が沢山あるんだよ？とても取りやめて貰えそうにないけど」

「ああ。だからBクラスが戦争を出来ない状況を作る。幸いにも試召戦争のルールではクラスごとの1対1しか認めていない。つまり他のクラスとBクラスを戦わせるとか？」

「んむ？また前回同様ワシが姉上に変装してBクラスを挑発するのかの？」

「お前そんなことしたのか？よく無事だったな……………」

「いや、その後姉上にたっぷりと折檻されたのじゃ……………。ヒロも見

ておつたじやろう……?」

「うーん? ああ! Aクラス戦のときか!？」

「そうじゃ……」

「話を戻すぞ。秀吉が言った作戦は以前使っているからもう使えない。そうじゃなくて他のクラスとオレ達が戦うんだ」

「他のクラスとワシらが戦う……。なるほどのう、それならBクラスの宣戦布告を避けられるし、戦争後は点数補充をする事が出来ると言つ事じゃな?」

「そう言つ事だ」

確か『戦争が終わつた後には必ず点数補充を行う事』だつたわけ? なるほど。それなら現状の問題はすべて解決する事が出来る。

万全の状態のFクラスに以前敗北しているからBクラスでも迂闊には手を出す事が出来ないだろうな

「じゃが相手はどうするのじゃ? ワシらは以前の敗北のペナルティとして『3ヶ月間他のクラスへの宣戦布告の禁止』を言い渡されておるしのう……」

「相手ならいるじゃないか。おあつらえ向きの奴らが……」

「その通りだ。Dクラスに宣戦布告をさせその戦争をやり過ごして点数補充を済ませる。」

Bクラスの相手は危険だがDクラスなら勝てなくても負けない勝負をすることは可能だ。

幸いにもあいつらは女子中心の開戦派と男子中心の非開戦派とで割れていて点数補充が済んでいないからな。」

「戦力は半減しているつて事が……」

「じゃが雄二、勝算があるのならなにゆえDクラスとの勝負をしなかつたのじゃ?」

「違つぞ、秀吉。勝算は無い。ただ負けない勝負が出来ると言うだけだ。勝つ事が出来ないからひたすら引き分けの為に戦う。そんな面倒な事やらないで済むならその方がいいだろう?」

「あれ? 結局戦争はするんだよね? だつたら何で午後の点数補充を

しないの？」

「お前の耳は飾り物か？さっきのムツリーニの情報を思い出せ」

「ムツリーニの情報……。ムツリーニ！ヒロ！一枚100円は安すぎるよ！秀吉の写真は500円なのに！」

「需要量と供給量を図った結果、そうなったんだから仕方ないだろう。て言うか思い出す所はそこなのか？」

「ほほう？500円か……。3人共ワシの写真について詳しく聞かせてはもらえんかの？」

「……………全部秘書が勝手にやったこと」

「そんな政治家みたいな！」

「え〜つとこの場合オレが秘書つて事になるのか？それじゃあ……」

『そんな！先生がやれつて言つたんじゃないですか！？こうなつたら法廷で洗いざらい白状してやる！』

「……………！！」（ブンブン……）

「お前ら全然危機感抱いてないだろ……」

いきなり始まつたバカな寸劇に雄二が呆れたようにツッコミを入れた。

「それでもないぞ。バカやってないと不安で押しつぶされそうで……」

……！！

「バカの事ばかり言つてないで話を進めるぞ」

「ヘイ、ヘーイ」

「さっきの情報では根本は『動きを気取られたら即座に宣戦布告を行う』と言つていただろう？これはつまり連中がまだ点数補充を済ませていないつてことだ。逆に言う『点数補充が終わる』か『オレ達が動きに気付く』までは宣戦布告をしないつてことだ」

「ふむ、ならば明日までは猶予がありそうじゃの」

「今日中にせめてくるつて事は無いの？」

「朝の騒ぎでお前は聞いていなかっただろうけど、西村先生が『召

喚システムがメンテナンス中で復旧するのは明日までになる』って
言っていたからそれは無いだろうな」

「なるほど……。話が長くなったけど要するに僕らこれからどうするの？」

「勿論Dクラスから試召戦争の宣戦布告を受けるために工作を始め
る。期限は今日一杯。それが出来なければオレ達は御座とみかん箱
の教室に逆戻りだ」

「だな……。そうなればまた姫路の転校話が出てくるかもしれない
から踏ん張りどころだぞ、明久」

「うん。頑張るよ」

「それで具体的な案はどうするのじゃ？」

「今朝の一件を利用する。明久と島田を引っ付けて焚きつけるんだ」

「え？その話は誤解だって……」

「事実はこの際置いておこう。クラスの為にお前と島田には仲睦ま
じいカップルを演じて貰う。清水が嫉妬で狂うほどのな」

「えええ！？そんなの無理だよ！美波はあの話で思いっきりヘソ曲
げちゃってるんだよ！？」

「それでも何とかするんだ。演技に関しては秀吉に任せる。台本な
んかも用意できるようなら頼む」

「了解じゃ」

「……確かにこの作戦は有効だ。けど大丈夫なのか？何だか嫌な予感
がする……」

事態が悪化しないといいけど……

「ムツツリーニは情報収集と情報操作をヒロは引き続きBクラスの
動向を探って何かあったらすぐに報告してくれ」

「……わかった」

「了解した」

「そうと決まれば暢気に飯を食っている場合じゃない。姫路と島田

が教室に戻っている時に行動開始だ。ムツツリーニ、教室に仕掛けた盗聴器を無効化出来るんだな？」

「……大丈夫」

「な、なんてことに……」

「明久、諦めて腹括れ。それに島田と仲直りするいい機会じゃないか？」

「……」

さて上手くいくといいんだけど……

第48話 プライドを捨ててもやらなければならぬ事はきつとある！

教室にて……

「でウチに何をしろって？」

「明久と付き合ってる演技をして欲しい。それも周りが見ていて血管が切れそうなくらいベツタベタな感じでな」

「絶対に嫌っ！」

島田は間髪入れずに断ってきた。やっぱりまだ怒ってるな……。どこは何としても協力して貰わないとFクラス全体が困ってくる。もはや島田と明久だけの問題じゃないんだ。

「そこを曲げて何とか協力して欲しいのじゃ。島田だけではなく姫路にも」

「え？私もですか？」

「うむ。明久と島田だけの演技では現実味に欠けるからのう。姫路には島田と明久の仲を妬む役をやって欲しいのじゃ」

「明久君と美波ちゃんの仲を妬む役ですか……」

姫路は複雑そうな顔をしている

当然と言えば当然だよな。姫路は明久に好意を抱いているんだからこの作戦自体面白くないだろう。まあ、姫路ならやってくれると思うけどな

「ウチは何と言われようと嫌よ！誰がこんなバカと！」

ダメだ、島田は完全に頭に血が上っている……
今普通に頼んでも蹴られるだろう……

「島田よ、冷静になって考えてみるのじゃ。確かに色々と思う所はあるじゃろうが、これはお主にしか出来ぬ事なのじゃぞ。それなのに静観を決め込むなぞすれば、後々必ず悔む時が来る。例えば姫路の転校してしまう　と言う事になった時、お主は自分を責めずにいられるかの？」

「うっ……」

ナイスだ、秀吉！島田の良心と姫路との友情を突いた上手い説得だ。

「あのさ、僕が恋人役って言うのが嫌なら他の人が恋人役をすればいいんじゃないかな？」

嗚呼、バカ……

そんな迂闊な事を言ったら島田はますますへソを曲げるぞ……
今、島田の心理は『明久の事が好きだからこそ許せない』って言う複雑な状態にあるんだから……

「ほう、例えば誰が？」

「雄二とか？」

「お前はオレに死ねと言っているのか？」

霧島が黙っていないだろうな

「ムツツリー二とか？」

「……盗聴器の操作がある」

精密作業だから他の事をこなす余裕はないだろうな

「ヒロとか？」

「Bクラスの動向を誰が探るんだ？」

それに島田と引っ付いているところを優子に見られて誤解をされたくない。

「他にも須川君とか・・・？」

「明久よ、ワシの名前が飛ばされた気がするのじゃが他意はないのじゃろう？」

「と言うか代役は無理だ！今朝あんな事を公衆の面前でやっておいで他の奴と付き合っているって言われて誰が信じる？お前と島田にしかできないんだよ」

「確かにそうだな。見破られたら一貫の終わりだ」

「あ、あの美波ちゃん個人的な事で申し訳ないんですけど、わたし転校したくないんです！だから協力してください！お願いします！」

「あ、いや……。勿論僕は協力するけど……」

島田を見ると凄い形相で明久を睨んでいた……。

迷っているな。もうひと押ししておくか……。多少格好悪いけどこの際そんな事言ってもらえない。

「頼む、島田。協力してくれ……」

そう言っただけは島田に土下座をした。

「え？ちよっと、烏丸！やめてよ、土下座なんて！」

「いや、島田が首を縦に振ってくれるまでやめない！これは本当にお前と明久でなくちゃにしかできない事なんだ！だから……頼む……」

……！

「~~~~~！！分かったわよ！だから顔をあげて！」

「ホントか！？ありがとう、島田！」

「美波ちゃん、ありがとうございます！」

よし、これなら何とかなりそうだ！

「そうと決まればさっそく演技の練習じゃな。3人共これを受け取るのじゃ」

そう言つて秀吉は台本を手渡した。

「もう出来たのか。いつの間に書き終えたんだ？」

「ほとんどがワシの持っていた物の引用じゃからの」

作戦が決まつてから5分足らず……

そんな短い時間でこんな台本を書きあげるとは、演劇バカ恐るべし

……

「それじゃあそいつを持って屋上で演技開始だ。ムツツリー二屋上の監視カメラはどうなっている？」

「……接触不良を装つておいたからまた動くようにしてある」

「そうか。だとしたら演技以外の会話はしない様にするんだ。清水にバレたら元も子もないからな。」

……

場所は屋上に移つて明久と島田の演技が始まる

ロールパンが仕掛けたカメラの死角に入つて声だけで演技をするよ
うだ。

台本

島田『ねえ、アキ……』

明久『なに、美波？』

島田『今さらだけど……アキにきちんとウチの気持ちを伝えておこうと思うの』

明久『え？そんなの今さら言わなくても……』

島田『それでも聞いてほしいの確かに今朝は気持ちが先走ってキスしちゃったけど　でもこういう事はハッキリさせておきたいから……』

明久『う、うん、分かった。それじゃあ聞かせて欲しい。美波の本当の気持ちを……』

島田『わざわざこんな所に呼び出してごめんね、アキ。あのね、ウチはアキの事が好きなのっ！始めてあった時からアキの事が好きっ！ずっと友達として傍にいるのが辛かった！本当は友達は友達でいる事なんて我慢できなかつたの！』

明久『美波……』

島田『アキ……』

明久『僕もずっと同じ気持ちだった……』

何とも、まあ凄いセリフだな……

実際に言われたところを見ようものなら砂どころか砂糖を吐いてしまいそうだ……

「ねえ、アキ……」

「なに、美波？」

お？始まったな……

「今さらだけど……アキにきちんとウチの気持ちを伝えておこうと思うの」

「え？そんなの今さら言わなくても……」

「それでも聞いてほしいの確かに今朝は気持ちが先走ってキスしち

やったけど　でもこういう事はハッキリさせておきたいから……」
「う、うん、分かった。それじゃあ聞かせて欲しい。美波の本当の
気持ちを……」

さて、ここからが一番大事な所だ。しつかり頼むぞ、2人とも……

「わ、わざわざこんな所に呼び出してごめんね、アキ。あのね、ウ
チはア、アキの事が嫌いなのに！」

ってあれ？なんか台本とセリフが違いやしないか？

「は、始めてあった時からアキの事が嫌いっ！ずっと友達として傍
に居るのが辛かった！本当は友達に友達で居る事なんて我慢できな
かったの！」

あれ？おい、島田さくん、あんた何やっとなねん？

「美波……」

「アキ……」

島田が暴走したまま演技は続く……

「僕もずっと同じ気持ちだった……」

そのセリフの後明久の顔面に拳がめり込み、そして　体が宙に
舞った……

.....

「全くお主らは何と言う失態を……」

「オレが土下座までした意味って一体……」

「だ、だって仕方ないじゃない！あんなセリフ言える訳ないじゃない！それに録音されているかもしれないでしょ！？」

「そうだよ！美波にあんな可愛いセリフが言える訳　ってあれ？
右手の感覚が無くなってるような？」

明久の右手が曲がってはいけない方向に曲がっていた……
……

腕をあげたな、島田……。コンマ単位の間でここまで正確に人体を破壊するとは……

「ヒロ！お願い、治して！」

「仕方ないなあ……」

ゴキン！バキバキ！ベキン！

「よし、これでもう大丈夫　ってどうした、明久？何で悶絶してるんだ？」

「う、ううん……。なんだか……すごく痛かったから……」

まあ、あれだけ派手にやられていたら治す時もそれなりに痛いだろうよ……

それは我慢してもらっしかない

「ムツツリーニ、盗聴器の方は？」

「……もう一度接触不良を装っておいた」

「ナイスだ、ムツツリーニ！」

危なかった……。

これがロールパンの耳に入ったら作戦は失敗してしまうところだった……

「それなら木下君、お手本を見せてもらえませんか？」

「んむ？別に良いが？」

そう言つて秀吉はオレの手を取つた

「ん？どうした、秀吉。オレの腕を取つて……」

『ヒロ、あんな事をしちゃつた後で今更だけど、改めて、……あな
たの事が好きです。ウチと付き合つて下さい……』

なんだ？優子に告白されている様な錯覚を覚えるぞ？

前に読んだ本の『僕は夢を見ていた。幸せで残酷な夢を……』つて
言うフレーズが頭の中を駆け巡る。

そんなことを考えていると後ろから背筋が凍りつきそうな殺気を背
後から感じた……

振り向くとそこには青筋をたてた【凄くいい笑顔】の優子が立って
いた……

嗚呼、何だか臨死体験の予感……

その後の事はよく覚えていない……
気が付いたのは5分後……

オレはボロボロになつた秀吉の横で横たわっていた……
思い出そうとすると頭が痛い……

オレは一体何をされたんだ？

「全く！何してるのよ!？」

「……優子、どうしてここに？」

「あなた合宿の時に久保君に何か渡すつて約束したんでしょ？久保
君から催促が来てるんだけど？」

「ああ、そうだったな。忘れてたよ。」

そう言えば明久のセーラー服の女装写真（パンチラVer）を渡す約束をしてたっけ。

停学や明久と島田の交際疑惑とFFF団＋（ロールパン）の襲撃ですっかり忘れていた。久保には悪い事をしたな……。お詫びにムツリ商会の新品をサービスしてやろう。

「悪い、雄二。後は頼めるか？」

「ああ、後は任せとけ」

そう言ってオレはその場を後にした。

.....

「で？何をしていたの、一体？」

「ああ、実は……カクカクジカジカ……って訳だ。」

「……そうなの。大変な事になってるわね。」

「そうだな。けどそれ以上に明久と島田が心配だ」

「どういう事？」

「ああ、あいつら今、ケンカ中なんだ」

「え？けど朝美波が吉井君にキスしたって聞いたけど？」

「それがな、あいつ合宿中に出した間違いメールの誤解をまだ解いて無かったんだってさ。」

それを告白と取った島田が明久にキスをしたってのが朝の真相。そんでもってその誤解が解けて島田が今明久に対して怒り狂ってる」

「.....」

「人間関係って難しいよな、全く……。」

「それでさっきの秀吉とのやり取りは？」

「島田への演技の見本だよ。一瞬、優子に告白されたような錯覚を

覚えて凄くドキドキしたよ。流石演劇バカ一代だな」

「…………ヒロは私に告白されたら嬉しい？」

「勿論、嬉しいに決まってる」

「そっか…………。」

優子は顔を赤くしながら俯いて何かを考えている

「もう少し私が勇気を出せる様になつてから…………ね？」

しばらくして何かを呟いたがオレは聞きとる事が出来なかった

「何か言ったか？」

「ううん、何でも無い」

「そっか」

優子はオレに制裁を加える時とはまた違う笑顔でオレに笑いかけてきてオレもそれにつられる様に顔を綻ばせた

こついう雰囲気つて本当に居心地がいいよな…………

柔らかな雰囲気の中オレと優子はAクラスへと向かって行った。

第49話 演技にはリアリティが必要だ（前書き）

待っていた人たちも待っていなかった人たちもお待たせしました！
更新再開です！

それではどうぞ！

第49話 演技にはリアリティが必要だ

Aクラスに着き、久保に報酬が遅れた事の謝罪をした上で写真を渡し、サービスとしてムツツリ商会の近日発売予定の抱き枕を贈呈した喜んでくれた様で何よりだ。

その後授業が始まる時間が来たので教室に戻ろうとすると……

「ヒロ、助けて！」

「んあ？明久？どうした　　っておい！なんだ、その腕！？」

「吉井君！？赤紫に変色してるじゃない！？どうしたの！？」

「うっ……、美波が……」

「とにかく保健室に行くぞ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「診せてみる！」

明久の腕の状態を確認するとひどい状態だった……。なんと言うか本当にグロすぎてお茶の間に見せられない状態というのはこういうことだろう。

「優子、明久を押さえといてくれ」

「え？う、うん。わかった」

「行くぞ！せえのっ！」

ゴキ！バキバキ！ベキン！

「ギヤアアアア！」

「我慢しろ！もう一回いくぞ！」

「ちょっと待って！心の準備が」

パキユ！メキ！ゴリユ！メリメリ！

「ノオオオオオオオオオオ！！」

「ラストだ！踏ん張れ！少し痛いぞ！？」

「え？今までののは痛くない奴だったの！？」

「今までののは比較的痛みが少ない奴だ！」

「ちよっ！？ちよっど待っ」

ゴキン！

「……………！！」（声にならない悲鳴）

「よし、治った……………」

「……………ありがとう。けどもう少し痛くない治し方は無かったの？」

「あれだけ派手にやられていたら治すのにもそれなりの痛みがくる。それが嫌なら正式な医者にかかれ」

「ところでヒ口、何でそんな関節を嵌めるなんて出来るの？」

「武道をやっているとこういう事のも詳しくなる。これがオレの1

00の特技の1つ【関節の嵌め外し】だ！」

「そのまんまじゃない……………」

「まあ、それはさておきその業のキレは島田か？」

「うん……………。良く分かったね……………」

「この学校でそんな事が出来る奴は優子が島田位しかいない！」

「え？木下さん、こんなこと出来るの？」

「で、できないわよ！」

「優子、嘘をついちゃいけない……………。全身凶器のお前ならこれ位の事は　って腕が？げるううううううう！！」

「ところで何がどうなってそんな有様になったの？」

「う、うん。実は」

.....

明久SIDE

遡ること少し前……

「次は島田と明久が教室を抜け出して逢引きしとるという設定でやるぞい。明久と島田は腕を組むのじゃ」

「……………」

「あ、あの木下君、別に腕を組む必要はないんじゃない？」

「姫路よ、お主の気持ちも分からなくてもないが、移動の間に人の眼やカメラがあるやもしれん。これは必要な事なのじゃ」

「で、でも……………」

「明久、島田、先ほどの失敗を取り戻す為に頑張るのじゃ。視覚的な効果は役作りの上でお主ら自身にも都合がいいはずじゃ」

「分かったわよ、…………一応腕を組むけど他の所に触ったら殺すわよ……………」

「りよ、了解」

こうして作戦第2弾を開始したんだ…………。

……………

「あははは、美波。そんなにギュッとされたら歩きにくいよ」

「ふふふ、良いでしょ別に…………。ウチら付き合ってるんだから」

お互い満面の笑みだったけど実際僕の肘関節はギシギシいていたんだ…………。

「でも美波そのせいでさっきから当たってるんだけど……………」

「え？こ、このスケベ！」

「アバラ骨が……」

ゴツゴツしてて本当に痛かったからつい言っちゃったんだ……。

「ふふふふふ、アキってば本当に冗談が好きなんだから。本当にかわいいわね」

「あははは。ヤダなあ、美波。さっきより更にくつつくなんて」

「いいじゃない。思いつきり強く抱きしめてあげたいんだもの」

「美波は甘えん坊だなあ」

和やかな会話だけど実際に僕の肘関節はこの時すでにどす黒く変色していたんだ……

「ふ、2人とも何をしているんですか!？」

「瑞希……」

「そ、そんなにくつついて、腕まで組んで!えっと……ま、まるで付き合ってるみたいじゃないですか!」

「そうよ、瑞希。ウチとアキは付き合ってるの」

「え?付き合ってるって……」

「うん。黙っていてごめんね、瑞希」

「美波ちゃん……。明久君の事好きだったんですか……?」

「うん……。それも黙っていてゴメン。ウチ瑞希の気持ち知っていたのに……」

2人ともどんどんセリフにない事をアドリブで喋っていて僕も何かアドリブで言わなければと思ってこう言ったんだ……

「やめて、2人とも!僕の為に争わないで!」

ゴキン!

次の瞬間僕の関節が外されてしまった

「やっぱりそうでしたか……。美波ちゃんも明久君のことが……」

ね……」

「いえ。美波ちゃんの気持ち私も何となくわかっていましたから……。むしろこうやってハッキリ言ってもらえてすっきりしたくらいです。」

念のため動作確認をしておこう……。

まずは親指……。むう、変だ。動かない……

「ウチのこと許してくれるの、瑞希？」

「許すとか、許さないとかじゃなくて……。人を好きになるのは自由だと思いますから、美波ちゃんを責めることは私にはできません。」

「瑞樹……ありがとう……」

演技が進んでいるようだけど僕の出る幕じゃなさそうだし、体の状態の確認を最優先にしよう……。次は人差し指の動作確認だ。

この指は一番血色がいいから動いてくれるはず……！

アレ？全然動かないよ？

もしかして相当やばいところまで来ていない？

「でも、今朝のキスは許しません！アレは反則です！ しかも明久君は初めてだったみたいですし！」

そんなバカな。中指は 動いてくれない！？ まさか、まさか……

「そ、それはあんなメールがあつたから、つい！」

ふぬあああつ！ 薬指も小指も動かない！ コレは本当に危険だよ！

「つい、じゃないです！ あんなズルは神様が許してもこの私が」

ドン！

何やら壁を叩くような音が聞こえたような気がしたけど今の僕はそれどころじゃない！

指がーっ！僕の指がーっ！

「そ、そんな話をしているんじゃないありませんでした。え、えっと…

…こほんっ！」

「そ、そうね。……こほんっ！」

って指どころか肘関節の動きまで怪しくなってきた。どうしよう。

このままじゃ《隻腕の観察処分者》なんてちよっとカッコイイつけられちゃうかもしれない。

「とにかく、その……美波ちゃんのバカッ！」

「あ！瑞樹！」

もう既に演技どころじゃない！急いでヒロのところに行って治療してもらわないと！

美波の腕を解いて

「ちよ、ちよっとアキ！なんで瑞希のほうを追おうとしているのよ！？」

くううっ！美波が腕を全然話してくれない！僕の体の一大事だっつて言うのに！

「……まさかホントにこんな場面がきたらウチより瑞希を選ぶっついでいうの……？」

美波は何かブツブツと言っていて僕の腕の状況に気づいていない。
ヒイイ！ もう腕が正視できないほど酷い状態に！
早くっ！ 早くヒロのところに行かなくちゃ！

「……そ、それならウチだって。ねえ、アキ。ウチと一緒にいて？
ウチはその、アキのことが……好き……なんだから！」

美波は真剣な表情で演技を続けている。けど、僕はもう限界なんだ！

「み、美波ゴメンツ！ 僕、行かなくちゃいけないところがあるんだ
！」
「あつ……!!」

必死に美波の腕を振り払って走り出した。ヒロは確か…… Aクラス
だったよね！
早くしないと取り返しのつかないことに！

『……そう……。そういうことなの……』
『落ち着くのじゃ、島田。迂闊なセリフは……』
『もっいいわ。演技なんておしまい。どうせあんたは瑞希みたいな
“女の子”が好きなんですよ……!!』

背中の方で何か声が聞こえてきたけど、血が通って痛みが走り始
めた僕にはそんなこと気にしてる余裕はなかった……

.....

BACKSIDE

「　　と言つ訳なんだ」

「要するに作戦中にも関わらず怪我の処置のためにこっちに來たつてことでもいいのか？」

「うん」

「……………」

「どうしたの、ヒロ？」

「こっの！ バカチンがぁー！！！」

「金八先生！？」

「なんて面倒なことをしてくれたんだ！ ええ、コラ！？　言い訳があるなら言ってみろ、この船底のカス野郎！」

「だって」

「言い訳するなっ！」

「ええ！？　そんな！」

「落ち着いて、ヒロ。今あんた頭に血が上りすぎて言ってることが滅茶苦茶だから…………。はい、深呼吸して」

「スーハー、スーハー…………」

「落ち着いた？」

「………… ああ、すまない。少し取り乱した」

「そう、それじゃあ話を続けよう」

「ああ。明久、お前と島田がケンカ友達みたいな関係だって言うのは知ってるけど今のタイミングで島田のコンプレックスの『胸』をネタにするのは考えなしにもほどがある」

「吉井君…………。アタシ、前に言わなかった？　女の人に対して『胸』をネタにからかうのは最低だって」

「うっ…………！」

「拳句の果てが最悪のタイミングで逃げ出すときたものだ。呆れてものが言えない…………」

「だってあのときは本当に感覚がなくて」

「バカチンがぁー！！！」

「まさかの2回目！？」

「確かに今回はやりすぎだと思うが、男ならこついつとき黙って貧乏くじを引いておくものだ！」

「そんな！？ 人事だと思つて！」

「とにかく喧嘩中にも関わらず相手役を受けてくれた島田に不用意なことを言つたお前が悪い！」

「あう……………」

「猛省しろ！ この大馬鹿野郎！」

「……………はい」

しかし拙いな……。作戦は失敗……。ロールパンを焚きつけるどころか逆に大喜びしそうな内容だ。教室に戻る前にBクラスの様子を探っておくか……

「明久、オレは少しやることがあるから先に教室に帰っていてくれ。」

「え？ あ、うん。わかった」

そう言つて明久は教室に戻つて行つた

「大丈夫かな？ 美波……………」

「うーん、正直言つてかなり拙いと思う。明久には言わなかったけど、このままじゃ島田が明久への気持ちに蓋をしてしまうことだつて考えられるしな」

「そんなのつて！」

「わかつてる。そうならないように頃合いを見計らつて何とかやつてみる」

「大丈夫なの？」

「やつてやれないことはないと思う。今ならまだ修復が可能な段階だ」

「そう……………」

「それより優子ももう授業が始まってるだろ？　もう戻ったほうがいい」

「……………うん。……………ヒロ」

「なんだ？」

「あんまり危ないことしないでね？」

「大丈夫だって。今回は今までに比べたら安全だから」

「本当に？」

「本当だ」

「それならいいけど……………。本当に無理しちゃダメよ？」

「わかった、約束する。」

優子と明久が去ったのを確認してからBクラスのスパイに電話をかけた

P r r r r r P r r r r r

出ないな……………。ってそうだった。今は授業中だから出られないな。それじゃあメールで……………

【点数補充はどこまで進んだかを教えてくれ？　あと根本が何か怪しい動きをしていないか？　どんな些細なことでもいい。何か動きがあったら連絡してくれ】

送信……………つと

とりあえず、これでよし……………

「さて、オレも戻るとしますかね」

第50話 適度なガス抜きは必要だ

問題

分子で構成された個体や液体の状態にある物質において分子を集結させる力のことを（ ） 力と言う。

姫路瑞希の答え

ファンデルワールス力

教師のコメント

正解です。別名分子間力ともいいます。ファンデルワールス力はイオン結合の間に発生するクーロン力と間違えやすいので注意してください。

土屋康太の答え

ワンダーフォーゲル力

教師のコメント

何となく語感を覚えていたというのは伝わってきました。惜しむらくはこの答えが分子間ではなく登山家の間で働く力だということですね。

吉井明久の答え

努力

教師のコメント

先生この答えは嫌いではありません。

烏丸大貴の答え

富と権力

教師のコメント

まさか烏丸君から珍回答が飛び出すとは……

しかもなんと言う汚れた答えを……

.....

「失敗もいいところだ。カス野郎」

姫路を伴い教室にもでつてきた明久に雄二が冷たく言い放った。明久が泣きそうな顔をしていたが今回ばかりはさすがに庇えない……演技を途中で投げ出すといった大失態の上に姫路と一緒に戻って来て島田の怒りをさらに煽るといふ大失態の上塗りをしてしまった。

「あんなもん見せられて明久と島田が付き合つてると思っやつがいのわけないだろう」

「そうじゃな。せめてもの救いは島田が明久に好意を持っている様子を見せたことじゃが、恐らく清水を動かすには不十分じゃろうな」

確かにその通りだ。あともう一押ししなければあのロールパンは動かないだろう……

「おまけにもう一度トライしようとしても島田はあの調子の上にお前は姫路と仲良く戻ってくると来たものだ……」

雄二の指差した方向に目をやるとさつきと比べ物にならないほど不機嫌な顔をしていた。

さしずめ噴火寸前の火山といったところか……

「ご、ごめんなさい。私が明久君と一緒に戻ってくるなんておかしいですよね……」

「いや、クラスメイトじゃから一緒に戻って来ること事態はおかしくないのじゃが……。明久が島田を放置して姫路を追いかけたというのが問題なのじゃ。周りにどう思われるかではなく、島田に対してじゃがな……。」

「とりあえず明久は島田に対して詫びの一つでも入れたほうがいいな」

「うん、そつだね。言ってくるよ」

今の状態で明久が島田に謝ったところでおそらく島田の機嫌を治すことができないだろう……。しかしこのあたりでガス抜きはしておいたほうがいい。

たまった怒りを発散させないと島田の思考がマイナス方向に向かっていきそうだしな……。

.....

『美波、その……さつきはごめん』

『もうあんたなんか知らない。瑞希と二人で仲良くやってればいいじゃない』

明久は頭を下げるが、島田はそっぽを向いたままだ

『いや、姫路さんとは途中であつただけ』

『言い訳なんか聞きたくない』

『あう……』

明久がしばらく何か考えたあと再び口を開く

『でも、このままだと姫路さんが』

あつ！ バカッ！

『……瑞希、瑞希ってあんたはいつもいつも……!!』

『み、美波?』

『どうして瑞希ばかりいつもお姫さま扱いなのよ！ じゃあウチは何なの!? 男だとも思ってるの!? どうしてウチにはそんな態度なのよ!?』

『別に、そんなつもりは……!!』

『瑞希が転校させられそうになったらウチが瑞希の両親に話に行くわ。だからもう話しかけないで。あんたの顔なんてもう見たくない』
ガス抜きどころか余計に島田の姫路に対する劣等感を煽るような形になってしまった。

このままじゃ状況は悪くなる一方だ……。早いうちに手を打たないといけないな……

『ごめん、悪かったよ……』

.....

「完全に怒らせちゃったよ……」

「そのようじゃな」

「ごめんなさい。あとで私が美波ちゃんに謝っておきます……」

「……………それは時間をおいてからにしたほうがいい」

「だな。今明久と姫路が何を言ったところで逆効果だ。」

島田の怒りの根本には姫路へのコンプレックス、明久への強い想いがある。

その当事者である二人がフォローに行こうものなら島田は余計に自分を惨めに思うだろう……

P r r r r r r P r r r r r r

メールが来たので携帯を取り出して画面を確認する。

「雄二、Bクラスの状況の報告だ。Bクラスは現在点数補充の7割を終えて一部では開戦の準備を始めているらしい。」

「そうか。予想よりも早いな。Dクラスを焚きつける前に時間稼ぎをする必要があるそうだ。ヒロ、ムツツリー二人で協力して『DクラスがBクラスに対して試召戦争を仕掛けようとしている』という偽情報を流してくれ」

「わかった」

「……………了解した」

Dクラスに狙われてるといふ情報があれば宣戦布告を躊躇うだろう……。

僅かな時間稼ぎにしかならないだろうけど今はそのわずかな時間でもありがたい

「さて次は秀吉だな。」

「む。なんじゃ？」

「清水との交渉の場をセッティングしてもらいたい」

「交渉といってもどうするつもりなのじゃ？」

「どうするもこうするもやることは一つだ。清水を挑発して敵意を煽る」

「そうなると島田も一緒のほうが良いかの？」

「ああ。そのほうが確実に挑発できるからな」

「大丈夫なのか？ 言い方は悪いが、今の島田はオレたちにとって爆弾のようなものだぞ」

「確かにそうだが、その辺はオレがうまくやる」

「うむ。それならばなんとかしておこう。機嫌を直すとまではいかなくとも同席してくれるように頼むくらいは可能じゃろ」

「そうしてくれると助かる。今に島田のところに姫路や明久をやるわけにはいかないからな」

「心得た。交渉の場は空き教室、時刻は放課後すぐで良いかの？」

「それぐらいでいい。明久と姫路はおれと一緒に来てくれ。それじゃあ各自作業に取り掛かってくれ」

「「「「了解」「」」」」

さて対Dクラス戦の作戦もいよいよ大詰めだ。
ここでしくじるわけにはいかないよな……。
気合い入れていきますか！

第51話 1つのミスから崖っぷちに追い詰められることがある……

「ヒロ、ムツツリー二偽情報の効果はどうだった？」

「……………首尾は上々」

「けどBクラスから情報の真偽を確かめるためにDクラスに使者を出すらしいぞ。それについての考えはあるのか？」

雄二のことだからもそうなることも想定済みだろう

「ああ、もうすぐ姫路が戻ってくる。そうしたら次の行動に移ろう」

「姫路はどこに行ったんだ？」

「家庭科室で料理を作っている」

ダツ！（オレが逃げようとする音）

ガシッ！（明久と雄二がオレを押さえつける音）

バタバタバタ……………（なんとか逃れようとなお足掻き続ける音）

「何やってんの？ 何やつちゃってんの？ なんでわざわざそんな危険物を作らせるんだよ！？」

「落ち着け、ヒロ！」

「これが落ち着いていられるか！ オレは優子に無理しないって約束したんだ！ だから何が何でも逃げ切ってやる！」

「これは作戦の一環だ！ お前の口にアレが入ることはないから安心しろ！」

「作戦の一環？ なんだよ、それならそうと早く言ってくれ……………。心臓に悪い……………」

「説明する前に逃げようとしたのはお前だろ……………」

「で、そんな危険物を何に使うつもりなんだ？」

「そっだよ。わざわざ手料理なんて作ってもらってどうするのさ？」

「姫路の手料理は暗殺用の武器だ」

酷い言われようだが否定できる要素が見当たらない……
初めてアレを口にしたとき三途の川を渡りかけたことがあるから尚
更だ……

「暗殺つて誰を？」

「Bクラスのやつだ」

「根本君が僕らの出した食べ物食べてくれるかな？ きつとすこ
く警戒すると思うよ？」

「いや、ターゲットは根本じゃない。今更根本を暗殺したところで
Bクラスが止まるとは思えない」

有効だったら迷わず暗殺するのか……

坂本、なんて恐ろしい奴……

まあ、けど根本だったら恨みを買ってそうっだしな……
そついう流れになっても仕方ないような気もする

「狙いはBクラスから出されるDクラスへの使者だ。おそらく奴ら
はDクラスに同盟を申し込むだろうっからな」

「同盟つて？」

「偽情報でDクラスに狙われていると知ったら、Bクラスの連中は
その対応をする必要があるだろう。その場合に考えられるのがDク
ラスとの同盟だ。使者を出すだけで戦闘を避けられるならそれに越
したことはないからな」

「ってかなり拙いんじゃない？ そんなことしたら『DクラスがB
クラスを狙ってる』って言う情報が嘘だつてバレちゃうじゃないか
！」

「だからこそ使者を狙うんだろ？ 使者がやられてしまえば情報は
本物だとBクラスに認識させることができる上にBクラスはDクラ

スに敵意を抱くつてところか？」

「その通りだ。そうなればBクラスとDクラスとの同盟は結ばれないし、連中の疑心は高まるはずだ」

なんてヤバイこと考えるんだこいつは……

好き嫌いを抜きにして考えて根本は策士としての能力は決して低くない

むしろ能力的には高いほうだろう……

しかしこんな規格外な奴が相手じゃ勝つことは無理だと断言できる策士としての能力だけではなくタチの悪さも完全に雄二が根本の上を行っている。

ホントにこいつが味方でよかったよ……

「けど暗殺ならスタンガンでもよかったんじゃないの？」

「スタンガンじゃ悲鳴を聞かれたときに厄介だろ」

「じゃあ口を塞げば」

「一緒に感電してしまうから地獄への案内人をもう一人余分に手配しておかなくちゃいけないな」

「ヒロに絞め落としてもらえば」

「別にいいけど意識を無くすまでに大体20秒位かかるからその間にどちらかに見つかる可能性は高いぞ」

「でも」

「心配するな。姫路の料理を選んだのはオレの趣味だ」

「え？ 坂本君私の料理が好きなんですか？」

「ひ、ひめ、じ？」

ブリキの人形みたいに首を後ろにやる雄二。

「良かった。そう言ってもらえると嬉しいです。けど霧島さんに聞かれたら怒られちゃいますよ？」

「はは、ははは……」
「ウエルカム！（グッ）」
「テメエ、そのムカつく笑顔は何だ！？」
「雄二、グットラック……」
「ヒロ、その憐れむような視線はやめてくれ……」
「坂本君と“烏丸君の分”もありますからよければどうぞ。」
「え？オレの分もあるのか？」
「はい、良ければ食べてください」
「ウエルカム（グッ）」

明久と雄二がすごく爽やかな笑顔でオレの肩を掴んだ……

「はは、ははは……」

どうしよう……

「あとで腹が減った時にでももらおう」

「ほ、僕もそうさせてもらおうよ」

アッ！ うまく逃げやがった！ ズルイぞ！

「そうですか……。烏丸君はどうします？」

ヤバイ……。自分の料理の感想を聞きたくて仕方ないっていう眼を
してやがる……

ここでオレが食わなければ姫路はすごくガツカリした顔をするだろ
う……

そうなるとオレは罪悪感で押しつぶされてしまつかもしれない……

ええい！クソツ！腹括れ！

天国の姉さん、絃馬さん……オレは今日そっちに行くことになるか
もしれません……

ジイサン……、先立つ不幸をお許してください……

あんたには色々とぞんざいな態度をとっていたけど何だかんだで尊
敬していたよ……

静馬……、オレがいなくなっても強く生きるよ……。

お前は姉さんと絃馬さんとオレの分も長生きしてくれ……。

優子……、お前に会えて本当によかったよ……。
大好きだったよ……。

「ええいつ！南無三ツ！」

そう言つて危険物ゼシを一気に口に流し込んだ。

「あっ！馬鹿っ！ヒロ、早まるな！」

ゴクゴクゴクツ！プハーッ！

「どうでしたか？ 烏丸君」

「……あ、ああ……。すご……。く……。ウマかったよ……」

目の前が白黒にしか見えない……

「そうですかぁ！ありがとうございます！」

「ヒ、ヒロ……？大丈夫なの？」

「な……。んだ？ ど……。うし……。た、明……。久？」

「ヒロ……。お前、漢だな」

「は……。は……。それ……。程でも……。ないさ……」

視界がグルグル回ってきた……
これは長くは持たないな……

「オレ……少……し……眠く……なって……きた……か……ら眠……
……らせて……貰う。後は……頼む……」

「ああ、任せとけ！」

「ヒロのことは忘れないよ！」

「わかりました。おやすみなさい」

「ああ……、お休み……」

さよなら、優子……

気を抜いたら一気に意識が遠ざかって行った……

……
……
……
……

賽の河原で半ば無理やり川を渡らせようとした奴らをボコッてな
んとかこの世に戻ってくる事ができた……

…… 神様、ありがとう……

大して信じていない神様に礼を言い、体を起こした……

「あ、ヒロ！起きたんだね！」

「よかったのじゃ……。ヒロが死んだら姉上になんと言えはいいの
じゃ」

「……無事で何より」

「ああ、心配掛けてすまない。……オレはどれ位くたばってた？」

「えっと、大体2時間くらい……」

「あれからどうなった？」

「……暗殺は成功」

「BクラスとDクラスの同盟は結ばれなかったけど……」

「何かあったのか？」

「うん……。根本君がAクラスに『雄二のお母さんが倒れた』って言う偽情報を流して雄二が霧島さんに引っ張られていっちゃった……。」

携帯を開くとスパイから【根本がAクラスに何か情報を流した。注意しろ】と来ていた……

クソッ……。これはオレの失態だ！
自分の詰め甘さに嫌気がさす……！

「交渉は完全に雄二任せじゃったからワシらには何も策がないのじや……。」

「……そろそろ時間。どうする？」

「どうするもこうするも雄二がいなければ僕たちがやるしかないよ……！」

「とにかくあのロールパンをこれ以上ないくらい怒らせよう……。」

雄二がいればうまくやるんだろうけど、オレのミスのせいでこうなっただんだ！

どんな汚い手を使ってもこいつらを助けにならないと……！

第52話 考え方は人それぞれ……

交渉の場の空き教室に向かうとすでにDクラスの代表の平賀とか言うやつとロールパンがいた。

「待たせたね」

明久が全く誠意の無い口だけの謝罪を述べて席に着いた。その様子に平賀の方は少しムツツとしたように眉を顰めたが

「お姉さまっ！お会いしたかったですっ！」

「美春！？ちよつと暑苦しいからひつつかないですよ！」

肝心の本命の方がオレ達をガン無視だ……

「清水よ、そこまでにしておくのじゃ。島田は明久の恋人じゃ。むやみやたらに手を出すではない」

見かねて秀吉が口を挟むが

「何を言っているんですか？ その豚野郎とお姉さまが何の関係も無い事くらいお姉さまの顔を見れば一目瞭然です」

「……それは……」

「大体その豚野郎がお姉さまに相応しいとは思えません」

「そりゃ僕は勉強もできないし、部活もやってないけどでも」

「勉強？ 部活？ それ以前の問題です」

そう言つてロールパンは見下すような視線を明久に向けた

「美春は前々から二人の関係を見てきましたがその豚野郎のお姉さまに対する態度は最低です。同じクラスの姫路さんに対する態度

とお姉さまに対する態度があまりに違いすぎます。」

まさか島田がいるこの場で島田の劣等感を刺激する事を言つつもりか！？

「止せ……！」

ロールパンに対し静止の言葉をかけるがロールパンはなおも話し続ける

「姫路さんには優しく気を使い、まるでお姫様に接するような態度。それに比べてお姉さまに対する態度はどうです？ 全く気遣いもなければ異性に対する最低限の優しさすら見えないじゃないですか」

島田の様子を伺うと今にも泣き出してしまいそうな顔をしていた……
ロールパンは明久に対して言っているのだろうが、それはは島田自身にとって認めたくないことなんだ……

「やめろ……！」

「はつきり言えば、その豚野郎はお姉さまの魅力に気づいてないどころか、何の気も使わずに男友達に接するような態度でお姉さまに接している大馬鹿野郎です。そんな男がお姉さまに相應しいかどうかなんて、容姿学力以前の問題です。それに」

こいつは大きな勘違いをしている……

違う……！ 明久の島田に対する接し方はそんなことじゃないんだ……！

明久の島田に対するぞんざいな態度の理由は

！

「それに演技とはいえ『好きだ』と言ってくれた姫路さんを追うなんて普通は考えられません。もしかしてお姉さまの事を男だとも思つて「それ以上口を開くなっ!!」」

オレの怒声に教室が静まりかえる……

シンとした空気の後、少ししてから島田が教室から逃げるように走り出してしまった。

「美波!？」

明久があわてて追いかけてみようとするが

「追つてどうするんです？ また男友達に接するような乱暴な言葉でもかけるんですか？ そうやって更にお姉さまを傷つけるんですか？」

「清水、いい加減にしろ……!!」

「なんですか？ 烏丸大貴……!! あなたは関係ないので黙つていてください!!」

「いいや、黙らないね！ 関係ないつてのも大間違いだ。明久と島田はオレの大事な友達だ。その友達を傷つけるようなことを抜かす奴相手にはオレは容赦しねえよ……!!」

「何言つてるんですか？ お姉さまを傷つけたのはその豚野郎

」

「オレは前にお前に行ったよな？ 『本当に相手のことが好きなら相手の気持ちも考えろ』つて……」

「何が言いたいのですか？」

「要するにテメエが考えなしに島田の劣等感を刺激するような事を言つたから島田が傷ついたって言つてんだよ……!!」

「なっ……!!」

作戦とか挑発とかそんなことはもうどうでもいい……！
オレはこいつの事を許せない……！
オレの友達二人を見事に傷つけてくれやがって……！

「テメエは明久を責めたいがために島田がいるにも関わらず島田の劣等感を考えなしに刺激した。少し考えればわかるだろう……。今の島田にソレを気づかせてしまったら島田が深く傷つく事くらい……！ 要するにテメエは自分のことしか考えていないんだよ！ そんなやつが『お姉さま、愛してます』だあ？ ふざけんじゃねえっ！ 本当にそいつのことが大事ならそいつの気持ちを第一に考えてるっ！」

「ぐっ………！」
「それに何が『お姉さまに相応しく無い』だ！ 『相応しい』、『相応しくないか』当人同士が決めることで外野がとやかく言うことじゃねえだろ！ 好き勝手いつてんな！」

「くっ………！ それでも美春はその豚野郎を許せません！」
「明久の島田に対する態度を責めたいんだっただらこの後二人で勝手にやってる！ 島田の事を第一に考えられないんだっただらそれはお前が自分の欲望の為に島田を利用していただけだっただけで事を自覚しろ……！ 『島田の事が好き』なんじゃなく、『自分が一番好き』ってことをよく覚えておけ！ ……秀吉、ムツツリーニ、島田を探しに行こう……」

「う、うむ。了解じゃ……」
「……………。(コクリ)」
「明久、あとはお前たちだけで決着を着ける……」
「う、うん。わかった……」

どうやら明久の方も相当へこんでるようだ……
これが切っ掛けで明久も自分の気持ちに答えを出せるといいんだけど……

.....

秀吉とムツツリー二と別れて島田を捜索することにした……

秀吉は校内、ムツツリー二は学校周辺、オレは島田の帰り道の周りをそれぞれ手分けしていた……

「いた……」

河原のところで島田が俯きながら座っているのを見つけた。

「よお、島田」

「烏丸……。何しに来たの？」

「たぶん島田の考えてる通りのこと」

そう言うと島田は眼を吊り上げて不機嫌な雰囲気を前面に押し出した
いつもならヘタレ根性に従って当たり障りのないフォローを入れる
だけに留めるが、今回は事態が深刻なためそうも言つてられない……。

今、島田を放っておけば島田の今まで大切にしてきた姫路との友情
が壊れてしまい、そして何より明久に対する気持ちに蓋をすること
になつてしまう……。

やるだけやつてダメだったのなら仕方がないが、こんな終わり方は
あまりにも残酷だ……。

……。
いや、違うな……。島田の為とか言うきれいな理由じゃない……。

オレがそんな終わり方を見たくないだけなんだ……。

大切な人がいつまでも自分の傍にいてくれるとは限らない。

終わりは本当に前触れもなく突然やって来る物なんだ……。

オレは姉さんや絃馬さんにソレが出来なかつた事を今でも深く後悔している……。

そんなものを再び見せられたら溜まったものじゃない……。だから……オレは明久と島田の和解の為に全力を尽くす……！オレが見たくない結果を現実のものにしないためにも……！

「隣いいか？」

「嫌よ……」

「嫌だつて言つても座るけどな」

「……………」

「単刀直入に言つと明久と仲直りしてくれないか？」

「絶対に嫌っ！」

「どうして？」

「どうでもいいでしょ！？ もう放つておいて！ どうせウチはアキに瑞希みたいな『女の子』として見られてないんだから！」

泣いているのか、怒っているのか……。あるいはその両方か……。？けど今の言葉で島田の怒っている……。いや、悲しんでいる理由は把握できた

大体の予想していた事と同じだ……。

今、島田の考えている事は大きな誤解だ。まずはそれを解かないと……

「島田はさ……、明久がなんで怒れられるのを分かっているながらも島田に馬鹿な事を言つと思う？」

「そんなのアキが馬鹿だからに決まってるじゃない！」

「……それで済ましちゃ明久が可哀そうだよ。……今から言つはあくまでオレの解釈だからもし嫌なら聞き流してくれ」

島田は座つたまま動かない……。しかし逃げることもしない……。

オレはそれを『肯定』のサインとして受け取って話を続ける……。

「オレは思うんだけど、たぶん明久は島田に甘えているんだと思う。」

「そんな訳！」

「いいから聞けよ。心の距離が近い人間同士って言うのは扱いが結構ぞんざいになってくる。明久と雄二がいい例じゃないか。あいつら普段はお互いをぞんざいに扱っているけどいざとなったら息の合った抜群のコンビプレイを見せるじゃないか」

「……………」

認めるのは非常に不本意だが、オレも家のジジイに対してそんな感じだしな……。

「おそらくそれと同じなんじゃないかって思う。明久は島田とじゃれているのが楽しいんだと思う。考えてもみる？ あれだけ自分の保身に関してだけは頭の回るやつだぞ？ 何を言ったら危険かなんて理解しているだろうよ。それなのにわざわざ島田を怒らせるような事を言っただけで怒らせる。これが何を意味しているかは予想がつくだろ？」

「……………それでもウチは結局『男友達』と同じ扱いじゃない……………」

「確かにそれだけだったなら『そうだ』って断言できるんだけどな。」

「それだけじゃない」

「どうということ……………」

「今日の朝、明久とキスしたって大騒ぎだったよな？ あの時の明久はこれ以上ないってくらい島田の事を意識していたぞ。FFF団がブチ切れるくらいだから間違いない」

「……………それでもアキは瑞希の方が大事でしょ……………」

「こついう時に嘘を言ってもどうしようもないからハッキリ言う。」

明久は姫路に好意を持っている」

「……やっぱりそうじゃない……。ウチなんて……」

「しかし、だ。明久自身、姫路の事を高嶺の花だと思い込んでいる節がある。今までの姫路の告白紛いの言動をすべて気付かずスルーしているのがいい証拠だ。あと島田、勘違いしているようだから言っておくけど姫路の持っていないものをお前は沢山持っているんだぞ。」

「え………?」

「例えばさっきロールパンが言っていた『姫路に対してのお姫さま扱い』……。これは逆にいえば相手との距離感を測りかねているとも言える。しかし島田に対してはそれが無い。いつそ近すぎると言っても過言じゃない。現時点で明久に一番近い異性は間違いない島田だよ。問題はお前がそれに今まで気づいていないってことだったんだけど、それに気付いた今これは島田にとって大きなアドバンテージじゃないか?」

「あ………!」

「他にも挙げればキリがないからやめておくけど、状況は姫路とイブン。あとは島田自身がスタートラインに並ぶか、それとも降りるか決めるだけだ」

「でも……。でも……。ウチは………」

「踏ん切りがつかないか?」

その質問に対して島田はコクリと首を縦に振った。

「そうか……。まあ、色々あったからゆっくり考えてみるのもいいと思うよ」

決めるのは他の誰でもない島田自身、これ以上は野暮というものだ……。

「それじゃあ、明日学校でな………」

「あつ……！ か、烏丸！」

「どうした？」

「ありがとう……。やっぱりアンタいい奴だわ……」

「ハツハツハツ！ 惚れるなよ？」

「何バカなこと言ってるのよ？ 優子が聞いたら関節極められるわよ？」

「ウツ………！ それは勘弁………！」

「フフフフ………」

「ああ、そうだ。島田、明久への関節技但至少は手加減してやれよ？ さすがに今日のはシャレにならなかったからな」

「わ、わかってるわよ………！」

さて、これで明久との和解は問題ないと思う。

この行動が正しいのか、間違ってるのかはオレじゃない誰かじゃないとわからない………

見方によっては友人である姫路への裏切りともとれるだろう………

けどオレはこうしたかった。

オレが見たくない結末を現実にしないために………

つくづくオレはエゴイストだな………。

思わず自嘲の笑みが零れた………

しかし後悔はしていない。

これでよかったんだと思う……。いや………、そう思いたい………。

先の事なんて誰にもわからない。

だからオレたちは今その時にできることを精一杯やるしかないから

………

第53話 決戦前には色々考えることが多い

『我々DクラスはFクラスに対して宣戦布告を行う！』

昨日の交渉から一夜明けての朝……

Dクラスからの使者がFクラスを訪れ、高らかに宣言した。

「成功したようでよかったのじゃ……」

「……………ヒロ、お手柄……………」

「そうだな、助かった」

「ハハハ……………、どうも……………」

誉められはしたもののあまり嬉しくない……

今思うと恥ずかしい。

あんなに感情を剥き出しにして相手に噛み付くなんてオレらしくない……………

いつもなら感情を抑えて、もっと上手く立ち回るのに最近それが出ていけない気がする……………

どうも最近のオレは変だ……………

しかしおかしいな……………

昨日いくらオレがロールパンを罵倒したところで肝心のロールパンの怒りがオレに向いてないから開戦に踏み切らせるには少し弱いと思っただけ……………

「明久、お前昨日ロールパンに何か言ったのか？」

「え？ う、ううん！ 別に何も言っていないですよ？」

「なんで片言なんだ？」

「な、なんでもないって！」

「ふうん、ならこれ以上聞かないけどさ……」

何でもないのにあの態度はおかしい……

何か隠してるな、コイツ……

まあ、いいや。確かムツツリー二があの教室に盗聴器を仕掛けていたはずだから何があったか後で聞かせてもらおうとしよう

「美波……!!」

「………………。」「(プイッ)」

明久は島田に積極的に声をかけるが、島田は明久と眼合わせようとせず、くソツポを向いた……

「あつ……」

明久は島田に無視されへこんでいる……
やれやれ、こっちにもフォローが必要か？

「明久、今はそつとしておいてやれ。こういう問題は時間がかかるんだ」

「けど……」

「今お前が何を言ったところでどうにもならないよ。喧嘩って言うのは謝る方も許す方もそれなりに踏ん切りをつけないといけないんだ。」

「うん……。……ヒロは凄いな……。人への気遣いとか、勉強とか、運動とかなんでも出来て……。それに比べて僕は……。全然ダメだよ……。僕もヒロみたいになりたかった……」

「阿呆、オレのそう言うのは真似しない方がいいぞ。と言うかお前はオレみたいになっちゃいけない。」

「どうしてさ？」

「オレは常に对人関係を計算して動いてきた……。だからなのかも知れないけど無条件に気を許せる奴って言うのがほとんどいないんだ……」

「けどヒロは優しいし、いつも誰をフォローしたり、助けたりしてるじゃないか」

「オレのそういつた行動にはいつも打算がある。オレが今までやってきた他人への手助けって言うのはほとんどが『人間関係を円滑に進めるためのポーズ』……。そしていざという時の為の人脈づくりってだけなんだ。だからオレは……。オレ本来の顔は偽善的で、打算的なエゴイストなんだよ。だから特に親しくもなく、対して得にならなそうだったら迷わず見捨ててきた……」

「見捨てて『きた』？」

「そうだ……。お前や雄二達みたいな『他人の為に一生懸命になれる人間』を見ているうちに『オレはそれでいいのか？』『何か大切な物を亡くしてないか？』なんてガラにもないことを思うようになってきてな……。オレも変わっていきたいと思うようになったんだよ……」

「けど……。！　そういう行動をとる度にバカにされて……」

「他の誰が何を言おうとも、オレはお前のそういうところを尊敬しているよ……。バカにしたい奴にはさせておけ。『正直者は馬鹿を見る』？　結構じゃないか。お前を馬鹿にして嘲笑うような奴は無条件でオレの敵だ」

そこまで言っつてやっと気付いた……

なぜ最近、明久達関連になってくるとオレが冷静でいられなくなっ
てしまうのか……

簡単なことだったんだ……

自分でも気づかないうちに明久達との仲間としての絆が大切になっ
ていたんだ……

なんでこんな簡単なことに気付かなかったんだろう……

そうか……。これが壁を壊すってことだったのか……

「ヒロ、どうしたの？ いきなり黙り込んだんじゃって……」

「あ、ああ。悪い、ちよつとボーっとしてた。とにかく島田の事はしばらくそつとしておこつ」

「うん……。わかった……」

島田自身も自分の気持ちと向き合うのに少し時間がかかる思うしな

……

試召戦争が終わったら本格的に和解の為に動くとしますかね

.....

「ヒロ、お前には点数補充を優先してもらつ」

「了解した。で、引き分けに持つていく作戦つてのはあるのか？」

「ああ、勿論だ。今回の作戦のカギを握るのは……明久だ」

「明久が？ 島田じゃないのか？」

「ああ。今からお前に作戦を説明する」

教室の隅っこに移動してヒソヒソと声を潜めて作戦を説明中……

「まずは姫路を教室から出さずに時間稼ぎというのを隠さないような戦い方をする。」

「なんでそんな面倒な事を？」

「『何かこちらに策がある』と相手に誤認させるためだ。そのため
の工作は昨日すべて済ませたから大丈夫だろう」

なるほど、『無いものを有るように見せる』というのは何処かの兵法書にも載っていた。

今回の目的が時間稼ぎならその作戦が一番有効だろう

「相手が痺れを切らせた頃に明久を単独で空き教室に移動させる。その状態なら清水は必ず食いつくはずだ」
「なるほど……。ロールパンは明久を自分の手で粛清したいと思っ
ているからか……」

「そこで……ゴニョゴニョ……ゴニョリータ……ゴニョリーニョ……
……という訳だ」

「……そこまでしなくちゃいけないのか？」

「ああ、そうだ。クラスを守るためにはこれがベストだ……」

「けどそれじゃあ、明久が……！」

「お前が基本的に明久の味方だっというのはわかっているつもりだ……。だからこの作戦が反対なら降りてくれても構わない……。この騒動は明久から始まった。それなら明久で締めるのが一番だろう……」

「……わかった。オレも参加する……。オレの『自爆』で……沈める……！」

「お前がそこまでする必要はないだろう。」

「それでも……明久を裏切るような行動を起こすのは事実だ。それならオレだけのうのと生き残ることは出来ない……。これはオレのケジメでもあるんだ。やらせてくれ、雄二」

「……わかった。そこまで言うのならもう何も言わねえ。」

「ありがとう、雄二……」

第54話 裏切り……

明久SIDE

僕は今、雄二の指示で清水さんと決着をつける為に空き教室で一人待っている。

待っている間何もすることが無いからぼんやりと考え事をしていて、脳裏をよぎるのは、美波の事……

僕の美波に接する態度は間違っていたんだろうか？

美波は僕が気を使わないでいた事に傷付いていたんだろうか？

僕はもう徹底的に嫌われてしまったんだろうか？

いろんな考えがグルグル回る……。

こういう時、雄二やヒロならもっと上手く気を使えるのかな？

どうして僕はいつもこうなんだろう……

考えても、考えても一向に思考が収束しない……

自分の頭の弱さに辟易しながらそれでもなお、思考を止めない……

どれくらい時間が経ったかわからない……

気が付けば廊下での喧騒がこっちに近付いてきた。

「そろそろかな？」

堂々めぐりになっていた思考を切り替え、戦いに備える。

そのまま待つこと、しばし……

目的の人物が教室に入ってきた……

「こんなところに一人でいてくれて助かりました。あなたにはお話がありましたから」

よかった。本当に来てくれた。

ホツと胸を撫で下ろしながら、目的の人物に視線を向ける。間違いない。Dクラスの清水さんだ。

「話って、なにかな？」

「そう難しい話ではありません。要するに　　白黒はつきりさせましょう、というだけです」

そう言った清水さんの瞳には僕への敵愾心に満ちていた。よっぽど僕の事が気に入らないんだろう。

「幸いにも今は試召戦争の真っ最中です。わかりやすく決着をつけることができます」

清水さんの後ろには布施先生がいた。

「ここは受けるしかなさそうだ……」。

「わかったよ。勝負だ、清水さん」

「先生、召喚許可をお願いします」

「許可します」

布施先生が許可を出し、化学の召喚フィールドが教室に展開される。

「「サモン試獣召喚！！」」

清水さんは試召戦争をそれなりに経験してるし、今回は不意打ちも出来ない。

簡単にあしらえる様な相手じゃないから慎重に攻めないと……

「そう言えば勝負を始める前に聞いておきたい事がありました」

「何かな？」

「昨日の話ですが」

「うん」

「あれは戦争を起こすための狂言ですか？ あの交渉も、最後の言葉も」

「それは……」

すぐには答えられずに言葉が詰まる。

いまさら言ったところで信用してもらえるんだろうか？

実際誰がどう見ても僕らが美波を利用しているようにしか見えないだろう。

それに僕らが美波を利用して清水さんを挑発しようとしたのは紛れもない事実なんだから……

「どうなんですか？」

「……………」

再び問いかけてくる清水さんに僕は何とも言えず、沈黙で返した……

「そうですね」

「……………」

「……泣いていました」

「え？」

「お姉さま、走り去るとき泣いていました」

「……………」

「きっかけは烏丸大貴の言う通り、美春が考えなしにお姉さまの劣等感を刺激するようなことをあの場で言ったからです。……でも、

原因は！……原因は！」

清水さんの僕を睨みつける眼には烈火の如き怒りが見て取れた。

「オマエがつ……！ オマエのような男がいるから……っ！ お姉さまが泣く羽目になるんです！」

その言葉を合図に清水さんの召喚獣が突っ込んでくる。正面からの真っ直ぐな動きを僕は受け流すように動いた。それでも衝撃を殺しきれずにフィードバックで体が痛む……。相当な点数差があるようだ。

.....

化学

Dクラス
清水美春
112点
VS
Fクラス
吉井明久
22点

.....

点数差は約5倍
圧倒的にこちらが不利だ！

「どうしてお前のような下郎がお姉さまのそばにいます！ どうして気持ちを弄ぶような下種がお姉さまと言葉を交わしているんです！」

一撃、一撃が重い……
そして何より清水さんの言葉が僕の心に重く押し掛かる。
美波が泣く羽目になったのも事実。
僕らが美波を利用したのも事実。
でも

「どうしてお姉さまを利用するために平然と嘘をつくような外道がお姉さまのそばにいるのです！」

ガッ！

相手の剣を木刀で受け止める音が響く。
でも……、それでも僕は……！

「……嘘は……ついて、いない……！」

「な、にをいって……？」

「僕が言った事は嘘じゃないんだ！」

「なっ！？」

付き合ってるという話が演技でも、キスしたという原因が誤解でも僕が清水さんに言った言葉は嘘じゃない！
全部僕の本心なんだ！

「僕みたいな馬鹿でも言っている嘘と、悪い嘘がある事くらいわかる！ 昨日のあれは紛れもない僕の本心だ！」

さっきの防御で木刀が折れかかっている。

点数差五倍の猛攻で僕の召喚獣はもうボロボロ……

こんな状態じゃ勝ち目なんてないだろう……
けど

「逃げるものか……！」

僕が今回の事で迷惑をかけてしまった人たちの為にも僕が責任を取らなくてどうする！

それが出来なければ僕は騒動を起こすだけ起こして尻尾を巻いて逃げだすただのロクデナシじゃないか！

こうして責任をとる機会を与えてくれたことを雄二に感謝

『『『^{サモン}試獣召喚！！』』』

「「えっ！？」」

眼をやるとそこには雄二とヒロを筆頭にした点数補充が済んだFクラスの面々がいた……。

「伏兵ですか……！ 卑怯な真似を……！」

「戦争に卑怯も汚いもないだろう？」

「雄二、ヒロ！ これはどういうことなの？」

まさか一騎打ちのつもりで来た清水さんを袋叩きにするつもりなんじゃ！？

「悪いがヒロの言った通りこれは『勝負』じゃなくて『戦争』なんだ。オレにはクラスを守る義務がある」

「軽蔑してくれて構わないよ。だけど目的のために……明久、お前の信頼を裏切らせてもらう！」

二人はそう冷たく言い放ちヒロの召喚獣が構える……。

「や、やめ ……！」

「やれ」

指示を受けヒロの召喚獣は刀で幾重にも斬りつけ、そして召喚獣に取り付き
自爆した……。
僕の召喚獣に向かって……

「え……………？」

……………

ヒロSIDE

「痛ああああっ！　ねえ、なにこれ！　今までで一番痛いんだけど！？　全身が！　爪先から頭の天辺までありとあらゆる所に激痛があっ！」

「すまない、明久……」

オレの自爆の攻撃力はどんな点数差も無効化して相手を必ず戦死に追いやる必殺兵器……

そんなもの【観察処分者】のお前がまともに受けたら死ぬほど痛いよな……

俺びと言っては何だけどこの後の【地獄の補習】に付き合っただけからな……

「清水、この通りすべての元凶は粛清した。これで今回の件は水に流してくれないだろうか？」

「ぎゃああああ！　細胞の一つ一つが焼けるように熱くて痛い痛いっ！　しかも刀で斬りつけられるから火傷の痛みと刀の鋭い痛みがコラボレーションが新境地を開いてるようないっ！」

そんな捻ったセリフが出てくるなんて自爆をまともに食らった割に

は余裕があるな……。
痛みへのた打ち回っている明久をロールパンは呆れたように見下ろした。

「そうですね。美春の怒りはまだ収まりませんが」

ロールパンは明久（本体）を蹴りつけている……

「清水さん、もう決着ついてるよね！？ どうして更に追い打ちを！？ 痛たたたたっ！」

「私刑に処した後、この豚野郎を放課後まで補習室に軟禁するといふのなら休戦を受け入れましょう」

「約束しよう。明久の召喚獣は消し飛んだからこれで補習室行きは決定だ。あとは放課後になるまでそれぞれの教室で点数補充でもやって過ごせばいい。その間こいつはずっと鉄人の餌食だ」

ついでのオレも西村先生の餌食だ……。

自分で決めてやったこととはいえ、キツイよな……。

明久の眼が『なんとと言う外道な取引を！』と訴えてるような気がする。

「ふんっ！何を恨めしそうな顔をしているのです。元はと言えばあなたがお姉さまを誑かすからいけないのです。少しは反省してくるといいです！」

ロールパンは尚もゲシゲシと明久（本体）を蹴り続けている。

「ははははは反省しています！ 美波を傷つけたことを心から反省して痛たたたたっ！」

「まあ、あの言葉が嘘だったらこんなものじゃ済ませませんけど今

日は……！ これくらいで……！ 勘弁して差し上げましょう……！

……！」

やることがえげつないなあ……。

「あ、烏丸大貴！」

「んあ？ なんだ？」

「あなたにお詫びとお礼を……」

「はあ！？」

そう言つてロールパンは頭を下げた。

予想もしなかつた言葉と行動にオレはつい間抜けな声をあげてしまった。

「あなたが昨日言っていた『本当に相手の事が好きなら相手の気持ちを考える』という言葉について美春なりに真剣に考えてみました。確かにあなたの言う通り相手の気持ちを考えた発言をするべきでした。反省しています。危うく美春自身が最も嫌っている人間に知らず知らずの内に成り下がってしまうところでした」

な、なんだ？ あのロールパンがすごくまともな事を言っている？ どうしたんだ、一体……！

騙し打ち？ 変なものを拾い食いしたのか？ 偽物？ それとも世界の終わりが近いのか？

「あ、ああ。こっちこそ昨日は言いすぎた。頭に血が上って清水がどんな気持ちでいたかまで気が回らなかつた。すまない」

そう言つてオレも激しくキョドリながら頭を下げた。

「それじゃあ、丸く収まったところで教室に帰るか。野郎共！引き上げだ！」

『『『おう！』』』

そう言つて雄二達は空き教室から引きあげて行つた。痛みに悶える明久を置いて……

「さ、最低だ……」

「ええつと……、明久ドンマイ……」

それ以外にかける言葉が見つからなかった……

そしてボロボロになつた明久に肩を貸しながら教室から出たら

ガラツ

「ウェルカム！ お待ちかねの補習だ。今からお前たちを『趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎』と言う理想的な生徒に仕立て上げてやるからな！」

「先生、オレの認識が間違つてなければ、それは補習じゃなくて洗脳です……」

すごくいい笑顔の西村先生が待ち構えていた……。

嗚呼、やっぱりやめとけば良かったな……。

第55話 丸く収まって良かった、良かった……

「うう、今日も酷い目に遭った……」

「これくらいで済んで良かったじゃないか……」

「……そうかもね」

西村先生による補習も終わり、フラフラになりながら教室に戻るオレと明久……

その足取りはまるで酔っ払いの千鳥足の様だった。

そしてやっとの思いでFクラスに辿り着き、ドアを開けると

「あれ？ 3人もまだ帰ってなかったの？」

雄二、秀吉、ムッツリーニが残っていた。

「ちょっと気になることがあったからな」

「気になること？」

「根本の動きか？ それならオレが『対根本撃退用作戰』を考えてあるけど？」

「いや、根本の事じゃない。って言うかなんだ？ その『対根本撃退用作戰』って？」

「しばらくすればわかるよ。ちょっとやり口が外道過ぎるからあまり使いたくなかったけど、昨日の交渉の邪魔をしてくれたお返しをしないとな」

「根に持つのう……」

「忘れたか？ オレのモットーは『恩も恨みも忘れない』だ！」

「そ、そうか……。まあ、話を戻そう。」

「そうじゃな。気になる事というのはムッツリーニが面白い物を聞かせてくれるらしいのじゃ」

「……………明久とヒロも聞いてくといいい」

「面白いものねえ……。なんだろ？ みんながそんなに楽しそうなんだからよっぽど面白いものなのかな？」

「まだムツリーニも中身を聞いていないらしいが、面白いことは間違いないらしい」

「……………保証する」

「ムツリーニがここまで言うんだったらきつと半端ないんだろうな。聞いていこう、明久」

「うん。ねえ、中身は何かな？」

「ああ、とある男女の会話らしいぞ」

「男女の会話？」

「おいおい……。野暮なことは止せて。悪趣味だぞ」

「ヒロ、大丈夫じゃ。これはお主もワシらも気になっていた一件の顛末がよくわかる会話じゃ。」

「え…………？」

「ん…………？」

気なっていた一件ってまさか！？

「……………スタート」

『この話し合いに何の意味があったか知りませんが美春はもうあなたを恋敵として認めるようなことはありません。お姉さまの魅力に気付かず、ただ同性のように扱う豚野郎に嫉妬なんて時間の無駄ですから。……………烏丸大貴の言うことも尤もですが、やはりお姉さまの魅力がわかるのは美春だけです』

「ん？ オレの言うこと？ もしかしてこれって……………」

「ちょ、ちょっと待って！ この会話はまさか！？」

「ご名答。これはお前と清水が昨日の放課後何を話したか、その一

部始終を録音した物だ」

「なるほど。確かに面白いものだな」

実際あの後何があったのか気になっていたところだ。

『……なんです？ 美春に何か言いたい事があるのですか？』

『うん……。一つだけ。清水さんの誤解を解いておきたいんだ』

『誤解？ なんです？ お姉さまと付き合ってるというのが演技だと言っことだったらもう知っていますけど？』

「ちよちよちよちよつと！ 何再生してくれてるのさ！ 冗談

じゃない！ 早く止めないと！」

「秀吉、ヒロ！」

「了解じゃ」

「オーライ」

雄二から指示でオレと秀吉で明久を押さえ込む。

なかなか頑固に抵抗してきたが大した問題にはならない。

『いや、そうじゃなくて……その……美波の魅力を知っているのは君だけじゃないってこと』

「クツ！ 離して、秀吉！ ヒロ！ これだけは本当にダメなんだって！」

「ふっふっふ。そうはいかんのじゃ」

「悪いな、明久。いくらお前の頼みでもそれは聞けない。なぜならオレは この後の会話に興味津々だからだ！」

「そんな！？ ヒロだけは僕の味方だと思っていたのに裏切り者――！！！」

「ハッハッハ！ 誰に何と言われようとオレの好奇心は止められな

い！」

明久は相変わらず悪足掻きを続けるが押さえる所をしっかり押さえられているため大した身動きが取れない。

『何を言っているんですかっ！ いつもお姉さまの悪口ばかり言っ
て、女の子として大事に扱おうともしないでっ！』

『うん。それは清水さんの言うとおりかもしれない』

『だったらお姉さまの魅力の何を知っているというんです！？』

『確かにお姫様みたいに扱ってるわけじゃない。男友達に接するよ
うな雑な態度で接してるかもしれない。けどね』

「わーーーー！わーーーー！わーーーー！！ 聞くなーーーー！ 流すな！

！ーーーー！」

「うるさい」

「むぐうーーーー！！！」

『けどなんですか？』

『 けど僕にとつては美波は、ありのままの自分で話が出て、
一緒に遊んでいると楽しくて、たまに見せる仕草が可愛い、とても
魅力的な 女の子だよ』

「ぎゃあああああっ！！！」

明久の絶叫が教室内に響き渡る。確かにこれはこいつにとっては羞
恥プレイだ……。

しかしこれでロールパンが仕掛けてきた理由がわかった。

そももつてあのロールパンにも人の苦言を真摯に受け止め反省す
るってことができるんだな……。

少し見直した。オレの中のあいつの評価を改める必要があるそうだ。

「明久、お前言う時には言うんだな」

「……………男らしい」

「なぜだかワシの鼓動まで速くなって凄いのじゃが……………」
「輝いてるぞ、明久」

あ、なんだか明久の眼がヤバイ……………。

まるでオレたちの記憶が消えるまで殴るくらいの事を考えてる時の
眼だ。

「ハッ……………!!」 (ダッ!)

「……………ッ!!」 (ダッ!)

オレとムツツリーニが誰かの気配を感じて廊下の方へ駆ける。

この気配はまさか !

ガラッ!

急いで廊下に出るがその時はすでに誰もいなかった……………。

「ムツツリーニ……………」

「……………ヒロも感じたか……………?」

「ああ、油断していたな……………」

「……………」 (コクリ)

「油断したとはどういう意味じゃ?」

「今のを立ち聞きされたかもしれない」

「え!? 聞かれたって誰に!?!」

「……………たぶん張本人」

そつだ、今の気配は確かに島田のものだった……………。

これは事態が良くなったのか？ それとも泥沼フラグなんだろうか？
いずれにしても明久には少し悪い事をしてしまった。

「そ、そうか。聞かれちゃったか……。すまん、明久。まさかこれ
ほどの物だとは思わなかった」

「すまぬ明久」

「……………ごめん」

「悪かった……」

「まあ、別にいいよ。張本人相手なら」

こ、こいつはなんて器がでかい奴なんだ……！
オレだったら恥ずかし過ぎて死ねる自信がある……！
そして原因を作った奴を問答無用でボコるのに……！

「それより悪いと思うんだったら僕と美波の仲直りに協力してよ。
あれ以来ずっと険悪なままなんだから」

「それについてはもう問題ないだろ……」

「そうじゃな……」

「仲直りどころか……」

「……………うん」

「へ？ なんで大丈夫なの？」

なんでも何も……

さっきの奴のおかげで島田の劣等感が一気に解決してしまったから
だろ……

まあ、なんにしてもこれで明久と島田は問題ないな
残る問題は一つだけ……

根本がFクラスに手出しを出来ないようにするだけだ……！

眼には眼を、歯には歯を、外道な手段には外道な手段を！

この混乱のもとを断ちきる！

覚悟しろよ、ヒキョー者！

.....

美波SIDE

ガチャッ！

「あ！ お姉ちゃんお帰りなさいですっ！」

「た、ただいま」

「？ お姉ちゃん、どうしたんですか？ 顔が真っ赤ですよ？」

「葉月、どうしよう……」

「????? 何がですか？ 学校で何かあったのですか？」

「あのね……」

「はいです」

「お姉ちゃん……どうしようもないくらい人を好きになっちゃったかも……」

.....

ヒロSIDE

「ねえ、聞いた？ 合宿の時の覗き騒ぎだけどアレってBクラスの根本が計画したことらしいよ？」

「え〜！ それじゃあ責任はFクラスに押し付けて自分はコソコソと隠れてたってこと？ 最低ね！」

「しかもそれを理由に自分のクラスとDクラスをけしかけてFクラスをさらに追い詰めようとしたらしいわよ？」

「何それ！ ひっど〜い！ けど、何でそんなことしたの？」

「なんでも有無を言わず犯人を仕立て上げて肅清すれば自分が黒

幕だって知られる事がないからだっさ。Fクラスは根本に利用されるだけされてあとはポイントで事らしいわ」

『最っ低ー！ Fクラスかわいいそう……』

『うん、Bクラスの人たちもそれを知ってカンカンに怒ってるっさ。もう誰も根本の言う事なんて聞かないでしょうね』

『あははは！ 卑怯なことばかりしてるから罰があたったのよ』

『そうね。根本の行動は前から目に余るものがあつたから同情の余地無しよね』

.....

「ね、ねえ、ヒロ……」

「何だ、明久？」

「どうして根本君が覗きの黒幕ってことになったの？」

「そんなものオレがツレと協力して噂を流したからに決まってるだろ？ 幸い根本は色んな所で恨みを買っていたから進んで協力してくれる人が多かつたしな。悪い噂は一秒で校内を七周半するから広まるのが早い、早い」

「う、うわ……」

明久が呆れたような眼でこっちを見る……

「な、なんだよ！？ その眼は！ 先に姑息な手段で仕掛けてきたのはあつちだ。堂々と勝負を挑むならこんな外道な手段は取らないけど、姑息な手段でくるっことはやり返されることも覚悟の上だろ？」

「……………」

それでも尚、明久は疑わしそくに視線を外さない……

無言のプレッシャーに耐えかねてオレはついに折れた……

「だーっ！ わかったよ！ 白状すればいいんだろ！？ このクラスを陥れようとしたから腹が立つたんだよ！」

認めたくないが、オレの中でいつの間にかこのクラスの存在は大切なものになっていた。

オレはオレの大事にしているものに危害を加えようとする奴への報復行為に手段を選ぶつもりはない。

「あれ？ 照れてる？ 照れてるの？」

「やかましい！」

顔がすごく赤いのが自分でもよくわかる……

明久がオレのそんな様子を見てニヤニヤしながらこっちを見ている。憎たらしい面だな、クソッ！

「全くもう！ ヒロは照れ屋だな……って痛い！ ちよっ！

人体に必要なパーツが色々もげちゃうよ！」

「五月蠅えっ！ 優子直伝の洗練されたこの業を身をもって味わえ！」

「何やってんだ、お前ら……？」

「ああ、おはよう雄二」

「おう、おはよう。ところでヒロ、あの噂が昨日言っていた『対根本撃退用作戦』ってやつか？」

「雄二、そのことなただけだね。ヒロが噂を流した理由はあああああ！ ヒロ！ 待って！ それ以上やったら僕の腕の関節が外れちゃう！ ふぎゃああああ！」

「安心しろよ！ 関節が外れたらオレが責任を持って嵌めてやるから！ アフターケアもバッチリ！ いや、オレって親切だな！」

「それは全く安心できないし、親切でもないいいいい!!」

「平和だな……」

「雄二！ 前見て、前！ 目の前に全く平和じゃない状態があああ
あ！」

.....

「おはようじゃ、雄二」

「おう、秀吉。おはよう」

「なんじゃ？ ヒロと明久はじゃれておるのかの？」

「そうだな。しかし合宿以来ヒロはいい風が変わったな」

「そうじゃな。前は一緒にいても必ずどこかで壁を作って、姉上以外には遠慮して一歩引いているといったところじゃったが、今ではそれが感じられんしおう」

「ああ。たぶんオレたちを友達として認めてくれたんだろうな」

「そうじゃな。嬉しい限りじゃ」

.....

こうしてB・D・Fの3クラスを巻き込んだ騒動は幕を閉じた。

色々大変だったが大事に至らなくて何よりだ。

さてこの平和な日常を長続きさせるためにも今日も一日頑張るとしますかね！

「僕の平和は!？」 by 明久

第4部 完

外伝6話 アルバイトは危険が一杯！【前篇】（前書き）

今回ちょっと際どい表現があります。

ご注意ください……

それではどうぞ！

外伝6話 アルバイトは危険が一杯！【前篇】

〈特別コーナー〉

鉄拳先生人生相談室！

「さあ、始めました。このコーナー！ 鉄拳先生の人生相談！ここでは皆さんお馴染みの鉄拳先生こと西村宗一先生が皆さんのお悩みに答えてくれます！それでは鉄拳先生よろしくお願ひします！」
「私がこのコーナーを受け持つ鉄拳先生だ！ 諸君らの悩みに答えよう！」

「そしてオレはアシスタントのレイヴン丸です！ え？ 違いますよ？ オレは断じて烏丸なんてイカしたナイスガイではありませんよ？」

「いや、お前はどこからどう見ても烏丸だろう……」

「そんな細かいことはさておき、一つ目の相談言ってみましょう！」

3年生T村Y作さんのご相談

鉄拳先生、レイヴン丸君、僕の悩みを聞いてください。実は僕には好きな子がいます。

その人はとても可愛らしくて人気があります。ですがそのK下Y吉さんはどうやら戸籍上では男のようなのです。これは同性愛になっってしまうのでしょうか？

先生、僕はどうしたらいいのか教えてください。

鉄拳先生とレイヴン丸のアドバイス

「いや、いきなり反応に困る相談がやってきましたね、鉄拳先生？」

「そうだな……。正直このコーナーを引き受けなければよかったと後悔している……」

「まあ、気持はわからなくもないですけど、一度引き受けたからには最後までやらないといけませんよね？」 『教師は生徒を正面から受け止める』……。いい言葉ですよ……。それでは鉄拳先生アドバイスをどうぞ！」

「……君の好きになった相手には双子の姉がいたはずだ。容姿に惚れたのであれば彼女に想いを告げることだ。容姿ではなく内面に惚れたのであれば 冷静によく考え直すことだ。一部の生徒の間では『彼は第3の性別【秀吉】である為同性愛ではない』という説があるが、決して惑わされないように！ 君が健全な学校生活を送れることを祈っている」

「はい、はい！ 鉄拳先生！ 異議あり！」

「なんだ、烏丸？」

「烏丸じゃなくてレイヴン丸ですって！ その双子の姉のY子はH吉のスペアじゃないんですから、その答えはY子を傷つけるんじゃないでしょうか？」

「ではどうしろと言うのだ？」

「そうですね。オレの意見としては……見込みがないからさっさと諦める。もしH吉のスペアとしてY子に告白しようものなら無事に卒業できると思うなよ？」

「……………お前だけはマトモだと思っていたのだが……………」

「それでは次のご相談をどうぞ！」

2年生K保T光さんの相談

最近、寝ても覚めても頭から離れない人がいます。彼 Y井A久君が笑う姿を見ていると僕まで幸せになり、彼が沈んだ表情をして

いると僕まで悲しくなってしまう。

彼は同性なのですが……この気持ちは恋愛感情なのでしょう？

鉄拳先生とレイヴン丸のアドバイス

「ここ最近強く頭を打っていないか？ 記憶にないとしても念の為病院で診察を受けることを推奨する。同性愛云々の話はその後だ」

「鉄拳先生！ なんてことを言うんですか！？ 彼は真剣に悩んでいるんですよ！？」

「では、どうしろというのだ！？」

「オレの意見としてはまず同性愛かどうかは置いておいて、彼の喜びそうな事を考えて実行するのいいと思う。それでその気持ちが同性愛だつて自分で結論が出たと言うのなら……そこから先は君が『どうしたいか』を考えて決めてみるのいいと思う。」

「……上手かわわして煙にまいたな……」

「え？ 何を言っているのか分かりかねますが？ それでは次の相談をどうぞ！」

2年生S水M春のご相談

私には1年の頃からずっと好きなお姉さまがいます。ですが最近そのお姉さまが悪い男に騙されています。どうしたらその男を殲滅できるのか教えてください。

「貴様ら、同性愛以外に悩みはないのか！？」

「鉄拳先生！ 落ち着いてください！ あゝ、オレの意見なんですが、まず偏見や嫉妬を取っ払ってその男を見てみるといいと思う。どんなにいい奴でもそいつを憎いと思えばおのずとそいつが悪い男に見えることだってある。」

逆に相手を好意的に思えばそれがどんな極悪人だつていい奴に見えるってこともあると思う。そして何より大事なのは『好きな相手』の気持ちを思いやるのが大事だ。だから殲滅なんて物騒な考えは

早めに捨てたほうがいいぞ」

.....

「なんじゃ、こりゃ〜っ！」

某刑事ドラマの様な叫び声をオレはあげる……。

理由はオレがバイトをしていた店の扉に張り出されている一枚の張り紙……

それにはこう書かれていた……

『夜逃げしま〜す！ バイバイキ〜ン！ BY店長』

なんてことだ！ まだバイト代を貰っていないというのに！

あのタヌキオヤジめっ！ 散々人をこき使っておいて〜っ！

どんな激務も憧れのバイクを買ったためだと思って頑張ってきたのに

……！

「ついてねえええええ！」

.....

翌日、文月学園2年Fクラス……

オレはこれ以上ないくらい落ち込んでいた……

「ヒロ、どうしたのじゃ？ 沈んでおるようじゃが……」

「また学園祭の時みたいに木下さんと喧嘩でもしたの？」

「ああ、秀吉、明久……。聞いてくれるか？ 実は 【省略】

と言っ訳なんだ……」

「それは何とも……」

「災難じゃったの……」

「ああ、ここのところ大した不幸がなかったから油断していた……」

そう、お忘れの人も多いと思うがオレは結構不幸体質だ……

編入する前にトラックに撥ねられたり、編入初日にバナナの皮を踏んでこけて1時間ほどのびていて遅刻したり、おみくじを引けば毎年大凶しか出てこなかったり、自販機で飲み物を買ったら釣り銭がすべて100円玉で返ってきたりと散々だったりする……
久しぶりにこの台詞を言おう。

不幸の神様、そんなにオレが好きかい？

俺はあんたなんか大嫌いだ！

バカ野郎……っ！

「せっかくバイクを買うための金が今月で溜まると思っていたのに……」

「なんだ、ヒロ？ バイトを探しているのか？」

「ん、ああ。そうだな……。新しいバイト見つけないとな……」

「それならこれなんてどうだ？ 今週の土曜日なんだが……」

雄二はそう言っつて一枚のチラシをオレに見せた。

【喫茶店 ラ・ペデイス 日雇い11:00～20:00まで 800円程度

未経験者歓迎！ 長期アルバイトも募集中！】

「募集人数は5人なんだがお前も一緒にどうだ？」

捨てる神あれば拾う神あり……！

「雄二……！　ありがとう……！　お前になら明久の尻を差し出してもいい……！」

「ちょ、ちよつとヒロ！？　何を言っているのさ!？」

「気味の悪い事を言ってるじゃねえ!」

「……雄二、浮気は許さない」

「うおつ！　翔子どこからわいて出た!?　待て、これは違う！

ぎゃあああつ！　頭蓋が割れるうつつうつつ!」

「明久君……、やっぱり坂本君の事が……」

「姫路さん!?　お願い、誤解しないで!」

「よし、それじゃあ張り切って行くとしますか!」

「……明久、雄二……気の毒にのう」

「……ヒロは時々天然になる……」

「全くじゃ……」

待ってるよ、憧れのバイク！　オレ、バイト頑張らな!

.....

「明久はなんでバイトしようとしたんだ?」

「うん……。実は仕送りを親が横領しちゃって……」

「横領!?　なんでまた!？」

「学校の成績を報告しなかったら……」

「なるほど、大体わかった。ダメだろ、親御さんに心配かけちゃあ

「う……!　ごめんなさい……」

「秀吉は?」

「演技の幅が広がるかもしれんからのう」

「秀吉らしいや。ムツツリーニは?」

「……新しいカメラの購入資金」

「ああ、確かにムツツリーニの持つてるカメラって相当いい物だし

な

「……………（コクコク）」

「雄二は？」

「……………自分の部屋にカギをつけたくてな。……………とびきり頑丈な奴を……………！」

「そ、そうか……………。なんだか大変そうだな。オレに出来ることなら相談に乗るぞ？」

「ああ。どうしようもなくなった時は頼む……………」

……………

「こんにちは！ アルバイトに来た烏丸です！ よろしくお願います！」

「ああ……………、よく来てくれたね……………。よろしく頼むよ……………」

この店の店長か？ なんだか随分とくたびれてるな。何かあったんだらうか？

（ねえ、この店長さん大丈夫なのかな？）

（むう、何かあればすぐに富士の樹海に向かいそんな雰囲気じゃのう……………）

（的を射ているな……………。早まった事をしないように眼を放さないようにしておこう）

（これは噂なんだがあの店長どうやら奥さんと娘に逃げられたらしい……………）

（そ、そうか……………。それは気の毒だな……………。）

要するにオレたちは奥さんと娘が帰ってくるまでの繋ぎか……………

まあ、いいけどな。ちゃんと給料を支払ってくれるならオレの方は

文句はない。

（けど変だな？ それにしたって他のバイトの人がいてもおかしくなさそうなのに……）

（あれ？ そう言えばそうだね。この前来た時はバイトの女の子が何人かいたはずなのに）

（その連中がどうしたかは知らないな。何かあったのかもしれないが）

（まあ、なんにしても仕事は仕事だ。詮索してもどうにもならないし、オレたち出来る事なんて何も無い。さっさと始めよう）

「それじゃあこれは君たちの制服……。サイズが合わなかったら言っつてね？」

「……サイズが合いません」「」

「性別が合いませんぬ」

「なんだ？ オレ以外はみんな間違ってるのか？」

「あれ？ おかしいな、きちんと目測したはずなんだけど……」

「僕は少し小さいだけです、雄二とムツリーニ　じゃなくて坂本と土屋のサイズは明らかにあってません」

「おいおい……、冴えないオッサンだな……。奥さんに逃げられたのってもしかしてうだつが上がらないからじゃないのか？」

「うーん、坂本君はS、吉井君はM、土屋君はEロ　じゃなくてLに見えたんだけどな……？」

「前言撤回、このオッサン意外と侮れない……」

「こいつらの性癖をこの短時間で見抜いている……」

「しかも性格が読めない……。会ってしばらくして言動や行動を観察して、それをパズルの様に繋ぎ合せていく事でそいつがどんな人

間か何となく把握してきたがこの店長はイマイチ行動が読めない…
…。
こんな人間は初めてだ……。

「……………エロになんて興味がない」

「……なにいつ!?!」「……」

「嘘をつくな、嘘を!」

「ムツツリーニ、いくらなんでもそのウソはないよ!」

「そうだぞ、嘘というのは人を騙せる範囲でつくものだ!」

「……………!?!」(ブンブン)

ムツツリーニの世紀の大嘘に対してオレと明久と雄二が一斉に突っ込みを入れる。

なんて大それた嘘をつく奴だ!

「ああ、ごめんね。うっかり制服と性癖を間違えちゃったよ……………」

なんて奴だ! このオッサン本当に行動が読めない……………!

「じゃからワシは性別が合わぬと言っておるのに……………」

秀吉の呟きは見事に全員に無視されてしまった……………

「秀吉、コレをお前にやる……………」

「これは……………胃薬かのう?」

「オレが常備している薬だ。効き目は抜群だから胃が痛くなったら飲みな……………」

「ヒロ……………、かたじけないのじゃ……………」

……………

.....

「なんだか学園祭のときみたいだね」

「.....喫茶店に縁がある」

「そうかもな。オレは厨房に回るから二人とも接客頑張れよ」

「え？ ヒロは接客しないの？」

「接客は嫌いだ.....。それに料理は得意だしな」

「そうなんだ.....」

ガチャツ！

「お待ちせ、二人とも」

「.....待たせた」

「待たせたな」

「意外と似合うものだな。それっぽいじゃないか」

「そうじゃのう、なかなか男前じゃぞ三人共。ヒロのコック服なんかは特に馴染んでおるのじゃ」

パシヤ、パシヤ.....

「コラ、ムツツリーニ。何を撮っている？」

「.....最近、ヒロの写真が密かに人気商品」

スッパーン！

「勝手に撮るな。勝手に売るな」

「.....ヒロ、どこからハリセンを」

「企業秘密だ！」

「お約束じゃのう.....」

大体そんな物誰が買うつていうんだ？
自慢じゃないがモテた事なんか一度もないぞ！

「ではワシらも着替えるとするかの」

「そうだな」

「ちょっとバカ雄二！ 何、秀吉と一緒に着替えようとしているのさ！？」

「……………万死に値する……………！」

スパパーーン！

「お前ら秀吉は男だつて言ってるだろう……………」

「痛っ！ 痛いよ、ヒロ！ ハリセンなんて何処から」

「企業秘密だ！」

「全く……………お前らは……………。男同士なんだから問題ないだろう」

「何言ってるのさ！？ それは戸籍上の話だよ！」

「待つんじゃない、明久！ 事実ワシは男じゃぞ！」

「雄二、どうしても考えを改めないのなら」

「突入なんてするなよ。ドアの弁償なんて冗談じゃないぞ」

「心配するな、その時はオレが二人を床に沈める……………」

「霧島さんにこの状況を包み隠さず暴露する…！」

ガチャ

「オレは廊下で着替えよう」

「よしよし。それじゃ僕らは店長のところへ行こうか」

「むう……………、背中 của ファスナーが上がりなん……………。雄二、すまぬが少々手伝って うん？ 雄二はどこへ行ったのじゃ？」

「すまん、秀吉。オレは自分の命が惜しいんだ……………」

雄二、お前も大変なんだな……

……

「それにしても本物の喫茶店か……。学園祭の時と違ってまた新鮮だね」

「……………面白い」

「そうか、二人ともバイトは初めてなのか？」

「うん」

「……………(コクリ)」

「そっか。初バイトか。へますんなよ、特に明久」

「し、しないよー！」

ニヤニヤしながらからかう様な口調で言つと面白いほど動揺してくれた。

全く飽きない奴だよ、お前は

コンコンコン……

「」「」……………。「」「」

返事がないな……。どうしたんだろう？

ガチャ

「失礼します」

「……………(ボー)」

「あの店長？」

「……………(ボー)」

返事がない。ただの屍のようだ……

(ムツツリーニ、ヒロあの店長やばくない?)

(やっぱりお前もそう思うか?)

(………危険かもしれない)

(だよ。ちよっと確認してみようか)

(………どうやって?)

(軽い日常会話でもしてみるよ)

(気をつけるよ。ああいう雰囲気の間人はデリケートだからな)

(了解)

「あの……店長?」

「ん……? ああ。なんだい?」

「今日はいい天気ですね」

「ああ、そうだね……。お父さんってウザいよね?」

明久との言葉のキャッチボールは店長の大暴投で台無しになってしまった……。

それでも明久はめげずに言葉を紡ぎ続ける。

「えーっと、お客さんがたくさん来るといいですね?」

「僕の可愛い娘はね……、1歳になるまでは『お父さん、大好き』が口癖だったんだよ」

「店長、それは記憶の捏造です……」

かなり末期症状だな……。某ドラマのネズミ嫌いの獣医学生が言った迷台詞

『戸棚の裏にはネズミの卵でいっぱいだア!』と同じくらいヤバいセリフだ……。

(どうしよう、全然会話にならないんだけど？)

(相手が興味を持ってしている話題に触れてみたらどうだ？)

(…………… 娘の話)

(なるほど。それなら反応があるかもね)

「あ……………」

「うん……………。うん…………？」

「店長の娘ってどんな」

「5秒やる…………。神への祈りを済ませろ…………！」

店長が今までの様子が嘘のように速い動きで明久の首筋にナイフを押し付けていた…………

って言うかどこかで聞いたことのあるセリフだな？
どこだっけ？

「店長、待つてください！ 落ち着いてください！ って言うかそのナイフ何処から出したんですか！？」

「あ、ああ…………、ごめんね。君はバイトに来てくれた子だったね？」

僕の可愛い天使を誑かしに来た輩じゃないよね…………？」

「あ、あはは…………、そうですね。ヤダなあ……………」

(ヒロ、ムツッリーニあの店長どう思う？ アウト、セーフ？)

(…………… チェンジ)

(オレとしては無効試合にしたい…………)

どうしよう…………。オレ達は相当拙い場所に足を踏み入れてしまったようだ…………

出来る事なら今すぐに回れ右をして逃げ出してみたい…………
しかしそうも言ってもらえないのが現実だ。

ここで逃げたらオレはバイクを買うだけの金を稼ぐことができず、
明久は生活ができなくなるだろう。

この狂った環境の中で狂った店長の下で何とかやっていくしかない！
そうとも！ ブービートラップが襲ってこないだけ家より何倍もマ
シじゃないか！

そう考えると気分が大分軽くなってきた！
よし、がんばろう！

「やはりワシだけ違う制服というのは……………」
「諦める、秀吉。これも仕事のうちだ」
「あ、二人とも結構時間がかかって」

明久が視線を秀吉に向けた後、固まった……………
そこにはウエイトレスの格好をした秀吉がいた……………
似合ってる。確かに似合ってるけど……………！
お前いいのか？ 本当にそれでいいのか？
優子に見られたら殺されるぞ……………！

「秀吉、凄く似合って」
「ディア・マイ・ドウタアアアッ！！」

明久が何か口にしようとした瞬間店長が秀吉に飛びかかった。

「うお！ なんだ！？」
「て、店長何トチ狂ってるんですか！？」
「ディア・マイ・ドウタアアアッ！！」
「ダメだ！ 言葉が通じない！！」
「雄二、そっちに行った！ 迎撃を！！」
「了か ダメだ！ 速すぎて攻撃が当たらねえっ！」
「ムツツリーニ！ 店長にスタンガンを！」
「……………目標が絞れない！」
「秀吉っ！ 危ない！」

ガッ！

「ヒ、ヒロ!? 大丈夫!」

「な、なんとか……」

どうにか体に触れる瞬間を狙って防御するが、長くはもたない……。なんていうバカ力だよ!? 西村先生クラスだ……! せめて得物があれば対等に渡り合うことができるのに……!

「秀吉! ヒロを助けよう! 『父親に勝手に日記を読まれた思春期の女の子』のセリフを大声で!」

「りよ、了解じゃ! 『お父さんなんか大っ嫌い!』」

「そうかつ! それじゃあ今夜はお父さんと一緒にお風呂に入ろうっ!」

「ダメだ! 会話になってねえ! 3人共、困んで一気にボコるぞ! この変態を秀吉に指一本触れさせるな!

「全力でいくよ! 秀吉はその間急いでに服を着替えてきて!」

「ディア・マイ・ドウタアアアツ!!」

その後、ムツツリーニ特製の改造スタンガン最大出力3回でどうにか変態を沈めることが出来た……

「で、どうするの?」

「どうするもこうするも店長がこんなじゃ何もできないだろ。」

「そうだな。こんな変態の城で働くにはさすがにこれだけの給料じゃ割に合わない」

「いや、そういう意味じゃないだろ……」

「って言うかもっと給料がよかつたらこんな店でも働けるんだ……」

「ああ。労働に見合う報酬がもらえるのなら溝さらいだって喜んでやるとも！」

「しかし今回は無理じゃな。ワシらだけで店を開けるのは無理があるからのう……」

「仕方ない。外に臨時休業とでも張っておこう」

「そうだな」

カランコロン

あ、お客さんだ。仕方ない、今日は休業だって事を話して帰ってもらうと

「いらっしゃいませっ！」

つておいー！ 明久、何やってるの？ 何やっちゃってるの！？

『良かった。開いてるみたい。時間潰す場所がなくて困ってたのよねえ』

『ホント、助かったね』

（おい、明久。何勝手に招き入れてるんだ！）

（ごめん！ 頭の中でシミュレーションをしてたらお客さんが来て、ついで！）

（困ったのう。もはや追い返せる雰囲気ではなくなってしまった）

（仕方ない。さっきマニュアルを厨房で見つけたし、なんとかやってみよう）

（……………店長が眼を覚ますまで踏ん張るしかない）

（うう……………ごめん…………）

（まあ、そう気にするな。学際的要領でやれば大丈夫だよ。頑張れ、明久！ お前なら出来る！）

(う、うん。わかった。頑張るよ)

とりあえずオレは注文が来るまでに厨房に何かがあるのかチェックしておこう。

それからオレたちは特にミスらしいミスもなく順調に仕事をこなしていった。

明久が注文を取るときに噛んでお客さんに励まされていたけど、まあ初めてのバイトだしその程度のミスは許容範囲ないだろう。

むしろ噛んだことによってお客さんに親しみを持たれていた訳だから一概に失敗とも言いきれない。

『ああつ！ 変態先輩だ！』

『常村と夏川だ！ お前の記憶力は一体どうなっているんだ！？』

なんだ？ 明久はなんで騒いでるんだ？

あの客は……確か学際の時の常夏コンビ……

久しぶりに見たよ……。まあ、見たからって得した気分になんてならないけどな……

「あ……！」

「どうした、ヒロ？」

「ああ、どうもミルクの搬入が遅れているようなんだ。在庫が切れた」

「わかった。ホールの2人にそう伝えておこう。」

「ああ、頼む」

『アイスマルクティーとアイスコーヒーを1つずつ』

『お客様、申し訳ありません。ただいまミルクを切らしておりましてアイスマルクティーはアイスティーになってしまつたのですがよろしかったでしょうか？』

『あ、ホントに？ それじゃあそれでいいや』

「かしこまりました。アイスコーヒーとアイステイーを1つずつです。少々お待ちください」

さすがだ、秀吉。見事な対応だ。

注文された料理を作りながらホールの方に聞き耳を立てる……さて明久の方はちゃんとできているかな？

「俺はアイスコーヒー」

「オレはアイスミルクだ」

「お客様、申し訳ありません」

「あん？　なんだ？」

「ただ今ミルクを切らしておりましてアイスマルクは」

良かった……。明久もちゃんと出来てそうだ……。これで安心

「アイスになります。ご了承ください」

「それただの氷だろ！？」

「では少々お待ちください」

「話聞けよ！」

安心できなかった……。何やってるんだ、あいつは！
すぐにもフォローに入らないと……！

「ヒロ、お客様が呼んでおる！　すぐに来てほしいのじゃ！」

「え？　けど今明久の方が大変なことに」

「いいから来るのじゃ！」

秀吉に引っ張られオレはお客様の前に引っ張り出された。

「このデザートは君が作ったのかね？」

「はい。そうですが……」

何だろう？ クリームか？ もしかして自分なりに工夫を加えたのがいけなかったかな？ そんな変なものは作ってないと思うんだけど……

「素晴らしい！」

「はい？」

「この上品な甘さの中に仄かに苦味を入れることで、甘さが一層際立っており、それでいてしつこくないすっきりした後味が絶妙なハーモニーを奏でており……略……何より素晴らしいのが味のバランス……略……それでいて調和を崩すことのない……略……甘いものが嫌いな人間にも食べられるように作ってあり……以下省略」

は、話が長い……！ どうしよう……。変なのに捕まってしまった

……

一刻も早く明久のフォローに回らなければいけないのに……！

この目の前の話の長い男の言葉を聞き流しながら明久の方の様子を伺う……

『このブレンドは何を混ぜているんだ？』

『はい、アイスコーヒーとホットコーヒーを混ぜております』

『その2つは混ぜたらダメだろ！ ぬるくなるだけだろ！？』

『備え付けのタバスコと爪楊枝はお好みでお入れください』

『いねえよ！ そんな特殊な好みを持った奴なんて！』

『ところでお客様』

『あん？ 何だよ？』

『今日は頭にブラをつけていないんですね？』

『てめえ！ 表出るやアアア！』

ああああ！ 拙い！ 拙いぞ！ 早くフォローを入れないと……！
「お客様、申し訳ありませんが少々問題が発生しましたので失礼します」

「ああ！ まだ私の話が終わっていないというのに！」

冗談じゃない！ これ以上あなたのクソ長い話に付き合ってもらえるか！

こっちは忙しいんだ！

「明久！ お前何やって」

「食らうか！」

バシャ！

「……あ……！」「……」

常夏コンビの坊主の方がコーヒーを明久にかけようとしたが明久が避けてしまったため後ろにいた秀吉にかかってしまった……

「す、すまねえ……。あんたを狙ったわけじゃねえんだ……」

自分がやらかした事態に気がついて、頭を冷やした坊主頭の先輩（名前忘れた）が秀吉に頭を下げる。

それに対して秀吉はニッコリと笑い「いえ。お気になさらず、お客様」と返した。

プロだ！ 接客のプロが此処にいる！

（巻き込んでごめん、秀吉）

(何、気にするでない。着替えれば済む話じゃ)

(そう言ってもらえると助かるよ)

(明久、あのお客さんはオレが対応しておくから他の客に回ってくれ)

(え？ でもヒロはキッチン担当……)

(背に腹は代えられない……。お前があのまま常夏コンビの相手をしているとそのうち喧嘩に発展しそうな気がするからな)

(う……！ ごめんなさい……)

(次からは気をつけるよ)

その後常夏コンビにデザートをサービスすることで明久のミスを水に流してもらおうように頼んだ。坊主も秀吉にした事に対して罪悪感を感じていた様なので渋々だが応じてくれた。

もし応じなかったらオレが説得せつとくしなければならなくなるところだったからそうならなくて何よりだ。

ところで秀吉のサイズの制服ってまだあったっけ？

こんなことで大丈夫なのか？ オレたちは……

外伝6話 アルバイトは危険が一杯！【後篇】

カランコロン

「いらっしやいませ！」

「こんにちは、明久君。遊びに来ちゃいました」

「え？ 姫路さん？」

「おう、姫路！ いらっしやい！」

「こんにちは、烏丸君」

「……ア、アキ……」

「あ、美波もいらっしやい！」

そう言つて明久がニッコリと笑うと

「……っ！……！」

島田は顔を真っ赤にしてソツポを向いてしまった……

そう言えばあの後教室での一件以来、明久と島田はまともに会話を
してなかつたっけ……

「ヒロ……、美波まだ怒ってる……」

「怒ってない、怒ってない……」

「でも怒りのあまり真っ赤になってるよ……？」

「えーっと……。あれは別に怒って真っ赤になってる訳じゃないか
ら……」

全く世話の焼ける奴らだよ、お前らは……

「後で何とかしてやるからほら案内、案内」

「う、うん……。絶対だよ。……えっとお客様、2名様でよろしい

でしょうか？」

「いいえ、4名です」

「え？ 4名？」

「一人はちよつと遅れているんです。そしてもう一人は……」

『……雄二、妻への隠し事は浮気の始まり』

『なんだ？ ここにいるはずのない翔子の声が聞こえるぞ？ 呪いか？』

「あ、明久……。雄二の救援に行ってくるから後頼んだ」

「ええ〜？ ちよつと野暮じゃない？」

「野暮でも何でも『命あつてのモノダネ』だろ？」

そう言つてキッチンで雄二に制裁を加えようとしている霧島に向かつて説得を始めた。

「落ち着いてくれないか、奥さん」

「……奥さん？」

「だってお前雄二の奥さんだろ？」

「ヒロ！ お前何言つて……！」

「……奥さん……」

「待て、翔子！ それは色々とおかしい！」

奥さんと言われたことがよっぽど嬉しかったのだらう……。うっとりしながらその言葉をもう一度呟いている。

「まあ、落ちつけよ。旦那さん」

「……奥さん……、旦那さん……」

「ヒーヒーッ！ 何言つてくれてんだ！？」

「照れるなよ、旦那さん」

「旦那さんと言つな……ッ……！」

「まあ、そんな細かい事は置いて……これをオレが言っているのか迷うが、その為に二人の間の絆にヒビが入っちゃいけないと思うからあえて言わせてもらおう。雄二がバイトをしている理由は

！」

「……理由は？」

「奥さんには内緒で『大好きな奥さんへのプレゼント』を買ったためなんだー！ー！」

「キサマツーーー！ 裏切ったなー！ー！」

「……雄二、嬉しい……！」

「待て、翔子！ 違う！ 違うからな！ オレはそんな物買うつつもりは全くないからな！」

「またまた、照れちゃって……！ 奥さん気にしちゃダメですよ？ 旦那さんは相当な照れ屋だから恥ずかしがってるだけなんだ」

「……雄二が意地っ張りだっていうことは知ってる」

「おっと！ こいつは惚気られてしまいましたね。いや、仲睦まじい夫婦で羨ましい！」

「……ありがとう、烏丸はいい人……」

「キサマ、あとで覚えてろよ……！」

「悪い、もう忘れた。それにオレがフォローしたおかげでお前の命が助かったんだから感謝してほしいくらいなんだけど？」

「クツ……！」

「それじゃあ、ごゆっくり〜」

『……雄二、続き……』

『待て、翔子！ 引っ付くな〜っ！！』

.....

さて、明久と島田はどうなってるかな？

ホールに出るとすぐく空気の重いテーブルがあった……

「え、ええつとご注文が……決まったらお呼びください……」
「は、はい……」
「……………」
「そ、それでは……」
「ア、アキ……」
「な、何かな……？ 美波……」
「う、ううん……。やっぱり何でもない……」
「そ、そうですか……」

そう言うと明久は逃げるようにテーブルから去って行った……。確かにあれは居た堪れないだろうな……。島田がオレに気が付き、すごい勢いでこっちに迫ってきた……。例えるなら草食動物に迫る肉食獣みたいだ……。

「烏丸！ ちょっと来て！」
「ちょ、ちょい待て！ オレまだ仕事中 あ〜れ〜！」

すごい力で引つ張られて裏口まで拉致られてしまった……。この人攫いめ……！

……………

「どうしよう、烏丸〜！ アキの顔がまともに見れないの……！」
「どうしようって言われてもな……。こればかりは島田が自分で何とかするしかないだろ？」

「でもこの間教室であんなこと聞いちゃったから……！」
「いつも通りに接するのが一番だよ」
「それができたら苦労しないわよ〜！」

「明久のあの言葉を聞いただろ？ 明久は島田の魅力として『ありのままの自分を出せる相手』と言っていた。つまり明久は島田に今まで通り接して欲しいと願っている。今更変にかっこつける必要はないよ。ありのままを見てもらえ。今まで通りでも明久に島田の魅力は十分伝わるはずだから……」

「う、うん……。わかった……。やってみる……」

「よし、それじゃあ戻ろうか」

「うん、烏丸……。いつもごめんね……？」

「気にしなさんな……。……ところで島田、自分の気持ちに答えは出せたのか？」

「うん……。ウチは アキが好き……。今は気持ち瑞希に向いていても……。ウチは諦めない！ だから瑞希と同じスタートラインに並ぶつもり。瑞希には近いうちに話そうと思ってる。それで初めてウチと瑞希は対等に勝負できると思うから……」

「そっか……。自分自身でそう決めたんだったらオレが動いた甲斐があつたな……。オレはお前の友達であると同時に姫路の友達でもあるからどちらかに肩入れすることはしない。けど……。また辛くなつたら愚痴くらいは聞いてやるから、この間みたいに一人で溜め込むなよ？」

「うん……。ありがとう……。けど烏丸も人の事ばかりじゃなくて優子と仲を発展させないとね？」

「うわ、お、思わぬところで反撃が……。って言うかなんで島田が知っている！？」

「バレバレよ……」

「バレバレッスか……？」

「一体どのあたりまでバレてるんだ……？」

「たぶん優子とアキ以外は全員知ってる。あんた優子に対してだけ随分態度が違うし……」

「うわ〜お……。それはそれでまた複雑だな……」

なんで周りはみんな知ってるのに肝心の優子は気付いてないんだ……？

少なからずシヨックだ……。オレはもしかしてそう言う対象として見られてないんじゃないだろうか？

そんなウツな事を考えながらオレと島田は店の中に戻った……。

……

「ご注文はお決まりですか？」

「うん、何がいいでしょうか？」

「……どれもおいしそう」

「何かお勧めはありませんか？」

「え〜とね」

良かった……。島田は相変わらず明久の前では話さないが、さつきまでの重い雰囲気はだいぶマシになったようだ……。

「前に来た時はクレープが美味しかったよ。厨房にはヒロとムツリーニがいるからきつとすぐく美味しい物が出来ると思うよ？」

「前に来た時ですか？ あ、あのそれって誰とですか……？」

「え？ 美波とだけムグウ！」

「バ、バカ！ み、瑞希これは違うの！ べ、別に2人で来た訳じゃなくて……！」

島田は明久の口を塞ぎながら何かボソボソと明久に呟いている……。その場の勢いで島田は明久にさつきまで意識し過ぎた態度はまるでなく、自然体で接している。

まあ、雨降って地固まるって言うし、前のような関係に戻って良かったよ……。

明久の方も久しぶりに島田に相手をしてもらえて心なしか少し嬉しそうだし……

「え？ 二人じゃなかったんですか？ そ、そうですか。それなら……」

「も、もちろんじゃない。ね、アキ？」

「う、うん。勿論だよ！ 雄二を含めた4人で来たのさ！」

ゴキーン！

あ……、嫌な音がした……

どうやら右腕の関節を外されたようだ……

「……………吉井、もう1人は？」

気づけば霧島が明久の左腕をホールドしている……

これはもしかしてもしかなくても相当拙い状況じゃないか？ 止めないと店の中で殺人事件が起きてしまう……！！

「も、もう1人はあの人よね、アキ！？」

「う、うん。えっと……高橋先生と来たのさ！」

ゴキ、ゴキーン！

「ふぬああああ！ 手首の関節が嵌められてまた外されたああああ！」

「どうしてアンタはそんな底の浅い嘘しかつけないのよ！？ 高橋先生と一緒に来るわけないでしょ！？」

「え！？ え！？ やつぱり嘘なんですか！？ そ、そうなるや
つぱり2人で来たんですか！？」

「……A hellish gate has opened.
Compensate the crime with
your death. Are you ready,
Yuji？」

ええっと…… 『地獄の門は開きました。過ちをあなたの死で埋め合
わせてください。』

あなたは準備ができていますか、ユウジ？ 『かな？
つてことは……』

「なんだ！？ 何で翔子は戦闘態勢に入ってるんだ！？」

「逃げる、雄二！ 待て！ 落ち着いてくれ、奥さん！」

「ヒロ！ お願ひ、助けて！ このままだと殺されちゃうよー！」

「そっちもか！？ オレにどうしろと！？」

こんな厄介事を2つ同時に止めると！？ 無茶仰る！

カランコロン

「ごめんね、遅れちゃった……つて皆どうしたの？」

こんなカオスと化している店に優子が客として入ってきた……。

優子SIDE

「優子！ 助けて！ この事態の收拾はオレ一人じゃ手に余る！」

「え？ ヒロ、なんでここに？」

「そんなこと今はどうでもいい！ このままじゃ、店の中で惨劇が

起こってしまっ！」

「え？ え？ ちょっと落ち着きなさい、ヒロ。端折り過ぎて訳が分からないわ……」

アタシはそう言って辺りを見回すと吉井君と坂本君に制裁を加えようとしている美波と代表の姿があった。

「……大体わかったわ。代表に島田さんちょっと落ち着きなよ。お店で暴れるなんて良くないよ」

「……でも雄二が……」

「でもアキのバカが……」

「言い訳しないの。他のお客さんに迷惑でしょう？」

「確かにそのとおりね」

「……わかった」

全く……、代表も美波も坂本君と吉井君の事になったら見境がなくなるんだから困ったものよね……

「ヒロ、こんなところで何してるの？」

「見ての通りバイトだ。前働いていた店が潰れてしまっ……」

「そ、そうなの……？ 大変ね……。何か欲しいものがあるの？」

「ああ、バイクを買おうと思ってる……」

「そう……。その格好似合ってるわよ」

「ハハハ……。ありがとう……」

そう言うとヒロは何かを考えるように押し黙ってしまった。

それにしてもヒロのコック服姿はすごく似合ってカッコ良いわね……。

……
普段と全く違う服装だからか胸の鼓動が止まらない……

あとで土屋君に写真を注文しておかなくちゃ……！

「あれ？ 秀吉もここでアルバイト？」

アタシそっくりの見覚えのある顔を見つけ、視線を向けるとそこには男のくせにミニスカートを着たアタシの愚弟がいた……。何やってるのよー！？ このバカはー！

「秀吉、ちょろろといいかしら？」

「んむ？ なんじゃ、姉上？」

「いいから、いいから。吉井君、この店のトイレってどこにあるの？」

「え？ 向こうの奥だけど……」

「そう、ありがとう」

たっぷりお仕置きしてあげないとね……

あ、そうだ。これを言っておかないとね。

「あ、そうそう。代表と美波、さっき言った事撤回するね。他のお客様さんに迷惑でも、気に入らないものは気に入らないんだから存分にやっちゃいましょ」

「GOサインを出すなああああつ！！」

ヒロの叫びが聞こえたような気がするけど気のせいよね、きっと……

HIRO SIDE

「優子！ 助けて！ この事態の收拾はオレ一人じゃ手に余る！」

「え？ ヒロ、なんでここに？」

「そんなこと今はどうでもいい！ このままじゃ、店の中で惨劇が起こってしまうー！」

「え？ え？ ちよっと落ち着きなさい、ヒロ。端折り過ぎて訳が

分からないわ……」

そう言っつて優子は辺りを見回した……

「そうなの……。大体わかったわ」

理解が早くて助かるよ……。お願いです、助けてください！

「代表に島田さんちよつと落ち着きなよ。お店で暴れるなんて良くないよ」

「……でも雄二が……」

「でもアキのバカが……」

「言い訳しないの。他のお客さんに迷惑でしょう？」

「確かにそのとおりね」

「……わかった」

優子の言葉で島田と霧島は理性を取り戻し、なんとか鎮まった……

優子が（比較的）常識人で本当に良かった……

「ヒロ、ところでこんなところで何してるの？」

「見ての通りバイトだ。前働いていた店が潰れてしまっつてな……」

「そ、そうなの……？ 大変ね……。何か欲しいものがあるの？」

「ああ、バイクを買おうと思っつてて……」

「そう……。その格好似合っつてるわよ」

「ハハハ……。ありがとう……」

素直に喜べないのは何でだろう……？

やっぱりさつき抱いた疑問のせいなのか？

『オレは優子に男として見られてないんじゃないだろうつか？』

グルグルとネガティブな考えが頭の中を反芻する……。

「秀吉、ちよ〜と〜といいかしら？」
「んむ？ なんじゃ、姉上？」

その言葉を聞き嫌な予感を覚え、我に帰った。

視線を優子に向けるとそこには……秀吉に向っていい笑顔を向けている優子がいた……。

「いいから、いいから。吉井君、この店のトイレってどこにあるの？」

「え？ 向こうの奥だけど……」

「そう、ありがとう」

秀吉、逃げる……！ 死んでしまっぞ……！

「あ、そうそう。代表と美波、さっき言った事撤回するね。他のお客さんに迷惑でも、気に入らないものは気に入らないんだから存分にやっちゃいましょ」

「GOサインを出すなああああつ……！」

オレの叫びを無視して優子は秀吉を引きずってトイレの中に入ってしまった……

『……雄二、許可が下りた。高橋先生とのデートのことじっくり聞かせてもらう』

『何のことだ！？ それに聞かせると言っただって聞く気がないように見えるんだが！？』

『あ、あの明久君。さっきの話ですけど、やっぱり美波ちゃんと二人つきりだったんじゃない……！』

『ち、違うの！ アキは馬鹿だから記憶が違ってるだけでっ！』
『あがああ！ 美波、落ち着いてまずは僕の腕を開放して！ このままじゃ僕の腕に関節が1つ増えてしまうっ！』

『姉上、どうしたのじゃ？ なぜワシの腕をつかむのじゃ？』

『アンタ、どうしてそんな短いスカートで歩き回ってるのかしら？ 前に私言わなかったっけ？ あんたが変な事をする私までへんな目で見られるからやめろって』

『はっはっはっ、何を言っておるのじゃ。姉上は家にいるときはほとんど下着姿ではないか。ヒロといる時も化けの皮がどんどん剥がれてきているのじゃ。今更体裁を取り繕わんでも 姉上、違っ……そっちの関節はそっちには曲がらな 』！』

優子の一言がスイッチとなり、センスの良い内装の店はあっという間に阿鼻叫喚の地獄絵図へと変貌してしまった……

さらば、野郎共……！ オレはこれより現実逃避に入る……

優子……、家では下着姿で生活って……

優子ってズボラだったんだな……。全く仕方がない奴だなあ……。え？ 呆れた言葉とは裏腹に表情が緩みきってる上に鼻血が出てきてるっだったって？

仕方ないじゃないか、男の子だもの……

好きな子の下着姿を想像してしまうことだってあるさ……

その挙句鼻血を出してしまうことだってよくあることだ……

「き、君たちお客様の前で何をしているんだ！」

「あ、店長。気がついたんですか？」

「ああ、烏丸君心配掛けてすまないね。鼻血が出ているから拭いてきなさい」

「おっと……」

『全く人が倒れている間に何をしているんだ、君たちは。店を開けてしまったことはともかくお客様の前でこんな真似をするなんて何を考えているんだ！』

鼻血を拭きにバツクに戻ると店長の激しい叱咤が聞こえてきた。

男性陣には少し可哀そうな気もしないでもないが、これで女性陣の暴走も止まるだろう。

頭に血が昇ったことがいい具合に作用したようで島田の方も教室での事なんてすっかり忘れて明久とじゃれていたしな……

ほとんどの問題がうまく片付いてよかった、よかった……。

あとは店長が復活してくれれば言うこと無しなんだけど、そこまで要求するのはさすがに欲張り過ぎだな。

カランコロン

あ、客だ。みんな取り込み中みたいだし、オレが対応しますか……。

「いらつしゃいませ……つてあれ？ 清水？」

「あら、烏丸大貴。あなたここでバイトをしているのですか？」

「あ、ああ。まあな」

「み……は……る……!!」

「んあ？ なんだ、お前店長と知り合いなのか？」

「ええ、まあ……。どう、“お父さん”。少しは反省した？」

「お父さん！？ 親子か!？」

なるほど、確かに似ている。暴走具合とか、会話のキャッチボールで暴投を投げまくるところとか、キレたら見境がないところとか……。

「美春……！ディア・マイエンジェル……！」
「良かったですね、店長！奥さんと娘さんが戻ってきてくれたじやないですか！」
「わー、ホントに良かったねー！」（棒読み）
「うう……！ありがとう、吉井君、烏丸君！」

確か前にあの清水が『前にアレは何より先に死ぬべき男』とまでいった男だ。

これまでの情報を総合して考えると……

このオツサンは年頃の娘と一緒に風呂に入るように強要する変態で、前に清水が言っていた『危うく美春自身が最も嫌っている人間に知らず知らずの内に成り下がってしまうところでした』と言っていた事を考えると自己中心的なエゴイストと考えられる。

娘への愛情故と言えは聞こえはいいが、結局のところ“モンスターペアレント”と変わらない。

それを理由にして相手に自分のエゴを押し付けていい原因にはならない。

そうだ、愛情って言うの言葉は免罪符じゃないんだ。

「ああ、そこに見えるのは美波お姉さまじゃないですか！さては美春に会いに来てくれたんですね！」

「み……は、る……？」

清水は島田の姿を確認したと同時に店長の事なんてもう忘れて島田に飛びついた……

あれ？これってヤバくないか？

店長から何か黒いオーラが立ち上ってきている……。

「キサマが

」

「は？」

「キサマが娘を誑かす女かああ！！」

うお！　なんて速さだ！

ムツツリー二の召喚獣並みの速さだ！

「店長、落ち着いてください！　店長が暴れだすとまたみんなが暴れだしちゃいます！　そして『娘を誑かす女』ってという言葉は何処かおかしいということに気がついてください！」

「ディア・マイ・ドウタアアアアッ！！」

明久の必死の説得も空しく店長の暴走は止まらない……
こめかみに青筋が1つ浮かび上がる……

「……雄二、処刑再開」

「何を言っているんだ、お前は！　どうしてオレが処刑されなければ……ぐぎゃああっ！！」

引き続き霧島が雄二にアイアンクローを極めている……

その様子にオレのこめかみにまた1つ青筋が浮かび上がる……

「秀吉、まだ気を失わないでね？　ここからが本番なんだから……」

「あ、姉上！　違っ！　そっちの関節もそっちには曲がらなっ……
！」

その様子にオレの額に3つ目の青筋が浮かび上がる……

「明久君っ！　まださっきの質問に答えてもらってません！　美波ちゃんとデートしたんですか！？」

「お姉さまとデート!? この腐った豚野郎が!? 許せません!
八つ裂きです!」

「ディア・マイ・ドウタアアアアツ!!」

「ち、違うのよおじさん! ウチは美春じゃなくてアキと!」

「美波! 僕まで巻き込まないでよ! ってどうして店長まで僕に襲いかかって来るの!? だ、誰か助け!」

その様子についてオレの堪忍袋の緒が切れた……!

「お前ら、全員そこに正座しろおおおおおおおおおおお
おおっ!!」

その日喫茶店【ラ・ペデイス】に怒り狂った鬼神と狂戦士バーサーカーが降臨した。

その光景は長く人々の記憶にトラウマとして刻み込まれ、その様子を目撃した者は全員恐怖のあまり口を閉ざしたと言う……

外伝6話 アルバイトは危険が一杯！【後篇】（後書き）

難産でした……。

ええ、本当に……

紅鎖さん、アドバイスありがとうございました！

可能な限り頑張ってみましたが無事でしたでしょうか？

また感想をお待ちしております。

異伝 第0話 始まりの物語

12年前

烏丸千鶴は祖父である烏丸修輔に命じられ、ある人物に会うために本邸とは別の別邸を訪れていた。

これから会う子って確か本家でも噂になっっているお父さんの隠し子よね……？ということは私との関係は弟っていうことになるのかな？

そう考えながら別邸の庭を探しまること約30分……

一向にその男の子は見つからなかった……

なんだか変ね？働いているお手伝いさんに聞いても歯切れの悪い返事しか返ってこないし……。

「一体どこにいるのよ……？ハア……、もういいわ……。帰ろう……。お爺ちゃんには留守だったって言えばいいし……。」

そう一人零して踵を返そうとすると

ガサッ……

すぐ傍の植込みから物音が聞こえてきた……

「誰？誰かいるの？」

視線を送るとそこには

「……………。」

全身に何かで斬られたような生擦り傷と殴られたような痣があるが

リガリに瘦せた4、5歳くらいの男の子が立っていた……。その男の子はこの世のすべてに絶望し、呪ったような鋭い目つきを千鶴に向けていた……。その無機質な瞳に恐怖し圧倒させたが、すぐに持ち直し男の子のもとに駆け寄った。

「ちょっとあなた!? 大丈夫? 酷い怪我じゃない!？」

「……………」
「待ってて! すぐに手当てを キヤアツ!」

男の子の頭に手を伸ばそうとすると、男の子は怯えた様子で千鶴の腕に噛みついた……

「ちよつと、何するの!?! 離して!」

「……………」

振りほどこうとするが、男の子は千鶴の腕から離れない……
あまりの激痛に悲鳴を上げる寸前

ゴツ!

「ガアツ……………」

不意に誰かが男の子を殴り飛ばし、男の子はゴム毬のように地面に撥ねて転がり、ぐったりとして動かなくなった……

「大丈夫、お姉さん?」

助けてくれたらしい少年が手を差し伸べるが、千鶴は眼を吊り上げて少年を怒鳴りつけた。

「あなた、何をするんですか!?! 相手は子どもなんですよ!?!」

「いいんだよ、このくらい。いつものことなんだから」

少年は全く悪びれることもなくあっけらかんと答えた。

そして続けて何か言おうと口を開こうとすると奥から別の少年が出てきた

「お〜い！ 逃げたオモチャは見つかったか？」

「ああ、ここに居やがった。全くオモチャのくせに逃げだしやがって！ 生意気なんだよ！」

そう言うと少年は男の子の胸ぐらを掴んで頬に平手打ちを放った……。

「な！？ やめなさい！ 何をしているんですか!？」

「何って、このオモチャを使ってゲームをしてるんだよ。先にこいつを泣かせた方が勝ちで負けた奴は勝った奴にジュースを奢る」

「そうそう、前まではすぐ泣いてすぐに決着ついたんだけど、最近コイツ何をしてても泣かなくなってきたから手応えが出てきて面白いだよ」

そんな残酷な事をまるでテレビゲームを楽しむような口調で二人の少年は言った……

「あなたたち、そんなことして恥ずかしくないの!？」

「何言ってるんだよ。恥ずかしいのは“こいつ”だよ。だってこいつ“愛人の子”だぜ？」

「そうだよ。そんな価値のない奴がオレたちのオモチャになれることを感謝して欲しいくらいだよ」

この子たち本気で言ってるの？ でもそれならさっきまであの子が異常なまでの怯えていた理由がわかる……。

「オラッ！ 寝てんじゃねえ！ さっさと続きやるぞ！」

少年はそう言っつて男の子の髪の毛を掴み、引きずっつていこうとした。

パンツ！

乾いた音が辺りに木霊する……

千鶴が少年の頬を力の限り引っ叩いていた……

少年は千鶴の撮った行動があまりに意外だったのか、少年は掴んでいた男の子の髪を手放していた。重力に従い地面に伏していた男の子を千鶴はあわてて抱きとめ、大事そうに優しく抱きかかえた。

「いい加減にきなさい！」

「て、てつめえ！ 何すんだよ！ 見ろ、口の中が切れたじゃねえか！」

「どれがどうしたの！ あなたたちはこの子にもっと酷い事をしてるじゃない！ これ以上何かする気なら私はあなた達を許しません！」

あまりの剣幕に少年たちは一瞬気圧されたように怯んだが、その言葉聞き怒りを露わにした。

「てめえ、こんな薄汚い奴とオレたちを同列扱いにするんじゃねえ！ オレたちは本家の人間だ！ こんな奴とは価値が違っただよ、価値が！」

「許さなけりやどうするつてんだ！？ このクソ女！」^{ママ}

「さっさと俺らのオモチャをこっちに渡せ！ 痛い目見たくなかったらなあ！」

「嫌よ！ あんたたちみたい最低な人間に私の弟は渡さない！」
「へッ！ そんなクズを庇ったところで得なんてないのにバカな女！」

「望み通り痛い目合わせてやるぜえ！」

そう言つて少年たちは拳を振り上げた。

殴られる！

そう考え千鶴は男の子を護るように強く抱きしめ、来るはずの衝撃に備えた……。しかし来るだろうと予測していた痛みはいつまで経つても来なかった。

「痛てててててっ！ 何だ、てめえは！」

「その女の子の恋人だ！ テメエらよくもオレの大事な彼女に手を上げようとしてくれたなあ！ 覚悟しやがれ！」

殴りかかってきた少年の腕を掴み捻り上げているのは私の彼氏の沖田絃馬だった。

「絃馬！ 今はそんなことよりもこの子！」

「ウオツ！ なんだその子！？ 酷い怪我じゃねえか！ 急いで手当てしねえと！」

そう言っている間に少年2人は逃げようとするが

「おい、テメエら！」

「な、なんだよ！？」

「テメエらの面しつかり覚えたからな。今後千鶴とこのガキに何かしているところを見つけたらこの“沖田絃馬”が直々にぶっ殺す！」

覚悟しておけ！」

「お、沖田絃馬って『沖田家』の跡取りの!？」

少年たちは焦っている。

それもそのはず沖田家は烏丸家の分家だが地位は本家に次ぐNO.2の位置にいる。

『沖田家が烏丸家の敵に回れば本家が傾く』とまで言われるほどだ。自分たちが原因で沖田家が敵に回れば少年たちは間違いなく本家での居場所を無くすだろう……。

この期に及んで自分たちの保身しか頭がない2人に絃馬と千鶴は吐き気を催すほどの嫌悪感を抱いたが、今はこんな奴にかまっている場合ではない。

一刻も早くこの男の子を医務室に運ばないといけないのだ。

「わかつたらさっさと失せろ！ その薄汚い面二度と見せるんじや

ねえ！」

「は、はい！」

「す、すみませんでした！」

少年たちはあわてて逃げだし、千鶴と絃馬は急いで男の子を医務室に運んだ。

.....

「う……………」

「……………よかった。気がついた？」

「……………ッ!！」

「あ、まだ動いちゃダメ！」
「~~~~~ッ!!」

男の子はすぐにでも逃げようとしたが傷の痛みあまり悶絶している。

「……………」

男の子は相変わらず鋭い眼でこっちを睨んでいる……。

しかしその眼には先ほどまでの憎悪の色はなく、むしろ困惑しているように見えた。

「はじめまして、よね？ 私は烏丸千鶴。あなたのお姉さんよ……。

「……………姉……さん？」

「そうよ。だから私はあなたに酷い事をしない。約束する」

「……………約束……束……？」

「うん……、うん……。約束する」

千鶴は男の子を安心させるために優しく手を握る……。

「……………もう、……………殴られたり……………しない？」

「うん」

「……………暗い所や寒い所に……………何時間も、閉じ込められたり……………しない？」

「うん」

「……………もう」

「大丈夫……。あなたは私が守るから……。絶対に……………!!」
「~~~~~ッ!!」

そう言っつて男の子を優しく抱きしめると、男の子は関を切つたように泣き出した。

今まで人間としてのプライドを見失わないようにずっと堪えてきたのだらう……。

「辛かつたよね……？ 苦しかつたよね……？ 頑張つたわね……。もう大丈夫……。これからは私が……、私たちが……。あなたを守るから……！ あなたの名前を覚えてくれる？」

「ヒック……、ヒック……。ヒ、ヒロキ……。烏丸大貴……。」

これは始まりの物語……

ヒロが何よりも望んだもう戻らない『失われてしまった幸せだった日々』の始まりの物語

すべてはここから始まった……

異伝 第1話 嫉妬

僕が姉さんに引き取られてから1年が過ぎた……

栄養失調でガリガリに痩せ細っていたこの体のは適度に肉が付き、血色も良くなっていた。

イジメや嫌がらせは相変わらずあるが、1年前までとは比べ物にならないくらい減り、直接殴られたりすることは無くなった。

その分、間接的な嫌がらせは増えたが僕にとっては大した問題には思えなかった。

優しさの中……

暖かさ中……

僕の中の傷が緩やかに癒えていくのがわかる……。

僕は幸せを貰えたんだ……

僕の面倒は主に姉さんと沖田絃馬と言う人が見ているが、僕は沖田絃馬が嫌いだ。

いい人だって言うのはわかってる。

僕にとつて恩人に当たる人で感謝するべきだと言うことも分かっているつもりだ。

しかし頭では分かかっていても仕方ないんだ……。

あの人と一緒にいると姉さんが僕の姉さんではなくなってしまうような不安定な感覚に襲われる。

姉さんを遠くに連れて行ってしまふような気がする。

それはたぶん姉さんの中で『沖田絃馬』という人間が一番大事だからだろう。

早い話が僕は『沖田絃馬』という人に嫉妬しているのだ。

けど仲良くしないと僕は姉さんに嫌われてしまう……。

そうなら僕はもう生きていけないだろう……。

こんな一人ぼっちの世界で大好きな姉さんに嫌われてしまったら……
…僕は……

よく考え方が子供らしくないと周りから気持ち悪がられる。
けど仕方がないじゃないか。

そうしないとこんな気持ち悪い家の中で生きていけないんだから……
僕はこの家の中での僕の立場をよくわかってるつもりだ。

烏丸本家の現当主である父にとって僕の存在は『失敗の象徴』『い
らない存在』『無価値なモノ』だって昔から言われてきた。

そう言われる内に僕はそうなるように“演じ”なければならなくな
った。

だってそうだろう？

僕が反抗すればするほど周りからの暴力や嫌がらせはエスカレート
していくんだから……

たぶん僕はどうしようもなく歪んでしまってるんだと思う。

それを知られてはいけない……。

特に姉さんには絶対に知られたくない……。

だから僕は『いい子』を演じなければいけない……。

『我儘』を言わない。

『悪戯』なんか絶対にしない『いい子』を演じなければならいん
だ……。

姉さんに嫌われないために……

.....

「遊園地？」

「そう、遊園地。今度の休み3人で行きましょう」

「いいな、行こうぜ！ ヒロ、お前行ったことないだろ？」

「確かに行ったことはありませんけど……」

「なら決まりだ！ 次の日曜日に行こうぜ！」

「は、はあ……」

「うん。それじゃあお弁当作らないとね」

「お、それならから揚げ入れてくれ！ から揚げ！」

「はいはい、全くいつまでたっても子供っぽいんだから……」

確かに遊園地と言うのは僕は初めてだ……。

今までテレビで見たことはあるけど、実際に行ったことはない。
行きたくないと言えば嘘になる。

むしろ行ってみたいというのが本音だ……。
しかし……

「せんせーい！ バナナはおやつに入るんですかー！」

「もう……、ちょっとお！ やめてよー！」

眼前で僕以上にはしゃいでいるこの男と一緒に行くってというのが
何となく気に食わなかった……。

.....

そして日曜日……

初めて遊園地に来て思ったことは人が多いということだった。

こんなに人が多いなんて……

「久しぶりだな、ここに来るのも！」

「そうね、1年ぶりくらいかしらね？」

入場ゲートを潜り抜け最初に視線が釘付けになったのは変な乗り物だった……

「姉さん、アレ何？」

「アレはジェットコースターって言うてとってもおもしろい乗り物なのよ。』」

「本当？ 乗ってみたい！」

「それじゃあ、行ってみましょう」

……

「ぎゃあああああああ！！！」

「あはははは！ あははははは！！！」

「もう無理！ もう嫌だ！ 遊園地怖い！」

「もう一回乗るわよ！ ヒロ！」

「無理！ 絶対いやだ！！ もう帰るー！」

「ふふ、逃がさないわよ……」

「嫌だー！！！！！」

しばらくしてやっと解放された僕はグッタリとしていた……

「おいおい、大丈夫かよ、ヒロ……」

「……大丈夫です……」

やめるよ……！！

「ほら、ヒロ。見えねえだろ。肩車してやるよ。」

「わっ！ や、やめてください！」

「何言つてやがる。ずっと見たそうな顔してたくせに」

やめてくれよ……！！

「ヒロ、ジュースを買ってやろう。何がいい？」

「……そ、そんな！ 悪いですよ……！」

「ガキが遠慮なんかしてるんじゃないやねえよ」

もう……構わないでくれよ！

「ヒロ、今度は」

「やめる……」

「あん？」

「やめてくれよ！ もう構わないでよ！ あんたに優しくされるとオレは惨めで仕方ないんだよ！」

「ヒロ！ 何言ってるの！？ 絃馬に謝りなさい！」

「嫌だ！ 姉さんはオレより絃馬さんのほうが大事なんだろ！？

もう放っておいてくれ！ オレはこいつが大嫌いだ！」

パンツ！

乾いた音があたりに木霊する……

それと同時に僕の方に痛みが走った……

姉さんが僕に平手打ちをしたのだ……

「なんてこと言うの！？」

「五月蠅い！ 姉さんもこいつも……みんな大嫌いだあ！」

そう言い捨てオレはその場から逃げだしたのだった……

.....

僕は僕を含めた『人間』が大嫌いだ……。
知られてしまった……

いい子でいようとしたりしたのに姉さんに我儘を言ってしまった。

もう嫌だ……。

もうダメだ……。

絶対見捨てられる……！

もう……お終いだ……！

「こんな所にいやがったか……。心配させやがって、このクソガキめ……。」

振り向くとそこには沖田絃馬がいた……。

「千鶴が心配している。さっさと戻るぞ」

「放っておけよ！ 気づいてるんだろ！？ オレはアンタが嫌いなんだよ！ 何なんだよ、

アンタは！？ 何でオレが嫌ってるのに気づいていてそんなに優しくするんだよ！？ 訳分らないんだよ！ 気持ち悪いんだよ！

せっかく今まで『いい子』を演じてきたのに台無しなんだよ！ アンタといるとオレは自分がどれだけ歪んでいるのか見せつけられるんだ！ もう……放っておいてくれよ！」

ありつたけの感情を込めた罵倒を絃馬に向かってぶつける……。

絃馬に向けたはずの言葉はまるで跳ね返るかのようにヒロ自身の心を傷つけていった……

「……頼む……から……。もう……これ以上……オレに構わないで……！」

眼を閉じ、耳を塞ぎながら傷つけられるようなことも、傷つけるようなこともない一人だけの世界……
きっと自分は一生そのまま生きていくんだと思っていた……。
絃馬や千鶴と会ってからそれができなくなってしまった。
傷つけたくなくてもこんな言葉が出てきてしまう……
姉さんたちに知られたくないドロドロとした感情の噴出……
もう止まらない……。
止められない……。

「いいんだよ……」

「え……？」

「我儘言うのはガキの特権なんだよ……。だからお前がオレが嫌いって言うんだったらそれでいいんだ。」

「な、何を言ってる」

「やっとお前自身の言葉が出てきたな……」

「お前が千鶴に心配かけたくないからずっと『いい子』を演じてきていたのはオレも千鶴も気づいていた……。けどな……。それじゃあオレたちは本当の家族にならないんだ……」

「違う！ オレたちはどう頑張っても『本当の家族』になんてなれる訳ない！ オレたちのしていることは『家族ごっこ』だ！」

「本物と偽物……。違いはどこにある？ 何が本物で、何が偽物だ？」

「それは……」

「『家族ごっこ』でいいじゃねえか？ それじゃあその『家族ごっこ』を本気でやろうぜ？」

「お前がオレの事が嫌いでも構わねえ。オレはそれを正面から受け止めてやるよ。だからお前はオレに向かってその感情をぶつけて来い！ 全力でな！」

「……………」

分からない、この人の考えが……
でも僕の事を心配してくれたのはわかった……
これからは少しでも近づいてみたいと思えた……

「…………ごめんなさい…………」

「さあ、戻ろうぜ？ 千鶴が心配している…………。」

そう思ったがポンポンと頭に置かれた手が暖かくて涙が出てきた……
それを誤魔化したくて、見られたくなくて

「 フンッ！」

思わず股間を蹴ってしまった……。

「グオツ…………！ テメエ！ このクソガキめ…………！」

「フン！ アンタが言ったんだよ！？ もっとわがままになれって
な！」

「限度があるわ！ 待ちやがれ、逃げるな！ オレは『人から受け
た恩は忘れないがな、恨みも忘れねえ』んだよ！ 今止まれば『く
すぐり地獄の刑』で許してやるぞ！」

「そんなこと言われて止まるバカがいるものか！ ちょっと待て！
トリモチは反則…………！！」

「はっはっは！ 反則だア！？ 要は勝てばいいんだよ、勝てばな
…………！」

「くうう！ セコイ手使いやがって！ それでも大人かよ！？ そ
れならこっちだって…………！ 『おまわりさ〜ん、ここに人攫いがい
ま〜す！』」

「あ…………！ てめっ！ それは反則…………！！」

「…………何やってんのよ！？ あんたたちは…………！」

スッパ〜ン！ スッパ〜ン！

「グオツ！ 何するんだ、千鶴……！」

「って言うか姉さん……。ハリセンなんて何処から……？」

「企業秘密よ！ それはそうと人が心配しているのに何2人で遊んでるのよ……！」

「待て待て！ これは違う！ 話せばわかる！ だから関節をあらぬ方向に曲げるのはやめっ……！ ぎゃあああああああ……！」

「げ、絃馬さん！？」

「……ヒロ、あんたもよ？ 人に心配かけて……！ ちよつとそこに正座しなさい……！」

「……ハイ」

その後絃馬さんと僕はみつちり姉さんに怒られた……

後から思えばこのときからオレは二人を家族として……大事な人間として受け入れ始めていたんだと思う……。

我儘を言っていていいといわれて頑なになった心を解きほぐされたんだと思う……。

姉さんに守られて人として無くしてしまったものを取り戻せたんだと思う……。

『家族』になれない歪な『家族ごっこ』だとしてもこのときオレは確かに幸せだったんだ。

そう……、あの日が来るまでは……

異伝 第2話 別れ……

千鶴SIDE

「ただいま〜！ ふう〜、疲れた〜！」

「おかえり〜！ 絃馬さん〜！」

「おう、ヒロ！ ただいま！」

両者ともに満面の笑みを浮かべている……

ヒロは父の帰りを待っていた子供のように絃馬に向かって駆け寄り、抱きつこうとしている。

その様子は何処かのホームドラマのようだった。

そして絃馬までの距離があと一歩と言ったところで

「なんちゃって〜！ 隙あり！」

ボディブローを食らわせようとしたが……

「甘いわ！」

絃馬に防がれてしまった……。

両者ともに固まったまま、しばしの沈黙が流れる……

「やっぱ〜！」

ヒロは踵を返し、逃げようとするが

「待て、クソガキ……！！ 今何しようとしていた？」

絃馬に肩を掴まれてしまった……

「え、何のこと？ 僕分からなくい！」

「嘘つけ！ 今鳩尾を狙っただろ？」

「ネラツテナイヨ？ ホントダヨ？」

「~~~~~っ！ 覚悟しろ、このクソガキ！」

「きゃははははは！ 絃馬さんが怒った~~~~！」

二年前のあの遊園地での一件以来両者の関係はこんな感じだ……

ヒロと絃馬は仲良くなつてると思う。

ヒロは頻繁に絃馬にちょっかいを出すようになった。

絃馬もそれを楽しんでいる様子で積極的にヒロに構っている。

お互いに遠慮がなくなり、最近では道場に連れて行ったり、一緒に

野球をしたりとまるで本当の親子のような関係を築きつつある……

絃馬が言うには武道も野球も才能があるらしい……

出会ったころの荒んだ様子はもう微塵も感じさせなかった。

そろそろ言うべきよね……。

私と絃馬の結婚の話……

ドツタン、バツタン！ ガツシャ〜ン！

その前にあの二人が暴れているのを止めないとね……

その後二人して仲良くサブミッションを極め、畳に沈めた……

.....

「ごめんね、ヒロ……。」

「なんで、謝るんだよ。姉さんは今までずっとオレのせいで受けなくてもいい中傷を受け続けてきたんだ……。だから姉さんは結婚して今までの分まで幸せになつてくれないとオレが嫌なんだ……。

「でも私がいないと、この家にはあなたの味方は誰もいないじゃない……。まだ7歳なの子供になんてあんなにひどい事が出来るの！」

「大丈夫だよ、オレは来年からじいさんの家に世話になる事になったから……。」

もう烏丸の本家にはもう戻らないよ。」

「そう、おじいちゃんが……。それなら少し安心できるわ。ヒロは昔から私がいないと何もできないから……。」

「その分トラウマもたくさん植えつけられたけどね……。プールに突き落とされたり、無理やりコーラを一気飲みさせられたり、カツコイイ髪形にしてやるって言うってキューピーちゃんにされたり……。」

「ふふふ、今になってみるといい思い出ね……。」

「冗談じゃないよ、全く……。」

昨日絃馬さんと姉さんが結婚するという話を聞いた。

昨日はああ言ったが、正直言って複雑な気分だ……

オレは絃馬さんを結構慕ってるけど、姉さんが取られてしまったよ
うな感覚だった。

けど姉さんはオレのせいで言われなくてもいい中傷を受けてきて、
嫌な思いをしてきている。

姉さんは一人だったオレに幸せをくれた。

だから姉さんには絶対に幸せになって欲しい。

そう、強く願う……

それに姉さんと絃馬さんの間に子供が生まれたらオレはその子のお
兄さんだ。

しっかりしないと……！

.....
それから1年後……2人が結婚して、静馬が生まれ、オレは今烏丸の本家を離れ、隠居した爺さんの家に世話になっている。
今日は二人の結婚記念日で姉さんと絃馬さんは、静馬をオレと爺さんに預けて2人で旅行に行くことになった。

「それじゃあ、私と絃馬さんが旅行に行っている間静馬の事よろしくね。おじいちゃん、ヒロ。」

「うん、任せてよ！ オレは静馬のお兄ちゃんだからね、ちゃんと面倒をみるよ！」

あ、あと、お土産よろしくね！」

「ふふ、分かっているわよ。それじゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい！」

「おう、ヒロ。静馬をイジメるなよ〜」

「絃馬さんじゃないんだし、イジメるわけないだろ？」

「安心しろよ。オレがイジめるのはお前だけだ！」

「なんて奴だ！ 極悪人め！」

「ははは！ もっと褒めて〜！」

スッパーン！ スッパーン！

「何バカなことばかりやってるのよ。」

「ち、千鶴、ハリセンなんて何処から……」

「企業秘密よ！ それじゃあ行ってくるからね」

「うん！ 行ってらっしゃい！」

「おう、行ってくる！」

そうやってオレは二人を送り出したんだ。

これが最期の会話になるとも知らずに……

……

訃報はその日の夜、突然やってきた……

高速道路での玉突き事故……

バスの車体の三分の二が挟られたらしい……

その中に姉さんと絃馬さんがいた……

2人の遺体を見ても涙が出てこなかった……

これは現実なのだろうか？

オレは悪い夢を見ているんじゃないだろうか？

「ヒロ……」

「今日の朝、出て行ったんだ……。2人で温泉に行くって……。あれ？ おかしいな？ 何で……？」

いきなり足の力が抜けて立っていられなくなった。

視界が回る……。

気持ち悪い……。

頭が痛い……。

「ヒロ……！」

爺さんがオレを担ぎ、ベットに運んで行った。

「爺さん、これは夢……？」

「……いや……、現実じゃ……千鶴と絃馬さんは」

「嘘をつくやつ！！ あの二人が死ぬわけない！ オレを驚かすために芝居してるんだろ！？ ビックリした、ビックリしたよ！ だ

から二人とも速く出てきてよ！」

「ヒロ！」

「あ……」

「あの二人はもう……」

「嘘だ……！嘘、嘘、嘘嘘嘘嘘ウソ嘘うそ嘘……！嘘だアアアアアアアアアア……」

もはや泣いてるのか、叫んでるのかよく分からない……。
気付いたら暴れていて複数の人に取り押さえられていた……
そのままオレの意識は暗闇へと落ちて行った……

……

二日後……二人の葬儀が烏丸の本家で行われた……

『ナンデ 千鶴 ト 絃馬サンガ 死ンデ オマエミタイナ ウス

ギタナイ 妾腹ガ 生キテイル！』

『オマエヲ 庇イ続ケタセイデ 千鶴ト絃馬サンハ ロクナ人生ジ
ヤナカッター！』

『千鶴ガ 本家ニ 居ラレナクナッタノハ オマエノ 所為ダ！』

『オマエノ 所為デ 静馬ハ 両親ヲ 亡クシタンダ！』

『オマエ ナンカ 消エテシマエ！』

『『『『オマエ ガ 死ネバ ヨカッタノニ！』』』』

本家の連中の執拗な罵倒がオレに降りかかる……

わかっているんだよ、そんなことは……

わかっている……。

みんなオレが悪い……

オレが悪かったから……それ以上言わないでくれ……

失ってから初めて気づく……

姉さんはいつもオレを笑顔で出迎えてくれた……

絃馬さんはいつもくだらない事にも付き合ってくれた……

オレが……

オレが死ねば……

オレが消えれば……

姉さんと絃馬さんに会えるのかな……？

またあの笑顔をオレに向けてくれるかな……？

フラフラとおぼつかない足取りで外を歩く……

行き先の分からないまま……

異伝 第3話 決意

夕日は沈み、辺りは暗くなり始めていた。

そんな中オレはどこへ行こうとしているんだろう……

いつそ本当に死んでしまうのもいいかもしれない……

これから先、生きていたっていい事なんてない……

そう考えたら『死ぬ』ということはひどく魅力的に思えた。

そしてそのまま川へと向かった……

.....

眼の前のこの川は流れが速く、その上深い……。

ずいぶん昔に飛び降り自殺をした人もいるらしい……

その上オレは泳げない。

これだけ成功のための要素が揃っていれば間違いなく死ねるだろう。

一歩、また一歩と川に近付く……。

まるで何かに吸い寄せられるように……

そしてあと一歩で川に入るという位置で……泣きそうな顔で俯いて

いる女の子を見つけた。

年はオレと同じくらい、吊りあがった瞳は勝気そうな印象を与えた

……。

何で泣いてるんだろう？

まあ、いいか……。オレには関係ない。オレはこれから死ぬんだか

ら……

そう考えあと一歩を踏み出そうとしたが……なぜか踏み出すことが出来なかった。

『ヒ口、誰かを助け、守れるような人間になりなさい。辛い経験を

たくさんしたあなただから人の気持ちを考えてたくさんの人を助けられるはずだから……」

何でだ！　なんで今こんな事を思い出す！

オレが何をやったところでもう姉さんはオレに笑いかけしてくれない……！

だったらそんなことやるだけ無駄じゃないか！

そんなことよりあとたった一步、たった一步踏み出せば辛い現実から逃れられるんだ！

オレは何を躊躇ってる！？

「……………」

「……………」

だっつ！　仕方がない……！　死ぬ前に一つくらいいい事をしておこう……

「どうしたの？」

「……………弟とはぐれて、探してるうちに道に迷って……………どうしよう……」

なるほど、見知らぬ土地で一人って言うのは確かに心細い……

「その弟の特徴は？」

「え……………」

「探すの手伝ってやるって言ってんだよ」

「い、いいの？　もう遅いのに……………。家の人心配しない？」

「オレを心配する人なんかいないよ……………。で、その弟の特徴は？」

「え？　あ、うん。アタシにそっくりなの」

「は？　そっくりって？」

「だから双子なのよ。二卵性って言って本当ならあまり似てないは

ずなんだけど、どういう訳かアタシと瓜二つで……」

「ふうん、そうなんだ。それじゃあ、どのあたりではくれたの？」

「えっと……たぶん商店街……」

「それじゃあ今からオレはお前を交番に連れて行ってからオレが商店街のあたりを探すから」

「嫌よ！」

「なんで？」

「だって人に任せてばかりで自分が動かないのは嫌！」

「そんなこと言ったって、お前このあたりの道全然知らないだろ？」

「う……！ あんたについていけば大丈夫でしょ？」

「けどそれじゃあ効率が」

「口答えしない！」

「待て！ 何でオレの関節を極めてるんだ！？ ちよっ！ やめ

ぎゃああああ！」

「アタシを連れていくわよね！？」

「わかった！ 連れて行くから関節決めるのはやめろおおおおお

！！！」

「最初からそう言えばいいのよ」

女の子は凄くいい笑顔でオレの手を離した。

その顔は凄く可愛かった。

可愛いけどすごく厄介な子に関わってしまったような気がする……

やっぱりやめておけば良かったなあ……

.....

しばらくは商店街を探し、もし見かけたら教えてくれるように店のおじさん達に頼んでおいた。

オレは何やってるんだろ……？

自殺するつもりで来たのに何で人助けなんかしてるんだろ？
なんで……？ なんで……？ なんで……？

「 聞いているの!？」

「 あ……、悪い……。聞いてなかった……」

「 もう……! ……ねえ、さっきの心配する人がいないってどうい
う意味？」

「 ……別に……。どうでもいいだろ。そんなこと……!」

「 ……うん、ごめんね」

突き放すような口調で言い放ち女の子は黙ってしまった。
それからしばらく沈黙が続く……

「 それよりさっさと探そう。弟も寂しい思いをしてるだろうし……」
「 う、うん」

それから探し回ること2時間……

「 あ、姉上! ここじゃ!」

「 やつと見つけた! バカッ! どこに行ってたのよ!？」

「 す、すまぬ……。姉上……」

「 まあまあ……。いいじゃねえか。見つかったんだから……」

やつと見つけることが出来た……

「 姉上、この御仁は？」

「 うん、アンタを探すのを手伝ってくれたの」

「 そうじゃったか。ありがとうじゃ」

「 ありがとう……」

『ありがとう』か……

そういえばオレはこれまで言ったことはあっても言われる事なんて滅多となかったっけ？

言われると案外嬉しいものなんだな……

「気にしなさんな……、もうはぐれるなよ」

「うむ、そうじゃな……」

「それよりそろそろ最終のバスがもうすぐ来るぞ。急いで行った方がいい」

「ああ！ ホントだ！ 急ぐわよ！」

「りよ、了解じゃ！ すまぬがバス停まで案内してくれんかのう……」

「……」
「わかった！ こつちだ、走れ！」

……

「ヤバい！ バスが来てるぞ！ 逃げ！」

「わかった！」

何とか二人ともバスに乗り込むことができた……
ギリギリセーフだな……

バスの窓から二人が顔を出して叫んだ。

「ね、ねえ！ また会える！？」

「え……？」

「今度3人で遊びに行くのじゃ！」

「は……？」

「覚えておいて！ アタシの名前は……」

その後の言葉はバスのエンジンの音に遮られて聞き取れなかった……

「……嵐のような奴らだったな……」

振り回されて正直クタクタだ……。でも不思議と悪い気はしなかった……。

「『また会える?』か……」

一人でいたときには冷え切っていた心が不思議と暖かくなっているような感じがした……

「そつだよな……」

オレは姉さんと絃馬さんからたくさん幸せを貰った……。それを静馬に返さず、勝手に完結させていいのか？

……たぶんあの二人はそんな事を望まないだろう……

思えば自分のことしか考えてなかったな。

オレは自分だけが辛いと錯覚して、静馬のこれからの事や爺さんの今の心情を考えたことすらなかった……

オレは静馬を護る……

『姉さんと絃馬さんの代わり』じゃなくて『姉さんと絃馬さんの分まで』静馬を護っていこう……。

親にはなれなくても兄のように接することはできるはずだから……。姉さんと絃馬さんから貰った幸せを少しづつでいい……。静馬に返していこう……。

『ヒロ、誰かを助け、守れるような人間になりなさい。辛い経験をたくさんしたあなただから人の気持ちを考えてたくさんの人を助けられるはずだから……』

姉さんの言っていた言葉……。今なら理解できるような気がする。

それにオレはあの子にまた会いたい……

例えまた会える可能性が限りなく低くても……いつかまた……
きつと会える……

またきつと会える……

確信にもた根拠のない自信がオレの中にあつた。

そう考えながら家に向かう足取りは驚くほど軽かつた……

その後爺さんに「心配させるな！」と言って頭に拳骨を落とされたのはまた別の話だ……

異伝 最終話 それから……

最初は静馬はオレの作る料理が好きではなかった様だ。
でも回数を重ねていくうちに『次はアレを作ってくれ』『これを食
べたい』と言ってくれるようになった。
オレはそれがすごくうれしくて……そして……

……
……
……

静馬SIDE

僕は今年で7歳になって小学校に入学した……
学校での生活にも少しずつ慣れてきて、
明日は遠足でお弁当がいるらしい……
けど誰が作るって言うんだ？
普段僕の家はもっぱら外食だ。
料理なんて僕を含めて誰も作れない……
特におじいちゃんに料理を作らせるということは家を火事にする
ということと同じ意味だからまた悩む……

「はあ……、どうしようかな……」

明日は仕方ないから兄さんには内緒でコンビニでお弁当を買って
いこう……

……
……
……

『うおおおおお！ カラスの首を獲れー！』

『いてまうど！ ワレエー！』

学校から帰る途中そんなこと怒声を張り上げている集団を見た……。また兄さんを追い回しているんだろ……

なんでも不良に絡まれた友達を助けたらつけ狙われるようになって返り討ちにしていくうちに数がネズミ算式に増えていったらしい……。

この間は女の子が書いたようなラブレターで誘き出されて待ち伏せされて血の涙を流しながら撃破していた……

『こつちにはいねえ！ あつちを探せ！』

『見つけ次第各自携帯に連絡！ 奴は強いから必ず3人1組で当たれ！』

『了解！』

『よし、散開！』

「………………。兄さんもう行ったよ…………。」

木の上に隠れている兄さんに向かって僕が言う

ガサツ！

「よくオレがここに隠れているってわかったな」

「兄さんの隠れそうなところは大体見当がつくよ」

「オレはそんなに単純に見えるのか？」

「…………うん」

「グツはああー！」

「バカなことやってないで早く帰ろう？」

「ん、そうしたいのは山々んだけど……。まだやる事があっ

たり、なかつたり……」
「……………」

兄さんにしては齒切れの悪い返事だ……
やる事ってなんだろう？

「と言う訳で先に帰っていてくれ！ アデュー！」
「あっ！ 兄さん！」

そう言うと、あっという間に兄さんは姿を消してしまった……
何なんだろう、一体……？

最近兄さんはどうもおかしい……
たびたび用事があるって言って家に中々帰ってこないし、聞いても
はぐらかされる……
なんだか寂しい……

兄さんは僕の事なんかどうでもいいのかな……？

結局その日の夜、兄さんが帰ってくることはなかった……

……………

ヒロSIDE

拙い、拙い……

予定より遅れてしまった……！

急いでこれを静馬に届けないと！

オレはある包みを持って静馬の通う小学校へと走った。

徹夜で体力が切れかけている……

え？ 学校はどうしたって？ そんなもん気にするな！

一回遅刻したくらいで死にはしない！

今日この日の為に綿密に計画を立て、準備してきたんだ！

絶対に間に合わせてみせる！

.....

静馬SIDE

『はい、それじゃあバスに乗ってくださいーい！』

担任の先生が指示を出し、生徒たちは次々とバスの中に入っていく。コンビニで買ったお弁当を持って、遠足のバスに乗り込もうとしたその時

「静馬！」

「え？ 兄さん？ 昨日はどうしたの？ 家にも帰らないで……！」

「まあ、説教は帰ってから聞かよ。これを……」

「何これ？」

「弁当！」

「なんで兄さんが知って」

「オレの情報網を舐めるなよ！ それにお前が何かを隠してる事くらいお見通しだ！」

視線を手に向けると包丁で手を切った痕や、火傷の痕が大量にあった……

「べ、別にそんなになるまで無理しなくても……」

「バカ野郎！ 子供が遠慮してんじゃねえ！ こついつときは黙って受け取っておけ」

「う、うん……。……。ありがとう。」

「おう。じゃあ楽しんで来い！」

「うん！ 行ってきまーす！」

そのお弁当はところどころ焦げていて、すごく不味かった……

でもすごく嬉しかったよ……

僕の為にあそこまで頑張って作ってくれたことが……

本当に…… 本当に…… 嬉しかったんだ……

ヒロSIDE

良かった……、間に合って

この日の為に料理教室で必死に勉強した甲斐があった……

あまりの才能のなさに先生が強化合宿をしようと言いだしたことに
は面喰ったけど、そのおかげで物体Xしか作れなかったオレが料理
を作る事が出来た……

遠足か……

オレは他の子が親の手作り弁当を食ってるのを横目にコンビニ弁当
を食うのは惨めだった。

だから…… 静馬にはそんな思いをしてほしく無かった。

本当に間に合ってよかった……

姉さん、絃馬さん……

オレは静馬の兄さんとして…… 叔父として……

ちゃんと出来ているんだろうか……

その答えを聞くのはずっと後になりそうだ……

オレは……、オレ達は生きていく……！

あなたたちがいなくなつて寂しいけど……

それでも大切なものがここにはたくさんあるから……！

だから…… 見ていてくれ……！

第5部開始 第56話 世の中の常識は気付かない間に変わっている

あの危険なアルバイトから数日して、休日……
オレは小麦粉を買いにスーパーまで来ていた。

小麦粉1キロ 98円、卵が1パック88円か……。
こんなに安く買えるなんて今日はラッキーだ！

目的の物を手に入れ、先日買ったばかりのバイクに跨りヘルメットを被ろうとしたその時ある人物を見てオレの動きが固まってしまった……。

正確に言えば、視線の先にあつた人物の格好を見て固まってしまったのだ……。

視線の先にいたのはショートカットのボン、キュツ、ボンの女性だった……。。

年はオレより5歳くらい上だろうか……？

その女性は見事にオレのストライクゾーンど真ん中の『年上の巨乳美人』だった……。

そう……、外でバスローブさえ来ていなければ……

何でバスローブ!? ここは外だよな!?

オレの知らない間に日本はここまでフリーダムになつていたのか!?

そうか、今日は暑いし汗をかいたから給水性の高いバスローブを……

……ってそんな訳あるかッ!

色々と混乱していると

「あの、申し訳ありませんが道を教えていただけますか？」

「へ？」

いつの間にかバスロープのお姉さんが目の前に来ていた……。
周りは取り巻きながら、好奇と戸惑いの視線をこちらに向けている
……。

「え？ ああ、道ですね？ どこに行きたいんですか？」

「ここなんです……」

とりあえず、にこやかに対応する。

バスロープの事に関しては突っ込まない方向で……

お姉さんが地図に書いてある場所を見るとそこはオレの友達である
『愛すべきバカ』の住むマンションだった。

「ああ、ここなら知ってます。後ろに乗ってください。送っていきますよ」

「申し訳ありませんが、ナンパはお断りいたします」

あ、ナンパと間違えられた……。

けど、確かにそうだな……。この発言は不用意だった……。

「ああ、すみません。そんなつもりは無かったです……。友達が
が住んでいるマンションだったから、つい……」

そう言えばこのお姉さん、あの『愛すべきバカ』に顔が似ているよ
うな……？

まあ、いいか……

「えっと、このマンションに行く道ですが、ここからずっと真っ直
ぐに行くとき大きな十字路があります。その十字路を右に曲がって二
つ目の信号を左に曲がると右手の見えるてきますよ。」

「そうですね。ありがとうございます」

「いえ、どういたしまして。それよりそんな恰好じゃ色々と拙いので、すから、これを羽織ってください」

そう言っ羽織っていた黒のライダーズジャケットをお姉さんの肩にかけた。

これはこれで色々と問題あるような気がするが、バスローブ一枚よりはマシだろう……。

「色々ありがとうございます。」

「いえ、困ったときにはお互い様です。それじゃあ失礼します」

そう言っバイクのエンジンをかけ、その場を後にした。

.....

翌日……

「おはよう、明久」

「おはようじゃ、明久」

「あ、おはよう。秀吉、ヒロ……」

そんな些細なことからいつも始まる日常……

そんな中で小さな事件が1つ起こった……

「あれ？ いつもより顔色がいいな？」

「臨時収入があっって朝食でも取ってきたのかのう？」

「ま、まあ、ちょっと……たまには僕だっ、ね……」

必死に何かを誤魔化そうとしているが目が泳いでいて何か隠していることが丸分かりだ。

「シャツにアイロンがかかっておる様じゃし……」

「寝癖も直ってるしな……」

「そ、それはホラ。週初めだからそれくらいは……」

「嘘つけ。お前いつもそんなことに気を使ってないだろ」

「……怪しいのう」

「ほ、ホントに何も無いんだって！」

秀吉が明久を下から覗きこむように見ている……

その姿が何となく優子と重なって見えてしまい、オレの心境は複雑だ……。

『朝から見せつけてんじゃねえぞコラア！』

『そちらの先輩の言う通りだ。君はもう少し木下君と距離を取るべきだと思っ』

通りすがりの常夏コンビのモヒカン（名前忘れた）と久保に明久が注意を受けている。

秀吉がその発言に対しいつもの如く『ワシは男じゃ』的なツッコミを入れている隙に明久に逃げられてしまった。

逃げたちしても教室で会うのにな……

……

『なんてこと言うんですかっ！？ 明久君！ そう言うのはもっと

大人になってからです！』

『ウチにはアキの本音がわからない！』

教室に向かう途中姫路と島田のそんな叫びが聞こえてきた。

その後すごい勢いで教室から走っていく島田とすれ違った……。

「なんじゃったんじゃろうか、今のは……？」
「大方また明久と喧嘩でもしたんだろ？ ほっとけ、ほっとけ。関わると面倒くさい」

そう言っつて教室のドアを開けると信じられない光景が目に入った……
男の永遠の夢……裸ワイシャツだ……！
その裸ワイシャツを……雄二がしていた……

「うわ……」

その奇抜な格好にオレはドン引きだ……

「相変わらず賑やかじゃな。先ほど明久が走り去っていったと思ったら、今度は島田が飛び出していくとは、一体何があったのじゃ？」

秀吉、雄二のあの恰好についてはスルーなのか……？

出来ればオレもそのままスルーしたいんだけど……

昨日のバスローブのお姉さんと言い、今日の雄二と言い流行ってるんだらうか……？

「実はこのバカがこんな時間から公序良俗に反する発言をしたんだ。」

「朝から猥談とは……明久、やるなあ……」

「また助平な事を言っておったのか、明久よ……」

「ち、違っよ！ 僕はそんなムツツリーニみたいな真似はしないよ。」

「……失礼な」

「おはよう、ムツツリーニ。それってアレか？」

「……（コクン）」

「なんなの、それ？」

「……………ただの枕カバー」

「ただの枕カバー？ その割には包みが大きすぎない？」

「……………（ブンブンブン）そんなことはない」

「気にするなよ」

「……………。ごめん、ムツツリー二中身を見せてね？」

「……………あ」

拙い……………、あれを見られたら……………！

「さて、何が出るか……………な？」

中から出てきたのは最近売れ筋の明久がプリントされた抱き枕カバーが出てきた……………

「……………ムツツリー二、ヒロ……………。何これ……………？」

「……………ただの抱き枕カバー」

「そうそう、大した問題じゃないだろ？」

「『大した問題じゃない』じゃないよ！ ただの枕カバーと抱き枕カバーには大きな隔たりがある事を覚えておくんだ！ って言うかなんで僕の写真なの!？」

「……………世の中マニアというものがある」

「自信を持って、明久。お前の抱き枕は意外に高く売れる」

「何言ってるのさ！ 僕の抱き枕なんて欲しがる人なんて何処にも……………」

「失礼、土屋君と烏丸君はいるかな？ 前に頼んでいた抱き枕カバーを……………」

「あれ？ 珍しいね、久保君。ヒロとムツツリー二に何か用？」

「……………何でもなし。少々用事を思い出したので失礼するよ」

あ、逃げた……

.....

「ヒロ、ムツツリーニ。久保とも取引していたのか？」

「（こくり）……強化合宿以来お得意様……」

「奴め、完全に吹っ切れたな……」

「まあ、気にするなよ……」

.....

「はあ……。とにかくムツツリーニ、ヒロ。その抱き枕カバーは没収するからね。作った分を回収して写真を秀吉に変えて持ってきてよ」

「明久よ、どさくさに紛れてワシの抱き枕を作るではない」

「そうですね、明久君。人の物を勝手に取って、しかも改造するなんてダメです！」

1つは姫路の分として注文を受けているしな……。

「は、話を戻そう……。」

「そ、そうじゃな。なんの話じゃったかのう？」

「オレが明久にトランクス姿で登校を強要されたって話だ」

「明久、お主……」

「お前、そうだったのか……？」

「雄二！ わざと誤解を招くような言い方をしないように！」

「まあ、それは冗談なんだが……。要するに明久が送ってきたメールのせいで翔子が何か勘ぐって俺が酷い目にあっただって話だ」

「どんなメールを送ったんだ、お前は……？」

「え？ 普通のメールだよ？」

そう言っつて明久はオレに携帯の画面を見せた

「どれどれ……？」

……

『雄二の家に泊めてもらえないかな？ 今日ちょっと……帰
りたくないんだ』

……

「際どい内容だな……。腐女子の皆さんが喜びそうだ」

「え、そうかな？」

「しかしそれは今朝の明久の様子がおかしいのと同関係あるのかのう
？」

「明久君の様子ですか？ そう言えば今朝はいつもより血色がいい
ですね。制服も糊がきいてパリツとしてますし、寝癖ないですし……

……」

「さすがだな。明久の事をよく見ている」

オレの発言に姫路が顔を真っ赤にするして慌てている。

純粹な若者をからかうのは面白いわ。

あゝ、和むな。

「確かにおかしいな。顔色がいいのはまだ分からなくもないが、制
服がきちんとしているのは妙だ」

「……………明久らしくない」

どんどん明久の顔色が悪くなっていく……。

「何か隠してるのはお見通しだ。さっさとゲロツて楽になっちまえ。カツ丼くらいは用意してやるからさ……」

「ハハハハハ！ ナニヲ イッテイルノカ ワカラナイヨ！ それよりそろそろチャイムが鳴るよ！ 鉄人が来る前に席に戻らないと！」

そう言うや否や明久は大急ぎで自分の席に戻って行った……。

「……怪しい……」

隠しているものを見なくなるのが人情だ。

さて何を隠しているのかな……？

まあ、明久の事だからきつとすぐくバカな事……訂正、面白い事なんだろうな。

第57話 化学は日常生活でも役に立つ！

『吉井保健室に行つてきなさい』

このセリフを明久は今日7回言われていた。

一部の生徒の間では『天変地異の前触れではないか？』という噂がまことしやかに囁かれていて、それを教師陣もあながち否定できないという顔で聞いている……。

なぜなら 明久が机に向つて真面目に勉学に励んでいたからである……。
そしてさらに

「みんなお昼にしようよ。昼休みは短いんだからさ」

手作りと思わしき弁当を広げていた……。

「明久君、今日は何で手作りお弁当なんですか？」

「まさか誰かに作ってもらつたんじゃない？……！？」

「なんだ？ 何でみんなしてオレを見る？」

「ヒロ、お主が作つたのではないかのう？」

「いや、作つた覚えは無いな」

「……………なら誰が？」

「一応自分で作つただけだ」

「嘘ですね」

「嘘ね」

スピーカーみたいに二人の言葉が八モツた……。

「アキに料理なんて出来るわけないもの。正直に言いなさい。誰かに作ってもらったんでしよう？」

「明久君の周りにこんなきれいなお弁当が作れる人と言うと……」

「坂本、土屋、烏丸ね……」

だからオレは作ってないって……

姫路と島田の妄想癖にも困ったものだ。

「やれやれ、二人の想像にお任せするよ」

相手にするのが面倒になって投げたな……。

けどこの状況でそんなことを言う……

「想像どおりって アキはそこまで汚れちゃってるの!？」

「え!？ ちょっと待って! 何を想像したの!？」

ほら、やっぱりそうだった……。

「そう言えば今日坂本君に『帰りたくない』ってメールを送っていたわよね」

「と言うことは明久君と坂本君は……」

「待って! 違うよ!」

明久と姫路、島田は同性愛疑惑をまだ捨てきれていないんだろうか？
明久への誤解を解くのも時間の無駄のような気がしたので傍観に回る事にした。

『……やっぱり浮気の相手は吉井だった』

『……って霧島さんいつの間?』

『……ついさっき来たところ』

『霧島さん、坂本君に何か用事ですか？』

『（こくり）……雄二にズボンを返すつもりだった。……………。』

聞こえてしまった……。

さつき霧島の『……浮気にはお仕置が必要』ってつぶやきが確かに聞こえてしまった……。

『ああ、翔子か。やっとズボンを返す気になったんだな。これでやっと普通の服装に　ってどうした？　なぜズボンを放さないんだ？』

『……雄二』

『ん？　なんだ？』

『……雄二に酷い事をしたくない』

『ひどい事したくない？　なんだかよくわからんがいい心がけだな』
『だから先に警告する』

『何を？』

『おとなしく私にトランクスを頂戴』

ダッ……！（雄二猛ダツシュ）

『あははは！　バカだなあ、雄二は』

『あの明久君』

『ん？　何、姫路さん？』

『そのお弁当食べるんですか？』

『うん。そりゃまあ、せつかく準備したんだし』

『そうですね。わかりました……。それじゃあ食べ比べてみてください』

『食べ比べ？』

『はい。実は 昨日作った特製クッキーが』

ダッ……！（明久猛ダツシュ）

明久、雄二生きていたらまた会おう……。

「……………ところでヒロ」

「どうした、ムツツリーニ？」

「……………昨日お前がバスローブを着たグラマラスな年上美人と楽しそうに談笑していたという目撃情報がある」

「ああ、それは道を聞かれていただけ」

不意に背中に悪寒が走った……。

ゆっくり振り向くとそこには【いい笑顔】の優子がいた……。

明日は我が身……ってところか？

「ヒロ……？ さっきのはどういうことかしら？ バスローブを着

た女の人と談笑なんて……？」

「待て、優子！ 落ちつけ！ ただ単に道を聞かれていただけだつて！」

「嘘つかないで！ バスローブで外に出る人なんている訳ないじゃない！」

「いたんだよ！ そう言う人が！」

「そこまで嘘を付き通す気ならこっちにも考えがあるわ……！」

「か、考えて？」

「直接体に聞いてあげる」

ダッ……！（オレ猛ダツシュ）

『ああっ！ くら、アキ！ 待ちなさい！ きちんと坂本との関係

「について説明しなさいっ！」

『明久君、どうして食べないで逃げ出すんですか!? 坂本君のお弁当よりもきつと栄養豊富ですから食べてみてください!』

『……雄二、二人で愛の逃避行なんて許さない』

『ヒロ! 待ちなさい! ゆっくりと話を聞いてあげるから!』

「うわぁ! 追っかけてくる〜!」

「てめえ、明久! 翔子に何を吹き込みやがった!? 何で俺がいきなり襲われなきゃならんのだ!」

「知らないよ! 雄二こそ姫路さんや美波に何かおかしいこと吹き込んでない!? 最近すごくおかしい想像をされているような気がするんだけど!」

「知るか、ポケット! お前の日ごろの行いが悪いからだろ!」

「なんだと、このカスツ! その言葉そのままそっくり返してやる!」

「お楽しみの中申し訳ないが、前見ろ! 前! 西村先生が待ち構えてる!」

「またお前らか!? 吉井、坂本、烏丸。今度は何の騒ぎだ!」

「げっ! 鉄人!」

「喧嘩している場合じゃない! 協力して突破するぞ!」

「仕方ねえ! アウェイケン 起動!」

「行くぞ! サモン 試獣召喚!」

「あつ! バカツ……! 止せっ!……え? あれ!」

「なんだ!? いきなり召喚フィールドが消えた!? 前に見た干渉とは違うみたいだし……何があつたんだ?」

「ポケットとするな! 明久、ヒロ!」

「貴様ら……! 何の騒ぎか知らんがよりもよって召喚システムを悪用するとは……!」

「あははははは……！ やつべえ……！」

人間本当に恐怖を覚えたときは笑ってしまつと言つ……。すぐ怒ってらっしやる……。

やっぱりそうなると思っていたよ。

学園の召喚システムを悪用してあの西村先生が黙っているはずが無い……！

この様子だったら鉄拳＋補習＋説教5時間コースってところかな……？

冗談じゃねえ！ 何が何でも逃げ切つてやる！

『待ちなさい、アキ！ 瑞希のクッキーを食べさせてあげるから詳しい話を聞かせなさい！』

『……雄二、抵抗するならYシャツも没収する』

『ヒロ！ 往生際が悪いわよ！ 観念しなさい！ 今なら関節を逆に曲げるだけで許してあげるから！』

オレの頭の中で警報が鳴り響く……

敵はすぐそこまで迫ってきているようだ……！

「よし明久、ヒロ！ 階段を降りたら二手に分かれるぞ！ 俺が先行して囷になるからお前たちは柱の陰に隠れて連中をやり過ごした後に逃げるんだ！」

こいつ……！ 自分だけ犠牲になってオレたちを助ける気か……！？

「ダメだ、雄二！ お前だけ犠牲になるなんて……！」

「そうだよ！ 僕が囷になるから雄二の方こそ隠れてやり過ごすんだ！」

「それもダメだ！ 何とか3人で助かる方法を……！」

「そんなことを言っている場合じゃないだろ！ オレ一人でお前たち二人を助けられるのなら本望だ……！」

「そんな……！ 諦めるな！ 何とか、何とか策を捻り出すからそんなバカな考えは捨てる！」

人の命は足し算引き算では表せないんだ！

いくら合理的で確実に善悪を考えなければ有効な手段でも……！

雄二を……仲間を見捨てるなんて事をオレはしたくない……！

「仕方ねえ！ こうなりや無理やりにも……！（ドンツ）」

「うわっ……！」

「ゆ、雄二！ 何を！？」

何とか食い下がるオレたちに雄二は埒が明かないと判断したのかオレたち二人を柱の陰に押し込んで自分は囿になる為廊下を走り出す。

「雄二、あのバカ……！」

「すまない、雄二！ 生きてまた会おう……！」

オレと明久の為に犠牲になった雄二を想う。

今ほど自分を無力だと思ったことは無い……。

こうして雄二の無事を祈る事しか出来ないなんて……！

『鉄人、島田、木下姉！ 明久とヒロならその柱の陰に隠れてい
るぞ！』

「っておい……っ！！」

あの野郎！ オレたちを売りやがった！

オレの涙を利子付けて今すぐ返しやがれ！

「オノレ雄二！ 貴様の裏切りは忘れんぞ！」
「テメエ、雄二！ 月夜ばかりと思うなよ！」

明久と二人で西村先生から逃げるためひたすらダツシユする。
明久の方はそろそろスタミナが切れてきているようだ！

「止まれ！ 吉井、烏丸！ 補習室で茶でも飲んでいけ！」
「すみません、西村先生！ せつかくのお誘いですが、オレは珈琲派なんです！」

「嫌です！ お茶と一緒に涙を飲むことになりそうだから！」

「明久、奥の手を使う！ 合図したら眼を瞑れ！」

「何をするの！？ ヒロまで僕を売る気！？」

「信用しろ！ オレはお前を裏切らない！ いいな！？」

「う、うん！」

明久との同盟を結びポケットの中から導火線を付けた純マグネシウムの粉末を入れた袋とライターを取り出す。

「ヒロ、何それ！？」

「マグネシウムだ。今から実践に役に立つ化学の実験を廊下で行う！」

「りよ、了解！」

シユポツ！ （袋の導火線に火をつける音）

メラメラ…… （導火線が燃える音）

クルツ （オレが振り向く音）

「観念したか！？ 烏丸！」

「ヒロ！ 覚悟しなさい！」

「退きなさい、烏丸！」

「悪いね！ オレは諦めが悪いんだ！ 明久、眼を瞑れ！ 喰らえ

！ マグネシウム光線っ！！」

ピカッ！

「又オツ！」

「ま、眩しっ……！」

「キヤッ……！」

マグネシウムが酸化するときが発生する強力な光で追っ手の優子、島田、西村先生の眼が眩む。

「はっはっはっ……！ あばよ〜！ とつつあ〜ん！」（栗田寛一風）

「誰が『とつつあん』だ！？」

「ヒロ！ 待ちなさい！」

「『待て』と言われて待つバカはいない！ さらば、優子！ 愛してるぜ〜！」

「ああああ、愛してるって……！？ あ、あんた……！」

顔を真っ赤にしながら慌てふためく優子は写真に収めておきたくなるくらい可愛かった。

出来ればもう少し眺めていたいが、そうしていたら捕まってしまう。オレと明久はダッシュでその場を後にした……。

「でどうする、明久？ 一旦やり過ぎしたがこのままじゃ捕まるぞ？」

「任せて！ いい隠れ場所があるんだ！ 鉄人が絶対に来れないよ

「うな場所が！」

「女子更衣室とか女子トイレなんてオチはなしだぞ!？」

「ち、違うよ! とにかく付いてきて」

「オーライ! 頼むぜ、明久!」

明久の大丈夫はいま一つ怖いものがあるが、明久はオレを信用してくれたんだしオレも明久の言葉を信じるとしますか……! !

第58話 権力者は怒らせない方がいい

しばらく逃げ回り、開けっ放しの窓から部屋の中に侵入する。

「ふう、ここまで来れば見つからないかな？」

「あれ？ この部屋ってもしかして……」

「何の用だい？ クソガキ共」

「うわ！ 奇怪で醜悪な老人オブジェ！」

「出会い頭に罵倒かい！？ 本当に礼儀知らずなガキだね！」

「落ち着け、明久。学園長だ」

「全くクソガキ共が……。3人そろって無断入室に加えて悪口とはね。また停学にでもなりたいのかい？」

「う……。すみません」

「無断入室したことはお詫びしますが、オレは悪口は言ってませんですよ？」

「あのジジイの身内っただけで処分する理由は十分さね！」

「そんな！ 理不尽です！ あんまりです！……って3人揃って？」

「なんだ？ お前らもこの部屋に来たのか？」

「あ、雄二ここにいたんだ」

「ああ、ここならそう簡単に見つからないからな」

「確かに学長室に逃げ込むとは“普通”なら考えないだろうな」

「何をしたのか知らないがね、ここはそうそう気安く来ていい場所じゃないよ、クソガキ共。あんた達みたいな不細工が来ると空気が汚れて不快だよ」

「何か言ったの、雄二？」

「阿呆が。現れるなり学園長を奇怪で醜悪な見るに堪えない汚物呼ばわりしたお前と一緒にするな。俺はなんで学園長室に妖怪がいるのか尋ねただけだ」

「それは十分失礼だよ、雄二。学園長だって好きで妖怪みたいな姿をしている訳じゃないんだから」

明久と雄二の発言には問題があるがオレは何も言っていないのに非道い言われようだ。

確かにオレはそんなに容姿が整ってないが、学園長だけには容姿の事でとやかく言われたくない。

今の発言にちよつと腹が立ったから反撃しよう。

「そう思うなら空気清浄機でも付けておいたらどうですか？ 尤も不細工がいる場所の空気が汚れるんですしたら、この学園長室の空気はもはやレベル4の生物災害バイオハザードを引き起こしているでしょうから、手遅れでしょうけど」

「……………」

「……………アンタ達には一度学園の最高権力者って言うのが誰か教えてやった方が良さそうだね」

「教えていただかなくても十分わかっているつもりですよ。問題が起きたら解決よりも隠蔽を図る学園長様？」

「……………フン！ 大体あんた達に容姿の事をとやかく言われたくないね。常夏コンビのバージョンアップ版が」

「「なんてこと言いやがる！ このクソババア！」」

「非常に不愉快な言葉ありがとうございます。【検閲削除】で【検閲削除】な学園長様」

あまりの不本意な言葉が来たのでとりあえず考え付く限り最悪の言葉を返しておいた

「フン。可愛く無いガキだね！ それで何か用かい、ジャリ共。見の通りアタシは忙しいんだけどねえ」

「『忙しいんだったら皮肉言っでないで仕事しろよ』と思ったが黙

っていた。なぜなら下手な事を言つとまたこの横暴で悪趣味な妖怪のオブジェが処分を盾に脅迫してくるかも知れないと考えたからである」

「声に出てるんだよ！ このクソガキ！」

「ハッ……！ しまった、つい本音が！」

「いい度胸だね、この【検閲削除】なガキ」

「お誉めに預かり光栄です。【検閲削除】な学園長」

両者共に辛辣な皮肉を飛ばしあい、睨み合っている。

その顔にはお互いに青筋が2、3個浮かび上がり、言葉を発する度にブチツという音が学長室に響いていた……

「あゝ、話を進めよう。聞きたいことつて言うのはさっき何もしていないのに召喚フィールドが消えたんだが何かあったのか？」

「口のきき方を知らないバカ共だねえ。まあ、バカどもに敬語なんて高度すぎるから仕方ないかもしれないけどね」

ちなみにオレの態度は慇懃無礼といって、表面上は丁寧で礼儀正しい態度でも内容は尊大で無礼という日本語が正しく理解できる人物なら凄く頭にくる皮肉の言い方なのだ！（豆知識）

「今起きている不具合の一つさ」

「不具合？ 白銀の腕輪のか？」

何だ？ まだ腕輪の不具合は直ってなかったのか？

「いや、召喚システムの方さ」

「そう言えば最近メンテナンスとか色々やってみましたよね。大丈夫なんですか？」

「調子は悪いけど心配には及ばないよ、クソジャリ。まだ調整は必

要だけど夏休みに入るころにはまた使えるようになるはずさ」

「つまりもうすぐ解禁される予定の僕らの試召戦争は」

「二学期まで待つてろってことさね」

「そんな！？ 困ります！」

そう言えばそろそろ試召戦争敗北のペナルティの『三か月の回線禁止期間』が終わる。

そうなれば明久達は迷わずすぐに宣戦布告を行うだろう。

雄二は霧島に勝って自由の身になる為、明久は病弱な姫路の為に……それなのにさらに待たされるのは我慢できないだろう。

「一応使えないことはないんだがね……使わせる気は更々ないよ。教職員にも試召戦争の申し込みがあったら止めるように、と伝えてあるしね」

「使えないわけでもないのに禁止ってまるで意地悪みたいじゃないですか!？」

「『みたい』じゃなくて意地悪そのものさね」

それでいいのか、教育者……？

「どうしてそんなことを？ 説明してください!」

「はん。説明しなきゃ分からないかい？」

「和からないですよ、そんなのっ!」

「そいつはたした洞察力さね。首から上についてるのは飾りかい？ その割にはいてくれも悪いようだね」

完全にからかわれている……。

どうやらこちらの旗色が悪いようだ。

少し頭を冷やす必要がある。

(落ち着け、明久)

(そうだ、あのバアサンの口の悪さは今に始まったことじゃないだろ？ 腹を立てるだけ時間の無駄だ)

(その割にはさっきの皮肉の応酬はすごかったな)

(まあ、そういうことはこっちに置いて……)

(置いておくな。持って来い)

(持ってきたものに火を付けて、丸めてこねて食べちゃった)

(……なんだか毒気が抜かれちゃった気がするよ……)

(そうか、それは何よりだ)

(よし、落ち着いたな。ここは言い返すよりもババアの機嫌をとって試召戦争の解禁をさせた方がいいだろう？ ここは我慢だ)

(そうだ。中身が子供な大人の対応で一番効果的な対応方法はこっちが大人になる事だ。あのバアサンは子供、こっちが大人……わかったか?)

(わかったよ。雄二、ヒロ)

(何を言われてもグツと堪えるよ)

(よく言った、明久!)

(ああオレたちの目的のためにも……な)

そうとも！ オレたちはこれより貝になる！ 何を言われても貝のように押し黙るとも！

「まったく。いくらアタシに惚れてるからと言って、学園全体を巻き込んで覗き騒ぎを起こすなんて……」

「……黙れ、この自意識過剰ババアアアアアアアッ!!!!」「」「」

しまった……！ バアサンのあまりの不本意な言葉に考えるより先に口が出てしまった……！ 貝になれなかった……

「じ、自意識過剰とは何だい!? アンタ達がアタシを覗くために

暴動を起こしたのは事実だろうに！」

「明久がバカだの不細工だのホモ野郎だの言われるのは事実だから
気にならねえが俺がババアに興奮していると思われただけは我慢
ならねえ！ 訂正しろ、ババア！」

「そうですね！ 訂正してください！ バカで不細工でババアの裸に
興奮してるのは雄二だけです！」

「って言うかあの覗きの主犯は根本（って噂をオレが流したん）で
すよ」

「ああ、もう！ うるさいねえ！ なんと言われようとアタシは生
徒と恋仲にはならないからね！」

「お願い下げじゃアアア！」

「寝言は寝ている間に言うからこそ許されるんですよ！？」

.....

随分と話が逸れた様な気がする……

「で、禁止の理由は何ですか？」

「あんた達が試召戦争の本質を見失ってるからだよ」

「試召戦争の本質？」

「何を勘違いしているのか知らないけどね、この学校 【試験召
喚システム】の本来の目的は『学生のモチベーションの向上』なん
だよ。だと言うのにあんたらのやってきたことは何だい？ 校舎の
壁の破壊に始まり、学園の爆破、合宿での覗き騒ぎ、その後の試召戦
争騒ぎ……どれも学生の本分から逸脱することばかりじゃないか」

「「う………！」」

それを言われると辛いものがある……。

「だが騒ぎを繰り返すうちにオレたちの成績は向上しているはずだ。潰れた授業の為の補習だつて受けているしな」

「そ、そうですよ！ きちんとやる事はやっています！」

「……違うな」

「え？」

「外部からの評価……、スポンサー関係からの圧力……、世論に左右されやすい学園の体制……つてところかな？」

「その通りだよ。事実がどうあれ世間がどういう眼で見ることが問題なのさ」

そう言つてバアサンは深いため息をついた……。

心なしか憔悴しているように見える。

この文月学園は世界唯一の試験召喚システムの導入のおかげで多数のスポンサーが集まつており、学費が非常に安い。

これは逆にいえば世論に弱いというデメリットを生んでしまう。

オレの実家の烏丸本家も文月学園のスポンサーの一つだ。

そう言えば学園祭以来本家のほうが手を出していないみたいだけど大丈夫なんだろうか？

「つまりは学園長が言いたいのにはシステムのメンテナンスというのは世間に対する隠れ蓑で実際は期末試験に集中させるために禁止する、と」

「相変わらず察しがいいね。その通りさ」

「えっと……」

「要するに『試召戦争を禁止にするので、期末試験でいい結果出せや！ ワレ、コラ！ ボケエツ！』つてことだな」

「そ、その通りなんだがなんだかな……」

「言い方に問題があるさね……。とは言つてもアンタ達の事だからまともに勉強なんてしやしないだろうけどねえ……」

「失礼ですね。オレは普段からコツコツやっていますよ」

「成績向上が見られなければ特別夏期講習でもやろうかねえ……」
「全力でやらせて頂きますっ！」

「そ、それは酷いですよ！ 試召戦争が禁止の上に夏休みが減るなんてあんまりです！」

「贅沢な事を抜かすクソジャリだね。なんなら三学期まで試召戦争を禁止して勉強漬けにしてやってもいいんだよ？」

「うげ……！」

オレと明久の声がスピーカーカーのように重なる。

相当な面白フェイスを披露してしまったのだろう……。

オレたちの様子を見てバアサンは満足したとばかりに意地の悪い笑みを浮かべている。

「まあ、あんたらの言いたいことも分からないでもないよ。この話は明日他の生徒にも公表する予定だけど相当な反発があるだろうしね。だから今回は特別にシステムのリセットをおまけしてやるよ」

「システムのリセット？」

また新しい用語が出てきた。

「メンテナンスの件もあるし一旦蓄積されているデータを白紙に戻してやるのさ。そうすると少しはやる気が出てくるんじゃないのかい？」

「ほう、確かに悪く無い話だな」

バアサンと雄二は話を進めているが、オレと明久は置いてけぼりだ……。

「吉井と烏丸が理解できないって顔をしているね。システムのリセットって言うのはつまり召喚獣の装備が白紙に戻るってことさ」

「え？ そうなんですか！？」
「なるほど、それは確かにいい話だ……」

痛みがフィードバックされる明久の召喚獣には特に魅力的な話だろ
う。

学際の際に必死に勉強した甲斐あって日本史だけならBクラスレベ
ルまで学力が上がっているし、少しは強力な装備になるだろう。

「本当なら学年末試験にしか変更が出来ない所を特別だって事だな」
「本来勉強って言うのは他の誰でもなく自分の為にやる事だからこ
ういうことは間違ってると思うんだけどね……。今回は事情が事情
だけに特別さ」

珍しくバアサンが教育者らしい事を言っている……。

普段の口の悪ささえなければ素直に尊敬できるのにな……

「わかりましたっ！ 期末試験頑張ります！」

「え……？」

「???? どうしたの、ヒロ？ いきなり僕の額に手なんか当てち
やって……」

「いや……、熱があるのかなって思って……」

「失礼な！」

「どうしたんだ、明久。急にやる気なんて出して……」

「よし！ やろう、雄二、ヒロ！ 期末試験を頑張って二学期にA
クラスから教室を奪取するんだ！」

「お、おう。そうだな」

「バカ共の頭で理解できて何よりだね。さて用が無くなったらさっ
さと出て行きな」

「はいっ！ 失礼します！」

オレと雄二の手を掴んで、生き生きした様子で踵を返し学園長室か

ら出ていこうとする。

一体どうしたんだ、こいつは……

なんだか心配だ……。

空腹のあまり悪いものでも拾い食いしたのかな？

「あ、おい！ 今出て行ったら奴らが……！」

「ハッ……！ 待て、明久！ 外は拙い！」

雄二の言葉で我に返り、明久を止めようと声をかけたが

ガチャ……

残念ながら遅かったようだ……

「……ウエルカム……」

扉を開けると西村先生を筆頭に姫路、島田、霧島……そしてすごく
いい笑顔の優子がいた……。

オレは生きて学校から出ることが出来るのだろうか……？

第59話 『他所は他所、家は家』 大人のジャイアニズムにも困ったものだ……

終業のチャイムが鳴り響く……

今日も一日頑張った！ さて、今日はニコニコマートの特売日だ。
急いで買いに行かないと……！

「雄二、ちよつといい？」

「なんだ、明久？」

「今日雄二の家に泊めてくれない？ 期末試験の範囲の勉強を教え
てほしいんだ」

ザワツ

明久の発した言葉にFクラスの教室がザワめく……
無理もない……。

オレも正直ビックリという言葉だけでは表せないくらい驚いている
……。

『おい……、聞いたか？ 今の……』

『確かに聞いたぜ。俄かには信じがたいことだが……』

『まさか、あいつらが……』

『まさかあの吉井と坂本が……』

『期末テストの存在を知っているなんて……！』

「そうそう明久と雄二が期末試験の存在を知ってるなんてビックリ
……ってちつがーう！ そうじゃないだろ！ 明久が勉強をやる気
になってることに驚くべきだろ！」

クラスメイトの発言にツツコミを入れる。
ツツコミの上級技術【ノリツツコミ】で……

「勉強を教えてほしいだと？ …… やれやれ、明久お前まだ九九の七の段が言えないのか？」

「明久……、お前……！ そうだったのか……！？」

「待つて！ 僕は一度も九九の暗唱に不安があるなんて言った覚えはないよ！ 分数の掛け算だつてちゃんと出来るんだからね！？」

「そうか、三角形の面積の求め方で躓いているところだったよな」

「底辺×高さ÷面積！ いい加減僕をバカ扱いするのはやめなさい！」

「よしよし、良く出来たな明久。あとはそこに2を割る事を覚えたら三角形の面積が出るからな」

「お前本当に大丈夫なのか？」

「……ふう、雄二は人の上げ足を取る事だけは一人前だね。あとヒ口、僕なら大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「すげえ！ その返しはさすがのオレも予想外だ！」

「全員核シエルターを作れ！ 近いうちに天変地異が起こるぞ！」

いつも通りバカなやり取りをしていると

「あの、明久君」

姫路が鞆を抱えてこっちにやってきた。

「九九の覚え方にはコツがあるんですけど……」

「言えるからね！ いくら僕でも九九くらいはキチンと言えるからね！」

姫路……サラツと明久にとどめを刺したな……

「しかしどうしたのじゃ？ いきなり明久が勉強なぞ特別な理由でもない限り考えられないのじゃが」

「そ、それはホラ！ さつき雄二が説明したじゃないか！ 『召喚システムのデータがリセットされる』とか『試験の結果が悪かったら夏期講習がある』とか……！ 木刀と学ランなんて装備はそろそろ卒業したいし、夏休みを満喫したいし、頑張ってみようかな。なんて……」

「なんでそんなに慌てているんだ？」

「……………明久らしくない」

「そうね。アキがその程度の理由で勉強をする気になるなんて思えないわね」

向こうからムツツリー二と島田がやってきて明久を更に追い込む。

明久が勉強をするっただけで凄じ騒ぎだ……。
いや、まあおかしいと思うがやる気になってるんだったら理由がどうあれ良いんじゃないかとも思うが……

「あ、あの明久君……。私でよければ一緒にお勉強しませんか？」
……………姫路さんの家に泊めてもらう訳にはいかないしなあ……………」

何ですと？ 何で勉強から家に泊まるって話まで飛躍するんだ？
どうも明久の言動を見ると『勉強をやる気になっている』と言うより、『家に帰りがらない』という印象を受ける。

けど何でだ？ 明久は一人暮らしだし帰りがらない理由なんて特に考え付かない……………。

「え？ 明久君私の家に来たいんですか？」

「あ、いや。そうじゃなくて……………」

「そ、それならお父さんにお酒を飲まないように言っておかないと

……。その……。もし明久君がお父さんに“大事な話”があるのなら酔っ払っちゃってると困りますし……」

色々大事な段階をぶっ飛ばしているような気がするがオレの気のせいだろうか？

「まさか転校の話！？ それなら説得に行くけど！」

「転向ですか？ 明久君の家は仏教じゃないんですか？」

「ほえ？ 何の話？」

「いえ、ですから、お家の宗教が違うという話を……」

「????？」

か、会話が噛み合っていない……

天然同士の化学反応ケミストリーは恐ろしい……

「時々姫路の思考は明久と同レベルになる時があるな」

「そうじゃな。朱も交われば赤くなると言ったところじゃろうか？」

「……………似た者同士」

「オレはこいつらの会話聞いていると和むけどな……」

「それはそうと明久、なんで俺の家にそんなに泊まりたがる？」

「えー、その、あー」

「嘘をつくな」

「急に勉強に目覚めて って早いよ！ まだ何も言っていないのに！」

「別にヒロの家でもいいんだけど……？」

「ダメだ。お前の命の為にも……」

「え？ どうして？」

「どうしてもだ……」

さすがに友達をジジイのブービートラップの餌食にするのはためらわれる。

オレは体が頑丈に出来ているから何ともないが、栄養失調気味の明久があトラップに引っかかったら無事じゃすまないだろう。

「まあ、次の試召戦争の事もあるから勉強くらい教えてやってもらい
いが」

「え？ ホント？」

「ただしお前の家で、だ。その方がやりやすいだろう？」

「僕の家はダメだよ！ 今日、その……ちよつと都合が悪いんだ
！」

「都合が悪いだと？ 何かあるのか？」

「う、うん。実は今日家の改装工事の業者が」

「嘘つけ。今日は本当ならお前の家でボクシングゲームをやる予定
だっただろうが。改装業者が来るわけないだろ」

「じゃなくて家の鍵を落としちゃって」

「マンションだから管理人に言えば開けてもらえるだろう」

「でもなくて家が火事になっちゃって」

「火事になったのに弁当作って服にアイロンかけてきたのか？ ど
れだけ大物なんだお前は……？」

「あー、えーつと、他には、他には」

「いい加減にしる。お前の嘘は底が浅いんだよ」

「ぐ……、わかったよ。今日はおとなしく家に帰るよ」

「待つんじゃ、明久。一体何を隠しているのじゃ？」

「うえっ？ 別に何も隠してないよ！」

「何かあるかわからんがこのバカがここまで必死になって隠すこと
か……。面白そうだな」

「そうね、アキの新しい一面が見れるかもしれないし」

「私も興味あります」

「……………家宅搜索」

「テスト期間で部活もないしワシも言ってみるかろう」

「くう……！ ころなったら……！ 助けてヒロ！ みんなを止めて！」

「あゝ、雄二。」

「なんだ？」

「あとで何があつたか教えてくれ。オレはこれから特売に行かないから」

「任せておけ」

「ヒロ……！？」

「ダメだよ！ 今家は凄く散らかつたいるんだ！」

「そうか。それじゃあ片づけを手伝ってもらえ」

「でも散らかっているのは2000冊のエロ本なんだ！」

「……………任せておけ（ゲツ）」

「しまった！ ムツツリー二の興味を余計に煽る結果に！ 物凄い逆効果だ！」

「よし、それじゃ意見もまとまったことだし、明久の家に行くか！」

「……おおー！」「」

「行ってらっしゃーい！」

「やめてー！」

明久の抵抗も空しく『突撃！ 隣の吉井さんの家（語呂悪っ！）』

は決行されることになった。

残念！ 明久！

.....

スーパーにてタッチの差で4時の市限定200品の醤油を手にいれ、切れかけている野菜を買い物籠に入れてレジに向かおうとした。もちろんマイバックも忘れていない。

『えっとパエリアの材料は確か』

レジで並んでいる途中どこかで聞いたことのある声が聞こえてくる。

『日本酒と鶏の血と』

聞き間違いか？

パエリアの材料としてはありえない物が聞こえてきたような気がする……

まあ、いいや。オレには関係ないしな

『アンモニアとチャーミーV（洗剤）と』

突っ込まない！ 赤の他人に対して突っ込みを入れるほどオレは非常識ではない！

『あとは金バサミでしたね』

「アウトーーー！！！」

「あら？ あなたは昨日のバイクの男の子」

あまりの致命的なうっかり発言につい突っ込みを入れてしまった。

「あ、昨日のバスローブのお姉さん。無事に目的地に着けましたか？」

「はい、おかげさまで。ありがとうございました」

「いえいえ、どういたしまして……って違う！ そうじゃなくて！

パエリアの材料はトマト、にんにく、オリーブオイル、ベーコン、鶏の手羽先、レモン、サフラン、サヤエンドウです！ 断じて日本酒と鶏の血とアンモニアとチャーミーV（洗剤）と金バサミなんて入れません！」

「そうですね、それは勉強になりました。ありがとございました」
「そうですね。お役に立てて光栄です……」

「えっと……、まずカンナに……」

「お姉さん、オレが材料をとってきますからここで待っていてください……」

「???? いえ、そんなわけには……」

「お願いですから……!」

「そうですね、それじゃあお願いしてもよろしいですか?」

「任せてください……」

オレは一体何をやってるんだろ……?

.....

とりあえずお姉さんの買い物も済み、夕焼けに染まる帰り道……

「本当に昨日と言い、今日と言いお世話になりました」

「いえいえ、昨日も言いましたが困ったときにはお互い様ですよ」

普通の10倍はあるパエリアの材料をお姉さんの家まで運んでいた。さすがにこの量の荷物を女性に持たせて自分は何もしないと言うのは気が引けたからだ。

「失礼しました。まだ自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます」

「あ、ご丁寧にどうも。オレは烏丸大貴と言います」

「ヒロキ君ですか。よろしくお願ひします」

「こちらこそ」

それからしばらくオレは“玲さん”と談笑しながら昨日道を教えたマンションに向かった。

玲さんは不思議と初対面なのに気を許すことができるような雰囲気を持った人であったという間に意気投合してしまった。

「ヒロキ君は高校生ですか？」

「ええ、文月学園に通っています。」

「そうですか。私の弟もその学校に通っているんですよ。」

「そうなんですか？ どこかで会ってるかも知れませんか。その弟さんのお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

そうこうしている内にマンションの玄関の前に立っていた。

ガチャッ

玲さんが玄関のドアを開ける。

『うわわわ！ 帰ってきた！』

ん？ この声、もしかして文月学園に通っている弟って……！？

「あら……？ 姉さんが買い物に行っている間に帰ってきていたのですね、アキ君」

「……お邪魔しています」「……」

「お客様ですか。ようこそいらっしやいました。狭い家ですが、ゆつくりして言ってくださいね」

「お、お帰りなさい。姉さん……ってあれ？ なんでヒロまで一緒なの？」

「いや……、まあ成り行きと言うか、なんとと言うか……」

「あら？ ヒロキ君、アキ君とお友達でしたか？」

「ええ、まあ……。明久君にはいつもお世話になっております」「いいえ、こちらこそ。いつもアキ君がお世話になっております。他の皆さんも自己紹介がまだでしたね。吉井玲と申します。皆さんこんな出来の悪い弟と仲良くしてくれてありがとうございます」

明久が必死に隠したがっていたのはお姉さんの存在だったのか。

けど極度な料理音痴疑惑以外にはそんなに変わったところは見当たらないような気がするが……

雄二が明久に『お前の姉のどこがおかしいって言うんだ！？ この贅沢者め！』と言って胸倉を掴んでいるが、オレもその意見には賛成だ。

オレの家のジジイに比べたらそれくらいの特徴など十分笑い飛ばせるレベルだ。

第一普段FFF団の相手をしているんだったらこれくらい屁でもないだろうに……

そんな事を考えていた。

しかしこの後オレたちは玲さんの珍プレーを目の当たりにして明久がなぜ姉の存在を必死になって隠そうとしたのか思わず納得してしまうのだった……。

第60話 類は友を呼ぶの『友』とは家族も入っているのだろうか？

「坂本雄二です」

「……………土屋康太、です」

「はじめまして、雄二君に康太君」

「ワシは木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者には良く間違えられるがワシは女ではなく」

「男の子ですよ？ ようこそいらっしやいました、秀吉君」

玲さんのその言葉に秀吉は感極まったように立ち上がり

「ワシを一目で男と見抜いてくれたのは主様だけじゃ……………！」

そう言えば、そうだな。オレも初対面の時男か女かわからなかったし……………

「勿論わかりますよ。だって」

そう言つて玲さんはニッコリと笑う……………

きれいだ……………！

その顔にオレはつい見惚れてしまった……………

「家のバカで不細工で甲斐性無しの弟に女の子の友達が出来るわけがないですから。ですからこちらの御二人も男の娘ですよね？」

そう言つて玲さんは姫路と島田に視線を移した……………

「ちよ……………！ 姉さん、出会い頭に何言ってるのさ！ 3人と女の子だからね！」

スッパーン！

「なんでやねん！」

何処からともなく取り出したハリセンで明久の頭をどつく……

「明久よ、ワシは男であつておるぞ」

「ヒロ君、ハリセンなんて何処から取り出したのですか？」

「玲さん、申し訳ありませんが企業秘密です」

「そうですか……。残念です。それはそうとアキ君……まさかアキ君は女の子を家の中に連れ込むようになっていたのですか？」

「あ、いや……。その……」

「……そうですか。女の子ですか。変な事を言つてごめんなさい」

「実は……。つてあれ？」

「どうかしましたか、アキ君？」

「いや、姉さん怒つてないのかなつて思つて……」

「？ あなたは何を言っているのですか？ どうして姉さんが起る必要があるのですか？」

「そ、そうだよね……。アハハハ……」

「明久、大丈夫か？ 随分顔色が悪いぞ……」

「アハハハ……。大丈夫だよ」

明久を気遣いポンツと手を肩に置く。

「ところでアキ君」

「ん？ 何？」

「今日はお客様がたくさんいらつしやっていますし、アキ君の楽しみにしていた『お医者さんごっこ』は明日でもいいですね？」

「……………」

玲さんの発言を聞き、つい明久から2、3歩距離を取ってしまった……。
つまり、ドン引きしたのだ……。

「ちょ……！ 姉さん、何言ってるの!? まるで僕が日常的に実の姉と『お医者さんごっこ』を嗜んでいるかのような物言いはやめてよ！ そしてヒロ！ 姉さんの言葉を信じて僕から微妙に距離を取るのやめてよ！」

いや、だってなあ……。

親友だと思っていた奴に変態疑惑が出てきたら少し距離をとりたくなるのは当然だと思っぞ。

「あ、明久君……。お姉さんと『お医者さんごっこ』なんて……」
「アキ……。血の繋がったお姉さんが相手って……。法律違反なのよ？」

「姉さん！ お説教なら後で聞くから今の台詞訂正してよ！」

「何を慌てているのですか、アキ君。それより、昨日アキ君渡した姉さんのナース服はどうしましたか？」

「このタイミングでそんな事を聞くなあああ!!」

「それと不純異性行為の現行犯で150点減点します」

「150? 多すぎるよ! まだ何もしていないのに!」

「……『まだ?』……200点に変更します」

「ふぎやあああつ! 姉さんのバカア!」

「すまん、明久……。さっきの言葉を訂正させてもらう。お前も苦労してるんだな」

「そうだな……。ほら、胃薬と頭痛薬だ。食後に飲めよ……」

「うん……。ありがとう。雄二、ヒロ……。僕生まれて初めて雄二とヒロに癒された気がするよ……」

あれ？ オレは結構頻繁に明久にフォローを入れているはずなんだけどな？

「ごめんなさい、話が逸れてしまいましたね。あなた方のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。申し遅れて申し訳ありません。私は姫路瑞希と申します。明久君とはクラスメートです」

「ウチは島田美波です。アキとは 友達です」

一瞬どう言おうか迷ったな、島田……

「瑞希さんに美波さんですね。初めまして」

「ところで、姉さんはどうしてヒロと一緒にだったの？」

「はい、買い物をしていて材料が分からなくなっているときに助けていただきました」

「助けちゃいました」

「そうなんだ。なんだかヒロらしいね」

「どういう意味だ？」

「ああ、ヒロらしいな」

「ヒロじゃからな」

「……………（コクコク）」

「そうですね。」

「うん、烏丸らしい」

うん、どういう意味だろう……？ こいつらの発言の意図が気になる……

「せっかく皆さんがいらっしやっただ事ですし、お夕食でも一緒にい

かがですか？ 大したおもてなしもできませんが」

「それじゃ、ありがたく好意に甘えさせてもらうかな」

「迷惑でなければご相伴に預らせて頂きたい」

「……………御馳走になる」

「ウチも御馳走になるのかな」

「じゃ、じゃあ私も……………」

「……………」

「どうしましたか、ヒロ君？」

「あ、いや……………。せつかくのお誘いですがオレは……………」

「え？ どうして？」

「今日ジジイがいなくて家には静馬一人なんだ。だから早く帰らないと……………」

「あれ？ 烏丸のご両親は？」

「……………さあ、どうしたんだろうかな？」

「え？」

「まあ、そんなことはどうでもいいじゃないか。それじゃあ、玲さんお邪魔しました」

「そうですね、残念です……………。昨日のお礼もまだだと言っのに……………」

ああ、そんなに残念そうな顔をしないでください……………

ただでさえストライクゾーンと真ん中なのにそんな顔見せられたら……………惚れてまうやるー！

「あ、それじゃあ静馬君も呼ぼうよ！ 人数が多い方が楽しいしいいよね、姉さん？」

「ええ、そうですね。そうしましょう。私もヒロ君とはもっとゆっくりお話をしてみたいです……………」

「あ、いや……………。そこまでご迷惑をおかけする訳には……………」

「もしもし、静馬君？ そう……………うん……………待ってるからね」

ピッ

「今からこっちに来るってさ」

「そ、そうか……」

なんでお前静馬の携帯の番号を知っているんだ？

そしてオレの返事くらい聞こうよ……

まあ、そこまで誘ってくれるのは嬉しいけどな……

「それは良かったです。ではアキ君お願いします」

「うん。了解」

「え？ アキが作るの？」

「うん。そうだけど」

「明久君お料理で来たんですか？」

「お昼に言ったじゃないか。お弁当作ったって言ったじゃないか」

「そ、そういうえばそう言うことも……」

「確かにそんなこと言っていましたけど……」

二人して釈然としない様子だ……

そんなに明久が料理を作る事が意外なのか？

「そう不自然な事でもないだろ？ 俺だって料理を作るしな」

「……………紳士の嗜み」

「ワ、ワシはあまり得意では……………」

三者三様の返事が返ってくる。

っていつかムツツリー二の『紳士の嗜み』に下心が見え隠れする気がする……

「まあ、そうだよな。オレも2年くらいまでは全く作れなかったし

な

「……ええええええ！」「……」

「なんだ？ 何でそんなに驚くんだ？」

「いや、だって……」

「オレは昔料理がこれ以上ないくらい下手で……。作るものはすべて【物体X】になって、食べばそいつは三日三晩三途の川を彷徨うことになる。付いたあだ名が【毒殺料理人】だ！」

「え？ それじゃあどうしてそんなに上手になったの？」

「通っていた料理教室の先生が強化合宿をしてくれてそこで徹底的に鍛えられてな……。」

そう、凄く厳しい先生だった……。

フルメタル・ジャケットのハートマン教官並の厳しさだった……。

「そう言う訳で今のオレがある訳だ」

「そうなんだ。ムツツリーニとヒロはともかく雄二は家で作って覚えてたタイプでしょ？」

「おう。その通りだが……やっぱりってどういうことだ？」

「あははは。だって雄二って家で一番地位が低そうだもん」

「？ お前は何を言っているんだ？」

「え？ 何って、夕飯って家で一番立場が弱い人が作る物なんですよ？」

「……」

そ、そうだったのか、明久……。

なんだか可哀想になってきた……。

「我が家では母の方針により、そう言うことになっています」

「そ、そうなんですか」

「な、なんだかパワフルなお母さんね」

「普通は作れる人が作る物なんじゃがな」

「え！？ 普通の家では違うの？ おのれ母さん！ よくも今までずっと僕を騙し続けてくれたな！」

「落ち着け、明久！ 考えようによつては『料理を習う機会を与えてくれた』ともとれるから！」

「騙されない！ もう騙されないぞ！ 言い方を変えたつて僕が今までやられてきた仕打ちは変わらないじゃないか！？ ねえ、ヒロ！ 何で僕の家だけこんな感じなの！？ 僕何か悪いことしたかな！？」

「落ち着けつてー！ー！ー！」

オレと明久の叫びがマンションの一室に木霊した……。後から他の住人から苦情が来ないか心配だ……。

第61話 吉井家の珍プレイ、好プレイ！

「落ち着いたか？」

「うん、ごめん。取り乱しちゃった……」

やっとの事で明久は正気を取り戻し、二人して肩で息をしていた……
ガチャッ！

「こんばんは、吉井さん！」

「あ、静馬君。いらっしやい」

「よし、それじゃあ静馬も来たことだし、先に夕飯の準備から始めるか。手伝うぞ、明久」

「……………協力する」

「ああ、オレも…………」

「あ、うん。ありがとう、三人とも」

「あのそれなら私もっ！」

「僕もやるよ！」

「「いや、女子と静馬（君）は座ってていいから！」「」

……………

「あれ？ ヒロ、これ違うんじゃないの？」

「んあ？ 何でだ？ パエリアの材料だろ？」

「え？ パエリアに必要なシーフードが一つも入ってないよ？」

「…………？ ああ、そうか。悪い、悪い。オレがシーフード嫌いだった」

たからついつつも作っているチキンパエリアの材料を用意してしま
った」

「チキンパエリア……?」

「まあ、基本的には普通と変わらないから大丈夫だよ」

しまった、しまった。

うっかりいつもの癖で食材を選んでしまった……。

そんなこんなで夕飯を作りながら玲さんが来た経緯を聞いた。

なんでも明久の生活態度のチェックに来たらしい……

先ほどの減点分振り分け試験の時より明久の成績が上がっていなけ
れば玲さんが明久の家に居座る事になり、明久の夢の独り暮らしは
幕を閉じてしまうのだ……。

雄二は明久が独り暮らしの方が何かと都合がいいから明久の普段の
行動を隠すことに積極的に協力するらしいがオレは明久の生活態度
特に食生活を快く思っていないので協力することにあまり乗り気で
はない……。

何度言っても直らなかつた明久の食生活がマシになるんだったら、
この際すべて暴露してしまうのも有りだよな……。
なんて事を考えながら作業に没頭していると

『良ければアルバムでも見ますか? アキ君の小さな時の写真です
けど』

『え? いいんですか?』

『面白そうじゃな』

『アキの小さな頃ってどんな顔してたのかしら』

『それでは持ってきてきますね。少し待っていてください』

アルバム公開か……。

やっぱり定番だよな。

前の学校でも入学当初卒業アルバムの見せ合いが流行っていたし……

『お待たせしました。これがアキ君の2歳のお風呂の写真です』
『す、すっごく可愛いです！』
『うむ、愛らしいのう』
『素直そうでかわいいわね』
『わあ、僕より小さい……』

いいな、明久……

オレもこういう家族が欲しかった……

『それでこっちがアキくんが4歳のお風呂の写真です』
『あははっ！ アキってはお風呂の中で寝てるわ』
『よっぽど気持ち良かったんですね』
『無邪気な寝顔じゃのう』
『本当だ……。可愛いですね……』
『そしてこっちがアキくんが7歳のお風呂の写真で』
『小学生の頃ですね。懐かしいです』
『かなり背丈も伸びておるのう』
『あれ？ お風呂の写真しか見てないような気が……』

ん？ そう言えば何でさっきから風呂の写真ばかりなんだ？
他にも色々と見せるべき写真があるような気がするけど……？

『さらにこちらがアキくんの10歳の時のお風呂の写真です』
『ええええ！？ ちょっと待ってください！ 女の人がいるのにそんな写真……！』

「待った！ 姉さん！ どうしてさっきからお風呂の写真ばかりなの！？」

明久がキッチンから声を張り上げる。

『そしてこれがアキくんの昨夜のお風呂のお風呂の写真です』

『……………。(ゴクリ)』

『えええええ！？ 見る気満々！？』

「このバカ姉があーっ！！ いつの間にそんな写真を！？ さては着替えか！？ 脱衣所に着替えを持ってきた時かっ！？」

「明久、鍋から目を離すな。吹きこぼれるぞ」

「離せ、雄二！ あのバカ姉を一刻も早く止めないと僕の社会的立場が……………！」

「料理を舐めるな。いいからおとなしく鍋を見ている」

「離せーっ！ 雄二のバカーっ！」

……………。

「思ったけど、やっぱりオレもうちよつと普通の家族がいいや……そんなでもって、この人に居座られると明久が自殺してしまうかもしれない……………」

「そうなるやさすがに後味が悪いのでとりあえず暴露は無しの方向で……………」

「そんなこんなで時間が過ぎ……………」

「みんな待たせたな。夕飯が出来たぞ」

「ありがとうございます。お客さんなのにアキくんのお手伝いまでさせてしまって」

「いや、気にしないでくれ。料理は嫌いじゃないからな」

「あ、ありがとうございます……………」

「お、おいしそうね……………」

「姫路さん、美波、どうして僕の顔を見て赤面してるの？」

あれは確実に見たな……

「アキくん、あなたはどうしてもそんなに落着きが無いのですか。リビングにまであなたの声が響いてましたよ」

「姉さんの行動が原因だからね!？」

「ほらまたそうやって大きな声を出して……。カルシウムが足りないのではないですか？」

そう言つて玲さんは明久の分のチキンパエリアの皿を引いて、煮干の入った袋を置いた……。

「アキくんはこれを食べてください」

「何それ!? 僕の夕飯は煮干だけなの!? カルシウム不足だつて言ってるけどこれってただのイジメだよね!？」

す、凄い……。

肉親だけあつて明久の弄り方にも年季が入っている……。

雄二よりうまく明久を弄る人をオレは生まれて初めて目の当たりにした……。

「姉さん……。前から思っていたけど……。姉さんは僕の事が嫌いな……?」

「何を言っているのですか、アキくん。姉さんがアキくんを嫌う訳ないでしょう? むしろその逆です」

「え? 逆つてことは?」

「無論大好きです」

「そ、そうなんだ……」
「はい。姉さんはアキくんの事を愛しています」

良い姉さんじゃないか、明久……
やっぱり家族は仲良くしないとな……
オレみたいに性格に歪みがある人間と違って明久は本当に真つすぐだ。

家族の愛を幼いころから貰っている子供は人を大事に出来る。
明久を見ているとそう思うよ……

「 1人の異性として……」

「最後の一言は冗談だよな!?　むしろ嫌いでいてくれた方がありがたいんだけど!？」

「日本の諺にこういう言葉があります」

「何!?　また余計な事を言うの!？」

「バカな子ほどかわいい、と」

「諦める、明久。世界でこの人ほどお前を愛している人はいないぞ」
「待つて!　それは僕が世界で一番バカだつて思われてるってことなの!？」

「う、ウチだつてアキの事世界で一番バカだつて思っているわ!」
「わ、私だつて!　この世界で明久君ほどバカな子はいないと確信しています!」

「やめてあげてください!　それ以上吉井さんを傷つけないで!」
「待て、明久!　みんな悪気はないんだつて!　だから無言でベランダの方に向かうのはやめろー!」

.....

「……」

なんとか明久を宥めて夕飯食べていた。

「む。これはまた美味しい物じゃな」

「口に合って何よりだ」

「そう言っただけだと作ったかいがあるよ」

「……………」

「喜んでもらえて良かったよ」

ふと視線を姫路と島田に移すと二人ともあまり箸が進んでいないようだった。

「あれ二人ともパエリアは苦手だった？」

「う……。いや、嫌いじゃないし、凄く美味しいんだけど……………」

「だからこそ落ち込むと言いますか……………」

なるほど……………」

色々複雑なんだな……………」

「確かに上手に出来ていますね。残念です」

「偉そうに言うなあ。自分は料理全然ダメなくせに」

「何を言うのです、アキくん。姉さんだってアキくんの知らないところで成長しているんですよ」

「ふくん、どのように成長したのさ？」

「胸がEカップになりました」

「あんたに恥じらいという概念はないのか!？」

「???? 兄さん、どうしたの? いきなり僕の耳を塞いで……………」

「いや……………」お前にはまだ早い会話が繰り広げられていたから……………」

玲さん、静馬もいるんですから少し過激な発言は控えていただけ

とありがたいです」

「わかりました。それじゃあアキちゃんとヒロ君の前だけで言うことにしましょう」

「そう言う意味じゃないですから……！　って言うかなんでオレと明久の前だけで？」

「烏丸、優子に知られたら殺されるわよ？」

「頼むから黙っててくれよ？」

「どなたですか？　『優子さん』というのは？」

「烏丸の彼女です」

「まだ付き合っていないから……」

「そうですか。それじゃあヒロ君、お姉さんと物凄いチューを……」

そう言うって玲さんはオレに迫ってきた……

何でオレに迫って来るんだ！？　オレは何か悪いことしたっけ？

「しませんから！　というか何でオレ？　明久でしょう？」

「ヒロ！　何言ってるのさ！？　僕は祝福するよ！」

「テメエ！　他人事だと思って好き勝手言いやがって！」

「勿論その後にアキ君にもしますが……」

「勘弁してーっ！」

「まあ、冗談は置いておいて」

「ですよね？　『冗談ですよね！？』」

「料理の勉強もしましたよ」

「あ、そうなの？」

「はい。ついにタワシとウニの違いがわかるようになりました」

「あっはっは……！　ナイスジョーク！」

あれ？　どうしたんだ、明久。そんな気まずそうな顔して……

ジョークだよな……？

「ところで皆さん、家の愚弟の学校生活はどんな感じでしょうか？
例えば成績や異性関係とか」

「やたらと異性関係を強調してきたな。」

「さつき明久がキツチンで言っていた『不純異性交遊は完全アウトというお固い人』という玲さんへの評価は当たっている様だ。」

「その割には玲さん自身の行動はかなりフリーダムの様な気がするが」

……

「えっと明久君は凄く頑張っていると思います。最近は成績も伸びてきたみたいですし」

「そ、そうね。たまにドキッとするときがあるわ」

「そうですか、それで異性関係は？」

「え、えっと、それは……よく分かりません……。異性関係は」

「そ、そうね……。ウチもあまり知らないです。異性関係は」

「2人とも異性関係を強調する……」

「まあ、そうだよな。真っ先に知りたいのは姫路と島田だもんな……」。

「異性関係、のう……」

「秀吉君は何かご存知でしょうか？」

「そうじゃな……。何か、となると」

「秀吉、あーん」

「んむ？ あーん、じゃ」

「モギユモギユモギユ……」

「明久がキノコを刺したフォークを差し出し秀吉に食べさせた。」

「食べている間にしゃべる事をよしとしないのか、玲さんは黙って秀吉が食い終わるのを待っている。」

「秀吉君。それで」

「はい。秀吉、あーん」

「あーん、じゃ」

モギユモギユモギユ……

どうやら心配なさそうだ……

そう判断してオレは静馬の口の周りに付いたトマトソースを拭っていた……

『秀吉君。先ほどの話を』

『秀吉、あーん』

『あーん、じゃ』

モギユモギユモギユ……

『秀吉く』

『あーん』

『あーん、じゃ』

ボキユボキユボキユ……

あ、なんだか聞き慣れた嫌な音が……

「ふぬあぁっ！ か、関節が！ 肘が逆を向いて次世代の人間の体に！？」

「え？ 兄さん、何があつたの！？ どうして僕の眼を塞ぐの！？」
「……見ない方がいい」

そんな前衛的な次世代の人体は嫌だ……
とりあえず現実逃避も兼ねて静馬の眼を隠す……
ここから先はR15だ……

「アキくん、邪魔しないでください。酷い事になりますよ」

「なってるよ！ もう充分酷い事になってるよ！」

「それで秀吉君。さっきの話の続きですが」

「むう……。そうじゃな。本人が何も言わんのならばワシから何か言う訳にはいくまいて」

「あら、秘密ですか？ それなら今度アキくん自身に“ボツキリ”と聞かせて頂くことにしましょう」

「それが良いじゃろ」

「『ボツキリ』って何！？ 普通そこは『じつくり』か『ゆつくり』だよな！？」

要するに明久を拷問するってことでもいいのかな……？

凄惨な光景が見えないように静馬の眼を塞ぎながら考えを巡らせる……。

「明日のおかずは魚にしようかな……」

「まだ今日の夕飯食べているのにもう明日の献立を考えているのですか。アキくんは食いしん坊ですね」

「いや、そう言う訳じゃないよ」

食いしん坊万歳！

おそらく魚にしようとするのは骨折対策だろうな……
無駄に終わるような気がするが……

「そう言えば言い忘れていました。明日から姉さんの食事は用意し

なくて結構ですよ」

「え？ そうなの？」

「はい。こちらで済ましておかなければならない仕事があって明日から土曜日か日曜日くらいまでは帰りが遅くなりそうです」

明久がやたらと嬉しそうな顔をしている。

よっぽど玲さんの行動に手を焼いていたのだろう……

「うえ！？ いや、そんなことないよっ！ せっかく帰ってきた姉さんがいなくなるのは凄く残念だよ！」

「英語で言ってみてください」

「Happy」

「幸せって意味だな」

「……………」

「あっ！ 痛っ！ 姉さ……っ！ 食事中にビンタは……っ！」

玲さんの明久への愛情？が暴走している……

止めてやりたいが、今の光景を静馬に見せるわけにはいかない……
すまない、明久……

……………

食事を終え後片付けを手早く終わらせてリビングで勉強の準備に取り掛かっていた。

「皆さん、お勉強ですか？ それなら良い物がありますよ」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片付けていて見つけました。参考書という物なのですが、役に立つかもしれませので」

そう言っつて玲さんは一冊の本をテーブルの上に置いた。

「ありがとうございます。使わせて頂き」

そう言いかけて固まっつてしまっつた……

そこに置いてあつた本は

【女子高生 魅惑の大胆写真集】

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットが……っ！……っ！」

「保健体育の参考書としてどうぞ」

「あわわわわ……っ！」

静馬が顔を真っ赤にして処理落ちを起こしかけている……

とりあえず静馬は寝かしておいて……

さあ、勉強の時間だ！ 張り切つて『保健体育』を勉強しようか！

「そ、それじゃあ、あくまでお勉強の参考書として……っ」

「そ、そうね。ウチもちよつと勉強しておこうかしら……っ」

「よく言つた姫路、島田！」

「ちよ……っ！ 無理に姉さんのセクハラに付き合わなくていいんだよ……っ！」

「無理なんかしていないさ！ あえて言わせてもらおう！ オレは今無性に『保健体育』の勉強がしたくて仕方ない！」

「やめて……っ！ 煽らないで……っ！」

「アキくんの部屋にあつた他の参考書も確認させてもらいましたが、アキくんはバストサイズが大きく、ポニーテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向がありますね」

「冷静に考察を述べないで！ いくら言い方を変えて取り繕ってもそれが僕の趣味嗜好だつてバレちゃうから！」

「……………明久、残り1999冊は？」

「2000冊のエロ本の存在を信じていたの（か）！？」

「明久、ヒロ、エロ本の話は置いてといてさっさと勉強を始めようぜ」

いい加減收拾が付かなくなってきたので雄二が話を進める。
確かにもう時間が無い。

女子がいるからあまり遅くなってしまうのも拙いだろう。

悪ふざけはここまでにして真面目に勉強をしようか。

「よろしければ私がお勉強を見て差し上げましょうか？」

「え？ お姉さんがですか？」

「はい。日本ではなくアメリカのボストンにある大学ではありますが、大学の教育課程は昨年修了しました。少しはお役にたてるかと」

アメリカ？ ボストン？ それって……………！

「ぼ、ボストンの大学だと……………！？ まさか世界に名高いハーバード」

「よくご存じですね。その通りです」

「……………ええええええええええ！？」

凄い！ そんな人に勉強を見てもらえるなんて本当にラッキーだ！
けど上が良く出来ると下ができなくなるって本当なんだな……………

「なるほど、出廻らしか……………」

「雄二、その発言の真意を聞かせてもらえないかな？」

「雄二！ 思っけていても誰も言わないことをわざわざ言わなくてもいいだろ！ 明久の気持ちも考えろ！」

「やめて、ヒロ！ 悪意がない分、余計に傷つくよ！」

「あ、悪い。つい本音が……」

「まあ、それは置いといてそう言うことなら教えてもらおうぜ。本場の英語とかこっちの教師じゃ知らないことも色々知っていきそうだしな」

「……………頼もしい」

「わかりました。それでは英語あたりから始めましょうか」

「……………よろしくお願いします！」「……………」

その日は夜の10時まで玲さんの講義を聞き、解散となった。本当に勉強になった。

第62話 名門ツッコミ塾 坂本ファミリー！

翌日の放課後……

今日は雄二の家で勉強会をすることになった。

期末テストの勉強で気合いが入ってるようでいつものメンツが全員参加ということになった。

雄二の言った『幸い今日は御袋もないことだしな』と言う一言が気になったが……

……
……
……

「「「お邪魔します！」「」」

「ねえ、雄二以外には誰もいないの？」

「ああ。親父は仕事でお袋は高校の同級生と温泉旅行らしい。だから何も気兼ねせずにつくりとしていてくれ」

ああ、いいな……

ブービートラップの警戒が必要ない普通の家って……
憧れるな……

などと考えている内に雄二がリビングのドアを開ける。
するとそこには

ガチャッ

「……………（プチプチプチプチ……………）」

一心不乱に商品などの梱包に使うプチプチを潰している女性がいた……
脇を見れば潰したプチプチが山のように積み上げてある……
いったいこの人は何をやっているんだ……？
いや、プチプチを潰してるのは見たらわかるけどさ……

「……………」

パタン

雄二が何も言わずにドアを閉める……
血の気の引いた顔は見ていて痛々しかった……

「ゆ、雄二……？ さっきのプチプチを潰していた人って……」

「……………赤の他人だ」

「さ、坂本の母親なの……？ なんだか随分すごい量を潰していたわね……」

「う、うむ。あれほどの量。費やした時間はおそらく1時間や2時間ではきくまい」

「……………凄い集中力」

「坂本君のお母さんはそう言うお仕事をされているんでしょうか？」
「恐らく精神に疾患のある患者が何らかの手段でこの家に侵入したに違いない。なにせ、俺のお袋は温泉旅行に行ってるはずなんだからな」

「その言い訳は少し無理がないか？」

「うるさい……！」

『あら、もうこんな時間。さっき雄二を送り出したばかりだと思っただのに……。続きはお昼を食べてからにしましょう』

パンツ！

「おふくろっ！ 何やってんだ！？」

ついに耐えられなくなったようで、部屋に踏み込んだ。

「あら、雄二。お帰りなさい」

「おかえりじゃねえっ！ 何で家にいるんだ！？ 今日泊まりで温泉旅行じゃなかったのかよ！？」

「それがね、お母さん日にち間違えちゃったみたいなの。7月と10月ってパツと見ると文字が似てるから困るわね」

「どこが似てるんだ！？ 数字の形どころか文字数すら違うじゃねえか！？」

「こら、雄二。またお母さんを天然ボケの女子大生扱いしてっ」

「さらっと図々しいセリフを抜かすな！ あんたの黄金期は10年以上前に終わっている！」

「あら、雄二のお友達かしら？」

「話を聞けえっ！」

もはや何も言うまい……

雄二も大変なんだな……

ハッ……！ そうか、そう言うことだったのか！

雄二のツッコミとしての技術はここで鍛えられたのか！

名門ツッコミ塾『坂本ファミリー』！

オレもここでツッコミとしての技量を鍛えてもらおうかな……？

「皆さん、いらっしやい。いつもうちの雄二がお世話になっております。私はこの子の母親の雪乃と申します」

凄く若く見えるな……。

「一体年齢はいくつ位なんだろう……？
他のみんなも驚いている……」

「み、皆、とりあえずお袋は見なかったことにして、俺の部屋に来てくれ」

「そ、それじゃあお邪魔します」

雪乃さんは『お茶を持っていきますね』と言う声がリビングから聞こえた。

「いいな、雄二……」。

同じ保護者なのに家にトラップを仕掛けまくる家のジジイとは凄い違いだ……。

羨ましい……」。

……

「そっぴゃ久しぶりに雄二の部屋に来たよ」

「ワシもじゃな」

「……………同じく」

「オレは初めてだ」

「え？ アンタ達よく来てるんじゃないの？」

「大抵は僕の家が集まってるからね」

そう、主に集まるときは明久の家に集まっている。

広さといい、場所といい手ごろだからその方が色々やり易いからだ。

明久達だけ相手だったら気を使う必要がないからな。

全く家族用のマンションに一人暮らしなんて贅沢な奴だ。

「それはそうと雄二……。やっぱりこれは少し無理がないか？」

「そうだな……」

さすがに雄二の部屋に7人すし詰め勉強は少しばかりキツイ物がある……

「居間じゃダメかな？」

「ダメじゃないが、お袋がいるからな。勉強にならない可能性が高い」

「雄二にも霧島以外の弱点があったんだな」

後々役に立つかもしれないから覚えておこう。

P r r r r r r P r r r r r r

「あ、ウチの携帯ね。ちょっと「ゴメン」

島田が携帯を取り出して、耳にあてた。

「もしもし？ あ、Mut お母さん。どうしたの？……うん。

……うん。……そう、わかったわ」

「美波、どうしたの？」

「うん……。母親が急な仕事が入って家にいられなくなっちゃったみたい」

「あ、そうなの？ それじゃあ葉月ちゃんは今家に一人ってこと？」

「そうね。だから悪いけどウチは帰るわ勉強はまた今度ね」

「待て、島田。それなら会場をお前の家に変更しないか？」

「え？ ウチの家？」

「それは良いのう。島田の妹とは全員顔見知りじゃし、ちょうど雄

二の部屋は手狭じゃったし」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

「……………なんなら、夕飯を作る。ヒロが……………」

「オレかよ!? けどまあ、いいか……………」

「美波さえよければ、どうかな?」

「じゃ、じゃあ、ウチの家にしましょうか……………。ただし! ウチの部屋には絶対に入っちゃダメだからね!」

「そんなデリカシーのない真似する訳ないだろ。明久以外は……………」

「そうね、アキ以外は……………」

「なんで!? 僕だってそんなデリカシーのない真似しないよ!」

「……………どうだかな(ね)……………」

「しないってば……………」

「そこまでだ! そうと決まれば早速移動だ! さあ、行こう! 今すぐ行こう! チビツ子一人じゃ寂しいだろうからな!」

雄二は凄い勢いで捲し立てる。

そんなに慌てなくてもいいだろうに……………」

玄関に向かい靴を履いていると台所から雄二と雪乃さんの会話が聞こえてきた。

『お袋、ちよつと出かけてくる。夕飯は昨日の残りがあるからそれを温めて食べてくれ』

『あら、もう行っちゃうの? お茶用意しているところだったのに』

『悪い。ちよつと事情が変わったんだ。……………ところで、その麵つゆボトルは一体何に使うつもりなんだ?』

『麵つゆ? あらら……………。てつきり、アイスコーヒーだとばかり』

『お袋……………。色や匂いで気付いてくれとは言わないから、せめてラベルで気付いてくれ』

さすが名門ツッコミ塾……………。

何が出てくるか分からない……………。

雄二がツッコミであんなに憔悴するなんて……………

オレにはまだ荷が重そうだ。

もう少しツツコミとして経験を積んでからまた来ます！

待っていてください、雪乃師匠！

この烏丸大貴！ ツツコミとして力をつけてからもう一度弟子入りを志願させて頂きます！

第63話 島田家……たぶん最もまともな家……

「ただいまー！ 葉月いる？」

「わわっ！ お姉ちゃんですかっ！ お、お帰りなさいです！」

「？ 葉月、今お姉ちゃんの部屋から出てこなかった？」

「あ、あう……。実はその……。ひとりで寂しかったからお姉ちゃんの部屋に行っただけ」

「ぬいぐるみを取ってこようと思ったの？ そのくらいお姉ちゃんは別に怒らないのに」

「そ、そうですね？ お姉ちゃんありがとうございますっ！」

島田の家は凄くまともだ……。

なんだか久しぶりに和やかな空間に来た気がする……。

島田と葉月ちゃんも非常に仲が良く、アットホームな雰囲気さをさらけ出している。

和むなあ、こういう雰囲気……

オレは圧倒的に荒んだ空気の空間で過ごすことが多い為こういうた和やかな空気には憧れがある……。

烏丸の本家で愛人の子っただけで冷遇され、中学と前にいたの西橋高校でつけ狙われて、文月学園のFクラスとジジイのトラップ満載の今の家……。あれ？ まともな環境が無くねえ？

き、きつと気のせいだよな！ これ以上考えるのは止そう……。マジで凹んできた……。

「葉月ちゃん、こんにちは」

「あつ！ バカなお兄ちゃんっ！」

葉月ちゃんは明久の姿を確認するなりミサイルのように突っ込んでいった。

そして明久の鳩尾に直撃！

対象は顔を真つ青にして耐え忍んでいる……。無意識のSか……。恐ろしいな……。

「こんにちは、葉月ちゃん」

「わあつ。きれいなお姉ちゃんまで。今日はお客さんが一杯ですつ！」

「ほらほら、葉月。アキから離れなさい。みんな中に入れないですよ」

「あ、はいですつ。それじゃあバカなお兄ちゃん達こっちですつ！」
そう言つて葉月ちゃんは明久の腕を引つ張つて中に入つて行つた。

「つとと、そんなに引つ張らなくても大丈夫　ん？」

「どうした、明久？　何固まつてるん　ん？」

明久の目線の先にあつたのはぬいぐるみが部屋いっぱいに置れていた。

そしてその中の中央を陣取っているキツネのフィアのぬいぐるみが写真立てを抱えていた。

その中に入っていた写真は　見なかつた事にしておこう……人の趣味をとやかく言うのは野暮だ……。

「ちよつとアキ！」

島田がそう言つた瞬間明久の脳天、鼻先、顎の三か所にピンポイントに拳を叩きこみ、その上両手首の関節を外した……。あまりの見事な技のキレに鳥肌が止まらない……。オレしばらく鶏肉は食いたくないや……

「何見てるのよ!？」

あれだけ見事にやられたら三途の河が見えるだろうな……

「この部屋には絶対入っちゃダメだからね! それと烏丸! あんた何か見た？」

「何も見てないよ? ホントだよ……」

「中で見たものは絶対に誰にも言っちゃダメだからね!」

「サー! イエス、ママ! この秘密は墓まで持っていきます!」

「やれやれ。お前らは何やってんだか……。チビツ子、元気だったか？」

「はいですっ! おっきなお兄ちゃん!」

「そうかそうか、それは良かった」

「久しぶり、葉月ちゃん。いつも静馬がお世話になって……」

「あ、静馬君のお兄ちゃん! 葉月も静馬君といると楽しいから大丈夫です!」

「そうか、これからも仲良くしてやってくれるか？」

「ハイですっ!」

静馬はいい友達を持ったな……。

お兄ちゃん嬉しいよ……。

「とりあえず適当に座ってもらえる? 今テーブル持ってくるから」

「? お姉ちゃん、テーブルなんて何にするんですか? トランプですか?」

「葉月。今日お姉ちゃん達ね、うちでテストのお勉強をするの」

「あつ……。テストのお勉強ですか……。それじゃあ葉月、自分の部屋で大人しくしてるです……」

この子の気持ち、何となくわかるような気がする……。

周りに……大人に迷惑をかけまい、と本来なら子供である時期に“大人にならなくちゃいけない”“いい子でいなくてはならない”という考えに至る事はオレも経験してきている。そう言う子供は大抵心の底で埋められない寂しさを抱えている……。子供が子供らしく振る舞えない事は大抵は大人の都合だ……。大人の都合で子供が我慢しなければならいなんて事は無い方がいい絃馬さんも“我儘を言うのは子供の特権”と言っていたしな。明久に視線を送ると明久は頷いた後口火を切った。

「葉月ちゃん。僕らと一緒に勉強しようか？ 学校の宿題とか予習とかないかな？」

「え？ 一緒にお勉強してもいいですか!？」
「勿論だよ。ね？」

「ああ。どうせ一人に教えるのも二人に教えるのも変わらないしな」

「雄二、それは僕の学力が小学生レベルだって言いたいのかな？」

「葉月ちゃん、一緒に勉強しましょうね」

「ワシはあまり教えてやれぬが、一緒に勉強するのは大歓迎じゃ」

「……………保健体育なら教えてあげられる」

「島田、ムツツリー二は縛って外に吊るしておこう。葉月ちゃんが危険だ」

「……………ツ!!!(ブンブンブン)」

「烏丸……。目が据わってる……………」

「はい！ 葉月も一緒にお勉強がしたいです！」

うん、元気が良くて大変よろしい！

こうして1人の子供の笑顔は守られた……。

それにしても明久は葉月ちゃんの“いいお兄ちゃん”だな……。

今度2人で『兄バカ同盟』でも結成しようかな……………？

『バカ兄同盟だろ?』と言うツツコミは無しの方向で……………!

そんなバカな事を考えている内に勉強会は幕を開けた。

.....

それからしばらくワイワイと勉強をしていた……。そして気が付けば時計は9時半を回っていた。

「お？ もうこんな時間か……」

「なんじゃ、あつという間じゃったのう」

「……集中してた」

「すっかり暗くなってしまいましたね」

外を見ると姫路の言う通りもう真っ暗だった。

「あとはまた今度するとして、今日は帰ろうぜ」

「そうですね。それじゃあ美波ちゃん、ありがとうございました」

「あ、ううん。こっちこそ色々ありがとう。ほら、葉月もお礼を言いなさ　葉月？」

葉月ちゃんは明久の膝の上で寝息を立てていた。

それはもう気持ちよさそうにスヤスヤと……

「あははは、疲れちゃったみたいだね」

「もう、葉月ってば……。アキ、悪いんだけどこっちに寝かしてもらえる？」

「そうしたいんだけど……」

葉月ちゃんは明久のシャツの袖をしっかりと握って離さない。

「コラ葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ」
「んう……。帰っちゃ……。いやです……」

少しだけ眼を開きそう言い、シャツを更に強く握りしめた……。

「葉月、あんまり我儘言うとお姉ちゃん怒るからね」

「……お姉ちゃんのはわからないです……」

「え？ 何が？」

「……お姉ちゃんは、いつも一緒にいられるからいいです……。でも、葉月はこういう時しか、バカなお兄ちゃんと一緒にいられないです……。」

「「「「……。」「」」」」

聞き分けの良い子供がほんの少し漏らした本音……
子供らしいほんの少しの我儘……

「あのさ、美波。僕もう少しだけここで勉強して行っていいかな？」

「え？」

「オレからも頼むよ、島田」

「だな。今のチビツ子の台詞を聞いたら明久は残るべきだよな」

「もてる男はつらいのう」

「……………人気者」

「……………それじゃあ、悪いけどもう少し葉月に付き合っただけてくれる？」

「うん」

島田の許可も降りたし、オレたちは邪魔にならないようにさっさと退散しますか。

「あ、あのっ、それなら私も……！」

「それはダメだよ。女の子があまり遅い時間まで出歩いていると危ないからね。雄二にでも送ってもらって早く帰らないと……」

「でも心配なんです。イロイロと……」

「心配なのはわかるけど」

「いいえ！ 明久くんは私が何に対して心配しているのかわかってません！」

「????」

ああ、『何を言っているのかわからない』って面してるな……。

けど今回ばかりは明久の言う通りだ。
危ないし、遅くなりすぎると親も心配するだろうから早く帰るべきだ。

「あのやっぱり私も！」

「いくら言ってもダメなものはダメだからね、姫路さん」

「……あう……」

「姫路、諦める。こうなると明久は何が何でも考えを曲げないぞ」

「うう……。そんなあ……」

「それじゃあ、島田ありがとうな」

「大勢で押し掛けて悪かったのう」

「……ありがとう」

「お邪魔しましたー」

「美波ちゃん、ありがとうございました」

.....

この日の勉強会が終わり、家に帰る……

しかしなんだって島田の部屋にオランウータンの写真が飾ってあったんだろ……？

後日、『島田美波の熱愛のお相手はオランウータンだ』と言つ噂が
まことしやかに囁かれることになるが、それはまた別のお話……

第64話 ホームアローン イン 烏丸家！

特別英語試験

こちらでは私、吉井玲が学校のテストとは異なる形式の問題を出していきたいと思います。

正解が一つに限られる画一的なものではなく、もっと幅広い回答が可能な出題形式です。

決して個人的な調査を目的にしている訳ではありませんが、質問には正直に答えてください。

問 あなたの方までの異性との付き合い経験について、英語で答えてください。

姫路瑞希の答え

『I have no associated with a male.』

吉井玲のコメント

瑞希さんは今まで男性とお手伝いしたことがないのですね？ それは大変結構なことだと思います。学生の本分は勉強ですからね。尚、異性と付き合い方という意味で用いる場合の“associated”は主に否定的な意味を伴います。間違いではありませんが、“romantic overture（男女交際）”等の単語を用いると更に良いかと思いません。

坂本雄二の答え

『I was kissed while sleeping.』

吉井玲のコメント

英文としては正解ですが、内容が少々気になります。寝ている間に接吻とは最近の高校生は進んでいるのですね。我が家の愚弟がそのような真似をしていないか、あの子の回答がとても気になります。

烏丸大貴の答え

『I have associated only once with the woman in the past.』

吉井玲のコメント

その話をこの後、別室で根ほり葉ほり聞かせて頂きます。覚悟してくださいね。

吉井明久の答え

『英作文ができませんでした。』

吉井玲のコメント

.....。

.....

「で、結局昨日は姫路はあのまましばらく明久を待っていた訳か...

.....」

「大丈夫だったの?」

「それが..... 凄く怒られてしまいました.....。おかげで週末までの間学校以外の外出を禁止されちゃって.....」

「あらら、それは可哀そうに」

「まあ、けど親の気持ちも分からはないけどな」

大事な娘が二日連続で遅くまで外出していると心中穏やかじゃないだろう。

姫路の家は厳格そうだし、今回のペナルティでも軽いくらいだ。

「自業自得だろ。全く電話くらい出てやれば姫路の親だって安心しただろうに」

「そうですね……。反省しています……」

「でも雄二は大丈夫だったの？」

「何がだ？」

「夜遅くまで女の子二人と出かけていた上に昨日は途中まで姫路と二人きり……」

「霧島さんが起こる理由としては十分だと思っただけ……」
「……………」

雄二は『やつてもうた!』って顔で固まっている。

そして雄二は気付いていないようだが、背後から優子と霧島が近づいてきているのが見える……。今の会話も確実に聞かれただろう……。

坂本雄二君のご冥福をお祈りします……。

「ま、まあ、バレなければ大丈夫だろ。ってどうした、ヒロ? 何で拜んでいるんだ?」

「…………雄二。今の話向こうで詳しく聞かせて」

「まあ、待て翔子。お前は勘違いをしている。お前の考えているような事は何も起きていないし、そもそもお前に俺が責められる謂れはないと」

「…………うん。言い訳は向こうでゆっくりと聞かせてもらう」

雄二&霧島、退場……

成仏しろよ、雄二……

P i P i P i P i P i P i

「明久、携帯が鳴ってる」

「おっと……」

携帯を開け、明久が号泣しながら黙ってオレに画面を見せた。
とその画面には

……
……
……
FROM 坂本雄二 【たすてけ】
……
……
……

あれ？ おかしいな……。

視界が霞んでいてよく見えないぞ？

「おはよう、ヒロ。泣いてるの？ 何か辛い事があったの？」

「泣いてない……。これは心の汗だ……。」

「そ、そう……。」

「……吉井」

「うわっ！ 霧島さん!？」

「……雄二から聞いた。勉強に困ってる？」

「う、うん。そうなんだよ」

「……それなら私も協力する」

「え？ 協力って？」

「週末にみんなで泊まりに来るといい」

「霧島さん、いいのっ？」

「（コクリ）……吉井にはいつかお礼がしたいと思っていた」

「皆でと言う事はワシらもいいのかのう？」

「……勿論」

「代表、アタシもいい？」

「（コクリ）……優子も大歓迎」

「週末ってことはウチも行けそうだし、参加させてもらおうかな？」

瑞希はどう？」

「た、たぶん大丈夫です。ダメでも、何とか両親を説得します！」

「……参加する」

「お世話になります。ところで奥さん、雄二は大丈夫なのか？」

「……大丈夫、その頃には退院しているはず」

「そっか。それは良かった」

「た、退院って……？」

週末は霧島の家で泊まり込みで勉強することになった。

明久にとっては渡りに船と言ったところだろう。

.....

「それはそうと今日の勉強会は厳しそうじゃな。」

「瑞希も坂本もいないとなると教えてくれる人って烏丸だけだもんね」

「何？ 秀吉、アンタ達勉強会やってるの？ それじゃあアタシも混ぜてくれる？」

「良いのか？ 姉上？」

「いいわよ、別に……。あんたこのまま行くと本当に留年しちゃうそうだし……そうならアタシも困るし……」

「やった！ ありがとう、木下さん！ あ……、けど何処でやる……」

「……？ 僕の家はちよっと……」

「ウチの家も……」

「……………。(フルフル)」

「ワシの家で」

「秀吉……?」

「ワシの家も無理じゃな……」

「オレの家もやめておいた方が」

「ヒロの家でやればいいじゃない」

「ちよっ！ 優子！ 何言ってるの？ 何言っちゃってるの!?!」

オレの家がどれだけ危ないか分かったるはずなのに何を言っちゃってるんだ、この子は……!?!

「ヒロはアレの心配をしているんだろうけど、大丈夫よ」

「その大丈夫の根拠は!?!」

「被害に遭うのはあんた一人だから」

オレは一体この子のどこが好きなんだろう……?

ときどき自分でも分からなくなるよ……。

結局優子に押し切られるような形でオレの家で勉強会をすることになった……。

『惚れた方が負け』と言う言葉はその通りだとオレはこの時ほど実感したことはない……。

……………

「着いたぞ」

「すごい……。」

「大きい……。」

「圧巻じゃな……。」

「……立派」

オレの家（正確にはジジイの家）を見上げてそれぞれが感嘆の言葉を漏らす……。

確かに一般的な家に比べるとジジイの家は豪邸と言う言葉がぴったりに合う家だ。

センスの良い和風の家で中には道場までであると来たものだ。

これでブービートラップさえ仕掛けてなかったら最高の環境なんだけどな……。

「そじゃあお邪魔しま」

「待て、明久……」

明久を制止して、オレはポケットの中から硬貨を取り出し、投げつけてドアノブに当てた。

すると

バチッ！

火花を散らして硬貨は弾かれた。

どうやらドアノブに電流を流しているらしい……。

「ヒ、ヒロあれは何……？」

「うちのジジイお手製のブービートラップだ。全くホームアローンみたいな真似しやがって……。お前らも迂闊にその辺を動かすなよ。下手に動くと……死ぬぞ……！」

一同（優子以外）が顔を青くしながら頷いたのを確認し、オレはトラップの解除にかかる。

絶縁性の高いゴム手袋を嵌め、ドアノブに触れ電源を切る……。これくらいで動じなくなってきたている自分が怖い……。

慣れって恐ろしいなあ……。

ドアを開くときも油断は禁物だ。

そつとドアを開けると……やっぱり糸があった……。しかも頑丈さと隠密性を兼ね揃えた釣り糸を使っている……。

予想通り！ 上を見上げると金ドライってか？

そう思つて頭上を見上げると、仕掛けてあつたのは 『赤いレンガ』 だった……。

なんだか今日のトラップは殺傷力が強すぎないか？ あんな物当たつたら病院送りだぞ！

そう考えながら仕掛けてあつた釣り糸をカッターナイフで切断し、すべてのトラップを解除した……。

ガラーン！

と思つたら上から金ドライが落ちてきて頭に直撃した……。

まさか！？ 糸を切つたら落ちて来るようになっていたのか！？

殺傷力のやたらと強いトラップも解除した後の油断を大きくするための布石……！

本命はこつちだったのか！？

いきなりの予期せぬダメージを食らい、足もとがふら付く……。

そしてふらついたまま、何の準備もなく玄関に足を踏み入れてしまい、仕掛けてあつた落とし穴に落ちた……。

.....

「痛ててっ！ 優子、もっと優しく頼む！」

「我慢しなさい」

落とし穴に落ちた後、腕を派手に擦り剥いたので優子に手当をしてもらっていた。

ジジイの方は優子のお仕置きを食らい、向こうの部屋で伸びている……。

「はい、終わり」

「ああ、ありがとう」

手当ても終わったようなので勉強の準備に取り掛かる。

「それにしても何で家にブービートラップが仕掛けてあるの？」

「ジジイの趣味だ」

「か、烏丸のおじいさんって一体……」

「………気の毒」

「じゃな……。」

「その憐れむような視線はやめてくれ。マジでへこんできた……。」

「ところでヒロ、ご両親は何処におるのじゃ？」

「あ、それ僕も気になる！」

「秀吉、吉井君、その話は……」

「大丈夫だよ、優子。オレは大丈夫だから……」

そう言えば優子はオレの家庭の事情を知ってるんだったよな。

気遣ってくれてるのが良くわかる。

やっぱりこの子はいい子だな……。

けど大丈夫だ。以前は思い出すだけでドス黒い感情が腹の底から湧きあがってきたけど、それを吹っ切る事の出来た今は違う……。

だから話そう　オレのすべてを……

「オレは愛人の子でさ、母親はオレの幼い頃に亡くなった。父親とは引き取られる時に一回会ったきりでどっちも顔をよく覚えていない。8歳くらいまで姉夫婦に育てられてきたけど、その姉さんも事故で……。それで今はジジイと姉さんの子供の静馬と一緒に暮らしてる。一応姉さん以外の兄弟は腹違いの兄貴と同年の妹いるらしいけど面識がない。」

「……………」

予想はしていたけど空気が重い……。優子にいたっては泣きそうな顔をしている。

まいったな……。そんな顔をさせたい訳じゃ無いのに……。

「そんな顔をするなよ。オレはもう吹っ切ってる……。じゃなきゃこんな話する訳無いだろ？」

「でも……」

「それにな、最近思うんだ……。」

「？ 何を？」

「こつという暗い過去があった方が女の子にモテるんじゃないか、と！」

「ぼ、僕の心配を返せーっ！」

「そうとも！ 二枚目には暗い過去が必要不可欠！ その条件を満たした今！ オレは夢のモテモテ王国の住人に！？」

「無理ね……」

「無理じゃな……」

「……………無理」

「まさかのダメだし！？」

「だって烏丸って『いい人』だし……」

「どこからどう見ても三枚目……良く見ても2・7枚目と言ったと

「ころじゃの」

「……………モテる事はまず無い」

「クツ……………！ 言ってくれ！ 明久、何とか言ってくれ！」

「ようこそ、ヒロ！ 三枚目カテゴリーに！ 歓迎するよ！」

「歓迎するな！ こうなったら……………！ 優子、何とか言ってくれ」

「ってどうしたんだ？ 何で無言でオレの首に手をかける？ 待」

「て待って待って！ ちょ……………！ 入……………てる……………！ 頸……………動脈……………」

「に指が……………入……………る……………！」

「モテモテ王国って何かしら、ヒロ？ じっくり話を聞かせてね」

「……………すごくいい笑顔で首を絞められた……………」。

「話を聞くと言っているのに全く聞く気がない様に見えるのはオレだけか？」

「落ちていく意識の中でオレは暢気にそんな事を考えていた……………」。

……………

「オレは明久とムツツリー二を見るから優子は島田と秀吉を頼む。」

「わかったわ」

「……………木下姉が良かった」

「バカめ、優子にお前みたいな奇跡のエロスを担当させると思ったか？」

「……………エロになんて興味がない」

「嘘つけ」

「……………興味がないんだ！」

「問題です。女性は何を迎えることで第二性徴を迎え特有の体つきになるのでしょうか？」

「……………初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では生理の事を月経、初潮の事を初経と言う。初潮年齢は体重と密接な

関係があり、体重が43kgに達する頃に初潮をみるものも多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などにも影響され、なんでもない。」

「やっぱりお前は人類史上最高のエロスだよ……。」

「……………ッ！（ブンブンブン）」

「それで明久は普段どんな試験対策をしてるんだ？」

「ふふふ……！ よく聞いてくれたね……！！」

「なんだ？ 自信满满だな？」

明久はポケットからゆっくりと3本の鉛筆を取り出した。

「数学はこのストライカーシグマV！ 英語はプロブレムブレイカ

ー！ 歴史はシャイニングアンサー！ 正解率高いんだ！」

「……………。」

ポキッ！（鉛筆をへし折る音）

ポイツ！（折った鉛筆を捨てる音）

「僕の秘密兵器がーっ！ 何するんだよ、ヒロ！」

「さて始めようか。お前は世界史の暗記を中心に」

「無視するな！」

「やかましい！ オレやお前みたいな万年ピンボーくじ引きが確率論に頼ったところで上手くいく筈ないだろ！ これ以上バカな事を

抜かすなら折った鉛筆をテメエのケツに突っ込むぞ！」

「なんて事を言うんだよ、このバカ！」

「バカって言う方がバカだ！ この大バカ！」

「なんだと超バカ！」

「うるせえ、ウルトラバカ！」

「グレートバカ！」

「ミラクルバカ！」

「いい加減にしなさい！」

オレと明久は優子と島田に仲良く拳骨を落とされました……。

第65話 霧島邸の快適無敵な週末

明久達がオレの家に勉強しに通うこと三日……

ムツツリーニの方は微妙だが、明久の方は何とか世界史をDクラスの中堅レベルまで引き上げることができた。このまま順調に続けていけば今回の試験で減点分を取り戻すことは十分可能だとオレは踏んでいる。

そしてあつという間に土曜日がやってきた。

オレは乗ってきたバイクを庭に停めさせてもらい、霧島の家玄関に佇んでいる……。

そして思った事はただ一つ……

デカツ！　なんてデカイ家なんだ！　ジジイの家の3倍位はあるんじゃないか！？

霧島ってやっぱりお嬢だったんだなあ……。

「……いらっしやい、烏丸」

「あ、ああ。お世話になります。あ、これつまらない物だけど……」

そう言っただけ昨日焼いたパウンドケーキを霧島に手土産として渡す。

正直言っただけ今回のパウンドケーキは自作だ。

出来る限り砂糖による甘みを抑えて、ブランデーのまろやかな甘みを強調した。

そして中に入れてあるドライフルーツは三ヶ月間ラム酒の中にじっくりと漬けたんだ取って置きだ。味にうるさいジジイにもお墨付きを貰った。

優子の喜ぶ顔が楽しみだ……。
長い廊下を霧島の後について歩きながら辺りを見回す。

「しかし部屋が多いなあ……………」

「……………用途別」

「へえ、あれは？」

「……………書斎」

「あれは？」

「……………シアタールーム」

「そう言えば、この前雄二が言っていた『雄二専用の部屋』ってどれの事？」

後でその部屋にドッキリを仕掛けてやるっ……………。

「……………あれ」

霧島の指をさす方向にある部屋に眼を向けるとそこには鉄格子のついたどう見ても牢屋にしか見えない部屋があった……………。

「そ、そうか。いい趣味してるな……………。雄二も喜ぶだろうっよ……………」

「（コクリ）……………泣いて大喜びしてた」

泣いて嫌がってたんじゃないのか？

すまない、雄二……………。

オレが彼女の極端に偏った恋愛の価値観を正すには少しばかり力不足の様だ……………。

無力なオレを許してほしい……………。

「……………着いた。ここが勉強部屋」

そう言つて霧島が部屋の扉を開いた。

「あっ！ ヒロ、やっと来たのね！」

そう言つて優子がトテトテと音を立ててこっちに寄つてきた。

「おはよう、優子。今日は一段と可愛いな」

「ななな何言つてるのよ！？ そう言う事は二人きりの時に……」

冗談を言う様な軽い口調で本音を口にするとう優子は面白いくらい真っ赤になつて慌てふためいてくれた。その様子に顔を綻ばせ、優子の頭を撫でた。

「ちよつ……！ ヒ、ヒロくすぐりたい……。」

気持ちよさそうに眼を細める優子にオレの理性は決壊寸前だ。

これ以上この反応を見ていたら優子にケダモノの如く襲いかかつてしまうか、萌死にしてみつかのどちらかしかないだろう。

どちらにしても変態扱いは免れない……。

さすがに変態扱いされたらたまつたものではないので未練は残るが、撫でている手を引つ込めた。

優子が不満そうにむくれていたので「そんな変な顔をしてたら元に戻らなくなるぞ」と、言つたらすごくいい笑顔で関節を逆に曲げられた……。

最近優子による少し強力なストレッチのおかげで関節が柔らかくなつてきている気がする……。

なんだか複雑な気分だ……。

気を取り直して辺りを見回すともう大体全員揃っていた。

え〜と今来ているのは優子、秀吉、ムツツリーニ、工藤、姫路、

島田か……。

雄二はどうせ逃げられないように霧島に捕獲されているだろうから、残りは明久だけか。

「で、さつきから気になっていたんだけどムツツリー二と工藤は何をしているんだ？」

「愛子と土屋君？ なんでも『第二次性徴を実感した出来事は何か』についてさつきから10分くらい議論してるみたいだけど……」

「へえ、興味深いな。オレも混ぜてもらおうと」

「ヒロ……？」

「するのはまた別の機会にしておこうか！」

あ、危ねえ……！ 危うく殺されてしまうところだった……！

優子とじゃれつくのは嫌いではないが、わざわざ自分から痛い思いをしにいく趣味は無い。

ムツツリー二と工藤の議論には興味深々だが今回は我慢しよう……。

『ムツツリー二君は頭でもの考えすぎだよ！ 「百聞は一見に如かず」って言葉を知らないのっ？』

『……十分なシミュレーションもせずに実戦に挑むなど愚の骨頂』

『そうやって考えてばかりだから、すぐ鼻血を吹いて倒れちゃうんだよー！』

『……何を言われても信念を曲げるつもりはない』

『またそうやって屁理屈を言って……！ この分からず屋っ！（チラッ）』

『……卑怯なっ……！（ブシャアア）』

スゲエッ！ ムツツリー二の鼻から蛇口を全開にしたときの様な量の鼻血がっ……！

毎回思うけどあれでよく生きているよな……。

ハッ……！ そうかつ！ そういうことかつ！

人がエロいのは生命力の強さの表れなのか！

それならムツツリー二のあの生命力の強さも説明できる！

明久や雄二の人並み外れた生命力の強さもあいつらの人並み外れたエロさに比例していると考えれば理に適っている！

また世界の真理に一步近づいた……！

ありがとう、ムツツリー二！ また一つ学ばせてもらったよ……！

あ、いつの間にか明久が来ている。

と、言う事はこれで全員揃ったな。

さっさと勉強の準備を

『今日の姫路さんは死ぬ！』

『えええっ！？』

「なんでやねんっ！」

最近条件反射になりつつあるハリセンを使ったツツコミは日々鋭さを増しているようだ。

よしっ！ 今日もオレのハリセンは絶好調だ！

それはそうと

「おい、明久。なんでそんなノストラダムスも真っ青になるような不吉な予言をしてんだよ。ここは姫路に『いつもよりかわいいね』って、褒めるところだろ？」

「うう……。『今日の姫路さんは可愛くて見ているだけで頭がおかしくなりそうだ』って事を簡略化したら、何故かそうなっちゃったんだ……。」

「それは、また……。絶妙な間違いだな……。」

「あ、あの明久君……。私何か悪い相でも出ているんでしょうか……」

「？」

「…………ゴメン…………。気にしないで…………。ちょっと不測の事態に対処
だけなんだ…………。」

哀れ、明久…………。

白くなって遠い眼をしている…………。

向こうでムツツリー二と工藤の議論がヒートアップしているし、明
久も居た堪れないし、雄二が拘束されて床に転がされてるし問題が
起こらない内にさっさと勉強を始めようか…………。

第65話 霧島邸の快適無敵な週末（後書き）

久しぶりの投稿です。

お待たせしました。

そしてお気に入り200件突破、総合評価600突破ありがとうございます！

支えてくれた皆さんのおかげです！

これからも頑張っていきたいと思しますので応援お願いします！

第66話 ささやかな幸せ……

オレは一心不乱に数学の模擬試験の問題を解いている……。そして次から次へと回答用紙に答えを書き込んでいった……。辺りは騒がしいはずなのに妙に周りの声が遠く感じる……。そんな中シャーペンで紙に書き込む音と時計の針の音がやけに大きく感じられた……。

残り時間はあと1分……。首尾は上々……！

よし！ 今度こそ貰った！

3……2……1……0！

終了を告げるアラームが鳴り響き答え合わせを始める。気なる結果は

烏丸大貴 254点

木下優子 281点

「だーっ！ また負けたあっっ！」

「これでアタシの4連勝ね。やっぱりヒロは図形が足を引っ張ってるわね。」

「図形なんて大っ嫌いだあーっ！」

「ヒロは頭が固すぎるのよ。もっと別の方向から見れば分かりやすいのに……」

「ちえっ……。いいんだよ。オレは文系なんだから数学なんて……。数学なんて……！」

「ハイ、ハイ。腐らないの。少し休憩しよう？」

「クソっ……。！ 次は負けなからなっ！」

「フッフ、望むところよ」

姫路は明久を、雄二と霧島は秀吉と島田を、工藤はムツツリー二の勉強を見ていてくれるのでオレは優子と数学のタイムトライアルの勝負をしていた。

現在の戦績は全敗……。

いくら苦手科目だからといっても一度も勝てないのはさすがに悔しい……！

歴史なら……！ 歴史なら絶対に負けないのに……！

とりあえず休憩になったのでリフレッシュを兼ねて他の連中の様子を見に行く。

まずは姫路と明久からだな。

『明久君、そこは東洋やインドは別々に考えずに何が起こっていたのかっていう覚え方をするといいですよ』

『それぞれの国で？』

『そうです。例えば、紀元前550年頃、中国で孔子と言う人が誕生したとき、インドでも有名な人が誕生しているんですよ』

『「孔子」ってどこかで聞いたことあるような気が……？』

『「儒教」って考え方を創始した人です。明久君の好きな三国志にも大きな影響を与えた人ですね。』

『ああ、そう言えば漫画やゲームで出てきたかも』

『その「儒教」の創始者である孔子が生まれた頃、実はインドでも同じく「ジャイナ教」や「仏教」の創始者が生まれているんですよ』

『仏教の創始者って言う……お釈迦様？』

『はい、正解です。ゴータマ・シッタールタと言う人ですね』

『ジャイナ教って方はわからないや』

『ちょっと難しかったでしょう？ そっちはマハヴィーラという人です』

『うーん、聞いたことが無いなあ……』

『どちらも歴史上では有名な宗教の創始者なので、覚えておいた方がいいと思います』

『ふむふむ……』

『これって面白いと思いませんか、明久君』

『え？ 何が？』

『だってこの長い世界の中で、有名な宗教を作った人がほぼ同時期に3人も生まれてるんですよ』

『あ、確かにそうだね。偶然かな？』

『偶然かも知れませんが、そうじゃないかも知れません。もしかすると、人と言う生物はある程度時間が経つと、同じような思想を持つて神様を信じ始めるのかもしれないね』

『それってすごいなあ……。場所は違っても、人の進化は同じように進んでるってことだよな』

『はい。あるいは……』

『あるいは？』

『もしかしたら本当に神様がこの世界に降り立って、インドや中国を巡って教えを授けたのかもしれないよ？』

『おおつ、なるほど！ そう考えたら、確かに同時期に宗教が生まれたことに説明が付くし……。それにロマンがあるね』

『本当のところはどうだか分からないですけどね。』

なるほど。面白い解釈だ。

こういう自分では考え付かないような新しい解釈があるから歴史は面白い。

そして歴史を紐解けば過去の偉人の様々なサイドストーリーを知る事が出来て実に興味深い。

例えば今回の試験で重要になってくるアレクサンドロス3世は実はランプのKのモデルだとか、両刀使いだっただとか、「私は勝利を盗まない」と言った名言や、死因は遠征中に刺された蚊によるマラリアだったとかの様々な説がある。

今回の事をきっかけに明久も歴史の面白さに気が付いてくれたらオレも嬉しい。

『それじゃあこの括弧の中に何が入るか分かりますか？』
『うん、勿論だよ！ 儒教の創始者は 「孔子」 っと』
『はい、正解です』

姫路は人に物を教えるのが上手いな。意外に教師とかが天職かもしれない……。

『あ、ところで姫路さん』

『はい？』

『今更だけど、その……き、今日はいつもと髪型が違うからどうしたのかなって思ってたの……』

『あつ。こ、これはですね……一応ポニーテールにしたつもり、なんですけど……慣れないから上手く出来なくて……。へ、変ですか……』

『ううん！ 全然変なんかじゃないよ！ 凄く似合ってるよ！』

『そ、そうですか？ 2時間もかけた甲斐がありましたあ……』

『2時間！？』

『これからは毎日こうしてきますね』

健気な子だなあ……。

明久の為にそこまで出来るなんて姫路は心底明久に惚れてるんだろ
うな……。

こういう子には出来れば幸せになって貰いたいものだ……。

『あ、いやっ。その髪型も似合うけど、やっぱりいつもの髪型が一番可愛いと思うよっ！』

『か、可愛いだなんて……。そんな……。明久君てばお上手です……』

『あははは！ 別にお世辞のつもりはないけどね』

『それに明久君の方が私なんかよりよっぽど可愛いです……』
『それは僕にとって全然嬉しく無いセリフだからね!？』

相変わらず仲がいいな、こいつら。

邪魔しちや悪いから雄二たちの様子を見に行こう……。『

霧島がさっきまで一緒に教えていたようだけどいつの間にか何処かへ行ってしまったようだ。

そして島田は明久と姫路の様子が気になる様で、さっきからチラチラと様子を伺っている。

『おい、島田。世界史の方ばかり気にしていないで集中しろ。お前の国語は明久レベルなんだからな。せめて二桁は取れてもらわないと二期の試召戦争の時に困る』

『う……。わ、わかってるわよ! で、でも……世界史の方も自信がなくて……』

『大丈夫だ。お前の世界史は全体から見れば酷いがFクラスから見たら普通だ。それよりも弱点を強化しろ。お前は問題文さえ読めれば即戦力なんだからな』

『う……。ウチは別に畳と卓袱台も嫌いじゃないのに……』

『ワシも同感じゃ。姫路が転校しなくてもいいレベルの設備が維持できれば十分なのじゃから少しくらい手を抜いても……』

『いや、ダメだ! 必ずAクラスに翔子に勝つんだ! そうしな
いといつまで経ってもオレの立場が変わらないからな!』

『勝っても変わらないんじゃないの?』

『その通りじゃ! もう籍を入れるべきじゃ』

『クツ……! テメエら……!』

確かに雄二は霧島以外に本気になれないだろうな。

けど今日のあの部屋を見てしまうと無責任に籍を入れることを勧め

るのは、どうしても躊躇してしまう……。

結局しばらくは現状維持しかないだろうな。

さっさとお互い向き合えばいいのに面倒な奴らだなあ……。

『まあいい！ 次の問題だ！ 【はべりの已然型を用いた例文】を書いてみる』

『『以前食べたケーキはベリーデリシヤスでした』』

『お前らちよつとそこに正座しろ。見る！ お前らの発言の所為で後ろでヒロが笑死にしそうだ！』

は、腹が……痛い……。息が吸えない……。腹筋が痙攣してきている……。

ダメだ……！ これ以上ここにいるとオレは笑いすぎて死んでしまいかもしれない……！

ムツツリー二達のところへ行く……。

『ムツツリー二君、さすがにこの問題はわからないでしょ？』

『……中一で70%。中二で87%。中三で99%』

『なんでそんなことまで知ってるの!?!』

『……一般教養』

『うっ……。正攻法で勝てる気がしなくなってきたよ……。』

『……工藤はまだまだ甘い』

『こ、こうなったら あだね、ムツツリー二君実はボク』

『……?』

『毎日ノーブラなんだよね』

『……ッ!?(ポタポタ)』

『え? それなのにどうして形が崩れないかって? それはね【検閲削除】って感じでマツサージをいつも【検閲削除】ってなるまで
毎晩毎晩』

『……殺す気が……ッ!(ブシユウウウ)』

『殺すだなんて人聞きが悪いなあ。ボクはただ出血多量でテストで』

調子を出せないといいのになんて考えてないし』

『……………この程度のハンデなんてどうと言う事はない』

『ふうん、そんなこと言うんだ』

『……………お前には負けない』

『そこまで言うのなら遠慮なく。それでさっきの続きだけど』

【検閲削除】を体が熱くなるまでやったら、最後は【検閲削除】を使

つて【検閲削除】を

『……………死んで……………たまるか……………！（ダバダバ）』

ムツツリー二の鼻からおびただしい量の血が流れ落ちる……………。

つていうかお前ら人の家を汚すなよ……………。

ああ、高級家具に血が付いてる……………！

その手の家具は掃除する手順が厳密に決まっっていて掃除が面倒なんだぞ！

掃除する人の身にもなれっつてんだ！

「……………そろそろ夕食だから、別の部屋に来て」

「お？ もうそんな時間か……………」

時計を見たら6時を回っていた。

優子へのリベンジは夕食の後だ……………。

……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………

霧島の家晩飯を見て一同唾然とした……………。

す、凄い……………！

世界三大珍味に高級そうな食事のオンパレード！

そして何より

「ど、どうしたの、ヒロ？ 何で目頭を押さえて上を向いてるの？」
「いや、ただ何もしていないのに晩飯が出てくる喜びについて……」
「所帯臭いわね……」
「現実的と言ってくれ……」

優子の指摘も分からなくはない。

オレの幸せが一般高校生の幸せとかけ離れてる事くらい自覚しているが、オレの家ではこれが結構切実な問題だったりする……。なぜならオレ以外に家事をこなせる人間がいないからである。お手伝いさんをジジイが雇ったことがあるが皆ジジイの食の好みの細かさとセクハラで長く続いた試しが無い……。本当になんとかしないとイケないよな……。

.....

「へえ、霧島はひとりで暮らしてるのか？」

「（コクリ）……私だけ」

「翔子の家はそれぞれがみんな自由に暮らしてるからな」

「……だから気兼ねしなくていい」

「それなら家で雄二といちゃつき放題だな」

「お、おい！ 何言ってる」

「（コクリ）……週末はいつも二人きり」

「しょ、翔子待て！ ヒロが悪い顔をしている！ 何か企んでるぞ、コイツ！」

「ヤダなあ。企んでないって。強いて言うなら雄二の優雅な週末をFFF団にチクったらどうなるか見てみたいなんて思ってるだけだっつて」

「それを一般的には企んでいるというんだ！」

「ほらほら、雄二。さっさと食わないとなくなってしまうぞ」

「人の話を聞けえッ！」

雄二をからかいながら箸を進める。
賑やかで楽しい食卓だ。

雄二の飲み物だけ毒々しいピンク色だったがその辺は気にしない方向で……

「……雄二、勉強の進み具合はどう？」

「おう、順調だ！ 今度の試験ではお前を追い越してしまうかもな！
！ そうなれば俺も晴れて自由の身だ！」

あゝあ、調子に乗ってるな。そのうち痛い目見るぞ、コレは……

「……そう。……じゃあ勝負する？ 雄二がどの程度出来るようになったか見てあげる」

「ずいぶん上から目線でものを言ってくれるじゃねえか」

「……実際に私の方が上だから」

「クツ……！ 上等だ！ 勝負でも何でもしてやろっじゃねえか！
お前に本当の実力の違いを見せてやる！」

あらら……。あっさり受けてしまったな……。
乗せられているとしても、いい加減学習しろよ……。

霧島の事だから絶対に落とし穴が仕掛けてあるぞ。きっとそこらじゆうにいくつも、いくつも……

「……わかった。そこまで言うのなら今回の出題範囲の簡単な復習
テストで勝負」

「おうよ！ 今までの俺と思うなよ！」

「……それで雄二が負けたら今夜私と一緒に寝る」

「は？」

やっぱり落とし穴があったか……。
まあ、けど……あんな美人と添い寝してもらえるなんて羨ましい……。
……。
いや……、それを通り越して……妬ましい……！

「霧島さん。ゴメン。杏仁豆腐が食べたいから包丁くれないかな？
日本刀でもいいけど」

「……今持ってくる」
「翔子、待て！ 今このバカに刃物を渡すと俺の命に関わる！」

明久が先駆けて雄二を抹殺しようとするが残念ながら不発……
敵（雄二）は中々手強い様だ。
鬼のお面をかぶり、包丁を砥石で念入りに研ぎながら雄二をどう暗殺するか考えを巡らせる……。

「ヒロ？ その包丁はどこから持ってきたのじゃ？」

「バカ者、これは出刃包丁だ。人をかつ捌くのに最適なんだぞ」

「……その般若面はどこから？」

「バカ者、これはナマハゲだ。雄二みたいな『悪い子』をお仕置きする鬼なんだぞ」

どこから出したかは企業秘密だ。

これぞオレの100の特技の1つ！

【どこでも処刑道具お取り寄せ】だ！

「待て！ お前ら全員眼が怖いぞ！」

「……代わりに雄二が勝つたら吉井と寝る事を許してあげる」

「驚くほどオレにメリットがねえぞ！？」

「何をバカな事を言っているんだ！ オレだったら絶対に0点を取

りに行くというのに！」

「ナマハゲの面をかぶって出刃包丁を持ちながら俺の背後に回るな！ 本気で怖いぞ！」

「いいな。そう言うの面白そうだな。ボクもやりたいな」

「雄二の処刑を、か？ 処刑道具を貸そうか？」

「違うでしょ！ っていうかやめなさい！」

優子に怒られたので処刑セットを渋々しまっ……。

「……愛子も勝負する？」

「うん。それもいいんだけど……。どうせならそのテストを皆で受けてその順位で部屋割を決めようよ」

「よしっ！ 望むところ」

「ダメですっ！ 明久君にはそういう事はまだ早すぎます！」

明久がその話を受けようとした途端に姫路の顔色が変わり、申し出を断わる。

「でも保健体育の試験の為に吉井君がボクと実践を経験しておくのはイイコトだと思うよ」

「ダメですっ！ そんなのいけませんっ！」

「保健体育のお勉強、ボクが吉井君に教えてあげたいな」

「ダメったらダメですっ！ 工藤さんがそんなことしようとするのなら 私が明久君と一緒に寝ます！」

「ええええええええ！？ 姫路さん何言ってるの！？」

「あはははっ！ 姫路は大胆だなあ」

「み、瑞希！ 何言ってるのよ！？ そんなのダメに決まってるでしょ！？」

「でも美波ちゃんも明久君のHな本を見たならわかるはずですよ！ 明久君だって男の子なんですっ！ Hな事に興味津々なんです！」

工藤さんと一緒に寝たら大変なんです！」

「確かに、アキの持っていた本の中の4冊目にはショートカットの
子も載っていたけど……」

うわぁ……、明久のトップシークレットが駄々漏れだぁ……。

「ですから私が明久君を守るために一緒に寝ますっ！」

「そ、そうねっ！ アキの為に一緒に寝てあげないとねっ！」

「姫路さんに美波、少し落ち着きなよ。そんな申し出受けなければ
」

「うーん、姫路さんには流石に勝てないか……。それじゃあ烏丸君、
一緒に寝ようか？」

「うえええっ!?!」

「勝負よ！ 愛子！」

「って、うおい！ 優子さん!? 何言ってるの？ 何言っちゃっ
てるの!?!」

「止めないで、ヒロ！ 女にはやらなければいけない時というのが
あるのよっ!」

「それはどう考えても今じゃないと思うぞ！」

「いやいや、お主らも姉上も落ち着くのじゃ！ この話を受けなけ
ればよいだけの」

「勝負です、工藤さん！ 私明久君の為に負けません！」

「そうね！ アキの為にもうチと一緒に寝るとするわ！」

「愛子、アタシはあなたに勝つわ！ 勝ってヒロを護る！」

「話……じゃと……思うんじゃないが……」

唯一冷静さを保っていた常識人の意見は見事にスルーされてしまっ
た……。

冷静さを保つ事が生き残るためには一番重要だという事を実感させ
られたよ……。

「……じゃあまだ開けてない新品の模擬試験を持つてくる」

「待て、翔子！俺はまだ承諾していないぞ！」

「……決定事項。さつき雄二は勝負するって言った。反対意見は認めない」

「ぐっ……！そ、それは……そうだが……！」

オレたちとはばっちりだあ……。

雄二が何かを考えた後、霧島に見えないように毒々しいピンクの液体の入ったコップを傾かせジュースを零した……。

「つとすまん！翔子！服にかからなかったか？」

「……大丈夫」

「いや、大丈夫じゃない。お前からは見えないけど服の裾の辺りに少しかかったみたいだ」

「……それは困るかも」

「悪い。オレの不注意で」

「……あの薬は繊維を溶かすから」

「待て！お前はオレに何を飲ませようとしたんだ！？」

雄二のコップに入ったピンク色の液体は床の絨毯に零れ、煙を出している……。

ポ、ポイズンピンク……！？

「……着替えてくる」

「それもいいが……どうせなら少し早いが先に風呂にしないか？腹ごなしも兼ねてな」

「……わかった。先にお風呂にする」

「模擬試験はその後だな」

「……うん」

何か企んでるな、コイツ……
大方模擬試験の問題の解答を盗み出すとかそんな口クでもないこと
だろうけど、今回はオレにとっても死活問題だから協力を惜しむつ
もりはない……。

「さて、行くとしますか……」

第67話 潜入、そして……

「さて、行くとしますか……。」

「了解、覗きだね」

「……………任せておけ」

「もしもしチケットピアですか？ 楽園へのチケットを5枚お願いします。 ってちつがーう！ そうじゃないだろ！」

「お主らはどこまでバカなのじゃ……………？」

「俺たちが行くこうとしているのは翔子の部屋だ」

「え？ 何で？」

「決まってる！ 模擬試験の解答を盗み出すためだ！」

「わくお、卑劣な事を臆面もなく堂々と言い放ったよ」

雄二の転職は盗人か詐欺師に違いない……………。

「けど僕らは問題を盗み出す必要はないんだけど……………？」

「（コクリ）……………それより覗きが大事」

「いいか、明久。 お前の姉責は何を禁止していた？」

「？ ゲームは1日30分 ？ 不純異性交遊の禁止 　　　　ってヤバいっ！ すっかり忘れた！」

玲さんに知られれば明久は即死だな……………。

「でもバレなければ……………」

「協力しなければ俺がバラす」

「外道！ この外道！」

「それにムツリー二。 お前も危険だぞ」

「……………なぜ？」

「出血多量で死ぬ。確実に……………！」

「……………このオレが死を恐れるとでも？」

「ムツツリー二、命は大事に、な……………？」

「予想されるテストの順位を考える。？翔子？姫路？ヒロ、

工藤、木下姉の誰か」

「霧島が雄二、姫路が明久、ヒロが姉上となると工藤は誰を選ぶかのう……………？」

「工藤はムツツリー二を選ぶだろうな」

「……………まさか」

「さっきの言い争いもある。ムツツリー二を失血死させて、保体の王者を奪うつもりじゃないか？」

「（ギリッ）……………つくづく卑怯な……………！」

「待て、なんでオレが優子を選ぶことが決定してるんだ！？」

「姉上では不満なのかのう……………？」

「違う、違う。コン【検閲削除】ムを持ってきてないからそういう事は出来ないんだよ」

「…………………………」

「まあ、それは半分冗談として」

「真顔で冗談言わないでよ」

「と言うか半分は本気なのかのう……………？」

「……………ヒロはムツツリスケベ」

「ハイ、そこシャラップ！さすがにいくらなんでも他人さんの家で行為に及ぶのは人としてどうかと思っただな」

『優子と一緒に寝れる』という事はオレにとっては凄く魅力的だ……………。

しかし……………！ そんな事をしてしまったらオレの理性が朝まで保つかどうか……………！

【自分で責任の取れない事】をやるのはオレの信条に反する。

「協力してくれるな？」

「わかったよ。協力するよ」

「勿論」

「……………やむを得ない」

「ワシも協力しよう」

「秀吉まで？」

「ワシも色々複雑での中……………。女子と同衾して何もなければワシは完全に女扱いじゃろうし、何かあれば問題になる。これほど割に合わん状況はあるまい……………」

「なんと言うか……………気の毒だな……………」

「よし。そうと決まれば行動開始だ。翔子の口ぶりから察するにテスト問題はあいつの部屋にある。早速忍び込むぞ！」

「……………了解」

しかし女子の部屋に侵入か……………。緊張するな……………。

……………

『霧島さん。お風呂はどんな感じなんですか？』

『……………大浴場と露天風呂がある』

『す、すごいわね。旅館みたい』

『楽しみですね』

『ボクも楽しみだよ。温泉も姫ちゃんのコレを直に見るのもね』

『きゃっ！ どこを触ってるんですか工藤さんっ！』

『ちよっ……………！ 愛子、やめなさいっ！』

『そんなこと言って、優子だって興味深々のくせに』
ホント大きいよね。何が入ってるんだろ？』

『……羨ましい』

『やつ……！ き、霧島さんまで……！』

『大きすぎて不公平よね……』

『ホントに……。アタシもこれぐらいあれば……』

『そうね、アキだって……。……注射器で吸い取る事とか出来ないかしら……？』

『み、美波ちゃん、木下さん！？ 眼がとっても怖いですよ！？』

.....

さっきの魅惑の会話の誘惑に負け明久とムツツリーニがフラフラと女性陣の後についていこうとしていた。

オレは明久を、雄二はムツツリーニをの首根っこを引っ掴み制止していた。

「止めないで、ヒロ！ もう何もかもかなぐり捨てて姫路さんたちについていきたいんだ！」

「……………同意！」

「お前らの理性は紙風船か！？ この間の合宿で懲りたんじゃなかったのか！？」

「今回はあの時のような失敗はしない！ 停学なんて食らわないようにうまくやるさ！ あえてもう一度言おう！ 僕は、純粹に欲望の為に女子風呂を覗きたい！」

「アホな事を声高に叫んでんじゃねえっ！」

「落ち着けバカ共。あの時の事をよく思い出せ」

「誰がなんと言おうとこれだけは譲れないんだ！」

「いや、そこは譲つとけよ！」

「なら言い方を変えよう。あの時のババアの裸をよく思い出せ」

「……………（ケプツ）」

雄二の発言にオレたち三人はさつき食ったばかりの晩飯が喉元までリバースしかけた……。これが精神汚染と言う奴か……。出来れば明久とムツツリー二にだけ聞かせてほしかった。もしくはオレの耳を塞いでから言っただけ欲しかった……。

「覗きつて良くないよね……。見る方にも、見られる方にも……」
「…………… 犯罪行為良くない」
「わかつてもらえて何よりだ」

ムツツリー二が頻繁にやっている盗撮、盗聴も十分犯罪行為だからな？
まあ、オレもムツツリ商会で片棒を担いでる様なものだから指摘はしないけどさ……。

「よし、中に入るぞ」
「あれ？ 開かないよ？」

明久がドアノブを捻るが、扉は一向に開かない。

「カギがかかっておるようじゃの」
「自分の家で？ うーん……。大事なものでもしまってるのかな？」

「霧島だつて年頃の女の子だ。自分の部屋にカギくらいかけたいだらうよ」

「そんなものかな？」

「そんなものだろ？ よく知らんが……」

「ムツツリー二いけるか？」

「…………… 30秒くれ」

ムツツリーニが鍵穴にピッキング用の道具を突っ込むこと30秒……。
霧島の部屋の鍵は開いた……。

盗人技術に近い物があるのでは？　と思うのはオレだけだろうか？
他の連中はこの状況を簡単に受け入れてしまっている……。
やっぱり長い間つるんでいる年季の差と言う物なのだろうか……？

「これはまた立派な部屋じゃな」

「ひ、広いね……」

「手分けして探そう」

「そうだな」

三十畳以上の大きさがある部屋をそれぞれ手分けして探す。

うーん、女の子の部屋を家探しなんて罪悪感が……

「(ブバァッ)……………ッー!!」

「うわっ！　どうした、ムツツリーニ!？」

「……………ブービートラップが……………!!」

「トラップ!?　まさかっ!?!　この部屋にトラップの痕跡は見当たらないぞ!?!」

まさかうちのジジイよりトラップを仕掛けるのが上手いなんて事はないよな!?!

もしそうならオレたちの全滅は必至だ……………!
姿勢を低くして辺りを警戒する……………。

何度確認してもこの部屋にトラップを仕掛けた痕跡は見つからない……………。

更に警戒レベルを引き上げる……………。
それでも一向に見つける事が出来ない……………。

クソッ……！ 見つからない……！ 万事休す、か……！？

「………ヒロ、明久気を付ける。工藤愛子はオレたちを皆殺しに……！」

「工藤？ トラップを仕掛けたのは霧島じゃないのか？」

「ヒロ、ムツツリーニが何か握ってる」

ムツツリーニが握っている物体を見るとそれは女物の下着だった……。
まさか……あれがブービートラップの正体？

「……あれで死ぬのはきつとムツツリーニだけだね……。」

「……そうだな。心配して損した気分だ……。」

『あ、あれは……！』

「やれやれ、今度は雄二か……」

「どうしたの、雄二？ 問題でも見つけた？」

「それともまたブービートラップでも出たのか？」

からかうような口調で声をかけるが雄二の様子が変わったので急いで駆け寄った。

「クッ……！ 強化ガラスか！ 何か、何か壊す道具は!？」

「落ち着けっ！ どうしたって言うんだ!？」

「ヒロ、あれ……」

明久が指をさした方向に眼を向けるとそこには分厚いガラスでコーティングされている雄二と霧島の婚姻届があった……。

「ヒロ、明久！ ちょうどいいところに来てくれた！ これを取り出すのを手伝ってくれ！」

「見るからに無理っぽいよ……。それより早く問題を探さないと……」

「バカを言うな！ 俺がこれをどれだけ探していたと……！ 翔子のヤツ弁護士に預けたなんて嘘を教えやがって……！ これがあるから部屋にカギをかけていやがったな……！」

「雄二、気持はわからなくないが落ち着けて。とりあえず婚姻届のある場所は確認できたんだからそれだけでもお前にとつては収穫だろ？ 強化ガラスの壊し方なら今度教えてやるから今は退け。それよりも今はやる事があるだろ？ 婚姻届を取り戻したって今夜同衾する羽目になって既成事実でも作られたらそれこそ“詰み”だぞ？」

「うるさい……！ それより強化ガラスを壊す方法を知っているなら今すぐ教える！」

「ま、待て！ 揺さぶるな！ 振動で気持ち悪い……！」

……ダメだ。完全に頭に血が上ってる……。

強化ガラスを壊す方法って言ったってガスバーナーと水を用意しなくてはならないから今すぐ出来るような方法じゃない。

それを今の雄二に伝えたところでオレを揺さぶってるこの手を放してももらえるかどうか……。

っていうか……ウブッ……！ マジで気持ち悪くなってきた……。

『マズイ！ みんなここは撤退しよう！ 殺戮部隊がここに戻ってくる可能性がある！』

明久の撤退の合図に一同我にかえる。

入口の所を見るとそこには工藤がニコニコと人懐っこい笑みを浮か

べながら立っていた。

ヤッベ……！！ 工藤が此処にいるって事は優子もこの近くにいる可能性が高い！

霧島の部屋に忍び込んだ事が優子にバレる！！オレ死亡！

単純明快で絶対的な公式が頭の中に広がり、オレ達は鼻血を吹いているムツツリー二を引きずって脱兎の如く霧島の部屋から逃げだした……。

『また後でね、5人とも』

工藤の相変わらずの人懐っこい明るい声がやけに遠く感じた……。

「うう……。作戦失敗だよ……。どうしよう……。」

「どうするもこうするも、一度見つかった以上何もできないだろ」

「困った……。ムツツリー二はこのまま寝かせておけば何とかなるかもしれないけど、僕たちは」

「テストで勝つしかなくなったな」

「だよ。雄二が勝って一緒に寝る相手に僕を選べば……。」

「その瞬間俺たちは社会的な死を迎えるだろう……。」

「どっちの選択肢を選んでも“死”あるのみ……か。本格的に拙いんじゃないか？」

「安心するのじゃ。お主らが遊んでおる間にワシが試験問題らしきものを軒並み開封しておいたからのう」

「ナイスだ、秀吉！」

「そうだね！ お風呂に入りながら策を練ろう！」

「そうじゃな」

風呂に入りながら策を練るといふ方向で話がまとまり、明久達は秀吉と別行動をとろうとするが秀吉に呼び止められた。

「お主ら、何故ワシと別行動をとろうとするのじゃ!？」

「え? だってお風呂でしょ?」

「うむ、風呂じゃ」

「だから僕は男湯で秀吉は」

「ワシも男湯じゃ!」

「? 時間をずらして入ろうって事? それなら少し待ってるけど」

「違うのじゃ! わしもお主らと一緒に入るのじゃ!」

「えええええつ!? そんなのダメだよ!」

「何がダメなのじゃ!?! 今日という今日はワシをきちんと男だと認識してもらおうからの! 男同士裸の付き合いじゃ!」

どうやら秀吉の日頃の不満が一気に爆発したようだ。

まあ、確かに秀吉の普段の扱いは男としては不名誉極まりない物だと思つ……。

え? 誤解を解いてやらないのかつて?

以前から散々言ってるのに聞き入れられないからオレはもう諦めた……。

悪く思うな、秀吉……。

ん……? あ、あれは……!

「は、裸……」

「顔を赤らめるではないっ! とにかくお主が何と言おうとワシは男湯に入るからの!」

「わかつたよ。そこまで言つのなら一緒に入る ってどうしたの、

ヒロ? 顔色が悪いよ」

「ハハハ、ハハハハハッ……。あ、明久、後ろ……」

「え? 後ろ?」

「ねえ瑞希。突然だけどアキが水のないプールに飛び込む姿、見てみたくない？」

「奇遇ですね、美波ちゃん。私も明久君が酸素ボンベなしのスキューバダイビングをすることで見なくなっちゃいました」

明久の後ろには夜叉と化した姫路と島田がいた……。

「ま、待て二人共……。何度も言うようだが秀吉は男」

「じゃあ行きましょうか、アキ？ この家だったらプールぐらいありそうだし、20メートルクラスの飛び込み台があるといいわね？」

あははは……。シカトされてくら イヤン、バカン

「その後はお風呂に頭の先まで浸かってきちんと1000まで数えましょうね？ 体の芯まで温まりますよ」

「ゼロが二つばかり多いぞ、姫路！ そんな状態で1000まで数えたら温まるどころか体温が無くなってしまっからっ！」

「そうだよ。二人共冗談がうまいなあ……。そんなことしたら僕は死んでしまうじゃないか……。待って！ どうして僕をそんなに嚴重に縛るの！？ ねえ！ こっちを向いてちゃんと否定してよ！

冗談だよねっ！？ だ、誰か助け いやああああっ！」

「全く戻ってきてみたら木下と一緒に風呂なんて……」

「工藤さんが忘れ物をしてくれてよかったです。後でお礼を言っておかないとダメですね」

明久は二人に引きずられてどこかに連れていかれてしまった……。無事に明日の朝日を拝めるといいんだけど……

『……雄二、婚姻届を盗もうとするなんて許せない』

『待て、翔子！ 話を聞け！ あれは盗難じゃなくて正当な権利……』

…ぎゃあああああ！』

『ムッツリー二君。起きて、起きて』

『……………』

『えいつ（チラッ）』

『……………グゴアッ！（ブバアッ）』

は、ははははは……………。ヤッベエ……………。全員戻ってきてるって事は……………

「ヒロ、代表の部屋に忍び込むなんて何考えてるの……………？」

「やっぱり優子も戻って来てたか……………」

「話は愛子から聞いたわ。じっくりお仕置きしてあげるから 覚

悟しなさい……………！」

「ははは……………。勘弁して、ドクロベー様……………」

「『オシオキダベー』って何やらせるのよ!？」

「いや、まさか乗ってくれるとは思わなかった……………」

「あんた、楽には死ねないわよ……………！」

「サラバッ！」

「アッ……………！ コラ、待ちなさい!!！」

「殺されるとわかっていて止まる奴がいるか！ 絶対逃げ切ってる！」

「待ちなさい!!！」

その後死に物狂いで逃げたが、行動パターンを読まれ先回りされ捕まってしまった、いつもより少し激しいスキップを取る羽目になっ

第68話 野郎共！ ミッション イン ポッシブル！

秀吉のフラインプレーで晩飯の時に言っていたテストは中止となった……。

そして就寝時間……

「木下君。何かあったら大声で叫んでくださいね」

「……これ、防犯ブザーとスタンガン。雄二に何かされそうになったら使って」

「むう……。もはやワシの性別を正しく認識しているのは明久の姉上とヒロと姉上だけになっておるのう……」

「秀吉、今回ばかりは同情するわ……」

「姉上、そう思うなら誤解を解いてくれんかのう？」

「それは無理だろ。もうこいつらの頭の中で秀吉は『秀吉』っていう性別だって完全にインプットされてしまってるからな……」

「なぜこんな事になっているのじゃ……？」

『アキ、わかってると思うけど……』

『わ、わかってる！ 何もしないよ！』

ハア……。秀吉も大変なんだな……。

優子SIDE

「あれ？ 私の髪留めどこに行ったんでしようか？」

「なくしちゃったの？」

「そうかも知れませんが」

「……探すの手伝う」

「そうね、さっきの騒ぎのときかな？」

みんなで姫路さんの髪留めを探そうとしたけど、姫路さんは「明日の朝布団を片付けるときに探すから大丈夫」と言って申し出を断った。

別に気を使わなくていいのに……

「そついえば瑞希っていつもあの髪留めしてるわよね？」

「思い出の品だとか？」

「んっふっふ、ボクの予想だと好きな人からの贈り物だって感じますけど」

「いえ、あれ自体は自分で買ってきた普通の髪留めです」

「あらら、予想がハズレちゃった」

「確かに思い入れはありますけどね」

「え？ なになに？ 面白そう！」

恋バナの気配に敏感に反応した愛子は凄いい勢いで姫路さんに詰め寄った。

けど愛子、その流れに持っていくとあなたにも矛先が向くわよ？

「それはヒミツです。それより私は工藤さんのお話が気になります」

「え？ ボク？」

「そだね。ウチも気になるわ」

「2人とも奇遇ね。アタシも前から気になってたの」

「ふふ……。3人ともそんなにボクのエッチな話が聞きたいのかな？」

「違うわ。そつちじゃなくて……」

「土屋君との関係です」

「ふえっ!？」

「……それは私も気になる」

「さあ、白状しちやいなさい」

「な、何言ってるのさ、4人ともつ。ボクとムツツリー二君がどうこうなんてある訳ないじゃないつ。」

愛子は土屋君との関係を問われると激しく狼狽した。

顔を真っ赤にして首を激しく振って否定する様子はいつもとは違ってなんだか新鮮で可愛かった。

「そうやって否定するところが怪しいですね」

「……いつもの愛子なら笑って受け流す」

「ち、違うつてば！ ボクもムツツリー二君もそんな気全くないよつ」

「そうかしらね？ 意外と男子の部屋でも、土屋が似たような事を言ってるかもしれないわよ？」

「……お泊まり会定番の会話」

それはどうかしら？ ヒ口達の事だからきつとバカな話やエッチな話で盛り上がってるんだと思うけど……

「ほらほら向こうできつと土屋も尋問されてるだろうし、素直に言っちゃいなさい」

「……言えば楽になる」

「話しちゃいましょうよ。ね？」

「だから、あんな頭でつかち、ボクは全然興味ないって言ってるのに！ そ、それより優子だって烏丸君となんだか怪しいじゃない！」

「ええつー！？」

「それもそうですね……」

「……優子にも尋問が必要」

「えつと……！ ア、アタシは……！ その……」

「あんまりのんびりしていると烏丸君を他の人に取られちゃうよ？」

「え？ でも烏丸つて全くモテないつて聞いたんだけど？」

「と・こ・ろ・が！ ボクの調べによるとそうでもないんだよね。確かに同じ学年の女の子には全くモテないけど、1年生と3年生の間で隠れファンが増えてきているって話だよ」

「ええっ！？ そ、そうなの！？」

「……確かに前に清水が最近烏丸の写真が1、3年生の間でよく売れるって言った」

「上級生には『優秀なのどこか天然なところが可愛い』って言われてて、下級生の間では『面倒見がいい』ってことで慕われてるみたい」

「確かに烏丸って面倒見がいいわよね。ウチもアキと喧嘩してもうダメかって思った時に色々と助けてもらったし……」

「いつも全体を見て困った時はさりげなく手助けをしてくれますね」

「……料理が上手いのもポイントが高い」

「確かに今日作ってきてくれたパウンドケーキは絶品でしたしね」

「そうだね。あのまったりとしてしつこくない上品な甘さにボクはもうメロメロだよ」

「合宿が終わってから雰囲気柔らかくなったわよね」

「うんうん。それも人気が出てきた理由みたい」

し、知らなかった……！

ヒロがそんなにも女の子に人気が出てきてたなんて……！

「優子がいららないなら……ボクが貰っちゃおうかな」

「えええ！？」

「いいよね、烏丸君って。容姿も悪くないし、頭もいいし、話易いし……お買い得物件だよな」

「そうね」

「そうですね」

「（コクリ）……」

愛子の言葉に一同頷く……。

「ダ、ダメツ！ 絶対にダメー……ッ！」

「……あんな『お兄さんが居たらな』って」「」「」

「……え？」

思ってもいなかった言葉に目が点になった……。

「人気はあるけど、烏丸君を恋愛対象として認識してる人はまだ少ないみたいだよ。3年生には『弟に欲しい』1年生には『お兄さんに欲しい』って意見がすごく多かったんだ。少数派の意見としては『お嫁さんに欲しい』って言うのがあったけど」

その少数派の人たちの性別が気になるわね……。

「で、でもさっき代表がヒロの写真がよく売れるって！」

「……ハツタリ。優子の反応が可愛くて、つい……」

「だ、代表……っ！」

「優子の本音。しっかり聞かせてもらったよ」

「ちよっ……！ あ、愛子！」

「そうですね。けど、まだまだですよ」

「そうね。夜は長いんだからまだまだ聞かせてもらっつわよ」

「……今後の参考にさせてもらっつ」

「み、みんな眼が怖いわよ……！？」

その後ヒロとの関係をじっくりと尋問された……。

っつ……、恥ずかしい……。

BACKSIDE

「坂本雄二から始まるっ」（雄二のコール）
「コッコイエーッ！」「コッコ」（オレ、明久、秀吉、ムッツリーニの合いの手）

「古今東西っ」

「コッコイエーッ！」「コッコ」

「一部の生徒の間で噂になってる明久の恋人の名前っ」

パンパン 雄二の番

「【久保利光】！」

「ダウト！ それダウト！ 久保君、男だから！」

パンパン ムッツリーニの番

「……………【坂本雄二】」

「嫌だあっ！ 何となく知ってたけど改めて言われると凄く嫌だあっ！」

「俺だつて嫌だ！ ボケッ！」

パンパン 秀吉の番

「え、えつとえつと【ヒロ】じゃ！」

「うおいつ！ コルア！ 秀吉！ 何言ってるの？ 何言っちゃってるの！？」

「嫌だあっ！ 雄二よりはマシだけど、それでも凄く嫌だあっ！」

パンパン オレの番

「【木下秀吉】！」

「ヒ、ヒロ！ 何を言うのじゃ！ ワシは男じゃ！」

「バカめっ！ 因果応報って言葉を知らないのか？」

「……………」

「明久よ！ そこで黙り込んで顔を赤らめられるとワシも困るのじやが！？」

パンパン 明久の番

「し、【島田美波】！」

「……罰ゲーム決定ーッ！」

「どうして！？ 何で久保君や雄二がオーケーなのにこの前キスした美波がアウトなのさ！？ このゲーム訳が分からない！」

「さあ、明久。くじを引くのじゃ」

「安心しろ。お前以外は納得している」

「そうだな。正直オレに罰ゲームが来なければどうでもいい」

「外道！ この外道！」

「はっはっは〜！ もっと褒めて〜！」

明久をやり込めてクジを引かせる。

さて、気になる罰ゲームは

「『女子部屋に潜入して姫路さんの髪留めを戻してくる』って

これ書いた罰ゲームじゃないか！」

「ああ、さつき霧島の部屋で拾ったやつか」

「なんだ、明久。お前は随分ぬるい罰ゲームをじゃないか」

「そう言うお前らは何を書いたんだ？」

「オレは『翔子の部屋から婚姻届を奪取してくる』だ。ちなみに成功するまで何度もトライしてもらおう」

おそらくもう別の場所に移されてると思うけどな……………。

「ワシは『本気女装写真集の撮影』じゃな。ワシの苦しみをもっと味わうべきじゃ」

「……………」『各グッツ用写真の撮影』。ポーズを決めている写真はなかなか撮れない」

おおぅ……………。生々しくもおぞましい罰ゲームだな……………。

「ヒロは何を書いたの？」

「ん〜、『外の池の周りをダッシュで10往復。そのあと10分間その場で休憩してから戻ってくる』だ。」

「なんだ？ お前の罰ゲームも随分とぬるいじゃないか」

「そうじゃな。お主ならもつと『地味にダメージの大きい罰ゲーム』を書いていると思ったんじゃが……………」

「……………」ずいぶんと単純」

「うう……………。それに当たりたかった……………」

「何言ってるんだよ。これは秀吉の言うとおり『地味にダメージの大きい罰ゲーム』だって」

「どうして？」

「蚊っていうのは二酸化炭素を多く排出している人をよく狙うらしいぞっ」

「ま、まさかヒロ！ お前……………！」

「気づいたか、雄二？」

「え？ どういう事？」

「今の時期の水辺は蚊が多いぞ〜。しかもその状態で10分間そこで留まっておかなければならない。となると 相当蚊にたかられるだろうな……………」

ニヤリと悪い笑みを浮かべると明久は青くなって後ずさりをした……………。

「オレの書いた罰ゲームを引かなくて良かったな。」

「ハハ……ハハハハ……。」

「さて。それじゃああいつらが寝静まるまで適当にダベるか」

「そうじゃな。疲れておる様じゃし、小一時間もしたら眠るじゃろ
う」

「……………お題は？」

「『今までの人生で一番恥ずかしかったこと』でどうだ？」

「それじゃあここにトランプがあるし、大富豪をして負けた奴がし
やべるってことでいいか？」

「……オツケー」「」

「よし。カードを配るぞ」

……………

「さて。そろそろいい時間じゃぞ、明久」

「そうはいかないよ！ 僕は『人生で12番目に恥ずかしかった話』
までさせられてるのにヒロ以外は何も話してないなんて不公平だ！」

「つつてもなあ……………」

「お前らの引きが弱すぎるから悪いんだろ」

「……………驚異的な弱さ」

「なんでオレ達のところには強いカードが来ないんだ……………？ 10

以上が全く来なかったぞ……………」

「うう……………。ヒロはまだいいじゃないか……………。4回しかビリになっ
てないんだから……………」

そりゃそうだ。無い知恵振り絞って必死に戦略を立てたんだからな

……………。
今回は勝てなくても負けなければいいから比較的楽だった……………。

あまりに弱いカードしか来ないから、イカサマかと思って途中からカードのシャッフルから配布まですべてオレと明久が担当したのになんでなんだろうな……。

「ゴチャゴチャ言っていないで行くぞ、明久」

「うう……、わかったよ　って雄二も行くの？」

「ああ。翔子の部屋に婚姻届を取り戻しにな……。」
そう言っただけさつきムツツリニから借りていた強化ガラス切断用のカッターを掲げた。

余談だがさつきオレが提案したバーナーと水を使った熱疲労を利用する方法は手間と時間がかかり過ぎるからという理由で却下された。

「雄二、悪い事は言わない。やめておけ」

きつと霧島は雄二が婚姻届を奪取しに来る事を想定してトラップの一つや二つは用意しているだろう……。

「お前が何を言っても俺はやるぞ！　俺の自由の為に！」

「そうか……。それじゃあもう止めないよ……。」

「待ってる、翔子め！　俺がいつもやられっぱなしだと思っくなよ！」

「……………面白いハプニング期待している」

「ハプニングなんて冗談じゃないよ」

「しゃあねえ。オレも手助けしようか」

「いいの？」

「お前だけなら見つかった時確実に死ぬだろうけど、オレなら口八丁でやり過ごせるかもしれないからな。」

「ありがとう、ヒロ！」

「いいって事よ」

こうして漢たちの命をかけたミッシヨンは幕を開けたのだ……。
この中の何人が生き残れるのだろうか……？
漠然とした不安を抱えながら、天を仰ぐ……。
願わくば…… 全員生きて帰れるよう……

第69話 そして、また一步……

(準備はいいか、野郎共?)

(オーケーだよ)

(俺は向こうへ行く。そっちはそっちで上手くやれ)

(オーライ。健闘を祈る)

(見つからないようにね)

明久と雄二がそれぞれ目的の場所へ移動する……。

オレは女性陣が起きないか見張っている。

スウ、スウと規則正しい寝息が聞こえる……。

「ん……！」

不意に誰かが寝返りを打つ音が聞こえ、警戒レベルを高める。

これ以上ここに留まるのは危険すぎる！

明久と眼が合い、アイコンタクトを送る。

(明久、そろそろヤバい。髪留めを適当なところに置いて、撤退するぞ)

(了解。すぐに)

「……明久……君？」

姫路が上体を起こし、明久の方を向いていた……。

すぐ見つからないように布団を死角にして姫路から見えないように体を隠す……。

(ひ、姫路さん？ ここコレは違うんだ！ コレは髪留めが落ち

ていたから元に戻そうと……！　そ、そうだ！　ヒロ！　　って居
ない！？）

見つかった相手が姫路なら明久の方は大丈夫だろう……。
むしろある意味明久にとってはラッキーだ。
ホフク全身をしながら部屋を出る……。
そして聞き耳を立てるデバガメ一匹……。

（あの明久君、髪留めって、私のウサギのやつですか？）

（あ、うん。そうだけど？）

（そう、ですか……。あの明久君……）

（はい！）

（その髪留め、着けてもらえませんか？）

（あ、うん……）

何かゴソゴソとやっているみたいだけど、暗くてよく見えないが、
どうやら明久と姫路はかなり密着している様だ……。

（ダメ、ですか？）

（あ、いや！　勿論つけさせてもらおうよ）

そう言つて明久は再び何かゴソゴソと動く……。
やっと暗闇に目が慣れてきたな……。
眼を凝らしてよく見ると明久が姫路のウサギの髪留めを自分に着け
ていた……。

いや、『着けてほしい』ってそういう意味じゃ無いだろ？

（ど、どう？　似合うかな？）

（あ、いえ。明久君にじゃなくて、私に着けてほしいって意味だっ

たんですけど……)

(「う、ごめん！　そうだよね！　普通男の子はこういつの着けないよね！」)

最近は何でもヘアピンを着けている人を街でよく見かけるけどな…

…。

それはさて置き、明久の『なんと云う赤っ恥！』と、云う声が聞こえてくるような気がする……。

(似合ってますけど、ね)

(ごめんなさい。忘れてください……)

そう云って明久は姫路の髪にウサギの髪留めを着ける……。

ここにきてオレは一つの疑問を抱いた……。

これから寝るのに髪留めを？

もしかして姫路がああ髪留めを大事にしている理由って何か明久が関係しているからなのだろうか……？

(これでいいかな？)

(はい、ありがとうございます)

(それじゃあ僕はここで……)

(……待ってください)

(？　姫路さん、どうしたの？)

(このウサギ、似合ってますか？)

(え？　あ、うん。勿論だよ。姫路さんと言えばウサギ、ウサギと言えば姫路さんってくらい)

(……っ！　そうですか……。それは良かったです……。)

(……？)

表情はよく見えないが、姫路から何か感極まったような雰囲気を感じられる……。

(あ、あの明久くん……。もう少しだけ近くに来てもらえますか?)
(う、うん。別にいいけど?)

明久が姫路に一步近づく……。そして 二つの影が一つになった……。

(明久君……)
(!?!?!?!?)

明久は訳が分からないといった感じで狼狽している。そう言うオレもかなり混乱している……。え? ええっ!?!? 抱きついてる!?!? 姫路が明久に抱きついてる!?!?

(やっぱりダメです……。こんな……。私の気持ちを揺さぶるような事を、されちゃうと……)

なんだ!?!? 姫路は明久に迫ってるのか!?!? ヤバいな……。これ以上あの状態が続くと……。明久も姫路も理性を振りきれてしまひそうだ……。

「ううん……。」

良いタイミングで島田が寝返りを打ち、明久と姫路は驚いたように固まる……。

「すず、すず……」

ほどなくして再び規則正しい寝息が聞こえてきた……。その間に二人とも少し冷静になったようで、体を離す……。

(そ、それじゃあ僕は見つからないうちに戻るとするよ)

(あ、はい。そうですね。それがいいと思います)

『今は……明久君にとって大事なテスト前だから我慢します……。でも今度こういう事があったら……私はきつと……』

そんな姫路の意味深な呟きは婚姻届を盗もつとしたのがバレたと思われる雄二の悲鳴によって掻き消された……。

.....

オレは今、不思議な空間の中にいる……。

不思議な浮遊感……。

明るくもなく、暗くもない……上も下もない……そんな不思議な空間……。

ああこれは夢だな……。

ときどき今見ている光景は夢だとわかる事がある……。

そついう時は大抵……いい夢か、悪い夢のどちらかだが……今日はどうやらいい夢のようだ……。

なぜなら 二度と会えないと思っていた2人が笑いながら目の前に立っていたから……

『姉さん、絃馬さん……』

『久しぶり、ヒロ……。』

『おう、久しぶりだな!』

『絃馬さあ〜ん!』

満面の笑顔で両手を広げ芝居がかった態度で絃馬さんに駆け寄った。絃馬さんも『カム、ヒア!』といった感じで腕を広げている。そして悪い笑みを浮かべ、拳を握りボディを狙うが

『ゴアツ!』

膝蹴りを鳩尾に入れられオレの攻撃は不発に終わった……。

『す、少しは利口になったよう……。』

『ワンパターン……。そうやってボディブローを決めるのがお前の攻撃パターンだったよな』

クソ……。読まれてたか……。

それはさて置き

『大きくなつたわね……。』

『ホントにな……。最期に会った時はこんなチビだったのにな』

『……当たり前だろ。あんたらが死んでから何年経ったと思ってるんだよ』

『それもそうか』

絃馬さんはオレの言葉を聞き更に大口を開けて豪快に笑った。

本当に……。何年たっても変わってない……。

『化けて出るならオレより静馬の所に出てやれよ。態度には出さないけど、家で一番寂しい思いをしているのはおそらくあいつだ……。』
『またそうやって捻くれたことを言う……。』

『大丈夫だ！ もう化けて出た！』

『化けて出たのかよ！？』

『その後、悲鳴を上げられた！』

『そりゃそうだ！』

『そしてへこんだ！』

『元気出して！』

『……あなた達、久しぶりに会ったんだからもっと色々と話すことがあるでしょう……？』

『それもそうだ！』』

『ハア……。変わってないわね……。』

『まあ、コントはここまでにしましょうか……』

『そうだな。』

.....

『心配になってきてみたけど……よかったわ……。ひとりで苦しむのは辞めたのね』

『うん。オレみたいなものでも必要だと言ってくれる人がたくさんいるって気づけたから……』

『そうか』

『最近思うんだ……。オレの中に渦巻いていた「本家への憎悪」……。「誰にもわかるものか」っていう苦しみ……。それらはみんなオレに必要なんだと思うんだ。』

『.....』

『オレの中の歪みごとオレを受け入れてくれる人がいる。オレが支えてやれる人がいる。オレを必要と言ってくれる人がいる。だからオレはオレの「過去」を悪くないって思うようになったよ……。』

明久達がオレを必要だと言ってくれる……。

静馬を支えてやれる……。

優子がオレを受け入れてくれた……。

“誰にも理解できる訳が無い”と思って人と人との間に壁を作っていた……。

けど、理解しちやいけないんだ。

「冷遇され、疎まれ、虐待されてずっと独りだった」っていう苦しみを知っているオレが他の人にその痛みを理解させたらダメなんだ。だからオレはもう行くよ。

明るいところへ……

みんなのところへ……

“オレにしか出来ないこと”を探しに……

以前姉さんが言っていた「誰かを助け、守れるような人間になりなさい。辛い経験をたくさんしたあなただから人の気持ちを考えてたくさんの人を助けられるはずだから……。」という言葉は今初めて本当の意味で理解できた気がする……。

オレはこの答えを……胸に刻んでこれからも生きていくよ。

『いい顔になったわね』

『自分なりに“答え”を出せたからな』

『そうか』

『お前は簡単にこっちに来るなよ。あの台所に出る“黒い流星”並みにしぶとく生きるよ。ジジイになるまでな！』

『なんだかいいこと言ってるのにアレにたとえられるとビミョーな気分になるな……』

『そうね。相変わらずバカな会話しかしないんだからアンタ達は……』

……

『それが楽しいじゃないか』

『ふふ……！ そうかもね』

オレは笑いながら泣いている……

それを見て絃馬さんは肩をすくめながら微笑み、姉さんはオレの頭を撫でていた。

『悪かったな。お前や静馬に寂しい思いをさせてしまって……』

『……大丈夫だよ、オレは……。だから、安心してくれよ』

『静馬を頼むわね……。あの子を守ってあげて……』

『ああ。任せて』

『元気でな』

『負けないでね』

『うん!』

笑顔を浮かべたまま、二人が消えていく……。

言いたかったことはたくさんある。

もっと沢山話したかった……。

もっと頭を撫でてほしかった……。

もっと甘えていたかった……。

もう、二度と会えないけど……。

あなたちに会えて本当に良かった……。

好きだった……。

本当にあなた達の事が……大好きだったよ……。

今、会えた事が夢でも現でも……これだけは絶対に二人に伝えたい……。

『ありがとう……! 姉さん! 絃馬さん!』

2人は何も言わずに微笑みながら消えていった……。

.....

甘い霞みがかつた夢を見ていた気がする……。
涙が眼から流れ落ちていた……。

オレ何の夢を見ていたんだっけ……？

何か嬉しい夢を見ていた気がするけど一向に思い出せない……。

まあ、眼が覚めたら見ていた夢の内容を忘れるなんてよくある話だよな。

時間は午前3時……

再び寝なおす気も起きず、零れおちていた涙を拭い体を起こす。

そしてドアを開け、部屋を後にした……。

……

当然みんな寝静まっているようで、自分が廊下を歩く音がやけに大きく響いた。

そして誰もいないベランダに出て、夜風に当たっていた。

初夏の風は涼しく、心地がいい……。

上を見上げれば満天の星空、辺りを支配するのは静寂……

オレはこういう雰囲気が好きだ……。

しばらくオレはこの空気と一体化するような感覚を堪能していた……。

「こんなところで何してるの？」

声をかけられハツとして後ろを振り返る。

闇の中から現れた人物の顔が月明りで照らし出される。

そこには優子がいた……。

「どうしたんだ、優子？ 寝てたんじゃなかったのか？」

「うん。ちよつと食堂で」

「盗み食い、か？」

「ち、違うわよ！ 眼が覚めて、のどが渴いたから水を貰いに行っただけよ！」

「あははは。冗談だよ」

「もうっ！ で、何してたの？ こんなところで」

「ん、ちよいと一人になりたくて……な」

「……また変な事を考えてたんじゃないでしょうね？」

「いや、違うよ。大丈夫」

優子が心配するように眉をひそめたので、すぐさま否定する。

実際に一人になりたかったのは合宿の夜の様な否定的な理由じゃない。

「オレ今までこんなに人に気を許したことが無かったから、こういう雰囲気慣れてなくて……。それで一人になって少し考えたかったんだ」

「……嫌だったの？ こういう雰囲気……」

「まさか！ すごく楽しかったよ！ オレがこんなに笑えるなんて少し前までは自分でも思っても二みなかったからさ！ そりゃ、まあ……正直少し戸惑ってるけど……。恥ずかしい言い方だけどこの時間はオレの宝物だよ」

「……大丈夫よ」

「え？」

「宝物なんかじゃない。ヒロはこれからアタシ達とこれからもっとたくさんのおい出を作っていけるから……」

「優子……」

またしばらくの静寂……

その間オレと優子はお互い視線を外さない……。
そうだよな……。

オレは優子のお陰でオレは一步を踏み出すことができた……。
優子の言葉のお陰で「人に心を許せない」という苦しみから解放
された……。

優子がいてくれたから……
自分を……仲間を大切に知る事が出来た……。
オレは優子に二度と戻ってこないと思っていた幸せを貰った……。
暖かな幸せの中胸が満たされていくのを感じる……。

「優子……」

「なに……?」

「……ありがとう」

「どうしたの、急に?」

「そう言いたい気分なんだ……」

「……どういたしまして」

また再び静寂が辺りを包みこむ……。

ベランダで2人は並んで夜空を見上げていた……。
いつもより少しだけ近く寄り添い、お互いの手を重ねながら……

第70話 ハッピーエンドに向かって

一夜明けて、霧島の家での勉強合宿から帰ってきた。

全身生傷だらけでボロボロに痛む体を引きずりながら、溜まっていた家事を片付け、机に向ってテスト勉強の最後の追い込みにかかっていた。

何故生傷だらけかと言う時は朝まで遡る……。

.....

朝の陽ざしが目に入り、眼を覚ました……。

どうやらオレはあのままベランダで寝むってしまった様だ。

さすがに外で寝るのは寒かった。

そんな中、何だか暖かくて柔らかい物体がオレの腕の中に収まっていた……。

なんだろ、これは？

柔らかい物体の正体を暴くため少し動くと　ムニユ　とした感

触の特に柔らかい物体二つがオレの胸のあたりに当たっていた……。

こ、この微かな膨らみは……まさかっ……！

恐る恐る視線を下に向ける……。
そこには

「んっ……。ううん……。」

優子がオレの腕を枕にして眠っていた……。

しかもお互い温め合うように抱き寄せあっていた……。

ま、拙い……。これは言葉で言い表せないほど拙い……！

優子が眼を覚ましたらオレは

？ 関節を逆に曲げられる処刑

？ 重りをつけてプールに叩き込まれる処刑

？ 今までにない方法での処刑

どれにしてもオレのDEAD END！

どうする！ オレが生き残るための方法は！

オレの取るべき選択肢は！

？ 諦めて処刑される……

？ 現実逃避、現状維持……

？ 【検閲削除】をしてしまう……

ロクな選択肢がねえええつ！！

しかもなんだよ！？の選択肢！

そんなことしたらオレはコンクリに詰められて冷たい海に沈められてしまうじゃねえかつ！

ええいつ！ 煩惱退散！ 煩惱退散！ 煩惱退散！ 煩惱退（以下

省略）

「……………ヒロ？」

拙い……。知らず知らずに選択肢？を選んでいる間に優子が眼を覚ましてしてしまった……。

ここは場を和ますために小粋なトークでも……！

「あゝ、優子……」

「な、何？」

「優子の胸って小さくても柔らかいんだな」

しまった~~~~!! テンパリ過ぎて小粋なトークがセクハラトークに!?

オレの死亡フラグが立ってしまったあ!

「え……? ~~~~~ッ!!」

「優子待った! 今のは言葉のあやって奴で決して下心が出たわけでもなく、態とである訳でもなく 待った! 首はそっちの方向には曲がらない! そんでもって背骨が曲がってはいけない方向に曲がってきているって待て待て待て! い、いやああああっ!!」

殺されなかったのは幸いだったが、この後優子がオレと眼を合わせ
てくれなくなった……。

そして明久とムツツリーニがヤバい事を考えてそうだったから明久
にはオレの必死の説得きまじほくをして、ムツツリーニには粗品エロほんを贈呈してF
FF団には黙っていてくれる事を約束してくれた……。

.....

と、まあ……

こんな感じで明久でもやらないようなボケをかましてしまった訳で

.....

優子が怒るのも無理が無いわけで……

完全に優子に嫌われてしまった訳で……

「全部オレが悪いんだよ、ドチクショー~~~~ッ!!」

やりきれない気持ちで部屋の窓を開けて、太陽に向かって吠えた……。
そんなバカな事をやっているのと玄関のチャイムが鳴った。

「何だ？ セールスか？ それともまた新聞の勧誘か？」

最近新聞の勧誘がしつこい……。

いつもならやんわりと断っているが、今日はそんなに優しく出来ないぞ！

なにせ最高に機嫌が悪いからなあ！

言葉責めで再起不能にしてやるれるー！っ！！（意味不明）

トラップに引つかからないように玄関に向かい、蹴りでドアを勢いよく開けた。

「オルアーツ！ 新聞ならいらねえぞ、ゴルアーツ！」

「ひいひいっ！ ぐぐぐぐぐぐ、ごめんなさいーっ！！」

そこには珍しい客が立っていた……。

「……ってあれ？ 明久、どうしたんだ？」

「う、うん……。ごめん、ヒロ……。今日……泊めてくれないかな

……？」

.....

明久SIDE

姉さんと喧嘩した……。

僕は久しぶりにこつちに来た姉さんに喜んで貰いたかっただけなのに……！

久しぶりに姉さんに僕の作った料理を食べてもらいたかっただけに……！

僕の気遣いは姉さんにとっては『余計な事』『結果が出せなかったことへの言い訳』なんだ！

姉さんはきつと僕の事を嫌いなんだろう……！

皆が家に来た時、あんな嫌がらせとしか取れないことをするし、ちよつとした事で減点をするし……！

だからもう姉さんの顔も見たくなかった……。

だから勉強道具一式を持って家を飛び出した……。

……

気付けばヒロの家の前にいた……。

ヒロは迷惑な顔一つせずにも何も聞かずに家に招き入れてくれた。

「……何も聞かないの？」

「……聞いてほしいのか？」

分かっけていて放っておいてくれて……。

きつとヒロは凄くつらい事を乗り越えてきたんだろう……。

だから僕が話すまであえて聞かないんだろう……。

いつもは僕を弄繰り回して遊んでいるけど、いざという時に無条件で真っ先に助けてくれる……。

僕の悪友でもあり、親友でもあり、兄の様な人に心から感謝した……。

ヒロSIDE

「勉強はここでやっつけ」

「うわぁ……。ぬいぐるみと剣道の道具と野球の用具が節操無く」
「ラボレーションを……」

スッパーン！

「人の部屋を分析すな！」

ハリセンを取り出し、明久の頭をどつく。

「痛い！ 痛いよ、ヒロ！ ハリセンなんて何処から」

「企業秘密だ！」

ここに秀吉がいれば間違いなく「お約束じゃな」と言っただろう。
2人でコントをしてもどこか空しいのでさっさと勉強を始める
ことにした。

.....

明久がなんで家出てきたのかは大体予想はつく……。

大方、玲さんと喧嘩でもしたんだろう……。

おそらく原因は些細な言葉のすれ違い……

頃合いを見て余計な御世話をしようか……。

.....

P r r r r P r r r r r

『はい、もしもし。吉井です』

『あ、こんばんは。烏丸です。夜分遅くに申し訳ありません。』

『ヒロ君ですか……。あの……。アキくんがそつちに』

『明久なら今家にいます』

『そうですか……。ご迷惑をおかけします。すぐに迎えに行かせて
』

『いえ、今日のところは明久は家でお預かりします。その方が玲さんにとつても都合がいいでしょう?』

『どういう意味ですか?』

『いえ。簡単な話です。あなたは明久の自分への不満をバネにして学業へのやる気を向けさせようとしているのは何となく気付いていました』

『……いつからですか?』

『初めて家に行ったときからですよ。最初は明久への愛情が暴走しているだけかと思いましたが、どうもあなたの言動を聞いてみると“態と明久に嫌われるような言動”をしているような気がして……』

『……………』

『大丈夫ですよ。』

『え?』

『玲さんが明久の為に自分を悪者にしなくても、明久は“やる時にはやる男”です』

『……………』

『ですから……。明久にあなたを嫌わせないでください。明久はああ見えて玲さんの事が大好きなんです。だから……。玲さんを嫌いたくないはずなんです。だから……』

『ありがとうございます、ヒロ君……』

『いえ……。あと……。これは独り言ですが……。言い訳をしないこと

は時として潔く感じますが、それは時として誤解を生んでしまします。ですから素直に玲さんが明久にしてあげたい事を言っただけと簡単に仲直りできると思いますよ」

「……ヒロ君は大人ですね……。」

「そうかも知れませんが。ですがそうなる段階で人として大事なものをたくさん失ってしまったてしまいました。ですが明久はそんなオレとは全く違う……。自分とは何もかも違う。だからこそオレはあいつの事が好きなんです」

「……………」

「だからこそオレはあいつの為に何かしてあげたいんです……。」

「……アキくんはいいお友達を持ちましたね……。」

「そう言っていただけだと嬉しいですよ……。」

「ありがとうございます、ヒロ君……。これからもアキちゃんと仲良くしてあげてください」

親友でもあり、悪友でもあり、弟のような存在……。

オレはそんな明久に何かできたのだろうか？

何かできたと信じたい……。

あとは明久と玲さん次第……

頼むよ二人とも……

オレはハッピーエンドしか見たくないからな……！

第70話 ハッピーエンドに向かって（後書き）

PV60万、ユニーク5万突破しました！

皆さん、本当にありがとうございます！

これからも精進します！

そんでもって記念小説を書きたいと思っています！

いろいろと壊れた内容になると思いますが、読んでいただけたら幸いです！

第71話 愛情は世界を救う！

朝、いつも通り朝食の準備をしていると、眼の下にクマをこさえた明久が台所にやってきた。

「おはよう、明久。勉強ははかどったか？」

「うん。ごめんね、色々と……。夕食の代わりにブドウ糖をもらっちゃって……」

「気にしなさんな。そんなに高い物でもないし、オレも集中したい時によく食うしな」

最近では固形のブドウ糖が薬局で売っていて勉強前に食うと、面白いほど頭の回転が速くなるからオレも重宝している。明久は徹夜で疲れてるんだから万全まではいかなくても、せめてこれくらいのコンドیشنの管理はしておかなければならないだろう。

「朝飯だけでも食つとけ。朝食うと頭がすつきりして実力がちゃんと出せるようになるぞ」

「あ、うん。それじゃあ貰うよ。」

「ああ、先食つててくれ。オレはジジイと静馬を起こしに行くから……」

今、家の中のトラップはすべて解除されている。

普段はオレが通るとセンサーが反応してトラップが発動する仕掛けになっていたからオレと体格が違う静馬やジジイは引つかからずに済んでいるが、オレより少しだけ背が低い明久が通ったらセンサーが反応してトラップが発動してしまうだろう。

明久が引つかかったらシャレにならない……。

勉強の邪魔をするわけにはいかない。

今の明久はこれまでとは比べ物にならないくらい真剣なんだ。
ジジイもその辺りの良識は一応わきまえてる様で安心した。

「おい、ジジイ。起きろー！ 朝飯が出来たぞー！」

扉を開けたとたん竹槍が飛んできて頬を掠めて後の壁に突き刺さった……。

薄皮一枚切った傷からは血が一筋流れ落ちる。

「おお、すまん。すまん！ 新作トラップの誤作動でのう……。まだまだ調整が必要じゃのう……。」

「ジジイ……、聞きたくないが一応聞かせてもらおう……。そのトラップで誰を始末する気だ？」

「始末するとは人聞きの悪い。ただ“お主が慌てふためく姿を見た”というジジイが仕掛けたお茶目な悪戯じゃと言つのに……。」

コメカミに浮かべた青筋が切れ、頭の中でゴングが鳴り響く……。オレとジジイの第1ラウンド スタート……！！

.....

静馬SIDE

「吉井さん、先に行った方がいいですよ」

「え？ でもヒロが……。」

「今お爺ちゃん拳と拳で会話中です。ああなったら、どちらかが沈むかまで止まらないですから……。」

「そ、そうなんだ……。」

『ほっほっほっ！ ワシの勝ちじゃ！ 未熟者め！』
『ノオオオオオツ！ 眼がああ！ 眼があああつ！！ 催涙スプレ
ーを仕掛けるなんて卑怯だぞ！』
『何を言うか！ これは兵法というものじゃ！ それにお主なら1
0分くらいで回復するじゃろ。なにせ回復力だけは人外じゃからの
う！』
『思いつきりスキルの無駄遣いじゃねえかよっ！』

おじいちゃん……
また何かバカな事を行ったんだね……？
後でキツチリお仕置きをしておかなくちゃ……。

「ヒ、ヒロって毎朝大変なんだね……」
「そうですね……。不幸のオリンピックピックがあったら絶対にダントツ
で金メダルを取るでしょうね……。」

吉井さんは兄さんにお礼を言って先に学校へ行った。
僕も早く朝ごはんを食べて学校に行かなくちゃ……。

.....

ヒロSIDE

なんとか催涙スプレーによるダメージも回復し、学校に行き試験の
準備を始める。

痛ててて……。まだ微妙に眼が痛い……。
最近ジジイは兵法と称した卑怯な小細工を多用するようになってき

た……。
オレが強くなってるのか？
いや、たぶん違う……。
喧嘩慣れはしてきているけど実力は客観的に見て徒手空拳の実力はあんまり伸びていないと思う……。
なんだか嫌な胸騒ぎがする……。
考えすぎならいいんだけど……

「よし、お前ら席に着け。期末テストの一日目だが」

つと西村先生か……。

西村先生がHRで連絡事項を伝え、教室をでる。

その間にオレは教科書を軽く見直し、試験に備えている。そろそろ試験が始まるな。

今回もやるだけの事はやったし、それなりに自信ありだ。あとは野となれ、山となれってところかな？

「はい、勉強道具をしまってください。1時間目のテストを始めます」

よっし！ やるか！

現代国語

『四面楚歌』の正しい意味を選択肢の中から選びなさい。

? 孤立して助けが無い事

? 歌ばかり歌って何もしないこと

? 楚という国の様に四面に伝播しやすい事

? 四面のBGMが楚である事

これは？だな。
しかし他の選択肢はまともなものに？の選択肢は何だ？
意味分からん……。

リーディング
英語

“ It ” の意味する内容を日本語で書きなさい。

“ It ” won't take you more than
ten minutes to your home .

警告 『それ』と書いた生徒は問答無用で職員室への出頭を命じます。

『それ』なんて書く奴がいる訳ない いや、いたな。書きそうな
奴が何人も……

気を取り直して問題をよく読んで
ええっと……直訳すると『それは10分以上のあなたをあなたの家
にお連れしないでしよう。』かな？

つて事は『10分以内にあなたの家に着くことが出来ないこと』か
な？

うーん、自信ないなあ……。

世界史

人・智・礼の教えを説いたのは（孔子）……

これで大体解けたかな？

あとは時間が過ぎるまで見直しをするか……。

そして終了のチャイムが鳴る……。

一番後ろの席のオレは同じ列の回答用紙を回収していた。

「明久、回収するぞ」

「うん」

「…………お前…………これは…………」

「え？ どうしたの？ ……あ…………！」

明久の大きなミスに気付いてしまいオレと明久の目は点になってしまった。

右よし！ 左よし！ 正面よし！

「明久、今なら西村先生が見ていないから、さつさと直しまえ…………」

…………

「ヒ、ヒロ…………！ 後ろ、後ろ！」

「あん？ 後に何があるって 西村先生…………。いつからそこにいらつしゃったので…………？」

「お前がキヨロキヨロし始めたあたりからだ…………。教師の目の前で不正行為を唆すとはいい度胸じゃないか、烏丸…………？」

「あははは…………。軽いジャパニーズジョークですよ…………。」

「そうか。ジョークか！ それなら回答紙をさつさと前に持って行け！」

「サー、イエスサー！」

背筋を伸ばし西村先生に向かって敬礼！

その後真っ直ぐに教壇に回答用紙を提出した。

すまん、明久…………。オレも自分の命が惜しいんだ…………。やっちまったなあ…………。

まさか名前を書き間違えるなんて…………。アホなミスしたなあ…………。

…………

クラス 紀元前

学生番号 334年

氏名 アレクサンドロス大王

.....

やっちまっ たなあ.....。

.....

「帰るのか？」

「うん。姉さんに成果を報告しないと.....」

そう言っ て帰る準備をしていた明久はげんなりした表情をしていた。

「.....姉さんは僕の事が嫌いなのかなあ.....。」

「は？」

「だって.....事あるごとに減点するし.....、ヒロ達が家に来た時嫌がらせとしか思えない事しかないし.....、僕の為になる様な事何一つしてくれないし.....」

「.....。」

「きつと姉さんは僕に何も期待していないんだ.....。」

「あゝ、明久。それはちよいと違うぞ。興味のない物にわざわざ構うような人はいない」

「え？」

「相手に期待するからお前に対して怒るんだよ。」

「.....。」

「知ってるか？ 人間って自分の興味のない物や関心のないものに対して向ける視線は驚くほど冷たくて、無機質なんだよ」

本家の人間がオレに向ける無機質な視線……。

あいつらはオレを人間として扱わず、玩具として扱った……その冷たい視線……

あの視線を向けられる……その恐怖は今でも忘れられない……。

でも……玲さんが明久に向ける言葉や眼には体温があつた。だから……

「信じてやれよ、あの人を……。お前の“姉さん”なんだろう？ きつとお前の事を一番に考えてくれてるよ」

「……そうだといいんだけど」

「信じられないなら1つアドバイスだ。オレの予想が正しければ冷蔵庫の中にお前と玲さんの仲直りの鍵がある」

「……………」

「もう一度言っておく。あの方は大丈夫だよ」

「……………うん」

「仲直り……出来るといいな」

「うん、ありがとう……………」

明久は小さく笑って帰って行った……。

……………

明久SIDE

「まったく、あなたと言う人は……。アキくん……。いえ、アレクサンドロス大王と呼んだ方が良いでしょうか？」

ヒロの家から帰ってきた後、気まずいのを我慢して試験の報告をしてお説教を受けていた。
家出の方はヒロが姉さんに報告していた様でそんなに怒られなかった……。

「う……。でも点数は良かったと思うんだ。ただ0点になっちゃっただけで……」

「もし名前を記入したら高得点だったとして、だからどうしたというんですか？アレクサンドロス大王くんは受験の本番で同じミスをしてしまったら、そうやって試験の人に言えば許してもらえらると思うんですか？」

「うぐ……」

本当にヒロの言うとおりこの人は僕の事を考えてくれているんだろうか？

疑問がグルグルと僕の頭の中を回り続ける……。

『その人がどんな人間か？』ということに関してヒロの言う事は結構当たる……。

人間観察に対してヒロは凄く高い能力を持っているんだろう……。けど今回はかりはハズレかもしれない……。

姉さんが僕の事を一番に考えてくれてるなんて……考えられない……。

「う……。僕なりに頑張ったのに……」

「頑張った結果がこれなのでしょう」

「……ごめんなさい」

「別に謝る事はありません。姉さんは最初からアキくんは何の期待もしていなかったのですから」

「う……。う……」

ヒロ、やっぱり姉さんは僕に何の期待も持っていないのがわかったよ……。

やっぱり姉さんは僕の事が

「一応、努力していたということは評価に値しますが、結果を残さなくては意味がありません。努力というのは結果の為の過程に過ぎず、いくらその行動が尊いものでろうとも、過程自体を誇る様になっってしまったては何の意味も持たないのです」

難しい言い方をしているけど要するに

結果を出そうと努力をするのはいいことだけど『努力したから結果を出せなくていいんだ』って自分から言い出すのは間違いだって事だ……。

そのまましばらく姉さんのお説教は続く……。

「あら？ もう7時ですか。そろそろ夕飯にしましょうか」

た、助かった……。これでお説教から解放される……。

「アキくんは明日もテストがあるようですよ、続きは明日にします」

え？ 日を跨いでも続けるの？

「それじゃ、とりあえず簡単なものでも作るよ」

「いいえ。今日は外で済ませましょう。時間も時間ですよ」

家庭料理好きの姉さんには珍しく外食が提案される。

これもやっぱり僕が夕飯を作っていて結果が出せなかったら困る、なんて理由なんだろうか？

「行きますよ、アキくん」

「あ。先に行つてよ。僕もすぐに行くから」

「わかりました」

夕飯に使わないんだつたら冷蔵庫の肉を冷凍しておかなくちゃならないよね。

あ。そう言えばヒロが冷蔵庫の中に僕たちの仲直りの為の鍵があるつて言つてたよね……？

そう考えながら冷蔵庫を開ける。すると中には黒焦げのパエリアが入っていた……。

それを見た瞬間、こここのところ抱いていた疑問が次々と氷解して行った……。

何で雄二達が来る事を知らなかったのにあんなに大量の食材を買ってきたのか？

調理に失敗した時の事を考えて多めに用意したからだ……。

どうして和食じゃなくてパエリアだったのか？

それは僕の好物だつて知つてたからだ。

どうして昨日僕に夕飯を用意させようとしなかったのか？

そんなの決まつてる。姉さんが僕の為に僕の好物を作ってくれるつもりだつたからだ。

ヒロが言つたとおりだつた。

姉さんは僕の事をちゃんと考えてくれてたんだ……。
眼から暖かいものが一筋流れる……。

「言つてくれればいいのになあ……。」

本当は月曜の夜、姉さんが夕飯を作ってくれるつもりだったのかもしれない。

けど雄二達が来たからそれができなくなった。どおりである時少し不機嫌だったわけだ……。

結果が出ない努力に意味はないっていうのは自分に言い聞かせている部分もあったんだなあ……。

「参ったな……。色々と酷い事を言っちゃったよ……。」

本当に不器用な人だ……。

ヒロは姉さんの本質に気付いていたんだ。

姉さんが僕の為に色々和努力していることも……

明日お礼を言っておかないといけないよね……。

『アキくん、何をしていますか？ 行きますよ？』

「ゴメン。今行くよ！」

頬に伝った涙を拭い、肉を冷凍庫に入れ家を出た。

.....

「ごめん。お待たせ！」

「時は金なり、と言います。あまり人を待たせるものではありませんよ」

「うん。気をつけるよ」

姉さんの二歩位後を歩く。

姉さんは振り返らずに淡々と歩いていった。

「あのさ、姉さん」

歩幅を広げて姉さんの隣を歩く。

「なんですか？」

姉さんはこちらを向かずに返事をする。

いつもこんなつれない態度だから誤解してしまっけど、姉さんは僕の事を色々と考えてくれている。

昨日の喧嘩のときだってそうだ。

僕を勉強に集中させるために姉さんが僕の為に夕飯を作ってくれようとしたんだ……。

それに気付いたら嬉しくて、嬉しくて……

「ははっ」

「？ 人を呼びとめておいて笑うなんて失礼ですね。何か言いたい事があるんじゃないですか？」

「あ、うん」

謝罪を伝えても姉さんは喜ばないような気がする……。だから……僕の本心を伝えよう……。

「色々ありがとう。僕 姉さんの事大好きだよ」

「にやにを」

一呼吸。

「何をいきなり言い出すのですか？」

「勿論家族としての好きだけだね」

「そんな事言っでご機嫌をとっても明日のお説教は勘弁してあげま

せんからね」

「そっか。それは残念」

「当然です」

「当然、ね」

「……………」

そう言えばこうして2人で出かけるのは何年振りだろう……。

「そのうち気が向いたら夕食を作ってあげましょう」

「え？ 本当？」

「ええ。美味しすぎてアキくんが驚くような物を作ってあげます」

「そっか。それは楽しみだね」

「はい。ただし気が向いたら、ですが……………」

料理は全然ダメな姉さんだ。人前に出せる料理が作れるまで十分な練習期間が必要になるだろう。

まったく、分かってないなあ……………。

そんな事しなくても料理はたった一つの方法で驚くほど美味しくなるのに……………

「姉さん、料理の最高のスパイスって何か知ってる？」

「一番の調味料……………？ 塩、でしょうか？」

「うーん……………。そういう意味じゃなくてさ」

「そう意味じゃない、ですか……………。そうなる……………空腹、でしょうか。生存本能に刺激された食欲は、この上ない調味料になるはずですよ」

「なるほど。姉さんらしい答えだね」

やっぱり全然わかってない。

「その様子だと空腹も違うみたいですね。答えは何ですか？」

「ははっ！ なんだろうね。」

「さてはアキくん、料理の苦手な姉さんをからかって遊んでますね？」

姉さんは拗ねたように眼を細め、ニヤニヤと笑う僕を非難がましく見ている。

そんな視線がおかしくてつい頬が緩んでしまう。

料理の最高のスパイスは空腹じゃなければ一つしかないのよね。

「まあ、いいでしょう。そうやって笑ってられるのも今のうちです。

明日はアキくんが泣いて謝るまで拷問してあげますから」

「うえ！？ 内容がお説教から体罰に変わってるんだけど！？」

「嫌ならチユウでも構いませんが？」

「殴ってください！ 泣いて謝るまで！」

「変態ですね」

「弟にキスしようとするアンタにだけは言われたくないよ！」

結局いつもの口論をしながら道を並んで歩いている……。

けど……大好きだよ、姉さん……。

.....

「ところで、姉さん。部屋にある初日にバスローブの上に羽織ってきたライダーズジャケットは何？ 確か姉さんバイクの免許なんて持って無かったよね？」

「あれは秘密です」

「ふん。随分大切にしているようだから気になったんだけど……？」

「ふふふつ。秘密です」

姉さんは顔を少しだけ赤くしながら照れた様に微笑んでいた。
その笑顔はいつも見せる笑顔と少しだけ違ったような気がした。

.....

NO SIDE

「.....学園長。これは何ですか？」

「そう非難がましい目で見えるんじゃないよ西村先生。ちよいとシス
テムの調整に失敗しただけじゃないか」

「このどこがちよつと（.....）ですか？」

「ちよつとみてくれが悪いだけだね」

「ほほう。そうですか」

「ああ、そうさ」

「.....」

「.....夏だねえ.....」

「学園長。遠い眼をしても無駄です。」

「はいはい、わかつてるよ。それじゃ、復旧作業を始めるから手の
空いてる教師を全員連れて来な」

「それは構いませんがこれが生徒に発覚したらどうするつもりです
か？ 特に烏丸に知られたら烏丸本家につける隙を与えることにな
ります」

「烏丸大貴の事だったら大丈夫さ。あいつはそういう事はしない人
間だからね。それに生徒に知られたって構いやしないさ。問題はさ
つきも言った通りみてくれ（.....）だけだからね」

「という事は？」

「なる様になる、ってだけさ」

「やれやれ.....。これだからこの学校は.....」

第5部
完

第71話 愛情は世界を救う！（後書き）

第5部終了です！

今回はPV60万、ユニーク5万突破記念小説を載せたいと思います。

メタ発言やキャラ崩壊が飛び交っている内容になっているので『それでも構わない』という心の広い方、チャレンジャーな方は読んでやってください。

記念小説 第×××話 これは寧ろ座談会？（前書き）

キャラ崩壊、メタ発言が飛び交っています。

ここでの発言は本編には一切関係ありません。

それでも構わない、というチャレンジャーな方、心の広い方はどうぞ！

記念小説 第×××話 これは寧ろ座談会？

「はい、始まりました！ PV60万、ユニーク5万突破記念小説！ 『これは寧ろ座談会？』」

「なんでPV60万、ユニーク5万なんて中途半端な数字なんだろうね？ 普通はPV10万とか、ユニーク1万とかなのに……」

「静馬！ その話はしちゃいけない！ 作者の黒歴史なんだ！」

「??? どういう事？」

「以前作者はそういう企画を立ち上げようとした……。」

「うん、うん」

「そして新米^{ペーペー}だった作者は1万ユニークのあまりの嬉しさのあまり企画を募集したんだ……。」

「ふむふむ……。で、どうなったの？」

「1通も来なかった……。」

「……………」

「そこで作者は初めて正気に戻った！ そして恥ずかしさのあまり床に転がって悶えていたんだ！ 『オレは未熟者の癖に何を調子になつていたんだ！？ できればあの時の自分を埋めてしまいたい！』と！」

「……………に、人間増長しちゃダメだよね！」

「ああ。涙なしには語れないシヨツパイ教訓だ……！ 作者がクロなだけにクロ歴史、だな……。」

「兄さん、それつまらない……。」

「サーセン……。」

……………

「さて、気を取り直して！ 司会はバカ兄、叔父バカ、シスコン、ツッコミ役、処刑人、いい人、苦勞人、西橋のカラス、アンラツキーボーイ、ムツツリスケベ、お嫁さんに欲しい男子？1、などの様々な妙なあだ名を持つ『カラス』の一応主人公！ 烏丸大貴です！」

「お前出番少ないの気にしてたのな……。」

「当然だよ！ 兄さんは本編52話辺りから株が上がってきてるし、おじいちゃんはトラップ作成で大活躍なのに僕だけなぜか出番が少ないんだよ！？ これは作者によるあからさまなイジメだよ！」

「あのジジイの大活躍はオレの不幸以外の何物でもないんだけどな……。けど外伝で主役はったことあるじゃんか？」

「それにしたって身近すぎるよ！ 例えば僕が『葉月ちゃんが好き』って設定も作者さんが生かしかれてないせいで忘れかけられてるんだよ！？」

「まあ、確かにそうだけとさ……。」

「これは断固抗議するべきだよ！」

「ん？ なんだ？ 紙が……。」

【旅に出ます。探さないでください……。】

「うお〜い！ 作者！ メンタル弱すぎだろ！？ 戻ってこ〜いっ！」

「そつだよ、作者さん！ ハウス！ ハウス！」

「……静馬、犬じゃないんだから……。」

.....

「それじゃあゲストの紹介、いつてみよ〜！」

「はい！ 全身凶器！ バイオレンスなツンで兄さんを蹂躪する、見た目は美少女！ 中身は大熊猫^{シャイアントパンダ}！ 『カラス』のヒロイン！ 木

下優子さんです！」

「よろしくね　ところでこの文面誰が考えたの？」

「え？　作者さんが旅に出ちゃったから兄さんが即興で……」

「そう……。ヒロ？　このあと二人つきりでゆっくり（肉体言語で）話しましょう？」

「ハハハ、ハハハハハ……。」（オレは生きてこの会場から出られないかもしれない……。）

.....

「さて、今日のトークのお題は「チラ！」

【カラスに出てくるオリジナルキャラについて】

「ああ、なるほど。カラスには結構オリジナルキャラが出てくるからなあ……。」

「そうだね。しかもまだ2、3人増える予定だって言うからビックリだね。」

「だな。上手く動かせるかどうかも分からないのにな？　もしうまく動かせずに話が破綻したら大笑いだよな！」

「そうだね」

「あっはっはっは……！」

「あんた達そんなことばかり言っていると出番がなくなるわよ？」

「オレ主人公なの？」

「僕どうせ出番が少ないし……」

「作者がこの小説を消去して存在自体消されるとか」

「やめてくれよ！　リアルに怖い！　って言うかシャレにならん！」

「そうだよ！　小説削除を本気にした人が出たらどうするの!？」

小説削除はネタです。本気にしないでください。念のため……

.....

「さて、オリキャラと言えはまずオレから」

「必要ないんじゃない？」

「なんでだよ!？」

「アンタ一番最初の主人公設定で優遇されてるじゃない。これ以上何を語るつもりよ？」

「ほら、近況報告とか？」

「なんで疑問形なのよ……。まあ、いいわ。ヒロは顔は童顔、比較的可愛い顔をしてるわね。体つきは……。細身でもなく、太くもなく……。中肉中背ってところかしら……。？」

「最近バイト大貯めて買ったバイクでそこらじゅう回る事がマイブームだ」

「家の家事を一手に引き受ける凄腕の主夫でもあるよね」

「料理の腕はプロ級よね」

「才能が全く無かった分必死に磨いたからな」

「アンタのそういうところは結構好きよ」

「いやあ……。照れるなあ」

「最初はシビアな現実主義者リアリストって設定だったのに最近はずいぶんホットな性格になっちゃってるよね。」

「精神的に弱い面があるけど、決心した時にはすごい事やるぜ、オレは……!」

「普段はヘタレなのにな」

「ヘタレって言うなあー!」

「ちなみに作中では童顔である事以外特に特徴のない顔って言われてるわね」

「特徴のない顔とか言うなあー! 何気に気にしてるんだぞ!」

「裏設定として一部の男子の間では『女装したら可愛いのでは?』」

「っていう噂が……」

「いやだぁーっ！ そんな事実知りたくなかった！ 知りたく無かったよぉーっ！」

「ねえ、優子さん。ここに書いてある裏設定その2『磨けばそこそこ光る素材』っていうのは読まなくていいの？」

「いいの。そんなこと言っつてヒロが身だしなみに気を使い始めたら競争率が上がっちゃうし……」

「余計な心配だと思うけどなぁ……。兄さん、優子さん以外は眼中になさそうだし……」

「チクショーツ！ 次だ！ 次！」

.....

「次は僕だね。僕は沖田静馬。なんで兄さんと名字が違うか知りた
い人は本編を読んでね」

「静馬は美形です……」

「そうね。ヒロとはすごい違うわよね……」

「……ちなみに烏丸家はオレ以外みんな美形です……」

「えっと……ヒロ、ドンマイ……」

「本編の中では常識人で兄さんの代わりに本編の語り手として扱わ
れています」

「最近優子の影響でバイオレンスさが目立ってきています」

「兄さん……。僕の事嫌いな？」

「いいや、全く！ むしろ大好きだね！」

「はいはい、ブラコンも大概にね……」

「正確にはブラコンじゃなくて叔父バカなんだろうけどな……」

.....

「次はアタシね」

「異議あり！」

「なによ？」

「優子原作キャラだろ？ オレより紹介の必要ないじゃないか！？」

「いいのよ。原作からの変更点と追加要素を語るだけなんだから」

「なんだか釈然としないなあ……………」

「アタシがルールブックよ！」

「ゲストの台詞とは思えねえ！」

「アタシは木下優子。『カラス』での変更点は原作より母性が強い人物として書かれてるわね。あと好きな人への独占欲が強いって要素も追加されてるわ」

「ふ〜ん、母性（笑）の強い人物、ねえ……………」

「……………ヒロ、アンタが52話で言った『相手が怒るとわかっていながらバカなことを言うのは、相手に甘えている証拠（要訳）』っていいセリフよね……………。アンタそんなにあたしに甘えたいのかしら……………」

「待った！ 記念小説でそんなグロいものでお目汚ししなくても……………」

「大丈夫よ。小説だから映像は見えないし、感想にアタシとアンタのやり取りが好きって書いてくださった人が結構いるから広い心で許してくれるわよ」

「いくら読者の方の心が広いからって、それに甘えるのはいかななものか！？ 待て待て待て！ オレが悪かった！ ごめんなさい！ すみません！ 申し訳ない！ だからそんないい笑顔で迫るのはや、やめっ！ 優子！ ち、違っ！ その関節はそっちには曲がらな ぎゃあああああっ……………」

しばらくお待ちください……………」

……………

.....

「うう……。ひどい目に遭った……。」

「アンタがバカなことばかり言うからでしょ」

「……反省してます」

「さて残り二人になってきたので一気にいきましょう！ 続いてはこの二人！」

【沖田絃馬、沖田千鶴（旧姓：烏丸）】

「僕の両親だね。お父さんの方の性格は豪快、お母さんの方は優子さんそっくりらしいよ」

「そんなに似てるの？」

「ああ。バイオレンスなところとか、怒ったら怖いところとかそっくりだ。」

「ヒロ……？」

「待て待て待て！ さっきやったばかりでまたやったらさすがに苦情が来る！」

「……そうね。仕方ないから許してあげる。……今は。用がすんだら確実に始末してあげるから……」

「聞こえない！ そんな不吉な呟きはオレには聞こえない！」

「兄さん！ バカやってないで司会してよ！」

「……ごめんなさい……。えゝ話を戻すけど、オレのハリセンを始めたとした【100の特技】はすべて姉さん直伝なんだ」

「そうなの？」

「そしてオレの【恩も恨みも忘れない】は絃馬さんの主義でもある「へえ……」

「この二人にはすぐく世話になった。両親がいたらこんな感じかなって思ってたよ……。」

「ヒロ……」

「と言う訳でオレの人生に最もいい影響を与えてくれた人たちだ。オレが最も尊敬する人達でもある」

「うん……。」

「さて、カラスのオリキャラはこれくらいかな……?」

「そうだね。それじゃあ皆さん、読んでくださって」

『待たんかーっ!』

「うわ……。嫌な予感が……」

『ワシを忘れてもらっては困るぞい、皆の衆! 烏丸家先代当主!』

烏丸修介! ここに見参!!』

「うわぁ……」

「……………」

「ふっ……! ワシの登場がカッコ良すぎて声も出ないといった感じじゃの!?!」

「呆れて声も出ないんだよ……。せっかく……!せっかく……アンタ抜きで上手く事を運んでたのに……。なんで出て来るんだよ、アンタはーっ!!」

「何を怒っておるのじゃ、お主は? ワシは『カラス』の真の主役じゃぞ?」

「主役はオレだろ!? 何バカな事言っつてやがる!」

「優子さん、久しぶりじゃのう? どれ、久しぶりに優子さんの尻の感触でも……」

「殺す! アンタだけは! 今日ここで殺す!」

「ほっほっほ! かかってこい、青二才が!」

……………

「え、できれば身内の恥なので隠しておきたかったのですが……」

「静馬君も言うわね……」

「烏丸修介、僕たちの一応保護者です。趣味はトラップ作成と武道。僕の武道の師匠でもあります。兄さんをトラップに引っかけては喜んでいる、自分の本能の赴くままに行動する人格破綻者です……」

「じ、人格破綻者……」

「まあ、悪い人ではないんですけどね……」

「そうでしょうね……。そうじゃなければヒロが気を許すはずないものね……」

「あれでも僕らの事は考えてくれてるみたいですよ。口には出さないけど兄さんも、それがわかっているから本当に嫌ってる事はないですね」

「あ、ヒロがK・Oされた……」

.....

「ヒロ、大丈夫だった？」

「まあ……、いつもの事だし……」

「おじいちゃんは僕が沈めておいたから……」

「うう……。俺の威厳が……」

「そんな物最初からないでしょ」

「そんなバツサリ斬るなよ……。傷つくだろ……」

.....

「さて、これで全員終わったな。」

「そうね。意外と長かったわね」

「これからの展開ですが……」

「本編ではオレと優子との関係が微妙なものになってるな」

「アンタがあの時アタシに抱きつくから……！」

「いやいや。お前が勝手にオレのところ引付いてきたんだろ？」

「まあ、当然のようにもうひと悶着ある様で……。兄さんはあの人とフラグが微妙に立ってる訳で……」

「え？ あの人って誰だ！？ オレは誰とフラグを立ててるんだ！」

「？」

「アンタねえ！ フラグが立ってたらどうするの！？」

「そりゃまあ、口説きません！ オレはそんな軽薄な真似しません！」

「そうした方が賢明ね。アンタの身の安全の為に……！」

「兄さんも優子さんと早く付き合っちゃえばいいのに……。ここまですんでくださってありがとうございます。これからも（兄さんが）大暴れします。気長に見守ってやってください！ 最期になりましたが」

「……皆さんのおかげでPV60万、ユニーク5万突破することができました！ ありがとうございます！ これからもがんばります

！」「」「」

記念小説 第×××話 「これは寧ろ座談会？」（後書き）

次回は外伝を掲載します。

外伝 第7話 ラブコメはやめる……（前書き）

今回は完全オリジナルストーリーに挑戦してみました。
楽しんでいただければ嬉しいです。
それではどうぞ！

外伝 第7話 ラブコメはやめる……

「は？ 優子が熱出した？」

試験が終わり、一夜明けて夏休みまで秒読み段階まで入った学校で秀吉が脈絡もなく言った発言に驚きを隠せなかった。

「そうなのじゃ……。霧島の家から帰ってきて以来、どうもあまり眠っていなかったようじゃし、試験が終わり疲労が一気に出たのじやろっ……」

「そうか……」

「何か悩んでおる様じゃったし、ヒロは何か知らぬかと思つてのう

「……………」

心当たりはある……。

あの夜の事か？

それとも翌朝の事か？

秀吉に何と言つたらいいものか……？

「心当たりがある様じゃのう……」

「……参つたな。ポーカーフェイスにはそこそこ自信があつたんだけどなあ……」

「ヒロは隠し事をするとき顎に手を当てる癖があるのじゃ」

「……そこまで見抜かれてるとはな……」

「ワシの前で演技はできぬぞ。どんな演技も見破つてしんぜよう」

「この人間嘘発見機め……」

「演劇バカ一代と言つて欲しいのう」

「で、オレに何をしろ、と？」

「話が早くて助かるのじゃ。姉上の看病をしてほしいのじゃ」

「お前は？」

「今日は部活が遅くまであるのじゃ」

「親は？」

「泊まりで昨日2人で温泉旅行に出かけて帰ってくるのは明日じゃ」

「要するに看病する奴がないのか？」

「そういうことじゃ。ヒ口、頼めんかのう……？」

「優子が嫌がらないか？」

優子も一応年頃の女の子だ。

同い年の男に看病されるのは抵抗を感じないだろうか？

合宿の時嫌われてしまったオレだと余計に……

「大丈夫じゃろう。ワシもお主でなければこんな事は頼まぬ」

「オレでなければ……？」

「これ以上の事はワシからは言えぬ」

「む？ 意味深な物言いだな。どういう意図で言ったのか気になる
んだけど？」

「これ以上の事は言わぬと言ったじゃろう」

「なんだかお前少し不機嫌じゃないか？」

秀吉の発言に棘を感じる……。

怒っているのか？

「……姉上は……乱暴で趣味が変わっておるし、横暴じゃし、暴力
的じゃし、見栄っ張りじゃ」

「そこまで言うか……」

「……じゃがワシのたった一人の姉上なのじゃ……」

「……。」

「ヒロがもし姉上を悲しませるのなら 分かっておるじゃろうな？」

「……わかってるさ。けどオレが今問題にしているのは優子が嫌がらないか？ って事で」

「四の五の言うのではない。行・く・の・じゃ！」

「……わかった」

「最初からそう言えばいいのじゃ。これは家の鍵じゃ。しっかり頼むのじゃ」

「了解、ボス」

秀吉から鍵を受取り、家の位置を覚えてもらう。

合宿の時以来オレはどうやら嫌われてしまったようで、優子はまともにもオレと眼を合わせてくれない……。

正直言つて気まずい……。

もし本当に嫌われてしまっていたら……？

それを知る事が怖い……。

優子に嫌われてしまう事が 本当に怖い……。

それを考えるとオレは足にまるで重りをつけられているかのように重く感じた……。

.....

優子SIDE

アタシは今ヒロを目の前にしてこの上なく緊張していた……。

大丈夫……！

きっとヒロはアタシの気持ちを受け入れてくれるはず……！

自分にそう言い聞かせながら深呼吸……そしてヒロに向かい合っ……。

『ヒロ……、アタシ アンタの事が好き！ ヒロ！ アタシと付き合って！』

ヒロの眼がアタシを真っ直ぐ見詰める……。
アタシもヒロの眼から眼を逸らさない……。
訪れる沈黙……。

そしてヒロは アタシから眼を逸らした……。

『じめん……』

『え……？』

『オレ付き合ってる人がいるんだ。だから』

ウン……？

『優子と付き合う事は出来ない……』

やめて……！ 聞きたくない！

ヒロが言い終わると同時に何処からともなく少し年上の胸の大きい
ヒロ好みの女の人がヒロと腕を組んだ……。

『ヒロ君、お待たせ！ 行く？』

『ああ。』

待って！ 行かないで！

アタシの願いも空しくヒロはこちらを一度も振り返らずに彼女と向こうへ歩いて行った。

『あの人、何の用だったの？』

『何でもないよ』

『え、怪しいなあ』

『ははは、ホントに何でもないって。俺の好きな人はアンタだけだよ』

『……ありがとう、ヒロ君』

やめて！ 誰かにそんな笑顔を向けないで！

誰かのモノになんてならないで！

アタシを アタシだけを見て！

お願い……だから……！

アタシの傍にいてよ……！

『おい、優子？』

ヒロ……。アタシを置いていかないで……。

『優子！ おい、優子！』

.....

『優子！ おい、優子！』

『……ヒロ？』

『どうしたんだ？ うなされてたぞ？』

『うん。少し嫌な夢を見て……』

そこまで言っつて初めてある違和感に気が付いた。

「何でヒロが此処にいるの？」

「秀吉に看病を頼まれてな。個人的にも心配だったし」
「そうなの……。」

時計を見ると、もう午後5時を回っていた……。

「食欲はあるか？」

「うん……。あまり食べたくない……。」

「ダメだ。食わないと薬を飲めないだろう。食欲がないなら、お粥でも用意してくるから少し待ってる。台所を借りるぞ」

「……うん」

ヒロは部屋から出て行った。

参ったな……。

あんな夢を見るなんて……あたし相当参ってるんだろうなあ……。しばらくして、お粥を持ってヒロが戻ってきた。

「起きれるか？」

「ちよつと辛いかも……。」

「ほら、つかまって」

ヒロが差し伸べた手を掴みベットから上体を起こす。
体を起こしたらヒロは慌てて眼を逸らした。

「優子！ お前なんつう格好で……！」

「え？ あ！」

そう言えばアタシは下着姿だった……。
忘れてた！ あまりにも熱いから寝ている最中に寝間着を脱いだんだった！

「オ、オレは部屋の外にいるから着替えたら教えてくれ！ あっ！
あと汗を拭いておくのも忘れるなよ！ 濡れタオルはここに置いておくから！」

ヒロは慌てて部屋から出て行った……。

うう……。恥ずかしい……。

今回はかりは自分のズボラな性格を呪うわ……。

けど……。心配して来てくれたんだ……。

嬉しい……。

やっぱりアタシは……。ヒロの事が好き……。

優しいところも、繊細で傷つき易いところも、少し天然なところも、アタシを秀吉のスペアとしてではなくアタシとして見てくれるところも……。ああ見えて寂しがり屋なところも……。みんな、みんな……。大好き……。

.....

着替え終わってヒロを呼んだ。

ヒロの顔はまだ赤かったけど……。一応アタシを女の子として認識してくれてるってことよね、これは……？

ああ、熱のせいか思考がボヤけてる様な気がする……。

枕もとに濃度を薄めたスポーツドリンクを置いて、お粥を入れた小さな鍋の蓋を開ける……。

中から湯気が立ち込めてすごく熱そうだった。

「優子、お前熱いのは平気か？」

「え？ うん、少し苦手……。かな？」

「そうか。それじゃあ少し冷ました方がいいな」

そう言ってヒロはレンゲでお粥を掬い、冷まし

「はい、あ〜ん」

「……………」

「どうした？」

「自分で食べられるから……………」

「あ、悪い……………。静馬にもやっていたから、つい……………」

「そうなんだ……………」

ヒロはこういう事をテキパキとこなしていく……………。

正直スボラなアタシから見たらすごい事だとは思っけど……………きつとそれはそうしなくちゃいけない環境だからだったのかな……………？
だったらヒロはいつ誰に支えてもらってるんだろっ？

お爺さんが清涼祭の時に言っていたあの言葉が頭から離れない……………。
本当にいつか壊れてしまわないだろうか……………？

「それじゃあ……………」

「やっぱり……………食べさせて……………」

アタシはヒロの服の袖を掴み、お願いした……………。

支えたい、と思うと同時にヒロに甘えていたい、と思う自分がいる……………。

いいよね……………？ 今だけは……………

ヒロは小さく微笑みアタシの我儘を聞いてくれた……………。

……………
……………
……………

ヒロSIDE

優子は飯を食い終わった後、薬を飲んですぐに眠ってしまった。耳に当てるタイプの体温計で計った温度は37度8分……。

まだ少しあるな……。

優子の方を見るとあどけない表情で寝息を立てている……。その様子を見て、つい笑ってしまった……。

ゆっくりお休み……。

さて、オレは優子が寝ている間にある事をしようと考えていた……。それは　この家の片づけだ。

さつき台所を拝借したときに流し台を見たが……アレは無い……。洗い物が山のように溜まり、黒い彗星が出てくる始末……。

いくら両親が旅行中だからと言ってもアレは酷過ぎるだろ……。このまま放置して帰る事は可能だが、あんな惨状を見てそのまま帰るのは、オレの中の主夫としてのプライドが許さない！

台所だけではない……。このリビングも何か月も掃除機をかけていない様な汚れ方をしていた……。

靴下の裏が埃で真黒だ……。

そして何より酷いのが優子の部屋！

“リアルのため”の部屋と言えばどれくらい酷い状態か分かってもらえるだろうか……？

失礼な事を考えるようだが、秀吉の“鉄の胃袋”はこの不衛生な環境が作り出したものだろうか？

まあ、いいや……。

秀吉が帰り次第すぐに片づけに取り掛かるう！

「ただいまじゃー！」

「お帰り、秀吉くん！ お片づけにする？ お掃除にする？ それとも大掃除にする？」
「全部意味が同じなのじゃ！」

さて秀吉も帰ってきたことだし、お掃除スタート！

.....

「終わった……」

「さすがにきつかったのじゃ……」

「そう思うなら定期的に片づけろ……」

「母上に言っただけじゃ……」

「自分で何とかしようって気はゼロかっ！？」

優子の部屋以外の場所の片づけを終え、外を見ると朝になっていた。
.....
長い時間をかけた甲斐があり今やそこらじゅうがピカピカだ。

あっ！ やつべ……！ ジジイに外泊するって連絡してないや……。
……帰ったら一、二発殴られる事は覚悟しておこう……。

「さて……優子の様子はどうか？」

.....

「おはよう、優子。調子はどうだ？」

「おはよう。うん。大丈夫。熱も下がったみたい」

「そうか。それは良かった。けどもう少し寝てろ。朝飯は何が食いたい？」

「えっと……あっさりした物が食べたいな」
「オーライ。少し待ってる」

.....

「秀吉、それとっつけてくれ」

「了解じゃ。何を作っておるのじゃ？」

「和風、トマトと大根の卵とじスープだ。あっさりしていて低カロリー！ 女性に人気のメニューだ」

「確かに美味そうなのじゃ……」

「お前の分もちゃんと作ってあるから安心しろ」

「わーい、じゃー！」

朝食も出来上がり、優子の部屋に運ぼうと思っていた矢先に何の脈絡もなくキッチンのドアが勢いよく開いた……。

『ただいま！ 秀吉！ 優子！ お父さんが帰ってきたよ〜！』

「父上？」

「え？」

「ん？」

優子と秀吉の父親？と思わしき人物はオレを見て固まった……。

そして黙って扉を閉めた……。

とりあえずどう説明したらいいものか、と考えていると再びキッチンのドアが開いた。

「やあ、はじめまして。どなたかな？」

「あ、えっと……はじめまして。秀吉君と優子さんの学友の烏丸大貴と申します。」

「ご丁寧にも。僕は秀吉と優子の父の木下日吉です。よろしくニコヤカにあいさつしてきて、握手を求めてくるがオレは騙されない！
なぜなら後ろ手に隠している鉈がチラチラと背中から見え隠れし、その存在感をアピールしているからだ……。
もしかしくなくても……オレ今人生最大のピンチ!？」

『あら、あなた。どうしたの？ 鉈なんて持ち出して……』
「なんでもないさ。ただ娘につく悪い虫を農薬番長よろしく……じやなくて、駆除を……」

「あら。あなたが優子や秀吉の話によく出てくるヒロ君じゃない？」
「え？ あ、はい！ あなたは……？」

「はじめまして。優子と秀吉の母です」
「あ、はい。よろしくお願いします。なぜオレの事を？」

「それはね、優子の部屋にあなたの写真が」
「そんな事は今どうでもいい！ 問題はこのゴキブリ野郎をどう始末するか、だ！」

「い、いや！ 始末って!？」
「大丈夫！ 日本の憲法では娘を守るためなら、【検閲削除】までは許されるから……!」

「何が大丈夫ですか!？ 勝手に憲法の内容を改竄しないでください！ そんな恐ろしい憲法は世界中どこ探したってありませんからね!？」

「問答無用！ とつとと死ね!」
「うわっ！ 危ねえ!」

振り下ろされる鉈を半身になって避け、オレは全速力で逃げ出した……。

どこか！ どこか安全な場所は！？

「待〜て〜！ ゴキブリ野郎〜！ お〜ま〜え〜は〜こ〜ろ〜す〜
！」

「怖っ！ めっっちゃ怖っ！」

ひたすらオレは鉈を振り回すオッサンから逃げ惑う。

いつの間にか“リアルのため部屋”……もとい、優子の部屋に逃げ込んでいた。

「え？ ヒロ！？ どうしたの！？」

「助けて、優子！ このままじゃオレ殺される！」

「見〜つけた」

「うわ〜っ！！」

「チヨロチヨロすんじゃねえ〜！」

「お、お父さん！？」

「やめるのじゃ、父上！ ヒロは姉上の心配をしてわざわざ看病をしてくれとおったのじゃぞ！？」

「あら？ 今どき珍しいくらいいい子じゃない？」

「そんなの下心があるに決まってる！ さあ、死ね！ 今、死ね！
すぐに死ね！」

「うわわわわっ！」

優子の部屋でもお構いなしに鉈を振り下ろす木下父！

その鉈をよけまくるオレ！

あっという間にカオスな空間の出来上がり

木下父の振り下ろした鉈が置いてあった段ボールを破壊した……。そして段ボールの中身が部屋中に雨あられの如く飛び散った……。飛び散ったブツを見てオレは思わず固まった……。

そこには 【ユウタ×シンジ 伝説の木の下で貴様を待つ！】
吉井明久×坂本雄二 君だけが僕の相棒】 【烏丸大貴×木下秀吉
ワシはお主の事が好きなのじゃ！】その他諸々……

優子つてもしかしてというか、やっぱり

「腐女子、なのか？」

「~~~~~っ！ 忘れなさいいいいっ！」

「優子！ ち、違っ！ その関節はそっちには曲がらなっ

！ ぎゃああああああああああ！！ な、何でお前オレの関節
を極めてるんだ！？」

「いいから忘れなさい！ この痛みで記憶を全部書き換えてあげる
から！」

「待て待て待て！ いいじゃないか、別に！ 腐女子でも！ 別に
これくらいでオレはお前の事好きって事は変わらな ノオオオオ
オオオツ！ 腕が変な方向にいいいいっ！？」

「バ、バカ！ アンタが変なこと言うから力加減間違えちゃったじ
やないっ！ そう言う事は二人きりの時に言っつてよ！」

『さて、あなたにも罰があるからね？』

『待て！ 母さん！ それよりあのゴキブリの退治を ! っつて
ぎゃあああああっ！』

その日、木下家から男二人の悲鳴が上がった……。

この事がきっかけでオレは木下母に大いに気に入られ、木下家に頻
繁に出入りすることになるのだがそれはまだまだ先のお話……

外伝 第8話 入れ替わりパニック！【前篇】

文月学園広告

君の若い力を学園平和の為に役立ててくれないか？
我々FFF団は、Fクラスの 学園生活全体の秩序を守る為、若い力を募集しております。この学園の平和を保つ、という崇高な目的へと邁進していきませんか。

業務内容

自らの強い想いを真心どんきに乗せて相手に叩きつけるだけの簡単なお仕事です。

使用する業務機器の種類も豊富。勿論持参も大歓迎。
初心者の方も安心。優しい先輩達が懇切丁寧に指導します。

給与

月給：1AP 現物支給！

なんと、5APで1HPに交換可能！

更に能力に応じた歩合給も！

詳しくは実際にお問い合わせください！

AP=Akityann Photograph

HP=Hdeyossi Photograph

2-F 須川亮 xxxxx

協賛 〓いつもあなたの真後ろに〓ムツツリ商会

「なんでやねん！ 何処からツッコミを入れるべきか分からんわ！」
byFFF団処刑人

.....

「 という訳でAクラスを使って文月学園のプロモーションビデオを作るうと思うんだよ。いいかい、高橋先生？」

「 はい、学園長。私からは反対する理由はありません」

「 やれやれ、助かるよ。最近どうも何処かのバカ共のせいで学園の評判が悪いようですねえ.....」

「 心中、お察しします」

「 それで、Aクラスの生徒のうち何人が出演してもらいたいんだけど、誰を出したら良いかねえ？」

「 そうですね.....。学年主席の霧島翔子さん、次席の久保利光くんを中心に撮影するのが妥当かに思えますが、あの二人は残念ながら愛想に欠ける部分がありますので」

「 くくくつ.....。あんたがそれを言うとはね」

「 客観的な意見を述べたまでです。私自身も愛想に欠ける事は重々承知ですから」

「 おや、気分を悪くしたかい？ それはすまなかつたね。話を続けておくれ」

「 いえ。.....そうなると成績優秀で勤勉、明るい性格の生徒と言う事で 木下優子さんを中心に制作するのがよろしいかと思えます」

「 ふむふむ。一人だけかい？ 他にはいないのかい？」

「 いないことはありませんが、若干のリスクを伴うかと」

「 リスク？」

「 はい。例えば工藤愛子さんという成績優秀で明るい性格の生徒がいます」

「 ふむ」

「 彼女を中心とする場合流れによっては、モザイクや検閲削除などの処理が必要となってくる可能性があります」

「 Aクラスだけは.....まともだと思っただけだねえ.....。」

「学園長、今のは私の冗談です」

「あなたの冗談は全く笑えないさね!？」

「ただ、彼女は少々性に関して奔放なところがありますので、勤勉な学び舎をイメージさせるには不適かと」

「そうかい。……それじゃあ木下優子って子を中心に作るうか。本人にこの話を伝えてもらえるかい？」

「わかりました」

「ところでその子は歌も達者かい？」

「と、仰いますと？」

「家の合唱部は人数が少ないからね。校歌の斉唱もその子を中心にAクラスの生徒と合唱部でやって貰いたいのだ」

「それは分かりませんが、恐らく彼女であれば問題ないでしょう双子の弟の木下秀吉君は演劇部でオペラをこなすほどですので、姉の彼女にも素質はあるかと」

「それはまた何でも出来る素晴らしい生徒さね」

「ええ。彼女ほど品行方正で見目麗しく、成績優秀且つ社交性に富んだ模範的な生徒は他にはいません」

.....

優子SIDE

ヒロの告白紛いの発言は、あの後再び暴れ始めたお父さんの所為で有耶無耶になってしまった。

そしてあれから3日……

ヒロとはまだ顔を合わせていない……

現実逃避も兼ねて、楽な格好で乙女小説を読んでいた……。

「……………はあ……………」

「どうしたのじゃ、姉上？ 似合わないため息をついて……………。ヒロ

の事かのう?」

「まあ、ヒロの事もそうなんだけど……」

「ヒロの事以外での悩み事かの?」

「……秀吉、アンタ確か歌とか得意よね?」

「歌? まあ得意と言っただけではないが、姉上よりは幾分かマシじやのう?」

「クッ! 言ってくれんじゃない!」

腹立たしいけど事実だから仕方ない。どうして秀吉に出来る事がアタシには出来ないんだろ?

「姉上は歌ができなくともワシより勉学の才能があるから良いではないか」

「今だけ勉強より歌の才能が欲しいわ……」

どういう訳かアタシには歌の才能と言う物が致命的に欠けている……

……。声質はそんなに悪くないんだけど、音感と言うのがアタシの中に存在しないのだ……。

カラオケに行っても専ら手を叩くだけだ。

「なんじゃ? 姉上は人前で歌声を披露する機会でもあるのかの?」

「その通りよ。高橋先生が『木下さんにしかお願いできないことなんです』って言って学園の紹介ムービーに参加して欲しいって……」

「学園の紹介ムービーと言う事は校歌でも歌うのかの?」

「『ご名答よ。……ハア……』」

ヒロの事も考えないといけないのに……

何でこう次から次へと問題が……

「そこまで言うのなら、高橋女史に頼まれた時点で断れば良かったじゃろうに……」

「絶対に嫌！ せっかくここまで何でも出来る完璧な優等生を演じてきたのにこんな事でギブアップなんて冗談じゃないわ！」

「姉上の見栄っ張りも筋金入りじゃのう……。ヒロの前では化けの皮が剥がれておるんじゃし、もう観念した方がいいと思うのじゃが……」

「木下家の血の様な物でしょ？ アンタは舞台上で役を演じる。アタシは日常生活で優等生を演じる。お父さんはヒロを抹殺するために友好的な人物を演じるってね」

「ヒロも災難じゃのう……。しかしそう考えるとワシらは似ておるのかも知れんのう」

認めたくないことだけど、性別や性格はともかくアタシ達の本質は似てるのかもしれない。

外見なんて身内ですら間違える位そっくりだし……

「……（じーっ）」

本当にそっくり……

「な、なんじゃ姉上？ ワシの顔に何か付いておるのかの？」

「アンタ物真似とか得意よね？」

「出来れば演技と言って欲しいのう」

「そんな事はどうでもいいの。……アタシの演技とか出来る？」

「それ位なら簡単じゃ。姉上の特徴は把握しておるからのう」

「そうよね。生まれてからずっと一緒だもんね」

「まさか姉上……。ワシに代わりをさせるつもりでは……？」

「そのまさかよ。アタシの制服を着て胸に詰め物でもしたら、余程の事が無い限りバレにでしょ」

「胸に詰め物？ 何を言っておるのじゃ姉上。その程度のサイズであれば詰め物などしなくとも あ、姉上、違っ！ その関節はそ
つちには曲がらな……っ！」

「秀吉アタシね、いますつつつごく困ってるの。お姉ちゃんのお願
い、聞いてもらえないかなあ？」

「ワシも今凄く困っておるのじゃが!？」

「じゃあ、お互い様よね？ 姉弟仲良く助け合いましょ？」

「いや、その理屈はおかしいと 痛たたたたっ！ りよ、了解じ
や！ 喜んで姉上の代役を引き受けよう！」

「そう、じゃあアタシもアンタの腕を折るのを勘弁してあげる」

入れ替わりが終わるまでは……

「うう……。姉上は暴力的で困るのじゃ……。」

「何言ってるのよ。ヒロはアンタの数倍は関節技を受けてるのにピ
ンピンしてるのよ？」

「体の頑丈なヒロと比べないでほしいのじゃ!」

確かにヒロの体は相当頑丈だ。普段おじいさんのトラップに加え、
アタシの関節技、そして最近はお父さんが隙あらばヒロを暗殺しよ
うとして狙ってるみたいだし……

少し自重しないとヒロに愛想尽かされてしまつかもしれない……。

「明日の放課後に体育用具室で、待ち合わせしてお互いの服交換し
よっか。……詰め物はアンタが必要が無いって言うのならしなくて
いいから」

「明日の放課後？ それは拙いのじゃ。補習があるのじゃ」

「それに出ないと拙いの？」

「うむ。出ないと留年の階段を一段上ってしまうのじゃ」

「アンタどれだけ頭悪いのよ……?」

「そればかりは返す言葉もない……」

「そう言う事なら仕方ないわ……。アタシがアンタの代役をしてあげる」

「姉上が？」

「何よ？ アタシだとアンタの代役は務まらない、とでも言うの？」

こいつに出来てアタシに出来ない事なんて歌以外は無いはず！

「いや、姉上にワシの代役だ出来ないとは言わんが……。くれぐれもクラスメートとの無用な接触はないように頼むぞい……。特にヒロは勘が良い上に、ワシらの違いが気配でわかる、と以前言っておった……」

「ヒロは特に警戒しないとイケないわね……」

「まあ、今のヒロなら誤魔化しきれると思うがの」

「？ どういう事？」

「実際に見ればわかるのじゃ。それより入れ替わりがバレないように頼むのじゃ。入れ替わりがバレたら」

「バレたら？」

「翌日からワシは本物の女じゃと思われてしまっじやろう……」

「アタシが入れ替わつてると考えないで、アンタが実は女だと考えるなんて……。流石はFクラスね……」

「じゃからくれぐれも接触のは気を付けてほしいのじゃ」

「わかったわ。そっちも絶対にはれないようにね。上手く言ったら今度お礼するから」

「任せておくのじゃ」

.....

「ホントにアンタアタシにそっくりよね」

「双子じゃからな。似ておっても不思議ではあるまい」
「二卵性なんだからここまで似なくてもいいと思うんだけど……」

とは言っても今回は似た容姿のお陰で入れ替わりが出来るんだから、少しは感謝してもいいかもしれない……。なんだか嫌な予感はあるけど……

「では、行ってくるのじゃ」

「あ、待って。コレをつけて行きなさい」

「これは盗聴器？ 姉上、こんな物何処で手に入れたのじゃ？」

「アンタの友達に頼んだら貸してくれたわ」

アンタの寝顔写真と引き換えに……ね。

「ムツツリー二じゃな。あやつにも困ったものじゃ」

「アタシはそれでアンタの行動をチェックするからね」

「監視などせずともワシは姉上の代役をきちんと務めて見せるのじゃ」

「アンタの『きちんと』は全然信用できないのよ」

「まあ、良いじゃろう。コレを持っているだけで姉上が安心するというのがなら、そうしよう」

秀吉はタイの裏に盗聴器をつけて、体育用具室から出て行った。

さて、アタシも秀吉の代わりに補習に出ないとね。

.....

『しまった！ 須川が窓を伝って隣の教室に逃げたぞ！』

『あのブタ野郎！ 異端審問会の血の盟約に違反してDクラスの玉野さんと番号交換をしていたという噂は本当だったのか！』

『いいか！？ 今より奴は会長ではなく異端者だ！ 必ず見つけ出して異端審問会にかけるんだ！』

『『了解！』』』

「ホントに何やってるのよーっ！」

Fクラスに入ると鞭や蠟燭を持った覆面の集団が忙しなく駆け回っていた……。

何なの、こいつら！？ どうして補習中だつて言うのに授業の準備すらしていないの！？

つて言うか授業云々以前にその装備は何！？ どこの武闘派宗教団体！？

『処刑人烏丸！ お前の力を借りたい！』

ヒロの名前を聞いた途端アタシは自分の心臓の音が聞こえてくるくらい胸が高鳴っているのを感じた……。

アタシの家で看病してくれて以来だ……。

あの時は下着姿を見られたり、お粥を食べさせてくれたり、告白紛いの爆弾発言を投下されたり、と色々とあった……。

あの時の『好き』ってどういう意味だったんだろう？

あの時の夢が脳裏から離れない……。

このままじゃ愛子が言つてた『ヒロを誰に取られてしまう』っていう事が現実になってしまいかも知れない……。

ヒロを誰にも渡したくない……。

他の誰かに取られるなんて絶対に嫌……！

ヒロに会ってから感情に歯止めが効かなくなってきた……。
アタシってこんなに独占欲が強かったんだ……。

『何だよ？ 何か用か？』

ヒロの声が聞こえてきてアタシは我に帰り、後を振り返った。
そこには眼の下にクマを作り、疲れた顔をしたヒロがいた。

『異端者須川を処刑に力を借してくれ！』

「パス」

『何故だ！』

「メンドイ。それ以上の理由はない」

そう言ってヒロは再び頭を抱えて何か考え事をしていた……。

『く……！　こうなったら！　協力してくれるならこれを贈呈する
！』

「なんだよ。ここ3日間寝れなくて、疲れてるんだからエロ本くらいじゃ動かねえぞ……」

『木下優子の体操着姿の写真を1ダース！』

「……ネガごと寄せ」

『よし！　要望に応えよう！』

「よっしゃ！　協力させて貰おう！　学園の風紀は守られなければならない！」

『その通りだ！　処刑人！』

『豚ども！　FFF団を愛しているか！？』

『生涯忠誠！　命を賭けて！　闘魂！　闘魂！　闘魂！』

『草を育てるのは！？』

『異端者の血だ！　血だ！　血だ！』

『俺たちの仕事は何だ！？　お嬢様！？』

『粛清！　粛清！　粛清！』

『バカ者共があつ！　オレ達は粛清しに行くのではない！』

その言葉を聞いてアタシは少しだけホツとした。

そうよね。ヒロがこんなバカなことに力を貸すわけないわよね。

「オレ達は異端者を殺しに行くんだ！ 全員武器を取れ！ FFF
団出陣！」

『『『『『おおおおおおおおおおつ！！ サーチ&デー
ー スツ！！！！』』』』』

前言撤回……。神様……。あれがアタシの好きな人なんですけど
……。！？

「A～E部隊は奴を捕え次第異端審問にかける！ ケータイのメモ
リーの削除も忘れるな！ 番号交換に成功していた可能性も考えら
れる！ F～G部隊はあらゆる手段を行使して奴の悪評を流せ！
なお、F～G部隊の指揮はムツツリー二に一任する！ 暴れて来い
！」

「……………任せろ。Dクラスには念入りに流しておく」

「H部隊は船越先生 46歳（独身）の元へ向かえ！ 奴に人生の
墓場と言う物を教えてやるんだ！ I部隊、J部隊は校外逃走の可
能性も考慮して正門、裏門を張れ！ 最後にK部隊は教室で待機！
須川のカバンの中を検める！ 新たな情報が出てくるかも知れな
い！ オレも前線に出る！ 全員ケータイにはいつでも出れるよう
にしておけ！」

『処刑人烏丸！ お前自ら前線に出なくても……………！』

「止めるな、有働！ 事件は教室で起きてるんじゃない！ 現場で
起きてるんだ！」

ヒロ……。アンタ映画ネタ好きなのね……………。

それにしても……………ホントに何をやってるのよ……………？

報酬がアンタにそこまでさせるの？

アンタが望むなら体操着姿くらいいくらでも撮らせてあげるのに……………

「あつ。帰ってきてたんだ、秀吉！」

駆け回ってる覆面集団の一人がこっちに近付いてきて覆面を外した。学年どころか学校中で有名になってる吉井明久君だ。こんな事ばかりやってるからバカって言われるんじゃないかな？ 見た目はそれなりにマトモなのに勿体ない……。

「ん？ あれ？ 何だろ？」

「な、なに　ごとじゃ？　明久？」

吉井君がアタシの顔をじつと見つめてきた。

「いつもと何か違うような気がするんだけど？」

「き、気の所為じゃ！　ワシは至っていつも通りじゃぞ！」

油断したわ！　警戒しなければならぬのはヒロだけじゃなかったんだ！

「そうかな？　いつもはもっと……こう……女の子らしくて、可愛らしいような気がしたんだけど……？」

どうしよう。このバカの喉笛を搔っ切りたくなってきたじゃない…

…！

「ところで補習はどうしたのじゃ？　みなそれ所ではないようじゃが」

「さつき鉄人がプリントを置いて行ったよ。それをやった後、解説授業するんだって」

「それで自由に動き回っているのじゃな」

「そうだね。鉄人が来るまで自習みたいなものだからね」

西村先生も紹介ムービーの準備をしているのかな？ そうじゃなければ少しの間とはいえ、この危険なクラスから眼を離すとは思えないし……

「それはそうと、やっぱり雰囲気だけじゃなくて声もちよつと高い気がするんだけど、風邪でも」

『報告！ 新情報です！ 須川の悪評を流す為にF部隊がDクラスの玉野と接触したところ彼女は須川には興味が無く、それよりも『アキちゃん』について教えてほしい』と繰り返していた。繰り返す！ Dクラスの玉野は吉井明久に興味有り！』
「さらばだっ！」

吉井君は覆面を投げ捨てて脱兎の如く逃げ出した。

しかしハリセンが眼にも留まらぬ速さで飛んできて、畳に刺さり、吉井君の行く手を阻んだ……。

「オレが逃がすと思つたか？」

「ヒ、ヒロ……？ ハリセンが畳に突き刺さってるんだけど……？」

「特注品だからな」

「あ、そうなんだ。特注品だったら刺さるよね！」

「ああ。特注品だから畳に刺さるし………異端者の処刑にも使えるんだ……！」

「そ、そうなんだ……。あはははは！」

「そうなんだ。あははははは」

「「あはははははっ！」」

2人揃って笑い始めた……。

「ヒロ……」

「なんだ？」

「どうして現場に血が流れるんだ！？」

「それは異端者がこの世にいるからだ！」

「台無しだ！ 台無しだよ！ ヒロ、君は青島刑事に謝るべきだ！」

「オレに部下はいない……！ いるのは（異端者を処刑するための）仲間だけだ！」

「隠した本音が丸見えだよ！ ヒロ、君は青島刑事に土下座して謝るべきだ！」

うん、アタシもそう思う……。

「さて、バカ話もここまでにしようか……。 覚悟は出来たか、明久……？」

「ダーーーーッシュツッ！！」

「良い逃げっぷりだ！ しかし！ 往生際が悪い！ 3日間徹夜のテンションを舐めるなよーっ！！ あーっはっはっはっ！ 逃げ惑え！ 泣き叫べーっ！ オレを楽しませて見せるおーっ！ はははははははは！」

ヒロは狂氣的に笑いながら吉井君を追いかけて行き、覆面の集団もそれに続いた。

どうしよう……。 アタシ好きになる人間違えたかも知れない……。 神様！ リセットボタンをアタシにください！

そして……。教室に誰もいなくなった……。

外伝 第8話 入れ替わりパニック！【前篇】（後書き）

長いので前、後篇分けます。
続きをお楽しみに！

外伝 第8話 入れ替わりパニック！【後篇】

さて、誰もいなくなったことだし、秀吉の行動のチェックでも……イヤホンを耳につけてスイッチを入れる……。耳障りなノイズが走った後、徐々に音声クリアになった。

『 下さん、ありがとう。』

『 え？ アタシ？ 久保君にお礼を言われることしたっけ？』

あ、聞こえた。いつもの秀吉の声とは違うけど、これがアタシの普段の声なのかな？
少し違和感を感じる……。。

『 ああ、君と話したおかげで勇気が出てきたよ。クラスメイトに同志がいると知れただけでも心強い！』

『 同志？』

久保君と雑談中？ と言う事はまだ撮影は始まってないのかな？
けど、久保君と同志って一体どんな会話を……？

『 まさか木下さんがバイセクシャルだったとは驚いたよ』

あのバカ一体何を話したのよーっ！？

『 よかったら烏丸君との仲を応援させてくれないか？ 僕で出来る事なら何でも協力させてもらうよ。この痺れ薬を使うかい？ それとも手錠を貸そうかい？ 取って置きとして媚薬もあるよ？』

『えっと……。そうね……。どれにしようかな……。？』

こうしちゃいられない！ あのバカ殴つても止めないと！
Fクラスを飛び出し、Aクラスの教室の扉を勢いよく開ける。

「あら秀吉。どうしたの？」

「姉上、ちょくちょくとよろしいかの？ 大至急向こうで内密に話し合いたい事があるのじゃが」

「？ よく分からないけど、いいわよ。それじゃ、久保君。ちよつと失礼」

アタシの殺気に気付くことなく秀吉はアタシの演技を続けている。
そして誰もいない階段の踊り場まで連れて来た。

よし。ここなら……。殺れる！

「アンタ、久保君に何を話したのかしら？」

ヒロ曰く【すごくいい笑顔】で質問する。

勿論関節をいつでも極められる様に腕を掴みながら……

「んむ？ 他愛もない雑談をしておったのじゃが、その際に好きな異性の話になつての」

「うんうん。……。それで？」

「姉上の思考を読み『ヒロの事が好きじゃが、同性愛も好き』というニュアンスを伝えようと あ、姉上！ 違つ！ その関節はそっちには曲がらなつ」

「このバカ！ アタシがいつからバイになつたのよ！？ アタシはBLを見るのが好きなだけで、そっちの趣味はないわよ！ 誤解を招くような事は言わないでよー！」

「りよ、了解じゃ！ 次はしくじらないようにしようー！」

「ホント頼むからね」

とりあえず秀吉にこれ以上関節技をかけると撮影に影響が出るかもしれない。

口惜しいけど、今は先の事に集中してもらわないと……

この失敗は後でキッチリ体で清算して貰うからね……！

関節技から解放すると秀吉は腕をさすりながらAクラスに戻って行った。

アタシもFクラスの教室に戻らないと……

.....

『……優子』

『あ、代表。何？』

今度の話の相手は代表？

ああ。早く撮影が終わってくれないかしら？

このままじゃ入れ替わりがバレてしまいそう……。

『……スカートがめくれてる』

あのバカ！ またボロを出して！

演技云々の前に動きが無防備すぎるのよ！

アタシ達がスカートの時どれだけ気を使っているのか全然わかってないんだから！

『心配してくれてありがとう、代表。でも大丈夫なの』

『……大丈夫って？』

『見られても大丈夫ってこと』

『でもスカートが捲れたら……』

『うつん。それ位平気。だって今日は下着をちゃんと履いてるから……』

.....

「アンタ何て事言ってくれてるのよ!? アレだとまるでアタシが常にノーパンみたいじゃない!？」

「いつもと違ってスカートの下にスパッツを履いているから大丈夫という意味じゃったんじゃが」

「そういう風には全然聞こえないのよ!」

「じゃが、スパッツは分類的に下着に入ると」

「黙りなさい! ああいう迂闊な発言は二度としないように気をつけなさい! あと、スカートの裾には気をつけなさい!」

「じゃが姉上の服はスカートが短いし、ウエストがゆるくて動きにくいのじゃ」

「……それはアタシのスタイルが悪いって言いたいのかしら……?」

このバカ! 用が済んだら確実に始末してやる!

「とにかく! 動きには十分注意しなさい! あんまり挑発的な格好していると変な虫が寄ってきたら困るんだからね!」

「了解じゃ。気をつけよう」

「くれぐれも頼んだからね」

.....

『き、木下さん!』

『? 何? えっと』

『Fクラスの横溝浩二です。実は、えつと……、その……』

Fクラスの横溝浩二君？ 誰だろ？ あんまり話したことない子だ
と思うけど……

緊張してるみたいだし……まさか！？

『じ、実は僕……木下さんの事が好きなんです！ 付き合ってくださいー！』

やっぱり告白！？ でもよりもよって秀吉と入れ替わってるとき
に告白なんてタイミングの悪い人ね。

……秀吉と入れ替わってるからこそ、告白に踏み込んだなんて事な
んでないわよね？

気持は嬉しいけど、アタシはヒロの事が好きだし……この人の事も
よく知らないし、申し訳ないけどお断りさせてもらいたいかな？

『あの……気持は嬉しいんだけど』

『そ、そんな……！』

『ごめんなさい……』

相手をなるべく傷つけないように気を使った断り文句……

うんうん。流石は双子の弟ね。上手にお断りしてるわね。

……なんだか断り慣れてるのが釈然としないけど。

『それなら木下さんの好みのタイプを教えてください！ 僕頑張
って木下さんの好みの男になるからっ！そしたら』

尚も食い下がる横溝君。

少ししつこい気もするけど……そこまで好かれているのは悪い気は
しない……。

だからって、さっきの返事は変わらないけどな。

『それでも……ごめんなさい』

『ど、どうして……?』

『アタシはもう既にヒロと毎晩【検閲削除】するような仲だから…

…』

.....

「~~~~ツ! ???」

『どうした、烏丸?』

「いや、何か悪寒が……」

『いたぞ! 吉井だ! 天井に張り付いていやがった!』

『逃げたぞ! 追え!』

『処刑人! 指示を!』

「第1、第2分隊はそのまま明久を追撃! 第3、第4、第5分隊は回り込んで逃走経路を塞げ! その後徐々に包囲網を狭めれば奴は袋の鼠だ!」

『『了解!』』

「よし、散開! 抜かるなよっ!」

『『おおおおおおおおおっ!!』』

.....

「殺すわよ」

「あ、姉上! 顔は笑っているのに目が笑っていないのじゃ! 少し落ち着くのじゃ!」

「落ち着いていられるわけないでしょ！」

既に『ノーパン解放主義者』『バイセクシャル』『每晚ヒロと』検閲削除』の変態プレイを楽しんでいる』……という三重苦の変態扱い……。

音痴のレッテル貼られるより酷い事になってるじゃない！

アタシはどれだけ救いがたい女になってるのよ！？

「ワシなりに姉上の好みを分析したのじゃが……違ったかのう？」

「うっ……。全く違うってわけじゃないけど……。確かにそういう願望はアタシの中にある訳だし……。普段読んてる乙女小説にも頻繁にそういう描写は出てくるし……。けど！　そういうのはアタシ普段は表に出さないでしょ！」

「むう……。難しいのじゃ……。」

「自分を演技バカって豪語するなら『外でのアタシ』の演技を徹底しなさいよ！」

「むう……。確かにそうじゃ。すまぬ、姉上。ワシは『家の姉上』のイメージが先行してそちらばかり再現してしまったようじゃ」

「……アンタにとって家にいるアタシってそういうイメージなんだ……。」

自分ではもう少しマトモだと思ってたんだけど……。

「了解じゃ、姉上。今からきちんと『外の姉上』の演技を徹底しよう」

「もう色々と手遅れの様な気もするけどね……。」

毒食らわば皿まで！

ここまで来たらコイツに全部やらせよう……。失うものなんて何もなしね……。

.....

秀吉のせいで疲れ切った状態でFクラスに戻ると、いつの間にか吉井君が戻ってきていてこちらにやってきた。

「あれ？ 秀吉、どこかに行ってたの？」

「あ、吉 明久。うむ、トイレに行っておつての。それよりもう逃げ回らなくていいの？」

「うん。横溝君が秀吉のお姉さんに告白したって情報を聞いてみんなそっちに向かったよ」

横溝君ごめんなさい。あなたは多分今回の事でアタシの次に可哀想な被害者だわ……。

「全く横溝君も懲りないよね。先週秀吉にデートを申し込んで肅清されたばかりなのに、ダメだったら今度はお姉さんなんて」

前言撤回。横溝とかいう奴今度見かけたら全身の関節逆に曲げてやる……！

『あゝきゝひゝさゝ！』

振り向くと眼の下にクマを作った目の血走ったヒロがハリセンを両手に持って仁王立ちしていた……。

正直かなり怖い……！
腰が抜けるかと思った……。

「うわっ！ ヒロ！？ 待って！ 僕は」

「取引しないか？」

「へ？」

「さっきの『横溝が優子に告白した』って情報を洗いざらい吐けば、今回の依頼を破棄してお前の護衛に回ってやる」

「取引成立だね！ ヒロ！」

「お前の勇気ある決断に感謝する、明久！」

さっきまで血で血を洗うリアル鬼ごっこをしていたと二人はガツシ
リと握手をしていた。

男の友情って……謎だわ……。

情報を受取り、ヒロは何処かに電話している。

『もしもし、須川か？ ちょっと頼みがあるんだ。………………。あ
あ、FFF団を扇動して横溝を生きたままオレの目の前に転がして
くれ。報酬は……そうだな……。今度異端者が出た時に無料で処刑
を請け負うって事でどうだ？………………。そうか、やってくれるか！
恩に着る！じゃあ、朗報期待してるよ。またな！』

「ヒ、ヒロ？ 少しやり過ぎではないかのう？」

「止めるな、優子！ オレは優子を秀吉のスペアとして見ている奴
が死ぬほど嫌いなんだ！ ってあれ？」

「何言ってるのさ、ヒロ。ここにいるのは秀吉だよ？」

「そ、そのとおりじゃ！ ワシは秀吉じゃ！」

「ああ。悪い……。おかしいな？ 優子の気配だったんだけど……
？ 眠ってないせいで感覚鈍ってるのかな…………？」

す、鋭いじゃない…………！ アタシと秀吉の見分けを付けるなんて！
それと……嬉しい……。

やっぱりヒロはアタシを秀吉の代わりじゃなくてアタシをアタシと
して見てくれる……。

それは普段秀吉のスペアとして告白されているアタシとしては凄く嬉しい言葉だった……。この騒動が終わったらちゃんとヒロに告白しよう……。

そうアタシは固く決心した……。

.....

「秀吉、お姉さんと言えばさ」

「あ、姉上がどうかしたのかの!？」

「何慌ててるんだ？」

「な、なんでもないのじゃ……」

「秀吉のお姉さんだけど学園の宣伝用のビデオに出るんだってね。」

せつかくの自習だし見に行ってみない？」

「ん？ 確かにそうじゃのう。気になるし見に行くのも悪くないのう……」

「そうだな。面白そうだ」

Fクラスの教室を後にして、3人でAクラスに向かう。入れ替わりがバレないかさつきから気が気でない……。

「それにしても秀吉のお姉さんってすごいよね。可愛いし、勉強も出来るし、運動だってできるし、今日はカメラの前で合唱までやるんでしょ？ なんでも出来て凄いよね」

「そ、そうかのう……?？」

吉井君の無垢な瞳を前にして少しだけ罪悪感が湧いて来た。

ごめんなさい。アタシはホントは音痴でカメラの前で合唱なんて出来っこないんだけどね。

「甘いな、明久。なんでも出来る人間なんてものは存在しない！
『何でも出来る人間』イコール『人前でボロを出さない人間』とい
うのが森羅万象の絶対的公式だ！そして優子はああ見えて、ズボ
ラで凶暴な生物なんだぞ！」

ヒロが意地の悪い笑みを浮かべながら、アタシの本性を暴露する…
…。

今度、関節という関節を全部逆に曲げてやる……

腐女子であるという事は暴露しなかつたみたいだけど、それ以外に
も色々暴露しているみたいだし、ね……。
そんな物騒な事を考えていると吉井君がヒロに聞こえないように小
さく耳打ちしてきた。

「ヒロも素直じゃないよね。本当は秀吉のお姉さんの事が大好きな
のに……。あれ？ どうしたの秀吉？ 顔が真っ赤だよ？」
「な、なんでもないのじゃ……。」

関節を曲げる時少しだけ手加減をしてあげよう……。

『 『 『
『 『 『
『 『 『

「お。聞こえてきたな」

「秀吉のお姉さんが中心で歌ってるよ」

「校歌斉唱から先に撮ってるのか……」

「そうみたいじゃな」

「やっぱり秀吉のお姉さんってきれいだね」

「そ、そうじゃろ？」

吉井君の一言で少しだけ救われる……。

『 やっぱり』って事は普段のアタシも少しは綺麗に見えてるってこ

とだ。

「ヒロ、どうしたの？ 眉間に皺なんか寄せちゃって……」

「……少しだけ気になる事があっただけだよ。いや、気のせいだな。気にしないでくれ」

「う、うん。」

こうして文月学園のプロモーションビデオ撮影は無事に幕を閉じたのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

プロモーションビデオの撮影も終わり、Fクラスでヒロが深刻な顔をして何か考え事をしていた……。

「どうしたのじゃ、ヒロ？」

まさか入れ替わりがバレたんじゃ……
そう考え、後ろからヒロに声をかけた……。

「ああ……。……。あのさ、秀吉……。家で優子は何か言っていないか
ったか？」

「何か……。とは何じゃ？」

「いや……。この前家に行ったとき関節技をかけられてる最中に慌
ててポロツと本音が出てしまって……。凄く間抜けな告白みたいにな
ってしまっただけ……」

「ふむ……。その疑問に答える前に質問なのじゃが……。ヒロは姉上
をどう思っておるのじゃ？」

「……好きだよ。優子はオレにとって誰よりも特別な女の子だ……。
もし拒絶されたらどうしようって考えたら、夜も眠れなくて……」。

ははっ……、自分が情けないよ……。」

その答えを聞いてアタシの眼から涙が零れ、感極まってヒロに後ろから抱きついた……。

「ううえええええ！？ ひ、秀吉、何を　　ってお前、まさか優子か！？」

「うん……。ヒロ……。アタシもアンタの事が好き……。」

「え？」
「アタシは　　」

「待った！　かなり間抜けな告白だったからちゃんと言わせてくれ！」

「いいじゃない。間抜けな告白でも……。ヒロらしいじゃない……。」

「たまにはオレにもカッコつけさせてくれよ……。」
「うん……。じゃあ、言っ……。」

ヒロは立ち上がりアタシと向かい合った。

「……オレは　　優子の事が好きだ！　優子さえ良ければ　　オレと付き合ってください！」

「……。」

しばらくの静寂の後、優子はゆっくりと歩き出した。

「……アタシでいいの？」

「ああ。優子がいい。優子じゃなきゃダメだ……。」

「一歩、ヒロに近づく……。」

「アタシ、嫉妬深いわよ……？」

「無関心でいられるよりはいいさ……」

ヒロは肩を竦めて軽く笑う……。

そしてまた一歩近づく……。

「アタシ、アンタの言つとおり凶暴よ」

「今さらだろ？」

そしてまた一歩……。

「アタシ腐女子なのよ……？」

「大した問題じゃないさ」

そして…… 2人の距離はゼロになりお互い抱き合った……。

「浮気したら殺すわよ……。」

「肝に銘じとくよ……。オレはまだ死にたくないしな……。」

「……嬉しい」

更に抱きしめる力を強くする……。

そしてしばらくそのまま抱き合っていた……。

『烏丸！ 横溝を生け捕りにしたぞ！』

「「あ……っ！」「」

『『あ……っ！』『』』

FFF団の面々が生け捕りにした横溝を担いでFクラスに入ってきた……。

そしてしばらく時間は止まる……。

『……おのれ！ 烏丸……！ FFF団処刑人の身でありながら異端者まで墮ちるとは……！』

『しかも相手は秀吉だと！？ 皆の衆！ これを許してはおけるか！？』

『『『ふざけんなーっ！』』』

しまった……。

そう言えばアタシは秀吉の制服を着たままだった……。

「あゝ、待て待て待て！ お前らは大きな勘違いをしている。こいつは秀吉じゃなくて」

『諸君、ココはどこだ？』

『『『最後の審判を下す法廷だ！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』』

『よろしい。これより 2-F 異端審問会を始める。』

「話を聞けつて！」

『判決！ 死刑！』

「くっ……！ 聞く気なしか！ 優子！ オレは逃げる！ またな」

「あ、ちよつと！ ヒロ！」

『逃がすな！ 追撃せよ！ 奴は拷問してから1000回殺す！』

『『『サーーチ&デーリースッ……！』』』

「殺されてたまるかああああつ……！」

……

「……姉上よ」

「……何よ、秀吉」

「最近どうもクラスメイトの間でワシは実は女でヒロと付き合っておるといふ噂が流れておるのじゃが……」

「奇遇ね。実はアタシもクラスの間で木下優子は常にノーパンでヒロの【検閲削除】奴隷で、毎晩【検閲削除】プレイを楽しんでいるつていふ噂が流れてるんだけど……？」

「お前らはまだいいじゃないか……。オレなんか秀吉と優子の間で二股をかけていて優子のノーパンもオレの指示だつて噂が流れてるんだぞ……」

「……」

「姉上、ヒロ！ どうしてくれるのじゃ！？ こうなつてしまったらワシはますます男扱いされなくなつてしまつてはいないか！」

「アンタは大して今までと扱いは変わらないじゃない！ それよりアタシは優等生から一転して三重苦の変態よ！？ 責任取りなさいよ！」

「それよりオレだ！ 人格者つて評価から鬼畜の女たらしつて評価になつて、家ではトラップ！ 学校ではFFF団の襲撃！ 木下家では木下父につけ狙われて安息の地が何処にもないんだぞ！」

「姉上が入れ替わりなぞ言い出すから悪いのじゃ！ ヒロもヒロじや！ 何故よりによつてあんなタイミングで告白などするのじゃ！」

「自業自得でしょ！ 元はと言えばアンタがおかしな演技ばかりするからじゃない！」

「オレか？ オレの所為なのか、秀吉！？」

「そうじゃ、姉上とヒロが原因じゃー！」

「……」

「こうなつては仕方ないから放つておくかの……」

「それもそうね……。気にしたつて仕方ないし……」

「もう少し待てばもっと凄い話題が出てこんな話は忘れられるだ

ろっから(の)……」「
「それで本当にいいのかよ、お前ら……」

外伝 第9話 暴走兄貴

文月新聞

S田M波さん熱愛発覚！ お相手は野性味溢れる熱い、アイツ！

最近何かと話題に上がるFクラスだが一部の生徒の噂によるとFクラスの数少ない女子である島田美波さんに好きな相手がいるという話だ。

校内ランキングの“彼女にしたくない女”NO.1に輝く彼女だが、好意を表せずにいるいわゆる“隠れファン”が多いという事実も少なからず認められている。

要するに…… S田M波さんの熱愛のお相手はチンパンジー（要約）

ちなみに取材班は彼女に取材に赴いたところ、不幸な事故に遭ってしまったようで取材を断念……

彼女をよく知る人へのインタビュー

クラスメイトのY井A久さん

『とにかくシヨックでした……。』

奇しくもY井A久さんのコメントはS田さんの隠れファンの気持ち代弁することになってしまった。

自称【S田M波さんの恋人】S水M春さんへのインタビュー

『絶対に認めません。あの豚野郎ならまだしも、猿ごときにお姉さまを譲るなんて言語道断です。そもそもお姉さまには美春という恋人がいるにもかかわらず、そのような疑惑が持ち上がるだけで墳墓ものです。美春以外の誰がお姉さまのペタンコに触れるというの

ですか？』

S水さんは終始お怒りのご様子。尚、彼女がS田さんの恋人であるという確証は新聞部の方では確認がとれていない。

チンパンジーみたいな人にインタビュー

『貴様らしい度胸だな』

インタビューの趣旨を説明したところ取材班を全員拘束して補習室へと去って行った。本記者は幸いにも所用で遅れていたため、難を逃れる事が出来たが、これ以上のインタビューは困難を極めると予測されたため断念……。

お悔やみ申し上げます……。

新聞部インタビューアール2名：S田M波さんに取材中、全身の関節を逆に曲げられるという事故に遭う。

新聞部インタビューアール数名：N村教諭への取材以降行方不明……

「おいおい……。本当に来たよ。オレたちの変態疑惑を打ち消すほどの凄いニュースが……」 by FFF団元処刑人、鬼畜女たらしの変態

.....

優子SIDE

「どっやって渡そっ……」

ため息をつきながらきれいにラッピングされた包みと睨めっこしている……。

そして溜息……。

また睨めっつ……。

溜息……。

エンドレス……。

このやり取りを1時間ほど繰り返している……。

秀吉は呆れ混じりの視線をアタシに送り、部活に行ってしまった……。

……。

そしてまた繰り返すやりとり……。

不意にアタシの携帯電話に着信が入った……。

最近付き合い始めたばかりのヒロからだった。

『もしもし、優子！？ 緊急事態なんだ！ 至急オレの家まで来てくれ！』

電話してきたと思ったたらいきなり切れた……。

あのヒロが緊急事態だって言うくらいだからよっぽど大変なことな
んだろう。

まさか！ 烏丸本家の関係！？ それともおじいさんの体調が悪く
なったの！？

何にしてもヒロがアタシに助けを求めている！
それだったら急いで行かないと！

.....

ヒロの家に行くとき珍しくトラップのセンサーのスイッチが切られて
いた。

よほど深刻な事態に違いない……！

急いで家に上がり、今へ向かう……！

「ヒロ!? どうしたの!?」

扉を開けると……

ヒロと美波と姫路さんが怖い顔をして正座していた……。
どうやら集められたのはアタシだけではないみたいだ……。

何? 何なの!? この空気!?

「諸君、よく来てくれた……」

「な、なんなの? 一体……」

「少しばかり深刻な事態だから召集をかけさせて貰った……」

「深刻な事態って一体何ですか、烏丸君?」

「まさか烏丸の本家がアンタに何かしてきたとか!？」

「いや……。そんな事よりもっと重要な事だ……。」

烏丸の本家関係じゃないとすれば、どんな問題が起きたんだろう?
どんな大問題でも……覚悟は出来ているわ!

「明久と島田の妹……葉月ちゃんと静馬が今日一緒に出かけるらしい!」

「ええええええ!？」

「……………」

心配して損した……。

「優子、なんだ!? その冷めた視線は!? コレは由々しき事態なんだぞ!？」

「そうですね、優子ちゃん! 明久君が葉月ちゃんと一緒に出かけているなんて大問題です!」

「そつよ！ アキが葉月に何かしないかちゃんと見張らないと！」「静馬君も一緒でしょ……？」

ヒロと姫路さんと美波がここまで息がピッタリな様子をアタシはいまだかつて見たことない……。けど何でだろう？ 全然羨ましくない……。

「良く言った！ 姫路、島田！ その通りだ！ ムツツリーニ、カモーン！」

そう言つてヒロがパンパンと手を鳴らすと土屋君が天井裏から現れた。

「ムツツリーニ！ 明久の監視及び、静馬の初デート（保護者同伴）の記録を頼む！」

「……………報酬は？」

「FFF団の依頼を受ける時に須川から報酬として受け取った幻のお宝本！ 【きれいなお姉さんは好きですか？】シリーズの記念すべき第1巻を前金として！ そして成功報酬として2〜5巻（完結）を贈呈しよう！」

「アンタどれだけ年上好きなのよ!？」

「（グツ）……………任せておけ！」

「感謝する、ムツツリーニ！ 場合によっては明久を始末してくれて構わん！」

「……………言われずとも」

「さすがだ！ ムツツリーニ！」

「あ、アンタ達……………」

「ダメです、烏丸君！」

「そつよ！ アキを始末するなんて絶対にダメ！」

流石ね、二人とも。ヒロのバカな行動を見逃さないなんて……

「明久君のお仕置きするのは……私達です……」

「そうね……。お仕置きはウチらがやるべきよね……」

姫路さんと美波の眼から光が消えてる……？

何があなた達にそこまでさせるの！？

「よし！ それじゃあ明久の始末は姫路と島田に任せた！」

「……………（コクリ）」

「ダメでしょ！ アンタ達少し頭を冷やしなさい！」

なんでヒロは静馬君が絡むと思考が残念な方向に向くんだらう……？

「よし！ 出陣じゃーっ！」

「はい！」

「ええ！」

「……………（グッ）」

「ハア……。もう……。」

……………

静馬SIDE

「お待たせ！ 葉月ちゃん、吉井さん！」

「ううん。全然待つて無いよ」

「そうですっ！ 三人揃つてのデートですっ！ 葉月はすっごく楽しみですっ！」

本当は二人きりになりたかったんだけど、今日の目的はデートじゃ

ない。

それに兄さんには内緒にしておきたいから、兄さんと一番仲が良い友達の吉井さんに付いてきてもらう様に頼んだ。

「じゃあ、行こうか」

「はい(ですっ)！」

.....

優子SIDE

「何を話してるかまでは聞こえなですな.....」

「任せておけ。こういう事もあるかと思ってムツツリーニからすでに盗聴器を拝借している。各自このイヤホンを付ける」

「用意がいわね、烏丸」

「任せろ！」

「はあ.....」

アタシは今静馬君と吉井君と美波の妹の葉月ちゃんを尾行している.....。

土屋君は3人の動向をベストアングルで撮れるように別行動をとっている。

通行人の視線が痛い.....。

なぜなら今、アタシ達は全員黒ずくめにサングラス、黒い帽子という異様ないでたちだからである。

ヒロ曰く「尾行と言えばこの格好だろ！」と、言う事らしい.....
なんであの3人のはバレないんだろ.....？

.....

『バカなお兄ちゃん！ あれ取って欲しいですっ！』

『葉月ちゃん、ごめんね。今僕お金が……』

『あう……。ごめんなさいです。諦めるです……』

『葉月ちゃん、僕が取ってあげるよ』

『静馬君、いいのですかっ！？ ありがとうございますっ！』

『任せてよ！』

『わあ……。静馬君ってクレーンゲームが上手いなだね』

『任せてください！ お金を出すなら元はしっかりと取って見せませ！』

『変なところでヒロと血のつながりを感じるね……。』

『わわわわっ！ すごいです！ ぬいぐるみがドンドン取れて行くですっ！』

『ふふふふふ！ “クレーンの静ちゃん”の異名を持つ僕の腕を持つてすればこれくらい軽いものさ！』

『静馬君凄いですっ！』

.....

しばらく吉井君たちはゲームセンターで一緒に遊んでいる。

静馬君は葉月ちゃんにお願いされクレーンゲームでぬいぐるみを取っている。

たった30分であつという間にぬいぐるみの山が出来た……。

「ヒロ、静馬君ってあんなにゲームが上手かったの？」

「ああ。教えたのはオレだけど、今やゲームの腕はオレを凌ぐほどの凄腕だぞ、アイツは……。付いたあだ名がゲーセン荒らし、チビツ子ギャングだ……」

「アンタ達って絶対妙なあだ名を付けられてるわね……。」

とは言ったものの葉月ちゃんは静馬君に取ってもらったぬいぐるみを袋に入れて貰って静馬君に抱きついて大喜びしている。吉井君はそれを見て微笑ましいという様子で見っていた。

「ねえ、ヒロ。アタシ達別に見張る必要なんてないんじゃないの？」
「いやいや、ダメだろ？ こんな面白　ゲフン、ゲフン　大事なイベント見逃すわけにはいかないだろ!？」
「本音が丸見えよ、アンタ……」

……
……
その後商店街を回り、静馬君が何かを買っていた……。

そしてしばらく3人で楽しそうに遊びまわっていた。

「やっぱり邪魔するのも悪いわよ……。帰らない？」

「何言ってるんですか、優子ちゃん！　明久君が！」

「そうよ、優子！　アキと葉月が……！」

「どっちかって言うと吉井君と葉月ちゃんのデートっていうより、静馬君と葉月ちゃんのデートになってるし……。吉井君のことが好きなら、ちゃんと信用してあげないと……。」

「「っつ……！」」

痛い所を突かれて2人とも後ずさる……。

そして

「そうですね……。明久君を信用しないといけませんよね……」

「そうね……。アキが葉月に何かする度胸なんてないだろうしね……」

「あ……っ！ お前ら！」
「それじゃあ、烏丸。ウチらこの辺で……」
「そうですね。烏丸君、また明日学校で……」
「さて、まだこんなバカな事を続けるつもり？」
「くう……！ たとえオレ一人になろうとも！ オレには静馬の成長を見届けるという義務が……！」
「………………。気付いてよ、バカ……………」
「んあ？ 何か言ったか、優子？」
「何でもないわよ」
「???? まあ、いいや。レッツ 尾行！」
「はあ……………」

もう……………。『二人つきりでデートしよう？』 って振りだったのに…………。
鈍いんだから…………。バカ…………。
カバンの中に入れていた包みを少し強く抱きしめた…………。

……………
……………
……………

静馬SIDE

「吉井さん、葉月ちゃん。今日はありがとうございました。」
「うづん。いいんだよ。ヒロが喜んでくれるといいね？」
「静馬君はお兄ちゃん思いですっ！ 葉月は静馬君のそういつと」
「ろが好きですっ！」
「あ、ありがとう……………」

葉月ちゃんの言葉につい照れてニヤケてしまう…………。
葉月ちゃんに好きって言ってもらえた…………。
凄く嬉しいな…………。

葉月ちゃんの気持ちが今の時点で吉井さんに向いているのは分かっている。

何となくわかる気がする。

吉井さんは凄くいい人だ。

何より吉井さんは兄さんが認めるほどの人なんだ。

そうは見えないけどすごい人なんだろう……。

けど、僕は諦めない！

僕の葉月ちゃんへの気持ちは簡単に諦められるような軽い気持ちじゃないんだ！

きつと……いつかきつと……！

.....

ヒロSIDE

三人は歩きながら移動販売車でクレープを頬張っていた。

あの移動販売車は！ 幻のクレープを売っているって噂の！

運がいい時にしか出会えないという話題の移動販売車だ……！

クソウ……！ 尾行中でなければ絶対に買いに走るのに！

『痛てえな！ コラ！ このクソガキ！』

不意に盗聴器から聞こえてきた下品で粗野な声でハツと我に返り、静馬達の方に視線を移す……。

三人はガタイのいいチンピラに絡まれていた……。

どうやら葉月ちゃんが男にぶつかり、男の服にクレープをつけてしまったようだ。

『あー、あー！ どうするんだ！？ この服高かったんだぞ！？』

『慰謝料とクリーニング代して有り金、全部置いていきな！』

『ぎやはははっ!』』』

『ごめんなさいです……』

『すみません……。』

『ごめんなさい……。』

3人はチンピラに頭を下げて謝っていたがチンピラはますます調子に乗って3人に詰め寄る。

『ゴメンで済んだらケーサツはいらねえんだよ!』

『オラ、さつさと金だしな!』

男は下種な笑いを浮かべながら、葉月ちゃんを突き飛ばした

『あう……!』

『葉月ちゃん! 大丈夫!?』

.....

「アイツラ……! 生かしちゃおかねえ……!」

「ヒロ、ダメよ!」

「なんでだよ! このままじゃあの3人が!」

「今ここでアンタが助けに行ったら静馬君が傷つくからよ!」

「ぐっ……!」

「ここは耐えて! どうしようもなくなったとき、コッソリと手助けをするの! わかった!？」

「……。わかった……。けどアイツラが3人に手をあげたら……」

「……!」

「その時はアタシも止めないわ」

.....

.....

『この野郎！ よくも葉月ちゃんを！』

『吉井さん！ ダメです！』

『静馬君、なんで止めるんだ！ 葉月ちゃんが付き飛ばされたんだよ！？』

『でもここで喧嘩をすれば葉月ちゃんも巻き込まれます！』

『おうおう、そっちのガキは物分かりがいいじゃねえか！』

『わかってるならさっさと金だしな！』

静馬は何か考え込んだ後、財布を出す振りをして砂でチンピラの視界を塞いだ。

『今だ！ 逃げよう！』

『うん！』

『ハイです！』

眼つぶしをした後静馬達は脱兎の如く逃げ出した。

「そろそろいいんじゃないか？」

「そうね。暴れてきなさい！ おまわりさんに捕まらない程度に！」

「了解！」

『こっの！ クソガキが！』

『待ちやがれ！ 逃げんな！』

『クソツ！ なめた真似しやがって！ ぶつ殺してや』

「はい、そこまで……！！」

『あんだ？ テメエは！？ 妙な格好しやがって！』

『そこをどきやがれ！ あのガキ共ぶつ殺してやる！』

「それを聞いたら退く事なんて出来ないな」

あの3人を脅した事……後悔させてやる……！
サングラスを外し、ゆっくりと戦闘態勢に入る……。

『上等だ！ テメエからまずぶつ殺してやる！』

『覚悟がしやが ゴアツ！！』

背負い投げ！ 一本！

「オレを前に悠長におしゃべりしていいのか？ 余裕だな？」

そのセリフに皮肉をたっぷりこめてやる。

頭に血が上って静馬達の事なんて忘れるくらい……遊んでやるよ！
恨みならオレの所にどうぞ！

『この野郎！ 後悔させて』

『待て！ こいつ……！ もしかして！』

『なんだ？ 知り合いか？』

『まさか……！ そんな……！ お前、西橋の……カラス……！？』

『うええええええ！』

『まさか！？ あの暴走族を1人で潰したっていう！？』

『キレた拍子にビルを更地にしたって聞いたぞ！？』

『目からビームを出すって！？』

「おい、どんな噂を聞いたんだよ！？」

『ひい！ ごめんなさい、もうしません！』

『だ、だから殺さないで！』

『こここ怖いよ、お母ちゃん！！』

「あゝ、おい……？」

『『ごめ〜ん〜な〜さ〜い〜！』』

話しかけると、チンピラはダッシュで逃げて行った……。
お、オレの噂って一体……？

「えっと……正義は勝つ？」

「どう見てもアンタが悪役みたいだったけど？」

「……気のせいだ……。」

……

「はあ……。今日は疲れたわ……。」

「……あのさ、優子……。」

「何よ……？」

「今度の休み2人で何処かに遠出しないか？」

「え……？」

「優子が良ければだけど……。」

よくよく考えたら付き合っているのにデートに誘わないなんて無礼の極みだ。

今度の休みに優子の好きな所に付き合おう……。

「……ヒロ……これ……。」

優子はオレに綺麗にラッピングされた小包を差し出してきた。

「んあ？ 何これ？」

「アンタもうすぐ誕生日でしょ？」

「え……？ ああ、忘れてた！」

「忘れないでよ、もう……。だから……誕生日プレゼント……！」

「貰っていいのか？」

「その為に買ってきたのよ」

「やっべえ……！　すごく嬉しい！」

そして優子の照れる姿がすごく可愛い……！

「……………開けてもいいか？」

「……………うん」

小包がグチャグチャにならないようにそっと開く……。

中にはシンプルでセンスのいい腕時計が入っていた……。

その腕時計をつけてみる……。

「似合うか？」

「うん……！」

「そっか……。ありがとう、優子……。」

「どういたしまして」

静馬とジジイ以外から誕生日を祝ってもらえることがこんなに嬉しいとは……！

「ヒロ、帰ろっか？」

「そうだな」

夕焼けの商店街を2人で手をつなぎながら歩いて行く……。

そしてオレと優子は一緒に帰って行った……。

後日、この日のデートはオレの誤解で静馬が出かけていた理由はオレの誕生日のプレゼントを買うために明久と葉月ちゃんにプレゼント選びを手伝ってもらっていたことが発覚。

姫路、島田、優子に正座で5時間の説教を食らった……。

そしてこの日の優子とのやりとりをムツツリー二に撮られており、
FFF団に襲撃されたのは言つまでもないだろう……。

外伝 第9話 暴走兄貴（後書き）

静馬君救済計画第1弾！

出番の少ない静馬君に愛に手を！

って感じでノリで書きました。

ごめんなさい……。

第6部開始 第72話 暑い時に暑苦しい話をするべきではない……

次の単語を英訳しなさい。

『スペイン語』

姫路瑞希の答え

『Spanish』

教師のコメント

基礎英単語の一つですね。たまに頭文字のSが大文字になるのを忘れてしまう人がいます。そのようなケアレミスには充分注意しましょう。

土屋康太の答え

『Spensise』

教師のコメント

“Japanese”と同じような形で“Spensise”と書きたかったんでしょうか。残念ながら間違いです。

吉井明久の答え

『spagnet』

教師のコメント

どう解釈してもスパゲッティと書くこととしたようにしか見えません。

烏丸大貴の答え

『Spaghetti』

教師のコメント

……開いた口が塞がりません。

.....

夏だなあ……。

肌を刺すような強い陽射し、セミの鳴き声、オレが持ち込んだ風鈴の音、夏休みではしゃいでいる子供たちの声……。

夏だなあ……。

『夏は暑いから嫌いだ』と言う人もいるが、オレは夏は割と好きだ……。

女性の露出度が高くなる　ゴホン、ゴホン　それはさて置き、オレは暑さに滅法強い上に暑いと体がよく動く……。

毎年、夏には気温に比例してテンションが上がっていく……。

そして最近可愛い彼女まで出来てオレの人生は色々と絶頂期だ！

夏サイコー！　夏大好き！

そして今年の夏はいつも通り優子とデートして、バイトして、デートして、旅行して、デートする、という素晴らしい夏休みを過ごすつもりだったのだが、そうはいかなくなっている……。

なぜなら　Fクラスで西村先生の鬼の補習を受けていたからである……。

（逃げよう雄二、ヒロ。この魂の牢獄から）

（いいこと言うじゃねえか明久。オレもこの鉄拳補習にはもう飽き飽きしていたところだ）

（面白そうだから乗った）

（なんだかヒロ、テンションが高いね……）

（そうか？　暑いからじゃないか？）

（そうか……。暑すぎてついに頭がおかしく）

（人を可哀想な人みたいに言うのやめてくれないか？）

ボソボソと西村先生の補習から逃げだす相談をしているオレ達3人

……。
目線は黒板に向けたまま、腹話術の様に最小限の口の動きだけで会話をしている。

オレ達Fクラスは姫路、島田、秀吉以外みんな西村先生に眼をつけられてしまってるので、快適な学園生活を送る上では必須技術だ……。

スキルの無駄遣いというツツコミ野暮なのでしないように……！

（よく姫路はこんな状況で真面目にノートをとれるよな。アイツは化け物か？）

（流石は実力はAクラスレベルの優等生　　と言いたいところだけど、大丈夫かな？　姫路さん体が弱いのに……）

（その辺は西村先生だって配慮してるさ。ああ見えて細かい気遣いが出る人だ。その証拠に姫路は教室の一番涼しい場所にいるしな）

その代りオレ達は一番暑い場所にいる訳だが……

（で、どうやって逃げる？）

（なんだ明久、人を誘っておいて作戦は何もないのか？）

（策があつたら1人で実行してるよ）

（ここは王道の人海戦術とかはどうだ？）

（（乗った））

オレ達の会話を聞いていたクラスメイト達は秀吉島田以外の全員が脱走に参加の意思を表明した……。
本当にお前らは楽しい奴らだよ……。

（それじゃあ誰が捕まっても恨みっこなしで……。いいね、みんな？）

全員小さく頷き、了承した。

西村先生の動きを見計らう……。

感覚を研ぎ澄まして慎重に流れを読み切れ……。

西村先生が黒板に板書しようとするまであと約5秒……。

4……3……2……1……0！

行くぞっ！

「全員動くな！」

「……っ！」「……」

バカなっ！ 読まれていたのか！？

逃げようとしても体が動かない……！

まるで蛇に睨まれたカエルのようだ……！

「貴様ら、いい度胸だな……。そんなにオレの授業は退屈か？」

拙いな……。鉄拳制裁が来るか……？

「……そうか。お前らがそこまで退屈しているとは気付かなかった。これはつまらない授業をしていたオレの落ち度だな」

んん？ あれ？ なんだ？ らしくないな……？

西村先生の意外性たつぷりの言葉に軽く混乱しながら耳を傾ける。

「佻びと言っては何だが、一つ面白い話をしてやろう……。姫路、島田、木下は耳を塞げ……。」

ああ、なるほど。オレ達の油断を誘う為に態と態度を軟化させたのか……。

このあと行われるのは恐らく精神攻撃の類か？
そうとわかればバカ正直に聞いてやる事はない。
オレも耳を塞がせてもらう！

「烏丸！ お前は耳を塞ぐな！」

チヨークが飛んできてオレの額に直撃！

飛んできたチヨークは粉々に砕け、オレは激痛のあまり畳の上を転がり回り、のた打ち回っていた。

くう……！ オボエテロ……！

ようやく激痛も収まり、来るべき精神攻撃に備えて座禅を組み黙想する……。

色即是空……。

オレは今……空気と一体化する……。

頭の中には何も無い……無そのもの……。

来るなら来い！

「あれは十年前の夏　オレがブラジル人留学生とレスリングをやっていた時の事だ。」

『『『ぎゃああああああつー！』『』』

西村先生とブラジル人留学生のレスリング！

他の連中も苦しそうだが、オレは座禅を組んで頭を空っぽにしていたせいで暑苦しい状況を頭の中で鮮明に想像してしまった！

「相手は身長195？、体重120kgの巨漢、ジョルジーニョ・グランシェーロ、腕の太さが女性のウエスト位ありそうな男だった。対するオレも負けはしない。身長188？、体重97kgの鍛えに鍛えた肉体でヤツと正面からぶつかり合い」

『やめろー！ やめてくれえー！』

『脳があー！ 脳が痛てえよあー！』

『ママーっ！』

「死ぬーっ！ 死んでしまっーっ！」

何故同じスポーツの話なのに高校野球などと比較して爽やかさの欠片もないんだろう？

西村先生の精神攻撃から逃れるために必死に別の事を考えようと努力する……。

しかし強烈に脳裏に張り付いた暑苦しい映像がそれを許してはくれない……！

あっという間にFクラスの教室は阿鼻叫喚の地獄絵図へと姿を変えた……。

それに追い打ちをかけるように西村先生の話はせいじくわいごう続く……。

「しかし奴はレスリングと柔道を勘違いしていた。腕ひじきを仕掛けてきたんだ。だが俺の自慢の上腕二頭筋には勝てる訳もない。汗にぬれ、血管を浮かび上がらせながらも俺は腕を伸ばしきることなく抵抗を続けた。すると相手はすかさず俺の頭上に回り込み、その分厚い大胸筋で俺の顔を圧迫しつつ上四方固めを」

『ぐおおおおお！ いやだ！ 眼を閉じたくない！ 最悪のビジ

ユアルがまぶたの裏に張り付いて離れない！』

『起きねえ！ 福村が起きねえよう！』

『空気を！ 新鮮な空気をくれえ！』

「はははは……。いっそひと思いに殺してくれ……」

一秒が一時間以上に感じられる……。

狂ってしまえたなら……楽なのに……。

「そして制限時間いっぱいまで使ったオレ達の寝技の攻防は続き
ん？ もうダウンか？」

頭痛を堪えて周りを見渡すとクラスメイトは全員机の上に突っ伏し
て気を失っていた。

オレを含めたほとんどの奴らが頭から煙を出していたのは決して見
間違いではないだろう。

「やれやれ、仕方ない。十分間だけ休憩を入れよう。脱走な
んで、くだらない事を考えた自分を反省するように」

仕方ないのはアンタだーっ！

ありったけの怨嗟の感情をこめて西村先生を睨みつけた。

「なんだ、烏丸？ 続きが聞きたいのか？」

「滅相もございません！ 勘弁してください！」

オレは世界記録に残りそうな速さで土下座をしたのだった……。

.....

「あの明久君何があったんですか？ みんなとっても苦しそうな
んですが……？」

「なんと言うか……、言葉の体罰を、ね……」

「鉄拳制裁の方がまだマシだった……。」

「脱走なんて考えたんだから先生が怒るのも当然じゃない。しかも
烏丸まで一緒になって……」

「島田、昔とある登山家が残した名言を知っているか？」

「???? 何それ?」
「『どうして山に登るのか?』 『そこに山があるからだ』」
「聞いた事はあるけど……」
「そしてオレは今! この言葉を残したい! 『どうして補習をサボるのか?』 『そこに補習があるからだ!』」
「さすがだよ、ヒロ! 僕は君を心から尊敬する!」
「よせよ、明久。そんなに褒められると照れるだろ?」
「最近烏丸にバカが感染ってきているような気がするわ……」
「烏丸、バカは感染するものなんだ。お前だって例外ではない」
「ウチは感染ってないわよ!」

やれやれ、自覚が無いというのも困ったものだ。

どう考えても烏丸、姫路はFクラスの影響を受け、バカが感染すると思っぞ?

これを言つと烏丸に殴られそうなので黙っておくが……

「烏丸、ウチ今すぐあんたを殴らなければいけないような気がするんだけど?」

「それは間違いなく気の所為だな」

「しかし烏丸、実際に俺達の席は脱走を考えても仕方がないくらい酷い物だぞ。全身から水分が無くなってしまいそうだ」

「そうなの? ウチの席はそこまで酷くないから分らないけど」

「私も風が入ってくるから結構大丈夫です」

「俺達の席は日当たり最高、風通し最低のワーストポジションだからな」

「どれ位酷いんですか?」

「明久の成績くらいだな」

「何言つてくのさ。雄二の性格位でしょ?」

「どっちにしても人の耐えられるレベルじゃないな」

「『なんて事を言うんだ、この野郎!』」

オレの発言に憤慨して息ぴったりの文句を口にする明久と雄二。
やっぱりこの二人何だかんだ言っても仲がいいよな。

「でも確かにこの席はヒロの性格位酷い物だよ。さっきペンのアル
ミ部分を触ったら軽く火傷しちゃったしね」

「バカめ、オレの性格が悪い事に今頃気が付くとは」

「火傷したの？ どれどれ？」

「あ、いや。そんな大したものじゃないから」

島田は明久の火傷の心配をしている。

こういう優しい所を普段から見せておけば明久なんかイチコロだろ
うに……

「なんじゃ島田、明久に随分優しいではないか？」

「美波ちゃんは明久君に近すぎます！」

島田の行動を秀吉はからかい、姫路はすかさず牽制を入れる。

「べ、別にアキに優しい訳じゃ………！ 怪我してたらウチが殴ると
きに手加減しなきゃいけないし………！」

「どっちにしても殴るのか……。」

「けど僕は美波は優しいと思うよ。」

「え………？ アキまで何言ってるのよ？」

明久の言葉を聞き、島田は耳まで真っ赤にして慌てている。

「面倒見がいいし、細かいところまで気が付くし、妹思いだし。そ
れに動物に愛情を注ぐことができるし 異性として」

この間の部屋に飾ってあったオランウータンの写真を明久はそういう風に誤解したわけな。

「あんたまだそれ誤解してたの!？」

“まだ”って事は何度か誤解を解くために行動を起こしたのか……。哀れ、島田……

まあ、バカな……もとい、思い込みの激しい明久だし誤解を解くには更に強烈なインパクトのある情報で上書きしないと誤解は解けないだろうな。

例えば……島田が明久の事を好きだ、というくらいのインパクトのある情報とか……

「聞きなさい、アキ！ アンタは誤解しているだろうけど、ウチはオランウータンなんかに興味はなくてウチが本当に好きなのは！」

「……好きなのは?」「……」

島田の発言に今まで頭から煙を出して倒れていたクラスメイト達は起き上がり、島田に視線を集中させていた。

この状態じゃ島田は相当言いにくいだろうな……。

「……チンパンジーなのよ!」

「そ、そうなんだ……。そ、その……誤解しててごめんね……。」

「う……。そ、そうよ! ウ、ウチは別にオランウータンが好きない訳じゃないんだから!」

大胆不敵な告白を大勢の前でやらかした島田はその後、泣きそうな顔をして「ウチ、もうお嫁にいけない」と呟いていた……。

「島田、余計な御世話かもしれないが、いい加減素直にならないと後で泣く事になるぞ?」

「か、烏丸だつて優子とはどうなのよ!??」

「ん? 付き合つてるよ」

「ええええええつ!?!?」

オレの発言に姫路と島田がすごい勢いで食いついてきた。女子はこの手の話が好きだなあ……。

「い、いつからですか!?!?」

「1週間くらい前から」

「こここ、告白はどつちから?」

「オレ……かな?」

「デートは!?!? デートはしたんですか!?!?」

「ああ。2人で水族館に行ってきた」

凄い勢いで質問攻めにされている。

次の瞬間死角から大量のカッターナイフがオレの急所を正確に捉えるような軌道で降り注いできた。

オレは攻撃の気配を読み取り、愛用品である特注のハリセンでカッターをすべて叩き落とす。

『『『チツ……!』『』『』』

クラスメイトの怨念のこもった舌打ちが教室内に響き渡り、異端審問会の準備が始まっていた。

『諸君、ココはどこだ?』

『『『最後の審判を下す法廷だ!』『』『』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を！』』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』』』

『よろしい。これより 2 - F 異端審問会を始める。』

そして、いつものやりとりが始まった……。

「ヒロ、どうするのじゃ！？ このままでは暴動が起きてしまうのじゃー！」

「落ち着け、秀吉。オレがこの状況を予測してなかったと思うか？」

「……何か手があるのじゃな？」

「とっておきの手がある」

『異端者烏丸よ……。何か言い残すことはあるか？』

「ああ。言い残すことっていうより確認したい事と為になる話を、な……」

『聞いてやろう』

「感謝するよ。まず確認から……。お前らは要するに“オレが優子と付き合って幸せになる”って事が許せないのか？」

『『『その通りだ！』』』』

『“他人の不幸は蜜の味、他人の幸せは許さない”と言うのがFF F団の血の盟約……』』

「なるほど。よくわかった。ダメだろ？ そういう事言っていたら

……。聖書にも書いてあったぞ？ 『汝、隣人を愛せ』と……」

『『『知ったことかっ！』』』』

「これからオレはそんなお前たちに“愛の話”をしようと思う」

『『『聞く耳持たん！』』』』

「なんだよ。幸せのおすそ分けをしてやろうと思ったのに……」

『なんてムカつく奴なんだ！ かつてここまでふてぶてしい異端者がいたか！？ いや、いない！（反語）』

『全員、かかれ！ 人としての原形を残さないくらいスプラッター

にしてやれ!」

『『『おうつ!!!』』』』

『注意しろ! 腐つてもFFF団元処刑人だ!』

『畜生! あの野郎! 俺の木下姉妹とのラブラブ同棲計画を邪魔しやがって!』

『なんでオレが振られてあいつがOKを貰えるんだ! 不公平じゃないか!』

『あいつにも俺達と同じ痛みを味わってもらわないといけない!』

『そつだろ、みんな!?!』

『『『当然だつ!!!』』』』

古今東西様々な武器を持った覆面集団が鉄砲水のように押し寄せてくる……。

秀吉はそれを見て慌てているが、オレはそんなに慌てていない。

そしてゆっくりと口を開いた……。

「ちなみに“愛の話”っていうのは」

『『『殺せええええええつ!!』』』』

「合コンのセッティングの話だ」

その時Fクラスの中の時間が止まった……。

「諸君……。オレと共に【オレが幸せとなる『全員幸せ』』と、いう

【幸せの方程式】を証明しないか?」

『『『喜んでつ!!!』』』』

『烏丸! お前はなんていい奴なんだ!』

『さすがだ! 今までの異端者とは全く違う!』

『俺達の幸せまで考えていてくれたとは!』

『静粛に!』

FFF団の会長である須川の声で一同静まり返った。

『それでは烏丸大貴と木下優子の交際をFFF団公認とすることに異存はないか？』

『『『当然だ！』』』

『異論が無いようなので異端審問会はこれにて閉会と』

『待て！ 全員騙されるな！』

『なんだ、横溝よ？ 何か言いたい事があるのか？』

『そいつは……！ そいつは…… オレの木下姉妹を毒牙にかけたSランクの異端者だぞ！？ そんな奴を許していいのか！？』

横溝の言葉に一同ざわめく……。

やはり処刑を実行しようという意見も出てきている……。

そういえば、横溝って確か秀吉のスペアとして優子に告白したんだっけ？

さて…… 優子に代わって仕返しをしておくか……。

「諸君、オレとの友情の証として 横溝を血祭りにあげて貰いたい！」

『『『はい、喜んで！』』』

うんうん。オレはお前らのそういう（自分の欲望に）素直なところは大好きだな

『あ！ ちよつ！ 待って！ そこは ! ぎゃあああああああああ！』

横溝の汚い悲鳴が教室内に響き渡った……。

.....

.....

「さっきのが作戦じゃったのか……?」

「ああ。オレの100の特技の中でも奥の手に分類される奥義!

【愛の話(有限)】だ!」

「なぜ有限なのじゃ?」

「いくらオレの人脈が広いからって女子の数には限りがあるからだ
よ」

「なるほどのう……」

「ところでムツツリー二はどうした? 処刑側にあいつの気配を感じ
なかったけど?」

「ムツツリー二ならほれ、あそこじゃ」

「なんだ、まだ死んでるのか?」

「あやつの想像力は常軌を逸しているからのう……」

「なるほど。さっきの暑苦しい拷問の様な話中の光景を鮮明に想像
出来てしまった訳か……。気の毒に……」

「全くじゃ……」

.....

それからしばらくダベっていてリセットされた召喚獣の装備の話に
なった。

「召喚獣の装備の確認をしない?」

「そうだな。オレも気になってたところだ」

「戦力の把握は戦略を立てるのに重要だからな。幸いにも鉄人がい
ることだし、召喚許可を貰おうぜ」

今回の期末試験はそれなりに点数が取れたので結構いい装備になっ

てるに違いない。

編入当初は試験召喚システムなんかにも少しも興味はなかったのに今はこんなに気になってるなんて人生は分からない物だ。

「西村せんせい！」

「どうした吉井？ お前が俺を呼ぶとは珍しいな」

「会話する度にタンコブが増えていく相手ですしね」

「……そうか、お前もタンコブを増やしてみるか、烏丸？」

「冗談です。ごめんなさい。」

「全く……、お前というやつは……。それでどうした？」

「ちよつと召喚許可をもらいたいんです」

なんだ？ 西村先生の顔色が変わった？

「どうしたんですか、先生？ 顔色が悪いですよ？」

「いや、なんでもない。召喚許可だったな？ あー、吉井……お前

は観察処分者だ。人より力があつて物に触れる召喚獣を持っている。

そんな危険なものをみだりに呼び出すのは感心できんぞ？」

「本当にどうしたんですか？ らしくない言い方ですね？」

いつものこの人ならもつとストレートな表現を好むのに変化球の様な表現を選ぶとは珍しい。何かあるのか？

「何を隠してる、鉄人？」

「何も隠してないぞ、坂本。それよりそろそろ休憩時間が終わる。席について授業の準備をするんだ」

怪しい……。怪しすぎる……。

「西村先生、私たちの召喚獣に何かあつたんですか？」

「ウチの召喚獣なら物に触れないから呼び出してもいいですよね？」
「……さて授業を始めるぞ」

姫路と島田の言葉を見殺しして授業を始めようとする西村先生……。何かを誤魔化そうとしているのは明白だ。

「何かあったのかの間違いなさそうだな。こうなりやもう召喚許可をよこせなんて言わねえ。その代わり何があったのかは説明してもらっぜ！」
起動！^{アウエイクン}

雄二の白銀の腕輪の能力【召喚フィールド作成】でFクラスにフィールドが生成される。
そして明久が召喚獣を召喚した。

「あれ……？　なんだか僕の召喚獣が……」
「おいおい、明久のくせに随分と贅沢な装備だな」
「ってというか何で実物大……？　いや、実物より少し大きいか」

そう明久が呼び出した召喚獣はいつものようにデフォルメされた学ラン木刀を装備した物ではなく、甲冑を身に着け、西洋剣を装備した実物より大きな召喚獣だった。

「これでは試召戦争が本物の戦争の様になりそうじゃな」
「どんだけグロイ光景が出来るんだよ、一体……」
「顔も明久君そっくりですね。今までの可愛い感じと違ってなんだか凜々しいです……」

「え？　そう？」
「姫路も物好きだな。こんなバカ面のどこがいいんだか？」

そうやって雄二は明久の召喚獣を軽く小突いた……。

そして 明久の召喚獣の首が落ちた……。

「きゃあああああつ!!」

「ええええつ!?! 何これ!?! いきなり僕の召喚獣がお茶の間に見せられないくらいグロい事になってるんだけど!?!」

「な、生首……?」

あまりの凄惨な光景を前にして流石にオレもドン引きだ……。デフォルメされていない状態だから余計にえげつない……。

「すまん、明久。そんなに強く殴ったつもりはなかったんだが……。今ホチキスを持ってきてやる」

「何的外れな事言ってるのさ!?! 引つ付けるなら接着剤でしょ!?! ホチキスじゃ穴が開いて痛いんだから!」

「な〜んで〜やね〜ん!」

オレのハリセンが唸らせ、明久の発言に対してツツコミを入れる。

「痛っ! 痛いよ、ヒロ! ハリセンなんて何処から」

「企業秘密だ!」

「うむ。お約束じゃな」

「問題なのは明久の召喚獣の首を引つ付ける方法じゃなくて何故明久の召喚獣の首がもげたかと言う事だ。議論する所を間違っているぞ」

点数表示はされている訳だから戦死状態という訳でもなさそうだ。それなら何故明久の召喚獣はこんな状態になっている?

「一体……召喚システムに何があつたんだ……?」

第6部開始 第72話 暑い時に暑苦しい話をするべきではない……（後書き）

ヒロの召還獣（オカルト版）をどうしましょう……？

只今考え中です……。

もし、よろしければアイデアを送ってやって下さい……。

（本質を含めてお願いします）

第73話 お披露目！ オカルト召喚獣！

「さて鉄人、これは一体どういう事だ？」

雄二は現実を直視したくないと言わんばかりに思いっきり明後日の方向を向いている西村先生に向かってオレ達全員が思っている事を代弁した。

西村先生はしばらく黙っていたが、諦めたように溜息をつくどゆっくり理由を話した。

「……オレには良く分からんが今呼び出される召喚獣はどうも化け物の類になっているらしい。」

「お化け、ですか？」

「つていう事は明久のコレは首なしの騎士……『デュラハン』か……？」

「お前らも知つての通り試験召喚システムは偶然やオカルト要素も含まれているんだ」

「えっとつまりそれって……システムの調整に失敗したつて事ですか？」

「……身も蓋もない言い方をするな」

オレの質問に西村先生は仏頂面で答えた。出来る事なら生徒に見つかる前に処理したかったんだろう。

「明久の召喚獣を見る限りオカルトが色濃く出たみたいだな」

「なるほど。オカルトと言えばお化けだもんね」

「しかしこれは心臓に悪いぞ？ 首がいきなり落ちるんだから……」

「けど何でデュラハンなんだろ？ お化けなら日本の妖怪が一杯いるはずなのに」

「学園長の話を書く限りではどうやら召喚者の特徴や本質から呼び出される妖怪が決定されるらしい」

「特徴や本質ですか？ そうなるとデュラハンが選ばれたって事は僕の騎士道精神が召喚獣に影響を与えたって事ですよね」

お前の何処に騎士道精神があるんだ？ と思っただが黙っておいた……。

……。
真実は時として残酷だ……。

人は他者を傷つけない為にも時として真実より優しい嘘をつく必要がある……。

今がまさにその時だとオレは判断した……。だから……言うものか……。

「明久、現実から目を背けるな……。」

「え？ 違うの？ じゃあ甲冑の似合う男らしさとか、大剣を振るう力強さとか……。」

「『頭が無い』バカ』だからじゃな」

「言った！ 必死に眼をそむけていた事実を秀吉が包み隠さず言っただあーっ！」

「……秀吉、雄二。あんまり……明久を甚振るな……。」「僕甚振られてたの!？」

「すまぬ、明久。しかし本質は置いておいて前より強そうになっただるではないか」

「そ、そうだね。前よりは強そうだよね！」

真実を告げるべきかどうか……判断に迷う……。

システムにバカにされた上にあの弱点を指摘して明久は傷つかないだろうか？

しかし言わなければ後で明久が痛い目に逢うかも知れない……。どうする、オレ？ どうしたらいいんだ!？」

「俺には強くなったようには見えないけどな」

「何さ、雄二。何が不満なのさ？」

「その取り外しのできる頭だ。戦闘中相手の頭が転がってたらどうする？」

「確実に狙うじゃろうな」

「そういう事だ。つまり明久の召喚獣は常に頭をどつちかの腕で抱えなければならぬって事だ。片腕しか使えないなんてハンデもいところだな」

「う……。そういう事が……。」

相変わらず雄二は明久に容赦無いな……。

『お前ら、さつきから面白そうな事やってるな』

『これ、召喚獣か？ さつき本質がどうか言ってなかったか？』
『なるほど。それで吉井の召喚獣は頭が無いのか』

眼クソが鼻クソを笑う、五十歩百歩……。

明久もお前らだけには言われたくないだろうよ……。

「そう言うのならそっちだって呼び出してみなよ。僕より酷いのが出てくるかも知れないよ？」

『おいおい、吉井。そんなこと言っているのか？』

『俺達がバカ日本一のお前に負けるわけないだろ？』

『なんて言っても俺の本質はジェントルマンだからな！』

異端審問会FFF団のメンバーが何を言うか……。

ジェントルマンだったなら友人に彼女が出来た場合祝福すると思うんだが……？

『『『サモン 試獣召喚！！』』』』

ズズズズズズズズ……（ゾンビが3体登場）

なるほど。性根が腐ってるからか……。
納得……。

「こ、怖いです！ 明久君！」

「あ、アンタ達その汚い物を速くしまいなさいよ！」

「島田、お前容赦無いな……。あの3人泣いてるぞ？」

「しかし、まあこれは面白い物だな。秀吉はどんな召喚獣なんだ？」

「ワシの本質と言えば演劇じゃからな。妖怪ではないが、舞台で有名なオペラ座の怪人辺りが妥当じゃろうな」

「……それはどうかな？」

「？ ヒロ、何か言ったかの？」

「気のせいだろ？」

「まあ、いいじゃろう。 サモン 試獣召喚」

ポン！（猫又登場）

「へえ、猫のお化けか。可愛いね。秀吉によく似合ってるよ」

「どうやら秀吉の本質は可愛いって事らしいな」

「本質っていうよりこれは特徴の様な気がするんだけど？」

「ワ、ワシはついにシステムにまでこんな扱いを……」

「普段から女装とかを気軽にポンポンしてるからだろ？」

「き、木下！ そうやってまたアキを誘惑して！」

「わ、私だつて負けません！ いきます！ サモン 試獣召喚！！」

ポン！（サキユバス登場）

「きゃああああああつ！」

露出度が高く、胸が強調された召喚獣の登場と同時に姫路は大きな悲鳴を上げ明久の首を180°捻った……。

耳が……キーンとする……。

あの体のどこからあんな大きな声が出て来るんだ……？

ムツツリーニがエロの気配を察知して飛び起きた。

西村先生の精神攻撃から復活したムツツリーニは必死にカメラのシャッターを切っているが、レンズが鼻血で覆われてしまい、何も映らない……。

それでもひたすらシャッターを切り続けるムツツリーニにオレは不覚にも感動してしまった……。

まあ、それはさて置き

「姫路、明久の首が曲がってはいけない方向に曲がってる。それ以上は拙いから離してやってくれないか？」

「で、でも！」

「姫路、召喚獣を消したいのならオレから離れる。フィールドの有効範囲から出たら自然と消えるからな」

「あ……。はい、そうします」

姫路がフィールドの外にでてサキュバスは消えてしまった。

うーん、もう少し目の保養をしておきたかったな……。

明久の外れた首の関節を嵌めながらそんな事を考える……。

優子にバレたら殺されるのでそう思った事は内緒だ……。

「災難じゃったな、姫路」

「うう……。酷いです……。あんな格好なんて……。恥ずかしすぎです……。」

「とは言ってもあれが姫路の本質なんだから仕方ないだろ？」

「わ、私の本質って……？」

い、言いくらい……。

明久、秀吉と顔を見合わせる……。

どうやらこの2人も同じような事を考えたらしい……。

「え、えつとね……。なんと言うか……。その……」

「そ、そうじゃな……。言いくらいことじゃが……」

「あつと……。女性としての魅力が溢れるって事じゃ」

「胸がデカいってことだろ？」

「うわああああんっ！！！」

「雄二ーっ！！！」

「デリカシーって物が無いのっ！？」

「せっかくオブラートに包んだ言葉を必死に選んだのに台無しだろ
！」

「そ、そんな事無いです！ 全体的にちよつと太ってますけど、特
徴になるほど大きくなるなんて全然ないですっ！」

「止すんだ、姫路さん！ それ以上言うと特定の誰かを傷つけるこ
とに あれ？ 急に視界が暗くなつたような……？」

そりゃそうだ。島田がニコヤカに明久の頸動脈を締め上げているん
だから……

「アキ。何か言いたいのなら聞くわよ？」

「し、島田。いくら明久が頑丈だからってそれ以上やると死んでし
まうぞ？」

「大丈夫よ。生かさず、殺さずの加減は心得てるわ……」

島田美波……恐ろしい奴……！

「外見的特徴は置いておくとして、あと他に考えられる特徴としては『大胆』つてところじゃないか？」

「大胆、ですか？」

「ああ。確かに思い当たる節がいくつもあるな」

「この前明久と帰った時も『襲いかわらないように我慢します』つて言ってたしな」

「そういえば以前学園祭の打ち上げの時も明久を押し倒しておったな」

「あ、あれは違います！ 思い余って、勢いというか、とにかく……、その……」

「ふふつ。瑞希ったら可哀そうに。そんな大きな胸してるからあんな召喚獣が出てきちゃうのよ。その点ウチなら何の心配もいらなから大丈夫よ。妖精とか戦乙女とかそういう可愛い物が出てくるはずだから」

果たしてそうかな？ 姫路の特徴がアレだから、その対極に位置する島田の召喚獣はアレ以外思い浮かばないだが……

「サレモン 試獣召喚！！」

ゴゴゴゴゴゴ……（ぬり壁登場）

うん、予想通り……

（バ、バカ！ 明久！ 笑うな！ 殺されるぞ！？）

（そ、そんな事言ったって……プツ……！ ククク……！）

「ねえ、アキ？」

ビクッ！

「な、何かな？ 美波……」

「この召喚獣……ウチに何を言いたいのかしらね？」

「さ、さあ……。なんだろうね……？」

とりあえずお呼びがかかったのは明久だけなので、オレは安全地帯に退避……

明久が雨の日に捨てられた子犬の様な眼をしてオレ達に助けを求めるが、誰もそれに応える事は出来ないだろう……。誰だって自分の命惜しいのだ……。

「そつだ！ きつと美波と又り壁は固いってところが似て……いて……」

「へえ〜。ウチが固いって何処が固いのかしら？」

嗚呼、これは死んだな……。

「うん……。きつとね……。胸が固 アガアッ！ そ、そつだ！ 拳だよ！ 拳も固いって意味だよ！」

「『拳も』って何よ！？ 触ったこともないくせに！ アキのバカアーーッ！」

スゲエ……！ 格ゲーのハメの様なテクニクで明久の体が宙に舞っている……。

もしゲームでこのテクニクを使ったら使った瞬間に友達を無くしそつだ……。

とりあえずアイツらは置いておいて……

「ムツツリーニの召喚獣はどんなものなのじゃ？」

「……………試^{サモン}獣召喚」

タキシードを着た顔色の悪い男が登場。

「これはヴァンパイアか……？」

「ムツツリー二にピッタリな召喚獣だな」

「確かにいつも血を欲してるイメージがあるからな」

「若い女が好きという点でも酷似しておるしの」

「ここまで来ると雄二のも気になるよね。召喚してみてよ」

「ん？ そうだな。このままじゃ呼べないからフィールドをoffにして鉄人に許可を貰おうか。今更止める理由もないだろう」

召喚フィールドを消し、西村先生に許可を貰い雄二が召喚獣を呼び出した。

呼び出されたのは上半身裸の雄二だった。

「妖怪……なのか？」

「そのまま雄二自身が出てきたのう」

「ちよつと眼のやり場に困りますね……」

「雄二、とりあえずその見る人すべてを不幸にする召喚獣をしまつてよ」

酷い言われようだ。

「わかってる。こんなもの俺だつて見たくない」

「しかし雄二の召喚獣は何なんじゃろうか？」

「……………ドッペルゲンガーとか？」

「何言ってるのさ？ これは最近発見された『坂本雄二』っていう新種の妖怪だよ。醜い容姿と汚い性格で美人の幼馴染を騙すって評判の」

酷い言われようだ……。

「……明久、お前の召喚獣を呼び出せ」
「ん？ 別にいいけど？ 試獣^{サモン}召喚っ」
「目指せ、ワールドカップ！」

雄二の叫びと共に明久の召喚獣の頭は蹴り飛ばされていった……。そして蹴られた頭はきれいな弧を描いてゴミ箱にIN！見事なコントロールだ……。フィードバックによる痛みで明久は畳の上を転がりまわっている。

「蹴ったね！ 僕の召喚獣の頭をボールに見立ててゴミ箱に蹴り込んだね！？ なんて事するのさ！？」

「気にするな、明久。よく言うじゃないか。『友達はボールだ』と『それを言うなら『ボールは友達』じゃないの！？ 言葉を前後入れ替えるだけでイジメの現場になるんだけど！？」

「まあ、オレはお前を友達だと認めていないがな」

「だったら蹴るな！」

「けど明久、今のはお前が悪い。あんな言い方したら雄二が怒るのは無理ないじゃないか」

「う……、ごめんなさい……」

「雄二は霧島を騙しているんじゃない」

「そうだ、その通りだ」

「二人とも真剣に付き合ってるんだから！」

「そうだ、その通り って違うからな！」

「照れるなって」

「照れてねえ！」

「んむ？ 雄二、お前の召喚獣の様子が変じゃぞ？」

「お？ 本当だな。何が起こるんだ？」

雄二の召喚獣がブルブルと身震いを始めたかと思うと口が大きく裂け、裸だった上半身から毛が生えてきた。その様子を見て姫路と島田は抱き合って悲鳴を上げている。

「狼男……か？」

「雄二の本質はどうやら野生の様じゃの」

「けど何でいきなり変身したんだろ？」

「……………何か丸い物を見た？」

「丸い物……？ アレか？ 明久の召喚獣の頭」

「……………いくら調整に失敗したからって何ていい加減な……………」

「それはそうと……………ヒロの召喚獣はどんなものが出てくるんだろ？」

「西村先生。これって新学期までには直るんですか？」

「ねえ、無視しないでよ」

「召喚システムの調整はオレにはよく分からん」

「ねえ、ちよつと」

「学園長なら何か知っているんだろうがな」

「ねえ、ヒロ」

「そうですね。雄二、今から行ってちよつくら聞いてこないか？」

「そうですね。その辺は鉄人よりババアに聞いた方が良さそうですね。」

「なんたつて召喚システムの開発者様だからな」

「ねえ」

「そうと決まれば早速レッツ ゴー！」

「ちよつと」

「そうですね。行くぞ！」

「話を聞いてよ！ って言うか引きずらないでよ！」

「貴様ら！ ドサクサに紛れて脱走か！？」

「ヤバい！ バレたぞ、雄二！」

「ダッシュだ！ ヒロ、明久！」

「うう……………。なんだか扱いがすごくぞんざいだよ……………」

……………

.....

「「教えてください、学え　ババア」」

「お、お前ら……」

「……どうしてアンタ達は素直にアタシを学園長と呼べないのかね
え……」

「すみません、学園長……」

雄二、明久に代わりオレが頭を下げる。

なんだって態々相手の神経を逆撫するような呼び方をするかな？
こいつらは……

しかも学園長って言いかけてから言い直してるし……

「ハン、今さら言い方を変えた処で教えてやるもんかい。このクソ
ガキども」

「そんな！　酷いですよ！　ババア長！」

「その呼び方は今までで一番酷いさね！」

「明久……。お前……」

「おいおい、明久。失礼じゃないか。巷で若いと評判の学園長（笑）
に向かつて」

「「いや、お前も（あんたも）十分失礼だから（さね）！」」

「んで、実際のところどうなんだ？　きちんと復旧するのか？」

「何を言ってるんだい？　それじゃあまるで召喚システムに問題が
あるみたいじゃないかい」

「だって、まるで何も思いつきり調整に失敗してるじゃないです
か」

「いいや違うね。コレはちょっとした遊び心ってやつさ」

この人は一体何を言いたいんだ？

「今は夏だからねえ。肝試しには持って来いの季節じゃないか」

「つまり、ババアは肝試し用に召喚獣をカスタマイズしたって言うのか？」

「そうさ。あれは夏休みでも登校する可愛い生徒たちへのアタシのささやかなプレゼントさね」

雄二と目配せをしてお互い頷く……。

どうやら雄二はオレの言いたい事を分かっているようだ。

オレの本当の目的をどこまで読んでいるのかまでは分からないが……

「そうですか。それを聞いて安心しました。召喚システムの不具合かと勘違いしてしまいましたよ！」

「え？ 何言ってるのさ、ヒロ？ あきらかに ムグウ！」

（悪い明久、少しだけ静かにしてしてくれ）

「（コクコク）……………」

明久の口を慌てて塞ぎ、余計な事を言わないように頼む……。

もしオレの懸念が本当に当たっていけばここで下手な事を言うのは命取りだ。

「そうだな。学園長の心遣いに甘えさせて貰うとしようぜ」

「それじゃあ残りの二日間は肝試しって事でいいんですか？」

「いいや、ただの肝試しなら却下さね。あくまで召喚獣は学習意欲の向上の為のツールだからね。見た目だけを楽しむのは一環とは認めないよ」

「それじゃあチェックポイントでも設けてそこで勝負でもさせるか？ それなら問題ないだろ？」

「そうさね。ルール次第だけどそれなら認めてあげてもいいさね。」

「よし、決まりだな。早速みんなに知らせて準備に取り掛かるうぜ！」

「悪い、雄二。先に帰っていてくれ。オレはちょっくら学園長に話

があるから」

「ああ、わかった。行こうぜ、明久」

「あ、うん」

.....

「で、話って何だい？ クソジャリ」

「まあ、ちよつと世間話のひとつでも……」

口で適当な事を言いながらそこら辺にあつたボールペンを貸してもらい、ポケットの中に入れていたメモ帳を使って学園長と筆談をする。

盗聴の可能性を警戒してのことだ。

「アンタと話す事なんて何も無いよ、このクソガキめ」

「そんな意地悪ばかり言ってるから皺が増えるんですよ学園長」

《盗聴の可能性があるので筆談で失礼します。この召喚システムの不具合なんです、本当に偶然ですか？》

《どういう事だい？》

《あくまで可能性の話ですが、もしこの不具合が誰かの思惑によって人為的に引き起こされた事態だとしたら……召喚システムの技術者及び、この学園の教師が烏丸の本家と繋がってる事も考えられます》

「余計な御世話だよ。このクソガキが」

「ほらほら、怒るとまた皺が増えますよー」

「全く腹の立つガキさね！」

《アンタはどう考える?》

《オレは偶然ではないと考えています。ここしばらく本家が大人しかったのはこれを狙って学園長を糾弾するチャンス伺っていたんじゃないでしょうか?》

《確かに考えられるね……》

《もしそうなら、これは逆にチャンスでもあります。もし裏で本家が糸を引いている証拠をつかめたら本家につける隙を無くせると同時に、本家の連中がこの学園に二度と干渉できない状態に追いやることができません。一度技術者、教師の行動を洗ってみる事をお勧めします。あとこの部屋に盗聴器が仕掛けてないかの調査も》

もし盗聴器が見つかったなら本家の息がかかった教師が学園の中にいるという事だ。

本家に決定的な召喚システムの不具合の証拠をつかまれる前にこの不具合は本家の自作自演だったという証拠を掴まないといけない。ここから先は相手より早く行動した方が勝つ……。もし負ければ……本家は『学園長は無能』を徹底的に糾弾し、新たに自分たちの息のかかった人物を学園長としておくだろう……。そうなればこの学園はどうなるか……。

《そうさね。調べておくことにするよ》

《お願いします》

「それじゃあ、学園長。オレはこの辺で!」

「二度と来るんじゃないよ! このバカガキ!」

筆談を終えて紙を学長室に置いて出て行く。

さっきの会話の内容は学園長がちゃんと処理してくれるだろう。

調子に乗りすぎたな……。

この学園に害をなそうとしたこと……後悔させてやる……。
ガラスに映った自分の顔を見る……。
そこには冷たく無機質な眼をした自分がいた……。
ああ、嫌だな……。
この眼をしているときの自分は嫌いだ……。
嫌でも思い知らされる。
自分の人間としての汚い本質を……。
烏丸の家を嫌悪したところで、所詮オレも烏丸の人間、か……。
それでも……オレは優子や明久達のいるこの文月学園が好きなんだ
……！
これだけは……偽りのないオレの本心……
だから……どんな汚い手段を使ってもあんたにこの場所を渡しはし
ない！
例えオレが破滅する事になっても……その時はあんたも道連れだ……
……！
このあたりで過去の因縁に決着をつけようか……！
親父……！

第73話 お披露目！ オカルト召喚獣！（後書き）

ヒロのオカルト召喚獣を何にするか、決めました！
アイデアをくれた皆さん、本当にありがとうございました！

第74話 妖怪大戦争 IN 文月学園！

「優子、それ取ってくれ」

「はい」

「ありがとう」

「ヒロ、あれ取って」

「ん」

「ありがとう」

「息がピッタリじゃな」

「バカップルですから」

「なっ！ 何言ってるのよ！？ もっ……」

学園長の話から翌日……

オレ達は3・Fの教室を肝試し用に改装していた。

雄二が西村先生の補習をサボる為に本気になって手を回しているから働いているオレ達としては非常に動きやすい。

学園長の話ではお盆に一般公開もすることにしたらしい。

「けどAクラスまで協力してくれるとは思ってなかったよ」

「アタシ達だって勉強ばかりじゃ息が詰まるわよ。ちょうど期末試験が終わったところだし息抜きには持って来いのタイミングでしょ？」

「そっか……。けど姫路、島田あたりは結構怖がってたけど、優子はこういうの平気なのか？」

「そっね……。あんまり得意ではないわね」

正直言ってかなり意外だ。

可愛い外見で騙される奴が多いが、優子の性格はかなり豪快で男前だ……。

普段の家では下着姿もしくはジャージ（秀吉談）、優等生を演じるための努力は惜しまない、口より先に手が出る、その他多数……
下手するとオレより男らしいかもしれない……。

「そうか。意外だな。優子にこんなハリボテを怖がる細かい神経があったとは 待った！ ごめんなさい！ 今のはオレが悪かった！ だからそんないい笑顔でオレの関節を逆に曲げるのはやめっ！

やめっ

ぎゃあああああああ！！！！」

.....

「痛ててて……。酷い目に遭った……。」

「アンタが余計な事言うからでしょ！？」

「うう……。ごめんなさい……」

「なんじゃ、ヒロは姉上の尻に敷かれておるのう……」

「ははは……。尻にシカレマンと呼んでくれ……」

痛む関節をさすりながらゆっくりと起き上がる。

不意にガラスに映った自分の顔を見た。

眼に昨日の様な冷たさは無く、柔らかい表情をしていた。

やっぱり優子といると荒んだ気持ちが無くなるな……。

『それはね……。本当にお化けが出るんだってさああああああつ！』

『きゃあああああああつ！！！！』

悲鳴が上がった方に視線を向けると島田と姫路が明久に抱きついて

いや、あれは締め上げてるのか？

明久の頸椎が深刻なダメージを受けているようだ……。

バカめ……。

島田、姫路のタッグの攻撃力を甘く見るからそうなるんだ。

一般論としては肝試しの際に女の子から『キヤー、怖い!』と言って抱きつかれるのは男の子の永遠のロマンだ。

しかし島田と姫路にかかれればそんな夢の様なシチュレーション悪夢に早変わり!

この学校には普通に可愛い女の子は居ないんだろうか?

姫路、島田、霧島、優子の様に可愛さや美人度に比例して攻撃力が上がってる様な気がする……。

「ヒロ、あんた何か失礼なこと考えてない?」

「滅相もございません!」

とりあえずさつき考えた事が優子にバレると殺されてしまうので頭の片隅に封印して、再び準備に取り掛かる。

なんだか騒がしいので明久達の方を見るとゾンビの集団がデュラハンの頭でサッカーをしていた……。

かなりえげつない光景だ……。

『パス行くぞ!』

「ああ!」

『オツケイ、ナイスパス! くだばれ、クソ野郎が! どりゃあつ』

「ふぎやあ!」

『よし、ここだ! シュート!』

「うぐああつ!」

もう一度言おう……。

かなりえげつない光景だ……。

ゾンビに頭を蹴られるたびに明久はフィードバックによる痛みでのた打ち回っている……。

そして何処から湧いて出たのか、清水がその光景を満足そうに眺めている……。

「秀吉、何でこんな地獄絵図みたいなことになってるんだ？」

「うむ。どうも先ほど姫路と島田が明久に抱きついた事が気に入らなかつたようじゃの」

「ホントにあの連中は……。それ位の事大目に見てやれよ」

「全くじゃな」

「ホントにFクラスって……」

「あ、久保が参戦した」

「……………」

『Aクラスの久保君……でしたか？ 美春達の邪魔をしないでください！』

『そうはいかないよ、清水さん、Fクラスのみんな。君たちが束になつてかかつてこようと僕は一歩も譲らない。守るべきものが此処にあるのだから……！』

『上等です！ それならそこにいる豚野郎と一緒に葬り去ってあげます！ 試獣召喚サモン！！』

『僕は負けない！ 今まで勉強を頑張ってきたのはきつとこういう時に吉井君を守るためなんだ！ 試獣召喚サモン！！』

「久保と清水の召喚獣が一緒だ」

「あれはなんじゃろうな？」

「……………迷ひ神」

「うおっ！ いたのか、ムツツリーニ？」

「……………最初から」

「して迷ひ神とは何なのじゃ？」

「……………人を迷わせる妖怪。一説では迷つて果てた人の魂が道連れを探してるとか」

「なるほど。人の道に迷って、仲間を引きずり込もうとする連中と
言う訳じゃな……」

「こ、この展開についていけないのってアタシだけ……?」

「安心しろよ。すぐ慣れる」

「慣れたくない……」

『ええい！ 全員一斉に久保利光にかかるのです！』

『『『おおーっ！』』』

『僕は負けない！ 来るなら来い！』

飛び散る腐肉……、宙を飛ぶ生首……、弾ける四肢……。

あまりの凄惨な状況に耐性の無い人は皆悲鳴を上げている……。

これは……、なんと言うか……アウトだ……。

そして混乱の決定打となるこの一声……

『きゃあああつ！ こっち来ないで！ 試獣召喚！！』^{サモン}

『ミホ！ 畜生、よくもオレの彼女をビビらせてくれたな！

試獣召喚！！』^{サモン}

『今こいつ彼女って言ったぞ！』

『裏切り者だ！』

『『『殺せえっ！』』』

そして全面戦争へ……

「ははっ！ 妖怪大戦争だな」

「笑ってないで止めなくていいの!?!」

「……オレに死んでこい、と言うのか?」

「……ごめん」

「……わかってくれればいいんだ」

まあ、オレが止めなくてもそろそろ先生が召喚フィールドを消すと思うしな……。

『『『お前らうるっせえんだよっ！！』』』

何人がガラの悪い闖入者が教室に怒鳴り込んできた……。

あれ？ あのボウズとモヒカンどっかで見たことがある様な気が……？

「騒がしいと思ったらまたお前か、吉井！」

「お前はつくづく目障りな奴だな……！」

オレはアンタ達の罵詈雑言が耳障りで仕方ないよ……。

「変た 変態先輩でしたっけ？」

「おい、今言い直そうとしたのに俺達の顔を確認して言い直すのやめただろ！？」

「お前俺達を心の底から変態だと思ってるだろ！ 常村と夏川だ！ いい加減覚えろ！」

ああ、常夏コンビか……。

そういえばそうだった……。

あまりにもどうでもいい情報だったから完全に忘れていたよ……。

「それで常夏先輩、何か用ですか？」

「テメエ……。個人名が覚えられないからってまとめやがったな……。」

「さすが吉井明久だ。脳の容量が小さすぎるぜ！」

「常川先輩、夏村先輩。明久をあまりバカにしないでください。あまりにどうでもいいことだったから容量の無駄遣いだと判断した上

でのことなんですから」

「俺達の名前を微妙に間違ってるぞ、お前！ しかも容量の無駄遣いだあ〜！？」

「テメエ……！ 烏丸！ ケンカ売ってるのか！？」

「この人たちは何を怒ってるんだろうな、明久？ 注文通りまとめず、ちゃんと個人で読んだのに……」

「きつとカルシウム不足なんだよ」

「そっか。カルシウム不足か。それならイライラしていてもしょうがないよな？」

「そっか、そっか！ テメエら俺達に喧嘩を売りたいんだな！？」

「喧嘩売ってもいいですけど、その場合挑戦料として1万円頂きます」

「こっの野郎 ! って言うかテメエらうるせえんだよ！ 俺達への当てつけか、コラ！？」

「夏期講習に集中できないだろうが！」

「」「そっだ、そっだ！」「」

嗚呼、鬱陶しい……。

鉄筋コンクリートの校舎で、試召戦争を前提とした防音設備があるのにこれくらいの騒ぎで上まで響くわけないだろう……。

「すみません。上の階まで響いているとは」

「おいおい、先輩方。それは酷い言いがかりじゃないか？」

「え？ 雄二、言いがかりってどういう事？」

「口実を設けて難癖をつけることだ。いちゃもんも言う」

「言葉の意味を聞いたんじゃないよ！ さてはキサマ僕の事を物凄くバカだと思ってるな！？」

「……………え……………？」

「なんだその『何を今更』って言う顔は！？ 僕をそこまでバカだと思ってるのは雄二だけに決まってるじゃないか！ って何で皆気

まずそつに眼をそらすの!? 僕の眼を見てよ! クツ……!! こ
うなつたら ヒロ、君は僕の事をバカだと思っていないよね!？」
「……………も、勿論! お前は馬鹿なんかじゃないさ!」
「眼が泳いでるよ! 畜生! グレてやるーっ!」
「……………明久、この件は今度でゆつくりと話そう。今は別の話がある
から、な?」

雄二の幼子を諭すような言い方で明久はプライドを傷つけられたの
か、明久は声を押し殺してサメザメと泣いていた……。
何と言うか……すまない、明久……

「それでええつと、なんの話だったけか?」

「3年生の文句が言いがかりではないか、という話じゃ」

明久を放っておいて話は続く……

「俺達が騒がしいのは認めるが、これはれっきとした試験召喚獣を
利用した学習の一つだ。学園長も認めている。それに何よりここは
新校舎だ。ボロい旧校舎ならまだしも新校舎の下の階の騒ぎが上の
階まで聞こえるはずが無いだろ。つまり先輩方は勉強に飽きてフラ
フラしていたところに俺達が何か楽しそうな事をしているのに気が
付いて、八当たりしに来たって事だ」

3年全員がバツが悪そつに眼を逸らした。
どうやら図星の様だ。

「それじゃあ言わせてもらつがよお、坂本! お前ら迷惑極まりな
いんだよ!」

「明久、これが俗に言う逆切れと言う奴だ」

「へえ、そうなんだ。勉強になったよ」

「ア、アンタ達……火に油を注いでどうするのよ……？」

「テ、テメエ烏丸あ！」

「なんですか、夏村先輩？」

「夏川だ！ テメエらしい加減にしゃがれ！ 大体テメエら2年には出来の悪すぎる奴が多すぎるんだよ！ バカの代名詞である『観察処分者』だって2年にしかいねえし、学園を爆破したのだからこのクズコンビじゃねえか！」

「呼ばれたよ、雄二。誤りなよ」

「お前だろ、明久」

「両方ともだ！」

「「そんなバカな！」」

「アハハハ、コントだ！」

「まあ、あんた達が明久を気に入らないというのはわかった」

「待つんだ雄二。そうやって僕にすべての罪を押し付けるのはどうかと思う」

「美春もこの豚野郎が気に入りません！」

「おお。話せるじゃねえか、この縦ロール」

「気易く話しかけないでください、豚先輩！ 家畜臭いです！」

「清水、話がややこしくなるから少し……黙れ……！」

「……し、仕方ありません！ 今日のところは撤退します！」

この前のバイトの時鬼神モード（優子命名）で説教して以来どうもオレは清水に天敵として認識されてしまっているようだ……。まあ、静かな学園生活を送れるからそれは別にいいんだけどこの状況で暴言を言い捨ててほしくなかった……。清水の発言のお陰で3年連中がすごく殺気立っている……。

「 ツメエら！ 上等じゃねえ 」

「夏村先輩」

「夏川だ！」

「これ以上やるといふのならこちらにも考えがありますよ？」

「ああ!？」

「この人間型暗殺兵器! 木下優子をあなた達にけしかけ 優子、待った! その関節はそつちには曲がらな ぎゃあああああああああつ!！」

「う、うおおつ……………」

「つと言つのは冗談ですが」

「お前、器用だな……………。関節を極められながら話をするとは……………」

(これ以上やるといふのなら学際の際のあなた達の企みをバラします)

常夏コンビの夏村 (だっただけ?) の方にボソツと耳打ちすると血の気が引いて行った……………。

よし、効果は抜群だ。

学園転覆の手先になって働いていた事をバラされれば、常夏コンビはあつという間にその影響力を無くし、学園内での居場所も無くすだろう。

「それをバラしたらお、お前だつて困るだろ!？」

「いいえ。困るのは学園長でオレはちつとも困りませんよ。」 (大

嘘)

「ぐっ……………」

「とは言つてもこのままじゃ先輩達も収まりが付かないでしょうから……………一度対等な条件で勝負しませんか？」

「勝負、だあ?」

「そうです。肝試しの驚かす側と驚かされる側に分かれて勝負するんです。」

脅迫という強硬手段に訴えて3年連中を黙らせることは簡単だ。しかしそれでは2年、3年の間に禍根を残してしまう事になる。だったら不満を発散させる場所を作って、そこに不満をぶつけさせ

てやればいい。

「面白い提案だ」

「悪かねえな」

雄二が了承し、続いて夏村(?)が了承する。

「それじゃあそういう事で決定!」

「当然俺達が驚かす側だよなあ。お前たちにきっちりとお灸を据えてやらねえとなあ」

「ああ、それで構わない」

「これがあらかじめ決めていたルールです」

? 2人1組での行動が必須1人だけになった場合チエックポイントの通過は認めない。

1人になっても失格ではない

? 2人のうちどちらかが悲鳴を上げてしまったら両者とも失格

? チエックポイントはA~D各クラスに4つずつ。合計四カ所とする。

? チエックポイントでは各エリアを守る代表者(クラス代表じゃなくてもOK)を2人と召喚獣で勝負する。

? 一組でもチエックポイントをすべて通過する事が出来れば驚かされる側、させなければ驚かす側の勝利となる。

? 脅かす側の一般生徒は召喚獣バトルを認めない。あくまでも脅かすだけにする。

? 召喚時に必要となる教科の教師は各クラスに一名配置する。

? 通過の確認用として必ずカメラを携帯すること

? 設備への手出しを禁止する。

「へえ、結構凝ったルールだね。面白そうだよ」

「坂本、この悲鳴の定義つてのは一体どうなってる？」

「その辺はカメラを携帯させる訳だしそこから拾った音声が一定値を超えたら失格つて事でどうだ？」

「そんな事が出来るのか？」

「ご心配なく、常村先輩。その辺はこのムツツリー二の得意分野です」

「……………問題ない」

「おい、ちよつと待て烏丸！ 何で常村の方は名前を覚えてやがる！？」

「夏村先輩、今大事な打ち合わせ中なので少し静かにお願いします。」

「夏川だ！」

まだ騒ぐか…………。

全く…………、空気の読めない奴だ。

「チェックポイントの科目はどうやって決める？」

「それについては一つずつ科目指定つて事でどうだ？」

「一つずつ？ 二つずつじゃないのか？」

「ええ。現国の先生と化学の先生にはもう話してしまいましたから」
「受験で出やすいその二教科なら不公平は無いだろ？」

「で、坂本よお。さつさと負けた方の罰を聞かせろよ」

「負けた方は二学期にある体育祭の準備と後片付けを相手の分まで
請け負うつて事でどうだ？」

「おいおい、お前にしては又ルイ罰ゲームじゃねえか？ さては勝
つ自信がないな？」

「夏村先輩、間違えないでください」

「夏川だ！」

「この勝負は雄二とあなたの私闘ではなく、学年全体が関わって
ることなんです。そんな重い罰ゲームを相談なしに決めて学年全体

から顰蹙ひそこまを買いたいんですか？」

「……ケツ！ お前は忌々しい奴だな、烏丸あ！」

「お誉めに預かり光栄です」

「そう逸るなよ、先輩。個人的な勝負がしたいんだったら、チエツクポイントで待ってればいくらでもやり合えるぞ？」

「チエツクポイントでの直接対決か……。面白れえっ！ 乗ったぜ！」

「そんなじゃ勝負は明日って事で……。楽しみにしてるぜ？ 先輩？」

「クズ共、年上の怖さを思い知らせてやる」

単純な奴ら……

さて面倒な準備設営と脅かし役も押し付ける事が出来たし、さっさと帰ろうと……

.....

三年との肝試し合戦の打ち合わせも終わり、優子と一緒に帰っていた。

お互い何でもないような話をするだけのゆっくりとした時間……

オレがボケて優子がツッコミを入れる漫才の様な会話……

この優しい時間がずっと続いてくれればいいのに……

どうやらオレは随分ナーバスな気分になっているようだ。

それを誤魔化すようにいつもより多くバカな発言を連発する。

そしていつものやりとり……

「けど面白いわね、人の本質を映し出す召喚獣なんて」

「そうか？」

「そうよ。ちなみにアタシは化け猫が出ただけど……」

なるほど。猫かぶりな性格と可愛い外見に反して凶暴なところが出たのか……

「ははっ。優子にピッタリじゃないか」

「どっついう意味よ？」

「言葉通りの意味」

「……なんだか最近ヒロ捻くれてきている様な気がする」

「優子の前で取り繕うのもバカらしいしなあ……」

「なんだか複雑な気分だわ……」

優子の前では演技も打算も……何も必要ない……。

そして穏やかな気持ちでいられる。

自分の中にあるのがドス黒い物だけではないと実感できる……。

自分の事ばかりだな……。

やっぱりオレの本質は 『エゴイスト』だ……。

召喚獣を呼び出したら出るのは恐らく 悪魔か死神か……。

もしかしたら厄病神かも知れない……。

「ヒロの召喚獣ってどんななの？」

「わからん。召喚してないし、興味もないからな」

「嘘ね……」

「……なぜ？」

「アンタは嘘をつくときと隠し事をするときは絶対に顎を手にやる癖があるからよ。アンタの事だからまた変に考えすぎてるんでしょ？」

む……。鋭い……。

「ハア……。ホントにお前ら姉弟には隠し事出来ねえなあ……。」

「当たり前でしょ？ 秀吉はともかくアタシがアンタの事どれだけ

見てきたと思ってるのよ？」

「ははっ、嬉しいけど恥ずかしいセリフだな」

「誤魔化そうとしないで……！」

逃げ道なし、か……。

仕方ない……。そろそろ一人で抱え込むのも辛くなってきたことだし……

「わかったよ。白状する……」

オレは自分の本質を見せつけられるという恐怖……

本質をさらしてしまう事で友達に軽蔑されてしまっかもしれない、という不安をすべて優子に話した……。

「アンタは……なんでそう次々と不安を見つけてくるのよ……？」

「オレから見たらどうしてお前らが“自分の本質”を気軽に他人に見せられるかっていう方が疑問だよ……。」

「別にそこまで怖がらなくても……」

「もし……出てくるのが今日のゾンビと比べ物にならない醜悪なものだったらどうする？ そんな物が本質として出てきたら……オレは……！」

全身の血液が逆流するかのような感覚を覚えた……。

もう……一人はいやだ……。

あの時の様には戻りたくない……。

オレは皆が好きだ……。

だから……嫌われたくない……！

「ホントにアンタは……」

次の瞬間オレの顎にすごくいいのが入った……。予想もしなかった衝撃に頭がクラクラして尻もちをつく……。

「い、いきなり何するんだ!？」

「気合い入れてあげたのよ！」

「は……………」

「しっかりしなさいよ。ここが踏ん張りどころでしょう?」

優子が膝をつき、オレの手を握りながら諭すように耳元で囁く。

「アンタは自分の悪いところしか見えていない。だからそんなに怖いよ。もっと自分のいいところを見てあげなさい。」

「自分の……………」

「そうよ。アタシはアンタのいい所をたくさん知ってる。友達や家族を何よりも大事にしてるところも、義理堅いところも、面倒見がいいところも、人の痛みを分かってあげられるところも……………」それ以外にもたくさん知ってる。だから……………」自分を嫌いにならないで……………」

その通りだ。オレが皆に自分の本質を見せたくないのは自分が嫌いだからだ……………」

「アタシはアンタが好きなんだから、アンタも少しだけでいい。自分を好きになつてあげて……………」

「けど……………」オレは自分が信じられないんだ……………。それなのにどうやって好きになればいい? どうすればいい?」

「アンタが自分を信じられないんだったら、アタシを信じなさい! アタシはアンタの本質がなんだろうと絶対に嫌いになつたりしない……………」

「オレの本質が最低な人間だったとしても、か?」

「その時は力技で矯正してあげるわよ！ 長期戦の準備も万端よ！」
「ち、力技……？ ……………。 はは………！ はははははは………！」
「なんで笑うのよ!?」
「いや……、ククツ………！ 悪い………！ 力技って優子らしいなって思っ………！ アハハハハハハハッ！」

優子の豪快な手段にオレはつい笑ってしまった……。
そして……救われたような気がした……。
さっきまでの鉛を飲んだような重い気分はもう既に無く、すこく……楽になったような気がする……。
ドロドロは吐き出さないと楽にならないよな……。
優子に相談して……良かった……。
オレはこれで……自分の本質が何であれ受け入れられるような気がする……。

「ありがとう、優子………」
「ちょっと………！ ヒ、ヒロ!?」

立ち上がり、優子を抱きしめる……。
腕の中に収まった温もりが、それがオレに勇気をくれる……。
優子を好きになって良かった……。

そしてオレ達はそのまま一緒に帰って行った。
さて明日は肝試しだ。
頑張ろうっと！

第75話 肝試し勝負開幕!

「こにやにやちはー、学園長!」

「なんだい、また来たのかい。このバカ餓鬼が」

「はっはっはっ! そんな事ばかり言つてたらオレその内グレますよ? グレちゃいますよ?」

「何言つてるんだい。面の皮は鋼鉄製フルメタルのくせに……」

《様子はどうですか?》

《悪いニュースだよ。この部屋で盗聴器が見つかった》

《となると教師の誰かが本家とつるんでますね……。最近出入りした教師を洗うのが効率的だと思います》

《ああ。今その作業をやっている最中さね。近々烏丸本家……当主であるアンタの父親が直々に視察に入るらしいからね……。それま
では決着をつけるよ》

「もしもし、みのさん? ウチの学校の学園長がイジメるんです…

…。」

「何バカやってんだい!?!」

「明日来てくれるかな?」

「『いいとも!』って何やらせんない!? このバカタレが!」

「あっはっは! ノリがいいですね。キャッチフレーズは「愉快痛快妖怪学園長」つてのどうですか?」

「それはただの悪口さね!」

《わかりました。盗聴器はそのままに……。こちらの動きを相手に伝えるのに使えます。》

《ふん……。本当にタチの悪いガキさね、アンタは……》

《まあ……。確かにそうかも知れませぬ……。》

《だが……感謝するよ》
《どういたしまして》

「さつさと出て行きな！ このバカガキ！」
「はいは〜い、失礼しました〜！」

.....

「しかし……凄いセツトだなあ……。」

学園長との密談（筆談？）を終え、教室に戻る段階で3年が作ったセツトについて感嘆の声を上げてしまった。

薄暗い部屋、少し冷たい空気、異様なまでの静けさ……。

まるで夜の学校の様な雰囲気が出ている……。
確かにこのセツトと昨日の様なオカルト召喚獣がコラボしたら相当不気味だろう……。

凝ってるなあ〜。

「あ、ヒロ。おはよう」

「おはようじゃ」

「おはよう、明久、秀吉」

「今から肝試しの組み合わせ決めるんだってさ」

「そっか。頑張れよ？」

「あれ？ ヒロは？」

「ヒロは姉上と組むのじゃろ？」

「ああ」

『『『殺せええええっ！！』『』『』』』

「待て！ お前らどういいう事だ！？ オレと優子は公認じゃなかったのか？」

『許可したのは付き合うまでだ！ いちやつくことまで許した覚えはない！』

『『その通りだ！』』』

『なんて目茶苦茶な屁理屈なんだ！ 『付き合う事OK』いちやつく事OK』ってことじゃないのか！？』

『つていつかそもそも何でお前らの許可が必要なんだよ！？ お前らは優子のお父さんか！？』

『『知ったことか！』』』

『明久、連中は何であんなに殺気立ってるんだ！？』

『多分、朝から10人以上に声をかけたのに全滅だったからじゃないかな？』

『く……！ そういうことか！』

『かかれええええええええ！』

『『おおおおおおお！』』』

『待て待て待て！ お前らオレを殺すと合コンができなくなるぞ！？』

襲撃がピタリと止まった……。

『どうする？』

『ここであいつを殺ってしまったら我々の幸せが……！』

『いやしかし木下姉とペアを組むのは殺したいほど妬ましい……！』

『待て！ 合コンで新たな出会いがあるかも……』

『それに最後の希望がまだ残っている……』

『結論は出たか？』

『『処刑はやめておいてやろう！』』』

FFF団の連中は全員揃って腕組みをしてふんぞり返っていた……。

「お前ら素直に謝るって事が出来ないのか？」

『『我々の辞書に“ごめんなさい”の文字は無い！』』』

「そりゃ落丁だな。返品して今すぐ新しい辞書を買って来い」

「朝から何やってるんだ、お前らは？」

「おはよ、雄二。今から組み合わせ決めるんだって？」

「ああ。折角だから極力男女ペアになる様にするつもりだ。その方が盛り上がるだろうしな。お前は木下姉と組むんだろ？」

「さすが雄二。良く分かってらっしゃる」

「え？ 雄二、いいの？」

「別にいいだろ。俺は地獄の鉄人補習フルコースをサボりたかっただけだ。設営も3年がやってくれたんだ。体育祭の準備を引き受けてもそう大した問題じゃないだろ？」

「じゃが雄二と明久とヒロは常夏コンビと個人的な勝負の約束をしておったじゃろ？」

「んなもんあいつらを焚きつけるための方便だ。面倒な設営作業を押し付ける事が出来た今そんなことしなくても大して問題じゃない」「ふ〜ん。なるほどね〜。だから男女ペアにしたのか〜。……………」

で、本音は？」

「翔子とペアを組むように脅された腹いせに全員巻き込んでやろうと思った」

まあ、雄二の目的は予想通りか……………。

最もオレの本当の目的ためには好都合な提案だ。

オレが常夏コンビに勝負を持ちかけた本当の目的は なんだから……………」

「あのさ、ムツツリー……………。肝試しなんだけど僕とペアを組まない？」

……………ッ！！（ブンブンブン）

「え……………!?」

明久、なんでムツツリー二に申し込んだんだ?

お前なら姫路、島田あたりに申し込めば絶対にOKもらえたはずだろ?

「あ、明久君! どうしてこの中からよりもよって土屋君を選ぶんですか!??」

「そうよ、アキ! アンタ木下はともかく、ついに土屋にまで興味を持ったの!??」

「え? だって雄二とヒロを誘ったら霧島さんと木下さんに悪いじゃないか」

「この面子でお前の選択肢は俺とムツツリー二とヒロの3つしかないのか?」

「明久…………。お前、噂だけだと信じてたのに…………。開けてはいけない扉を開けた………….のか?」

「……………。明久、気持だけでも迷惑」

「相変わらずお主の考える事は全く読めん…………。」

そんなに男と組みたいんだったら久保あたりにでも申し込めばいいのに…………

「お姉さまっ! 肝試しのペアでしたら美春が立候補します!」

「み、美春!? 待ちなさい! さつき坂本が男女ペアにするって言ったでしょう!?? ウチとアンタじゃダメなのよ!」

「大丈夫です! お姉さまのこの静かな水面を思わせるようなお胸さえあれば、性別の壁なんてあつてなきが如いです!」

いや、性別の壁は厚くて高いぞ、清水…………

「もう！ 離れなさい！ ウチはアンタと組む気はなくて
「お願いだ！ ムツツリーニ！ 僕とペアにくっ！」

島田が明久の頸椎を正確に掌握し、抵抗できないようにホールドしている。

アレだけ見事に極められては抜け出すことは至難の技だろう……。

「アキと組む約束をしてるの！ 悪いわね、またの機会にしてくれる？」

「ですがお姉さま！ そんな豚野郎が一緒では！」

「美春。ウチが約束をやぶる事が嫌いだって事、知ってるでしょ？ それなのにまだそんな事言うのかしら？」

「……仕方ありません。お姉さまがそこまで言うのならこの場は引きます。」

「うん。わかってくれてありがとう、美春」

「ですが万が一その豚野郎が参加できなくなったら美春が」

「ごめんね、美春。そうだったらウチおなかが痛くなる予定なの」

「お姉さまは冷たいですーっ！」

“お腹が痛くなる予定”とは斬新な断り文句だ……。

「そういう訳でアキ、よろしくね」

「けど、美波は僕がパートナーでいいの？」

「そ、そんなに遠慮しなくても、ウチにはアキで充分よ。ちょっと頼りないけど、ウチはあんな作りもの怖くないし、それにあんだだつて他にパートナーのあてなんて……」

「僕、人間だよ？」

「……その誤解、絶対に今日中に解いて見せるからね」

「島田……、心中お察しする……」

「そう思うなら烏丸も誤解を解くのを手伝ってよ……」

「……悪いが誤解を解く自信がない」
「「「「」」」」

『吉井明久……！ 殺します。殺します。殺します。ころします。ころします。殺しころしころしころしころしころしころしころし……！』

明久に死亡フラグが……

きっとあいつ昨日の夜寝ている時に死神が枕元に座っていたに違いない……。

『待つんだ、清水さん。まずは様子を見るんだ』

『あなたは……Aクラスの久保利光君でしたね。美春に何か御用ですか？』

『手を組もう、清水さん。おそらく僕たちの利害は一致するはずだ』
「……美春にとっても悪い話ではなさそうですね」

訂正……。明久と島田の不幸フラグが立った……。

ご愁傷さまとしか言いようが無い……。

「み、美波ちゃんずるいですっ！ 私だって明久君と」

「う……。ごめんね、瑞希……。でもでもアキと組んだら、チエックポイントでの召喚獣をアキの目の前に曝さないといけないのよ？」

「はう……。！ そ、それは……！」

「まあ、組み合わせは大体決めておいて細かい事は後でいいだろ」

「どうしたの、雄二？ 他の人を優先させるなんて、らしくないじゃないか？」

「ああ。今回は俺は肝試しを企画した側だからな。自分が楽しむのは後回しだ。」

「で、本音は？」

「翔子とペアになった以上他の連中にクリアさせて俺は出来るだけ参加せず済ませたい」

そうはいかない……。

雄二には悪いが、オレの目的の為に雄二には是が非でも参加してもらわなければならない……。

「さて。そろそろ突入順とか決めないとならんし、くっちゃべつてないで集合場所に急ぐぞ」

.....

《ね、ねえあの角怪しくない？》

《そ、そうだな……。何か出てきそうだな……。》

Bクラスのコンビがまず様子見として出撃している。

仲のセットの作りは江戸時代の風景で結構雰囲気が出ている……。

そしていかにも怪しい角を2人が慎重に曲がる……。

そして

《そ、それじゃ俺が先に行くから……》

《うん……》

《行くぞ……！》

《うん……！》

意を決したように角を曲がる2人……。

そこにはただ、ただ長い廊下が続いてるだけだった……。

「な、何よ。何も無いじゃない」

「良かったです。あそこには何もありませんね……」

ホッとしてる姫路と島田……。相手の術中に嵌まっている……。ホラー映画の定番は『ホッ』とさせといて『バア!』だ……。きつとこの後、何かあるぞ。

《《ぎゃあああああああ!》》

「「きゃああああああ!」」

「……???」

「……失格」

カメラに映る間もなく突入した2人の悲鳴が上がり、デジタルメーターが失格ラインを超える。

突入した2人の悲鳴につられて姫路、島田も悲鳴を上げ、霧島はそれを見て何が怖いのか分からないといった様子で首をかしげている。優子かというと、平然としていた。

「優子、お前意外に平気そうだな」

「え……? そんなことないわよ!?　すごく怖いわよ?」

「なんで疑問形?」

こいつ……。

『肝試しが苦手』って事も優子得意の対人用猫の毛皮か……?」

「何よ? その冷やかな視線は?」

「いゝや、別に」

「うゝん、いきなり1つ目の角で失格なんて……。向こうも本気だね。」

「流石は3年と言ったところか……。」

このままのペースでいけば、点数の高い連中はチェックポイントにつく前に失格になってしまっただろう。

これはオレの目的を果たす為には良くない状況だ。二組目が突入した後、雄二に耳打ちした。

「雄二、Fクラスを投入してチェックポイントまで様子見をしたほうがいいじゃないか？」

「そうだな。あいつらが終わったら投入だ」

《《ひゃあああああ!!》》

「早っ!!」

《《血塗れの生首がいきなり出てきやがった……。》》

《《後ろにいきなり口裂け女がいるなんて……》》

なるほど。カメラを使って脅かすタイミングを計っていたな……。

どおりでカメラの使用をあっさりと許可したと思った。

おまけに明久以外の召喚獣は物に触れれないから奇襲するには持って来いだ。

確かにこいつは強敵だ……。

「よし、それじゃあ手を打つか! みんな! 順番変更だ! Fクラス福村、須川ペアと有働、朝倉ペア先行してくれ!」

《《行ってくるぜ!》》

《《カメラはオレが持つぞ》》

まずは須川、福村の2人が先行する。

そしてさっきの曲がり角……

2人は警戒心の欠片もない様子でズンズン進んでいく……。
お前らのそういうところは素直に凄いと思う……。

《あそこだったよな。何か出るって場所》
《だな》

そして何気なくカメラを向けるとそこには血みどろの生首と口裂け
女が浮いていた……。

「きゃあああああああ！」
『きゃあああああああ！』『』

姫路と島田の叫びが呼び水となり、教室にいた奴らの叫び声が辺り
に響いた。

耳が痛い……。

《おつ。この人口は少し大きいけど美人じゃないか》
《いやいや。こっちの方が美人だろ。首から下は下がらないから分
からないけど、血を洗い流したら美人のはずだ》

うん。悟りの境地に達しているな……。

『もう、女なら何でもいいや』ってところまで悟りを開いてしまっ
ている……。

恐るべし……！ Fクラス！

「な、なんであいつらあんなに平気なのよ！？ アキ達も！ 怖く
ないの！？ あんなにリアルなお化けなのよ！？」

そう言った島田の顔は真っ青だった。

とは言われてもなあ……。

「別に命の危険がある訳じゃないからな」

「グロいものはFクラスで散々見慣れているしな」

「……………あの程度殺されかけている明久とヒロに比べたらどうという事はない」

「そうじゃな。姉上の折檻に比べたらどうという事はない」

「だな。オレ達も伊達に毎日死にかけてる訳じゃない」

日頃殺されかけてる事がこんな所で役に立つとは考えてもなかった…………。

《それにしても暗いなあ》

《ああ。それならちようどいい。あそこにある明かりを借りようぜ》

セツトされている提灯に近付き、明かりを借りようとする。

ポン

セツトに紛れていた提灯に手足が生えた。

「きゃあああああつ！！」

教室内に再び叫び声が上がるが

《これ掴めないぞ？》

《召喚獣なら掴めんじゃねえか？ 試獣^{サモン}召喚》

「うわあ…………。」

モニターに映し出される2人は平然として召喚獣を呼び出し更に先に進めた。

ゾンビに頭を掴まれて手足をバタバタさせる提灯お化けは少し哀れだった…………。

優子はその光景を見て顔を引き攣らせていた……。

お化けは平気でもFクラスのバカ行動にはいつまで経ってもなれないようだ。

全く順応性の低い奴だ……。

環境に順応すること……

それは人類の進化に必要なことだというのに……

『……雄二。怖いから手を繋いでほしい』

『黙れ翔子。お前全然怖がってないだろ』

『……怖くて声が出なかった』

『嘘つけ。悲鳴を上げるタイミングを計り損ねただけだろ』

ほら、霧島はしっかりFクラスの行動に順応してるぞ。

《あー、畜生。なんで俺が須川なんかと……》

《お前がモテないから悪いんだろ？》

《何だと須川……？ お前だって、朝から20人位に声をかけたけて全滅だっただろうが》

《ち、違う！ あれは別に断られた訳じゃない！ 向こうには向こうの都合があつたんだ！ 俺がモテないわけじゃない！》

《オレだってそうだ！ オレはモテないわけじゃない！ タイミングが悪いだけだ！》

あれ？ 今赤い線を越えなかったか……？

「……………失格」

「あいつら何をやってるんだ……………」

「あいつらバカをやってるんだ……………」

流石はFクラス……………！

オレを含めてバカばかりだ！

《はぁ……。不毛だな……。》

《そうだな……。》

《《後で腹いせに烏丸を殺ってしまおう……》》

「ご指名じゃ、ヒロ」

「アンタモテるじゃない？ 羨ましいわ」

「あいつら『殺る』って言ったぞ！？ これが本当に羨ましいのか！？」

冗談じゃねえ！ 殺られる前に殺ってやる！

オレを襲撃して生き残れると思うなよ……！

そして次は有働、朝倉が突入……。

順調にチエックポイントまで辿り着き、瞬殺された……。

「まあ、こんなもんだよな」

「そうだね。チエックポイントは純粹な点数勝負だもんね」

「けどあの2人のお陰で向こうの仕掛けとチエックポイントまでの道のりは理解できた」

「そうだ！ これで他のクラスの連中を送り込める確立も上がったはずだ！ 皆！ ここは一気に勝負を決めるぞ！ 今の連中に対抗できそうな連中はドンドン突入してくれ！」

『『俺達に任せておけ！』『』『』

「お前らが対抗できる点数じゃないだろ！？」

Fクラスの連中が自信満々に立ち上がる……。

お前たちのその自信はどこから出て来るんだ？

オレに一番欠けている物を持っているクラスメイトに呆れながらも、羨望を抱いている自分に少し驚いた……。

自分の本質を臆面なく晒すことができる奴ら……
それは自分に自信が持てるってことなのかな……？
3年連中の言うとおりあいつらは馬鹿だ……。
だけど……オレにはそのバカなところが……どうしようもなく羨ま
しくて、憧れる……。

第76話 Dクラスの怪奇

《よし、Bクラス制覇!》

《やったね、真一君!》

朝倉達が撃破されてから7組目の突入でやっとBクラス担当の3年を撃破することに成功した。今回は補充試験が無いらしいから消耗させてからトドメを刺すという方法が最も有効だ。いかにして点数のいい奴の数とチェックポイントの数のバランスをとるか、がオレの真の目的のを果たす為のポイントになってくる。

それはそうと……

《それじゃあ引き続きDクラスに向かおう!》

《うん。頑張ろうね、真一くん》

《怖かったらいつでも言えよ。俺が守ってやるからな》

《うん。ありがとう。頼りにしてるからね》

『チツ……!』

クラス全体から舌打ちが響き渡る。

肝試しに参加しているFクラス以外の男子から漏れた者の様だ。

あいつらの心境は『イチャイチャイチャとウザってえ……!』
といったところだろうか?

舌打ちで済ますあたりこいつらはまだまだ甘ちゃんだ。

「坂本、次は俺に行かせる。奴等に本当の敵は2年にいるってことを教えてやる」

「待てよ近藤。ここは【安心確実の味方殺し】の異名を持つこの武藤啓太の出番だ」

「いやいや。【逆恨み清算します】がキャッチコピーの原田信孝に任せておくべきだ」

「ははは。バカだなあ。ここでこのオレ【処刑人】烏丸大貴と【天下無敵の仮面優等生】木下優子の最強コンビを起用しなくてどうするよ?」

「アタシはやらないわよ! っていうか巻き込まないでよ!」

「みんな! 落ち着いてよ!」

「そうだ。明久の言うとおり………そういう事は皆でやるべきだ!」

そう……、オレ達のFクラスの売りは大胆な行動力!

舌打ち程度で済ませるなんてとんでもない!

……オレも大分Fクラスに染まってきたな。

まあ、面白いからいいけどさ。

「けど味方同士でやり合うのは拙くない? 勝つためにあの人たちには頑張ってもらわないとね?」

「そうじゃな。勝ちを狙うのは当然じゃろうな」

「なるほど。殺るのは使い終わった後って事だな」

「違うでしょ!」

《きゃあああああああつ!!》

《ど、どうした真美!? 何かあったのか!?》

《何か又メツとしたものが首筋に……!》

「……………失格」

「直接接触、かな?」

「恐らくそうだろうな。向こうもバカじゃない。上手く切り替えてきてやがる」

「切り替えるって驚かし方を?」

「ああ。刺激する感覚を視角から触覚に変えてきやがった。急に切

り替えられたら対処できないだろうからな」

「なるほど。向こうも頭を使ってきておるといふ事じゃな」

「やっぱりここはオレ達Fクラスの出番だろ？」

「ああ。Fクラス第2陣突入準備！ これ以上奴らの好きにさせておくな！」

『『『おうつつ！』』』

.....

《おい。坂本の話や戻ってきた奴の話だと、このあたりでよく分からない物を当てて来るらしいぞ》

《そうなのか。それだとさっきまでのBクラスよりやりにくいな》

《そこで俺はちょっとした対策を考えてきた》

《対策？ 何かいい方法でもあるのか？》

《おう。とっておきの方法だ。……いいか？ 突然触って来る物が怖くて悲鳴を上げてしまうのは、それがなんだかよく分からない物だからだ》

《確かにそうだな》

《だから、その触れてくる物を『俺の事が好きで手を繋ぎたいけど、恥ずかしいからそこらの物を使ってしまふ可愛い女の子』と脳内変化してやればいい》

《な、なんだと……！？ それはあまりに妙案すぎる……！ 武藤、

俺はお前のその頭脳が恐ろしいぜ！》

《ふっ……！ よせやい！ 照れるぜ！》

「ヒロ………？」

「優子、皆まで言っな！ お前の言いたい事は何となくわかる！

わかるけど……！ あえて頼む！ スルーしてくれ！」

「わ、わかった………」

「ねえ雄二。あの2人、会話がモニター越しに会話が聞こえてる事
知らないのかな？」

「わからん。なにせ恐ろしい頭脳の持ち主だからな」

「確かに恐ろしいね」

そしてこんにやくが飛んできた。

《ヒヤッホー……ッ！ たまんねーっ！》

脳内トリップを堪能しているバカ2人……

今の叫びでどうやら失格になったようだ……。

「明久、ヒロ。あの二人を後で始末しておいてくれ……」

「了解」

オレのハリセンはまた仲間の血で染まるのか……。

.....

「今の2人以外は順調そうだね」

「そうだな。突然の接触到驚きはするものの、悲鳴を上げるほど繊
細な神経をしている連中じゃないからな」

「という事はそろそろ向こうの方でも何か動きを見せる頃合いじゃ
ろうな」

「ああ。向こうにもこっちの動きは筒抜けだからな。」

「なんだか……嫌な予感がする……」

「ヒロの勘はよく当たるからな。注意しておこう」

「何をしてくるかな？」

「さあな。見当もつかないが　ん？　雰囲気が変わったな。」
「そうじゃな。わかりにくいのが広い空間に出たようじゃの……。あ
とは……中央に照明らしきものが見えるのう」
「う……！」

不意に背中に妙な悪寒が走った……。

これは……何か拙い！　何かよく分からない（というか分かりたくない）けど拙い物がある！

「どうしたの？」

「何か……！　何かヤバいのがいる……！」

身の危険はないはずなのにオレの頭の中で警報が大音量で鳴っている……！

冷汗を流し、息を吸うのも忘れるくらい緊張していた。

モニター越しに突入したクラスメイトの会話が聞こえてくる。

《なんか不気味だな》

《そうだな。よく分からないがヤバい感じた》

《つつ立っていても仕方ない。先に進むぞ》

《おう》

「ダメだ……！」

「ヒロ……！？　しっかりして!？」

「それ以上進んじゃダメだ！」

しかしその叫びがモニターの2人に聞こえるはずもなく、どんどん先に進む。

そしてオレの嫌な予感は当たった……。

照明のスイッチが入り、ステージの一部にスポットライトが当たる

……。
そこには常夏コンビの片割れの坊主頭……夏村？が静かに佇んでいた。

ゴシッククロリータファッションを着て……

『『『『『ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああつ！！！！！！！！！！』』』』』

モニターの2人だけではなく、教室内は恐怖のどん底に突き落とされ、2年全員は校舎全体に響き渡りそんな悲鳴を上げていた。今この教室の中は軽い恐慌状態だ。

勿論オレも例外ではない……。

「坊主野郎めっ！ やっってくれたな！」

「汚い！ やり方が汚ければ映ってる絵面も汚いよ！」

「きゃあああああああ！！ お化け！ お化けじゃないけどお化けより怖いです！」

「うううう……っ。夢に見る……！ ウチ今夜は絶対に寝れないわ……。」

「……気持ち悪い」

「あれはさすがにワシも耐えられん」

「クウ……ッ！ 昨日の西村先生の精神攻撃よりキツイ……！！」

「あんな恐ろしい事を思いついて実行するなんて……！！」

《なんだ？ 今こつちの方から悲鳴が聞こえてこなかったか？》

《ああ。間違いない。そこで悲鳴が ぎゃあああああ！！》

さっきの悲鳴が呼び水となって突入した奴が続々と坊主のいる部屋に集まってくる。

「雄二！ 速く手を打たないと全滅だよ！」

「く……っ！ だがすでに突入している奴らは助けようが無い……！」

「そんな！ 彼らを見捨てるしかないの！？」

「……………ッ！」

「待て、ヒロ！ どこへ行く！？」

「決まってるだろうっ！ あいつらを助けに行く！ まだ間に合うかもしれない！」

「止せ！ 間に合わない！ それにお前まで奴らの餌食になるつもりか！？」

「けどっ！」

《ぎゃあああああつ！ 誰か、誰か助けっ……！》

《嫌だ！ 嫌だ嫌だ嫌だ！ ここから出してくれえっ！》

《助けてくれ！ それが出来ないならせめて殺してくれ！》

《……………xっ！》

「……………突入部隊……………全滅……………」

「くそっ！ みんなあ！」

「……………ッ！ よくもあんな……………！ あんな無惨な殺し方を……………っ！」

悔しさ、怒り、やるせなさが入り混じり、机に拳を打ち付けた。

確かにオレの“真の目的”の為には確かにあいつらには失格になって貰わなければならなかった。

しかしそれは笑い話で済むレベルで失格になってくれればいいだけだった。

あの坊主は……………！ あの坊主だけは……………！

許しておけない……………！ 許しておけるか……………！

『坂本っ！ 仇を……！ アイツラの仇をとつてくれ！』
『あんなので負けたら散っていったアイツラに申し訳が立たねえ！』

「雄二！ あの坊主はオレが叩き潰す！ オレに行かせてくれ！」
「落ち着きなさい、ヒロ。今のアンタは頭に血が上り過ぎてるわ」
「木下姉の言う通りだ。それにな、あの坊主を撃退するために最も適してるのはお前と木下姉じゃない。……ムツツリーニ、工藤ペア！ 準備は！？」

「……………いつでも行ける」

「バッチリだよっ」

「よし！ ムツツリーニ、工藤愛子ペア投入するぞ！」

『ムツツリーニ！ ムツツリーニ！ ムツツリーニ！』』』

『工藤！ 工藤！ 工藤！』』』

鳴りやまないムツツリーニと工藤への声援……

その声援を受けても二人はいつも通り平然としていた。

「よろしくね、ムツツリーニ君」

「……………（コクリ）」

「頼むぞ、二人とも。なんとかあの坊主を突破してDクラスをクリアしてくれ」

「うん。約束はできないけど、精一杯やらせてもらおうよ」

「……………問題ない。あの坊主に真の恐怖を教えてやる」

……………

「みんな！ もうすぐ衝撃映像が来るよ！ 女子は全員眼を閉じるんだ！」

ムツツリー二と工藤が問題の場所、坊主の待つ部屋に近付いていく。あの恐怖は来ると分かっていてもやはり耐え難い物がある。

冷静に考えるとオレが言ったところでどうにかなるものではない。

落ち着け……。私情に流されるな……。

あの坊主に引導を渡してやりたいが、冷静に……オレの目的のための策を実行するんだ……。

オレのこの肝試しにおける“真の目的は”明久達だけじゃなく、学年の皆に対する裏切り行為と言えるだろう……。

けど取り返しがつかない事になる前に……やらなくてはいけない……。

そしてこの目的は遂行するために必ず誰かが手を汚さなければならぬ。

だったら……オレがやる……。

汚れ仕事はオレの仕事だ。

表側に立つ奴等にさせるわけにはいかない。

「つ、土屋君がダメだったら、あとはこちらも対抗して明久君がフリフリの服を着て行くしかありませんね……。」

「そ、そうね。そ、それしか手はないものね。仕方ないわよね……。」

「二人ともそのおかしな提案は気が動転してる所為だよな？」

「……………」

「あははははっ！ 頑張れ、明久！ オレは応援してるぞ！」

「あら、その時はヒロも一緒よ？」

「あははははっ！ ナイスジョーク！」

「和服はこの間着だからセーラー服とゴスロリとメイド服……どれがいい？」

「冗談だよな？ 冗談だと言ってくれ！」

いくらオレが汚れ仕事担当だとしてもそんな汚れ仕事は御免こうむる。

念のために言っておくがこれは我儘でも仕事の選り好みでもない！

《ムツツリーニくん、あの先だったっけ？ さっきの面白い先輩がいるのって》

《……………問題ない。準備は出来ている》

あの2人、随分落ち着いてるな……………。

「やっぱりまた真っ暗になってるね」

「突然現れる方が効果があるからな。タイミングを見計らってスポットライトを入れるつもりだろう」

「しかしムツツリーニはどうやってあの変態野郎を撃退するつもりなんだろうな？」

「うん……………。見当もつかないよ……………」

「ムツツリーニの事だ。何かとっておきの方法があるんだろう」

話している間にムツツリーニと工藤は問題の場所に辿り着いたようだ。

ぼんやりと暗闇から映し出される影が不気味さを一層強調している。

「そろそろ来るぞ」

「うん……………！」

「……………ッ！」

来るべき衝撃映像に備える……………。

そして

バンッ！（スポットライトのスイッチが入る音）

ドンツ！（ムツツリー二が大きな鏡を置く音）
ケポケポケポケポツ……！（坊主頭の変態が嘔吐する音）

ああ、なるほど。相手の気持ち悪さを逆に利用して自爆させるって
ことか。

流石だ。ムツツリー二！

ところであんまり関係ないけど、あの吐いた物って後で3年が処理
してくれるんだよな？

《テ、テメエ！ なんてもんの見せやがる！ 思わず吐いちゃったじ
やねえか！》

《………吐いた事は恥じゃない。むしろ人として当然の事》

おい、変態野郎。その発言は自虐だつて気付いているか？

《クソっ！ 想像を絶する気持ち悪さに自分でも驚いたぜっ！ ど
うりで着付けをやった連中が頑なに鏡を見せてくれないはずだ！》

その着付けをやった連中に心底同情する……。

《ムツツリー二君。この先輩ちよつとおもしろいね。来世でなら知
り合いになってあげてもいいかなって思っちゃうよ》

《ちよつと待て！ お前今俺の現世を全否定しねえか！？ ってい
うか生まれ変わっても知り合いどまりかよ！？》

工藤が珍しく毒吐いた……。

あいつもあの変態野郎のやり口に憤りを覚えてたのか？

《あ、ごめんなさい。悪気はなかったんですけどゲロ野郎》

《純粹な悪意しか見当たらねえよ！》

しかし……どこかで聞いた事がある様な罵倒だな……？
何処でだったかな……？

《つて待てやコラ！ テメエ何勝手に人のこんな姿をとろうとして
やがる！？》

《………海外の本物サイトにアップする》
《じよ、冗談じゃねえ！ 覚えてろおおっ！》

坊主頭の変態野郎は涙目になりながら走り去って行った……。
皆……、仇はムツツリーニが獲ったぞ……。
だから安心して眠っていてくれ……。
眼を覚ます頃にはすべて終わってるはずだから……

「それにしても……工藤さんって意外とキツイ事言うんだね……。」
「………普段の愛子がああいう事は言わない」

「お姉さま！ あの罵倒は美春が工藤さんに指導したんです！ 美
春のお手柄です！ 褒めてください！」

「み、美春……。あれはいくらなんでも酷過ぎ」
「清水……」

「な、なんですか！？ 烏丸大貴！ み、美春に何か御用ですか！
？」

「アレはないだろ……。」

「そうよ。烏丸の言う通りあれは」

「あれだけじゃ生ヌルイッ……！」
「………え……？」

「あの程度の罵倒しか出来ないのか！？ 否！ 断じて否！ お前
の実力はそんなものじゃないはずだ！ あの坊主頭の変態野郎が相
手ならもつとキツイ罵倒を浴びせてやっても良かったはずだ！ 倫
理？ 情け？ そんな物はあの変態野郎に必要ない！ あの坊主限

定で18禁なんてクソ喰らえだ！」

「……………ッ！　そうですね……………。烏丸大貴！　美春が間違ってた……！　【検閲削除】や【検閲削除】クラスの罵倒を工藤さんに吹き込んでおくべきでした！」

「清水……………！　わかってくれればいいんだ！　偉そうなことを言っ
て悪かったな　　って優子！　待て！　その関節はそっちに曲がら
な　　ッ！　ぎゃあああああああ！！！」

「アンタは何バカな事を大声で口走ってるのよ！？　しかも清水さ
んと仲良くしてるし……………！　覚悟しなさいよ……………」
「みぎゃああああああつ！　それ以上は無理iiiiiiii！！！」

……………

バカな事をやっているうちにムツツリーニ、工藤ペアはチエックポ
イントに到着した。

「あれ？　ここのチエックポイントは坊主先輩じゃないんだね？

てつきりあの人が出て来るんだと思ってたよ」

「ああ。そういう決まりは作ってないからな。後のAクラスかCク
ラスにでもいるんだろ」

「出てこないって事はないよね？」

「それは無いな。常夏コンビの性格から考えて、恐らく一番最後の
教室でラスボス気取ってるんだろつよ」

「まあ、後の事は後の事じゃ。まずは目先のことじゃな」

「そうだね」

チエックポイントで3年と対峙するムツツリーニ、工藤ペア……………

科目は保健体育……………

《《《《試獣召喚！！》》》》

そして召喚獣が呼び出される。

ムツツリーニはヴァンパイア、工藤はのっぺらぼう、3年2人はミイラ男とフランケンシュタインだった。

3年の本質は根が優しいと怪我しやすい、かな？

工藤はのっぺらぼう……

『掴み所が無い性格』か？ いや、というより『本心を見せない』
なのか？

意外だな。人と壁を作るタイプには見えなかったんだけど……

「そう言えばこの前ワシがやった演劇の演目で『のっぺらぼうの尻眼』というのが合ってたのう。」

「尻目？」

「なんでも、そののっぺらぼうは人に会うと全裸になったらしいのじゃ」

なるほど。本質は『見せたがり』か……。納得……。

.....

保健体育

Aクラス 市原亮次郎 303点

Aクラス 名波健一 301点

.....

「うわぁ……。強いな。流石はAクラス……」

「そうだね。受験科目じゃないんだから、もっと手抜きすればいいのに」

「何言ってるのよ。Aクラスは他のクラスの模範にならなくちゃいけないんだから、手抜きなんてとんでもないわよ」

《ムツツリー二君。先輩達の召喚獣なんだか強そうだね。操作もボク達より1年長くやつてるし、結構危ないかな?》

《……………確かに強い》

……………

科目

保健体育

Aクラス 工藤愛子 479点

Fクラス 土屋康太 557点

……………

「 が俺と工藤の敵ではない」

「 確かに、ね」

それは一瞬の出来事だった……。

召喚された3年のミイラ男とフランケンシュタインが倒れていた……。

一度も組みつかずに……

は、速い……!

オレの動体視力をもってしてもかなりギリギリだった……。

「 ヒロ、雄二……。今一体何が起きたの?」

「 ヴァンパイアが狼男に変身してフランケンシュタインを引き裂いていた……。」

「 それで……のっぺらぼうの方は?」

「 はつきりと見えたわけじゃないが……一瞬全裸になってミイラ男

を殴ってまた服を着ていた……。」

オレははつきりと見えました……。
おかげで姿勢は若干前屈みです……。

「その間にムツツリーニは出血・止血・輸血を済ませていた……。」
「流石は奇跡のエロリストだな……。」

「……雄二」

「ヒロ？」

「「浮気の現行犯」」

「ちよつと待て翔子！ 工藤の召喚獣を見ようと思ったわけじゃないからこれは不可りよぎやあああああー！」

「……浮気は許さない」

「アンタ何で愛子の召喚獣の格好に鼻の下伸ばしてたのかしら？
言い訳があるなら聞いてあげるけど？」

「優……子……く、首……首が……締まって……る……っ！」

《じゃあDクラスもクリアだね。次はどこに行けばいいんだっただけ？》

《……Cクラス》

《はい。了解……ところでどうしてムツツリーニ君は鼻にティッシュを詰めてるのかな？》

《……花粉症》

《へえ〜。ふ〜ん。花粉症、ねえ？》

「明久君、今何かいやらしい事考えてませんか？」

「ううん。全然」

「で、本音は？」

「後でムツツリーニに頼んで今の対決をスロー再生してもらおうと思ってる」

「これが土屋君の記録用ハードディスクでしたよね？」

「あああああつ！ ダメだよ、姫路さん！ 返して！ それは……
えっと！ そうだ！ 不正の監視用に使ってるんだから！」
「これだけの人数が証人として見ているんだから大丈夫です」
「ひ、酷い……」

『そっか……。アキは小さくても興味有るんだ……。』

薄れゆく意識の中でそんな会話が聞こえていた……。

ああ……。なんだか……。眠く……。なつて……。

第76話 Dクラスの怪奇（後書き）

祝100部達成！

記念としてリクエスト募集します！

届いた企画の中からアミダで1つ選ばうかと思えます！

1通も来なくて泣くことになるかも知れませんが……（冷汗）

まあ、とにかくリクエストお待ちしております！

第77話 お色気大作戦！

「とうわけでここではこの僕吉井明久と」

「坂本雄二が」

「ここに寄せられた『怖い話』を紹介していきたいと思います」
「面倒臭いな」

「雄二、そういうのは思っても口に出さないのが礼儀だよ」

「お前もその言葉で本音がバレてるけどな。それじゃあ最初のメールを紹介してくれ」

「了解。最初はラジオネーム『レイヴン丸』さんから」

「おい、それヒロじゃねえか！」

「それじゃあ読むよ？」

「あ、ああ。注意しろ。ヒロの事だから何かでかい爆弾落としていくぞ……。」

【The・イマジン（想像してごらん）！ 西村先生の女装姿……。

リアル鉄人桃子……！】

「ぎゃあああああああああああああああつ！！！！」

司会者が恐怖のあまり失神した為、今回はここまでとなります。

誠に申し訳ありません……。

またリスナーの皆さんの精神衛生上好ましくない想像をさせてしまったことを深くお詫び申し上げます。

【文月学園広報部 スタッフ一同】

.....

《あれ？ この口が二つある女の人って何のおばけだっけ？》

《……………二口女》

《じゃあ、あっちの体が伸びてる女の人？》

《……………高女》

《じゃあ、あっちの毛深い男の人は？》

《……………どうでもいい》

次のステージはCクラス……

ムツリーニ、工藤ペアは順調に進んでいった。

拙いな……。

まだ失格になって無い奴が結構残っている……。

このままじゃオレの計画に支障が出てしまう。

そろそろ何か手を打たないと……。

「順調だね雄二。このままだとあの2人で全部突破出来ちゃうんじゃない？」

「いや、そうでもない。さっきの保健体育の成績を見て向こうもムツリーニの正体に気付いただろうからな。そろそろ対策を打ってくるはずだ。」

「え？ どういう事？」

「3年はムツリーニの名前は知らなくても『保健体育が得意な異様なスケベがいる』って事くらい知ってるだろう。」

「すごい伝わり方だな。“ムツリーニ”の方がまだオブラートに包まれてるだけマシなんじゃないか？」

「ヒロ、話の腰を折るな。」

「悪い。まあ、正体がバレてるならやる事は1つ……。弱点を徹底的に突いてくるだろうな。」

もしそうならオレが動く必要はない。

しばらく様子を見させて貰おう。

決して『漢としてムツツリー二対策を拝みたい』という下心による行動ではない、とオレの名誉の為に言っておこう！

「でもムツツリー二の弱点って言っても……」

「鼻血の噴出音で失格に出来る」

「あははは……、まさか3年がそんな事をするわけが……」

「まあ、見てればわかる。……そろそろ来るぞ」

モニターには遠目からでも美人とわかる女性が奥に立っている。

あれがムツツリー二対策か……。

楽しみ　じゃなくて、お手並み拝見させてもらおう。

《……………っ！！（クワツ）》

《ムツツリー二君どうしたの？　何でそんなに真剣な顔……なるほどね……。》

モニターがだんだん女性に近付いていく。

近づくときよくわかるが、その女性はどことなく霧島と似たような雰囲気を持っていた。

その女性は髪を結びあげた切れ長な眼をしており、着物を着崩していた……。

『『『眼福じゃあああああっ！！』『』』

教室に2年男子ほぼ全員の魂の叫びが響き渡る。

確かに色っぽい……。

チラリズムの原則をバツチリと掴んだ、見えそうで見えない着崩し方……。

結いあげられた髪から覗かせるそのうなじもポイントが高い。

敵ながら天晴れ、といったところだ。

けどなんだろう？

あの人からはオレと似たような匂いがするな……。

「……雄二」

「み、見ていない！ オレは全然見ていないぞ翔子！」

雄二、弁明の前にまず口から垂れてる涎をなんとか拭いたほうがいいぞ。

「……私だつて着物を着たらあんな感じになる」

「いやお前に着物を着てほしいといったわけじゃないんだが……」

「……けどちょうど良かった。結婚式の時どっちを着ようか迷ってたから」

「ん？ ドレスと着物か？ まあ、誰と結婚するかは置いて、

悩むくらいなら両方着るって選択肢も」

「……じゃあ着物と猫耳メイド服の両方着る」

「なんだその選択肢！？ 出席する両親もいろんな意味で涙が止まらないだろ！？ おい、ヒロ！ こいつの間違った認識を解くのに力を貸してくれ！ 口八丁はお前の得意分野 っておい！ 何で眼を逸らす！？」

悪い、雄二……

霧島の偏った恋愛価値観を直すにはオレではちょっと力不足だ……。

《……この程度で……この……オレが……っ！》

《……ムツリー二君、足にきてるみたいだケド？》

《……ッ！！（ブンブンブン）》

ムツリー二！ 3年の先輩の攻撃がクリティカルヒート！！

これはかなり効いている！

もう既に死に体だ！

それでも尚立ち上がる！ これは執念のなせる技だーっ！
と、まあボクシングの実況風にまとめてみたりして……

ところで工藤……

さつきから気になってたんだけど、お前の顔に小さく青筋の様なもの見えるのはオレの気のせいなのか？

《ようこそいらっしやいました御二方。私3年の小暮葵と申します》
《小暮先輩ですか。こんにちは。ボク2 Aの工藤愛子です。その
着物似合ってますね》

《ありがとうございます。こう見えてわたくし、茶道部に所属しておりますので》

《あ、そっか。茶道って着物を着てやるんだよね。その服装はユニ
フォームみたいな物だね。ちょっと着方はエッチだけど》

工藤さん、顔は笑っているのに目が笑ってないデス……。

《はい。ユニフォームを着ているだけです》

《そうですか。それじゃあボク達先を急ぐので》

《実はわたくし》

《？ なんですか？ まだ何か》

《 新体操部にも所属しておりますの》

そう言つて小暮先輩は着ていた着物を脱ぎ棄てた。

そこのはレオタードを着た小暮先輩が……

『土屋康太！ 音声レベル、画面すべて赤！ 失格です！』

「畜生！ やり方が汚ねえ！ はだけられた着物でも限界ギリギリ
だったのに、その下に露出で満点のコスチュームだと！？ あのム

ツツリー二がそんなもん直接見て耐えられるわけねえだろうがっ！
「全くだよ！　なんて汚い手を使うんだ！　とにかく雄二は対策を
練って！　僕は今から姫路さんに土下座してさっきの記録用ハード
ディスクを設置し直してもらおうから！」

「わかってる！　抜かるなよ明久！」

「勿論さ！　必ず録画して見せる！」

雄二と明久が壊れた……。

まあ、あんなもの見せられて冷静でいろって方が無理だろうけど……
…後ろから姫路と島田と霧島が迫ってきているのに気付いてないん
だろうか？

「ヒロ、アンタは意外に冷静ね？　アンタの凄い好みのタイプだと
思ってたんだけど？」

いつでもオレの関節を極められる様にスタンバイしていた優子がも
つともな疑問をオレにぶつける。

なんと説明したらいいものか……

「あゝ、うん。まあな。例えばなんだけど、凄く甘い物食った後に
ジュースを飲むと甘さを感じなくなるだろ？　それと一緒になんだよ
「????　なんだかよく分からないわね……。」

以前玲さんのバスローブ姿を目撃しているからあれくらいの色気な
ら耐性が出来ている。

なんて優子に言ったらオレの命が危ないから言えない……。

「大変だ！　土屋がやられた！」

「助に行かなくては！」

「待て！　お前だけ行かせることはできない！　オレも行くぜ！」

「拙いのじゃ！ ほとんどの男子が突入準備に入っておる！」
「ヒロ！ ブレーキを頼む！」
「はいはい。わかったよ」

そしてオレは霧島にお置きされている雄二に代わり全員にブレーキをかけるための演説を始めた。

「全員落ち着け！」

『『『止めるな烏丸！ これは漢の聖戦なんだ！』』』

「だから待て！ 何が聖戦だ！ けしからん！ 実にけしからんぞ！」

『『『貴様……！ 何を言ってるんだ！？』』』

「いいか？ オレ達のやるべきことは 紳士としてあの小暮先輩にあの恰好をやめるように注意しなくてはならない！！」

『『『……ッ！』』』

『なるほど。それなら向こうを気遣う事で紳士さをアピールでき、なお且つレオタード姿を拝めるぞ！』

『確かにそうだ！』

『すまない、烏丸！ オレ達が間違っていた！』

『そうだ！ 俺達は紳士だからな！ あんな格好をやめさせるために注意をしなくてはならない！』

『そうと決まれば行くぞ！ あの先輩の元へ！』

『『『おおおおおおお！ 新体操！』』』

「……………？ おかしいな。ブレーキをかけたつもりだったんだが……………」

「アクセル全開じゃったな……。突撃と同時に全員失格になったよっじゃし……………」

「どうしてうちの学校の男子はこうバカだらけなのかしらね……………」

「どうして集団覗き騒ぎが起こったのか分かったような気がします……。」

「アンタ何やってるのよ……！ 戦力が激減しちゃったじゃない……！」

「ゆ、優子！ 待つて！ オレのその関節はそつちには曲がらな

ッ！！

ッ！！（声にならない悲鳴）」

「うう……。まずいな。このバカの所為で男子の戦力が激減しちまった……。このままじゃ久保以外の男子は全滅するぞ……。」

「そうだね。状況を打開するためにも、ここは僕に任せてよ。」

「明久君。あまり反省してないようだとお姉さんに言いつけちゃいますからね？」

「よし、突入は諦めよう」

「仕方ない。向こうが色気で攻めてくるなら」

「女子に行ってもらわうわけだね。よし。頼んだよ、秀吉」

「……明久よ。誤解をしてもらっては困るのじゃが、ワシとて異性に興味はあるのじゃからな。特にお主には覚えておいてもらわんとワシも色々困」

「え？ 異性に興味がある事を覚えておいてほしい、なんて……。みんなの前でそんな事言われても、僕は、その……」

「待つんじゃない！ 今のは遠まわしな告白ではないぞ！？ 何故頼を赤らめておるのじゃ！？」

「みんな、よく聞け！ 次は木下姉妹で行くぞ！」

「待て雄二！ 優子はオレとペアだ！」

「しかしお前が行つても」

「問題ない！ あの程度の色気なら既に耐性が付いている！」

「え？ なんで？」

「前に玲さんのバスローブ姿を見た事があるからだ！」

「ヒロ……後ろ、後ろ！」

「あん？ 後ろに何があるって 優子！ 待て、違う！ 話を聞いてくれ！」

「へえ……？ アンタ浮気してたんだ……。」

「だから違うって！」

「“玲さん”って誰よ？」

「明久の姉さんだ！」

「で、その“吉井君のお姉さん”のバスローブ姿をどうして目撃することになったのかしら？」

「バスローブ姿で外を歩いていた玲さんに道を聞かれて」

「へえ、ソウナンダ。ビックリネ。トコロ デ ツキアウト

キ ニ アタシ ウワキ シタラ コロスツテ イッタ ワヨネ……

……！？」

「待て！ 嘘じゃない！ 本当なんだ！ だからそんな無表情でオレの関節を変な方向に曲げるのはやめっ……！ やめっ……！ のおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ……！！！！！！」

こうして怒った優子に関節という関節を逆に曲げられ、一方的にペアの解消をされてしまった。あまりの理不尽さに少し泣いてしまった……。

……

《肝試しか……。困ったわね。アタシあんまりこつこつの得意じゃないのに……》

《姉上、セットを踏んどる》

《あ。ごめんなさい。壊れてないわよね？》

《しかし本当にヒ口と来なくて良かったのかの？》

《今あのバカの話はしないで……！ 怒りのあまり大声を出しちゃいそうだから……！》

《りよ、了解じゃ》

「これで問題なく先に進めるね」

「だな。あの2人なら色仕掛けになんて掛からないだろうからな」

「問題大有りじゃああああああっ!!」

「なんだ？ 浮気男」

「浮気なんてしてねえっ！ オレは優子一筋だっ!」

「ごめん、ヒロ……。姉さんの所為であらぬ疑いを……」

「いいんだ、いいんだ……。どうせオレなんて……」

「ええい、じめじめと鬱陶しい！ 向こうに行ってる!」

なんて酷い奴なんだ……。

《あら？ あなた達は　そうですか……。女の子同士のペアで来ましたか。それでしたらわたくしに出来ることはありませんね。どうぞお進みください》

《だって、秀吉。お言葉に甘えていきましょ》

《むう。すんなりと通れたのにこのわだかまりはなんじゃ?》

「なんだか随分あっさり通してくれましたね」

「そうだな。いくらなんでも無抵抗すぎる」

優子、秀吉ペアが小暮先輩を通過して少し行った所に常夏コンビの片割れのモヒカンが立っていた。

「なんだろ？ 秀吉対策かな？ けどあの坊主先輩みたいに変な格好もしてないし、悲鳴を上げる要素なんて見当たらないけど……?」

《来たか木下。待っていたぞ》

《なんじゃ？ ワシを待っていた？ どういう事じゃ?》

《よく分からないけど速くすまして貰いなさい。アタシらは先に進まないといけないんだから》

《そうじゃな。何の用か知らんが手短に頼むぞい？》

《ああ。大丈夫だ。時間は取らせねえ。……いいか、木下秀吉》

《なんじゃ？》

《オレは　　お前の事が好きなんだ……！》

秀吉の絹を裂くような悲鳴が学校中に響き渡った……。

.....

「すまぬ……。このワシがあそこまでみつともない悲鳴を……」

「まあ、気にするなよ……。無事に帰ってこれただけでも充分だ」

「そうだな。同性の　　しかもあんなむさい野郎に告白されたら悲鳴を上げるのは無理もない」

「そうだよ。それにお姉さんが『なんでアタシを差し置いてアンタが……！』って言って関節技をかけてたんだし仕方ないよ」

「違っのじゃ。関節技も確かに厳しかったのじゃが、『お前を想って書いたんだ』といって自作のポエムを朗読されたのが一番苦しかったのじゃ……。」

「ああ……。あのスノーピー以下の文章か……。確かにあれは無い……。」

もしオレが評論家ならマイナス7つ星をつけてるところだ……。

「出来れば姉上の力でチェックポイントを突破……。それが叶わぬなら消耗させるくらいはしておきたかったのじゃが」

「それは心配するな、秀吉。相手も俺達の事を知っているようだが、こっちには秘密兵器がいる。あいつらなら色香に惑わされることも

ないだろうし、恐らくチェックポイントも突破出来るはずだ」

「ああ……。あいつらか……」

あいつらの起用はある意味禁じ手……といういか反則というか……。それ位厄介な奴らなのにそいつらの手綱を握る方法があるのか？

「え？ そんな人いたっけ？ ……女子なのかなあ？ でもそれじゃあ常夏コンビに落とされそうだし……」

「いや、常夏コンビはもう大丈夫だろ。坊主の方はあれだけやればもう出てこないだろうし、モヒカンの方は秀吉専用の対策だったみたいだしな」

「……そうか。あれは秀吉をピンポイントで狙った本気の一撃だったんだ……」

本気と聞いた途端秀吉の体がビクンと震えあがった……。どうやら相当深いトラウマを植え付けられたようだ。

「明久、言葉は選べ。……よしよし秀吉。元気出せ……」

「う、うむ……。心地よいのじゃ……」

そう言って秀吉の頭を撫でると秀吉は猫のようにゴロゴロと喉を鳴らした……。

しばらくそうしていると背中から激しい悪寒がした……。

「ヒ、ヒロ……。姉上が後ろで凄い形相で睨んでおるのじゃ……」

「め、眼を合わせるな……！ 殺られるぞ……！」

……

「よし、行って来い。明久、島田」

「あれ？ 秘密兵器って僕たちの事だったの？」

「いや、違う。お前と島田が秘密兵器を動かすための力ギになるんだ……。」

「そ、そうなんだ。よく分からないけど分かったよ……それじゃあ美波行こう？」

「……………ッ！（ブンブンブン）」

「島田、怖かったら明久に捕まっていればいいから行って来い」

「べ、別に怖がってなんか……………！」

「いや、雄二が言いたいのには明久が怖がるだろうから支えてやってくれって事だ。」

「そ、そうね。そこまで言うのなら言う通りしてあげてもいいわ！」

「やれやれ、島田も難儀な性格じゃのう……………」

「何か言った？ 木下」

「いいや、なんでもないぞい」

「あ、あの……………美波ちゃん怖いなら私が……………！」

「ううん！ 全然怖くないわ！ むしろ楽しみでしかたないくらい

！ さあ、アキ！ 行くわよ！」

「あがあっ！ み、美波！ 腕をつかむって関節を極めるっていう事じゃないって！」

「ああ、待て。明久」

「なに、雄二？」

（ひとつだけお前に指示がある。ある程度中に入って着物女の一步手前まで進んだら周囲に誰もいないことを確認してから物陰に隠れて、ここに帰ってこい）

（え？ 大丈夫なの？）

（ああ。ルールでは戻ったら失格とは書いてないからな）

（それならいいけどそんなことして何の意味が）

「よし、それじゃあ行って来いっ」

こうして明久と島田のペアがCクラスの攻略の為に出陣したのだっ

た。

第77話 お色気大作戦！（後書き）

リクエスト募集中！

期間は肝試し編終了まで！

お待ちしております！

第78話 クレージー大作戦!

明久、島田ペアが突入してからしばらくして……モニターに突入させてないはずのペアが映し出された……。
久保、清水ペアだ。

「む? ヒロ、あの2人が勝手に突入しておる様じゃぞ?」

「ああ。ほつとけ。っていうか元からあの2人を突入させることが目的だったんだろ、雄二?」

「その通りだ。明久と島田が肝試しでいちゃついでる所を見せて、清水の嫉妬心と久保の焦りを煽り、暴走させる!」

「名づけて【クレージー大作戦】!」

「ネーミングセンスが無いのう……」

「そうか? 某映画から拝借したんだが……」

秀吉の心無い発言に心に深い傷を負いながらも視線をモニターに視線を戻す。

島田と明久が密着して歩いており、その後ろを久保と清水が気付かれないように尾行していた……。

《うぼおああああっ……》

《つと びつくりした……。大丈夫、美波?》

《っ! (ブンブンブン)》

《ほら、外を見れば……》

《うらめしや……》

《っ! っ!》

《ごめん……。余計な気づかいたたね……。》

《もう……。やだあ……。来るんじゃない……。ねえ、アキ……。
……。帰る……?》

島田は涙目になりながら明久に上目遣いで訴える……。
あれは……可愛い……！

普段のバイオレンスな行動が目立っていて忘れられがちだが、島田は凄く可愛い……。

あの状態なら明久を悩殺する事くらい簡単だろう……。
明久と島田はよろしくやっている……。

こっちは全然よろしくないが……。
姫路から何か黒い瘴気の様なものが出て眼からハイライトが消えている……。

正直肝試しより怖いです……。

あ。清水がボールペンを投げナイフの要領で明久に投げつけた……。
投げられたボールペンは明久から逸れ、壁に深々と突き刺さっていた。

セツトは壊すなよ、頼むから……。

しかし技の切れが甘いな……。

飛び道具の基本は“一撃必殺”だ。

今の一撃で決められないようでは清水はまだまだ未熟だ。

《次は外しません。豚野郎……！》

《待つんだ清水さん。ここで仕掛けるのはまだ早い》

《そ、そうでした。もっと暗い所でお姉さまとあの豚野郎を引き離すんです。》

《幸いにもパートナーを変えちゃいけないっていうルールは無かったからね。坂本君たちも上手いルールを考えてくれたものだよ》

よしよし……。久保と清水はオレと雄二の掌の上で踊ってくれている……。

ふふふふ……。さあ、そろそろ作戦も大詰めか……？

「ヒロ、今悪い顔をしておるのじゃ……。」「
おっと……」

《それにしても美波がこんなにもお化け屋敷が苦手だなんて思わな
かったよ》

《だ、だってしょうがないじゃない。ドイツのお化けならまだしも、
日本のお化けなんてしらないんだから……》

《でも美波もそろそろ日本に慣れないとね？》

《いい……。こんなものに慣れなきゃいけないんだっいたらウチはド
イツで暮すもの……》

《けど、そんなのは寂しいよ、美波……。ドイツで暮すなんて》

《全つつ然、寂しくなんてないわ。向こうにだって友達はあるもの。
別に1人になる訳じゃないから平気よ》

《あ……。いや、そうじゃなくて……》

《じゃあ、何よ？》

《寂しいのは僕たちのほうなんだけど……》

《……え？ アキが寂しいってどうして？》

《？ どうしてって……。寂しいのは寂しいわけで……》

《だからどうして寂しいって思うの？》

島田……。ここで勝負に出るか……。

《……。……。いつも一緒にいる仲間がいなくなるから、かな？》

《……。いつも一緒……？》

《うん》

その言葉にはお前が思っている以上に深い意味にとれるだろう……。

その事に気付いているか、明久……？

気付かないって事は時には残酷な事なんだぞ……？

《それなら……アキはウチと一緒にいてほしい、ってこと?》

《う、うん。そうなるかな?》

《じゃあ、じゃあ……ウチがアンタの傍にずっといてあげるって言うたら……どうする?》

《僕の席だけじゃなくて、周りの席は全部暑いし、冬は隙間風で寒いからやめておいた方がいいと》

《アキ、バカなこと言って誤魔化さないで》

《え? はい。ごめんなさい》

教室中の生徒がずっこけた……。

残念ながら島田……。

さっきの明久の発言は本気だったと思うぞ?

明久の頭の悪さに全米が泣いた……。

《ウチが聞きたいのはそんな事じゃない。ウチが聞きたいのは》
《》

《お姉さまを誑かす豚野郎が……。呪います。殺します》

清水……、空気読め……。

《き むぐう》

《美波、手荒な真似だけど今はごめん》

《……。 (コクコク) プハア、けど早く逃げないと》

《いや、こういうのは逃げてる最中に追いかけるから余計に怖く感じるんだよ。大丈夫。別に危害を加えられるわけじゃないんだから平然としてれば》

シユカカカツ! (ボールペン×3)

おいおい……。島田に当たったらどうするんだよ、あのKY女……。

《逃げよう、美波。走れるね?》

《うん》

《逃がしません……! お姉さまを奪い返すまでお姉さまを奪い返すまで、地の果てまで追いかけます……!》

《清水さん。君は今、ここにいるどの召喚獣より凶悪だよ》

やっぱり血は争えない、というべきか……?

あの店長そっくりだよ……。

明久と島田は懸命に走っているが、追いつかれるのは時間の問題だろう……。

さあ、どうする明久? お前の悪知恵の見せどころだぞ?

《いい美波? 僕が合図したら召喚獣を呼んで》

《う、うん》

そのまま明久は分岐点までそのまま走り、態と行き止まりの方向へ行く。
そして

《美波、今だよ》

《う、うん。試験^{サモン}召喚》

又リカベが登場し、明久達の姿を隠した。
なるほど。巧い手だ……。

あれなら気配を感じる事が出来る相手以外には隠れてる場所は分からないし、明久を殺すことしか頭にない清水は脇に標的が隠れてるなんて予想もしてないだろう。
こいつは明久の作戦勝ちだな。

それにしても

《お姉さま、オネエサマ、逃がしませんカラネ……。ケタケタケタ
……。》

《清水さん、邪悪すぎてもう周囲の空間すら歪んでるよ？》

アレを相手にしなくちゃいけない3年には心底同情する……。

オレだったらあんなのヤバいの相手にするくらいなら、常夏コンビ
に土下座した方がまだマシだと思う。

清水の行動に引きながらも明久達のモニターに眼を戻す。

いつの間にか島田が気絶しており、明久は島田をおんぶして戻り始
めていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ただいま、みんな」

「おう、お帰り」

「戻ったか、明久。よくやった。作戦は大成功だ。」

「え？ なんで？ 美波は気を失っちゃってるし、僕は何もしてな
いんだけど？」

「お主らはそれでよかったのじゃ」

「あ、あの……明久君……。」

「なに？ 姫路さん」

「あ、いえ……。なんでもありません……。」

「そろそろお前の行動が実を結ぶぞ。画面を見てみる」

「ん？ なになに？」

《ヒィー……フゥー……！ オネエサマ……。 オネエサマ ヲ

イケニエ ニ ササゲナサイ……！》

《ね、ねえ……。これ、君の召喚獣なの……？　なんだか禍々しい
オーラが出てるんだけど……？》
《いいえ、これでも一応人間なのですが……》

チエツクポイントで久保、清水（だった何か）が3年の女子2人と
相対してした。

女子2人は清水の尋常じゃない様子を見て、腰が引けてしまってい
るようだ。

《それにしても意外ね。葵の所を男子が突破してくるなんて……。
君ってブス専？》

《いえ。そんな事はありません。あの先輩が魅力的な人だってこと
位は分かります。》

《本当に？》

《ええ。僕だって以前好きだった人は女性ですから》

さらっとカミングアウトしたな……。

《……コロ……ス……！　ウバ……ウ……！　オネエサマ……！》

《それでは先輩方、清水さんが人の言語を失う前に始めましょうか。
試獣召喚》

《もうその子人として大事なものを色々と失ってる気がするけどね

……。　試獣召喚》

《は、早く終わらせないと呪われそうね……。　試獣召喚》

《試獣召喚》

.....

現代国語

3年

Aクラス 寿湊 289点
Aクラス 中尾みさお 277点

2年

Aクラス 久保利通 388点

Dクラス 清水美春だったもの 154点

.....

総合点数では負けているけど、恐らく問題ないだろう。
なぜなら

《湊！ 私がそっちの男子を引き受けるから、あなたはそっちの女の子？をお願い！》

《ダメよみさお！ そっちの男の子の方が点数高いのよ！ それならあなたよりも少しでも点数の高い私が……！》

《い、嫌よ！ だってそっちの子眼がイってるんだもの！》

《わ、私だつて嫌よ！》

もう既にチェックポイントの2人の戦意が微妙なものになっているからだ。

気の毒に……。

オレならあんなのが相手に来たら、絶対に裸足で逃げ出すだろう。

《オネエサマ…… オネエサマ ミハル ハ オネエサマ ヲコ
ンナニモ エ シテルノニ ドウシテ フリムイテ クレナイノ
？》

本当に……気の毒に……！

こうして怯える先輩2名を撃破してこのクラスは攻略となった。
クレージー大作戦、大成功！

けど素直に喜べないのは何故だろう……？

.....

「あとは雄二と霧島さんがAクラスを突破したら勝ちだね」

「そうじゃな。手が回らんかったのかAクラスは特別な仕掛けはなさそうじゃし、雄二と霧島の2人であれば余裕じゃろう」

「……それはどうかな？」

「え？ 何か言った、ヒロ？」

「いや、独り言だ」

危ない、危ない。うっかり声に出してしまった。

感づかれてはいけない……。

Aクラスは迷路が延々と続くだけの単純な仕掛けだ。

ただ迷路の道が常に造り替えられるから脅かせるポイントも変わって
てくるだけ……

さて……ここまでは順調……。

あとは雄二と霧島がチェックポイントに辿り着くだけだ。

雄二の事だから残り1組になるまで突入はしないだろう。
ますますオレの目的を果たすのに都合だ。

《うわああ！》

《きゃああ！》

「……………？と？失格」

さて……あと6組……。

《いないな……！ 急がないと、こうしてる間に2人の絆が……！》
《オネエサマ……ドコ……？》

「やれやれ……。清水はともかく久保まで正常な判断力を失ってる
とはな……。チェックポイントを突破したんだから、自分たちの前
には誰も居ないと気付いてもいいだろうに……。」

「よほど姿を見失った事に焦っているんじゃないかな」

「……恋は盲目」

「え？ 清水さんはともかく久保君はなんで焦ってるの？」

「……。」

「明久、世の中には知らない方が幸せという事もあるんだ。」

「え？ え〜っと……。実は久保君は清水さんの事が好きだとか？」

「はははっ……。上手く伝わらなかったのかなあ……？ オレが言

いたいのには 『藪を突いて蛇を出したいのか？』 って事だ。まあ、

オレには実害ないし、面白そうだからそれでも構わないけどな」

「ごめんなさい。やっぱりいいです」

「賢い選択だ」

《どこに彼らは……？ ん？ 明かり？》

《オ、オネエサマ……ドコ……？》

「んむ？ どうやら久保と清水がチェックポイントに到着したよう
じゃな」

「あ、本当だ」

《おう。来たみてえだな。随分と待たされたぜ》

《お前らが俺らのお相手第一号だな。三年の実力をじっくりと見せ

てやるから覚悟しやがれ」

「やっぱり来たか。常夏コンビ……」

《失礼、先輩方。ここに吉井君と島田さんが来ませんでしたか？》

《アぁ？ ここに来たのはお前らが最初だぜ》

《え？ そんなはずは……。彼らは僕たちより先に来ているはずでは》

《吉井たちなら確か、途中で引き返していくのが見えたような気がするな》

《そ、そんな……！ じゃあ僕達はずっと無駄な時間を……！》

《？ よくわからねえけど、あいつらに会いたいんだっいたらさっさと負けて教室に戻るんだな。 試獣召喚》

《そついう事だ。 試獣召喚》

《そうですか……。 試獣召喚》

《…… 試獣召喚……》

やっぱりやる気が失せているな……。
クレイジー大作戦はここまでだな……。

「久保君は勝てるかな？」

「どうだろうな。久保も清水もガチガチの文系だったはずだ。物理の勝負となると分が悪い」

「そうになると……久保君は苦しいね……。」

「物理を指名してきたとなると常夏コンビは理系という事になるのかの？」

「そうなるな。全く人は見かけによらないってのはこの事だな」

.....

物理

Aクラス 久保利光 213点
Dクラス 元・清水美春 71点

.....

「これで300点台とか出してきたら苦しいよね」

「それは恐らく大丈夫じゃろう。相手はなんといいってもあの常夏」
ンビじゃからのう」

「そうだね。雄二が向こうを挑発しておいてくれてよかったよ」

「.....先見の明がある」

「さすがに3年のトップクラス相手はきついからな」

「.....お前らに一つ忠告だ。」

「何さ、ヒロ？」

「相手を舐めすぎると.....痛い目を見ることになるぞ？」

「な、何言ってるの、ヒロ？」

「見ていればわかる」

.....

物理

Aクラス 常村勇作 412点
Aクラス 夏川俊平 408点

.....

「.....何いいいいいつ!?!?!」

「ちよちよちよとあの点数ってどういう事！？ 常夏コンビ
ってあんなに成績が良かったの!？」

「まるでAクラスの優等生じゃな」

「……………信じられない」

「しくじった……………！ どうりで簡単に挑発に乗ってきたわけだ！

アイツら俺の意図を見透かしてやがったな！」

「……………。」

《んじゃ、頑張つて見せろよ後輩ども。》

《せいぜい粘ってくれよな》

大斧を構える坊主の牛頭と槍を構える馬頭に久保と清水の召喚獣は
一瞬で消されてしまった。

クレージー大作戦これにて終了ってか？

「ヒロ、お前知ったのか!？」

「何を？」

「常夏コンビの成績を、だ！」

「知ってたらもつと明確な対策を立ててるって。雄二の挑発に簡単
に乗ったから少し不自然に思ったただだよ。」

嘘だ。雄二の読みどおりオレは常夏コンビの成績を知っていた。

知っていてあえて黙っていた。

オレの目的の為に……………

「……………ヒロ、お前何を考えている？」

「別に何も？ それより楽しめよ。肝試しを、さ」

雄二が何か勘付いたようだな……………。

だけど……もう遅い……。

終わりは近い……。

さてこの肝試し勝負……最後に笑うのは誰だろうか……？

第78話 クレージー大作戦！（後書き）

ヒロの肝試し勝負の真の目的がだんだんハッキリしてきました。

肝試し編でヒロのリアリストとしての面が浮き彫りになるかと思いません。

もしかしたらヒロに嫌悪感を抱く人が出てくるかも……

そうなった場合はお叱りは作者が受けますので、どうかヒロを嫌いにならないでください……。

お願いします……。

お気に入り登録件数300突破ありがとうございました！

第79話 作戦放棄、そして火はついた

「どう雄二？ 勝ち目はありそう？」

「ん〜……。良くて6：4つてところだな。翔子はともかく俺の物理の点数は150点程度だからな。召喚獣の操作も向こうの方が1年長くやってるからそんなもんだろ。それに」

「それに？」

「いや、なんでもねえ。気にするな」

どうやら雄二は完全にこっちの目的に気が付いているようだ。

そうだ。その通りだよ、雄二……

悪いが お前には今回負けて貰う……。

悪く思わないでくれ……。

「それなら他の人に消耗させてもらえば」

「……………それは厳しい。残っているのは突入済みを含めて4組だけ」

そうだ。これで全部終わる。

これで

！

「……………そのうちの1組は明久達」

「僕？ あ、そっか。失格になってないんだっけ。けど美波もあんな状態だし僕たちはもう戦力にならないよ」

「姫路と組めばいいだろ？」

「え？ 私ですか？」

「ヒ口、何言ってるのさ。姫路さんはあんなに怖がってるのに」

「参加するか、参加しないかは姫路が決める事だ」

「あ、あの……。私ああいうのは本当に苦手で……。だから……、

その……。明久君にはとても迷惑をかけてしまおうと思っただけですけど……」
「ああ、気にしないで。どうせ罰ゲームも大したことじゃないんだから」

「出来れば……明久君と一緒に参加したいです……。」

「つてええ！？ 姫路さん参加してくれるの!？」

「あ、はい。明久君の迷惑にならないなら」

「うっん！ 全然迷惑なもんか！ むしろ大歓迎だよ！」

「そうか。姫路もやっとその気になったか。さっきの島田と明久の様子を見て何もしないようなら姫路に勝ち目はないもん。ここは勇気をだして」

「さ、坂本君！ それ以上言ったら怒りますからね！」

「へいへい、黙りますよっ」と

「Fクラスの連中が気付く前に行った方がいいぞ。バレたら大変な事になる」

「い、行きましょう、明久君っ」

「そ、そうだね！ 急いで行こう！」

さてさて……、姫路の事だからすぐに悲鳴を上げるだろう。

そうなれば明久も失格になり、1番の不確定要素は排除される。

明久は良くも悪くも何をやらかすか分からないから、確実に排除しておかなくてはいけない。

なんにしてもオレの計画の鍵となるのは姫路と雄二と霧島か……。

「さて俺達も突入の準備に入るか」

「……雄二、怖かったら私に抱きついていいから」

「断る。そしてお前は怖くても一人で何とかしろ」

「……無理。私は怖い物がすごく苦手だから、雄二にずっとくっついている」

「今度俺を攻撃している時のお前の顔を見せてやる。本物の鬼が見

られるぞ」

「……きゃあ、こわい」

「うぐおおっ！ か、関節が……！」

「……コホン、コホン……。キヤア……？ イヤア……？」

「お前今悲鳴を上げる練習をしてるだろ！？ くそっ！ 俺は絶対騙されなきゃああつー！」

「……そっか。ぎゃああああ、っと」

まあ、雄二と霧島は大丈夫……かな？

……

《明久君、手を放さないで下さいね……。》

《うん。わかってるよ》

姫路と明久は体を密着させながら奥へ奥へと進んでいく。

その時点でオレは少し様子がおかしい事に気付いた。

召喚獣が出てこない？

突入してから約3分……

一向に3年の召喚獣は姿を現さない。

何か企んでるな……。

《えっと姫路さん、苦手なのに参加してくれてありがとう。》

《あ、いえ。そんな。私の方こそ迷惑をかけちゃうのに一緒に来てもらってありがとうございます。》

《迷惑だなんて、とんでもないよ。感謝こそしても迷惑に思うことなんて、絶対はないよ》

《そう言ってもらえると私も嬉しいです》

《でもやっぱり怖いでしょ？》

《そ、それは……その……はい……。怖いです。明久君、本当にごめんなさい……。私、運動神経も良くないし、こういうのも苦手だし、こうやっていつも明久君に頼ってばかりで……》

なんだ？ これと同じような事を最近どこかで……？

《あ、いや。そんなに謝らないで、姫路さん》

《でも……！》

《あのね、姫路さん。姫路さんはそうやって自分を卑下してるけどそういうのは僕たち男子にしてみれば全然嫌な事じゃないんだよ》

《嫌な事じゃない、ですか？》

《うん。だってさ、姫路さんみたいな可愛い女の子が、さ。苦手でも頑張っ一緒に来てくれるなんて、しかも自分を頼ってくれるなんて、そんなの男なら誰でも嬉しいに決まってる。喜びこそすれ、嫌な気分になるわけないよ》

そうなんだろうか？

この子はオレが居なくちゃダメだ、っていうのは男の幻想だ。という事を考えてしまつオレは捻くれてるんだろっなあ……。

《姫路さんは可愛いし、頭もいいし、性格だって優しくて、欠点なんて殆どなくてまるでお姫様を守ってる様で……》

《……え……？》

《まあ、問題は一緒にいるのが僕みたいに頭が弱くて、喧嘩もダメな頼りない奴だって事なんだけど　ん？》

《……お姫さま……ですか……？》

『ロールパンが言っていた“姫路に対してのお姫さま扱い”これは逆にいえば相手との距離感を測りかねているとも言える』
いつか島田に言った事が頭の中をよぎる……。

明久お前は分かって無い……。
姫路はお前が思っている以上に強い人間なんだぞ……。

《……前から明久君に聞きたかった事があるんです》

《な、何かな？ 何でも聞いてよ》

《……明久君は私の事どう思っているんですか？》

《ほえ？》

《私、ずっと気になってたんです……。明久君は私の事、お姫様のように大事に扱ってくれますけど、もしかしてそれは明久君が私と距離をとってるからじゃないかな、って……》

《姫路さんと距離？》

《だって明久君さつき『欠点のほとんど無いお姫様みたい』って言いましたよね？》

《あ、うん。言ったけど？》

《違うんです……。私、そんなんじゃないんです……。！ 何をやるにしても鈍くさいし、すぐにヤキモチやくし、勉強だって褒めて貰っても大事な時には倒れちゃってるし、独占欲が強いし……。！ 面倒だらけで……》

《いや、そんな事は》

《そんなことあるんです。私は欠点ばかりなのに》

『アンタは自分の悪いところいところしか見えていない。』
そうか……。やっとわかった……。

姫路は……。【自分が嫌い】だっていうオレと同じ悩みをずっと以前から1人で抱え込んでいたのか……。

《あ……。！ ごめんなさい。私明久君に散々助けられてるのに、こんな変な事を言って……。わ、忘れてください。今のは怖くて気が動転してしまっただけなんです……》

カメラをじつと見つめている……。
ああ、カメラが回ってる事を忘れていたのか。
二人して慌てて今の会話は冗談だと取り繕っている。
今の会話は聞かなかったことにしておこう。
人の悩みは気軽に他人が触れていいものじゃない。
姫路の相談に答えていいのは姫路が頼った相談相手である明久だけだ。

《さてこんな所でいつまでも話してないで、先に進まないかね》
《あ、そうですね。早く進まないと坂本君たちに追いつかれちゃいますもんね?》

《あはは、冗談話してるのも楽しいけどね》

《あはは。あ。でも、私が重いつて事は本当ですよ》

《えーっと、重いつて、その……》

《あ……。か、体のことじゃないですつ。私の考え方や気持ち为重いつて事ですつ。体重は、えっと、その……ちょっとだけ……》

まあ、体重は女性の永遠の悩みだからなあ……。
優子も自分が秀吉よりスタイルが悪いって事を気にしてたし……。
オレ達男には一生分からないだろうが……。

《あ、姫路さん。近くにいないと……》

《これくらい平気です。これくらいの事で心配をかけちゃうから、きつと気を遣わせちゃうんです。》

そのまましばらく姫路、明久ペアが進んでいく。
しかし本当におかしい……。
ここまで来て召喚獣が1体も出てこないなんてありえない。
一体何を企んでるんだ……? ?

《……………っ!?!》

《え……………!?! あ、明久君……………!?!》

急に照明が消え、辺りは真っ暗になった。

「物音が聞こえる……………」

「何か仕掛けるつもりじゃな」

《落ち着いて、姫路さん。眼が慣れるまで何もしない方がいい。後、出来れば眼も瞑つといた方がいい。》

《あ、はい。わかりました》

そして物音が静まりかえる。

一体何を仕掛けてくるつもりだ？

辺りが再び明るくなり、モニターも元通り映し出された。

《ごめん、姫路さん。もう大丈夫　ブサイク？》

《殺すぞ》

「雄二？　霧島と中に入っておらんかったかの？」

「なるほど。霧島対策として、暗闇に乗じて霧島のペアを怖がりの姫路に入れ替えて狙い撃ちするつもりか。」

どうやら雄二も同じ考えに辿り着いたようだ。

オレにとっては都合がいい状況だが、あれだけ怖がっている奴を狙い撃ちするというやり方は気に入らないな……………。

《まあ、そんなわけで俺達は奴らの作戦にまんまと嵌まっちゃった

わけだ。》

《何かあったの？ 雄二らしくないけど》

《まあな。俺の本来の目的はもう果たしているからな》

《目的？》

《ああ。俺がこの勝負に乗ったのは鉄人の補習から逃れるためだ。勝敗に関わらずこのイベントが成立した時点で俺としちゃ十分だった訳だ。》

《あ、そういう事ね》

《まあ、あの連中に負けるのは癪に障るし、片付けなんて面倒はやりたくないから、それなりに頑張ってみただけだな。そもそもこれは遊びのイベントだ。ムキになって勝ちに行く必要もないだろ。それに俺達に負けて欲しがってる奴もいるみたいだしな》

雄二はオレが負けて欲しがってる事……。

何故負けて欲しいのかも含めて完全に気付いている、か……。
全く本当に勘のいい奴だ。

《一応この状況を打開できる策はあるが……》

《え？ そうなの？》

《その作戦はお前ともう1人に重要部分を全部任せないといけない上に、鍵となる奴が動きたがらないから出来ないんだよな……》

《ふ〜ん、そうなんだ》

《まあ、そういう訳だから俺達は静観だ。姫路の事は翔子に任せておくんだな》

《そっか……。まあ、霧島さんなら安心だね。》

《んじゃ、行くぞ明久》

《へいへい。了解。あーあ、姫路さんから雄二にパートナーが変更なんてとんだ災難？ 雄二、キサマ……霧島さんから逃れるために態と向こうの手に引つかかったな？》

《何を言っているんだ、明久。流石3年生。見事な作戦じゃないか。》

こんな頭脳プレイを披露されたらFクラスの俺が対抗できなくても仕方ないだろう?》

《で、本音は?》

《翔子と二人でお化け屋敷にいるとなぜか釘バットで襲われる恐怖が蘇るんだ》

あ、それ前にオレと明久が夜なべして考えたアトラクションだ……。

《なんだ、雄二。偉そうに言ってたけど結局肝試しにビビってたんじゃないか》

《バカを言うな。俺は幽霊やお化けなんざ、全然怖くねえ》

《あ、霧島さん》

《く……っ！ 間に合え、明久バリアー……っ！》

《なるほど。雄二が怖がつてるのがよくわかったよ。あと、咄嗟のときに雄二が僕をどうするのかも》

《細かい事は気にするな、シール 明久》

《キサマ……！ 今僕の事をシールドって言いそうになっただろう……！》

《それにしても、おかしいな》

《雄二の頭が?》

《黙れ、使い捨て装甲板。俺が言ってるのは未だに姫路の悲鳴が聞こえないことがおかしいって事だ》

《あ。そう言えば》

確かにそうだ。

霧島、姫路ペアのモニターに眼を向ける。

《……姫路、大丈夫?》

《は、はい……っ！ 大丈夫です……！ 怖くないです……！》

《……こんなの見かけが変わっただけの召喚獣。怖くない》

《はい。そうです。召喚獣だから怖くないんです……！》

姫路は必死に耐えていた……。怖いのに……。逃げだしたいのに……。それでも……。必死の耐えていた……。

何故姫路はあんなに頑張るんだ……？

決まってる。明久と対等な関係でいたいからだ。互いに助け合える仲間でいたいから……。頑張ってるんだ……。

《おげああああ》

《うう……っ！うー……っ！》

《……姫路、大丈夫。怖くない。こんなのは作り物》

《は、はい……！大丈夫です……！頑張ります……！》

そこまで分かっていながら……。オレは姫路の頑張りを無碍にする行動を……？

でも！それでも！やらなくちゃいけないんだ！

手遅れになる前に終わらせないと！負の連鎖が終わりのない流血に変わる前に……！

その為ならオレは……！

《うらめし……や……》

《っ！っ！大丈夫です……！怖くないです……！》

《……姫路は、とてもいい子》

お前は本当にそれでいいのか？ 烏丸大貴……！？

良いに決まってる……。もう……決めたんだ。

《オネエチャン コツチヲ ムイテヨウ……》

《はうう……！ ううう……っ！ 空耳です、幻聴です……っ！》
《……お姉ちゃんを取り込み中だからまた今度》

落ち着け、私情に流されるな……。
余計な感情は斬り捨てる……。

「姫路……！ あと少しじゃ！ 頑張るのじゃ！」

「……………っ！」（コクコク）

《……姫路》

《あ、はい。なんでしょうか……？》

《……多分ここチェックポイント》

《え……！？》

驚いたな……。

姫路がチェックポイントに辿り着いた事にじゃない……。

オレの目的の為に都合の悪い状況なのにどこかでホッとしている
自分がいる。

オレは迷っているのか……？

……有り得ない。

きつと……気のせいだ……。

《げっ！ こいつら失格にならなかったじゃねえか！ どうすんだ
よ、常村！？》

《どうするも、こうするも……、勝負するしかないだろ。あのクズ
共よりよっぽどしんどそうだな。》

《全く……。吉井と坂本と烏丸をボコる前にとんだ邪魔が入ったな。
誰だよ、ミスった奴は》

《あーあ、2年なんざバカだらけだから楽勝なんて言った奴は誰だ
よ？》

《悪かったよ。訂正する。吉井と坂本と烏丸はクズだが、中にはちよつとマシな奴がいるから注意が必要だ。これでいいか?》

《今更遅えよ。やれやれ……。この二人、掃き溜めに鶴つてやつか? あんなカスどもとつるんでいるなんて勿体ないな》

「……………随分と酷い言われようじゃのう……………!」

「……………ム力つく……………!」

「……………。」

「ヒロはなぜ黙っているのじゃ!? お主がバカにされておるのじやぞー!?」

「別に怒るほどの事でもないだろ? これまでだって影で散々言われてきてるんだ。今更だろ?」

「……………いいのか?」

「いいんだよ」

《そもそもあんなクズ共が学校にいるから俺達は》

《……………雄二達はクズじゃない》

《……………あ?》

《……………雄二達はクズじゃない》

《そうは言っても、事実は事実だろ? すぐに問題を起こすし、教師には目えつけられてるし、部活で功績を残している訳でもないし、成績だつてクラスの最底辺のFクラスだ。あれをクズつて呼ばずになんて呼べつてんだ?》

《まったく、本当にあいつらは学校の面汚しだ。人に迷惑をかける事しか出来ないなら、大人しくゴミ溜めで埋まってろつての。》

《どうして……………!》

《あ?》

《どうしてそんな酷い事ばかり言つんですかっ!?!》

姫路がいつもの声とは比べ物にならないほどの大音量で常夏コンビ

に向かつて叫んだ。

あまりの大きな声に教室にいる生徒は眼を見開いて呆然としている。オレも正直ビツクリだ……。

《んだテメエ……！　なんか文句でもあんのか……！？》

《確かにあなた方の言う通り明久君と坂本君の成績は良くありませんし、色々問題も起こしてしまったかも知れません！　でも、だからどうしてそんな酷いことばかり言えるんですか！？　何も知らないくせに！　明久くん達がどれだけ優しく、どうして問題になる様な事やっていたかも知らないくせに！》

《っせえな！　お前こそアイツラがどんだけ頭が悪いのか知らねえんじゃねえのか！？　ちよつと成績や素行を調べればわかる事じゃねえか！》

《どうして成績や素行だけの表面でしか人を見られないんですか！？　そんな物より大事なものはたくさんあるのに……！》

《ぎゃんぎゃん喚くな！　あんなカス共の事情なんて知ったことかよ！》

《明久くん達はカスなんかじゃありません！　取り消してください！》

《いいから出て行け！　なあ常村、こいつら今大声で失格だよな？》

《あ、ああ。そうだな。こいつはラッキーかもな》

《って事だ！　さっさと失せろ！》

《……言われるまでもない。その顔、いつまでも見ている物じゃない。行こう姫路。こんな奴等に雄一と吉井と烏丸の良さなんてわかる訳ない》

《………はい》

常夏コンビは『してやったり』といった顔で勝ち誇った笑みを浮かべていた。

霧島に連れられて姫路はチェックポイントを後にする。

その肩は小さく震えていた……。

「……………」

姫路……泣いていた……。

……オレは……何をやっているんだ……？

仲間をあんな下種共にバカにされて

苦手な事に頑張って立ち向かった姫路をあんな方法で陥れられて

そして自分の目的を果たすためにあんな奴等に態と負けて

最後に皆で『頑張ったな』と言って笑い合っのか……？

仲間を……姫路を泣かされたまま 黙って引き下がるのか……？

そんなことは

「 ありえねえ……………」

「 どうしたのじゃ、ヒロ？ 」

「 いや…………。秀吉、ムツツリー…………。オレ行ってくる……………」

「 ……………どこに？ 」

「 言わなくてもわかるだろ？ 」

「 じゃがパートナーは……………」

「 それも問題ない。アテはある 」

ここで立たなきゃ…………皆と仲間にいる資格なんてないから…………！

本気で行くぞ、覚悟しろ下種共…………！

姫路を泣かせた報いは受けてもらう！

テメエらの最悪の形での敗北でな…………！

「 優子！ 」

「 何よ？ 言っておくけどアタシまだ怒ってるんだからね？ 」

「浮気疑惑の事は後でゆっくり話し合おう。今はそれより手を貸してほしい」

「？ アタシはもう失格になってるからアンタのパートナーは出来ないわよ？」

「ああ、わかってる。そのことなんだけど、アイツを連れ出すのに協力してほしい」

「……なるほどね。そういう事……。条件があるわ」「条件？」

「あの最低コンビをアタシの代わりに完膚なきまでに叩き潰しなさい！」

どうやら優子も常夏コンビの発言に憤ってくれていたようだ。

自分たちのために優子や姫路や霧島が怒ってくれた事が少し……嬉しかった……。

「ははっ！ 了解した！」

「それじゃあ行きましょうか！」

「ああ！」

優子にパートナーを連れ出してもらい、Aクラスに突入しようとしたとき姫路と霧島とはち合わせした。

「……烏丸、今から突入？」

「ああ」

「？ けど優子は失格になったはず」

「代表、ヒロのパートナーはアタシの後ろ」

「……納得」

「と、いつわけでちよっくら常夏コンビをボコってくる。徹底的に、な」

「……任せた」

「……………」

霧島と話している間、姫路は俯いて一言も話さなかった。

恐らく自分で自分を責めているんだろう……。

けどさ、姫路……。

気付けよ……。

お前の頑張っている姿に触発されてる奴等が3人もいるんだぞ？

お前は『自分が嫌いだ』っていうオレと同じ悩みを長い間抱きながらも逃げに入ったオレと違って、自分の意志で進むことを選んだ凄
い奴なんだよ？

「姫路」

オレの呼びかけに反応して姫路の体がビクンと揺れる。

慰めはかえって姫路に対して失礼だ。

だから慰めの言葉はかけない。

この一言だけでオレの言いたい事はすべて伝わるはずだから。

「ナイスファイト」

それだけ言ってオレ達はAクラスに入って行った……。

……………

明久SIDE

「だってさ、雄二。僕達、優しいらしいよ？」

「初耳だな。俺もお前ほどじゃないにしろ、自分も立派なクズだと思
ってたんだが」

「そうだよな。僕も雄二ほどじゃないにしろ、自分がダメ人間だっ

「て自覚はあつただけだ」

「っていうかクラスメイトの殆どがダメ人間だ。」

「まったく姫路さんも勿体ない事するよね。あんなに頑張ったのに、僕達の為に台無しにしちゃうなんて」

「だな。こんな遊びでムキになる事なんてないのにな。勿体ねえ」
「だよな」

「本当に勿体ない……。」

「あんなに歯を食い縛って一生懸命頑張っていたのに。」

「んじゃ、行くか明久」

「そうだね、雄二」

「肝試しなんて遊びだ。本気でやる必要なんてない。けどな」

「うん……。」

「ここから先は本気だ。クソ野郎ども……！」

第79話 作戦放棄、そして火はついた（後書き）

やっと投稿出来ました！

お待たせして申し訳ありません！

夢の総合評価1000突破まであと少し！

正直な話、自分の小説を皆さんがそこまで評価して頂けるとは始めた当初は考えてもいませんでした。

本当にありがとうございます！

これからも頑張ります！

第80話 激突！ そして謀略の影……

NO SIDE

「いよう、センパイ。待たせたな」

「遅かったじゃねえか、坂本。格下があんまり目上のもんを待たせるもんじゃねえぞ」

「そいつは悪かったな。ちよいと野暮用があつたもんでな。日々忙しいセンパイ方は時間が貴重なんだよな？」

「当たり前だろ。お前らみたいなバカ共とは違うんだよ」

明久と雄二がチエックポイントに足を踏み入れると、常夏コンビが揃って嫌らしい笑みを浮かべていた立っていた。

状況は2年側に圧倒的に不利。

物理の点数で常村と夏川に勝っている者は2年側には残っておらず、3年の勝利はほぼ確実に決まっていた。

「ところで昨日個人的な勝負をするって言ってたよな？ それって当然何か賭けるんだろ？」

「やりたくねえってんだつたら見逃してやるからその代わり……土下座でもして」

「いいですよ。約束ですからこの勝負罰ゲーム有りにしましょう」

「んあ？」

常村と夏川は揃って意外そうな顔をしていた。それもそうだ。

この二人は雄二と明久が乗ってくるとは思っていなかったのだから……。

「『負けの方は勝った方の言う事をなんでも聞く』ってのどどうですか？」

「てめえ、何か企んでやがるな？」

「よっぽど自信があるみたいじゃねえか？」

「さあ、どうでしょうね？」

「さっき坂本がカメラを使ってクラスの連中に言っていた『世界史の教師を呼んでおけ』ってのとなにか関係がありそうだな」

「まあ気にすんなよ、センパイ。最近召喚システムの調子が悪いみたいだからな。念の為にやっただ」

「……まあいいだろ。お前らが何企んでるか知らねえが、どうせ猿知恵だろうからな　試獣^{サモン}召喚！」

「ぶちのめしてやる。試獣^{サモン}召喚！」

常夏コンビはいきり立って召喚獣を呼ぶが、2人の召喚獣である牛頭と馬頭は一向に現れる様子は無かった。

「ああ？　なんだ？　出て来ねえぞ？」

「なんだこれ？　どういうことだ？」

「おかしいですね。本当に不調でしょうか？」

突然起きた不可解な現象に教室内にいた物理の教師も首をかしげている。

「いや、先生。気にしないでいいですよ。理由は分からないんですけど、物理だけが不調になっているみたいですから。仕方が無いから、俺が“念のため”呼んでおいた世界史の先生に頼んで勝負って事にしましょう」

そう、この不可解な現象が起きた原因は雄二が持つフィールド精製

型の白銀の腕輪の能力で【干渉】を起こしたからである。
点数差の開きが激しい物理より、点数差の少ない世界史で勝負しようというのが雄二の考えだった。

「な……！ 坂本、てめえ……！」

「んん？ どうかしましたか、センパイ？ 日々忙しいセンパイ方には時間が無いんスよね？ だったら他の先生が来るのを待たせるなんてそんなの申し訳ないじゃないですか？ ほら、ちょうど世界史の先生も来たみたいですし」

常村が雄二に噛み付くが、当の雄二はその様子を見てもどこ吹く風といった様子で挑発的な口調を崩さない。
それを見て常夏コンビは顔を真っ赤にして怒り狂っていた。

「上等だ！ てめえらクス共相手にはちょうどいいハンデだ！ やつてやんよ！」

「まあ、そう慌てないでくださいよ。まだ役者がそろってないんスから」

「あぁっ!？」

「ほら、来ましたよ」

暗闇の中にぼんやりと人影が二つ映し出される。

その人影は薄暗い光に照らしチエックポイントに到達した。
チエックポイントに姿を現したのはヒロと優子だった。

「来たか」

「オレが来るって分かったのか？」

「ああ。お前の性格なら姫路のあの言葉を聞いて黙っているはずがない、と思ってたからな」

「そうか……」

「おい、烏丸。お前のパートナーの木下の姉はもう失格したはずだ。単独行動は禁止されてるはずだろ」

「常村センパイ、オレが今組んでるのは優子じゃありません。オレが組んでるのは優子の後ろの奴ですよ」

そう、ヒロが組んでるのは優子に背負われている気絶した美波だった。

流石にヒロが気絶した女の子に触るの訳にはいかないので、優子に頼んでここまで背負って着て貰ったのだ。

「ルールでは気絶したら失格とは書いてなかったから問題ないですよね?」

「あ、ああ」

「へっ……! クズが一人増えたくらいでなんの問題もねえよ!」
「甘く見るなよ、常夏コンビ。コイツは常に最悪なカードしか引けないほどの万年大凶男だが、その分狡猾な頭脳を駆使してどんな最悪な状況でも引っくり返して勝ちを拾う事にかけては天下一品だぞ」
「なんだか誉められてるのか、貶されてるのか分からない言い方だな……」

「たぶん貶されてるわよ?」

「雄二、あとでオボエテロ……!」

「すまん、もう忘れた」

「~~~~~!」

「ヒ、ヒロ落ち着いて……!」

「ゴチャゴチャ言ってるんじゃないか? やんのか!? やらねえのか!?」

「そういきりたつなよ、センパイ。ヒロ交代だ」

「オーライ、大将」

「なんだ、坂本。お前はやらねえのか?」

「ああ。俺の出る幕はなさそうだしな。この二人に任せるさ。」

「そんなに俺達が怖いのかよ？ 『キヤー、僕ちゃんこわ〜い』ってか？」

「「ぎやははははは！」」

「こっの……！」

「喚くな……！」

「ああ！？」

「聞こえなかったのか？ 『喚くな』って言ったんだよ、下種共」「な、なんだと！？」

「どちらが上かはやり合えばわかる。いい加減お前らの聞くに堪えない耳障りな言葉にうんざりしていたところだ。さつさと始めるぞ。……明久、お前はそっちのモヒカンを頼む。オレはこっちの変態を叩き潰す」

「了解。任せてよ」

「テメエ烏丸あ！ 随分と舐めた口きいてくれる」

「吠えるな。さつきから聞いてりや、ダラダラダラダラ長ったらしい口上喋りやがって……。不言実行って言葉を知らないのか？ それともその程度の言葉で相手を挑発したつもりか？ だとしたら随分お粗末でちやちな作戦だな。小学生でももつとマシな挑発が出来るぞ？」

ヒロは挑発も兼ねて徹底的に夏川をバカにする言葉を並べた。

そして最後に肩を竦めてシニカルに笑う事で憎たらしさに更に拍車をかけた。

口上を遮られ、徹底的にバカにされた夏川は顔を真っ赤にして怒っている。

「つめえ！ 上等じゃねえか！ ぶっ飛ばしてやる！ 試獣召喚！」

「サモン
試獣召喚」

人の本質を映し出す召喚獣……本質はいいかえれば人の個性だ

……！

自分の本質を見られる事が怖い？ 甘えたこと言ってるな！

合宿の時自分と人との間に作り続けてきた壁を壊すって決めただ

る！？

だったら躊躇うな！ 躊躇うな！ 躊躇うなっ！

周りがオレをどう思おうともオレは 皆と一緒にいたい！

一緒にいたいんだ！

.....

世界史

Aクラス 夏川俊平 167点

Fクラス 烏丸大貴 406点

.....

夏川の召喚獣である牛頭が大斧を構えこちらに向き合った。

そしてヒロの召喚獣 カラス天狗が長巻を構え相對した……。

.....

「もしもし？ わ、私です……。はいいつもお世話になっておりま

す。………。はい……。はい……。そんな……！ そ、そんなこ

とできません……！ ……ッ！ ……分かりました。やります

……！ だから……！ ……ですから息子の会社にだけは……！ はい

……。はい……。失礼します……。」

P i

男は背中に冷汗をかいていた。

彼は文月学園に勤める教師で今回の“システムの不具合”を“人為的”に引き起こした真犯人だった。

烏丸本家に息子の会社に圧力をかけられ、文月学園を転覆させる計画に無理やり参加させられていたが内心では同僚や生徒に対する後ろめたさでいっぱいだった。

彼は教師という職業に生きがいを感じていた。

20年間……。

苦労の連続で頭は見事に禿げ上がっていたし、胃痛に悩まされることも多かったが、生徒と共に悩み、問題を解決していくこと……。そして壁を乗り越えた時の生徒の嬉しそうな顔が何よりも好きだった。

そんな彼は学園長の信頼も厚く、生徒、教師の両方からも人気が高かった。

それは彼にとつての勲章であり、誇りでもあった。

しかし清涼際前のある日……。

元教頭であった竹原から「息子の会社を潰されたくなければ、烏丸本家の為に働け」と告げられた。

彼に選択の余地は無かった……。

「1度だけ」という条件のもと、彼は「白銀の腕輪に不具合があるらしい」という情報を竹原に渡した。

それが彼にとつての地獄の始まりだった。

“1度だけ”という条件は最初からなかった事にされ、彼は今日まで烏丸本家の為に働く事を強要され続けていた。

烏丸本家の現当主である烏丸修一は前回の乗っ取り計画に失敗し、先代当主で穩健派筆頭の烏丸修介を敵に回し、影響力が危ういもの

になっていた。

今回の乗っ取りが失敗すれば、烏丸本家はその影響力を無くし権力を失うだろう。

その現当主の烏丸修一はこの文月学園を乗っ取る事に執着している。なぜそこまでこの学園に執着するのか？

答えは簡単だ。

烏丸修一は自分の失敗を認めない人間だからだ。

以前の乗っ取りの際も自分が捨てた愛人の子、要するに自分の“失敗の象徴”の暗躍のお陰で失敗した。

『自分が捨てた失敗の象徴』に邪魔されたのが何よりも許せなかったのだらう……。

彼は立場上その“愛人の子”と話したことがある。

彼、烏丸大貴は危うい雰囲気があるが、自分の考えをしつかり持った若者で個人的には修一よりも大貴の方が好感が持てた。

しかし、もう遅い……。

今自分がやるべき仕事は召喚システムの不具合の証拠を集め、修一に提出すること……。

つまり学園長をリコールする材料をそろえる事だった。

この計画が成功したら別の学校で校長に昇進させてやる、という話があるがそんな事にはもう興味が無かった。

なぜなら成功しても、失敗しても彼は教職を退くつもりだったからである。

もう既に辞表は書いて懐に忍ばせてある。

学園長、同僚、生徒たちを裏切って自分だけおいしい思いをするのは彼の教師としての最後のプライドが許さなかった。

「……出来れば……最期まで教師でいたかったなあ……」

それは彼の唯一の願いだった……。

.....

牛頭の武装は大斧……。

正面から打ち合えば競り負ける……。

「オラオラ、どうした！？ さつきから逃げ回ってばかりじゃねえか！？」

夏川は下品な野次を飛ばしながらカラス天狗に猛攻を仕掛けている。対するヒロはカラス天狗は前後左右巧みに移動しながら長巻の広い間合いを生かし、ヒット&アウェイの戦法をとっている。

「はっはっはあっ！ 噂には聞いていたが召喚獣の扱いはへボだなあっ！ ええ！？ 烏丸あっ！」

ヒロは夏川の野次に眉を顰めるが、夏川の言うとおりだった。カラス天狗の攻撃は牛頭に全く当たらなかったが、牛頭の攻撃は決定打になっていなかったが、確実にダメージを蓄積させていた。

ヒロは世界史の点数では夏川を圧倒的に上回っていたが、召喚獣の操作は同学年の生徒と比べても経験値が圧倒的に足りていない所為で下手くそだ。

それゆえに夏川や明久の様な召喚獣の操作に長けた人間はヒロの天敵となるのだった。

「オラアッ！」

「しま……っ！」

夏川の掛け声と共に牛頭から蹴りが繰り出され、斧の攻撃を捌くの
に精一杯だったカラス天狗はまともに受けて吹き飛ばされてしまっ
た。

.....

Aクラス 夏川俊平 167点

Fクラス 烏丸大貴 198点

.....

「く……っ！」

「ヒヤハハハハッ！ どうする、烏丸あゝ！？ 勝負あったんじ
やねえかあ？」

「チツ……！ 流石に召喚獣の扱いではオレは足元にも及ばない、
か……。」

「今なら土下座すれば許してやってもいいだぜ？ かゝらゝすゝま
ゝちゃゝん？」

夏川はニヤニヤと勝ち誇った笑みを浮かべている。

自分の勝ちが動かないことを確信している顔だった。

「降参？ いや……降参する必要なんてないさ」

「あん？」

牛頭の背後に突然牛頭の目の前にいたはずのカラス天狗が現れた。

夏川は驚き牛頭を後ろに下がらせるが、その先にカラス天狗がまた待ち構えていた。

夏川の牛頭は慌てて大斧を振りカラス天狗を消し去った。

「ふう……。脅かしやがって……」

夏川はホツとして前を向くが、眼の前の光景を見て固まった。

「な、なんだよ！　これは！？」

夏川が驚くのも無理はない。

なぜなら目の前には先ほど牛頭が消し去ったはずのカラス天狗が8体まで増えていた。

「言つたる？　『降参する必要はない』って。今度はオレが腕輪の能力を使ってアンタを追い詰める番だ」

「テ、テメエ！　これは何の能力だ！？」

「答えるわけないだろ、と言いたいところだけど特別に教えてやるよ。オレのオカルト版召喚獣の能力は“幻”。さて、どれが本物かわかるかな？」

そしてカラス天狗は牛頭に一斉に襲い掛かった。

「舐めるなああっ！」

次々と襲いかかるカラス天狗を大斧、拳、蹴りすべてを使って撥ね退ける。

しかしそれはすべて幻で先ほどの様に消えてしまっただけだった。そして再びカラス天狗は8体まで増え、牛頭に再び襲いかかる。

夏川にとって幸いだったのはカラス天狗1体、1体の連携がお粗末

だったことだ。

幻といえども流石に8体の召喚獣を同時操作する事は今のヒロには荷が重すぎた。

それを見逃さず牛頭は次々と襲いかかってくるカラス天狗を各個撃破していた。

とはいえ、この状況は夏川にとつていいものではない。

このままだといつ本物の攻撃が牛頭に届いても不思議ではないのだ。そして、ある事に気付いた。

あの召喚獣にだけ影がありやがる。つてえ事はあれが本物か!? ハッハア、バカがあ！ 自分の召喚獣の能力を過信しやがって……! やっぱリクスはクスだなあ!

そして夏川は牛頭を操作し、“影のあるカラス天狗”に突進させた。ヒロは驚き迎え撃とうとするが、一手遅かった……。

カラス天狗は牛頭の突進をともに受けてしまい、壁まで吹き飛ばされてしまった。

更に悪い事にその衝撃で武器である長巻を手放してしまったのである。

.....

Aクラス 夏川俊平 167点

Fクラス 烏丸大貴 83点

.....

急いでカラス天狗を起こそうとするが牛頭はカラス天狗の喉元に斧を突きつけ、その行動を阻んだ。

「何で……本体が分かった……!?」

「ハハア、バカがあ！ 本体の足元に影が映っていれば丸分かりじやねえかあ！」

「影……だと……？」

「自分の召喚獣の能力を過信するあまり詰めを誤ったなあ……!?」

かゝらゝすすまゝちやくん？」

「ちくしょう……っ！ すまない、姫路……！」

ヒロは床に膝を付き、拳を叩きつけた。

夏川はその悔しそうな様子を眺めて楽しんだあと カラス天狗に
大斧を振り下ろした。

そしてカラス天狗は頭を割られ 静かに消えていった……。

第80話 激突！ そして謀略の影……（後書き）

祝！ 総合評価1000突破！

あまりの嬉しさにフアイヤー後藤並みに踊り狂っております！

以前募集したりクエストを書いた後、記念としてメタ発言が飛び交う座談会をやるうと思っております。

よろしければ見てやってください。

オカルト編もいよいよ佳境に入ってきました。

更新ペースは以前より遅くなりますが頑張りますので、よろしくお願ひします！

第81話 大どんでん返し！

NO SIDE

明久のデュラハンと常村の馬頭はほぼ互角の戦いを繰り広げていた。世界史の点数だけなら常村の方が上だったが、明久は白銀の腕輪の能力、同時召喚した2体を巧みに防御、攻撃と使い分け馬頭を翻弄していた。

この戦法は強化合宿時の対西村戦でヒロと組ん時の戦法で、そこに彼なりの工夫を加えていた。

明久が加えた工夫はただ一つ。前衛の召喚獣を目隠し防御だけではなく、眼隠しとして活用し、後衛の攻撃担当の召喚獣ができた死角から馬頭を攻撃するというものだった。

相手からしたら見えないところから突然襲ってくる大剣は厄介な事この上ない。

それだけではなくデュラハンの動きのキレが時間が経過すると共に少しずつ鋭さを増していき、馬頭を確実に追い詰めていた。

「どういう事だ、坂本お！ 片方はテメエが操作してるんじゃないやねえだろうな！？」

自分がクズだと罵った人間に追い詰められている事が信じられず、雄二に言いがかりをつけるが、雄二の対応は至って冷静だった。

「おいおい。妙な言いがかりはやめろよ、センパイ。そんな事出来るわけないだろ？」

「じゃあどうなってるやがる！？ 1人でここまで召喚獣をうまく扱ってるなんてありえねえっ！」

常村自身も言いがかりである事は理性では分かっていたが、認めたくなかった。

“エリート”であるAクラスに所属し、そこでもトップクラスの自分が“ゴミダメ”であるFクラスの最底辺に分類される明久に追い詰められることなどあつてはならないことだった。

雄二は常村の反応をみて一拍置いてから口を開いた。

「バカつてのは面白いよなセンパイ。一つの事に夢中になると、それに対してとんでもない集中力を発揮しやがる。空手バカとか剣道バカとか呼ばれる連中もいるが、それは『物事に集中する奴』って褒め言葉だよな」

「何が言いてえんだ！」

「まあ、要するに、だ。姫路を泣かせたときからこいつはスイッチが入ってるって事だ。気を付けるよ？ 今のそいつは 強いぞ」

雄二が話している間にデュラハンの猛攻は続く……。

形勢が不利と判断した常村は仕切り直すために間合いを取った。

常村は夏川に比べると冷静であり、そこが夏川より強い要因ともなっていた。

落ち着け。あいつらのペースに流されるな……！

いつもと使い勝手の違う召喚獣だ。慣れるまで距離をとりながら戦うのがベスト！

俺が操作に慣れさえすれば相手は所詮カスの吉井だ。

俺が負ける要素なんて一つもねえっ！

再び武器を構えデュラハンと切り結ぶ。

一合、二合、三合……。

馬頭が防御に重点をおいた操作に切り替えたため、デュラハンは攻めきれない。

そのまましばらくどちらも決め手に欠ける状況が続いた。
常村はだんだん召喚獣の操作に慣れてきたようで、動きにキレが出てきた。

明久のアドバンテージがなくなった。

そうあれば力で劣るデュラハンはどんどん追い詰められていき、点数が徐々に減っていく。

状況が不利と判断した明久は仕切り直そうと距離をとろうとするが、常村はそれを許さない。

前衛についていたデュラハンは馬頭の槍に貫かれた。

「へっ！ これで残りは後の奴だけだなあ！」

「グウ……ッ！」

痛みのフィードバックに苦しみながらも最後の操作を行った。

槍で貫かれた前衛のデュラハンは馬頭を抑え込み、後ろのデュラハ
ンが大剣で自らの召喚獣ごと両断した。

.....

Aクラス 常村勇作 0点

Fクラス 吉井明久 61点

.....

「ッ！！」

馬頭は消え去り、明久はフィードバックによる失神しそうな苦痛に耐えながらも勝利を収めた。

しばらくの間失神しそうな激痛に耐えながらも息を整える。

「か、勝った……！ ヒロの方は……？」

自分の相棒の状況が気になり、視線を夏川とヒロの方へ向ける。
明久の目に飛び込んできたのは 牛頭に頭を割られ静かに消えていくカラス天狗の姿だった……。

「ヒヤハハハハッ！ 残念だったなあ、吉井イ！？ お前の相棒は俺にボロ負けだったぜえ！？」

夏川の下品な笑い声が教室に響き渡る。

「ま、まさか……！？」

「嘘だろ……！？ ヒロが負けるとは……！」

「……………」

フィードバックで痛んだ体、半減した点数を含めて明久と夏川の点数を比較すると、もはや明久に勝ち目はなかった。

モニターで様子を見ていた3年には楽勝ムードが漂い始め、2年には諦めの空気が流れていた。

そんな中でチェックポイントにいた優子とモニターで様子を見ていた秀吉だけがある違和感を感じていた……。

おかしい……。ヒロにしたのはあつさりすぎて……。？

変じゃな。ヒロの行動のどこかに嘘を感じるのじゃ……。？

そして夏川の牛頭が明久のデュラハンにとどめを刺そうとゆっくりと近づいていく。

それは夏川の意識がヒロから完全に離れた瞬間だった。

「隙あり」
「あん？」

ヒロのその言葉と同時に牛頭の背後から突然とどめを刺され消えたはずのカラス天狗が姿を現し、長巻で牛頭を一刀両断した。

「え……？」
「なっ……！！？」
「うそ……！！？」

……
……
……
Aクラス 夏川俊平 0点

Fクラス 烏丸大貴 24点
……
……
……

ヒロ SIDE

「な……！！？ 何だと！？ か、烏丸！ テメエ！ これは一体ど
ういう事だ！？」

「どういうことだ、とは？」
「なんでテメエの召喚獣がまだ生きてやがる！？ 確かに俺は本体
を倒したはずだぞ！？」

「よく出来てたたる？ “偽カラス天狗”」
「ど、どういう事だ！？」
「おい、変態野郎。いい事を教えてやるよ。」
「なにいつ！？」

「ホログラムに近い存在である召喚獣に“影”なんて出来るわけな

いだろ。明久や教師用の特別仕様を除いて、な」

「「「あつ！」「」」

「影なんて幻で映してしまえばいいだけの話だ。」

「じゃ、じゃあ後ろからいきなり召喚獣が出てきたのは！？」

「そいつも腕輪の能力。周りの風景と同化させたただだよ。暗がり
に潜ませておけば多少周りと違ってても気づかれる心配はないからな。
あとは本体と見せかけた“偽物”を相手に合わせて動かして仕留め
させて、本体が後ろから相手をぶった斬ればいいだけだ。」

「卑怯だぞ、テムエ！」

「卑怯？ 何言ってるんだ？ 召喚獣の能力を最大限生かす戦法を
取っただけだろ？ 納得が出来ないんだったら不正やルール違反が
あつたか調べてみるか？」

「ぐ……ッ！」

「しかしヒロ、なんでそんな回りくどい事したんだ？ 普通にやつ
ても勝てただろう？」

「え？ どうして？」

「いいか、明久。コイツは合宿の時に一応木下姉に勝てる位にまで
は扱えるようになってるんだぞ？ いくら召喚獣の扱いがへボだつ
ていつてもここまで点数差があるんだからここまで一方的な展開に
なる事なんてないだろ？」

「あ、それもそうだね」

「出来ない事はないけど確実性に欠けたし、それに」

「「「それに？」」」

「いい気になって勝ち誇ってる最中にどん底に突き落とした方
が屈辱的だろ？」

「「「性格悪っ！！」」」

「そこで八モるなっ！ 第一お前等にだけは言われたくない！」

まあ、本当の理由はあんなに頑張っていた姫路をあんな汚い手を使
って嵌めた上に泣かせたから、最悪の形の敗北を与えてやらないと

気が済まなかったただけだが、それは黙っておこう……。

「まあ、そんなわけで センパイ方……？ 楽しい罰ゲームの間
DEATH」

「ケ……ッ！ 俺達に何をさせようってんだ……？」

「……姫路さんに謝れ！」

「勿論……土下座で、な」

決まったな……。

「ところでヒロ」

「なんだよ、雄二？」

「お前良かったのか？」

「良かったって何が？」

「あんな怨恨の残りそうな勝ち方して……」

「え？」

「お前のこの勝負を持ちかけた本当の目的は 『僅差で2年が負ける事で3年連中との対立に折り合いをつける』ことだったんだろ？」

「？ ……。 ツ！ しまったあ~~~~っ！ やっちま
ったあっ!~!」

どうするんだよ、オレ!? 頭に血が上り過ぎてて本来の目的を忘れてたあっ!

「雄二、どういう事？ ヒロは何で僕達にギリギリで負けて欲しかったの？」

「ヒロ個人には得はない。けどな、3年は2年に勝つことで面目を保てると同時に俺達への不満を解消できる。俺達は『僅差で負ける』事によって3年連中に力を認めさせることができる。自分達が苦

戦して勝った相手を貶める事は自分たちの面子を潰す事と同じだからな。そうなれば3年が2年に対していちゃもんをつける理由もなくなるって事だ。デメリツトも俺達が少し恥をかくだけって事と、体育祭の準備の請負っていう軽いものだったしな。それで学年全体の安全が買えるんだったら安い物だろ」

「な、なるほど……。けど雄二は何で気が付いたの？」

「不自然に思わなかったか？ 現実主義者のあいつが自分たちが不利になる事を分かっていたいながら、新体操の先輩の時に戦力が激減するのを承知で突入するように煽ったり、作戦に対して慎重になり過ぎたり、おかしいことだらけだろ？」

「あ、そういえばそうだね」

「まあ、俺としても別に反対する理由もなかったから止めなかったけどな」

「ヒロ……。なんだか凄く……。バカだね……。」

「お前にバカなんて言われたら、あいつ絶対首を括るぞ……。まあ、だが俺も同感だ。」

まあ、そんなこんなで……。肝試し勝負は2年の勝利という形で幕を閉じた。

オレの本当の目的を果たせないまま……。

まあ、目的が果たせなくても『これはこれで悪くない』と少し思ったのは内緒だ……。

.....

『いやー、面白かったなあ。装飾も結構大がかりだったし』

『流石学園をあげての騒ぎってところだよな。盆休みの間の一般開放も来てみるかな』

『高橋先生の召喚獣なんか気になるよな』

『鉄人が出てきたらどうする?』

『……そ、それは……大丈夫だろ……。一般開放なんだから人様に見せられる召喚獣をだすはずだから』

『そうあってほしいよな……』

肝試し終了後、夏期講習からの開放感と後片付けは必要ない、という学園側のお達しにより生徒たちの顔は晴れ晴れとしていた。オレは3年連中に余計な恨みを買ってしまったわけだが……。まあ、それは仕方ない!

前の学校みたいに集団で襲いかかられるなんて事はないだろうしな!
! うん!

それはそうとオレはさっきから気になってる事があり、ずっと腕を組んで首を捻っている。

周りにいる優子、秀吉、霧島、雄二、ムッツリーニ、工藤も同じように首を捻っている。

気になることは

「オレの本質ってなんなんだ?」

「カラス天狗よね?」

「ヒ口は剣術が得意であつたからそれではないかのう?」

「そうなのか?」

「……カラス天狗は“義経記”^{ぎけいき}で“源義経”に剣術を教えたって伝説がある。“面倒見がいい”って事かもしれない」

「ああ、それいいかも!」

「……たぶんハズレ」

「それじゃあ?」

「……カラス天狗は“子供に持っていた団扇を騙し取られた”という“間抜け”な伝説がある」

「……ああ、なるほど」「」「」

「そこで満場一致!? オレの本質って“間抜け”なのか!? 冗談だよな!? 頼む、冗談だって言ってくれ!」

「……。」「……。」
「なんで皆して気まずそうに眼を逸らすんだよ!?!」

「ヒロ、事実を受け入れる。いいじゃねえか、“間抜け”くらいで済んで。明久なんか“バカ”なんだぞ」

「納得いかねええええっ!」

「はいはい、それじゃあ帰るわよ。ヒロ、帰りにどこかに寄って行きましょ?」

「待て、優子! 話はまだ終わって っておい! 引きずるな!

ボタンが千切れるって!」

「ヒロ、往生際が悪いのう……。観念するのじゃ」

「けど“間抜け”は無いだろ!?! “間抜け”は!」

「い・い・か・ら・さつさと来なさい!」

「優子、待て! なんでそんないい笑顔でオレに迫って ノオオオオオオツ!! 腕がモゲルウウウウウツ!!」

.....

NO SIDE

「本当に“間抜け”だったのかな?」

「……………どういうことだ、工藤?」

「だってカラス天狗って一部の地域では“守り神”として信仰の対象になってるんだよ? 烏丸君にピッタリじゃない?」

「多分……それら全部ひっくるめて全部ヒロの本質なんだろ? それを言ったらアイツは顔を真っ赤にして全力で否定するだろうけどな」

「……………雄二と同じで素直じゃない」

「グツ……………!」

「アハハハ、そうかもね」

「ところで明久と姫路は何処行った？」

「……吉井なら瑞希に呼ばれて屋上に行った」

「なんだ翔子。下の名前で呼ぶなんて随分姫路と仲良くなったんだな。どういいう心境の変化だ？」

「……うん。私は、ああやって、怖くても一生懸命になって頑張る人が好きだから」

「……………」

「……………すごく……………好き」

「なぜそれで俺の方を見る？ 俺に怖い物はなければ、頑張るなんて殊勝な態度は無いぞ」

「……………じゃあそういう事にしてあげる」

「グ……………ッ！ なんだか引つかかる物言いだな……………！」

……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………

明久 SIDE

「姫路さん」

「あ……………、明久くん」

僕の顔を見て気まずそうに眼を伏せる姫路さん。その眼は、少しだけ赤かった。

「そろそろ帰ろうよ。明日からは本当の夏休みだし、楽しい事がいっぱいだよ」

「……………」

「実はさ、姉さんが戻ってきたら海に行こうって言ってるんだ。車も借りるみたいだし、姫路さんさえよかったら一緒にどうかな？」

「……………」

姫路さんの浮かばない表情に変化はない。困ったなあ……。

「さっきここにあの先輩達が来て謝ってくれました」

「あ、そうなんだ」

「あれって……明久君たちのお陰ですよね……？」

「え？ あ、うん。それは別に……」

「誤魔化さないください」

「……………まあ、一応……………」

「ごめんなさい……………。またこうやって…………私の為に…………」

「えー？ いや、それは違うよ、姫路さん！」

「どこも変わらないじゃありませんか！ また私は前みたいに役に立てなくて、それどころか足を引つ張ちゃって、明久くん達に助けて貰って…………！」

「…………姫路…………さん」

「私…………自分が嫌いです…………！ 役に立てないところも、迷惑ばかりかけちゃうところも、こうやって明久君に当たってしまうところも…………！ 全部、全部…………！」

姫路んの目から大粒の涙が零れおちた…………。

どうしてそんなに自分を嫌うの？

僕たちは姫路さんの言葉があったから頑張る事が出来たのに…………。

「あのさ、姫路さん」

「……………はい」

「さっき先輩達相手に啖呵切ったのすごくカッコ良かったよ。なかなか出来るものじゃないよ。男の先輩相手に怒るなんて」

「ちゃ、茶化さないください！ 私が言いたいのはそういう事じゃないって…………！」

「それと……………凄く嬉しかった。僕らの為に怒ってくれたあの一言の

お陰で僕も雄二もヒロも頑張れたんだ。ありがとう」

「でも……私は相手の点数も全然減らせませんでしたし……」

「そんな事は問題じゃないよ。だって姫路さん自身も言ってたじゃないか。『点数よりも大事なものがある』って。姫路さんが僕らを成績じゃない部分で評価してくれたように、僕らも姫路さんに成績じゃない部分で助けらったんだから」

あの時姫路さんが頑張ってくれたから、僕らも頑張れた。

あの言葉が無ければ僕らもあんな勝負に挑まなかっただろう。

「明久……くん……」

「それに新学期になったら試召戦争で姫路さんにたくさん助けてもらうだろうし。姫路さんはFクラスの主戦力なんだから頼りにしてるんだよ？」

僕がそう言うのと姫路さんは涙を拭って笑顔を見せてくれた。

よかった。いつもの姫路さんだ。

「ありがとうございます、明久君。私、少しだけ自分に自信が持てそうです」

「そう……。よかった……。」

姫路さんの負い目が無くなったのだったら僕にとっても凄く嬉しいことだ。

「助けあってるって言ってもらえるならもつと遠慮しなくてもいいんですよねっ！」

「うん、勿論だよ！」

「じゃあ、明久君」

「なに？ 姫路さん？」

「私の事はこれから『瑞希』って呼んでください!」
「はえ!?!」

「ずっと気になってたんです。坂本君の事は『雄二』って呼ぶし、木下君の事は『秀吉』で土屋君と烏丸君はあだ名で、美波ちゃんも『美波』って呼ぶのに私だけ名字でしかも『さん』付けなんて」
「あ、そっか。そうだよな」

「だから私のことも皆と同じ様に『瑞希』って呼んでください!」
「なんだか断わり辛い雰囲気……」。

「えっと……姫路さん……。呼び方には色々と説明しにくい複雑な事情があつて……」

「理由? 何ですか? 説明してください」

「出来れば……勘弁してほしいなあ、なんて……」

「ダメです。説明してくれないと納得できません」

「うう……。参ったなあ……」。

「笑つてでしょ?」

「笑いません!」

「誰かに話すでしょ?」

「誰にも話しません!」

「ダメだ……。見逃してくれそうにない……」。

「えっと……実は……」

「はい。」

「前に姫路さんのこと名前で呼んでみたいと思った時……」

「はい」

「その……家で一人で名前を呼ぶ練習を……」

「……え？」

うがーっ！ 恥ずかしくて死にそうだった！
絶対に誰にも言うつもりは無かったのに！

「そういう訳だから姫路さんは『姫路さん』ままでって事で！
いよね！」

この話はここまで！ さつさと終わらせて記憶から未梢しよう！
そうじゃないと僕の精神が崩壊する！

「わかりました。そういうことなら今は許してあげます」

「そ、そっか。ありがとう、姫路さん」

「それじゃあ明久君が恥ずかしい秘密を教えてくださいましたので、私も1
つだけ秘密を教えてくださいあげちゃいます」

「え？ 姫路さんの秘密？」

「実はですね」

姫路さんは僕の耳元に口を寄せて、

「私の初恋ってまだ続いているんですよ」

そう言っ僕の頬に柔らかい何かを押し付けた。

あれ？ これって！ まさか!？

「ひひひひ姫路さん！ 一体何を !？」

「さあ、行きましよう。明日から夏休みです。色々と遊びの計画を
練らないといけませんね。」

「いや、姫路さん！ それどころじゃないよ！ 僕の話聞いてよ

！」

「夏休み、楽しみですな」

「ちよつと姫路さんってば！」

明日から始まる僕らの夏休み……。

今年は一切どんな事があるんだろう……？

なにがあっても 1つだけ確かな事がある。

きつと去年より楽しくなるだろう……！

今からすごく楽しみだ！

姫路さんと皆の所へ戻りながらそんな事を考えていた。

第81話 大どんでん返し！（後書き）

突貫で仕上げました。

前話でヒロが負けるなんて……！

といった感想をたくさん頂きました。

それを見た瞬間『やった！』と思いました。

今回のヒロの勝ち方で皆さんが驚いき喜んでくれれば作者としてこれ以上うれしいことはありません！

ありがとうございます！

とりあえず6部終了まであと1話……。

頑張ります！

第82話 過去との会合

明日……。

何年も会っていないかった父親と学校で会う事になっている。

学園転覆の陰謀の方は問題ないだろう。

手を引かせるための取引材料は十分にそろえる事が出来た。

烏丸本家のあらゆる不正、教師や技術者相手に身内の会社を盾にした脅迫、その他諸々……。

不正の方は色々書類や証拠を既に学園長に渡してある。

本家に脅迫されていた教師や技術者たちもジジイに事情を話し、沖田家に頭を下げて本家を少しの間牽制してくれるように頼んだ。

あとは本家の計画を破綻させれば、他に圧力をかけられるだけの影響力を無くすだろう。

不正の証拠を学園長に提出した今、本当ならそれにオレが同席するだけの義務もなければ、必要もない。

むしろオレがいると話がこじれる可能性だって考えられる。

それでも　今回はオレは学園長に頼んで同席させてもらう事にした。

いつまでも逃げてるわけにはいかない。

オレをドン底まで突き落とした男……。

怖い……！

けど　やらなくちゃ……！　オレはいつまで経っても縛られたまままだ……！

自分と向き合い、過去と向き合わなきゃ……オレは前に進めない……！

怖い怖い怖い怖い怖い……！

手が小刻みに震えている……。

ビビるなよ……！

恐怖に吞まれるな……！

頼むから……止まってくれよ……！

オレの意志とは無関係に震えは一向に止まる気配はない。

トラウマとは厄介なもので漠然とした不安が心の中を包み込む……。腹の中に鉛でも入ってる様な感覚だ……。

その漠然とした不安を振り切る為にオレは道場で木刀を振っていた。

いつもの形稽古……。

幼い頃に絃馬さんに仕込まれ、何百万回も振り続けてきた剣術の形

……。しかし……運足、重心移動、体さばき、理合、呼吸、刀法、残心

……。

すべての動きがバラバラで話にならない。

振るった剣に納得がいかずもう一度心を鎮めて剣を振るう……。

しかし技が荒く、いつもの様な技のキレが感じられなかった。

「全然ダメだな……。」

「全くじゃ。剣に恐怖が映っておるぞ」

「うおっ！ マスターヨーダ、いつからそこに！？」

「誰がマスターヨーダじゃ！ この大バカ者！」

「いや、悪い。で、いつからそこにいたんだ？」

「お主が闇雲に剣を振り回すだけの形稽古をしていたあたりからじゃ」

「それは最初からと、言わないか？」

「そつとも言うじやろうな！」

「そつとしか言えないから……。」

「しかしあの雑な剣は何じゃ？　いつもの技の冴えが全く無いではないか！？」

「む……！」

「仕方ない。ワシが相手をしてやろう。防具を付けよ、ヒロ。ワシが直々に稽古をつけてやろう。余計な考えが吹き飛ぶくらいの……」

ジジイは上座に座りゆっくりと防具をつける。

オレもそれに倣い、防具をつける。

開始線まで行き、お互いに一礼……。

竹刀を構え、地稽古を開始した。

……

「す、少しは……手加減してくれ……。」

「何を言うか……。手加減したら稽古に……ならんではないか……。」

「もう……年なんだから……大人しくしてろよ……。」

お互いに肩で息をしながら、防具を外す……。

しばらく息を整えた後、ジイサンがいきなり口を開いた……。

「ヒロ……。明日修一に会うのじゃな……？」

「……ああ」

一呼吸、間を置いてから答える。

恐らくこのシゴキはジイサンなりの気遣いだったんだろう。それだけではないだろうけど……。

「ヒロ……。ワシは……お主に詫びねばならないことがある……。」
「……………」
「ワシが……お主を引き取った理由は　お主と修一が……似ていたからなのじゃ……………」
「修一は精神的に弱く、危うい人間じゃった……。ワシはそれを“甘え”として切り捨て、当主としての厳しい教育を施し続けた。修一が出し続けていた“SOS”にも気づかずに……厳しく当たり続けたのじゃ……………」
「……………」
「結果……修一の心は壊れ、どうしようもないくらいの“歪み”を生み出してしまった……………」

ジイサンは尚もオレに告白を続ける。

自分のしてきた事を懺悔するような……重い口調で……………」

「それを無かった事にしてくれて……。やり直したくて……。同じように“弱く危うい人間”であり、誰よりも修一に忌み嫌われながらも、誰よりも修一に似ている“お主”を引き取るうと考えたのじゃ……………。引き取ってやり直して……罪悪感を消してしまいたかったのじゃ……………」

それで“あの日”姉さんとオレを引き合せたのか……………」

「そしてごうも考えた。“本家の歪み”に抗い続けた“千鶴”と“歪み”から生まれたお主なら　きっと修一を助けられる、とも……………」

「つまり　目的の為にオレ達を利用し続けた、って事か？」

「そうじゃ……………。これはワシの咎……………。お主に憎まれても……………」

「嘘をつくなよ……………」

「むう？……………」

「罪悪感だけで子育てなんて重労働を続けられるわけないだろ？」

「……………」

「ジイサンは……態と自分を悪役にしような言い方をするんだな。オレは知ってるよ。ジイサンがどれだけオレ達の事を考え続けてくれたのか。そりゃ最初はアンタの罪悪感を軽くするための行動だったのかもしれないけどさ、オレはジイサンのお陰で姉さんと絃馬さんに出会う事が出来た。2人を失って 生きる気力を亡くしかけてたオレを本気で心配してくれた。静馬を引き取りたいっていうオレの無責任な我儘を叶える為に骨を折ってくれた。そして今日までオレを……オレ達を育て続けてくれたのは誰でもないジイサンだろ！？ それを……否定するなよ！ アンタの思惑はどうあれオレはアンタに救われてるんだよ！ それを“その程度の理由”で否定するな！」

気が付けばジイサンの胸倉を掴んで怒鳴っていた……。

感情の抑制が効かない……。

けど……！

それでも……！

ジイサンのやってきた行動を否定する事は許せなかった。

他の誰でもないジイサン自身が今までの事を否定する事は絶対に許せなかった……。

「ヒロ……。ワシらを……烏丸の家を 憎んでおらんのか……？」

「恨んでるよ！ 憎んでるよ！ ハラワタが煮えくりかえるくらいになあっ！ でもなあっ！ ソレはソレ！ コレはコレだ！ なんか文句あるか！？」

「め、目茶苦茶な感情論じゃ！」

「何か問題あるか！？ 感情論上等！ 人間なんて本来感情で動く生き物だ！ こんなところで理屈なんか必要ねえだろ！？」

「……お主は……本当に……変わったのう……。以前のお主なら感

情を剥き出しにして本音で相手にぶつかる事などなかったじやろうに……」

「……オレには手を差し伸べてくれた人が沢山いたからな。だから……オレは……変わる事が出来たんだ。親父だってそうだ……。手を差し伸べてくれる人さえいたら……きつと変わる。“歪み”って言うてもそれは人の個性だ。人間なんて大なり小なり何処かに歪みを持っている。だから　手遅れって事はないだろ？」

「……何を……言っておるのじゃ……？」

「お互いまだ生きてるんだ。それなら相手に気持ちを伝え続けることだってできるんだ！　だったらやる事は一つだろ？」

「……………」

「今まで眼をそらし続けてきた事と向き合うのは怖いと思う。けどさ……、なるべくなら皆で笑いたいだろ？　理想論だって事も分かってる！　それでもあえて言わせてもらおう！　月並みなセリフで悪いけどな、独りでは無理だった事でも、仲間と一緒にやれば乗り越えられるかもしれないだろ！　確かにアンタはたくさん間違えたかも知れない！　失敗したかもしれない！　けど大事なのは“失敗したあと、どうするか？”じゃないのか？　世の中には取り返しのつかない失敗だってある事は分かっているつもりだ！　けど……まだ取り返しがつくだろ！？　だったら戦えよ！　立ち向かえ！　オレはアンタに後悔して欲しくないんだよ！」

ありつただけの思いをぶつけた……。

感情が高ぶり過ぎて涙が眼から溢れ出る。

もう自分が何を言っているかもよくわからない……。

父親の事は許せない……。

許すことなんて出来ない……。

それでもジイサンが父親との和解を望んでる……。

それなら……やる事は一つだろ……？

綺麗事？　理想論？　結構じゃないか！

救いの無い現実主義より可能性のある理想論の方がいいに決まっている！

「親父を救うのは“オレ”じゃない。アンタだ。アンタの言葉だけが……親父の心を救う事が出来るんだ。その事を……忘れないでいて欲しい……」

「本当に……お主は……絃馬君と千鶴に似てきたのう……。……ありがとう、ヒロ……。お主がいてくれて……。良かった……。」
「……最高の褒め言葉だ……。……。オレもジイサンがいてくれて良かった……。」

微かに微笑んだあと、ジイサンは道場から去って行った……。再び木刀を手にして正眼に構える。

自分の心の中にある憎悪、怒り、悲しみ、恐怖、絶望……。色々な負の感情が入り混じった心の闇……。それに決着をつけてオレは前に進む……。決着をつける事でオレは自分の中で忌み嫌っていた“歪み”を受け入れられ“自分を肯定”出来る様な気がするから……。自分を否定する事はオレの事を『好き』と言ってくれた優子や、『友達』と言ってくれた明久達への裏切りになるから……。

木刀を頭の上までゆっくりと持ち上げ、一太刀振るう……。鋭く、そして静かで澄んだ風切音が道場内に鳴り響いた……。

.....

翌日、休日出勤する為に制服に着替え、玄関を出た。

「いつてきます……。」

いつも言っている些細な言葉……。
些細でも重要な言葉……。

必ずこの場所に帰ってくるという意思表示……。

不安で不安で仕方ない……。

何が不安だと聞かれても答えようがない。

漠然とした不安に理由なんてないのだ。

あえて言うとしたら 何が起こるか分からない事に不安を感じる
んだろうな……。

「ダメだな……。このままじゃ……。向き合う事が出来ない……。」

携帯を取り出し、ある人物に電話をかける。

P r r r r r P r r r r r

しばらく呼び出し音が鳴り目的の人物が電話に出た。

《もしもし、ヒロ？ どうしたの？》

「朝早くに悪いな、優子。ちよつと頼みたい事があってさ……。」

《どうしたのよ、あらたまつて……？》

「まあ、ちよつと気合いを入れなきゃいけない用事があつてな。悪
いんだけど……。“頑張つて”って言うてくれないか？ それだけで
オレ頑張れるような気がするから……。」

《？ よく分からないけど……言えばいいのね？》

「ああ。頼む」

《それじゃあ……頑張つて、ヒロ……》

「はいよ。頑張るよ。じゃあまた後で、な」

《あ、ちよつと待つ》

ありがとう、優子……。

「よっし……！ やりますか！」

.....

学校についてしばらくしてから視察が始まった。

遠目から見た父親は一目で血の繋がっていると感じた。

ジイサンがオレとアイツが似ていると言っのがわかる気がする……。

オレと同じ眼をしてるなあ……。

荒んだ無機質な眼……。

オレもあんな眼をしていたんだな……。

視察はつつがなく終了し、応接室で話し合いが開始された。

「 本題に入りますが……文月学園の試験召喚システムに不具合が起きているらしいですね？」

きたか……。

「このままだと学園長を解任しなくてはいけなくなります。そのことについて」

「そのことなんだがねえ……。面白い情報がアタシに寄せられてるんだよ」

「面白い情報？ それはどんな？」

「今回の“召喚システムの不具合”は烏丸家の陰謀だという情報だよ」

「それは、それは……。随分突飛な情報ですね？ 一体誰から寄せられた情報ですか？ もしかして……その出来損ないから……でしようか？」

そう言つて父親はオレに視線を向けた……。昔会つたときと変わらない……。無機質な冷たい眼……。

『頑張つて、ヒロ……』

……頑張ろう……。頑張ろう……！
そう思う事がきつと 最初の一步だ……！
だから……！

「確かに……オレが持つてきた情報です。」

「フン……！ 本家に迎え入れられなかったから嫌がらせのつもりか？ 恥を知れ、愚か者」

「恥を知るのはそちらではありませんか？」

「どういう意味かわからんが？」

「まだ惚けますか？ それじゃあ 先生、入ってきたく下さい！」

切り札の一人である主犯の教師が応接室に入ってきた。

「キ、キサマツ！」

「……あなたが脅し、無理やり協力させていた人です。」

「そ、そうです……。わ、私は……私は……！ 清涼際より少し前から……学園を転覆させる為……烏丸の本家にきよ、協力していました……！ 協力しなければ……！ 息子の会社に圧力をかけて破

滅させてやると言われました……！」

「そ、そんな奴の事は知らん！ 出鱈目だっ！」

「まだシラを切りますか。ならこの不正の書類の数々はどう説明しますか？ すべて 文月学園に関係する企業に圧力をかけていることがわかりますが？」

「こ、これをどうやって……！？」

「友人に情報に精通した人が沢山いるので……」

「クツ……！ こっの……！ 失敗作がっ！」

顔を真っ赤にしてオレの胸倉を掴み凄んだ……。

横にいた西村先生がそれを制止しようとしたが、オレはそれを制した。

ブレッツシャーのあまり目が回る……。

胃が…… 擦じ切れそうだ……。

頑張れ……！ もう少しだろ！ 乗り越えろ！

「こちらの要求はただ一つ……！ 二度と文月学園に手を出さないこと！ オレの周りにもだ！ それを飲まない場合！ この書類の他にも掴んでいる情報すべてを公表して本家を破滅させます！」

「ぐ……っ！」

顔色が赤から青に変わる……。

そしてオレの胸倉を離し、ぐったりとその場に崩れ落ちた……。

「お前さえ……！ お前さえいなければ……！ お前なんか産まれなければ……！」

分かってるよ。オレの存在はアンタにとって見たくない“失敗の象徴”だ……。

一時期はオレを見て欲しくて……。いつか笑いかけてくれると信じて……。必死に勉強、運動を頑張ってきた時期もあった……。けど……。親としての期待は裏切られ続けてもう尽きてしまった……。今この人に自分の存在を否定されても何の感慨もわかない……。

オレが怖かったのは過去の記憶……。本家の連中から受け続けてきた暴力……。

オレの存在を知っていながら、どんな扱いを受けているか知っていながら無関心を貫いたアンタ……。

そして再び暗い所に引き戻されるといふ恐怖……。

ああ。確かにそうだな……。

オレとアンタは似ているよ……。

けどな……。オレはアンタの様にはならない……。

色々な人がオレを支えてくれてるから　オレの心は壊れない……！

「あの女が……！　お前を産まなければ……！　なんでだ！　なんでお前ばかりが俺の欲しかった物を手に入れる！？　ズルイじゃないか！　不公平じゃないか！　千鶴も！　父さんも！　みんな俺から離れてお前の方に行ってしまった！　お前さえ……！　お前さえいなければ……！」

机の上に置いてあった灰皿を手に取り殴りかかってきた。

完全に不意を突かれ灰皿は頭に当たり、額が割れた。

割れた額からおびただしい量の血が流れ落ちた……。

周りが慌てて父親を抑え込んだ。

「なんで！　なんで！　お前ばかりっ！　クソッ！　失敗作のくせに！　お前さえいなければあああああっ……！」

「ジイサンに見捨てられることもなかった、か……？」

「……………ッ！」

暴れていた父親は動きを止めた……………。
射殺さんばかりの怨嗟を込めた視線をオレに向ける。
その瞳の中にはわずかに戸惑いの様な物が見えた。

「ジイサンは……………アンタを見捨てたわけじゃない……………」

血が流れ落ちる額を渡されたタオルで押さえながらそれでも視線を外さない……………。

ここで逃げるわけにはいかない。

逃げて……………たまるか……………！

「ジイサンは……………今でも……………アンタを心配し続けてる……………」

「何を言ってる……………！」

「本当は！……………オレはアンタを今日破滅させるつもりだった……………
……………！」

そう、本当は家が一枚岩でないことも利用して内部分裂を起こさせた後、書類の情報を烏丸本家に敵対している勢力に渡し、内外両方から本家を跡形もなく壊してしまおうつもりだった……………。

昨日ジイサンがコイツを助けて欲しい、と言ってくるまでは……………。

「けどなあっ！ ジイサンが！ アンタを救ってほしいって言うてきたんだよ！ 誰よりもアンタを憎んでるオレの気持ちを理解しながらも！ それでも……………！ アンタを救ってほしいって言うてきたんだ！ 頼むから！ オレの事を認めたくないって……………！ 憎いって言うならそれでも構わないから……………！ ジイサンの気持ちだけは……………信じてやってくれ……………！ あの人は……………誰よりもアンタの事が好きなんだっ！」

憎い……！ 眼の前のこの男が……！
オレをドン底まで突き落としたこの男が……！
それでも……！ ジイサンの願いは叶えたいんだ！ 叶えてやりた
いんだ……！

「……………」
「ジイサンの携帯の番号をここに置いておく……。腹が決まった時
でいい……。連絡してやってくれ……。」

フラフラになりながらも西村先生の肩を借り、応接室をあとにした
……。
あとは……ジイサンと父親が決める事だ……。
やるだけの事はやった……。
今まで生きてきて……一番緊張した……。

「西村先生……。」
「なんだ……！？」

西村先生はオレを背負いながら走っている。
恐らく行先は保健室だろう……。

うわっ……。血が結構出てるなあ……。

「オレの言いたい事……ジイサンの気持ち……伝わったかなあ……
？」

「きつと伝わった！ お前はよく頑張った！」
「ハハッ……。なんだか西村先生に褒められるって……妙な気分だ
……………」

「お前はそんな状態だというのに減らず口を……！」

「こつこつ性分なんですよ……」

「いいから喋るな！ もうすぐ救急車が来る！」

「ああ……。また……。入院かあ……」

せつかくの夏休みなのになあ……。

優子とデートしたり、明久達と遊びに行ったり、静馬と色んな所に

……行きたかったのに……。

思考が鈍り、瞼が重くなる……。

そしてそのまま……オレは意識を手放した……。

.....

眼を覚めたのは3日後……。

病院のベットの上でだった。

額の傷は意外に浅く、2針縫う程度で済んだらしい……。

余談だが、傷が塞がり、糸を抜くまでに1週間しかかからなかったから、医者に「アンタホントに人間か？」と、いう目で見られた……。

……。

正直オレも自分の回復の速さにビックリだ……。

そして今……オレは未だかつてない恐怖を目の当たりにして震えている真つ最中だ……。

何故なら　目の前で優子が……メチャクチャ怒っているからだ……。

「えっ……と、優子……さん？」

「何かしら、ヒロ？」

「なんと云つか……ごめんなさい……。」

「あら、何を謝ってるの？　アタシは全然怒ってないワヨ……！」

嘘つけ！　怒ってる！　メチャクチャ怒ってるよ！

だって後ろに般若見えるし！

体からは黒い瘴気みたいなものが立ち昇ってるし！

ちなみにオレは床に正座させられていて優子は正面で腕を組み仁王立ちしている。

「ハア……。あんまり心配かけさせないでよ……。」

「悪い……。」

「で、何で言ってくれなかったの？」

「……オレの問題だから」

「怒るわよ」

「優子の言いたい事はわかってるつもりだ。けどさ……。これだけは　自分で決着をつけたかったんだ……。会ってみて確信したよ。アイツは……。昔のオレだ……。だから……。前に進むために……。オレ自身の力で決着をつけたかったんだ」

「……ヒロの言い分は……。わかった……。けど……。アタシはいつもアタシの問題に不参加で……。アタシってそんなに頼りない……？」

支えたいのに……！　いつも……」

「支えてくれてるよ。」

「え？」

「優子はいつもオレを支えてくれてる。この前だって優子が『頑張つて』って言うてくれたから頑張れた。自分の本質を見られたくないって時だつてそうだ。優子がオレを肯定してくれたから……オレは踏ん切りをつける事が出来たんだ。だから……泣きやんでほしい……。笑つて欲しいよ……。オレは……。優子の笑つた顔がすごく……好きなんだ……」

立ち上がり、優子を抱きしめようとしたら……コケた……。

「え？　ど、どうしたの、ヒロ!？」

「あ、足が……痺れ……た……!」

「へえ？」

「ちよつと待て優子！　なんでそんないい笑顔でオレに迫つて……!」

「勿論……決まつてるでしょ？」

「待て待て待て！　オ、オレ実はさつきから傷が痛んで」

「嘘ね。もう傷は塞がつてるって先生が言つてたわよ」

「じゃあ、『足を触られたら死んでしまう病』で!」

「ふふつ　さあ、覚悟はいいかしら……?」

「出来てない！　覚悟なんて出来てないからこつちに来るな!　っ

てぎゃああああああつ!」

「ほら、ツンツンツン……!」

「やめつ！　やめつ！　やめてくれえええええつ!」

「あはっ！　あははははっ！　心配かけさせたお仕置きよ　まだ

まだ行くからね!」

「か、勘弁してくれ……!」

.....

「おじいちゃん、秀吉さんどうする？　なんだか凄く入りにくいんだけど……」

「むう……。」

「姉上……。嬉しそうじゃのう……」

「しばらく見守るとしよう。」

「これは“見守る”っていうより“出歯亀”っていうんじゃない？」

「静馬君、細かい事はいいっこ無しじゃ」

「本当にいいのかなあ……？」

そんなこんなでオレは父親と決着をつけた。

決着をつけることで何かが劇的に変わったわけじゃない……。

けど……この日逃げなかった記憶は　オレの中で勲章になるはずだから……！

後日……父親とジイサンがお互い長年の溝を埋めるために色々やっ
っているという事を聞いた。

オレはすべてを許すことはできない……。

けど……これでよかったんだと今は思う……。

なるべくなら……皆が笑っていられます様に……！

第6部 完

第82話 過去との会合（後書き）

難産でした……。

投稿するのにこんなに時間がかかるとは思ってもみませんでした…

…。

お待たせして、ごめんなさい。

シリアスは当分書きたくないです……。

さて次は『王様ゲーム』やります！

お楽しみに！

特別編 文月学園女装コンテスト〜カラス編〜

「はあ？ 女装コンテストオ！？」

「うん。投票でアンタが出場することになったから」

「『することになったから』じゃねえ！ 何でオレが女装しなくちゃならないんだ！？」 冗談じゃねえ！ 絶対嫌だからな！」

何が悲しくて女装なんかしなきゃいけないんだ！

ってどうか投票って何だ！？

「いいじゃない、別に……。アタシは見たいわよ」

「いくら優子の頼みとはいえ聞けないぞ！ 断固拒否する！」

こればかりはオレの男としての沽券に関わることだ！

「そうはいかないのよ。もうエントリーしてあるんだから」

「お断りします」

「ねえ……。ヒロ……。？ アタシすっごく困ってるの……。協力……。してくれないかなあ？」

「おおおおおお脅したって無駄だぞ！ 出ないからな！ だからそんないい笑顔で関節を逆に曲げるのはやめっ……。！ みぎやあああああああっ！！」

結局優子の30分にもわたる強引な説得（説得）によってオレは女装コンテストに出場することを（無理やり）了承させられてしまったのだ……。

.....

《文月学園主催！ 女装コンテスト！》

一斉に上がる歓声にオレは思わず啞然としてしまった……。
お前からこんなバカ企画をわざわざ見に来るなんて……そんなヒマ
なのか？

《さて始めました。文月学園らしいこの企画！》

こんなものを売りにするな、バカ野郎！

あのバアサンは何考えてるんだ！？

もしお茶の間に見せられないような汚い光景でも出てきたら、文月
学園の株は大暴落してしまうぞ……。

《時期はいつなのか、目的は何なのか、場所はどこなのか？ そう
いう細かいところはすべて無視して進めて行きましょう！》

目的なしにこんな大博打みたいないなみたいな企画を立ち上げるなあ！
第一オレはこんな意味のない事で泥を被りたくないぞ！

《解説を努めますのは私放送部の新野すみれと》

《学年主任の高橋洋子先生です》

アンタ達は何やってんだぁー！っ！！

放送部の新野とかいう奴は知らんが、高橋先生！

アンタだけは常識的な人間の部類に入ると思っていたのに……！

《《よろしく願います》》

よろしくお願いするなああああつ!!

オレは恥も体面もすべてかなぐり捨てて泣いてしまいたかったが、化粧を落としたら優子に殺されてしまうのでなく事が出来ない……。泣けないことがこんなに辛いなんて……思ってもみなかった……。

.....

《それではエントリー? 1番 【卑怯】 【変態】 【女装趣味】 と三拍子揃った外道! 2 - B 代表の根本恭二さんです!》

誰だぁー! っ!?

あいつの票を入れた大馬鹿野郎は! っ!

あいつの女装姿はオレのトラウマなんだぞ!

嗚呼……、思い出したら寒気と眩暈と吐き気が……。

《いやぁ……、これは思った以上に汚い絵ですねえ……。しょっぱなから誰得な企画が分からなくなってきました……。》

オレ達気が合うな、新野……。

オレもそう思った……。

本当に……心の底からそう思ったよ……。

《そんな事を言っではいけませんよ。彼の変態としてのプライドをズタズタにしてしまいますから》

《変態としてのプライドなんてむしろズタズタにされるべきだと思いますが気にしないでいきましょう》

高橋先生……。変態としてのプライドって何ですか……? ?

オレ……分らないです……。

オレの疑問を余所に根本は自信満々とも言いたげな表情でステージを歩いている……。

何であいつあんなに自信満々なんだ？

普通は嫌がつて早足になるはず……まさか、あいつ……このコンテストに投票じゃなくて自分で立候補したのか……？

もしそうだとしたら……キモッ！！

そしてステージの真ん中まで来てターンをしようとした矢先に……落ちた……。

《なお審査員は点数をつける代わりに出場者を強制的に退場させる権限を持ちます》

《審査員がこれ以上は見るに堪えないと思ったらボタンを押すわけですね》

《はい、そうなります》

審査員は……優子と久保か……。

つていうか優子さん……眼が怖いです……。

けどボタンか……。

それならオレの番になったら速効でボタンを押してもらえばいいんだ！

それならオレはこんな恥ずかしい姿を観客にさらさずに済む！

そうと決まれば策を練ろう！

今回に限り優子は俺の敵だから頼りにならない……！

なら久保を明久の女装写真で買収すればいいだけの話だ！

よし！ この方向でいこう！

次の奴が終わったら早速久保にメールを送ろう！

《ちなみにこの退場させるための落とし穴はFクラスの烏丸大貴君の祖父の烏丸修介さんのお手製となっております》

クソジジイイイイイツ!!!!

何をやってやがる! 何やってやがるんだ!

家に帰ったら絶対シメる! ボコる! 屋根まで飛ばすつ!!!

覚悟しやがれ!

.....

《エントリー?2番 Fクラス代表の坂本雄二さんです》

雄二……、お前も強制的に出場させられていたんだな……。

お互い強く生きよう……。

ガタン(雄二が落ちる音)

《おつといきなり厳しい評価。ターンすらさせてもらえませんでしたね》

雄二……、羨ましい奴……!

速攻で落とされて恥をかく時間を最小限に抑えられるなんて……。

《坂本君は中央……、つまり平均点に届かずに終わってしまったようですね》

《そうなりますね》

《平均点以下……。つまり赤点という事は補習の必要があるかもしれません》

え？

《いえそんな補修は必要ないかと思えます》

《彼にあの恰好のまま後で職員室に来るように伝えてください。どこが悪かったのか一緒に考えましょう》

ええええええええええ！？ そんな！ 嘘だろ！？ 嘘だと言つてくれ！

それじゃあステージに出て速攻で落とされるっていうオレの計画が……！

しかもあのまま職員室って……！

普通の出場者よりも長く女装してろってことか！？
そんな殺生な！

《これほど余計なお世話という言葉を体現したセリフを私は今まで聞いた事がありません》

仕方ない……。

腹括ってステージに立つとしよう……！

女装姿で補習なんてやってられるか！

オレが覚悟を決めたと同時に雄二の声によく似た叫び声が聞こえてきた気がするが……きっと気の所為だろう……。

.....

《さて、エントリー？3番今回は撮る側ではなく撮られる側、ムツツリ商会の若き経営者、土屋康太ことムツツリーニさんです》

ムツツリー二……、お前も犠牲者か……とか、女装姿がかなり可愛いとか、そんな事は今どうでもいい……！
それよりも重要視すべき事はさっきの新野の発言……
撮られる側って言うてた……。

ということはカメラがあるのか！？

嫌だあ！ こんな恥さらしな格好を映像や写真に残すのか！？

こんな恰好を静馬に見られたら……！ 見られたら……！！ オレはあああ……！！

最悪の場合舌嚙んで死んでやろうか……？

いやしかし！ そうなるとオレは女装姿で仏さんになってしまっ！
死して尚、恥をかかなければいけないってしまっじゃないか！

この案は魅力的だが却下だな……。

《これはレベルが高い。普通に可愛いです》

《土屋君は無口で小柄ですからね。雰囲気も出ているのではないでしようか》

《歩ききましたね。審査員もこれなら見ていられると思ったのでしょう》

優子さん……、何でそんなご満悦な笑顔をしていらっしやるので？

《続いてエントリー？ 4番、文月学園を代表するバカ、吉井明久さんです。》

ゴ、ゴスロリ……？

似合ってるから余計に怖い……。

嗚呼、久保が……今にもステージに乱入しそうなくらい興奮している……。

あ！ ちょっと優子何を

カチツ（優子がスイッチを押す音）
ボタン（明久が落ちる音）

優子……。お前容赦無いな……。
けどなんで落としたんだろう……？

《意外です。結構可愛かったのに落とされてしまいました》

だよな？ あそこで優子の友達の玉野も泣いてるし……

《審査員席の久保君が震えながら下唇を噛んでいますね》

《なぜでしょう？ 今の彼からは学年次席としての貫録が欠片も感じられません》

《木下優子さんはAクラスの威厳を保つためにボタンを押したのか
もしれませんね》

ああ、なるほど……。

プライドの高い優子らしい理由だ……。

.....

《エントリー？4番Fクラスの天然腹黒童顔ジミー、罵って欲しい
という男子が急増中の烏丸大貴君です》

凄い言われようだ……。

《これは……！ 凄いですね。男性の時の地味な感じとは全く違
いはなりとした印象を与えてくれます》

《烏丸君の顔は特徴が無いですからね。それが清楚な印象を引き出

しているのでしょう《

《和服もポイントが高いですね。彼は生まれてくる性別を間違えたのかもしれない》

なんてこと言うんだ……。

《涙目になっています。これは……その辺の女子なんて相手にならないほど可愛いです》

《そうですね。私もできれば持って帰って色々と着せ替えてみたいくらいです》

アンタ達がボロカスに言うから泣きそうになったんだろっが！

《これも歩ききりました。審査員席の木下優子さんがご満悦です》

《木下優子さんのあんないい笑顔は今だかつて見たことがありません》

優子め……！ オボエテロ……！

.....

《それでは最後のお一人、エントリー？5番》

沸き立つ観客……

期待されているのが良くわかる……。

アイツはファンが多いからなあ……。

《本命中の本命と言われ》

バン（優子がスイッチを押す音）

ガタン（秀吉が落ちる音）

《優勝候補……………》

会場の空気が静まりかえり、空気が凍った……………。

落ちた秀吉のドックタグが何故か強く印象に残った……………。

優子……………、いくら秀吉が女装するのを快く思っていないとしてもこう
いう企画何だから、空気読もうよ……………。

《はい、それではこれで文月学園女装コンテストを終了します。皆
様、またの機会にお会いしましょう。さようなら》

《さようなら》

“またの機会”なんてあつてたまるか……………！

あつたとしてもあの手この手を使って阻止してやる！

……………

「面白かったわね」

「姉上……………。酷いのじゃ……………。」

「……………。」

「ヒロ、どつしたの？」

「優子……………」

「え？ な、なに？」

オレは優子が逃げられないように肩を掴んだ。

意外に柔らかくてさわり心地がいい……………って違う！ 今回の目的は

そういうのじゃない！

しっかりしろオレ！

「貴重な体験させてもらったよ。ありがとう」

「え？ え？ ど、どういたしまして……？」

「本当に優子には着付から化粧まで本当に色々とお世話になって…

…」

そこまで来て優子はやっとオレの異変に気が付いたようで逃げ出そうと何とか抵抗を試みていたが、オレに肩をがっちりと掴まれている為、逃れる事が出来ない。

「……ヒロ？ まさか……怒ってる？」

「いやいや、怒るなんてとんでもない！ いやあ、貴重な経験をさせて貰ったよ。本当に……！ この感謝の気持ち……どうしたら伝わるかなあ……？」

「え、えっとヒロ……？ 何と言うか……ごめんなさい……」

「優子……。オレのモットーは？」

「えっと……“恩も恨みも忘れない”……」

「近々……商店街でカラオケ大会があるんだってな……？」

「え……？ まさか……」

「今度は優子の素晴らしい歌声を皆に聞いてもらおうか？」

「ちょ……！ ヒロ……！？ や、やめ……！」

「もうエントリーしてあるから……逃げられると思うなよ？」

「い、いやああああああああつ！……！」

後日覆面をつけた女版ジャイアンの活躍で商店街のカラオケ大会は大混乱になってしまった事は言うまでもないだろう……。

特別編 王様ゲーム カラス編

場所は2-F……。

オレ、明久、雄二、秀吉、ムッツリーニ、姫路、島田、霧島、工藤が真剣な顔をして卓袱台を囲み向き合っている。

真剣勝負……！ 恨みっこなし！
さて……やるぞ！

「王様ゲーム！」（雄二の声）

「……イエー……イ……」（全員の相の手）

「明久、ルールの説明を頼む！」

「OK！ ここに1〜7番の数字と“王”と書かれたクジがあります。この“王”のクジを引いた人は他の1〜7番の人に命令ができます。例えば1番が王の肩を揉むとか、2番が3番にしつぺをするとか……。そして王様の命令は」

「…… 絶対……！」

「優子も参加できれば良かったのにね」

「用事があったんだから仕方ないさ。終わり次第来るらしいぞ」

「あ、そうなんだ」

「それじゃあ、はじめろぞ！」

雄二の指示で全員クジを引く……。

この緊張感……！ たまらないね……！

「お前ら、覚悟はいいか？」

「お前こそ吠え面かくなよ、雄二！」

「へっ！ お前こそな、ヒロ！ 行くぞ！ せーのっ！」

「……王様だ〜れだ！」「……」

「……ダーーーーッシュ！」

オレ達三人は走って行った……。血の涙を流しながら……西村先生に告白する為に……！

数分後……。

オレ達3人は

【私は教師をからかった事を反省しています】
と、いう看板を下げて教室に戻ってきた……。
後になって思えば、よくそれだけで済んだ物だ……。

不意に明久、ムツツリーニと眼があった……。

そして2人とも血の涙を流しながら、オレと同じことを考えていると確信した。

（（雄二！ 絶対殺す！））

こうして漢たちは雄二への復讐を誓い合っただけであつた……。

「2回戦！ 行くぞおおおおっ！」

「……YAAAAAAAAA!」「……」

「せーのっ！」

「……王様！ だ〜れだ!」「……」

「あ。ボクだね」

次は工藤か……。

さてどんな命令を下してくる？

「それじゃあ 2番が、4番のホッペにチューを」

「ホントですかあああああっ!?!」

姫路……4番か……。

明久が2番なのか?

「あ、明久君……。明久君のクジの番号は 2番……ですよね……?」

「姫路さん……」

明久はゆっくりと自分のクジを姫路に見せる……。
そこに書いてあった番号は

明久 3番

「え……?」

「……。(トントン)」

「え……?」

島田 2番

「あ……ああ……」

「いらっしゃい……瑞希……」

「イ、イヤアアアアアアッ!」

しばらくお待ちください……………

何があったかつて?

それは鼻血まみれで机に伏しているムツツリーニと恥ずかしがりながら口をハンカチで拭いている島田を見て察してくれ!

「わかりました。そういうちょっとHな罰ゲームもありなんですね
……？ それならもう！ 私だって……！ 容赦しません……！」
「普通は女の子はいやらしい罰ゲームを嫌がる物なのじゃが……」
「秀吉、もつともなツツコミだがあんまり意味が無いと思うぞ？」
「なぜじゃ？」

「姫路は思い込んだら一直線！ 人の話を聞かない！」
「得心がいったのじゃ……」

「いきますよ！ セーの！」

「……王様、だ〜れだ……！」

「おお！ やった！ オレだ！」

よしよし！ 色々と罰ゲーム考えてきてたんだ！

「さて……行くぞ？ 1〜3番！ この中から好きな罰ゲームを選
べ！ 尚、1度選んだ罰ゲームはもう選べないから早い者勝ちだ！」

？ 古典の竹中先生のズラをパクってくる。

？ 屋上から『ギャルのパンティお〜くれ！』と叫ぶ。

？ 何か面白い事をやる。（誰かが笑うまでエンドレス）

1番 秀吉

2番 雄二

3番 明久

「「なんて罰ゲーム出しやがる、この野郎！」」

「ワシは？を選ばせて貰おうかのう」

「あつ！ ずるいよ、秀吉！」

「そつだ！ ここはじゃんけんで」

「早い物勝ちだと言ったはずだ」

「ぐ……っ！」
「それではゆくぞー！」

.....

「あははははっ！」

「き、木下！ もうやめてっ！」

「は、腹が抜れる……っ！」

「はい、秀吉O・K！ あとは雄一と明久だな！」

「うう……っ！」

「くっ……っ！」

結局、明久が屋上から『ギャルのパンティおくれ！』と叫び、雄二が古典の竹中先生のズラをパクることで事態は収拾した。勿論、2人とも西村先生の拳骨を食らった事は言うまでもないだろう。

「あゝ、笑った笑った！ さて次行くぞ！」

「……王様！ だ〜れだ！」

「あ、私ですね。」

「姫路か……」

どんな命令をしてくるのかな？

さっき『もう容赦しません』って言ってたし……。

「それじゃあ 8番が1番を口説いてください！」

1番 島田

8番 オレ

「よ、よろしくね。烏丸……」

「ああ。悪いな、オレで……。それじゃあ行くぞ」

「う、うん……」

「島田……」

「うん……」

「お前に好きな人がいるのは分かってる……。けど……！ オレじやダメか!?!」

「え……!?!」

「オレは……！ いつでも島田の事を1番に考えてるから！ だから……もし島田さえよかったら……」

「烏丸……」

「島田……」

P r r r r r P r r r r r

「あ、悪い。メールだ」

一旦演技を中断して携帯の画面を見た。

.....

From 木下優子

本文

浮気したら殺す!

.....

「ごめんなさい、優子さん！ ちょっと変な気持ちになりました!」

携帯の画面に向かって光の速さで土下座した……。
何故か島田がオレに向ける視線が冷たかったのが印象に残った
……。

.....

「次、行こうか……」

「そうだな」

「それじゃあ、せーの!!」

「王様! だ〜れだ!」

一斉にクジを引く……。

さて次は誰だ!?

「.....」

流れる沈黙……。

この空気は……まさか!?

王様 霧島

()(復讐するは我にあり!)()

共に雄二抹殺を誓った仲間とともにアイコンタクトを交わす。

「す、すまんが急用がつ!」

「逃がすかあああああつ!」

「邪魔するなあつ!」

明久、ムツツリー二が雄二を足止めしている間にオレはカッターナイフを3本取り出し、2人を突破してドアの手をかけようとしている雄二に向かって投げつけた。

カッターナイフはオレのイメージどりの軌道で雄二の制服をドアに縫い付けた。

そして動けなくなった雄二を明久、ムツツリー二が取り押さえる。抜群のチームプレイだ！

オレ達3人はお互いの眼を合わせて親指を立てた。

「さあ、王様！ ご命令を！」

「は、離しやがれえええええつ！」

「離すわけないだろうがあああつ！」

クソツ！ なんてバカ力だ！

「……じゃあ、雄二は今から私に何をされても抵抗しちゃダメ」

「待てお前！ 俺に何をする気なんだ！？」

「……そんなの……恥ずかしくて言えない」

「コイツ変態だあああああつ！」

「はっはっはっ、雄二！ 夫婦仲睦まじくて羨ましいなあ、オイ！」

「キサマアアツ！」

「じゃが霧島よ。さっきの命令は残念ながら無効じゃ。きちんと番号で宣言せんとルール違反になってしまう」

チイツ、秀吉！ 余計な事を！

けど、まあいい……。

雄二のクジの番号はさっき見えたからな……。

(霧島、これを見る！)

霧島に見えるように指を4つ立てる。
霧島はそれを確認して小さく頷いた。

「そうだ！ 秀吉の言う通りだ！」

バカめ！ 助かったと思っただか！？

これがお前の人生の墓場への片道切符だ！

「……………じゃあ……………4番」

「……………。」

雄二は再び無言で逃げ出すが、オレ達デルタフォーから逃れられるはずが無い。

会えなく御用となり、別室で霧島とゆつくりと夫婦の時間を過ごすことになった。

……………

「一体何があつたのじゃろうか？」

「まるで拷問の痕みたいよね」

島田、痕みたいじゃなくて拷問の痕なんだ……………。

雄二は亀甲縛りに猿轡、全身に鞭の痕があつた……………。

因果応報……………。

肝に銘じておこう……………。

「それじゃ、ラスト！」

「王様！ だ〜れだ！」

もうラストか……。結局優子は間に合わなかったなあ……。

「よし、僕だあ！」

最後の王様は明久か……。

「んじゃ、1〜8番の全員は 隠し持ってる僕らの女装写真を焼き捨てる〜」

「「そ、そんなあ！」」

「「それは名案だな（じゃな）！」」

姫路と島田が抗議の声を上げ、オレと秀吉が明久の提案を称えた。この間の女装コンテストでオレの女装写真が学校全体に出回っているらしいからここで少しでも破棄出来るならその方がいい。

「そんなの酷いです！ あんまりですうううっ！」

「そうよ、アキ！ しかもそれだと木下の写真や烏丸の写真まで燃やすことになるのよ！？」

「大丈夫。僕が持つて無い秀吉とヒロの写真なんて存在しないから」

後で玲さんに連絡して全部破棄してもらおう……。

「待て明久よ！ お主今何と？」

「さあ、大人しく写真を渡すんだ！」

「「いやああああああっ！」」

.....

さて、今の状況を簡潔に説明しようか……。

- ・亀甲縛りで動きを封じられた雄二の膝枕で眠る霧島
- ・鼻血の海に沈むムツリーニ
- ・悲しみのあまり涙が枯れてしまった姫路と島田
- ・教室で火を起こし女装写真を処理する明久と秀吉
- ・それを傍観するオレと工藤……。

「あはは……。なんか凄い光景だねえ……。」

「確かになあ……。まさかここまで混沌とした光景が広がると思っ
つてもみなかった……。」

「そうだね。人に見られたら誤解されそうだよね」

「ははっ！ 全くだ！」

ガラッ！

「ごめん！ 遅くなっちゃって！」

「あっ！」

「……………」

優子がナイスタイミングというか、バッドタイミングというか……。どっちにしても絶妙なタイミングで教室に入ってきた。そして眉を引き攣らせて無言で教室のドアを閉めた……。

「……解散っ！！」「……」

「優子待て！ 話を聞いてくれ！」

「アタシは何も見えてない！ 聞いてない！」

「だから待ってっ！」

「追いかけてこないでよ！ 変態！」

「お、おまっ！ 仮にも自分の彼氏を“変態”呼ばわりはどうかと

思うぞー！
「

王様ゲームは幕を閉じた。

それぞれの心に深い爪痕を残して……。

もう2度とこの面子で王様ゲームなんてやるものか！

外伝 第10話 世にも奇妙な物語（前書き）

かなり訳がわからないバカな話になりました。
お叱りはなるべくやさしくお願いします……。

外伝 第10話 世にも奇妙な物語

「ちよいとそのお兄さん、寄ってかない？」

学校帰りに胡散臭い辻占い師に呼び止められた……。

本当に胡散臭い……。

頭からすっぽりとローブを被って顔を隠している……。

本当に胡散臭い……。

「好きな子との相性を占う相性占い！ 手相占い！ 人相占い！

何でもござれのスーパージョウイ師にお任せあれ！ 今ならなんと1000円のところを500円ポッキリ！ いかがですか！？」

何処のキャバクラの呼び文句だ……。

関わりとロクな事にならなそうだったので、無視してさっさと帰ろうとした。

「あゝ！ ちょ、ちょっと待って！ お願い、寄ってって！ 後生だからー！」

「占いなんて曖昧なもの信じてませんので、他を当たってください」「そんなー！ お願い、騙されたと思ってー！」

「騙されて500円盗られるくらいなら、その500円で夕飯の品を1品増やします……！」

「ぐふうっ……！」

「え？」

いきなり辻占い師が倒れた……。

「この3日間……水しか飲んでないのよ……。お願いだから……」

「可哀想な私を助けると思ってた……」

「……」

騙されてる！ 絶対騙されてる！
頭では分かっていたのだが、流石にこのまま見捨てて行くのは後味が悪すぎる……。

「……わかりました。それじゃあ頼みます……」

「はいはい！ 張り切っちゃいますよ」

「張り切らなくていいからさっさと終わらせてください……」

「もう、冷たいんだからあ。そんな事じゃ女の子にモテないぞ」

「やっぱりキャンセルで」

「ああ！ ごめんなさい！ 真面目にやります！ ヤレ」

「ソラン、ソラン、ハイハイ」

「胡散臭せえ……！ 胡散臭すぎる……！」

絶対オレ騙されてるよ！

目の前にインチキ占い師に500円を騙し取られる己の不運を嘆いた……。

押しに弱いなあ、オレ……

「最近大きな悩み事が解決して、これからは少しずつ幸せになれるつてさ よかったねえ」

「へえ、そう……。それは良かった」

「いや、お兄さんは私の命の恩人ですよ」

「そうですか……」

「お礼にもう一つサービスしちゃいます」

「いえ、結構です」

「そんなこと言わずに」 私の愛、受け取って」

「いません」

「はい、チチンプイプイ、ビビデバビデ、ブーーーーッ！」

占い師のかけ声をかけてオレの足元を指さした後、いきなり足元に穴が出来た。

そしてオレはその穴に落ちた……。

「のわああああああああっ！」

なに、コレ！？　なんだ、コレ！？　テメエはデスラー総統か！？

「それじゃあ……楽しんできてね」

「テメエ！　覚えてろおおおおおっ！」

.....

「ハッ！」

布団から飛び起きた……。

辺りを見回せば、いつも通りの自分の部屋……。

「なんだ、夢か……」

頭の悪い夢を見た……。

あれはなんだったんだ、一体……？

まあ、いいや……。

さっさと朝飯の支度を始めよう……。

.....

.....

いつもの朝、いつも通りの時間に登校した。学校ではきつといつも通り適度に騒がしく、適度に平和な1日が待ってるだろう。

オレはこの時は思いもしなかったんだ……。

いつも通りの適度に騒がしく、適度に平和ないつもの日常が無くなってる事に……。

「おはよう、ヒロー！」

「ああ。おはよう、明ひ ……っ！」

いつも通りあいさつしてきた明久の格好を見て固まってしまった……。

「どうしたの？ 急に固まっちゃって……」

「いや、どうしたもこうしたも……。お前、その格好……」

「え？ 変かな？」

「ああ。変だ。なんだって朝っぱらから女装なんかしてるんだ？ また姫路や玲さん辺りにでも強要されたのか？」

だとしたら同情の涙を禁じえない。

しかし明久からは予想とは斜め上の回答が返ってきた。

「え？ “姫路君”や“兄さん”はそんな事しないよ？ “男装”させようとするにはするけど……」

ん？ 兄さん？ 姫路君？ 何を言ってるんだ、こいつは？ 寝ぼけてるのか？ じゃあ姫路の呼び方に関してはスルーで……

「兄さん？ お前に兄貴なんていたのか？」

「もう、寝ぼけちゃって！ ヒロだって会った事あるじゃない」

「え！？ いつ！？」

「この間の勉強合宿の時！」

「あの時お前の家族っていったら玲さんしか会っていないぞ？」

「だから！ “吉井玲”が兄さんなんだって！ ホントにどうしたの、ヒロ？」

「いやいやいや！ お前こそ変だぞ！？ どうしたんだ、明久！？」

「もう！ それは男装したときの名前だよ！ 私の名前は“吉井明子”だって！」

なんだ！？ 会話がかみ合わない！？ 頭でも打ったのか……！？

「あ、おはよう姫路君！」

「おはようございます。明子ちゃん、烏丸君」

「姫路か！？ ちょうど良かった！ 明久が壊れ た！？」

「？ どうしたんですか？ どうして固まってるんですか？」

「い、いや……。どうしても何も……！」

姫路と顔を合わせてまた驚いた……。

姫路も男装をしていたのだ……。

そして何よりも驚いたのは……姫路の胸についていた男の夢と希望が詰まった巨大な物体が無くなっていたのだ……。

「本当にどうしたんですか、烏丸君？ 口をパクパクさせて金魚みたいですよ？」

「姫路君、ヒロはさつきから盛大に寝ぼけてるみたいなんだ」

「ふふっ……。そうなんですか？」

え？ あれ？ 何でこんな訳のわからないことになってるんだ！？

……落ち着け、オレ！ 突発的な事態に弱いのはオレの弱点だ！
まず落ち着け！ 落ち着け！

深呼吸！ ヒッヒッフー！ ヒッヒッフー！
って違う！ これは深呼吸じゃなくてラマーズ呼吸だ！

「おはよう、アキ！ 瑞希！ 烏丸！」

「……………」

「あ、おはよう美波！」

「おはようございます、美波君」

やっぱりというか……………。なんとというか…………。

島田も男装をしていた。

「今日も突きがいのある頬つぺただな！ ほらほら！」

「美波、くすぐりたいからやめてよ〜」

「美波君！ 明子ちゃんに近付き過ぎです！」

「べ、別にオレはアキの事なんか…………！」

「お兄様！ そのメス豚から離れてください！ お兄様の魅力がわかるのはこの僕！ 美春だけです！」

「げっ！ やめろ、美春！ オレにそっちの趣味はない！」

これは…………。一体どうなってるんだ…………？

周りを見渡してみると知った顔がちらほらと見えてそいつらも皆男女逆転していた。

玉野、小山、新体操の…………。そうだ、小暮先輩は男子の制服を…………。平賀、久保…………。根本、常夏コンビは女子の制服を…………。

オエッ！ 今のは忘れよう…………。

まあ、なんにしてもオレが思った事は唯一つ…………！

「本当にどうなってるんだぁ…………っ！」

.....

少し落ち着きを取り戻し、Fクラス……。

やっぱりここも全員性別が逆転してしまっている。

ほとんど男子ばかりだったクラスがほとんど女子ばかりになっていった。

『チツ！ 明子の奴……！ 今朝、姫路君と島田君と烏丸君と一緒に登校してきたみたいよ？』

『ブスのくせに！ ブスのくせに！ ブスのくせにっ！』

『あんな女より私の方が可愛いわ！ 絶対に！』

『あとで異端審問会を開きましょ！？』

『ここはやっぱり靴に画びょうを……！』

『私最近黒魔術に凝ってるの』

どうやら性別が逆転してもFFF団は存在するようだ。

やり口が直接的ではなく、女性のダークサイドである陰湿でネチッコいやり口にシフトしてしまっているから本家FFF団より性質が悪……い……。

ちなみに雄二とムッツリーニはというと……

「今日も朝からシヨウに迫られて大変だったわ……。」

「……………男性の体の神秘……………」

坂本雄二改め『坂本ユウナ』、土屋康太改め『土屋コウミ』になっていた……。

恐らく雄二（女版）がさっき言っていた“シヨウ”とは霧島（男版）

の事だろう……。そしてムツツリー……。男だったからムツツリスケベで済まされるが、女だったら【検閲削除】になってるぞ……。もう何があっても驚かないような気がした……。あと教室に来てないのは、秀吉だけか……。あいつも性別が逆になってるんだらうなあ……。

「おはようじゃ、ヒロ！」

「……秀吉、だよな？」

「そうじゃが？ どうしたのじゃ、ヒロ？」

よかった！ すごく安心した！ 秀吉は男の制服はまだ！

「ひ、秀吉ーっ！」

「なんじゃ、ヒロ！？ なぜ泣きながらワシに抱きついてくるのじゃ！？」

ムニユツとした柔らかい物が体に当たった……。

以前優子の胸を（不可抗力で）揉んだときと似たような独特の柔らかな感触は……？

まさか……！？

「ヒ、ヒロ……。嬉しいのじゃが……恥ずかしいのじゃ……。教室でこのような大胆な……。こういった事はせめて二人っきりの時に……」

「ヒ、ヒロ！ ダメだよ！ ここは教室だよ！？」

「いいじゃないですか、明子ちゃん」

「そうだよ、アキ。木下は前から烏丸の事好きだったんだから」

「な、何を言うのじゃ！ 島田！」

絶望するしかねえー！

なんだよ、これ！ 訳分からねえよ、これ！

何がどうなってるんだよ、ホントに！

『烏丸！ おい、烏丸！』

「ハッ！」

「何をボーツとしている！ さっきから呼んでいるんだからさっさと返事をせんか！」

「あ、すみません。西村先生」

まずい。オレが思考に耽ってる間にHRが始まっていたのか。慌てて顔をあげると

「アマゾネス？」

西村先生（女版）の格好を見て、パツと出てきた単語を思わず口に
してしまった。

「いい度胸だなキサマ……！」

「あっ！ いやっ！ これは！ その……！ えーっと！」

「この課題をプレゼントだ！」

「ノオオオオオッー！」

しまった！ 余計な事を言ってしまったあつ！

「期限は3日後だ！」

「そんな！？ こんな分厚いのを3日でやれって言ってますか！？」

「足りないのか？」

「時間が足りません！」

「そうか！ なら追加を……！」
「誠心誠意がんばりますっ！」

なんで……こんな事に……！

.....

「ヤホーッ！ ムツツリーニちゃんいる？」

「……………！ 工藤……………！」

「よかつたらボクと保健体育の勉強を実践でしない？」

「……………！ セクハラはお断り」

「やだなあ……………。体は正直だよ？」

「……………！ そんな事は……………ない……………！」

男女逆転してもあいつらはやる事が相変わらずだなあ……………。

.....

「……………ユウナ……………。朝の続き……………」

「ま、待って、シヨウ！ 私は……………！」

雄二（女版）が霧島（男版）に迫られてる……………。
こっちもやる事は相変わらず、と……………。

.....

さてここにきて今更だが、とても大きな問題がある！

それは 優子も男になってるかどうか、だ！
ご存じの通りオレは真正銘のノンケだ！
優子が男になっていたとしたら ！
オレは！ オレは！ どうしたらいいんだあああああつ！
コラ、そこ！ アホらしいって顔するな！
オレにとつては重大問題なんだぞ！
確認……！ 確認しなくてはならない……！
正直ビビってるが問題を先送りしておくわけにはいかない……！
さて！ 行くぞ！

「ヒロ？」

「って、まだ心の準備が出来てねえよ！」

「何言ってるのよ？」

「優子……だよな？」

「他に誰に見えるっていうのよ？」

「優子？ すっごくバカな事を聞くようだが」

「うん」

「お前に【検閲削除】はついているか？」

パキユツ！

あ、嫌な音……。

「ぐおおおおおおおつ！ 指があああああつ！」

「アンタは……！ ホントに……！ 何言ってるのよ！？ セクハラよ！ セクハラ！」

「だから『バカなこと聞くけど』って前もって言ったじゃないか！
「もう……！ ホントに！」

「けど良かった……。優子は女のままだった……。」

「？ まさか！？ ヒロ！？」

「なんだよ？ 薬ならやってないし、ラリってもないぞ？」

「違うわよ！ あんたも変だって思ったの！？ 皆の性別が逆になつてる事に……！」

「つて事は 優子もか!？」

「よかつたあ！ アタシだけじゃなくて！ 皆、なんでか性別が逆になつてて……！」

「はあ……。よかつた……。オレの頭がおかしくなつたのかと思つた……。」

「アンタがおかしいのはもともとでしょ？」

「なあっ!？ お前……！ それはいくらなんでも酷い！ 酷過ぎる！」

「はいはい、それじゃあ何でこんな事になつたのか考えましょ？」

「ハア……。全く……。オレは身に覚えが無いんだけど……。」

「何かあるはずよ。例えば“ミミズに【検閲削除】を”」

「おーっと！ それ以上は女の子が口にしちやいけない！」

なんて事を言うんだ、この子は……！

本人自覚が無いみたいだけど、段々オレやFクラスの影響を受けてきてるなあ……。

「じゃあ、何があるつていうのよ？」

「うーん……。……わかつた！」

「え？」

「これはオレの夢に違いない！ そうじゃなければこんな非常識な現象が起こる訳無い！」

「へえ、じゃあこれは痛い？」

ゴキゴキバキ……！

「~~~~~っ！ 滅茶苦茶痛いです……！」

「そう。じゃあ夢っていうのはないわね」

なんて酷い奴だ……！

やるなら頬を掴るとか、もうちょっと可愛げのある方法をとってくれ！

何で関節を外す必要があるんだよ！？

「となると……？」

「お手上げ……だな」

「諦めるの早くない？」

「とりあえず、だ。諦めるとは言ってない。それにこれは明らかにオレ達の手には負えないだろ？」

「……………」

「姉上！ ヒロと何をやっておるのじゃ！？」

「ちよつと内緒話」

「姉上はいつもヒロを独り占めしてばかりでするいのじゃ！」

「おいおい、独り占めって……」

「ワシだってヒロと一緒にいたいじゃ！」

「ヒロ？ 何で秀吉はアンタに気があるような事を言ってるのかしら？ 答えによってはこのままボツキリやって次世代型人間にするからね？」

「そんな青いネコ型ロボットもビツクリな次世代型人間は嫌だ！

つていうかちよつと待て！ 本当に勘弁 っ！」

「ヒロ！ 今朝ワシに抱きついてきたではないか！？ あの責任はどう取ってくれるのじゃ！？」

ボキッ！

「腕があああああっ！」

「ヒロのバカあああああっ！ 浮気者……っ！」

「ご、誤解だアアアアツ！」

「何が誤解なのじゃ！？ 朝確かにワシに抱きついたではないか！」

「秀吉！ これ以上話をややこしくするな！」

「殺すわ……！」

「待て、優子！ 目からハイライトが消えている！ 本気で怖いから……！」

いつから優子はツンデレからヤンデレにクラスチェンジしたんだ！？

「浮気者は殺す……！」

「や、やめ……っ！ ぎゃああああああああつ！」

バカとテストと召喚獣〜文月学園のカラス〜

B A T E N D

「って、なるかああああつ！」

.....

よし、とりあえず現状を整理しよう。

- ・ 何故かこの学校でオレと優子以外全員の性別が反転している。
- ・ それに気が付いてるのはオレと優子だけ
- ・ 原因は不明
- ・ 何故か秀吉がオレに引っ付いてくる。
- ・ 結果優子が怒ってオレに関節技を掛けまくる。

「考えれば考えるほど訳が分からん……。一体どうなってんだ？」

まず昨日の行動を振り返ってみよう……。

いつも通りトラップにかかって……

いつも通りジジイに伸されて……

いつも通り登校して……

いつも通り優子に関節極められて……

いつも通り西村先生の拳骨をくらって……

いつも通り補習を受けて……

いつも通り明久と島田の喧嘩（島田による一方的な関節技）を仲裁して……

いつも通り姫路の料理の餌食になって……

いつも通りムツツリ商会でバイトして……

いつも通り帰って……

いつも通り家事全般やって……

「参ったな……。完全に手詰まりだ……。」

そもそもこんな異常事態を常識で測ろうとすること自体が間違いか

……。

だとしたら答えは非常識の中に……？

ダメだ……。余計混乱してきた……。

もう一度最初から考えなおそう……。

え……っと、不思議な出来事の原因に心当たりは………あつた……

……！

あつたよ、そういえば！

あの胡散臭い占い師！

夢だとばかり思っていたが、こんな訳のわからない事態が始まったのはあの占い師にデスラー総統みたいに落とされてからだ！

「あの野郎……！（女だけど）許してはおけない……！」

.....

「やあやあ、昨日のお兄さん 私に会いに来てくれたのかな？」

「ああ……！ 会いたかったぜ、この野郎……！」

「いやん〜 いくら私が可愛いからってそんな情熱的な告白を

」

「アンタのバカな話に付き合う気は一切無い！ いいからさつさと元に戻せ！」

「え〜、面白く無かったですか〜？」

「全っ然！ 面白く無かったね！ むしろ混乱しまくったわ！ いからさつさと戻せ！」

「それじゃあ元に戻すための料金を1万円」

スチャ（ハリセンを両手に構える音）

「ああ〜、ごめんなさい！ 反省しましたからそんな物騒な物はしまってください〜！ っていうかハリセンなんて一体何処から出したんですか〜？」

「企業秘密だ……！ さつさと元に戻せ！ その後一発殴らせる！」

「殴らるのは嫌なので最初と同じ戻し方をしま〜す。」

「待て、それだとオレまた落ちるんじゃない ツ!？」

「チチンパイパイ、ビビデバビデ、ブー……ッ！」

また足元に穴が出来て落ちていった。

「のわああああああああつ！ またかよおおおつ！」

「それじゃあ……またね〜！」

「テメエエエエツッ！ オボエテロオオツッ！」

.....

「ハッ！」

布団から飛び起きた……。

辺りを見回せば、いつも通りの自分の部屋……。

「なんだ、夢か……」

頭の悪い夢を見た……。

あれはなんだったんだ、一体……？

まあ、いいや……。

さっさと朝飯の支度を始めよう……。

.....

いつもの朝、いつも通りの時間に登校した。

当然だが、みんなの性別は元に戻っていた……。

と、いうかアレはオレの夢だったようだから……いや、これ以上考
えるのは止そう……。

「おはよう、ヒロー！」

「おはよう、優子。どうしたんだ？ 疲れた顔をしてるぞ？」

「うん……。それがね、昨日変な夢見ちゃって……」

「変な夢？」

「それがね……。アンタ以外、学校の全員の性別が逆になって……」

「え……?」

「ふふっ、本当にバカな夢よね」

「ああ、そうだな……。本当にバカな夢だ……」

まさか、な……?

うん、これ以上考えるのは止そう!

あれは夢だ!

うん! 間違いなく夢に決まっている!

強引に思考を収束させてこれ以上考えるのをやめた。

自分の理解の及ばないことをいくら考えたって無駄だろう。

そして……。いつも通りの日常は続く……。

外伝 第10話 世にも奇妙な物語（後書き）

silverさんリクエストの性別が逆になった秀吉と優子がヒロを取り合う話（あれ？ なんか違うね？）でした。

結果訳のわからない話が出来ました……。

なんと言いますか…… silverさん、ごめんなさい……。

これが精一杯でした……。

他のリクエストも本編に使えそうなものが多かったので、機会があれば本編の中に組み込んでいきたいと思っています。

次は海話を考えております。

これに懲りずに読んでやってください……。

外伝 第11話 遊びに行こう！ 陰謀と逃走編

明久SIDE

「そういえばアキくん。旅行にお友達を誘うと言っていましたけど、結局旅行の人数は何人位になりましたか？」

「姉さんも入れて11人なんだけど……」

「11人、ですか？ 随分数が多いですね」

「うん。参加したいって人（約一名強制参加）が結構いてさ。無理かな？」

「ワンボックスカーを借りても1人どうしても入りませんね……」

「あ、ヒロはバイクを持ってるから、それで来れば入るんじゃない？」

「そうですね。そうして貰いましょう。他に誰を呼んだのですか？」

「えーっと、まあ……学校の友達だよ」

「学校のお友達ですか。例えば誰です？」

「雄二とか、秀吉とか、ムツリー二とか……」

「他には？」

「ひ……」

「？ ヒロ君と秀吉君ならもう聞きましたよ？」

「ひ……ヒ・ミ・ツ」

「アキくん歯を食いしばりなさい」

「ご、ごめんなさいっ！ ちょっとした冗談ですっ！ ちゃんと言うから殴らないで！」

「わかりました。正直に言うてくれるならご褒美にチュウをしてあげましょう」

「残り5人は昨日知り合った宇宙人なんだ」

「よく正直に答えてくれました。さあ、顎を上げて眼を閉じてください」

「ちょっと待つて！ 今、僕明らかに嘘ついたよね!？」
「人間も広義に解釈したら宇宙人ですから」
「そんなの屁理屈だ！ とにかく謝るからストップ！ ストップ
！」
「そこまで嫌がられると流石に」
「あ、ごめん。傷ついた？ でも姉弟でそんな事は」
「ムラムラしますね」
「変態！ 度し難い変態が此処にいる！」
「本気にしないでください。半分冗談です」
「ヤバい……！ この人半分本気だ……！」
「そもそもアキくんが嘘をついて誤魔化そうとしたからいけないの
です。何故誤魔化そうとしたのですか？」
「……言つても……怒らない？」
「参加者の中に女の子がいる、なんて事でなければ、殴りませんし
へシ折りませんし女装もさせませ どこに行くのですか、アキく
ん？」
「嫌だあつ！ 殴られて、へシ折られて、女装させられるのは嫌だ
あつ！ もうヤダツ！ 僕、烏丸さんの家の子になるうっ！」
「そうですか。女の子がいるのですか。」
「ち、違うんだよ！ これは、その……前の試験の時に凄くお世話
になったし、いつも一緒にいるメンバーだから呼ばないのも変だし、
誘った時は泊まりだなんて思わなかったし……！」
「まったくあなたという人は……」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさい！」
「……まあ、いいでしょう。お世話になっている人なのは確かです
し、姉さんの見ていないところで何かされるよりはずっといいです」
「じゃあ!？」
「今回だけですからね？」
「ありがとう、姉さん!」

「ただし旅先で不純異性交遊に当たる事をしたら」

「あははは……。ど、どうなるのかな？」

「一族郎党皆殺しです」

「いや、それ姉さんも死んでるから」

.....

ヒロSIDE

「あゝ、クソツ！ 傷口が痒い！」

父親とやり合った一件で出来た額の傷は完全に塞がっていた。

それでも治ったばかりの傷跡とはやたらと痒い物で、搔くときに絶妙な力加減が必要だ。

下手に力加減を間違えて強く引つ搔いてしまったら、痛いので細心をはらわなければならない。

「恨むぜ、あの野郎……」

悩みの種である傷を作った人物を頭の中に浮かべ、悪態をつきながら天井を仰いだ……。

ピンポーン

「はい！」

家のチャイムが鳴り、玄関へ向かった。恐らく優子たちだろう。

今日はみんな揃ってオレの家に来る事になっている。

何故か明久と雄二が怪しげな笑みを浮かべていたのが気になったが

……。
まあ、あいつらの事だからきつとくだらない事でも考えているんだろつ。

この時父親との一件が解決して、ずっと張り詰めていた糸が緩んでいた……。
後にオレは何故もつと深読みしなかったのか？ という事を後悔することになる。

軽い足取りで玄関へ向かう。今日はトラップのセンサーは切つてあるようだ。
友達が来るからジジイが気を使つてくれたんだな。

「ありがたいね、本当に……」

独り言をつぶやいた後、玄関の戸を開けた。

優子を始め、明久達いつものメンバープラス霧島、工藤が立っていた。

何故かとってもいい笑顔を浮かべながら、大きな旅行カバンを持つて……。

「おう、いらつしゃい。凄い荷物だな。旅行に行くみたいだぞ？」

「察しがいいわね。その通りよ。今から皆で 海に行くんだから」

「へえ、そうなのか。ところで聞き間違いだと思うんだけど、さっき『今から』って言ったか？」

「聞き間違いないわ。今から、よ」

「その“みんな”の中にオレも入ってるのか？」

「当たり前じゃない」

「そうか、そうか。あっはっはっは！ ……急用を思い出した！」

回れ右をして全力で逃げ出した。

「嫌だあつ！ 海は嫌だあつ！」

「逃がさないわ！ おじいさん！」

「合点承知じゃ！」

何処からともなく現れたジジイが手にしていたスイッチを押した。すると天井が開き、中から荒縄で括りつけられた丸太が斜め45度の角度から落ちてきた。

タイミングを合わせろ！ 1・2・3！

「どりゃあ〜っ！」

丸太を跳び箱の要領で飛び越え、一回転して着地した。そしてまた逃亡を続ける。

「まだまだじゃあつ！」

今度は四方八方から竹槍とモーニングスターが飛んできたが

「甘いわあつ！」

「なんとっ！？」

竹槍は一つ残らずハリセンで叩き落とし、モーニングスターはすべて避きつてみせた。

「絶・好・調　　っ！」

行くぜ！ 自由への逃走劇！ 聞け！ この魂の叫びを！

「海になんて行ってたまるか　　っ！」

ひたすら走り、トラップゾーンを突破した。

オレの部屋はトラップが仕掛けられている可能性が高い！
なら今この家で一番安全な場所は　　！

「ここだあああっ！」

ジジイの部屋の襖を開けて、窓までの距離を一瞬で目測する。

出口まで約20歩！　いけるっ！

一気に部屋を駆け抜け窓に手をかけ勢いよく開いた。
すると

バサア

「うおおおっ！？　なんじゃこりやああああっ！」

天井から網が落ちてきて体に絡まった。必死に抜け出そうと試みる
がもがけばもがくほど、網は体に絡まっていった。

「兄さん、惜しかったね」

「静馬！？　お前裏切ったのか！？」

「ごめんね。優子さんに頼まれたんだ」

「どうじゃ、ヒロ？　ワシと静馬の夢のタッグじゃ！」

「お前ら……！　覚えてろ　　ッ！」

.....

「それにしてもすごかったね。さっきのトラップも、それを避ける
烏丸君も」

「……壮絶だった」

「い、いつもこんな事やってるんですか？」

「ヒロ、お前も大変なんだな……」

「そう思うならこの縄解いてくれ！ オレはどここの下手人だ！？
つていうかお前からまた結託していやがったな！？」

チクショウ！ 油断していた！ そうだよ！ 明久、雄二がつるん
で悪だくみしている時つて大抵オレが酷い目に遭うんだつた！

「いや、今回はお前を海に連れて行こうと提案したのは」

「僕と」

「アタシよ」

「明久！ 優子！ お前からオレに何か恨みでもあるのか！？」

「だつてヒロを連れて行かないと姉さんが不機嫌になるし」

「これを機に金槌を克服しましょう？」

「絶つつつつつ対！ イ・ヤ・だ！ 冗談じゃねえ！ 海はプー
ルと違つて足が付かなくところがあるんだぞ！？ 深海は光も空気
も届かない宇宙と同じような空間なんだぞ！？ そんな場所に行く
なんて正気の沙汰じゃねえ！」

「いや、深海までは行かないのじゃが……」

「落ち着け。お前思考がとんでもない所にぶつ飛んでるぞ？」

「と・に・か・く！ お断りだ！ 第一、何も準備していないし！」

「あ、準備なら僕がしておいたよ」

そう言つて静馬はオレの目の前にオレが愛用しているスポーツバツ
クを置いた。

静馬はいい子だなあ……つて違う！ そうじゃない！ 別の言い訳
を考えなくてはい！

「えっと……、頭の傷の具合が良くないし！」

「そうだったんだ。ヒロ、頭が悪かったんだね？」

「セイツ！」

「痛あつ！ 蹴ったね！ 今僕のお尻を蹴っ飛ばしたね！？」

「やかましい！ 気が立つてるのにアホな事を言うからだ！」

「ヒロ、嘘はダメよ。退院するとき、誰がアンタに付き添ったのだったかしら？」

「ぐっ！ ああ！ アレだ！ その……バイト！ 今日、明日とシフトを入れてるんだ！」

「シフト表には今日から3日間休みと書いてあるぞい」

「ジジイイイイツ！ 余計なこと言うなよ！」

「じゃあ問題ないわね？」

「えっと……！ あの……！ その……！」

考える考える考える考える考える考える考える考える

何か！ 必ず何か断る口実があるはずだ！

「皆の衆、少し落ち着くのじゃ。そう無理強いするものでもあるまい」

「そつだ！ 秀吉の言う通り！ 無理強いは良くない！」

「ときにヒロよ」

「ん？ なんだ？」

「海へ行けば姉上の水着姿が見放題じゃぞ？」

「神はオレを試しているのか!？」

優子の水着姿はぜひとも拝みたい！ しかしそのためには海へと行かなくてはならない！

なんてハードルの高い試練なんだ！

「……………ヒロのスケベ」

「そう言ったら烏丸君が可哀そうだよ。あれは寧ろ健全な反応だと僕は思うよ。ね？ さっきからボク達を隠し撮りしようとしているムッツリーニ君？」

「……………気のせい」

はっ！ 危ねえ、危ねえ……………！ 危つく流されてしまうところだった。

「やるな、秀吉……………！ オレの鋼より硬い決意をこつても簡単に揺るがすとは……………！」

「蒟蒻より柔らかい決意の間違いではないかのう……………？」

「しかし！ オレは行かない！ 絶対に、だ！」

もう、こうなりや意地だ！ 絶対に行くものか！

「そういえばさ、ヒロ」

「今度は何だよ？」

「姉さんが 水着を新調したらしいよ？」

「あれ？ 烏丸がいない！？」

「縄もいつの間にか切られてます！」

「どこに行ったんだ、あいつ！？」

「……………そこ」

「……………え！？……………」

「さあ、海に行くぞ！ 準備はいいか、野郎ども！」

「ヒ、ヒロ……………！ いつの間に縄を……………！？」

「驚いたか、優子！？ これがオレの100の特技の1つ！ 【縄

抜け】だ！」

「じゃあ、いつの間にそんな所に移動したの？」

「人間死ぬ気になれば何でも出来る！ さあ、行くぞ！ 遅れるな

！海がオレ達を呼んでいる！　って優子？　何でオレに迫ってくるのかな？」

「アンタ、アタシの水着姿より吉井君のお姉さんの水着姿の興味があるのかしら？」

「まあ、待て優子。まず落ち着け。肉体言語で語り合つのは確かに必要だと思う。夕焼けの砂浜で拳で語り合つた漢がお互いを認め合うように。しかし今はそれは必要ないと思うんだ。つまり何が言いたいのかというと、暴力は良くな　あ、ちよつと待て！　その関節はそつちに曲がらな　っ！　ぎやあああああああああああああああつ！」

「なんで死ぬ気になる理由がアタシの水着姿じゃなくて吉井君のお姉さんの水着姿なのよ……？　アンタそんなに年上がいいの？」

「ちよつ！　待て待て待て！　それ以上は本気で拙いって　ノオオオオオオオツ！」

.....

優子SIDE

吉井君の話によると車の定員が多すぎる為、ヒロはバイクで後ろから付いて行くことになった。地図は吉井君のお姉さんが持ってきてくれるらしい。

「痛てて……。酷い目に遭つた……」

「いつもの事ではないか」

「まあ、そつなただけどさ……」

「アンタが吉井君のお姉さんの事ばかり気にするからよ」

「……反省します」

「……車が来た」

「んむ？ そのようじゃな」

「あら……？ すみません。お待たせしてしまったようですね」

「いや、気にしないでくれ。俺達が勝手に早く集まっただけなんだ」

「うむ。つい気が逸ってしまつての」

「……………楽しみ」

「玲さん、今日はお招きいただきありがとうございます」

「うちもこの旅行を楽しみにしてました」

「そう言っていただけだと嬉しいです」

吉井君のお姉さん……………。ヒロが好きそうな凄い美人だ…………。
しかも…………。凄い胸…………。

「お世話かけます、玲さん」

「ヒロ君、お久しぶりです。アキくんから入院したと聞きましたが、大丈夫でしたか？」

「ええ。そんなに酷い怪我でもありませんでしたから。ただ頭部を強打していたので念の為に…って事らしいです」

吉井君のお姉さんはヒロの前髪をたくし上げて顔を覗き込んだ。

「わっ！ あ、玲さん何を…………？」

「ああ…………。傷が残っていますね。痛かつたでしょう？」
「……………」

そう言つて吉井君のお姉さんはヒロの頭を撫でた。

ヒロの顔が赤い…………。確かにヒロはあの手のタイプの女の人に弱い…………。

チクリと胸の奥が鈍く痛んだ。

「そ、それより玲さん！ 後ろの3人の紹介を…………」

「そうですね。失礼しました」
「……はじめまして。坂本雄二の妻の翔子「おい、ちょっと待って翔子！何を言ってる（ブスリ ビクンビクン）」……翔子です」
「こんにちは、吉井君のお姉さん。ボクは工藤愛子って言います」
「はじめまして、翔子さんと愛子さん あら？ 秀吉君が2人？」
「……はじめまして。秀吉の双子の姉の木下優子です」
「はじめまして。私は明久の姉の玲です」

「なんだろう？ なんだかこの人……警戒しなくちゃいけないような気がする……」。

ヒロが懐いてるから悪い人じゃないんだろうけど……。

「さて。ここにいても仕方ありませんので、早速向かう事にしましょう」

「あ、玲さん。目的地までの地図を頂けますか？」

「はい。この道なんです」

「確かにそうですね……。分かりました。このルートで……」

「それでは出発しましょう」

「みんな、適当に乗っちゃってよ」

「ヒロ……」

「どうした？」

「アタシ……アンタのバイクに乗せてもらったらダメ？」

「え？ どうして？」

「えっと……その……あなた1人だと……逃げないか心配で」

「信用ねえなあ、オレ。大丈夫、逃げないよ。だからオレの見張りにつく必要なんてないって」

「けど……」

アタシが心配してるのはそうじゃなくて！

そうじゃなくて……！

「それに真夏のバイクは暑いぞ？ 熱中症になったら大変だから玲さんに乗せてつてもらえよ」

「……うん。わかった」

「……しよげるなよ。向こう着いたら2人になれる時間なんて沢山あるだろ？」

「……うん！」

うん、少し元気出た！ さあ、行こう！

.....

ヒロSIDE

バイクを走らせながら、玲さんが運転する車の後ろについて回る。

それにしても暑いな……。着ているライダーズジャケットの下は汗でベタベタだ。

暑さに強いオレじゃなければ確実に体調を崩していただろう。

なんだか優子、元気が無かったな……。どうしたんだろう……？

心配だ……。

後で玲さんに相談してみるか……？ いや、こういう事は繊細な問題だからオレが下手に動いて引っかけ回すのは拙い。もし優子がオレの助けを必要としているなら自分から言ってくるはずだ。それまで近くにいて、支えるのがオレの役目だ。優子はオレの一番大切な女の子だ。

優子がオレにしてくれた様に優子が悩んでいるなら力になりたい。

この役目は誰にも渡す気はない。
信号待ちをしながら考えを巡らせる

思考が一先ず収束し、前を見ると中型車が左右に微妙に揺れていた。窓を見れば明久が紺色の物体（あれは水着か？）を持ってなにやら騒いでいる。

「楽しそうだな……」

明久達はオレに気が付いたようで、後ろに向って手を振ってきた。軽く笑い、ヘルメットのバイザーを上げて手を振り返す。

行くときは嫌がったが、この旅行についてきて良かったと思う。皆楽しそうだとオレも楽しい気分になる。

「本当にこの旅行は楽しくなりそうだ」

外伝 第11話 遊びに行こう！ 鮮血に染まる砂浜編（前書き）

キャラが壊れました！

ごめんなさい！（ジャンピング土下座）

特に今回ヒロが変態要素を爆発させます。

読む前に頭痛薬の準備をしておくことをお勧めします。

外伝 第11話 遊びに行こう！ 鮮血に染まる砂浜編

移動時間約3時間。辿り着いたペンションは緑に包まれ、潮の香りが届くような好立地だった。青い空、青い海、そしてオレの青い顔……。

「わあ……。眺めもいいですね」

「凄いわね。風通しもいいし」

「……絶好のロケーション」

「晴れてよかったよね」

女性陣のテンションはウナギ登りだが、オレのテンションは駄々下がりがりだ。

流石に海を目の前にすると決意も鈍る。

「ヒロ、顔が青いわよ……?」

「まあ……。ちよつと、な……」

「ヒロ君、体調が悪いならペンションで休んでいても」

「大丈夫ですよ、玲さん。ご心配お掛けしてすみません。けどこの漢・烏丸大貴！ 玲さんの水着姿を拝むまではくたばりませよ！ ちよつと！ 優子！ やめつ ギャアアアアッ！」

「本当に仲がよろしいですね」

「これが本当にそう見えるんだったら姉さんは眼科に行くべきだと思っ……」

「あ、姉上！ それ以上やるとヒロが死んでしまうのじゃ！」

「止めないで、秀吉！ 今日という今日はこのバカの浮気癖を徹底的に矯正してやるんだから！」

「ちよつ！ あれは冗談だつて！ 気を遣わせないようにするための冗談だから！ オレは優子一筋 ぎゃあああああああああつ！」

5分後……。やっと関節技から解放されたオレは痛む体を引きずつて水着に着替えに行くのだった……。

.....

「で、オレ達は待たされるわけだな」

「仕方ないよ。向こうは水着の準備に時間がかかるんだから」

「………こっちは機材の準備に時間がかかるから助かる」

「ムツツリーニ、捕まらない程度にしておけよ」

「………そんなへまはしない」

「そついえば今日はフル装備じゃないんだね」

「ああ。また優子に関節極められたくないからな」

今日のオレの格好はハーフの水着にノースリーブのジャケットを羽織っているだけのシンプルなものだ。

海の中に入るつもりはないので、浮き輪は持っていない。

それにしても秀吉遅いなあ……。

「……む。明久達はあそこじゃな。おい、お主ら ！」

「あ、あなたつ！ 何をしてるんですかっ!？」

「んむ？ なんじゃ監視員の方じゃな。どうしたのじゃ？ そんなに血相を変えて」

「どうしたのじゃ、じゃありません！ どうしてあなた、上を着ていないんですか!？」

「????? どうしてと言われても普通は男物の水着は上を着ないも

のじゃと』

『女の子が男物の水着を着ること自体おかしいのです！ とにかくこっちに来なさい！』

『ま、待つのがじゃ！ ワシは男じゃからこれで良いと』

『私の眼の黒いうちは、この海水浴場でそんな過激な格好は許しませんからね！ ここは子供たちも大勢いるし、怖いお兄さんたちも沢山いるんですから！』

『だから違うのじゃ！ ワシの話を』

『上を着ない限り絶対に海水浴場には入れませんからね！ 途中で脱いでもダメですよ！ 双眼鏡で監視しますからね！』

『だから待つのがじゃと言うておるのに』！

原因判明……。なんと言うか……。ドンマイ、秀吉……。

そのうちいい事あるさ……。もし優子に関節技をかけられそうになったら、全力で止めてやるからな……。

「それにしても玲さん様々だな」

「車の事？」

「それもあるが、不純異性交遊の全面禁止って奴だ。あれのお陰で翔子が大人しくなってくれて助かる」

「ああ、それね。僕以外には適用されないと思うんだけど？」

「いや。全員にとって事においておいてくれ。その方が都合がいい」

「え〜？ どうしようかな〜？」

「別にバラしてもいいが、その時はお前にも相応の報いを受けて貰う」

「報い？」

「島田とのキスをバラす」

「天地神明に誓って黙っておくよ」

「って事はオレも優子と色々することが出来ないのか？」

「そういう事になる。悪いが協力してくれ。この埋め合わせはいつ

か必ず！」

「つつたく、仕方ねえなあ……」

「ヒロ、色々つて？」

「……色々、だよ」

「……………ッ！（ポタポタポタ）」

「そういえば明久は頬にキスされたこともあったな」

「うえっ!？」

なんだ？ 何でこいつ、こんなに慌ててるんだ？ 葉月ちゃんが明久の頬にキスしたのはFクラスの奴なら誰でも知ってることじゃないか。

「ち、違うんだよ！ 屋上でのあれは姫路さんなりの挨拶だったはず！ あれ以来姫路さんの態度は特に変わらないし、本当の事を聞こうと思っても中々切り出せないし！」

「は？ 姫路？ 島田の所にチビツ子の話だったんだが？」

「……………明久、屋上つて？」

「……………」

自爆した？ 明久の話を纏めると、コイツ屋上で姫路にキスしてもらったのか？

「おい明久。お前何か面白いネタを隠してないか？」

「いやいやいやいや！ そんな事はないよ。ちよっとそういう夢を見たっただけで」

「そうか。それなら後で姫路に聞いてもいいか？」

「おだべば」

「明久がついに日本語まで不自由に!？」

「何を言っているのか分からないが『やめてください』って言いいたいのはわかるぞ」

「話が早くて助かるよ……」

明久は何か考え込むような顔をした後、『初恋まだ続いてるって言ったもんなあ』と呟いた。その表情は何処か諦めを含んだものだった。

何か……悩んでいるな？

「ん？ なんだって？」

「あ、いや。姫路さんの初恋の相手は誰だったかって思って」

「お前じゃないのか？」

「そうだったら嬉しいんだけどね。」

「……違うの？」

「うーん。確か小学校の頃姫路さん本人が『違う』って言ってたよ
うな気が」

なるほど。大体見えてきた。

要するに“姫路の初恋がまだ続いている”って事は姫路の初恋の相手は明久って事で間違いない。

明久は明久で姫路の初恋の相手は“自分ではない”という先入観にとらわれて姫路の気持ちに気が付いてない。と、いうより“その可能性を否定している”といった方が正しいのかもしれない。

「明久、これは独り言なんだけど」

「うん？」

「曖昧なものに囚われ過ぎると、目の前にある大事な事を見逃してしまう事がある」

「……ヒロが何を言いたいのがよく分からないよ」

「要するに、曖昧な記憶に囚われて難しく考えすぎるなって事だ」

「まあ、そうだな。昔の事の記憶なんて曖昧なものだしな」

「……それより今大事なのはさっきのキスの話」

「その通りだ」

「グッ……！」

「おいおい、お前らあまり人のプライベートに突っ込みすぎるなよ。悪趣味だぞ？」

「……………ッ！（ササッ）」

「どうした、ムツツリーニ？」

ムツツリーニが眼つきを鋭くさせて、カメラを構えた。
どうやら女性陣が来たようだ。

「お待たせ、準備に手間取っちゃって」

「ほらほら、みんな来たみたいだよ。やっぱり海といえば水着の女の子だよね」

「明久君の〜ス〜ケ〜べ〜」

「ヒロにだけは言われたくないよ！」

「チッ！ 誤魔化されたか」

「……………それより撮影を」

工藤が元気よく走ってきた。着ていたのはジーンズを短くカットしたホットパンツと上は普通の水着だったが、日焼け痕が……クツキリとうつっており、目のやり場に困る……。
麦藁帽子も似合っていてポイントが高い……。

「流石は水泳部だな。水着も麦藁帽子もよく似合っているぞ」

「そうかな？ ありがとう、坂本君。……………ん？」

「……………。（ササッ）」

「あははっ。ムツツリーニ君ってば。ボクの水着を撮りたいんだったら、堂々と撮ればいいのに。いつも言ってるけど、ボクは怒ったりしないから。ね？」

何故に？ 普通の女の子は盗撮されるのを嫌がるだろう？

工藤だからなのか？ それとも相手がムツツリー二だからなのか…
…？

「……………自惚れるな、工藤愛子」

「え？ どういう事、ムツツリー二君？」

「……………貴様の水着姿に興味など微塵も（ダバダバダバ）こ
れは熱射病の所為」

「28秒か…………。頑張ったじゃないか、ムツツリー二」

「凄いや、ムツツリー二！ 鼻血我慢の新記録だよ！」

ムツツリー二の鼻から血が大量に吹き出し、地に伏した…………。それを
見て雄二と明久はそれぞれ感嘆の声を上げる。

「吉井君に坂本君。そんな悠長な事を言っていないで助けてあげよう
よ」

「ムツツリー二、とりあえず日影で横になれ。鼻を押さえておけよ。
明久、悪いけどクラーボックスから氷を取ってくれ」

流石に放置は拙いので、鼻血の応急処置を行う。

けど興奮して噴き出した鼻血の処置ってこれで良かったんだろうか？

「大丈夫？ ムツツリー二君」

「あ、待て工藤！ それ以上近付くと　！」

「……………日差しが強くなってきた（ブシヤアア）」

「うぎゃああああああつ！ 眼がっ！ 眼があああああつ！」

工藤が近づいてきて興奮したムツツリー二の鼻血はさらに勢いを増して噴き出した。

噴水のように噴出した鼻血はオレの目にモロに入り、痛みのみならず

のた打ち回っている。

「え？ ちょっ！ ムツツリー二君！？ ムツツリー二君ってば！
？ 大丈夫なの！？ 鼻血が噴水みたいになってるけど！？」

「…………… 最近の熱射病は夕チが悪い（ブシャアア）」
「もうコレ熱射病とかじゃなくて、新型のウイルスか何かじゃないかな？」

「気にするな工藤。これはただ単にムツツリー二が工藤の水着姿に興奮してるだけなんだから」

「…………… 烏丸君、回復が早いね」

「…………… それが取り柄だからな」

「…………… ヒロ、出鱈目を言うな」

「照れるなって」

「…………… 照れてなど（ブシャアア）」

「…………… 良かった。ムツツリー二君、ボクの水着姿にも興味があったんだ……………」

「？ 何か言ったか、工藤？」

「う、ううん！ 何でもないよ！」

「…………… ムツツリー二」

「…………… 明久……………」

「遺言は？」

「何を言ってるの、吉井君！？ 縁起でもないよ！」

「…………… 来世は、鳥に生まれますように」

「ムツツリー二君もそこで乗らないの！ ちゃんと助かるから！」

「工藤がツツコミをしてくれるからオレが楽だな」

「烏丸君！？ ツツコミ放棄しないでよ！」

「いや、だってまともに相手してたら疲れるし……………」

「…………… そして空から女子更衣室を思う存分覗けますように」

「生まれ変わってもやる事はそれなの！？ もうちょっと現世の死因から何か学ぼうよ！」

「そつだぞ、ムツツリーニ。鳥になったら覗き放題になる代わりに本番ができなくなるんだぞ?」

「……………本番!? (ブシュウウウウウウウ)」

「か、烏丸君! 余計な事を言わないの! ホントにムツツリーニ君が死んじゃうから!」

「悪い。ついノリで……………」

「……………お待たせ」

「お待たせしました」

工藤より少し遅れて霧島と姫路が出てきた。

前と同じ水着だったが、やっぱりいいなあ……………。

「……………愛子、あまり土屋を苛めないように」

「ボク何もしてないんだけどなあ……………」

「違いますよ、翔子ちゃん。土屋君は工藤さんの水着姿に興奮しちやっただんですよ」

「……………そんな事実の確認されてない」

「鼻血を吹きだしながら否定しても説得力ゼロだぞ?」

「……………熱射病のせい」

「ここは日影だ、ムツツリーニ……………」

「……………興奮?」

「はい、土屋君も男の子ですから」

「……………そう」

霧島は少し何かを考え込むような仕草を見せた後、雄二に歩み寄って行った。

「……………雄二」

「んあ? 何だ翔子?」

「……………えい (ブスリ)」

「ふごあっ!? (ブシャアアツ)」

霧島が雄二の鼻に指を突っ込み、雄二の鼻から間欠泉の様な勢いで鼻血が吹きあがった。

周りで見ていた他の客はその様子に青い顔をしている。

「……これで、いい」

「いいわけあるかあっ! いきなり何をしやがる!? (ブシャアアツ!)」

「……雄二は私の水着姿に興奮しなくちゃいけないから」

それで実力行使!? いろんな意味で凄いな……。

オレも実力行使される前に優子の水着姿を誉めちぎっておこう……。

「霧島さんも姫路さんも綺麗だからなあ。スタイルもいいし」

「え……っ!? あ、明久君!? き、綺麗だなんて、恥ずかしいです……」

「んあ!? あ、ごめん! つい口に出ちゃってた」

明久の口説き文句が炸裂! 姫路は顔を真っ赤にしている。なんて

奴だ、このエロ野郎!

『ふん、ウチはどうせスタイルが悪いですよーだ!』

島田が明久の後ろで不機嫌そうに眼を釣り上げていた。競泳用の水着がすごく似合っている。

「って、あれ? 美波水着変えたの? この前とはずいぶん違ってみただけど」

「こ、これはその、今日はたくさん泳ぐ気だったからで! ほら、

最近ジュースやアイスの食べ過ぎで体重が増えちゃったから……
！」

「え？ でもさっき夏バテで胸から痩せたって……？」

「胸は痩せたけど、お腹が出ちゃったのよ！ 　　ってウチのバカ
アツ！ そんなところばっか強調してどうするのよーっ！」

島田は顔を覆って自分の不用意な発言を嘆いている……。

「そ、そうなの？ 僕にはそんな風には見えないけど？」

「いいのよアキ……。どうせウチは古き良き日本人体型なんだから
……。ドイツで育ったはずなのに……」

「島田、そんなに気にするなよ。お前にはお前の魅力があるんだか
らさ」

「放って置いて……。烏丸だつて胸が大きい方が好きな癖に……」

「確かにそうだな。けど、最近オレも考えを少し改めたんだ……」

「大きくても、小さくても胸は胸！ それは男にとって至高の存在
だ！ 前に優子の胸を（不可抗力で）揉んだときにつくづくそう思
った！ 小さいとは其れ即ち、成長の余地を残しているという事だ
！ そして何より小さくてもその弾力は失われる事はないところに
素晴らしさがある！ 故に！ オレはおっぱいの全てを肯定する！
ジークおっぱい！ オールハイルおっぱい！ あえて言わせても
らおう！ オレは大きいおっぱいは勿論、小さいおっぱいも大好き
だーっ！」

オレの演説で海水浴に来ていた男性客から大きな拍手が湧き起る。
そしてすっかり舞い上がっていたオレは後ろから迫ってくる脅威に
まったく気が付いていなかった。

「ありがとう！ ありがとう諸君！ もう一度言おう！ オレはお

っぱいが大好き　！」

ガスッ！（後頭部に優子のハイキックが炸裂する音）

バタッ！（オレが砂浜に倒れる音）

ズルズル（倒れたオレの足首を掴み引きずる音）

「アンタはホントに何を言ってるのかしら……？　恥ずかしいからやめてくれないかしら？　本当に……！」

「ゆ、優子？　いつからいたんだ？」

「『大きくても、小さくても胸は胸！』の辺りからよ。この変態……！　何をバカな事を口走っていたのかしら？」

「それは最初からじゃねえか！？　まあ、待て優子。話し合おう。」

オレは島田を元気づけようとだな　」

「肝心の美波が引きまくってるわよ？」

「え！？　嘘！？」

「さて……。スーパーお仕置きタイムよ……」

「あははは……」

優子が指をポキポキと鳴らしながら、ゆっくりと近づいてくる……。オレの真上に死兆星が見える……。

死因はきつと溺死ではなく、絞殺だろう……。

なぜなら……今現在……首を……絞められているんだから……。

嗚呼……、空が本当に青いなあ……。

.....

「痛ててて……。病み上がりなんだから手加減してくれよ……」

「アンタがバカなことばかり言うからでしょ！　セクハラよ！　セクハラ！　第一アタシの胸っていつ揉んだのよ！？」

「いつって霧島の家泊まりに行つたときに」

「え？ …………… ツ！ あ、あの時！？」

「おい、優子！？ 大丈夫か！？ 顔が真っ赤を通り越して、赤紫になつてるぞ！？」

「だだだだだだ大丈夫……！」

「全然大丈夫そうに見えないから！ テンパリ過ぎだ！ 少し落ち着け！ はい、深呼吸！」

「スー、スー、スー！」

「吸ってばっかじゃねえか！？ 息を吐けよ！」

「だだ大丈夫。もう落ち着いたから……！」

「そ、そうか……！」

やっと落ち着いて頬を少し赤くした優子は凄く可愛かった……。

もう理性も何もかもかなぐり捨てて襲いかかってしまいたいくらいに……。

どうやら優子はそういった事に免疫が無いようだ。

うん。恥じらいは重要だよな。

「遅くなって申し訳ありません」

「あ、玲さん……！」

玲さんが少し遅れてやってきた。

「どうでしょうか、ヒロ君？」

「いや、どうもこうも……！」

は、反則だ……！ あの水着姿は反則だ……！

あなたの水着姿は飛び道具だよ、玲さん！

ゲシッ！

「つて痛あつ！ 優子、なんで蹴るんだよ!？」

「別に……。何よ、鼻の下伸ばしちゃって……」

「いや、だってあれは反則だろ!？」

「確かにそうかも知れないけど……。……。……。アンタはアタシの彼氏なんだから……。ちゃんとアタシを見てよ……」

「？ 悪い。後半よく聞こえなかったから、もう一回頼む」

「な、なんでもない!」

「そうか。ところで」

「何よ?」

「水着新しくしたんだな？ すごく似合ってる」

「え？ あ、ありがとう……」

「うん。こつ……。微妙に水着が食い込んでるところとかマニアックでいいよな……」

ゴキッ!

「だああああああああああああああつ！ ちよつ！ 優子、これはシャレにならん！ メチャクチャ痛い!」

「うるさい、このバカ！ またセクハラ発言!？ 何考えてるのよ

!？ まさか他の人にもそんな事言ってるんじゃない?？」

「ふつ……。安心しろよ優子」

「な、何をよ?」

「オレがセクハラするのはお前だけだ」

「死ねええええええつ!」

「待て待て待て！ それ以上は拙い！ ホントに拙いから！ ぎざあああああつ!」

「……。お2人とも本当に仲がいいんですね」

玲さんの眩きの直後、ゴキキュツという音が砂浜に響き渡った……。

.....

「スイカとバットを用意してあるとは、明久にしては気が利くじゃねえか」

「まあね。海とえばスイカ割りだし、ヒロは泳げないから砂浜で遊べる遊びの方がいいかと思ってね。スイカもバッチリ冷やしてあるから、きつと美味しいはずだよ」

「気遣い感謝するよ、明久」

「.....喉が渴いていたから楽しみ」

近くに釣りを出来るポイントがあり、今日の晩飯分と明日の朝食分の魚を釣っていた。その後、明久からお呼びがかかり、ペンションからスイカとバットを持って砂浜に戻っていた。

「そういや、そろそろ昼時か。スイカの他に昼飯を調達しておく必要があるな」

「え？ なんで？ 塩水だったら目の前にたくさんあるじゃない」

「明久……、お前は塩分過剰摂取で死ぬつもりか？」

「平然とそんな答えが返ってくるお前はある意味凄いと思うぞ」

「.....よく生きていると思う」

「とりあえず.....後で玲さんを交えて、ゆっくりと話そうか.....？」

「.....ごめんなさいっ！」

「火を起こせるなら海で貝を獲っても面白そうだな」

「魚も結構釣れたし、それも悪くないよな」

「あとは海の定番の焼きそばやカレーやイカ焼き辺りもいいが
ん？ どうした、ムツツリーニ？」

「.....あれ」

『かわいい子たちばかりだね。何？ どこから来たの？』

『あ、いえ……。私たちは……。その……』

『向こうにダチもいるからさ、向こうで一緒に遊ばない？ そっちのきれいなお姉さんも一緒に、さ』

「ナンパだな。あの面子なら仕方のない事だが、面倒な事になったな」

「……………始末する？」

「始末しよう」

「ああ。そうだな。やっちまうか。その方が手っ取り早いだよ」

残念だ……。こんな平和な砂浜に赤い華が咲く事になるなんて……。

「いや、そんな事しなくても大丈夫だよ」

「あん？ お前優子があんな連中の毒牙にかかるのを黙って見てるつてののか？」

「違うよ。確かに姫路さん達だけなら心配だけど、姉さんが付いてるから上手くあしらうはずだよ」

「玲さんが？」

「うん。昔から姉さんは中身を知らない人には異様にモテるからね。あしらい方もよく知ってるはずだよ。中身を知った人はみんな裸足で逃げ出しちゃうけどね」

明久はそう言うつと肩を竦めて軽く笑った。

「見る目ねえなあ、そいつらは。あんな魅力的な人はそうそういないつてのに」

「え？？ ヒロは姉さんみたいな人が好みなの？」

「ああ。ストライクゾーンど真ん中だ。優子に会う前だったら間違

いなく玲さんに惚れてただろうな」

「そ、そうなんだ……。けど、あんな性格だよ？」

「そこがいいんじゃないか。こう……大人なのにごどこか抜けてるところとか、出来ないことは出来るまで挑戦し続けるスタンスとか、優しくて母性的な性格とか……。それを見たら多少の奇行はあつて、ないようなものだろう？」

「そんなものかなあ……？」

『申し訳ありませんが、御断りします』

『え？ なに？ 彼氏でもいんの？』

『はい。います。とつても魅力的な人が』

玲さんはナンパ男の質問に即答した。

いるのか……。まあ、あれだけの美人だったら当然と言えば、当然か……。

『この子です』

『あ、玲さん！？ これヒロの写真じゃないですか！？』

え？ オレの写真？ 何で持ってるんだ？

しかもいつの間にオレは玲さんの彼氏になったんだ？

……。ああ、そうか。ナンパ男を追い払うための口実か……。納得……。

『なんだ？ 随分地味な奴だな。明らかに年下だし……。こんな奴よりオレの方がいいに決まってるって！』

ほっとけ、バカ野郎！ オレが地味なのはオレ自身が一番よく分かっただけだ！

『なっ　！　ヒロをバカに　！』

『見た目が地味だといって侮ってはいけません。私と彼の関係は凄いですよ』

『へ？　すごいって、ナニが？』

『あまり大きな声ではいえませんが、実は　』

『へ、変態だ！』

え？　ちよっ！？　何言った？　何を言っただんですか、玲さん！？

『そして私の弟も交えて　して　します』

『そ、それは日本の法律で許されるのか……！？』

一気に顔から血の気が引いていく……。

いや、ナンパ男じゃなくて、オレの顔から血の気が引いていつてる……。

明久と顔を見合わせると、明久も顔を真っ青にしながら、涙目で首を横に振っていた。

オレもそれを見て、首振り人形のように首を何度も縦に振った。

『あ、玲さん！？　変な事を言わないでください！　ヒロはそんな事しません！』

ナイスフォローだ、優子！

『驚くのはまだ早いですよ。さらに彼と弟の要求次第ではこの子も混ざって　を使った　も……』

『~~~~~！！？！？』

『う、うそだろ……？　こんな可愛い子まで変態の餌食に……？

これ以上俺の中の常識を壊さないでくれ……！』

優子は顔を赤紫にして口をパクパクさせている。

明久とアイコンタクトを交わし、同時に頷く。

そしてダツシユで玲さんの元へと向かった。

これ以上の暴拳を止める為にもオレ達はやらなくてはならない！

「ちよつと待った　　っ！」

「姉さん！　何言ってるのさ！？」

「優子、しつかりしろ！　戻って来い！」

「『姉さん』？　それに写真の奴！？　ってことはこいつらが……
！」

「えつと何を言われたのか知りませんが、それは誤解で　　！」

「出たあ　　っ！　鬼畜変態コンビだ　　っ！　身内も性別も気

にしないケダモノの王と毎晩の変態プレイをこよなく愛する悪魔の
化身だ　　っ！」

「コラ待てえっ！　誤解したまま逃げるなあっ！　お願い待ってえ
っ！」

「まったく、ああいうのは困りものですね」

「僕達にとっては姉さんが一番の困りものだよ……」

「ま、毎晩【検閲削除】や【検閲削除】をヒ口と……。え、えへへ
へへ……」

「お前ホントに大丈夫か！？　熱っ！　メツチャ熱っ！　これ人間の
体温じゃねえぞ！？　　島田！　そのクラーボックスから氷を
取ってくれ！」

「え？　あ、うん！」

島田から氷を受とり、優子の額に当てた。すると氷はどんどん溶け
ていき、あつという間に水を通り越して水蒸気になってしまった……。

うわっ！　鼻血！　鼻血が垂れてきている！

急いでカバンの中からティッシュを取り出し、抱き抱えながら鼻を

押さえる。

「えへへへへへ……」

どつやら優子は妄想の世界にトリップ中の様だ。

「優子……、カムバア

ツクー！」

その後優子が復活するまで1時間も要してしまっただ……。

.....

優子も正常に戻りオレ達は楽しいスイカ割りの真っ最中。今は明久の番で、次は俺の番だ。

「明久君、もつと右ですよ」

「違っわ、アキ。実は左よ」

「吉井君」、もつと前だよー」

「アキくん、そこから左前方3・2度、直線距離4・7メートルの距離です」

皆が皆全く違っ方向を言っているから、明久の頭の上にクエスチヨンマークが浮かんでいる。さてオレも

「明久、スイカの位置は右に3歩、前に6歩だ」

「違っぞ、明久。スイカは左に5歩、前に2歩の位置だ」

「秀吉、オレの声真似をするな」

「何言ってるんだ、秀吉？ 勝手にオレの声を使うな」

「え？ え？ え？ どっちなさー！？」

「さて、どっちでしょう？」

「からかって遊んでるなあ!？」

「当然だ!」

「吉井君、ヒロの方が嘘を言ってるわよ」

「どっちがヒロでどっちが秀吉なのか、わからないんだって!」

明久の言葉を聞き全員から笑い声上がる。

そういえば珍しく雄二が何も言っていないな?

いつもなら明久を率先してからかうはずなのに……。

『……雄二、この水着どう?』

『どう、と言われてもな……。前にも見てるし、別になんとも』

『……それはきつと、きちんと見ていないから』

『っておい!? そんな恰好でくつついてくるな! 色々と当たっ

てるだろう!?』

『……遠慮しなくてもいい』

なるほど。夫婦の時間を満喫中か。

本心では嬉しいくせに本当に素直じゃない奴だ。

「ん? ちよつと待て、明久! そっちにスイカない! 危な

い、雄二!」

「くたばれええええつ!」

「うおおお!? 危ねえ つ!」

明久が振り下ろしたバットをギリギリで回避した。

振り下ろされたバットは砂浜にめり込んでいた……。

「チツ……。ああ、ごめん雄二。スイカと間違えちゃったよ」

明久は目隠しを外し、ニコヤカに謝った。

「明久よ……。今雄二の声がした途端、迷わずダツシユしておったように見えたのじゃが……？」

「あははは……。何言ってるのさ、秀吉。ひどい言いがかりだよ」「殺る気満々に見えたのもオレの気のせいかな？」

「気のせいだよ、ヒ口。美人の霧島さんにくつつかれてるのが妬ましくて殴りかかったわけじゃないからね？」

本音が駄々漏れだあ……。

「……まあ、気にするなよ秀吉、ヒ口。明久はあくまでスイカを探してただけだ。そうだろ、明久？」

「うん。勿論だよ」

「……雄二がいつて言うならそれでいいけどさ……。じゃあ次はオレの番だな」

雄二からバットを受け取りタオルで目隠しをする。

「ヒ口の次は俺がいかせてもらうぞ」

「何言ってるのさ、雄二。次はまた1番手の秀吉からのはずでしょ？」

「次は2週目だからな。俺から始まってもいいじゃねえか」

「いやいやいや。2週目が始まるんだったら今度は僕からでいいじゃないか」

グルグルグル〜と回って準備は出来た！

「あ、あの、明久君に坂本君。折角のスイカが飛び散らせてしまうものなんですから、スイカ割りには烏丸君で終わりという事で……」

「「スイカは割らないから大丈夫」」

「お主ら一体何を割るつもりじゃ？」

「「それは割つてからの楽しみ(だ)！」」

「なんだ？ スイカが飛び散るのが問題なのか、姫路？」

「あ、いえ……その……」

「任せとけ！」

感覚を研ぎ澄ませて気配を探る……。スイカの位置は……。あつた！

ここから約右に5歩、前に3歩つてところか？

そうとわかればオレの動きに迷いはない。

右に1・2・3・4・5歩！ 前に1・2・3歩！

よし、眼の前にあるこれだな！

バットを上段に構えて、一呼吸……。

「ヤアツ！」

氣勢を乗せて一気に振り下ろした。

スパ　ン！

よし、手応えあり！

眼隠しを外すと、眼の前には真つ二つにしたスイカがあった。

斬り口も水平！　よし、文句なしの業の冴えだ！

「わあ！　烏丸君凄い！」

「刃物で切つたみたいになってます！」

「ど、どうしたらバットでそんな芸当ができるのじゃ……？」

「オレの剣の腕なら、これくらいは朝飯前だ」

「アンタ時々本当に常識で測れないことをするわね……」

「お誉めに預かり光栄だよ」

「スイカ割れちゃったね。じゃあ次は雄二の頭をスイカの代わりに
」

「いやいや、お前の頭をスイカ代わりに
」

「明久、雄二……」

「なに？」

「なんだ？」

「これ以上喧嘩を続けるなら　お前らの頭がこの西瓜みたいに真
つ二つになるぞ？」

「ごめん、雄二！　僕が間違ってたよ！」

「俺の方こそ大人げない事をした！　悪かった、明久！」

「うんうん。仲良き事は美しき事かな」

「完全に脅してるじゃない、アンタ……」

まあ、それは気にしない方向で……！

外伝 第11話 遊びに行こう！ 鮮血に染まる砂浜編（後書き）

はい、掟破りのヒロイン弄りです。

優子ファンの皆さん、ごめんなさい！

ヒロはしょっちゅう弄ってますが、優子を弄った事はあまりないと考え、やっちゃんいました。

面白くなっていればいいなあ……。

外伝 第11話 遊びに行こう！ とある大失態編

「ねえ雄二、ヒロ」

「なんだ？」

「女性陣がいなくなってから肩の辺りが軽くなったような気がしない？」

「奇遇だな。オレもそう思っていた」

「妬みの視線が消えたから……だろうな……」

オレ達のグループの女性陣は美人揃いだ。それに比べて男性陣は女性陣に比べたら（オレ以外）若干見劣りする。そのため、降りかかる嫉妬視線もかなりの物だ。

それでもお前ら、たぶんオレよりマシなんだぞ？

明久、ムツツリー二は黙っていれば美少年で通るし、雄二もかなりの男前だ。

秀吉は……まあ、女性として見られてるだろうから除外……。だからこそ“見劣り”はしても釣り合わないなんて事はない。しかしオレはどうだ？

オレの容姿がはつきり言っただけ地味だ。顔に特徴が無い。かといって整っている訳でもない。

オレの容姿について他人に尋ねれば、10人が10人地味だと答えるだろう。

そんな水準以下のオレが女性陣と一緒にいようものなら、当然『場違い』『テメーには勿体ねえ』『分不相応』『何でお前いるの？』という様な視線が突き刺さる。集中砲火だ。

「やっぱり……釣り合っていないんだろうな……」

なんだって烏丸の家の連中は美形揃いなのに、オレだけ地味なんだからなあ……。

姉さんもかなりの美人だったのに……。

「あれ？ ムツツリーニは？」

「さっきカメラのレンズの洗浄をするって言って何処かに行ったぞ」

「どうせまた鼻血で汚しちゃうくせにね……」

「それでも動かずにはいられないのがムツツリーニって男だろ？」

「……確かに」

苦笑しながら肩を竦めた。

「それはそうと……意外に女の人だけで来てるグループも多いんだね」

「そりゃそうだ。友達同士で来ている奴等も多いだろうし」

「ナンパする男連中もいるんだから、ナンパされる女連中もいるだろう？」

「それもそうだね。ナンパなんて漫画や小説の世界だけの話だと思っただよ」

「意外に身近にあってビックリ、か？」

「ははっ、まあね」

「お待たせしました、皆さん」

雑談しているところに女性陣がオレ達の昼飯を携えて帰って来た。

「あ、お帰り。遅かったね。混んできたの？」

「いや、そこまで混んでいた訳ではないのじゃが……」

「？ 何かあったのか？」

「ボク達またナンパされちゃったんだよね」

「え？ また？」

男性陣はスイカを用意してくれたから、昼は女性陣が用意すると、押し切られてしまったが、やっぱり虫除けに付いて行けば良かったかも知れない。

「さつきは特に美波ちゃん、木下君、翔子ちゃん、優子ちゃんが迫られて大変だったんですよ?」

「ホント、ウチああいうの苦手なのに……」

「……私も、苦手」

「ワシは男じゃというのに……」

「なんでアンタあんなに断り慣れてたのよ……? 男のくせに……」

! 男のくせに……!」

「秀吉、お疲れのところ悪いが……ちょっと2人で散歩に行かないか?」

「ヒロよ……。バットを携えて何をしに行くつもりじゃ?」

「お散歩……」

「やめなさい……」

「ふえ、それは大変だったね」

「いつもみたいに腕力で片付けちまえば良かったんじゃないか?」

雄二が女性陣の持ってきた荷物に手を伸ばそうとしたら、工藤に軽く手を叩かれていた。

「こらこら、そんな態度じゃダメだよ。吉井君に坂本君」

「そんな態度つて言われても」

「何がダメなんだ?」

「何がダメなんだ って……。ハア……。2人ともホントに女心が分かってないなあ……」

「いや、だって僕達男だし……」

「そういう意味じゃないだろ……」

まったく何を言ってるんだ、このトンチキは……。

「コラ、アキ！　ウチらが困っていても気にならないっていうの！？」

「明久君、それはちょっと冷たすぎだと思います」

「あ、いや……。そういうわけじゃ……」

姫路と島田はジト目で明久を睨んでいる。相当ご機嫌斜めのご様子だ。

まあ、無理もないと思う。自分が好きな相手に無関心でいられるのは一番きつい……。いくら玲さんが付いていて安心だとしても、だ。

「……雄二」

「ん？」

「雄二はもつと烏丸を見習ってヤキモチを妬いたり、心配するべき」

「いや、俺なりに心配はしているとあだだだっ！　ちよつと待て

！　お前が俺に何を要求しているのか分からねえ！」

「……わかるまで教えてあげる。……身体に」

「ぶぐああっ！」

うん……。近くで見ると壮絶だな、霧島の折檻は……。

「ねえ瑞希。ああいうのって何処にいつても出てくるから困るわよね」

「そうですね。困っちゃいますね」

ウソくせえ……。

そう考えながら姫路と島田のしぐさを注意深く観察する。

「え？ 美波や姫路さんって何処に行ってもナンパされるの？」
「はい。それはもう、いつでも！」

姫路が握り拳を握って語気を強くする。顔は真剣そのものだった。

「そつよ。それはもう、どこでも！」

島田も語気を強くする。やたらと瞬きが多い。

そして何より2人も明久から視線を絶対に外さなかった。

「でもその割にはさつき随分と慣れてない反応に見えたけど？」

「そ、そんなことないです！ いつもの事過ぎて呆れて声が出なかつただけです！」

口調と表情としぐさがチグハグ……。

「はい、ダウト！」

「な、何を言ってるんですか？ 烏丸君」

「姫路、島田。嘘は良くない」

「な、何でウチらが嘘ついてるなんて言えるのよ!？」

「嘘をつく人間って必ずどこかに普段と違うアクションを起こすんだよ。例えば瞬きがやたらと多いとか、手とか口とかの表現する部分を隠すとか、言動と行動がチグハグになるとか、な。……それに女の人は嘘をつくときに疑われないためにも“相手の視線をじっと見つめる”っていわれてるけど、これも当てはまる。そもそもって人間が語気を強めるって時は何か隠している時だ。これらを総合してお前らが嘘を付いていると判断したってなんだ？ 何でみんなして、オレの方を向いてやれやれ……、って感じで首を振ってるんだ？」

「ヒロ君……」

「？ なんですか？」

「あなたモテないでしょう？」

「なあっ!？」

「なんで今まで烏丸がモテなかったのか、わかった気がするわ……」

「え？ え!？ 優子、どういう意味だ!？」

「……バカ」

「うえっ!？」

「と、とにかく! 私たち本当によくナンパされるんです!」

「そ、そうよ! 瑞希の言う通りよ! バカで鈍くて全然モテないアキと烏丸とは違うんだからねっ!」

その言葉に少しカチンときた。

そこまでバカにされて笑って流せるほどオレは大人でも、温厚でもない。

「なんだと!？ バカにするな!」

「そうだよ! 僕達だってその気になればナンパくらい余裕で」

不意に背中が薄ら寒くなった……。

何故だろう? 烏肌が止まらない……。

「明久君? 余裕で、何ですか?」

「アキ? 余裕で、何かしら?」

姫路と島田の反応がハモる……。笑顔なのに額にうつすらと青筋が立っていた……。

「ヒロ? 何かしら? 黙っていた分らないわよ?」

怖い怖い……！ 優子が怖い！ 見る者を皆魅了してしまいそうな笑顔なのに眼が笑ってねえ……！ もしかしなくてもオレ生命の危機！？

「えーっと、余裕で……、その……」

「そうそう、えーっと……」

ヤバイヤバイヤバイ……！ 言い訳が見つからない！

「まさか、できる、とでも言うんですか？ 明久くんが？」

「アキ。何言ってるの？ あんたにナンパなんて出来るわけないじゃない」

「む」

「ヒロ。モテないアンタがナンパなんてしても絶対誰も相手にしてくれないわよ」

「むむ」

「アキくん、ヒロくん。ナンパなんてしても、あなた達がモテないという事実が再確認させられるだけですから、やめておくべきです」
「むむむむ」

そこまで言うか！？ そこまで言うのか！？

オレがモテないのは分かっているが、何でそこまでバカにされなければならぬんだ！

「……雄二も女心が全然分かってない。だからモテない」

「くっ……！ 言ってくれるじゃねえか……！」

霧島に折檻されながらも、雄二が呻いた。

「まったく、3人とも反省しなくちゃダメだよ？ ほらほら代表も

その程度で許してあげなよ。買ってきた飲み物が温くなっちゃうから、ね？」

工藤の制止を聞き、霧島が雄二のコメカミから手を離れた。雄二はダメージの残る体を引きずりながら、こちらに来了。

(クソッ……！　なんか妙に納得いかねえぞ……！)

(理不尽に怒られた気がするよ……)

(ホントに好き放題言ってくれる……！)

プライドを深く傷つけられオレ達3人は隅っこで愚痴っていた。

(あいつらちょっと自分たちがナンパされたからって調子に乗りやがって……！)

(ケッ……！　悪かったな、モテなくて……！　自分の彼氏をあそこまで悪く言うか、普通……！？　しかも玲さんまで……！)

(何がモテない事実が再確認されるだけ、だよ……！　僕達だってその気になればナンパくらい　)

何か言おうとした直後、明久が固まり、そして

「じばあっ…！」

喀血し、砂浜に鮮血の華が咲いた……。

「あ、明久！？　大丈夫か、お前！？」

「何を見たんだ！？　しつかりしろ明久！」

「ム、ムツリーニが……」

「ムツツリーニが！？」

「ナ、ナンパされてる……！」

「あ？ なんだって？」

「誰が、だつて？」

「……ムツツリー二が……逆ナン……されてる……！」

「おいおい。何、バカ言ってるんだ？」

「そうだぞ、明久。寝言は寝てから言えと常々」

『キヤーツ！ 君、写真撮るの天才じゃない！？』

『すごい！ メチャクチャ綺麗じゃない！』

『……この程度、一般技能』

『またまた、照れちゃって可愛いっ』

「ぐっばあっ！」

「雄二 つ！？」

今度は雄二が喀血した……。

いや、気持はわかるけど……！ わかるけど……！ 何で喀血！？

「ありえねえ……！ 何で俺達を差し置いてムツツリー二が……！」

「ありえない……！ ありえないよ……！」

「い、いや。お前ら、ムツツリー二は黙っていたら結構王てるんだぞ？」

「ぐっばああ……！」

「うわああ つ！」

「信じられない……！ いや、信じたくない……！」

「そんなこと言っただってなあ……」

「……ねえ、2人とも」

「「なんだ（よ）？」」

「もしかして、だけどさ……」

「ああ」

「うん」

「このグループでモテないのって僕達だけなんじゃ……?」

「何を今更 (グキツ!) ギャアアアッ! 首があっ!

変な方向に っ! 何するんだ雄二、明久!」

「バカ言うなっ! そんな事がある訳ないだろっ!」

「だ、だよねっ! そんな訳ないよねっ! まったく僕は何を言ってるんだか!」

「まったくだ! バカも休み休みに言えっつてんだ!」

「おいコラ! 人の首を変な方向に曲げといて無視か? 無視なのか!?」

「黙れ! お前は放っておけばすぐに回復するだろう!」

「そうだよ! 今はそれより大事な話をしてるんだから!」

こ、こいつら……! なんてこと言いやがる! 回復が早くても痛いものは痛いんだぞ!

「明久! ナンパをするぞ! 俺達が“モテない”なんてことある訳ないという事を証明するんだ!」

「わかったよ、雄二! 何が『ナンパなんて出来るわけない』だよ! 僕達だつてその気になれば結構モテるって事を証明してやる!」

「お前ら、待て! 少し冷静になれ! そんな事したら、後でとんでもない事なるぞ!」

「ヒロ! お前は悔しくないのか!? “モテない男”のレッテルを貼られて! ムツツリー二に先を越されて!」

「いやいやいや! オレがモテないのは分かっていることだし……」

「お前はそれでいいのか!? 諦めきれるのか!?」

「何を……!?!」

「彼女であるはずの木下姉にあそこまでバカにされて悔しくないのか!?」

「……………っ!」

「ヒロ! 立ち上がるのは今なんだよ! 君は君の為に姉さんや木

下さんにバカにされたままじゃいけないんだ！」

「そうだ！ 『木下姉とお前が釣り合ってない』という理由で木下姉に告白してる奴はまだ結構いるはずだ！ お前は不安にならないのか！？ いつ、お前よりモテる男に木下姉を取られるかもしれないのに！」

「そ、それは……！」

「ヒロ、頑張つて木下さんと釣り合う様な男になろう！」

「そうだ！ 今こそ“モテない男”なんていう汚名をすすぐ機会なんだ！」

「お、お前ら……！ そこまでオレの事を考えてくれていたのか……！」

オレは本当にいい友達を持った……！

「よし、わかった！ やろう！ 2人とも！」

「……かかった……！」

「？ 何か言ったか？」

「いや、何も！」

まあ、こうしてオレ達は初めてのナンパに挑戦することになった。ホントに……オレは何を考えてたんだろうな……。

.....

「ところで2人ともナンパなんてした事があるの？」

「あるわけないだろ」

「一度もないな」

「実は僕も……」

やり方が全く分からない……。
参ったな。最初っから壁にぶつかってしまったか……。

「そう心配するな。こういう事は成功者の模倣をすれば、きつとうまくいく筈だ」

「模倣？ 誰の？」

「ムッツリーニの、だ」

「あ。そっか。確かにあれは成功例だよね。つまり写真を撮ろうとしている人を探すんだよね？」

「その通りだ」

「“写真を撮ろうとしている人”って……。随分限定的だな……。見つかるのかなあ……？」

「それを探するのがナンパの第一歩だろ？ とりあえず他に手が無いんだからやってみようぜ」

「それもそうだね」

.....

明久SIDE

「いたか？」

「いないな」

「やっぱり簡単にはいかないね」

「そういうもんだろ。なに。条件に合う連中さえいれば後は余裕のはずだ」

「そうだね。相手を見つける以外関門なんてあって、無きが如しだもんね」

「お前ら……、その自信はどこから来るんだよ？」

更に移動しながら周囲を探る。

条件に合う相手さえ見つけてしまえば、あとは『よかったら僕が写真を撮りましょうか?』と声をかけるだけでOKだ。

その後、適当に『何処から来たんですか?』とか言っただけで会話を膨らませたらしい

会話の切っ掛けさえ掴めたらあとはトントン拍子に進むはず。

なにせ問題は“会話の切っ掛けを掴む”という事だけなのだから!そこまで来て僕は思った。

最大の問題がこれだとすると、他の2人はどうなる?

そっちはどうやって切り込む? どうやって会話に入っただけでいいんだ?

「……………もしかすると……………」

最初に声をかける側とそうじゃない方とは物凄いハンデがあるんじゃないだろうか?

下手したら1人だけ成功して残り2人が失敗なんて事になりかねない。

僕が成功して雄二が失敗するなんて展開なら大歓迎だ。ヒロには悪いけど……………。

でも、もし逆の立場になってしまったら……………?想像するだけで恐ろしい!

「……………。」

隣を見ると雄二も思案顔をしていた。どうやらこいつも同じ結論に達したんじゃないか?……………?

「ど、どうした明久? まるで『大変な事実が気が付いてしまった』ってこういうような顔をしてるぞ?」

「あははは。何言ってるのさ、雄二。そんなの気のせいだよ。それより『俺は又ケガケするぞ』って顔に書いてあるぞ」

「ば、バカをいうな！ そんな事一度も考えたことはない！」

「お前ら、さつきから何の話をしてるんだ？」

「な、なんでもないよ！」

「そ、そうだ！ なんでもない！」

「……まあ、いいや。それより向こうでカメラを持っている女の人
が3人いる」

「「うおおおおおおっ！」」

「　　って早っ！ お前ら何そんなに慌てるんだよ！？」

ヒロが後ろで何か言っていたが、今の僕等には耳に入っていない。
僕の体よ！ 今だけ羽より軽くなれ！

「てめえ、明久！ 全力ダッシュとかどういうつもりだ！？ テメ
エはヒロを見習ってあとからゆっくりとついてきやがれ！」

「雄二こそなんだよその爆走！ 余裕が無くてみっともないよ！

そっちこそヒロを見習って余裕をもって行動したら！？ 話題は僕
が先に作っておくからさ！」

「いゝや、信用できねえ！ ここは俺に任せとけ！」

「くっ！ そうはいくか！」

小競り合いを続けながら全力で目標にダッシュする。砂地は慣れて
いなくて思うように進まないけど……！ それは雄二だって同じこ
とだ！ 余計な事は考えず全力で走りぬけ！

『それじゃあ撮るよ〜』

『きれいに撮ってね〜』

「「うおおおおおおっ！」」

ま、間に合った……！ まだ写真は撮られてない……！

「ハアハアハア……。お姉さん、ハアハア……。綺麗、ですね……」

「ハアハアハア……。良かったらハアハア……。水着の写真を、撮らせて、ハアハア……。ください……」

「いや……。ハアハア……。僕が、ハアハア……。撮ってあげます、ハアハア……」

『……………。』

……………

ヒロSIDE

「まさか、通報されかけるとはな……」

「何がいけなかったんだろうね……？」

「お前らの台詞が完全に変質者だったからだよ……！ 何でオレが平謝りする羽目になるんだよ!？」

そう。オレが追い付いたとき、明久と雄二はナンパした（と、本人たちは思っている）お姉さん3人に通報されそうになっていた。

事情を聞き、2人が怪しいものではないことを懇切丁寧に説明した後、オレはお姉さん3人に平謝りして、通報するのを思いとどまってもらった……。

なんだか何もしてないのに一番割を食ったような気がする……。その場から去る時のお姉さん方の同情の視線がやけに痛かった……。当の本人たちは何がいけなかったのか、まるでわかってない……。本当にこんな事で大丈夫なんだろうか……？

「よし、アプローチの仕方を変えるか」

「どうやって？」

「任せておけ。いいか、2人と。女に限らず、たいていの奴は容姿を誉められると、喜ぶだろう」

「確かに褒められて悪い気はしないなあ……」

「だから、まず相手の容姿を誉めて、そこから打ち解けて仲良くなつていくつて感じでどうだ？」

今回は結構まともな作戦だな。さっきみたいな限定的ではなく、やり易くなっている。
これならいけそうだ。

「なるほど。相手を褒めればいいんだね」

「この場合ただ相手を褒めるだけじゃダメだ。話題が膨らまないかな。芸能人みたい、モデルの様だ、とかの比喻表現　つまり何かに喩えて相手を褒めるんだ」

「……雄二」

「どうした、ヒロ？　何か問題でもあったか？」

「お前、天才！　ナンパの天才！」

「ふふん、今さら気付いたか……！」

そこまで計算しているとは恐れ入った！　流石はオレが大将と認め
た男だ！

「よし！　それじゃあ、やってみるか！」

「「おおーっ！」」

「まずは問題となるのが声をかけるタイミングだが」

「あっ！　お姉さん！　タオルを落としましたよ！」

『え？　あ、ホントだ。拾ってくれて、どうもありがとう』

「いえいえ、これくらいなんでもないですよ」

ナイスだ、明久！

雄二と揃って明久に向って親指を立てる。
声をかけるタイミングはバツチリ！ 今度こそいける！

「いや、それにしてもアレですね。お姉さん達キレイですね」
『え？ そ、そうかな？』

「本当にスタイル抜群ですね。モデルみたいだ」

『ふふつ、なあに？ 君たちナンパ？』

「はい、ナンパです。お姉さん達がキレイすぎるから、つい……」

『まったく、口が上手いね』

『君たち高校生？ 子供なのに、お世辞が上手だね』

よし！ 掴みはOK！ ここから会話を広げるんだ！

オレのやる気のメーターは満タンドころか振りきれていた。

何故なら！ このお姉さん方は玲さんには及ばないものの、かなりのメロンなお胸様だったからだ！ 千載一遇の好機！ これを逃す手はない！

顔つきをキリツと引き締め、お姉さん方を褒めちぎる……。

「いえ。オレ達はお世辞は言いません。正直者ですからね。本当に心の底からお姉さん達の事を『キレイだ』と思ったからこそ、です」
『え！？ え……つと……。あ、ありがとう……』

1番前にいたお姉さんが顔を真っ赤にして、俯いた。
よしよし、好感触だ。

「そうですよ。お世辞なんかじゃありません」

「だよな。俺達は本当にそう思うんだ。まるで」

「エロ本に出てくるヌードモデルみたいだ！」「」

「アウト ツ！ お前ら正直過ぎだあつ！」

顔色が一気に土気色に変化し、髪の毛が何本かハラハラと抜け落ちた……。

その後、明久と雄二が殴り飛ばされた事、オレが再び平謝りする羽目になったのは言うまでもないだろう……。

……

「……あの右、絶対世界を狙えるぜ」

「……間違いないね。あのお姉さん達は未来の世界チャンプだよ」

「お前らがアホな事言うからだ、バカ野郎共……!!」

海に来てから抜け毛が多くなったような気がする……。

クソッ……! 将来禿げないか何気に心配してるっていうのに……!

「あれ? 3人ともずつといないと思っていたら何処に行っていたんですか?」

「うわ、アキと坂本、ホツペタ腫れてるじゃない。一体どうしたの?」

「……転んだの?」

「ヒロも顔色が悪いわよ? 気分でも悪いの?」

「3人共大丈夫ですか?」

ヒイツ……! 姫路、島田、霧島、優子、玲さんの最凶チームだ! もしナンパしていたのがバレれば、オレ達は絶対に天に召されてしまう……!

何が何でも隠し通さなければ!

「だ、大丈夫! 体調は概ね良好だ! なあ、明久!」

「そ、そうだよ！ 別に何でもないよ！ ねえ、雄二！」

「お、おう！ ちょっと派手に転んだだけだ！ なあ、ヒロ！」

「……………」

「さて、雄二！ 向こうでもう一度泳ぎの勝負をしようか！」

「そうだな！ 今度は負けねえぞ！ ヒロは悪いがもう一度審判を

頼む！」

「お安い御用だ！ 天秤よりも公平なジャッジを下してやる！」

「さあ、行こう！ 水泳は楽しいよね！」

「全くだな！ さあ、行くぞ！」

「……………」

誤魔化しきれた……………かな？

……………

そして更に30分後

「さつきには上手くいきそうだったのに、雄二が余計な事言うから

……………」

「いーや、違う！ お前がバカな事ばかり言うからだ！」

「そんなことないね！ 雄二が良く分からない事を言ったせいだよ

！」

「自分の事を棚に上げてよく言うな、このボケがっ！」

「なんだと！ このブサイク！」

「オレから見たら、どっちもどっちなんだけどなあ……………。ほら、そ

の辺でやめとけ。お前たちがやり合つのは不毛だぞ……………」

あれから約10組の女性グループをナンパしたが、すべて空振りだった。

はじめの方は好感触なのだが、とどめの一言で雄二がデリカシー0の発言をするか、明久のバカな発言が飛び出すかのどちらかで失敗してしまっていた……。

その度にオレが平謝り事になるのだから、正直もう腰が痛い……。そして胃が痛い……。ハゲてしまったらどうしよう……。。

「そうだな……。やめておくか……」

「こんなことしても意味なんてないもんね……」

「なあ、思ったんだが……」

「なに？」

「俺達が失敗しまくるのは何処かで手を抜いているからじゃないのか？」

「と、いうと？」

「相手が好みのタイプじゃないから、無意識のうちにごどこかで力をセーブしてるからじゃないかって事だ」

「……………」

「え？ そうなの？」

「深層心理ってヤツだ」

「深層心理、か……。じゃあ、どうしたらいいのさ？」

「好みのタイプを見つければいいだろうな」

「……………」

「……………なんてな。冗談だ。本気で言ってたんだとしたら、今の言い訳はあまりにも格好悪過ぎる」

「ま、そうだね。ここまでやっておいて今更『本気を出していないだけ』っていうのはみっともないよね」

「冗談でよかったよ。今のが本気ならオレはお前を軽蔑しなくちゃならないところだった」

「だよな。……よし！ こうなりや男らしくあと一組失敗したら諦めるか」

「そうだね。そろそろ皆の所にも戻らないと拙いしね」

「みんなの所に帰りながら適当に見繕うか……」
「うん」

そう言っただけで元いた場所に戻る。

警察に通報されかけたり、殴られたりあった……。

周りのはほとんど人がいない。

気付かない間に随分遠くまで来たものだ……。

冷静になって考えると優子に対して、とんでもなく不誠実な事をし
てしまったと思う……。

今回の事は優子に対する裏切りだ。いくら頭に血が上っていたとし
ても、やってはいけない事だ。

うん。もう二度とナンパなんてしない！ 絶対にだ！
そう心に強く誓った。

「やれやれ……。結局俺はモテない男だったって事か……」
「僕は薄々気が付いていたけどね……」

雄二と明久の背中から哀愁が漂う……。

まあ、あの2人は本気で想ってくれる相手がいるからモテなくても
別に気にしなくてもいいと思う。

雄二は霧島以外の人には真剣に想う事が出来ないだろうし、明久、
姫路、島田の三角関係はまだまだ始まったばかりだ。そんなに落ち
込むことはない。

「これはこれでいい経験　　ん？」

「？　どうしたの、雄二？」

「うわ……！　すごい可愛い……！」

女の子にしては背が高いスレンダーな感じの女の子の2人組だった。
けど……片方はいつに気配が似ているんだけど……？

まあ、気の所為か……。あいつがそんな事する理由はないもんな。

「ラストの相手はあの2人で決まりだな」

「そうだね。最期の相手としては妥当だね」

「よし！ 行って綺麗に玉砕してこい！ 骨は拾ってやるからな！」

「あれ？ ヒロは行かないの？」

「今回はパスだ。向こうも2人しかいないしな」

「そうか。そんじゃ早速……！ おーい、その2人ー」

「随分やる気満々だな。そんなに好みのタイプなのか？」

雄二のはしゃいだ様子が珍しく、軽く苦笑する。

しかしこの時オレは気がついていなかったんだ……。

ここが地獄の一丁目の入り口だったんで……。

「え？ なに？」

「私たちに何か用かな？」

「あー……、今日この海水浴場に遊びに来たんだが、ちょっと道に迷ってさ」

「その、海水浴場を探してるんですけど何処にあるか知りませんか？」

「え？ 海水浴場ってそこに見えてると思うけど？」

「変な人々。もしかしてナンパなんじゃない？」

2人してクスクスと笑っている。

意外に好印象？ けど、なんだろう？ 嫌な予感がするなあ……。

「仕方ないなあ……。それじゃあその浜辺まで引っ張って行ってあげる」

2人のうちの一人が雄二の腕を引っ張って行った……。

「へ？ ああ、いや！ そこまでしてもらわなくても！」

あまりに予想外の反応に雄二の腰は完全に引けてしまっている……。そしてオレも何故かさつきから寒気が止まらない……。まるで誰かに監視されてるような、殺気を突き付けられてるようなそんな感覚だった。

「じゃ、私も同じように引っ張って行っただけだ。」

「うえっ！？ 別に僕はそんなことしてくれなくても大丈夫なんだけどー！？」

急展開に明久はテンパって一歩引く。

そしてオレの方はだんだん寒気が激しくなってきた。

なんだろう？

なにか……。最近感じたことのある様な……。そんな恐ろしい感覚が……。

あれ？ 本格的に体調を崩したのかな？

「遠慮しないで、ね？ さあ、腕を組むよ〜」

そう言っただけ相手の女の子は躊躇いながら明久の腕を組んだ。

なんだろう？ この寒気と相手の女の子の違和感は？

「ほらほら、照れなくていいから。そうだ。海に入る？ ね？」

「え？ あ、ちょっと」

随分と言動がチグハグ　ん？ 言動がチグハグ？　ってまさか！？

海に入るのを躊躇うアイツに明久は心配そうに声をかけた。

「どうしたの？ 気分でも悪いの？ それとも何か」
「明久！ そいつから離れる！ そいつは　！」
「ど、どうしたのさ？」

『お？ 髪の毛が脱色されて　は？ 黒？』

少し離れた雄二の方を見て、感じていた違和感は確信へと変わった
……。

『……私の髪の色はもともと黒だから』

「って霧島さん！？ バカな！ 何でここに！？」

「やられた！ オレ達は　嵌められたんだ！」

「……これ以上入るとスピーカーに水が入る」

「こ、この声は……！」

「……機材が壊れると困る」

「やっぱり！ もう一人の正体は女装したムッツリーニか！ くそつ！ ご丁寧に気配まで変えやがって！」

「そんな！？ じゃ、じゃあさっきの声は！？」

『すまぬ、ワシじゃ』

「嘘だと言ってよ、バーニー！」

『誰じゃ、バーニーとは……？』

「ムッツリーニ……。どうして……！ どうしてこんな事を！？」

「……断ったら……殺される勢이었다……」

「……」

ムッツリーニの体が小刻みに震えていた……。

よほど怖い目に遭ったんだろう……。

そして　きつとオレ達もこれからそれとは比べ物にならない

くらい怖い目に遭わされるんだろう……。

『……雄二』

『……はい』

『……正座』

『え？正座って……。それはちょっと場所が……』

『……正座』

『いや、だからな。ここは海の中だから、正座なんかしたら、海水で呼吸がだな……』

『……もう一度言わせる気？』

『……正座します……』

雄二が海の中で正座して、顔が海水に浸かっている……。出ていた頭を霧島が優しい手つきで押さえつけていた……。

さらば、雄二！ Forever!

「ムツツリーニ、姉さん達は何だった？」

「……………腕一本」

「腕一本かあ……。いやだなあ……。痛そうだなあ……………」

まあ、それ位なら妥当なところか……。元々オレ達が悪いのだし、甘んじて罰を受けよう……。

「……………腕一本以外はヘシ折るって」

「……………（ダバダバダバ）」

「……………明久、泣いた程度で許してもらえるほどこの世界は甘くない」

「さらば、明久！ 永久とこしえに！」

ガシッ！

「ヒロ、何処に行くのかしら？」

そうか……。さっきから感じていた寒気は優子がオレに殺気を放っていたからなのか……。

「ゆ、優子さん……？ その鎖分銅は何に使うのでしょうか……？」
「知りたい？ 知りたいの？ もう、仕方ないわね、ヒロは……ふふふ……」

幼子をあやす様な優しい口調……。しかし声色は鉄の様に冷たく、無機質だった……。

「明久君？ お仕置きの時間ですよ？」

「Ich liebe es vollst?ndig. Ber
eiten Sie sich bitte vor zu st
erben, aki?」

島田、それは一体どこの無我の境地だ？

「アキくん、ヒロくん……。私は悲しいです……。……弟と
る人を失うという事が……」

「優子さん……。最期に頼みがあるんだけど……？」

「潔いわね。いいわ。聞いてあげる」

「感謝するよ」

そう言ってオレはゆっくりと優子に近付き 抱きしめた……。

「ヒヒヒヒヒロ!? なんな何を!？」

「……優子……今夜、オレと一緒に【検閲削除】とか【検閲削除】

思ったより早くあなた達に逢えそうです……。

外伝 第11話 遊びに行こう！ とある大失態編（後書き）

果たして彼らの生死は！？

外伝 第11話 遊びに行こう！ 女の戦いと嵐の前の静けさ編

優子SIDE

ヒロ……、どこに行っちゃったんだろ？

お昼御飯を食べてから、すぐに吉井君と坂本君と一緒にどこかに行つてしまった。

一体何を ハッ！ まさか……！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『ヒロ……！ 明久は渡さねえ……！ 明久は……！ 明久は……！

！ オレのもんだあつ！』

『何言つてやがる、雄二……！ お前には……！ お前だけには明久を渡さない……！ 渡してたまるか！』

『やめてよ、2人とともに！ 僕の為に争わないで！』

『止めてくれるな、明久……！ 男には、愛する人の為にやらなくてはいけない時があるんだ！』

『その通りだ！ お前に勝つて、俺は明久の愛を手に入れる！ 行くぞ、ヒロ！』

『上等だ！ かかってこい！ 雄二！』

『どりゃあああああああああああああああつ！』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なんて事になってたりして……！ そうなったら……！ ア

タシはどうしたらいいの……!?!」

「優子さん?」

「きゃあああっ!」

「あ……。ごめんなさい。脅かすつもりではなかったのですが……」

「あ、玲さん? こちらこそごめんなさい」

「ところでアキくん達は何処に行ったんでしょうか? ヒロ君に迷惑をかけてないといいですが……」

「たぶん大丈夫だと思いますよ? ヒロもああ見えて、吉井君たちとバカやってる事を楽しんでるみたいですし……」

そこまで言ってアタシは 会ってからずっと気になっていた事を聞くことにした……。

「あ、玲さんは……!」

「はい」

「ひ、ヒロの事を……どう思っているんですか……?」

「好きです」

「……………ッ!」

「私はヒロ君の事を異性として愛しています」

心臓が早鐘を打ち、足が震える……。嫌な予感はしていた……。そうだった……。ヒロは同年代には全くモテない。

けど……年上にはかなり人気があるって愛子が前に言っていた……。玲さんの様な人が……本気になったら……アタシは……!

「優子さんはヒロ君の彼女なんですよね?」

「……………はい」

「ヒロ君の隣でしっかり支えて見守ってあげてください……」

「え?」

「？ どうしましたか？」

「ど、どうしてですか？」

「どうして、とは？」

「ヒロが好きなんでしょう？ だったら……！」

「私と優子さんでは……勝負になりません……。悔しいですが、ヒロ君の隣には……優子さんがあるのが一番なんです」

「……………」

「ヒロ君に初めて会ったとき……危うい子、だという印象を受けました……。アキ君と同じ年なのに、どこか“自分を諦めて達観した”ような眼をしていました……。そうすることで自分の心を護るように……。きつと……私では“理解できない”様な事を経験してきましたでしょう」

理解できない……。そんなのアタシも同じだ……。

ヒロの過去を聞いても……アタシはそれを本当に理解する事は出来ない……。

ヒロの痛みを“理解できない”アタシがヒロを支える事なんて出来るのだろうか……？

そんな漠然とした不安はずっと前からあった……。

ただ……考えたくなかった……。

もし……、支える事が出来ないなんて考えてしまったら、アタシはヒロの隣にいられなくなる……。

そんなの、絶対にイヤだ……！

どんどん暗い考えが頭の中に広がっていく……。

「このままだとヒロ君の心が壊れてしまいそうで、それでも人の心の機微を察して支えようと常に頑張るヒロ君から……眼を離せなくなっていました」

「……………」

この人は本当にヒロの事が好きなんだろう……。じゃなきゃヒロの事を話すときにこんなに嬉しそうな顔は出来ない……。アタシは どうしたらいいんだろう……？

「けど……ひと目優子さんと一緒にいるのを見た時、ヒロ君は優子さんと一緒にいるのが一番いいんだと、思いました……」
「え……？」

「ヒロ君は……あなたと一緒にいると、本当にいい顔で笑うんです……。本当に嬉しそうに……。愛おしそうに……。笑うんです……。それを見たら……。私は身を引くしかないでしょう……。？ 私は……。ヒロ君の笑った顔が……。本当に好きなんですから」
「玲さん……」

「それに私は考えたんですが、ヒロ君は……。自分の痛みや苦しみを人に分かってもらいたくないんじゃないでしょうか？」
「わかってもらいたくない？ どういう事ですか？」

「ヒロ君は優子さんが自分の心の闇を理解できない事を承知しているでしょう。人間は自分が実際に体験したことしか本当の意味で理解できません。そしてもし優子さんがヒロ君痛みを理解できてしまふなら、ヒロ君は悲しむのではないのでしょうか？ だからそれを”理解できない”優子さんが一緒にいてくれる。それはヒロ君にとつてとても大事な事なんだと思います。優子さんが隣にいる限り、ヒロ君は大丈夫です」

ヒロが前に口にしてた『人生は慣れと諦めが肝心』という言葉……。それはヒロの価値観そのものだったんだろう……。痛みを慣れて、自分を諦めてしまえば傷つく事はない……。けど……。最近はその口にしなくなつた……。

恐らくそれはヒロが少しづつ変わり始めてきたからだろう……。
ヒロが変われた理由に……。アタシは入っているの……？

「……アタシは……。ヒロに何をしたあげたらいいでしょう……？」

「……ヒロ君にうんと甘えてあげなさい」

「え？ そ、そんな事でいいんですか？」

「はい。どんな些細な事でも、それはヒロ君を支える事になる、と私は思います」

「………………。ありがとうございます、玲さん！」

「はい。どういたしまして」

そう言つて玲さんは優しく微笑んだ……。

ああ、そうか……。

この人は大人なんだ……。

「それでも、もし隣にいる自信がないと、言うのなら……。私が遠慮なくヒロ君を頂きます」

「ダメです！ 絶対に！ ヒロはアタシのです！」

前言撤回！ この人は油断できない！

……………

そして代表たちと合流してヒロ達と一緒に探し始めて30分後

「あれ？ 3人ももずつといないと思つていたら何処に行つていたんですか？」

「うわ、アキと坂本ホツペタ腫れてるじゃない。一体どうしたの？」

「……転んだの？」

「ヒロも顔色が悪いわよ？ 気分でも悪いの？」

「3人共大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫！ 体調は概ね良好だ！ なあ、明久！」

「そ、そうだよ！ 別に何でもないよ！ ねえ、雄二！」

「お、おう！ ちょっと派手に転んだだけだ！ なあ、ヒロ！」

「……………」

「なんだか……怪しい……。」

「妙に落ち着きが無い……。」

「さて、雄二！ 向こうでもう一度泳ぎの勝負をしようか！」

「そうだな！ 今度は負けねえぞ！ ヒロは悪いがもう一度審判を頼む！」

「お安い御用だ！ 天秤よりも公平なジャッジを下してやる！」

「さあ、行こう！ 水泳は楽しいよね！」

「全くだな！ さあ、行くぞ！」

「……………」

「玲さん……………」

「どうしました、優子さん？」

「ヒロが顎を触っていました……………」

「……………」

「ヒロは嘘をつくときや、隠し事をするときに顎を触る癖があるんです……………」

「という事は……………」

「はい……………！ 何か知られたら拙い事をやっているに違いありません……………！」

「そうですね……………。それはガツンとやってあげなければいけません……………」

「はい……！ ガツンとやっちゃいましょう……！」

「優子ちゃん！ 私もお手伝します！」

「そうね！ アキが変な事をしているんだったらお仕置きしないと
！」

「……夫への折檻は妻の務め」

「みんな！ やるわよ！」

「」「」「おおーっ！」「」「」

こうして皆の協力もあり、ヒロ、吉井君、坂本君へのお仕置きは滞りなく終了した。

けど、まだまだお楽しみはこれからよ……！

あのバカ！ 覚悟しなさい！

.....

ヒロSIDE

長い長い暗闇の通路……。

ひたすら歩き続ける……。

螺旋の階段……。

まだまだ上り続ける……。

長い長い橋……。

一度足を止めて、再び歩き出す……。

そして……一条の光が射した……。

「……生き……てる……？」

「ヒロ！ 気が付いたかの？」

「ああ……さすがに今回は死んだかと思った……。自分で自分の
生命力の強さにビックリだ……」

「姉上という者がありながら、ナンパなどするからじゃ」
「……………失礼極まりない」
「……………ごめんなさい」
「謝る相手が違うのじゃ」
「……………はい」

今回は完全にオレが悪いから、何も言い返せない。
正座しながら、秀吉のお説教を聞き、うなだれた。

「あれ？　ところで明久と雄二は？」
「……………そこでまだ死んでいる」
「うわちゃー……………これはまた派手にやられたなあ……………」

明久と雄二はボロボロという言葉では言い表せないくらい、痛めつけられていた……………。
なんと言うか……………モザイク処理が必要なくらい……………。

『ああつ！　そっちにいるのは死んだはずのお爺ちゃん！？』
『怖がることはないぞ、明久。こっちはこっちでいいところだぞ』
『って雄二！？　なんでそっち側で手招きしてるのさ！？　ダメだよ、その人たちに混じっちゃ！　もう戻れなくなるから！』
『はっはっは。そうビビるなよ、明久。この通り俺は元気だし、何の心配もいらなから　コツチにオィデよ……………。』
『気付いて雄二！　悪霊化してる！　もう半分死霊になってるからー！』
『つとと、すまんすまん。別にそんな事はないぞ明久。こっちは本当にいいところだ。毎日が楽しくて、楽しくて』
『ほ、ホント？　大丈夫なの？　雄二、嘘をついてない？』
『ああ、大丈夫だとも。本当に楽しくて楽しくて楽しめたのたのたノシイ　っ……………』

『さよなら、雄二！ 君の事は忘れない！』
『……………ニガサネエ……………！ オマエだけたす力るのはナツとくイ
かねエんだよう……………』

ヤバい……………！ あの世の一步手前に逝ってやがる……………！

「明久！？ 雄二！ しっかりしろ！ おい！？」

「……………ハツ！ 生きてる？ 僕達生きてるの？」

「ああ、よく覚えてないが、リアルに地獄を見ていた気がする……………」

「心配かけさせんな、このバカ共……………」

「あ、ヒロも無事だったんだね……………？」

「なんとか、な……………」

自分の頑丈さと回復の速さに感謝だ……………。

「けど意外だね」

「何が？」

「僕達って相当拙い事しちゃったじゃない」

「まあな」

「“相当”どころか“目茶苦茶悪い事”を、な……………」

「その割に罰がこの程度って随分軽いと思わない？」

「そうだな。この程度で済ませるなんて随分甘いな」

「なあ、秀吉。臨死体験させられるくらい痛めつけられる、ってのは軽い罰って言うのか？」

「世間一般では言わんじやろうな」

「だよなあ……………」

「ヒロは一度死んだ方がいいと思うがのう」

「ムツツリーニ！ 毒吐いた！ 秀吉が毒吐いた！」

「……………自業自得」

「……………ハイ」

隅っこで丸くなって地面に“の”の字を書いていじけていた……。最近オレの扱いが明久と同等かそれ以下になってきている様な気がする……！

「まあ、要するに　まだ何かあると思う……か？」

「そう考えるのが妥当だろうな」

「どうする？　逃げる？」

「いや、相手の出方が分からないのに逃げるのは拙い。万が一、もう許されてるのだとしたら余計な怒りを買っただけだ」

「藪を突いてなんとやら、というやつじゃな」

「だよな……。まあ、罰がまだ済んでいないとしても、それはそれで仕方ない」

「なんでそんなに落ち着いてるのさ!？」

「お前や雄二はともかく、オレは優子という彼女がいる癖にナンパなんて不誠実な真似をしたんだからな。その罰は受けるよ……」

「そう悲観するな。今から近くの町でやっている縁日に行くんだろ。そうそう酷い目に遭う事はない　と信じたい……。」

「荷物持ちや奢らされるくらいの事はあるんだろうな」

「……………それはいつもの事」

「それもそうだ」

「まあ、いつか。なるようになるよね」

「どうせ逃げても殺されるんだから、気にするだけ損だぞ」

「……………達観してる」

「まあ、そう思っておかないと、やってらんねえだろうな。こいつらの場合は特に」

「確かにのう……」

苦笑しながら肩をすくめた。

今更だけど、オレを取り巻く状況ってかなり特殊だよなあ……。

まあ、それは生まれたときから変わらない、か……。

「それにしても女性陣は遅いな」

「着替えに何分かつてるんだ？」

「……お待たせー！」「……」

まるで見計らったかのようなタイミングでドアが開いて、女性陣が入ってきた。

「ずいぶん時間がかかったんだね　って、おお！」

「お、凄いな。そんなもん用意していたのか」

「……時間がかかるのも納得」

「なるほど。浴衣じゃったか。全員似合っておるではないか」

「本当に、な。壮観だ」

部屋に入ってきた女性陣は全員浴衣姿だった。

ただえさえ美人ぞろいの女性陣が普段とはまた違った色気を醸し出している。

これは破壊力抜群だな、本当に。

「へえ、綺麗だね。髪型も変えてるからグツと色っぽくなってる

よ

「そ、そうですね？　ありがとうございます」

明久にそう言ってもらえて姫路は浴衣のすそを広げてはしゃいでいる。

可愛いなあ……。

「まさか私も着る事になるとは思いませんでした」

「皆で着よう、ってこつそり相談してたんですよ。玲さんの分は翔子ちゃんが用意してくれたんです」
「……着ていないのがあったから」

玲さんは照れたように笑っている。
相変わらず、この人はすごく綺麗だな……。

「ウチ浴衣って初めて着るかも」

「あ、そっか。美波は海外育ちだもんね」

「ちよつと歩きにくくて変な感じね」

「……ほえ」

「？ な、なによ、アキ？」

「あ、ああ！ いや！ なんでもないんだっ！」

島田に見とれてたな……。まあ、無理もない。

白い肌、髪から覗かせるうなじ……。
どれもすごい……。

うん。みんな似合ってる。

しかし、そんな女性陣の中でも 優子の似合い方はヤバイ……

……！

なんというか……普段色気の少ない優子がやたらと色っぽい……！
オレの視線は優子に釘付けだ……。

鼻屑眼が入るかもしれないが、この中で優子が一番似合っている！
島田も工藤も中々似合っているが、優子には敵わないだろう……。

「……ヒロ？ どうしたの？ もしかして……似合ってない？」

「いやいやいや！ 逆！ むしろ逆！ 似合すぎて目が離せない」

「~~~~~ッ！ そ、そう？ ありがとう！」

優子が顔を真っ赤にしている……。

これは……！ 反則だ！ 今日の玲さんの水着姿に匹敵するくらいの可愛らしさだ！

オレは幸せ者だ。こんな可愛い彼女がいるなんて！

感無量だよ、本当に！

（吉井君、烏丸君。優子や島田さんの浴衣姿に見とれたでしょ？）

（まあな。あそこまで似合っていて見とれるなっ方が無理だろ？
なあ、明久？）

（ぼ、僕は見とれてないよ！ 何言ってるのさ！？）

（お前がそう言うのなら、そういう事しておくよ）

（ふふふ。けど浴衣だと優子と島田さん特に可愛いよね。ほら、着物ってあんまりおっぱいが大きくなくても格好がつくでしょ？

そうなると優子と島田さんは他がかなりレベル高いから特に可愛い見えちゃうんだよ。着物ってボクや優子、島田さんみたいに胸が小さい女の子には助かるんだよね）

（確かに着物は胸が小さい方が色っぽく見えるよな……。うん……。新しい性癖に目覚めそうだ……。）

（ヒロ！？ 何言ってるのさ！？）

（烏丸君話せるねえ）

（いえいえ。お代官様ほどではありませんとも）

（工藤さん、僕にはそんなこと言われてもさっぱり）

（わからないならボクが教えてあげる）

そう言って工藤はムツツリーニ視線を送り

「チラッ」

『……………ッ！！（ブシャアアアアッ！）』

工藤のはだけられた浴衣を見て、ムツツリーニはいつもより多めの

鼻血を出して地に沈んだ……。

工藤は完全にムツツリーニで遊ぶコツを掌握したようだ……。

『ムツツリーニ、何事じゃ？』

『……俺が一体何をしたと……？』

『しっかりするのじゃ、ムツツリーニ！ 誰がこんな惨い真似を！？』

『……もう……駄目かも知れない……』

『しっかりするのじゃ、ムツツリーニ！ まだ死んではならん！』

『……だが、これはこれで満更でもない……』

『……なんと云うか、心配している自分が阿呆のように思えてくるぞい……』

「ね？ ムツツリーニ君いつもより興奮しやすいでしょ？」

「確かにそうかもな」

「よく違いが分かるね？」

「まあ、微妙な変化だから分からなくても無理はないさ」

それはそうと……工藤はムツツリーニによくちよっかい出すよな……。

似たもの同士だからなのか？ それとも何か別の

「……雄二。私の浴衣、どう？」

「ん？ まあ、似合ってるんじゃないか」

「……じゃあ、私と結婚したい？」

「全然」

「……私と婚約を結びたい？」

「微塵も」

「……じゃあ雄二」

「まっぴらだ」

「生きて……いたい？」

「おおつ！ 翔子は本当に可愛いな！ 見違えたぞ！」

「……雄二は本当に素直じゃない」

「お前な……。一応言っておくけど、今は“脅迫”って言うんだぞ……。」

「……恋愛では手段を選んじゃいけないってお義母さんが言った」

その様子に思わず苦笑する。

人によって愛情表現は様々だ。

雄二と霧島の愛情表現ってのは少し過激で変わっているが、見ていて微笑ましい。

本当に不器用な奴らだ。

「さて、それでは行きましようか。間に合わなくなってしまうからな」

「そうですね。間に合わなくなったら大変です」

間に合わなくなる？ 何に、だ？

祭り？ それとも何か別の

「急ぎましょ。ウチ日本のお祭りってこれで2回目だからすごく楽しみ」

「……遅れたら大変」

「ボクも凄く楽しみだよ」

考えてる時間は無い、か……。

まあ、雄二の言ったとおり、わざわざ祭りで暴力沙汰は起こさないだろうし、もしそうなってしまっても自分がまいた種だ。罰を受ける覚悟もきまっている。

なんだかかっこいい事考えてる様で、浮気のお仕置きを受ける覚悟

が出来ているってかなりかつこ悪いぞ……。

「ほら、みなさん準備してください」

「はい、あれ？ 車で行くの？」

「はい。海より離れていますし、着替えも持っていますので車の方がいいでしょう。ヒロ君もバイクの準備をしておいて下さい」

「はい」

何かある……。絶対何かある……。

まあ、口には出さないけどな……。

もしオレが口に出したら、明久と雄二の2人は迷わず“逃げ”に入るだろう……。

同じ事したのに、オレだけ制裁を受けるのは不公平だよな……？
悪く思うなよ、2人とも……。

「雄二、あんなに急いで何かあるのかな？」

「さてな。色気より食い気ってことじゃないか？ 俺もかなり腹が減ってきたぞ。気持はわからんでもない」

「…………… たこやき、やきそば、お好み焼き」

よしよし……。最大の難関である雄二がたつぷりと油断してくれている……。

もし何かあると感じれば、迷わず雄二は逃げる為の策謀を巡らすだろう。

その手の勝負で正面からやり合って雄二に勝てると思ってるほどオレはおめでたくも、身の程知らずでもない……。
だから……そのまま気付かず、油断しているよ……。

「それじゃ海に続いて夏の風物詩を楽しもうか」

「そうだな」

「……………良いショットが撮れるはず」
「まさに夏、といった感じじゃな」

ペンションから出て、停めてあったバイクのエンジンをかけながら、
真夏の夜の空を見上げる……………。
満点の星空……………。
耳を澄ます……………。
バイクのエンジン音の隙間に入ってくる風鈴の音がやけに大きく聞
こえた……………。
これも夏の風物詩、か……………。

外伝 第11話 遊びに行こう！ 女の戦いと嵐の前の静けさ編（後書き）

優子の腐女子モード爆発！

ヒロ、明久、雄二の修羅場シーンは書いていて少し鳥肌が立ちました……。

さて、お次はいよいよ皆さんお待ちかねのアレです！
お楽しみに！

外伝 第11話 遊びに行こう！ 駄犬達の愛のムチ編（前書き）

内容はカオス！

いつも以上にヒロが大暴走！

頭痛薬を用意してからご覧になることをお勧めします！

外伝 第11話 遊びに行こう！ 駄犬達の愛のムチ編

「祭り、か……」

初めて姉さんと絃馬さんに連れて行って貰った祭りは正直な話、辛かった……。

当時オレは姉さん以外の人間が自分を含めて嫌いだった……。

“他人の存在”とは“自分を傷つける為だけの存在”だと当時のオレは認識していた。

だから人が集まる場所は徹底的に避けた……。

けど…… オレを気遣ってくれている姉さんに心配をかせせてはいけない、と思っではしゃいで、楽しんでる振りをした……。

「うわ……。オレ嫌な子供だったんだなあ……。」

思い出さなくてもいいような事を思い出して、地味にダメージを受け苦笑を洩らした……。

バイクを駐車場に停めて、ロツクをかけた。

正直今でも祭りは好きじゃない。と、いうより祭りの良さが分からない。

何故皆相場より高い金を出して遊ぶのか？

何故普段では絶対に買わないような物を祭りでは買ってしまうのか？

何故皆そんなに浮かれているのか？

すべてが理解不能だ……。

「……みんなの所に行こう」

これ以上思考が捻くれた方向に向かう前に考えるのをやめ、合流地点へ向かった……。皆の前では気を遣わせないように楽しんでる振りをしなくちゃならない……。微かに片頭痛がした……。相変わらずオレは人の多いところは苦手なようだ……。

.....

「悪い。待たせてしまったな」

「ううん。気にしないで」

「それじゃあ行こうか」

オレと優子は今明久達と別行動をとっている。皆とは30分後に中央ステージで待ち合わせする事になっている……。さて、それまで優子といちゃつくぞ！

「しかし、変な店が増えたなあ……。ドネルケバブに佐世保バーガーって……」

「最近はどういうの増えたのよ」

「そうか……」

「結構最近が変わった物が出店してるんだな」

「みたいね」

「お、クレープ！　優子、食うか？」

「え？　いいの？」

「ああ。お兄さん！　クレープ2つください！」

『はいよ。お？　後ろの子は兄さんの彼女？』

「ええ」

『可愛いねえ！ よっしゃ！ トッピングをオマケしといてやるよ！』

「ははっ、ありがとうお兄さん」

『毎度 ツー！』

「へへ……。優子が可愛いから得したな」

「可愛いって……」

クレープを一口……。うん。美味しい……！

「……………」

「？ どうした、優子？」

「ううん。凄く美味しそうに食べるなあって思って」

「まあ、オレ甘いものに眼が無いからなあ……………」

「ふふっ……………！ ねえ、そっちのヤツ一口ちょうだい！」

「ん、はいよ」

手に持っていたクレープを差し出し、優子が一口食べる……………。

あゝ、ホントに和むわ……………。

「はい、こっちも一口あげる」

「ん、サンキュ」

優子が差し出したクレープを一口もらう。

あ、こっちも美味しい……………。

「ふふっ……………」

「？ どうした？」

「ホントに好きなのね、甘いもの」

「ん、まあな」

「それと……………コレ……………関節キスだから……………ね……………？」

「あ、言われてみればそうだな」

「……………」

「え？ なんだ？ どうしてそんな不機嫌な顔に!？」

「別に! ……けどもうちよつと照れるとかあつてもいいんじゃない? そうじゃなきゃ、アタシ一人だけ舞い上がってバカみたいじゃない……………」

「あゝ、悪い。動揺した時のポーカーフェイスが癖になつて、な。内心結構照れてるんだけど……………」

「ホントに?」

「ああ。ホント、ホント」

そう言つてそつと優子と手を繋ぐ。
優子は顔を真っ赤にしていた……………。

そのままゆつくりとした安らぐ時間が流れた……………。
そして30分後

「『納涼ミス浴衣コンテスト 町一番の浴衣美人を探せ』か……………」

「今日の目玉イベントみたいよ」

「へえ、面白そうだな」

待ち合わせ場所で明久達を探す。

あ、見つけた……………。

なんだか、ただならぬ雰囲気か漂っているが、何かあったのか?

「あ、ヒロ! 助けて!」

「おう、明久、雄二。どうしたんだ? 随分顔色が悪いぞ?」

「こいつらオレ達をこのミスコンに出場させる気だあ!」

「え?」

「当たり前です。明久君? まさかとは思いますが…」

「……昼間のナンパの件」
「あのくらいで許してもらえたとは思ってないでしょうね？」
「と、いう事はオレもその対象に入っているのか……？」
「その通りよ」

背後から優子に肩をがっちり掴まれた……。

「ヒロ？ アンタも出場^でるんだからね？」
「オレ男だぞ？」

「いいのよ。大丈夫。女装したアンタは本当に可愛いから……。普段は地味なのよね」

「地味って言うな。しかし何かあるとは思っていたけど、まさかミスコンに出場させられるとはな……。」「

「やっぱりヒロ君は勘付いていたんですね？」

「まあ、そうですね。わざわざ車で来るような距離でもありませんし、車を用意したのだからオレ達の着替え場所の確保ってことだったんでしょ？」

「そこまで気づいていって何故逃げなかったんですか？」

「ああ。勘違いしないでください。車に乗ってきた目的は玲さん達の目的がはつきりしたから納得いっただけで、最初から全部気付けていた訳じゃありません。それに」

「それに、何よ？」

「彼女がいるのにナンパなんてしたんですから、優子の気が済むならそれでいいです。行く前に罰を受ける覚悟はもう出来てましたしね」

「ヒロ！ それにしたって何かあるって僕達に教えてくれないのはどういう事さ！？」

「それはな……。オレが罰を受けるのに、同じ事したお前達だけ罰を受けないのは不公平だと思ったからさ！」

「この！ 人でなし！」

「何とでも言え！」

「……罪には罰を！ 駄犬には鞭を！」

「ふっ……。駄犬扱いか……」

「何よ、不満なの？」

「ああ。大いに不満だね！ なぜなら」

「なぜなら？」

優子にゆっくりと近づき、耳元で囁いた……。

「オレの【検閲削除】は馬並だからだ……」

ガスッ！

「……お、お前……！ レバーに……コークスクリューを……！」

「セクハラよ！ セクハラ！ 毎回毎回！ 何考えてるのよ、このバカ！」

「優子とナニをする事を考えてるんだ！」

「こっのバカー……！」

「げふうっ！」

「ゆ、優子！ これ以上やると烏丸君が死んじゃうから！」

「腕をあげたな、優子。今のは中々効いた」

「烏丸君……。本当に回復が早いね……。」

「まあ、それが取り柄だからな」

明久達の方を見ると、まだ悪あがきをしている。

まったく、往生際の悪い奴等だ……。

「だ、だが待ってくれ！ 細身の明久や、線の太くないヒロはともかく、俺のガタイで女装は無理があるだろう！？ どうかこの場は明久とヒロの女装だけで納めてくれ！」

「雄ニキサマ！ 一人だけ助かるうつつていつのか！？」

「ええい！ 離せ明久！ 俺はお前と違って女装趣味なんてこれっぽちも持ち合わせていないんだ！」

「僕だつてそんな物持っていない！ 大体僕だつてミスコン出場なんて無理だよ！ どこからどう見ても男なんだから！」

「……雄ニも吉井も往生際が悪い」

「まったたくよ。少しは男らしく覚悟を決めた烏丸と“土屋”を見習いなさいよ！」

「……………っ！？（シュバツ）」

ガシツ！

「ダメだよ、ムツツリーニ君 友達を見捨てて逃げちゃ、ね？」

「……………俺は……………無関係……………！（バタバタバタ）」

「ボクね、知ってるんだよ。君が浜辺でナンパされてた事も、コッソリとボク達の水着姿の写真を撮ってたことも全部」

おお、工藤がご立腹だ……………。逆ナンか？ 逆ナンがいけなかったのか！？

観念した方が利口そうだぞ、ムツツリーニ……………。

「……………！！（ブンブンブンブン）」

「照らなくていいんだよ？ さっきの女装も似合ってたし、ね？」

「……………！！……………！！……………俺は……………ただの被害者……………」

……………」

そうだな。元はと言えばムツツリーニが逆ナンなんかされたから『ナンパしよう』なんて流れになったんだ！ 八つ当たりだという事は重々承知してはいるが、地獄への道連れは一人でも多い方がいい。

「そもそも僕達が参加したいって言ったって受付で弾かれるよ！」
「そうだ！ 明久の言う通りだ！」

「あ、それじゃあこうしましょう。用意をして受付で弾かれちゃったら私たちも諦めます。でも、そうでなければ出場するという事で」

おお！ オレとしても願ったりかなったりな提案だ！

腹は括っていたが、ミスコンなんて出ないにこした事はない。

明久達の悪あがきが事態をいい方向へ動かしてくれるとは！

「それでいこう！」

「うん。それならいい……かな？」

「仕方ない……。そこまで言うなら受付まで恥をかいてやるか……。」

「……とばっちり……」

ははっ。けど、これで被害は最小限に抑えられた訳だ！

明久、雄二に感謝だな！

「良かったです」

「それじゃあよろしくね、秀吉」

「了解じゃ、姉上。さてお主ら、準備はいいかの？」

「おう、よろしく」

普段から女装させられる苦しみを知っている秀吉ならオレ達の考えも察してくれるはず！

本当に頼むぞ、秀吉！

「うむ。了解じゃ。必ずお主らをミスコンに出場させてしんぜよう！」

「え？ あ、あれ？ もしもーし、秀吉さん？」

「特にヒロ。お主の化粧は姉上に念入りに、と頼まれておるからの……！」

「……ッ!?」

「そして！メイクも立派な演劇の技術の一つなのじゃ！」

「あ、あの秀吉……?」

「悪いが手加減できそうにない」

オレの彼女と瓜二つの容姿を持ったこの男は満面の笑みを浮かべて、オレ達を絶望の底へと叩き落としてくれた……。

……

「酷い……。酷いよ、秀吉……。なんでこんな全力投球を……」

「……」
「土屋コウミ」って一体……?」

ホアン・シュンリイ

「ムツツリーニはまだいいだろ……。俺なんて“洪雄麗”だぞ。女装の上に中国人にされるとは思わなかった……」

「覚えてろ、秀吉……！絶対に復讐してやる……！」

学校が始まったら『秀吉貧乳女性説』を流した後、ムツツリ商会の力を使って秀吉の水着写真集を販売して、ボロ儲けしてやる！

秀吉に化粧を施された所為で、オレ達4人は結局ミスコンに出る羽目になってしまった……。

「4人とも似合ってますよ」

「姫路、お前の眼は正常か？」

「ホントに……！ぷぷ……っ！凄く、可愛いわよ」

「島田……！笑いを堪えながら褒めるな。笑うなら笑え……！」

「……雄二の丈がちよっと足りない」

「霧島、その辺で勘弁してやってくれ……！雄二が泣きそうだ……」

…！」

「アキくん、キレイに成長してくれてうれしいです。ヒロ君もとても似合ってますよ。持って帰りたいくらいです」

「玲さん……！ ホントに勘弁してください……！」

「後で皆で写真を撮ろうねっ」

「絶対にイヤだ！」

「あら、ヒロ？ 反対する権利なんてあると思ってるの？」

「人権侵害だ！ 弁護士を！ 弁護士を呼んでくれ！」

全員脱走防止の為、腕を掴まれてるため身動きが取れない。

その様子は、警察官に連行される容疑者だ……。

『それでは予選が始まります！ 出場者の皆さんは出場者の皆さんは特設ステージの裏でお待ちくださいーい！』

うわ……。もうすぐ始まるのか……。

確かに腹は括ったけどさ……。いざ、その時になると腰が引ける物だな……。

ええい！ なるようになれ！

(どうする?)

明久がアイコンタクトを送ってくる。

本当に便利な技だよな、これ……。

(どうもこうもあるか……。さっさと選考で落とされるしかないだろう)

(それしかないか……)

(………不本意極まりない……)

(お前ら、オレ達の命題を確認するぞ。オレ達はなんとしても女装

しているという事実を隠しながら、見事に予選で散らなくてはならない。オレ達の社会的地位を守る為にも！)

(だよ。出来れば受付でバテて欲しかったけど、今バレちゃったら女装趣味の上に自分は其処らの女子より可愛いぜ！ って勘違いしている激痛男だもんね……)

(よし！ その方針でいくぞ！)

((了解！))

「うむ？ そう言えばワシは何故出場させられているのじゃ？」
「今頃気づいたのかよ!？」

秀吉……、天然もほどほどに、な……。

.....

《それではいよいよ今年から始まりました新企画！ “第一回・納涼ミス浴衣コンテスト” を開催します！ このコンテストは“浴衣の小畑”の協賛による浴衣を題材としたミスコンテストでありまして、名前の通り浴衣の似合う美人を見つけようというものです!》

もし水着審査だとしても出場させられていたんだろうか……？

.....。優子だったら喜んでやりそうだ.....。
自分の彼女ながら恐ろしい.....！

《予選参加者はなんと59名、この中から決勝に進むことができるのはわずかに10名となります!》

もう既にミスコンではなく、“Missコン”になってるぞ？
なんと言うか.....楽しく見ているお客さんに申し訳ない気分だ.....。

《では、最初の10名に登場してもらいましょう！ どうぞ！》

係員の人に促され、ステージに出る。

最初の1組……。よくまあ、知り合いがここまで集まった物だ……。

最初の10人の内、オレ含めて4人が男……。

そんでもって優子も同じ組……。

嫌な事は早く終わらせるに限る！

さっさと予選敗退してしまおう！ うん！

《それでは1番の方からお名前を教えてくださいいただけますか？》

『はい。旅行で東京から来ました東野聡美です』

《特技などありますか？》

『あつ、はい。特技は』

うっ……。早く終われっ！

《ありがとございました。では、3番の方お願いします！》

そう念じている内に明久に順番が回ってきた。

『は、はいっ。吉井秋子です……（裏声）』

必死に裏声の小声で“自分が男である”という事実を隠そうとする明久……。

その努力が涙ぐましい……。

《特技などはおありですか？》

『え、えっと、強いて挙げるなら料理です……。パエリアとかカルボナーラとか』

その答えは拙いぞ、明久！ “餌付け” は男を最も落としやすい方法なんだ！

《お料理ですか。家庭的で素晴らしいですね。ではご家庭でも？》
『はい、一応毎日……』

《毎日ですか！ 今どきのお嬢さんにしてはとても珍しいですね。これはポイントが高そうですね！》

嗚呼……、明久がどんどん泥沼に嵌まってく……。

《それでは更に突っ込んで 彼氏さんはいらっしゃいますか？》
『い、いません！ 今まで……一度も……』

はい、ここで客観的に見た“吉井秋子像”を確認してみよう。

まず容姿端麗……。 (あくまで客観的に見ての判断)
料理が得意で毎日家で作っていることから家庭的……。
常に小声であることから、極度の恥ずかしがり屋……。
そして今まで一度も彼氏がいなかった……。
なんだ？ この男の身勝手とも言える理想が具現化したかのような女の子は！？

拙いぞ、明久！ これ以上余計な事を口走ると問答無用で決勝進出 (ゴ・トウヘル) だ！

《おおーっ！ これは男性陣にとってはとても嬉しいお知らせです！ どうですか、協賛かつ審査員の小畑さん？》
《携帯番号を教えてくださいたら、オジサンが後でお小遣いをあげよう》

死ね、クソジジイ！

《はい。あなたがスポンサーでなければ殴り倒してるところですが、
そももいかないので質問を返させて頂きます。今日の浴衣を着る上
で気を付けた点は何ですか?》

『その……あ、あまり体の線が出ないように、と……』

《さつきから真っ赤になつて俯いているのを見ると、吉井さんはか
なりの恥ずかしがり屋のようですね。浴衣を提供された小畑さんは
彼女の着こなしについて何か質問はありませんか?》

《下着を着けているのかどうかをお聞かせ願いたい》

地獄に墮ちろ、豚野郎!

《一周回つて心地よくなるような下種な質問をありがとうございます
す。気のせいか私さつきから冷汗が止まりません》

司会さん……、アンタプロだな……。尊敬するよ……。

『し、下着なんて着けてません!』

つて、ええええええええええ!?!? おい、明久! お前、今相当拙
い事言つたぞ!?!?

わかつてる!?!? わかつてるのか!?!?

『『『うおおおおおおおつ!!』『』『』

《よ、吉井さん!?!? こんなセクハラな質問に答えなくてもいいん
ですよ!?!? 男性客の皆さん! ウェーブはおやめください!?!? こ
こはそういう会場ではありません!》

《決めたよ! 彼女は決勝には進ませない! 衆愚に晒すにはあま
りにも惜しい人材だ!》

《はい皆様空耳ですよ。スポンサーがお客様の事を衆愚などと呼

ぼうはありますがありませんからねー。とにかく吉井秋子さん、色々とおりがとうございました。そして色々とすみませんでした……。気を取り直して4番の 》

明久は一仕事終わったような、ホツとした顔をしていた。あのエロオヤジの言葉を真に受けての事だろう……。しかしここまで凄い反響があつて予選で落としてしまったら暴動が起きるだろう。明久の決勝進出はほぼ確定してしまったと言つてもいい。さよなら、オレの親友……。

《 ありがとうございます。それでは次は5番の方お願いします! 》

『……………土屋コウミです……………』

《 ちょっとハスキーな感じの声がたまりませんね。今日はお友達と海水浴ですか? 》

『……………はい』

《 その浴衣の着つけ、大変お上手ですがよく着られたりするのですか? 》

『……………いいえ。友人にやつてもらいました』

《 そのご友人は今会場に来ていらっしやいますか? 》

『……………はい』

ふむ。無難だな。流石はムツツリー二だ。

これなら目立たず、予選落ちが出来るだろう。オレも見習わせてもらつとしよう。

《 浴衣の他にどんな服がお好きですか? 》

『……………チャイナドレスや着物は言うに及ばずレースクイーンにチアガール看護婦にキャビンアテンダント更にはファミレス店員に女性警察官制服やレオタードとOレスーツにセーラー服やブレザ

「や巫女服に加えてメイド服やテニスウェアなども素晴らしいとなんでもありません」

《こ、これは驚きました……。土屋さんはクールな態度と可憐な外見に反してコスプレがご趣味の様子！ 一部の方にはたまらないでしょうね》

「……………わ、忘れてください……………！（ブンブンブン）」

残念ながら司会者さん……。

そいつは“着る”のが好きなんじゃなく、“見る”のが好きなんです……………。

特に乱れた制服を見るのは大好物です。

『『『こ・う・み！ こ・う・み！』』』

『……………こ、困る……………！（ワタワタ）」

《これは凄い手応え！ 土屋さんの決勝進出は決まったようなものでしょう！ 土屋さん、本当にありがとうございました》

『……………あ、あの……………本当に困る……………っ！』

さよなら、ムッツリー……………。

オレは同じ轍を踏まないように気をつけよう……………。

《それでは6番の木下さん。自己紹介をお願いします》

「はい。木下優子です」

優子はお得意の猫モードでニッコリと笑いながら自己紹介をする。

《実に笑顔が素敵で可憐な方ですね。ご趣味などありますか？》

「はい。純文学が好きです。特に川端康成の『山の音』の、古いと情愛をテーマにした内容に心打たれて……………」

嘘つけ……。お前の趣味は下着姿でダラダラしながら乙女小説を読みあさることだろう。

《文学少女ですか。いいですねえ。こんなに清楚で笑顔が素敵な方なら男性も放っておかないでしょう》

司会さん、あんた見る目あるな。

《それでは小畑さん、木下さんにご質問はありませんか？》

《ハッ！ そんなチンチンクリンな貧乳に興味はないね》

「……………」

……………。

優子の表情が凍りついたのを見て、オレの中で何かがキレた……。

あの【検閲削除】野郎……！ 今なんて言いやがった……！？

殺す！ ぶっ殺す！ このMISSコンが終わったら、ナニを切り

落として、口に突っ込んだ後、拷問にかけて鬨り殺してやる！

その前に軽く精神的に追い詰めてやる！

《木下さん、ありがとございました。そして申し訳ありませんでした……》

司会さん、アンタが謝る事はないんだ……。

悪いのは全部あの豚野郎なんだからな！

《それでは次の方、7番の烏丸さんお願いします》

「烏丸ヒロコです……………」

《こ、これは……………！ 凄いですね！ 和風美人という言葉がピッタリと当て嵌まりそうな方です。小畑さん、どうでしょう？》

《いいね。お嬢さん、今日のパンツの色は何色だい？》

「黙りなさい」

《は？》

「は？ ではありません。黙りなさいと言ったのです。人間の言葉が理解できないのですか？ この豚野郎は？ そもそも酸素を二酸化炭素に変えて、排泄物を垂らすしか脳の無いウジ虫以下の存在のあなたがなぜこの世に存在しているのですか？ 身の程を知りなさい。この【検閲削除】以下が。そのイカ臭い【検閲削除】を今すぐ斬り落としなさい。もしくはその腐った生ゴミの様な口臭を放つだけの穴に床にこぼした牛乳を拭いた雑巾を捻じ込みなさい。そうすれば【検閲削除】野郎は【検閲削除】となるでしょう。間違っこの世に生まれてしまったあなたにはお似合いです。この【検閲削除】が！」

《あゝ、えっと か、烏丸さん！ ありがとうございます》

「どういたしました、司会さん」

《ま、待ちたまえ！ 私はまだ彼女に罵倒されたい！》

《聞こえませんかよ！ 私には何も聞こえませんかね！。はい！

次の方！ どうぞ！》

あまり精神攻撃は効果が無かったな……。

なら闇討ちするときはもっと違う方法を取るべきか？

迷うところだ……。

クイクイ

「ん？ どうした、優子？」

「ヒロ……。ありがとうね。アタシの為に怒ってくれて……」

「さあ、なんの事か分からないな」

「ふふっ……。そういう事においてあげる」

「そういう事においてくれ」

優子が少しでも元氣を取り戻してくれるなら、それでいいさ……。

《続いては中国からの参加です！ 7番^{ホアン・シュンリイ}洪雄麗さん、お願いします

！》

『^{ホアン・シュンリイ}洪雄麗デス。ヨロシク オ願イシマス』

《これはまた……背の高い方ですね。どうですか、小畑さん》

《素晴らしいですね。私個人的に背の高い方は大好きなんですよ》

《おおーっと！ 審査員の高評価が得られました！ それでは小畑さん、質問をどうぞ！》

《新婚旅行はカンボジアなんてどうですか？ マイハニー》

《はいわたくしツッコみませんよー。色々言いたい事があっても相手次第ですべて飲み込んで堪えるのが、司会のプロフェッショナルですよー》

舞台裏で「あの審査員始末してくる」という学年主席の友人の声が聞こえた……。

早まったことをするなよ、霧島……。

……… 殺るのはオレと雄二と一緒に、な。オレ達3人で計画を練るなら完全犯罪が可能だ。

『こ、国籍違ウノデ困リマース』

《愛があれば大丈夫です。マイハニー》

『愛ナンテアリマセーン』

《私には愛が生まれる自信がある》

『私アナタノ事嫌イデース！』

《友達からでも構わない。一生大切にする》

『いい加減にしる殺すぞおっさん』

《君になら殺されても構わない》

雄二、気持ちは痛いほどわかるが、ここはグツと堪えて申し出を受

けて、人気のない場所に呼び出し、オレ、霧島、お前の3人で砂にして財布の中身を頂戴した後、埋めてしまつのがベストだと思うぞ。ほら、幸い向こうも「殺されても構わない」って言ってるし……。

《はい。小畑さんも大喜びな洪雄麗さんでした。ではお次》

《待て。私の質問はまだ終わってない。雄麗、ご両親への挨拶はいつ行けばがふうっ！》

《殴ってませんよー。蚊が飛んでいただけですよー。それよりもそろそろ次いきましようね、小畑さん》

《……仕方ないな》

《それでは気を取り直して……エントリーナンバー8番、渡会さんですー！》

『渡会美紀です。よろしくお願いします！』

《渡会さんは地元からのご参加のようです。小畑さん、同じ地元民として何か聞きたい事は？》

《興味ないね》

《そう言わずに！ 洪さんの時のようにやる気を出して！》

《仕様がな……。そうですね……。渡会さん、あなたから見ての洪雄麗さんの印象を教えてください》

《お前もつ裏に行って洪さん口説いてこいよ！ そして2度と戻ってくるな！》

《なんだ貴様！ スポンサーに向かってその口のきき方は！？》

《今更常識人面か、コルアーツ！ 上等だ！ 司会なんてこの場でやめてやらあ！》

《か、顔は止したまえ！ 雄麗のご両親に会う前なんだから！》

《殴った方がその不細工な面もちったあマシになるってもんだ！》

《……雄二は渡さない……！》

「だ、代表まで！？ ヒロ、どうするのー！？」

「決まってるだろ？」

「そうよね。急いで止めないと　　ってヒロ!?　ハリセンなんて持って何を　　!?」

「その喧嘩、オレも混ぜるおおおおっ!」

「ヒロ　　ッ!?」

《げふうっ!》

ステージから助走をつけて飛び、優子をバカにした審査員の顔にドロップキックを入れる。

《か、烏丸さん!　今君オレって　　スパ　　ッ　　ガフウ

ッ!》

「オラ!　立て!　優子をバカにした事をこれくらいで許されると

思うなあああっ!」

《ぎゃああああああああああああああああああああっ!》

大暴れで結果関係者のほとんどが病院か拘置所に入るという結果で終わった。

ミスコンは未来永劫、第二回が開かれる事はないだろう。

オレと霧島も警察の追われる事になり、危なかったがなんとか逃げおおせる事が出来た。

本当に危なかった……。

.....

男の姿に着替え、また優子と別行動をとっていた。

そろそろ集合時間だな……。

うん。最初は祭りなんてつまらないと、思っていたが楽しかった……。

……。

オレは頭で理屈で考えすぎて、楽しむという事をしなかったから今までつまらなかったんだろう……。楽しいって気持ちは理屈じゃないんだ……。

「あ、痛っ！」

「？ どうした？ ああ。下駄の鼻緒で擦れたんだな」

優子の足を見てみると、親指と人差し指から血が出ていた。

「だ、大丈夫。歩けるから……」

「ダメだ。ほら、おぶってやるから」

「け、けど……」

「どうした？」

「おんぶだと……その……浴衣だし……」

「？ ……ああ。前がはだけるか。それは拙いな」

「だから、ね？ 自分で歩くから」

「じゃあ、こうしようか」

「え？ きゃあっ！」

優子の体を横にして抱き抱える。

正式名称『横抱き』俗にいう“お姫様だっこ”というものだ。けど……これ以外に腰にくるなあ……。

「ヒロ！ は、恥ずかしいから！」

「恥ずかしかったら顔隠しとけ。恥はオレがかく」

「そ、そう言う問題じゃなくて！」

「足痛いんだろ？ じゃあ無理するな」

大人しくなった。流石に顔を見られるのが恥ずかしいようで、オレの首に腕を回し、抱きついて顔を隠している。

密着している為、いい感じに胸が当たっている……。役得だな。

「……………ヒロ、ありがとう……………」

「どういたしまして」

「今回の事だけじゃないの……………」

「？ お礼を言われるような事したっけ、オレ？」

「行く前にアタシの元気が無かったからいつもよりバカなこと言ったり、やったりして元気づけていたんでしょ？」

「ナンノ ハナシ カナー？」

「やっぱり、ね。それに気付いたら……………その、嬉しくて……………」

「別に……………優子の為にやった訳じゃない。オレがそうしたかったから、そうしただけ……………」

「じゃあ、アタシはアンタにお礼が言いたかったからお礼を言うだけよ……………」

「む……………。はあ……………、敵わないなあ……………」

「フフツ……………」

優子が巻きつけている腕の力を少しだけ強くした。

オレも少しだけ強く優子を抱きしめる。

そのまま皆の所へ戻って行った。

その後、皆にからかわれて優子の赤い顔が赤紫に変わり、周りの温度が急上昇した事は言うまでもないだろう……………。

外伝 第11話 遊びに行こう！ 夏の青空編

「結局恥をかいたのは僕達だけじゃないか……」

「……心の傷を負った……」

「いろんな意味で忘れられない夏になったな……」

「オレはスッキリしたけどな」

「お前はミスコンでメチャクチャ暴れまわったからだろうが」

「はっはっは！ 気にしなさんな！」

縁日を満喫し、コテージに戻って雄二達はバーベキューの準備を、オレは昼間釣った魚を調理していた。

キスの内臓をとって、血を抜き洗い、衣につけて、油で揚げる。

こんがりとしたい匂いがしてきた。

よしよし、いい感じだ……。

揚げ終わるまでの間にこの魚を

「お主！ それは！」

「そう、石鯛！ 刺身にしてやるから少し待ってる」

「釣ったのか！？」

「だったら良かったんだけどなあ。流石に無理だったよ。こいつは地元のおっちゃんと仲良くなって貰ったんだ」

「い、いつの間に……」

「ま、これがオレの人徳ってやつだな」

「……」

「ああ！ お前らなんだ？ その疑わしそうな視線は！？」

「……いや、別に……」

そんなこんなでいつも通り続くバカ騒ぎしながら調理する。

「でもあのミスコンの結果は気になったよね。あのままやってたら誰が優勝してたんだろ？」

「そうだな……。まあ、妥当に秀吉じゃないか？」

「雄二よ。男のワシが拳がる時点で妥当という言葉とは縁遠いとは思わんか？」

「って、いつか秀吉は無理だろ？ 瓜二つの優子があそこまでこき下ろされてたんだから、秀吉でも同じような反応が返ってきたと思っぞぞ？」

「それもそうかもな」

「オレは玲さんが妥当だと思う」

「え？ 姉さんが？」

「あの魅惑のボディは反則だ！ 飛び道具だ！ 乳という名のミサイルだよ！」

「どんだけー？」

「まあ、偏執狂の意見はともかく」

「偏執狂って言いやがったか！？ この野郎！」

「まあまあ、落ち着くのじゃ」

「……………全員甲乙つけがたい」

「だよね。みんな可愛かったし」

偏執狂……………。…………。偏執狂とか言われた…………。

オレはちよつと大きなお胸様が大好きな17歳の健全な男の子だい！
雄二の発言に軽く（かなり大きな）シヨックを受けながらも、調理を続ける。

向こうは向こうでオレ達の女装を批評していた。

「私はやっぱり明久君だと思います。あのかわいい姿と天然っぷり

「がたまりませんっ」

「土屋や烏丸もかなり可愛かったけどやっぱりウチもアキかな」

「……雄二はイマイチだった。……やっぱり男らしい方が似合ってる」

「ボクはムツツリー二君の女装姿にキュンキュンきたけどね。あんなに似合うとは思わなかったな」

「アタシは断然ヒロね。あの審査員罵倒した時のSな笑顔はすごく良かったわ。玲さんはどうでした？」

「私はアキくんの女装姿は見慣れてますから……。雄二君、康太君の女装姿も新鮮でよかったのですが、やっぱりヒロ君が一番良かったかと」

え？ 見慣れてる？ 見慣れてるって言った？

親友の女装癖疑惑が浮上し、動揺して出刃包丁で手を切った……。

ああ！ 血が……！ 血がボトボトと！

「ちよちよちよと！ やめてよ、姉さん！ 違うからね！

そう言う格好させられてたって言っても幼稚園に上がるより前の話だからね！」

させられてたのか……。同情するよ、明久……。

とりあえず止血して、秀吉に手当してもらい、調理を再開する。

先ほどの明久女装癖疑惑が誤解だとわかってホッと胸を撫でおろした。

「アキくん、嘘はいけませんよ。一昨日の晩にもスカートをはかされていたではないですか。寝ている間に」

「それ初耳だよ！？ アンタ僕が寝ている間に何やってんの！？」

「ふふつ。慌てなくても大丈夫ですよ。半分嘘ですから」

「今の話のどこをどうしたら半分嘘になるの！？」

「スカートは膝の上程度にまでしか穿かせていません。業界用語で半脱ぎというものです」

「最悪だああっ!」

「玲さん、あなた何やってんですか……?」

魚の調理が終わり、話に加わる。

「ヒロ君、安心してください」

「? 何をですか?」

「ヒロ君にも今日の夜寝ている間に着せて差し上げますから」

「ア、アタシも手伝います!」

「御断りします!」

「え……」

「なんだよ!? その『断られたことが心底意外だ』って顔は!?

普通の男は女装を嫌がるんだよ!」

「そうだよ! 姉さんもいい加減にしてよ! 今後は勝手に僕の部屋に入ったら怒るからね!」

「そうだ、そうだ! プライバシーは尊重されるべきだ! という訳で、優子もオレの部屋に侵入するのはやめてくれよ。夜這いなら大歓迎だけど バキツ! ぎゃあああああ! 腕が変な方向に ツ!」

「あ、ごめん。力加減間違えたわ」

「シレッとした顔で嘘をつくな!」

「しかし侵入禁止ですか。それは困りましたね」

「困ってるのは僕達の方だよ!」

「ほらほら。アキくん、ギョツとしてあげるから落ち着いてください」

「ええい! 離せ! そんなもので落ち着くワケがはふう……」

「思いつきり落ち着いてるじゃない」

「は!?! ち、違うんだ! これは小さな頃からこうやって姉さん

に育てられてきた所為で、別に心から落ち着くワケじゃはふう……」

「よしよし。いい子ですねアキくん」

「ぐううっ！ つい条件反射で落ち着いてしまう……！」

「わかる！ わかるよ明久！ 姉さんにギュツとしてもらえると落ち着くよな！？ ようこそ！ シスコンの世界へ！」

「ぼ、僕はシスコンなんかじゃないよ！」

「いーや！ お前はシスコンだ！ 同じくシスコンのオレが言うんだから間違いない！」

明久と胸倉を掴み、姉萌の素晴らしさについて講釈する。

明久はげんなりとしていたが、そんなのはお構いなしだ！

「ヒ、ヒロ……。その……ギュツとしてあげるから……す、少し落ち着きなさい……」

「はふう……」

不覚にも優子の抱きつきで落ち着いてしまった……。

.....

「おう、明久。ちょうど焼けてるぞ。たっぷり食べ」

「ありがとう雄二。じゃあはい、これ雄二の分の飲み物」

「「……………ッ！」」

雄二が明久の皿に焦げたラードを乗せたので、明久は御返しとばかりに雄二のコップにサラダ油を注ぎこむ。

そしていつもの如く睨み合いへ……。

あいつらも飽きないなあ……。

『喧嘩するほど仲がいい』っていうが、それはその通りだと思う。

気になる相手でもなければ、ああやって毎回ちよつかいもかけないだろうし、な。

『喧嘩しつつも何だかんだ言って仲良し』というのが雄二と明久の関係なんだろう。

「ほれお主ら、睨み合っておらんと食わぬか。焦げてしまっぞい」
「……………うまい」

それを見かねて仲裁に入る秀吉、我閉せずのムツツリー……………。その様子があまりにも微笑ましすぎて口元が綻んだ。

「いったただつきまゝす！」

網の上にはたくさんの魚介類、肉、野菜などが乗っていた。雄二はそれを器用に焼いて、回して、食べたりしている。相変わらず要領のいい奴だ。

その様子を黙々と観察しながら、キスフライを口に運んだ。
うん。上出来だ。

「食事の準備ありがとうございます。雄二君、ヒロ君」

「あ、いや。気にしないでください。俺はこういう作業が好きなんです」

「そうそう。オレも慣れてますから」

「ヒロ、何故遠い眼をしているのじゃ？」

「……………秘密」

確かにこういう屋外での作業は慣れているが、こういう作業にあまりいい思い出はない……………。

慣れてしまった原因が原因だっただけに余計そう感じる……………。嫌でもあの“悲惨な体験”の記憶が蘇る……………。

まあ、それを語るのには別の機会で……。

「アキくんに止められなければ私がやるうと思っただけです……」

「私もお手伝いしようと思っただけですが、外の料理って勝手にわからなくて……」

明久グツジョブ！

姫路だけでも致命傷なのにそこに玲さんが加われば、ダークマターのような物質が出来上がるのは目に見えている。阻止出来る脅威が眼前にあるのに何とかしようとしなのは狂気の沙汰だ。

「まったく。アキくんは心配性で困ります。そんなに姉さんの包丁捌きが信用できないのでしょうか？」

「玲さん、明久君は私にもこういう時はお料理させてくれないんですよ。包丁で手を切ったりなんかしないのに」

本人たちに悪意と自覚が一切ないところがまた性質が悪い……。オレだってバカじゃない……。

この状況を好転させる為にどう動くべきか考えたさ。

もはや“キリンググウェポン”と言っても差し支えない“姫路の料理”を食わなくてもよくなる方法を！　しかし一向に打開策が浮かばない……。

一番手っ取り早いのは、姫路に“自分の料理の腕を自覚してもらう事”なんだろうが、そうなれば根性のある姫路の事だ。毎日のように練習に励むだろう……。

今現在、姫路が料理を作って学校に持ってくる回数は1週間に約2、3回！

倍以上になるなんて冗談じゃない！

『作ってきた料理を食わなければいい』なんて意見は問題外だ。

批判するだけで後の責任を持たないと、いうのはオレの信条に反する。

批判した奴は最期（誤字に非ず）まで姫路の料理修業に付き合わなければならぬ。文字通り地獄の底まで……。更に言わせてもらうなら、結果が伴わず人に努力をするように促した奴には、その努力の結果を最後まで見届ける義務が発生する。

よって、姫路の料理を批判する＝毎日犠牲となる哀れな生贄の羊が決定する。

と、いう図式が成り立つ……。

明久達もそれが分かっているから誰も何も言わないのだろう……。結局しばらくは現状維持、か……。やるせないな……。

「それじゃ今度ウチら女子全員でお料理対決なんてどう？ いったも男子に作ってもらってばかりじゃ悪いし」

「あ、それはいい考えですね美波ちゃん！」

島田……！ 余計な事を……！

「それは面白そうですね。私も仕事がなければ参加させて頂きます」
「……私も」

「ボクも参加してみようかな」

「ア、アタシは……ど、どうしようかしら……」

「でもお料理の勝敗ってどうやって決めたらいいんでしょうか？
個人の好みもありますし……」

「あ。それもそうね。どうやって勝ちになるのかしら」

「……K・OもしくはT・K・O……」

「烏丸、何か言った？」

「いや、なんでもない。それよりこの刺身を早めに食ってしまってくれ。これだけ暑いと傷むのも早いからな」

「そつだ。食べ食べ！ こっちの物も焦げちまうぞ！」

「雄二の言う通りじゃ！ こちらのトウモロコシもよい頃合いじゃぞ！」

「……………こっちのホタテも」

「飲み物持ってくるね！ コーラとオレンジとウーロン茶、どれがいいかな！？」

オレ達男性陣の必死の誤魔化しもあり、女性陣の料理対決の話題は打ち切られた。

その企画はあの手この手を使ってでも阻止してやる！
オレ達全員の命の為に！

……………

「いい食べっぷりじゃったな」

「ん〜……。なんかちよつと食い足りねえな……………」

「つつてももう食材は空っぽだぞ？」

「失敗したなあ……………。食材の計算間違つたみたいだ……………」

食材の計算事態は間違っていない。それ以上に皆がたくさん食べたと言っただけの話だ。

育ち盛りの高校生の胃袋を舐めてはいけなかった……………。

「それじゃ現地調達といくか？」

「へ？ 現地調達って？」

「近くに海があるだろ？」

「それって海で何か獲ってくるって事？」

「砂浜だからな。アサリ位はいるだろ」

「今から海まで行って獲ってくるって大変じゃない？」

「まあ、そうなんだよな……………。何かゲームをやって負けた奴が獲つ

てくるとかそういうのにするか？」

「お主らはそう言うゲームが好きじゃのう……」

「……………罰ゲーム好き」

「やめとけよ。腹減ってるのはわかるが、夜の海は色々危険だ」

「わかってるって。ちよつとした冗談」

ゾクリ！

なんだ！？ 今オレ今世紀最大の危機を迎えてるような感覚に！？
どうしようもない嫌な予感がする……！

なんとなく姫路の方から危険が迫ってきている様な気がする……！

『そう言えば私』

え？ そう言えばなんだ？

『家でマドレーヌを作って』

オレがどう行動するかを決めるのにコンマ1秒もかからなかった……。

「雄二、行こう！ 海に貝を探りに！」

「よく言った明久！ 沢山獲ってこような！ “他の物が何も入らなくなるくらい” 大量に！」

「夜の海は風情があつていいものじゃな、ムッツリーニ！」

「……………きつと暗い方が貝も沢山獲れる」

「そうと決まれば突撃だあ ツ！」

「……………おお つ！」「……………」

海へダッシュした。走れ走れ走れ！ 生き延びる為に！

生きて 明日を迎える為に！

.....

『いきなりどうしたのかしら？』

『さあ……？』

『まあ、いいけど……。マドレーヌがどうしたの瑞希？』

『あ、はい。マドレーヌを作って持ってきたんですけど、皆行っちゃいましたね』

『そうね……。あいつらが戻るまで食べるのは待ましょ？』

『はい。そうですね』

.....

「「「死んで……たまるかあ　　っ！」「」」

海に突撃する雄二、明久、秀吉。

3人とも我先にと貝を奪い合っている……。

「おっしゃ！　まず一つ目ゲット　　！」

「させるか雄二！」

「おわっ！　テメエ明久！　ドロップキックは卑怯だろ！」

「雄二が落としたアサリはこの辺じゃな」

ふふっ……！　バカめ！　貝なんて獲ってもたかが知れている……。

魚を狙った方がより効率的で当たりもでかい！

昼間仲良くなつたおっちゃんに夜釣りの入れ食いポイントを教えて貰っておいて正解だった。

釣竿を持ってきて、撒き餌を撒いて準備は万端！

釣り針に昼間の残りの餌をつけて投げ入れる。

……。
……。
……。

チャポン……

……よし！ かかった！

一気に竿を引いて魚を引き上げる。

「いよっし……！ チヌゲット……！ この調子でジャンジャンい
くぞお……！」

「……その魚……！ 俺が貰い受ける……！」

「うおっ！ ムツツリーニ……！ テメエ……！」

「……俺は死ぬわけにはいかないんだ……！」

そう言ってムツツリーニは構えた。

「上等だ……！ 昼間は不覚を取ったが、今度は本気でいかせても
らっ……！」

こちらも応戦の為構える……。

そして 命のやりとりが始まった……！

結局お互いの足の引っ張り合いで貝や魚はまともに獲れると事はな
かった……。

……
……
……
……
……
……
……
……
……
……

真夏の早朝、不意に眼が覚めた。

寝ぼけ眼で時計を見ると朝の7時……。普段は秀吉やお母さんに起こされないと起きないけど、今日はなんだか寝覚めがいい……。なんだかいい匂いキッチンから漂ってくる……。

それと一緒に包丁や何かを焼いている様な音も聞こえてきた。

匂いの正体が気になり、アタシは布団から抜け出し、キッチンへと向かった。

「……ヒロ？」

「？ ああ、優子か。おはよう。よく眠れたか？」

「うん。えっ……と、何してるの？」

「見ての通り朝飯作ってる……よっと……！」

フライパンで焼いている卵を手首のスナップだけで引っくり返しながらアタシの質問に答える。机の上には捌かれて塩につけられた魚、コンロの上には温かそうな味噌汁が既に完成していた。

ぎゅるるるる……

「うっ……！」

「くっはっはっは！ そんなに腹が減ってたのか？」

「う、うるさいわね！ 忘れてよ！」

「くっくっく……！ 了解……！ もうすぐ出来るから座って待ってる」

「あ、何か手伝うわよ」

「ん？ ああ、じゃあ残りの卵焼き作って置いてくれ。オレはの間ちよつと醤油のボトルとってくるから」

「えー！？ あ、ちよつと……！」

「頼んだぞ」

そう言っただけは向こうの方へ行ってしまった……。
どうしよう……。アタシ料理は本当にダメなのに……。！
……。うん、大丈夫！ 卵焼きくらいならアタシだって……。！
息まいて卵をフライパンの中に入れた。
アタシはその決断を5分後後悔する事になる……。

.....

「.....爆撃？」

「た、卵焼きよ！」

卵はこれ以上ないくらいに可哀そうな事になっていた……。
なんで……。！ なんで卵焼きがあんなに難しいのよ！？
大人しく調理されなさいよ、卵の癖に……！

「ううう……！ わ、笑えばいいじゃない！ どうせアタシは姫路
さんや美波みたいに料理が上手くないわよ！」

明らかに八当たりだった……。けど、ヒロの作った卵焼きと並べて
みたら、どうしても惨めで……。情けなくて……。それでも憤りを
ぶつけられる相手がヒロしかいなかった……。

「笑わねえよ。これでもオレが初めて焼いた卵焼きよりは遥かにマ
シだ」

焼き魚を皿に乗せて、なんでもないと風を軽く笑った。
そのあと焦げた卵焼きに箸を伸ばして一口食べた。

「それに食えない事もない」

「……………ごめん」

「気にしなさんな。少しずつ積み上げていけばいいさ。その気があればオレが手を貸すぞ?」

「教えて……………くれるの……………?」

「ああ。必要とあらば、手とり、足とり、腰とり、ナニとり教えて差し上げ　バキッ　アベシッ!」(バタツ)

アタシの渾身のストレートは顎を正確に捉え、ヒロが床に沈んだ……………。

「あ、顎が……………!　碎ける……………!」

「自業自得よ、このバカ!　またセクハラ!?」

「あてて……………。まあ、バカな話は置いといて、本気ならオレはどんな協力も惜しむつもりはない」

「……………アタシは本気よ!　ヒロ、よろしくお願いするわ!」

「オーライ、任せとけ優子!　けど、その前に　」

「その前に?」

「さっさと残りを作ってしまったわないとな」

「そうね。お皿を用意しておくわ」

楽しみにしておくわね、ヒロ……………。

……………

ヒロSIDE

朝食をとった後、帰りの準備も終わり、明久達は車にオレはバイク

にそれぞれ乗っていた。

「ヒロ君が朝食を用意してくれたのですか？」

「はい。僭越ながら作らせてもらいました」

そりゃ、な。昨日たまたま玲さんと姫路が明日（つまり今日）の朝食について話していたから、先手を打たせてもらった！ 殺されないために！
色々あったけど、どうにか生き残る事が出来た。これで……無事に帰る事が出来る……！

「とても美味しかったです。ヒロ君は将来いいお嫁さんになりますね」

「玲さん、オレ男です……」

何で嫁？ この人のオレへの認識って一体どうなってるんだ……？
混乱しながらバイクのエンジンをかける。

「……ヒロ、アタシもバイクに乗って良かったの？」

「ああ。まあ、な」

ひとまず危機は去ったが、車の中ではアレが出されるだろう……。
姫路の作ってきた“キリングウェポン”が……！

そうなった場合優子にまで危険が及ぶ可能性があるから、帰りはオレがバイクの後ろに乗せて行く事にした。

すまない、みんな……。オレはお前らより優子をとる。

恨んでくれて構わないよ……。
生きていたらまた逢おう……。

「それじゃあ玲さん。楽しかったです。ありがとございました」

「はい。どういたしまして」

そう言つて玲さんはニッコリと微笑んだあと近づいてきて、耳元で囁いてきた……。

「……ヒロ君、優子さんを幸せにしてあげてくださいね?」

「……勿論。そのつもりですよ」

「それだけではなくて、あなたも幸せにならなくてはダメですよ。あなたは痛みを堪えすぎる人の様ですから、もっと周りに頼りなさい。ひとりで出来る事なんて知れてるんですから」

「う……! ど、努力します……」

やっぱりこの人には敵わない……。

本当に……敵わないなあ……。

「それでは気をつけて帰ってくださいね。さようなら」

「はい。それじゃあ、また!」

「じゃあね、みんな!」

車が動き出し、みんなを見送った。

楽しい時間というのは本当に過ぎ去るのが速い……。

このときの楽しかった気持ちも時間が経つと同時に風化してしまうのだろうか……?

「ヒロ」

「ん?」

「玲さんに何を言われたの?」

「ん……? 優子を幸せにしてやれって、さ」

時間が流れ風化してしまつても……きっと楽しかったという事だけ

は覚えていると思う。

オレはきつと……今日の澄み渡った青空を忘れない……。

外伝 第11話 遊びに行こう！ 夏の青空編（後書き）

これにて遊びに行こう！ シリーズ終了です！

次は オリジナル話、修行に行こう！ を掲載します！

ヒロと静馬の知られざる（というか思い出したくない）過去が明らかにかに！

そしてあの人によるナンパのお仕置きもまだまだ終わらない！

お楽しみに！

外伝 第12話 修行に行こう！ 出発編

NO SIDE

旅行から帰ってきて1週間。夏休み残り10日。

大貴は残りの夏休みライブを優子に料理を教えたり、図書館で新しい本を発掘したり、明久達と遊んだりして満喫していた。そんな中修介は何の脈絡もなくとんでもない事を言い出した。

「明日……山まで修行しに行くぞい……」

その言葉を聞き大貴は持っていた箸を落とし、静馬は飲んでいた飲み物を盛大に吹き出した。そして2人とも衝撃のあまり某『お前はもう死んでいる』が決め台詞あの漫画の様な顔をしていた……。

「な、何故修行？」

「お主らが夏休みだからじゃ。それにヒロ。お主先日行った旅行で優子さんがいるにも関わらずナンパをしたそうじゃの？」

「うっ……！」

「カーッ！ 情けない！ いつからそんな不誠実な男に成り下がったのじゃ!？」

「ぐっ……！」

こればかりは大貴も言い返せなかった。修介の言ってる事は正論で大貴自身もそれをよくわかっていたからである。

「全く本当に情けない！ 少しはワシを見習って硬派にじゃな」

「ちよつと待て！ いい年してアイドルグループのライブでハッスルしてるテメエのどこが硬派だ!？」

「なんじゃと!? お主こそ毎週M木Y子目当てでSPを録画保存しているではないか!? あの様なきつそうな女子のどこが良いのじゃか!」

「テメエに年上の気の強そうなお姉さんの魅力は一生分からねえよ! この節穴ジジイ!」

「黙らっしやい! このM男が! 表に出るがよい!」

「オレはMじゃねえ! 上等だ、このヒビジジイ! 今日という今日は息の根止めてやる!」

そしていつもの様に殴り合いへと発展した。

そんな中静馬は

「……………! (ガクガクブルブル)」

小刻みに震えていた…………。「山怖い山怖い山怖い」と呪詛のように呟きながら…………。

……………

「絶好の山日和だな」

「そうだね。海に続いて山かあ…………」

「ふふつ。楽しみですね、明久君」

「烏丸のお爺さんに感謝ね」

「バカなお兄ちゃんや静馬君と遊びに行けるなんてすごく嬉しいですっ」

「……………近くに川遊び出来る場所があるらしい」

「……………(ササッ)」

「ムツツリー二君、いいショット期待してるよ」

「それにしても…………遅いわね。集合時間はもう過ぎてるのに」

「ヒロが遅刻するとは珍しいのう」

集まっていたのはいつもの面子＋美波の妹の葉月であった。全員修介から「山に遊びに行く」と聞かされており、残り少ない夏休みを満喫する為に喜んで参加したのだった。

そして更に待つこと10分

1台のマイクロバスが一行の前に停車した。

「皆の衆、待たせたのう！ コヤツラを捕らえるのに少し手こずってしまつての！」

バスから降りて遅刻した事を詫びる修介。その後ろにはボロボロになつてワイヤーで縛られていた大貴と静馬が転がされていた。

「し、静馬君！？ 大丈夫ですかっ！？」

「だ、大丈夫じゃないかも……………」

「アンタ何でまたボロボロでグルグル巻きなのよ？」

「いや…………。逃げようとしたら捕まってしまうって、な」

「何故ワイヤーなのじゃ…………？」

「ロープだと抜けるのが簡単だから、かな？」

「いやはや、今日に限って2人とも往生際が悪いから手こずつたのじゃ」

「そ、そうなんですか……………」

いつもの事に呆れて苦笑いを浮かべながら全員バスに乗り込んだ。

「…って何でお前らが此処にいる！？」

「え？ お爺さんに山へ遊びに行くから一緒においでって、誘われただけど？」

大貴の今更な、そして意図の分からない質問に優子が戸惑いながら答えた。それを聞いた大貴は顔を真っ青にしてうるたえた。

「逃げる！」

「え？」

「今からでも遅くない！ 早く逃げる！ 全員だ！」

「そうですね！ バスのドアが閉まったら手遅れになります！ 葉月ちゃんも早く逃げて！」

「ふえ？ 静馬君どうしたのですか？」

大貴と静馬は陸に打ち上げられた魚のように体をバタバタさせながら必死に逃げるように訴える。しかし彼らの必死の訴えも空しくは地獄行きのバスのドアが閉まってしまった。

ドアは一人も逃がさないと、言わんばかりにしっかりと閉まっていた。

「ああ……。遅かったか……。お前ら、遺書はちゃんと書いて来たか……。？」

「や、やだなあヒロ脅かさないでよ。これから山へ遊びに行くんですよ？」

「それだったらどんなに良かったか……。今からオレ達が行く場所は 烏丸家もしくはそれに連なる家がよく使っている鍛錬場だ……。？」

「？ 静馬君、たんれんじょってなんですか？」

「修行する場所の事だよ……。2年前に行った事があるんだけど、あのときは本当に死ぬかと思った……。？」

「ああ……。本当にあんな無茶な事やってオレ達よく生きてたよな……。？」

そう言って大貴と静馬は遠い眼をした。

「い、一体何があったの……？」

「……知りたいか？」

「うん」

「本当に知りたいのか……？（ガクガクブルブル）」

「や、やっぱりいい！」

大貴と静馬の体が弾かれた弦楽器の様に震えだした。その様子を見てほとんど優子の腰が引ける。

「だ、大丈夫だよ！ 僕たちならやれるって！」

「あ、明久の言う通りだ！ 命の危険なんて毎度のことじゃねえか！ 俺達なら乗り越えられる！」

「明久、雄二……」

自分を奮い立てるように叫ぶ明久と雄二。実際彼らはいくつもの死線を越えてきており、大抵の危機なら対処できる自信があった。

大貴はそれを見て、震えを止め2人と向き合う。その瞳は涙で少し潤んでいた。

「お前ら　ウサギは捌けるか？」

「「は？」」

大貴の思わぬ会話の変化球（むしろ暴投）により眼を丸くする明久と雄二。

それに対して補足するように静馬が以前行われた修行内容を打ち明けた。

以前行われた修行内容

それはナイフだけで山の中を1週間生き延びるサバイバル訓練だった。

勿論食事も自給自足、山の中は烏丸家の私有地の為、民家はなしと
いった環境の中での生活を強いられたのである。

山菜の生えていている場所はマムシや毒虫の巣窟……。
生えているキノコはほとんどが毒キノコ（致死性の低いものだと後
の調べで判明）

故に確保できる食料源のほとんどが動物性タンパク質（ほとんど野
ウサギの肉）だったのであった。

この修行内容は当時の大貴と静馬には相当ショックな出来事で
今でも苦い思い出になっている。大貴が外での料理が得意な訳も、
外での調理を嫌がる理由もこの経験から来ている。

「オレ基本的に動物好きなのに何であんな酷な事を……」

「ふふふ……。本当に……。もう二度とやりたくないよ……」

大貴と静馬の話聞き、一同顔を真っ青にしている。普段ポーカー
フェイスを崩さない翔子や、余裕のある態度をとっている愛子でさ
え、顔を引き攣らせている。

普通に考えれば余所の子供にそんな無茶な事をさせるわけがないと、
笑って否定できるが修介は家にトラップを仕掛けて大貴が引つかか
るのを見て楽しんでるような人格破綻者である。

自分の快樂のためなら人の迷惑など度外視して、常識では考えられ
ない事をするのは人格破綻者の専売特許だ。

バスの中の体感温度が全員のテンションに比例するように下がって
いった。

そんな様子を見かねたように諸悪の根源が口を開いた。

「安心するがよい。今回はそんな無茶はさせぬ」

「え！？ ホントに!？」

修介の言葉を聞き、大貴と静馬の顔が明るくなる。

2人して自分たちが無事に帰れるかもしれないという事に肩を叩きあつて喜んでいた。

「寢床の心配いらんぞい。なぜなら」

そんな大貴の甘い幻想を打ち砕く修介の一言。

「今回は道場を開放して竜馬に稽古をつけて貰う事にしたのじや」

「今すぐサバイバル訓練に変更してください！」

“竜馬”という名前を聞いた瞬間大貴は土下座して修介に頼みこんだ。

「今さら変更は聞かぬ。観念するのじや」

「もう……ダメだ……。こんなことならサバイバル訓練の方が数倍マシだった……」

「静馬君。竜馬さんって誰ですか？ 怖い人なのですか？」

「うっん。全然怖い人じゃないよ。僕のお父さんのお父さんなんだけど、すごく優しい人だよ。兄さんは苦手みたいだけど、僕は好きかな」

「そうですか！ 怖い人じゃなくて良かったです」

「嗚呼……。もうダメだ……。オレ死んだ……。絶対死んだ……」

「大袈裟ね、本当に」

.....

ひとしきり抵抗してもはや諦めがついた頃にはバスの中には微妙な空気が流れていた。

いつも通り夫婦の時間を堪能している雄二と翔子。

セクハラトークを繰り広げる康太と愛子。

瑞希、明久、美波は静馬、葉月と共に楽しそうに話をしている。

そんな中一番後ろに座っていた大貴だけがカビの生えそうな空気を漂わせていた。

優子と秀吉が横で慰めているが、あまり効果はなく大貴のテンションは下がり続けるばかりだ。

勿論楽しそうな雰囲気の中、進んでそんな空気を出している人間に関わろうとする奇特な者はおらず、それが微妙な空気を作り出していた。

普段の大貴なら楽しそうな雰囲気の中そんな空気の読めない事は絶対にならないが、今回ばかりは周りを気遣う様な余裕はなかった。それほどまでに大貴は“竜馬”という人物を苦手としているのだ。

「ヒロ、退屈しておる様じゃな」

「退屈してるんじゃないくて、絶望してるんだよ……」

「そんなお主の為に面白いビデオを用意してきたのじゃ」

「聞けよ、人の話を！　　ってビデオ？　何の？」

修介はシャキーンといった感じでDVDを一枚取り出し掲げた。

大貴と優子はそれをいぶかしげに眺めて首をかしげた。

「それは見てのお楽しみじゃ。それではスイッチオーン！　じゃー！」

バスの中に備え付けてあったテレビの電源が入り、火サスのテーマソングが流れた。

一同が「何故火サス！？」と、いうツツコミを心の中に入れる。

そしてタイトルが画面いっぱいに表示された。

【烏丸大貴 面白行動100連発！ 噂の男の大ボケ行動を大公開！】

「ジジイ ツ！！！」

「何じゃ？ 静かにせんか、バカ者」

「これが静かにしてられるか！ こんなもん何時撮った！？ いや、今はそんな事どうでもいい！ 止める、今すぐ！ 停止ボタンを押してディスクをぶっ壊せ！」

「いいじゃない。アタシはこれ見たいわよ。今更アンタの天然がバシたところで何の問題もないしね」

「いや！ そういう問題じゃない！」

「カメラ映りが気になるのかのう？」

「そういう問題でもない！」

《中三の冬……。風呂で眠っている間に溺れて死にかけ》

「ギヤアアアアッ！」

バスの中から悲鳴と笑い声が響き渡る。

《そしてつい最近……。櫛についた自分の抜け毛の数を数えて凹んでる後姿……。哀愁が漂ってくる》

「ギヤアアアアッ！ ギヤアアアアッ！ 見るな つ！ 写すな つ！」

バスの中に更に大きな悲鳴と笑い声が響き渡る。
大貴の受難はまだまだ終わらない……。

.....

ヒロSIDE

目的地に到着し、バスを降りる。

このあたりは自然がたくさん残っており、町の中とは違う匂いがする。

背伸びをして深呼吸をすると、いつもより楽に息が吸える様な気がした。

横を見るとムツツリー二が乗り物酔いでグロッキーになってたが、工藤が甲斐甲斐しく面倒を見ていたので、オレの出る幕はなさそう

だ。
前を眼を向けるとそこにはあの人住んでいる屋敷……。つまりオレ達の宿泊先があつた。

「ここは……旅館？」

「いや、個人家だ。ここはこの先の道場の師範の家だ」

「えっと……りょうまさんって人？」

「ああ」

「さて、早速荷物を置かせてもらつとするかの。その後竜馬に挨拶

じゃ

うう……。気が重い……。

.....

「よつこそ、皆さん。何もないとこるですが、ゆっくりしてらって
ください」

「……お久しぶりです、師範」

「ヒロ、元気だったかい？」

「はい。おかげ様で」

「竜馬おじいちゃん、久しぶりです」

「静馬久しぶりだね。ちょっと見ないうちに大きくなって」

オレ達の目の前に座っているこの老人、沖田竜馬は絃馬さんの父、つまり静馬の祖父に当たる。そして先代の沖田家当主の弟で沖田の家でもかなりの地位を持っており、中々のやり手だ。

当然任されているこの道場も大きなところで烏丸の本家の連中での道場に通っている者も結構いたりする。武道の実力は言わずもがな。

風貌も長身で端正な顔つき、そして性格は特定の条件下以外では温厚で紳士的。

まさに完璧超人といったところなのである。その完璧超人と性格破壊者が長年の友人関係にあるというのだから驚きである。きつこの人はオレのような凡人とは感性が違うのだ。

そしてオレはこの目の前の非の打ち所のない人物がかなり苦手だ。その最大の理由は後でわかるから、とりあえず置いて細かい所を上げるとすると

「ところでヒロ。この道場を継ぐ気になつてくれたかい？」

「いいえ。師範、何度も申し上げた通り自分はこの道場を継ぐ気はありません。そんな器でもありません。師範なら他にも沢山見込みのあるお弟子さんがいるはずですよ。そちらに話を持っていてはいいかがでしょうか？」

「そう言わないでくれ。君には天賦の才がある。そして権力に興味が希薄な所がまた良い。君以外にこの道場を任せられる人物なんて考え付かないよ」

このように顔を合わせるたびに道場を継げと、迫ってくるからである。

……オレは別にこの道場を継ぐ事が嫌な訳ではない。

武道は嫌いではないし、将来特別にやってみたい仕事がある訳でもない。

それだったら道場主という人生も悪くないとは、思っている。

しかしそんな軽い気持ちでこの道場は継ぐべきではない。

この道場を継ぐために、正統な後継者になる為にこの道場の門下生たちは日々必死に鍛練を繰り返している。それを余所から来た何の努力もしていないオレが横から搔っ攫う訳にはいかない。

それにこの道場は沖田の家の所有物だ。

それでもってオレはいくらはぐれ者とはいえ、烏丸の家の人間なのだ。

「他所者に沖田家の当主の補佐をやってる様な師範が直々に沖田家の所有物を継がせた」という話を快く思わない人間が必ず出てくるはずだ。

そう言った奴等がオレを貶めたいと思ってる本家の連中とつるんで何らかの嫌がらせをしてくる事は考えられない話ではない。

その辺りを考慮して断っているのだが、師範はそういった事に無頓着なのだ。

空気が読めないと言ってもいいだろう。

「え……つと、あの……師範？　さん？」

「ははは、私の事は師範もしくは竜馬でいいですよ。可愛いお嬢さん」

優子が遠慮するように聞き、師範がにこやかに返した。

よくあんな齒の浮くようなセリフが出てくるよなあ……。

まあ、本人は思った事をそのまんま口にしてるだけなんだろうけど……。

「それじゃあ竜馬さん、ヒロってそんなに凄いんですか?」

「ああ! 10年に1人の逸材さ! なんとと言っても最年少でこの『天源無想流』の目録までいった天才児だからね!」

熱弁する師範。なんだか本人の目の前で手放して褒められるとかなり照れ臭いんだが……。

しかもこの人の事だから本気でそう思っているんだろう。

「そういえば海に行った時もバットでスイカを真つ二つにしてたな」

「ふえ〜、ヒロって凄い人だったんだね〜」

「はっはっは! それほどでも あるけどな!」

全員の尊敬の眼差しを身に受け、普段人に褒められ慣れていないオレは調子に乗った。

鼻高々だ。伸び〜る、伸び〜る。鼻が天まで伸び〜る。

「調子に乗るではない愚か者。資質だけでいえば静馬の方が圧倒的に上じゃ。静馬に比べたらお主など毛ジラミ同然じゃ」

伸びきった鼻がボキリと折れた。

毛ジラミ……。毛ジラミとか言われた……。

「ほう? 静馬はもっと凄いのかい!？」

「うむ。今日ここに連れてきたのは目録を与えてもよいか、どうか試験する為なのじゃ。しっかり見てやってくれいっ」

「へえ! もうそこまで! 確かにヒロ以上の逸材かも知れないね!」

「え? いや……、あの……」

「静馬君、凄いですっ! かつこいいですっ!」

「え！？　そ、そうかな？　ありがとう、葉月ちゃん」

師範が興奮気味に静馬に詰め寄る。あの人の興味はもう静馬に移ったようで、静馬に「道場を継がないか？」と、持ちかけている。

正直オレの心境は複雑だ。静馬は真正銘沖田の人間で、しかも当主の直系だ。

そして才能の方も申し分なく“天才”という言葉がシツクリくる。

そしてその才能を奢ることなく、烏丸家先代当主による英才教育を施されているから死角なしだ。このままいけば間違いなくオレやジジイを凌ぐ実力を身につけるだろう。

もし静馬にその気があるのなら、この道場は静馬が継ぐのが妥当だろうと、オレの理性は考える。

しかし感情の方は簡単には割り切れない。

静馬の溢れる資質への嫉妬と劣等感……。

大好きな甥っ子にそんな感情を抱いてしまう自分への自己嫌悪……。その他色々なものが混ざり合って腹の中で真黒なスープを作っているようだ。

周りに気付かれないように小さくため息をつく。

横にいた優子がそんなオレの心情を察してくれたようでそっと手を握ってくれた。

優子の気遣いにオレはありがたさと心強さ、ほんの少しの煩わしさを感じていた。

そんな自分の中の汚い感情に気づき、また自己嫌悪に陥っていった……。

.....

「いや、すっかり話が逸れてしまって申し訳ない。今日の目的は修

業だったね?」

「そうじゃ。先日このバカは彼女持ちにもかかわらず海でナンパを試みよつてのう。この不屈き者の腐った性根を叩き直してやって欲しいのじゃ」

ジジイの言葉を聞き、明久と雄二は気まずそうにオレから眼を逸らす。

どうやらオレを乗せてナンパをするように仕向けた事に罪悪感を感じているようだ。

乗せられたとはいえ、オレが自分の判断でやったことなんだから、別にこいつらが罪悪感を感じる事はないのに律儀な奴らだ。

「それでは皆さん。早速始めますので着替えて外に集合してください。女性陣はそちらの部屋を使ってくださいね」

.....

着替えが終わり、外に出る。オレと静馬は自前の稽古着、他の皆はそれぞれ持参してきたジャージを着ていた。

「わあ、烏丸君その道着かっこいいね。ボクも後で着てみたいなあ」

「あ、ウチも! こういう服ってあんまり見たことないから興味あるわ」

「.....私も興味ある」

「ははは。それじゃあ後で道場にある物を出してくるよ。着るのは.....まあ、教えればすぐ出来ると思うから自分でやってくれ」

うん.....。こいつら意外にこういう服に興味津々なんだな。家に余ってる姉さん達の道着を持ってくれば良かったかな?

「さてそれでは男性陣は私に、女性陣は修介さんについて行ってください」

「師範、よろしいでしょうか？」

「何かな？」

「ジジイに女性陣を任せるのは少し不安があるのですが、入れ替えは出来ませんか？」

「ははは、大丈夫さ」

「そうじゃ！ お主少しは自分の祖父を信頼」

「ちゃんと人数分の防犯ブザー、スタンガン、特殊警棒は渡してあるからね」

「ああ、それなら安心ですね。」

「お、お主ら……！」

「それよりヒロは人の心配をしている余裕はあるのかな？」

「あわわわわ……！」

やっべえ！ この人の後ろに阿修羅が見える！ “スイッチ”が入りかけてる……！？

「久しぶりに手加減なしで特訓ができそうだ……！ ふふふ、楽しみだなあ……！」

（ヒ、ヒロ……！ 僕達一体何させられるの……！？）

（お前の知り合いなら何をしてくるのか予想はつくだろう……！？）

（聞いてどうする？）

（ヤバそうなら）

（………隙を見て脱走する）

（お主ら、往生際が悪いのう……）

（真顔で忠告しとくぞ。やめておけ。死にたいんだったら止めないけどな）

（え？ え？ 死……？）

(兄さん、どういう事?)

(あの人普段は温厚な分稽古中や特訓になると極度のサディストになるんだ。門下生の間ではその状態をスイッチが入るといつている。脱走なんかしてスイッチが入った師範に捕まれば)

((捕まれば?))

(脱走する元気を失くすとかいう理由で特訓内容が命懸けの内容から、更に殺人的な内容に変わる。オレはそれに捕まった門下生を何度か見てきたから間違いない)

そしてこれがオレが師範を苦手としている最大の理由なのだ。

(……脱走は諦めよう)

(そうだな。俺はまだ死にたくない)

(…………… (コクコク))

(うむ。これも貴重な経験じゃ)

「脱走の相談は終わったかな?」

「…………… ツ! (ビクツ)」「」

「え〜っと……………、脱走は諦めるとい方向になりました」

「そうかい。残念だよ。久しぶりに新しい殺人メニューを試してみ
たかったんだけど」

師範の言葉を聞き全員眼を泳がせながら苦笑いを浮かべている。

オレも嫌な汗が止まらない。

どうか全員無事に生き残れますように!

外伝 第12話 修行に行こう！

出発編（後書き）

ユニーク10万突破しました！

ありがとうございます！

企画として未消化の総合評価1000記念とまとめてやっちゃいます！

え？ 違います！ 手抜きじゃありません！ 効率化というやつです！

と、いうわけで次の中から最も要望の多い話を書きたいと思います。

？逃走中のパロディ

？コラボ小説（上手くできるかわかりませんが）

？前と同じ座談会

のどれかをメッセージで送ってください。

その中から最も数の多かった企画を採用したいと思います。

お待ちしております！

外伝 第12話 修行に行こう！ 基礎体力向上編

「さて皆さん。準備体操は終わったかな？」

「はい！」

「うん。元気があつて大変よろしい！」

師範はそう言つてニッコリと笑う。

さっきの台詞に引つ掛かるものを感じるのはオレだけだろうか？

「あれ？ 何で秀吉が此処にいるの？ 女子グループはあっちだよ」

「明久よ、ワシは男じゃ」

「あははは。秀吉は冗談が上手いなあ」

「聞いちゃいねー……」

「そこ！ 私語は慎みなさい！」

「すみません！」

「分かればよし！ それじゃあまずは“軽く”走り込みから始めようか！」

「え？ あの……竜馬さん？」

「吉井君、特訓中は私の事は師範と呼ぶように」

「あ、はい師範」

「よし。なにかな？」

「走り込みって言いましたけど、この辺りは走り込みにはあんまり向いてないような気がするんですけど……」

明久の言うとおりこの辺りは道がまともに舗装されていないデコボコした砂利道だ。

こんな所を走つたら故障の原因になる。

明久にしては鋭い指摘だが、まだまだ見通しが甘い。オレを含めた5人はもう“何処を走るのか”という事に気付いている。その証拠

にみんなの視線は道場まで続く長い、長い階段に向いているんだから……。

「うん、いい質問だね。もう気付いている人もいると思うけど、その片道1?ある階段を10往復してください」

「と、言う事は……階段を10キロ!？」

「明久、計算間違えてるぞ。往復だから20キロだ」

「ふぎやあつ!？」

明久はこの世の終わりを見たかのような顔になって頭を抱えている。まあ、けど安心したよ。20キロくらいならキツくはあるが、こなせない程ではない。

「ヒロ、安心するのはまだ早いよ」

「……………ッ!?(ビクッ)」

「君には特別にこの30kgの砂袋を背負いながら走ってもらおうからね」

「ふぎやあつ!？」

「し、師範! 実は僕朝から体調が悪くて!」

「そ、そうそう! オレもさっきから腹が痛いんです!」

「そうかい。なら選ばせてあげよう」

「「え?」」

「ここで“不慮の事故”で5日間布団の上で過ごすか、走るかのどちらかを」

「「走ります!」」

こうして師範による地獄の特訓は幕を開けたのだ……。

……………

「……ゼエゼエ……マジで……キツイ……ゼエゼエ……」
「バ、バカ野郎……ハアハア……本当に……大変なのは……ハアハア……これからだ……」
「……ハアハア……もっと辛い……ハアハア……何かがあるの……？」
「さっき“軽く”って……ハアハア……言ってみましたから……」
「まだ何かあると……ハアハア……思ってよいじゃろうな」
「……………(グツタリ)」
「おい、ムツツリーニ死ぬなよー」
「……………(コクン)」
「それじゃあ10分休憩したあと、次の場所に移動するからしつかり体を休めておくように！」

助かった……。10分あれば失った体力の6割は回復させる事が出来る……。
ホツとしながら背負っていた砂袋を下ろそうとすると

「ああ、ヒ口。君は今日一日それを背負ったままでいなさい。もし降ろしたら訓練メニューを倍にするからね」
「うえっ!?!」

つて事は今日一日こんな重たいの背負ってこのハードメニューをこなせってか!?! 無茶仰る!

「おや、不服そうだね? もう30キロ追加するかい?」
「滅相もございません!」

弱ッ! オレメツチャ弱ッ!

「はっはっは！ 冗談だよ」

「あ、そうですね……」

「追加分はたったの20キロだからね」

30キロ+20キロ=50キロ

「ふぎやああああつ！」

.....

「に、兄さん大丈夫……？」

「へっ……！ この程度で……！ オ、オレが音を上上げる訳ねえだ
ろうが……！」

「うゝむ……、執念じゃな……」

次のメニューの為山中を移動するオレ達……。

急な山道を50キロの砂袋を背負いながら登るのはキツツイ……！
虚勢を張ってはいるが、もはや体力は空に近かった……。

クソウ……！ 師範め……！ ニヤニヤしながらこつちを見てやが
る……！

悪趣味なサディストめ……！ とか内心毒づくが、師範の方は同じ
重さの砂袋を背負いながら同じメニューをこなしているから文句を
言えない……。

しかも汗一つかいていやがらねえ……！ 一体どんな発汗作用して
るんだ……！？

あと……！ 少し……！

水が落ちる音がする目的地を目指し、ひたすら無心に足を進める。

そして 目的地である滝に到着した……。
なんだか次のメニューが透けて見えるようだ……。
オレの不吉な予感が外れてくれるのを願うばかりだ……。

「えつと……師範？」

「なんだい、坂本君？」

「まさかとは思いますが……次の修行内容とは……？」

「ははは、なんていう顔してるんだい？ まさか『滝に打たれてきなさい』なんて言うと思ったかい？」

思っていました……。良かった……。オレの嫌な予感が外れてくれてホントに良かった

「滝に打たれてきなさい」

「『ギャアアアアアツ！』」「」

オレ、明久、雄二は同時に叫び声をあげた。

その文脈でそれはおかしいだろ！？

「ははは、冗談さ。大人のジョークというものだよ」

「師範、ホントに心臓に悪いのでやめてください……！」

ホントに心臓に悪い……！ アンタの場合ホントに言いそうだから
余計に怖いんだよ！

他の皆の顔色も青くなったり、白くなったり、土気色になったり大
変なんですから……！

「次のメニューは……滝に向かって蹴りを100回」

「アンタ正真正銘のアホや ツ！」

素人さんに何やらせようとしてやがる!?

「……アホ? ヒロ、今君師範である私に“アホ”と言ったかい?」

「あ、いや……! これは、その……!」

「100回追加」

「ギヤアアアアアツ!」

師範は青筋を立てながら、凄くいい笑顔で冷酷な事を言つてのけた。仕方ないじゃないか! オレのツツコミソウルが勝手に反応してしまつたんだから!

皆の同情の視線が妙に痛かつた……。

ええいつ! 男は度胸!

意を決して川の中に足を踏み入れる。流れが急で足を取られそうだ

……!

水深が膝上程度の浅い川で良かった……! これ以上深かったら力ナツチのオレは恐怖で動けなくなっていただろう。

続いて明久達も覚悟を決めて川の中に足を踏み入れた。

なんと言うか……すまない、皆。師範がこんな変態で……。

「—!」

「声が小さあいつ!!!」

「—!!!」

滝に向つて蹴りを繰り出す。

水飛沫がメチャクチャ痛えつ! 水の抵抗の所為で足が重い……!

そして何より砂袋が水を吸つて滅茶苦茶重てえつ!

「—!!!」

上から何か降ってきた。そしてそれがオレのすぐ横に落ちて大きな

水柱が立つ。

「師範！ 上から何か降ってきました！」

「ただの流木だ！ 気にすることはない！ 運が良ければ死なないからね！」

「それって運が悪けりや死にますよね！？」

もうヤダ！ こんな生活！

その後、明久が滝壺に落ちたり、雄二の頭に流木が直撃したり、静馬が流されたり、秀吉が沈んだり、ムツツリー二が死にかけたりと、色々あったが何とか全員生き延びる事が出来た……。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はい、それでは本日最後のメニューに移ります」

「……………」

皆師範の言葉に反応を示さない。否、示す事が出来ない。

スタミナ切れ？ いや、それもあるだろうけど、そうじゃない。

何故なら……オレ達の眼の前にはロクククライミング用の崖がそびえ立っていたからである。高さ約30メートル……。全員それを見上げて最後のメニュー内容を察してしまい、開いた口が塞がらないのである。

「最後のメニューは 崖登りだ！」

「……………」

「安心したまえ諸君！ ちゃんと命綱は用意してあるから！」

そう言う問題じゃねえ

っ！

口には出さないが、誰もがそう思ったはずだ。
嗚呼……、この人は頭のネジが何本か飛んじやってるんだな……。
今朝、『ジジイと友人関係である事が不思議』と考えていたが、前
言撤回。こりゃ類友だ……。ってか、オレのこの水を大量に吸って
濡れた道着と重量の増した砂袋とを背負って崖登りするのか？
……生きて帰れたらいいなあ。

「ファイトオーツ！」
「いっぱーっ！」

.....

優子SIDE

「本日の修行はここまでじゃ！ お嬢さん方、よく頑張ったのう！
それでは、ありがとうございました！」

「「「ありがとうございます！」「」「」

道場で礼をして、アタシ達の今日の分の修行は終わった。

「楽しかったね、修行」
「はい。いろんな事を知る事が出来ました」
「ウチはもうちょっと古流武術の事について知りたかったけどね」
「ほっほっほ、それはまた明日じゃな」
「……夫を捕まえる為の捕縄術もお願いします」
「うむ。勿論じゃ」

アタシ達の今日こなしたメニューはまず夕飯の為の山菜採り、その後毒キノコと食べられるキノコの見分け方の勉強。昼食後に休憩も

兼ねて川遊びをした後、道場で【天源無想流】（だつたけ？）という流派の基礎的な護身術を教えて貰った。基本的に和気あいあいとしていて、ヒロの恐れるような修行内容ではなかった。

「静馬君たち遅いです」

「そうね。何してるのかしら？」

日も傾き始めているのに未だにヒロや秀吉たちは帰ってくる気配はない。

この家のお手伝いさんが作った夕食の匂いが台所から立ち込めてきて、空腹になつたお腹を刺激する。

「あ、帰ってきたですっ」

「あ、ホントだ。おゝい！ え……？」

帰ってきた男性陣はみんな眼から光彩が消えていて、ヨレヨレになっていた。

少し白く見えたのはきつと気のせいではないだろう……。

「バカなお兄ちゃん！ 静馬君！ どうしたですか！？」

「あ……。葉月ちゃん……。僕……。生きてるよね……？」

「はい！ 生きてるです！ しっかりするです！」

「は、ははは……。死ぬ……。本気で死ぬ……」

「明久が落ちかけた時はどうしようかと思つたのじゃ……」

「ヒロと雄二のお陰で助かったよ……」

「貸し1つだ、明久……」

「……………よく生きてたと思う」

「……………」

「はっはっは！ 最近の若者にしてはみんな根性がある！ 正直ヒロと静馬以外は脱落すると思つていたんだが！」

「い、一体何があつたのよ……？」

「聞かない方がいい……。と、どうか思い出させないでください…

…」

「そ、そこまで……？」

「師範……！ これもう降ろしていいですか……？」

「ああ、もういいよ。良くやりきったね」

「だあ　　っ！ 重かったあ　　っ！」

ヒロはそう言つて背負っていたリュックサックを降ろしてその場に大の字になつた。

「一体何を背負つてたのよ？」

リュックサックの中身に興味が湧き、持ち上げようとしても重すぎて持ち上げる事が出来ない……！

「中身は砂だよ。鍛練用の砂袋なんだつてさ。重さは50キロある」

「よくそんな重いもの背負つて訓練してたわね……」

「自分でもビックリだよ……。亀仙人でも最初は20キロだったのに、なんでオレはいきなり50キロ……？」

ヒロが竜馬さんを恐れていた理由がわかつた気がするわ……。

普段元気が有り余つてるFクラスの男子の体力をここまで削つてしまふなんて……！

よっぽど濃い内容だつたんだろう……。

そんな皆に竜馬さんから元気の出る言葉がかけられる。

「みんな、ご苦労様！ 温泉が湧いているから存分に堪能してくれ
たまえ！」

「『『『イエ　　ッ！ 温泉！』』」

「その前に薪割りをしてくれるかな？」
「イエ　　ス！　薪割り！　バツチ来いや　　！」
「今の僕たちなら何だつて出来るような気がするＹＯ　　！」
「薪割りでも、瓦割りでも何でも来いや　　！」
「秀吉、一体どうしたのコレ？」
「何も……聞かないでやって欲しいのじゃ……」
「そ、そう……。わかったわ……」

ヒロと吉井君と坂本君がヤケクソ気味に裏庭まで走っていく。
そして３人は眼を血走らせながら鉈で薪を割っていた。
アタシはその様子を秀吉と一緒に呆然と見守るしかなかった……。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ヒロSIDE

存分に温泉を堪能して飯をたらふく食って、あつという間に就寝時間になった。

静馬と秀吉が寝てるのを確認して、オレ達は部屋の中央に集まる
秀吉は起こそうとしたら明久に全力で拒否されたので、悪いが起こさない方向で……。

「さて、お前ら……夜どすえ……」
「何故京言葉なんだ？」
「いや、何となく」
「それはさて置きお待ちかねの夜だ。やる事は決まってるだろ？」
「了解。猥談だな」
「それも悪くないけど、今回はもっと別の物を用意してあるんだ」
「別の物？」

「そつだ。それじゃあお前ら、ブツを出せ」

ブツって何だ……？

オレは雄二の言葉の意味が分からず、首をかしげている。

明久とムツツリー二はその言葉の意味を理解しているようで鞆から
“とあるお宝”を取り出し、床に置いた。

「お、お前ら……！ このお宝の山は……？」

「ふふふ……！ 姉さんの監視の目を掻い潜って隠し持ってた取っ
て置きの逸品だよ」

「おおお……！ これは凄い……！ それに雄二のブツもムツツリ
ー二のブツも負けず劣らず逸品ぞろいだ……！」

「………フツ、当然だ」

「お勧めはどれだ？」

「………これなんかはどうだ？」

「『健康系美少女の【検閲削除】』か……。いい趣味をしてやがる
………それほどでもない」

「俺のお勧めはこれだな。数ある品の中でも特に気に入っている
「おおお……！ 【検閲削除】 24時 【検閲削除】 したクー

ルビューティー』か……！ スゲエ……！ スゲエよお前ら……！
よくぞこんなお宝を」

尊敬する友人達に敬意の眼差しを向ける。

「けどお前らも水臭いな。そついうの持ってくるって計画してるな
らオレにも声掛けてくれればいいのに。そつしたら最近仕入れたば
つかのお宝を持つてくるのに」

「それはコレの事か？」

「そつそつ、その事 っって何で雄二がそれを持つている！？」

「行く前に修介さんに渡された。」

「あつの！ クソジジイ！ いつの間にオレの工口本の隠し場所を把握しやがった!？」

「落ち着け、ヒロ……！ 声がでかい……!」

「わ、悪い……!」

静馬と秀吉が起きてないかを確認した後、部屋の外に出て辺りを確認する。

どうやらさっきに騒ぎを誰も気にとめてないようだ。

「はあ……。近いうちに部屋に鍵を付けないといけないな……」

「まあ、とりあえず済んだ事はいいいじゃない」

「……………それより今はこのお宝の鑑賞を優先すべき」

「ムツツリーニの言う通りだ。次の行動に移るぞ」

「あとはその部屋に忍び込んでこの素晴らしきお宝を鑑賞するだけか？ オーライ、大将……！ じゃあ2階に行こう……！ あそこだったら師範もめつたに使わないから、安心して鑑賞会が出来るはずだ」

「よし。それじゃあそこまでの案内頼んだぞ……!」

「了解。こつちだ」

……………

優子SIDE

眠ってしまった葉月ちゃんに布団をかぶせ、アタシ達は部屋の中央に集まっていた。

「それじゃあ恒例のガールズトークを始めようか」

「……………今回はこんなものを用意してみた」

「サイコロですか？」

「……（コクン）これを振って誰がどのテーマを話すか決める」

「面白そうね」

「……それじゃあ振る」

「あははは、何が出るかな？」

代表がサイコロを振りそして

「優子が初恋の話をする」

「ア、アタシ!？」

「はい、それじゃあ優子ちゃんお願いします」

「ウチもすごく興味があるわ。優子の初恋がどんなだったのか」

「~~~~~!?!?!?」

「……優子、白状する」

「往生際が悪いよ」

完全に包囲されて逃げ場はなかった。こうなったらもう覚悟を決めるしかない!

「もう、仕方ないわね……。笑わないでよ？」

「絶対に笑いません!」

アタシの初恋は

「名前も知らない男の子なの」

「名前も知らない、ですか？」

「うん。確かアタシが小学生の頃だったかな？ 秀吉と二人で出掛けた事があつただけけど、その時に秀吉とはぐれてアタシも道に迷っちゃって 知らない土地で、たった一人だったから心細くて泣きそうだった時にその男の子が助けてくれたんだ……。」

「なんだかいいね。そういうシチュレーション……」
「うん。その男の子がね、遅くまで秀吉と一緒に探してくれて、道を教えてくれてそれでアタシ達は無事に家に帰る事が出来たの。その後何度か秀吉と一緒にその男の子に会いたくて、その町を探したんだけど、ついに見つける事は出来なかつたんだあ……」

今、あの時の男の子は何処でどうしてるんだろう……？

あの時あの子が言っていた『オレを心配する人なんかいない』って言う言葉……。

今ならその言葉を『絶対にそんなことない』って否定する事が出来る。

ヒ口と関わっていくうちに、アタシの今まで知らなかったことを知って行くうちにそう思うようになった……。

人は一人では生きていけない。

孤独を隣人にすることは出来ない。

心配する人がいないなんて事は絶対はない。そう思っている人がいるのならそれはその人が気付いていないだけなんだと思う。

恵まれた人間の考え方だつて笑う人もいるかもしれない。

それでもアタシは　そう考え続ける事をやめるつもりはない。

そうじゃないと、とても哀しいからだから

『明久が持つて来た　も　じゃねえかつ！』

『　僕よりもヒロの　！』

『　何でデメエ　！』

煩いわね！　人が真剣に考えてるのに！

「アキ達何を騒いでるのかしら？」

「……気になる」

「じゃあ、今から皆で向こうに行かない？」

「い、いいんでしょうか……？」

「いいんじゃない？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ちよつと遡ったヒロSIDE

こつそり2階のDVDプレイヤーのある部屋に忍び込み、雄二の持つてきたお宝を入れて再生ボタンを押した。

「おおお……！？ 何この道具……！？」

「えええ……！？ そこまでやつちゃうの……！？」

「うわっ……！ ホントにやるのか……！？」

「まだまだ……ここからがいいところだ……！」

「うおおおおお……！？」

「……………ッ！？」(ブシュウウウウ)

雁首そろえてお宝ビデオを鑑賞しているバカ4名……。ムツツリーニは再生ボタンを押してから約1分で鼻血の海に沈んでいった。己が信念に殉じた漢・ムツツリーニに敬礼をした後、すぐ画面に視線を戻す。

その顔は完全に鼻の下を伸ばしている状態だった。

ところでさつきから気になってたんだが

「この女優、霧島に似てないか？」

雄二の動きが止まり、ブリキ人形の様な動きでゆっくりと振り向いた。

「ヒ、ヒロ何を言っテやガルんだ？ そんなハズないだろ？」

そんな雄二の様子を見て明久は意地の悪い笑みを浮かべながら口を開く。

「まったく雄二も素直じゃないなあ」

「ぐ……！ 明久の持ってきたコイツも姫路と島田を足して2で割ったような容姿じゃねえか！」

「ああ、ホントだ。ポニーテールの巨乳か……。なかなかいい趣味をしている」

「なななな何の事かな！？ ヒロのコレクションだって木下さんが大人になって胸が大きくなったような感じの人が多かったじゃないか！？」

「なんでデメエがオレのコレクションの傾向を知ってたんだ！？ 家探しか！？ この前家出したときに家探したのか！？」

その後しばらく口論が続き、話はお宝の趣味の話になっていた。

「だーかーらー！ 巨乳と年上のコンボは最強なんだって！」

「お前の趣味は偏りすぎてるんだよ！」

「なんだと！ 巨乳を馬鹿にするなよ、雄二！」

「明久の言う通りだ！ お前はあのけしからん物体を見てなんとも思わないのか！？ それでも【検閲削除】はついているのか！？」

「アンタ達真正銘のバカね……」

「なんで男ってそんなくだらない事を熱く語れるのかしら……？」

「……永遠の謎」

「ですね……」

「バカって言うな！ お宝ビデオの議論は世界で いや、宇宙で

一番大事なことなんだぞ！」

「そうだよ！ ヒロの言う通り！ さあ、次のビデオを見よう！」

「だな。気を取り直して次はムッツリーニの持って来たこのビデオを」

「うお……………！ 今度は工藤似の女優か……………。それじゃあスイッチ」

「……ん？」「」

そこまで言ってやっと異変に気づいた。

あれ？ オレ達今誰と話してたんだ……………？

その疑問を解決させるべく、ゆっくりとうしろを振り返る。

そこには凍りつくような殺気を纏っている優子が いや、優子だけじゃない。

葉月ちゃん以外の女性陣が仁王立ちしていた……………。

唯一工藤だけはニコニコと笑っていたが、助けてくれる気はないようだ……………。

「え、お嬢さん方何故ここに？」

「あれだけ大声で騒いでいたら下の階まで筒抜けよ。ヒロ、ここで一体ここで何をしていたのカシラ？」

「えーっと……………保体のお勉強……………」

「そう……………。じゃあ、この参考書の題名を読み上げてくれないかしら？」

「え、いや……………！ そ、それは……………！」

「は・や・く！」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！

断ったら 殺られる！

「……………ナ、ナースななえ……………【検閲削除】な夜……………」

何この羞恥プレイ!? ハンパなく恥ずかしいんですけど!?

「……雄二、お仕置き」

「待て翔子! 話せばわか頭蓋が割れる~~~~~!」

「アキ?」

「覚悟はいいですか?」

「や、やだなあ……2人とも……。なんでそんなに殺気立って

待って! 僕を縛って何処に連れて行くつもりなの!? 美波!

そのスコップは一体何に使うつもりなの!?」

「ムツツリー二君このプレイはね、【検閲削除】の【検閲削除】っ

ていって【検閲削除】を【検閲削除】するときに

「……………!?!?」(ブシューウウウウウウウ)

「さて、次はアンタの番よ?」

「まあ待て、優子。何でもかんでも暴力で片付けてしまうのはよくないと思う。人間には対話という意思の疎通の為のコミュニケーション能力があり、それを行う事によって双方の誤解を解くでき背骨がミシミシいつてる~~~~!?!? 何これ!? 何だこれ!? いつもより5割増しくらいで痛いんですケド!?!」

「今日お爺さんに習った基本を守って技をかけてるだけよ」

「あんのクソジジイ~~~~! 余計な事を アアアアアアアア

アアアアアアアッ!」

こうして1日目の記憶は途切れた……。

翌朝、オレは師範の家の軒先でミノムシの様に吊るされており、明久は庭先に首から下を埋められていて、雄二は拘束具をつけられ木馬の上に座らされていて、ムツツリー二は血の海に沈んでいた……。

殺されなかっただけでも良かったと、喜ぶべきなんだろうか……?

……………

.....

NO SIDE

「本当にやるのかい？ ヒロには『無想』の修行はまだ早すぎると
思うんだけど……」

「いや、アヤツならやり遂げるじやろう……。竜馬も知っておるじ
やろう？ ワシにはもう 時間が残されていないのじゃ……」

「……………」

「ヒロのお陰でワシは修一との溝を埋めるきっかけが出来たのじゃ
……。これはワシが孫の為に出来る唯一の事なんじゃ……。ワ
シはヒロにワシの全て技を伝授してやりたいのじゃ……」

「……………わかった……。ヒロに『無想』を伝授する為の手助けを
約束しよう。ただ 危ないと思ったからすぐに止めるからそのつも
りで……………」

「……………すまぬ、竜馬」

外伝 第12話 修行に行こう！ 基礎体力向上編（後書き）

後半少し下品になりましたが、広い心で許して頂けると幸いです…。

以前とつたアンケートの結果、逃走中のパロディが見たいけど、コラボも読みたいという意見が多数寄せられた為、両方やることにしました！

現在あづまさん作『バカとテストと報告者』の主人公『保科望』君の出演が決定しております。

もし他にもコラボを了承してくださるチャレンジジャーな方はお知らせ下さい！

未熟者ですが、精一杯書かせて頂きます！

果たして『無想』とは何か！？

次回更新をお楽しみに！

外伝 第12話 修行に行こう！ 心の傷編

誰かが言っていた。『人間は慣れる動物だ』と……。

オレはその考えには共感する。確かに人間は適応力が高く、突然放り込まれた環境でも経験を重ねるうちに順応してしまう。

最初は嬉しくてしょうがなかった物が、慣れてしまつて何も感じなくなつたり、最初は嫌でしょうがなかった人からの悪意も時間が経つにつれ、何とも思わなくなつたり、最初は難しかった仕事も慣れてしまつと上手くこなせる様になつたり、と善悪問わずに様々なケースがある。

そして 最初辛くて仕方の無かつた修行も3日間連続でやっているとある程度慣れるもので、多少の筋肉痛は残るが初日の様に終わった瞬間に倒れるなんて事もなくなつた。

そして 4日目の朝……

「さーて、今日も一日頑張りますか!」

「ヒロ」

「あ、師範! おはようございます!」

「うん、おはよう。今日はみんなを道場の方に集めておいてくれ」

「あ、はい! わかりました!」

「うん、よろしく頼むよ」

「道場で? 師範、今度は何を企んでいるんだ?」

「地獄の掛稽古かな?」

「いや、オレや静馬はともかく未経験者のお前等にそんな事をさせるとは思えない。」

「わからないよ。お爺ちゃん的事だし……」

「……………何が来るか分からない」

「ムツッリーニの言う通りじゃ。油断させてからザックリ来るのが

師範の常套手段じゃからのう」

「そうだな。油断は禁物、だな」

この3日間でオレ達は師範の考えそうな事をすっかり把握しており、人を信じるといふ純粹で清い心を無くしてしまっていた……。

.....

一礼して道場の敷居を跨ぐ。

何人かの門下生が手伝いの為に呼ばれていたようで、オレ達を見て頭を下げる。

オレ達もそれを見て、頭を下げた。

懐かしいな……。昔来た時と全く変わってない……。

独特の張りつめた空気……。

防具の放つかびと汗が混ざった何とも言えない妙な臭い……。

本当に……。懐かしい……。

床に正座して上座を向く。明久達もそれに倣って正座をした。

師範とジジイが上座に座り、オレ達と向き合い

「それでは今日の稽古を始めます！ 気をつけ！ 礼！」

「「「よろしく願います！」「」「」

今日の稽古が始まった。

.....

NO SIDE

明久達は稽古の手伝いに来ていた門下生達に基本的な事を教わっていた。

擦り足の練習、竹刀の振り方、踏み込みのタイミング e x t
彼らの教え方はとても上手く、親切で明久達も楽しそうに竹刀を振っている。

初日から3日間にわたる地獄の基礎訓練に比べたら天国の様だった。

そして大貴はと言うと　まず外の敷地何周か走り、1時間程度打ち込みをした後、体が温まって万全の状態になるのを確認し、修介と立ち会う事になっていた。

審判は主審が竜馬、副審の2人は門下生、そして静馬は下座で正座をしながら見取稽古。

大貴と修介は防具を着け、開始線まで行き、互いに礼をする。そして蹲踞

「開始！」

「ヤアアアアアアッ！」

開始の合図と同時に大貴と修介の掛け声が道場に響き渡る。両者竹刀の先端で中心部を捉えようと探り合う。

先に相手の中心部を捉えたのは大貴だった。そのまま飛び込み面を繰り出す修介は竹刀を斜めに立ててその攻撃を逸らす。

大貴もそれを予測していたかのような動きでさらに連続で打ち込んでいく。

修介はそれをすべて受け止め、一気に大貴との間合いを詰めて小手を打ち込もうとするが、それを読んでいた大貴はさらに間合いを詰め、鏢迫り合いに持っていく。

しばらく鏢迫り合いは続いていたが、大貴は修介の体制を崩し引き面を打ち込んだ。

副審の一人が旗を揚げるが、主審ともう一人の副審は浅いと判断したようで、下に旗を振っている。

大貴はそんな様子を気にすることなく再び猛攻を仕掛ける。

まさに烈火の如き攻めであり、修介はそれを防ぐのが精いっぱいだった。

それもそのはず。大貴は剣術だけで言えば紛れもない“天才”であり、この時点で修介の技量を遙かに上回っていたからである。

しばらく猛攻は続き、無酸素運動も限界に達した大貴は一旦鏢迫り合いまでもつていく。修介は何とか反撃の糸口を掴もうと大貴の体制を崩そうと考えたが、崩す事が出来ない。

完全に大貴が修介を圧倒していた。

「やめ！」

竜馬が一旦試合を止めて、仕切り直しをさせる。その間に大貴は既に息を整えていた。

いける！ この調子ならジイサンに勝てる！

運動量はオレの方が上！ 剣速もジイサンの十八番の上段を使わせなければオレが上をいつている！ 上段を使う暇は与えない！ このまま一気に押し切ってやる！

大貴はこの試合に確かな手応えを感じていた。

今まで壁であり続け、目標としていた祖父をついに超える事が出来るという喜びがあった。

「はじめ！」

「イヤアアアアアアアアアアアッ！」

「キエエエエエエエエエエッ！」

2人の氣勢が道場を包み込む。こういった雰囲気慣れていない明久達は振っていた竹刀を止め、気当たりを起こしつつも、その激しい試合から眼を離せなくなっていた。

そんな中、大貴はある違和感気づく……。

おかしい……？ ジイサンの周りを包む空気が変わった……？

修介は先ほどまでと違い、静かだ……。しかし感じる^{プレッシャー}圧迫感^{プレッシャー}は先ほどまでとは比べ物にならなかった。

大貴はまるで自分の動きがすべて修介に見透かされているような感覚を覚えたのだ……。

動こうとしても体が重く思うように動かない……。摺足で間合い縮めようとすると、その動きで水面に波紋を作りだしている様な感覚に襲われる……。戦慄が走り、鳥肌が立った。

何を迷っている……？ 攻め込まなければ……！ 何も始まらないだろう……！

修介の放つ静かな^{プレッシャー}圧迫感に吞まれかけながらも、何とか気を取り直し、連続で剣戟を放つ大貴……。

しかしその剣はすべて修介を捉えることなく、空を切った。

「アアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

それでも尚、連撃を続けるがそれもすべて無意味に終わった……。

ジイサンの動きが変わった……！？ 相変わらずオレの方が剣速も運動量も上のはずだ！ それなのに 全く当たる気がしない

……！？

仕切り直す為に間合いを取り直す。そして今度は足捌きを最大限に生かし、左右から揺さぶりをかけて嘘実を織り交ぜた攻撃をしかけ

る。

しかし口は完全に無視されて、その中に織り交ぜた実だけを確実に塞がれていた。

もう一度間合いを取り直し、修介の間合いの外からの飛び込み面を試みるが

「小手ええええっ！」

踏み込むために一步踏み出した瞬間、修介が更に一步踏み出してきて間合いに入った瞬間に一本を取られてしまったのである。

なんでだ！？ “先”に動いたはずのオレが何故“先手を取られて”いる！？

大貴はなぜ自分が追い詰められているのか分からなかった。

一旦開始線に戻り気を落ち着ける。

落ち着け……！ ジイサンが“何か”しているのは明らかだ。だつたらそれを 見極めてやる！

そして2本目、修介は得意の上段の構えをとり、面を狙う。それに対して大貴は平正眼に構えて来るべき打突に備える。

修介がゆっくりとした動きで間合いを測る。大貴は狙いを定めさせないようを送り足で円を描くように移動する。

そして修介が微かに左腕を動かした。

来る

パアアアアンツ！

「な……!?!」
「一本! それまで!」

大貴は修介の上段から放たれる面に反応することすら出来なかった。いや、大貴の優れた動体視力をもってしても見ることもさえないわなかつたのだ。

修介の動きの起こりを察知した瞬間に一本を取られていたのである。

それは天源無想流の天才児とまで呼ばれた烏丸大貴の完全な敗北であり、自信を砕くには十分すぎる一撃だった……。

.....

ヒロSIDE

……負けた……。完膚なきまでに叩きのめされた……。
面を取り、師範の元に向かい正座をする。

「なぜ負けたのか、わかるかい?」

「……分りません……。途中までは確かな手応えを感じていたんですが、何故かこちらの動きが全部先読みされた上に、先手を取ったはずなのにいつの間にか後手に回っていたり……。途中で訳のわからない感覚になったんですが、いや、すみません。忘れてください」

こんなの言い訳に過ぎない。オレは負けたんだ。完全に……。
積み重ねた自信は木っ端微塵に砕かれ、惨めな気持ちで一杯だった。剣術であんなに完全にやられたのは、生まれて初めてだった。

そして何より、自分がなぜ負けたのか分からないと、いう事が余

計に悔しさに拍車をかけていた。

「ほう？　そこまで感じられたのかい？　大抵の者はここで『無想』を使われた事に気付かないんだが」

「？　『無想』？　どういう事ですか？」

「いや、何……君が勝てなかったのも無理はない。さっきの修介は

天源無想流の奥義『無想』を使っていた状態なんだからね」

「奥義……？　『無想』……？」

「どういう事だ？　訳が分からない……。」

そして脇にいてずっと口を閉ざしていたジイサンが口を開いた。

「『無想』とは其れ即ち究極の集中也」

「……究極の　集中……？」

「そうじゃ。説明しても分からないじゃろう？」

習うより慣れ

ろ、じゃな。これよりお主にはこの『無想』を習得するための修行をしてもらう！　ついてこい！」

習得……！？　ってことはオレもあんな動きが出来るようになるのか！？

『無想』……。　どんな技か分からないが、絶対に修めてやる！

そして今度こそ　ジイサンに勝つ！

道場を出て行くジイサンの後に続き、一礼して道場を出る。

そして小走りでジイサンを追いかけた。

まだまだ……！　オレはこれからだ！

.....

「ここは……？」

道場より少し歩いたところに、ただ広いだけの空っぽの部屋しかない小屋があった。

こんな所に連れてきて一体何をやらせようってんだ？

「ここ『無想』の修行をするための部屋じゃ。ここでは聴覚と視覚がこの完全に感覚を遮断される。お主にはここで瞑想をしてみよう」「瞑想を？ この部屋で？」

「そうじゃ。この部屋で瞑想をすることによってより深く集中の世界に入る事が出来るのじゃ」

「深い……集中の世界……」

「その状態を3時間継続できればこの修行はクリアじゃ」

「たった3時間でいいのか？」

とてつもなく煩い部屋ならともかく、こんな静かで暗い部屋で3時間瞑想する事なんて簡単すぎるんじゃないか？ ……いや、油断は禁物だ。天源無想流の奥義の修行というくらいだ。きっと何かあるはず……！

「最初に言っておくぞい。この修行は命がけとまではいかずとも、相当危険なものじゃ。下手をすれば精神に異常をきたすこともある。それでも」

「ハッ！ それこそ今さらだろ？ そんな事くらいで諦める訳がねえ」

「………。堪えられぬと判断したらすぐに出るのじゃ。さもな

くば」

「さもななくば？」

「最悪の場合再起不能になる」

「………上等。やってやるぞ」

ジイサンはいつになく真剣な表情だ。冗談抜きでヤバい修行なんだから……。
けどな、ここは譲れない。譲る気はない。ここで尻尾を巻いて逃げるなんて選択肢は初めからありえねえ！

「それでは開始じゃ」

暗い部屋の中に入り、ジイサンが外から扉を閉める。
そしてオレは無音の空間と無明の闇に包まれた……。

.....

.....。

.....。

.....。

.....。

アレからどれ位経っただろう……？

時間の感覚が全く分からない……。

自分の心臓の鼓動がよく聞こえる。呼吸の音も、脈の音も……。

色々と考えていた……。学校の事、友達の事、優子の事、家族の事、

本家の事、これからの事、そして　　これまでの事……。

キイイイイイン

何だ！？　いきなり……耳鳴りが……！

心臓が早鐘を打ち、呼吸が荒くなり、脈拍が乱れている。

クソッ！　まだやれる！　やってみせる！
オレには　まだ　　！

『おいおい、やり過ぎやないか？』

誰かいるのか！？

『こいつもう気絶してるぜ？』

『ハッ！　かまやせないさ。どうせこいつは愛人の子だ。俺達のオモチャにうつつつけだろ？』

ここは？　本家！？　何でここに！？

数人の男たちが何かを囲んで優越感たつぷりに笑っている。
囲まれてるのは　子供か？

『そうだな。ご当主に捨てられて、いらなくなった物を俺達が再利用してるだけだから、これはリサイクルだって』

男たちに囲まれている子供はグッタリと力なくその場に横たわっていた。

それを見て男たちは尚、楽しそうに談笑している。

やめろ……！

『ぎゃはははは！　リサイクルか！　上手いこと言うじゃないか！』
『オラ、さっさと起きろよ！』

バケツの中の水を子供にかけて、無理やりおこす。

少年の吐く息が白く、水を被せられてガタガタ震えていた。

やめろよ……！

『う……！』

『テムエに寝てる暇なんてねえぞ！ 俺達のストレス解消の為にしつかり働けつての！』

ガッ！

『ゴホゴホ……、う、ええええええ……』

もう……、やめてくれ！

思いつきり腹を蹴りあげられ、少年は咳込んだ後、嘔吐した。その様子を見て周りの男たちは汚い物を見るように、不愉快そうな顔をした。

『うえっ！ こいつ吐きやがった！』

『うわー、汚ねえ！』

『行こうぜ。こんな汚ねえ奴にこれ以上構ってられるか』

『そうだな。帰ってゲームでもしようぜ』

『ああ。そういえばあそこのダンジョン何だけどよ』

関心を失ったようにその場を去る男たち。取り残された少年はしばらくそのまま腹の痛み悶絶していたが、しばらくすると起き上がってこちらを見ていた。

オレは動く事が出来ない。その少年は　　オレだった……。

『な……！？ オ、オレ……！？』

『そうさ。お前はオレだ』

『！？ ……この悪趣味な光景はお前が……！』

『そうさ。お前が自分の本当の願望を忘れてる様だから、思い出さ

せてやるうと思ってな』

『テメエ……！』

『そう睨むなよ、オレ。お前だって気付いてるんだろう？ 自分の
本当の願いに』

『……………』

『お前の本当の願いは』

『黙れ！』

『本家の連中への』

『黙れ！』

『復讐、そして』

『うるせえ！ 違う！』

『自身の破滅なんだよ』

『黙れええええええええええええええええつ！』

『そう頑なな態度をとりなさんな。楽に考えようぜ？』

『……………ツ！ そんな願望はオレにはない！』

『なら何故声を荒げる？ 違うならもつと冷静に否定できるはずだ。』

“オレ”はそういう人間だ』

『黙れ！ “テメエ”が“オレ”のはずがない！』

『違うな。“オレ”は“お前”だ。そして“お前”は“オレ”だ。』

自分の憎悪に蓋をするなよ。ジイサンの為？ 違うだろ。オレは“

逃げたい”から誤魔化して生きてるだけだ。向き合った気になって

ただ 逃げてるだけだ』

『逃げてねえ！ オレは向き合ったださ！ 過去と！ 自分と！ 父

親と！』

『オレが頑なに自分の願いを否定する理由は あいつらか？』

『……………ツ！』

『なら言つてやる。“オレ”はあいつらに特に木下優子に依存して
るだけなんだよ。』

『……………』

『自覚ありか？ オレはあいつらに絶対的な“絆”を感じてそれに

浸り切り依存してる。だからオレの中の真黒な感情を知られたくなくて、知られる前に蓋をした。“ジイサンの為”だって自分に言い訳しながらな」

『 違 ！ ！ 』

『 “違う”なんて否定はさせない。まだ憎いんだろ？ 殺したいほど憎いんだろ？ 』

『 黙れ……！ ！ 』

『 だったら我慢する必要なんてない。その感情を解き放つてしまえよ。本家の連中に復讐しようぜ？ 与えられた能力すべてを使って灰になるまで……。そうする事によってオレの願いは叶う』

『 断る！ 』

『 自分に言い訳するなよ。正直になろうぜ？ その為に必要なら“あいつらを切り捨てる”よ』

『 オレの ！ オレの大事なものを否定するな！ 』

『 “オレ”に大事なものなんてない。誰からも大事にされなかったオレがどうして他人を大事にすることができる？ 出来やしないさ。』

『 大事にされなかった事なんてない！ 姉さんや絃馬さん！ ジイサンだって！ 』

『 我ながらおめでたい奴だな。それとも見ないようにしていただけか？ 厄介者の“オレ”が誰かに愛されるなんてあるわけないだろ？ お前は嘘つきだ。明久達への友情も嘘だ。家族への親愛の情も嘘だ。優子への情愛も みんな嘘だ。だって 』

『 それ以上言うな！ 』

『 オレの中には 』

『 もう……やめてくれ……！ 』

『 愛なんてないんだから……』

『 やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおつ！……！ 』

心の一番奥底に沈めたパンドラの箱の蓋が開いた……。

憎メ 全テヲ憎メ 才前ヲ生ミ出シタコノ世ヲ憎メ 才前ヲ否定シ
タ全テヲ憎メ

才前ハ存在シテハイケナカッタ オレハ存在シテハイケナカッタ
誰モ才前ヲ必要トハシテイナイ 誰モオレヲ必要トハシテイナイ
ダツタラ 壊セ 壊セ 壊セ 壊セ 壊セ 壊セ
ソシテ 壊レロ 壊レロ 壊レロ 壊レロ 壊レロ 壊レロ
スベテ 壊シ 壊レテシマエ

『もう……やめてくれ……!』

『 次に来たときに答えを聞こう。それまでお別れだ』

.....

N O S I D E

「大貴は？」

「そこで寝ておる。恐らく 自分のトラウマを目の当たりにした
のじゃろっ……」

「大貴のトラウマが此処まで深いものだったとは……」

竜馬と修介の顔色は蒼白になっていた。大貴はあれから過呼吸で倒
れ眼を覚まさない。

「修介、これ以上はダメだ！ やめさせよう！ このままでは再起
不能になってしまう！」

「……………」

「修介！」

「……………勝手に決めないでください。オレは……………まだやれますよ……………
……………」

「大貴！？ 眼を覚ましたのか！？ ダメだ！ これ以上は許可で
きない！」

「許可が無くてもやります。師範、邪魔をしないでください。アイ
ツの全てを……否定しなけりゃオレは……！」

大貴は眼つきを鋭くさせる。その眼には暗く、鈍い光が宿っていた。
それを見た竜馬と修介は 何故か大貴に反論する事が出来な
かった。

「ヒロ！」

修介でも竜馬でもない声が廊下に響き、大貴は足を止め振り向く。
声の主である優子の方を振り向いた。

「何？ 何か用？」

「え……？」

大貴の声はいまだかつて無いほど冷たかった。
声から自分が大貴から拒絶されているのが伝わる。
大貴の今まで見せたことのない冷たい表情に優子は身を固くしたが、
すぐに彼を止めるべく正面に回り込んだ。

「……どけ」

「……………」

大貴は優子を睨みつけて、更に冷たい声で言うが、優子は一歩も引
かない。

修介と竜馬は大貴のあまりの変貌ぶりに息を呑んだ。

今の大貴はかつて蓋をした本家への憎悪が腹の底で煮えたぎってお
り、触れるもの全てを傷つけそうな空気を纏っていた。

「……もう一度だけ言う。どけ」
「嫌よ！ 今のアンタは 何処がおかしい！」
「だったら何だ？ お前には関係ない」
「ヒロ！」

その一言に優子は怒り、大貴を殴ろうとするが、いとも簡単に防がれる。

「意味のない事するなよ。所詮は他人の問題だ。お前……………邪魔なんだよ……………」

何も……………何も要らない……………。

はっきりとした大貴が優子に対して言った拒絶の言葉だった。
優子の眼から涙が流れる。

そしてもう用はないとばかりに優子を押しつけ、その場を後にした。

独りになりたい。

「大貴！」
……………。

優子の呼びかけにもう大貴は反応を示さなかった。

再び回り込んできた優子に胸倉を掴まれ、優子に強引に引き寄せられ
唇を重ねられた……………。

「！？」

大貴は何が起こったのかわからないという顔をした。

そして優子に抱きしめられ、大貴の力が抜けた。

はたで見えていた修介と竜馬は事態が全く理解できず、眼を丸くしている。

優子の体温が大貴に伝わり大貴の眼から涙が零れ、優子を力一杯抱きしめた。

「なんでだよ……！ 何で……！ 独りにしてくれない……！？」

どうして優しくするんだ……！？ どうして …… けて……

！ 助けて、優子……！ …… 暗い所に引きずり込まれていきそう

で……どうしようもなく……怖いんだ……！」

外伝 第12話 修行に行こう！ 心の傷編（後書き）

書いてる最中相当きつかったです。

ヒロの豹変のあたりで特に……。

しかし今回のこれは自分を見つめなおす、そしてヒロが他人を頼ると、という場面を書くためには絶対必要だと思い書きました。

お叱りは作者にお願いします。

無想の正体はもう少し引っ張ることにしました。
もう少しお待ちを！

外伝 第12話 修行に行こう！ 無想習得編

あれから、何時間か優子にしがみついて泣き続けていた。

優子はそれを黙って受け止めてくれていた……。

あれだけ酷い事を言ったのに……。

罪悪感が胸を締め付ける……。

「優子はオレの母親が父親の愛人だったって事は知ってるよな？」

「……………うん」

「母親が死んでからオレ本家に引き取られて ずっと虐待さ

れてたんだ……………」

「……………」

「あいつらにとってオレは玩具でしかなくて……………。毎日毎日気絶するまで殴られた……………。助けを求めても……………誰も助けてなんてくれなかった……………。父親だって……………あいつはオレの存在自体煩わしく思ってた……………オレがどんな目に逢っていても……………ずっと見て見ぬふりをしてた……………。だから……………オレは……………毎日自分が消えてしまえばいい……………。生まれなくなかった……………。って思ってた……………」

「……………」

「否定するなら……………！ 何で……………！ 最初から……………！ いらぬなら……………！ 最初から引き取るなよ……………！ 何で……………！ 何で……………！」

「……………」

「だから……………全部恨んで……………全部ぶっ壊してしまいたかった……………。自分が闇にとらわれて破滅するんだったら……………オレを否定した全部を……………道連れにして、オレをこんなにした奴等に復讐して……………消えてしまいたいって思った……………」

「……………」

「けど姉さんやお前らと会って……………だんだん穏やかになって……………自分があるのが許されるような気がして……………それでこの気持ちに蓋を

した……。 “誰かの為” って自分に言い訳をしながら……。それが今日蓋をしたものが開いて…… 噴き出して……！」

「……………」

「…… 本当に…… どうしようもない……！」

「どうしようもなくなってる……！ アンタは……！ 他の誰がアンタを否定しても……！ アタシはアンタの 烏丸大貴の事が好き！ 秀吉達だってそう！ そうよ！ アンタは アンタが思ってるような人間じゃない！ 人の痛み真剣に考える事が出来る人間よ！ だから…… そんな悲しい事…… 言わないで……！ アンタは…… ここにいていいの！ いてほしいのよ！」

ずっと…… ずっと…… ずっと…… 言うて欲しかった事を言うてもらえた……。

自分が必要とされているという言葉……。

自分の存在を許されたという事実……。

優子の言葉の暖かさの中……、傷が癒されていく……。

もっと早く助けを求めればよかった……。

思えば自分の根っこの部分の事で人に頼ったのは初めてだった。

そのあと二人きりでいるんな話をした。

許されたような気がした……。

蓋をした汚い感情が許されたようなする……。

許されて…… 救われたような気がする……。

やっぱりオレはオレの周りの人たちも大事だ……。

憎しみを捨てる事は出来ないけど…… それでも……。

そのまま…… 安らかに眠っていった……。

……………

修行最終日……。

オレはもう一度あの部屋に入り、座禅を組んでいた。昨日の様な妙な感覚は何もなかった。ただ、ただ落ち着いて座禅を組んでいられた。

恐らく昨日、優子に何もかも吐きだしたのが、原因だろう……。大丈夫だ……。穏やかな気持ちでいられる……。

そのまま自分の心の奥へ、奥へ……。

『今日は随分落ち着いてるじゃないか』

『まあな』

『答えを聞こうか？』

『……“お前”が“オレ”なんだったら言わなくても分かるんじゃないか？』

『……お前正気か！？』

『正気さ。オレは 復讐はしない。そんなもって幸せになる！』

周りも幸せにする！ お前はオレの中に“愛はない”って言ったけど、そんなの知ったことか！』

『何でだ！？ 何故！ 違っただろ！ オレはまだ本家の連中に対する憎しみが募ってるんだぞ！ あの時の苦しみを忘れたのか！？』

『忘れてないさ。毎日気絶するまで殴られたり、真夏に脱水症状を起こすまで密閉空間に閉じ込められたり、冬に冷水をかけられたり、食事にガラス片を入れられたり……忘れられるものか……』

『なら何故だ！？ 何故復讐せずに矛を収められる！？』

『お前がオレに言ったんだろ？ もっと楽に考えろって。んで、考えてみた。確かにお前の言う通り、本家の連中に対する憎しみとか色々あるけどさ、今オレが手に持っているものに比べたらすごく軽いんだよ。それを手放してまで復讐に走る気はない』

『お前に傷はそんなものじゃないだろ！？』

『そうだな。けどもう決めた。全部飲み込んで前に進むって決めた。』

その先に何があっても……。オレは、さ……。幸せになりたいし、幸せにしたいんだよ。皆で笑っていられば最高だと思っ」

「……お前は……。！ オレ独りでこの暗闇に吞まれるって言うのか！？ オレを捨てるのか！？」

「……。お前ってホントにバカなんだな。あ、いや……。お前はオレなんだから当然といえば当然か……。」

「……どういう事だ？」

「“お前”は“オレ”なんだろ？ “オレ”が幸せになるときは“お前”だって幸せだ！」

「な……。！？」

「はあ、そんなことにも気付かないとは……。我ながら間抜けというか、なんと言うか……。まあ、とにかくだ！ オレはお前を否定しない！ 一生かけて向き合う覚悟は出来た！ それがオレの答えだ！ 何か文句あるか！？」

「ハア……。本物のバカだな、お前は」

「“オレ”は“お前”だ。オレがバカって事はお前もバカだろ？」

「フツ、そうだったな」

「おい？ 何かお前薄くなってるかい？」

「その言葉忘れるな。そしてオレの事も忘れるな。……。お前がまた揺れた時におれはまた出てくるぞ……。」

そうして……。満足そうな笑みを浮かべて“オレ”は消えていった……

『上等だ。来るなら来い。何度だって 向き合ってやるさ……』

……

.....

「3時間……。クリアじゃ」

ジイサンの声がかして眼をゆっくりと開ける……。強い光が目に入ってきてやたらと眩しかった。
……。トラウマ、か……。オレの中にあんなのがいるとは思っていなかったな……。
周りの景色がやけにクリアに見える。心は今までにはないくらい穏やかだった。

「なんだか……不思議な感覚だ……」

「……。このあとすぐに立ち会う……。準備をしておくのじゃ……。」

.....

「今から試合？」

「ああ」

「そう……。頑張つて勝つてきなさいよ！」

そう言つて優子はオレの背中を思いつきり叩き、喝を入れる。あまりに強力すぎて思わず咽てしまった。

「あ、ごめん。力加減間違えちゃった」

「……優子」

「何？」

「……昨日は酷い事言つてごめん……」

「……。いいの。ヒロは自分のトラウマを突き付けられて追い詰められてたのも分かってたし、それにアタシはアンタに頼つてもらえて嬉しかったから……。だからもういいの！」

「けど……」

「い・い・の！」

「……………はい」

「それじゃあ頑張っつていつてきなさい！」

「押忍……………！」

オレは優子に一生頭が上がらなそうだ。

まあ、それはそれで……………悪くないのかもしれないが、な……………。

……………

面を着け、開始線まだ歩き、蹲踞

心を静め、自分の鼓動や微かな音もやたらと大きく感じる。

いつもより感覚が鋭敏になつてる様な気がする。

「始め！」

「ヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

まずはお互い氣勢を充実させる。

まずは間合いの探り合い……………。

ジイサンは今日は最初から上段の構えでオレの隙を窺っている。

対してオレは平正眼で迎え撃つ。

上段の構え……………。

五行の構えの中で最も攻撃的な構えであり、最速の構えでもある……………

……………。

反面防御にはまったく向いていない極端な構えだ……………。

この構えのジイサンの剣速はオレを圧倒的に上回る……………！

注意深くジイサンの動きを探る……………。

まだ足りない……………！ もつとだ……………！ もつと鋭く……………！ もつと

深く……………！

心を鎮める……！ 感覚を研ぎ澄ませ……！
もっと深く……！ もっと鋭く……！ もっと……！ もっと……！

.....

NO SIDE

修介と大貴の睨み合いはしばらく続いた。

修介が動けば大貴も動く。大貴が動けば修介も動く。その動きは2人ともほぼ同時だった。

まるでシンクロしているような動きだ。

来る……！

大貴には何故か修介が打ってくるタイミングが分かった。

修介が竹刀を振り降ろす……。

その瞬間大貴は不思議な感覚を覚えた。

そこだけ空間が切り取られ、この場の時間だけが緩やかに流れている様なそんな妙な感覚……。その中で大貴だけがいつも通りの動きが出来るような……。そんな感覚……。

振り下ろされる竹刀を眼が捉えた。しかし大貴は動けない。否、動かない。

自分に起きた奇妙な感覚に戸惑っていたからだ。

そして修介の竹刀が大貴の面に入った。

「面あり！ 一本！」

なんだ？ 今の感覚……？

修介に面を取られたが大貴はあまり気にしていなかった。先ほどの一瞬が数秒に感じるような不思議な感覚に戸惑っていたからである。

確かめてやる……！

二本目が始まり、再び修介は上段に大貴は平正眼に構えた。大貴は一度深呼吸をし、修介に向き合う。そして再び襲ってくる奇妙な感覚……。

わかる……。

自分の鼓動が大きく感じる……。
相手がどう動いてくるのかよくわかる……。
自分がどう動けばいいのかよくわかる……。
五感が鋭くなっているのがよくわかる……。
一瞬が数秒に感じられる……。
他の雑念など一切入ってこない完全な集中の世界……。
これなら……！ これならいける……！
大貴を包む空気が完全に変わった。

修介が竹刀を振り下ろす。

しかし大貴は竹刀の軌道をずらし受け流す。そして残心の為に距離を取った修介との間合いを一気に詰めて、小手を入れた。

「小手あり！ 一本！」

「……………」

刹那の感覚……。

研ぎ澄まされた感覚……。

この感覚が……。

この感覚が……『無想』なのか……？

.....

ヒロSIDE

「まだまだ、安定するまで時間がかかるの？」

「……。あれが……あの感覚が……『無想』……？」

「そうじゃ。究極の集中……。刹那の感覚というものじゃろうか？」

五感を鋭敏化させ、それを意識的に引き出す。それが『無想』の正体じゃ」

「ん……、ならなんで名前が『無想』なんだ？ 『なにも想うこととは無い』って、なんかあんまり関係ないような気がするんだけど？」

「ところがそうでもない。『無想』を使うためには感情を一定に保つことが必要不可欠じゃ。だから さっきの部屋に入ってもらって『自分の中の弱さ』を克服する必要があるのじゃ。決して揺れることのない精神……。これが無想の原点……」

「……。オレが先手を取ったはずなのにいつの間にか後手にまわっていたのも……？」

「そうじゃ。無想状態では後手に回ったとしても、必ず先手を取る事が出来るのじゃ」

「なんつー出鱈目な……。で、オレはそれを修める事が出来たのか？」

「半分合格といったところじゃの。まだまだ安定性に欠ける上に、無想に入るまでの時間がかかり過ぎておるわい。じゃからさっきの試合も最後の一本にあんなにあっさりとやられる。最終的にスイッチを切り替えるように無想に入っていかなとな」

「うへえ……」

スイッチを切り替えるように……そんな無茶な……。
とは、思っていたがジジイの方は実際にスイッチを切り替えるよう
に『無想』状態にもっていったしなあ……。
……なんだか人外の扉を開けてしまったような気がするぞ……？
……。
……。
うん！ 気にしても仕方ない！
気にしない気にしない！

……
……
……

「で、話して何？」

「いや……。優子はいいつて言ったけど、やっぱりそうはいかない
から……」

「昨日の事？ あれはもういいって」

「やっぱり昨日のあの酷い発言にはケジメをつけるべきだ。そうじ
ゃないとオレの気が済まない！」

「……じゃあ、一つお願い聞いてもらってもいい？」

「ああ、何でも来い！」

「えっとね……。してほしいの……」

「え？ いや……。！ そ、それは……」

「何でもするって言ったのに……」

「確かに言ったけど……」

「ヘタレ……」

「グッ……！」

「ヘッポコ……」

「又……！」

「バカ……」

「ム……!」

「じゃあ、いいわよ。昨日の事絶対に許さないから」

優子が唇を尖らせ、ツーンとソツポを向く。

その様子にはオレは折れた。

「わかった! わかりました! 喜んでさせていただきます!」

「最初からそう言えばいいのよ」

「それじゃあいくぞ?」

「……うん」

優子が目をつむり、顔を上げる。

オレもゆっくりと優子に近付き 少しづつ顔を寄せて行く……。

そしてあと少しの所で動きを止めて後ろを向き叫んだ。

「おい! その出歯亀小隊! 出て来い!」

「え?」

「……なんでわかったの!??」

「チツ、バレたか」

「……… 異端審問会に提出する証拠を撮り損ねた」

「あ、やめちゃうんですか?」

「ウチらにかまわず続けて、続けて」

「続けてじゃねえよ! 何やってんの? 何やってんの!??」

10メートルほど後ろの草むらから静馬、葉月ちゃん以外の全員が姿を現した。

気配を上手く消していたようだが、無想を会得してから感覚が鋭敏になったオレには通用しない……。

……オレますます人間離れしてきたな……。

「……後学の為に見学」

「うん。勉強熱心で大変よろしい　なんて言うと思ったかあっ！
？」

「まあまあ、烏丸君。落ち着いてよ」

「これが落ち着いてなんていられるか！？　大体秀吉！　お前が付いていながら」

「アンタ何やってるのかしら？　お姉ちゃんの邪魔してそんなに楽しいのかしら？」

「あ、姉上違っ！　その関節はそちらには曲がらなっ　！」

秀吉は優子による折檻を受けている最中だった。

さよなら、秀吉……。君の事は忘れない……！

「もう！　いいところだったのに！」

「あははは、ごめんね優子」

「で、お前等はここで何してるんだ？　全員勢ぞろいで覗きが目的
ってわけでもないだろ？」

「あ、うん。今から宴会をするんだっけさ。」

「さっさと来いよ。お前がいないと始められねえ」

「……………（コク）」
「…………… ああ、わかったよ。行こう」

オレは何でこいつらを切り捨てようとしてたんだろう……？

今のオレにこれ以上大切なものなんてありはしないのに……。
自分を見つめ直して分かった気がする。

大事なものがそこにあるのなら、人は辛くても、苦しくても踏みとどまれる。

大事な事は逃げないこと。蓋をして眼を逸らさないこと。

沢山の人たちに支えられてきた……。

姉さん、絃馬さん、ジイサン、静馬、師範、明久、雄二、秀吉、ムツツリーニ、姫路、島田、霧島、工藤、西村先生、バアサン、そして 優子……。

オレは……どうしようもないバカで、性格悪くて、面倒臭くて、姑息で、弱くて、いいとこの方が少ないけど、それでもいいって言ってくれた人たち……。

その人たちとの生活……。

オレにとって何よりも貴い日常……。

それを手放してまで 欲しいものなんてある訳が無い……。

だから……もう憎むのをやめる……。

ジイサンの為？ それもあるだろうけど、何より自分の為に……。

憎しみを捨てるんじゃない。

背負っていくんだ。

他でもない自分の為に……。

オレは……そうして前に進んでいく。

もしオレがまた道を踏み外しそうになったら……とめてくれる人と一緒に……。

オレは生きる……。

これからも……生きていく……。

外伝 第12話 修行に行こう！ 宴会編

最終日の修行も終わり、最後の夜に宴会をすることになった。

眼の前には山盛りの豪華な食事。山海の珍味。唐揚げ。デザート。正体不明の肉。

より取り見取りだ。

「師範、これ何の肉ですか……？」

「ああ、それは私が今日の朝早くに狩ってきたイノシシの肉だ」

イノシシ……。ワイルドボア……。

ウシ目・イノシシ科に分類される野生動物。非常に神経質で獰猛……。

どうでもいい話だが、イノシシが真っ直ぐにしか進めないという話は完全に出まかせである。

「鮮度はバツチリ！ 味も保障しよう！」

「……………」

もはや何も言うまい……。師範がオレの中の常識で測れない人だ。て事はとっくの昔に知っていたことじゃないか……。

自分の身内に非常識な人外が多い事に少しへこむ。

そして自分も人外の扉を開いてしまった事を思い出し、更にへこんだ……。

泣くな、オレ！ 強く生きる！

そんなオレの心情を知ってか知らずか、師範は皆揃ったのを確認して乾杯の音頭を取る。

「それでは諸君！ 最終日までよく頑張ったね！ 今日は遠慮なく騒いでくれ！ それでは乾杯！」
「……かんぱーい！」

皆それぞれ持っていたグラスを重ねる。そしてバカ騒ぎが始まった

今回全員無事に終わる事が出来てなによりだ。

オレも精神的に大きく成長出来たような気がする。

あとは……この感覚を上手く使いこなすだけ、か……。

この感覚……、オレは便宜上『無想状態』と呼んでいるが、この状態は体力を激しく消耗する。

オレの力量だともって10分といったところだろう。

その上、不意に中途半端に無想状態に入ったりするから全く安定していない。

まだまだ学ぶことは多いな……。

「ねえ、兄さん」

「ん？」

「兄さんだけ別メニューだったけど、何してたの？」

「ん、真つ暗な部屋で座禅組んでた」

「座禅？」

「そう、座禅」

「いいなあ、ヒロ！ なんだか凄く楽そうで！」

「そうだぞ！ 俺達なんか……！ 俺達なんか……！」

『楽そうで』という言葉に少しムツとしたが、流す。

確かに中身を知らない奴には楽に見えるだろうし、明久たちがやつれていたから相当大変な目に逢ったんだろう。

「……何やらされたんだ？」

「素振りを1000回、擦り足の練習、筋トレに走り込み他にも
にも……」

「ほ、けど初日に比べたらだいぶ楽じゃないか？」

「ところがそうでもないんだよ……」

「美波の技の受けをやったんだけど……」

「うん」

「技のキレが殺人的になってたんだ……」

「そ、それは……災難だったな……。いや、正確には災難の予感か
？」

ただえさえ島田の攻撃力には眼を見張るものがあるのに、ここで更にパワーアップなんてしたら、主な矛先である明久にとっては死刑宣告を受けたようなものだろう。

「吉井さんがバカな事を言わなければいいだけの話だと思えますけど？」

「……はい、ごめんなさい……」

静馬の厳しいツツコミに明久は肩を落とすうなだれた。

小学生に言い負かされて凹む高校生……。情けないぞ、明久……。
まったく……。いざという時の行動力はずば抜けてる癖に、普段は
なんでこんなヘタレなんだろうな……。？ まあ、ヘタレな点はオレ
も人の事を言えないか……。

.....

「一番烏丸大貴！」

「沖田静馬！」

「一発芸やります！」

周りから割れんばかりの拍手が上がり、場が盛り上がる。

オレと静馬はそれをまあまと、いう感じで抑えて、少し距離をとって向き合った。

そしてアイコンタクトをとり、タイミングを合わせる。

床にアゴをつけて三点頭立の要領で体を上下反対にして、背中を逸らした。

その姿は

「「シャチホコ！」」

名古屋城の屋根に乗っている物体を模した一発芸に全員受けてくれた。

拍手と笑い声が部屋いっぱい広がる。

それに応えるようにオレと静馬は手を振り退場した。

定番の宴会芸タイム。

ジジイが一人一芸披露しろと、無茶ぶりしてきやがったので仕方なしにやったが、受けるとこれは意外に楽しい。

「2番木下秀吉、物真似10連発！　いくのじゃ！」

秀吉のモノマネで更に大きな笑い声が部屋に響く。勿論オレも腹を抱えて大爆笑だ。

「3番、坂本雄二！」

「4番、吉井明久！」

「明久をぶっ飛ばします！」

「雄二を八つ裂きにします！」

いつも通り明久と雄二のどつきあい。本来なら止める立場にある師範とジジイはどちらが勝つか賭けている。

アンタら……。子供の前で何やってんだよ、ホント……。とりあえず暴れる明久達をハリセンで始末して、ステージから引きずり降ろしておいた。

師範とジジイから「賭けが成立しない」と、抗議が来たが、そんなのオレの知ったこっちゃねえよ。

「5番、姫路瑞希！」

「……霧島翔子」

「明久くんと」

「……雄二に」

「女装させます！」

それを聞いた途端明久、雄二は泡を食って逃げ出したが、面白かったオレ達は総出でこれを抑えて、二人を姫路と霧島に引き渡した。哀れ、2人は猫耳メイド服を着せられ晒しものにされた。

随分姫路と霧島のテンションが高いな。

ひとしきり大笑いした後、コップにいつの間にか入っていたジュースを一口

つてコレジュースじゃねえ!?

「ジジイ！」

「何じゃ？」

「これ酒じゃねえか!? 未成年に何を飲ませようとしてやがる!」

「高校生なら酒食らい普通に飲むじゃろう?」

ダメだ、コイツ! 全く反省の色がねえ!

なるほど。姫路と霧島のテンションがやけに高いと思ったらこつこつ

うことか！

「クツソ！ 他の連中は……！？」

「明久君、今度はセーラー服を着てくれませんか？」

「やだなあ、姫路さん……。冗談が上手いんだから……」

「……雄二、次はこの服」

「翔子待て！ 何をトチ狂っていやがる！？」

遅かった……。あの2人はもう助からない……。

あの2人がアイコンタクトでSOSを送ってきたが、オレは巻き込まれないように眼を逸らした。

触らぬ神にたたりなしって奴だ……。

え？ ついさつき『切り捨てない』なんて言ったのに？

ここはケースバイケースって事でひとつ、よろしく！

.....

あれから2時間。宴もたけなわになってきたこの状況。既にオレの周りはカオスになっていた。

明久は姫路に猫耳メイド服を着せられた後、セーラー服 ナース服

チャイナ服 スクール水着をローテーションで着せられ、泣いていた……。

つていうか……何故ここにそんなものがあるんだ？ 持ってきてたのか？

次に雄二だが、霧島に薬を嗅がされ、裸に剥かれ、縛られてどこかに連れて行かれた。

まあ、悪いようにはならないだろう（と思いたい）

ムツツリー二は……まあ、いつも通り工藤と猥談中。ある意味あそこが一番和やかだ。

そしてオレは

「聞いておるのか、ヒロ!?!」

「ハイハイ、聞いてるよー」(棒読み)

「ワシは男じゃというのに毎回毎回明久たちときたら 云々カン又ン……」

酔っ払った秀吉に絡まれていた。

こいつ絡み酒かよ……。

余談だが、オレは酒にあまり強くなく、飲んだら甘え癖が出るから、なるべくなら酒は飲まないようにしている……。

「そうだな。そうだな。お前は男の中の男だもんな」

「そうじゃ! わかっておるではないか!」

「じゃあ、男の中の男の秀吉君にはこの“ウイスキー”を一気飲みしてもらおうか!」

「任せるのじゃ!」

「秀吉君のいいとこ見てみたい! はい、一気! 一気! 一気! ……………」(ゴキユゴキユゴキユ)

体の中のアルコールを薄める為にひたすら“烏龍茶”を“ウイスキー”と、“水”を“焼酎”だと偽って、飲ませていた。

もはやこいつは自分が口に行っているのが酒か、そうじゃないかの区別すらついていないくらい酔っているのだ。

このままある程度水分を取らせてアルコールを抜いてしまえば問題ない。

追加の飲み物(酒に非ず)を持ってこようと立ち上がりかけた瞬間

「ヒョロ!」

グキツ！

「ガツ……………！」

何かがすごい勢いで飛びついてきて、骨盤がグキツといった危ねえ……………！

この年で笑劇（誤字に非ず）のギツクリ腰デビューをしてしまうところだった……………。
オレをギツクリ腰に追いやろうとした原因に眼を向ける。

「優子……………お前……………！」

こいつも飲んでやがる……………！

「えへへへ……………」

「『えへへ』じゃない！ 何で飲んでんだよ！？」

「えゝ、飲んでないもゝん。おじいさんや竜馬さんがくれたジューズしか飲んでないもゝん」

「『もゝん』じゃねえ！ いくつだ、お前は！？」

ジジイ

！ 師範！ 一体何やってんですか！？

『わははははははは！』

『ふははははははは！』

「……………ダメだ……………。出来あがってやがる……………」

他に頼れる奴は……………！？

「秀吉ヘルプ！ 助け」

「スカー、スカー……………。もう食べられないのじゃ……………」

「わかりやすい寝言をありがとう、ドチクシヨウ！」

クソ……！ 秀吉もダメか！

何だ！？ 楽しい宴会のはずが酔っ払いまみれのカオス空間になっ
てるんだ！？

A・宴会だからです。

「ヒロ？ アタシ……ヒロにどうしても聞いておかなきゃいけない
事があるの……」

「聞いておきたい事？ 何だ？」

「えっとね……」

俯きながら上目遣いで手をモジモジさせながら恥じらう優子……。
頬はほんのりと赤くなっていた。

ストライクだ！ ストライクだよ！ オレは優子が恥じらってる姿
を見るのが大好きなんだ ツー！！

「ヒロは……受けと攻めどっちなの？」

「……は？」

何？ 空耳か？ と、いうか何だ？ 今の訳分らない言葉は？
日本語なのか？

受け？ 攻め？ 受けの反対は投げ？ 攻めの反対は守り？
もう訳分からん……。

「どっちなの！？」

「い、いや言ってる意味がよく理解でき」

「やっぱりヒロだとヒロ×吉井君かヒロ×秀吉とのカップリングが
鉄板なんだろうけど、ヒロを攻めにするか受けにするかの論争が最
近すごいよね。あ、ちなみにアタシはヒロ×秀吉のヒロ鬼畜攻め

×秀吉健気受け派だからね？ だから (以下省略) 」

「何言つてんだよ！？ 眼が怖えよ！ そしてお前が何を言ってるのかオレには1ミクロンも理解できねえよ！」

「もう！ 何で分からないのよ、ヒロのバカ！」

怒られた……。なんだか凄く理不尽な事で怒られているような気がするのは気のせいだろうか？ もう訳分かんねえよ！

「しょうがないわね。じゃあ、バカなヒロの為にBLの基礎用語をレクチャーしてあげる」

なんだか声がやたらと色っぽい……。色っぽくていいのだが……！
なんだか嫌な予感がする……。

オレの嫌な予感は見事に当たり、このあと優子はオレに延々とBL用語、つまり婦女子が主に使用する用語を聞かされ続ける事になった。

.....

「ひ、酷い目に遭った……。」

優子にひたすら同性愛について熱っぽく語られ、オレは憔悴しきっていた……。

優子の頭の中がオレの想像以上に腐ってた事にビックリだ……。
というか……。寒気が……。

優子には悪いが、オレには同性愛の良さがさっぱりわからない……。
というか無理……。！ ホントに無理……。！ 生理的にどうしても受け付けられないって！

当の本人はオレの腰に巻きついたまま寝ちまうしよ……。

神様！ オレ何か悪い事しましたか！？
何でこう災難ばかり

「烏丸、烏丸……」

「なんだよ……？」

島田がヒソヒソ声で手招きをしている。

「？ 何でそんなに憔悴してるのよ？ しかも優子が腰に巻きつてるし……」

「ちよつと、な……」

「まあ、いいわ。とにかくこれ見て！ コレ！」

「？ 何だつて うおおおおお……！？」

「ね？ かわいいでしょ？」

静馬と葉月ちゃんがさつきから静かだと思ったたらこういうことか！
2人して仲良く隣で寝てしまってるじゃあ……りませんか！

これは！ いい！ 最高だ！ シャッターチャ～ンス！ テレテッ
テレッ
（意味不明）

「島田……！ カメラ……！」

「はい、これ」

この写真をカメラに収めて、オレと島田はご満悦だ。
2人が大きくなったら見せよう！

……。

……。

……。

なんだか考え方が子煩悩な親父みたいになってるのは気のせいだろうか？

うん。気にしないようにしよう！

しかし

「本当に大きくなって……。ついこの間まではこゝんなに小さかったのに」

「そうよね。子供って知らない間に大きくなつてるときがあるわよね」

「そうそう。昔はこいつよく泣いてさ、泣き声聞く度にイライラして頭が痛くなつたり、目眩がしたりって時もあったんだよ。それが

ホントにここまで大きくなって……。不思議だよな……」

「あ、烏丸も？　ウチも時々葉月が小さかった時のこと思い出すわ。あの時は親がいないときにウチが葉月の面倒を見てたんだけど、我儘でちよつとしたことですぐ泣くし、ぐずるし本当に大変だったわ」

「だよな。やっぱり子供つてどこも同じようなものなんだよな……」

「やっぱりあれって育児ノイローゼっていうやつなのかな？」

「ん〜、多分そうなんじゃないか？　昔は自覚なかったけど、今思うとそうなんだろうな……」

「本当に子育てって難しいいわよね？」

「そうだな。けど、こつやつて成長したところを見ると報われる気分だよ」

「確かにそうよね」

『あの二人、本当にボクたちと同じ年なのかな？　団地妻みたいな会話になつてるよ？』

『……………所帯じみている……………』

こつして宴会の夜は更けていく。

そして翌日

「うづう……。頭が痛いです……」

「……気持ち悪い」

「二日酔いじゃ……」

「途中から記憶が無いんだが、何があったんだ？」

「僕の男としての尊厳って……（シクシクシクシク）」

なんだかこっちの空気は暗いな……。

「昨日は楽しかったね、ムッツリー二君」

「………。久しぶりに内容の濃い話が出来た」

「すごく楽しかったですっ」

「そうだね。また来よう？」

「はいですっ」

それに比べてこっちは随分と満喫したようだ。

「それじゃあ師範、お世話になりました！」

「ああ。またいつでも来なさい」

「……はい」

なるべくなら来たくないなあ……。なんて口が裂けても言えない……。

「それでは竜馬、達者でのう」

「……修介も。体を厭えよ……」

まるで今生の別れの様な挨拶を交わすジジイと師範。全くそう言っ

冗談は縁起でもないからやめると、いつも言ってるのに……。

「それでは皆の衆！ バスに乗り込むのじゃ！」

「……はい！」「……」

ジジイの指示で皆帰りのバスに乗り込んだ。

オレも続いてバスに乗り込もうとしたが、師範に呼び止められた。

「どうしました？」

「いや……。ヒロ、年寄りから少し説教を、ね」

「説教ですか……。」

オレ何か怒られるような事したっけか？

「君は今回の事で、自分の弱さを否定せず、受け入れ、前に進むと決めた。そうだね？」

「はい」

「うん。それは勇気ある決断だったと私は思う。しかし 先の事を見据えすぎて今ある大事なものを蔑ろにしないように。『先を見る』ということは『今を犠牲にする』という事ではない』のだからね？」

「……はい」

少し師範の言葉の意味を考えてから、微笑を浮かべ頷いた。

「わかればよろしい！ くれぐれもそれを忘れてはいけないよ」

「はい！ ありがとうございます！」

師範の言葉を受け取り、バスに乗り込んだ。

オレはしばらくしてから……なぜ師範がこの時こんな事を言ったのか本当の意味で理解する事になる……。

外伝 第12話 修行に行こう！ 宴会編（後書き）

修行シリーズこれにて終了！

自分の未熟さを思い知ったシリーズでした。

まだまだ僕には勉強が必要です。

次回は以前アンケートで募集した逃走中のパロディかコラボのどちらかを掲載する予定です！

お楽しみに！

特別編 カラスと報告者（前書き）

あづまさん作『バカとテストと報告者』とのコラボです。
初のコラボなので緊張します。
それではどうぞ！

特別編 カラスと報告者

「そこまで！……引き分け！」

「ありがとうございます！」

面を外し、息を整え、相手の大貴は相手と向かい合う。さっきまでの相手が大貴に駆け寄ってきた。

「ありがとう！ すごくいい勉強になったよ！ 同い年の人でオレが勝てなかったのは烏丸君が初めてだ！」

「いえ、こちらこそ」

大貴と同い年の少年は柔らかな笑みを浮かべている。対する大貴は無表情で無愛想だ。

「今度手合わせするときはオレももっと強くなってから！ その時はまた」

「ああ、そうだな。オレもお前に勝ちたい」

この日から……『保科望』と『烏丸大貴』は互いに切磋琢磨する関係になり、互いを自分の越えるべき壁だと認識しあったのだった。

.....

随分昔の夢を見たなあ……。

アラームが鳴る前に眼を覚まし、布団から這い出る。体を伸ばしてストレッチをして、頭を覚醒状態へと持っていく。

オレ、烏丸大貴が保科望と出会ったのは確か12歳位の頃だった。保科は武道の世界では知らない人間などいないほどメジャーな古武術『如水流』の使い手で、如水流当代当主の『日野鉄山』先生の孫というサラブレッドだ。しかも武道の腕前だけではなく、顔良し、頭良し、性格良し、と三拍子どころか、四拍子揃った奴だから余計に腹立たしい。『天は二物を与えず』という言葉があるが、あれは絶対に嘘だと思う。実際に二物も三物も持っている奴は存在するのだ……。

何処の完璧超人だよ、ホントに……。

確かあれは『天源無想流』と如水流の他流試合の時だったかな……？ジジイと日野鉄山先生は昔からの知り合いで、同じ年の孫がいるという事で妖怪同士……もとい、武道に身を置く者同士他流試合をさせようという流れになったらしい。

結果は4戦やり合ってすべて引き分け。勝者なし。

まあ……、その結果に別の意味で納得はしていないが……。随分昔の話だ。あの時から保科はオレの目標であり、超えるべき壁だった。

.....

いつもの如く補習からの脱走に失敗して職員室で西村先生の説教（ゲンコ付き）を受けた帰りだった。

「は……。非道い目に遭った……」

「明久、大体お前があの時物音をたてなければ」

「何言ってるのさ！？ 雄二だって」

いつものように責任の擦り付け合いをしている明久と雄二。おなじみの光景だ。

そんな中オレは携帯を教室に忘れた事に気が付いた。

「悪い。忘れ物したから先に行ってくれ」

「うん。わかった」

「じゃあな」

「おう、じゃあな」

2人と別れ軽く駆け足で教室に戻り携帯をカバンの中に入れる。その後真っ直ぐげた箱へと向かうつもりだった。

「のっぞむ〜〜！」

ん？ なんだか妙に間延びした声が……

あれは……優子の友達の白石か？

Aクラスの『白石沙耶』……。

『大人っぽい見た目に反して言動が無邪気で子供っぽい。そのギャップが“萌え”に拍車をかけている』

と、須川が熱っぽく語っているのを聞いた事がある。

白石がすごい勢いで走ってきて、丁度隣にいた眼鏡の男子生徒に飛びついた。

その光景にオレはバカみたいに口を開けて凝視した。

バツ！（白石が眼鏡の奴に飛びつく音）

サツ（眼鏡の奴が避ける音）

ズベチャツ！（白石が床に叩きつけられる音）

「きゅっっ……」

ひ、非道え……！ 今、あいつ顔から落ちたぞ……！？
避けてやるなよ、その奴……！

「ふえええん！ 酷いよ、望……！」

「いや、だって危ないし……」

「お、おい……、大丈夫か白石？」

「あ、烏丸君だ……。こんにちは……！」

「あ、ああ。こんにちは……？ いやそうじゃなくて！ 鼻が少し
擦り剥けてるぞ？」

「あ、ホントだ」

「ほら、これでも貼っとけ」

「うん。ありがとう」

絆創膏を財布の中から取り出し、白石に手渡す。それを受取り貼り
付けた。

そして白石の怪我の元凶の方を向く。

「おい、お前……。避けてやるなよ……」

「いや、だって危ないじゃないか。全長約165？、重さおよそ5
0キロの物体が高速で飛んできたら避けるのが当然の反応でしょ？」

「いや、確かに危ないのは否定しないが……一応女の子なんだし、
顔に怪我をさせるのは」

「そつだよ、望……！ 烏丸君の言う通り！ 避けるなんて甲斐性の
ない証拠だよ……！」

「避けられるのが嫌なら普通に登場してくれ。ん？ 烏丸？」

「？ 何だ？」

「君って……もしかして……『天源無想流』の『烏丸大貴』！？」

「あ、ああ……。なんで知ってる……？」

どこかで会ったことあったっけ？

「久しぶりじゃないか！」

「……………は？」

「ははっ！ 烏丸家が文月学園のスポンサーだって事は知ってたけど、本当に会えるなんて思ってもみなかったよ！」

「え？ え？ え？」

コイツは一体…………ん？ 待てよ？ のぞむ…………、ノゾム…………、望…………？

まさかコイツ…………！？

「お前…………『如水流』の『保科望』か！？」

「そうだよ！ 本当に久しぶりだね！ 元気だったかい！？」

「え〜？ 2人とも知りあい？」

「ああ。沙耶には話したことなかった？ オレが他流試合で唯一勝てなかった相手が烏丸なんだ」

「あ、聞いたことある〜！ そうなんだ〜！ 烏丸君って望に勝ったんだ〜！ す〜い！」

「いや、凄くない。オレも保科には勝ったことないし……………」

「4回試合して、4回とも引き分け。オレの剣は烏丸の堅い守りに全く通用しなくて、結局決着はつかなかったんだ。だから実質はオレの負けみたいなものだよ」

「へえ〜」

「謙遜するなよ。全部防いだんじゃない。オレがお前の攻撃に防戦一方になってただけだよ。実戦ならオレが確実に負けていた」

『如水流』の真価は『状況に合わせて効率的な手段を選ぶ』という

ところにある。

つまり引き出しが多く、どんな状況にも対応可能という所に強みがある。

形に嵌まった『天源無想流』との他流試合では保科の使う如水流にはどうしても大きな制限が付いてしい、どうしても保科の方が不利になってまうのだ。

その点がオレがああ試合の結果に納得していない点だった。

「日野先生は元気か？」

「うん。まあね。最近あつてないけど、元気なんじゃないかな？」

烏丸先生は？」

「ああ、元気元気。ありや殺したって死なねえよ。見ろよ、このタシコブ。あのジジイまた新しいトラップを作つてオレを実験台にしやがつたんだぞ？」

「ははっ、相変わらずだね。本当にお互い身内で苦労するよね……」

「ホントになあ……」

「……なんだか烏丸変わったね……」

「そうか？」

「うん。昔はもっと人を拒絶してるような感じだった」

「う〜ん……。まあ、確かにそうかも……。たぶん、さ……。いろんな人たちに会つて、いろんな人たちと関わつてく内にオレ自身も変わつていつて、成長出来たんだと思う……」

「そうか……。いい人たちと出会えたんだね……」

「ちなみにお前もそのうちの一人に入つてるからな」

「ははっ、ありがとう」

「……、もうこんな時間か」

「？ 何か用事があるのか？」

「ああ。晩飯を作らないと……。じゃあな、保科、白石！ また今度ゆつくり話そう！」

「ああ、またね！」

「ばいばい！」

.....

「　　って事があつたんだよ」

「へえ、ヒロと保科君って知り合いだったんだ」

日曜日、優子とデート中……。

映画館に向かう途中に昨日あつたことを話した。

「ああ。文月に転入してるとは思わなかったな……。」

「アンタがトラックに撥ねられなかったら、もっと早くに再会してたかもね」

「そうかもな」

「そして二人は禁断の恋に……。新ジャンルだわ……！」

「コラ、その腐女子……！　とんでもない妄想をするんじゃない！」

「ハッ……！　ち、違つわよ！　な、何も考えてないわ！」

「涎を垂らしながら否定しても説得力ゼロだからな……？」

最近優子の変態スイッチが入ってきてる気がするのはオレの気のせいだろうか？

出来れば気の所為であつて欲しい……。

「……あれ？」

「どうした？」

「あれって保科君じゃない？」

「ん？　あ、ホントだ……。」

反対から保科と……あれはCクラスの小山とAクラスの白石と佐藤（だったけ？）がいた。慌てて何かから逃げるように走っている。

「よう、保科」

「あ、烏丸」

「クツ……！ ここにもFクラス！？」

「え？」

オレの顔を見るなり表情を険しくして敵意をむき出しにするCクラス代表の小山。
オレこいつに何かしたっけ？

「そこを通してくれ、烏丸！」

「あ、ああ。勝手に通ればいいじゃねえか。何を慌てているんだよ？」

『いたぞ、こつちだ！』

『もう逃げられねえぞ！ 保科くっ！』

『顔が良くて、女に持てる男にはぜひ死んで頂きたい！』

『あのスカした眼鏡野郎！ 殺す殺す殺す……！』

「大体理解できた……」

「理解が早くて助かるよ」

保科と女性陣をターゲットに定めるFFF団の面々……。
こいつら休日返上でこんなバカやってるのか？ 暇なのか？

『『『殺せ

ッ！』』』

「の、のぞむ、怖いよ……」

「……………ッ！」

「な、なんでこんな事を……………」

女性陣がそれぞれFFF団に怯えている。

そして一斉に保科に襲いかかるバカ共……………。

いくら保科が強いと言っても女性陣を庇いながら素手で戦うのじゃ限りなく不利だ。

「ハア……………。仕方ねえな……………。優子、悪いけど……………」

「ん……………。いつてらっしゃい……………」

「あとは頼む。慣れてない奴らにはショックが大きいだろうからな……………」

少し距離をとり、勢いよく走り始める。

斜め前にあった手すりを踏み台にして高く飛びあがり……………」

「よっ……………と……………」

『ギヤアアッ』

竹刀を持つてる奴に飛び蹴りを食らわせ、落とした竹刀を拾い、切っ先をFFF団に向けた。オレという思わぬ乱入者にFFF団のメンツは固まっている。

その隙を保科が見逃すはずがなく、近くにいた奴の顎に攻撃を加え倒し、得物を確保する。

「え……………」

「か、烏丸君！？ Fクラスなのにどうして……………！？……………」

『キツサマ！ 処刑人烏丸！ その異端者に与するのか……………！？……………』

るために前を走り、振り向きレシーブの要領で打ち上げた。自分たち頭を飛び越えた保科に全員呆然として次に何をすべきかを考えられずにいる。

その隙にオレも隙間を縫って脱出し、保科のあとを追った。

『ハッ！ 逃がすか！ 追えええええええええつ！』

『待て、このクソガラス！』

「『待て』と言われて待ったバカは古今東西何処にも居ない！ あの明久ですらそんな事は知っている！ つまりここで止まるという事は明久以上の『バカである』と自分で証明している様な物だ！ 故に！ その申し出は却下させてもらおう！」

『訳の分からないこと言ってるんじゃねえ！』

「意外に余裕だね、烏丸」

「はっはっは！ 西村先生の追撃に比べたらこいつらなんて可愛いもんだ！」

「確かにそうかも！」

『俺達の存在を無視して和やかに会話してるんじゃねええええええつ！』

.....

『もう逃げられないぜ？ このクソ野郎共……！』

『散々バカにしてくれたお礼をしてやらないとなあ……！』

『覚悟はいいか……！？』

狭い路地に追い詰めオレと保科を追い詰め、殺気立つFFF団。それに向き合い不敵な笑みを浮かべている。

『『『死ねえええええつ！』

あれ？ 『『』

『お、おい！？ そっち詰めるよ！』

『あいたたたた！ 詰まつてる、詰まつてる！』

「さ〜て、お前ら覚悟はいいか？」

「この狭い路地なら多数の方が不利なのは当然だよな？」

『ヒイツ！？』

『こ、こいつら眼がヤバい！？』

『あの眼鏡の奥に宿る冷たい光は人殺しの眼だ〜！』

『『お、お助け〜〜〜！』』』

「却下！」

オレ達の無慈悲な宣告に全員震えあがる。

「せつかくの優子とのデートがお前らのお陰で台無しだ……！ 楽に死ねると思うなよ」

「君たちはやり過ぎたんだよ。もう悪ふざけじゃ済まされないほどに、ね？」

『『ぎゃあああああああああああああああああああ
あああつ！』』』

.....

「おかげで助かったよ」

「気にしなさんな」

ポロポロになったFFF団（だった物体）を積み上げ、少し休憩する。

「今度何かお礼をしなくちゃね」

「今度じゃなくていいさ。」

「え？」

「ちよつとここで立ち会わないか？ お互いの得物も丁度竹刀だし、な？」

「本気かい？」

「冗談ではこんな事言わねえよ……」

「……わかった」

「本気で来いよ？ これは剣術の他流試合じゃない。『如水流』の真価を……見せてくれ！」

「ああ、勿論！」

お互いギリギリと間合いを測る。オレは保科の攻撃に対応する為に集中の世界に入った。

無想状態……。この状態なら相手のどんな動きでも対応する事が出来る。

長い間目標とし、壁としてきた人物……。

保科が動けばオレが動く……。

オレが動けば保科が動く……。

勝負が決まるのは一瞬……！

……来る……！

動いたのはほぼ同時……！

保科の必殺の一撃をオレが弾き飛ばす。

保科の体制が崩れて打ち込もうとするが……

「……引き分け、かな……？」

「……そうだな……」

互いの竹刀が折れていた……。

「……剣術の技だけでよかったのか？」

「烏丸相手に何かする隙があるとは思わないよ。もし何か仕掛けようとしたらその隙にこっちがやれてしまう」

「そっか……」

長年抱えてきたモヤモヤがすっきりした気分だ。

結果は相変わらずの引き分けだったが、オレが納得できる引き分けだった。

「望……。ありがとう。本気で相手をしてくれて……」

そしてオレを対等と見てくれて……。ありがとう……。

「どういたしまして、大貴」

しばらくしてお互いの笑い声が夕暮れで赤く染まり始めた路地に響き渡った……。

特別編 カラスと報告者（後書き）

あづまさん、ありがとうございました！

こんな感じでどうでしょうか？

感想をお待ちしております！

特別編 カラスと魔法使いとその他色々(前書き)

今回はレフェルさん作『俺と彼女と召喚獣』より新条ありすさん、秋月終夜くん、桃宮あかりさんの出演です。

難しかったです、なんとか形になりました。

前回とはまた毛色の違う話になっています。

それではどうぞ！

特別編 カラスと魔法使いとその他色々

いつの事だか分からない、遙か彼方のどこかで……

文月王国という大国があった。文月王国は300年間大きな争いもなく平和が続いていた。

しかし10年前、突如として魔王が現れ、文月王国に侵攻を始めた。魔王軍の猛攻に文月王国軍は為す術もなく、敗退を繰り返す。

そんな中女王『姫路瑞希』の一人娘、『秀吉姫』が魔王軍にさらわれ、開戦ののろしが上がる。一人娘、秀吉姫を奪回する為に、魔王を倒す為に、文月王国は勇者『秋月』を投入する事を決定した。今ここに文月王国の勇者と魔王軍の最後の戦いが始まるうとしていた。

演劇部特別演目

『勇者と魔王とその他色々』

CAST

勇者：秋月終夜 魔法使い：新条ありす 黒魔術師：桃宮あかり

格闘家：島田美波

女王：姫路瑞希 姫：木下秀吉

.....

「勇者・秋月くん！」

「はい！」

ここは謁見の間

魔王『烏丸』に攫われた秀吉姫を奪回する為に勇者一行が召集された。

「私の一人“娘”『秀吉』が魔王『烏丸』に攫われてしまいました」「はい」

「あなたに秀吉姫の奪回をお願いしたいのです」

「僭越ながら女王様、オレ達だけでは明らかに戦力不足だと思いませんが」

「はい。ですからレベルアップする為のキビ団子（自家製）を準備してあります。これを食べて魔王の居城に」

「女王様、よろしいでしょうか？」

「どうしました、あかりちゃん？」

「何か薬品とかいれた？」

「あ、はい。塩酸や硫酸をちよつと……」

「瑞希……、ちよつと」

「あ、はい。どうしたんですか？」

「言ったよね？料理の冒流は止めるって」

「は、はい」

「それなのに、また、薬品料理を作って」

「あ、あかりちゃん？ 眼が怖いですよ？」

謎の液体を手にして女王瑞希にジリジリと近づく黒魔術師・桃宮あかり。

顔が笑っているのに目が笑っていない。

「美波」

「ひゃい！」

「瑞希を捕えて」

「ま、待ってください！まだ、食べれないと決まったわけじゃ」

「薬品入れて食べれる食品などあるか！！！」

「はう！」

「瑞希、ごめん！」

あかりの圧力に負けて美波は瑞希を抑え込んだ。

そしてあかりはゆっくりとした動きで手に持っていたドリンクを瑞希の口に流し込んだ。

っていいのか？ 主従関係こんなので！？

「きゃあああ！！！」

「あ、倒れた。」

「ふう、悪は滅びたわ」

「お前の方が魔王よりよっぽど怖い……」

「何言ってるのよ！ 料理にあんな危険物入れるなんて料理への冒瀆以外の何物でもないわ！」

「あははは……」

《時間が押してるので手早く次へ！》

「ほら、さっさと進めるわよ！」

「お、おう……」

カンペが出たのであかりたちは慌てて演技を続行する。

勇者一行は女王から対魔王用の最終兵器を受取り、旅立つのだった。

.....

そんなこんなで、あつという間に魔王『烏丸』の城

「展開早すぎない？」

いいんです！

「ふははははは！ よく来たなあ、勇者一行！」

「ヒロ、お前ノリノリだな」

「やかましい！」

意外に悪役が気に入っている烏丸大貴。

頭にはヤギの様な角をつけていて、黒マントに黒いズボン黒シャツ

……全身黒づくめだ。

もしかしたら下着も黒かも知れない。

「下着も黒いし、腹の中も真黒だ」

マジで！？

「まあ、それはそれとして、オレを相手にしたくば、まずはそこに
いる雑魚2人を倒して王座に来るがいい！」

「セリフが魔王っぽい！」

「……一応魔王役なんだよ。あんまりメタ発言するな。まあ、とに
かく！ 行け、雑魚常夏コンビ！」

「誰が雑魚だ！」

魔王烏丸の声にこたえて、頭にブラをかぶったフリフリのごスロリ
衣装を着た坊主頭の変態と普通の格好をしたモヒカンが立ちほだか
る。

「変態！ 変態がいる！」

「うつつ……！ 気持ち悪い……！ ウチ絶対に夢に見るわ……！」

「観客の精神衛生面を考えろよお前ら！」

誰得く？ な汚い絵に観客席では大ブーイングが巻き起こる。
放っておけば暴動が発生しそうな勢いだ。

「うるせえ！ 俺だつて好きでこんな恰好をしてる訳じゃねえんだよ！ チクシヨウ、なんで俺がこんな役を……！」

「クソっ！ さっさと終わらせるぞ、夏村！」

「応よ！ 行くぞ常村！」

終夜達や観客からのブーイングを一身？に受けて、顔を真っ赤にして終夜達に襲いかかる常夏コンビ。

しつこいようだが非常に嫌な光景だ。特あんな気色悪い格好をした夏川に襲いかかられたらトラウマものだろう。

襲いかかる常夏コンビを迎え撃つためあかりは前に立ち、黒魔術で毒電波を送った。

「ぐわあっ！？」

「どうした夏川？ ぐおおっ！！？」

バタツ

哀れ常夏コンビはあかりに瞬殺された……。まあ、所詮雑魚だし……

…。

「「雑魚つて言うじゃねえ！」」

「ふう、手ごわい相手だったわね」

「違う意味で手強い相手だったけど……」

「大丈夫か美波？」

「う、うん。なんとかね……」

そんなこんなで魔王の王座

「ふははははは！ よくぞあの変態コンビを倒してここまで辿り着いたな！ 褒めてやろう！」

魔王・烏丸の言葉の後、何処からか変態って言うんじゃない！ という声が聞こえてきたような気がするが、そんな事はお構いなしに大貴は台詞を続ける。

「それでは次は魔王近衛兵！ 明久、雄二、ムッツリーニ！ 行け！」

「おう！」

「いくよ！」

「………………。」「(コクン)」

魔王近衛兵役の3人が剣を抜き、終夜達に襲いかかる。

「雄二」

「うっ！ ありす……！」

「明久」

「うっ！ あかり……！」

「私たちの敵なの？」

あかりとありすは襲いかかってくる明久と雄二を見るとびくり、と体を震わせ一歩引いた。

思わぬ反応に明久、雄二はどうしていいのかわからない。

あかりとありすは二人して『イチメるの？ イチメるの？』と言わんばかりの潤んだ瞳で明久と雄二をじつと見ている。

「魔王様……！」

「なんだ？」

「俺達（僕達）にはできねえ（ないよ）！」「」

「アホかあああああつ！」

明久と雄二は剣を落とし、膝をついた。

その様子を見て魔王・烏丸は声の限り叫び、ツッコミを入れる。

「ええい！ こうなったらムツツリーニ！ お前だけが頼りだ！」

「ムツツリーニ、お宝本5冊でこっちに寝返らないか？」

「……………交渉成立（グツ！）」

「オレの部下ってこんなのばかり~~~~っ！」

魔王役でもヘタレは健在な烏丸大貴。

一癖もふた癖もある部下を前に胃を痛めている。世が世なら大規模な人事を行っていただろう。

しばらく頭を抱えていじけていたが、気を取り直して刀を抜く。

「ええい！ こうなったら仕方無い！ オレが相手だ！ 来い、終

夜！」

さつきまでのヘタレた姿などなかったように威風堂々と刀を構え階段をゆつくりと降りてくる魔王・烏丸。

「えい」

ありすの魔法で大貴の足元にバナナの皮が現れ、それを踏んだ大貴は時代劇俳優も真っ青になる様な見事な階段落ちを披露した。

と、というか演技ではなく本当に落ちているのだが……。

「そんなバナナ！ 台本にはこんなシーン無かったぞ！？」

「え？ だってアドリブだし？」

「こんな危険なアドリブシーンを加えるんじゃないやねえっ！」

つくづくバナナの皮と相性の悪い男、烏丸大貴。

「痛ててて……。し、仕切り直しだ！ 来い終夜！」

「行くぞみんな！ 魔王・烏丸にオクトパスアタック（たこ殴り）だ！」

「「おおー！」」「」

「え……。？ ちょっと……。？ あの……」

終夜の台詞を聞き、大貴は顔を真っ青にした。

「ちょっと待て！ 役の上でも正義の味方のお前らが一人を寄ってたかってボコるってのはいかなものか！？ こんなえげつない勝ち星拾っても、誰かに自慢はおるか、恥ずかしくって日記にもつけられないぞ！ 新条助けて！ こいつら眼が据わってる！」

大貴は終夜達のただならぬ雰囲気を感じて、この場における唯一の良識人であるありすに涙目で助けを求める。もはや演技の事など忘却の彼方だ。

誰だって自分の命は惜しいのだ……。

「烏丸君……」

「……なんだ？」

「あなたの事は忘れないからね」

「ちょっと待て！ それ完全に死亡フラグだよな！？」

「大丈夫！ 魔王なんてやってる時点で死亡フラグ立ってるから！」

「痛いだろう？ 苦しいだろう？ 辛いだろう？ 貴様達を生とい
う苦悩から解放してやるう！」

「させるか！」

「む？」

「させない……！ 誰一人として……殺させはしない！」

トドメを刺そうと近づく魔王・烏丸の前に終夜が立ちふさがる。

対して終夜は友情・努力・勝利という何処かの漫画雑誌の三大原則
が似合いそうな男だった。この二人を主役と悪役に据えた演劇部の
部員達は自分たちの配役は的確だったと確信して影でニヤケている。

「うおおおおおおおおおおおおお！」

終夜は声を張り上げて摸造刀を抜き、大貴に斬りかかる。大貴も刀
を抜き終夜を迎え撃つ。

終夜は力いっぱい斬りかかるが大貴はそれを子供を扱うかのように
かわし、いなし、弾く。

そして終夜の剣が弾かれ、宙に舞った。

「人間にしては中々頑張ったが……これで終わりだ！」

「させないわ！」

「ぬおっ！」

終夜にとどめを刺そうと刀を振り上げた瞬間、横から美波の蹴りが
入る。

「終夜は……！ 終夜は……！ ウチを守る！」

その瞬間、時間が止まった……。

「美波……！」

「終夜……！」

終夜と美波は手を取り合い、見つめ合っている。

2人の中に点描が飛んでいるように見えるのは決して大貴の気のせいではないだろう。

「お、お前ら！ オレと台本を無視して2人の世界に突入してるんじゃないぞ！」

（ちよ……！！ 島田……！！ 台本と違っ……！！ どういう事だよ秋月……！？）

（ハッ！ ごめん！）

（ついやってしまった）

台本では『勇者が魔王にトドメを刺される瞬間に最終兵器を発動、動きを止めている間に勇者が魔王を倒した後、秀吉姫を救出。その後勇者と幸せに暮らしてめでたしめでたし』と、いった感じだったのだが、ここにきて急な予定変更が必要になった。

これだけ美波といちゃついている勇者役の終夜が姫とくっつくなんてありえない。

大貴と終夜は眼を見合せて頷き、舞台袖にいる秀吉に視線を送った。裏で『オネエサマオネエサマオネエサマオネエサマ……！！』とか地獄の底から響くような声が聞こえてきたような気がしたが、そんなの気のせいだ！ と大貴と終夜は結論付ける。

というか結論付けなければ大貴はともかく終夜は怖くて枕を高くして眠れない。

ただひたすらこの状況を打開できそうな秀吉に救援を求めるが

《気合いで乗り切るのじゃ!》

((そんなご無体なああっ!))

秀吉が掲げたカンペを見て、大貴と終夜の心の声が見事にハモツた。今の2人の心境は極寒の雪山に装備なしのパンツ一丁で放り出されたようなものだった。

考える! 考える考える考える考える考える!

破綻しない方法を考えないと!

脳みそフル回転で打開策を考える大貴と終夜……。やってしまった事を自覚して顔を真っ赤にして慌てふためいている美波……。

舞台の上はカオスだった。そんなこと観客はまだ気づいていないことだけが救いだった。いつまでもこうしてはいられない。

とりあえず動く! 最終局面まで台本通りに動いて後はノリで何とかしよう!

コレが2人が達した結論だった。

「魔王烏丸! 最後だ!」

「フン! どんな物が出てきたとしても我霸道! 止められぬわ!」

終夜は瑞希から貰った最終兵器を発動させた。

とはいってもかぶせていたシーツを取っただけだが……。その中から現れたのは

「ヒロ? 秀吉をさらってどうする気だったのかしら?」

「最終兵器彼女~~~~~!?」

「どういう事だよ!? 最終兵器って神剣とか何とかいうものだったはずだろ!？」

大貴が周りを見渡すと全員揃いも揃って口の端だけ釣り上げたいわゆる『意地の悪い笑み』を浮かべていた。

大貴だけ事態を把握できておらず呆けた顔をしている。対して優子は凄くいい笑顔で大貴に迫っていく。

「ヒロ? 秀吉をさらってどうする気だったのかしら?」

「あ、いや……! その……!」

「やっぱり女房と畳は新しい方がいいのかしら? ふふふ、本当にしようがないわね」

「は、ははは……。」

「覚悟しなさいよ!？」

死亡フラグが立ちました!

これだけ分かりやすい死亡フラグはどこを探してもないだろう。

チクシヨウ、お前ら! だましたな!

騙されたことを少し遅れてやっと悟る。

そうしている間にアント オ猪木のテーマソングが流れてきた。

「1・2・3!」

ㄩㄩㄩㄩダ

ツ! 『』

そして 大貴にとっての地獄が幕を開ける。

スリーパーホールド、ドロップキック、アリキック、ニードロップ、

コブラツイスト、卍固め、延髄切り、そしてトドメのジャーマンス
ープレックス……。
観客は大いに沸いた……。
優子が目立ち過ぎて、話が破綻した事には誰も気づかない。
観客はみんな『優等生の木下優子が凄い！』という事にしか眼がい
つてないのだ。

「こうして魔王は滅び、秀吉姫を救いだし、勇者・秋月終夜は格闘
家・島田美波と未長く幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし
！」

「……ち、ちつともめでたくねえ……！」

舞台は成功した。

大貴の命と引き換えに……。

.....

ヒロSIDE

楽屋裏

「おつかれ、新条……」

「おつかれ、烏丸君」

げんなりしているオレに対して新条がねぎらいの言葉をかけてくれ
た。

周りを見回すと明久は桃宮と姫路と、雄二は霧島と格闘中、終夜は
島田とじゃれている。

まったく元気な奴らだ。

「全く、酷い目に遭った……」

「本当にお疲れ様」

優子の襲撃を受けてボロボロになったオレはとりあえず新条とダベつてる。

「雄二の所に行かなくていいのか？」

「……………」

地雷踏んでしまったかな？

それじゃあとりあえず雄二の話は置いて、気がかりになってる事を聞こう。

「さっきの舞台でさ、バナナの皮が何もなくてところからでてきたよな？」

「え？ う、うん」

「あれは何だ？」

「え…………！？ あ、あれはね！ 烏丸君がハリセンを出すのと同じ要領で！」

「嘘だな」

「う…………」

新条は固まってしまった…………。

顔色が少し青くなって、震えてしまっている。

「人には知られたくないこと、か？」

「……………うん」

「わかった。それじゃあこれ以上は聞かないし、さっきの事も忘れ

る」

「え？ いいの!？」

「聞かれたくないんだろ？」

「う、うん……」

「悪かったな。困らせるつもりはなかった」

理由なんてわからない。

けど、新条はそれを隠したがっているのは間違いない。なら、そこはオレが軽々しく興味本位で踏み込んでいいところではない

隠してるって事〓信用されてないと、いう事ではない。

隠すって事は知られたくないからだ。

人にはそれぞれ他人に知られたくないとがある物だ。

それが分からないほどオレは野暮じゃない。

「あゝ、そろそろ止めてやった方がいいじゃね？ 雄二が泡吹いてるぞ？」

「あ、うん！ それじゃあ行ってくるね！」

新条は慌てて席を立ち雄二と霧島の方へ向かう

その様子が微笑ましくついで小さいな笑みをこぼす。

新条は少し行つて立ち止まり、こちらを振り向いた。

「ありがとう、烏丸君！ 聞かないでくれて！」

いっただけ言つて新条は再び雄二と霧島の所へ突撃していく。

その言葉を聞き、少し呆然とした後、もう一度小さく笑った。

特別編 カラスと魔法使いとその他色々(後書き)

かなり妙な話でしたが如何でしたでしょうか？

レフェルさんに怒られないといいんですが…… (汗)

感想お待ちしております。

特別編 カラスと雲雀（前書き）

GAUさん作『バカと雲雀と召喚獣』より『支倉ひばり』さんと『クリステイーナ・ウエストロード』さんの出演です。
上手く出来ていたらいいなあ……。

特別編 カラスと雲雀

文月学園のFクラス……。

この教室で一人の少女が眠っていた……。

少女の名前は『支倉ひばり』、Fクラスで『小女神』リトルゴッテスと呼ばれ崇められている。一部では熱烈なファンクラブまで存在するほどの小動物的な愛らしさがある少女だ。

ひばりは日頃の疲れが一気に出て誰も居ない教室で眠ってしまったのだった。

.....

支倉ひばりは夢を見た……。

暗く、冷たく、哀しく、恐ろしい夢を……。

走っても、走っても追ってくる『何か』から必死に逃げていた……。その『何か』が何なのかひばりには分からない。しかしその『何か』はとても恐ろしい物だという事を本能的に理解していた。

『何か』に腕を掴まれる。そして……暗闇の中に引きずり込まれそうになった。

もがいても、もがいても『何か』から抜け出す事が敵わなかった。

「助けて」と叫びたくても声を出す事が出来ない。そしてひばりは闇に包まれる。

怖くて……、冷たくて……、寂しくて……哀しくて……涙が溢れてくる……。

「誰か……助けて……！」

絞り出した声はは暗闇の中に吸い込まれた。
それでも尚、助けを求め続ける……。

「誰か……！ 助けて……！」

『 たつたら たつたら たらたら たつたら 』

「え……！？」

この雰囲気完全にミスマツチな歌声が聞こえてくる。

あまりの訳の分からなさにひばりは啞然として、眼を丸くした。

『 たらつたら たつたら たつぷりつたらつたら 』

歌声はどこか楽しそうで、非常にイラツとくるような感じだった。

恐らく歌声の主は意図的そうだったイラツと来る雰囲気を出して
るに違いない……。

そして歌が異様に上手い事も不愉快さに拍車をかけている。

ひばりのツツコミ魂ソウルに火が付いた。

「なんでタラコの歌なの！？」

ハリセン・小烏丸を取り出し、思いっきり振り下ろした。

.....

スパーンという音が教室に響き渡る。

ひばりが小烏丸で歌声の主『烏丸大貴』にシバいき倒したからだ。

「何をする、支倉。せつかくうなされてたから起こしてやったのに

……」

頭をさするながら抗議する大貴、横ではクラスメイトの『クリステイーナ・ウエストロード』が腹を抱えて大笑いしている。

「普通に起こしてよ！ 何でタラコの歌を耳元で囁くの！？」

「支倉、間違ってるぞ。あの歌の正式名称は『たらこ・たらこ・たらこ』だ。それに耳元で囁いたんじゃなく、メガホンを使って
「そんなこと聞いてない！」

スパーンと、小気味よい音が再び教室に響き渡る。クリスはそれを見て更に大笑いをした。

笑いすぎて腹筋が痙攣していた。

「オーケー、オーケー、わかった。耳元で『タラコ・タラコ（以下省略）』を囁いた理由だな？ 話せば長くなるんだが……」
「手短くね」

「了解、意思疎通ギリギリの手短さで語ろうか！ オレが補習室から『姐さん』と帰ってきたとき偶然か必然か、はたまた運命のいたずらか支倉が教室で大きないびきをかいて寝ている所を発見、このままでは『風邪をひくだろうな』と思って起こそうかと思ったがあまりにも気持ちよさそうに寝ているので『起こすべきか？』『そのままにしておくべきか？』と10分ほど迷った。そしてオレは迷った末に制服の上着を支倉の肩にかけ、姐さんと一緒に支倉が起きるのを待とうと考えた。
省略 そのまま『ああ、今日はいいい天気だな』とか『今日の晩飯何にしようかな？』とか『今日も西村先生の鉄拳は相変わらず痛かったな』とか『雲は何で白いんだろうな？』とか姉さんと話している内に支倉がうなされ始めた。脊髄反射で『これはもう起こさなくちゃダメだろ！』という結論に至り起こそうとしたが、普通に起こしたのではオレの芸人魂が納得できな

い。より面白い起こし方を0.5秒で考え、『たらこ・たら（以下省略）』をメガホンで支倉の耳元で熱唱するという方法を　へぶうっ！」

「ムダに話が長いよ！」

クーガーの兄貴並みの早口で訳を話す大貴は言い終わる前にひばりに小烏丸でどつかれた。それはもう芸術的なまでのツツコミのキレだ……。

その攻撃を受け大貴はややオーバーリアクション気味に一回転した後、畳に倒れ込んだ。

「腕を上げたな、支倉……。小烏丸を短期間でここまで自在に使いこなすとは……！　もうお前に教える事は何もない……！（ガクッ）」

クリスは大貴の元に駆け寄り、体を抱き上げる。

「ヒロっち……」

「あ、姐さん……」

「遺言は……？」

「オ、オレが死んだら、その事実を3年間隠しておいて下さい……」

「おお、始皇帝みたいだねい」

「そしてベットの下にあるオレの遺産は明久、雄二、秀吉、ムッツリーニに平等に分配してください……」

「うん……」

「さ、最期に一つお願いが……！　あ、姐さんの豊かなお胸で眠らせてください……」

「お安い御用だよ……。お休み、ヒロっち……」

「はい……。これで……思い残すことは……」

『ヒロ、アンタ何してるのかしら？』

「ほあああああああつー！ ごめんなさい、優子さん！
今起きます！ すぐ起きます！ ってあれ？」

自分の彼女である優子の声がしたので『文月学園二大恐妻家』と呼ばれる大貴（ちなみにもう一人は雄二）は慌てて飛び起きたが、優子の姿はどこにもなかった。

「支倉……！ だましたな……！？」

ひばりお得意の声帯模写に騙されたことに気づき、ジト眼でひばりを見る大貴。

対してひばりは『してやったり』という笑顔を浮かべていた。

しかし大貴はすぐに邪悪な笑みを浮かべる。ひばりはその顔を見て思わず一歩後ずさった。

大貴がこの顔をしている時は大抵ロクな事を考えていないのだ。

「な、何をする気！？」

「『何をする気』か……。違うな、もうしてあるんだよ！」

「な、何を！？」

「鏡を見てみる！」

大貴に促されるままひばりは慌ててカバンの中から手鏡を取り出し、中を覗き込む。

「何これ！？」

ひばりのトレードマークとも言つべき『ポニーテール』が『ちょん髷』にされていたのである。しかもごく丁寧に針金で固定までしたあった。

「ふっ、我ながらホントに良い出来　スパアアアン！　デコが痛い！」

大貴がさわやかな笑みを浮かべると、ひばりは小烏丸を大貴の頭、正確には眉間に叩き込んだ。

「ヒ、ヒロっち……！　寝ているひばりにイタズラを……！？」

もし何も知らない人がクリスの言葉を聞いたら大貴はロリコンの上性犯罪者扱いされてしまうだろう。それが分かっているから大貴は慌ててクリスに弁解をする。

「誤解です！　オレは小学生は守備範囲外ですから！」

「あたしそんなにちっちゃくないよっ！？　烏丸君と同じ年だよっ！　もう！」

ひばりは頬を膨らませプリプリと怒ってりながら頭の針金を外す。針金はいとも簡単に外れ、ひばりの髪型がポニーテールに戻った。

「ははっ、悪い悪い。許してチョンマゲ」

「誠意が感じられないよ！」

大貴は優しい笑みを浮かべながら、ひばりの頭を撫でる。

ひばりはあまりの心地よさにそれ以上何も言えず、頬を膨らませながら、大貴をジト目で見ていた。

それをみてクリスは微笑ましい気持ちでいっぱいになる。

普段学校内でも精神的に大人で、人に甘えることをあまり知らず、優子や明久達以外の他人に対してどこか冷めている大貴だが、ひばりを前にすると年相応、いや年齢よりも子供っぽくなってしまっただ。

対してひばりも大貴に対して容赦がない。
こうしてみると2人とも仲の良い兄妹の様だった。
クリスにはそれがなんとなく嬉しかった。

「まあまあ、ひばりん　　ロッキーもロッキーなりに反省してるよ
ん」

「ロッキー……だと……？」

クリスの言葉を聞いた瞬間、大貴はひばりを撫でる手をピタリと止めた。

その表情は眉間に皺を寄せ、険しくなっていた。

「何か気に入らない事があったんだろうか？」とオロオロするひばりだったが、その心配は杞憂に終わった。

「『明日の為にその一！　やや内角に決り込むように！　打つべし打つべし打つべし！』　　って何をやらせるんですか、姐さん！」

「ヒロポンが勝手にやっただけだよんっ」

「『ダメ、ゼツタイ！』　　ってまたまた何やらせるんですか、姐さん！」

「カラカラが勝手にやっただけだってばんっ！」

「その呼び方は『任　堂』に怒られちゃう！」

「いい加減にしなさい！」

スパパアアン！

いい加減收拾がつかなくなってきた大貴とクリスのやりとりにひばりの小烏丸が火を吹いた。

「痛いよんっ！？　ひばりんっ！　ていうか、そのハリセンどこから出したのなんっ！？」

「企業秘密です」

「ホントに立派になって……！ お兄さん嬉しいよ……！」

自らがハリセンを与え、そのいろはを伝授した愛弟子の成長した姿に大貴はそつと涙する。

とはいっても泣いたふりだが……。

「もう……！ 2人とも何でいつもそんなにやりとりばかりしてるの？」

「いや、何となく……姐さんのネタは拾わなければいけないような気がする」

「お姉さんも何となくヒロっちにネタを振らなきゃいけないような気がしてない」

大貴とクリスは顔を見合わせ、ガシツと握手した。

そして大貴とクリスはお互い頷き、ひばりからまっすぐ見えるように並び、足を肩幅に広げ、上半身を少し前に倒した。そしてそのままグルグルと回り出す。

続いてクリスも大貴の動きとタイミングをズラし同じようにグルグルと回り出す。

「はっはっは、やりますね、姐さん！ オレの考えを瞬時に読んで動いてくれるとは！」

「はっはあ、おねーさんにかかればザツとこんなもんよん」

その光景にひばりはどうツッコミを入れたらいいのか分からず、顔を引き攣らせていた。

もはやひばりは置いてけぼりだ。

1分ほどその動きを続け、大貴とクリスは再びガシツと握手をした。

「すごい！　すごいですよ、姐さん！　オレのポケにここまで付いてきたのは姐さんが初めてです！　結婚して下さい！」

「あつはつはあくん、一昨日来やがりなん」

「オゝマイガツ！　これで48戦48敗ですね」

「そうだねん　またの挑戦を待つてるよん」

振られたのにあまり悔しそうではない大貴、お互いに冗談だと分かっているからこそその光景だ。そのまま冗談で終わればどれだけ良かっただろうか……。

「ヒロ、アンタ何やってるのかしら？」

「おいおい支倉、二回も同じ手に引っ掛かるわけないだろ？」

後ろからかけられた声をひばりだと思ったがすぐに違和感に気が付いた。

ひばりは自分の斜め前にいるのだ。しかも顔を真っ青にして口を金魚のようにパクパクさせながら大貴の後ろを指差している。

ギギギという音が聞こえてきそうな動きで後ろを振り返った。そこには　凄くいい笑顔で青筋を浮かべている優子がいた……。

「アタシの前で他の人にプロポーズなんていい度胸してるじゃない？」

「えつと優子さん？　ヘアピン変えたんだな？　すごく似合ってるぞ……」

「アラ、ありがとう。ところで輸血の準備はしてあるかしら？」

あからさまに話題を逸らそうとするが、そんな手が優子に通じる訳がない。

その後大貴の地獄の底から響くような悲鳴が学校中に響きわたった……。

.....

ヒロSIDE

「ヒロっち、無事かなん？」

「まあ、なんとか……」

オレは優子から折檻されてボロ雑巾のようにされたが、すぐに復活して立ち上がる。

相も変わらず人間離れした回復力だ。自分のことながら空恐ろしいよ……。

「優子と支倉は？」

「仲良く一緒に帰ったよん」

「そうですか」

「ヒロっちは本当によくひばりにちよっかいをかけるねい？」

「まあ、そうですね。オレ支倉の事大好きですから」

「おお、爆弾発言だねい ゆーこりんとひばりんと三角関係

どちらに軍杯があがるかなん」

「ははっ、わかってるくせにそう言っんですね」

「どっという意味かねい？」

「オレが支倉に恋愛感情を抱く事はありませんよ。恐らく支倉も同じでしょう」

「……………」

「オレと同じように『支倉ひばり』という人間は何処か歪で壊れています。」

オレは『自分を含めたすべての事を憎む』事で

支倉は『誰かの為である事』で壊れた心を守ろうとしている。

自分の身を削るほどの献身

恐らくだが、これが『支倉ひばり』という人間の歪みの正体……。それにオレが気付いたのはオレ達が2人共、根っこの部分で『自分たちは同類だ』という事に気付いているからだ。

以前誰かが『オレは支倉に好意を抱いているのじゃないか？』と聞いてきた事があった。

しかしそれは絶対ないと、断言できる。

「確かにオレと支倉は恐らく誰よりも心が近い。けどそれはオレ達と同類だからです。お互いにお互いが『壊れた人間』だという事を分かっているからこそなんですよ……」

互いが互いを感じている『シンパシー』これが心が近い理由……。寄せ集めのガラクターパーツで作った物はちよつとした事ですぐに壊れてしまう。

オレ達が引っ付くと言う事はそういう事だ。

「オレに支倉を救う事はできません。同じく壊れた人間であるオレには出来ないんです。」

オレは支倉の持つ危うさを感じ取る事が出来る。壊れた人間に壊れた人間を救う事は出来ないのだ。

「けど、だからこそ『心を救う』事は出来なくても『心を護る』事は出来る。だからオレは――」

支倉が心の闇に取り込まれないように『踏み留める』事がオレに出来る精一杯だ。

「なんでおねーさんにそんな話をしてくれたのかなん？」

「……あなたもオレと同類だからですよ……」

「……いつ気づいていたのかなん？」

「『気付いていた』なんて言えたら格好いいでしょうけど、確証はありませんでした。ただ『何となく』あなたから壊れた人間独特の匂いがしたので」

「お姉さんが何故壊れてるのは聞かないのかなん？」

「……あなたが話すべきだと考えたらオレは聞きますが、話したくない物を無理に聞き出す気はありませんよ」

「……ありがとうねい……」

姐さんが微かに笑う。その笑顔には……今にも消えてしまいそうな儂さがあった。

心の闇とは厄介なものだ……。

自分が悪いという思い込みから解放されると悲しみが

悲しみは怒りに変わり

怒りは憎しみに変わる

そうしてそれは毒の様に自らを蝕み、破滅へと導いてしまう。

支倉にはそうなって欲しくない。

そうなってしまったら 遅いんだ……。

そうならないようにオレはあの笑顔を護りたい……。

あの笑顔が壊れてしまわないように

そしていつかは

いつかは支倉を救ってくれる奴が現れて欲しい。

オレに優子がいてくれたように、支倉にもいつか自分を救ってくれる人が現て欲しいと、願わずにはいられない……。

.....

NO SIDE

「ごめんね、ひばり。ヒロが迷惑かけちゃって」

「ううん、大丈夫だよ。むしろ烏丸君がいてくれてよかったんだ」

「……何かあつたの？」

「うん……。怖い夢を……見たんだ……」

「怖い夢？」

「うん。……暗闇に引きずり込まれて……二度と戻ってこれないよ

うな……そんな怖い夢……」

「……………」

「起きた時、烏丸君とクリスがいてくれたから……凄くホッとして

……それで……」

「……………」

ひばりの眼からポロポロと大粒の涙が零れおちる。

優子はそれを黙ってひばりを抱きしめた。

「怖かったよう……」

「大丈夫、大丈夫だからね……。どんな事があっても……アタシと

ヒロはひばりの味方だし、秀吉やFクラスの人達だつて絶対に助け

てくれるから……」

「ありがとう……。優子ちゃん……」

「忘れないで……。あなたは自分が思っているより周りのみんなに

愛されてるんだから」

温かさの中ひばりは泣いた……。
少しづつ、少しづつでいいから ゆっくり傷を癒してほしい……。
自分の胸の中で泣いている強くて弱い大切な友達を優子は黙って泣き止むまで抱きしめ続けた。

特別編 カラスと雲雀（後書き）

如何でしたでしょうか？

感想をお待ちしております。

次回からは一旦本編に戻ります。

まあさん、リザクさんとのコラボと、逃走中は現在制作中ですので
もう少しお待ちください！

第7部開始 第83話 取られた物は取り返せ！（前書き）

19世紀の終わり、ドイツの宰相は世界最初の社会保障制度を創設し、貧困者達の救済を図った。また、この救済と同時に、社会主義者鎮圧法を制定した為、この政策は『（ ）とムチの政策』と呼ばれた。

次の問いに答えなさい。

問1 当時のドイツの宰相を答えなさい。

問2 （ ）の中に当てはまる単語を答えなさい。

姫路瑞希の答え

問1 ビスマルク

問2 アメとムチの政策

教師のコメント

正解です。ビスマルクは政策として、社会保険制度をご褒美 っ
まり『アメ』として民衆に与え、一方で社会主義者鎮圧法という『
ムチ』で人々を叩いたという訳です。甘やかすだけではなく、叩く
だけでもない。政治のみならず、様々な場面で用いられる手法です
ね。

土屋康太の答え

問1 エリザベス

教師のコメント

ムチ 女王様 エリザベス女王

最近君の考えが読めるようになってきて先生はとても不思議な気分
です。

吉井明久の答え

（ムチ）とムチの政策

教師のコメント

叩きすぎです。

烏丸大貴の答え

（ハリセン）とムチの政策

教師のコメント

ムチはツツコミの道具として使わないで下さいね。

第7部開始 第83話 取られた物は取り返せ！

「西村先生、知的好奇心を育むには具体的な目標が必要だと思わないだろうか？」

「古今東西、科学技術の発展の裏側には、必ず戦争の影が存在した。鉄が生まれたのは工業の為ではなく、剣や鎧を作るためであり、馬が飼育されたのは農業の為ではなく騎兵の生産の為だ。近代で例をあげるとしたら、核技術の発端だって戦争といえるだろう」

「……………」

「科学技術の発展という明るい結果が生まれる背景には、必ず人間同士の戦争という暗い過程が存在し続けてきた。とまで言うのと流石に言いすぎかもしれない。しかし戦争という危険だが明確な目的を持つと、その度に科学技術は飛躍的な発展を遂げてきた。これは残念ながら紛れもない事実だ」

「……………」

「本来、科学技術の発展というのは知的好奇心を原動力として発生する。それは古代だろうと現代だろうとどのような時代であっても変わりはない」

「……………」

「だがその原動力によって効率的に結果に結びつくのは、過去の事例を見る限り『戦争の勝利』という闘争本能に根ざした『具体的な目的』が存在する場合が多いと言える」

「……………」

「別にだからと言って戦争が必要だと言っている訳じゃない。戦争というのは多くの死者を出し、それは『同種族を殺す』という生物にとつての最大限のタブーを犯している続ける愚行そのものだ」

「……………」

「だが、それが愚行であってもそこから学びとれるものは少なから

ず存在する。それは『知的好奇心は具体的な目標を持つことで、より良い結果へとつながりやすい』という事実だ。　　ここまで言えばあとは先生には分かってももらえると思うが」

ここまで言っただけ黙って雄二の話を聞き続けていた西村先生がゆっくりと口を開いた。

「……坂本、お前の言わんとしている事は伝わってきた。確かにお前の言う通り知的好奇心は目的の有無でそのあり方は変わってくる。それはその通りだ。……だが」

組んでいた腕をオレ達全員を見てはつきりと告げる。

「　　没収したエロ本の返却は認めん」

「「「ちつくしよおおおおおおおおおつ！！！！」」」

新学期早々持ち物検査なんてやり方がやり方が汚ねえ！　汚すぎる！　しかも初日にはあえて何もせず、油断している2日目に行われた。完全に油断していたオレ達は男の聖書^{エロ本}2冊、普段読む本を10冊、漫画を5冊、料理本を8冊、動物写真集を3冊、アイポット、デジカメ、DVD、須川に貸すと約束していたゲーム、アヒルなど西村先生にすべて没収された。

え？　どこにそんなに何処に持っていたかった？

知り合いから貰った異次元バック（特許志願中）に入れていたんだ！

しかしオレも完全に油断していた！　烏丸大貴、一生の不覚！

「どうしてですか西村先生！　さっきの雄二の演説を聞いたでしょー！？　僕達が保健体育という科目を学習に対する知的好奇心を高めるためには『エロ本の内容の理解』という本能に根ざした具体的

な目標が必要なんです!」

「学習しなければ理解できんほどの高度な工口本を読むな。お前は
何歳だ?」

「知識を求める心に年齢は関係ないと思います!」

「よく見る。ここに成人指定と書いてあるだろう」

「くう……! ああ言えばこう言う教師め……!」

「明久、熱意は買うが、正攻法で西村先生に勝てるはずないだろう
? ここはオレに任せろ。小細工と屁理屈はオレの得意分野だ」

「うん。任せたよ、ヒロ!」

「任された。西村先生、どうしてもその本を返してくれませんか?
」

「なんと言おうと返却は認められん」

「生徒の学習意欲を削ぐような行為を教師がしていいんですか!?

「教師だからこの本を没収しなければならんだ」

「先生だつて18歳になる前に工口本の1冊や2冊持っていたでし
よう!?

「なんと言われようと成人指定の本を17歳以下のお前たちに渡す
わけにはいかん」

「先生……、実はオレ……生まれて3年間出生届を出されていなか
つたんです……。つまりオレの実年齢は ハタチ 20歳なんです!」

『『『な、なんだつて つ!!!!!』』』』

「いや、お前ら信じるなよ! 嘘に決まってるだろ!」

「自分で白状してどうする」

「ハッ! しまった!」

「真顔で重い嘘をつくな、バカ者」

「あだつ!」

西村先生の堅い拳骨を脳天に落とされた。

ああ、眼の前にお星さまが……

「ヒロ……」

「すまない、明久……。オレには無理だった……。こうなったらプランB！青春の汗作戦だ！Fクラスの連中に視線を送ると全員オレの考えを読み取ったようでコクリと頷いた。さて行くぞ、野郎共！」

『お願いします、西村先生！僕等にその本を返してください！』

『僕らには僕らにはその本が必要なんです！』

『お願いです、僕等に保健体育の勉強をさせてください！』

『『『お願いします、先生！』』』

青春の汗作戦！それは生徒全員が青春映画のノリで行動し、それを受けた対象（教師に限る）も自分が青春映画に出てくるような教師であると誤認させ、ついうっかりノリで行動してしまうという恐ろしい作戦なのだ！

「黙れ。一瞬スポ根ドラマと見紛うほどの爽やかさでエロ本の返却を求めな」

なんてノリの悪い教師なんだ。

「それならこう考えてくみられませんか？」

「だからなんだ吉井。これ以上無駄な演説に割く時間はないぞ」

「あれはエロ本ではなく保健体育の不足分を補っている参考書だと「全員きちんと準備して授業に臨むように。朝のホームルームを終わる」

「ええい！こうなりや実力行使だ！僕らの大事な参考書エロ本を守るため、命をかけて戦うんだ！」

『『『『『おおおおおお!!!』『』『』』』』』
「相手は出鱈目な人外だ！ だけどこっちにも人外に片足を突っ込んでいる人間兵器ヒロがいる！ 加えてこの人数だ！ 負けるわけない！」

スパア ツン！

「誰が人外やねん！」

「痛い！ 痛いよヒロ！ ハリセンなんて何処から出したの!？」

「企業秘密だ！」

「烏丸、まだ余計な物を持っていたか……！ それも没収だ！」

「冗談！ オレの大事な大事な『小烏丸』を奪れてたまるか！」

「……そのハリセン、名前あつたんだ……。」

「キサマでは俺に勝てん」

「夏休み前のオレと思わないでください！ 修行の成果見せてあげます！」

感覚を研ぎ澄まし、心を鎮める……。

よし……、これなら……いける……！

無想 ガスッ！

「アダッ！」

「隙だらけだ、バカ者」

ま、また眼の前にお星さまが……！

「全員かかれ つ！」

『『『『『おおおおおおおっ!』『』『』』』』』

オレがやられたあとFクラス総出でかかるが西村先生は巧みな柔道

技で次から次へとなぎ倒していった。
そこでオレの意識はブラックアウト……。

.....

「あの野郎絶対人間じゃねえ……！」

「だよな……。どうして47人の男子高校生を相手にしてたった一人で戦えるんだろ……？」

「……もはや人間兵器レベル」

「こつちの人間兵器は全く役に立たなかつたしね……」

「今もぶっ壊れてるぞあいつ」

「オレの……オレの小烏丸がああああああ……！」

「アンタらつてこういう時は凄い結束力を発揮するわよね」

「すごい結束力つてそんなに統制が取れてた？」

「統制つて言うより……どうしてクラスの全員が一人残らずああいう本を持ってきてるのよ？」

「まあ、それは色々と男子の事情があるんだよ」

「あんな本を全員で持つてくる事情つて一体……？」

「没収されたのは仕方ないと思います。その……明久くんにはあーいった本は……その……早いと思いますから」

「うう……、そうは言っても納得いかない……」

小烏丸を失った悲しみを紛らわせるため涙を拭いて話を聞くと姫路と島田は明久の抱き枕カバーを、秀吉は演劇の小物として使う携帯ゲーム機を没収されてしまったようだ。

「雄二はどうだったんだ？」

「俺はまたMP3プレーヤーだ。一昨日に出た新譜を入れたばかりなのに全部ペアだ！クソッ！」

「……………持ち物検査の警戒を完全に忘れていた」

「……………ムツツリーニ、被害は？」

「……………データの入ったメモリも全部没収されたから当分再販も出来ない」

「……………ええ！？」「……………」

「どういう事さ、ムツツリーニ！ いつもきちんとバックアップを取っているんじゃないの！？」

「そうですねよ土屋君！ どこかに予備データは残っていないんですか！？」

「本当は家のパソコンを探せば出てくるわよね！？」

「……………バックアップはある。しかしサルベージに時間がかかる」

「すまん。オレが手伝えれば良かったんだが、パソコンはあまり得意じゃなくて……………」

「……………（フルフル）気にするな、ヒロ」

「ムツツリーニ……………」

自分が情けない……………！ こんな時に指をくわえて見てるしかないなんて……………！

『おい、聞いたか？』

『ああ、再販が未定とは……………！ 姫路や島田や木下の水着姿がそれまでお預けなんて死にも等しい苦行だぜ……………』

『それだけじゃない。霧島に工藤に知らないお姉さんまで水着で写っていたらしいぞ……………！ それを見られないなんて……………！ 俺はっ！ 俺は……………っ！』

絶望的とまではいかなくてもそれに限りなく近い報告を聞きクラスメイトからはシヨックの声が上がる。

オレだって優子（予約でネガごと買い占めた）と玲さんの水着と浴

衣写真を凄く楽しみにしてたのに……！

「クツソダラアツ！ 許さん……！ 許しておけるか……！」

「どうする、2人とも。やる……？」

「愚問だな、明久……！」

「その通りだ。こんな横暴を許したら今後の学園生活に支障が出るからな。教師共 特に鉄人が出払った昼休みに職員室へと忍び込み、俺達の夢と希望を取り戻すんだ……！」

「……お前たちだけを戦わせはしない」

『ムツツリー二の言う通りだぜ』

『俺達仲間だろ？』

『忘れて貰っちゃ困るぜ！』

「みんな……！ 感謝する」

持つべきものは仲間だ……！ オレは今！ モーレッツに感動している！

「行くぞお前ら！ 取られたものは取り返せ！ 俺達のチームワークの見せどころだ！ そこに少しでも希望がある限り！ 俺達は進み続けるんだ！」

『『『おおおおおおおおっ……！』』』

「待ってください！」

「？ どうしたの姫路さん？」

「あ、あの！ やっぱりそういうのは良くないと思うんです……！」

「良くないって職員室に忍び込もうとしている事？」

「はい」

「なんでだ姫路！？ お前も没収された大事な物を取り返したくないのか？」

「そ、それはその……。返ってくるなら嬉しいですけど……。学校のルールを破っちゃったのは私自身ですから……！」

「まあ、瑞希の言う通りよね。元々ウチらが校則違反をやっちゃってるのが原因なわけだし。その罰に納得いかないからって、また問題を起こすのはちよっとね」

「ウツ……!」

姫路の言葉に島田が援護射撃を送る。徹底した正論だ。

しかも正論を盾に自身を正当化するのではなく、自身にも公平に正論を突き付けている。

これは反論できない……。確かにこの作戦は問題があったかもしれない。

「どうしようか？　そこまで言われると盗み出すのはちよっと……」

「あ……、どうするも何も……。姫路と島田にそこまで言われたら考え直すしかないだろう」

「そうだな」

「明久くん、皆さん……！　分かってくれたんですね？」

「ああ、姫路すまなかった。オレ達が間違っていた……」

「いいえ！　わかってくださればいいんです！」

「いいかった事はよくわかった。つまりこういうことだろう？」

「忍び込むのではなく、正々堂々正面から殺つてしまえ！　という事だな!？」

「全然違いますからね!？」

.....

「だから何でお前たちはそこまで単純なんだ？」

ただ今オレ達は冷たい床に正座をさせられひたすら補習の問題集をやらされていた……。

「クソ、汚ねえ……！俺達のお宝を奪ってボコった拳句、今度は職員室で召喚獣を用意しての待ち伏せとは……！教師の風上にもおけない連中だ……！」

「全くだよ。男らしく正面から堂々と襲撃に来た僕達を卑劣にも待ち伏せで迎え撃つなんて……！そんなの大人のやる事じゃない……！」

結果から言うと襲撃は見事に失敗し、暴動に参加していた同志は一人残らず捕縛されてしまった。かくいうオレは万全を期して無想状態になった後、襲撃を行ったが、行動開始から約30秒で西村先生と高橋先生の召喚獣というドリム^{反則}タツグにあっけなく捕まってしまったのだった。

「ヒロ、なんで無想状態で負けるのさ!？」

「無茶言うな！オレだけ高橋先生の召喚獣と西村先生の二人がかりだったんだぞ！いくら無想状態だからって得物無しであんなKILLマシーン2人に勝てるか！」

「無駄口を叩いているお前等にプレゼントだ」

「……ゲッ!」

プレゼントと称した問題集（赤いリボン付き）が机の上にドスンと置かれる。

それを見て顔をしかめるオレ達3人……。

「酷い！このチンパンジー人間じゃない！」

「さてはこのチンパンジー、俺達を家に帰さないつもりだな!？」

西村先生は無言で問題集をオレ達3人の机の上に置いた。

バカだな、2人とも……。雉も鳴かずに撃たれまいに　って何で

オレの机の上にも置かれているんだ!?

「西村先生! 何でオレまで課題を増やされるんですか!? しかもオレと明久だけ2冊ですし!」

「烏丸、夏休みの課題だが……」

「? きちんと全部やって提出したはずですよ?」

「吉井が初日にすべて提出した」

「ああ、明久が頑張ったって事じゃないですか?」

「そうか。それでは吉井の記述問題の回答と読書感想文の内容が一字一句すべて同じだった事についてはどう説明する?」

頭の中がフリーズした……。

「……こ、このバカ ツ! 何で読書感想文や記述問題まで丸写しするんだよ!?!」

「え!?! 写していいって、言っていたのはヒロじゃないか!?!」

「だからって読書感想文や記述問題まで一字一句全部丸写ししてどうするよ!?! これじゃあ『僕は人の宿題を丸写しました』って高々と宣言しているようなモンじゃねえか!」

「……………ハッ! しまった!」

「遅い!」

夏休み最後の日、「アキくんが課題をまだ終わらせていないんです」と、玲さんから愚痴のメールが送られてきたため、玲さんに内緒で明久を家に招き、オレの完成済みの課題を徹夜で写させたのはまだ記憶に新しい……というか2日前の話だ。

オレの苦勞を返せ、バカ野郎!

「坂本は早く提出しろ。吉井、烏丸は課題のやり直し! 期限は1週間、遅れたら利子として1冊づつ追加してやるっ!」

「『うぎいいいいいつ！！！！』」

『あいつらもバカだな。あんなチンパンジーに逆らうとは』
『全くだ。俺達みたいに大人しくチンパンジーに従っておけばいいものを』

『無駄な抵抗をしているからチンパンジーに眼をつけられるんだ』
『烏丸も哀れだな。吉井のバカを甘く見た所為でチンパンジーから眼をつけられて巻き添えだ』

「そう言えば他の連中も全員課題を提出してなかったな。安心しろ。全員平等に利子をくれてやる」

『『うぎいいいいいつ！！！！』』

クソダラアツ！ これで3日間徹夜決定じゃねえか！ なんて事しやがる、この鬼教師！

「おのれ鉄人！ 絶対に復讐しちやる……！！」

「あの野郎今に見てやがれ……！！」

「……………この恨み、忘れない……！！」

『月のない夜道には気を付けろってんだ……！！』

『見てろ、そのうち靴の中に画鋏を仕込んでやる……！！』

『それなら俺は鉄人同性愛者説を学校中に流してやる……！！』

「お前ら、復讐計画を立てるのはいいが、そういうのは実行の時が来るまで腹の底にしまっておいた方がいいぞ。その方が疑いが自分に向かない」

「更にもう一冊追加だ」

『『うぎいいいいいつ！！！！』』

グツ……！！ クソツ……！！ オレは何も復讐計画を立ててないってのにこの扱いはあんまりじゃないか……！！？

お宝^{エロ本}、DVD、その他諸々、そして何より『小烏丸』を没収された

上にこの扱い……！
久しぶりにこんな理不尽な扱いを受けた……！
オレにだって我慢の限界くらいはある……！
「まったくつくづくお前たちは……。体力が有り余っているようだから、そういうのは運動で発散しろ。幸い近々体育祭がある事だしな」

「……いかにも脳筋らしい発想だ（ボソツ）」

「一冊追加……！」

「うぎいいいいいい！」

何であんなに小声で呟いたのに聞こえるなんてどんな地獄耳だよ！？
この分じゃ校舎裏に穴掘ってその中に向って言った悪口でさえも聞かれてしまいそうだ。

「さて。俺はお前たちが暴れた職員室の後始末をしてくる。全員さぼらずに課題をやっておくこと。脱走したら……地獄を見せてやる」

……発言が教師じゃなくてチンピラになってる……。

非常に不穏当な言葉を残し、西村先生は教室を後にし、ガチャリという音がした。

あれ？ オレ達監禁されたんじゃない……？

「そついやもうすぐ体育祭か……。体育祭って事はアレがあるな……」

アレ？ アレって何だ……？

「雄二、やるんだね？」

明久が口の端を釣り上げる……。周りを見たら全員が同じように口の端を吊り上げニヤケている。一人だけ良く分かっていないオレはクラスメイトの豹変に少し戸惑っている。

「思えばこの5カ月。いや、入学してから一年五カ月。俺達はこの学校の教師陣に随分酷い目に遭わされてきた……」

「廊下に正座させられたり、補習室に軟禁されたり、^{エロ本}聖典を没収されたり、酷い設備の教室に押し込まれたり、学年の男子が全員停学になったり、学園長の裸を見せられたりしたよね」

『『『うんうん！』『』』

優子がいたら『自業自得でしょ』とツツコミを入れるだろうが、オレは入れる気はない。

何故ならオレだっていい加減我慢が限界に近づいてきてるからだ！

（自業自得）

「だがもうすぐ体育祭。俺達は この学校の教師共に復讐する事が出来るんだ！」

『応！ やってやろうじゃねえか！』

『去年は勝手がわからなかったが、今回はそうはいかねえ！』

『鬼教師共め！ 眼に物を見せてやる……！』

「いいかお前ら！ こんなチャンスはまたとない！ 今までの学校生活で罵倒され、虐げられてきたこの鬱憤。この機に晴らすずしていつ晴らす！」

『そうだ！ 恨みを晴らせ！』

『この機に乗じて仇を討て！』

『ドサクサに紛れて奴等を痛めつける！』

「全員今は牙を遂げ！ 地に伏し恥辱に耐え、チャンスの為に力を溜める。今この時は真に仇を討つ時期じゃない。鬼教師共に復讐

すべき時は体育祭。親睦競技という名の下に接触事故を装って復讐を果たす。いいか、俺達の狙いは」

『『生徒・教師交流野球だ！！！』』

「な、なるほど。そういう事か……！」

「特にヒロ！ お前にはいつもより多く動いてもらう事になる！」

「了解、任せておけ！ ジジイのコレクションから暗器をくすねておく！ 手裏剣、マキビシ、寸鉄、鉄扇！ 仕込杖と爆薬も作っておこう！ 勿論扱い方も指導しよう！」

「頼もしいじゃねえか！」

「ヘッ！ お前もな！」

「待っている、ババア、鉄人、その他恨み連なる教師共……！ 交流野球にかこつけて、必ず聖典の仇を取ってやるからな！」

「小烏丸……！ これが散って行ったお前への餞だ！」

「やるぞおおおおおっ！」

『『『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおっ！！！！』』』

Fクラス、皆の心が 1つになった瞬間だった……。

.....

連絡事項

文月学園体育祭 親睦競技

生徒・教師交流野球

上記の種目に対し本年は実施要項を変更し、競技に“召喚獣を用いる”ものとする。

文月学園学園長 藤堂カヲル

第7部開始 第83話 取られた物は取り返せ！（後書き）

レフェルさん！ 異次元バックありがとうございます！
さっそく本編で使わせていただきました！

久しぶりの更新、久しぶりの本編になります！
本当にお待たせしました！
長い間オ리지ナルばかり書いていたので、少し勘が鈍っているよう
な気がします。

しばらくは現実の方で忙しいので不定期更新になると思いますが、
見放さずにおいてくれるとありがたいです。

第84話 脅迫だって時には必要さ……

「ババア

ッ！！！」

「なんだいクソジャリ共。朝から騒がしいね」

「どうも、おはようございます。クソババア」

「アンタはさわやかな顔して毒を吐くんじゃないよ！」

朝、掲示板に張りつけられた内容を見て明久、雄二と共にバアサンに抗議にでた。

あ、絨毯を新しいのに変えたのか。父親に灰皿で殴られたときに流れ落ちた血痕がきれいさっぱりなくなってる。

「どうして今年から交流野球を召喚獣を使ったものに変えるんですか！？ これだと先生達を痛めつけて復讐できないじゃないですか！」

明久が学園長に凄い勢いで迫っている。このまま後ろから背中を押してやるのかな？

明久は学園長とのセカンドキスなんて非常に愉快的体験をする事になるだろう。

「……………アンタが今言った事がそのまま変更の理由になると思っただけどねえ……………」

バアサンはそう言って手元の資料に視線を戻しす。呆れて物も言えないといった表情だ。

「この野球大会の為に僕達がどれだけ目に見えないラフプレーを練

「けつ。このルール変更、どうせまた例の如く試験召喚システムのPRの為だろうが……その肝心のシステムは制御できるようになったのか？」

「肝試しや夏休み中ならともかく、今はもう完全に制御してあるさね。どこをどういじれば、ああなるかは分かっているんだからね」

確か本家に脅されてシステムをいじくった犯人だった先生が修復に全面協力して、意外にあっさり解決したんだっけ？ その先生は今は別の学校で教職を続けているらしい。

あれ以来ジジイの話によると、本家 というより、父親はあれ以上ちよっかいをかけてる気が無くなったらしい。

まあ、あの父親の近況なんてどうでもいいことだけだな！

「なんだい、その疑わしそうな顔は？ まさか、アタシが調整に失敗して、偶然野球仕様になって、それを都合よく利用しようとした、なんて思ったんじゃないだろうね？」

「……まさにその通りです」

「ふん。アンタらがどう思っているか知らないけど、野球用に組み替えるってのは並みの労力じゃないんだよ。召喚フィールドの拡張、バットやグローブの設定に、ボールっていう仮想体の構築もしくちやいけない。それこそ完全に制御できなければ出来ない事なのさ！」

「……なんだか熱心に語ってるけど、僕達には少しも理解できないよね、ヒロ？」

「そつだな。正確に言えば1ミクロンも興味がないから右から左へ抜けていくんだよな、明久？」

「僕達バカだもんね、ヒロ？」

「オレ達バカだもんね、明久？」

「このクソガキ共がっ！」

「まあ、どうせ上手くいっただから皆に見せびらかしたかっただけだ

るうね」

「まったく、年寄りの道楽に振り回されるこっちの身にもなって欲しいよな」

「」
バアサンの表情が固まった。わかりやすい反応だな、ホントに。

「おいおいお前ら。もうちょい発言に気を遣え。凶星を突かれてバアが凍りついちまったぞ」

「コイツはうつかりだ」

「そうだね。やっちゃったね」

「すみませんでした、学園長。凶星を突いてしまって」

「ち、違うさね！ これはあくまで一つの教育機関の長として、生徒たちと教師の間に心温まる交流を」

「あー、はいはい。流石だねー」

「そうだねー。尊敬しちゃうなー」

「そうですねー。心温まりますねー」

「本当に腹立たしいガキ共さね！」

「だが、そういう事ならルールを白紙に戻す事は可能だよな。なんせ変更の理由がバアの傲慢ってだけなんだからな」

「そうです！ ルールを元に戻してください！」

「却下だね」

「」
「どうして!?!」

「そこまで人をバカにしておきながらどうして断られると思わないんだい!?!」

「え？ バカにしてみました？」

「しかも自覚なしかい!?!...ゴホン、さっきの暴言が無くても今さら変更は無理だね。この通り、もうプログラムや来賓用のパンフレットも発注済みなんだからね」

「そんな...! 僕等の同意も無しに勝手にここまで話を進めるな」

んて……!」

「どうしてアンタ達のお伺いを立てなくちゃいけないんだい？」

まあ、そうだろうな。いきなりのルール変更は納得いかないが、いちいち学校側の企画で生徒の意見を聞くななんて事はまずしない。修学旅行の行き先を学校が勝手に決めるのと同じようなモンだ。当たり前といえば当たり前だが……このバアサンがやると腹立たしいから不思議。

「確かに今から変更って訳にはいかないだろうが、このままじゃ生徒と教師の間にも差が出ないか？」

「差ってというのは召喚獣の強さの事かい？ ハッ、何を言ってるんだか」

「でも、雄二の言う通りですよ！ 教師チームの点数は物凄く高いじゃないですか！ そんなに差をつけられたら勝てる訳が」

「バカ言ってるんじゃないよ。今回は戦闘じゃなくて野球じゃないか。召喚獣の力だけで勝てるって言うのなら、野球選手はみんなポディービルダーになってるよ」

「でも！」

「諦めろ、明久。この学校は試験校で、実践重視だ。点数の差はついている隙にはならない。むしろ肯定する材料になる」

「よく分かってるじゃないかい」

「ヒロはどっちの味方なのさ!？」

「いくら言おうが、ここはそういうルールで成り立っているんだから仕方ない。けど、学園長。このままやれば生徒のモチベーションが落ちるのも事実ですよ？ 来賓にそんなみっともない試合を見せるつもりですか？」

「そ、そうですね！ やっぱり今からでもルールの変更を」

「待て、明久。それは出来ないってさっき俺が言っただろう？」

「でもこのままじゃやる気が起きないよ！」

「今から変更なんてしたら、プログラムとパンフレットにかかった経費がそのまま損害になる。オレ達にその損害を埋める案はないし、いくらゴネようが現実的に考えて無理なモンは無理だ」

「ぐう……！」

「けど、このままじゃやる気が起きないのも事実だ。だからこそ雄二も代案を考えてあるんだろ？」

「え？」

「その通りだ。どうだろう、学園長。俺達のやる気が出るように、商品を用意してくれないだろうか？」

そうきたか。雄二の考えが見えてきた。

「これはまた、随分とくだらない提案をしてきたもんだね。そんなもん急に言われても用意できるわけないだろう？」

「いや。用意も必要ないし、費用もかからない。俺達が勝ったら持ち物検査で没収された品を返却してもらいたい。それが商品として事でどうだ？」

「……なるほどね。名より実をとろうって訳かい」

「ババアも流石にあの問答無用な持ち物検査については、生徒だけではなく、教師陣にも色々言われたんじゃないか？」

あの持ち物検査は厳しすぎる。オレが前にいた学校もそれなりに厳しいところだったが、没収されたものは後日返却という事で、生徒たちの不満を抑えていた。

しかしこの学校の持ち物検査はそれすらない。これでは生徒たちの不満は増す一方だ。

「……フン、没収されるのが嫌なら学校に持って来なければいいんだよ」

「正論ですね。ですが、正論で押さえつけるだけではますます反発

は強くなる一方です。それは学園長だつてよくご存じでしょう？」

「……フン」

「そこでこの提案だ。これを呑んでくれればルール変更に大人しく従うし、チャンスを与える事で生徒たちの不満も抑える事が出来る。悪い話じゃないだろう？」

「進むべき方向が分からないから不満が爆発するって事かい？一度チャンスを与える事でその結果負けたとしても、不満の矛先を“教師陣”ではなく、“チャンスを物に出来なかつた自分たち”に向けようって事だね？」

「その通りだ。人間誰だつて一方的に奪われるのは嫌なものだからな。自分たちが行動した結果なら、すんなり受け入れられるもんだ」

双方に旨みのある話だ。断る理由がない。

「どうだ、ババア？」

「お願いします、ババア」

「そうさねえ……。これは取引というより、あんた達のお願いだからねえ……。そんな態度で来られても素直に受けよつって気にならないねえ……」

「こつこの……！」

明久が逆上しかけたので、手で制する。放っておけばこの後は「クソババア！」と、バアサンを罵倒したのだろう。これは『先にキレた方が負け』そういう喧嘩だ。ここで逆上するのは拙い。恐らくバアサンはゴネてこの後の展開の主導権を握ろうとかいう腹積もりなんだと思う。そうはいくか。主導権を握るのはオレ達だ！

「お願いします、学園長」

そう言つて頭を深々と下げた。そして

「この条件を呑んで頂けないのなら、偶然来賓席に紛れ込んだ火薬入りボールに偶然火が付いて、偶然爆発してしまうかもしれませんが」「それはもう『お願い』じゃなくて『脅迫』じゃないかい!」「ババア、条件を呑んだ方がいい。コイツは根が真面目だから『やる』と言ったら本当にやるぞ」

「流石雄二! オレの事を良く分かってるな! けど人聞きが悪い。それじゃあまるでオレが来賓席を爆破するって言ってるみたいじゃないか」

「来賓席にはアンタの父親も来るんだよ!？」

「それは好都合　ゴホンゴホン、それが何かオレに関係ありますか?」

甘い。その程度でオレが止められるわけないだろう。むしろ躊躇う理由がなくなった。父親ごと爆破してやる。額の傷の恨み、晴らさしておくべきか……!

「し、仕方がないね。その提案呑んでやるうじやないか……」

「ありがとうございます、学園長」

バアサンに見えないようにすれ違いざまに雄二と拳を合わせた。

「あとはルールの明文化だな。商品がかかっているんだ。あとでこんなルール聞いていないと、言われても困る」

「それはこっちの台詞だよクソガキ」

もうオレには交渉の為のカードは残っていないし、あとは雄二に任せますか。

『この召喚野球大会に使う教科は一科目だけにするのか?』

『アタシはそれでもいいんだけどねえ。アンタらはそれだと困るだろっ?』

『ああ。各イニングでそれぞれ使用科目を変えて貰いたい』

『それくらいなら認めてやるっじゃないか。きちんと授業に関わりがあるからね』

『それは助かる。だとしたら「召喚獣を用いて授業内容を云々」と書くよりは、「必ず授業科目の中の一つを用いる事」と書いた方が分かりやすいんじゃないか?』

『ルールを曲げないならその辺りは好きにしたらいいさ』

.....

召喚野球大会規則

・各イニングでは必ず授業科目の中から一つ用いて勝負する事

・各試合において同種の科目を別イニングで再び用いる事を認めない

・立ち会いは試合に参加していない教師が務める事。なお、立ち会いの教師が試合中移動してはならない

・召喚フィールド外にボールが飛んだ場合、フェアの場合はホームラン、その他の場合はファールとする

・試合は5回の攻防までとし、同点である場合は7回まで延長。それでも決着がつかない場合は引き分けとする

・事前にメンバー表を提出する事。ここに記載されていない者の試合への介入は一切認めない。なおこれにはベンチ入り人員および立

ち会いの教師も含む

・基本構成は各ポジション1名ずつとベンチ入り2名とする

・進行においては体育祭本種目を優先させる。競技が重なりそうなときは事前にメンバー登録の変更を行う事

・その他の基本ルールは公認野球規則に準ずる

.....

雄二が交渉を終え、教室に戻る途中に明久が思い出したかのように口を開いた。

「ねえ、雄二。さっきの提案ってさ、一見合理的に見えるけど、僕達に勝ち目があればの話だね?」

明久の言うとおり、バアサンとの交渉で決まった事は『勝てば没収品は返却してもらえろ』という事だ。つまり『勝たなければ意味がない』という事になる。現時点でまともに正面からぶつかってもオレ達最低クラスの学力じゃ、教師陣どころか、1回戦突破すら難しいだろう。そう、まともに正面からぶつかつたら、な。

「今度はどんな作戦を考えたのさ?」

「ん? 何の話だ?」

「とぼけるなよ。バアサンとのあのルール設定。オレ達に利が無ければ面倒事を嫌うお前がわざわざ自分から干渉したりはしないだろう?」

「だとしたらあのルール設定に僕達が勝つための布石をいくつか置

いてあるって考えられるよね？」

「明久も頭が回る様になつたじゃねえか。その通りだ。俺は勝ち目のない勝負をする気はないからな」

「で、その策は？」

「それは当日までのお楽しみだ。明久の脳みそじゃ当日まで覚えていられるかどうか怪しいからな」

「失礼な！」

「そうだぞ、雄二。いくら明久でもそんなことある訳」

「ちよつと思ひ出せなくなるだけなのに」

「すまない、雄二。オレが間違つてたよ……」

「いや、わかつてくれればいいんだ……」

「あれ？ どうして2人とも僕を見てため息をついてるの？」

「何でもないよ」

「そつだ。気にするな」

「????」

「けどお前が本気を出すつて事は没収されたのはMP3プレーヤーだけじゃないな？」

「他には何を取られたのさ？」

「特級品の写真集を3冊ほど持つていかれた……」

「写真集つて……よくもまあ、雪野師匠と霧島の探索の眼を掻い潜つてこれたな……」

雄二の母親、雪野師匠と雄二の嫁、霧島の工口本探查能力はずば抜けている。その監視の目を掻い潜つてここまで持つていられたというのは本当に驚きだ。

優子にそんなスキルが備わつてなくて良かった。

「ああ。本棚の下や天井裏、完全防水にして熱帯魚の水槽の底に沈めたりと、色々工夫したからな」

「それつてもうみたい時に取り出せるレベルじゃないよね？」

「そうまでしなくちゃ守れないし、そうまでして守る価値のある逸品だったんだ……！」

「へえ、そこまでのものなら僕も是非見てみたいなあ」

「オレも見たい」

「……私も」

オレと明久と霧島は頷きあう。そのためには何としても教師陣相手に勝利をおさめないと！ という訳で

「雄二、オレ達は急用を思い出したからこれで」

「後は霧島さんと夫婦二人で仲良く」

「待てお前ら。この状況で俺を1人にするな」

「離せ雄二。オレはスプラッタを見る趣味はない」

「そうだよ。ここにいっても見るに堪えないグロテスクな光景を見せられるだけなんだから」

雄二の手がオレと明久の肩をがっちり掴む。中々のバカ力で外すことは難しそうだ。

「……雄二を甘く見ていた。今度は水槽や植物鉢、雄二が入浴中の浴槽の中まで詳しく探す」

凄い執念だ。

「おい待て。最期の一つは確実に目的が捜査じゃないだろ？」

「ちようどいいじゃねえか。これを機に童【検閲削除】を卒業してしまえよ」

「……頑張る」

「待て翔子！ 少し落ち着こうか！ このクソガラス……！！
煽ってんじゃねえよ……！！」

雄二が射殺さんばかりの表情でオレを睨んでくるが、そんなの知らね

「……久しぶりに雄二と一緒に風呂」

「ん？ ねえ霧島さん」

「……なに？」

「もしかして雄二と一緒に風呂に入った事があつたり？」

「……中学に入るまでなら」

「イツシャアアアアアッ！」

「つぶねえええええ！」

明久が渾身のハイキックを放つが、雄二はそれを紙一重でかわす。やるなあ、明久、雄二。ノーモーションであれだけ威力のある蹴りを放つ明久、そしてそれをかわした雄二には格闘技の才能があると思う。師範の道場に叩き込んで1年間みっちり修業をつけて貰ったらしい線いくんじゃねえの？

「落ち着け明久！ 中学になるまでとはいっても高学年になった頃にはまったく」

「……私の胸が大きくなってきてからは、数回しか」

「ダラツシヤアアアアアアアッ！！！」

「うおおおおおつ！？ お、お前今本気で俺を殺る気だっただろ！？」

「黙れ邪教徒！ 誰もが踏み入れる事を許されぬ聖域を汚す異端者め……！ その罪死を以て贖うべし。それが」

『『』』 我ら、異端審問会の掟！』』』

「うおおおつ！！！」

「ちよ、ちよつと待て！ お前らいつの間に現れたんだ！？ さっきまで気配すらなかったぞ！？ 風呂といつても別に何かあったわ

けでもぎゃあああああつー！！」

ビビった……！ 無かった……！ 本当に気配が無かった……！
一体何処から湧いて出たんだ……！？

「……………あ……………雄二……………」

『吉井一級審問官。異端者の発見、ご苦労だった』

『ありがとうございます。須川会長』

こ、怖え〜！ 最近弱体化してきたから油断していたが、こいつら確実にパワーアップしてやがる。これはオレが優子に添い寝して貰った事があるってバレたらブルブルブルブル 考えたくねえ……！ くわばら、くわばら……。

雄二は須川率いるFFF団に縛られ、引き摺られて行った。
縛られてボロボロになった雄二と眼があつたが、オレには……………何もできない……………！

誰かを救う事なんて出来やしない……………！
オレに出来る事といえば 運ばれる雄二の横でBGMとしてドナドナを歌う事だけだった……………。

ドナドナド〜ナ〜ド〜ナ〜 荷馬車がゆ〜れ〜る〜

雄二の眼が『殺す』と訴えてきている様な気がするが、きっとオレの気の所為だろう。

「……………さっき話していた『野球に勝てば没収品返還』って話、よく聞かせて欲しかったのに……………」

第85話 開幕！ 召喚野球1回戦！

『 時より召喚野球大会を行います。参加する生徒は 』

「ヒロ、始まるわよ」

「おう。練習に付き合ってくれてありがとな」

「いいわよ、別に。アタシもいい練習になったしね」

体育祭当日。召喚獣の扱いに自信がないオレは優子呼び出し、野球用召喚獣の感覚に慣れる為、2人で練習をしていた。練習といつてもキャッチボールやトスバッティング、ノックなど基礎的な事を中心に行ったが結構大きな収穫だ。

捕球は結局下手なままだったが、打つ方は問題ない。

実際にやるのと違って、感覚にズレが生じる。なんと言うか……野球ゲームをしている様な感覚なのだ。これは普段使う召喚獣にも同じことが言える。

先に練習しておいて良かった。ぶつつけ本番なら間違いなく皆の足を引っ張っていた。

今回は試召戦争と違ってオレお得意の小細工のしようがないから、単純に召喚獣の操作技術を向上させなくてはいけない。

召喚獣の操作という点ではオレはFクラスの中でも誰よりも劣っている。

どんなに点数が高くて、当たらなければ意味がないんだ……。

「じゃあ、お前も頑張れよ」

「うん、ヒロもね」

.....

「ねえ雄二。初戦の相手って何処だったっけ？」

「たしか一回戦は同学年の隣のクラスが相手だって話だからオレ達の対戦相手はEクラスだな」

Eクラスか……。そういえばオレ達Eクラスとあんまり交流が無いよな？　しくじったな。対戦のデータを調べておくのは戦の基本なのにそれをやっていない。大丈夫だろうか？

「ねえ、Eクラスと勝負しても大丈夫？　危険はない？」

「明久……」

こここのところ明久は危険人物と関わりあいになる事が多い為、すっかり人を信じる心を失ってしまっているようだ。

まあ、オレの方……。というより、オレの身内にも原因の一端がある訳なんだが……。

「ん……。まあ、大丈夫だろ。さっき代表同士で挨拶をしたが、対応も可愛いものだったしな」

「え？　可愛いってどんな感じだったの？」

「『押忍！　自分はEクラス代表の中林であります！　本日は絶対に勝たせて頂くであります！』ってな感じで」

「そいつ絶対に全身筋肉だよね！？　絶対可愛くないよね！？」

「いやいや、体育会系だと割とそんな感じだぞ？　危険人物じゃなさそうだし、良かったじゃないか」

「冗談だ。本当は『今日はヨロシクねっ。絶対負けないんだからって感じでしゃべる代表だった』」

「苛つく喋り方をする奴だな」

「けど、全身筋肉よりはマシだよ……。よし、こっちだって負けるもんかっ」

「ただしラグビー部所属」

「やっぱりそいつ全身筋肉だろ!？」

「おおっ……、寒気が……」

「なんてな。それも嘘だ。Eクラスの代表は女子テニス部のエースをしている中林って奴だ。性格はそうだな……。島田や木下姉に近い感じじゃないか？」

「性格は？ となると」

「……外見は？」

「鉄人に近い 冗談だ。ダッシュで逃げようとするな」

「雄二の冗談は心臓に悪いんだよ!」

「そうだぞ！ 優子の性格に西村先生の攻撃力を持ったゴリラ女ならたとえライフルを持っていても降伏するしかないじゃねえか!」

「まったく雄二よ……。二人をからかうのも大概にするのじゃ。話が進まんではないか……。」

「すまんすまん。そうだな……。Eクラスは一言で言うと『体育会系クラス』だな」

「体育会系クラス？」

「ああ。部活を中心に学園生活を送っている奴らが殆どだ。部活に打ち込んでいる分成績が悪い連中ばかりだが、その分体力や運動神経はかなりのモンだ」

ん？ なんだ？

眉間に皺を寄せて険しい顔をしたヘアバンドの女子がこっちにツカツカと近寄って来た。

そして

「なるほど、部活バカって訳だね」

「アンタにバカって言われたくないわよバカ!」

いきなり明久を罵倒した。

明久はいきなり罵倒されて眼を丸くしてポカンとしている。

「えっと……」

「私たちがバカならその下のクラスのあんた達は大バカじゃない！

この大バカ！」

（おいおい、明久。なんなんだ？ このヒス女は？ 何か恨みでも買ったのか？）

（う、ううん。初対面のはず………だけど………）

「二人とも、こいつがさつき話した中林って奴だ」

「ああ、この人が全身筋肉って話の」

「明久、その言い方は的確だが、色々と拙い」

「全身筋肉！？ 私は一体どういう紹介をされたの！？」

明久は中林の全身をよく観察している。

さっきの雄二の冗談が本当に冗談かどうか確認しているんだろう。しかしホントにこうしてみると無駄な贅肉が全く付いていない。

確かに中林の体は徹底的に絞られたアスリーの体格だ。

「何ジロジロと見てるのよ、この変態！ これだからFクラスのバカ共は嫌なのよ！ 嫌らしい！」

「誤解だ！ オレはただ『いい体してるな』と思ったただけだ！」

「やっぱり変態！」

「違う！ オレは変態じゃない！ 仮にそうだとしても変態という名の紳士です！」

「おちよっくつてんのかあああああつ！」

「待ってよ！ ヒロはともかく、僕は中林さんは鉄人に似た人だつて」

「アンタ私に喧嘩を売っているんでしょ？ そうよね！？ そうに決まってるわよね！？」

「よくやった明久、ヒロ。ナイス挑発だ」

「『よくやった』じゃない！ 雄二の所為で初対面の人といきなり距離が出来ちゃったじゃないか！」

「気にするな明久。一生懸命努力すれば、人との距離だって埋められるし、大きな夢だって叶えられるし、秘蔵の工口本も取り戻せる」

「良いこと言っているのに最後の一言で台無しだ！ ええい！ 雄二のバカは使えない！ 人間関係ならヒロ！ 頼むよ！」

「オーライ明久。 烏丸大貴の人間関係講座！」

「イエ ツ！」

「はい。それでは本日の講義は初対面なのにEクラス代表の中林に蛇蝎のごとく嫌われてしまったは吉井明久くんの為にその距離を縮める方法を伝授しようと思う」

「うんうん！」

「いくら台所に住まう黒い彗星のごとく嫌われてしまっても、相手は同じ人間だ。必ずその距離を縮める方法は存在する！」

「ヒロ先生！ その方法とは!？」

「オーライ。今からその方法を説明しよう！ メモの準備は万端か？」

「はい先生！」

「よろしい！ それでは説明しよう！ さっきも言ったが、相手は同じ人間だ。相手のボデイゾーンを侵害しないように、ある程度近づき、まっすぐ眼を見つめ、心を込めてこうこう言うのさ！」

「ふむふむ」

「 お前の秘密知ってる……。と！」

「ふむふむ へ？」

「これで大抵の奴は大人しくなる。口調は……。そうだな……。なるべく静かに声を低くして言った方がいいな。拳動不審な行動をとるのもアウトだ。ハツタリだとバれてしまうからな。叩けば埃が出てくる奴ほどこいつの効果は絶大だ。ただ気をつける点といえば、使

う相手は間違えるな。一步間違えればこっちがやられるぞ」

「さわやかな笑顔でなんてこと言うのさ!？」

「……お前だんだん性格悪くなってきていないか？」

「何言つてんだよ。オレの性格が悪いのは今に始まったことじゃないだろ？」

「けど前は近づきにくい雰囲気はあったけど凄く性格が良かったし、常識人だったよ!？」

「そりゃそうだ。前のアレは『嫌われない人間像』で『敵を作らないための仮面』みたいな物だったんだからな。性格が良く見えなけりゃオレの計算ミスという事になる」

「なるほどのう。その役を演じてきたような物かのう?」

「まあ、演劇風に言うとなつてさうなる」

「で、今のが素なの?」

「まあ、半分は。残りの半分はFクラスに毒されてきてるんじゃないかねの?」

「ああ、確かにそうかも……」

「姫路といい、ヒロといい……このクラスからまともな人間がいなくなってきたような気がするんだが……」

「この妙な学校でまともでいようって方が無理だろ? それに……バカになつてみてわかつた事がある」

「? 何がわかつたの?」

「案外バカになつてバカをやるのは楽しい」

「そういうものなの?」

「そういうものだ」

.....

1番 ファースト 木下秀吉

2番 ショート ムツリーニ 土屋康太

- 3番 ピッチャー 吉井明久
- 4番 キャッチャー 坂本雄二
- 5番 ライト 姫路瑞希
- 6番 セカンド 島田美波
- 7番 センター 須川亮
- 8番 サード 福村幸平
- 9番 レフト 横溝浩二

ベンチ 烏丸大貴 近藤吉宗

.....

「あれ？ ヒロはベンチなの？」

「まあ、オレ守備がど下手だからな」

「その通りだ。お前にはいざという時の為の保険になってもらう
「保険？」

「そうだ。お前は打つ方は結構上手いからな。どうしても物にしな
けりゃいけないチャンスに代打で出すからいつでもいけるようにし
ておけ」

「うわ、責任重大だな」

「それなら姫路さんでも良かったんじゃない？」

「いや、姫路にはこの試合で野球という競技自体に慣れて貰う。そ
のためには試合に出すのが一番手っ取り早い。それにルールに運動
の苦手な姫路では確実にまではいかないだろう？」

「確かにそうかも。けど本当にいいの？ ヒロと姫路さんがバッテ
リーを組んだらAクラスでも簡単に打てないよ？」

「悪いがそいつは無理だ」

「え？ どうして？」

「オレはまだ召喚獣の細かいコントロールが出来ないし、キャッチ

「ヤーは捕球技術が高くないといけない。ってなわけでお前と雄二がやるのが一番効率がいいんだよ」

「つまりオレに守備を期待するなという事だ！」

「じゃあ姫路さんをピッチャーにして」

「その案も無理だと思っぞ」

「え？ どうして？」

「姫路が投げてとれる奴がいるか？」

「あ……」

最悪の場合召喚獣が消し飛ぶという未来予想図が全員の頭をよぎり、言葉を無くす。

「恐ろしや、恐ろしや……。乳神様、恐ろしや……」。

雄二の説明によると召喚獣の怪力に合わせてボールの重さもそれに対応して設定してあるらしい。姫路の召喚獣の怪力（明久の召喚獣の約7倍〜8倍）で砲丸みたいな重さのボールをぶつけられたらそれこそジ・エンドだ。正直な話、想像もしたくない。

「ならば雄二が投げて姫路が捕るってというのはダメなんじゃろうか？」

「ご、ごめんなさい。私野球とか全然詳しくなくて……」

「ピッチャーはリードから全体への指示まで担当しなくちゃいけない司令塔だ。その役割は初心者の姫路には荷が重い。キャッチャーはFクラスの司令塔である雄二。これは絶対に動かしちゃいけない。勝つためには、な」

雄二が眼を閉じ、静かにゆっくりと深呼吸をする。

そしてゆっくりと眼を開け、低くよく通る声で叫んだ。

「それじゃあいくぞ teme 兄ら！ 覚悟はいいか！？」

「……おうつ！」

「Eクラスなんざオレ達にとっちゃただの通過点だ！ こつちの負けはありえねえ！」

「……おうつ！」

「目指すは決勝、仇敵教師チーム！ 奴等を蹴散らし、その首を散つていった戦友エロ本の墓前に捧げてやるのが目的だ！」

「……おうつ！」

「やるぞ teme 兄ら！ 俺の 俺達の、かけがえのない仲間エロ本の弔い合戦だ！」

「……おつしゃあ っ！！！！」

Fクラス全員の瞳に復讐の焰が灯る。

待つてる、小烏丸！ 奴等を倒し、お前を必ず取り戻す！

「あ、あの美波ちゃん……。こうしてみると、なんだか……」

「そうね……。ウチらまでそういう本を没収されたみたいよね……」

「ワシは別にエロ本など持ち込んでいないのじゃが……」

.....

『プレイ！』

審判である寺本先生の声がグラウンドに響き、試合が始まる。

明久は雄二のサインに首を縦に振り、召喚獣がピッチャープレートに足をかけ、大きく振りかぶり第一球を 投げた！

キンッ！

『ホームラン!』

Eクラス 1点

Fクラス 0点

「ちゃんと投げる、ボケがあー!」

「ちゃんと指示しろ、クズがあー!」

そりゃど真ん中にスローボールじゃ打たれるだろうよ……。

恐らく様子見してくるだろうと踏んでど真ん中を要求したんだろうが…… Eクラスの連中がたかが球技大会で戦略とか考えてるだろうか?

少なくとも代表の中林は戦略よりも戦術を重視って事か。それならEクラスは常にヒツティングのサインが出ていると考えていいだろう。

それならバントやスクイズ、バスターの様な小技を使ってくる事はない。

オレから言わせれば Eクラスは甘い。勝負は『相手の嫌がる事を徹底的に、かつ効果的にする者』が勝つ。『自分のやりたいようにやる奴』なんか切り崩す事なんか簡単だ。やりたい事をやらせなければいいんだから……。その上代表がアレだから、野球で最も重要になってくるチームワークや統率力は紙切れ同然だろう。雄二の言うとおりEクラスは敵じゃないな……。

とはいっても油断は禁物だ。全力で潰しにかからなければ……。

キンッ!

『ホームラン!』

Eクラス2点

Fクラス0点

「バット寄せ　　ッ！！」

全力で潰しにかからなければ……………。

『ええい、バカ共が！　もうお前らには任せておけねえ！』

『そもそも吉井と坂本に任せた俺達がバカだった！』

『こうなりゃここから先は俺が投げる！　ピッチャー交代だ吉井！』

『なら俺が捕ろう！　キャッチャー交代だ坂本！』

「あ、バカ！　止せ！」

キンツ！

『ホームラン！』

Eクラス　3点

Fクラス　0点

どうしよう……。いきなり借金が3点も……。Eクラスの統率力が紙切れだといつても個々の能力はオレ達より上だ。全力で…………潰しにかからなくては…………！

その後、とりあえずポジションを元に戻し、再び試合を再開した。

次のバッターは

『吉井明久…………！　よくも人の事を全身筋肉呼ばわりしてくれたわね…………！　絶対に、絶対に許さない…………！』

凄い恨まれ方だ…………。あいつ明久に何か恨みでもあるんだろうか…………？

ゴスツ！

『デッドボール！ 一塁へ』

「殴らせて！ あの男を一度でいいから殴らせてよ！」

「落ち着け中林！ せっかく勝っているのに乱闘でノーゲームにするのは勿体ない！」

明久にボールをぶつけられて、バットを装備し憤怒の形相でマウンドに向かおうとする中林をEクラスの男子が必死に抑えて、宥めている。

どうやら中林は代表としての自覚に欠けるようだ。感情的になり過ぎている。激しすぎる感情は自分の本来の実力を半減させてしまう。そして怒りは判断力を鈍らせる。

ああというのが大将だと周りは苦勞するだろうな……。

よく知らないEクラスの面々にオレは心底同情した。

第85話 開幕！ 召喚野球1回戦！（後書き）

M a r y X m a s !

僕はアルバイトのシフトが15時から0時30分（残業付き）が週6回入れられててM a r y 苦しみます！
え？ つまらない？ サーセン……。

次話は結構速く投稿できると思います。
決着をお楽しみに！

第86話 お礼をキツチリするのが人の道！

『ストライク！ バッターアウト！』

明久的確にコーナーをつく投球にEクラスの5番セカンドフライ、6番、7番三振となり、攻守交替となった。

「よし！ ちょっとしたハプニングはあったが、ほぼこちらの計算通りだ！ さつさと点を取ってぶっ倒すぞ！」

「『おうつ！』」

いや、こっちの攻撃力で3点差は結構痛いぞ？ それを『ちょっとしたハプニング』で片付けるなよ……。

「トップバッターは秀吉だな。頼んだぞ！」

「うむ。任せておくのじゃ」

秀吉がバッターボックスに向かい、審判に一礼。そして召喚獣がゆつくりと打席の土を均し、構えた。

「木下！ まずはアンタを打ち取って勢いをつけるわよ！」

中林がピッチャーか……。と、なるとあの方法が一番有効だな。

中林の召喚獣は大きく振りかぶって、カーブ投げた。

『ボール！』

キャッチャーがピッチャーにボールを投げ返した後、中林はワインドアップで第2球を投げた。

『ボール!』

カウント2ボール。中林は悔しそうに顔を歪めているが、深呼吸してセットポジションをとる。そして第3球を投げた。

『ストライク!』

ふむ。まだ召喚獣の扱いに慣れていないようだ。(それでもオレよりは上手いのだが……)

実際にやるのと同感覚が違い、随分とやりにくそうだ。

カウントは2ストライク、2ボール

そして次の一球が投げられた。

キンッ!

『ファールボール!』

流石、秀吉は冷静だ。自分の役割をきちんと理解している。

「ねえ、あのスイングだと秀吉は」

「ああ。たぶん四球狙いだな」
フォアボール

「それだけじゃないさ。1番バッターの役割は相手の手の内を1つでも多く暴く事だ。それに中林みたいな直情型の人間はああ言う事をされると、頭に血が昇る。結果判断力は鈍り、こっちが有利になる」

『ボール!』

「くっ！ いやらしい真似してくれるじゃない！ 思い切り振ってきなさいよ、木下！ 勝負よ！」

「すまぬが、それは出来ん。何せ0対3という状況じゃ。五回しかない以上、ワシらは確実に点を取り返さなくてはならぬからの」

「何よ！ 私が怖いのか？ 四球フォアボールなんか狙わないで、ちゃんとヒットで塁に出なさいよ！」

「なんと挑発しようと思駄じゃ。ワシはワシの仕事をごなすだけじゃからな」

秀吉の言う通りだ。どう考えてもここは無理に勝負する場面ではない。

それにこれも戦略の1つだ。それを『いやらしい』？ 甘い上に考えがあまりにも浅い。

「くっ！ いいから勝負しなさいよ 男らしく！」

「……………男らしく、じゃとっ」

あ。ヤバ

『ストライク！ バッターアウト！』

「すまぬ、お主ら…………。無理じゃった…………」

「いや、まあ仕方ないけど…………。どうして最後だけあんなに大振りだったの？」

「ワシにも色々譲れない物があるのじゃ」

「ふん…………」

見事だ、中林…………！ 秀吉のコンプレックスを利用した上手い挑発だった。敵ながら天晴れだ！ と言わせてもらおう！

2番はムッツリーニか……。

古典

Eクラス 中林宏美 105点

Fクラス 土屋康太 22点

「どうしよう雄二。僕にはコールド負けの光景も見えるんだけど」
「奇遇だな。俺もだ」

「早くヒロを出した方がいいじゃない？」

「いやいや、大丈夫だ。チャンスは必ず来る。焦るなよ」

「大丈夫って言われても……」

「信じる。信じていれば、きつと妖精とかがなんとかしてくれる」

「あ。もう神頼みしかないってことなんだ……」

「……頼む。大量虐殺の妖精……！」

「気をつけて！ そいつは多分妖精の名を語った邪神だから！」

「願い、聞き届けたり……！」

「ヒロ！？ そんなお面被って何やってるのさ！？」

「ヒロ？ ノンノンノン。オレは大量虐殺の妖精！ 名は『マスク・

ド・レイヴン丸』！ 『レ』と『ヴ』の発音に気を付ける！ 『レ

イブン丸』じゃなく『ルウェイヴン丸』だ。ここ重要！ で、雄二

よ。オレに何を望む……？」

「Eクラスの奴等を皆殺しにしてくれ」

「了解した。」

「了解しないで！」

八ミングを口ずさみながら、ポケットの中から先日作った火薬を仕込んだボールを取り出す。

「して、生贄は？」

「明久。俺達の戦友エロ本の為に生贄になってくれ」
「嫌だよ！ 何言ってるのさ!？」

『アウト!』

あ。どうやらアホな寸劇やってるうちにムツツリーニが凡退したみたいだ。

「あゝあ。明久が生贄になるのを渋るから」

「まったくだ。協調性のないバカだな」

「いくらなんでもエロ本と命を引き換えにするバカはいないと思うんだけど!？」

「ヒロ、雄二よ。あまり明久をイジめるではない」

「ははっ！ 明久の反応が面白くてつい、な？ まったく困るよな?」

「本当に困るのは僕なんだけど!？」

『バッテリーラップ!』

「と、遊んでる場合じゃなかったな。」

「そうだね。よし！ ここは一発デカいのかましてくるか!」

「おう。期待してるぞ、明久」

「任しとけっ!」

先に謝っておく。明久、すまない……! !

ゴスッ!

『デッドボール。一塁へ』

「痛みが！ 顔が陥没したような痛みがあっ!」

明久重ねて詫びる。すまない……！　だが、これでオレ達の勝ちが見えた。お前の犠牲を無駄になんかしないからな……。

「ここから先アンタは全部デットボールよ！」

「最悪の予告だ！　絶対さっきの事根に持つてるよね！？」

ところでここでのルールって危険球と報復死球は認められているんだろうか？

当たったとしても明久以外は痛くも痒くもないし、その辺は無視しているんだろうか？

「さて、ここで真打ち登場って訳だな」

そういつてゆつくりと打席に入る雄二。
点数は

中林宏美 105点

坂本雄二 198点

「う……っ！　こいつも怖いけど、次はあの姫路だし……。ここは勝負で……！」

よしよし。雄二の計算通り。

残念だったな、中林。お前が私怨に走った時点で勝負は既に決まっていたんだよ。

お前たちが勝とうと思うなら明久を確実に殺す（打ち取るという意味）べきだった。

そうすれば雄二、姫路、島田の誰かを敬遠して被る被害も多くて1点に、上手くすれば0点に抑える事が出来たっていうのに……。本

当にアホだな……。状況は不利だが、流れは確実にこちらの計算通り。向こうに伏兵がない限り、こっちの負けはありえねえ。

「あらよつと！」

キンツ！

『ホームラン』

Eクラス 3

Fクラス 2

さて流れが一気にこっちに傾いた。大量リードしてから追い突かれるといふのは、かなりプレッシャーがかかる。結果動きが固くなり、攻撃にも影響する。そっちには心臓に毛の生えた奴はいるかい？

「くつ……！ 次からは坂本にもぶつけるしかないっていうの……！？」

「普通に敬遠しろ！」

体育会系のスポーツマンシップは何処へいった？

雄二は中林の危険な発言にツッコミを入れた後、悠々とダイヤモンドを一周してベンチに戻ってきた。

「坂本、お疲れ様」

「…………… ナイスバッチ」

「流石じゃな、雄二」

「…………… 僕の心配は？」

「大丈夫だったか、明久？」

「ヒロだけだよ……。僕を心配してくれるのは……」
「当たり前だろ？ これ以上お前がバカになつたら玲さんが泣くだ
る？」

「ヒロなんて大嫌いだ つ！ー！」
「さて、次は姫路じゃな。ここはホームランで一気に同点といきた
いところじゃが」

「それはちよつと厳しいかもしれないわね……。瑞希は点数はいい
けど、あの通り運動神経はあまり良くないから……」

「そう思つて俺も姫路に無理に打たないように言つてある」

「え？ フォアボール 四球狙いつて事？」

「オレなら姫路は歩かせて、次の島田で勝負する」

「姫路さんを敬遠つていうのはわかるけど、どうして美波で勝負な
の？ 美波は運動神経かなりいいよ？」

「えーつと、それは……。ほら、古典だから……」

「????？」

『フォアボール！ 一塁へ』

「あ、はい。ありがとうございます」

「うう……。ウチの番ね……」

中林宏美 105点

島田美波 6点

「さあ、守備だ！ しっかり守るぞ！」

「「「おうっ！」「」」

「ウチまだ打つてないんだけど!？」

「ヒロがここで代打で出ればいいのではないかのう？ そうすれば
一気に逆転する事が出来るというに」

「そつだよ！ バカでまな板な美波よりヒロが打つた方が 首が

……！ し、締まって……る……！」
「バカめ。余計なこと言うからだ」

島田はスリーパーホールで絞め落とし、打席に向かっていった。余計なこと言っつてボロボロにされた明久の呼び戻しをしながら、話を進める。

「で、代打の話だけど、まだ早い」

「？ 何故じゃ？」

「まだ守備が残っているし、次の科目は数学だ。島田を外すには惜しい。流れは絶対にもう一度こっちに来る。これは確定だ。だろ、雄二？」

「その通りだ。勝負を仕掛けるのは最終回。その時の状況次第でヒコを投入する」

『アウト！ チャンジ！』

「ってなわけだ。頑張ってこい！」

「う、うむ」

その後2、3、4回と特に動きが無く戦況は膠着状態となって迎える最終回……。

打者が2巡してトップバッターは1番の秀吉から。科目は保健体育。

「頼むぞ、秀吉！ 絶対に打ってくれ！」

「秀吉なら出来るよ。頑張っつて！」

「……………期待している」

「秀吉、ここで打つて男を上げる！」

『木下、石にかじりついてでも打つんだ！』

『気合いを入れる！ お前にかかっているんだ！』

『そうだ！ 頑張ってくれ！ そして、なんとしても打ってくれ！』
「う、うむ。努力はするが」

『『俺達の工口本の為に！！！！』』
「そしてオレの小烏丸の為に！！！！」

「……………」

『ストライク！ バッターアウト！』

「なんだ秀吉！ 今の腑抜たスイングは！？ それでも男か！？
実は入れ替わってましたとか言わないだろうな！？」

「その通りよ。このバカ…………！ 覚悟しなさいよ！？」

「すみません！ 自分調子くれてました！」

まさか入れ替わっていた事に気付かないとは…………！ オレとした事
がなんたる不覚…………！

ジャンプして一回転半ひねり、その勢いを利用して土下座した。
地面に頭が少しめり込みかけたが気にしない！ その程度で命が助
かるのなら安いものだ！

「冗談じゃ」

「おおおおおお脅かすんじゃないやねえよ、この野郎！」

本気で死んだかと思ったじゃねえか！ ジャンピング土下座の上級
技、一回転半ひねり土下座をうつかり披露してしまった…………！
なんだか周りから凄い拍手を送られてるし！ Eクラスの奴等が眼
をキラキラさせながらオレを見てるし！ あ、ヤベ…………。ちよつと
シヤレにならない勢いで血が…………。

「よし。次はムツツリー二だ。必ずいい結果が出る」

「……………行ってくる」

Eクラス 古川あゆみ 102点
Fクラス 土屋康太 589点

「メチャクチャだな」

「メチャクチャじゃな」

「やっぱり土屋君は凄いですね。」

「ああ、そうだな。凄いスケベだな」

「これならホームランを打ってくれますよ」

「あ、うん。打ったらホームランだろうね」

「でも多分ダメなのよ。土屋は打てないわ瑞希」

「え？ どうしてですか？」

「あの点数じゃ。おそらくムツツリー二は敬遠されるじゃろうな」

「敬遠って わざとフォアボールをだして勝負を避ける事ですね

」？」

「うん。そういう事」

『ボール。フォアボール』

「……………（コクリ）」

「Eクラスの作戦としてはこの後明久を打ち取り、雄二、姫路を敬遠。その後の島田で勝負といったところじゃろうな」

「そうだろうな。だが……………そう簡単にいかせない。

よし、血も止まった。」

「明久、お前の保健体育の点数は？」

「……………22点」

「酷いもんじゃな」

「だって、それは……………その……………。^{エロ本}参考書を取られちゃったから……………」

「アンタは何を使って勉強をしようとしてるのよ、バカ」

「この回で仕掛けるぞ。明久、カットしてフォアボールを狙え。召喚獣の操作が取り柄のお前ならそれ位出来るだろう？」

「う、うん。それ位なら簡単だけど……」

「ヒロ、島田の代打で出すぞ。準備しておけ」

「オーライ、大将」

まずはムツツリー二に同点にしてもらおうか……。

『走った！』

ピッチャーが振りかぶった瞬間ムツツリー二が走り出す。明久はムツツリー二の援護の為にやや大きめにバットを振る。キャッチャーはボールを取り、クイックスローでセカンドに送球する。しかし夕イミングが 拙い！

『…………… かった……………！』

『な…………… つ！？』

『はや…………… つ！』

ムツツリー二の召喚獣はキャッチャーの投げたボールがピッチャーの頭上に差しかかったところで加速した。そしてサードを目指す。端からサードを盗む気だったのか！？

『サード！』

『わかってらあつ！』

キャッチャーからの送球を捕ったシヨートは大急ぎでサードに送球する。が

「…………… 加速」

『んだとお！？』

ムツツリー二の腕輪の能力加速で召喚獣は三塁ベースを蹴り、ホームを狙う。

ボールの速さが追いつかねえ！

「クソ！ なめんなあ！」

サイドがボールを捕り、ホームへ送球しようとするが

「……………加速、完了」

Eクラス 3点

Fクラス 3点

「……よっしゃあああああああああ……！！！！！！」
「よし！ このままの流れで一気に勝つぞ！」

これでイーブン！

カウントは2ストライク 3ボール！ 明久！ なんとかしても塁を埋めてくれよ！

ゴスツ！

『デッドボール！』

『『『あ……………』』』

「あががが……………っ！ だから……………！ どうして僕にはデッドボールばかり……………！」

しかもカウントがカウントだから当たり損……。
そしてトドメの

『吉井明久、戦死！』

「ええ！？ ちよつと待つて！ まだ試合が残ってるのに0点になつただけど！？ まさか」

「補充試験を受けて来い、明久。ランナーは代走として近藤が出る」
「チクシヨ―！ 最悪だああああつ！！！！」

明久が号泣してるのを見て、ピッチャーの古河は申し訳なさそうに頭を下げた。

対してシヨ―トを守っている中林は『ザマミロ』という様な表情をしている。

その顔を見て少し……。ほんの少しだが、カチンときた……。ホントにほんの少しだけな！

その後、予想通り雄二と姫路は敬遠。バッターは島田に代わってオレ！

「やっと出番か。待ちくたびれた」

さてやるぞ……！

色々してくれたお礼をしなければいけないよな？

オレは自分の仲間を傷つける敵に対しては情けなんてかけない……！

古河あゆみ 105点

烏丸大貴 323点

1アウト、満塁！ 敬遠は間違ってもない。おいしいねえ、ホントに！

「じ、じで烏丸君！？ ぞ、どうしよう……！？」

「勝負よ、あゆみ！ その変態は召喚獣の扱いはど下手よ！ 今まで出てこなかったのがその証拠よ！」

「は、はい代表……」

中林の言葉に釈然としない物を感じながらも頷きセツトポジションをとる古河。

どの道勝負しなければ押し出してサヨナラだ。勝負よりほかにEクラスの取る道はない。

使いすぎると頭が痛くなるが、少しなら問題ないだろう……。感覚を研ぎ澄まし、心を鎮める……。行くぞ無想……！

集中の世界に入り、周りの景色がクリアになる。そして周りの様子がスローに見える……。

ピッチャーが投げたボールの縫い目まではつきりと見える。ゆっくりと、ゆっくりと近づいてくるボールの中心を思いつきり狙い打つた……！

そこで無想状態を解く。

バットの真芯で捉えたボールは寸分の狂いなくショートを守っている中林の召喚獣の頭部を直撃してレフトに転がっていった。その隙に近藤がホームベースを踏み、Fクラスのサヨナラ勝ちとなった。

『『『いやっほおおおおっ……！ 烏丸サイコ つ……！』』』

あはははは、崇め奉りたまへ！

そしてオレが密かに狙っていた目的も達成された。

『中林宏美、戦死！』

「ええ！？」

明久に向って散々ラフプレーをしてくれたお礼にささやかなプレゼントだ！

ありがたく受け取りやがれ！

「こ、この……！ 狙ったわね……！？」

「おいおい、酷い誤解だな。召喚獣の扱いが下手くそなオレがあんなに器用に狙えるわけないだろ？ 第一狙ったとしても捕れないコースじゃなかったはずだ。自分の実力が足りないからって八つ当たりはしてほしくないな」

「くうっ……！」

「グダグダ言つてないで、さっさと補習を受けて来いよ」

「（ギリッ）覚えてなさいよ……！ 烏丸大貴……！」

おお、怖い怖い。

こうしてオレ達は無事に1回戦相手であるEクラスを降した。

色々と恨みを買ってしまったようだ。まあ仕方がない。理不尽な理由で明久を散々蹴ったお礼はキッチリとしないといけないからな。

「やあ、烏丸君。召喚野球は終わったようだね？」

「よう、久保。その様子だとそつちも勝ったみたいだな？」

「ああ。君が試合前にくれたアキちゃんの浴衣写真元気の源のおかげだね」

「ははっ、役に立てたのなら良かったよ」

これも雄二の作戦の一環だしな。

2 Aには是非勝つて貰わなくてはいけない。優子には悪いが、今回は卑怯、卑劣、姑息、邪道、外道、横暴、非道、無法、理不尽、横道、道外れ、ペテン、小細工何でも有りだ！

小鳥丸のために！ オレは鬼にも悪魔にもなるう！

「くっ、くくく久保君……！」

「ところで挨拶するただけにこっちに来たわけじゃないんだろ？ 明久の召喚野球の時の映像はムツツリーニがちゃんと記録してるぞ」

「本当に話が早いね。悪いけどお願いするよ」

「お得意様のためだ。気にするなよ。見所は中林にデッドボールを喰らって涙目になって モガアツ！」

いきなり中林に後ろから口を塞がれた。

(い、いきなり何しやがる……！)

(な、何言おうとしてるのよ……！?)

(何って……！ オレが何言おうとお前には関係ないだろ……！)

(久保君に変な事吹き込まないでよ……！)

(何言って ……ああ、そういう事か)

(な、何よ……！?)

(いや、明久をやたらと嫌う理由が読めたなあ、って思ってさ)

(ぐう……！)

(久保の写真を1ダース300円、初回サービスとしてパンツ丁Verも付けるぞ)

(3ダース買っわ……！)

(毎度あり……！)

(鳥丸、あんたいい奴ね……。敵視してて悪かったわ)

(いやいや、オレの方こそ色々と済まなかった。詫びとってはな
んだけど、今後久保の写真を仕入れて友人価格で中林に販売しよう
と思うんだが……)

(もちろん買っわ……!)

(今後ムツツリ商會を御贖に……!)

オレと中林はガシツと友情の握手を交わす。

「どうしたんだい？」

「いやいや、何でもないさ」

「そうそう、何でもないわ」

よし、中林と和解！ プラス新しい顧客ゲット！

余計な恨みを買わずに済んで良かった。久保に感謝だな。

さて、次の相手は何処かな？ っと、その前に二人三脚か……。

名目上は召喚野球より体育祭協議を優先しなくちゃいけないし、面
倒だけどやるとしますか！

第87話 テッド オア アライブ！（前書き）

明けましておめでとございます！

昨年は本当にお世話になりました。

今年もよろしく願います！

それでは新年第一弾どうぞ！

第87話 デッド オア アライブ！

「お。戻ってきたか明久」

「ご苦労じゃったな、明久」

「お疲れ」

「……………お帰り」

「あ、うん。ただいま……………」

明久は回復試験を終え、こっちに戻ってきた。

なんだかげんなりというか、しょんぼりとした様子だ……。疎外感でも感じてるのだろうか？

『頼む……………！ 何とか最高のパートナーを……………！』

『いいから早く引けよ。後がつかえてるんだから』

『分かっているから急かすなよ……………！ よし。……………これだ チクシ

ヨオオオオツ！』

『『『シヤアアアツ！ ざまあみやがれ！』』』

「えっと、あれ何やってるのかな？」

「ん？ あれか？ ただのクジ引きだ」

「いや、それは見たらわかるよ」

「次の二人三脚のペア決めだ」

「ふ〜ん。そうなんだ」

随分冷静だな。明久も精神的に落ち着いてきたんだろう。

以前までの明久なら男女ペアを決めるクジ引きなら召喚獣を喚びだしてアイツラを皆殺しにするくらいのを考えただろうが……………これ

も師範の精神修行のおかげだろうか？

一夏の経験が少年を大人にしたのだろう……。

「なんじゃ明久？ 随分落ち着いておるではないか」

「だって僕は誰がパートナーになっても気にしないから。どうせ男女別になつてるだろうし」

「二人三脚は男女混合だ」

「全然問題ない試獣^{サモン}召喚」

「落ち着けバカ。教師の許可なく召喚獣が喚べるか」

気付いてなかっただけかいっ！

「これが落ち着いていられるかぁーっ！！ 誰！？ 女子勢のパー

トナーは誰になったの！？」

「安心せい。まだ決まっておらん」

「え？ そうなの？」

「……………決まっていたらあんなに騒がない」

「あ。それもそうか。それでみんな祈りながらクジを引いているんだね」

「そついう事だ」

「その幸運者は祈りが届いた瞬間に殺されるけどな……………」

姫路か島田とピッタリと密着するなんて事になったらFクラス名物、異端審問会・FFF団が黙ってはいないだろう。幸せとは儚いものである……………。

「でも、よく姫路さんと美波が男女混合を了承したよね。雄二が言いくるめたの？」

「バカを言うな。俺は男女別を推奨したくらいだ」

「え？ なんて って、ああそっか。下手な事があつたら殺され

るもんね」

「いい加減お前が観念して霧島と向き合えばそういう事もなくなるんじゃないのか？」

「うるせえ！……クソツ！こんな競技より野球の方が重要だつていうのに……！」

「……………同意」

「次の相手は決まったのか？」

「……………まだ試合中。延長戦」

「ふむ。上手くすれば次の試合は不戦勝になりそうじゃの」

「楽だからオレはそっちの方がいいなあ……………」

どんな戦略を練ろうと『確実に勝てる』という保証はない。オレ達のクラスは強力だが、癖が強く不安定だ。唯一安定した強さを持っている姫路でさえ、今回の野球勝負ではその実力を十分に発揮しきれないだろう。戦わずに勝ち星を拾えるのならそれに越した事はない。

「まあ、一応試合がある事を前提に考えておくか……………。確か、次の勝負は数学・物理・現国・政経・地理だったよな」

「……………保健体育が無い」

「………って事はムツツリーニは体育祭の競技の方に参加？」

「そうだな。2回戦はそうしてもらおうか」

「……………（コクン）」

まあ、名目上体育祭競技が優先になってる上に保体が無いんだつたらそれが妥当だろうな。

「打順や守備位置をかなり弄る必要があるな……………。須川はバントが得意そうだから、2番に移動して」

「僕はどうなるの？ 数学は苦手なんだけど？」

「数学もだろ？」

「雄二、明久の召喚獣の操作能力は小技を使う時に色々と応用が利くと思う」

「ああ、そうだな。明久はこのまま3番でバスターかエンドランでもすれば……上手くいけばここで1点くらい取れるはずだ」

「んで、雄二はそのまま4番で、姫路、島田はどうする？」

「そうだな……。島田の数学は貴重な戦力だから……。確実に回るように1番で」

「現国と政経の時に打順を回さないように注意しないと。そうないと、後の方にオレと姫路辺りをやって、島田の前にランナーをなくした方がいいと思うんだが……」

「それもそうだな。それじゃあヒ口、次の試合はお前は9番セカンドだ。始まる前にしっかり守備練をしておけ」

「オーライ、大将」

暇な先生をテキトーに見繕ってノックでもしてもらおうか。

そんな感じで雄二、明久と次のメンバーの相談をしていると、姫路と島田がモジモジしながら明久に声をかけた。

「あ、あのっ！ 明久くん！」

「ん？ どうしたの、姫路さん」

「別に用ってほどじゃないんだけど、ね」

やけに肩に力が入っている。何をそんなに力んでんだ？

「その……明久くんは何番ですか？」

「え？ 何番って」

打順の事か？

……。

いや、そんな訳ないな。二人三脚の番号の事が……。
体を密着させる必要のある二人三脚だったら色々とアピールする事が出来るから明久との距離を縮めたい2人にとってはチャンスだろ
うな。

「3番だよ。ナンバー3」

「はううっ!!」

明久の答えに姫路と島田は同時に悲鳴を上げる。

……。あれ？ 明久ってまだクジ引いてないよな？

「うう……。確かに低い確率だと思ってたけど、ウチならきつとい
けると思っていたのに……」

「酷いです、あんまりです……。こつやって堂々と引っ付く事の出
来るチャンスなんて滅多にないのに……」

姫路、島田は地に手を付き、自分の運のなさを嘆き、打ちひしがれ
ている。

「あゝ、そういう事か。安心しろ、お前ら。明久が言ってるのは打
順の事だ。二人三脚のクジはまだ引いてないぞ」

「え？」

雄二の言葉を聞き姫路と島田はあっけにとられたように口を開けた
まま硬直していた。

「あ、そうか！ 野球の話ですっかり忘れてた！ 僕も早くクジを
引かないと！」

「あ、明久くん！」

「ちよつと待って、アキ！」

「なに？ どうした？」

「いえ、あの。その……私は7番なんですけど」

「ウ、ウチは6番なんだけど」

青春してるねえ！ いやー、ホント若いつていいねー

「絶対にその番号は引かないで（ください）！」

お前ら2人とも口を揃えて何て酷な事を言ってた……？

「りよ、了解……。行ってくるね……。」

肩を落としてトボトボとくじ引きに向かう明久……。背中からは40代後半のサラリーマンが醸し出すような独特の哀愁が漂っている……。

「お主ら、いくらなんでもアレは……。絶対に誤解されると思うのじゃが……。」

「だって相手は明久くんですから……！ 『この番号を引いてください』なんて言ったら」

「そ、そうよ……！ 絶対に真逆の方向に進むに決まってるわ……」

！ 坂本の番号とか、烏丸の番号とかその辺りをピンポイントで引いてくるに決まってるわ！」

「ああ、なるほど。確かに明久はオレに劣らない主人公補正ならぬ、不運補正がかかってるからな。それなら真逆の意思を伝えて、つてそれでもおかしいだろ、やっぱり！」

「で、でも……！」

「姫路、島田、商売の話をしなにか？」

「「商売？」」

「オレの番号は3番なんだが、明久がその番号を引いた場合、このクジを買い取ってもらいたい。高い金額を提示してくれる方に譲る

うと思うんだが」

「「言い値で買っわ（います）っっ！！」」

「まいどあり！」

「ヒロ、お主……最近欲の皮が突っ張ってきておらぬか？」

「何を言うのかな、秀吉君？ 強欲とは『不足を満たそうと強く求める気持ちが強い』って事だ。それはつまり求める心！ 『強い願い』！ 強欲じゃない人間はダメだ！ 向上心が無いからな！ 人間の文明や科学はその欲の深さ故に発達してきた！ そういう意味ではFクラスは向上心の塊だとも言える！ 優子だってそうだ！ アイツの努力を怠らない姿勢は欲望を満たそうとする行動だとも言える！ オレはそんな優子を心底尊敬する！」

「姉上も自分の向上心とお主の物欲を一緒にしてほしくないとと思うのじゃが……」

まあ、それはそれとして……。

『さて、吉井。運命のクジを引くんだ……』

『う、うん』

ガサガサ、ガサガサ……

『6ば』

『殺れ』

『『『イエス！ ハイエロフロント！』』』

『バカな！？ もう囲まれた！？』

「6番ね。そつか……。アキはウチとペアなんだ……」

「うう……。美波ちゃん、とっても嬉しそうです……」

「そ、そう？ 別にそんなことないんだけど」

「嘘ですっ！ 顔が輝いています！」

「う……」

「きつと、美波ちゃんはこのチャンスに明久くんの胸とかお尻に触るつもりです……」

「な、何言ってるのよ瑞希！　ウチがそんな事するわけないじゃって、はい？　触る？　何言ってるのよ瑞希？」

「あ……っ！　ち、違います！　触るじゃなくて、仲良くなるつもり、の間違いですっ！」

「瑞希……。アンタ、アキに何をするつもりだったの……？」

聞こえない。オレには姫路の変態的発言なんて聞こえない。

FFF団は明久の関節を一瞬で極めクジを奪う。無駄のない見事な動きだ。

「さて、この6番のクジだが、オークションを」

「わかりました。美春が言い値で買しましょう」

『『何で清水が此処にいる！？』』

神出鬼没のスキルをデフォルトでもっている女（の皮を被った怪人）清水美春の出現でFFF団のメンバーが全員慄いている。

しかし、これで島田が楽しみにしている明久との二人三脚を出来なくなるというのは少し気の毒な気がする。ここはやっぱり『マスク・ド・レイヴン丸』になってFFF団全員（もちろん清水含む）爆破してしまうべきだろうか？

『残念ながら清水。これはクラス内のもので　ん？』

『会長どうしました？』

『これは　6じゃなくて9だ。9番の見間違いだな』

『なんだ9番か。驚かせやがって』

『余計な事で体力を消費しちまったぜ』

『所詮は吉井だな。数字すらまともに読めないなんて』

酷い言われようだが、明久の命は助かったわけだ。

「烏丸大貴……！」

「ん？ 何か用か清水？」

「美春がここに来た本来の目的はお姉さまと組む豚野郎を殺す事ではありません」

「ああ、そりゃ結構な事だ。誰かを殺すなんて不毛以外の何物でもないからな」

「美春の本来の目的は あなたです！」

「なん……だと……？」

周りの空気が凍った。嫉妬の感情がドス黒いオーラになって辺りを包みこむ。

『『『……もし告白なら……！ 烏丸、絶対に殺す……！』』』

「オレの……体が目的なのか！？」

「ち、違います！ 何故そうなるのですか！？ 美春はお姉さま一筋です！」

『なんだ。違うのか』

『そうだよな。アイツがモテるなら俺がモテたって不思議じゃないはずだ』

『烏丸がモテる事なんてあるわけないからな』

今言った奴、顔覚えたからな。後でオボエテロ……！

「あなたは今、ハリセンを西村先生に没収されて丸腰だと聞きました……！」

周りの空気が再び凍る。ハリセン・小烏丸を没収されて以来、オレはやや情緒不安定気味で破壊衝動に駆られやすくなっている。オレと話をする時は小烏丸の事は触れない事がFクラス内での暗黙の了解になっていたりする。清水はそれを知らないため、あつさりそこに触れてきたのだ。

「私とお姉さまが添い遂げる為に邪魔な障害は排除しておくべきです……！　そこであの豚野郎の味方で最も厄介なあなたには、今のうちに消えていただきませう！」

そう言っ指と指の間にナイフやフォークを挟み、投擲の構えをとる。

「……やるのは別にいいけど、条件がある」

「……なんですか？」

「オレが負けた場合お前の望むように煮るなり焼くなりすればいい。その代わり、お前が負けた場合は」

「負けた場合は？」

「お前に父親　店長に向かって『お父さんだ〜い好き！　美春、お父さんの作ったクレープが食べたいな〜（ハート）』（裏声）と言ってもらおう！　そんでもって作ってもらったクレープをすべてオレに献上しろ！』」

「な、なんとという条件を出すのですか！？」

甘党であるオレは『ラ・ペディス』のクレープは大好物だったりする。以前バイトしたときにレシピは暗記したのだが、店長が作るクレープに比べてどうしても一味足りないのだ。

それだけなら少し悔しいだけで問題なかったのだが、オレがクレープを食うために店内に入ると、あの店長は何故かオレに襲いかかってくる。別に得物を持っていれば店長を伸してしまう事は簡単だ。

しかし店長を気絶させてしまえば、オレの楽しみであるクレープが食べなくなってしまう。

つまりオレが『ラ・ペディス』のクレープを食うためには変装して店内に入るしかないのだ。それでも食っている間バレないか気が気でないので、ゆっくりと味わってもいられない。しかし今回清水に勝てば、オレはゆっくりと気兼ねなくあの最高のクレープを食す事が出来るのだ。

「さあ、どうする？ 小烏丸が戻ってきたらオレに勝つ可能性は下がるぞ〜？」

「クツ……！ 良いでしょう！ 美春が負けなければいいだけの話です！」

かかった！ オレの得物が小烏丸だけだと思っなよ！

「死になさい！ 豚野郎！」

清水は構えていたフォークとナイフを一齐に投擲した。

オレはそれをすべてバットで叩き落とし、清水が第二射の構えに移る前にバットのグリップのボタンを押した。2つに割れたバット隙間からワイヤーが飛び出し、又ンチャクの様になった。

「今は亡きブルース・リーに捧ぐ！」

バット型又ンチャクをブン回し、そのまま間合いの外から清水をめかけて振りかざす。

清水は『届く訳ない』とタカを括っていた様で、回避しようとせずそのまま飛び道具を構えようとしていたが

「かかったあっ！」

「なっ!?!」

中に仕込んだワイヤーはジジイ特性の伸縮自在ワイヤー! 間合いの外からでも決して逃げる事は出来はしない! 伸びたバット型ヌンチャクが清水の腕に巻きつき捕らえた。

「お前の武器はスピードとトリッキーな動き! それが封じられた以上お前に勝ち目は無い! 頼みの綱の狂化もオレには通用しない! 一度だけ言う! 降参しろ、清水!」

「じよ、冗談ではありません! あの男に『大好き』という位なら死んだ方がマシです!」

「……そうか。残念だ」

グリップに仕込んであったもう一つのスイッチを押し、ワイヤーに電流が流した。

「し、痺れます!」

まあ、電圧はたった5万ボルトだから死にはしないだろう。オレはジジイに10万ボルト流されても死ななかつたから(たぶん)大丈夫!

膝を折るように倒れた清水に一言。

「グッバイ、エイジ・ダテ」

激しく空しく、そして不毛な戦いだつた……。

けど、これで『ラ・ペディス』のクレープゲット

「お主……、鬼じゃな……」

「そうだよ、ヒロ。やり過ぎだよ。相手は一応女の子なんだから

「あいつに対しては何も恩はないから、手加減してやる義理はねえよ。それにオレが負けてたらお前は確実に襲いかかったと思うんだが？」

「ありがとう、親友！ 助かったよ！」

「どういたしまして、親友。ところで二人三脚はどうなった？」

「秀吉が美波とペアで僕がムツツリーと、それと雄二が」

「…………… 姫路とペア」

「そっか」

『ごめんなさい美波ちゃん。私少し喜んじやいました』

『いいのよ瑞希……。ウチも同じ立場だったらきつと喜んじやうから』

「通りで他の連中がいなくなってる訳だ。ところでお前はいかになくていいのか？ いつもなら喜んで雄二をシバきに行ってるのに」

「そういえば変じやの。どうしたのじゃ明久？」

「あはは。大丈夫。僕がそんな事しなくても霧島さんが」

『…………… 雄二、浮気は許さない』

『ぐあああああつ！ しよ、翔子！？ どこから湧いて出た！？』

「霧島さんが殺ってくれるから」

「どちらにせよ雄二の命は風前の灯じゃったか……………」

「あ、あれは痛い……………」

霧島は雄二にアイアンクローをかけている。片腕だけで180？ほどある雄二を釣り上げるなんて半端な腕力じゃない。あれもジジイの特訓の賜物だろうか？ だとしたら雄二に同情の涙を禁じえない。

『……ところで雄二』

『この状態で何もなかったかのように話を進めるな。普通は手を緩めるだろ』

『……お義母さんから何か預かってない？』

『ん？ あれか？ あれなら』

「待てって言いながらもあのまま会話を続ける雄二も普通じゃないよね？」

「何を今更。オレ達の周りにまともな人間なんている訳ないだろう？」

「それはワシもカウントに入っているのかのう……？」

「まあ、な。お前自身はマトモなんだけど、な」

「ヒロ！ こんなに可愛い女の子を『変』だなんて」

「むう……。ワシはいつになったら男扱いしてもらえるのじゃろうか……？」

「なら、師範の道場に入門するか？ 1年でムキムキにしてみらえるぞ？」

「え、遠慮しておくのじゃ……」

「それは残念。冬の寒中水泳の道連れが出来ると思ったのに……」

「……………その話をもっと詳しく」

『……あれなら？』

『持ち物検査の日にお前の持っていた袋に入れておいた』

『……袋って』

『あの催眠術とか黒魔術とかの本が入っていた袋だ』

『……………ホントに……？』

『本当だ』

『……………嘘じゃ、ない？』

『嘘じゃない』

『……………』

『どうした翔子？　それがどうかしたのか？』

『………んて………とを………』

『だから、どうしたと』

『………なんて事をしてくれたの………っ！』

『ぎゃああああっ！　死ぬほど痛てえええっ！』

『………あの袋中身ごと全部没収されたのに………っ！』

『ぐぎゃああああああっ！』

な、なんだ！？　霧島が本気でキレてる！？

普段の雄二と霧島の少し過激なやりとりは犬がじゃれて甘噛みしている様なものなのだが、今回はそんな様子が感じられない。一体その袋の中に何が　いや、違う。雄二は雪野師匠から一体何を預かっていたんだ！？

パキユツ！

あ、嫌な音……。

『………雄二の………バカ………！』

雄二は力なくその場にぐったりと横たわり、霧島は走り去って行った。

霧島の事も気にはなるが今は雄二の方が先だ！　あれは拙い！

「お、おい。雄二、大丈夫か？」

「雄二。何やったのさ？」

「おいおい。こんな状態なのに答えられるわけ」

「ああ………。どうも俺の所為でお袋に預けていたものを没収された雑誌類と一緒に没収されたらしいが……。」

「うおおおおおつ!?!」

ビビった! 血塗れのまま起き上がってくるなよ。心臓に悪い! ……雄二の不死身っぷりもオレに劣らない物になってきたなあ……。

「預けていたもの、ねえ……。随分大事な物みたいだったけど」

「お袋に預けたものって事は まさか、婚姻届の同意書か!?!」

「ああ、そっか。雄二も霧島さんも未成年だもんね。せつかく手に入れた同意書を没収されたんだから怒るのも当然だよな」

「?????」

妙だな……。引つかるものがある。

思考が引っかかり、納得がいかない……。辻褄が合わないと、言うべきか……。

「危なかった……! そういう事ならあの持ち物検査に感謝ぐふう
っ!」

『連れて行け』

『ハッ!』

雄二が背後からのFFF団に不意打ちを食らい、再び倒れ込む。

そして麻袋に詰められ、どこかへ連れて行かれたが、オレは自分の思考を収束させようとしていたので、そんなの構っていられない。

そして 集中の世界に入る……。

1つ1つの可能性を潰し、オレが何に引っかかりを感じているのかを洗い出す。

霧島はなぜ怒ったのか?

持ち物検査で大事なものを没収された為だ。

雄二が雪野師匠から預かった物は本当に婚姻届の同意書だったのか?

？ 待てよ？ よくよく考えればおかしい。そんな重要な書類をいくら当事者とはいえ、人づてに渡すだろうか？

それだけじゃない。『婚姻届の同意書』なんてハッキリ言って『取替の利く書類』だ。

普段の霧島ならそんな事は素通りして、新しい同意書を用意するくらいやってのける。雪野師匠が霧島との結婚に同意してるならなおさらだ！ ズキン それなら霧島が没収された物は ズキン

もつと別の……別の替えに効かないような……ズキン グウ

ツ……！ ズキン、ズキン

「ロ？ ヒロ？ ちよつとヒロ!？」

「ハッ!？ ハア、ハア、ハア……!」

「どうしたのヒロ？」

「あ、ああ。悪い。ちよつと引つかかる事があってな」

「？ 引つ掛かるととは何じゃ？」

「……悪い。確証はないからまだ言えない」

「……そう。本当に大丈夫なの？」

「すごい汗じゃぞ？ 本当に大丈夫なのかの？」

「大丈夫だって。心配かけて悪かったな」

危なかった。無意識に無想状態に入ってたんだ……。凄い頭痛だ

……。
思った以上に副作用がキツイな……。早く制御できるようにしないといけない……。

霧島の事は気になるが、ひとまず置いておいて二人三脚の為にグラウンドへと向かった。

第88話 二人三脚、一本勝負！

NO SIDE

黒いスーツ姿の少年が歩いていった。端正で品のある顔つきの少年
いや、少年の面影を残した青年だった。その姿は凜としており、
一種の異質さを出していた。

そして何より彼の異質な部分はその瞳にあった。きれいな瞳だ。し
かしその中に少しだけ 注意して観察しないとよく分からないく
らい少しだけ 虚無的で、無機質で、すべてに飽きて退屈してい
るような色があった……。

実際に彼は心底退屈していた。文も武も彼に敵う者などいない。
烏丸本家という作品を完成させる為の部品の様だと思っている。

自分の存在はただそれだけの為に 自分は存在している。

それが周りが彼に見出す価値観であり、彼が自分自身に見出す価値
観でもあった。

性格は周りが望む理想に当てはまるように
個性や好みなど自分にとって無価値なもの

ただ……、ただ周りの人間が望むままに役割を演じるだけ

そんな生き方をしているうちに感情は揺れなくなった。

次に何もかもがつまらなくなった。

最後に彼の世界は色をなくした。

「まったく……。修一さんは一体何を考えているのでしょうか……。
高校三年という大事な時期に修兵さんをこんな学校に編入させよう
とするなんて……」

呆れ混じりに隣を歩いてきた彼の母親がヒステリックにこぼした。彼がこの話を聞くのはもう何十回目になるだろうか？ 普通なら嫌な顔をするだろうが、彼はにこやかに、そして丁寧に戻した。

「父さんは僕を試しているのでしょうか。これぐらいで潰れてしまうような器では本家を継ぐことなどできませんから」

こう答えておけばあんた達は満足なんだろう？

「修兵さんは次期当主として疑いようがないくらいの人物ですよ。わたくしも母として鼻が高いです」

青年の答えに満足したのか彼女はさっきまでのヒステリックな様子がなりをひそめ、落ちついた表情になった。その様子を見て青年の眼は少し冷めたようになる。

当たり前前だろ？ あんた達がそうなるように振舞ってるんだから……。

「ああ。でも心配です。この学校には『アレ』がいるという話ではありませんか……。あの千鶴の何もかもを狂わせてしまった『忌々しいアレ』が……！」

隣の彼の母はギリツと唇を歪めた。彼女は『烏丸大貴』の存在を心の底から疎んでいる。

理由は多くある。彼女の夫である烏丸修一が外で作った女の子供、要するに修一が不倫をしていたという象徴である事。嫉妬の矛先を大貴に向け、虐待とも言えるような苛烈なイジメを扇動していた事が先代当主の修介と自らの娘である千鶴に発覚し、両者の軽蔑を受け、持っていた実権をはく奪された上、精神病患者扱いされた事。

そしてつい最近の文月学園を乗っ取るという口くでもない計画を破綻させられた事。

父の方はその一件以来憑き物が落ちたかのような清々しい顔つきになり、むしろ何かをふっきった様な感じだったが隣のこの女性は違った。

余計に『烏丸大貴』への嫌悪感を強めたのだ。

青年から見たら完全に逆恨みなのだが、彼女自身はそうは思っていない。

自分の母親ながら心底くだらない人物だと青年は思う。そしてそんな人物の思い通りに動く事しか出来ない自分も

『今は亡きブルース・リーに捧ぐ！』

そんな声に誘われるかの様に彼はグラウンドの隅でバカ騒ぎをしている集団に眼を奪われた。

彼らは自分より少し下くらいの年の、整っているがどこか垢抜けない顔つきの取り立てて特徴のない少年を筆頭にみんな楽しそうに騒いでいる……。『心底楽しんでいる』というのがよくわかる。

青年はその眼の前の光景に眼を離す事が出来ない。あるいは彼らに自分に無いものを見出し、心を奪われたのかもしれない。

彼の母親はその様子を汚いものを見るように一瞥した後、こう言った。

「くだらないですね。あのような品性下劣な輩が多くて嘆かわしいばかりです。修兵さんもそうは思いませんか？」

「……………はい」

青年の答えに母親は満足したように頷き再び歩き出す。

それに従い青年も再び歩き出した。

この時青年は気付いていなかった。自分の感情が数年ぶりに大きく震えた事に

彼等の自由で楽しそうな生き方に強く惹かれていた事に

青年 烏丸修兵はまだ気づいていなかった。

.....

大貴 SIDE

「とりあえず僕のパートナーはムツツリーニだね。よろしく」

「.....よろしく」

「ウチのパートナーは木下ね。よろしく頼むわ」

「うむ。よろしく頼むぞい」

「オレの須川パートナーがどっか行っちゃまったぞ？ どうすんだ、コレ

？」

雄二の処刑は出来るだけ手短に終わらせてくれよ、ホントに。

「私は坂本君とペアですか.....。足を引つ張っちゃわないか心配です
「ああいや、その心配はないんじゃないかな？」

明久の言う通りだ。姫路は文字通り雄二に足を引つ張られると思う。
組み合わせは【秀吉&島田ペア】【明久&ムツツリーニ】【オレ&
須川】【姫路&雄二の亡骸】といった感じだ。まあ、儲け話がわや
になったのは残念だが、仕方ない。

あの連中の容赦無い暴力の前では論理的な思考など通じるかどうか
分からない。

最悪の場合、『買う』より『奪う』方が早いという安直に結論に達し、襲いかかってくる可能性だって考えられる。そうなれば小烏丸も木刀も持っていない状態でオレは負けないにしても苦戦する事は目に見えている。そういう意味では良かったのかもしれない。

「？ 何よ、アキ。パートナーが木下じゃなくて土屋だったのに随分嬉しそうじゃない？」

「まあね。ムツツリーニなら雄二よりはいいと思うよ」

「ふ〜ん。どうして？」

「だって可愛かったからさ」

「「「……………は？」「」」

「ほら、前に海に行つた時、ムツツリーニが女装したじゃない？アレが結構可愛かったから」

とりあえず秀吉とムツツリーニの腕を掴み、明久から5、6歩引き離す。

そしてあくまで平静を装い、ニコヤカにいつもと変わらない様子で明久に語りかけた。

「最近明久君の好みの幅が広すぎて困ります……………」

「はははは、お前の守備範囲の広さにはお兄さんビックリだよ」

「……………変態」

「むう…………。毎度のことながらお主の思考は理解不能じゃ」

「ご、誤解だよ4人ともっ！ 僕は決してムツツリーニの女装姿に興味がある訳じゃなくて純粹に勝負に勝ちやすいパートナーだったから嬉しかっただけで」

「近寄るな、変態めっ！」

明久が弁明しようところらに近づいてきたので、仕込みバットを取り出し、三節棍に変形させ、ブンブンとブン回し、威嚇する。

こ、こいつらはオレが守らなくては……っ！

「へえ、凄い自信じゃないアキ」

「まあね。ムツツリーニの速さは知ってるの通りだし、僕だって運動は苦手じゃないからね」

「そうなんだ……。じゃあさ、勝負しない？ ウチと木下ペアで。

確か各クラス2組ずつの出場だったでしょ？」

「あ、そうだったね。オツケー！ それなら勝負しよう！」

島田が嗜虐的な笑みを浮かべ、明久に提案すると明久は喜々として乗ってきた。

「それで 負けた方が罰ゲームね？」

「……………へ？」

「何よ、アキ？ まさか女子のペア相手に勝つ自信が無いとでもいうんじゃないでしょうね？」

「いや、島田。ワシは女子ではないのじゃが」

「むむ……！ そんな事はないさ！ その勝負受けた！」

「それじゃあウチ勝った場合の罰ゲームだけどウチが勝ったら

ちよつと付き合って……………？」

「え？ 付き合っつて、どこに……………？」

「買い物とか、ご飯とか、映画とか色々……………」

「そんなに沢山？ 一日で回りきれるかな？」

それは明らかに罰ゲームの名を借りたデートのお誘いだと思つのはオレだけだろうか？

「……………に一日だけ……………つもりは……………いから」

「ん？ 何か言った？」

「な、なんでもない……………！」

「そう。じゃあ、僕が勝った場合の罰ゲームはね……ご飯でも奢ってもらおうかな？」

「わかったわ。約束する」

「これでかけは成立だね」

「そうね。ウチが勝ったら 本当に付き合ってもらおうから……！」

何故か島田のその言葉が やけに耳に残った……。

『これより、第二学年による二人三脚を開始します。二年生の生徒はスタート地点に移動してください』

「よし、それじゃあ行こうかムツツリー二！ 最高のタイムをたたき出してやるうー！」

「……あまりくっつくな、明久」

「いや、だからそれは誤解だってば！」

「ムツツリー二、これを……」

「……これは……メリケンサック」

「もし明久が妙な動きを見せたら 迷わず殺れ……！ お前の貞操を守るために……！」

「……感謝する、ヒロ」

「よせよ。オレ達友達だろ？」

「だから誤解なんだってばあ つ……！」

……

「なんとか間に合ったな」

「遅いぞ須川。すぐにオレ達の番だ。急いで足を括れ」

「ああ、すまんすまん。思ったより激しく抵抗されて、な」

「ホントに、お前は……。ほどほどにしておけよ？ あんまり人に嫉妬ばかりしていると、そのうち自分の幸せを逃すぞ？」

「それでもやめられない、止まらない」
「かつ 海老せんじやないんだから……」

須川がオレの右足と自分の左足を結び、急いで2人してスタートラインに立つ。

こんな競技は正直な話どうでもいいんだが、負けるよりも勝つ方が気分がいい。

何より相方の須川が『体育祭でかつこいい所を見せてモテてやるぜッ!』と息巻いてるので、手を抜くのは悪い気がする。仕方ない。全力で行くとしますか……! !

「いいか、烏丸? 右足からスタートだぞ」

「オーライ、右足からだな?」

「そうだ……! 右足からだ」

『位置について! 用意 …!』

パァン!

右足から!

ガクン!(お互いの足がもつれる音)

ズベチャツ!(派手に地面とキスする音)

「何やってんだ ッ!」

「それはこつちの台詞だぁ っ!」

「右足からって言っただろう!?!」

「だから右足から出しただろうが!」

「俺から見て右足だ!」

「なんだよ、ややこしいこと言うな!」

「おい、烏丸」

「なんだ須川？」

「なんであのペア三人四脚になつてんだ？」

「あ？ 何バカ言つてんだよ。そんなことあるはず

……………」

「あるはず？」

「あつたな……………」

須川に促されるままグラウンドの方を見ると、明久&ムツツリーニペアより遅れる所少しの位置に島田&秀吉&清水（もう復活したのか？）が三人四脚で走っていた。

『え？ あれ？ 美春！？ あんた、あれだけ烏丸にこっぴどくやられたのに何でここにいるのよ！？』

『あの程度のダメージで美春のお姉さまへの崇高な想いは止められません！ …… ああ、お姉さま……。密着しても決して存在を感じさせない、その奥ゆかしいお胸がたまりません……………』

『ドサクサに紛れて何処触つてんのよ！？ さつさと離れなさい！』

この勝負にはウチの大切なものがかかっているんだから！』

『何を言っているのですか！ 美春はお姉さまの事を思つてこそ、こんな方法に出ているのです！』

『これのどこがウチの為よ！？ ウチの事を思うなら ってちよ

つとおおおっ！ 今アンタ背中にも手を回してホック外さなかつた！』

？』

『大丈夫です！ お姉さまなら固定しなくても何の邪魔にもなりませんから！』

『アンタ後で覚えておきなさいよ！』

『はい！ この感触忘れません！』

『そういうこと言ってるんじゃないわよっ！』

『むづ。ワシはこんな時はどうすればよいのじゃ？』

そして、明久&ムツツリーニペアがゴールテープを切り1位に、島田率いる妙な集団 もとい、清水、秀吉トリオがゴールして2位……ってか、三人四脚で2位って……。

「はあ……、はあ……。美春、アンタねえっ！」

「お姉さま、素敵でした……」

「なんというか異様に疲れる二人三脚(?)だったぞい……」

「美春！ アンタの所為で負けちゃったじゃない！」

「それではお姉さま美春はこの辺で失礼します！ またお会いしましょう！」

「あ！ コラ！ 待ちなさい！ 美春 っ！！」

島田がキレた所を見て、清水は優雅に一礼、その後明久を一睨みして風のように去って行った。

「おい！ 清水 っ！ あの罰ゲーム、忘れるなよ っ！

ちゃんとやってもらうからな っ！」

「絶対いやです っ！」

ふっ、ロールパンめ……。性質の悪さに定評があるオレから逃げられると思うなよ？

「……まったくあの子は……」

「いいの美波？」

「ん？ 何が？」

「いや、清水さんが入ってなかったら勝てたかもしれないのに」

「それは……まあ、そうかも知れないけど」

「でしょ？」

まあ、三人四脚あのスピードなら十分一位を狙えただろうな。

島田は少し考え込んだ後、吹っ切れたかのような顔をして明久の問いに答える。

「でも、ちよつと冷静に考えたら、これで良かったような気がしたから」

「？　これで良かったって？」

島田の答えに明久は尚も納得いかない、いった様子で聞き返す。

「あんな卑怯なやり方をしていたら　その場は良くても後で絶対に後悔すると思うから」

「……そっか。じゃあ賭けは無効って事で。そもそも勝負事体成立しなかった訳だし」

「いいや、明久。勝負は勝負。これは島田の負けだ。思う存分飯を奢ってもらえ」

「え？　え？　でも」

「そうよアキ。この勝負ウチの負け。約束通り今度ご飯を奢ってあげるわ」

「え？　それは悪いよ。ちゃんとした勝負じゃなかったんだから」

「ウチが言いって言うてるからいいの！　それとも何？　アキはウチの奢るご飯が食べられないってどういうの？」

酔っ払いの絡み文句みたいだ。

「うん……。じゃあ、お言葉に甘えて」

「うん。宜しいっ」

「……ところで島田よ」

「どうしたの木下？」

今まで空気を読んで黙っていた秀吉が言いにくそうに島田の肩を叩き、トントンと胸元を指で叩く。

「……まだ外れておるようじゃが……その……よいのかの？」

「え？ ……あ。ち、違うのよ！ 別に外れても大差ないとか、違和感無いかさそういうのじゃないんだからあ　っ！！」

「あ！　ちよつと！？　美波　っ！？」

島田が校舎の方に爆走していった。明久もその後を追って走って行く。

「……そうか……。外れても違和感無いのか……。」

島田の胸のサイズは優子より少し小さいくらいだから……。優子も外れても違和感無いんだろうか……？

いや、やめよう。今はそんなこと考えていても仕方がない。

今一番に考えるべき事は違う事だ。

別の事……。そう、すなわち　ムツツリーニの大量の鼻血を

どう止めるか、だ。

あつという間に、血に染まるグラウンドを見て、痛くなった頭を押さえた。

第89話 三羽鳥？ 三バカ？ どっちやねん！

「不戦勝か……。ラッキーだったな」

「そうじゃの」

「次の相手は 2 - A もしくは 3 - A か……。どっちが勝ち上がってくるかな？」

「お主の予想ではどうなのじゃ？」

「ん、2 - A かな？ 霧島を筆頭とした優子、久保の3トップの実力はよく知っているし、いくら常夏コンビが侮り難いっていても、脅威になるのは物理だけだ。奴等を4、5、6番辺りに据えていても霧島がピッチャーだったら、簡単に打てないだろ。ちなみにオレなら1点やる事を覚悟して一回の攻撃でわざと常夏コンビに回して物理で勝負しないって方法をとる。そうすることで向こうの得意教科をあてがった打順を崩す事も出来るしかもれない。ま、これはあくまで他の人の点数が霧島に及ばない事を前提とした作戦なんだけどな」

全教科が頭一つ飛びぬけていて死角なしの霧島ならではの作戦だ。キャッチャーもAクラスなら点数の高い奴がゴロゴロいるし、問題ないだろう。

さて、そろそろ試合結果を見に行つて貰つたムツツリー二が帰ってくる頃か？

「……………ただいま」

「どつだった？」

雄二が一步前に出てムツツリー二の報告を聞く。ムツツリー二の口から聞かされた報告はオレが予想していたものとは全く違う内容だ

った。

「……………2 - Aが敗れた」

「なっ!？」

「負けたって…………!？」

雄二は口を開けたまま絶句し、明久は信じられないといった表情で声を荒げた。

かくいうオレも少し信じられない。常夏コンビにそこまでの力があつたなんて俄かには信じがたい。決して侮っている訳ではない。実際に鼻肩眼無しで見ても物理さえ封じれば常夏コンビは霧島や優子の敵ではないのだ。なにより霧島が負けるところなんてイメージできない。それでも勝ったって事は

? チームの核であり、作戦の鍵を握る霧島の調子が悪かった。

? 3 - Aに霧島を上回る化け物がいる。

? 総合的な力量、作戦において向こうの方が上手うわてだった。

「どれだと思う?」

「……………まあ、あいつは姫路ほどじゃないにしても野球に詳しくないからな。その辺が原因で負けたんじゃないのか…………?」

雄二はすぐに思考を切り替え、オレの質問に答えた。しかしオレには雄二のその答えは自分自身を納得させる為に言ったように聞こえた。

「けど信じられないよ。あの霧島さんがいるのに…………」

「明久、野球は団体競技だ。ひとり優れたのがいたからって必ず勝てるってモンじゃない」

「それは……………そうだけ…………」

「今はそれより3 - A対策をしつかり固めるべきだ。2 - Aの場合だったらデータの露出が多かったからいくらでも戦略の立てようがあっただろうが、3 - Aのデータに関してはオレ達の持つてるのは常夏コンビの物くらいだ。ある意味2 - Aとやるよりも厄介だぞ」
「ちなみに雄二。2 - Aが勝ち上がってきた場合はどうするつもりだったの？」

「久保を懐柔して10対8で勝負するつもりだった」

餌に何を使う気だったのか凄く気になるけど、聞いたら色々後悔しそうな気がする……。

「何言ってるのさ。あの真面目な久保君がそんな汚い行為に手を染めるはずがないじゃないか」

「……そうか。お前はそう思ってるんだったら、その方が幸せかもしれないな……」

「真実の久保はヨゴれた好意に身が染まっておるからの……」

「……知らぬが仏」

「え？ え？ なに？ ねえ、ヒロ。みんな何言ってるの？」

明久の問いに対して曖昧な笑みを浮かべてごまかす事しか出来なかった。

「して雄二よ。作戦はあるのかの？」

「作戦と言えるほどのものじゃないが……奴らの召喚獣を殺そうかと思う」

「すんなりとそういう作戦が思いつくお前って凄いのか、凄くないのか……」

「もはやスポーツマンシップという概念は消え失せとおるの……」

「最低の作戦ね……」

「殺す……？ アウトにするって意味ですか？」

姫路の純粹さが眩しい……。

「了解。乱闘で再起不能にするんだね？」

「……………誰を狙えばいい？」

「別に乱闘じゃなくてもいい。奴等を殺す手段は乱闘以外にも色々あるからな」

「そっか。タツクルしてもいいし、デットボールを狙ってもいいよね」

「……………振り切ったバットを相手に投げつけてもいい」

「ああ。理解が早くてなによりだ」

「お主ら真性の外道じゃな！」

「あ、頭が痛くなってきた……………」

「アンタらねえ…………。相手に『卑怯だ』って言われても知らないわよ？」

「ふふつ。わかってないなあ、美波は」

「そうだな。島田には俺達のスポーツマンシップがまったく伝わらなかつたらしい」

「……………理解不能」

明久達は一斉に肩を竦め、島田に憐れむような視線を送る。実に腹立たしい仕種だ。

そして3人揃ってこの一言。

「…………『卑怯』『汚い』など敗者の戯言……………」

「アンタら最低すぎるわっ！」

まったく同感だ。明久達の壊れ具合に頭痛が酷くなり額に手をやった。

「お前ら待て。その作戦はオレは反対だ」

「なんで？　これだけ効率的な作戦は中々ないよ？」

「なんでって……。ただえさえ3年連中に恨みを買っているのにこれ以上関係を悪化させてどうする？」

「え、でも……」

「『でも』じゃない。それに常夏コンビは殺そうが、煮ようが、火あぶりにしようが、どうでもいいが、他の3年にはなんの恨みもないんだからその作戦はやめておきたい」

オレの信条は『恩も恨みも忘れない』事だ。向こうから仕掛けてきたならともかく、恨みの無い奴に危害を加えるのはオレの信条に反する。

「ヒロの言う通りじゃ。常夏コンビ（特に常村）は酷い目に遭ったところでどうでもよいのじゃが、他の3年には罪はないぞい。それに向こうの召喚獣を行動不能にしたところでワシらの勝ちになる訳ではないであろう？」

「そうだな。しかし相手は三年だからな。持ち物検査が俺達二年にしか行われなかった以上、向こうの優勝に対するモチベーションはこつちほど高くない」

「まあ、そうだろうね」

「だから、そのモチベーションの差を利用する」

「え？　どういう事？」

「三年は持ち物検査を受けていないから再試験を受けてまで続けようとは思わないだろうって事だ」

「ああ、なるほど」

「それでもやっぱりリスクがでかすぎる。それにあの常夏コンビがそんな事されて黙っているとは思えない。三年連中はこの間の肝試しでオレ達への不満を募らせている。そこへラフプレーなんかしようものなら不満を爆発させる起爆剤になりかねない。その上、下手

するとこつちが失格になる可能性だつて十分考えられるんだぞ?」

「その辺は上手くやるから大丈夫さ!」

「やるな!」

「アダッ!」

明久の額にデコピンをかますと、木魚のような音が鳴り、涙目でのた打ち回った。

おかしいな? そんなに強くしたつもりはないんだが……?

『いい音がしたのう……』

『やっぱり頭の中が空っぽだから?』

『そ、そんな事言っちゃダメです!』

「とにかく、その作戦は反対だ。」

「そうは言ってもだな……。他に作戦なんて」

「……ふははははははははははははははははは!」「」

突然何処からともなく聞こえてきた(アホっぽい)笑い声でオレ達は作戦会議を中断、声の主を探そうとキョロキョロと辺りを見回した。

少し離れた所に戦隊物の様なポーズを決めながら高笑いをしている三人組を見つけた。

いや、不本意ながら見つけてしまったというべきか……?

「……ははははははははははははははははははははははは!」「」

とりあえず眼を合わせないようにしよう。

言葉に出さなくても全員意見が一致したようであからさまに眼を逸らしている。

ると有難い。それではTAKE3！」

「……ふは」

「何者だー」（棒読み）

「……早いわっ！！」「……」

「なんなんだ？ あの変態軍団は？」

「明久か雄二の知り合いだろ？」

「ちよつと待つてよ！ 雄二はともかく、なんで僕の知り合いだつて決めつけるのさ!？」

「そのセリフそっくり返してやる、このバカ！」

「なんだと、この下種野郎！」

「……ッ！！」（掴みあつて睨み合い）

「いや、だつてお前らの知り合いってオレの知る限り10割が変態だし……」

「それを言うならお前の身内だつて静馬以外は変態ばかりじゃねえか！」

「そんな事はねえ ……いやあるな……」

客観的に見て、ジジイも師範も十分変態だ。

「明久、雄二……、決めつけてゴメンな……」

「いや……、わかつてくれればいいんだ……」

「僕達の方こそゴメンね……」

不毛な言い争いの所為でオレ達のテンションは駄々下がりがだ。

地に落ちるを通り越して、マントルまで到達しそうなくらいだ……。

「……オレ達を無視してんじゃねえ!!」「……」

うるさいなあ……。凹んだるときくらいそつとしておいてくれよ……。

……。

バファ ンだって半分は優しさで出来てるのに、あんた達には小指の甘皮程の優しさもないのか？

「……失礼しました。三年の方のようですが、何か御用でしょうか？」

「……何故俺達が三年だとわかった！？」

バカにしているのか？ それともバカなのか？ 恐らく後者だと思うが……。

「いや、ジャージが三年の色じゃないですか」

完全に余談だが文月学園のジャージの色は学年ごとに違う。一年は緑、二年は青、三年は赤といった具合に毎年ローテーションして色が変わっていく。

「……おお！ お前頭いいな！」

後者のバカ説で決定だ。なんだかこの短時間でドツと疲れた……。

「ありがとうございました。お帰りはあちらです」

「……うむ。見送り御苦労 って違う！」

チツ、流石にこんな方法で追い返せないか。しかしノリのいい人たちだな。

「それではどのようなご用件でしょうか？」

「……俺達は お前に用があるのだ、烏丸大貴！」

「え？ オレ……ですか？」

思わぬ言葉に呆然としてみると、雄二と明久がアイコンタクトを送ってきた。

(やっぱりお前の知り合いだったじゃねえか!?)

(誤解だ! オレはホントにこんなダ ヨウ倶楽部の様な奴等は知らない!)

(けど、向こうはヒロの事知ってるみたいだよ?)

(多分この間の肝試し相当三年連中に恨まれてるだろうから、それじゃないか?)

(ああ、お礼まいりってやつか……)

夏休みに行われた肝試しで、オレは常夏コンビ(正確には変態)相手にやや反則気味な小細工を使い、非常に性質の悪い方法で叩き潰した為、三年に相当恨みを買っている。

恐らく雄二の言う通り、目の前の連中もオレが気に入らないという理由で難癖つけにきたのだろう。

「お前気に入らないんだよ!」

やっぱりな。

「罵ってくれ!」

はいはい。……………ん?

「女の子紹介してくれ!」

え〜〜〜?

「……とにかくお前を潰す! この 文月学園三羽鳥がなっ!」

ポーズ）「」

罵るとか、女の子紹介とか関係なくね？

「……………」

「……………」

「……………」

「ふっ、俺達のあまりのカッコ良さに声も出ないと見える（ポーズ）」

それだけはないと、断言できる。

「やはりこのスペシャルファイティングポーズに度肝を抜かれたんだろう！ ついでにその冷たい視線！ 最高だ！（ポーズ）」

アンタの性癖含めて、違う意味で度肝を抜かれた。

「ついでに自己紹介もしておいてやる！ 有難く拝聴しろ愚かな愚民共！」

心の底から聞きたくねえ……………！

「」俺達文月学園お三羽鳥！ 右から「」

「三上！（ポーズ）」

「馬場！（ポーズ）」

「鹿島！（ポーズ）」

「」貴様の首を貰い受ける男達の名だ！（ポーズ）」

「……………。集合。作戦タイム」

オレの呼びかけに明久、雄二、秀吉、ムッツリーニはこの三人から

少し離れて円陣を組んだ。

「なんなんだ？ あの『リアルギニュー特戦隊』は？」

「三羽烏と名乗っておったぞい？」

「……………三バカ？」

「新手の精神攻撃か？」

「雄二、どうするの？ ある意味常夏コンビより手強そうだよ？」

あまりの濃い面子からの先制パンチにオレ達はタジタジだ。

「と、とにかくこのままじゃ士気に影響する。雄二、なんとか盛り返せないか？」

「お、俺がやるのか！？」

「お前代表だろ！？ ああいう予想外生物はオレの一番苦手なタイプなんだよ！ だから頼む！」

「……………チツ！ 貸し1つだからな」

「恩に着る」

「あー、失礼。三バカ先輩」

「……………三羽烏だつってんだろが！！！！」

「ヒロが気に入らないと言ったな？ 何故だ？」

「決まっている！（ポーズ）」

「そいつは（ポーズ）」

「俺達と（ポーズ）」

「……………キャラが被っているからだ！（ポーズ）」

「……………は？」

一瞬脳細胞がフリーズして、オレと雄二は啞然とした。

今なんて言った？ 『キャラが被っている』？ オレってあんなに痛いのか？

「……そいつは文月学園のカラス！ 俺達は文月学園の三羽鳥！
しかも知名度はそいつの方がわずかに（正確には圧倒的に）上だ！

俺達が目立つ上で『烏丸大貴』の存在は邪魔なのだ！」「」

「改名すればいいじゃないですか。『文月学園の チョウ倶楽部』
とかに」

「……ヤ ツ！！ それだけではない！ この間お前が肝試しの
時にやった大逆転！ あれがメチャクチャカッコイイっていうので
お前の三年女子の間での人気が凄い事に！」「」

「シヤ ツ！」

「うおっ！？ 明久、いきなり何するんだ！？」

「秀吉のお姉さんという可愛い彼女持ちでありながら、年上のお姉
さんにモテるなんて……！ ヒロ、僕達モテない男に死んで詫びる
んだ！」

『『その通りだ！ 異端者には死の制裁を！』』』

「……………死ね……………！」

うえっ！？ FFF団まで！？

奴等がギミック満載の野球道具を構えて殺気立っている。爆薬を
仕込んだボールが無いのがせめてもの救いだっただが、それでもバッ
ト型伸縮自在三節棍、仕込杖になっているバットなどが向こうの手
に渡っているから非常に厄介だ。

悪ふざけであんな殺傷力の高い武器を作るんじゃないかった！

このままじゃオレの命が危ない！ なんとか弁解をしなくては………！

「お前等落ち着け！ オレが優子以外になびく訳ないだろ！」

「全員構え！」

明久の合図で全員武器を構える。

聞く気なしか！ 仕方ない！ あまり気は進まないが、奥の手！

「明久……！」

「ヒロ、命乞いは聞かないよ。僕達……友達だろ？」

「この間、お前がきれいなお姉さんと一緒に買い物をしているところを目撃したんだが？」

『『『なにいつ！？』『』『』』

「ちよつ！ みんなどうしてそんな危険なものを僕に向けてるのさ！？」

「アキ？ 今の話はどういうことかしら？」

「ボツキリ聞かせて貰いますからね？」

「『ボツキリ』って何！？ 普通そこは『ジツクリ』とか『ゆつくり』だよね！？ あれ！？ このやり取り前にやったことがある様な気が！？ と、とにかく皆落ち着いて！ そんなのヒロお得意の狂言だよ！」

「ヒロ、今の話は真実かの？」

「誓って嘘はついてない。しかも明久はそのお姉さんと『今日は何が食べたい？』『アキくんにお任せします』ってな感じのやりとりをしていたぞ」

「え？ あ、あの烏丸君それって」

『『『殺せえ つ……！』『』『』』

嘘は言っていない。ただ、その綺麗なお姉さんが『玲さん』だって事を言っていないだけだ。

「いやあああつ！ 助けてヒロ！ どうかご慈悲をっ！」

「明久、命乞いは聞かないよ。オレ達……友達だろ？ 全員構え！」

「ちよつと待つて！ お願い殺さないで」 撃て「 いやああ

ああああげふうっ……！！」

明久も懲りない奴だ。オレのモットーは『恩も恨みも忘れない』！

そして仕返しは常に3倍返しを心がけている。オレに触れると火傷するぜ、ベイビー

「ふう、悪は滅びた」

「……お主の方が悪役の様じゃぞ？」

「何を言うか！ こんな品行方正で清廉潔白な好青年を捕まえておいて！」

「「腹の中がイカ墨より黒いじゃないか！（ポーズ）」」

「あ、まだいたんですか？」

「こ、この野郎……！」

「完全に俺達を忘れていたな。放置プレイというのもオツなものだ」

「まあ、いい。要件を言うぞ！」

「「烏丸大貴！ 正々堂々野球勝負をしろ！（ポーズ）」」

「……なぜ？」

「「決まっている！ 俺達がお前を倒して人気者になる為だ！（

ポーズ）」」

「嫌です」

「貴様！ それでも男か！？」

「何となく悪だくみの予感がするんですよ！」

挑発してくる三上に対してオレは断固拒否の姿勢をとった。

「くう……！ そんな事と云っているのか！？」

「？ 何がです？」

「そんなに冷たい事ばかり言っていると」

「言っているの？」

「馬場が大喜びするぞ！」

「ああ……！ もっと冷たい言葉を浴びせてくれ！ 罵倒してくれ

！ そして出来るなら蔑んでくれ！」

うおお……！ 真性のドMだ、こいつ……！ 若干……いや、かなり引いている。

「とにかく嫌です！ 絶対に！」

「逃げるのか！？」

「……ええ、逃げます」

「そうか。……なら仕方ない。お前が逃げるといつのなら俺は今すぐ『木下優子』を口説きに行く！」

「はあ！？」

「お前が勝負を受けないというのなら！ この鹿島こと『撃墜王力ツシー』が木下優子を口説いちゃうぞー」

「なにいつ！？ テメエ……！ 優子に手を出したら……！ 殺す……！」

「……さあ、正々堂々の男の勝負を受ける度胸！ デデンデン！ 貴様にはあるかっ！？」「」

「デデンデン！ やらいでかっ！」

「お前、ヒロ！ 何を勝手に」

「……グラウンドで待つ！ 首を洗って待っている！（ポーズ）」「」

「その言葉そのまま返してやる！」

そう言つて三バカは去つて行つた。

覚悟しとけ、三バカ！ 優子を口説くなんて事は絶対にさせないからな……！

「ワシにはもうついていけないのじゃ……」

「ウチら完全に蚊帳の外よね？」

「あ、あははは……」

第90話 真っ向勝負の目的

「このバカ野郎！」

「アダツ！」

三バカが帰ってすぐに雄二に怒られ、拳骨を落とされた。

「僕達が正々堂々とやり合って3・Aに勝てるの!？」

「お、落ちつけ2人とも」

「これが落ち着いていられるかっ!」「」

殴られた頭を涙目になって摩りながら明久と雄二を宥めるが、あまり効果はない。

「お前らな、オレが優子の事を引き合いに出されたから頭に血が上って挑発に乗ったと思っただけか？」

「え？ 違うの？」

「まあ、全くないって言ったらウソになるけど、本当の目的は別の所にある」

「本当の理由？」

「ルールを守って正面から勝つことは難しい事は理解している。雄二の策が善悪考えなければ効率的ってのも理解しているつもりだ」
「……………」

雄二は眼を閉じ、腕を組んでただ黙って聞いている。

「けどな、そうやって実力関係なしに修めた勝利だと次に繋がるも

のが何も無いんだ」

「次に繋がるもの、じゃと？」

「そうだ。3 - Aに勝ったとして次に上がってくるのは間違いなく教師チームだ。教師に下手な小細工は通用しない。相手をするにはそれなりに実力を備えてないと苦しい」

「まあ、そうでしょうね……」

「だからこそ、だ。教師より格下の3 - A相手に勝てないようじゃ、教師相手に何をしたところで通用しない」

「……………」

「2つ目の理由は試召戦争だ」

「え？ どうして試召戦争が関係してくるのですか？」

「オレ達は球技大会が終わってしばらくしたらAクラスに試召戦争ケンカ吹っ掛けるんだろ？」

「ああ」

「オレはあんまり春の試召戦争には参加していなかったけど、Fクラスが勝ちパターンって相手が『所詮はFクラス』と侮っている内に奇襲をかけて討ち取るってパターンがほとんどだ」

「言われてみればそうじゃの」

「勿論それも含めて実力なんだけど、オレ達は『最初から全力で潰しに来る相手』との戦闘経験がほとんどない。ここで格上相手に正面からぶつかっておく事も必要だ」

「けど」

「自信は経験に裏打ちされて確信に変わる。だからこそ自分たちに何が出来て、何が出来ないのかわらななきゃいけない。オレ達が真っ向やりあって勝つ事は2 - Aそして次の教師との勝負に勝つためには必要な事だと思うんだ」

そこまで言っただけで雄二はゆっくり眼を開けて、口を開いた。

「いいだろう。お前の提案、呑んでやる。そのかわり次の試合はお

前がキャッチャーをやれ。打撃の指示から配球の組み立てまで全部俺一人でやるのは骨だ。それと、もし相手がラフプレーをしてきた場合は」

「速攻で雄二の作戦に変更な」

「……分かってはいるならいい。よし！ この試合真正面からやって勝つぞ！」

「「「おお つー！」「」」

さて、これで勝たなきゃ雄二に申し訳ない。オレの出来る事、やれる事は全部やっておこう。

「ムツツリーニ。至急3 - Aの前の試合のデータと全員分の性格と点数をまとめたリストを準備してくれ」

「……既に手配済み」

「お、サンキュー」

ムツツリーニからデータを受け取る。ホントにわかりやすくまとめであるな。

受け取ったデータを10分ですべて暗記して、その後明久とピッチング練習をして試合に備えた。アイコンタクトが出来るお陰でサインの確認をする必要が無いので練習に時間を割く事が出来る。ホントに便利なスキルだな、これ。さっきの空いた時間にノックをしてもらったので覚束なかったキャッチングも少しはマシになった。

準備は万端！ 絶対に勝つてやる！

.....

「それでは3 - A対2 - Fの試合を始めます。尚、この試合では召喚獣の痛みや疲れがフィードバックするように設定されていますの

で、その辺りを留意したプレーを行うように』

「ちよつと待つてください！ 何でそんな面倒な事を！？」

常夏コンビの片割れのモヒカン（名前忘れた）が慌てて審判に抗議する。

さては何かやるつもりだったな？

『君たちに小競り合いをさせないようにするための措置です。学園長直々に言い渡されていますから変更は認められません』

意地の悪い人間は意地の悪い人間の考えてることを読めるんだろうか？ なんにしてもいい読みしていやがる。

『何か問題がありますか？』

「いえ。こちらはありません」

「うん、ないよな。フェアプレーを心掛けてたら痛みなんて来るはずないもんな」

「ぐ……っ！」

雄二とオレの言葉にモヒカンは言葉を無くす。

「こつちも問題ないです！（ポーズ）」

「むしる痛い方がいい！（ポーズ）」

「というわけで、正々堂々勝負！（ポーズ）」

「テメツ！ 三馬鹿！」

「……三羽烏だ！（ポーズ）」

『お互いに問題ないですね。それでは礼！』

「……おねがいします」「」

こうして3 - A対2 - Fの試合が幕を開けた。

.....

「好都合だな」

「ああ。好都合だ」

「何が好都合なの？ 召喚獣のフィードバックなんて本当にいいことないよ？」

「いや。戦略的に相手を嵌めるのにはかなり好都合だ」

「どういう事？」

明久は雄二の言葉の意図が読めないようでごつちに解説を求めてきた。

「ピッチャーに球数投げさせてへばらせようってごつた」

「ああ。なるほど」

「その通りだ。いいかお前ら？ なるべく粘って相手に一球でも多く投げさせる。この点数差だ。三振するのは仕方ねえ。しかしピッチャーを楽にさせる事はするな。三振一つでもただではやるな。勝負は後半。相手のピッチャーがばてた時に一気に打ち崩す。いいな！？」

『『『おうつ！』『』』

「しかし相手が都合よく動いてくれるかのう？」

「たぶん大丈夫だ。相手は召喚獣のフィードバックがどんなものか“知って”はいても本当の意味で“理解”はしていないからな。ペー配分もよく分からないだろ。何も考えてない奴なら初っ端から全力投球してくる事だつてあり得る。三振が沢山取れるなら余計にな」

「けど、フィードバックを理解していないっていうのなら私たちも

同じなんじゃ……?」

「ああ。オレ達は、な。けどこつちには明久がいる」

「え? 僕?」

「ああ。お前ならフィードバックがどんなものか文字通り身を持って理解しているからな。上手い具合にペース配分もできるだろ?」

「う、うん。まあね」

「しかも明久は召喚獣の扱いに長けてる分、コントロールもいい。捕手としてリードするのが楽しみでしかたないよ」

「そ、そうかな? よーし! そういう事なら頑張るぞ!」

投手である明久にやる気を出して貰う為、3割くらいは持ちあげてはいるが、実際明久のコントロールには眼を見張るものがある。さつきピッチング練習をしている時に4分割のストライクゾーンに対応した要求にも難なく応えてきた。これだけの投手は恐らくそうはいないだろう。

あとはオレのリード次第……! やってやるさ!

- | | | |
|----|--------|----------------------------|
| 1番 | サード | 島田美波 |
| 2番 | シヨート | 須川亮 |
| 3番 | ピッチャー | 吉井明久 |
| 4番 | センター | 坂本雄二 |
| 5番 | ライト | 近藤吉宗 |
| 6番 | セカンド | 土屋康太
<small>ムツリ</small> |
| 7番 | レフト | 福村幸平 |
| 8番 | レフト | 横溝浩二 |
| 9番 | キャッチャー | 烏丸大貴 |

ベンチ 木下秀吉・姫路瑞希

『 ットラライク！ バッターアウト！ 』

一番の島田が三振して肩を落としてベンチに戻ってきた。

「ごめん。あれは打てないわ……」

「気にするな。点数差が点数差だ」

「それに9球も投げさせたんだ。三振でも十分価値はある。無駄死になんかじゃねえ。っていうか絶対無駄にしない」

「あ、ありがと……」

バッテリーは常夏コンビ。力押しが大好きなあの二人ならペース配分お構いなしに喜んで三振を狙ってくるだろう。ますます都合だ。その後須川が7球、明久が16球粘ったあと、三振に倒れた。

1回だけで31球……。全員三振、か……。

オレの考えとしては三振は取るべきところでビシッと取るだけではないと思う。打たせれば一球で終わる相手でも三振なら3球以上投げなければいけない。投手にとって三振以上に気持ちいいアウトの取り方はない事は理解している。だが、それは麻薬だ。

試合が後半になるにつれてじわじわと効いてくる。

さて、まだまだ試合はこれからだぜ……？

1回裏。オレ達の守り。明久の投球練習を見て3年のベンチではホームラン競争をしようとしている奴がいる。そっちが飛ばす気ならこっちも手玉にとり易い。

マウンドまで行き、リードなどの明久と最終確認をする。

「本当に僕の球で大丈夫なの？ やっぱり点数の高い雄二が投げた方がいいんじゃない？」

引き彎った笑みを浮かべながら明久は言うが、ゆっくり首を振りそ

の提案を却下する。

「いや。今のメンバーは血気盛んなのが多いからな。雄二よりお前の方が相性がいいんだよ」

「でも……」

相当肩に力が入ってるな。まあ、あの点数差なら不安になるのも無理はないが……。

「大丈夫だ。お前なら出来る。それにな、雄二の速球じゃオレがお陀仏だ。まだそんなに速い球が捕れるほど上達した訳じゃないからな」

肩を竦めて冗談っぽく言うと明久は軽く笑った。どうやら今ので肩の力が抜けてリラックスできたようだ。

「まずは先頭打者切ろうぜ？」

「了解」

拳を胸に当てると明久は軽く笑いながら頷いた。そしてキャッチャーボックスに戻り、召喚獣を座らせる。しかしまあ、本当にツイている。2 - A戦に出ていた『高城』とかいうのが出てこなくてホントに良かった。あんな化け物クラスが出てきたら怖くてストライクゾーンにミットを構えさせる事なんて出来ないからな。

『プレイボール！』

「お前らが吉井と烏丸か……！ 肝試しの時は舐めた真似してくれたらしいじゃねえか……！ 三年に盾突いた事、後悔させてやる……」

……！」

予想していたけど随分恨まれてるなあ……。あゝ、ヤダヤダ。
オレと明久に敵意を向けながら、トップバッターはボックスに入り、
オープンスタンスに構えた。

「サモン試獣召喚！」

化学

Fクラス 吉井明久 57点

Aクラス 堀田雅俊 217点

点数差は約4倍か……。まずは様子見だな。

《アウトコース・低め・ボール一球分外せ》

明久はコクリと頷き投球動作に入る。バッターは明久の動作に合わせてステイバックにはいった。そしてタイミングを合わせて思いつき振りぬいた。

「ストライク！」

打つ気が前に出過ぎて、ボール球を振ってくれた。オープンスタンスじゃあのコースにバットは届かないから強振しても無駄だ。この人、頭に血が上って冷静さを欠いているな。
ますます好都合。

《もう一球外角・低め・今度はストライク》

引っかけて貰おう。狙い通りいかなくてもファールだ。

キンツ！

『ファールボール！』

詰まった打球が一塁側のベンチの方に飛ぶ。バッターはなぜ打てないのか分からないという表情で首を傾げている。考える暇なんてやるものか。この人には三振してもらおう。トップバッターの切り方は重要だからな。

《ラストだ。遊び球は無し・インコースに一番いい球》

そして明久の召喚獣の投げた球をバッターは三振すまいとスイングするが、2球続けて外角を見せられた状態で対応できるはずもなく、バットが空を切った。

『ストライク！ バッターアウト！』

「クツ……！」

バッターは悔しげに顔を歪めてベンチに戻って行った。1番があんな大振りするようじゃ三振を取るの簡単だ。今ので明久も自分の投球に自信を持たようた。

「情けねえな！ 見てろ、俺が見本を見せてやる！ あんなヘナチ

ヨコ球場外に飛ばしてやる！ 試獣^{サモン}召喚！」

2番バッターのモヒカン（名前忘れた）が意気揚々とバッターボックスに入ってくる。

明久や後ろの連中がムツと顔を歪めるが、オレはそんなにムカついてない。

奴等が負けたときの為の言い訳くらい残しておいてやらないとな。

え？ 怒ってないよ？ ホントだよ？

「よろしくお願いします、先輩。今回はラフプレーなしでいきましようね」

何をやってくるか分からないから一応座る前に釘を刺しておく。するとモヒカンは審判に聞こえないくらい小さく舌打ちして構えをとりてこつちを向いた。

「当たり前だろ？ 正々堂々やってテメエらを負かせてやる」

「ハハッ、胸をお借りします」

微妙に眼が泳いでいる。その上額に脂汗が浮いているさっきの舌打ちといい、絶対に何かするつもりだったな。

しかし審判の前でこう言うっておけばこつちの審判の心象もよくなるし、ラフプレーもやりにくいだろう。それでもやってくるようならこつちもそれなりの対応を考えているが……。

《インハイ・少し外す》

明久の投げたボール球を血気に逸ったモヒカンはバットの根っこに当てて内野フライに倒れた。モヒカンは地面を蹴った後、ベンチに戻って行った。

ふふふ、思うように打てず苛ついてるな。あんた達は遅い球だと思つて侮っているみたいだけど、ところがギツチョン。回転の少ない球は飛ばないもんだ。遅い球は伸びが無いから芯で捉えやすい。つまり遅い球は打ちやすいというのが一般論だが、明久の四分割のストライクゾーンを最大限活用して球を散らせればボールを芯でとらえる事は困難だ。

それを焦って打とうとすればするほど泥沼に嵌まる。ここまではプ

ラン通り。

「やっと俺の出番だぜ！ 試獣^{サモン}召喚！」

ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべながら坊主頭の変態はバッターは召喚獣を喚び出し構える。

《明久、こいつはピッチャーだ。三振させるより打たせて走ってもらおう》

《了解。打たせるんだね》

キンッ！

明久の球を思いっきりひっぱたくが、力が入り過ぎていたためバットの芯から外れ、ボテボテのゴロがショートに転がる。それを須川は難なく捌き、ファーストに送球して3アウトチェンジ。

「ナイスピッチ」

「うん。ありがとう」

互いの拳をコツンと合わせベンチに戻る。

「調子いいじゃねえか、明久」

ベンチに戻ってきた雄二が珍しく明久を手放しで褒めた。実際アクラスを三者凡退で抑えるというのは大したものだ。

「へへっ！ まあね。ヒロのリードのお陰だよ」

「ヒロ、お前も性格の悪いリードだったぞ」

「ははっ、雄二の攻撃指示も相当えげつないぜ？」

三人顔を見合せてニヤ〜つと悪い顔で笑う。

「お主ら傍から見たら悪役そのものじゃぞ？」

「……………悪い顔をしている」

「子供が見たら間違いないく泣くわね……………」

「そんなに悪い顔してるか？」

「……………してる」

そんな三人揃って同じこと言わなくても…………。

「ん？ どうしたの姫路さん？」

「あ、はい…………。えっと…………明久くん、手をこうやってしてもらえますか？」

そういつて姫路は片手を上げる。明久も姫路の意図が分からず首を傾げながらも片手を上げる。

「こ、こつ？」

「はいっ」

ペチンという音が響いた。明久と姫路がハイタッチした音だ。

「明久くん、すごく格好良かったです！」

「え？ そ、そうかな？」

「はいっ！ 私も負けないように応援頑張ります！」

「うん！一緒に頑張ろうね、姫路さん！」

「はいっ！」

あゝ、こいつらホントに見てて和むわ…………。

あれ？ いつもならこんな事してたらFFF団が湧いて出るのに出てこない？

いったいどうしたんだ？

『行けーっ！ 坂本　　っ！　チャンスでオレに回せーっ！』

『バッチ打てよ　　っ！』

振り向くと雄二の応援に夢中のFクラスのメンツの姿が……。やる気が当社比1.5倍増しに？

「秀吉、こいつら何でいきなりこんなにやる気出してるんだ？」

「むづ……。恐らくギャラリー席に女子が増えてきたからであろう？」

「あ、ホントだ。いつの間に……。っっていうか何でこんな試合見に来てるんだろ？」

「さあのう……」

まあ、何にしてもこいつらのやる気が出るのならどうでもいいか。無駄な事を考えるのを辞め、雄二の応援の為に声を張り上げた。

第91話 三馬鹿のターン！（前書き）

29日に投稿すると言っていたのに遅れてしまい申し訳ありません

（汗）

それではございぞー！

第91話 三馬鹿のターン！

NO SIDE

2 - Fと3 - Aの試合は現在2回の裏。3 - Aの圧勝だろうという多くの生徒や教師の予想を裏切り、最低最悪クラスと名高い2 - Fが点数差約4倍の相手に互角以上に渡り合っていた。

試合を観戦していたほとんどの観客は何故FクラスがAクラス相手に互角に戦えるのか理解できず驚いていたが、観客席にいた烏丸修兵は気付いている。Fクラスは点数でAクラスに圧倒されていても、戦略でAクラスを圧倒しているのだ。

その要となっているのは3人。司令塔であるFのクラス代表、過去に神童と名をはせた攻撃の司令塔『坂本雄二』。抜きん出た制球力を有する観察処分者『吉井明久』。そして明久の制球力を十二分に生かし、相手を変幻自在のリードで相手を翻弄するFクラスの？2クラスと呼ばれる少年『烏丸大貴』。この三人が流れを作り出している。

修兵は何故自分がこんな試合を見に来たのか自分でも分かっていなかった。しかし何故か無性に彼ら2 - Fの事が いや、自分の腹違いの弟である『烏丸大貴』の事が気になった。

修兵は嬉しそうに笑った。その顔はまるで新しい玩具を与えられた子供の様だ。修兵は全てにおいて非凡な才を持っている。それ故に彼は常に孤独だ。自らの大きすぎる才能故に彼と対等に渡り合える者も存在せず、周りが自らに求める役割を演じるだけ……。

そんな中で自分とも互角に渡り合えるかも知れない者にやっと巡り合えた。彼の中の空虚が歓喜で満たされていく。

そう、修兵は『自分が本気を出す事の出来る敵』をずっと渴望して

いた。そして彼 『烏丸修兵』はこの時初めて自分が『烏丸大貴』
という自分と対等に渡り合える可能性に強く惹かれている事を自覚
した。

.....

キン！

『ファールボール！』

雄二の13球目のファールがファースト方面に飛ぶ。カウントは2
- 2・マウンド上の夏川もFクラスの狙いに気がついたようだ。し
かし一球たりとも手を抜いた球を投げる事は出来ない。少しでも制
球を乱したり、スピードを落としたりしたら雄二はその球を見逃さ
ず、場外に運ばれてしまうだろう。

キン！

『ファールボール！』

「チツ……！！」

坊主は苛つきながら、キャッチャーからの返球を受け取る。そして
セツトポジションをとり投げた。

『ボール！』

『ナイセン坂本！』

『いいぞ坂本！ よく見た！』

『流石オレ達の代表！』

ベンチから歓声が上がリ、坊主は顔を不愉快そうに顰め、更に苛立つ。
そして

『ボール！ フォアボール！』

『いいぞー！ 頑張れFクラス！』

『へいへいピッチしっかりしろよー！』

球数はトータル47球。ペース配分を考えて投げるなら話は別だが、最初からが全力で投げ続ければすぐに限界が来てしまうのは当然だ。サードを守っていた三上がタイムを取りピッチャーマウンドに駆け寄る。

「おい、大丈夫か？」

「何がだよ……！？」

「奴等お前を疲れさせてから打ち崩そうとしてるぞ？」

「だったらどうした！ そんなもん力づくでどうにでもなる！ 相手はしょせんクズ」

「そうやって相手を舐めてるから足元すくわれるんだろっが！ 奴等は強い！ それをまず認めないと俺達は負け」

「うるせえっ！ くだらねえ事でいちいち来るんじゃないやねえよ！」

激高した夏川は三上の肩を突き飛ばした。三上は不満そうに眉を顰めながらも渋々とサードに戻っていった。

「あんなクズ共にこの俺が負けるはずがねえ……！ どんな手を使っても叩き潰してやる……！」

.....

大貫 SIDE

雄二が盗塁を成功させたあと、5番の近藤が凡退し、1アウト・ランナー2塁、バッターはムツツリー二。

ここで最低でも1点、出来れば2点は欲しい。それだけあれば今後の試合運びが楽になる。

三塁上にいる雄二がムツツリー二に向かってアイコンタクトを送る。

《あの野郎はもう限界に近い。このあたりで精神的に追い討ちをかける為に粘って四球^{フォアボール}を狙え》

《.....了解》

『ボール！ フォア！』

「.....（コクリ）」

審判のコールが告げられ、ムツツリー二は一塁へと進む。

続く福村もムツツリー二にならってフォアボールで出塁し、1アウト・満塁。

これは大量得点のチャンスだ！ そしてこの場面での点の取り方は重要だ.....。

ここで下手打つと最悪ホームゲッツーなんて事もあり得る。そうなればこちらに引き寄せられかけていた流れは三年側に一気に傾いてしまう。

ここは手堅くスクイズか.....？ なんて事を考えていると雄二から信じられない指示が来た。

《フォアボールで押し出しを狙え》

《さ、坂本！？ スクイズじゃないのか！？》

雄二の指示が腑に落ちず、バッターの横溝が自分の疑問をぶつける。オレも横溝と同感だ。

前の2人が粘ってフォアボールを貰えたからとはいえ、実際かなり危なかったのだ。

出来るかどうか分からない事をするより、向こうに1アウト払って成功率の高いスクイズをした方がいいというのが、オレの考えでもあり、恐らく横溝の考えでもあるだろう。

《これにはピッチャー、および相手チームのやる気を奪うって目的がある。押し出しはピッチャーが一番嫌がる点の取られ方だからな。その上先取点だ。精神的に大ダメージを与えられるぜ？》

なんてえげつない事考えるんだ……。『相手のやる気を奪う』って発想がオレと同じ高校生の考える事とは思えない……。

まあ、けどスクイズ失敗の可能性だって考えられるし、アウトカウントをやらずに点数を貰えるっていうのはなかなかお徳だ。そして雄二の言うとおり『相手のやる気を奪う』っていうのは有効な手段だ。それにもし失敗したとしても相手の球数を更に増やせるだろうしどう転んでも損はない。もしそこまで考えているんだとしたら

ブルブル 絶対に敵に回したくないタイプだな……。

そして雄二の狙い通り横溝は粘りに粘って根性で四球フォアボールをもぎ取った。観客席からため息が漏れる。

まあ、見ていてつまらない試合ではあるだろうな。けど、プロじゃあるまいし、観客を楽しませてやる義理はない。相手が格上である以上、こっちは形振り構っていられないんだ。

どんだけブーイングがこようが、『相手の嫌がる事を徹底的に』これは勝負に勝つための鉄則だ。雄二はその辺りを十分に理解してい

るから強い。

ホームに帰ってきた雄二に駆け寄りコソツと耳打ちをする。

「雄二、オレもフォアボールを狙うか？」

「いや、お前はヒツティングだ。ここで一気に点を入れれば相手は戦意を喪失する。お前の為に整えた舞台だ。トドメを刺して来い」

「了解、大将」

マウンド上の変態は相当バテている。雄二の言う通り、決めるならここしかない！

そつと眼を閉じ、集中の世界に入る……。

余計な雑音をすべてシャットアウトし、召喚獣にバットを構えさせた。

『『『鳥丸く〜ん！ 頑張つてえっ！』』』

何か聞こえたような気がするが、無想状態のオレはあのピッチャーの球を打つことしか考えられない……。

そしてピッチャーは何やら随分赤い顔（青筋が立っているし怒っている？）をして、セットポジションをとり、一杯投げてきた。

力が入り過ぎてるぜ、変態野郎！ ど真ん中の棒球だ！

引きつけて

引きつけて引きつけて

引きつけて引きつけて引きつけて ボールの中心を芯で捉えた。

キーンッ！ という小気味の良い音が響き、鋭いライナー性の打球が右中間に飛ぶ。

よっし！ 二塁打コース！ この試合もら っ！？

打球の方を見て驚きのあまり思わず眼を剥いた。

センターを守っていた三馬鹿（自称三羽鳥）の一人ド の馬場が打

球に飛びつき捕球したのだ。そしてランナーが飛び出していた二塁に送球しセカンドランナーはフォースアウトでゲッツーを取られてしまったのだ。

まさかあのコースの打球を捕るなんて……！　なんて守備範囲の広さだ……！

「すまない、雄二。あれだけお膳立てしてもらっていたのに……！」
「あれは仕方ねえ。むしろあの打球を捕った方を褒めるべきだ」
「見ていて気持ちいいくらい鮮やかでしたよね。ただ」

『ああつ！　もっと際どい球を！　もっと、もっと俺をイチメ抜いてくれ！』

「相変わらず嫌な趣味してるな……」

「見ていて気持ち悪いわよね……」

「あ、あんなのにアウトを取られたオレって一体……」

「ヒロ……」

「ん？　どうしたんだ明久？　なんで試合中に異端審問会の準備なんかしてるんだ？」

『『死ねええええつ！』』』

「どわあつ！？　な、何しやがる！？」

『黙れ！　この人間の屑！』

『リア充め！　爆発しろ！』

『いや、爆発だけじゃ足りない！　お前の【検閲削除】なんか爆発してしまえ！』

「ちょ……！　なんでオレの【検閲削除】を爆発させないといけな
いんだよ！？」

「おそらく先ほどの女子の先輩による黄色い声援が原因じゃの」

「え？　嘘？　そんなのあったのか！？」

「……………惚けようとしてもそうはいかない……………！」

「いやいやいや！ 本当に聞こえてなかったから！」

『『『うるせえ！ 黙って【検閲削除】を切り落とされる！』』』

「冗談は良子さん！ 絶対に嫌だね！」

『どうせ大したものでもないんだろ！？』

「んだとテメエら！？ 上等だ！ 粗末なものかどうか、こいで見てみるかゴラアツ！？」

「お、落ちついてください烏丸君！」

「そうじゃぞお主ら！ あまり大声で【検閲削除】、【検閲削除】と言つではない！」

「秀吉、お前も大声で言ってるぞ！？」

「あんた達も落ち着きなさいよ！ 女子の前でそんなデリカシーの無い事ばかり言うからモテないのよ！」

『『『はうっ！！』』』

島田の必殺の一撃に一同心を抉られる……。

そしてFクラスのベンチから黒い何かが立ち込めた……。

『守備……いこうか……』

『そうだな……』

『ああ……』

ザックリと一刀両断されて一同、心の傷は相当深いようだ。そんな奴等の様子を見かねたように姫路が慌てて口を開いた。

「あ、あの！ 皆さん！ 私、Fクラスの皆さんが一生懸命野球をやっているところは凄く格好良いと思います！」

『『『シャ　　ッ！　　しまつていくぞ　　っ！』』』

な、なんて単純な奴等……！

.....

NO SIDE

「クソツ！ あのクズ共舐めやがって……！」

ベンチに八当たりしながら夏川が忌々しそうに呟く。

「落ち着け夏川。荒れたらあのクズ共の思う壺だぞ」

「けどよ！ ……なあ、召喚獣の疲れだけじゃなくて、痛みもフィードバックするって言うってたよな……？ ならよ……やっちなおうぜ？」

「……そうだな……。あのクズ共には山ほど借りがあるからな……」

「ま、待てよ2人とも……！ いくらなんでもそれは……」

「それに三馬鹿が2-Fと紳士協定を結んでいたじゃないか！」

「ヘッ！ 三馬鹿の言うことなんざ知った事か！」

不穏な会話を聞いたチームメイトが慌てて常夏コンビを宥めようとするが、格下にこれだけコケにされて冷静さを失っている夏川を止める事は出来なかった。そして夏川の相方である常村も積極的に止めようとする気はないようだ。

『けどよ……！』

「……ケツ！ 腰抜け共が！ もういい！ 俺達だけでやるぞ！」

夏川と常村はラフプレーに乗り気でないチームメイトを見限った。

「ああ。まず狙うのは」

「「烏丸だ……！」」

2人の殺意を孕んだ視線はFクラスのキャッチャー『烏丸大貴』に向いていた。

.....

7番はさっきのド もとい、馬場か……。さっきの面目躍如だ！ 絶対に打たせん！

「よろしく！ なんなら思いっきりぶつけてくれても構わないぜ（ポーズ）」

「絶対にお断りです」
「残念だ！（ポーズ）サモン試獣召喚！」

.....

日本史

Aクラス	馬場梅雄	181点
Fクラス	吉井明久	121点

.....

よし、そんなに点数に差はない。どうやらこの人は日本史があまり得意ではないようだ。
とはいっても結構点数は高いから油断は禁物だな……。

《内角・高め・ストライク》

キン！

馬場はインコースが得意だったようで、思いつき振りぬくがバットを振るタイミングが三塁側のフェンスに直撃した。

《次は少し軌道修正して内角高め・少し外す・さつきより早めに》

明久は頷きwindアップで投げた。

よし！ 注文通りのいい球！

馬場はさつきと同じコースだと思ったようで同じように思いつき振りきつたがタイミングをさつきの球を基準として合わせていたため少し振り遅れ、フライがライトへ飛んだ。ライトの近藤はそれを危なげなくキャッチし、1アウト。

『デッドボール……』

さつき、次々！

「はっはっは！ 行くぜ！ (ポーズ) 試獣^{サモン}召喚！」

.....

日本史

Aクラス 鹿島竹彦 401点

Fクラス 吉井明久 121点

.....

.....

《敬遠するぞ、明久》

《了解》

流石にこの点数差では当たった時が怖い。万が一にも届かないように召喚獣を立ち上げらせミットを構える。

『ボール！』

『テメエら！ 卑怯だぞ！』

『ちゃんと勝負しやがれ！』

『キャッチボールなら余所でやれ！』

ふん。なんと言われようとオレはチームがより勝ちやすい方法を選ぶ。

野次でも何でも来いつてんだ。

『ボール！』

「ふっ！ 烏丸……こんなもんでこの俺を封じたつもりか？」

「？ どういう意味ですか？」

「こういう意味さ！」

『ストライク！』

鹿島は敬遠球を強引に打とうとバットを振るが、バットが届く所にボールを投げるなんてミスをオレがする筈ない。

「無駄ですよ。どんだけ振ってもこの距離じゃ届きませんから」

「ふん。そんな物はやってみないと 分からん！」

『ストライーク・ツー!』

「別に意地張って三振する必要はないでしょう。大人しく敬遠された方がいいと思いますよ?」

「ふん! まだだ! まだ終わらんよ!」

「そうですか」

とうとう自棄になったか……。まあ、アウトをくれるって言うんだっいたら有難くもらっておくか。

ミットを構え、明久の最後の一球を投げた。

あれ? なんだか鹿島の召喚獣の腕がさっきより長く

「行くぞ! 『伸びろ』!」

「なっ!?!」

思わず絶句した。鹿島が『伸びろ』と叫んだ瞬間召喚獣の腕が

「 伸びたあっ!?!」

「ドラ も~~~~んっ!」

キンッ!

大きく外したはずの敬遠球は鹿島のバットに当たった。芯から外れたのは幸いだったが打球はセンターのフェンスに直撃、跳ね返ってきた球を雄二が捕球しセカンドへ投げるが、鹿島はすでに二塁に滑り込んでいた。この試合で初めてまともにヒットを打たれてしまいオレは苦虫を噛み潰したような表情になる。

「落ち着いてヒロ! まだ一回打たれただけだよ!」

明久の言葉にハツとした。

そうだよ。明久はまだ崩れてないのにキャッチャーのオレが浮足立ってどうするんだ！　しっかりしやがれ！　切り替えるんだ……！　次を押さえる……！

「内野、一点やってもいいからバッターランナー優先で送球は一塁に！　外野はバツクホーム！　集中切らすなよ！　次切るぞ！」

『『『おお　　っ！！！！』』』』

こいつらもまだまだ集中が切れてない。まだまだやれる！

「（ポーズ）試獣^{サモン}召喚！」

.....

Aクラス　三上松之輔　286点

Fクラス　吉井明久　121点

.....

ふむ。かなりの点数だ。

こいつを敬遠してあの一番バッターで勝負してもいいけど、1アウト・ランナー1、2塁で1番に回すのは避けたい。もしそうなってしまうたら下手打つと大量失点なんて事になりかねない。最悪この人にホームランを打たれたとしても2-1。まだ逆転の目は十分にある。

召喚獣をキャッチャーボックスに座らせてゆつくりとミットを構える。

《ここが正念場だ。踏ん張れよ》と目線で送ると明久は神妙な顔で頷いた。

《外角・なるべく遅い球・大きく外す》

『ボール!』

一球目は見てきたな……。やっぱりこいつ要注意だ……!

《次は外角・低め・さっきと同じくらいのスピードできわどい球》

《きわどい球だね?》

《ああ、きわどい球だ》

ストライクよりもきわどい球である事が重要だというオレの意図を理解した上で首を縦に振り、要求どおりの球を投げてきた。

『ストライク!』

よし! これが入ったのは大きいぞ! さっきと今の2球は見せ球で、打ったとしてもファールが引っかけただけの当たり損ないしか飛ばないが見逃せばボールだ。だからこそ今のきわどい球に『ストライク』の判定が下ったのは大きい。

《外角・低め・速い球・ストライク》

『ストライク!』

三上は明久の渾身のストレートを空振った。

前の2球遅い球をじっくりと見たら、急に速い球には対応できないだろう。

さあ、次で決めるぜ？

《内角・高め・速い球》

明久がゆっくりと振りかぶり、投げる。

注文通りの球はミットに収まることなく、三上によってジャストミートされていた。

嘘だろ！？ 散々外角のスローボールを見せられた後のあの球に対応しやがった！？

打球は空気を切り裂くような鋭い音をさせてショートの真正面に飛び、たまたま須川のグローブがあった場所に収まった。捕った須川自身が一番びっくりしていた。

そして腕輪の能力で既に3塁にタッチし、ホームへと腕を伸ばしていた鹿島はタッチアウト。3アウトチェンジ。

「た、助かった……！」

「三馬鹿がここまでやるとは思わなかったな……」

「……………注意が必要」

「あいつらに次の打順が回る前に試合を決めよう。次回ってきたら完全に抑える自信が無い」

「なんだ？ 弱気じゃないか？」

「実際あいつ等はズバ抜けてるんだよ。なんで下位打順に置いているのか不思議なくらいだ」

「まあ、確かに常夏コンビより厄介なのはさっきのでよくわかった」

背中につすら寒いものを感じながらベンチに戻る。

4回表はから1番からだから、絶対に三者凡退に抑えなきゃいけない訳か……。

それが無理ならせめてあと2、3点は欲しいところだな……。

そして試合は運命の後半戦へ

第92話 再登場！ マスク・ド・レイヴン丸！

大貫SIDE

4回の表。使用科目は数学。数学が得意な島田がヒットで出塁。二番の須川がバントを決めて、1アウトランナー2塁。おいしいところで明久に回ってきた。

点数差には差があるものの、ピッチャーの坊主はへろへろで球威は5割減つてところか。

加えて思うようなプレイが出来なくて苛つき、焦りが出てきている所為かコースが荒くなってきている。そこは雄二の計算通り。あの程度の球威だったらクラス1のミート率を誇る明久が打つだろう。

そしてもし打てなくても後にいる雄二が球を場外に運ぶ。

それを見越して雄二は明久にはランナーを溜めるバッティングをするように指示を出していた。

キンツ！

明久がセンター前にボールを運び、1アウトランナー1、3塁。バツターは4番の雄二。

向こうの集中が切れかけている と、いうよりやる気を失くしているという方が正確かもしれない。今だにやる気なのは三馬鹿くらいだ。

さっきの島田のヒットだってそうだ。ライトが前に全力で突っ込んで1塁に送球すればライトゴロに仕留めることだって出来たかも知れない。

何故だ？ 諦めたのか？ いや、1点リードしているからって状況はイーブン。

決して諦めるような点数差では無いはずだ。何か裏がある様な気が

する……。

メンバーの耳に入れて警戒を促しておくべきか？

キンッ！

『ナイスだ、坂本！』

『回れ回れ！』

『三つだ！ 三つ！』

いや、やめておこつ。三馬鹿は『正々堂々』の勝負を提案してきた。なら、その裏にある物がラフプレーって事はないだろう。それにこれはあくまでオレの予想だ。もつと言つてしまえばマイナス思考による妄想と言つても過言ではない。となるとやっぱりオレの考えすぎかな。

雄二の三塁打により、勝ちが見えてきた。

1アウトランナー3塁。こちらが3点リード。あと1点ほしい。4点あれば三馬鹿がどんなに厄介でも、関係ない。『3点取られてもいい』という前提があれば明久の投球もリードもやり易くなる。となると、次の一手は勿論

《スクイズ・間違つても三上のいるサードには転がすなよ》

やっぱり手堅くスクイズだな。しかし手堅い手は向こうも読みやすい。

向こうがスクイズを警戒してストライクゾーンから大きく外せばスクイズの成功率は大幅に下がる。

一発勝負……！ 頼むぜ近藤！

ピッチャーがセットポジションをとり、ゆっくりと振りかぶると同

時に三塁上の雄二がホームに突っ込む同じようにサード三上がボールの処理の為に突っ込み、ファーストも少し遅れて突っ込む。そしてボールはストライクゾーンに投げられた。

コン

近藤はストライクゾーンの球を危なげなく一塁側に転がし、雄二は余裕を持ってホームイン。ファーストが転がったボールを捌き、ホームに投げるか、ファーストに投げるか少し迷った後ファーストに送球し、近藤はアウトになった。

スクイズを成功させた近藤がベンチに戻り、Fクラスのベンチは沸いた。

一方、マウンドでは坊主と三馬鹿の1人三上が揉めている。

あの坊主野郎、スクイズの警戒を全くしていなかったな……。試合を投げたか……？

まあ、それならそれで別に構わない。

楽に勝ち進めるならその方がいいに決まっている。

胸の中でざわめく感覚を気のせいだと片づけ、ムッツリー二の応援の為、声を張り上げた。

.....

NO SIDE

康太が三振に倒れ攻守交替となり4回の裏、3-Aの攻撃。打順は1番の堀田から始まった。

「.....試獣召喚」

サモン

大貴は前の打席とは打って変わり、大人しい堀田を怪訝に思いながらも召喚獣にミットを構えさせた。

《速い球・外角・低め》

明久がコクリと頷き、大きく振りかぶる。バッターは少し反応が遅く、バットの先端に場ボールが当たる。当たり損なった球はバックスピんがかかりフェアグラウンド内でバウンドしてキャッチャーに向かっていく。それを大貴はフェアグラウンド内でキャッチしてファーストにゆつくりと手加減をしながら投げた。

『アウト！』

「よし！ 1アウト！ この調子で締まっていくぞ！」

『『『おお つ！』『』『』』

ポーカーフェイスを保ってはいるが、大貴は内心送球で自分がミスしなかったことにホッと胸を撫で下ろしていた。

大貴は召喚獣の扱いが上手くない。それはつまり『力加減が出来ない』という事でもある。

そして大貴自身もEクラス戦で雄二が姫路を例に挙げて指摘するまで、そのことに全く気付いていなかった。

普段の召喚獣を使った戦闘行為なら一切手加減する必要はないが、今回は戦闘ではなく野球なのだ。大貴の点数では状況によって絶妙な手加減が必要になってくる。味方の送球で味方を戦死（フィードバックによる痛みのオマケ付き）にってしまうなど笑い話にもならない。

大貴は深く深呼吸をして気持ちを切り替える。そしてボックスに座りミットを構えさせた。

「……………いくぞ……………！ 試^{サモン}獣召喚！」

2番バッター常村勇作。大貴は明久に投球指示を出し、明久は迷いなく頷いた。

そして第一球

チンツ！

バスツ！

「ゲツ……！！」

『ファールボール！』

ファールチップが大貴の召喚獣の腹部に直撃する。一応プロテクターは着けてはいるが、衝撃までは殺しきれない。鈍い痛みが大貴の腹部に走る。

しかしすぐに持ち直し、ピッチャーに返球、次の投球指示を出す。そして第二球

チンツ！

ガツ！

「テツ……！！」

『ファールボール！』

ファールチップが肩口に当たる。プロテクターから少し外れていたので少し顔を顰めながらもピッチャーに返球し、次のサインを出す。第三球

チンツ！

ドンツ！

「……ッ！」
『ファールボール!』

流石にここまで続くと故意であると確信する。点数も減ってくるし何より痛い。

しかもルール上は問題ないので、審判は何も言えない。

ウザいな……。さっさと決めようか……。

怒りを鎮め、眼を閉じる。そして大貴は集中の世界に入り、ミットを構えた。

大貴の修めている天源無想流の奥義である無想　この状態の時
の大貴はあらゆる動きを先読みし、先手を取る事が出来る。
大貴の周りから余計な雑音が消える。

《速球・内角・高め・ストライク》

《でもヒロ、速球だったらファールチップが》

《大丈夫。手は打った》

《……わかった。気を付けてね》

明久は大きく振りかぶり、渾身の一球をキャッチャーミットに投げ込む。

そしてバッターの常村はやはりカットする為に力なくスイングし、バットがボールを掠める。大貴の召喚獣に襲いかかるが、バットがボールの何処に当たるかを見極め、軌道を予測し、あらかじめ飛んでくるであろう場所にミットを構えて待ち受けていた。

ボールはミットに収まり審判が高らかにストライクを宣言し、常村は三振した。

大貴は少しだけ痛む頭を指で押さえながらニヤリと笑う。

これで2アウト……！

《あと1人だ。油断するなよ？》

《オツケー。任せてよ》

夏川はバッターボックスに立ち、大きく構える。

《まずは外角・低め・一球外そうか》

明久が投げる球を夏川はよく見て見逃した。

『ボール』

ふむ。流石に頭に昇った血が下がってきたか？ 一球目はしっかり見てきたな……。

《外角・低め・今度はストライク》

『ストライク！』

夏川はこの球にも反応を示さない。

同じように球何球かボール球を投げてみるが、夏川は一向に反応を示さない。

内角を待っているのか？ ……。このままズルズルやってフォアボールをやるのも旨くない。望み通り内角を打たせてやるうか。内角を待っていたんなら少し外した球にも飛びついてくるだろう……。

《内角・低め・少し外す》

明久が大貴の要求した球を投げる。そしてその瞬間夏川の眼が獰猛な獣の様な笑みを浮かべた。必要以上に大きなスイングで内角の球を補給する為に寄ってきていた大貴の召喚獣のコメカミを思いつきり殴った……。

無防備だった大貴の召喚獣は戦死し、大貴自身にもフィードバックによる痛みが走り、その場に倒れ込んだ……。

「ヒ、ヒロ ツ!!」

明久は倒れ込んだ大貴に駆け寄る。雄二も2塁の審判にタイムを取ってから急いで駆け寄った。そして倒れた大貴の周りに顔を青くしたFクラスのメンバーが駆け寄ってきた。

「おっと、悪いな烏丸。態とじゃないんだが」

夏川は倒れ込んだ大貴を見降ろして形だけの謝罪を口にする。その様子を見て明久の頭が沸騰し、夏川に掴みかかろうとしたが、それより先に三上が夏川の胸倉を掴みあげた。

「テメエどういうつもりだ……!? 正々堂々と言ったはずだぞ……!?」

「事故だって言ってるだろ。事・故。スポーツに事故はつきものだから?」

「……………ッ!」

夏川の言葉を聞き、激高した三上は殴りかかろうとするが、鹿島と馬場に羽交い絞めにされ、制止された。

「離せ馬場、鹿島! そのクソ野郎を殴らせろ!」

「落ち着け！ 教師の前で暴力なんか振るったら停学になっちまうぞ！」

同じように夏川の言葉を聞いていたFクラスも全員怒り心頭だ。

『ふざけんなテメエ！』

『よくも烏丸をやりやがったな！』

『前々から気に食わなかつたんだ！ ここらで一発 ！』

お互いに睨み合い一触即発の雰囲気か辺りを包みこむ。

明久がどこから襲うか考え、ムツツリーニが飛び道具を構え、普段冷静な雄二でさえも剣呑な眼つきをして殺気立っている。

「諸君！ 待ちたまえ！」

そんな刺々しい雰囲気の中、陽気な声がある場に響き渡る。

一同、声の主の方向へと眼をやると

「大量虐殺の妖精！ マスク・ド・レイヴン丸！ ここに見参！」

「……………」

「……………」

「……………」

全員しばらく啞然とする……。そして

『『『何やってんだ、お前！？』』』

2-Fの生徒が一齐に覆面の男に対してツツコミを入れた。

突如現れた謎の覆面の男に3-A、観客席の観客も眼を丸くさせて

いる。

特に観客はこの状況を上手く把握する事が出来ずに混乱していた。覆面の男の正体が『烏丸大貴』だという事は理解できたが、その道化じみた行動が飲み込めていないのだ。特に大貴に対して『冷徹な策士』というイメージを持っており、密かに好意を抱いていた1年と3年の女子達は大貴のお茶目（かなりオブラートに包んだ表現）な一面にシヨックを受け、ドン引きしていた。

大貴 もとい、マスク・ド・レイヴン丸を見た三馬鹿は『『やっぱりキャラが被ってるじゃないか！（ポーズ）』』』』と言っていたがそんな事、誰も聞いていない。

第三者から見たら2-Fと3-Aの間に流れた剣呑な雰囲気がいくらか和んだように見えた が、しかし烏丸大貴という少年の人となりをよく知っている明久たちはシャツがぐっしょりと濡れる程の冷や汗をかいていた。

（（ヤバい。目が笑っていない））

雄二、明久の思考がシンクロした。

彼の信条は『恩も恨みも忘れない』そして本人曰く仕返しは常に三倍返し以上を心掛けているらしい。そして彼が本気でキレた場合、それを止められるのは大貴の恋人である木下優子だけだ。雄二は最悪の事態を避ける為に自分の携帯を操作し、アドレス帳を開く。しかし雄二のアドレス帳には『霧島翔子』の連絡先しか入っていないかった。

（また翔子の奴、俺の携帯を勝手にいじりやがったな。メカ音痴の癖に……。あゝ、けどよく考えたら俺木下姉の携帯の番号知らねーな……）

現実逃避も兼ねてそんな事を考えていた。

そして大貴　もとい、マスク・ド・レイヴン丸による夏村への報復が始まった。大貴　もとい、マスク・ド・レイヴン丸は夏川にゆっくり近づき、大貴　もといマスク・ド・レイヴン丸の握るグリップに鈍い光が走る。そして隙の無い動きで仕込み杖ならぬ仕込みバットを構えた。

「待て烏丸！　テメエ何で日本刀なんか持ってこっちを見てやがる！？」

「細かい事は気にするな！　そしてオレは烏丸ではない！　マスク・ド・レイヴン丸だ！」

「待て！　話せばわかる！」

「聞く耳持たん！　さあ、変態野郎！　Are　you　Ready？」

「Noだ！　Not　ready！」

「残念！　オレの準備は万端だ！　というわけでお命頂戴！」

「だったら『準備はいいか？』なんて聞くなよ……」というツッコミを華麗に無視しつつ、鼻歌混じりに踊りながら刀を構える。その様子のに夏川は半泣きになって力の限り叫んだ。

「テメエ正気かあっ！？」

「おお落ち着け夏川！　偽物だ！　偽物に決まって　！」

常村が言い切る前に銀の閃光が彼の頭上を走り、何か黒い物体がバサリと落ちた……。落ちたのは髪の毛だ。

常村は恐る恐る自分の頭に手を乗せる。自分の自慢のソフトモヒカンの尖っている部分を綺麗に刈られて河童のようにされていた。

「散髪代はいらないぜベイビー」

常村は自分の置かれた状況を理解するまで約3秒ほど時間を要し、理解した直後口から泡を吹いて気絶した。

そして大貴 もとい、マスク・ド・レイヴン丸は夏川をジッと見つめる。

「誰か警察に通報しろーっ！」

夏川が必死に叫ぶが、2ーF、3ーA、教師、観客全員が聞こえない振りをした。自業自得というのが半分、夏川の為に厄介事に関わりたくない気持ち半分だったところだろう。

そして怒りの凶刃は夏川を目掛けて振り下ろされる。それを夏川は間一髪で避け、背を向けて夏川は脱兎の如く逃げた。それを大貴もとい、マスク・ド・レイヴン丸が欽ちゃん走りで追いかける。

グラウンドはあっという間に地獄絵図に変わった。

文字通り命懸けで逃げる夏川はなかなか捕まらず、業を煮やした大貴は禁じ手である『火薬入りボール』を使って夏川を爆破しようとするが

「何してるのよアンタはあ つー!!!」

「ゲフウツー!!」

観客席にいた木下優子が乱入、背後からフライングニードロップで後頭部を打ちつけられ、大貴はグラウンドに沈んだ。そして優子は倒れた大貴を引きずり審判に頭を下げた。

「このバカがご迷惑をおかけしました。試合を続けてください」

『あ、はい……』

「じゃあ秀吉、Fクラスの皆頑張ってるね」

「う、うむ……」

『はい……』

優子は満面の笑みを浮かべ、大貴を引きずりながらグラウンドを後にした。

そしてその場にいた全員は先ほどの光景を忘れようと心に決めた。

.....

明久SIDE

その後、少し時間を置いてから試合を再開した。バッターはあの坊主の先輩だ。

真面目に野球をやっていたただけなのにラフプレイをしてくるなんて.....！

しかもヒロが召喚獣を戦死させ、フィールドバックで痛めつけたお返しはヒロに変わってしっかりとやらなさいといけない.....！ 僕の点数でどれだけ点数を減らせるか分からないけどデッドボールで

「ピッチャー吉井に代わって姫路。吉井はキャッチャー」

えっと、今の話だとヒロの代わりに姫路さんが入って、僕がキャッチャーをするって事になるのかな？ 参ったな。キャッチャーじゃ上手く坊主先輩を痛めつけられるかどうか分からないや.....。

「さ、坂本君！ 私、ピッチャーなんて無理ですっ！ それに運動が苦手だから烏丸君の代わりなんてとて」

「姫路、いいか。良く聞くんだ」

「ダメダメ。無理ですっ。出来ないですっ」

「いいか。ヒロの代わりは確かに難しいだろう。しかしあいつがない今、俺達が頼れるのはお前しかないんだ」

「……私しか、ですか……」

「そうだ。もしここでお前が何もせずに諦めてしまったら間違いく俺達が負ける。そうなったらヒロにどう謝ればいい？」

「……ッ！」

「散っていったあいつの為に俺は俺達は何としても勝たなければいけないんだ。これはあいつの弔い合戦……！ 勝つためにはお前の力が必要なんだ……！」

「………わかりました………！ どこまでできるか分かりませんが私、精一杯頑張ります！ 烏丸君の為に！」

「よく言ってくれた姫路！ 明久を信じて手加減なしの全力投げるんだ。野球ではバッテリー いや、夫婦の信頼関係こそが重要だからな」

「ふ、夫婦……。わ、わかりました！ 私、明久くんを信じて全力で投げます！」

「そうだ姫路。全力だ。コースも何も考えず、全力で投げるんだ」
「はいっ！」

なんだろう……。凄く嫌な予感がする……。

小走りでマウンドに駆け上がり準備をする姫路さん。まあ、いいか。僕も自分のポジションにつこう。

さっきまでヒロがいた場所立ち、に召喚獣を座らせ構える。2アウトランナー無し。

さっきの騒ぎで審判がカウントを忘れちゃったらしいからノーカウントから。

「へっ。烏丸がいなけりゃテメエらなんざ敵じゃ」

.....

化学

Aクラス 夏川俊平 244点
Fクラス 姫路瑞希 437点

.....

「げえっ!? そういえばあの女はかなり点数があっただった!」

姫路さんの点数を見て坊主先輩は恐れ慄く。無理もない。姫路さんの点数は見ての通り学年トップクラスだ。Aクラスの先輩でもそう簡単に打てるもんじゃ ってちよつと待って! 考えてなかつたけど、そんな球を受けそなたら僕が酷い目に逢うんじゃ!?

「それじゃあ行きます明久くん」

ダメだ! 来ちゃダメだ姫路さん!

「えい つ!」

「は? 何で ぎゃあああああつ! 痛ってええええええつ!
!」

可愛い声と共に放たれた可愛くないボールは眼にもとまらぬ速さで次打席の準備をしていた3年に直撃した。

.....

Aクラス 金田一真之介 DEAD
Fクラス 姫路瑞希 437点

.....

.....

「ああ！ ご、ごめんなさい！ わ、私どれ位の力加減で投げたらいいのか全然分からなくて」

姫路さんはあたふたと頭を下げている。当人はそれどころじゃなさそうだけど。

「し、審判！ あれ危険球だろ！？ 退場もんじゃないか！？」

「おいおい。酷い事言っなよ先輩。姫路のあの姿を見たら態とじゃない事くらいわかるだろ？」

『本当にごめんなさいっ！ 私、ピッチャーとか初めてで緊張しちゃって』

「ふ、ふざけんな坂本お　　ッ！ 故意じゃないにしても許される事じゃねえだろ！？」

「そうだな。“故意じゃないにしても許されない事”はあるよな？」
「グッ……！」

「さて先生。よく考えてください。負傷したクラスメイトの穴を埋めようと、苦手でも一生懸命努力しようとする可憐な生徒と神聖なスポーツに悪意を持ち込む愚劣で不細工な先輩。あなたは教育者としてどちらを応援しますか？」

『プレイ』

「審判あんっ！？」

無情にも告げられる試合再開の声。自業自得なんだろうけど、このままだと僕の身まで危ない……！

『うう……。上手いきません……。もつと力を込めたら上手いくんでしょか……。？』

バカな！ 今まで本気じゃなかったのか！？

コントロールを無視した学年トップクラスの全力投球。これはもはや野球じゃない！

「こ、今度こそ明久くん所へ！」

「ひいいいいいっ！！」

バットもミットもすべて放りだし頭を抱えてうずくまる僕と坊主先輩の召喚獣。剛速球はそのすぐ上を掠めていった。

「替える坂本！ あのピッチャーを今すぐ替えるおっ！」

「何を言うんだ先輩。俺達最低クラスが最上級の三年相手に勝つには姫路をピッチャーにするしか手はないじゃないか。こっちの一番の戦力が不幸な事故で退場してしまったんだしな」

「ムゲグツ……！」

「それにだんだん狙いがシャープになつてきてるだろ？」

「その狙いがキャッチャーミットだとは思えねえんだよ！」

『うう……。上手いかないのは明久くんを心の底から信じきれないからです……。もつともつと……。明久くんを信じないと……。』

え？ 彼女は一体何をしてるの？

「ちよつと待て！ あのピッチャー眼を瞑つてないか！？」

「違う。あれはバッテリーの信頼関係の表れだ。キャッチャーのリードを心から信じているからこそ、目を瞑って投げられるんだ」

「だから目を瞑ったらリードがまったく見えなくて言うてんだよ

「！」
「じゃあアレだ。心眼だ。確かヒロも目を瞑って獲も 相手の居場所を突き止めるぐらいの事をしてたぞ。それをやってのけるとは……流石は姫路だ」

「居場所探りあててどうすんだよ!? 必要なのはストライクゾーンだろ!? しかもテムエ今獲物って言いかけなかったか!?」

「酷い言いがかりはよしてもらおうか。獲物先輩」

「言っただろ!? 今確かに『獲物先輩』って言っただろ!?」

坊主先輩はやられてしまえばいいと思うけど、その獲物の中に僕が入っているかどうかが重要だ。

「ひ、姫路さん! せめて目を開けて」

『すう、はあ……。すう、はあ……。大丈夫です。明久くんを信じたいればきつとうまくいきます……』

「姫路さあん!?」

何あれ!? 無想!? 天源無想流奥義・無想なの!?

もう姫路さんにはサインや僕の声は届いていない。生き延びるには自分でこの状況をなんとかしないと……!

「仕方ない。姫路さんが投球したら思いっきり横っ飛びすれば……!」

「き、汚ねえぞ吉井! 自分だけ助かる腹積もりか!?!」

坊主先輩が何か言っているけど、当然無視。この人の場合何があっても自業自得だもんね。

「行きます明久くん！」

姫路さんは目を閉じたまま全力でボールを叩きこんできた。

全力で

大威力で

剛速球を

坊主先輩の召喚獣の頭に

「……………うわぁ……………」

初夏に花を咲かせるザクロという果実をご存じだろうか。甘くて、ちよつと酸味がある赤い果物だ。木に生つて熟したそれは、たまに収穫されることなく地面に落下して、道路の上で潰れていたりする。赤い果肉や果汁を、辺り一面にベッタリと飛び散らせて。

今日の前に映る打者の姿は、何故か僕にそんな光景を彷彿とさせた。

……………

化学

Aクラス 夏川俊平 DEAD

Fクラス 姫路瑞希 437点

……………

「ひで、え……………よ……………。あの女……………絶対……………悪魔だ、よ……………」

無惨な姿に変わり果てた自らの召喚獣の隣で、痛みで意識を失いか

けた坊主先輩が倒れている。自業自得とはいえ、これは流石に……
同情の涙を禁じえない……。

「あの、明久くん今度は上手くいきましたか？」

「いや、まあ……上手くいったって言えば、凄く上手くいったんだ
けど……」

手放して喜ぶ事の出来ない何かが此処にある……。

「さて裏切り者の卑劣漢への制裁も終わった事だし」

「……3-A棄権します！（ポーズ）」

「協力感謝する三馬鹿先輩」

「……気にするな坂本。それよりウチのクラスのクソ野郎が迷惑を
かけた。烏丸にも詫びをいれておいてくれ（ポーズ）」

こうして2名の打者に対してデッドボール2つ。犠牲者2名。失神
者1名。

傷害率200%……という数字を叩き出した投手・姫路瑞希とは体
育祭の伝説となり、日本刀でラフプレーをした先輩を追い回して多
くの人にトラウマを残した大量虐殺の妖精・マスク・ド・レイヴン
丸は危険人物として見事殿堂入りを果たした。

第92話 再登場！ マスク・ド・レイヴン丸！（後書き）

と、いうわけで92話をお届けしました。

真面目な野球勝負の結末がこれで良かったのかなあ……とは思いますが、やっぱり姫路の伝説は外しちゃいけないと考え、思いきってやっちゃいました！

教師チームとの対戦では本当に真面目に書きますので、今回は見逃して頂けると幸いです（苦笑）

第93話 腹が減っては戦が出来ぬ

「優子さん、そろそろ許しては頂けないでしょうか？」
「……………」

変態野郎を追い回した後、優子にシバき倒され、引き摺られて正座させられていた。

首には『反省中』という札まで下げさせられている。

「仕込みは摸造刀だったんだし……………」

「当たり前でしょ。本物だったらアンタしよっ引かれてるわよ!？」

「はい……………。ごめんなさい……………」

「え？ 偽物ならどうしてあのモヒカン先輩の髪の毛は斬れたの？」

「ああ。それはな、刃を当ててから刀身を高速で滑らせると切れ味が悪くてもすっぱり斬れるんだ。ほら、金具とかでもそうだろう？」

「そんな出鱈目出来るのはお前くらいだ」

「褒めるなよ。照れるだろ？」

「アンタ……………反省してないでしょ？」

「してる！ 日本海溝より深く反省してるから！ だから獲物を狙う目でオレを見るな！」

「まあまあ、姉上。今回は向こうに非がある事じゃし、その辺で許してやってはくれぬかのう？」

「……………仕方ないわね」

秀吉の進言でようやく許され、正座していた足を崩す。

「ヒロ、フィードバックの方は大丈夫なの？」

「ん、かなり痛かったけどな……………。まあ、大丈夫さ」

伊達に師範による地獄の特訓をやり遂げ、優子の父・日吉さんに命を狙われ、毎日ジジイによる日々殺人的になっていくトランプを受け、優子に殺されかけている訳じゃない。死の淵から蘇る度にオレの体もそれ相応に頑丈になっているようだ。なんだかドラゴンボールのアレみたいだな……。

「ところで聞いたぞ？」

「え？ な、何を？」

「お前らも相当えげつない事するなあ」

「は、ははは、はは」

「これだけやれば考えていた復讐計画も必要ないな」

「え〜っと……復讐計画ってコレの事？」

「そうそう、その事」

明久が復讐の為の計画書を手に取り、読み始めた。

「え〜っと……『三年用のトイレのトイレットペーパーを抜いた後、変態コンビの飲み物に下剤を仕込む』って何コレ！？ 陰険過ぎるよー！」

「……………ヒロ」

「なんだ？」

「……………トイレットペーパーは紙やすりにすり替える方が効果的」

「あ、なるほど。その案頂き」

「頂かないで！ 陰険！ 陰険ブラザーズだよっ！」

『アタシ何であんなのが好きなんだろ……………？』

『ゆ、優子ちゃん元気出してください』

『そうよ。烏丸も本気じゃないわよ。……………たぶん……………』

「まあ、それはさておき、昼だな」
「お昼だね」

運命サバイバルという名の昼食タイム……。ここより先はお互いの生存を賭けた血で血を洗う熾烈な生存競争となる。信じられるのは己のみ……！

そして 女神の審判が下される……。

「あの……皆さん……。私、お弁当を作ってきたんです」
「ホント瑞希って尽くすタイプよね……」

姫路の隣で島田は不機嫌そうにむくれている。

が、そんな事気にしている場合じゃない！ 何とかして優子を連れてここから離脱しなくては……！ そして鬨の火蓋は切って落とされた。

「んじゃ、俺は飲み物買ってくるから」
「いやいや、雄二は座ってなよ。飲み物だったら僕が買ってくるから」

「そう言わずにここはワシに任せるのじゃ」
「……………俺が行く」

「いやいや、ここはさっき試合を混乱させた詫びも兼ねてオレと優子が」

飲み物を買に行った振りをして戻ってこないつもりか……！
チツ！ 考える事は全員同じって事か……！

「ははつ。無理するなよ明久。飲み物を買ってくるには金が必要だろ？」

「大丈夫だよ。最近結構余裕があるから。何より使い走りと言え
ば僕。僕と言えれば使い走り。これ以上適任はいないんじゃないかな
？」

「待つんじゃない。使い走り歴15年。姉上にこき使われ続けたワシの
キヤリアを舐めるでない。明久よりも洗練された使い走りをご覧に
いれよう」

「……………違う。必要なのは速さ。【闇を裂く疾風迅雷の使い走り
と呼ばれたこの俺こそ適任」

「いやいや。それより天源無想流の使い走り道を極め【パシリの申
し子】と言われたオレが行こう。道場の師範やジジイに叩き込まれ
たパシリスキルを余す所見せてやるよ」

何としても使い走りの任を勝ち取りこの場を離脱する。その後適当
に理由つけて戻るのを遅らせれば暗黒物質ダークマターは処分されているだろう。
4人の命と引き換えに……………。

ここは譲れねえのさ。生きる事を選んだ以上は……………！

「テメエら、上等じゃねえか！ この俺の本気の使いっぱしりに叶
うと思うなよ！」

「何言ってるのさ！ 僕の使い走りの方が凄いに決まってるじゃな
いか！ むしろ雑魚共は引っ込んでいるべきだ！」

「雑魚とは心外じゃな。ワシの使い走りも見ずによくそんな口をき
けたものじゃ」

「……………いいから黙って俺に行かせる……………！」

「ハッ！ 井の中の蛙共……………！ お前たちに格の違いというのを
教えてやるう……………！」

「あ、飲み物ならウチが用意してきたわよ」

「ありがとう美波」

「……………あ、……………そうですね……………」

「……………」

島田のありがたい心遣いに涙が止まらねえよ……。

「それじゃ座らせてもらおうわね」

「アタシも一緒にいいかしら？」

「はい。どうぞ」

「ありがとう」

優子、島田、姫路が輪の中に入る。

姫路がゆっくりと弁当箱の包みを開く。今日のメニューは握り飯のようだ。恐怖のあまり手が震えてきた……。思考がまともに働かない……。どうやって優子を連れてこの場を脱出する？ いつその事明久か雄二あたりの口に力づくで詰めちまうか？ 最悪優子が脅威が迫るようなら、オレが

「おいしそうね。じゃあいただきますーす」

「……………あっ！」「……………」

何も知らない島田は何の躊躇いもなく握り飯を手に取り、口に運ぶ。しまった！ もう犠牲者が……！
もぐもぐと口に入れた握り飯を咀嚼する。そしてゴクリと飲み込んだ。

「うん。普通のおにぎりだけどおいしいわよ」

「はいっ。ありがとうございませすっ」

バカなっ！ 姫路の料理が普通！？ 姫路の料理がNormality！？ 冗談じゃねえっ！

「姫路、このおにぎり、どうやって作ったんだ？」

「特に何もしてないですよ？ 普通に炊いたご飯に、お塩を振って俵型に握って海苔を巻いただけですよ」

普通だっ！ 普通のおにぎりだっ！ いいよな普通！ Simple is the best!

「それじゃ姫路さん僕も頂きます！」

「あ、はい。どうぞ」

「んじゃ俺も遠慮なく」

「ワシも頂こうかの」

「……………頂きます」

「アタシも頂きます」

「ありがたく」

口にしてホッと一息つく。良かった。本当に普通のおにぎりのようだ。

とつか普通に美味しい…………。

「と、ところで、その…………」

「ん？ どうしたの美波？」

「いや、その、ね？ 瑞希がおかずに失敗したって言ったじゃない。それで、よかったら、なんだけど…………」

島田が顔を真っ赤にしながらかおずおすとバスケットを差し出す。

「美波、これって自分の分じゃないの？」

「う、うん。ウチも瑞希のおにぎりを貰うから、それならこれを皆でと思って…………」

バスケットの蓋を開けると中からは大量のサンドイッチが。そして

区切つてあるスペースにはから揚げ、ウィンナー、卵焼きなど明久の好きそうな物が盛りだくさんだ。色合いのも気を配っており、作り手の心遣いが伺える。

「コイツは……見事だな」

「え？ そ、そう？」

「うん。凄いよ美波！ これ本当に貰つてもいいの！？」

「う、うん」

「やったーっ！」

島田の弁当を前にして子供のようにはしゃぐ明久。見ていて微笑ましい。これだけ喜んでくれると作ってきた方としても嬉しいだろうな。

「自分の分ねえ……」

「その割には随分量が多いのではないのか？」

「……………素直じゃない」

「ち、違つもの！ ちょっと作り過ぎただけよ！ サンドイッチなら余つても家で食べられるから！」

雄二、秀吉、ムッツリーニにからかわれ、島田は赤い顔を更に紅潮させて慌てふためく。別にそこまで必死になつて否定する必要はないと思つけどな…………。

「これだけ美味しい物を余らせる！？ なんて勿体ない事を言うんだ！ 美波、そういう時は僕に真つ先に声をかけてよ！」

はっ！？ 殺気！ そこかっ！？

「いつでも付き合つから！」

立ち上がって身を翻し、明久の背後に迫る凶器を掴む。凶器の正体は 分度器？

『烏丸大貴……！ やはり邪魔です……！ 何故美春の恋路の邪魔をするのですか……！ 美春はただ純粹にお姉さまをお慕いし、お姉さまにつく悪い虫を駆除したいだけなのに……！ この憎しみで人が殺せたら……！』

「？ どうしたのヒロ？ いきなり立ち上がって」

「何でもないよ。気にしなさんな」

投げ込まれた分度器を殺気のする方向に投げ返し、清水に額にクリンヒット。

スコーンと、いう音をたて、木の上に隠れていた清水がポテッと落ちてきた。

「み、美春！？ アンタ何してるのよ！？」

「くっ！ 気づかれましたが！ こうなったら奇襲は諦めて突撃です！ お姉さま……っ！！」

「アンタに構ってる暇はないのよ……っ！」

島田は清水の姿を目視した途端、一目散に逃げ出した。

あいつも災難だな……。

『お姉さま！ お姉さま！ オネエ……サ……マ……！』

『来ないで！ 最近アンタ特に怖いのよ！』

『何を言っているんですかお姉さま！ 美春はお姉さまの為ならば畜生道に堕ちる事も厭いません！』

『それが怖いって言ってるのよ！』

「ね、ねえ。助なくていいの？」

「大丈夫だよ木下さん。あれはあの2人なりのコミュニケーションだし」

「そうじゃな。雄二と霧島のじゃれあい似たようなものじゃ。のう、ヒロ？」

「ノーコメントだ」

「……………仲睦まじい」

「微笑ましいですね」

「ホントにそうなの!？」

「まあ、気にしなさんな。それより食おうぜ」

「そうだね」

オレも作って来てあった弁当の入った重箱を開けて広げる。

「本当にアンタ厭味なほどうまく作るわよね……………」

「な、なんで美味しいモン作ったのに文句言われるんだ？」

「別に…………。釈然としないだけよ……………」

「まあ、お前の料理もそんな捨てたモンじゃないって」

優子も経験を積みそれなりに上達はしてきているし、決して料理が下手なわけではない。ただ細部適当なので、出来上がる物が大雑把な味になりがちなのだ。

「うん。美味しい」

「ああ。確かに美味しいな」

「うむ。どれも絶品揃いじゃの」

「……………うまい」

「私達も頑張らないといけませんね」

「そうね…………。頑張らないとね……………」

「ああ。今日はちゃんとしたおかずにおにぎりを食べられるなんて……。今日はなんていい日なんだ……」
「お前……、一体どんな食生活を送ってるんだよ……?」
「今日は購買でパンを買う予定じゃったが、思わぬ御馳走じゃの」
「購買? ああ! 拙い! 今日は購買で『限定プリンシエイク』が販売される日じゃねえか!」

『限定プリンシエイク』とは文月学園のスポンサーの一つであるジューズメーカーが作って週一回販売に来る、文字通り『飲むプリン』だ。この学校にしか売っていないので、文月学園の甘党の間ではちよつとした話題になっているのだ。そしてオレも何気に楽しみにしていたりする。

「ごうしちゃいられねえ! 急いで買いに行かないと!」

「あ、ヒロ待って。アタシも行く」

「よっし。急ごう。早く行かないと売り切れちまう!」

.....

NO SIDE

大貴はプリンシエイクを販売している場所に到着し優子に待つように言つて、混雑している所に割つて入つた。ここでは順番なんてあつてないような物なので上手く人波に乗り前に出なくてはいけない。人と人との間に出来るわずかな隙間に入り込み、先頭に出る。残つていたプリンシエイクは2つ。大貴は急いで注文する。

「プリンシエイクください! ……ん?」

大貴はと同時に注文した声の方向を見て、啞然とする。その人物は

「き、キサマ！ 大貴！？」

「チツ、見たくない顔が……。久しぶりだな。おっさん」

「貴様！ 父親に向って『おっさん』とは何事だ！」

「やかましい！ 今まで散々ほつたらかしたくせに今更父親面すんじゃねえ……！ テメエなんざ『おっさん』でも上等なくらいだ！ いいからオレにこのプリンシエイクを譲りやがれ、このボーフラ野郎」

「なんだと！？ 死にたいかクソガキ？ 俺がここのプリンシエイクをどれだけ楽しみにしてきたと思ってるんだ？ 貴様こそ譲れ」
「ああん？ やんのかコラ？」

額をぶつけながら至近距離でメンチを切り合う。大貴と修一。傍から見たらチンピラそのものだ。

「ふざけんな、ボケ」

「黙れ、サル」

「誰がサルだ。このファザコン野郎」

「シスコンとブラコンを併せ持ったド変態が。帰ってクソして寝てろ」

「灰皿で息子を殴るようなクソ野郎に何言われても痛くも痒くもねえんだよ」

「だつたら土下座でも何でもしてやるうか？ このタコ助が」

「それが謝る奴の態度かゴミ野郎。パパとママに教わらなかつたか？ 人に謝るときは靴の底を舐めた後『この哀れな豚野郎をお許してください』だろ？ ああん？ このウジ虫野郎が」

「だ ま れ、テメエの靴底舐めて謝るくらいなら、便器にキスした方が百倍マシだ。この【検閲削除】がつ！」

「殺すぞ。この【検閲削除】！」

「あんまり調子にのっていると【検閲削除】して【検閲削除】を【検閲削除】してやんぞゴラ!？」

「おお。やってみるよ。やられる前にテメエの【検閲削除】を切り落として【検閲削除】

に突っ込んだ後【検閲削除】して【検閲削除】してやるからよおっ
!」

「「上等だ! 表に出るやあ っ!」」

ジャージ姿のチンピラと来賓のような格好をしたチンピラは胸倉を掴みあつてひたすら口汚く罵り合い、ヒートアップしている。周りの生徒はその様子を見て完全に引いており、2人の半径20m以内に近づく事を避けた。

「殺す! 貴様は当主である俺自ら粛清してやる!」

「上等だ! 額の傷の恨み! 今日こそ晴らしてやる……!」

購買内に冷たい空気を包み込む。殺気立つ2人を遠巻きに取り囲む一般生徒。

そして2人は構え、ゆっくりと間合いを探り同時に動いた。

「何やってんの っ!」

「ほぐっ!？」

「……………は?」

購買内で待っていた優子が乱入し、大貴の後頭部に拳骨を落とした。修一はそれを見て啞然とした。

「ア・ン・タ・はぐっ! 何でいつもいつも問題ばかり起こすの!

? 来賓相手に喧嘩なんかしたら停学じゃすまないわよ! 退学よ

! 退学!」

大貴の胸倉を掴みあげガクガクと揺する優子を見て修一はポカンと口を開けたまま絶句している。

「優子待て！ オレの関節はそつちには曲がらな って言うか、いつもより痛いからホント勘弁……！」

「お仕置きよつ！ 反・省しなさい！」

「ギヤアアアアアアアアツ！」

「……………千鶴……………？」

大貴の関節を固めている優子が今は亡き自分の娘の姿とダブリ無意識にその名を呟いた。

……………

「いや、申し訳ない。初めまして。大貴の父の烏丸修一と申します」

「はじめまして木下優子です」

「そのおっさんに頭下げる必要ねえ

ひふえふえふえふえふ

えっ！」

むくれた大貴が発した余計な一言に優子は笑顔のまま頬を引つ張る。その様子が微笑まします修一は小さく笑う。

優子は自分の失くした娘である千鶴にそっくりなのだ。外見は全くと言っていいほど似ていない。しかし性格や雰囲気酷似しているのだ。

そして ついこの間まで自分の『失敗の象徴』として忌諱し、向き合う事を避けた息子の大貴。自分の大事なものをすべて奪っていったと憎み続けた。

しかしその最も憎んだ息子が自分が失くしたものを取り戻す切っ掛

けを作った。

そうして初めて苦しみから解放された。あの日、ドロドロとしたものを何もかも吐きだし、そして吐きだしたものを大貴が受け止めた上で切っ掛けを作ってくれなければ自分は一生苦しみ、悔んだらう。

何故自分だけが苦しいなどと思いあがった事を考えていたのだろうか……。

自分は被害者などではなく、加害者だったというのに……。何故気付かなかったのだろうか……。自分が大貴を憎んでいたのと、同じように大貴も自分を憎んでいた事に……。自分はどうしようもなく愚かで憎むことしかなかったのに、大貴は憎む気持ちを持ちながらも自分の憎んでいる人間を救おうとした……。こいつになら　大貴になら出来るかも知れない……。

烏丸本家の負の連鎖を断ち切る事が　負の連鎖に囚われてしまった息子と娘を救う事が出来るかも知れない。

虫のいい話だというのも自覚している。修一はそれでも大貴に賭けてみたいと思えた。

第94話 運命サイバル

大貴SIDE

結局優子の提案であのおっさんとこっちでプリンシェイクを一本ずつ分け、オレは優子と一本を半分ずつするという形で落ち着いた。なんだかあのおっさんの雰囲気が見たときと変わっていた様な気がするがその辺はオレにとってどうでもいい事だ。そんなこんなで優子とともに皆がいる所に戻ると 秀吉が倒れていた。

『いっぱい食べてくださいね』

『は、はははは、はは』

『……………（ガクガクブルブル）』

「ひ、秀吉 つ！？ どうしたんだ！？ 一体誰にやられた！？」

「ヒロ、秀吉の手の所！」

《犯人は握りめ》

げ、原因判明！ クソツ！ オレとした事が読みが甘かった！

油断したところにボン！ は兵法の基本だというのに！ いや、今はそんな事はどうでもいい！

「秀吉！ しっかりしろ！ ほら、飲め飲め飲め！」

ビンの蓋を開け、中に入っていた液体を秀吉の口の中に流し込む。

「……………グツ！ゴホゴホツ！……………ヒ、ヒロ。ワシは……………生きておるのかの……………？」

「ああ。生きてる。お前は確かに生きてる！」

「良かったのじゃ……………。しかしヒロ。一体ワシに何を飲ませたのじゃ？ すさまじい味じゃったが……………」

「コイツは師範特製の蘇生薬（別名：死んだ方がちよつとマシな蘇生薬）。原料は……………聞かない方がいい……………」

「げ、原料は何なのよ!？」

「聞きたいか？ オレはこの特性蘇生薬の原料を聞いた時、あまりの気持ち悪さに2日間飯が喉を通らなかつたが……………本当に聞きたいのか？」

「え、遠慮しとくわ……………。それより一体どうしてこうなったの？」

「……………原因は……………すぐにわかる。雄二、明久は？」

「あいつはジューズを買いに行つたきりまだ戻つて来てね……………」

「……………戻つてきてる……………」

ムツリ二の発言でオレと雄二は同時に振り向いた。そこには顔を真っ青にしている明久の姿が……………。

「さて。コーラが売り切れたから探してこないと……………」

逃がすかつ！

「おお！ 明久戻ってきたか！ コーラなんていいから座れよ！」

「ダメだよ雄二！ 高校生にもなつてお使いひとつ出来ないなんて僕の沽券に関わるからさ。学校の外に出ても探してくるよ……………」

「いやいや、俺はコーラなんていらなかつたんだ。そこまでする必要はないぞ。そんな事より座れよ……………」

「それは出来ないよ。一度頼まれた事を途中で諦めるなんて僕の責任感が許さないから。だからその掴んでいる腕を放してくれないか……………」

な

「はっはっは。……いいから座れって言ってんだクスが……っ！」

「あはははは。……いいから離せって言うてるんだよカスが……っ

！」

「雄二、無理強いは良くない。明久の行動は明久自身が決めるべきだ」

「そう！ ヒロの言うとおり！」

「ところで明久」

「ん？ どうしたの？」

「今現在お前の眼の前に提示されている選択肢は二つ」

「???？」

「1・大人しくここに座る」

「え？」

「2・逃げようとして背後からオレに斬られる」

「……っ?!?!?!?!?!」

明久はオレが仕込みを取り出したの見て顔をさらに青くした。

「どつちがいい？ オレは出来るなら友達を斬りたくないから選択

肢1をお勧めするが？」

「……………選択肢1で……………」

「素直で大変よろしい」

「……………(シクシクシクシク)」

泣くなよ明久。オレだって友達を犠牲にするのは本意じゃない。オレがお前に許しを乞う資格なんてない。恨んでくれて構わない。だが、ここは黙って死んでくれ……………！

「……………明久、あゝん……………！」

「や、ヤダなあゝムツツリーニ。何ぶざけてるのさ？ やめなよ」

ムツツリー二がもはや恥も外聞もかなくなり捨てて、明久の口もとの握り飯を寄せる。
顔に締めまりが無くなってる。

「明久、あ〜ん」

まさかの雄二参戦。これはちょっと気持ち悪い。そして優子、ヨダレ。ヨダレが垂れてる。

「おい明久。照れるな。口を開ける」

「……………遠慮する事はない」

「いやいや。本当に冗談はやめなよ。恥ずかしいじゃないか」

「大丈夫だ。誰も見ていない。だから、いいから口を開けろってんだ……………！」

「……………ほら、あ〜ん……………！」

「いやいやいや！べ、別に食べたくないって言ってる訳じゃないからね！ただ、人前でそんな恥ずかしい真似はやめてって言うてるだけなんだからっ！」

「リ、リアルBL!?!? まさかこんな近くでリアルカプが見られるなんて……………！しかも吉井君のツンデレ受け」

どうしよう。可愛い彼女（であるはず）の優子の腐った脳みそが沸いてしまっている……………。

そしてその中に姫路も加わり、三つの握り飯を口に詰め込まれて明久は倒れた。

勇氣ある英霊に哀悼の意を捧げる……………。

「……………って死んでたまるか……………っ！」

「バカな！？ もう復活したと!?」

「ふっ、舐めて貰っちゃ困るよ。最近は姉さんの手料理を食べる機会が多いからね」

「なるほど。耐性が……」

「……………苦労してる」

「ところで姫路。特製はいくつ作ってきたんだ？」

「えっと……………確か2つだったと……」

ならもう安心だ。残っている握り飯の一つを摘みあげ、ヒョイと口の中に運ぶ。

夢を……………夢を見ていた……。

幼い頃……………毎日振るわれる容赦のない暴力に心をズタズタにされた辛い日々……………。

姉さんと絃馬さんに引き取られ満たされた日々……………。

姉さんと絃馬さんを失って絶望した日々……………。

静馬とジイサンと過ごした楽しかった日々……………。

明久達と過ごしたかけがえない日々……………。

優子に出会って心を救われた日々……………。

すべてはオレの心の中に……………。

2つだけって言ったのに……………姫路の……………ウソ……………ッ、キ……………。

……………
……………
……………
……………

「し、死ぬかと思った……………」

「大丈夫なの？」

「まあ、なんとか……………。頑丈と回復の速さが売りだからな……………」

「ごめんなさい。失敗したものが混ざっていたみたいで……………」

「姫路さん、いったいどんな失敗したの？」

「えっと……ちょっと中和に失敗しちゃってお弁当箱が溶けちゃって」

「……………」

姫路の予想の斜め上に行く失敗談に優子は絶句する。

突っ込むなオレ……………！ 突っ込んだら負けだ……………！

「とりあえず姫路、今度料理するときはオレと明久と一緒に作ろうか」

「え？ あ、はい！ 喜んでっ！」

「ちよっ……………！？ ヒロ！？ 何で僕まで!？」

「ん？ オレ一人だと姫路が嫌だろ」

「だからって何でいきなり!？」

「いきなりじゃない。そろそろなんとかしないといけないと思っていた」

「でも……………！」

「細かいことは気にするなよ。弾避 明久」

「キサマ、今『弾避け』って言おうとしただろ！」

「冗談だ。そんなに怒るな。けど、ホントにそろそろなんとかしないと……少なくとも味見する事を覚えて貰わないと（オレ達が）死ぬ」

「……………」

誇張も脚色も一切ない純然たる事実を突き付けられ明久は黙り込む。周りはお通夜のような空気に包まれた。そんな重い空気を何とかしようとして雄二が無理やり明るい声で場を盛り上げようとした。若干声が裏返っていたのを指摘しないのは大人の作法ってやつだ。

「と、とにかく1つ多かったのは予想外だったが、これで残りは普

通の握り飯だ。特別製は明久、秀吉、ヒロに当たっちまったからな」

「……………残念」

「け、けど雄二運が良かったよね！」

「あ？ 何がだ？」

「いや。だって僕に『あーん』なんてしてたじゃないか。霧島さんに見られていたらどうなってたか」

「ああ。そういう事か。それは……………まあ、その通りかもな。最近のあいつは相手が男でも聞きやしねえ。見られていたらどうなっていた事か」

「え？ 翔子ちゃんならさつきそこを通りかかりましたよ？」

「……………Really？」

「はい」

「さよなら雄二。今まで楽しかったよ」

「……………来世でも一緒にバカをやるっ」

「待てお前ら。そんなに簡単に人との別離を受け入れるな」

けど、変だな。霧島の性格なら目撃したら即殺しに来そうなモンだけどな……………。

「優子、霧島の様子はどうだった？」

「どつって？」

「なんつーか、こご……………。少し様子がおかしくなかったか？」

「うん。さつきの3・Aとの試合の時もそうだったんだけど、なんだか……………少し様子がおかしかった。持ち物検査のときに何か大事な物を没収されちゃったみたいなんだけど……………」

「大事な物？ それが何かわかるか？」

その問いかけに優子はゆっくりと首を左右に振る。

「そっか……………」

「うん。ごめん……」

「気にしなさんな。ただの興味本位で聞いただけだ。ただ、腑に落ちない事があるけどな」

「腑に落ちない事って？」

「霧島くらの優等生なら大事なものだって教師連中……そうだな……。西村先生あたりにちゃんと説明すれば返却位してもらえはるはずだ。あの人は厳しいけど、石頭じゃないからな。それなのにそれをせず、野球大会で優勝なんて遠回りをしようとしたのは何故だろうな」

「そういわれてみれば……」

「そんなに大事な物なら何故遠回りする？ それをしないのは、没収された物が雄二の言うとおり『本人が承諾していない婚姻届』だからか……、それとも別の理由があったからか……」

「別の理由って……？」

「さあ。あくまで可能性の話だからなあ。そこまではわからん。ただ……、オレは霧島の没収された品が雄二の予想した『婚姻届』だとは思っていない」

「何で？」

「そもそもよく考えればおかしい話だ。国の正式な書類を学校側が没収するわけがない。日本の法律では男は18歳で、女は16歳で婚姻が可能になる。16歳の霧島がそういった書類を持っていても全く問題ないからだ。そいつが『余計な物』というカテゴリに入るはずがない。つまり霧島の没収された品は『雄二関連の替えの利かない大事な品』というのがオレの結論だ」

「……………」

「さて、どうしたものかな？ ってなんだ？ そんな奇妙な物を見るような眼は？」

「あんたって……普段バカな事ばかりやってる癖にこういうときは別人よね……………」

「おいおい……………」

「普段からそんな感じだったら絶対モテるのにね」

「え？ ホントに？ じゃあオレこれからバカな行動はやめようかな！？」

「だ、駄目よ。アンタには……その……アタシがいるんだからモテなくていいの」

「……………。すっげえ殺し文句だな……。そして言った後に照れるなよ。顔が真っ赤を通り越して赤紫になってるぞ」

「う、うるさいわね…………。」

優子が独占欲全開にしている。ホントに……相変わらず可愛い奴だ。

……………

『これより一年生による応援合戦を行います。一年生の生徒は』

準備してきたブツを持って応援合戦の準備を始める。なんだか仮装大会みたいになってるな…………。

「学ランなんて久しぶりだなあ…………。中学校の時以来だよ」

「なんだ。明久も中学では学ランだったのか」

「……………同じく」

「ワシもじゃの」

「そうなんだ。秀吉はセーラー服だったんだね」

「明久よ…………。会話がつかっておらんぞ」

ツッコミたい…………。しかし今のオレは小鳥丸を没収された牙を抜かれた獣…………！ 羽を切られたカラス…………！ 突っ込む事は出来ない…………！

「ねえ、木下」
「嫌じゃ」

島田が秀吉に何か頼もうとしたが、秀吉は断固拒否の姿勢をとった。まあ、何を頼もうとしたのかは大体予想はつくが……。

「そんな事言わないで。ほら、この衣装も可愛いわよ」
「可愛いから嫌なのじゃ」

やっぱり秀吉にチアの格好をするように頼んでいたのか。

「何度頼もうとワシはチアガールなどやらんのじゃ。ワシは応援団に入るのじゃ」

「応援団は人数余ってるじゃない。こっちは人数が足りなくて困ってるの。だから、ね？」

「島田、何でそんなに秀吉にチアをやらせたいんだ？ コイツこんな成りしてるけど一応男だぞ」

「だって……」
「あ。美波ちゃん。早く着替えないと時間が無くなっちゃいますよ！」

チア姿に着替えた姫路が向こうへ走っていく。それはいい。それはいいんだ……。

注目すべきところは別のところにある。姫路の動きに連動して巨大で豊満なものが上下に揺れているんだ……。なんてこった……。人類はここまで進化していたのか……。

「スツゲー……」

「だから嫌なのよ。あの子と2人で踊るのは……！ 揺れるのよ！？」
「跳ねるのよ！？」 暴れるのよ！？」

「そうは言われてもワシはチアガールはやらんのじゃ！」

あっ、ムツツリーニが鼻血を吹いて倒れた。

「まあ、確かに姫路さんと並んで2人で踊ってたら色々比べられちゃうよね」

「しかもあの子すっごく張り切ってて一生懸命飛び回るのよ!？」

もう隣にいるウチへの嫌がらせとしか思えないのよ!」

「そりや間違いなく被害妄想だな。やめとけ。そんなことしたら秀吉が後で優子に殺される」

「それでも……お願い木下!一緒にチアガールをやって!」

「嫌じゃっ」

「けど学ランの上に無理してサラシを巻くくらいなら素直にチアをやって方が」

「あれはお主らが巻かなければ教育委員会に訴えられるというから仕方なく付けておるといふのに……」

阿呆らし……。もう勝手にやっけてくれ……。

「明久君、美波ちゃんは木下君に何をお願いしているんですか?」

『なんでそんなに嫌がるの?こんなに可愛いのに』

『可愛いから嫌なのじゃ!ワシは男なのじゃから可愛いのは着ないのじゃ!』

『木下、ここだけの話だけど』

『なんじゃ?』

『チアガールの格好って実はすごく男らしいのよ』

『さてはお主、ワシを明久レベルのバカじゃと思っておるじゃろ!』

「美波が秀吉にチアガールをやってみないかって誘ってる最中なん

だ

「チアガールを……ですか……。どうしてでしょうね？」

「あははは……。きっと女子の数が少ないからだよ」

「あ、そういうことでしたら」

姫路が後ろ手に隠していたチアガールの衣装を持って明久に熱っぽ
い視線を送る。

「どうしてそんな物を取り出してジツと僕のほうを見るの！？ 着
ないよ！ 誰が何と言おうが着ないからね！」

「ははは。よかったじゃないか明久。ちょうど女子の人数が少ない
のが気になっていたんだ。これで少しは見栄え良く」

「あ、あの坂本君も良かったら……」

「待て姫路。何故もう一着取り出して俺の方を見る？」

余計な事を言うからだバカ者め。

「烏丸君も是非」

「折角のお誘いだが遠慮しておくよ。オレはこれででるから」

「カラスのキグルミですか？ わあ、可愛いです」

「ヒロ！ 一人だけ逃げようなんてするいよ！」

「そうだ！ お前もチアガールをやったらどうだ！？」

「ヒロ？ ノンノンノン！ オレはFクラスのマスコット！ 名は

『キグルミ・レイヴン丸』！ 夜露死苦！」

女装させられる前にカラスのキグルミを着込み短い手足を振り上げ
クイツとポーズをとる。遠巻きに見ていた他のクラスの女子から「
可愛いーっ！」という声が聞こえてくる。

ふっ、正統派ではなく、受け狙いに走ったのは大成功のようだ。

「それはそうと姫路さん。応援の練習すごく頑張ってるらしいね」
「あ、いえ……。それほどでも……」

「だが、島田も心配していたがあまり無理しなくていいんだぞ。応援合戦はあくまで余興で体育祭の点数とは関係ないんだからな」

「はい。なるべく無理はしないようにはします。けど」
「けど？」

「私は私の出来る事で役に立ちたいって思って。だから明久君、応援の応援をしてもらえませんか？」

「うん。もちろんだよ！」

「なんだか吹っ切れたみたいだな。いい顔してる」

「はい。前までは自分にできない事を数えて自信をなくしてたんですけど……それでも私に出来る事を精一杯やっていきたいって考えるようになりました！」

「そっか。その考え方がいいな」

「そうですか？」

「ああ。凄く良いと思う」

肝試しの一件以来自分自身に自信が持てなかった姫路が逞しくなってきた。

痛みや苦しみを知り、それを乗り越え前に進もうとする人は魅力的だ。

それだけで周りに力を与えてくれる。

そんな姫路をオレは心の底から格好いいと思った。

「あれ？ 霧島さん？」

「あ。ホントだ」

ちょっと離れたところに見える学年主席の姿。いつも伸びている背筋が少し曲がり、肩も落ちてきている。ずいぶん落ち込んでいるようだ。

「おい、翔子。どうかしたのか？」
「……………あ。雄二……………。……………野球負けちゃった」
「ああ。そうらしいな。けど安心しろ。仇は討った」
「……………でも、私の没収品返してもらえない……………」
「没収品ってお前な……………」
「……………結婚式まで大事に保管しておくつもりだったのに……………」
「バカ言つな。あんなもん見つけたら俺がかわりに捨ててやる」
「……………え……………？」

は？ 今あいつ何て言った？

「いや。『……………え……………？』じゃないだろ。あんなもの没収された程度でそこまでへこむなよ」
「……………あんなもの、つて……………」
「そうやってつまらない物を没収されて凹むくらいなら常夏コンビ如きに負けた自分をだな」
「……………ッ！」

パシンッ

乾いた音がグラウンドに響き渡った。
霧島が雄二の頬を思いつきり引つ叩いていた音だ。霧島の瞳には今にも零れ落ちそうな大粒の涙が溜まっている。

「……………つまらない物なんかじゃない……………！ 雄二にだけはそんな事言つて欲しくなかった……………！」

普段の霧島からは考えられないような大きな声。その声に思わず気圧されてしまった。
そして霧島はそのまま背を向けて走り去って行った。

「「「……………」」」

あまりにも衝撃的な出来事にオレ達は誰も動く事が出来ず、呆然とその場に立ち尽くすしかなかった。

「わ、私翔子ちゃんのところへ行つてきますね！」

真つ先に我に帰つた姫路は霧島を追いかけて走っていく。オレ達は未だに動く事が出来ない。

「……………子の奴……………！」

そしてようやく事態を理解した雄二が低く唸り吠えた。

「翔子の奴！ 何が『つまらない物なんかじゃない……………！』だ！俺本人が同意していない婚姻届なんかつまらない物以外の何物でもないじゃねえか！ 俺にだけは言われたくないだあ！？ 俺だから言うんじゃねえか！ こつちは何も承諾してないんだぞ！ 悪く言うのは当然だろうか！」

「う〜ん…………。確かに、霧島さんにとって大事でも同意した覚えのない婚姻届とかであそこまで怒られても困るよね…………。」

「全くだ！ つまらない物つて言い方が気に食わねえのなら、くだらない物とでも言い換えてやろうか！？ あのバカがあ つ！！」
「お前ら待てよ。霧島の言い分もきちんと聞いていないのに一方的に決めつけるな」

「え？ ヒロは霧島さんが悪くないっていうの？」

「そうは言つてない。ただ霧島が没収された品が本当に婚姻届だったのかつて話だ」

「他に何かあるっていうんだよ！？」

「そんな事は霧島本人じゃなきゃわからねえよ！」

「確証もないのに寝惚けた事言ってるじゃねえよタコ！ 頭沸いてんのか!？」

「ちよっ……！ 雄二言い過ぎ ！」

「あ？ なんだよ？ 喧嘩売ってるのか？」

お互いに睨みあい険悪な雰囲気が漂う。

そんなオレ達を見かねたように明久が仲裁に入った。

「落ち着いてよ二人とも！」

「ケツ！ 一生ほざいてろっ！ ボケが！」

「チッ！ うっぜえ……！ 勝手にしろ、この石頭が……っ！」

応援合戦が終わり、教師チームとの対戦が目前に迫っていた。

Fクラスの大將である坂本雄二と実質上の副將である烏丸大貴との間で不協和音を抱えたまま……。

第94話 運命サバイバル（後書き）

遅くなつてしまい申し訳ないです。

就職先の研修とバイトとの両立で一日中働いている事が多いもので

……。

なるべく空いた時間に執筆をしていくつもりですので、今後もお付き合ひお願いします。

第95話 Fクラスの綻び

NO SIDE

『お前、離せよ!』

『いい加減にしるよっ!』

『……うー……っ!』

(え? え? なんだよ……? どういう事だよ……これは……?)

『この野郎! うざいんだよっ!』

『邪魔すんな!』

(俺なのか……? 俺の所為で……翔子は苛められているのか……?)

少年の体が恐怖で震える。自分の傲慢のツケを目の前の少女が払っているのを見て愕然とした。

(た、助けないと……!)

そう考えたが、少年は踏み込めない。神童と呼ばれた少年は助けに入ったとしてその後自分がどんな目に逢うのかという事が容易に想像できた。だからこそ助けなければいけないと理性ではわかっていても、動く事が出来ない先生や大人を呼ぶこともできない。そんなを事したら彼女を有名私立に転校させたがっている彼女の祖父が苛めを口実に翔子の意思などお構いなしに無理やり転校させてしまうだろう。

どうする事も出来ないこの状況に少年は心の中で弱音を吐き、必死

に自分を正当化する言い訳を考える。そんな自分をこの上なく惨めに思いながら……。

『……いや……！』

苛めを行っている少年たちは翔子を羽交い絞めにし、胸元に手を伸ばした。

少年は最近翔子が自分の胸が大きくなってきたと、言っていた事を思い出す。

苛めを行っている少年たちが翔子に何をしようとしているのか容易に想像する事が出来た。

（あいつだって女なんだ。そんなことしたら傷つくに決まっている……！ 翔子……！ 助けを呼べよ！ そしたら俺がダツシュで先生を呼んできてやるから……！）

少年はただ待ち望む……。少女が自分から助けを求めるのを……。そして やっと翔子は口を開いた……。

『……いや……！ 私、転校なんてしたくない……！』

.....

『木下は三番だったよな。確か最初の科目は化学だろ？』

『うむ。他の科目の出来がイマイチじゃったからな。化学が回ってくるこの打順が一番都合が良いのじゃ』

『俺もだ。この前の世界史や英語は難しかったからな。勝負にならねえ』

教師陣との対戦を控えたFクラスの面々はそれぞれポジションと打順の確認をしていた。

相手はかつてない強敵。点数は勿論、経験、操作技術すべてが彼らの上をいつている。

上回っているところといえば、体力くらいのものだろう。

そして何より彼らには大きな不安要素があった。Fクラスの主力である雄二と大貴を取り巻く空気が重い。

「あ、あの……ヒロ？」

「なんだ？」

大貴は明久に愛想のない返事を返す。その上無表情だ。機嫌が悪いのは明らかで、明久が次の試合を不安に思うのは仕方がなかった。明久に気を遣わせている事に気付いた大貴は一呼吸おいて答えた。

「悪い。空気悪くしてしまったな。……心配しなさんな。与えられた仕事はこなすさ。いくら気に入らなくても、それはそれ。これはこれだ。足を引つ張るような真似はしない」

「そう？ それならいいけど……。……ねえ、どうしてヒロは霧島さんの肩を持つのか？ 話を聞くかぎりでは雄二が怒っても仕方がないような気がするけど？」

「オレはどっちの味方でもない。ただ雄二の言うとおり『霧島の没収された物』が本当に『本人が了承していない婚姻届』だったのかって話だ」

「え？ それってどういう」

『これより生徒・教師交流野球決勝戦を始めます。皆さん、整列してください』

「霧島の事もあの野郎の事も気にはなるのもわからないでもないが、今はそれよりもやる事がある。目の前の事に集中するぞ」
「う、うん」

明久は大貴の言う事が気になったが、教師に整列するよう促されと
りあえず疑問を頭の片隅に置いておく事にした。

『お互いに礼！』
『『『おねっしや すっ！！』』』

先攻 教師チーム
後攻 2 - F

1番	ショート	福村幸平
2番	サード	横溝浩二
3番	ファースト	木下秀吉
4番	セカンド	島田美波
5番	センター	烏丸大貴
6番	レフト	須川亮
7番	ピッチャー	吉井明久
8番	キャッチャー	坂本雄二
9番	ライト	姫路瑞希

ベンチ 近藤吉宗 ムッラーニ
土屋康太

「はは……。野球なんて何年ぶりでしょうね。試獣召喚サモン！」

教師チームのトップバッター科学教諭の布施が召喚獣を喚び出しバ
ッターボックスに入る。

化学

化学教師 布施文博 501点

Fクラス 吉井明久 57点

あまりの力の差にある者は引き攣った笑みを浮かべ、ある者は空を仰ぎ、ある者は神に祈る為怪しげな儀式を始めた。キャッチャーの雄二がピッチャーの明久にサインを送る。

《アウトコース 低め 遅い球》

明久は頷き、雄二の指示通りアウトコースに遅い球を投げる。

『ストライク!』

布施は動かさず球を見送る。野球に慣れていない彼は慎重になり、一球目は見ることに専念したようだ。

《インコースギリギリ 高めに外す》

外した球で相手の様子を見るつもりなのだろう。明久は雄二の意図を瞬時に理解し、要求どおりに投げる。

「……………ッ!」

『ストライク!』

布施はビクリと動くもそのまま球を見逃した。カウントは1ストライク1ボール。そろそろバットを振ってくるだろう。それを見越して雄二は勝負に出た。

《インコース 低め 速球》

明久はコクリと頷き深呼吸。

「行くぞ布施先生……！　これが僕の……全力だあああつ……！」

召喚獣が力を込めて全力で振りかぶり、キャッチャーミットに向かい投げた。が

『すつぽ抜けてんじゃねえか！』

力みすぎた明久はまさかの失投をしてしまった。布施はそれを見逃すはずがなく、眼つきを鋭くさせ、バットを振りぬいた。

キンツ！

『ホームラン』

ボールは場外を飛び越え、召喚フィールドの外に消える。打った布施は悠々とダイヤモンドを回った。早くも1点を取られてしまい、2-Fの生徒達の気分が沈む。

「切り替える明久！　まだ1点取られたただけだ！　十分逆転できる！」

センターの大貴が櫛を飛ばし、明久は気を取り直した。

一方大貴は雄二の対応に少しイライラしていた。ホームランを打たれた後のピッチャーのケアはキャッチャーの仕事だ。しかし雄二は動かなかったのだ。

「切り替えるよ、バカが……！」

舌打ちをして、グラウンドを軽く蹴る。そして次のバッターの現国教師である寺井伸介がバッターボックスに入ったのを確認して気持ち切り替えて構えた。

寺井が召喚獣を喚び出した。

現国教師 寺井伸介 211点

寺井は文系教師であるため、他の教師の点数に比べ見劣りするが、それでも生徒からみればAクラス上位に匹敵する点数だ。Fクラスの守備勢は構え、集中し始める。

彼らは先制されたにも関わらず、誰一人として勝負を投げていない。

《低め一杯 速球》

雄二のサインに明久は頷き、セットポジションをとり投げる。ボールは雄二の注文通りのコースに投げ込まれるが

「ほっ、とー！」

寺井は掛け声と共に召喚獣を操作し、バットがボールを捉えた。ジヤストミートされた打球は低い弾道を描き、ライト前に転がっている。

ノーアウトランナー1塁。

「完全に捉えたと思ったんですが……。やっぱり生身でやるのとは違いますね」

塁上の寺井は先ほどの自身のバッティングに納得がいかないようで首を捻っていた。

そして次のバッターは

「よろしくお願いします」

学年主任であり、才女と名高い高橋洋子。彼女は慇懃に挨拶をしながらバッターボックスに入った。

「サモン試獣召喚」

化学

学年主任 高橋洋子 801点

『『『ブホッ！！！！』』』』

うしろを守っていたFクラスの生徒が一斉に噴き出した。圧倒的
そんな言葉すら温く感じるほど力の差があった。はっきり言って
彼らの点数では逆立ちしたって一矢報いることすらできないだろう。

《勝負にならねえ。敬遠するぞ》

《了解》

雄二、明久の決断は早かった。実際彼らと同じ立場に立つたら100人が100人同じ結論に達するだろう。そんな中明久はある違和感に気付いた。その違和感の正体を探るために注意深く高橋の召喚獣を観察する。そして違和感の正体に気付いた。

バットを持つ手が上下逆なのだ。通常は右バッターなら右手を上
持つものだが、高橋の召喚獣は左手を上にして持っている。明久の
頭にある仮説が浮かび上がる。

(高橋先生は野球に慣れてないんじゃないか……?)

『高橋先生、バットを持つ手が逆だな。それでは打ち難いはずだ』
『ああ、どうりで……。ありがとうございます、西村先生』

今の西村とのやりとりで明久が自分の仮説を裏付けとするには十分だった。

そして雄二に勝負するように促す。雄二も先ほどのやりとりを見て同じ結論に辿り着いたようで迷いなく頷いた。

《アウトコース 高めに外す 速球》

野球に慣れていないのなら、ボール球で釣るという雄二の考えに納得し、明久は注文通りの球を投げる。

『えっと……こうでしたか……』

途中でバントの構えを取るが、コースを外した球には当たる事もなくボールはミットの中に納まり審判はストライクを宣告する。

《ここは黙って送らせてアウトを1つもらうぞ》

この策に驚いたのはセンターを守っていた大貴だ。教師チームが“ただ送ってくるだけ”なんて単純な戦略を練ってくるはずがない。そして何より次は打者はあの西村なのだ。得点圏である2塁にランナーを置いて勝負するなどという危険な事はしたくない。

西村を敬遠するとしても他の教師陣はAクラスの生徒並みの点数を持つっていると予想できる。それならこの試合でランナーを溜める事、得点圏にランナーを置いて勝負する事は何より避けるべきなのだ。この考えを一刻も早くバッテリーに伝えるべきなのだが、もう遅い。

すでに明久は投球動作に入っているのだから……。
大貴は内野に向かって走る。

「ここで、こう……」

ゴンという音が鳴り、バントの割には勢いがいい球が飛ぶ。

プッシュバント。普通のバントはボールの勢いを殺すため当たったと同時に絶妙な力加減でバットを引く必要があるが、プッシュバントはインパクトの瞬間にバットを押し出してミートする事によって自らも生きる可能性を上げるものだ。バスターやエンドランと同様に相手の意表を突く形で行われることが多い。

バントされた球がピッチャーと前に突っ込んでいたサードの間を抜けていく。しかし運は彼らFクラスに向いていた。

「任せる！」

打球の飛んだ方向がショートの前で福村の真正面だった。

「ナイスだ福村！」

大貴はホッとしてスピードを落とすが

「じぶるあ j k l ; s d ! !」

『『『んだとお!?!?』』』

球を捕球したはずの福村の召喚獣の体がぶっ飛んでいた。

「……………は？」

福村の召喚獣のあまりに無残な死に方に大貴の思考が一瞬止まる。

すぐに自分が何すべきなのかを思い出しセンターに転がってきたこぼれ球を処理しようとするが、動揺していて細かい操作が覚束ない。

『高橋先生あれなら二塁まで行けます！』

『わかりました。二塁ですね』

教師陣の誰かが叫び、高橋は冷静に頷き二塁へ向かった。ピッチャーマウンドを突っ切って……。

『は？』

学年主任であり、才女と名高い高橋のあまりにも素つ頓狂な行動にグラウンド上の誰もが目を丸くした。ランナーは1塁、2塁、3塁、ホームと順に走らなくてはならない。故に先ほど高橋がとった『1塁を踏まずに2塁に直接向かう』という行為は紛れもなくルール違反だ。他にも高橋のこの行為は『塁と塁とを結ぶライン（ベースライン）を離れ、明らかに走塁を放棄した場合』『基準となるラインから3フィート（約91センチメートル）以上離れた場合』という走者がアウトになるケースにも適応する。

『バッター、アウト』

当然審判が彼女にアウトを宣告する。しかし

『何故ですか？』

『そういう物なので……』

高橋は自分がルールに反した事すら気づいていなかった。大貴は無性にずっこけたい衝動に駆られるが、グツと我慢する。

『烏丸！ ボール、ボール！』
「へ？ あ、ああ」

須川に声を掛けられ大貴は彼にボールを渡す。ボールを受け取った須川は1、2塁間に棒立ちになっていた寺井にタッチした。状況に流されず次に自らがとるべき行動を見失わなかった須川のフラインプレーなのだが……グラウンドに立っていた選手全員は微妙な表情をしていた。
ちなみに高橋の打球が直撃した福村の召喚獣は誰にも気づかれる事なく戦死していた。

.....

大貴SIDE

戦死した福村に代わり、ショートに近藤が入り試合を再開した。さて、色々あつて少しばかり取り乱したが気を取り直して次の打席は

「さあ来い！ このまま三つめのアウトを取ってやる！」
「威勢がいいな、吉井」

補習教師西村宗一。オレ達Fクラスに数々の辛酸を嘗めさせたの天敵といつてもいい存在だ。
むう……。厄介なのが出てきたな……。あの人をどうやって封じるべきか……。
まあ、普通に考えたら敬遠だよな……。

化学

《敬遠するぞ明久》

《了解》

明久、雄二の決断は早かった。実際オレがキャッチャーでも間違いないそうする。即刻即座に即時即決する。点数は勿論、本人の運動神経、召喚獣操作の経験それらすべてが桁違いだ。駆け引きでどうにか出来るレベルを軽く超えてしまっている。それは問題ないのだが……。敬遠策をとった雄二が立ち上がらないのだ。何やってやがる！？ 相手はあの西村先生だぞ！ 生半可な事やつたらこつちがやられちまう！

『ボール』

とりあえず一球目は見逃してくれたようだが、次はわからない。ボール球でも打てるのなら打とうと狙っているかもしれない。いや、間違いなく虎視眈眈と狙っている！

「雄二、横着するな！ 立って敬遠しろ！」

センターから大声で警告するが、雄二は立ち上がる気配を見せない。クソッ！ あのバカ……！ いくら喧嘩中って言っても今はお互い意地張ってる場合じゃねえだろ！

『お前たちは勉強は苦手だがこういう事はわかっていると思っただがな』

西村先生が嘆息まじりに雄二に言う。

『なんですか？ 敬遠くらいで卑怯だなんて言わないで下さいよ』
『そうじゃない。いいか坂本、教師として一つ忠告しておく。何事もやるからには徹底的にやれ』

拙い！ やられる！

明久は迷いながらも第二球を投げた。

『烏丸の言うとおりにするべきだったな！』

ガキンという音を立ててオレの召喚獣の遙か上空をボールが通過する。そしてそのままボールは場外へと消えていった。

ボール球を力技で……。なんて出鱈目な……。

『ホ、ホームラン！』

『フン』

西村先生は淡々とベースを回っていく。

これで2点差……。そろそろ拙いか……？

その後も雄二の不調による影響は続いた。続く5番の大島先生のとときには指示の遅れでポークを取られかけ、その動揺で制球が甘くなつた明久の球をセンター前に運ばれ、その後のバッターに対しても取れるはずのキャッチャーフライを落とし、取れるはずのアウトを逃した。結局そのバッターにヒットを打たれ、ダブルスティールを仕掛けてきた走者に対してどちらに投げればいいか迷って焦って送球したら暴投するなど散々だ。

結果やらなくていい点までやってしまい、4 - 0と絶望的なまでの展開となってしまうた。

その後の打者に2ベースを打たれ、窮地は尚も続く。現在の状況は

2アウトランナー2塁バッターは8番。
そろそろ限界だ……。

「タイム！」

タイムを取り、マウンドの方に走っていく。雄二が不快そうに、明久と秀吉と島田は不安そうにこちらを見る。悪いが空気が悪くなるとか言ってる場合じゃない。このままじゃ確実に負ける。

「なんだ？ 文句でも言いに来たのか？」

「よくわかってるじゃないか」

「ケツ。んなもんお前に言われなくてもわかってらあ」

「なら……オレが何をしに来たかわかるだろ？」

「……………」

「え？」

「ヒロ、お主……………」

「キャッチャー交代だ。他の事が気になって目の前のやるべき事に集中できていない奴にこれ以上全体の指揮をとらせるわけにはいかない」

「……………チッ」

自分でも本調子でない事が、集中できていない事がわかっているのだろう。

不愉快そうに舌打ちをしながらも、黙ってセンターへと歩いて行った。

悪いな雄二。今のお前でははっきり言って足手まといだ。

「あんたたち大丈夫なの？」

「雄二の事は試合が終わった後だ。それより今は目の前の事に集中するぞ。余所事考えて勝てる相手じゃないからな」

「う、うん」

「了解じゃ。して、何か策はあるのかの？」

「ある。……島田、近藤。一球目に仕掛けるぞ。抜かるなよ」

「……………そういう事ね。わかったわ」

『けどよ烏丸。もう4点差だぜ？ 勝ち目なんてあるのかよ？』

「大丈夫だ。充分勝ち目はある。逆転の為の策もある」

と、言うておく。上手くいくかは正直五分五分だが、不可能ではない。とはいっても結局は運次第なのだが……。当初の策までにどれだけ点差を詰める事が出来るか、が勝利のカギとなる。
やってやるさ……………！

「よし！ 締まってくぞ！」

『『『おお つー！』『『』』』』

それぞれ守備位置に戻っていく。オレもキャッチャーボックスに召喚獣を座らせ、構えた。

さっき既に明久にはコースの指示は出してある。

明久はプレートに足を掛け、セットポジションをとり思いっきり投げた。

外角高め、速球！ 指示通り！

捕球してそのまま二塁上にクイックで手加減なしで投げる。

島田はすでにベースカバーに入っており、送球を受ける。

いきなりの事で虚を突かれた二塁上の走者は慌てて戻るが、間に合わない。

『アウト！ チェンジ！』

「上手くいったな」

「そうね。けどもう少し手加減してくれてもいいんじゃない？ ウ

チ一応女なのよ？」

「悪い悪い。生半可な事してたら刺せなかったからさ」

開始直後、まだ相手が集中し始めていない隙に2塁に牽制球を手加減なしで投げ、殺すという単純な策だ。一步間違えれば島田の召喚獣は消し飛ぶだろう。あいつの反射神経とオレの点数があつてこそ出来た事だ。

一回裏

教師 4

Fクラス 0

さーて、結構な窮地だが最悪な状況をひっくり返すのは得意分野だ。

「ここからが反撃開始だ。このまま楽に勝てると思うなよ……！」

第95話 Fクラスの綻び（後書き）

結構今更ですがお気に入りで500突破しました。
皆さん本当にありがとうございます。

これからもがんばっていききたいと思えます！

第96話 反撃開始！

NO SIDE

少年は自分より一回り体の大きい上級生に囲まれていた。彼は震える少女の手を取り逃げようとするが、上級生たちは少年の逃げ道を完全に塞いでいた。神童と呼ばれるほどの頭脳を持っていた彼はこのあと自分が迎える結末を予測していた為、足が震え、手が震え、逃げ出したいという気持ちでいっぱいだった。それでも彼はけなしの勇気を振り絞ってここにいる。逃げられないと悟った少年は震える足に心の中で湯を入れて覚悟を決めた。

「翔子、お前先に帰れ」

「……ゆ、雄二」

「いいから先に帰れ！ お前がここにいると迷惑なんだよ！」

「……でも」

「いいからっ！」

雄二の体が震えている事に翔子は気づく。

「……私、先生を呼んで」

「いいから帰れ！」

雄二は翔子がどれだけこの学校にいる事を切望しているか知ってしまった。

この事が表沙汰になれば翔子の祖父がどのような対応をするかも知ってしまった。

そして何より あれほど必死に抵抗を続けていた翔子が、自分の

身を案じて転校も厭わず先生を呼ぼうとしている事実がどうしようもなく惨めで嫌だった。自分は翔子の苛められていた原因でありながら廊下の隅で頭を抱えて震えていたというのに……。

昨日まで格下だと思つて歯牙にもかけなかった存在からの暴力に怯え、自分が何よりも守らなければいけない少女を守れずにいる。

「俺……勉強が得意だからずっと自分は大人に負けない凄い奴だつて思つてた」

「ゆう……じ……」

「でも、全然そんな事なかった。いくら数式が解けても、外国の言葉がわかつて……こんな酷い事する奴らに殴られるのが怖いんだ……」

自分の情けなさど無力を自覚し、雄二の中にあつた価値観はすべて崩れていく。

雄二の頬が涙で濡れていた。

それを見て翔子は自分も泣き出しそうになるのを必死に堪えた。

「……うん……。私、先に……帰るね」

きつと雄二は自分がやられてしまふところを誰にも見せたくないだろうから。

翔子は振り返らずに教室を後にする。雄二を見捨てて逃げるといふ嫌な自分を我慢して雄二の言うとおり教室から駆けて行つた。

.....

大貴SIDE

「さて、戦力差を確認しておくが……」

「……………」。(ゴク)

「正直言って圧倒的すぎて話にならない」

「そ、そこまではつきり言わなくても……」

「これでもオブラートに包んではいるぞ。向こうがプロだとすれば、こっちは高校野球で万年一回戦負けの超弱小チームだってところまでは言っていないし」

「言った！ 今はつきり言ったよ！」

「まあまあ、落ち着け。ほら、孫子だって言っていただろ？ 『敵を知り、己を知れば百戦危うからず』って。今は己を知るときだ」

「何か策があるのじゃな？」

「まあ、な。オーソドックスだけど向こうの弱点を徹底的に突く」

「じゃ、弱点？ 教師チームにそんな物あるの？」

「あるさ。ライトの」

「高橋先生ね。けどあの野球は素人だけどあの点数よ。本当に弱点になるの？」

「野球は力があればいいってもんじゃない。まあ、力があるに越した事はないんだけど、守備に必要なのは咄嗟の判断力だ。外野を抜ければ最低でも二塁までは進める。あとは駆け引きに勝てさえすれば点は取れる」

「わかった。ライトを狙えばいいんだね」

「いや、無理だ」

全員ずっこけた。

「そこまで説明してそれ!？」

「悪い悪い。けど、明久。お前の点数で布施先生の球を外野まで運べるか？」

「うっ……………!」

「ま、アキの点数じゃね」

『まあ、バカの吉井だしな』

『ここは俺達に任せておけ』

「お前らもだ」

『『『うっ……！』』』

「じゃ、じゃあどうしろって言うのよ？」

「教師陣にオレ達が勝っているところを利用する」

「ウチらが先生たちに勝つてるところ？」

「判断力と体力、そして野球経験。オレ達は結構頻繁に授業をサボって野球をしているけど、教師チームにはブランクがある人が沢山いるはずだ。その人が守っているところを徹底的に狙う。ムツツリ
ーニ、資料を」

「……………（コクリ）」

ムツツリーニから資料を受け取り、みんなに見えるように広げた。

「内野で野球経験がない、もしくはブランクがあるのは3人。サード、セカンド、ピッチャー。と、いうわけで……サードもしくはファーストを狙う」

「打てるかのう……」

「無理に打つ必要はない。打てないと判断したらバントでサードに転がしてしまえ。バスターの構えで相手を揺さぶってもいいぞ。間違ってもキャッチャーに打球を処理はさせないように。そんな事になつたらすべてのチャンスを潰されるぞ」

『『『りよ、了解……』』』

西村先生の恐ろしさをよく知っているクラスの連中は顔を青くして頷く。

「それと雄二」

「……………なんだ？」

「お前はライト狙いのバッティングを心がけてくれ。お前が2塁まで行けば何としてもホームに帰してやる」
「……フン」

不愉快そうに鼻を鳴らす雄二。正直その態度にムカついたが、今仲間割れして得な事なんか一つもないから放っておく。

しかし 厳しいな……。

姫路は点数は高いが素人。雄二のバカは府抜けていて、いつもの生彩さを欠いている。

今使えるカードは明久の召喚獣の操作技術だけ……。

切り札の準備はしておくが、こいつはオレが失敗したらすべてパーだ。

両肩に重圧が押し掛かる。それを振り払うように頭を左右に振って気持ちを切り替えた。

「ムツツリーニ、今から教師チームの配球をすべてデータに入れておいてくれ」

「……………何をするつもりだ？」

「キャッチャーの配球を読む」

「……………そんな事が？」

「出来るかどうかは五分五分だけど、さっきのバント作戦でとれる点はよくて1点……。戦略を立てようにもボールをバットに当てられなければ意味がない。けど相手の配球を先読み出来れば低い点数でも打てるはずだ」

「……………やっておく」

「頼む」

オレはオレのやるべき事をこなさないと。現状ではオレ達の勝てる確率は極めて低い。

けどな……それで『はい、そうですね』で終わらせる訳にはいかな

いんだよ……。

雄二から指揮系統を奪ったからには結果を残さないとあいつに申し訳が立たない。

万に一つの勝機でも……手繰り寄せてみせる！

《まずは様子見だ。待機》

《了解》

「サモン試獣召喚！」

近藤が召喚獣を喚び出し、バッターボックスに入る。ピッチャーの布施先生は召喚獣を操作させ第1球を投げた。

『ストライク！』

ふむ。結構速いな。大体130キロってところか……。

《いけそうか？》

《当てるだけなら何とかかなりそうだ》

《よし。それなら次は少し揺さぶってみよう。バントの構えだけとつてくれ》

《わかった》

布施先生が投げ、近藤がバントの構えをする。それを見てサイドは突っ込み、少し遅れてファーストも突っ込んできた。近藤がバントを引く。

『ボール！』

セカンドが全く動かなかつたな。ってことは

《セーフティバント。ファースト方面に転がせそうか？》
《やってみる》

コン！

近藤がファースト方面に転がした。上手い具合に勢いを殺している。近藤が走る。突っ込んできたファーストはボールを拾い、ファーストに投げようとするが、セカンドを守っていた先生と布施先生がお見合いをしまいベースカバーに誰も入っていない為、投げる事が出来ない。

そして近藤は余裕でセーフ。ノーアウトランナー一塁。

初回は様子見のつもりだったが、早速こんなチャンスが回ってくるとは……ラッキーだ。

「よし。このチャンス大事に！ 絶対モノにするぞ！ 気合い入れろ！」

『『『『おおー！』』』』

《どうする？ 送るか？》

《まだだ。とりあえず西村先生の肩を確認したい。近藤、走る振りをしてくれ。横溝は球のタイミングをとってくれ。必要ならバットも振って構わない》

《了解》

《わかった》

近藤は布施先生のモーションを慎重に窺って、足を上げた瞬間にスタートする。

西村先生はボールを受けてすぐに二塁に送球する。ショートはその球を受けて塁上にグローブをやるが、近藤は途中で一塁に戻って

た為ショートタッチは空をきる。
もし盗塁をさせていたら完全にアウトになっていただろう。近藤のスタートは完璧だったにも拘らず、だ。
危ねー……。このタイミングでもアウトかよ。これだったら保健体育のムツツリーニ以外はアウトになると考えていいだろう。この試合盗塁はさせない方がいいな……。

《普通に送る。やれるか？》

《大丈夫だ》

《くどい様だが、くれぐれもキャッチャーに打球の処理をさせるなよ》

《わかってるって》

コン

サードに球が転がっていく。サードはその球を難なく捕球しファーストに投げる。その間に近藤は2塁へ進み、横溝はアウトになった。1アウトランナー2塁。バッター秀吉。

「サモン試獣召喚じゃ！」

さて、どうしたのか……。点を取るためには何としてでも1アウトでランナーを3塁に置いておきたい。

次は島田か……。確か島田の化学の点数は50点〜60点……。チャンスを託すには心許ない……。

《秀吉、バントの構えだけして態と失敗しろ。ファールグラウンドに転がしてもいいし、ファールチップにしてもいい。とにかくこっちがバントで近藤をサードに送りたがっていると、相手に思い込ませるんだ》

《了解じゃ》

秀吉の召喚獣がバットを構え、ピッチャーが投げる。それと同時に秀吉はバントの構えをとり、ファールチップがうしろに飛ぶ。西村先生の召喚獣はそれを難なくキャッチして審判はストライクを宣言する。

グラウンドの方を見るとファーストとサードがバント処理の為に突っ込んでおり、セカンドはファーストにシヨートはサードにベースカバーに入っていた。

これなら……いける……！

《次はバントの構えをするだけ。前には転がすなよ》

ピッチャーが投げた球を秀吉はバットを引いて見逃した。

『ボール』

先ほどと同じようにファーストとサードは前に突っ込みセカンドとシヨートはそれぞれベースカバーに入っている。

よしよし。バントをバッチリ警戒してくれてるな。

《もう一球様子を見てから仕掛けるぞ》

《了解じゃ》

『ストライク！』

カウントは2ストライク1ボール。頼むぜ、秀吉……！

引き続きバントの構えをとる秀吉を見て守備陣は突っ込む為に前のめりになっている。

そしてピッチャーが球を投げると同時に前に突っ込んだ。

秀吉はピッチャーが投げた瞬間にバントの構えからヒッティングの構えになる。それと同時に近藤はセカンドベースからスタートしていた。

『バスターだ!』

「いや、違う。正確にはバスターエンドランだ」

キン!

バットとボールがぶつかる高い音が響き、本来セカンドがいるべき位置にボールが転がる。しかしセカンドはファーストにベースカバリーに入っていた為、その打球に対応する事が出来ない。打球はライト前に転がり、近藤はそのままホームに突っ込もうとしたが、高橋先生が西村先生の指示を受け、返球がレーザービームで返って来た為、サードに留まった。

イチローみたいな返球だな、オイ……。けどまあ、奇襲は成功。これで得点する為の条件は出揃った。次のバッターは島田。点数が低いから長打力を欠くが、今この局面で必要なのは長打ではない。

《待機》

《了解》

島田に待機の指示を出し、相手の出方を窺う。

『ボール』

ピッチャーの投げた球はストライクゾーンから大きく逸れたところでキャッチャーミットに納まった。ファーストとサードも先ほどと同じように前に突っ込んできている。さっきと違つところといえば、

ショートとセカンドが定位置にいた事くらいだ。スクイズを警戒してのことだろう。そしてバスターの可能性も考慮してある。

《もう一球待機》

『ボール』

守備陣はさっきと同じ動きをした。これだけ警戒されていたらスクイズで得点する事は難しい。

《ボールなら待機。ストライクなら強振。なんならそのまま打ってもいいぞ。》

《打ってもいいのね？》

《ああ。あれだけ前に突っ込んできていたら前進している守りは確実に抜ける。後ろの守備陣も上手くいけば抜けるかもしれない。その代わりピッチャー前とフライを上げるのはなしな》

《了解》

『ストライク』

ストライクゾーンに球が投げられた為、島田が強振するも当たらず空振り。

ファーストとサードは島田がバットを振ったのを見て、普通のバツクホーム体制をとった。

続けて島田に同じサインを出す。

『ストライク』

ボールが速すぎて振り遅ている。まともに打つためにはもう少し時間が必要か……。

《とりあえずストライクなら三振しても構わないから強振。ボール球なら待機だ》

島田は頷きバッターボックスに入る。そしてピッチャーの投げた球はストライクゾーンから大きく外れた。

『ボール』

危ね……。やっぱりスクイズを警戒していたか……。

外してスクイズ失敗させれば、ファーストとサードが前進する必要はないもんな。

そしてグラウンドの守備陣がスクイズの警戒を解いた事を見て点を取れる形が整った事を確信した。

《仕掛けるぞ。一発勝負だ。やれるか？》

《任せなさいよ》

島田にこのチャンスを託し、オレは戦況を見守る。手に汗を握りながら成功を祈った。

ピッチャーはファーストにいる秀吉とサードランナーの近藤を警戒しながら投げた。

それと同時に再び近藤と秀吉がスタートをきり、島田がバントの構えをとり当てる。

ファーストとサードはそれを見て慌てて前進するがもう遅い。

上手い具合に勢いを殺した球はサードとキャッチャーのちょうど真ん中あたりで止まる。

サードはグローブを使わず、直接手でボールを掴んでキャッチャーにトスするが、すでに近藤はホームベースに滑り込んでいた。

『1点取つたど　　っ！！！！』

近藤が高らかに宣言し、Fクラスのベンチは湧いた。ベンチに戻ってきた近藤は仲間に揉みくちやにされている。オレはベンチの外に出てアウトになった島田を出迎えた。

「ナイスバント」

「ウチにかかったらこんなものよ」

お互いに顔を合わせてニヤツと笑ったあとハイタッチ。読み勝つ事が出来て良かった。

けどまだ1点だけだ。1点返したただけだ。

ここから先奇襲やバント作戦は通用しないだろう。雄二立案のあの作戦が始まるまでもう2点くらいは欲しい。

2アウトランナー2塁。バッターオレ。

気を抜くな。点数は向こうの方が上だ。けどな……オレはパワーヒッターじゃない。技術で飛ばすタイプの打者だ。

だからよお……狙い撃つぜええええっ！　とか言ってみたりして……。

「お願いします。試^{サモン}獣召喚」

召喚獣が喚び出され、バットを構える。そしてオレも大きく息を吸い込んでゆっくり吐く。

ゆっくりと感覚を研ぎ澄ます……。

閉じていた眼を開き、自分の周りの音シャットダウンした。そして集中の世界に足を踏み入れる。

ピッチャーがセットポジションをとり、振りかぶって投げる。それを見逃してタイミングを測った。

『ストライク』

外角低め一杯の球のいい球だ。

審判が高らかに宣言し、１ストライク。自分がああ球を打つイメージを固める。どのタイミングでボールが来るか、どのタイミングでバットを振ればいいのかというイメージもしっかりと固める。そして一度構えた。

『ファールボール』

イメージしたタイミングで振るが、少しタイミングが違う。振ってみて現実とずれていたイメージを微調整してからバッターボックスに再び入った。

タイミングは覚えた。後は強振。

ピッチャーが足を上げ、前に踏み込み、目一杯胸を反らし投げてきた。

ボールの回転する方向が見える。綺麗なバックスピンだ。

ひたすら目を凝らし、ボールの中心点を見極める。召喚獣もタイミングを合わせてバットを振った。

見極めた中心を……ぶっ叩け！

キンッ！

ライナーとフライの中間を軌道を描く打球は左中間を真っ二つに切り裂いた。

セカンドにいた秀吉はオレが打つたと同時にスタートし、三塁を蹴りホームへ突っ込む。

センターから矢のような鋭い返球が返ってきて、キャッチャーミットに収まった。

それとほぼ同時に秀吉の召喚獣はホームへ滑り込む。クロスプレイだ……！

セカンドベースの上から審判の判定を待った。そして。

『セエ　　フツ！！』

『『『よっしやああああああっ！！！！』』』

こ、これで4-2……。

激しい頭痛、歪む視界、付き纏う倦怠感と疲労感……。

使いすぎたか……。

2塁上でゆっくりと息を整える。これが無想の副作用……。

無想は汎用性が高いが万能ではない。

文字通り神経をすり減らして無理やり集中力を上げ、五感を底上げするものだから当然遣いすぎると体と精神に歪みが生じる。

あと一回が限度ってところか……。

息が整い、汗をジャージの裾で拭う。

次の打者の須川が布施先生の球に手も足も出さず三振してチェンジとなった。

第97話 頑張る者のキセキ

NO SIDE

「お帰りなさい雄二」

帰宅するといつものように母が出迎えにきた。

「……………」

「今日学校から電話があつて上級生と喧嘩したんですって？」

雄二の体がピクリと動く。そのまましばらく立ち止まったまま黙っていた。

「何かあつたの？」

「別に……何もない」

雄二は努めて平坦な声で返事をした。

「何もないわけじゃないでしょう？ 上級生と喧嘩だなんて」

「あいつらがム力つくから殴った。それだけだ」

「ム力つくからだなんて……。本当にそれだけで喧嘩をしたの？」

「そうだよ。」

「お母さん喧嘩はいけない事だと思つわ」

「うるさい！ あいつらがム力つくから殴った！ 他に理由なんて

何もない！」

「あ、雄二！ 待ちなさい！」

雄二は何も言わない。教室で何があつたのかも、何故自分が喧嘩をしたのかも話さない。

そのまま雄二は部屋にこもり中から鍵を掛けた。

「ム力つくから殴つた、ね……」

雪乃は雄二の言葉を反芻する。本来なら悪い意味しか持たない言葉が、雪乃の胸に染み渡つた。

「……おばさん」

雄二がいなくなった事を察して翔子が居間の方から顔を出した。

「ごめんね翔子ちゃん、親子喧嘩なんて見せちゃって」

「……ううん。それ、私が原因だから」

「あら、雄二はそう言つてなかつたわね。ム力つくから殴つたつて」

「……でもそれは雄二が私を庇つてるからで、本当は雄二は私を助けてくれて」

「うん。わかつてる。翔子ちゃんが本当の事を話してくれたもんね」

「……このままじゃ雄二が悪者になっちゃうよ？」

「ううん。それでもあの子が考えてやった事だから母親としては知らないフリをするだけよ」

受け取り方次第では冷たいと取れるような言葉を告げる雪乃だったがその顔は誇らしそうだった。

「……おばさん、嬉しそう」

「そうね。今日ほどあの子の母親である事を誇りに思つた事はないわ。ただ勉強の出来るだけの子になるよりよっぽど嬉しい」

「……雄二は……優しいね」

誰に言うわけでもなく翔子は小さく呟く。
慣れない喧嘩をして、痛い目にあって、悪者になってまで自分を助けてくれた。

その為に母親に嘘をついてまで。

「……あのね、おばさん」

「なあに翔子ちゃん？」

「……私大きくなったら雄二のお嫁さんになりたい」

「あらあら。気が早いわね」

「……きつと幸せにするから」

「ふふつ。それは翔子ちゃんが雄二に言われる台詞よ？」

「……間違えた」

「じゃあいつかそういつてもらえるように、おばさん翔子ちゃんの事を応援するからね」

「……本当？」

「本当よ。翔子ちゃんが雄二を嫌いにならない限り、ね」

「……大丈夫。きつといつまでも好きだから」

それは確信とも言える予感を伴う、未来の自分の心の形。

.....

大貴SIDE

2回の表

教師 4

F クラス 2

バッテリー8番。

「しまつていくぞっ！」
『『『おお　　っ！……！』』』

使用科目は数学。明久の点数は酷いモンだが、8番9番ともに文系の先生で教師チームは1試合ごとにメンバーを総入れ替えしているらしいからやれるはずだ。

問題はトップバッターの布施先生。そろそろ野球仕様の召喚獣の操作に慣れてきているはずだし、さっきのホームランを見てる限り明久の投げる球のタイミングを覚えられているとみて間違いないだろう。

一応対策は用意してはあるが……。果たして通用するだろうか……？

「とりあえずこっちに集中だな」

『プレイ！』

《行くぞ。インコース高め　速球　際どいところ　ボールなつても構わない》

《了解》

『ボール！』

バッターは要求よりも大きく外れた球を仰け反って避けた。そのまま体制を持ち直し、再び構えなおす。立っている位置がさっきよりも外に寄っている。

《外角　低め　遅い球》

さっきとは真逆の球に外角を意識していたバッターは手打ちになり、

引っかけた。

ポテポテの球がピッチャー前に転がり、1アウト。

「よっし！ この調子でいくぞ！」

『『『おおっ！！！』』』

その後、9番がレフトフライに倒れ、バッターは最も厄介な布施先生。

ここで切らないと経験者の寺井先生、点数がアホみたいに高い高橋先生、点数と運動能力共に死角なしの西村先生、体育教師大島先生を一気に相手しなくてはならなくなる。

現実問題として寺井先生と西村先生と大島先生をリードだけで抑えることは不可能。

つまりここで出塁を許してしまえばオレ達は負ける……！

「よろしくおねがいします。試獣^{サモン}召喚」

数学

化学教師 布施文博 227点

Fクラス 吉井明久 31点

目を覆いたくなるような点数差にバツクは愕然とした。

一同こっちにピッチャー交代した方がいいんじゃないかの視線に向けてくる。

まあ、普通にやりあったら勝ち目はないだろう。けど、やり方次第だ。

《明久、アウトコース 低め めちゃくちゃ遅い球 必ず外せ》
《わかった》

『ボール!』

《もう一回同じ球》

明久は頷き投げる。布施先生もあからさまなボール球を見逃す。

『ボール!』

審判が高らかに宣言し、2ボール。

仕込みは済んだ。そろそろいいかな……。

「タイムお願いします」

『タイム!』

「ピッチャー交代。ピッチャー吉井に代わって島田。吉井がセカンドに入ります」

「あとはよろしくね美波」

「任せなさい。バッチリ抑えてあげるから」

島田がピッチャーマウンドに向かい明久からボールを受け取る。オレもピッチャーマウンドに行き、島田と投球の打ち合わせをした。

(島田はアイコンタクトが出来ない為)

後ろから『烏丸大貴……! オネエサマと夫婦の関係になるナンテ……! 憎しみで ヒトガ コロセタラ……!』って声が聞こえてきたような気がするが、今は無視だ。

仮に試合中に何か仕掛けてきたとしても一時的な痛みと引き換えに妨害が教師チームの差し金だと言いがかりをつけて試合展開を有利に運ぶ事が出来るし、清水の介入が教師チームにバレてあいつが処罰を受け今後の憂い無くなるなんて事になってもいい。どっちにしてもオレには損が無い。

まあ、それはそれとしていくぞ。召喚獣を座らせ構える。

島田は大きく振りかぶって 投げた。

『ストライク!』

布施先生は急に変わった球速に対応できず、見逃した。

仕切りなおす間なんて与えない。島田に球を返し、座り構える。

オレが島田に出した指示はただ一つ。それは 。

『ストライク!』

全力投球。何も考えずただストライクゾーンを投げ込む事。

オレの狙いは見せ球によるタイミングの矯正。明久の低い点数によるスローボールをじっくり見てタイミングを覚えた後に島田の速球に対応する事は出来ないだろう。さあ、ラストだ。決めてくれ。

『ストライク! バッターアウト!』

布施先生のバットは空を切り、チェンジ。とりあえず一山超えたな。あとはどうやって点を取っていくか……?」

「ナイスピッチ」

「ありがとう。本当に信じられないわ……」

「何が?」

「3・Aとの試合の時もそうだったけど点数のないウチらが真っ向勝負で互角に渡り合えるなんて……」

「『野球は点数じゃない』か……。認めるのは癪だけど学園長の言うとおりだったね」

「ああ。あとは点を取るだけだ」

この回の打順は7番の明久から雄二、姫路か……。割と好打順だ。

『期待してるぞ、坂本』

『お前だけが頼りだ、坂本』

『頼む。ホームランをかつ飛ばしてくれ、坂本』

お前らそんなあからさまな……。

「みんな、それは僕に余計なプレッシャーをかけまいとする気遣いなんだよね!？」

どんなポジティブシンキングだよ。

『……あー……。まあ、そうだな。ついでに吉井も……』

『もういいよ! 形だけの応援なんていらぬよ!』

「あの、明久君頑張ってくださいね」

半泣きになる明久に対して姫路がそつと声をかけた。

姫路の激励を受けた明久は天使の癒し! と叫び顔を明るくする。

「ひ、姫路さん! ありがとう! 頑張ってくる!」

「はいっ。応援しています!」

「よーし! この打席を姫路さんに捧げるよ!」

明久は意気揚々と打席に向かい構える。姫路に元気づけられ気力やる気共に十分だった。

そして。

『デッドボール!』

「ぎにゃあああっ! 左手首から先の感覚があああっ!」

「す、すみません吉井君！ すっぱ抜けてしまって！」

布施先生の失投により明久はデッドボールを受け悲鳴を上げながら、のた打ち回っている。
それを見て姫路は困ったように呟いた。

「あ、あの……。捧げるって言われてもこれはどう受け取ったらいいんでしょう？」

「は、はあ……」

「ねえ、烏丸」

「恐るべし明久……。タイミング、リアクション共に完璧だ。やはりあいつは笑いに対して天性のバランスと素質を兼ねそろえている……。同じ芸人として嫉妬せずにはいられない……。っ！ ああ！ このやりどころのないドロドロした負の感情をオレはどうしたらいいんだ！」

「どうもしなくていいと思うわ……」

バッターは雄二。不安要素はあるが、運動神経、操作能力、点数総合して間違いなくFクラスのメインフェポンだ。あいつならオレが指図しなくても今何をするべきかわかるだろう。オレはその間に。

「姫路、バツティングの肝はタイミングだ」

「タイミング、ですか」

「そう。布施先生の球は大体1・2の3のタイミングだ。今から投げるからタイミング取ってみるよ」

「は、はい」

「1・2の3」

『ストライク！』

先ほどのデッドボールでストライクゾーンに入れてきただけの球を雄二は見逃した。
何やってんだ？ 絶好球だったじゃねえか……。

姫路はもう一度布施先生の球を見ながら素振りをする。まだ僅かにタイミングがずれている。

「もう一回行くぞ。よくボールを見るんだ」

「はいっ！」

「1・2の3」

ブンッ！ という音が鳴る。鋭いスイングだ。これなら掠っただけでもでかいのが飛ぶだろう。タイミングもあつてきている。

「どうでしたか？」

「タイミングはバツチリ。後はボールをしっかりと見ていけよ。もうひとつ。バットは短く持った方がいい。姫路の点数とあのボールの勢いなら当てるだけで飛んでくからな。」

「はいっ。ありがとうございます。頑張ります！」

「おう！ 期待してる！」

パンツ！ と姫路とハイタッチを交わし、雄二に視線を戻す。

カウントは2ナッシング。布施先生が西村先生のミットを目掛けて投げた。

アウト・ロー・際どい球だが入っている！

雄二の召喚獣はびくりと体を震わせ、その球を見逃した。

『ストライク！ バッターアウト！』

あのバカ野郎が……！
集中できていない雄二にイライラして思わず舌打ちが漏れた。それを見て姫路は不安そうにオロオロしている。
落ち着け。不安を悟られるな。司令塔が浮足立つと周りに不安が伝染してしまう。

「姫路」

「はい」

「初球を叩いてくれ」

「初球ですか……？ 私に出来るでしょうか……？」

「大丈夫だ。さっきの明久のデッドボールの影響で布施先生はまず初球を『置き』にくる癖が顕著に出てきている。お前ならきつと出来る。もし失敗してしまっても気にするな」

「で、でも……」

「自分に出来る事を精一杯やるんだろ？ お前の頑張る姿は周りに力を与えてくれるんだよ。だから頼むぜ、ムードメーカー！」

「はいっ！ どこまでできるかわかりませんが、力の限り頑張りますっ！」

頑張れ……！ 頑張れ姫路……！

「お願いしますっ！ 試験召喚っ！」

物理 Fクラス 姫路瑞希 363点

「……なあ、秀吉。姫路って物理苦手じゃなかったっけ？」

「霧島と仲良くなつてから二人で必死に勉強しておったからのっ」

「そうか……。あいつ頑張ったんだなあ……」

あいつの心意気をオレも見習わないといけないな。

布施先生がファーストに向かい牽制球を投げる。ほとんどリードを取っていないかった明久は余裕でセーフ。ピッチャーはファーストからボールを受け取り、姫路の方をちらりと窺う。姫路はピッチャーから視線を外さない。あいつの集中力は切れていない。そして布施先生は大きく振りかぶって投げた。

「1・2の 3！」

キンツッ！ という音が響き、ボールが高く上がる。

レフトがバツクして落下地点に到着した。落下地点はフェンスギリギリ。

あと少し……！ あと少しだったのに……！

Fクラスのメンバーが一斉に守備に入る準備をする。

その時 強い勢いの風がバツクネットの方から吹いてきた。

その風に煽られて高く上がった球は少しずつ少しずつ流されていく。そのまま伸びて、伸びて。

『『『いけえええええええええつ……！』』』』

そして。

『ホ、ホームラン！』

『『『よっしやあああああああああああああああああああああああ
ああつ……！……！……！』』』』

「ど、同点！ 同点じゃ！」

『夢じゃねえよな！？ ちょっと俺の事殴ってくれね？』

『よーし！ 行くぞ』

『ぶるっああsjrkd fっ！ 強く殴りすぎだ、この野郎！』

『姫路さんサイコー!!』
『結婚してくださいあい!!』

と、バカ騒ぎをしている。

かくいうオレも人知れず小さくガッツポーズ。

「お帰り明久、姫路!」

「か、烏丸君、明久君! 私、やりました!」

「うんうん! すごいよ姫路さん!」

「ああ! これでFクラスの勝ちが見えてきた! お前のお陰だ!」

「あ、ありがとうございます。私皆さんのお役に立つことが出来て本当に嬉しいです!」

姫路は涙ぐんでいて、島田に揉みくちやにされている。明久はそれを見守り大笑いしている。

「油断するな! まだ試合を振り出しに戻したただけだ! 姫路の頑張りを見守るな! この試合絶対勝つぞ!!」

『『『おっつ!!--!!』』』

試合はまだまだここからだ! このまま押し切ってやる!

.....

NO SIDE

「.....雄二の.....バカ.....」

霧島翔子は校舎裏で独りで落ち込んでいた。
雄二のお嫁さんになるという夢を笑われたあの日……。
雄二はあの日『俺はお前の夢を笑わない』と言ってくれた。
それなのに……。

『あんなつまらない物見つけたら俺が代わりに捨ててやる』

胸が千切れてしまいそうだった……。

次に怒りが込み上げてきた。

最後に悲しみで一杯になった。

雄二がわからない……。

自分が好きになった雄二は残酷な事を言う人間だったのか？

それほどまでに自分の気持ちは雄二にとって重荷だったのだろうか？

自分は雄二に好意を押し付けていただけで雄二の気持ちは殺していたのだろうか？

そう考えると翔子は悲しくて仕方がなかった。

膝を抱えて頭を抱え込み、涙が溢れてくる。

「いた！ やつと見つけたわよ代表！」

「……優子？」

後ろから声を掛けられ、顔を上げて振り向くとクラスメイトの木下優子が息を切らせながら立っていた。

「……どうしたの？」

「どうしたのじゃないわ！ 行きましようー！」

「……行くって何処へ？」

「Fクラスの応援よ」

「……いい。行かない」

「どっしって？」

「……私が行っても……」
「しっかりしなさいよっ！」

優子の叱咤に翔子の体がビクリと震える。

「事情は姫路さんから聞いたわ！ あなたが応援しないで誰が応援するの！？ 今代表の『大事な物』を取り戻すためにヒロが頑張ってる！ 姫路さんも吉井君も頑張ってる！ みんな頑張ってる！ だから！ 代表に見届けてほしいのよ！ いえ、代表が見届けなきゃダメ！」

「優子……」

優子に手を引かれ翔子はグラウンドに向かう。
自分の心がわからないまま……。

第97話 頑張る者のキセキ（後書き）

白球の方も更新しました。

よろしければそちらも読んでいただければ嬉しいです。

第98話 真実(前書き)

お久しぶりです。

長い間お待たせして申し訳ないです。

それではどうぞ！

第98話 真実

『チエンジ!』

近藤が打ち取られ、チエンジ。3回の表、4 - 4の同点。使用科目は古典。

ここまでは作戦が上手い具合に嵌り、運も向いていた為互角にやりあう事が出来ている。
むしろ上手くいきすぎている。

けど、ここからが正念場だ。そろそろ教師チームも野球仕様の召喚獣の扱いに慣れてくる頃だろうし、こちらの不安要素が表面化し始めるころだ。そして何よりこの回は2番寺井先生、3番高橋先生、4番西村先生、5番大島先生。さて、どうしよう……。

吉井明久 古典 9点

そう、これがオレの中の懸念の1つ。明久の古典の点数が低すぎる事。

古典が一桁って……。ある程度暗記すれば50点くらいは取れるはずなのに……。
まあ、今言っても仕方ない。あるモンでこの場を凌ぐしかない。
まずは様子見だ。

《アウトコース 低め 遅い球》

点数の低い明久の召喚獣の投げる遅い球。それは野球経験者である

寺井先生には打ち難いだろう。なまじ速い球に慣れていると遅い球は打ち難いモンだ。

案の上寺井先生はタイミングを大きく外し、空振りしてくれた。よし、このままもう一球少し軌道修正して、

《アウトコース 低め 遅い球 少し外す》

『ストライク!』

寺井先生はもう一度空振りする。タイミングが合ってきている。軌道修正をしてきている。それじゃあもう一丁。

《アウトコース 同じコース 遅い球》

『ファールボール!』

寺井先生が打ったライナーがフェンスに直撃する。これだと遅い球はタイミングを掴まれているな。

《インコース 速い球》

明久の召喚獣は大きく振りかぶって投げた。

よし! 注文通り!

キンッ!!

「なっ!?!」

芯から少し外れていたがそれでも威力とコースは十分だ。三遊間を

綺麗に抜けていき、シングルヒット。

く……っ！完全にタイミングを外してその上芯で捕らえそこなっても合わせてくるか……。やられた……。

ノーアウトランナー1塁。明久は膝に手をつき肩で息をしている。

相当疲弊しているようだ……。当然と言えば当然だ。あいつは1回戦の2-E戦、3回戦の3-A戦そしてこの教師戦のトータル12イニングを一人で投げているんだ。

疲れない方がおかしい。今のところ球威は衰えてはいないが、集中力の方はそうはいかない。そして雄二が使い物にならない今、明久が捕まったらオレ達は負ける……！何とかして同点のまま最終回を迎えたい。

「よろしくおねがいます。試験召喚^{サメン}」

学年主任 高橋洋子 古典 867点

高橋無双……。生ける反則……。そんな言葉を真つ先に思い浮かべたオレを誰が責められよう……。いや、責められはしまいつ……！（反語）

「今度は上手くやります」

『上手くやります』が『上手く殺ります』に聞こえるのはオレの気のせいだろうか？ 気のせいだと願いたい。

《外角 ギリギリ外す 遅い球》

野球経験者じゃない高橋先生ならあからさまな釣り球で振ってくれ
る可能性がある。

勿論これは希望的観測なんだけど……。そして失敗したら怪我じゃ

済まないんだけど……。

まあ、それは教師チーム全員に言えることだしここで腹くくらないと……！

明久が1塁ランナーを警戒しながらセットポジションをとり、クイックで投げた。

そして。

「まあ、予測通りの球ですね」

「……っ!?」

高橋先生の召喚獣は思いつきり腕を伸ばして当てに行く。

バカなっ!? コースが読まれていただと!?

キン! という高い音が響き、ボールはライト線に乗り審判が「フエア!」と大声で叫ぶ。

拙い! 長打コースだ! くそ、この人の頭脳を甘く見すぎていた!

『高橋先生! 今度はちゃんと一塁から回ってください!』

「わかっています。同じミスは二度繰り返しません」

高橋先生の召喚獣は1塁ベースを踏み、続けて2塁へと向かう。

ムツリーニの召喚獣の加速と同等……いや、それ以上の速さだ……!

「バックホーム!!!」

ライトに向かい叫ぶがその間に高橋先生の召喚獣はセカンドベースを蹴る。

速すぎる! 間に合わない……!

高橋先生の召喚獣は尚走り続ける。とか思ってる間に3塁ベースも

蹴りホームへ向かってくる。
そして。

「高橋先生……。アウト……です」

ボールを中継しているセカンドが固まった。

高橋先生の召喚獣は3塁と本塁の間を走っていた寺井先生の召喚獣を追い抜いてしまったのだ。

野球のルールでは『後ろの走者が前の走者を追い抜いてしまった場合、後ろの走者はアウトになる』というルールが存在する。が、普通はそんな事起こり得ないケースだ。

高橋先生の召喚獣の能力が高すぎるが故に起きた珍プレー……。
何というか……。皮肉だなあ……。

「納得いきません」と、不満そうに言う高橋先生に「そういう物なので……」と脱力気味に返す寺井先生……。

「ふふ……」

「？ 何を笑っているのですか、烏丸君？」

「いえ。普段ピシツとしていて近寄り難い高橋先生が急に身近な人を感じられて。意外に面白い人ですね」

「そうでしょうか？」

高橋先生って……明久の姉さんの玲さんに近い物が……あるような気がする。

オレの中で高橋先生の急に身近に、そして好意的に感じられた。

『えっと……タッチアウトです先生』

『あ……』

そうこうしている間にボールを持った須川の召喚獣が驚きのあまり

3塁とホームの間に棒立ちになっていた寺井先生の召喚獣にタッチして2アウト。

うーん……。しまらねえなあ……。

その後勝負にならないと判断した西村先生を歩かせて、2アウトラッナー1塁。

バッターは体育教師大島武。この人は西村先生に及ばないもの高い身体能力の持ち主だ。

ここでこの人を打ちとる事が出来れば流れは完全にこちらに傾く。やってやるさ！

《アウトコース 低め 外す 速い球》

『ボール！』

明久が投げた球に対して大島先生はピクリとも動かない。次は。

《インコース 高め 速い球》

明久の召喚獣の全力投球をまたしても動かず見逃した。

一体なんなんだ？

大島先生の行動を訝しみながらも明久に次の投球指示を出す。

《アウトコース 速球》

大島先生は石のように動かない。そして ニヤリと笑った。

なんだその余裕は？ 追い詰められているのに？ 何か嫌な予感がある。明久の体力の方も心配だしさっさと決めよう！

《インコース 低め 速球》

上下左右振りまくった今なら対応する事は難しいだろう。

さあ、決めてくれ！

明久の召喚獣は投球動作に入り　　投げた。が、　　拙い！　ど真ん中に入っている！

大島先生の目が鋭く光る。そして　　、

キン！

ど真ん中に入った絶好急は見逃される事はなく大島先生の召喚獣はボールをバットの真つ芯で捉える。そして打球はワンバウンドして召喚エリアの外に消えていった。エンタイトルルツーベースだ。

西村先生は3塁で止まり大島先生は2塁を踏んだ。

2アウトランナー2・3塁……。タイムをとってピッチャーマウンドに向かった。

「ゴメン、ヒロ。すっぱ抜けちゃった……」

「気にしなさんな。点を取られたわけじゃないからな。それに2ベースまでは打たれても大丈夫だったんだ。次切ろうぜ」

「うん」

肩に手をポンと置き、明久がまだ折れていない事を確認してピッチャーマウンドを後にする。心の中に引つ掛かっている懸念に蓋をして……。

バッターは6番。状況は悪いが、ここまで寺井先生、高橋先生、西村先生、大島先生を相手にして0点に抑えているということ事態かなり運がいい。

いくぞ……！！

《外角　高め　速球　クイックスロー》

明久の速球を受け、審判の『ストライク!』というコールにも構わず3塁ランナーに牽制球を投げる。西村先生の召喚獣は滑り込み、セーフ。まあ、こっちもこれで刺せるなんて思っていない。ただあのまま大きなリードを取られると目障りだから『あまり突っ込んできていたら刺すぞ』という警告のようなモンだ。

こちらの意図が伝わっていないのか、『やれるモンならやってみろ』という意思表示か(恐らく西村先生の性格から考えて後者)は相変わらず大きなリードをとる。

まあ、いい。あまり牽制しすぎて暴投をしてしまうのもつまらない。ランナーは無視してバッター勝負に焦点を絞る。

《外角 低め 遅い球 外す》

『ストライク!』

《内角高め 速球》

さあ、これで……終わりだ!

キン!

なっ……!?

6番の先生は難なくバットでボールを捉えた。

完全に揺さぶっていた。コースも球速も申し分なかった。それなのに……何故打たれている!?

若干芯か外れたが力づくで前に飛ばされたボールはセンター前に転がり西村先生は悠々とホームイン。

折角同点まで持ち込んだのに再びリードを許してしまった……。

弱気になる明久に《大丈夫だ》と視線を送り再び構える。2アウト

ランナー1・3塁。バッター7番。

《外角 低め 外して様子を見る》

『ボール！』

バッターはピクリとも動かず、見逃す。まるで打つ気が無かったようにも見えた。

もう一球外して様子を見るというのも一つの手だが、ここは弱気になって逃げるべきところじゃない……！

《内角ギリギリ 速球》

明久は一瞬だけ不安げな表情を見せた後、引き締めセットポジションをとった。

そして力いっぱい投げた。

キン！

7番の先生の召喚獣は迷いなく振り切り、打球はレフトの頭上をを超える。

それと同時に1・3塁の先生の召喚獣はスタートしていた。

レフトが球を拾い、投げるが 遅かった。すでに大島先生はホームに返っており6-4。

いよいよ苦しくなってきた。しかし……なんで打たれた……？

いくら野球仕様の召喚獣の操作に慣れてきたからっていきなり打てるようなモンでもないだろ？ そして何より……教師チームの一挙手一投足に違和感を感じる。

上手く説明出来ないが……何というか……手のひらの上で転がされているような……そんな錯覚を覚える。

2アウトランナー2・3塁。バッター8番……。

あと1アウトだっていうのに……。アウト1つがこんなにも遠い……。その後8番にヒットを許し、一塁ランナーが盗塁を成功させ、2アウトランナー2・3塁。これ以上ないピンチに対策を練る為にマウンドに集まった。

「何で打たれたんだろ……？」

『何でってそりゃ吉井の球が遅すぎるから』

「いや、多分明久が原因じゃない」

「？ じゃったら何が原因なのかのう？」

「わからない。ただ……」

「ただ？」

「ここで抑えられなければ……負ける」

沈痛な呟きに全員顔が引き締まる。それほどまでに事態は深刻だ。そうだ。ここで大量得点を許してしまえばチームの士気が落ち、姫路の頑張りさえも無駄になり、オレの小烏丸は永久に失われる。そんな事になってたまるか！

「どうするの？」

「……」

『どうするんだ烏丸？』

『何とかしてくれ……！』

『烏丸……』

拙い……。崩れ始めてきている……。焦りが、疲労が、自らの心を蝕んでいき正常な判断を出来なくしていく……。

深呼吸。そして一拍置く。そして横にいる秀吉に話しかけた。

「秀吉、お前はどう思う？ 教師陣の動きに何か気付いた事はないか？」

「ふうむ……。ワシの気のせいかもしれぬが……」

「どんな細かい事でもいい。気付いた事があつたら教えてくれ」

「うむ。何とかじゃな……。最初から何処にボールが来るかわかっているようなスイングじゃったのじゃ」

「……。最初から？ どこに来るかわかっているような……？」

「うむ。なんとなくじゃが……」

「……。そうか……。！ そういうことか……。！ クソツ！ やられた
！」

原因を理解して拳を掌に打ちつけ歯噛みした。

「どづいう事なの？」

「原因は……。オレだ！ オレの配球が全部読まれている！」

「嘘！？ そ、そんな事が……。！？」

「ああ。もつと早く気付くべきだった……。！」

高橋先生の『予想通りですね』と言った時その発言を、その意図を
深読みするべきだったのだ。こんな芸当あの人が出来るのは高橋先生しか
いない！

掌の上で転がされているような違和感の正体はこれだったのか！

「ゴメン……。僕の点数が低いから」

「それ以上言つたらぶん殴るぞ……。！」

剣のある声に明久は少し怯えたように一歩引く。

「これはオレのミスだ！ オレが自分のリードを過信しすぎたから
起きた事だ！ オレの責任を……。持つていくな……。！ 頼むから……」

…持っていかないでくれ……！」

「……………ゴメン」

「……いや、こっちこそ悪い。言い過ぎた」

「しかし配球が読まれていたならどうするのじゃ？ お主の配球はワシらのアキレス腱じゃぞ？」

「……………」

打開策が思い浮かばない。どうすれば抜け出せるのかすらわからない。

どうすれば……。どうすればいい……！？

「いつそ……何も考えずに投げるっていうのは……どう？」

『そんなバカな』

『抑えられるわけないだろ』

『やっぱり吉井は所詮吉井』

「……………いや。案外悪くないかもしれない……………」

全員『正気か、こいつ？』と、いう視線を向けてくる。

「上手くいくのかの？」

「それはわからない。けどこのままオレがリードをしても配球が読まれている以上、確実に打たれる。それだったら一か八か……。ノープランに切り替えて混乱している隙に一気に決めるっていうのは有りだと思っ」

オレは計算で戦略を練る理詰めの人間だ。そして察するに高橋先生もオレと同タイプ。

しかしその力量はオレとは比べ物にならない。故にオレが高橋先生の企みを超える事は不可能。しかし明久ならどうだ？ 出会って大体5カ月になるが、オレは未だに『吉井明久』という人間を測りか

ねている。器が大きいかと思えば、とんでもなく器が小さかったり、優しいかと思えば、とんでもない外道だったり、バカかと思ったらアホだったり……。

『吉井明久』には理屈では測れない“何か”がある。

その“何か”はオレには理解が及ばないものである事もなんとなくわかる。だからこそオレは計画を練る時は明久の存在を『イレギュラー』として捉えている。

高橋先生の理詰め完璧な計画の中に『吉井明久』というイレギュラー因子を混ざる。

それだけで何かが起きるような気がする。

きっちり噛み合った歯車と歯車の間に異物が挟まったら何らかの異常が出るように……。

きつと明久のような存在はオレや高橋先生のような理詰めの人間の天敵なんだろうな……。

「さあ、いくぞ。真っ向勝負だ」

『『『『おうー!!』『』『』』』』

それぞれの守備位置に戻っていく。そしてオレは外野に指示を出す為に声を張り上げた。

「外野深く！ 打たして行くぞ！ フライは全部捕ってくれ！ 転がったら即バツクホーム！」

『『『『おうー!!』『』』』』

「内野！ 2アウトだ！ 捕ったらランナーは無視してファーストに！」

『『『『おおっ!!』『』『』』』』

「ここが正念場だ！ 気合い入れて行くぞっ！」

『『『『おおおおおおっ!!……!!』『』『』』』』

そしてキャッチャーボックスに召喚獣を座らせ構える。
明久はランナーを警戒しながら全力で 投げ込む。

『ストライク！』

内角高めの速球がキャッチャーミットに収まり、審判が高らかに宣言する。

バッターの先生は予想とは全く違った球に混乱している様子だ。冷静に考えたらここは間をとる場面だが、そんな暇は与えない。すぐさま明久に返球し、ミットを構える。

バッターもそれにつられるように構えなおした。

そして 。

『ストライクッ！』

よし来た！ トドメ！

ミットを構えるが今度はバッターは釣られてこなかった。

一旦バッターボックスから召喚獣を出してゆっくり深呼吸をする。

そして落ち着いた表情になるとボックスの中に入って構えた。

そして 。

キンッ！

甲高い音がグラウンドに鳴り響き、センターの浅い所に打球が飛ぶ。センターフライ！ この回凌いだ！

と、誰もが思っただろう。しかし誰もが予想していなかった事が起こった。

『『『なっ……！？』』』

センターの雄二が簡単な凡フライを弾いてしまったのだ。

雄二は慌ててボールを拾うがその隙に3塁ランナーはホームイン。そして2塁ランナーも3塁ベースを踏みホームに突っ込んできた。

「バックホ ムッ！」

雄二はボールを拾い、思いっきりホームに向かって投げる。そしてキャッチャーミットに収まると同時にランナーがホームに突っ込んできた。正面からぶつかり合うミットとランナーの体。点数に差がある為オレの召喚獣は後ろに吹っ飛ばされてしまった。そのまま何回転か横に転がり、しばらく沈黙する。

ボールは……！？ 判定は……！？

『アウト ツー！』

ボールはミットの中に収まっておりランナーアウト。どうにか4点目は防ぐ事が出来たが、傷は浅くない。特に3点目。これは明らかにやらなくてもいい点数だ。

ベンチに戻ってきた雄二の胸倉を掴み上げる。

「テメエ！ やる気あんのかよ！？」

「……………」

「わかってんのか！？ ええ！？ 何とか言ってみろ、このクソ野郎！」

「……………」

雄二は何も答えない。それが益々苛立ちに拍車をかける。

「霧島の事が気になって試合に集中できないか!？」

「……………ッ！」

「甘えた事言つてんじゃねえっ！ お前はFクラスの代表なんだぞ!？ 時には個を殺してでもクラスを勝利に導く義務と責任があるだろうがっ！ 勝つために全員頑張つてんだぞ!？ 姫路だつて苦手なのに一生懸命頑張つてクラス皆で勝ちたいと思つてる！ それに霧島の大事なモンを取り返すのにお前は本当に動く気がないのか!？」

「黙つて聞いてりゃ好き勝手言いやがつて！ お前に何がわかる!？ 俺と翔子の事を何も知らない癖に知つた風な口きいてんじゃねえ！」

「ああ、わかんねえよ！ オレはお前じゃないからお前が何を思つて何を抱えてんのかなんて理解できない！ 『わかる』なんて反吐が出る言葉も使いたくない！ けどな、ここで大事な人の為に動く事の出来ない人間が屑だつて事くらいは知つてるぜ!？」

「…………… 黙れ！ 違う！ 大事だからこそ……………！ 大事にしてるからこそ！ 俺はあいつの気持ちを受け入れるわけにはいかないんだ！ 『勘違いから始まつたあいつの好意』を受け入れる訳にはいかねえんだよっ！」

「勘違い!？ ふざけんじゃねえっ！ それを決めていいのは周りでもましてやお前でもないっ！ それは霧島本人が決める事じゃねえのかよ!？ お前はそれを理由にして霧島の好意を受け入れる事から 霧島自身と向き合う事からビビつて逃げてるだけだろうがっ！ もし誤解が解けちまつたら霧島はお前から離れて行つてしまつかもしれないって考えてなあっ！ だから今みたいな宙ぶらりんな状態を維持している！ 第一今回の喧嘩の理由の『本人が同意していない婚姻届』だつてお前が勝手にそう思つてるだけだろうが！ お前は本当にそんな替えの利くただの紙切れの為に霧島があそこまで怒つたと思つてんのかよっ!？」

「うるせえっ！ それこそ確証のないお前の妄想だろうが！」

掴みあいになり、殴り合いにでも発展しそうな一触即発の空気……。そんな中で姫路が遠慮気味に口を開いた。

「あ、あの……『本人が同意していない婚姻届』ってどういう事ですか？」

「え？ 姫路さんどういう事？」

「いえ……。私が聞いた話と違うと思って……」

そこまで聞いてオレと雄二はそろって姫路を見た。

「えっと……。私は翔子ちゃん没収された物は『如月ハイランドで坂本君から貰ったヴェール』だって聞いたんですけど……」

「は？」

あの時の……！ これで欠けていたパズルのピースが全て揃った……。

思わぬ事実には雄二の目が点になる。そのまま姫路の言葉に耳を傾けた。

「前に翔子ちゃんが嬉しそうにお話ししてくれました。みんなの前で自分の夢を笑われた後で坂本君が『俺はお前の夢を笑わない』と言いながらプレゼントしてくれた大事なヴェールだって……」

「あ。それ、ウチも聞いたわ お泊まり会の時に幸せそうに言っていたの、凄くに印象的だったもの。そっか……。あれ、没収されちゃったんだ……。それはシヨックよね……」

「俺はお前の夢を笑わない」

そんな風に言ってくれた本人が霧島の大事なものを『つまらない物』と言って切って捨てた。

雄二の勘違いで発した軽口。しかし勘違いである事を知らない受け取る側からすればどんな鋭い刃よりも深く刺さるだろう。

「翔子ちゃんなら先生に事情を話せば返してもらえたかもしれないのに……」

「きっと、もう誰にも笑われなくなかったんでしょうね……」

「雄二、なんてバカな事を……」

「……………」

姫路、島田、明久の言葉を聞きながら雄二は黙って目を閉じ何かを考えている。

「雄二。オレはこのまま終わるつもりはないぜ。どんなに低い勝率でも絶対に手繰り寄せてやる。お前はとうする？ このまま終わるつもりか？ 終わらせて……いいのか……？」

「……………そこまで安く見るなよ」

「なら、やることは決まったな」

「ああ。決まった」

3回の裏、7-4。バッターは2番横溝。状況は悪いが、まだ終わっていない。終わらせない。

立ち上がった雄二とお互いの拳をぶつける。

そして目を見合わせた。

言葉はいらぬ。オレ達がやる事はただ一つ……。

「勝つぞ……！」

第99話 ただ、出来る事を……（前書き）

お久しぶりです！

スランプ気味で半月ほど放置気味でしたが、やっと納得のいくものが出来ました！

楽しんでいただければ幸いです。

それではどうぞ！

第99話 ただ、出来る事を……

3回の裏7-4。こちらの攻撃。

雄二が立ち直った。だからと言って決して状況が好転したわけじゃない。寧ろ状況は依然として苦しいままだ。それでも……だとしても……一筋の光明が見えた。そんな気がした。

「おつしゃテメエらッ！ きつちり点数もぎ取って俺らのお宝を取り返すぞ！ 合言葉は」

『Get back！ ERO-BOOK！！！！』

「反撃いくぞ、テメエら！」

『おつしゃああああああああ！！！！』

つものペースを取り戻した雄二の鼓舞で全員に力が入る。士気が高まっていく。

これだ！ これがFクラスだ！

『エロ本エロ本エロ本エロ本エロ本エロ本エロ本エロ本エロ本エロ本……』

『！』

『抱き枕水着写真シャワーカーテンエロゲ……！』

大事な事なので2度言わせてもらおう！ これがFクラスだ！

「ヒロ、俺は例の作戦の為の根回しを始める。攻撃の指揮はお前に任せる。いいな？」

「了解」

『プレイ』

『シャアアアツス!!! 試獣召喚!!!』
サモン

雄二はケータイを片手に外の仲間と連絡を取り、根回しを始める。オレはオレでムツツリーニからこれまでの配球が載っているデータを貰い、癖を探し始めた。高橋先生のようにすべてを見透かす事は出来ない。無駄に終わるかもしれない。だとしても何も出来ない訳じゃない。だからこそやれる事はすべてやる。足掻けるうちはみっともなくとも、這いつくばってでも足掻き続けてやる!

2番の横溝に指示を出した後、データを広げ思考を展開させる。癖らしい癖と言え、間を取りたいときにボールを要求する事くらいか……。

西村先生のリードは基本的に攻撃的だ。それは西村先生の性格の影響かもしれないし、『打てるものなら打ってみろ』という自信の表れかもしれない。もしくはその両方か……?

何にしても西村先生は内角高めを多用する。データを見る限りそんな印象を受ける。

つまり内角は西村先生が最も信頼しているコース。つまり決め球。問題はそれをどのタイミングで投げてくるか予測するってところか……。

『アウト!』

そうしている間にセーフティバントを試みた横溝がファーストでファースアウト。けど、これも計算の内。オレだって教師チームにセーフティバントの様な奇襲がそう何度も通用するとは思っていない。このアウトは布石。この回に点を取る為の布石だ。

《わかってるな》

《うむ。心得ておる》

秀吉がバッターボックスに入り、再び思考を展開させる。
どのタイミングで決め球長てくるかわからないなら。

《ボール！ フォア！》

秀吉が執念でフォアボールを勝ち取り、1アウトランナー1塁。ネクストバッター島田。

島田はパワーがある訳ではない。かといって秀吉のように小手先の技術がある訳でもない。

さて、どうする……？ どうしたらいい……？ このチャンスを逃す手はない。

そうなると定石通りに送りバントの方がいいか？

数多の選択肢の中からどうすればいいのかを吟味する。そして島田と目があつた。

まっすぐに、迷いのない目だ。そうだな……。出来る事は限られて
いる。そうだな。ここで逃げたらさっきの横溝のアウトが無駄にな
る。それにこの試合は1点をもぎ取って終わりってわけじゃない。
次に繋がるものが無ければ追加点なんて取れやしない。

だから。

左耳を触る。前の回に島田と打ち合わせたエンドランのサインだ。

島田は強気に笑いバッターボックスに入った。そして。

ガツという音になる。あの音はボールがバットの先に当たった音だ。
横向きに回転をしたボールは弾む事なくピッチャーの方へと転がっ
ていく。

拙い！

『ゲッツーコースだ！』

それでも秀吉は2塁に走るしかない。ピッチャーは前に突っ込み弾

まない横回転のボールにグローブを延ばす。その時、急に弾まなかつたボールが跳ねた。跳ねたボールをピッチャーはファンブルした。慌ててボールを拾い、一塁に投げようとするが、

『セーフ！』

『『よっしゃああああああつ！！！！』』』

あ、危ねええつ！ 危うくゲッツー地獄行きコースだった……！
けど何でボールが急に弾んだ？

さっきボールが妙な動きをしたところを見るとそこは僅かに盛り上がっていた。

イレギュラーか……。ラッキーだったな。どうやら今のところ運はこっちに向いているようだ。この流れをそのまま掴む！

『バッターラップ！』

つて次オレだよ！

急いで準備してバッターボックスに入る。ちょうどいい。さっき思いついた手を試させてもらう。ラスト一回……！ ここで使わせてもらう！

目を瞑り、ゆっくりと感覚を研ぎ澄ましていく。

自分の鼓動を感じ、自分の五感のすべてを掌握する。

目を開くとそこは雑音を一切シャットアウトした静寂な世界。
無想。

ピッチャーがセットポジションをとり、足を上げて、踏み出して投げた。

『ストライク！』

外角低めに見事に決まった。

しかし、今さらだけどさすが教師だな。球のスピード、コントロールどれも申し分ない。

けどよお、打てないほどじゃない！

同じ様にもう一球外角低めに投げ込まれる。それを召喚獣を操作し、ファールにする。

『ファール！』

『ボール！』

『ファール！』

『ボール！』

外角の球をすべてファールにして少しずつピッチャーを追い詰めていく。カウントは2-2。ファールはいくら打ってもいい。そしてそれによって相手の集中力を削ぎ、精神的にプレッシャーを与える事は出来る。

ピッチャーは少し間を置き、セットポジションをとった。

決め球がくる！

なんとなくだが、間違いない。

それを感じ取りオレはバントの構えをとるが、守備陣は誰も前進しない。

こっちの狙い通り！

ピッチャーは全力で、剛速球を、内角高めに叩きこんできた。

そしてその球の中心を見極めバットを引き、振り抜き、バットがボールを捉える。

狙うは一塁線！

流した打球はファーストの頭を越えて、ラインの上を跳ねる。審判がフェアを宣告した。その間に秀吉島田はそれぞれ進塁し、1アウト満塁。高橋先生のレーザービームの威力を知っている為、ライト方面にボールがいった場合1つしか進まない様に念を押してあった

が、どうやら正解だった様だ。

あのままもう1つ進んでいたら確実にアウトになっていただろう。残り一回を使つてしまいい体中に先ほどとは比べ物にならない倦怠感、頭痛、眩暈が付き纏う。それでもまだ倒れる訳にはいかない。

動きが鈍くなつた体に鞭を打ちバッターボックスの須川に向けてアイコンタクトを送る。

《やる事はわかるか？》

《ああ。大丈夫だ》

仕込みは終わった。あとは頼むぞ、須川。

須川がバントの構えをとる。守備陣はさっきと同じ様に前進守備はとらない。当然と言えば当然だ。これまで散々奇襲策としてバスターやエンドランを使ってきたのだ。当然これもバスターだと考えているだろう。

ピッチャーが投げると同時に全員スタートする。

須川はそのままバントの構えを崩さずにバットにボールを当てて勢いを殺す。

まさか本当にバントをするとは思っていなかった守備陣は慌てて前進して、グラブにボールを収め、キャッチャーにトスをした。それと同時に秀吉の召喚獣はホームに滑り込む。タッチとホームインはほぼ同時……！

判定は。

『セ　フ……！』

『『『うおおおおおおおおおおおっ……！！』』』

7-5……。あと3点……。！　1アウトランナー満塁。バッターは我らが誇る鉄砲玉、吉井明久……。！

《スクイズの構えだけして掻きまわすぞ》

《了解だよ！》

ピッチャーが投げると同時に明久はスクイズの構えをとる。それを読んでいたバッテリーはボールをストライクゾーンから大きく外した。当然明久はバットを引き、ボール。

守備陣も前進して警戒しているのが良く分かる。

次も同じようにスクイズの構えだけという指示を出す。

スクイズ警戒のため同じようにストライクゾーンから外して2ボール。周りの警戒はまだ解けていない。これだけ警戒されていたらスクイズは難しい。止むを得ない。普通に打ってもらおう。

《ヒットイング。多分内角高めにストライクを入れてくるだろうから注意。ピッチャー前だけは避けるよ》

《うん。了解》

明久がサインを確認し、バットを構えたのを見るとピッチャーは打球モーシヨンに入った。

そしてありったけの力を込めたボールをキャッチャーのミットを目掛けて叩きこむ。

コースは 内角高め！ やっちまえ明久！

明久の召喚獣がステイバック、そしてバットがボールを真っ芯で捉えた。

キンッ！ という音が鳴り響き、ボールはショートの間を越える。サードランナーはタッチアップの為、3塁ベースに戻り、いつでもスタートを切れるように準備する。しかしランナーはスタートをする事が出来なかった。フライの落下地点が浅すぎたのだ。

きつとボールの勢いでバットが押し戻されてしまったのだろう。

あれではタッチアップをする事が出来ない。レフトは明久が上げた

フライを難なくキャッチ、ランナーは全員ベースに戻る。これで…
…2アウトか……。
けど、次は……！

「^{サモン}試獣召喚！！」

雄二が真剣な表情でバッターボックスに入る。今のあいつにオレの指示は必要ないだろう。
集中している雄二を見て安心してその場を任せる。

初球。いきなりぶつ叩いた。鋭い打球は二遊間を真つ二つに切り裂き、センター前に転がる。そして島田がホームイン。7 - 6。あと1点で同点。2アウト満塁で尚もチャンスは続く。しかもネクストバッターはFクラスのリーサルウェポン姫路瑞希。

「よ、よろしくおねがいますっ！ ^{サモン}試獣召喚っ」

召喚獣を呼び出しバッターボックスに入る姫路。緊張しているのかやや表情が固い。

「姫路さん！ 気楽にね！」
「は、はいっ！」

明久が声をかけるが、責任感の強い姫路の緊張がそれくらいでほぐれる筈がない。そして。

『ットライク！ バッターアウト！』

ボール球を振ってしまい3球三振。チェンジになった。
全員一斉に守備位置に着く為に走っていく。センターに向かおうと

する雄二を明久が呼びとめた。

「雄二」

「なんだ明久？」

「ピッチャー交代」

「……いけるのか？」

雄二は明久の提案に少し考えてから確認するかのよう聞き返した。

「やるしかないじゃないか。この勝負負けられないんでしょ？」

「……そうだな」

「どういう事じゃ明久？ ピッチャーが雄二というのはいいのじゃが、その球を捕れるキャッチャーがおらんではないか。姫路やヒロに任せるのかの？」

「ははつ。何を言ってるのさ秀吉。姫路さんにそんなきついことをやらせるわけないじゃないか」

「じゃが、そうなると雄二の球を捕れるのは」

「いるよ、一人。この状況でキャッチャーをできるのが」

明久は真剣な表情で雄二を見据え、言い放った。

「来い雄二。僕が、お前の球を全部捕ってやる！」

「待て！ それなら点数に余裕のあるオレの方がいいだろ？ オレなら捕れないとしても、前に転がす事くらいは出来る。わかってるのか？ 受け損ねたらお前の召喚獣は消し飛ぶんだぞ！？ 態々お前がリスクを冒す必要は」

「ヒロも隠しているけど、もう体力が限界に近いでしょ？」

「ッ！」

明久の鋭い指摘に思わず絶句する。明久の言うとおりオレは無想の

使い過ぎで体力がもう空っぽに近い。周りの音がやけに頭に響き、立っているだけで足が震えるほどに体力を消耗してしまっている。

「だから僕がやる。姫路さんがそうして見せてくれたように、僕も僕の出来る事を精一杯やるんだ！」

「明久君……」

「言ったな明久。その台詞、後悔すんなよ。受け損なったらお前の召喚獣が消し飛ばすからな！」

「望むところだっ！」

.....

明久SIDE

『プレイ！』

審判が開始を宣言して試合が再開される。

《ど真ん中。ストレートいくぞ》

《了解》

ピッチャーの雄二が送ってくるサインに、僕がミットを構える。ズバンツ！ という音とともに腕や肩にフィールドバックがやってくる。痛ッ！ あの野郎、本当にゴツイ球を投げてきたな。

雄二の点数は281点。対して僕の点数は84点から75点へと真正面から受けたにもかかわらず減少していた。

もっと体全体を使って衝撃を殺すように受ける必要がある。そのためには集中だ。投げ込まれる球に全神経を集中させてダメージのないように捕球するんだ。

『ストライク!』

「ナイスボール!」

「当然だ」

《ど真ん中。ストレート。すぐにいくぞ》

雄二はボールを受け取りながらアイコンタクトを送って来た。

あの野郎……っ! 間髪入れずに投げる気か……っ!?

雄二はボールを受け取ると普通はサインの確認するための間を待たずに第二球を投げてきた。さっきと同じコースに一瞬でボールが到達する。そして僕の体にまたフィードバックが走った。

『ス、ストライク!』

受けたボールを投げ返し雄二に視線を送る。

《危ないじゃないか! 捕り零したらどうするんだよ!?》

《温い事言ってるな! 俺の球全部捕るんだろ!》

あの野郎! 上等じゃないか! 点数では負けてても召喚獣の扱いでは僕の方が格段に上だっことを見せてやる!

そんな僕の考えが伝わったのか、雄二は特に返事を求めずボールを握りなおした。

今度のコースは こいつの事だ。目を見なくてもわかる。

「さて、先生方。手前勝手に悪いが……こっちも色々事情が変わっちゃまったんだ」

直後、ストライクゾーンど真ん中に構えたミットに剛速球が叩き込まれた。

『ットライク！ バッターアウト！』

「これ以上は一点たりとも取らせやしねえ！」

.....

大貴SIDE

4回の裏。7-6。1点ビハインド。バッターは1番から……。

「近藤、横溝、秀吉！ 作戦だ。いいか？ このまままともに向こうとやりあつたところでこっちはギリ貧だ。たとえ偶然でフォアボールやヒットが出ても、点数を入れられるほどに続かねえし、もう奇襲は通用しないだろうからな。だから、その後の例の作戦に全てを賭ける。お前らは、なんとか時間を稼いでくれ」

「うむ。了解じゃ」

「エロほ 参考書の為だ。時間稼ぎくらいいくらでもやってやるさ」

「その代わり、次の回はしくじんなよ」

『プレイ！』

「雄二、仕込みの方は？」

「バッチリだ。クラスの連中にも指示は出してある。あとは時機が来るのを待つだけだ」

言うのは簡単だが、あの剛速球の前では時間稼ぎも容易ではない。さっきまでオレ達が対等にやり合っていたのは、教師陣が次から次へと続く奇襲で浮足立っていたからと、姫路の存在、そして運に少なからず助けられていたからだ。

『ストライク！ バッターアウト！』

『グッ……！』

近藤も粘ったが決め球をイン・ローに叩きこまれ、三振する。教師陣にはもう浮足立った様子は見られない。そしてオレは横溝の視線を送る。

《西村先生の決め球はインコースだ。ギリギリまでは手を出さな。見せ球に釣られるなよ？》
《了解だ》

横溝はフルカウントまでボールに手を出さず、2・3になってから叩きこまれるインコース高めの球を何球かファールにする。しかし。

『ストライク！ バッターアウト！』

残るバッターは秀吉だけだ。

『ファールボール！』

秀吉は必死に食らいつく。ファールを打つ度にバッターボックスから召喚獣を出し深呼吸して、サインを確認する事で少しでも時間を稼ごうとしている。

オレも配球のデータを頭に入れてどのタイミングで決め球がくるか予測し、秀吉にコースを伝える。

『ファール！』

あと少し……！ あと少しなんだ……！

『ファール!』

頑張り! 頑張り! 頑張り! 頑張り! 頑張り! 頑張り秀吉!

『ファール!』

何度目かわからないファールに手に汗を握る。そんな中ムツツリー二が顔をあげて呟いた。

「……………来た!」

「っ!」

『ジ、ジジ……………!』

「来たかっ!？」

『これより、中央グラウンドにて、借り物競争が始まります。出場選手の皆さんは、所定の場所に』

「……………来たあっ!」「……………」

クラスの全員の声が重なった。

その直後、秀吉が打ち上げた球が捕球されて、ついにアウトとなった。

しかしこちらの目的は果たす事が出来た。細い細い綱渡りを終えてやっと見えてきた勝機に全員はしゃいでいる。

「やれやれ……………。どうやらうまくいったようじゃの……………」

「ああ! よくやってくれた秀吉! 近藤! 横溝!」

「何を喜んでいるのか知らんが、守備につく準備をしろ」

「わかってます。けど、ちょっと待って下さい」

「? 何を待てと?」

「今にわかりますよ。そろそろ来ますから」

西村先生は明久の言葉に訝しげに首を傾げ、辺りを見回すと、こっちに駆けてくる複数の人影が見えた。

「なんだアイツらは。あんなに急いで」

『遠藤先生！ 借り物競争です！ すいませんが一緒に来て下さいっ！』

『えっ？ でも私、今からここでリーディングの立ち会いを』

『いいから来て下さい！』

『でも』

『なんと言おうとダメですよ！ 今日、野球よりも体育祭が優先されるんですから！』

『っ！？』 『っ！？』 『っ！？』

グラウンドに来たのは全員Fクラスの生徒だ。借り物競走に託けて立ち会いの教師全員を引っ張っていくというのが雄二の考えた乾坤一擲の作戦だった。

ああ、こっちの狙いに気がついて驚いてら……。実際こんな策を思いつくのは雄二くらいのモンだろう。オレが策士として雄二に敵わないと考える理由はここにある。

オレは『取り決められたルールの中で理論を展開して相手の裏をかく』というのが主流だが、雄二の場合は『決められたルール自体をぶち壊して自分達が有利に戦えるフィールドに相手を引きずり込む』という策が多い。相手からしてみればどちらが厄介かといえば確実に後者だ。ルールに則った策は予想のしようがあるが、前提となるルールをぶっ壊してくる策は予想のしようがないからだ。本当にえげつない。

立ち会い可能な教師は全員Fクラスの生徒に引っ張られていった。

「これで立ち会いの先生はいなくなつたな、鉄人」

「仕方ない。こうなつたらさっきの回の立ち会いの先生にまた頼んで」

「おっと。それはルール違反だ。事前に決めただろう？」同じ科

目は二度使わない』と」

「ならばどうしろと言つんだ。立ち会いの教師は他にいない。試合に参加している教師は立ち会いができない。こっちのチームに8人でやれとでも言つのか？」

「んな事言つわけないですよ。まだ勝負できる科目は残っているんですから。立ち会いの先生がいなくても、野球の勝負が可能な科目が、ね」

「まさか……」

「気づいたか鉄 西村先生。そう。そのまさか、だ。五回の勝負は、体育の 実技で勝負といきましょう」

「全員グローブをつける！ 最終回はちよつとばかりハードだぞ！」

『『『おおっ！……！』』』

乾坤一擲のこの作戦。届いてくれよ！

《外角 低め カーブ》

「フンツ！」

カキインツ！

雄二の投げた球は明久のミットに収まる事なくバットで捉えられる。ラインドライブのかかった打球はセンターに飛んでいく。ワンバウンドした打球をセンターが捕球し二塁に投げる。これでノーアウトランナー一塁。西村先生相手にシングルで済んで良かったというベキだろうか？

次の打順は大島先生……！ 全員の顔に緊張が浮かび、構えに力が入る。

《外角 低め 速球》

『ストライク！』

まずは様子見といった所だろう。初球は余裕を持って見逃した。

《外角 低め 速球 外す》

『ボール』

流石に見せ球に釣られるようなことはないか……。

《真ん中 ストレート 全力投球》

勝負をかける気だな……！

腰を落とし、踵を浮かせて打球に備える。

そして。

キーンッ！

鋭い打球が二遊間に打ちこまれる。島田はその打球に飛びつき、倒れこむ。

「ボール二つ！」

「烏丸！」

「おう！ 秀吉！」

「うむっ！」

島田がベースカバーに入ったオレにボールをよこし、ベースを踏ん

だオレは秀吉のグローブに投げ込む。6・4・3のゲッツーだ！

「っし！ 2アウト！ あと1つだ！ 全員気を抜くなよ！」

『『『おおっ！！！』』』

《内角 高め 全力投球》

『つとと！？』

『ストライク！ バッターアウト！』

ラストバッターは内角高めに叩きこまれた決め球を空振り3アウト
チェンジ。

オレ達は全員ベンチに戻り雄二を中心に円陣を組む。

「さて……。これで、残すところは俺たちの攻撃だけだ。7 - 6。

これが最後のチャンスだ。1点とって追いついてもダメだ。ここで
逆転できなきゃ、俺たちは負ける。延長戦に入ったら勝ち目はねえ」

そう。体育の実技が使える回は最終回だけ。奇襲で浮足立たせる事
の出来ない今、オレ達

が召喚獣の勝負で勝てる可能性は皆無といってもいい。だからこれ
が真正正銘最後のチャンスだ。

「この一回が、俺たちの正念場だ。何が何でも2点もぎ取れ。いい
か、絶対に勝つぞ」

『『『おうっ！』』』

「それじゃ、ウチは土屋に交代してもらおうかな」

「どしたの美波？ 自信がないの？」

「そりゃまあ、ね。いくらなんでも、ウチだって男子と同じレベル
で野球なんてできないもの。体力もそうだけど、経験でも敵わない
し」

確かにそうだ。島田の言う事は理にかなっている。

「そ。だから、土屋と交代。きつとウチよりウチよりうまくやってくれるだろうし、それにこういう時って、男の子が頑張るから格好良いんじゃない？」

島田はそう言って楽しそうに笑った。

「だ、そうだ。やれるかムツツリーニ？」

「……………問題ない。待ちわびた」

ムツツリーニがバットを手に取り、ヘルメットをかぶりバッターボックスに向かう。

ピッチャーは大島先生。キャッチャーは西村先生か…………。

『プレイ！』

大島先生は大きく振りかぶり投げた。

『ストライク！』

おいおい。なんて速さだよ…………！ 130キロ後半くらいか？

やれるのか、ムツツリーニ！？

「……………ッ！」

大島先生が投げた球をムツツリーニは空振りする。

おいおい…………！ ずいぶん大振りじゃないか！ そんなんじゃないか！ そんなに当たらないもんも当たらなくなっちゃうぞ！

「……………」

『ボール』

ムツツリーニは何かを狙っているようにジッと大島先生から視線を外さない。そして大島先生が最後の球を投げた。

「……………いけっ……………！」

ムツツリーニはそういうと同時にバットを構えなおした。あれは。

『セーフティバントだ！』

転がったのは長谷川先生が守るサード前。咄嗟の事で長谷川先生の対応が遅れ、お手玉をする。その間にムツツリーニはファーストを駆け抜ける。

『セーフ！』

『『『『おおおおー……………っ……………！！……………』』』』

ノーアウトランナー1塁。こいつはチャンスだ！ バッターは5番のオレ！ 打てないほどではなかった。ここで何としても打って点を入れてやる！

バッターボックスに入り、中の土を慣らし、バットをベースに当てて立つ位置を測る。

そしてゆっくりと構えた。

大島先生はセットポジションを取り、投げた。

『ストライク!』

ボールが外側に逃げ、空振りした。
今のは変化は……! スライダー!?

「大人げないと言っなよ?」

「言いませんよ。寧ろ大人げないのは大歓迎です」

「ふっ、そうか」

大島先生の方を見据え、投球に備える。スライダーに狙いを絞り、
投げてきた球を振るが、

クツ……! 追い切れ ない!

『ストライク!』

スライダーの変化の鋭さについていけずに空振りした。

バッターボックスから出て、バットを杖のように立てて息を整える。
無想を使えば容易に打てるのだろうが、今のオレは無想を使うだ
けの体力が残っていない。疲労がピークに達しており、普通のプレ
ーをするのも精一杯の状態なのだ。

この状態じゃ 大島先生のスライダーを打つことは無理……。
天を仰ぎ、自分の取るべき道を考える。ベンチを振り返る。

そのあとファーストランナーのムツリーニを見た。ムツリーニ
はオレのやろうとしている事を察したようでコクリと頷く。

バッターボックスに入り、構えた。そして大島先生が投げると同時
にバットを構えなおした。バントの構えだ。

コンッ!

出来る限り勢いを殺してサードの前に転がす。一塁に向かって全力

で走るが、ボールを拾った西村先生がファーストに送球しアウト。けど、これでいい。これでムツツリー二を二塁得点圏に送る事が出来た。打てないなら、せめて後に繋がる何かを残したい。オレの出来る事はここまでだ。だから。

「あとは任せたまふ、雄二……」

第99話 ただ、出来る事を……（後書き）

次回で野球編終了（にできるといいなあ……）です。
お楽しみに！

第100話 ヒーローは誰が為に

明久SIDE

「いいところで回って来たじゃないアキ。ここで打てばヒーローよ」
「あの、頑張ってくださいね明久くん！ 応援していますっ！」
「うん。ありがとう。期待に応えられるかどうかかわらないけど、
精一杯やってくるよ」

とりあえずそう答えて僕はバッターボックスに向かう。

「吉井か。面白い場面で出てきたな」

「そうですね。ここでヒットが出たら同点。ちょっとしたヒーロー
ですよ」

「女子の応援もあるんだ。お前はここで打ちたいだろうが、こっち
も教師としてのプライドがある。そう簡単には譲ってやれんな」
「譲ってもらえるなんて最初から思ってませんよ」

大島先生がセットポジションをとり、投球モーションをそして一瞬
後鉄人のミットにボールが収まっていた。

『ボール』

一球目から外してくるあたり少しは警戒して貰ってるんだろうか？
何にしてもあのヒロですら打てなかった球だ。そう簡単には打てな
いだろう。

「一球目から振ってくると思ったんだがな」

「女子の前で格好つけると思ったんですか？」

「まあ、そんなところだ」

鉄人が大島先生にボールを戻す。僕はバッターボックスの土を慣らして再び構えた。

大島先生は2塁にいるムツツリー二の動きを確認したあとボールを投げる。ストライクゾーン低めだ。

『ストライク!』

鉄人は黙ってボールを見逃した僕を見て怪訝そうな顔をした。何か企んでいるように見えたんだろう。

鉄人のサインを確認し3球目を構える大島先生。

『ボール』

「どうした吉井? 打たんのか?」

「はい。えっと……色々作戦とかあるんです」

さらに警戒してくれるようにと、軽口を叩いてみる。僕の言葉を鉄人がどう受け取ったかわからないけど、静かにミットを動かす気配が伝わって来た。

『ボール』

またしてもボール。これで1ストライク3ボール。向こうは勝負するしかなくなった。

「……………」

鉄人は無言でボールを大島先生に投げ返し、構える。5球目はスト

ライク。

僕はバットを振らなかった。振れば2回に1回は打てると思う。けどそれは2回に1回は打ち損じてしまっただことだ。

「いいのが吉井。同点タイムリーのヒーローにならなくて」

「いや。なれるなら確実になりたいですよ、僕だって」

鉄人は再び僕に話しかけてきた。僕がヒットを狙っているように見えなかったんだろう。さっきの球を見逃したんだから当然といえば当然なんだけど。

バットを短く持って構えると、間をおいて6球目が飛んできた。

これは 入ってる！

カキンッ！

『ファール！』

カウントは2 - 3。

「フォアボール狙いか。ずいぶん消極的だな」

「あ、いえ。そういうわけじゃ」

「誤魔化すな。そんなスイングを見せられたら馬鹿でもわかる。折角のチャンスだというのに勿体ない真似を」

「僕もそう思うんですけど！」

カキンッ！

『ファールボール！』

「えっと……僕だったらすごく悔しいと思うんです。大事な物のか

かった試合なのに自分が何にも出来ずに終わるっていうのは「

「？ 何を言っているんだ？」

「自分の譲れないものを他人任せにすることのやるせなさというか、憤りというか、納得のいかない感じとか……」

「お前が何を言おうとしているのか、いまいち理解できん」

カキンッ！

『ファールボール！』

「えっと……上手く言えないんですけど、要するに」

「要するに何だというんだ？」

「今日の主役は僕じゃないってことです」

『ボール！ フォア！』

これで僕は一塁に向かう事が出来る。

「それより先生こそいいんですか？」

「なにがだ？」

「勝負に徹するなら僕と雄二を敬遠して姫路さんを狙うべきだと思うんですけど」

「ふん。見くびるなよ吉井。以前にも言っただろう。『俺達教師は生徒の模範となる存在だ。向かってくる生徒を正面から受け止めずに何が教えられる』と」

そのまま会話を打ち切りバットを渡す為雄二の方に向かう。ネクストバッターの雄二はジッとこちらを見ていた。

「これで肝試しの時の借りは返したよ」

「ほざけ。お前への借りがあれだけだと思つなよ」

「それじゃ、後は任せた」

「わかっている。必ず打つ」

力強い返事に頷いて僕は一塁へと向かった。

.....

NO SIDE

1点を追うFクラス。それを全力で阻止しようとする教師チーム。意地と意地とのぶつかり合い。坂本雄二は普段の余裕な態度から打つて変つて真剣な表情でバッターボックスに入り構える。2アウトランナー1・2塁。シングルで同点にするだけでは延長で負ける。長打ができればサヨナラ勝ち。なんとも分かりやすい構図になった。ピッチャーの大島がゆっくりと構え 投じた。

『ボール！』

投げられた球は外角ギリギリに収まっていた。打つ気に逸った者ならさつきの球を引っかけた終わりだった。しかし今の雄二は冷静だった。冷静に球を見極め、チャンスを見極め、狙っていた。大島が第2球を投げる。

キンツ！

『ファールボール！』

内角高めに投げ込まれたボールを雄二は思いっきり引つ張り、ボー

ルはレフト側のフェンスを飛び越えて行った。フェアグラウンドに飛んでいれば確実に長打だっただろう。大島は西村のサインを確認する。そして。

『ストライク！』

雄二は大島の投げたスライダーを空振りした。まったくタイミングが合っていない。

（なんてキレだ。あれが ヒロですら打つ事の出来なかったスライダーか……！）

雄二は一旦バッターボックスから出てゆっくりと深呼吸をする。そして気持ちが落ち着いたので確認してから再びバッターボックスに入った。

雄二が構えたのを確認した大島はすぐに投球モーションに入り、スライダーを投げた。

『ボール！』

判定はボール。ボールだと確信を持って見逃したのではない。ただ、単純に手が出なかつたのだ。もはや駆け引きは必要なかつた。大島はこのまま決め球であるスライダーで押し切ってしまうつもりなのである。

タイミングが合わず、スライダーのキレに対応出来ていない雄二に勝ち目はない。

雄二の手が震え、足がガチガチになる。自分の背負っているもの、自分が打たなければ負けるという事実、負けたくないと思う気持ちが雄二の緊張を極限まで高めてしまったのだ。

(チクシヨウ……！ 止まれ……！ 止まれよ……！)

必死に心の中で叫ぶが、手足は思い通りに動いてくれなかった。その時。

『……雄二……！ 頑張つて！』

聞き慣れた声。昔から聞いてきた声。自分が誰よりも大切に想っている幼馴染の声。

観客席を振り返る。そこには 霧島翔子の姿があった。彼女は顔を真っ赤にして目に涙をためて必死に雄二に声援を送っている。

(なんて顔してんだよ、あいつ……)

雄二はフツと笑う。さっきまで緊張でガチガチだった手足がポカポカしてきた。

(翔子……。まだ……。こんなクズを信じるのか。まだ……。信じて、くれるのか……?)

雄二はゆっくりとバッターボックスに入る。

(ここで打てなきゃ男がすたる！)

雄二の集中力、テンション共に最高潮に達した。どこにも余計な力が入っていない自然体でバットを構える。大島はセットポジションをとり、投げる。スライダーだ。キンッ！

『ファールボール！』

スライダーを正確に芯で捉え、レフト線に鋭いライナーが飛ぶ。

『ファールボール！』

続けて投げてきたスライダーそのまた次に投げてきたスライダーも引つ張りファールにした。マウンド上の大島は表情には出さないが苛立っている。
そして。

キーンッ！

スライダーだけでは打ちとれないと判断した西村が要求したストリートを雄二はバットの真つ芯で捉えた。その瞬間2塁ランナーの康太と1塁ランナーの明久は次の塁を目掛けて疾駆する。打ったボールはセンター前に落ちた。長打を警戒して深く守りすぎていたセンターは慌てて前に走る。

康太が3塁ベースを蹴り、ホームへ向かう。明久も2塁ベースを蹴り3塁に向かう。

センターはボールを処理し、中継に入った大島先生にボールを渡す。その間に康太は生還し、同点。明久は3塁ベースを蹴り、ホームへ向かった。

『『『吉井！？』』』

Fクラスのほぼ全員が明久の行動を無茶だと断じた。

「いけええええええっ！！ 明久ああああああっ！！」

しかしベンチで見守っていた大貴は大声で明久の行動を後押しした。

彼は普段の思考は現実的でギャンブルはしない堅実派なのだが、ここは走るべきだと判断した。ネクストバッターは姫路瑞希。素人な上に運動が得意ではない瑞希は野球の実技向きではない。回ってきたら確実に打ち取られてしまうだろう。もし仮に明久がアウトになつたとしたら次の回の攻撃は野球仕様の召喚獣での勝負に戻る。そうなれば表を無得点に抑えて、瑞希がホームランを打つという可能性がまだほんの少し残っているからだ。

大貴の後押しを受けて3塁を蹴つた明久は加速する。だが　気合だけで勝てるほど教師チームは甘くない。中継の大島先生がバツクホームする。タイミング的には完全にアウトだ。ベースに飛びこもつとする明久の前にキャッチャーの西村がブロックの体制に入り立ちほだかる。

明久は歯を食いしばり体制を低くして衝突に備える。同じ様に西村も腰を落とし衝突に備えた。

「　　つー！！」

と、同時に明久は突如として回りこむ様に西村の前から姿を消した。衝突に備えて腰を落としていた西村は俊敏な動きが出来なくなっており、明久の突然の動きについていくことが出来ない。その隙に明久はホームベースに腕を延ばした。際どいタイミングだ。土煙が舞い、しばらくの静寂……。判定は　。

『セ

フー！！！！』

『『『よしゃあああああああああああああああああああ
あつ！！！！！！』』』

Fクラスのベンチが関の声を上げた。

「やってくれたな吉井」

西村がジャージについた土を払い明久に話しかけた。

「いけると思っただんで」

「いける？ この俺を相手にか？」

「西村先生だからこそ、ですよ」

「俺だからこそ？」

明久はにやりと笑い、からかうように言った。

「先生は言ったじゃないですか。『教師は生徒を真正面から受け止める』って」

西村はしばらくあっけに取られていたが、すぐ気を取り直して不敵に笑う。

「なるほどな。ならば、これからはお前への接し方を変えていくとしよ」

『2年Fクラス 対 教師チーム 7対8で2年Fクラスの勝利です。お互いに礼！』

『『』ありがとうございます つ！！！』』

こうして彼らの野球は幕を閉じた。

.....

『』 という事です。坂本君も誤解していただけみたいです』

『……うん。教えてくれてありがとう瑞希』

『いえ。これくらい別に』

『……ううん。助かった。雄二はきっと私に何も説明してくれないと思うから』

『そうですね。言い訳をしないというのは坂本君らしいと思いますけど』

『……雄二はそういう事には凄く不器用だから』

『他の事にはあんなに気が回るのに変わっていますね』

『……うん』

『それじゃあ翔子ちゃん。理由は説明してくれなくても坂本君は謝ってくれると思いますからその時は』

『……うん。私も雄二に謝』

『いえ、違います。翔子ちゃんが謝るのは最後です』

『……？ どうして？』

『いいですか？ 翔子ちゃんは最初は事情を何も知らないふりをしてて』

『……うん』

『お詫びの印に、キスでもせがんじゃいましょう』

『ふえ！？』

『？ どうかしました、翔子ちゃん？』

『……何でもない』

『そうですね』

『……何という、策士……』

『そんな事ないですよ。これくらい、普通です』

『じゃあ瑞希もそのうち吉井に？』

『……』

『いえ。これは、その……。第三者だからこそ出来るアドバイスと
いいですか……。自分の時は頭が真っ白になっちゃって何も言えな
いと言いますか……』

『……瑞希らしい』

『わ、私の事はいいんですっ。それより折角のチャンスなんですから頑張らないと!』

『……うん。頑張っちえみる』

『翔子ちゃん……。緊張してませんか?』

『……少し』

.....

「うっあ〜……」

誰もいない校舎裏で大貴は大の字になって寝転がりながら唸っている。

慣れない召喚獣の長時間操作、普段やらないクラス全体の指揮、そして無想の使い過ぎで大貴は疲れ切っていた。

「疲れてるな」

「誰かさんのお陰でな」

「今回はお前に負担をかけすぎて悪かったとは思っている」

「別にもう、いい……。オレも言い過ぎたところもあった……」

話しかけてきたのは雄二だ。雄二の謝罪に対し、大貴は罰が悪そうに眼を反らす。

雄二は無言で大貴の横に座った。

「少し、話を聞いてくれ」

雄二はそう言う自分と翔子の過去について話し始めた。

神童などと呼ばれいい気なり、傲慢に振る舞ったツケを翔子に払わせることになってしまった事。自分の所為で翔子が苛めを受けた翔

子を助けるよりも保身に走る事を考えた事。
そしてあんな形でしか翔子を守る事が出来なかった不甲斐なさ……。

「これが……俺があいつの好意を受け入れられない理由だ」

「……………」
「これ以上俺なんかのためにあいつを」

「雄二」

「？ なんだ？」

「バ カ！」

「な！？」

「お前本気で馬鹿だな！」

「真面目に話してたんだが……！？」

「おお。真面目に返してるとも！ あのなあ、さつきも言ったけど霧島の気持ちが『本物』か『偽物』かだなんて結局は霧島にしか分からない。それをお前が勝手に『勘違いだ』なんて決めつけるな」

「……………」

「第一何が『本当の好意』で何が『偽物の好意』だ？ オレは昔、育ての親みたいな人に自分達のやっている事を『家族ごっこだ』って言ったら、『本物と偽物……』。違いはどこにある？ 何が本物で、何が偽物だ？ 『家族ごっこ』でいいじゃねえか？ それじゃあその『家族ごっこ』を本気でやろう』って言われた事があるぞ」

「……………」

「たとえ切っ掛けがお前の言うとおり『勘違い』だったとしても……。ずっと一緒にいた。相手を好きになる理由なんてそれだけで十分だと思うけどな……」

「……………」

「あと、もう一つ。お前に言っておきたい事がある」

「なんだ？」

「いま自分の手にあるものが本当に大事なものならその手を放すな」

「……………」

「終わりは本当に突然やってくる。今日みたいに明日も笑っていられるとも限らないんだ……。オレは……。大事な人達にただ一言好意を伝えられないまま……。二度と会えなくなってしまった……。その事を……。伝える事が出来なかった事を今でも後悔している」

「お前……」

「だからかな……。今日感情的になった理由も……。お前の霧島への突き放した態度を見て無意識にイラついて八つ当たりしたんだと思う……。だから……。その事だけは謝っとく。悪かった」

「ああ……」

「雄二……。霧島と正面からちゃんと話せよ……」

「……考えとく」

話す事が特になくなり沈黙する……。

「俺はそろそろ戻る。お前はどつする？」

「ん……。ここで少し休む事にする」

「そうか。じゃあな」

「おう、じゃあな」

その場を後にする雄二に対して、大貴は手をヒラヒラと振りながらバフツとタオルを顔に被せ寝る体制に入った。

「お疲れ様」

「優子……」

雄二が去ってすぐに声がしたので顔に被せたタオルを取ると優子が覗き込むように大貴を見ていた。

「ああ。少し疲れちゃった」

しばらくして落ち着いた優子は大貴の頭に被せてあるタオルをそつと退けて優しい手つきで頭を撫で、無防備な寝顔を見て微笑む。

「お疲れ様……。大貴……」

優しく、慈しむ様な声それだけ言って優子は大貴の頬にそつと唇を寄せた。

第7部 完

第100話 ヒーローは誰が為に（後書き）

第7部終了！ 一番長く、一番書いてて大変でしたが、終わらせることが出来て良かったです。

次回は那家乃ふゆいさん作『バカテスの一存』とのコラボを予定しております。

お楽しみに！

特別編 コラボ DE 座談会（前書き）

今回は那家乃ふゆいさん作『バカテスの一存！』とのコラボです。なんだかグダグダな上に那家乃さんに怒られそうな内容になりましたが、読んでいただければ幸いです。

ちなみに座談会での内容は本編とは別物となっておりますので、悪しからず……。

特別編 コラボ DE 座談会

「どうもどうも、こんにちは！ 第7部野球編も無事終了して、はじまりましたこのコーナー！ その名も『コラボ DE 座談会』！ ここではメタ発言、暴走、現実では起こり得ない出来事、ご都合主義、台詞パロディ、何でも有り！ パーソナリティは烏丸大貴と」

「沖田静馬と」

「木下優子（カラスver）でお送りします！」

「さて、それじゃあ早速ゲストの紹介をさせていただきます。それではどうぞ！」

「今回のゲストはこの人！ 『那家乃ふゆい』さん作『バカテスの一存』より眼鏡による！眼鏡の為の！眼鏡の少年！ 『五月雨愛斗』^{なと}「どれだけ眼鏡を強調してるのさ……」 と『木下優子

（一存ver）』です！」

「『よろしくおねがいします！』」

「はい、よろしく！」

「よろしくおねがいします」

「よろしくね」

「しつつかし、本当に同一人物なんだな……。気配から胸の大きさまでまったく同じ ボキッ ビクビクッ……」

「に、兄さんの首が曲がってはいけない方向に!？」

「わ、わわ!？ いきなりスプラッター!？」

「けど本当に秀吉以外でアタシと同じ顔の人が目の前にいるってちよつと怖いわね……」

「そ、そうね。一応『パラレルワールドの自分』って事になってるみたいだけど……」

「しかも何事もなかったかのように話を再開し始めちゃった!？」

「に、兄さん大丈夫!？」

「あゝ……、死ぬかと思っただ！」

「うわわわわ!？ 首が真後ろに曲がったまなのに立った!？」

「クッラッラが立ったあゝあゝッ! ゴキン、

バキバキ あゝあゝあゝ……あゝ。よし戻った」

「ねえ、静馬君。君のお兄さん本当に人間……?」

「ぼ、僕もよく分からなくなってきました……」

「なんだなんだ? お前ら二人してゾンビでも見たかのような顔して?」

「「突っ込まない! 突っ込まないぞ ツー!」」

.....

「それじゃあ気を取り直して」

「ねえ、兄さん」

「ん? どうした静馬?」

「『バカテスの一存』って『生徒会の一存』と『バカとテストと召喚獣』とオリキャラの五月雨さんをミックスした二次創作小説なんだよね?」

「ああ。その通りだ」

「それなのにどうして『生徒会の一存』に出てくる人たちが一人も出てきてないの?」

「そういえば……。少なくとも『真冬』は出てくるだろうなって予想してたんだけど?」

「ああ。非常にいい質問だな二人とも。それはな」

「「それは?」」

「作者の阿呆が『生徒会の一存』読んだ事がなく、キャラが掴み切れていないからだ」

「最悪のアホだ　　っ！！！！」

「なんで！？　どうしてアニメ化までされたあの有名な作品を読んだ事がないの！？　そんな事で五月雨さんの出演を許可してくれた那家乃さんに申し訳ないとか思わないの！？」

「そうだよ！　これは世界中の生徒会の一存ファンの皆さんに腹を切って詫びるべき事態だよ！！」

「腹を切　！？　待って五月雨さん！　それは駄目です！　あんなアホ作者でも死んだら僕たちまで消えちゃいます！　作者さん、今からでも遅くありません！　今すぐ書店に走って全巻買ってまとめ読みするんだ！」

「残念ながら静馬、それは無理だ」

「どうして！？」

「作者は最近『とある魔術の禁書目録』を大人買いして給料日まであと10日近くあるのに財布の中の残金が2000円きってるんだ」

「どれだけテキトーなの、うちの作者は！？」

「すごい計画性のなさだね……」

「ちなみに作者のお気に入りキャラは『浜面仕上』と『アイテム』のメンバーらしいぞ」

「凄くどうでもいい情報だ！」

「まったくだよ！　本当に誰得情報！？」

「ちなみに作者の最近の悩みはテレビで見た『インフィニット・ストラトス』が面白かったから、二次創作をやってみたい気がするけど、『カラス』と『白球』の更新が遅れているのにそんなの始めて大丈夫だろうか？　って事らし　「どうでもいいよ！！」

息ぴったりだな、お前ら。話を戻すが、オレ個人としてもこんな地味眼鏡よりも年上の巨乳美人の『紅葉知弦』さんにご登場願いたかったよ……。ジークおっぱい！　オールハイルおっぱい！」

「烏丸、地味顔って人の事言えないでしょ……」

「うん。兄さんの顔も十分地味だからね」

「ねえ、こっちのアタシ……。真顔で聞いわよ？　アレのどこが良

くて付き合ってるの?」

「アタシにも……もう、よくわからない……」

「だ、大丈夫ですよ! 兄さんの良い所はそこじゃありませんから!」

「あれ!? オレの巨乳好きの部分全否定された!?!」

「まあ、妥当な判断だよ……」

「まあ、とりあえずその話は置いて」

「置いておかないでよ。持ってきて」

「持ってきたのに火をつけて、捏ねて、丸めて食べちゃった」

「ああ! なんて事を!?!」

「兄さん、五月雨さん……。何やってるの……」

「いや、五月雨のツツコミスキルが高いからオレも安心してボケられる。五月雨、オレと一緒にM-1グランプリを目指してみないか?」

「一人でやっててよ! 僕はもうツツコミで疲れた! 何だろうこの人……。杉崎と同じ匂いがするよ……」

「失礼な! 『ハーレムルート!』とか公衆の面前で豪語する変人とオレみたいな品行方正な紳士を一緒にしないでもらおうか!」

「いやいや、そっくりだからね?」

「いやいや、オレの方がマトモだからな(多分)!」

「いやいや」

「いやいや」

「いやいや」

「いやいや」

「いいから先に進めなさい!」

「……はい……」

「最初からグダグダだね……」

.....

「で、進行するわけだが」

「何をするの？ フリートーク？ オタク文化の素晴らしさを1、2時間ほど語れるけど？」

「それを言うならオレも静馬の話を3、4時間語り続けられるぞ？」

「そうなんだ。僕は5、6時間語れるけど」

「実はオレも7、8時間語り続けられるけど」

「二人とも止まってください。特に兄さん、これ以上恥ずかしい事しないで」

「へいへい。しゃーなーな」

「話を戻しますけど、フリートークでも良かったんですけど、今日はスタッフの人からお題の書いた紙を入れたクジを貰ったからそれを使おうと思うんですけど、五月雨さんどうですか？」

「面白そうだね。それと静馬くん、僕の事は愛斗でいいよ」

「は、はい。あ、愛斗さん……」

『眼鏡キャラと超美形シヨタの絡み……！』

『これもこれで……。っていうかむしろこっちの方が萌える……！』

「（あれ？ この企画にスタッフなんていたっけ？）」

「それじゃあ、さっそく引かせてもらおうよ」

「はい。何が出るかな 何が出るかな」

「あ、お前らちよつと待」

「えーっと、なになに？ 【木下秀吉は何故木下優子よりモテるのが徹底検証 ……】」

「……………（ブチッ）」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

入れ替わった時に見せた無防備な動き。あれが秀吉がモテる理由じゃないかな？」

「なるほど。一理ある」

「一理？ じゃあ烏丸の考えはどうなのさ？」

「オレは背徳感って奴が利いてるんじゃないかって思う」

「背徳感？」

「そう。人間は『やるな』と言われた事ほどやりたくなる。『押すな』と念を押せば、押したくなるし、『覗くな』と言われれば覗きたくなる。やってはいけないと良心では理解していても本能がそれに抗おうとする。秀吉は正真正銘生物学的には『男』だ。しかし、そこら辺にいる女の子よりも愛らしい顔をしているのもまた事実。

つまり男連中にとって秀吉が『男』だという事実は邪魔になる。そこであえて現実から適度に目を反らす為に男は心の視力を0.7に保つ事にする(0.7なら運転可能)そこから『木下秀吉の性別は第3の性別「秀吉」である』という妄想をするんだ。これはミロのヴィーナスの美しさを楽しむ為の『ビーナスの両腕の不在のゆえにそこには想像力による全体への飛翔(原文では「特殊から普遍へ」の飛翔とある)が可能』(清岡卓行著 ミロのヴィーナスより)という理屈と通じるものがある。秀吉の性別をあえて暈す事により男連中に妄想をする余地を与え、もし本当に男なら『禁断の恋』という背徳感に揺れるマゾヒスティックな性癖にも、秀吉が女だとして自分を男だと言い張っている秀吉が嫌がりながらも自分のものになつていくというサディスティックなシチュレーションも妄想できるという柔軟性がある。つまり『木下秀吉』という存在は『男を誘惑する天才』だからっだ！』(約20秒)

「……………」
「言葉でも…………世界を縮めてしまった…………」

……………

「はい。というわけで時間になりました」

「なんだかグダグダだったね。結局静馬君は泣きながらどこかに行っちゃうし、ツイン優子は誰かから送られた薄い本の夢中だし……」

「だな。なんだか那家乃さんや読んでくれた人達に怒られそうな内容だったな。読者の皆さん、お叱りはなるべく優しくお願いします。それじゃあ最後に番組宣伝！」

「文月学園に通っている五月雨愛斗さみだれまなとは「生徒会の一存」が大好きなどこにでもいる少年だった。しかし、あることをきっかけに「生徒会の一存」の世界へ！愛斗はそこで何を知り、何を感じ、何を学ぶのか……。笑いあり、涙ありの日常のようで日常から外れたドタバタコメディ！『バカテスの一存！』をよろしくおねがいします！」

「はい。それではまた会える日を楽しみにしつつ……」

「さようなら！」

この座談会は本編とは別ですので悪しからず……。

特別編 コラボ DE 座談会（後書き）

次回はリザクさん作『バカとテストと召喚獣』気まぐれ猫のスケッチブック』とのコラボを予定しておりますので、よろしくお願ひします！

特別編 カラスと気紛れ猫（前書き）

今回はリザクさん作『バカとテストと召還獣』気まぐれ猫のスケッチブック』とのコラボです。

遅くなった上に短いですが、個人的には不思議な味がでていいかな〜なんて思っています。

それではどうぞ！

特別編 カラスと気紛れ猫

ここは文月学園。放課後の2年Fクラスのボロ教室。

そこでカラスと呼ばれる少年と気紛れ猫と呼ばれる少女が椅子に座って向き合っていた。

少年の方は背筋を伸ばし、握り拳を作って膝の上に置いている。緊張してるのか、その表情は少し固かった。対して少女の方は気楽に鼻歌を歌いながらスケッチブックに向かって鉛筆を走らせている。

「ねえ、ひーくん。もうちょっとリラックスしてよ」

「遠月、無茶言わないでくれ。リラックスをしろって言われてリラックス出来るほど器用じゃないんだ」

『ひーくん』と呼ばれた少年の名は『烏丸大貴』。絵を描いている少女の名は『遠月優羽』

この二人が何故放課後の教室でこんな事をしているかというところ、それは少し遡る。

.....

「ねえ、ひーくん」

「あ？ 何だ遠月か。どうしたんだ？」

「お願いがあるんだ」

遠月優羽が烏丸大貴に話しかけるのは非常に珍しい。烏丸大貴は遠月優羽があまり好きではない。勿論、友人だとは思っているし、人

間的に無害で仲間想いという事で一定の信頼は置いている。彼の天敵である清水美春のように喧嘩をする事もない。総合的に見て完全に嫌っているわけではない。しかし、彼女の本来の性質である『自由気まま』というスタイルが『自分勝手』という風に見えてしまい、どうしても容認する事が出来ないのだ。

そして何よりも遠月優羽という人間の在り方は大貴とはまるで逆だった。

烏丸大貴は幼い頃から生まれや育った環境の中で腹芸ばかり使って生きてきた。その為自分のやりたい事は二次、『自由気ままに生きる』などもつての外。恩人である姉やその夫の弦馬、祖父に迷惑をかけない様に、そして『沖田静馬の保護者』という立場上彼らの世間体を気にしながら自らに鎖をかけ、縛られ不自由に生きてきた。しかし遠月優羽の生き方を見るとそれらを気にしているのが馬鹿らしくなってしまうのだ。だが、大貴は今までの生き方を否定する事は出来ない。それを否定したら、大貴は大貴ではなくなってしまう。今の大貴は『不自由』だったからこそ存在しているのだ。それを簡単に否定など出来はしない。『今の自分』に誇りを持ち、こんな自分を『好き』だと言ってくれる人がいるのなら尚更だ。それでも『自由気まま』への憧れは捨てきれない。

(恐らく、オレがこいつを好きになれないのはオレがこいつに嫉妬してるからなんだろうな)

人間は自分の持っていないモノを持っている者に出会ってしまったら憧れ、強く惹かれると同時に同じくらい疎ましく思い、嫉妬する。自分の心の中を大貴は冷静に、客観的に分析していた。

優羽の方も大貴を避けている節がある。理由は不明だが、嫌われているんだろかな。と、大貴は考えている。それでも特に困りはしないし、害がある訳ではないので放っておいたのだが、その優羽が態

々自分を名指しで『頼みたい事がある』と言ったのである。
これは相当な一大事に違いない。と大貴は無意識に身構えた。
彼女はこう……堪忍袋の緒が切れる直前のラインをカリカリと削る
ような、そんな小さなイタズラが非常に得意なのだ。

「聞くだけ聞こうか？」

「あのね ひーくんの絵を描かせてほしいんだ」

「……………は？」

……………

と、いうわけである。

今まで優羽は大貴を描きたいとは思わなかった。

人には様々な感情がある。

喜び、怒り、哀しみ、諦め、驚き、嫌悪、恐怖、そして 憎
しみ……。

絵は人の持つあらゆる感情を鮮明に映し出す。故に絵を描く側はモ
デルの心の断片を読み取る事が出来るときがある。特に人間の瞳に
はその人の行動原理や人生観、が顕著に表れる。例えば明久は真っ
直ぐな人柄、雄二は深い思いやりが、蒼夜にはどっしりとした安定
感など。

しかし、優羽は初めて大貴に会った時単純に恐怖した。

笑顔の仮面を被りながらも、その瞳には暗い光を宿していたからだ。
優羽はその光の正体を知っていた。あれは怒り、哀しみ、恐怖、悪
意、憎悪 この世のあらゆる負の感情が入り混じった破滅を願う
者の瞳だ。

下手に覗き込めば、自分もその闇に引きずり込まれてしまう。

だからこそ優羽は大貴を描きたいなどとは思わなかった。描けな
かった。

仲良く追いかけてっことをしていた。

特別編 カラスと気紛れ猫（後書き）

お互いの人物分析でした。

こういったあまり動きのないまったりとした話は書いてて落ち着きますね。

次回はまあさん作『サドで邪悪な召喚獣』前田理音の出演です。すでにプロットは出来上がっています。

そして静馬をやっと活躍させることが出来ます。

お楽しみに！

特別編 カラスと科学者 + e x t r a (前書き)

『サドと邪悪な召喚獣』より『前田理音』くんと『前田怜生』くんの出演です。

今回はちよつと長くなりましたが、面白く出来たと思います。
それではどうぞ！

大貴 S I D E

「静馬、覚悟はいいか？　ここから先の領域は血で血を洗う修羅の道。躊躇った奴から殺られるぞ。いいか？　殺られる前に殺れ」

「け、けど兄さん。これってひよつとしなくても悪い事なんじゃ…

…？」

「確かにオレ達が今からやろうとしている事は人の道から外れる行為だ。けどな、綺麗言だけで世の中を渡っていけるほど甘いモンでもないだろ？」

「そ、そうだね……。僕たちが生きていくためには通らなければいけない道なんだよね」

「ああ。どんな手段を使っても手に入れなければならない。この

1パック88円（お一家族様1パック限り）の卵を！！」

夏休みの終り頃。オレと静馬は行きつけのスーパーの朝市に来ている。

日課であるチラシのチェックをしていたら、何と今日は特売日だったのだ。

ちようど卵を切らしかけていたので、これは渡りに船だと思い、静馬を連れて買いに来た。

レジに別々に並べば卵を2パック手に入れる事が出来るからだ。

ジジイの方は今日本家の方に顔を出しに行っており、昨日から家にいない。

「ターゲットはスーパーの中！　よし、行くぞっ！」

「うん」

「なんだ、お前たちも来ていたのか？」

「お？ 理音に……怜生君もおはよう」

「おはようございます」

「ああ。おはよう大貴」

「お前も卵を狙ってきたのか？」

「いや。今日の俺の狙いは食パンだ。一家族一斤限りだからそんなに買えないがな」

「……卵は？」

「あいにくまだ3パックほどストックがあつてな。あまり買いつぎても勿体ないだろう」

「……。理音、オレと手を組まないか？」

「ほう？ 話を聞こうか」

「オレの狙いは1家族1パック限りの卵。お前の狙いは一家族1斤の食パン。オレとお前が協力すれば、オレは卵が3パック。お前は食パンを3斤手に入れる事が出来る」

「ほう？ 悪くない話だ。だが、お前はパンを買わなくていいのか？」

「家は全員米派だからな」

「そうか」

「交渉成立、かな？」

「そうだな」

前田理音と前田怜生が仲間になった。

テレットテレ〜レ〜

特売においてコイツ以上に頼もしい味方はいないだろう。

「そうと決まれば、早速行くぞ。特売好きの血が騒いで仕方ない」

「ああ。特売（トウセツ）がオレ達を待っている！」

「兄さん……、特売は戦場とは言わないんじゃ」

「

「突貫！」

静馬のツツコミを流して、オレと怜生君をおんぶした理音は戦士達おはちゃんどもがひしめく戦場へと駆けて行った。

.....

とりあえず烏丸家、前田家ともに目的のブツを入手する事に成功。オレ達は揃ってベンチに座って勝利の美酒（缶ジュース）を飲んでいる。

「ふう、一仕事を終えた後の一杯は格別だぜい」

「大貴、オヤジ臭いぞ」

「ほっとけ」

「兄さん、オヤジ臭いよ」

「んぐ……」

「お兄さん、オヤジ臭いです」

「……………はい、すみません」

なんなのこの子たち！？ 何でオレにこんなに辛辣なんだよ！？

「あれ？ あんたたちも来てたんだ？」

ベンチに座っていたオレ達に声をかけてきたのは同じクラスの島田美波だった。

妹の葉月ちゃんと仲良く手を繋いでいて、非常に微笑ましい。

挨拶もそこそこにベンチに座り「あそこのスーパ―は安い」だの「あのスーパ―が安いのは広告を出していないから」とか「あそこの早朝市場はめちやくちや安く新鮮だ」など雑談を始めた。その間

にチビツ子達は3人も集まって向こうで遊んでいる。

「静馬くん、怜生君。この後何か予定はありますか？」

「え？ え？ なななないよ？」

「……………（フルフル）」

「良かったですつ。今からお姉ちゃんに水族館に連れて行ってもらうんですけど、一緒に行きませんか？」

「え？ も、勿論！」

「……………（コクコク）」

葉月ちゃん言葉に静馬は弾けるような笑顔を、怜生君は顔を真っ赤にしながら頷いている。

なんだこの可愛い生き物たちは！？ カメラを！ 誰かカメラをここにういっいっ！！

パシャパシャ

横では理音が何処からともなく取り出したカメラでチビツ子達の写真を撮っていた。

「理音、お前どっからカメラを……………」

「気にするな。お前だって小鳥丸を何もないところから取り出したりにしてるだろ。くだらない事気にしてる暇があったらこのレフ板を持って」

「お、おう。ところで理音。モノは相談なんだが……………その写真の焼き増しは頼みたいんだけど？」

レフ板を構えながら理音に交渉を試みる。こいつだって鬼じゃないし、何と言ってもオレと同じブラコンだ。きつとオレの頼みも快く引き受けてくれるだろう。

「そうだな。お前が俺の新薬の実験台になるんだつたら」
「待て！ 写真の焼き増しにその条件は明らかに割に合わない！」
「大丈夫だ。新薬といつても自白剤で副作用も微々たるものだ」
「その副作用ってのは？」
「胸が大きくなる」
「何をどうしたらそんな副作用が……」
「前田、その話をウチにちょっと詳しく！」

島田の食い付き方に異常な執念のようなもの垣間見えて怖い。

「あ。行くのはいいけど、荷物が……」
「いいよ、行ってこい。荷物ならオレが持っていくから」
「え？ けど……」
「いいから。遊びたいんだつたら遠慮なんかするな。子供は目一杯遊ぶのが仕事だ」
「う、うん。ありがとう兄さん」
「それじゃあお兄ちゃん、行ってきます」
「ああ」
「それじゃあ静馬くん、怜生君。行くですつ」
「待ちなさい葉月。その前にお母さんに銀行に行くように言われてたでしょ？」
「そうでした」
「あ、それじゃあ僕も一緒に行くよ」
「僕も……」
「それじゃあ悪いが、島田よろしく頼むわ」
「終わつたら連絡をくれ。迎えに行く」
「あれ？ 烏丸と前田は行かないの？」
「ああ。行きたいのは山々なんだけど、オレは午後からバイトがあるんだ」

「俺はラボに戻って実験の続きだ」
「うん。仕方ないわね」

島田に静馬と怜生君を任せてオレは家に帰ろうとしたその時。

《お客様に日頃の感謝をこめて只今のお時間サプライズサービスタイム。お肉売り場で牛肉がな・ん・と、100グラム150円。100グラム150円でございます。先着50名様限定の特別サービスになっております》

オレと理音のスタートダッシュはほぼ同時だった。

肉屋を目指してオレ達は店内を駆け抜けた。前方にはオレ達と目的を同じくする強敵達オバタリアンがヌーの如く群れを成している。

「俺が先行して道を作る！ タイミングを誤るな！」
「誰に向かって言っている。お前こそ読み間違うな」
「上等！」

すし詰めになっているおばちゃん連中が僅かに作った隙間を広げ、理音の通る為の道を作る。理音はその一瞬のタイミングを逃さずに隙間に入り込み巧みに前に進み、オレもそれに続く。そして。

「とつたぞ」
「よっし、ナイス理音！」
「離脱する」

理音が戦利品を2人分確保してオレはそれを横取りされない様になる。そしてそのままその場から離脱した。

.....

NO SIDE

銀行前に停車している黒のバンがある。その中では男がは8人それぞれ銃やナイフの手入れを行い、これから自分達がやるべき事に備えていた。

「始めるぞ。最後の仕事だ。」

「これが終わったら俺達は一勝遊んで暮らせるだけの金が手に入るんですねボス？」

「ああ。勿論だ」

「偽造パスポートの方は？」

「問題なく仕上がっている。終わったら即効高飛びする準備も万端だ」

「それじゃあボス。最後の仕事に行きましょうぜ？」

「よし。それでは 行くぞ！」

ポストンバックの中に装備を一式詰め込み、変装の為のカツラやサングラス、マスクをつけ見取り図を懐にしまったのを確認してバンの扉を開ける。

銀行の自動ドアを潜り、サイレンサーをつけた銃で天井に向けて発砲。高く静かな銃声に銀行にいた人間は自体が飲み込めず青ざめ、呆然としている。

「手を上げる！ 強盗だ！ 騒ぐんじゃないねえ！ 言うとおりにしろよ？」

いち早く警備員が強盗の主犯らしき男に掴みかかるが、関節を極め

られ殴り倒される。

「この銀行は我々が占拠した！ 死にたくなかった全員大人しくしろ！ 逆らったら」

男は天井に向かってもう一発威嚇の為に発砲する。

「殺すぞ……！」

男たちは持ち込んだ段ボールの中から怪しげな機械を取り出して机の上に置き、主犯の男は得意げに説明を始めた。

「こいつは電波妨害装置だ。ケータイを持つてる奴は見てみな？ アンテナが立ってないだろ？ ケータイを床に置き、大人しく二階の会議室に迎え」

「……」

銀行内の人々は動けない。事態を飲み込めていないのだろう。

「さっさとしろ……！」

その様子に主犯の男は一括。銀行内の客は悲鳴を上げながら、男たちの指示に従った。

男たちと客はまるで牧羊犬と羊のようだった。犯人が客を追い立て、客は犯人達の追い立てる方向へと誘導されていく。

そんな中、主犯の男は真つ直ぐにこの銀行の支店長がいるであろう部屋へと向かい、乱雑に扉を蹴破った。

「支店長、サイレント・アラームは切った。大人しく金庫室を開けてもらおうか？」

.....

真つ先の異変に気がついたのは大貴だった。

「理音……」

「何だ大貴？」

「なにかこう……寒気がしないか？」

「冷房が利きすぎてるんじゃないか？　もしくは風邪か？　新薬を試してみるか？」

「いやいやいや、そう言うのじゃなくってな。もっとこう……強烈な悪意を感じるってどうか……」

「……ふむ。お前の第六感は下手なレーダーより精度が高いからな。非科学的ではあるが、あながちバカに出来ないか……」

「だよな。ちよっと気になるから見てくる」

「まあ、待て。それなら俺も行く」

.....

静馬たちは今、会議室に閉じ込められている。

銀行強盗に巻き込まれてしまったからだ。今会議室にいるのは20人ほど。この銀行にいたすべての人間がここに集められている。

葉月、美波、怜生、その他のお客さん達と銀行のスタッフ達。

全員怯えきった表情をしている。怜生に至っては恐怖のあまり美波にしがみついて震えている。静馬はその様子を見て拳を強く握る。

（僕がしっかりしないと！　怜生君やお姉さん、そして葉月ちゃん
は僕が守らないと……！）

静馬は大貴よりも割り切った考え方は出来ないが、状況判断能力は誰よりも優れていた。

自分が考えなしに犯人の男たち掛って行っても返り討ちに逢う上に周りの人達を危険に晒してしまつのは目に見えている。ならどうするか？

決まっている。逃げればいいのだ。何も無謀に立ち向かうだけが『誰かを守る』という事ではない。『逃げる』事も『誰かを守る』為には必要だと静馬は考える。いや、守らなければならぬからこそ、逃げなければならぬのだ。

静馬は外の見張りに気付かれない様に壁を軽く叩き向こう側が空洞だという事を確認する。

「静馬くん。な、何をされるのですか？」

「この壁を斬って向こう側の部屋に脱出するんだ」

「壁を斬る？ そんな事が出来るの？」

「はい」

静馬は壁に取り付けてあるコンセントを外して隠し持っている小刀を取り出し、刃を当てノコギリのように表面のベニヤ板を斬っていく。

「あんだ常識人だと思つてたけど、流石烏丸の甥っ子と言つか何と言つか……」

「最高の褒め言葉だよ、おねーさん」

.....

「なんだ？」

「あれは……あまり考えたくないが強盗だな」
「強盗!？」

理音の言葉を大貴は信じられないといった感じて反復する。間違いであってほしいとその表情から窺うことが出来た。

「もっと悪い知らせがある」

「これ以上悪い知らせがあるのか? とにかく警察に」

「怜生達があの銀行の中にいる」

「まさか!? どうして! その根拠は!？」

「俺達と別れる前に島田は『銀行に行く』と言っていた」

「それだけじゃあの中に静馬達がいるって根拠にならないだろ!」

「まあ、落ち着け。これを見る」

「これは レーダー?」

「そうだ。怜生が迷子になった時の為にGPSを改造した特注の発信機を持たしてあるんだが、そのビーコンがああ建物の中から発信されている」

「何かの間違いって事は……」

「現実主義者のお前らしくないな。『何かの間違い』なんて優しい展開がそう都合よく起こる訳ないだろう」

「理音、お前……ッ!」

大貴は理音の冷静な対応が気に入らないのか鋭い目つきで睨みつける。

大貴もわかっている。理解している。『何かの間違い』なんてそんな都合のいい事現実に起こりえる事はないという事を。それがわかっているからこそ、余計に冷静な理音が気に入らない。

「落ち着け、大貴。今のお前は頭に血が上っている。そんな状態じゃ何も出来ないぞ」

「……ッ！ チツ、わかつたよ」

「とりあえず警察はダメだ。犯人たちを下手に追い詰めると拙い事になる」

「だからってこのまま放っておくわけにはいかないだろ。あの中のクソ野郎共が出て行くときに人質を殺す可能性だって考えられる」

「誰が放っておくと言った？」

「ん？」

大貴は理音の違和感に気付く。そう、大貴は大きな勘違いをしていた。

自他共に認めるブラコンである理音が怜生を人質に取られ冷静であるはずが無い。

今気付いた。理音はあくまで冷静に装っているだけだ。

「見てろクソ共。小物の分際で怜生を人質に取った事を死ぬほど後悔させてやるう」

大貴は理音の邪悪な笑みを浮かべた横顔を見て引き攣った笑みを浮かべた。

「大貴、まず有象無象共の人数の確認だ」

「お、おう」

言うや否や大貴の行動は早かった。目を閉じ、時間をかけて感覚を研ぎ澄ましていく。

目を見開き大貴が纏う雰囲気が変わった。

「下に1、2、3、4……5人。上に1、2、3……4人。あとは20人くらいの人が一か所に集められている。これは人質だな。悪意を感じられない」

無想状態の大貴は建物内の気配を次々に読み取っていく。

「そうか。見張りが手薄な位置を探ってくれ」

「………………。あつた。二階の窓。あれは…………トイレか？」

「よし。そこから登るぞ」

「わかった」

……………

雨どいを伝って2階のトイレに入った大貴と理音はドアの向こうに見張りが巡回してくるのを待ち、ドアを開けた瞬間2人掛かりでトイレの中に引きずり込み、口を塞ぎ縛り上げ動きを封じる。その際に腹に2、3発ブチ込んだがそれは御愛嬌だ。

「テメエら！ この俺にこんな事してただで済むと」

「黙れ。お前がその薄汚い口を開いていいのはお前の仲間の情報を吐くか、悲鳴を上げるときだけだ。わかったら『はい』もしくは『イエス』と鳴け。この豚にも劣るのウジ虫野郎が」

「仲間の情報を吐くか、ここでオレの気が済むまでボコられるか。お前はどっちがお好みだ？」

お決まりのセリフを遮るように理音が男を威圧し、大貴もそれに続く。

「……………」

目の前の男は無言で大貴の顔に唾を吐きかけた。大貴は無言で目を細め男を見下ろした。

「……………喋る気なし、か」
「へへっ……………」

大貴が男を引きずり込んだときに奪い取ったナイフを投げつけ頬をナイフが掠める。

男の顔から嘲笑が消え、表情が強張る。

「ならよお……………指の2、3本切り落とせば素直に吐く気になるかなあ？」

「ヒッ……………！」

左手で男の手首を掴み、右手に持ったナイフを男の指に近づけていく。

大貴は本気だった。静馬を助けるためだったらどんな残酷な事も顔色一つ変えずにやれる。

本当にそう思った。

そんな大貴の暴走とも言えるような行動を止めたのは理音だった。

「落ち着け大貴」

「オレは落ち着いている」

「いいや。落ち着いていない。このクソ野郎を拷問するのは結構だが、拷問するときにあがる悲鳴で仲間がこっちにくるかもしれない。だからやめておけ」

「……………わかったよ」

大貴は渋々男からナイフを退ける。男はあからさまにホッとした表情になった。

「そんな事よりこの『少し強力な自白剤』を使う方が効果的だ」

「『少し強力な自白剤』？　ちなみに副作用は？」

「一生、勃たなくなる」

「……ツ！？！？」

「さて、覚悟はいいか？」

「待……っ！　わかった喋る……！　全部喋るから勘弁してくれ……」

男はあっさり折れて仲間たちの情報を小鳥のように喋り始め、喋り終わると同時に理音が（何故か）持っていた『瑞希の手料理』を口に押し込まれ轟沈させられた。

「落ち着け。お前が冷静さを失ったら助けられる者も助けられなくなる」

「……返す言葉もない」

「熱くなるな。冷静になれ。大切なものを守りたいのなら尚更、だ」

「……。わかった。悪かった」

「わかればいい。怜生達を助けるために行動を起こすぞ」

「ああ。で、どうするんだ？　オレの方の武器は小鳥丸と護身用に持っている小太刀の木刀だけ。正直言つて銃を相手にするには心許ない。つて言うか、いざ銃を向けられたら縮こまってしまつかもしれない」

「大丈夫だ。こう言う時の為にとつておきのアイテムがある」

「お前のとつておき、か。激しく嫌な予感しかないんだが……」

「どんなモンだ？」

「これだ」

理音が懐から取り出したのは明らかに隠し持つには無理がありすぎるほど大きな物体だった。バケツの頭、段ボールのボディ、ベニヤ板で作られたアーム。どこからどう見ても『幼稚園児が工作で作ったようなチープなロボット』だった。

「何……それ？」

「怜生が工作で作ったロボットだ。これをお前が着て制圧する」

「お前アホか！？ 実はアホなのか！？ 子供がダンボールとバケツで作ったロボットの中に入って銃を持った強盗を制圧しろってか！？」

「大丈夫だ。チープなのは見た目だけで出来は保証する。バケツとダンボールの下の装甲は防弾用セラミック、左腕には暴徒鎮圧用を使用する粘土弾とトリモチ弾を仕込んだ空気銃を装備、そして運動性能や筋力を補強するためにパワースーツを採用している」

「なんだよ、その無駄な高性能！？」

「そしてお前が右手に小烏丸を装備すれば完璧だ」

「どこがどう完璧なんだ！？ 完璧どころか半壁にすらなってるねええええつよっ！」

大貴は小烏丸を右手にリオにツッコミをいれようとするが、リオはのらりくらりと無駄のない動きでそれをかわす。そのまま追いかけてっこをしていたが、しばらくすると体力が切れたのか膝に手をついて息切れしている大貴の姿があった。対してもリオは汗一つかいていない。

「と、とにかく……そんなギャグにしかない」

「よし。わかった。それならこうしよう。このクジを引いて外れの方がこの『ロボ』の中に入る事にしよう」

「よし！ わかった！ それじゃあ行くぞ。せーの！」

……。
……。
……。

「大貴、乗り心地はどうだ？」

「……………ム力つく事に快適だ。きぐるみの中は暑いって相場が決まっているんだが」

「冷暖房完備だからな」

「ただだけ技術の無駄遣いしてるんだよ？」

「気にするな。俺は気にしていない」

「お前って奴は いや、やっぱりいい。……………『メカ・レイヴン丸』発進！」

段ボールで出来た見た目限りなくチープな機械兵士は自らの使命を果たすべく動き出した。

……………

「このクソガキッ！」

「グッ！」

「静馬くんッ！」

男の蹴りを腹に受け、静馬の顔が苦悶に歪み、葉月は悲痛な叫びをあげる。

「クソッ！ クソッ！ 舐めやがって！ 舐めやがってええええええええええっ！」

静馬は壁を斬って隣の部屋に逃げようとしていたが、人1人分が通れるだけの穴を空けたところで見張りに見つかってしまい制裁を受けていた。ボロボロにされ、転がされた静馬は息をするのも辛そうだ。

「ハア、ハア……。ペナルティだ。お前の目の前で3人殺す。そうだな。……。そのガキ3人」

指名されて美波、葉月、怜生の体がビクリと震えた。

「人質を賤けるにはな、逆らえば見せしめとして誰かが殺される事を見せつけないといけない。わかるよな？ 運が無かったなお嬢ちゃん達」

「お、お願い。この二人は、この二人は殺さないで……。！ まだ、こ、子供なの」

「ん〜、美しい精神だ。素晴らしいね、お嬢さん。虫唾が走る。それじゃあ、ガキの方から先に殺すとしようか」

「あ、あんた達……。ッ！ 最低……。ッ！」
「ハッ、じゃあなガキ」

男が引き金を引こうとした瞬間だった。静馬が起き上がり一瞬で間合いを詰め、男の手首を蹴った。男は痛みに顔を歪め、銃は床に転がる。その間に静馬はもう一発、男の顔面に拳を叩きこみ、葉月達に向かって叫ぶ。

「速く逃げて！」

「で、でも……。！」

「速く！ 逃げてくれれば僕も逃げられるから！」

「わ、わかった！」

人質にとられていた人たちは静馬に促されるまま一斉に開けた穴から逃げ出し始める。

「静馬くん！」

「大丈夫！ 無茶はしないよ！ 葉月ちゃん達が逃げたらすぐに僕

ええええぞおおおおおおおおおおおおおッ！」

男は吠え、静馬を睨みつける。

「テメエの所為だ！ テメエの所為だクソガキッ！ 切り刻まなきや
気が済まねえぞゴラアアッ！」

男はナイフを取り出し静馬に斬りかかる。しかしそのナイフは静馬を捉える事はなかった。

「……………？ どこだ！？ ガキはどこに！？」

男はさっきまでそこにいた静馬が突然消えた事に激しく狼狽した。

「どこだよ！」

「な……………ッ！ ヘブッ！」

声のした方を向いた矢先に先ほどと同じ場所に拳を叩きこまれ、男はよろめく。すぐに反撃しようとナイフ横に尻ぐが、既に静馬は男の間合いの外にいた。

（僕は兄さんみたいに鉄壁の防御を持つてるわけじゃないし、おじいちゃんみたいに一撃で相手を倒す事が出来るほど攻撃が得意じゃない。けど）

静馬は男に向かっていく。男は慌ててナイフを突き出そうとするが静馬はそれより速く連続で男に拳を叩きこんでいく。ナイフを前に振れば静馬は後ろに。右に振れば静馬は左に。左に振れば静馬は右に。

男のナイフは静馬を捉える事が出来ない。

「動きの速さならだれにも負けない！」

静馬は速く、的確に男の急所に拳を叩きこむ。先手を譲らず、反撃を許さず、存在の認識すら許さず徹底的に。そしてこれは静馬自身気づいてなかった事だが、静馬は自らの速い動きを利用して相手の死角に入り込む動作が非常に上手い。

『相手の死角に入り込む体捌き』これが沖田静馬の最大の武器だった。

そんな動きを前にして素人である目の前の男が敵うはずが無い。男は程なくして床に倒れ込んだ。

「逃げれた……？ ……とりあえず……良かった……」

静馬の呟きには勝利に酔った様子はなくただ、ただ葉月達が逃げ切れたことへの安堵しかなかった。

.....

「あれ？ 1人足りねえ？」

メカ・レイヴン丸こと烏丸大貴は困惑していた。理音の発明したこの『メカ・レイヴン丸』の性能は非常に優秀で銀行内にいた犯人グループを瞬く間に制圧していった。何発か銃弾を喰らったが『メカ・レイヴン丸』の装甲は防弾仕様だった為、大貴の体には傷一つ付いていない。

既に銀行強盗の犯人の7人をトリモチ弾で拘束していた。見張り役は静馬が片付けているだろうから残るはあと1人なのだが銀行内を

徹底的に探しても何処にもいない。

最初探った時に把握した人数は9人。計算が合わない。とりあえず適当にリーダーっぽい奴に聞く事にした。

「おい、あと一人何処行つた？」

「あゝあゝ！？ 知るかボケ！」

スパアンスパアンスパアンスパアンスパアンスパアン！

とりあえず素直になるように小烏丸でドツキ回しておく。

「もう一回聞けど、もう一人は何処？」

「し、知ら」

スチャ（小烏丸を構える音）

「待った！ 言う！ 言うからその異常に痛いハリセンをしまつて

くれ！」

「最初っからそう言えばいいんだよ」

大貫はニツコリと満面の笑顔を浮かべリーダー格の男の話を聞いた。

.....

「ハアハアハアハアハア！」

銀行の支店長は路地裏を走っていた。

逃げる為に。

犯人役の男たちが捕まれば、自分との繋がりが露見するのは時間の

問題だった。

そう。今回の事件の黒幕はこの男だ。

自分が強盗の手引きをする事で、よりスムーズに事を成せるはずだった。

しかしその計画は突然乱入してきた訳の分からない幼稚園児が作ったようなチープな作りのロボットに阻まれてしまった。

纏まった金を稼ぐ目的で強盗の手引きを引き受けたのにこのままでは自分も犯罪者として臭い飯を食べる事になってしまう。

支店長はひたすら逃げた。明確な目的地がある訳ではない。しかし、一刻も早くこの場所から離れなければいけない事は本能的に理解出来た。

「何処へ行くのですか？」

「ヒツ………！」

底冷えするような声で呼び止められる。

自分の進行方向にそれは立っていた。

前田理音。薬学における稀代の天才であり、『壊れた人間』である彼は目に異常な光を灯し、口元は楽しそうに緩んでいた。

男は『あれは人の触れてはいけないモノ』だと本能的に察知し、怯え始める。

「く、来るな！」

腰を抜かし、ちょうど足もとにあった鉄パイプを持って理音を迎え撃とうとするが。

「ああ。心地いい敵意です。恐怖の感情が最高のスパイスになっていますよ。………壊し甲斐がありそうです」

そう言つて理音はさらに笑つ。

子供が心底夢中になれるオモチャを見つけた時のように。無邪気に残酷に。

そしてさらに支店長との距離を無造作に縮めた。

「く、来るなああああああああああつ！！！！」

支店長は力いっぱい鉄パイプを振ろし、理音の肩に当たる。しかし、理音はそれを気にする事無く蹴りで支店長の膝の関節を壊し、地面に転がした。

「ぎ、いあああああああああつ！！！！！」

支店長がのた打ち回り苦しむ姿を楽しそうに眺めながら理音は舌なめずりをする。

「さあ、ここからが本番です。良い声で鳴いてください」

「そこまでだ」

「大貴くんですか」

理音の首に小太刀の木刀の切っ先を向けて大貴は理音の動きを止める。

「これ以上はやめる理音」

「『やめる』？ 何をですか？ これを壊す事をですか？」

「そうだ」

「断ると言つたらどうなるか興味がありますね」

「……………ッ！」

「ああ。心地良い殺意です。壊したくなってくる。大貴くん、あなたを壊してもいいですか？」

「……………」

理音の問いに大貴は無言。警戒レベルを更に引き上げた。

大貴は理解している。小太刀しか持っていない自分では今の理音には敵わないという事を。それでも 大貴は今の理音を止める方法を知っている。

「……………」

大貴は無言で木刀を捨てた。

「何の真似です？」

「オレはお前とやり合わない」

「それは私に大人しく壊されると言う事ですか？」

「お前はそれをしないよ」

今の理音は敵意を向ける相手を壊したがる。それを止める方法はただ一つ。捨て身の無抵抗という行為を実行する事だ。

「あなたは私を嫌っていると思いましたが」

「おう。お前みたいな危険なモンは理音の中からさっさと消え失せてほしいね。けど理音はお前を『消す気はない』と言った。それならオレは信じるさ」

「私を、ですか？」

「いや。お前をじゃない。お前を信じ、受け入れている理音を信じるんだよ」

「…………… ふふふ、つくづく面白い人ですね」

「お褒めに預かりどうも」

「あいつをお願いします、大貴くん。あいつと似て非なる存在のあなたなら他の人には出来ないアプローチができるでしょうから」

「言われなくても。これ以上理音が壊れる事のない様に守るさ。」
たとえ『救う』事は出来なくても、それでも出来る事はあるはずだから。

大貴の答えに満足したように笑い、理音は理音に戻っていった。

.....

「静馬くん大丈夫でしたか？ 怪我はありませんか!？」

「葉月ちゃん、は、離れて！ 僕は大丈夫だから!」

静馬は半泣きになった葉月抱きつかれていた。

「無理しないでください！ 葉月心配したんですっ!」

「ご、ゴメン……」

「静馬くんが無事でよかったです……」

「葉月ちゃん……。ごめんね。ありがとう」

「全く、無茶して……」

「ご、ごめんなさい。お姉さん」

「けど、葉月を みんなを守ってくれて、ありがとう」

「は、はい」

「……………(キュッ)」

「？ どうしたの怜生君？」

「……ありがとう。静馬お兄ちゃん……」

「……。うん。怜生君に怪我が無くて良かった」

『守られてばかり』

それはずっと静馬のコンプレックスだった。

しかし今日、沖田静馬は誰かを 怜生を、美波を、そして葉月を

守る事が出来た。

静馬はそれを誇りに思う。

この日、沖田静馬は初めて誰かを『守る戦い』というものを知った。

特別編 カラスと科学者 + extra (後書き)

次回は『逃走中』書きます。
お楽しみに！

特別編 逃走中！ カラスver 前篇（前書き）

長いので前後篇に分けました。上手く出来ているかどうかわかりませんが、楽しんで頂ければ幸いです。

特別編 逃走中！ カラスver 前篇

夜明け前。如月ハイランドに集められた12人に恐怖のオープニングゲームが待ち受けていた。参加者は吉井明久、坂本雄二、烏丸大貴、木下秀吉、土屋康太、姫路瑞希、島田美波、霧島翔子（自称坂本翔子）、木下優子、工藤愛子、沖田静馬、島田葉月。

《これよりゲームを始める》

スピーカーから流れる音声に呼応して、盛り上がる一同。

オープニングゲームルール説明

- ・ハンターボックスまでの距離は30メートル
- ・逃走者は1人ずつサイコロを振る。
- ・サイコロには2〜6とハンターの目。
- ・ボックスは出た目の数だけ前進。
- ・合計16マス以上進めばクリアとなりハンター放出まで1分間の猶予が与えられる。
- ・その間に逃走者たちはエリアに散らばる事が出来る。
- ・ハンターの目が出たらその時点で4体のハンター放出。その時点90分間のゲームが始まる。
- ・サイコロを振る順番はくじ引きで決定。

1人目は沖田静馬。

「す、すごく怖いよこれ！」

「頑張れ静馬！ お前なら出来る！」

「そんな事言ったってすごく近いって！」

「静馬くん！ ファイトですっ」
「よし、がんばるぞ！」

静馬は勢いをつけてサイコロを振る。

.....。

.....。

出た目は5。全員が息を吐く。緊張のあまり息をするのを忘れたようだ。

その間にハンターの入ったボックスが5マス前進した。残り11マス。

2人目は坂本雄二。

「.....雄二、頑張つて」

「あ、ああ」

雄二は緊張の面持ちでサイコロを振る。出た目は 4。

ハンターボックスが4マス進み、クリアまで残りは7マス。クリアに近づけば近づくほどハンターの目が出た時の確保の危険が増す。

三人目は姫路瑞希。

「が、がんばります！」

「頑張れ、姫路さん！」

「あなたならいけるわ、瑞希！」

「はいっ！」

瑞希は思いっきりサイコロを振る。出た目は 6。

「……いよつしゃあああああ！」「……」

残りは1マス。次のサイコロの目が2以上ならオープニングゲームクリア。

「よし、次は誰だ？」

クリアが目前に迫り、雄二が意気揚々と言う。四人目は。

「オレだ」

「……終わった……！」

「……どういう意味だよ！？」

四人目は烏丸大貴。やたらと運が悪く、ばば抜きをやらねば必ずババが回ってくる、大富豪をやらねば絵札は回ってこない、くじ引きでポケットティッシュ以外が当たった事が無い、おみくじを引けば大凶onlyなど、やたらと運が悪い。

「みんな、逃げる準備をするんだ！」

「そうだ！ コイツの事だから絶対ハンターの目を出すぞ！」

「……靴ひもの確認を怠るな」

「信用ねえな、オレ！ 優子、このバカどもに何とか言っただけでやっつけろ！」

「ヒロ、アタシはあなたの事をずっと見てきたから、誰よりもあなたの事を理解してるつもりよ？」

「え？ ああ、うん。サンキュ」

「だからね、なんとなく確信が持てるの。絶対アンタはここでハンターの目を出すって」

「……」

恋人である木下優子にまでダメ出しをされて大貴は隅っこでしゃがんで地面に『の』の字を書いていじけた。彼は意外にナイーブな性格なのだ。そんな大貴を哀れに思った静馬と葉月に大貴を励まされ、気を取り直した。

「大丈夫だつて。ハンターの目を出さなけりゃいいんだろ？ それ！」

「あ！ バカッ！ まだ靴ひもの準備が！」

雄二の叫びも空しく、サイコロは空中で回転しながら落ちていく。地面に落ち、転がり、出た目は 6。

「「「うおおおおおおおおおおおおっ！！！！」「」」

オープニングゲームクリア。

「め、珍しい」

「……………奇跡が起きた」

「明日は雪じゃろつな」

雄二、康太、秀吉がそれぞれ好き勝手な事を言っている。それを聞き、大貴はまた泣きたくなつたが、グツとこらえた。

「僕、ヒロならやってくれると思つてたよ！」

「お前、さつき『みんな、逃げる準備をするんだ！』つて叫んでたよな？」

「けど、実際アンタなら絶対ハンターの目を出すと思つてたのに」

「兄さんはサイコロの好きな目を出す事が出来るんです」

「なんでそんなこと出来るのですか？」

「ああ、それはな。ウチのジジイにチンチロリンのカモにされてか

ら必死に特訓したからな！ もはやシゴロの後家殺しも自由自在！」

「アンタ、ギャンブルはしない主義じゃなかったの！？」

「勝率が7割を超える勝負はギャンブルじゃない！」

「訳のわからない理屈を……！」

「完全に努力の方向を間違っておるのう……」

「木下さんも大変だね」

「というより何でそこまで強い目を自由自在に出せて、3割負けるんだ？」

「……烏丸だから？」

「凄い説得力だね」

「あはははは……」

.....

一分後。それぞれ如月ハイランドのあちこちに散った。

「はあく、とりあえず散ったはいいが、逃げ道とか身を隠しておく場所を頭に入れておかないとな」

最悪の場合自首も頭に入れておかないと、と烏丸大貴は考える。いつも鉄人こと西村教諭との追っかけっこをしているので、逃げ脚にはそこそこ自信はあるが、最悪のケースは常に想定しておくべきだ。『捕まつて賞金をパーにするくらいなら自首も有り』と言うのが大貴の考え方だ。恰好悪かろうと、非難されようとそれがベストだと大貴は思っている。彼は自他共に認める堅実派なのだ。それに賞金の使い道は既に決定している。

ある程度の逃走経路の下見をした後、大貴は何やら侵入者を阻むような施設Aと呼ばれる囲いがある物々しい雰囲気の建物に入っていた。

P r r r r P r r r r

ある程度中枢に入ると同時に携帯電話が鳴り始めた。残り85分の事だった。

.....

【残り87分】

「絶対に賞金を貰う」

吉井明久は息巻いていた。今月はどうしても欲しい新作ゲームが3本同時に発売されるのだ。最高賞金額10万8千円。1秒の商金単価は20円。テレビよりは少ないが、それでも一高校生には十分すぎるほど高額だ。自首など考えていない。この賞金が手に入れば金欠による清貧な生活（雄二や大貴曰く金の使い方を考えない自堕落な生活）ともおさらばだ。そう考え、明久は何やら侵入者を拒むような物々しい囲いと警備の設置された施設Aに入ろうとした。

「ここは黒い服を着た方以外立ち入り禁止です」

このテーマパークのスタッフらしい男が明久の前に立ちはだかる。

「あ、そうなんですか？ すみません」

（黒い服、か……）

不意に黒服が妙に好きな堅実派の友人を思い出した。

(そう言えばヒロは今日も黒い服を着てたよね?)

テレビなどでよくミッションが来る時こういった場所に目的のものを設置しておくことが多い。とりあえず覚えておいた方がいい。自他共に認めるバカな明久だが、こう言ったゲームをやりこんでいるだけあってこの先にどんな場所でイベントが起こるのか大体予想は出来ていた。大抵の場合、特殊な手続きを踏まないと入れない場所にはおいしいアイテムや重要なイベントがあるのだ。

P r r r r r P r r r r r

突然明久の携帯電話が鳴った。ミッションだ。

【立ち入り禁止区域施設Aに賞金単価減額装置を設置した。残り70分までにそれぞれのレバーを下さなければ賞金単価が1秒10円に減額される。なお立ち入り禁止区域に入る為にはキツネのフィーが持っているノインちゃんストラップが必要だ】

「まずいよ。賞金が下がっちゃう!」

ミッションを受け取るや否や明久はキツネのフィーを探し始めた。

.....

「.....」

「ムツツリー二君、どうする?」

工藤愛子の問いにミッションを受け取ったムツツリー二こと土屋康太は悩んでいた。

行くべきか、行かざるべきか。

今回参加しているメンバーは坂本雄二、吉井明久を筆頭に無駄に勇ましいのが多い。姫路瑞希は何事においても一生懸命やる性格である以上必ずミッションに赴くだろう。

しかし、もし彼らが失敗した場合、賞金単価の減額という現実が待ち受けている。最新のデジカメを買うためにはそれは避けたかった。しかし彼にゆつくりしている時間を与えてくれない。後ろからはハンターが迫ってきていたからだ。

「ムツツリーニくん！ハンターが！」

「……まずは逃げる」

言うや否や、康太と愛子は同じ方向に走った。

康太の全力疾走に愛子は離されていく。そしてハンターと愛子の距離はどんどん縮まっていく。

「うう……。このままじゃ捕まっちゃう……！ごめんね、ムツツ

リーニ君！（チラッ）」

「……ッ！？（ブシュウウウウウウウー！）」

愛子が来ていたシャツを少し捲り、康太は眼を見開いた。チラッと見えた白い肌。康太は公園の噴水のように鼻血を吹いて倒れた。

【土屋康太、確保。残り11名】

「……お、おのれ、工藤愛子……！だが……これはこれで

……悪くない……（ガクッ）」

.....

【残り時間69分15秒】

《烏丸大貴、島田葉月の活躍によりミッションクリア》

「よし。何とか間に合った」

大貴はガッツポーズ。偶々ミッションを受け取った時、施設Aの中にいたのだ。

ミッションを受け取った大貴は速攻で賞金減額装置の電源を切るべく動いた。

間に合いそうにないならミッションを諦める事も重要だが、自分の手の届く範囲にあ

るのなら参加する。現実主義者であるが故にいい意味でも、悪い意味でも堅実派なのだ。

美波の妹である葉月とは施設の中で会った。聞くところによると彼女は偶然フィーの傍にいた為、ノインのストラップを手に入れる事が出来たそうだ。

しばらくその辺を隠れながら慎重に移動している最中に携帯電話が鳴った。

【姫路瑞希確保。残り10名。残り時間57分53秒】

「あちゃあ……」

大貴は掌で顔を覆い、天を仰いだ。運動の苦手な瑞希が逃げ切れるとは思っていなかったが、大貴個人としてはどんな事にも頑張る瑞希に好感を持っていたので、出来れば逃げ切ってほしいとは思っていた。

残る逃走者は大貴を除き明久、雄二、康太、秀吉、美波、翔子、優

子、静馬、葉月だけとなった。そしてまた大貴の後ろに不穏な影が。

「ヤッベ！ ハンターだ！」

自分以外の気配を後ろの方に感じ取り振り向いた後、一目散に逃げ出した。

ハンターの足は大貴より速かったが、これだけ距離が離れているなら撒く事は可能だ。

あらかじめ目を付けておいた逃走経路をたどり巧みに隠れた。ハンターは大貴を見失い巡回に戻っていった。

.....

【残り時間50分】

P r r r r P r r r r

【ミッション2 ネームタグを交換せよ。スタート前に渡されたネームタグを交換せよ。尚交換は何度行ってもよい。失敗した場合ハンターが2体が新たに放出される】

このミッションを受け取った坂本雄二はミッションを達成するべく動き始めた。

まず手近な誰かを捕まえてネームタグを交換するだけの簡単なミッションだ。やらない道理は無い。

ハンターを警戒しながら、他の逃走者を探す。そして目の前の草むらに隠れている明久を見つけた。

「雄二、ミッション」

「ああ。これがオレのネームタグだ」

「うん。こっちが僕のネームタグね」

そう言つて雄二は道端で拾つたボロボロのプラスチックを、明久はその辺にあつた葉っぱをそれぞれ渡した。

「やんのかコラアアアアアツ!!」

「上等だ、表出るやああああツ!!」

掴みあい始める明久と雄二。お互いに考える事は同じだった。

スパパァン!

「何やってんのお前ら……」

「全くお主らは……」

その様子に大貴は小烏丸で雄二と明久にツツコミを入れ、一緒にいた秀吉が呆れたように溜息をついた。

「あ、ヒロと秀吉。もうミッション終わったの?」

「おう。秀吉とさつき会つてな。交換して貰つた」

「という事は残りは木下姉と翔子と工藤と島田姉妹、静馬か」

「島田姉妹は静馬と、優子は工藤と交換したらしいから大丈夫だ」

「そうなんだ」

「ほら、お前らもさつさと交換してしまえ。1人でも失敗するとミッション失敗なんだからな」

「わかつたよ。雄二と交換なんて本当に不本意だけど」

「それはこっちのセリフだボケ」

「さつさやらないとハンターの前に突き出すぞ、コラ」

「はい！ さっさとやります！」

雄二と明久はネームタグを交換して、それぞれ散って行った。
雄二も移動しようと考えていたら

「……雄二」

「うお！？ しよ、翔子か……。脅かすな」

「……ゴメン。雄二、ミッション」

「あ、ああ。交換するか」

そう言つて先ほど明久と交換したネームタグを差し出した。

「……吉井のネームタグ？」

「あ、ああ。それがどうした？」

「……雄二」

「なんだ？」

「……浮気は許さない」

「待て！ それはいくらなんでも理不尽頭蓋が割れるうウウウウウ
ウウウウウッ！！！！」

.....

【坂本雄二、霧島翔子確保。残り8名】

残り時間42分になった頃。沖田静馬はこのメールを受け取った。
その事実を冷静に受け止めながら静馬は携帯電話を閉じる。
他人を気にかけている余裕は静馬にはなかった。静馬には勝たなければいけない理由がある。彼は新しい防具が欲しかった。今使っている防具はボロボロだったのだ。

しかし剣道の防具の値段は高い。良質な物でなくても10万円位はするのだ。修介にねだって買ってもらうという手もあったが、これから何十年と使っていくつもり物だ。出来るなら自分のお金で買ったかった。

(このゲーム負けられない！)

これまで何度かハンターと遭遇したが逃げ切っていた。

彼の100メートルのタイムは12秒前半。足の速さは静馬の自慢でもあった。

「あ、優子さん　ってハンター!？」

「……静馬くん!？」

木下優子がハンターを伴い、正面から走ってくる。

当然、静馬も回れ右して逃げた。

距離は十分。逃げ切れる！と静馬は確信した。が、突如としてスタート前に腕に付けられた機械が鳴り始めた。

「な、鳴ってる!？」

と、優子。

「い、今はそんな事どうでもいいです！　逃げないと　ッ!？」

静馬は眼を疑った。後ろのハンターとは別のハンターが前方に迫っていた。

「「う、嘘オオオオオオツ!?!？」」

優子と静馬の叫びが八モった。

.....

【ミッション3 アラームの電源を切れ】

そのミッションを受け取った直後、静馬と優子の確保の知らせを受け取り、眉を顰めた。

「木下さんと静馬くん捕まっちゃったんだ……」

「らしいのう……」

秀吉とさつき途中で遭遇した明久がそれぞれ言う。彼らはアラームの電源を切る為に、警備室を目指している所だった。警備室までの距離は約400メートル。過酷な状況下だったが、このままでは「ここにいますよー」とハンターに触れまわっているようなものだったので三人共ミッションを果たすべく警備室を目指していた。

「秀吉、興味本位で聞くが、優子は賞金を何に使ったつもりだったんだ？」

「うむ。実はもう、欲しい新刊が大量にあるらしいのじゃが」

「欲しい新刊？ それって優子のあの趣味の？」

大貴の問いかけに秀吉は神妙な様子でコクリと頷いた。

「捕まって良かったと、言うべきなんだろうか……」

「ねえ、木下さんのあの趣味って何？」

「明久よ。世の中には知らない方がいい事があるのじゃ……」

「だな。………ッ!? ヤバイ！ ハンターだ！ 逃げろ！」

油断して警戒を怠っていた大貴。ハンターは既に近くまで迫ってきている。

大貴がこれまでハンターをかわしてこれた秘訣は、無想による副産物である勘の良さと高い感知能力にあった。その能力でアドバンテージを握っていた。

しかし今回はそうはいかない。逃げる大貴と明久と秀吉のFクラストリオ。追ってくるハンターとの距離はみるみるうちに縮まってくる。

(このままでは捕まる……！)

そう判断した大貴はある決断を下した。

「明久、秀吉！ オレ、絶対に捕まる訳にはいかないんだ！」

「勿論僕もだよ！」

「ワシもじゃ！」

「確実にハンターから逃げ切る秘策があるんだが、乗るか？」

「乗った！」

「この先に三差路がある！ そこで別の方向に散るんだ！ オレは右！」

「じゃあ、僕は真ん中で！」

「ワシは左じゃな！ 残り物には福があるからう！」

「ハンターが誰に食いついても恨みっこなしだ！」

「わかったよ！」

「了解じゃ！」

「散会！！！」

三差路に突き当たりそれぞれに指示を出す。明久と秀吉は言われた通りのルートを突き進む。ハンターが食いついたのは 明久

だった。

「って嘘おおおっ！ 嫌だあああっ！」

【吉井明久確保】

残るは烏丸大貴、木下秀吉、島田美波、島田葉月、工藤愛子の5名。
そして逃走劇は後半戦へと突入していく。

特別編 逃走中！ カラスver 前篇（後書き）

今までで一番難産でした。

逃走中って難しい！ 後編は現在制作中です。気長に待って頂けるとありがたいです。

気づけば投稿を始めて1年過ぎていました。ここまで長く続けられたのも応援してくれた皆さんのお陰です。

これからも頑張っていきますのでよろしく願います！

特別編 逃走中！ カラスver 後篇

残り38分。現在の賞金金額62400円。
生存者 烏丸大貴、木下秀吉、島田美波、島田葉月、工藤愛子。

「あらら、明久捕まっちゃったか……」

大貴は携帯電話を閉じ短く嘆息して心の中で犠牲になった友人に合掌した。

ハンターが明久に食いついたのはいいが、警備室から随分離れてしまった。アラームの鳴る音はまるで目覚まし時計のスヌーズ機能の様にだんだん大きくなってきている。

ここから警備室まで直線で100メートル。しかしその直線上は先ほど明久を捕獲したハンターが徘徊しており迂回せざる得ない。となると最短距離で約200メートル。

大貴は靴ひもの確認をしてから、深呼吸。覚悟を決めて駆けだした。

【残り時間36分】

.....

【残り時間34分】

「アキ、捕まっちゃったんだ……」

ペンチでアラームの配線を切っていた携帯を閉じ、美波はため息を

つく。

隣では妹の葉月が手慣れない様子でペンチを握り、アラームの配線を斬ろうと悪戦苦闘していた。美波はそっとペンチの端を握り、葉月のアラームの配線を切断した。けたたましく鳴っていたアラームはピタリと止まる。

「ありがとうございます、お姉ちゃん」

「うん。それじゃあ行くわよ。このままここにいるのは危ないからね」

「はいですつ。頑張るですつ」

美波と葉月は警備室から外に出て、固まって一網打尽にされるリスクを避けるためそれぞれ逆方向に散っていった。それぞれの逃走者達が賞金を求める理由があるように彼女たちにも賞金を求める理由があった。彼女たちの賞金の使い道はズバリ家族旅行だった。

美波と葉月の両親は共働きだ。そして普段から何かと忙しく、家族でゆっくりする機会が少ない。『賞金を持ち帰り家族水入らずの旅に行きたい』これが彼女たちの目的だった。

その為に美波か葉月。どちらか1人は確実に逃げ伸びなければならなかった。

「ッ！」

美波の前方からけたたましい音を立てて誰かが走ってくる黒い服。

一瞬ハンターかと思ったが、違った。

「か、烏丸？」

「島田か！ ミッションは終わったのか？」

「う、うん」

「この先真っ直ぐ行くとハンターと鉢合わせるぞ。右のルートから

逃げておけ」

「う、うん。わかった。ありがとね」

「おう。じゃな！ お互い健闘！」

そう言つて大貴は警備室の方向に走つていった。美波はしばらく大貴の走り去つた方向を見詰め、彼の忠告通り右の道へ走つていった。

.....

【残り25分】

ミッションクリアの知らせを携帯で受け取つたのは、5分前。今回のミッションでは誰も脱落しなかつたようだ。工藤愛子はホッと一息ついていた。最初以降、運良くハンターのは遭遇していない。出来るならこの先ずっと遭遇したくない。

彼女は他の参加者と違い、特に賞金を求める理由が無い。しかし10万と言う大金を獲得できるチャンスがあるのなら全力を尽くすべきだと考える。お金はいくらあつても邪魔にならないし、もし自分が進学した場合、大学の授業料は馬鹿にならない。家に学費を払うだけの余裕が無い訳ではないが、ないよりある方がいい。

「さーて、烏丸くんを探さないとね」

工藤愛子は烏丸大貴を探していた。優子曰く、大貴は広範囲での人の気配を察知できるらしい。大貴と一緒に行動できるならハンター相手に大きなアドバンテージを握る事が出来ると考えていい。

P r r r r r r r P r r r r r r r r

再び携帯が鳴りだし愛子は折り畳み式の携帯電話を開き、画面を見た。新しいミッションだ。

【ミッション4 残り10分までに監視カメラの電源を落とせ】
園内に設置されている5台の監視カメラに逃走者が映ると即ハンターに通報される。

停止するには監視カメラの電源を抜け！ 失敗した場合ハンター2体放出。

.....

「うっわ、性質悪いミッション来たよ……」

ハンターをやり過ごす為、草むらに潜んでいた烏丸大貴は持ち前の地味な顔を歪めた。小柄ながら引き締まった体に目一杯の木の葉や木の枝を張り付け、頭に頭上に鳥の巣やら木の枝を差し込んでいた。傍から見たら大貴の姿は糞虫の真似をした変態そのものだった。そんな事など本人は気にも留めずにミッションの為に作戦を練り始める。

監視カメラなら逃げる途中に何台か確認した。
大体開く範囲は120度。あいにく遮蔽物によって死角が出来るカメラは大貴の近くにはない。しかしこのまま放っておくのは彼にとっても旨みが無い。逃走経路は多ければ多いほどハンターを巻く事の出来る可能性は高くなる。逆に言えば逃走経路を限られてしまえば、捕まる可能性が引き上げられてしまう。

「仕方ねーな。近くにある奴だけでも停止させるか」

近くに会った監視カメラ5に向かって大貴は木の枝を張り付いけた

まま匍匐前進で慎重に進み始めた。その様子は傍から見たら相当気
持ち悪かった。

.....

島田葉月は近くの監視カメラ2の電源を切るべく移動していた。彼
女は監視カメラに映らない様に物陰に隠れながら慎重に移動してい
く。上手く隠れているつもりだった。

監視カメラが彼女の姿を捉える。葉月はその事実気付いていない
ままミッションを続行する。そして。

「よいしょっと！ やったです！」

葉月は監視カメラの電源を切り、両手を上げてピョコピョコと飛び
上がっている。

しかし後ろから黒い影がすごいスピードで迫っている事に彼女は気
づいていなかった。

.....

P r r r r r r P r r r r r r

【島田葉月確保。残り時間21分 逃走者4名】

「島田さんの妹捕まっちゃったんだ」

工藤愛子はミッションを果たすべく走る。駆ける。疾駆する。目指
すは監視カメラ1。

失敗してハンター放出など冗談ではない。しかしこのミッションは極悪だ。今いる逃走者の数は残り4人。電源を切らなくてはならない監視カメラは残り4台。1人1台の割合で電源を切らなくては間に合わない。ミッションに動けばそれだけハンターに捕まる可能性も高くなる。もはや一刻の猶予もなかった。愛子は全力で走る。一つでも多くの監視カメラを切る為に。しかし、このゲームの神様は無常だった。

「ッ!? ハンター!」

前方からハンターが歩いてきており愛子は急ブレーキをかけるが見つかった。

愛子は回れ右して逃げ出すが、ハンターは既にすぐ近くまで迫ってきている。愛子は必死に逃げるが2度目はなかった。

【工藤愛子確保。残り時間19分 逃走者3名】

.....

その後美波がカメラ1を、秀吉がカメラ4を、大貴がカメラ5をの電源を切るが残りのカメラ3を切れず痛恨のミッション失敗。ハンターが新たに2体放出された。そんな中大貴はあの決断を下す。

「よし。自首すつか」

夕飯のおかずを決めるような軽い口調だった。そこには躊躇も未練も見当たらない。

現在の残り時間13分27秒。賞金金額92940円。ここまで増

えれば充分だった。

そうと決まればさっそく自首の為に公衆電話を目指す。自首の条件は公衆電話で電話をかけ『自首します』と言うだけ。ここから公衆電話まで約200メートル周囲にハンターの気配は前方約100メートルの一体だけ。ここなら障害物が多い為、見つかる心配はあまりない。迂回すれば見つからずに行ける筈だった。

ゆっくりと一応警戒しながら後方へ下がり遠回りしながら公衆電話を目指した。

大貴がジェットコースターの前を通りかかった所だった。

P r r r r r r P r r r r r r

携帯が鳴った。

【ラストミッション ノインちゃんとフィーを観覧車の前に連れて行け】

メリーゴーランドの前のノインとジェットコースターの前にいるフィーをそれぞれ観覧車の前に連れていけ。成功した場合、ハンターが3体消える。

「くあつ……！ 何て嫌なタイミングだ、チクシヨウめがッ」

大貴はあまりのタイミングの悪さに悪態をつく。そして少しだけ逡巡した。

（公衆電話は観覧車の手前のY字路のもう一方の道にあったはず……）

「仕方ね。出来る限りやってヤバそうならトンスラすっか」

フィーの腕を引っ張って観覧車の前を目指した。

残り時間9分 逃走者 烏丸大貴、木下秀吉、島田美波。

.....

「む……！？ ヒロではないかつ！」

「秀吉？ ツ！ 志村後ろ後ろ！」

大貴は秀吉の後方にいるハンターを見て慌てて隠れた。が、遅かった。

「む！？ は、ハンターじゃ！ 逃げるのじゃ！」

大貴と秀吉はフィーを伴い逃げ出した。手前のY字路に差し掛かり、大貴は公衆電話に向かい、秀吉は観覧車に向かった。ハンターが食いついたのは 大貴だった。

「ぬあああああああああ！ チックショー！ こっち来やがったあああつー！」

叫びながらもスピードを緩めない。もはや逃げ切る事は不可能だった。

大貴は公衆電話の受話器を取り、自首用の電話番号を入力しようとするが ミス。

もう一度受話器を戻し、電話番号を入力する。ハンターとの距離は50メートルまで縮まっていた。

今度は間違えないよう慎重に番号を押していく。ハンターはあと20メートル。

「烏丸大貴！ 自首します！」

【残り時間7分53秒 烏丸大貴、自首成立】

「YES！ YES！ 何処までもYES！」

大貴は自首を成功させて有頂天だった。

「危ね、危ね。危うく捕まっちゃうところだったぜい。そんなじゃ、御疲れサマンサ、ターバサ」

彼は間違いなく調子に乗っていた。警戒にスキップなんかしながら、スタート地点まで戻っていく。大貴のスキップの着地地点にバナナの皮が落ちており、その10分後、大きなタンコブを作った大貴がスタート地点に戻ってきたが、それはまた別の話。

.....

木下秀吉は大貴を囮にハンターから逃げ切り、フィーを連れて観覧車の前に連れてきていた。観覧車の前には恐らく美波が連れてきたであろうノインがいて、二人を観覧車前につれてくる事が出来た。

「これでミッションクリアじゃな」

P r r r r r r P r r r r r r

「ヒロ……、捕まったのじゃな」

リタイヤしたと思われる友に想いを馳せながら秀吉は携帯を開いた。

【残り時間7分53秒 烏丸大貴 自首成功 賞金98,140円
獲得】

「むう、ちゃっかりしておるのう……。あやつらしいと言えば、あやつらしいがの」

秀吉はそう言っつて携帯電話を閉じて周りを警戒しながら身を隠す場所を探す。

秀吉にもゲームに勝ちたい理由がある。

演劇部の部費の足しにする為になんとしても勝ちたかった。

演劇には何をするにしてもお金がかかる。小道具はまだいい。持ち寄れば、それなりに何とかなる。しかしセットや衣装はそうはいかない。セットを組むのにも古着を改造するにしても、絶対にお金がかかるのだ。部費だけで賄えない事はないのだが、それでも苦しい事には変わらない。だから賞金が欲しい。

しかしそんな秀吉の願いを打ち砕くかのような出来事が。

先ほど大貴を逃したハンターが迫っていた。そして 見つかった。

「ま、拙いのじゃー!」

秀吉は逃げる。ハンターは追う。両者の距離はどんどん縮まっつていく。

そして 彼の必死の逃亡も空しく捕まっつた。

「く、悔しいのじゃ……」

【残り3分32秒 木下秀吉 確保 残り1名】

.....

【木下秀吉 確保 残り1名】

島田美波は物陰に隠れていた。息を潜めて終了の時間を待ち続けている。周りにはハンターはいない。そして。

.....

「10.....9.....8.....7.....6.....5.....4.....3.....2

.....1「「「「

.....

「0!」

【島田美波 逃走成功!】

賞金10万8千円獲得!

「葉月! お姉ちゃん、やったわよーっ!」

「凄いですっ! お姉ちゃんカッコいいですっ!」

「それに比べてヒロ。アンタ自首なんてかっこ悪すぎ」

「そんな戯言、聞こえねーな」

「じゃあ、聞こえるようにしてあげる」

「ちよっと待て優子。そんないい笑顔でオレの腕をとって何をする

気だ あっ！ 無理！ オレの関節はそっちには曲がらないって
！」

「……相変わらず優子と烏丸は仲良し」

「待て翔子。何故お前はオレに手錠をかけようとするんだ!？」

「……雄二もあの二人を見習ってもっと私とスキンシップをとるべき」

「いや、翔子。あれはスキンシップというより理不尽な制裁 待
て翔子！ 俺の関節はそっちには曲がらねえっ!!」

「ぼ、僕の幸せなゲーム三昧な生活が……」

「あ、明久くん。コレをあげるから元気出してください」

「これは？」

「はい。今朝作って来た魔奴隷怒です」

「さらば！」

「あっ！ 明久くん待ってください！」

「皆元気じゃのう」

「本当に仲がいいよね」

「……仲良き事は美しき事かな」

「アレ本当に仲いいんですか？ なんだか殺伐としてますけど？」

こうして文月学園主催逃走中は島田美波の勝利で幕を閉じた。

その後日、新品の防具が沖田静馬の元に届けられたのは別の話。

オリジナルキャラクター

沖田静馬 11歳 男

沖田弦馬と千鶴の息子で烏丸大貴の甥。真面目で誠実な常識人。穏やかな性格だが芯は強く、やや嫉妬深い面がある。美少年で落ち着いた性格の為、学校ではモテる。

両親の死後、自分を育ててくれた大貴と修介を尊敬している。島田葉月に好意を抱いており、明久をライバル視しているが、同じくらい明久の事を頼りにしている。自立心が強く「護られてばかり」という事にコンプレックスを感じている。

僅か数ヶ月で天源無想流の最年少目録の記録を塗り替えた真正正銘の剣の天才で烏丸修兵と同等の才能を持っている。持ち前の素早い動きを最大限に生かした相手の死角に入りこむ体捌きを得意とする。

烏丸修介 72歳 男

烏丸本家の先代当主。快樂主義の性格破綻者。趣味で作成した新作トラップの実験と称して大貴をトラップの餌食にする口クでもない人物。

今でこそ軽い性格だが、昔は人間味が無いほど厳格な性格で烏丸修一の歪みを形成した張本人。本人も自分が親として失格だった事を自覚しており、修一との間に溝が出来た事を悔やんでいる。修一との関係は現在徐々にだが修復中。

天源無想流免許皆伝。攻撃を最も得意とする。

烏丸修一 51歳

大貴の実父。プライドが高く、自らの失敗を認められない性格。自らの失敗の象徴である大貴を長い間疎んじていたが、大貴と本音をぶつけ合った事で態度が軟化する。失敗を認められない性格の根幹は厳格だった父に認めてもらう為、幼い頃から努力に努力を重ねてきたことから。想定内の事には強いが、自信の予想外の事にはめっぽう弱く精神的に脆い部分が表面化する。甘い物が好き、努力を重ねる堅実派、多芸だがどれも極める事の出来ない器用貧乏、根っからの2番手など、大貴とよく通じる部分があり修介をして『誰よりもよく似ている』と言わしめる。

烏丸修兵 18歳 男

大貴の実兄。眉目秀麗。文武両道。烏丸本家当代きつての天才で人当たりのいい好人物を演じる青年。

秀才である大貴と違い何でも極める事が出来る故にすべてに退屈している。

本音をぶつけてくれる相手も、本音をぶつけられる相手もない。自分を『烏丸本家』という作品を完成させる為の『パーツ』のように考えており、絶望している。

自らが全てをぶつけられ、対等に渡り合える『敵』を探しており、大貴に執着する。

外伝 第13話 ホンネ日和 【前篇】

夏休みも終わりにさしかかったある日。いつもの如く鉄人こと西村教諭の地獄の補習を終わらせて（明久、雄二は脱走を試みるも失敗。烏丸大貴は西村の猟犬の如き追撃をかわし未だに逃亡中）教室で海に行った時の写真を広げて雑談をしていた。そこへ学園長である藤堂力ヲルにある事を頼まれた。

「『『召喚獣の試運転？』』」

教室にいた吉井明久、坂本雄二、島田美波、木下秀吉は声を揃えてオウム返しに聞き返した。

「どうしてウチらなんですか」

「適任だからさ。アンタ達なら点数が高すぎず、召喚獣の扱いにも慣れてるからね」

学園長は美波の問いに当然と言わんばかりにスラスラと応えた。

「それに 補習を脱走しようとした馬鹿どもへの罰になるからね」

「『……………（サツ）』」

学園長に避難するような視線に明久、雄二は罰が悪そうに顔を背けた。それと同時に2人は先ほど西村教諭に捕獲された時に大したお咎めが無かった事が腑に落ちた。

「あの、試運転って何をすればいいんですか？」

と、瑞希がおずおずと手をあげながら学園長に聞いた。

「特にこれといってテスト項目はないさね。呼び出して適当に動き回らせるだけさ。なんの動きもないのは試験にならないから困るけどね」

学園長の言葉に妙な怪しさを感じ明久と雄二は眉を潜め、顔を見合わせた。

「あ、それなら私にも出来そうです。お手伝いをさせてください学園長先生」

「……私も」

そんな2人の懸念を知ってか知らずか、瑞希と翔子は手伝いを申し出た。

「いや。アンタ達はダメだね。点数が高すぎる。もしも召喚獣が暴走したら色々拙いからね。そう言う訳で試運転は吉井・坂本・土屋・木下・烏丸・島田に頼むよ。教科は古典でね」

「待つてくださいババア長！ このメンツと僕が同列扱いされるのは納得できません！」（14点）

「そうです学園長！ ウチをこんなバカと一緒にしないでください！」（6点）

「………不本意極まりない………！」（9点）

「……アンタらのその自信はどこから湧いてくるのかねえ………」

「三人合わせて姫路や霧島の半分以下の点数じゃというのに………」

「ちよっと待てババア。このメンツはともかく、俺とヒロはそれなりに点数が高かったはずだが？」

「アンタ達には何が起こつても構わないからね」

「それが教育者の言葉かつ！」

「とにかく！ 烏丸も西村先生に捕まり次第、試運転に参加させるから先に始めといておくれ。試験時間は今から1時間。召喚フィールドは一応試運転用に学校全体に広げておくけど一応この教室から出ないように。データが採りにくくなるからね。うまくやってくれたら……そうさね。図書券や学食の食券を贈呈しようかね。ただでやらせるのもなんだしね」

「「「おおー」「」」

秀吉、康太、美波は揃って簡単の声をあげるが、明久と雄二は感じていたばやけた懸念の輪郭がだんだんハッキリしてきていた。一言で言うと怪しすぎると思ったのだ。

「それじゃあ頼んだよ。報酬を出すんだから 絶対に途中で投げ出すんじゃないよ」

そう言い残して学園長はFクラスから出て行つた。美波と秀吉と康太は学園長の言葉に素直に大喜びをしているが、明久、雄二は先ほどから感じている何とも言えない怪しさに揃って懊惱としていた。しかし状況は彼らが怪しさの正体を掴むのを待つてくれない。

「じゃあさっそく始めましょ」

「じゃな。こうしておつてもはじまらん」

「……………了解」

「あ、三人共ちよつと待」

「「「サモン試獣召喚！」「」」

明久が制止の言葉をかけるが、3人共召喚獣を呼び出した。床に馴染みのある幾何学模様が浮き出て召喚獣が姿を現した。

「良かった。サイズは前の奴に戻ったみたいね」

「……………武器を持っていない」

「服装も学校の制服みたいですね」

「システムをリセットすると言っていたからその影響ではないかのう？」

「一応おかしな所は見当たらないね」

「油断するな明久。さっきのババアの話だと変更したのは操作性の部分らしいからな。動かしてからが本番だろ」

「ふむ。ならばさっそく動かしてみるかの」

《では、明久に飛びついて脅かしてみるのじゃ》

「……………?」

その場にいる誰のものでもない甲高い声が教室に響き渡った。

……………

大貴SIDE

自由への逃走劇も化け物染みたスペックを誇る西村先生に阻まれ、補習を脱走しようとした罰として召喚獣の試運転に参加するように言われた。

学校で待ち合わせ優子、部活を終えた工藤と合流してFクラスへ向かった。

「うーっす。元気ですかー？」

《ムキー！ 雄二のアホー！》

《うぎー！ 明久のボケー！》

教室のドアを開け、軽い調子で挨拶した。そこに飛び込んできたのは召喚獣が喋りながら取っ組み合いをしているという世にも珍しい光景だった。

「なんだあ、こりゃ？」

「くたばれ雄二！ 責任とれ！」

「死ぬのはお前だ明久！ 地獄に堕ちろ！」

こっちはこっちで本体同士が取っ組み合いしてるし。一体何があったんだ？

「お前ら何やってんだよ？」

「よく来たな、ヒロ！」

「なにも聞かずに《試獣召喚^{サモン}》って言うてくれないかな？」

「は？ まあ、学園長から召喚獣の試運転頼まれてるからやるけどよ。その前に何があったか説明くらいしてくれ」

「理由はあとで話す！」

何だっつてんだ、一体。

「しゃーねーな。呼び出した後にちゃんと説明して貰うぞ。《試獣^サ召喚^{モン}》」

いつものようにキーワードに反応して召喚獣が投影される。ついでの間までオレの召喚獣はオカルト仕様の烏天狗だったが、こっちの方が見慣れている分しっくりくるような気がする。

「「ようこそ、地獄の一丁目へ！ 愛すべきバカ野郎」」

明久と雄二が揃いも揃ってまた訳のわからねえ事をのたまわっている。

《まあ、こいつらが訳わからねえのは今更か》

「ん？」「え？」

聞き慣れない甲高い声。しかもオレの考えた事を喋っている。そういえばさっきの召喚獣も甲高い声で喋ってたよな？ ……もしかして、もしかしくなくてもオレ嵌められた？

.....

《死に晒せ、テメエら！》

《死なば諸共だ！ 諦めるヒロ！》

《そうだよ！ 赤信号みんなで渡れば怖くないだよ！》

《訳わかんねえ事言ってんじゃねえ！》

《グフウツ！》「顎が割れるような痛みがアアアアアア！」

この召喚獣、どうやらオレの本音を勝手に喋るようだ。その事を姫路から説明して貰うとすぐさまオレの召喚獣は明久と雄二の召喚獣に殴りかかっていった。

流石オレの本音を表す召喚獣。『恩も恨みも忘れない』というオレのモットーを余すところなく再現して

《って今はそんな事どうでもいいんだよ！》

「それより召喚獣を消す方法は何かないのか!？」

「無理ね。学園長の話だと、学校全体にフィールドを展開しているみたいだし」

「《くあ~~~~っ!!》」

オレと召喚獣は揃って頭を抱えた。

《オレは明久と雄二が酷い目に逢うのを安全圏から眺めて指を刺して大笑いしていただけでいいのに！ 何故気付けばオレまで酷い目に!?!》

「ヒ口、黒い本音が漏れてるわよ」

「《しまった!》」

拙い！ この召喚獣、腹黒を自任しているオレとは相性が悪すぎる！ さつさと何とかしないと色々と大事なモンを失いそうだ！

「けど本音を喋る召喚獣か。面白そうだね」

「「面白くない!」「」」

「そうね。これがあれば、隠し事もできないし、ね?」

「《ゆ、優子さん? 何をする気ですか?》」

工藤と優子のいい笑顔にオレ達は揃って戦慄した。

「ムツツリーニ君」

「……………ッ!(ビクン)」

「ボクちよつと君に聞かせてほしい事があるんだよね」

「こつちは話す事なんか」

《……………エロの話なら大歓迎》

《ちよつと待てお前ら。是非オレも混ぜてください》

「……………（ベシベシ）」
「ぬあああああああっ！」

ムツツリーニは無言で召喚獣を叩き、オレはこめかみに手をやってブンブンと首を左右に振って絶叫した。後ろで優子が殺気を撒き散らしながら、いい笑顔のまま表情を変えないのが凄く怖い。

「あはは。残念だったね烏丸君。Hな話じゃないんだよね。ボクが聞きたいのは　ムツツリーニ君がボクの事をどう思っているかだよ。いつもは興味ないって言うてるけど、本当はボクに興味があったりしない？」

「……………何を馬鹿な事を」

《……………スパッツの中はどうなっているんだろう？》

「……………（ベシベシ）」

《……………痛い》

「あははっ。本当に本音を喋るんだね。面白〜い」

「……………面白くない」

《……………スパッツの中見たい》

「……………（ベシベシ）」

《……………叩かないでほしい》

「あはははははっ」

工藤はムツツリーニの反応を見て明るく笑っていたが、オレにはその笑いが無理やり明るく振る舞っているように見えたような気がする。

「じゃあ、もうちょっと遊んでみようかな」

そう言って工藤は人懐こい笑みを浮かべながらオレ達の方に向き直った。

なんだ？ 何をする気なんだ！？

「ねえ、吉井君、坂本君、烏丸君。スパッツだからつまらないかもしれないけど
ボクのスカート捲ってみる？」

「何言ってるのさ工藤さん。僕はそんな《捲らせてください》いやらしい人間じゃないよ」

「そつだぞ工藤。俺達をからかっても《待て明久。俺が先だ》無駄だからな」

「そつとも。女の子がそんなはしたない事を《是非ともお願いします！》言つもんじゃねえよ」

「アキ。ちよつとこつち来て」

「明久君お話があります」

「……雄二、おいで」

「ヒロ、顔を貸しなさい」

やっちまっただぜ

.....

「まったく。覗きや本の没収で少しは懲りなさいよね。そうやっていやらしい事を考えてるとまた問題になるんだから。ね、瑞希？」

「え？ そ、それは、その、えつと……いやらしい事は年頃だから仕方ないかもしれませんが……。愛子ちゃんをそういう目で見るのはダメですつ！ あんまりそういう事ばかり考えてると、美波ちゃんと一緒にお仕置きしちやいますからね？」

「……雄二、浮気は許さない」

「ヒロ、いい加減にしないと軒先に吊るすわよ？」

「……はい。肝に銘じておきます」「」

オレ達3人そろってDOGENZAしていた。見よこの芸術的なまでのDOGENZAを！

もはや土下座は人生の友！ かけがえのないパートナー！ そうとも！ もはや土下座はオレの人生と言っても過言ではない！

「ごめんね4人共。ちよつとからかつちやつたよ」

「本当だよ。酷いよ工藤さん」

「ちよつとは自重してくれ」

「オレ達の場合、冗談でもシャレにならねえからな」

「ごめんね。嘘ついちゃって」

「は？ 嘘？」

「そう。ボク、嘘ついてたんだ。実はボク」

工藤はスカートの端を指で摘み上げ、ギリギリまでたくしあげた。

「 今日スパッツ穿いてないんだ」

《……………ツ！？（ガタツ）》

《……………ツ！？（ガタツ）》

《……………ツ！？（ガタツ）》

《……………ツ！？（ブシュウウウウウッ）》

「……………これは違うんだああああああああつー！」「……………」

「……………いいからこつちに来なさい！」「……………」

……………

「……………やべえ……………。意識が朦朧としてきた」

「……………拙いね……………。僕も指先が震えてきたよ」

「流石のオレも死んだかと思った……」

「……雄二。私だってスパッツ穿いてない」

「アキってばどうしてそう、いやらしい事ばかり考えるのよ!？」

「明久君っ。ちゃんと反省してくださいっ」

「ヒロ、いい加減にしないと庭先に埋めるわよ」

優子の脅し文句がグレードアップしている!?　じよ、冗談じゃねえ!　埋められたらどうやって息するんだ……!?

ちなみに島田の召喚獣はというと　。

《アキのバカ!　スケベ!》

と言いながら、明久の背中をポカポカやっていた。

これくらいだったら妬いてるのか。可愛いな。くらいで済むだろうに……。

「ムツツリーニ、生きてるか?」

「……………(グツタリ)」

《返事が無い。ただの屍のようだ》

「って屍になつたらダメだろ!」

「それとね4人共。今日は寝坊しちゃってブラをする時間が」

「「もう勘弁して《《《ブラがどうした!?》》》ください

!」「」

死んでたまるか……!　今死んだら通販で頼んだエロビデオが走
式会場に到着してしまうじゃねえか……!　絶対に生き残ってやる!

「……雄二」

「ち、違つぞ翔子!　これは男として当然の反応をだな　」

ジリジリと詰め寄る霧島に無駄な抵抗を試みる雄二。霧島は一步、

「黙れ、このバカ召喚獣!!」

オレ達の受難はまだまだ終わらない……………。

外伝 第13話 ホンネ日和 【後篇】

「明久君が異性に興味があるのは嬉しいですけど、翔子ちゃんや愛子ちゃんをそういう目で見るのはダメですっ。玲さんに怒られちゃいますし、そうじゃなくても最近はそういったHな事で問題ばかり起してるんですから」

「はい……。ごめんなさい……」

姫路に説教を喰らっている明久を見て何とも言えない気分陥っていた。

《年頃なんだからスケベなのは仕方ない事だと思っただが……》

「アンタ達のは明らかにいき過ぎてるのよ」

怒られた。本音と建前ってのは人間関係を形成するの当たって重要なものだと思っただけの頃。

《男子高校生の脳内はほぼメシと女で占められているんだから正直な話、仕方ないと思うが……》

「ヒロ、まだ反省が足りないのかしら？」

「いや、けどな優子。実際問題人間の三大欲求を否定する事はその生物の根本を否定する事に等しくてな」

《ぶっちゃけた話、エロを解禁して欲しい！》

「ぶっちゃけ過ぎだコラ！」

《もっと言うと優子と【検閲削除】や【検閲削除】をしたい！》

「やめてくれええええ！ それ以上はオレの命が危ない！」

いつでも逃げられるように優子から2、3歩距離をとった。無駄だとわかっていながらも足掻きたくなるのは人間の悲しい性なんだ。と構えていた訳だが、いつまで経っても優子は襲ってこない。むしろ何か考え込んでいる。

「えっと……優子？ ……さん？」

「ねえ、ヒロ」

「は、はい！」

不意に声を掛けられ、上官を目の前にした軍人よろしく背筋をまっすぐにして直立不動になった。

「その、えっと……やっぱり………したいの？ その、色々……」

「……………」

《へ、返答に困る質問を……！》

拙い！ このまま放っておいたら、召喚獣が勝手にオレの心の奥底のあんな願望や、こんな願望を余すところなくオープンしてしまう！ それだけは避けなくては！ オレにだって人並みに羞恥心というものが備わっているのだから！

「まあ、その……オレも男だし……。好きな子とは、やっぱり………なあ？」

なるべくオブラートに包んだ表現で優子の問いに答える。ここは彼氏として彼女を不安にさせる返答はしてはいけない。顔が熱い。全身の血液が頭部に集まってきているような気がする。オレはよく優子にセクハラをするが、それはスキンシップの一種だ。こうしてあらためて問われ、真面目に答えるとかなり照れる。

同じ様に優子も顔を真っ赤にしていた。

「え〜っと……………優子？」

「ヒロ……………で、出来るだけ早く……………その……………決心するから……………。だ、だから……………それまでに手近なところで浮気したらダメよ」

「りよ、了解」

《なるべく早くよろし 「^{はし}奔れ、小烏丸！」 ギャアアアア！

！》

『ウチらの存在完全に忘れてるわね……………』

『優子ちゃんと烏丸君素敵です。羨ましいです』

『……………2人共本当に仲がいい。雄二も見習うべき』

『おのれヒロ……………！ 殺したいほど妬ましい……………！』

『……………同感……………ッ！』

『クラスの連中が知ったら暴動が起きるな……………』

……………

「……………。コホン、明久君」

「な、なにかな姫路さん？」

「突然ですけど……………明久君には好きな人はいますか！？」

「《ほえ？ 急にどうしたの？》」

「姫路さんその話アタシにももっと詳しく！」

《え！？ ちょい優子！ なんで明久の好きな人に興味があるんだ！？》

「……………改めて知りましたけど、明久くんってこういう質問を理解してないんですね」

《それが明久が明久である所以って奴だ》

「ヒロ、貴様今『明久』と書いて『バカ』と読んだな!？」

「待て待て待て! これは召喚獣が勝手に　　っていつかなんでそんな変な所で鋭いんだ!？」

「明久君! どうなんですか!？」

「吉井君! どうなの!？」

「えっと、その……」

《どうしてこの状況で急に好きな人なんて聞いてきたんだろう?》

もしかして最期に好きな人に想いを伝えてあげるから、安心して死眠ねって事なのかな?　　そういえば先週見た映画でそんなシーンがあった気がする。死にかけの戦友の手を握って遺言を聞くところ。あの時はそのあと火をつけた煙草を口に咥えさせて戦友はゆっくりと天に召されていったっけ。って事は、このあと僕も煙草を吸う事になるのかな。未成年だけど大丈夫なんだろうか……?》

「あの、姫路さん。僕まだ成人してないんだけど……?」

「壮絶にあさつての方向に勘違いしてます……」

「相変わらず明久の考える事は読めない」

「思考が斜めに一足飛びしてるわね」

《困った。学校で喫煙なんてしたら停学は確実なのに》

「しかも命の危機を感じ取っておきながら心配するところそこかよ」

《アキとウチは両思いなのかな?　　気になるね!》

「コラアーツ!　　アンタはちよつと黙りなさい!」

《ヤーツ!》

「ヤーツ!　　じゃないの!」

「そうじゃないですよ明久君。私が聞いているのは、純粹に、明久君に好きな人がいるのかわからないのかって事です」

「えっとね、姫路さん。そういう事はあまり人前で口にしたくな

「
《えつとね。僕が好きなのはね》
「飛んでけボールのように！」
《みぎやアアア！！》
「ああ、ちっちゃな明久君が！」

明久が召喚獣をサッカーボールキック。蹴られた召喚獣は弧を描いてゴミ箱にイン！
そのあとフィードバックで体が痛むのか悶絶していたが。

「ダメですよ明久君。いくら自分が相手だからって」
《痛かった》
「よしよし。痛い痛い飛んで行け〜」

姫路が明久の召喚獣をごみ箱から拾い上げ頭を撫でている。っていうか、胸！ 姫路の豊満な胸が当たっている！

《クソツ！ 羨ましすぎるぞ明久の召喚獣！ 優子のは寂しいから》
「寂しくて悪かったわね！」

「あ、待て優子！ オレの関節はそんな無茶な方向には曲がらな
って曲がったアアアアアアアアアアアアツ！？ オレの腕が曲が
てはいけない方向にイイイイイイイイイイイイツ！？！？！？」

「…………雄二。雄二はどう？ 私の事、好き？」
「ふん。くだらねえ。そんな質問に答える義務は」
《俺か？ 俺は勿論》

「唸れ俺のハリケーンシユート！」
《みぎやアアアツ！！》
「…………雄二酷い」

「こんな方法で秘密を暴こうとしてるお前は酷くないのか！？」

「ドンマイドンマイドンマイ 泣かない〜で〜 涙なんかは似合わないオレの胸にさ〜あ、おいで 羞恥心 羞恥心」

へこみ過ぎて教室の隅で丸くなっていた。それでも優子の暴走は止まらない。

「それで噂ではアンタ前の学校で彼女がいたみたいだけど、どんな子だったの？」

「だから今の彼女の目の前で元カノの話なんかするわけねえ」

《ああ。あの子は 「月までぶっ飛べ！」 ギャアアアアアアアアアア！！》

小鳥丸で召喚獣を打ち据え、天井まで飛ばす。そして落下する所を狙い、更に一閃二閃追い打ちをかける。ここまで痛めつければ戦死に

《痛え……》

なつてねえええええ！ さっきの明久の召喚獣といい、雄二の召喚獣といい、どんだけしぶといんだ、本音仕様！？

「それより明久君。さっきの質問なんですけど」

「 さっきの質問？」

「はい。明久君の……好きな人は」

「……………。えっとね、僕の好きな人は」

「好きな人は……？」

ゴクリと息を飲む音が聞こえる。そして優子もさっきから何故か明久の好きな人に興味心身のように、身を乗り出して聞き耳を立てている。

「 Gクラスの佐門さんかな？」

「 Gクラスの佐門さん？」

優子と姫路は揃って首を捻った。

ポン（優子と姫路の召喚獣登場）

「さあ、これで条件は五分だよ姫路さん！好きな人の話を続けようじゃないか！」

「ず、ズルイです明久君！好きな人の名前で騙すのは反則です！」

「フラインプレーだ明久！」

「あ、アタシとした事が……こんな単純な手に……！」

「ふふつ。いらっしやい瑞希、優子。存分に本音で語り合いましょ……？」

《うんうん。本音で語り合える仲間っていい物だね》

《まったくだ。苦楽を共に分かち合える仲間って素晴らしい》

《実は、さつきから明久君がHな事を考えてもお仕置きしないのは私もたまにヘンな事を考えちゃうからで》

《吉井君が坂本君と愛し合ってるって噂の真偽を確かめたかっただけなのに……！なんでこんな事に》

「いやあああああ！……！」

「甘いわね、二人とも。隠してることなんて考えるから召喚獣が勝手に話しちゃうのよ」

《うちもね、ぬいぐるみと机の上にアイツの写真が飾ってあってね、》

「こんな風にいいいいいいいい……！」

《隠し事？ 隠し事って僕が洗濯機の下に隠してるHな本の》

「どりゃあああああ!!」

《ふぎゃああああ!!》

《隠してる本? アタシはね、自分の部屋の押し入れに大量のBL本がため込んであつてね最近のお気に入り文芸部が出した『大貴

×吉井君』の》

「きゃあああああああああ!!」

《おのれ文芸部! そんなモン出してやがったのか!? 今度見かけたら、とっ捕まえて水車に張り付けて大回転させた後、指先から少しずつ懇切丁寧に削ってやる!》

「コラ、そういうのは相手に警戒心を持たせない為にも思つていても口にしないのが一番いいんだぞ」

.....

同時刻 別の場所にて

「あ、あの久保君」

「うん? えつと.....君は.....」

「私、Eクラス代表の中林つていいいます!」

「そうか。こんにちは、中林さん。僕に何か用かな?」

「えつと、なんていつたらいいのかな.....。私久保君に聞いてもらいたい事があつて、毎日ずつともやもやした気持ちで一杯で.....。

もやもや、じゃないな.....。哀しみ? 切なさ? 悶々? とにかく上手く言えないけど、どうしても伝えたい事があつて、ずつと苦しくて.....。久保君今忙しいかな?」

「大丈夫さ。問題ないよ」

ポンツ (久保&中林召喚獣登場)

《実は私、Aクラスの久保君の事がずっと気になって……。運動ばかりやってるせいかな。あの知性に光る眼がすごく好きで 私と付き合ってほしいの!》

《ああ。どうして吉井君はあんなにも無防備で愛らしいのだろう。あのバカな行動。バカな発言。バカな仕草。すべてが愛おしい》

「……………」

「……………」

「……中林さん」

「……はい」

「すまない」

「こんな屈辱的な振られ方は嫌あああああつ!!!!」

……………

「……どりゃああああ!!」

《《《ぎにゃああああ!!》》》

3人の怒声が重なる。

明久が召喚獣をゴミ箱に叩き込み、雄二が蹴り飛ばし、オレは子鳥丸で打ち据えた。この行為を短時間に何度繰り返した事か……。

「はあ、はあ、はあ……。今日はなんてハードなんだろう……」

「まったく、だ……。実体化した召喚獣がここまで厄介だとは……」

「こりゃ実験の名を借りた新手の精神攻撃だぞ、おい……」

「雄二とヒロはまだいいよ。こっちはそれプラスフィードバックまで付いてくるから体中が痛いよ……」

「……雄二はそろそろ諦めて本当の気持ち聞かせてくれるべき」

「ボクは吉井くんの色んな秘密と烏丸君の恋愛遍歴を聞きたいな。誰かさん達の為にも、ね」

「……誰が聞かせるか!」

チクシヨウ、こいつら他人事だと思って！

「工藤さん。僕らなんかよりライバルのムッツリーニの所に行くべきだと思っただけだな！」

「よく言った明久！ その通りだ！」

「うん……。そうしたいのは山々なんだけどね、ムッツリーニ君があんな感じだから」

「……………。工口なんて興味ない」

《……………。興味津々》

「……………。スカートなんてどうでもいい」

《……………。どうでもよくない。すごく大事》

「……………。どうでもいいんだ……………。っっ！！」

《……………。違う。凄く大事》

「……………。あんまりいつもと変わらないんだよね」

「……………。ズルイ……………」

「チクシヨウ！ 素直な人間って羨ましい！」

「じゃ、じゃあ女子グループの方に！」

「あ、明久君！ こっちに来ちゃダメですからね！」

「声を聞くのもダメよっ！ あっち向いてなさい！」

「もしこっちに来たら……………。殺すわよ……………！」

《でも、他の人をそう言う目で見るのは困るんです！ だからお仕置きはしなくてもお説教はしてたんですっ！》

《あっ！ それはウチも同じ！ 許せないよね！》

《わかるわ。アタシも吉井君のお姉さん相手に鼻の下伸ばしてるバカを見ると頸動脈かつ切りたくなるもの。アンタはアタシだけを見ればいいのよ！ って思うわ！》

「残念でした。あの3人の秘密はお泊まり会の時に聞いてちゃってるんだよね」

「それじゃあ雄二で」

「ふざけんな！ 翔子一人でも手に余るってのに！」

「坂本君は代表の管轄だからダメだよ」

「そんなお役所仕事な！ よ、よし。それじゃあ秀吉でどうだ！？」
「ってあれ？ そういえばさっきから秀吉の声が聞こえないような」
「ん？ そう言えばそうだな。不公平じゃねえか」

周囲を見回して秀吉の姿を探す。教室の隅に静かに座っていた。

「んむ？ ワシをよんだかの？」

「木下君寝てたの？」

「いや、流石にこんな騒ぎの中ではいくらワシでも寝れんぞい。妙な事を口走られる前に修行僧になった気持ちで瞑想して気分を落ち着かせておったのじゃ」

《……………》

「……その手があつたか！」

「何で持つて早く言わないのよこのバカ ツツ！！」

「あ、姉上違っ！ ワシの関節はそちらには曲がらな ツ！」

嗚呼。秀吉が世にも蒼いネコ型ロボットも裸足で逃げ出すような次世代型人間に……………。

「……雄二と吉井と烏丸の召喚獣を連れてきた」

「……え？」「」

顔を真つ青にするオレ達3人。雄二と明久は霧島に召喚獣をこちらに返すように懇願するが、霧島が素直に渡す訳が無い。それなら

感覚を研ぎ澄ます。

五感のすべてを掌握。

そのまま状態を維持しつつ、ゆっくりと集中の世界に足を踏み入れた。

無想。

「これで3人の本音が聞けるねっ。吉井君の好きな人は？」

「……雄二。本当の気持ちは？」

「そして烏丸君の元彼女はどんな人だったのかな？」

《《好きな人？ それは ……………》》

《……………》

「あれ？ 吉井君、烏丸君？」

「……雄二、返事は？」

《《……………》》

ふっ。無想状態のオレの集中力をそう簡単に乱せると思っな。

無想とは其即ち究極の集中也。

この技は自分の集中力を強制的に極限まで高める。

あらゆる感覚が鋭敏化され、考える前に体が動き、刹那の感覚を掌握する。

無想状態のオレの負けは有り得ない！

『見てください美波ちゃん。瞑想したら大丈夫みたいですよ』

『ホント！？ じゃあウチらも真似しましょ！』

《《スカートで座禅！？ 見たい見たい！》》

《……………俺も見る……………ツ！》

「邪念がああああっ！！！！」

ふっ。その程度で集中を乱すとは、二人とも修行が足りないな。

.....

「もうダメだ……。フィードバックで体中が痛い……」

「俺もこんなに疲れたのは久々だ……」

「……………キツイ」

「流石のワシも限界じゃ……」

「はう……。このままだといずれ変な勢いで告白する羽目になっちゃういそいです……」

「ウチも、こんな事で告白するなんて絶対嫌なのに……」

「このままじゃアタシの完全無欠の優等生としてのイメージが……」

「……………なあ、お前ら。オレ達が何でこんな事をしなくちゃならない？」

「え？」

「このクソみたいなバカ騒ぎの元凶を思い出してみる。誰の所為でこうなったのか、よく考えるんだ。」

「……………」

「全員の脳裏にこの騒ぎの元凶である白髪頭の口の悪いシワクチャババアの顔が思い浮かんだと思う。その上でお前らの問おう！ やられっぱなしでいいのか、と……。否！ 断じて否！ オレ達は報復するべきだ！ こんな非道を行った元凶に血の贖いを！」

オレの信条は 恩も恨みも忘れない。そして仕返しは常に三倍返しを心掛けている。

《《《《《……………》》》》》

ガラッ！ ザッザッザッザッ！

この場にいる全員の心が一つになった。

正義という大義名分さえでっち上げてしまえば行動が正当化される。

正義の為の復讐。

嗚呼、なんと甘美な響きだろうか。

そして自分を納得させるかの如く、それぞれ一言。

「まあ、そりゃそうだよな」

「人を実験台にしようとして自分だけ無事でいようって方が甘いよね」

「因果応報じゃな」

「……………当然の報い」

「ま、そう簡単に許せる事じゃないわよね」

「そうね。危うくアタシの1年半積み重ねてきた努力を全部台無しにされる所だった訳だし、ね」

数分後。廊下から老婆のしわがれた悲鳴が聞こえてきたような気がした。

「ま、召喚獣の試運転中に暴走が起きたとしても不自然ではないよな」

外伝 第14話 絶望からの脱却 【前篇】

???? SIDE

子供の頃から母からは疎まれ続けてきた。腹違いの兄への暴力を扇動していた母を軽蔑して家を出た姉と私の容姿が瓜二つだったから父は優しくかったけど私を見ていなかった。むしろ私を通して姉を見ていて、私が姉と違う部分を見る度になんか気がかりしていた。

それが私にはつらかった。

私にはもう一人の兄がいる。

周りの期待に応え、なんでも完璧に出来てしまう。そんな兄が。その事は素直に凄くと思う。

けど、私にはそんな兄がなんだか怖い。

まるで自分の考えを持っていない家の為に存在する部品のような兄が怖い。

私はこの家が嫌い。

私はこの家では居ても、居なくても同じだから。周りの大人は兄さんさえいればいいんだから。

.....

NO SIDE

「テメーがオレを呼び出すなんて珍しいな。企んでやがる？」

大貴は人目の少ない河川敷に呼び出された。個人的には呼び出し自体を無視してしまいたかったが、緊急事態との事なので仕方なく呼び出しに応じたのが現状なので大貴にはまるでやる気がない。呼び

出しをかけた人物が人物なので、仕方ない事ももしれないが。

「頼みがある」

「頼み？ テメーが？ オレに？」

「そうだ」

苦虫を噛み潰したような表情をして大貴と相對しているのは烏丸修一。大貴の実父だ。大貴は困惑を隠せない。昔のような洒落にならない険悪な関係ではなくなっていたが、それでも大貴と修一は洒落になるくらいには険悪なのである。そして非常にプライドの高い修一が恥を忍んで大貴に頼むという事が俄かに信じられなかった。

「とりあえず聞くだけ聞いてやるよ」

大貴の言葉を受けて、しばらく逡巡してから修一は重い口を開いた。

「とある縁談をぶち壊して欲しい」

「はい、サイナラ」

大貴は即決で踵を返し、その場から去ろうとしたが。

「逃がすかあああつ！」

修一による腰を狙った理想的なタックルによって身動きが取れなくなってしまう。

「うおっ！？ 何すんだ！」

「貴様さつき『聞いてやる』と言っただろう！」

「その前に『聞くだけ』って言っただろ！ 自分の都合のいいように解釈してんじゃねえっ！ ええい、離せ！ オレはおっさんとイ

「チャつく趣味はない！」

「私にもそんな趣味はないっ！」

「縁談をぶち壊すって、んな事自分でやればいいだろ！」

「それが出来ればわざわざ貴様なんぞに頼るか！」

「『なんぞ』!? 言っに事欠いて『なんぞ』とか言いやがりましたかこのブタ野郎！」

「んだと!? このボーフラがつ！」

「うるせえ、このタコ！」

「俺がタコなら貴様はイカ！」

「意味わかんねえんだよ、この【検閲削除】！」

「この機知に富んだ言い回しを理解出来ないとはとことん残念な感性だな、この【検閲削除】！」

「残念なのはアンタの頭だ、この【検閲削除】！」

「上等だ！ 表出るやああああっ！」

「ここは表だ、ボケがあああああっ！」

かくして父と子の果てしなくくだらない喧嘩は真面目なお巡りさんに職質をかけられるまで続いた。

.....

「で、壊して欲しい縁談つてのは、テメエの娘 オレの妹か。そいつの縁談なんだな？」

「その通りだ」

烏丸修介宅。殴り合いの末、ボロボロになった上お巡りさんにしっかり油を絞られ、家に送り届けられた後大貴と修一は2人揃って仲良く怒られ、正座させられていた。

「それってオレが動く必要あんのかよ？ 本家のトップはテメエだろ。テメエが一声『縁談ダメ、絶対』って言えばいいだけの話だろうが」

正座した足が痺れてきているのを感じながら大貴が言う。

「そういう訳にもいかない。本家での私の実権などもはや微々たるものなんだからな」

正座した足の感覚がなくなってきたのを感じながら修一が答えた。

「ケツ、情けねえな」

「誰の所為でこうなったと思っている！？」

「テメエの強欲が招いた結果だろうが！」

お互いがお互いの胸ぐらを掴みかかろうとするが、足が痺れているため悶絶している。それでも足を崩さないのはお互いに『こいつより先にギブアップしてたまるか！』という意地の張り合いをしていたからだ。

それはともかく、大貴は夏休み前に修一が画策した『文月学園を乗っ取る』という計画を破綻させている。それは大貴と修一が前に進むという意味ではいい効果をもたらしたが、一方で烏丸本家での大貴の悪名が高くなった事と修一の当主としての肩書きが紙切れよりも薄くなったという意味ではあまりいい効果をもたらさなかった。とは、言っても大貴にとって本家での風評が悪くなったところで今更なのだが。

「なんにしても私の一存でこの縁談を破棄する事は出来ないのだよ。決定権は妻が持っている上に、縁談の相手は本家で懇意にしている

家の人間だ。出来る事なら『烏丸本家とは無関係』なところで破談になるのが理想的なんだ」

「さつきから聞いてりやたらと縁談に否定的だが、縁談の相手が娘を幸せに出来ないとは限らないだろうが」

「最悪なんだよ、その相手が！ 女好きで金遣いの荒いチャランポラン！ その上、家の権力を笠に着てやりたい放題ときている！

そんな奴に娘が幸せに出来るのか！？ 否！ 断じて否！ そんな相手と結婚なんかしたら、外で愛人を作りまくって家庭など省みず好き放題やるに決まっている！」

「ほー？ まるでどつかの誰かさんみたいじゃねえか」

大貫は冷たい目線を修一に送る。そんな視線などお構いなしに修一は更にヒートアップしていく。

「兎に角！ そんな相手に大事な娘をやれるか！」

「そんなロクデナシが相手なら本人が断りやいいだろうが。結婚なんて所詮当事者同士の意志が尊重されんだから」

「あの子はそんな事が出来る子じゃない。昔から妻に疎まれていて、周りの誰もがあの子を居ても居なくても変わらない『透明な存在』として扱っているんだ！ その所為で自分の殻に閉じこもってしまう、周りに逆らう程の強い意志を持てる状態じゃない！ だからこそ外からあの子の殻を破れるきっかけ必要なんだ！」

「オレに本家の人間の為に泥をかぶれつつか？ どの口がそんなふざけた事を宣いやがる？」

「ッ！ お前の妹だぞ！？」

「関係ねえよ。なにがテメエやその妹とやらを助けるために泥を被れだ？ ふざけんな。なんでオレが本家の人間を助けるために動かなきゃならねえんだ」

「しかし」

「くどい。他当たれ」

大貴は修一の頼みを一蹴した。当然といえば当然だ。自分の 中の ドロドロした感情を受け入れ復讐よりも前に進む事を選んだとしても、そう簡単に彼の中の『憎しみ』がなくなった訳ではない。受け入れてすぐに蟠りがなくなるほど人間は簡単なものではないし、大貴の傷もそんな浅いものではない。それでも距離を取りつつ蟠りをなくしていこうと複雑な感情を抱きながらも奮闘しているだけでも大貴にとっては大きな譲歩なのだ。

これ以上本家のゴタゴタに巻き込まれるなど冗談ではない。ましてや会ったこともない憎むべき相手の為に泥を被るなど論外だ。修一はそれでも尚、大貴に頼み込んだが頑として首を縦に振る事はなかった。

心の中で魚の小骨が引っかかったような感覚を覚えながらも断り続けた。

.....

「あゝ、なんなんだ？ このイライラは」

修一との話し合いから一週間。大貴の中での引っかかりは解消する事はなかった。寧ろ時間をおけばおくほど気になってイライラしてきた。

リフレッシュの為に街に繰り出してブラブラしても気晴らしにすらならない。懊悩の果てに見えてくるのは靄のかかった輪郭のはつきりしない感覚だけ。何がなんだかわからなかった。

「.....なんだってんだよ」

長い長い溜息をつき空を仰いだ。

「烏丸、大貴？」

「んあ？」

急に後ろから呼び止められ、間拔けな声をあげながら振り返った。黒髪がよく似合う大和撫子のような上品な容姿。しかし少し俯きがちなたまげが見る者に儂げで気弱な印象を与える。そんな少女だ。彼女は大貴がよく知る人物だった。驚きのあまり大貴は眼を剥いて絶句している。そしてやっとの思いで言葉を絞り出した。

「中町、楓……？」

.....

『いらつしゃいませ。2名様ですか？』

「はい」

『喫煙席と禁煙席がございますが』

「禁煙」

『かしこまりました。それでは5番のテーブルにどうぞ。ごゆっくりお過ごしください』

大貴と楓は近くのファミレスに入った。『久しぶりに会ったんだし、食事でもどうかな？ ダ、ダメだったら別に良いんだけど……』と提案してきて大貴がその提案に乗ったからだ。大貴は内心驚いていた。楓は自分から何かをするという事が酷く苦手な性格だ。ぶつちやけると気が弱くて引つ込み思案だ。

その楓が自発的に大貴を食事に誘った。それは大きな進歩だ。それだけ長い時間が経っているんだな、と大貴はしみじみ思った。

「あ、あの久しぶり。元気、だった？」

「ああ」

「……………」

「……………」

会話が續かない。居心地が悪そうに楓はうつむいた。

「あ、あの……………迷惑だった？」

「んあ？ なんで？」

「なんだか……………機嫌が悪そうだったから……………」

「怒ってるように見えたか？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

「いや、怒ってねーから。そんなに謝んなよ。オレが悪いことした気分になってくる」

変わったと思えば相変わらず面倒な性格だ。と大貴は心の中だけで嘆息しておく。

「悪い。別に怒ってるわけじゃないんだ。ちょっと悩み事っていうか、な」

正直過去に振られた元彼女と一緒に食事なんて気まずいどころの話じゃない、と思ったが敢えて口にはしない。言えば目の前のこの気の弱い女の子は申し訳なさで縮こまってしまふという事が容易に想像出来たからだ。この気まずい状況をなんとか打開しようと額に手を当てながら思考を展開した。

……………

彼女の名前は『中町楓』。大貴の以前通っていた高校の同級生で彼女の元彼女だ。

彼女は所謂『深窓の令嬢』という存在で、その可憐な容姿と品のある仕草、そして気弱で控えめな性格で学校の男子に高い人気を集めていた。一部では熱狂的なファンクラブが存在するほどに。しかし、注目されるという事は良い事ばかりではない。注目されやすい人間は総じて嫉妬されやすい。

加えて楓の人見知りが激しく気弱な性格はそういう者達の嗜虐性をそそった。結果女子の間での無視、素行の良くない男子生徒による陰湿なイジメがはじまった。

そうなつてからは誰も楓に寄りつかなくなった。周りの生徒やファンクラブを名乗っていた連中も自分達が標的になるのを恐れ傍観を決め込んだ。

そして楓は非道い人間不信に陥ってしまった。

大貴も最初の内は大して楓に興味はなく、積極的に彼女に関わる事はなかった。しかしある日大貴は見ってしまった。学校でも悪い意味で名前の知れている集団が人気のない体育倉庫で楓を取り囲み、嫌がる彼女の顔を水の入ったバケツに突っ込ませている現場を。周りは楓が苦しむ様子を見て心を痛めるどころか、優越感に浸り全員が例外なくハツキリとした嘲笑を浮かべていた。大貴は欠伸をかみ殺しながら興味なさげに踵を返し、その場をあとにしようとした。

『自分に利が無ければ見捨てる』

これが当時の彼のスタンスだったからだ。
しかし。

主犯と思わしき生徒は「教育的指導」などと身勝手な理屈を雄弁に

語りだした。

その身勝手な理屈を聞いた瞬間、他人が苦しんでいようと、自分の利にならないなら迷わず見捨てるスタンスを貫いてきた大貴の中で何か切れた。

苛めを行っていた生徒達が過去の自分と自分を長い間苦しめ続けた本家の人間と重なって見えたからだ。

一瞬で頭の中が沸騰し、自分の中で渦巻いていた憎悪の感情を解き放つてその場にいた男子生徒を全員半殺しにした。

それが切っ掛けで大貴と楓は共に行動する事が多くなった。というより楓が大貴に懐くようになった。大貴の視点では、半ば八つ当たりのように暴力を振るっただけだったが、楓の視点では大貴は自分がいじめられている所を助けてくれたヒーローだったからだ。

『上級生を複数半殺しにした』という危険人物の傍にいるという事も有り以降、楓へのイジメはピタリとやんだ。程なくして楓から告白された事も有り2人は付き合い始めた。

この事件がきっかけでなにもかもが好転したかのように見えた。

しかし　　現実はそのなにごくない。

大貴が半殺しにした不良グループが人数を増やして彼にお礼参りにやって来た。

今の大貴だったら『自分がある程度殴られてやり過ぎ』という方法を選択しただろうが、当時の大貴は力で強引に解決した。ここから無限ループだ。

やられた相手は更に人数を増やして大貴を襲撃し、大貴もそれを撃破する。

そんな事を繰り返している内に大貴は『悪鬼羅刹』と並ぶ存在、『西橋のカラス』と呼ばれるようになった。

いよいよ拙いと思い始めた大貴は『戦略的撤退』を駆使し始めたが、

時すでに遅し。

ルールのない暴力に終りなど無い事を知る。ただ、ただ螺旋になっているのみだ。

そんな事をしている内に楓は大貴から離れていった。

理由は聞いていないが、大体の想像はついた。

考えてみれば当然の事だ。気の弱い彼女がいつまでもこんな不良から追いまわされる男に付き合っているはずが無い。

楓の行動に失望感はなかった。人間は誰だって自分が一番可愛いものだ。

それに大貴は自分の傍らに誰が居ようが居まいが関係ない。

大事な人達はみんな居なくなった。

静馬以外の間人はみんな同じだった。

大貴の目の前に彼女が現れるまでは……………。

……………

「……………ねえ、烏丸君？ 本当に怒ってないの？」

「怒ってねえよ」

楓が怯えた表情になったのを見て、知らず知らずのうちに口調がきつくなってしまう事に気づく。大貴は罰が悪そうに頭を掻いた。

「いや、悪い。最近なんか……………、なんとというか、悩みがあつて、な」

「悩み？」

「ああ」

「えつと……………どんなものが聞いてもいい？」

大貴は『お？』と驚愕した。楓がここまで深く人の間に踏み込む事など付き合っていた当初は皆無だった。やっぱり彼女は変わった。

たのだろう。大貴は今の彼女なら自分の心の中の靄をハッキリして
くれるかもしれない、と思った。

「聞いてくれるか？」

「……………え？」

楓はまるで都市伝説を間近で目撃したような視線を大貴に向けた。

「なんだよ？」

「う、ううん。だって烏丸君が私に 人に頼るところなんて初め
て見たから」

「……………まあ、色々心境の変化があつてな」

そう返し大貴は自分の中の引つ掛かりについて話し始めた。

……………

「 …… ってなわけだ」

「つまりイライラの原因が分からなくて余計にイライラしてるって
事？」

「まあ、端的に言えばそうなる」

「……………」

楓はしばらく考え込み、大貴の顔を真つ直ぐに見詰めた。

「烏丸君はその子を助けてあげたいんじゃないの？」

「ハッ、そんなバカな。ありえねえよ」

楓の指摘を大貴は鼻で笑ってから否定した。

大貴は烏丸本家が嫌いだ。憎んでいると言ってもいい。

諸々あつてそういつた感情は緩和し復讐する気は失せたが、それでも自分にとつて憎むべき人間の1人を助けたいと思うほどお人好しにはなれない。自分は聖人君子ではないのだ。

「だつて……烏丸君はあのとき私を助けてくれたじゃない」

「あの時は助けたんじゃない。ただ、八つ当たりの対象がそこにあつて殴りたかつたから殴つただけだ」

「けど、……それでも私は嬉しかった……」

「……………」

「全校生徒によるイジメが始まつてからは私はどん底だつたよ。友達だと思つてた人達はみんな私が酷い目にあつても見て見ぬふり。ファンクラブとか言つて集まつてきてた人達もあつさり掌を返した。誰も信じられなくて、安心して息を出来る場所さえなかつた。そんな中で烏丸君だけはまつたくブレなかつたよね」

大貴が楓に欠片も興味が無くて、あの日楓を助けてくれたのも、半ば八つ当たりだという事実は付き合い始めてしばらくしてから気づいた。

それでも、自分を助けてくれた事には変わりなかつた。突き殺される他の選択肢を目の前に提示してくれた。耳触りのいい言葉でその場を取り繕うだけの友達だと思つていた人たちより、大貴の方が信頼できた。

「私は烏丸君の事が本当に好きだつたよ」

「……………嘘つけ。理由を何も言わずにいきなり『別れて』とか言つて離れていつたくせに」

「そのとき烏丸君は本当に私の事好きだつた？」

「……………」

楓は大貴の事が心底好きだった。

だからこそ大貴が抱えている深い闇に気づき、救いたいと思った。

しかし　ダメだった。

大貴は変わらなかつた。

大貴にとって楓の存在など居ても居なくても一緒。ただそれだけの存在だった。

大貴が楓の所為で『西橋のカラス』などと呼ばれ、追いまわされる羽目になつても大貴は楓を責めなかつた。

いつそ責めて、詰つて、ぶつけてくれた方が良かったのに。

好きなのは自分だけ。それはとても寂しかった。そうして楓の想いは摩耗していった。

だから　別れた。

「好きつて気持ちが一方向行で、居ても居なくても同じって態度をとられる事は……辛い事だよ」

「……………ッ!？」

大貴は不意に横つ面を鈍器で殴られたかのような顔になった。それだけ楓も言葉が刺さつたのだろう。

『居ても居なくても同じ』

嫌悪ですらないその行為は他人が与える本物の絶望だ。

大貴は楓の言葉に痛みを感じながらも真摯に受け止めた。

（オレは中町が離れていったのは喧嘩ばかりしてるオレに嫌気がさしてだと思つていた。結局オレは自分の事ばかりで何もわかつていなかつたんだな……。中町の事も……。自分の事も……）

楓の言葉がきつかけになり心の中の靄が晴れていく。

(そうだ。中町の言う通りだ。オレは何やってんだよ。周りから疎まれ続ける痛みをオレは誰よりも知っていたはずなのに……！)

「……中町」

「？」

「ごめんな」

「ううん。気にしないで」

静かに目を閉じ首を横に振りながら言う。

「それと、ありがとう」

装飾もなにもない。本心からの言葉だった。それを聞き、楓は眼を丸くした後、心底嬉しそうにはにかんだ。

「どういたしまして」

大貴はかすかに笑い、伝票を持って席を立つ。

「あ、烏丸君」

「なんだ？」

「あなたは……今、好きな子いる？」

「……ああ。ついこの間から付き合い始めた彼女がいる」

「……そう、なんだ……。その彼女の事……好き？」

「ああ。大好きだ」

「そう……。良かった。その彼女の事……大事にしてあげてね……」

「ああ」

そう言って大貴は会計を済まし、店から出て行った。

楓が目溜めている涙には気付かない振りをして。

「もう……いいよね……」

大貴と別れてから『強くなるう』と誓った少女は俯き、持っていたハンカチを目に押し当てた。その日、中町楓は涙は枯れる事が無い事を知った。

.....

店を出て勇み足で家に向かう。懐から携帯電話を取り出し、『坂本雄二』にかける。

敵は『烏丸本家』。これは完全に大貴の私闘であり、雄二達を巻き込むのは気が引けた。

しかし自分一人では事を起こすには力不足は否めない。

大貴は大抵の事はこなせるが、決して全能ではないのだ。

だからこそ、烏丸大貴には仲間達の力が必要だ。

「もしもし、雄二？ 頼みたい事があるんだ」

「よく集まってくれた。恩に着る」

そう言つて普段無造作な髪にアイロンをかけ、櫛を入れ、ワックスで整え、放置気味だった眉毛を整え、スーツを着込んでピシッときめている大貴は頭を下げた。

仲間内に「誰だお前は！？ ヒロがそんなカッコいい筈が無い！」と断言された事に少しばかり傷ついたが、今はそれを置いておく。

『気になる烏丸』

『そうとも。俺達は無理やり結婚させられる薄幸の美少女を助ける為に来ただけだ』

『ああ。決してあんな美人と結婚できる相手をぶち殺したいと思つた訳じゃない』

『俺達はジエントルメ ンだからな。困つた人は見捨ててはおけないのさ』

「無理やり結婚なんて許せないわよね！」

「はいっ。やっぱり結婚は自分の好きな人とするべきです！」

「……結婚は女の子の夢。こんな風に利用するなんて許せない」

FFF団の覆面を被つたメンバーと島田、姫路、霧島が口々に言う。特にFFF団は妹の写真を見たときからやる気が漲っている。大貴はその言葉を聞いて安心したように顔を綻ばせた。

『『『』で、どうやって殺す？』』』

「待てお前ら。いきなりそれは拙いだろ」

殺気立つFFF団に雄二が制止の言葉をかけた。FFF団を突撃させてその混乱の中、対象を連れ出すという手も考えなかった事はなかったが、流石に学外での集団暴行はシャレにならない。雄二の援護射撃するように大貴もフォローを入れる。

「そつだぞお前ら。始末するのは別にいいとしても、その後死体の処理して揉み消すのが面倒だろうが」
「アンタは何物騒な事を言ってるのよ」

大貴の物騒な言葉に木下優子がげんなりとした様子でツツコミを入れた。内心『バイオレンスな性格なお前に言われたくない』と思っただが、賢明な事に口に出す事はなかった。
誰だって自分の命は惜しいのだ。

「今回は烏丸本家の当主のおっさんと先代当主のジジイがこっち側についているからかなりの無茶な方法も有りだ。本家の権力で揉み消せるからな。それを意識して作戦を立ててくれ」

「完全に権力を笠に着てるよね」と、明久。

「当たり前！ 使えるモンは何でも使う！ そんなもってどんな勝率の低い勝負もモノにする。それがオレの流儀だ！」

「して、どうするのじゃ？」

「……………暗殺する？」

「あははは。それも面白そうだよね」

ちょうど姫路も居る事だしな。と、大貴は瑞希の耳に入らないくらい小声で言う。

「だから待てと言っているだろう。俺に作戦がある」
「作戦？」

「ああ。確か相手の男は相当女癖が悪いって話だったよな？」
「あ、ああ」

雄二は悪い顔をしながら作戦は集まった男性陣を絶望の淵に叩き込み、女性陣を歓喜させた。

.....

烏丸咲は思考停止していた。そうでないとなえられなかった。

お見合い相手の『松本』は兎に角口が良く回る。まるで口にモーターでも取り付けられているのかと疑問に思ってしまったくらい口が良く回った。

そしてそのよく回る口から発せられる言葉は例外なく上から目線。話はすべてほとんどが自信の自慢話ばかり。しかもそのほとんどが目の中の男の功績などではない事を知っていた。

面倒な所や、汚れ仕事はすべて部下にやらせて自分は後から来ておいしい所を総取りしていく。閉鎖的な親族会社によくある話だ。それを目の前の男はさも自分が全て自分の手柄のように語る。咲が何より気に入らないのはその視線。
好色そうな目が咲の胸や足を舐めるように見ている。気持ち悪くて鳥肌が立った。

くだらない。 浅ましい。 実に不愉快だ。

しかし口には出さない。口には出せない。今までそうやってやり過ぎしてきた。

そしてきつとこれからも彼女は自分の意思を口にする事なんてないだろう。

個人差はあるけど男性特有の引き締まっていて堅そうな体。伸びたすね毛や腿の毛はミニスカートやニーソックスの隙間から『これもか』というくらいに自己主張している。

俗に言う『オカマ集団』だ。ニューハーフではない。オカマだ。そんな女性陣が化粧を施した不気味な人が30人以上横に並んでいる。

目の前の男の話も胸やけがするほど不愉快だったが、目の前のこの光景には及ばない。

思わず啞然としてしまう。松本に至っては涙目になって口をパクパクさせている。

せめて剃りなさいよ……。と、咲は的外れな事を考えていた。

「突撃いいいいいいいいいいいいいい！！！」

メイド服の女の子？が号令を発し恐怖の集団は一斉に松本に向かって走って来た。

警備委員が騒ぎを聞きつけオカマ集団を制止しようとするが、オカマ集団はそれを難なく突破して松本の元に真っ直ぐ突撃した。松本は必死に逃げようとするが、オカマAに飛びつかれバランスを崩し転ぶ。その隙にオカマB、オカマCが1人、2人と松本を囲んでいきあつという間に埋め尽くしてしまった。

目の前の男が好色家だという事は知っていたがまさか『オカマ』にまで手を出しているとは流石に思ってもみなかった。咲は軽く引き……いや、ドン引きしながら埋もれている松本から距離をとった。

「キャッ………！」

木下大貴が急に咲の手を取った。

「な、何を………？」

「オレの仲間が時間稼いでるうちに行くぞ！」

「え？ え？ え？」

「いいから早く！」

「は、はい！」

木下大貴の強い口調に咲は思わず頷いた。木下大貴は咲の手をとって走り出す。途中で警備員に行く手を阻まれるが、それを軽いフットワークでかわしてホテルの外に出た。

「秀吉！ バイクの準備は！？」

「バッチリじゃ！ いつでも行けるぞい！」

「よし、サンキュ！」

木下大貴はバイクに跨り、咲に乗るように促した。咲はようやく少し冷静さを取り戻したようで、この状況がおかしい事に気がつく。

「き、木下さん？ あ、あなたは一体……！？」

その問いに木下大貴と名乗った青年は不敵な笑みを浮かべた。

「それ偽名。オレの本名は『烏丸大貴』。一応お前の兄貴って事になる。父親の依頼でこの縁談をぶち壊しに来た。以上説明終り。何か質問は？」

「で、でも……！ この縁談は、烏丸本家の……」

「オレは本家が嫌いだ。だから本家の意志を汲み取ってやる義理はない。だから、お前に聞いている。それともお前はこの縁談を受け入れてんのか？ だったら妨害して悪かった。回れ右してホールへどうぞ」

「い、嫌に決まっています！ け、けど私には選択肢は」

「選択肢なら目の前にある。あとはお前が決める」

「で、でも……これは本家の……」
「まあ、『本家の為』に人身御供になる気なら止めねえけどよ、流されてるだけだったら辞めておけ」
「で、でも逆らえるわけない！ 今までだってそうだった！ 私が自分の意志を伝えても伝えなくても同じだった！ だったら言葉になんてしたくない！ 選択肢なんて存在しない！ 変わる訳なんてないよっ！！」

半狂乱に感情のままに咲は叫んだ。

その叫びを聞き、大貴は悟った。彼女は絶望しているのだ、と。

『自分は居ても居なくても同じ透明な存在』として扱われ続け彼女の下した決断は悉く本家の人間の思惑の激流に飲み込まれ続けて、心が摩耗していつてしまったのだ。

それはかつて自分が楓にしてきた事と同じ事だ。

楓はそこから自らの意思で這い上がって来たが、目の前のこの子は心が折れてしまった。

それでも、大貴は選ばせなければならぬ。他でもない彼女を救う為。

これまで大貴は自分に誰かを救う事は出来ないとそう考えていた。そういつた事が出来るのは自分の様な壊れた人間ではなく、明久たちの様な優しい人間だけだと、決めつけてきた。

しかし、それは結局出来ない言い訳をしているだけの甘えなのだ。目を閉じて、耳を塞いで逃げているだけだ。

「抗う前に諦めるのは簡単だ。何もせず状況に流され続けなければいい。それも一つの道だろうさ。けどよ、『敵う訳が無い』って諦めた時点で自分の本心に欲しいモンは一生手に入る事はない」

ああ、そうだ。

誰かを救う事を諦めていたオレみたいに。

だからこそ烏丸大貴はここで変わる。
甘えを乗り越え、出来ない言い訳を捨てて変わる。

「もし、流されるだけの状況が苦しいなら行動する前から諦めるな。目の前に希望があるなら形振り構わずそいつを掴め。どんなに小さくても格好悪くても知った事か。諦めていいのは全力で立ち向かって力が及ばなかった奴だけだ」

誰かを『護る』だけの現状維持ではなく誰かを『救う』為に。
大貴は無言で咲の手を握った。その手は小さな手は震えていた。

「今、ここでオレが握った手を握り返すのも、振り払うのもお前の自由だ。本家の激流に流され続けて選択の余地が無かったってんだ。つたらこれを最初の選択にすればいい。お前が本気で考えて決めたんだ。オレ達はその選択を全力で支援してやる。他の誰でもない『烏丸咲』、お前自身が決めるんだ」

「……………」
「……………」
「……………」
頼むよ。もう一度だけ思考停止しないで選んでくれ。本家の歪みにもう一度だけオレと一緒に立ち向かってくれ。頼むよ……………」

咲は眼を閉じ、深く考える。

この人は一体何をしたいんだろう？ 何を言っているんだろう？
ワカラナイ。ワカラナイ。ワカラナイ。

私には選択肢が無い。私は空っぽの人間だ。私は 　　　私は 　　　私は

何かが変わるかもしれない。何かを変えられるかもしれない。
諦め続けてきた咲の胸中にそんな思いが渦巻く。

しかし 変えられるのだろうか？ 今まで本家の意向を無視した事なんてなかった。

もし、無視するのなら自分はここから先未知の領域に足を踏み入れる事になる。

それはとても怖い事だ。ひよっとしたら立ち直れないくらいにズタズタに傷つく事になるかもしれない。烏丸本家という温室に閉じ籠って流されるままに暮らせば少なくとも傷つく事はない。だけど

苦しい。

『仕方ない』と、諦めるたびに胸が押しつぶされそうなくらいに苦しかった。

この苦しみから逃れたかった。

ここではないどこかに逃げ出したい。そんな衝動も咲の中に確かにあった。

懊悩の果てに咲は選んだ。大貴の手を握り返す事を。

どうしようもない状態から大貴の差しのべた手を取る選択をした。

今までどれだけ苦しんできたのか。

その過程でどれだけ葛藤があったのか。

それはどれだけの覚悟が必要なのか。

その瞬間大貴は決めた。目の前にいる妹の力になろう、と。どんな手段を使っても護り抜こう。この絶望している彼女を救い出そう、と。

「よし。そうと決めれば逃げるぞ！ 後ろに乗っかれ」

「え？ で、でもあの人たちは」

大貴が咲にバイクに跨るように促すと咲は心配そうに警備員に追われて逃げ回っている明久達を見やった。それを大貴は肩を竦めて軽く笑い飛ばす。

「大丈夫さ。あいつらは普段から人外相手に逃げ回ってる猛者揃いだぞ。あの程度の奴らに捕まるような奴なんざ1人も居ねえ。それよりさっさと乗る」

「う、うん」

咲は渡されたヘルメットを被り、おずおずと遠慮気味にバイクに跨り大貴に捕まった。それを確認した大貴は秀吉に向かって不敵に笑いながら言う。

「秀吉。雄二に連絡しておいてくれ。『作戦は成功』ってな」

「了解じゃ」

「そんじゃ、いくぞ！　しっかり捕まってる！」

バイクのスロットルを全開にして激しい轟音と共に加速し、夜の街を駆けた。

「ねえ、これからどうするの！？」

「さあ、どうしようか？」

無計画。彼女の脳裏にそんな言葉がポンと浮かんだ。

烏丸咲は早くも大貴についてきた事を激しく後悔した。

.....

それから大貴と合流していろんな所を遊び歩いた。

ゲームセンター。カラオケ。ボーリング。バツティングセンター。

しかし咲の心のは動かなかった。

楽しそうに遊ぶFクラスのメンバーを横目に咲はつまらなそうに溜息をつく。

彼女は昔からそうだ。遊びに行っても何が楽しいのかわからない。同級生が友達と何でもない事で談笑しているところを見ても何が楽しいのかわからない。心揺れない。冷めている。それが周りとの壁を更に意識させる。今もそうだ。

咲は彼らが『何故そんな無駄な事を心底楽しそうな顔をしているのか』がわからなかった。

「よー。不機嫌な顔してるな」
「……………」

話しかけてきたのは木下大貴　ではなく、烏丸大貴。自分の腹達いの兄。

「こういう場は苦手か？」
「……………」

自分の事なのによくわからない。
そんな事はおかしい。

それは自分が人間として欠陥だからではないだろうか？
咲の中でそんな考えが浮かび上がる。

これ以上そんな考えを見たくなくて話を逸らした。

「お母さん、怒ってるかな…………？」

「ほっとけ、そんなモン」

「で、でも……………」

「お前は選んだんだろつが。だったら誰が何と言おうとも堂々としてればいい」

「…………ハート強いよね」

「別に。自分が乗り気じゃない縁談を蹴るなんざ当然の権利だろ？
いちいち他人の言う事なんか気にしてられるか」

「でも、親だよ？」

「親でもやっていい事と悪い事がある。いや、むしろ今回のコレは親だからこそやっちゃいけない事だ」

親という存在に一種の諦念の様なものを抱いている大貴ならではの理屈だ。

しかし咲は大貴のようには割り切れない。

「……無理、だよ。だって、私は、必要ないんだから」

「……………」

「私ね、母さんに昔から嫌われてて……。『千鶴』姉さんに似てるからだって……。私は私なのに、ね……」

咲がポツリポツリと話し始める。大貴は蔑むでもなく、憐れむでもない瞳で咲を見詰め黙って聞いていた。

「お父さんも、私を見る度に、姉さんと、重ねて、違つところを見つければ、がっかりした顔、するんだ……。姉さんは、姉さん。私は、私なのに……」

「何当たり前な事言ってるんだ？」

「え？」

「お前は姉さんじゃねえ。姉さんの代わりなんて誰にも勤まらねえ。あのオツサン　修一だってわかってる」

「けど」

「名前」

「え？」

「お前を姉さんの代わりにするんだつたら、『千鶴』名前の由来つまり『願い』と重なる。けど、お前の名前は『咲』　お前の

名前は多分だけど 『叶える』って意味だ。『願いを叶える』。
姉さんの名前の次に繋がる言葉だ。聞けばあのオッサンがつけた名前だ
って言うじゃねえか。あのオッサンはお前に姉さんの代わりを求めた
んじゃねえか？

「……そんな事一言も」

「わかってる。真意はオッサンにしかわからない。だからコレはただのオレの想像」

「……………」

「それに、お前の事が心配じゃなきゃ態々縁談をぶっ壊してくれて
険悪な関係にあるオレに頼んで来ねえよ。あのプライドの高い野郎が
プライドを捨ててまで護りたかったモンがお前だ。その気持ちは汲み
取ってやってくれ」

「じゃ、じゃああなたは頼まれたから私を助けようとしたの？」

「いや。最初は断ったさ。わかってるんだろ？ オレは本家が嫌いだ。
本家の人間は嫌いだ。その一因のお前を助ける為に何故動かなく
ちやならないってな」

「なら……どうして」

「オレは 自分で自分の殻を破りたいんだ」

人を救う事が出来ない自分と思い込んでる甘えた自分と 決別したい。
。

その為にはこれまでとは違う覚悟がいる。

自分が目を反らし続けてきたものを真っ直ぐに受け止める覚悟がいる。
憎しみを『別の何か』に昇華していく覚悟がいる。

だから 。

「だから、オレはここにいる。お前に選ばせる為に考える時間を
作る。オレの選んだ道だ」

「……私は、どうすればいいんだろう？」

「それをオレに聞くのはナシだ。自分で決めないとな」

「……………」

「本家の連中がお前の選んだ事に対して文句言ってきたとしても、そいつらはお前の人生に責任を持つ訳じゃない。オレにしてもそう。結局自分の選ぶ道や人生は自分で責任を持つしかない。じゃなきゃ全力で走れないだろ？」

「……………」

「縁談に乗り気ならオレに全責任を押し付けて受ける。嫌なら断れ。わからないなら逃げるってのも一つの手だ」

「え？ 逃げる？」

「そう。逃げる」

「逃げるなんて…………？」

「言つとくが、逃げる事は格好悪い事ではあっても、恥ずかしい事ではないぞ。行き詰った時にリフレッシュが必要のように、答えが出なくて堂々巡りになってる状態でいくら考えても無駄だ」

「……………」

「わからないって事は判断材料が足りないからだ。判断材料が足りないなら色々なモンを見て、聞いて、触れて判断材料を揃えればいい。その為には一旦逃げて問題を先送りにして時間を作ればいい。

見事な三段論法。流石オレ」

腕を組み、得意げに『うん、うん』と頷く大貴に咲は呆れ混じりの視線を送る。自分が長年抱えてきた苦悩をこつと単純にされると悩んでいる自分がバカらしくなってくる。

思わず笑みが零れ、空を見上げた。夜空に浮かぶ大きな満月に目を奪われる。

「デッケエ月……………」

「うん……………」

大貴の言葉に咲は相槌を打ち、しばらく2人は無言で月を見上げていた。

「よし。近くで見よう」

「え？」

いきなりの大貴の提案に咲は啞然とする。そんな彼女の心情などなんのその。

飛び上がるように立ち上がると、バイクのタイヤにチェーンをかけて走り出した。咲は慌ててそれを追う。

手近の一番高いビルの中に入り、警備員に見つからないように中に侵入する。

そして階段を一気に登り始めた。

何故自分はこんな意味のない事を一生懸命にやっているんだろうか？
登り切ったとしても何も得るものなど無いのに。

何故目の前を走っている男の子を追いかけているんだろうか？
考えても、考えても、考えてもわからない。
それでも咲は走った。

走れ走れ走れ走れ。

酸素を欲する肺に明一杯の空気を送り込み、上を見上げて、暴れる
心臓を感じながら。

ダッシュで一気に駆け抜ける。

バン！ と勢いよく屋上の扉を開き、一気に視界が開ける。

目の前に飛び込んできたのは無数の人工的な光。

手の届きそうなほど圧倒的な存在感を放つ大きな月。

咲は達成感で一杯だった。

「楽しい〜〜！」

夜空に向かい大きく手を突き出し屋上を吹き抜ける風を目一杯感じた。

「のは、楽しじゃ、ない〜〜……………」

へナへナとその場に座り込んだ。横では大貴も同じように汗を流し、息を切らせている。

「何階くらい、走った……………」

「さあ？ 14、5階つてところじゃねえ？」

「もー、ダメ…………。足がガクガクいつてるー。こんなに全力で走ったの久しぶり……………」

「いつも、そんな感じで、笑ってればいいのに」
「え？」

「さっきなんで皆何でもない事で楽しそうな顔をしてるのかわからないって言つてたよな？ それがこの答え。意味のないバカな事でも全力でやるから楽しいんだよ」

「そんなものなの？」

「そんなものだ。意外に全力を出し切るってのは大事な事だぞ。力を出し切らずに諦めてしまつとどうしても悔いが残るからな」

「……………諦めなくて、いいのかな？」
「たりめーだ」

こんな自分を肯定してくれる人がいる。

自分の選ぶ道を応援してくれる人がいる。

それはこんなにも心強い事だったのか。

咲は何とも言えない 胸を押しつぶされそんな感覚に近いが苦し

くはない　　そんな不思議な感情が胸の中に広がっていった。

そして　　咲は選んだ。

.....

ガチャン　　！！

湯呑を机に力いっぱい叩きつけ、和室に破片が飛び散った。

烏丸本家の正妻　　咲の母親は怒りで顔を歪めていた。

「おのれ！　あの薄汚い溝鼠がッ！」

大貴に唆されて咲は今回の見合いを断った。

見合い相手の松本も今回の一件で怒り、二度と烏丸本家と関わらないとも言ってきた。

烏丸本家の力を増す為に進めた話だったのに、烏丸大貴に引っかけ回され全てが水の泡だ。

「よくも！　よくも！　よくも！」

半狂乱になって叫び、暴れる。

「潰してやる！　あの時のように！　二度と立ち直れない様に……

ッ！　滅茶苦茶にしてやる……ッ！」

「その必要はありません」

呪詛の言葉を連ねる母を止め部屋に入ってきたのは　　烏丸修兵だった。

「修兵さん、どういう意味ですか……?」

息を乱しながら修兵を体温の低そうな目で睨みつけた。

普通の人間ならその威圧感に圧倒されて何も言えなくなってしまうだろう。

しかし修兵は威圧感などお構いなしに話を続けた。

「今回騒動で糸を引いていたのは僕ですから」

「……………ッ! どういう事ですか!？」

「松本家と縁談してもこちらに益が無かったからですよ」

母の剣幕を修兵は涼しい顔で流す。

「この資料を見てください。松本家のインサイダー取引と書類偽造による私的横領の証拠です。既に検察が動いてるそうですよ?」

「……………」

修兵は理路整然と松本家との縁談の無益を母に説明していく。

「ですが、今回の縁談は既に秒読み段階に入り、簡単に壊せるものではなかった。だから烏丸大貴を利用して、向こうから断らせるように仕向けたんです」

「利用したのですか?」

「ええ。利用したんです」

「……………それなら問題ありません」

「それでは松本家が潰れる事によって煽りを受ける企業を抱き込む事にしましょう。事前の根回しを怠らねければ、松本家の傘下の企業の5割を本家の傘下に収める事が出来ますから」

「ええ。では、早速」

母が部屋から去っていったのを確認して修兵は溜息をついた。

くだらない。

勿論『大貴を利用した』事実には存在しない。

『大貴を利用し、彼よりも自分が優位に立っている』という話が彼女のつまらない自尊心を守らせ、溜飲を下げさせるのに十分だったからそう言ったただけだ。

烏丸大貴はやつと見つけた自分のすべてを出し切れる相手になる可能性がある。

そんな貴重な存在をあんたつまらない人間に潰させる訳が無い。

大貴を倒していいのは自分だけだ。

そして 修兵にも一応妹を思いやる気持ちはある。

修兵が大貴に向ける感情には僅かな感謝と敬意。そして多大な期待があった。

.....

「ふーん。留学」

「うん。昔からやってみたかった事があって……」

咲は照れくさそうにはにかんだ。いい顔になった。と、大貴は素直にそう思いながら湯呑に入った熱い茶を啜った。

烏丸咲が松本との縁談を断ってから1週間後。音沙汰なかった咲が修介宅に訪れてきた。なんでも幼い頃からの夢だったデザイナーになる為にパリに留学する事を決意したらしい。

「思い切ったな」

「うん。自分でもそう思う。けどね、まだ最初の一步だよ？」

「それでも大したもんだ」

「ありがとう」

迷いを振り切り、真っ直ぐと前を見詰め、すっきりとしたいい表情になっている。

彼女はもう大丈夫だ。なんとなくだが大貴はそう思った。

「あなたのお陰で前に進む決心がついた気がする。あのまま行っていたらお父さんの事も誤解したまま一生後悔してたと思うから」

「そう言えばオッサンは何だった？」

「うん。『よし！ 行ってこい！ 将来は有名デザイナーだな！』
だって」

「親バカ……」

「本当にね。でも、嬉しかったなあ」

「そっか」

「本当にありがとうね。お兄ちゃん？」

「お兄ちゃんは止せ」

居心地が悪そうに眼を反らす。同い年の女の子に『お兄ちゃん』と呼ばれるのに抵抗を感じているようだ。それを見て咲は悪戯っぽく笑った。

しばらく2人で雑談をしていたら時計の針が4時を回っていた。
そろそろ帰る、咲は言う。

出発は明日。帰国は3年後。今日が学生の内に大貴と咲が会う最後の日になるだろう。

若干の名残惜しさを感じながら大貴は玄関まで咲を送っていく。
何も警戒せずに玄関の扉をスライドさせた瞬間。大貴の体は瞬時に

地上数メートルまで吊りあげられた。その後上下逆さまに吊りあげられ「ああああ〜」という間抜けな声をあげながらグルグルと竜巻旋風脚のように回っていた。

『ホツホツホ。油断したな未熟者め』

「ジツジイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！！
コレは何の真似だああアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

？」

「いやはや。お主の部屋の机の上でこのような本を見つけてのう。
これを読んだら『やらねばならぬ！』と思い立った次第じゃ」

修介の手には【ベン・トー2 ザンギ弁当295円】という題名の
本があった。

大貴がつい先日書店で見つけ、買った本の一冊だ。1巻を読み終え、
つい最近2巻を読み始めたばかりだったが、酸欠を起こしそうにな
るほど大爆笑な内容と、バカバカしさの中に光る格好良さ、そして
何より登場人物1人1人の生き様に惹かれ、最近のお気に入りにな
りつつある本だった。

「面白かったぞい。特にガブリエル・ラチエツトの頭目が」

「や、やめる！ まださわりの部分しか読んでないんだ！ ネタバ
レすんじゃねえ！」

「帝王^{モナーク}の目的が」

「だからやめろって！」

「何と言っても見どころは魔導士^{ウィザード}と帝王^{モナーク}の」

「やめろおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オッ！！！！！」

その後、未読の本の内容のオチまでネタバレされ、大貴は泣いた。
そして咲はそのやりとりを見て笑っていた。心の底から楽しそうに。

少し前までは自分がこんなにも笑えるなんて知らなかった。

大貴が抑え込んでいた自分を解放してくれた。

自分の未来は自分で決められるのだと教えてくれた。

夢に向かって一歩を踏み出すことへの勇気をくれた。

ふと罫から降ろされた大貴と眼があった。

大貴は肩をすくめて困ったように笑う。それに釣られて咲も透けるような笑顔を浮かべた。

「あなた忘れていましたわね……ッ!?」

「氣ノ所為、でござえますよ?」

「やっぱり忘れていましたわね!?」

「い、いや。色々と忙しくてな!」

「キサマ……ッ! 私 ノ デイアマイエンジェル ト イチャツ
キオツテ……ッ! 許サン! 3秒ヤロウ。神へノ祈リヲ済マセロ
ッ!」

「あいにく祈りたい神様がいないんでね!」

軽口を叩きながらも余裕のない表情で回れ右してダッシュした。体のバネを目一杯使い逃げた。

「あ、待ちなさい! 美春を置いて逃げるなんて許しませんわ!」

『逃ガサンツ! 殺!』

「ついてくんな清水! アレの狙いはお前だろ!?!」

「甘いですわね烏丸大貴。すでにアレの抹殺対象の中にはあなたも含まれていますわ。精々美春の邪魔をする者同士殺し合いなさい!」

「テメエ! 最初からそれが目的だったな!?!」

「そうでなければあなたの様な豚野郎に声などかけません!」

「ぶっ殺すぞテメエ!」

『痴話喧嘩!? オノレ! 最早殺スダケデハ足りヌ! 滅殺!』

「だああああああ! 状況が悪化してやがる! なんだってのんびり出来るはずの休日こんな目にあわなきゃいけないんだよドチクシヨウめがッ!」

「ここで止まればのんびりする事は出来ますわよ?」

「あの世でのんびりしろって事かよ!?!」

言い争いながら尚も足を止めない。

何故なら後ろの狂戦士がどこぞの世紀末覇者の様な凶悪な形相で追って来ているのだから。

サラバ三馬鹿。あんたたちの尊い犠牲は3秒くらいは忘れない。
三馬鹿の屍を踏み越えてオレは走る。駆ける。疾駆する。
風に〜なり〜たい〜

常夏コンビと三馬鹿を撃破して地獄の使者は尚もオレ達を追う。
小柄な体格を最大限利用して、人と人との隙間に巧みに入り込みオレはこの逃走劇のアドバンテージを握っていた。しかしもう一押し足りない。

もう一回回作戦が使えれば確実に逃げ切れるのだが……！

「あれ？ ヒロと清水さん。2人が一緒にいるなんて珍しいね？」

「ぶ、豚野郎！」

「あ、明久。雄二？ お前らこそ何やってるんだよ？」

「え？ 新作ゲームを買って僕の家でやるうかと思つて」

「お前も来るか？」

「あゝ、悪いけど今日は遠慮しておく！」

「それよりどうしたの？ なんだか顔色が悪いけど？」

くう……ッ！ 殺伐とした状況の中の明久の優しさが眩しい！
いくらオレが外道だからと言っても友達を犠牲にする事なんて

ふと、本音召喚獣のときに嵌められて色々痛い目に遭った事を思い出した。

そして後ろから迫ってきている地獄の使者の顔を見やる。

うん。まあ、いいか。

「じゃあな二人とも。清水、ナンパされて嬉しいのはわかるが今はさっさと逃げるぞ」

「そうですね」

.....

スーパーのロッカーに入れてあった米を回収して、駐車してあったバイクの後ろに清水を乗せて家に帰った。優子以外の女の子を後ろに乗せるのはかなり抵抗があつたが、よくよく考えたら清水は女の子の皮を被つた怪物モンスターなので『まあ、いいか』と思つた。まったく見た目だけなら軽く水準を超えるのに勿体ない。

「とりあえずこれで有利に迎え撃てるはずだ」

ジジイ作成のトラップを設置して一息つく。勿論木刀の準備も忘れていない。

「本当にこんな仕掛けであの男を止められるのですか？」

「ジジイのトラップの性能はオレが一番よく知ってる。このトラップ地帯を無傷で通り抜けられる奴なんてまずいない」

今回ばかりはジジイの珍妙でハタ迷惑なこの困つた趣味に感謝してやってもいいと思つた。

「全く、何故あんな身勝手な男が美春の父親なんでしょうか……！」

「なるほど。同族嫌悪か」

「失礼ですわ！ 撤回を要求します！」

「いや。お前らソックリだから」

「一緒にしないで頂きたいですわ！」

清水は自分の性格が店長に似ている事を認めたくないようで、反論を捲し立てる。

それを聞きながら深いため息をついた。

「なんだってそんなに店長を嫌うんだ？ 反抗期か？」

「そんなの決まっていますわ！ あの男は美春の気持など無視して一方的な愛情を押し付けて来る様な豚野郎だからですわ！」

似たような事島田にもやってるじゃねえか。というツツコミは無粋なのでしないでおく。

厄介事に巻き込まれない為にもテキトーに良い事言つて清水の店長に対する悪印象を緩和しておく必要がある。面倒だが。心底面倒だが。オレの保身の為だ。致し方ない。

「そう言つてやるな。あの人はあの奇行はお前に対する愛情が暴走しているだけだ」

「例えそうだとしてもあの男が最低の親である事は変わりありませんわ！」

「親は子を育て、子は親を育てるモンだ」

「？ どういう事ですか？」

「多分さ、親つてのは最初から『なっている』ものじゃなくて、親は子を育てるうちに親に『なっていく』もんじゃないか？」

「自分の親を親にするためには清水自身が父親に向き合う必要があるんじゃないか？」

「……あなたもそうしてきたのですか？」

「……オレの場合、その機会すらなかったからな」

「どういう、事ですか？」

「オレは結構有名な家の私生児なんだけどさ、聞いた話によるとオレの母親は金目当てにオレを生んで、認知されなかったらネグレクト起こしたらしい」

「……ッ！？」

「その後は父親に引き取られたんだけど、そこでも父親はオレを『自分の失敗の象徴』として拒絶して、周りに虐げられて、暴行されていても見て見ぬ振り……」

『美春っつ！ デイア マイドーターツ！』

「こ、この声はっ！」

「お出ました！」

家中のトラップが発動する音がするが、そんなものお構いなしに店長が此方に近づいてくる。そしてこの部屋の前の最後のトラップゾーンを突破した。

「美春っつ！ お父さんが助けに来たよっつ！」

「帰って！ なんと言われようとあなたと帰る気なんてないわよっつ！」

「そ、そんな……美春……。……キサマか……。！？ キサマがマイエンジエルを誑かしたのか……。！」

「か、烏丸大貴は関係ありま……！」

「ああ。そうだよ」

清水が否定する前に店長の言葉を肯定する。すると店長は射殺さんばかりの眼差しをこっちに向けた。殺意を孕んだ視線も何かを言いたそうな清水も無視して尚、言葉を繋げる。

「ちょうど良かった。この女には飽きたところだ。さっさと連れて帰ってくれないか？」

「何を言っつて」

「飽きた……。だと……。！？」

「遊びで抱いてやったら調子に乗って彼女面だ。面倒くさい事この上ない」

「！？！？！？ いつ美春があなたとそっついう関係に……。！？」

「キサマ……。！」

オレに向かってくるのか？ あんたの愛情を受け取るのを拒む娘の為に？ 知ってるか？ そういうのを無駄骨って言うんだぜ？」

店長は大人しくなり、下を向きワナワナと体を震わせる。そしてオレを見据えてハッキリと告げた。

「違うっ！ 僕は『娘に好かれない』からお前に向かって行くわけじゃないっ！ 美春を愛しているから！ 例え嫌われて蔑まれても僕のたつた1人の大切な娘だ！ だから美春を傷つけたお前を許さない！ 絶対に許すものかっ！」

「……………」

そのままの体制で天を仰ぎ、大きく息を吸ってゆっくりと吐く。

「ってなわけだ。清水、これが店長の本心だ」

「……………は？」

「あ、あなた…………お父さんから本心を引き出す為に態と憎まれ役を

……………！？」

店長だけが訳が分からないというようにクエスチョンマークを頭に浮かべている。

「人間追い詰められると飾り気のない本心が出てくるからな」

ニツと口の端を吊りあげ笑うと清水は何やら感極まったような表情をしていた。

「さ、あとは家に帰って二人で話し合え。ちゃんと話し合わなきゃ互いの気持ちなんてわからないんだからな」

要約：さつさと出てけ。お前の家の問題にオレを巻き込むな。家族の問題は家族で解決しやがれ。

ってな感じの本音を巧妙に隠し、当たり前障りのないちょっと良い事を言っておく。

そのまま済めばちょっといい話で片付た。片付いていた筈なんだ。しかし。

ミシミシ！

柱を握り潰したような音が聞こえ、凄い殺気が辺りを包み込む。後ろを振り向いてはいけない。

本能がそう告げていたが、怖いもの見たさが勝ってしまった。

ギギギギッと油をさしていないロボットの様な動きで後ろを振り向くとそこには。

「……………」

襖から顔を半分だけ出してこちらを覗いている優子の姿が。その表情は、その……………色々と拙い事になっていた。心臓の弱い人が目を合わせたら、それだけで天に召されてしまうんじゃないかって思うくらいヤバかった。そして優子はゆっくりと声を出さずに口を動かす。

オレは読唇術は使えない。だが、何故か唇の動きだけで優子が何を言おうとしているのか理解出来てしまった。

ブ・チ・コ・ロ・シ・カ・ク・テ・イ・ネ。

以心伝心の関係って素晴らしい。麦のんになった優子は死ぬほど怖

かった。

その後『両手足の関節を一つ増やされ、首を360度回されるか、全身の皮を剥かれるかどうか選べ』という究極の選択を迫られ、『オレと清水が【検閲削除】関係にある』という誤解を解く為に深夜にわたる説明を行い（そこに至るまで殺された回数には軽く二桁を超す）夜遅いという事で木下家まで優子を送って行き、別れ際にキスしているところを木下父・日吉さんに見られリアルに殺されかけたが何とか生き延びる事が出来た。流石に日吉さんが火炎瓶を持ち出してきたときはもうダメかと思った……。

.....

昼休みの中盤に差し掛かり、持ってきた弁当と優子の作って来たケーキを1ホールを平らげて重箱を仕舞い始める。

「烏丸大貴」

「清水か……」

顔を真っ赤にした清水が神妙な顔をしてこちらに来た。正直、優子の手前あまり顔を合わせたくない相手だったが、とりあえずそう言う事を顔に出さずにこやかに対応しておく。

「先日はお世話になりました」

「ああ。気にするな。で、和解は出来たのか？」

「……………とりあえずあなたのやり方を見習って少しずつ向き合っ
ていこうかと」

「ふうん。そっか」

「それと、これはお礼にとお父さんから持たされたものですがよ、
よかったらどうぞ」

そう言つて清水は包みを開いた。中からは大量の冷凍されているラ・ペディスのクレープが……！

「え？ これを……オレに？」

「ええ」

「えーっと……ドッキリ？」

「いいえ」

「毒でも入ってるのか？」

「入っていません」

「一体何を企んでるんだ！？」

「失礼ですわ！ 美春にだつてお世話になつた方への感謝の気持ちくらいは持ち合わせています！」

嘘だ！ 目の前の女の子の皮を被つた怪物にそんな殊勝な心掛けがある筈が無い！ きつと何か裏があるはずだ！

そつえばさつきからコイツの顔が赤いな……？

なにかあからさまに目を反らされてるし、落ち着きのない様子だ。

ハッ！ ま、まさかコイツ　！

「お、お前まさか　惚れたのか！？」

「ええ！？」

「なななななななななな！　そ、そんな訳ありませんわ！」

「だつたら何故目を反らす！？　瞬きが多くなってるぞ！」

「　　ッ！　く、くうううう……ッ！」

「ま、待つて清水さん！　本当に　！？」

「そうか。惚れてしまったのか……。………優子に！」

「………は？」

確かに優子は『細身の貧乳美人』という清水の好みにピッタリ当て

訳のわからない事を叫びながら清水は泣きながら階段を下りて行った。

「コラコラ、クレープは置いていけ。」

「な、なんだっただ一体……?」

「ヒロ……」

「なんだ?」

「アンタ、バカでしょ……」

「何故にバカ扱い!?!」

外伝第16話 闇鍋大好き！ 愛してる！ 【前篇】

大責SIDE

おさかな天国の流れる店内を歩き回り、目的の物をカゴに入れていく。

今日の一番の目的のトイレットペーパーを片手にとる。トイレットペーパーを買う上で重要な事は安ければいいという物ではなく、ロール数、長さ、1パックを計算してメータ単位で値段を換算していく事だ。うん。これが一番安い。

続いて食品売り場へ行き、今日の晩飯の為の材料を入れていく。

静馬は友達の家泊まりに行っているし、美食家気取りのジジイは今日はこの間の縁談をぶち壊した時の後始末の為、本家の方に行っている。よって今日はオレ1人だ。

今日は手抜きすっかな。とか考えながらレジに並ぶ。

ピッピッピッという電子音をポーっとしながら聞いているうちにオレの順番が回って来た。

パートである店員のおばちゃんは手慣れた様子でカゴの中の商品のバーコードを読み取らせていく。

『3498円です』

「4000から。あ……っ」

しまった。マイバックを忘れてきた。

「すみません。袋ください」

『かしこまりました。3503円になります。4003円お預かりします。500円のお返しになります。こちら500円分のお買い上げごとにお渡ししている福引券になっております』

「どうも」

『ありがとうございます。またのご利用をお待ちしております』

おつりとレシート、福引券を7枚貰いってサッカー台に商品の入ったカゴを持っていく。

福引券か……。静馬がいないタイミングでこんなモン貰ってもなあ……。

オレはやたらと運が悪い。勿論クジ運なんて皆無に等しい。16年生きてきてポケットティッシュ以外の景品を引き当てた事が無いほどだ。反面静馬はやたらと運がいい。クジを引けば10回に1回は当たりを引いてくるほどにクジ運がいい。だからこういったモノを貰った時は大抵静馬に引いてもらうのだが、あいにく今日は静馬はいない。しかもこのくじ引き券今日限りのモンだ。

仕方ねえな。オレが引くか。ポケットティッシュでも何も無いよりはいい。

くじ引きをやっている場所を探し、行列を見つける。

その最後尾に並び景品のラインナップをチェックした。どうせ上位なんて当たらないだろうから、下の方だけ。上を見てしまうと、あり得ないとわかっていても期待してしまうから夢敗れた時が辛いんだ……ッ！

5等 卯月温泉ペアチケット宿泊券

6等 海の幸詰め合わせセット

7等 お買い物券1万円分

「へえ……。あの順位であんな豪華な商品なのか……」

ポツリと呟きを洩らした。あれだけ下の方に景品があるならもしかしてオレにもチャンスがある訳ないか。余計な期待は抱かないようにしよう。今日に限って当たるなんて、そんな都合のいい

- 1等 鉄パイプ 10万円文
- 2等 鉄パイプ 5万円分
- 3等 鉄パイプ 1万円分
- 4等 鉄パイプ 4千円分

「なんなんだこの意味不明な景品のラインナップは……………」

その後6回引いて全て鉄パイプが当たった。16年生きてきてポケットティッシュすら当たらないくじ引きってのは初めてだったよ、チクショウめ……。

……………

「あれヒロ?」

「ん? 明久と……………玲さんお久しぶりです」

「こんにちはヒロくん。お久しぶりです」

「それ……………どうしたの……………?」

「福引で、当たった……………。お前こそどうしたんだそれ?」

「福引で当たったんだ」

明久の持っている台車には『海の幸詰め合わせセット』が、オレの持っている台車には『鉄パイプ 55万4千円分』が乗っていた。

「辞退すれば良かったのに……………」

「工務店にでも売れば少しは儲かるかと思ってな……………」

その分運ぶのが滅茶苦茶重いが……………。

「あれ? そう言えば珍しいね。ヒロが静馬君を連れずに買い物し

てるなんて」

「ああ。今日は静馬は友達の家泊まりに行ってる」

「へえ。じゃあ今日はお爺さんと2人？」

「いや。ジジイの方もこの間の縁談の後始末で本家の方に行ってるから今日はオレ1人だよ」

「そうなんだ」

「それならヒロくん。よろしければ我が家で夕飯でもどうですか？」

「え？」

「1人で食事をとるのも味気ないでしょう」

「いや、けど姉弟水入らずのお邪魔じゃ……」

「おいでよヒロ。この量は流石に僕と姉さんだけじゃ食べきれないよ」

「遠慮なんて要りませんよ。アキ君のお友達なんですから」

「……………。それじゃあお邪魔させていただきます」

「はい」

「あ。その前に一旦帰ってから出直します。この鉄パイプを家に置いてこないと」

「うん。それじゃあ待ってるよ」

「ああ。世話になる」

その時、オレはまさかあんな事になるなんて……夢にも思わなかったんだ……。

……………

「あれ？ お前らも呼ばれたのか？」

「ああ」

「うむ」

「……………」

鉄パイプを家に置いてきて、お土産を片手に明久の家の前で雄二、秀吉、ムツツリー二と会った。

「ありや？ 優子はいないのか？」

「誘ったのじゃが、呼ばれてもいないのに行くなど図々しくて出来ぬそうじゃ」

「あー。まあ、それもそうか」

おかしいな。このメンツなら霧島、島田、工藤、優子あたりに声をかけていてもおかしくない。っていうか、明久の性格からして絶対に声をかけるだろうに。

明久の行動が腑に落ちないながらもインターホンを鳴らす。

「うーっす。明久来たぞー」

「いらっしやい。よく来てくれたね」

扉は直ぐに開き、明久はオレ達を中に招き入れる。

「折角の福引の景品を御馳走になるなんて悪いな」

「図々しいようで恐縮じゃが、ご相伴にあずかせていただくかどうか」

「……………楽しみ」

「ほい。これ土産のケーキ。手作りだから店のやつみたいに見栄えは良くねえが、味は保証する。食後にでも食おうぜ」

「ありがとう。そんなに気を使わなくてもいいのに」

「別に。世話になるんだからこれくらいは、な」

「世話なんてそんな。結構な量だからさ、手伝いに来てくれて助かるくらいだよ」

なんだ？ 明久から悪意を感じる……？ そんでもって台所から淀んだ空気が……？

「明久、何故鍵をかけるのじゃ？」

「ははは。最近は何騒だからね」

「……………チエーンまで？」

「念の為。念の為」

全員胡乱な者を見るような表情で明久を見る。沈黙が場を支配していたが、そのままでは前に進まないと判断した雄二が口火を切った。

「明久、お前何を企んでいる？」

「……………流石は雄二。勘がいいね」

「ま、まさか……………ッ！」

「そのままかだよヒロ……………」

「お主は何を言っておるのじゃ？ 海の幸を楽しむだけじゃろうが。」

別段毒がある訳じゃあるまいに

「い、いや。あるんだよこの場にいる全員を殺傷してしまうだけの

威力を持った毒が……………！」

「どつという意味じゃ？」

『あ。皆さんこんにちは』

奥の部屋から顔を出したのはエプロンを装備した我らが誇る殺人コ
ツク 姫路瑞希だった。

「……………ッ！？！？！？」「……………」

全員の色が一気に青くなり、旋回して逃げ出した。しかし明久がドアの前に陣取っていた為、逃げる事が出来ない。

「あ、明久テメエ……！」

「ここから先は地獄への一方通行だ。逃げられると思うなよ……！」
「妙に親切だと思つたら最初っからこれが狙いだつたな！？ このクソ野郎がッ！」

「地獄への道連れは逃がさない……！ ノコノコとやって来た我が身を呪うがいい……！」

「明久よ友人に対してこの仕打ちはあんまりじゃと思わぬか！？」

「……ツ！（コクコク）」

「大丈夫。僕にはわかつてるよ。口ではそう言いながらも、本当は僕一人がピンチに陥つてるのが心苦しくて仕方ないんだよね？ 仲間として苦楽を共にしたいんだよね？」

「死ぬなら一人で死ぬ！」

「このような事をするヤツなぞ仲間などではない！」

「……外道が……。ッ！」

「殺す！ 今殺す！ すぐ殺すっ！」

「バカだなあ。表面上はそんなこと言っていても隠しきれない本心はヒシヒシと伝わってくるのに」

「（（（明久、絶対殺す……！）））」

（君たちも一緒に死ぬんだ……！）

「明久テメエ……！ 体育祭の時の復讐か！？」

「……陰湿な……！」

「ワシは関係ないじゃろう！」

「オレもお前に恨みを買う事なんか何もやってねえよ！」

「ヒロの所為でこの間清水さんのお父さんに襲われたし、秀吉を巻き込むのは気が引けたけど僕たちは仲良し5人組だ。仲間外れにするなんて出来ないよ」

「そこはあえて仲間外れにしておいてほしかったぞい！」

「あら？ ヒロくんに……坂本君達ですか？」

キッチンからエプロンをした玲さんが顔を出した。

こんなにエプロンの似合う女性をオレは未だかつて見た事が無い。

「量が量だから皆にも手伝ってもらおうと思って呼んだんだ」

「それはいい考えですね」

確かにこの人数なら1人当たりの摂取量は確実に少なくなる。という事は生存率も上がるかもしれない。しかしわかっているはずだ明久！ それだって気休め程度にしかない事くらい！ なんてこつた！ 玲さんのエプロン姿はメイドの土産だったのか……！

「そう言う事なら美波さん、翔子さん、愛子さん、優子さんにも連絡してみてはどうでしょう？ 前に海に一緒に行った仲ですから特に」

「え？ いいの？」

「はい。アキ君の行動を見て思ったのですが、どうやら姉さんはアキ君を束縛しすぎて逆に良くない影響を与えていたようです。ですから、この際姉さんの見ている前ならある程度は許容しようかと。ですが身体的接触や覗きなどいやらしい行動に該当する者は折檻の対象になるので注意してくださいね」

「うん。それはわかってる」

明久は玲さんの言葉でパアツと顔を明るくさせた。うんうん。良かったなあ明久。ってちょっと待てい！ それってつまり犠牲者リストの中に優子も含まれちゃうって事か！？

「明久、優子を呼んだらどうなるか……わかってるよな……？」

「ひふああいひふあい」（痛い痛い）

小烏丸の柄で明久の頬をグリグリやり、脅は じゃない、説得する。

優子はオレが守る！（キリッ）

「電話してみたなら優子ちゃんは来れるそうですよ。良かったですね
烏丸君」

「……ソウダナ。ヨカッタナー」

どうしよう。優子の命が危険にさらされる。

「翔子ちゃん達も大丈夫だそうですよ」

「ひ、姫路は行動が速くて偉いなあ……」

雄二も姫路にぶちかまされ、やっとの思いでそんな言葉を吐きだし
た。

.....

「で、どうするんだ明久？」

「どうするって言われても」

「台所に入れないんじゃないじゃ手の打ちようがねえ」

なんとか殺人料理回避しようとおの手この手で調理に介入しようとしたが、姫路・玲さん連合の『台所は女の戦場。男子禁制』と一刀
両断されてしまいオレ達は敗北した。明久の言う「死者が量産され
るって点ではいい得て妙だね」という言葉はシャレが効いていた
が笑えなかった。

「あの、明久君」

「な、なにかな姫路さん」

「道具を探しているんですけど……」

チャーンズ！ 人の家の台所は使い勝手がわからない、というのはよくある話だ。

そこを突いて広げれば明久が調理に介入できるかもしれない。

明久、雄二も同じ考えに至ったようで、無言で頷く。明久はにこやかに姫路に対応した。

「オッケー。何が必要なの？」

「えっと……瞬間接着剤を」

「もうダメじゃ……。ワシはここで死ぬんじゃ……」

「くそ……。俺にはまだやり残したことが沢山あるんだ……」

「………生きて、もっと……！」

「姉さん、弦馬さん……。もうすぐ、あなた達の元に逝きます……」

姫路の言葉はオレ達全員を絶望の底にたたき落とすには十分すぎるほどの威力を持っていた。それでも尚、諦めずに立ち向かおうとする勇者の姿が。

「あ、あのさ姫路さん。わかってると思うけど、料理に瞬間接着剤を入れるのはとっても危険」

「何を言っているんですか、明久君。お料理に瞬間接着剤なんか入れたら大変な事になるじゃないですか」

「だ、だよねっ。大変な事になるよねっ。そのくらい常識だよねっ」

「はいっ。ふふふ。おかしな明久君」

「な、なんだ早とちりか……」

「寿命が縮んだのじゃ……」

「そっだな……。いくら姫路でも料理に瞬間接着剤を入れるなんて

」

瞬間接着剤が必要なんだ？ という疑問が頭から消し飛ぶくらい喜んだ。

しかし更なる絶望がオレ達に向かって鎌首をもたげる。

「あれ？ だとしたら何で瞬間接着剤が必要なの？」という地雷原に裸足で突っ切るような明久の質問対して姫路は

「はい。えっと、ブイヤベースを作っていたら圧力鍋が真ん中から破裂しちゃって」

「「「さらばだ！」「」」

もう無理！ もう嫌だ！ もう耐えられない！ こんな恐怖の館ホーンテッドマンションには一分一秒だって留まっていたくない！

「ああ！ コラ待てエ！ 逃げるなあ！」

明久が追ってきたが、雄二は既にロックチェーンを外し外に飛び出している。オレもその後が続こうと思ったが。

「……どうして私が来たのに逃げようとするの？」

「ぐああああ！ 後生だ翔子！ 離してくれええ！」

「何処に行こうとしているの？」

「ムツッリーニ君、ボクが来たからって照れなくてもいいのに」

「何やってのよアンタ達は？」

島田、霧島、工藤、優子に行く道を阻まれ逃げる事が出来ない。

「優子！ オレと2人で逃げよう！」

「な、なに？ いきなり何言ってるの!？」

「ずるいのじゃヒロ！ ワシも連れて行ってほしいのじゃ！」

「ええい！ 腰に巻きつくな鬱陶しい！ バイクの三人乗りは交通法で禁止されているんだ！」

「そこを何とか曲げて頼むのじゃ！」

「……………（ジユルリ）」

「ちょっと待て優子！ お前今何想像した！？」

「何も想像してないわよ！？ 鬼畜顔のヒロが秀吉に迫って断り切れない秀吉を押さえつけてお尻に【検閲削除】を捻じ込んで最初嫌がっていた秀吉は段々」

「待て優子！ 色々と拙い事 っていうか酷い事を口走ってる！」

「ハッ！ アタシなにか口走ってた！？」

「そりゃもう！ 思いつきり！」

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああつつつ！！！」

「あ、姉上が発狂したのじゃ！」

「そうっとしておいてやろう……………」

それがオレ達の精一杯の優しさだった。

……………

「…………お邪魔します…………」

「アキ、コレお土産」

「…………私も家からこれを。玲さんに」

「ボクはこれね」

「はい。これもどうぞ」

島田と工藤は果物を、優子は飲み物を、霧島はワインを明久に手渡す。

「どうもありがとう」

靴を脱いで上がり、リビングへと向かう。オレはこの場を離脱する事を諦め、いかにして無事に家に帰る事が出来るかの方向で考えをまとめ始める。一応師範特性『死んだ方がちょっとマシな蘇生薬』は持ち歩いているが、この人数で割るとなると、効くかどうか……。

「あ。皆さん今晚は。」

「……………（ヒクッ）」

優子の顔が僅かに引き攣った。

「（な、なんで姫路さんがここにいるのよ!?!）」

「（明久が呼んだんだ!）」

「（料理はさせていないわよね?）」

「……………」

「（なんで目を反らすのよ!?!）」

『瑞希。何を作ってるの?』

『はい。ブイヤベースを作っていたんですが、失敗して作り直しになっちゃいました』

「大貴、正直に答えなさい」

「な、なんなりと」

「姫路さんはどんな失敗をしたの?」

「……………はい。原因はわかりませんが、圧力鍋を真ん中から破裂させました」

「……………」

「ゆ、優子! む、無表情でオレの首を絞めにかかんのはナシ!

「ちょ、頼む！ 殺さないでくれ！ まだ死にたくない！」
「アタシだって死にたくないわよ！」

『まあまあ、そんなに落ち込まないの瑞希。失敗は誰にでもあるものよ』

『……失敗は成功の元』
『ボクはお料理しないからよくわからないけど、次はきつとうまくいくよ』

((ひいひいひいひいっ！！！))

オレと優子の心の悲鳴が重なった。様な気がした。

『上手くいく』が『上手く逝く』に脳内変換されてしまい、冷や汗が止まらなくなった。

『でも、時間が無くなっちゃったのであまり手の込んだ料理が……』
『それならいつそのこと鍋にしたらいいんじゃない？』

『え？ お鍋ですか？』

『うん。この人数だと、お鍋も海鮮類だからおいしいと思うよ』

『お鍋ですか……。わかりました！ それなら、今すぐ準備を始めますね！』

「あー、姫路。鍋なら俺が得意だから任せてくれないか？」

「ダメですつ。坂本君たちは座っていてくださいつ」

「じゃが姫路。鍋は基本出汁を入れて煮るだけなのじゃから」

「木下君まで何を言っているんですか！？ その出汁が大事なんですつ！」

「(優子、お前鍋は ?)」

「(無理。出汁の作り方を知らないわ……)」

オレは今日ほど優子に何故出汁の作り方を教えておかなかったのか、と後悔した事はない。

今日無事に帰る事が出来たら、優子に鍋の出汁の作り方を教える事にしよう。

「それでは闇鍋なんてどうですか？」

話を聞いていた玲さんが唐突にそんな事を言い出した。

「闇鍋、ですか？」

「はい。確か鍋料理の中では最もメジャーなものだと聞いています」「姉さん、それは」

そこまで言いかけて明久は考え込んだ。

オレも玲さんの提案を吟味する。

闇鍋とは多人数がそれぞれ自分以外には不明な突飛な材料を持ち寄り、暗中調理して食べる鍋料理。食事というよりは遊び、イベントとして の色彩が濃く、スリルと笑いを楽しむために行われることが多い。ウィキペディア抜粋。

つまりは 姫路が料理に手を加える時間が少なくなり、オレ達の生存率が増す。

そしてなにより、上手くすれば無傷で生き残れる可能性だって考えられる。

オレ達は目を見合わせ、一度だけ頷くと一にも二にもなく玲さんの提案に飛びついた。

「あの、玲さん。闇鍋ってというのは普通の鍋料理とはちょっと違って」

「それは良いのう！ 闇鍋とは面白い提案じゃ！」

「そうだな！ 闇鍋は鍋の中の鍋だよな！」

「すべての鍋は闇鍋に始まり、闇鍋に終わる！」

「アタシ闇鍋って大好き！」

「……………闇鍋最高……………」

「流石は姉さん！ 良いことを言うね！」

「闇鍋ってボクもちょっと興味あるな。やったことがないよ」

「……………私も、やってみたいかも」

島田が何か言いかける前にオレ達は闇鍋を猛プッシュした。それに便乗するかのようにな女性陣も賛成の声をあげる。

「あ。でも、うちにはカセットコンロがないや……………」

「明久君。それなら私から持ってきますよ？ 私の家なら近いです」

「え？ いいの？」

「はいっ。他にも色々持って来たいと思っていましたから、丁度いいです」

色々ってなんだ！？ 色々ってなんなんだーっ！？

底知れぬ恐怖を感じながらも、首の皮が一枚繋がったこの状況に安堵の息を洩らした。

外伝 第16話 闇鍋大好き！ 愛してる！ 【後篇】

NO SIDE

死神が恐怖の館から去りて、ホーンテッドマンション生贄の山羊達にひと時の安息の時が訪れた。例え仮初の平和だとしても彼らはその安寧の時間を享受した。そう、残酷な現実から目を反らすことによって彼らは自分たちの心を守っていたのだった。

瑞希を待っている間女性陣は明久が景品として引き当てた海鮮セツトを使って前菜を作っていた。

「はいお待たせ〜。オードブルが出来たわよ〜」

「……………お待たせ」

そう言つて美波と翔子は大皿を持ってリビングにやって来た。その中身を見て男性陣は感嘆の声をあげる。大皿の上には鮮魚とその周りを彩るように野菜類が盛りつけられており、ソースで綺麗な文様が描かれていた。

「ワインがあるって聞いたから、カルパッチョにしてみたんだけど」

「美波つて、魚をおろせたの？」

「うっん。ウチはソースと盛り付け。魚をおろしたのは」

「……………私」

「ふえ〜、霧島さんがやったんだ〜」

「……………花嫁修業、だから」

頬を紅潮させてはにかむ翔子を見て、雄二はプイツと居心地悪そう

に眼を反らした。

「それでこっちが蟹の酒蒸しと海鮮サラダだよ」

遅れてキッチンから姿を現した愛子と優子がそれぞれ料理を盛り付けた皿を持ちこんできた。

「もつとも、ボクと優子は野菜を切って盛り付けたただけだね」

大貴は苦笑しつつ大雑把に切られた野菜を見て「なるほど。野菜の切り方が優子っぽい」と呟くと優子は「なによ。文句あるの?」とむくれながら半眼で睨みつけた。その顔が大貴のツボに入ったようで、思わず笑ってしまいそうになるのを必死に堪えて「ないって」と言って両手を上げて降参のジェスチャーをした。

「じゃあ瑞希には悪いけど、先に始めちゃいましょうか」

「姫路さん待たなくていいのかな?」

「待っててもいいけど、そうなるよ」待たせちゃった』って言って気にするわよ。あの子、そういう事凄く気にするから」

「それでは瑞希さんには申し訳ないですが、先に始めさせて頂きますしょうか」

「……はい」「」

「じゃあ、とりあえず乾杯からだよね。姉さんは折角だから霧島さんのワインを貰ったら?」

「そうですね。1人だけお酒で心苦しいですが」

明久の提案に玲は遠慮気味に頷いた。

「それはしょうがないよ。僕たちは未成年なんだし」

「そうじゃな。ワシらは代わりにジュースでも」

「あ、待って木下。飲み物も作ってみたの。今持ってくるから」

そう言っただけ立ち上がり、キッチンに軽い足取りで入っていった美波は人数分のジュースをグラスに注ぎお盆に乗せてリビングに戻って来た。

「はい。特性フレッシュジュースね」

グラスが全員に行き渡り、美波が座つたのを確認してから明久は音頭をとった。

「それじゃ、カンパイ」

「……カンパイ」

フレッシュジュースの豊潤な果実の香りが鼻腔をくすぐる。大貴はその香りをひとしきり楽しんだ後、グラスを口に運ぼうとした。その時

「辛あつ！ 凄く辛あつ！！ っていうか何の嫌がらせなのさコレ！？」

明久が床でのた打ち回っていた。

「し、島田。コレ……辛いのか？」

甘党で辛いのが苦手な子供舌・烏丸大貴は恐る恐る美波に尋ねた。すると、彼女は微かに頬を紅潮させ、瞳をウツトリさせながらこう言った。

「アキの事を考えてたらね、手が自然にタバスコに伸びていったの」

「なんだ。明久のだけ特別製か」

「島田は明久思いじゃな」

「……………手が自然に動いたのなら仕方ない」

「仕方なくないよ！ そんな恋する乙女風に言っただって可愛くないんだからね！」

普段ならこの時点で明久がいじられ過ぎないようにバランスを調整する大貴だが、素知らぬ顔でジューズの風味を堪能する。彼は明久に嵌められた事をまだ根に持っていた。

烏丸大貴。彼は受けた恩も恨みも忘れない。義理堅くもあり、執念深くもある男だった。

「雄二！ 僕にジューズを！」

「止せよ明久。関節キスになっちまうだろ？」

「何言ってるの！？ 今までそんな事気にした事なかったくせに！！」

明久の要請を雄二はニヤケながら拒否。完全に明久が苦しむ姿を見て楽しんでる。

「な、ならムツツリーニ！」

「……………断る」

「待つて！ 最近ムツツリーニは僕と距離を置こうとしてない！？ 誤解だから！ 体育祭の時言った『女装姿が可愛い』って言ったのはただの冗談だから！」

その発言を聞いて優子は人知れずデヘツと、不気味な笑顔を浮かべていた。その様子を眺めていた大貴はたった一つの迂闊な発言が悲劇を招くという事がある、という事を知る。

「ヒロ！　お願い！　僕に飲み物を！」

目を血走らせながら迫ってくる明久にやや引きながらも、グラスを渡した。

「はい」

「ありがとう！」

グラスを引つ手繰るように受け取ると一気に中に入った液体を飲みほした。

「ブハアアツ！　辛あつ！　っていうか熱うっつ！！！」

「わー、しまったー！。明久にうつかりタバスコの入ったグラスを渡してしまったぞー。こんなの飲んだら大変な事になってしまうぞー」
「もうなってるよ！」

棒読みで言う大貴に明久は涙目でツツコミを入れた。

「まあ、熱いお茶でも飲んで落ち着け」

「こんな状態で熱いお茶なんか飲める訳ないでしょ！！！」

「お前はよく秀吉に言い寄っているんだから、『お熱いのがお好き』
だろ？」

「そんな訳ないよ！　鬼！　悪魔！　鬼畜！　人でなし！」

「誰にでも欠点という物はある！」

ドヤ顔で言い放つ大貴に秀吉は飲んでいたジュースを噴き出した。

「姉さん、僕に飲み物を！」

「飲み物ですか。わかりました」

玲はグラスに注いであったワインをコクンと口に含み、明久の頭を抱え込む。

そのまま一気に明久の口に近づけていく。

「ノオオオオオオオオ！？」

明久は慌ててこれを回避。ゴロゴロと横に転がってジャンプして着地。その俊敏な動きは野良猫を彷彿とさせた。

「危なあ ツ！ 姉さん何しようとしたの！？」

「？ (こくん) 飲み物が欲しいのでは？」

「誰も口移しで欲しいなんて言っていないからね！？」

「……なるほど。口移し」(ボソツ)

「明久。羨ましい……」(ボソツ)

「待て翔子。俺の飲み物に何を入れようとしている？」

「ヒロ、殺すわよ？」

雄二は翔子の手を掴み自分の飲み物にタバスコを入れられるのを防ぎ、大貴は優子の鋭い眼光を前に冷や汗をダラダラと流していた。明久はそのバカなやりとりの間にキッチンの蛇口で舌を洗うようにして冷やし、落ち着いてからリビングに戻るうとした。

「はいアキ。こつちが本物のジュース」

「え？ ああ、ありがとう」

傍に来ていた美波が差し出したジュースの入ったグラスを恐る恐る受け取った。何も仕掛けが無いが、匂いを嗅いで確認する。フレッシュジュース独特の甘酸っぱい香りにホッと一安心。

「少し反省した？」

「え？ 何を？」

明久は「訳がわからない」と言いたげな表情で首を捻った。そんな彼を見て美波は肩を竦める。

「その顔は『何が何だかわからない』って顔ね」

「う、ごめん……」

凶星を突かれて明久は素直に謝った。

「まあ、アキが鈍いのは今に始まった事じゃないしね。しょうがないから教えてあげる。ウチが怒っていた理由はね　どうして瑞希より先にウチを誘ってくれなかったの？　ってこと」

「へ？」

予想もしていなかった回答に目を丸くさせる。美波の意味深な発言に明久の中にある“期待”が生まれるが、脳裏に掠めたその考えを『あり得ない』と片づけた。彼はこういった話には群を抜いて鈍いのだ。

「アキ、戻りましょ」

「あ、うん」

美波に促され明久はキッチンを後にする。リビングに戻った明久の目に飛び込んできた光景はまさしくカオスだった。雄二は翔子に入られたであろうタバスコ入りドリンクを一气飲みして辛さにのた打ち回っているところを翔子に口移しを迫られ、大貴は優子に腕ひしぎ十の字固めを喰らいながら、酔っぱらった玲に膝枕（逃げられないようにホールド済み）をされていた。メロンの物体に隠れて顔が見えないその光景を目の前にして苦痛に顔を歪めながらも『絶

景だああっ!』と叫んでいた。

そのバカ騒ぎは玲が寝てしまつまで続いた。

.....

「それじゃあお鍋の準備を始めますね」

カセットコンロを持参した瑞希が明久宅に戻り、いよいよ恐怖の闇鍋が幕を開ける。

カセットコンロの上に土鍋を置き、中に出汁を入れてグツグツと煮込んでいく。

闇鍋のルールは以下の通り取り決められた。

- ? 素材は食べられるものである事
- ? 箸につけた料理は必ず食べきる事
- ? 用いる食材は一人一種類
- ? 死んでも文句は言わない(コレ重要)

時間も時間なので明久宅の食材のみを使用する事になった。これとルール?の縛りによって彼らの最も恐れていた事態にはならないはずだった。

「そう言えば私、家から食材を持ってきちゃいました」

無邪気に言い放つ瑞希の一言によって男性陣と優子の希望はあつさりど打ち砕かれ、絶望が彼らの心を蝕んでいく。背中に薄ら寒いものを感じながらも烏丸大貴はこの場にいる全員の生存率を上げる為、ある冷酷な決意を固めた。

「食材は一人ずつ、他の人に見えないように持ってくるといふことで良いのよね？」

「……うん。見えたらつまらない」

「えっと、それじゃあボクから持ってくるね」

そう言い愛子、翔子、美波、優子、大貴、秀吉、康太、雄二の順で食材を準備していく。

そして明久の番になり、キッチンに向かっていく。

この時点で明久は気付いていた。男性陣は間違はなく、自分以外の誰か（男性陣限定）に瑞希の持ってきた食材を確実に押し付け、自分と女性陣の生存率を少しでも引き上げようとしているだろう、とそれは予想などという曖昧なものではなく、一種の信賴にも似た確信だった。生き残る為にまずはキッチンにある食材を確認する。自分のホームグラウンドでの勝負という事で彼はこの勝負で大きなアドバンテージを握っていた。

まずは戸棚を確認。無くなっていたのは。

? タバスコ（新品）

? タバスコ（使いかけ）

? タバスコ（ピザのオマケ）

? 片栗粉

「バカばかりだあああああああああああああつ！！」

あまりの激辛好きに明久が魂の叫びを上げる。まともに食材と言えるものは片栗粉くらいだった。とりあえず深呼吸。気を落ち着かせ、次に冷蔵庫の食材を確認する。

無くなっているのは。

- ? ハーブ類
- ? 長ネギ
- ? ニンジン
- ? 豆腐

ハーブ類には体の基礎代謝を高め解毒効果があり、ネギには僅かだが薬効効果がある。

（長ネギを防壁に使いつつ、気休め程度でも解毒作用を期待しよう
つて考えか。この攻撃性の低い考えはネギは秀吉かな？ 防壁の事
まで考えていない点から考えて、ハーブを選んだ人はこういった事
に慣れていない。つて事はハーブは木下さんか……）

明久は未だかつてないほど冷静に敵戦力を分析していく。

（ニンジンは切った形跡がないから斜面を使って姫路さんの食材を
誰かの前に転がしてしまうつもりか。『姫路さんが持ってきた食材
が出汁を意識しての液体だったら』つて事を考えていない脇の甘さ。
ムツツリーニだな。そして残る片栗粉。これはゼリー状にして食材
を包み直接封じてしまつ作戰。この『多数を救うために少数を切り
捨てる』考え方。こんな冷酷な決断を下すのは烏丸大貴、奴しかい
ない。恐らく封印した危険物質を自分が引き当てる事も覚悟しての
作戰だろう。切り捨てる対象に自分も含む時点ですらいいと言えばら
しいのだけど……。そして最後に豆腐。これは多分豆腐でプールを
作って姫路さんの食材を隔離する作戰。なら、僕の選ぶ食材は
コレだ！）

.....

グツグツと鍋は煮えている。中には出汁をとる為の昆布しか入っていない。

そして死神による審判の時は訪れた。

「それでは、電気を消しますよ」

「じゃあボクから材料を入れるね」

電気が消え、愛子が食材を投入する。美波、翔子、康太、秀吉、優子もそれに続いた。

「次は俺だな」

雄二は暗闇の中素手で豆腐を丁寧に丁寧に並べていく。明久はその気配を感じ取り邪悪な笑みを浮かべるが、暗闇のせいとその顔は誰にも見えない。

「それじゃあいくぞ」

大貴は意を決したように食材を投入して明久の番になる。

「僕も入れるね」

明久も自分の食材を投入、瑞希の順番が回って来た。

「それじゃあ私も入れますね」

トポツ、トポトポツ

「…………… ツ!?!?!?」

ゲル状の何かが投入される音を聞き、投入される食材があくまで物

体と仮定した作戦を立てていた康太に戦慄が走る。そして鍋に火を入れ、再び煮込み始めた。

.....

明久SIDE

豆腐を選んだ雄二は恐らくこういう風に考えているだろう。姫路さんが投入した食材は出汁に溶け込んだ時点で生命活動に支障をきたすだろう、と。だからこそ豆腐を使って隔離の為にプールを作った。そうやって安全地帯を作って劇物は誰かに押しつけようって魂胆だ。まあ、ヒロの作戦で出汁に溶け込む心配はなくなったわけだけど、自分が危険物を引き当てる可能性は否めない。それなら僕は雄二のその作戦を逆手に取る！

隔離施設。これは裏を返せばそこに危険物を流し込めば、僕は無事に済むという事だ。

そこで僕は選んだ食材こんにやくと雄二の投下した豆腐を使って更にプールを作る。

勿論これだけだと僕の目の前に劇物が投下されてジ・エンドだ。

しかしあらかじめ出汁をとる為に入れた少し大きめの昆布を使って僕の目の前に投下されて、片栗粉で包まれた食材を雄二の作ったプールに流し込めばいい。

雄二のバカめ！ 自分の作った隔壁で追い詰められるがいい！

この生存競争生き残るのは！

雄二SIDE

かかったなバカが！ 明久の奴、予想通りこんにやくでプールを作りやがった。この俺が何故こんにやくがあるにもかかわらず、豆腐

なんて崩れやすい食材を選んだのか、何故出汁をとる為だけの昆布がやけに大きいのに何も言わなかったのか、まるでわかっちゃいねえ。だからお前はバカなんだ！

台所を管理している明久の事だ。何を選んだのかは直ぐに割れるだろう。そうしたら当然明久は何か対策を立てて来る。なら俺は更にその裏をかくだけだ。

まずはこんにやくを残し、豆腐を選ぶ。その豆腐に穴を空けておく。あとはその豆腐を明久の作る隔壁に利用するだけ。明久は自分は安全地帯にいと油断して隔壁内の食材をとるだろう。ヒロの作戦が読めないのが少し不気味だが、問題ないだろう。俺の作戦は完璧だ。ちよつとやそつとのイレギュラーで崩れるなんて事はないだろう。この生存競争生き残るのは

！

NO SIDE

「この僕だ！」

「この俺だ！」

.....

「そろそろいい頃合いだな。火を消すか」

そう言った雄二が火を消し、部屋の中が真っ暗になる。

「いよいよね.....」

「.....ドキドキする」

「どんな味になってるのかな？」

緊張しながらも何処か楽しそうな美波達。彼女たちは知らない。自

分達がしている遊びのチップが自分達の命である事に。

「それじゃ、開けてみるわね」

鍋つかみを手にした美波がゆっくりと鍋のふたを開けた。途端に夕バスコ特有の刺激臭が部屋の中に立ち込める。

「くくう……ッ！」「」

夕バスコを投入したであろう三人はこの刺激溢れる匂いに顔をしかめた。

「じゃあ、いよいよ闇鍋スタートだね」

「おっしゃ！ やってやるぜっ！」

明久が開始宣言をし、雄二が気合を入れ、大貴は隠し持っていた竜馬特製『死んだ方がちよつとマシな蘇生薬』を取り出す。

それぞれがそれぞれの思惑を持って鍋の中に箸を突っ込み、手探りで具を探し摘む。

「明久、本当にその具材でいいのか？」

「雄二こそ取り出してから後悔しないようにね」

明久、雄二は最後にお互い牽制し合い、同時に食材を取り出した。

ドロリ（溶解したこんにやくとゼリー状の片栗粉の残骸っぽい物）

「くく……は？」「」

これには今まで沈黙を保ってきた大貴も思わず声を上げた。

(き、気のせいだ。いくら姫路の料理がヤバイって言っても他の食材を融かすなんて事ある訳ない。そうだ。今のは目の錯覚だ。幻覚だ。光の屈折が生み出した視角誤認だ。そうに違いない。うん。普通に考えてこんな事ある訳ないんだからな)

祈るような気持ちで自分にそう言い聞かせて、再び箸で摘んでいた食材を引き上げた。

ドロリ(溶解したこんにやくとゼリー状の片栗粉の残骸っぽい物)

「……大事な防壁があーっ!?!?!」

「な、何よ!? いきなりどうしたのよアンタたち!?!」

「姫路……、恐ろしい子……ッ!」

「俺たちの小細工なんか相手じゃないってワケか……!」

「? どうしたのよ、アキ」

「いや、気にしないでいいよ美波……。所詮僕らは奪われる側の存在だったんだ……」

「本当に何があったのよ?」

美波の質問を明久はスルーした。知ったところでどうなるものでもないし、始まる前に知らせて恐怖を与える事もない。

「ま、まあいいわ。とにかくウチも……」

「待て島田」

雄二は美波を制するとクリスチャンのように指を組み厳かに言葉を紡ぎだした。

「吉井君たちはいつも楽しそうだよね」

戦々恐々としている男性陣プラス優子に対して極めて女性陣は楽観的だ。

「お箸じゃ取りにくいと思いますからお玉にしましょうか」

各自お玉を使って具を小鉢の中に入れていく。瑞希の料理の威力を知っている彼らの心情は死刑執行を待つ罪人のそれだった。

「……………いただきます」

翔子が手を合わせてから、先陣を切って汁を少し啜った。

『匂いほど、変な味でもない』

「翔子！？ お前の声が直接脳に響いてくるんだが、魂はきちんと身体の中に入ってるのか!？」

霧島翔子の異常事態に雄二は激しく狼狽する。その様子をいつものおふざけだと思いついでいる女性陣は躊躇いなく危険物を口にした。

「「きゃあああああ!」「」

女性陣に起きた惨状が容易に想像できてしまい、明久達は彼女たちを直視する事が出来ない。唯一無事な優子は顔を真っ青にしながら大貴の服の袖口を掴み涙目でうろたえている。

「み、美波ちゃん!? 翔子ちゃん、愛子ちゃん、しっかりして下さいー!」

「う……………。な、なによ、あの味……………」

「……食べ物とは思えない」
「ぼ、ボクもこれはちよつと……」

よかった。生きてた……。男性陣プラス優子が安堵の息を洩らす。瑞希は急いで飲み物を準備して美波達に渡した。

「うう……。まったく、酷い目に遭ったわ……」

「……臨死体験」

「ボク、あんな味は初めてだったよ」

飲み物で口直しをしながら愚痴る美波達。ある程度落ち着くとそれぞれ明久、雄二、康太の方を向き、邪悪な笑みを浮かべた。

「じゃあ、今度はムッツリーニ君たちが食べる番だよ」

「……っ！？（フルフルフル）」

康太は必死に拒否するが、愛子はそれを笑顔で却下した。彼女たちは酷い味になった原因は男性陣にあると思っっているようである。

「はい、あーん」

「……っ！？（フルフルフル）」

「……雄二。あーん」

「冗談じゃねえっ！俺は食わねえからな！」

「や、やめるんだ美波！僕はまだ死にたくない！」

「何を言ってるのよ！自分だけ助かるうなんて、そんなの許さないんだから！」

三者三様の攻防は続く。

「烏丸君、優子ちゃん、木下君」

惨状を目の前に男性陣は半泣きになりながら恐慌状態に陥る。

「ほらアキ！ あーん！」

「もごあっ!？」

「ほらムツツリーニ君、どうぞ」

「……………う……………ぐ……………っ！」

「……………はい、雄二」

「もごあっ!？」

残る男性陣の口にも危険物が押し込まれ彼らは「あ。俺死んだ……………」
と思った。

が、しかし

「あれ？ 全然平気だ」

「なんだ。意外に大した事ないじゃないか」

「……………この程度、どうという事はない」

「んむ？ 本当じゃな。辛い事は辛い、そこまででもないのう」

生き残った男性陣は平気な顔をして一口、また一口と鍋をつついて
いる。

「なるほど。いつの間にか耐性が出来ていたか」

「事あるごとに危険物を口にしていたからのう」

「……………複雑な気分」

「あれ？ じゃあ、どうしてヒ口はやられたんだろ……………？」

『か、辛……………ッ！ 舌が焼ける……………ッ！ 死ぬ……………ッ！ 死んでしまつ……………ッ！ 水をくれええええッ！！ グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

「なるほど。毒性じゃなく、辛さにやられたのか……」

「ヒロの子供舌にも困ったものだね」

「……………やれやれ」

明久たちは和やかに会話しながら平然と鍋を平らげていく。

「な、なんでアンタ達そんな平気なのよ？　こんなに酷い味なのよ

！？」

「……………理解できない」

「吉井君達って味覚障害…………？」

美波、翔子、愛子が明久達を見て戦慄し、優子は辛さのあまりのた打ち回っている大貴の面倒を見ながら自分があの危険物質を口にす
る事が無かった事にホッと（無い）胸を撫で下ろしていた。

外伝 第16話 闇鍋大好き！ 愛してる！ 【後篇】（後書き）

レポートが思ったより早く出来たので投稿できました。

次回から第8部『学園風雲篇』に移行します。

Aクラスへの宣戦布告を間近に控えたFクラス。

大貴、雄二、明久、修兵、小山。

様々な思惑が絡み合い、事態は急展開を迎える。

お楽しみに！

第8部開始 第101話 人間とは慣れる生き物だ

あの恐怖の闇鍋から3日たった平日の早朝。短針が5を指している目覚まし時計が鳴った。平日の朝は何故こんなに眠いのだろう。特に月曜日となると、布団から這い出る行為すら億劫だ。しかしそれでも起きなければいけない。けたたましく鳴る目覚ましを止め、布団の温もりに未練を感じながらも起きる。

まだ半分寝ている脳細胞を覚醒に持っていく為に洗面所に向かって頭から水を被る。

さすがにこの季節になると少し冷たい。

固まった関節をバキバキと鳴らしながら稽古着に着替えて、木刀と雑巾、水の入ったバケツを携えて道場に向かった。

一礼して道場に入る。この張りつめた空気はオレは割と好きだ。道場の掃除を終わらせ、木刀を持つ。

まずは基本の正眼の構えから。

大きく振りあげて一旦止める。

運足、重心移動、体さばき、理合、呼吸、刀法全てを掌握して切っ先に意識を集中させる。そして頭の中で刀身を滑らせるイメージを固めて、一気に振り下ろした。

鋭く、そして静かで澄んだ風切音が道場内に鳴り響いた。

「よし、バッチシ！」

自分の振るった一太刀に納得いき、自然に笑みが浮かんだ。

.....

「ジジイ、朝飯が出来た　　ッ!？」

そこまで言いかけて大貴の表情が凍った。大貴の祖父・烏丸修介が廊下で倒れていたのだ。

大貴は急いで修介に駆け寄って体を抱き起した。

「オイ、ジジイ!　しっかりしろ!　大丈夫か!？」

「……………ヒ、ヒロ」

「待ってる今救急車を　!」

「不覚じゃった。お主を嵌めようとしていたトラップが暴発して

」

「いつそ死ね!」

大貴のチョップを修介は白刃取りの要領で受け止めると、修介はすぐさま立ち上がり何事もなかったかのように朝食が用意してある居間へと向かった。大貴はその小さな背中を見て思う。

(細く、ちよつとした事で折れてしまいそうな体だった)

何気なく自分の手を見た。まだ微かに手が震えていた。

大貴は祖父に対する態度は他の人間に比べるとぞんざいだが、本心では彼に多大な恩義を感じ慕っている。その修介が倒れていたのだ。うるたえない筈がない。

ホッと安心して息を吐いた。

(いつからだろう……。ジイサンに確実な“老い”を感じるようになったのは…………)

普段はあまり考えないようにしているが、修介はいつ何があっても
おかしくなくらいの高齢なのだ。そして　　いつかは自分と別れ
る時が　　……。

「ヒロ〜！ さっさと味噌汁をよそわんかあ！」

「……………、へいへい。今行くよ」

（まあ、自分そんな事にはならはねえか。殺しても死ななそうなく
らいピンピンしてるし）

何処か現実味に欠ける未来予想図を考えるのをやめて、大貴は居間
に向かった。

……………

大貴SIDE

朝の一騒動に肝が冷えたが、気を取り直して学校に向かった。
とりあえずジジイの体調をチェックをしていたら遅刻ギリギリにな
ってしまった。

慌てて校門をくぐり、教室まで走り、ドアを勢いよく開ける。

扉を開けるとそこは　　。

「　　これより異端者・吉井明久の審問を行う」

異端審問会の裁判所だった。手足を縛られた明久が畳の上に転
がされていた。

うん。いつも通りの光景だ。オレも凶太くなったモンだ。最初の頃

はこの光景を見る度に慌てふためいていたが、今はこの光景を日常の延長線上として受け入れている。

これは成長、なんだろうか……？ それとも常識的感覚がマヒしてしまっているんだろうか？ ……恐らく後者だろうと思う……。

「吉井明久。何か言い残す事はあるか？」

「途中であって一緒に登校しただけなんだ！ 無実 と、まではいかなくても減刑を要求する！」

明久が須川にそう言い、しばらく異端審問会会長・須川亮は思索する。

オレはその騒ぎを脇目に秀吉が湯呑に入れてくれた緑茶を啜り一言。

「……………茶が、美味しい」

『では、会員十名による往復ハイキックで手を打とう』

『ちょ、ちょっと待ってよ！ 刑が重すぎるよ！ それにその程度の事で重罪なら皆だつて同じ様な事が起こつたらどうするのさ！？』

『『『む……………ッ！』』』

明久の自己弁護により処刑準備を始めていたFFF団の動きが止まった。

明久が指摘した自分達にも起こりえる可能性というのを考えているのだろう。

『会長。被告の言にも一理あるかと思えます』

『我々も鬼ではないのですからこの程度であれば看過してもよろしいかと』

『一緒に登校くらいの幸運なら我々にも訪れるかもしれせんし』

しかし敢えて言わせて貰おう。ねえよ。FFF団を解散させない限り天地が引っくり返ってもねえよ。夏休み前に『愛の話(合コン)』のセッティングをしたんだが、そりゃもう酷いモンだった。自己紹介から先に中々進まない。少しでも会話が弾もうものなら寄ってたかってソイツをボコる始末。そんな状況下でお前らに幸運が訪れるはずがねえだろ。

あの後、オレの方に合コンに行つた女の子からのお前らの行動に対する苦情がドツと寄せられたんだぞ。そのメールが優子に見つかつて浮気していると勘違いされてボコられるし……。散々だった……。

『それに朝のストーキング行為が処罰されるなら、私は毎日刑を受けなくてはならなくてはならないじゃないですか』

今の声は横溝か。そう言えば最近優子が通学途中に誰かの視線を感じるって言つてたっけ。

後でガチでブツ殺しておくか。

茶を啜りながら横溝の死体の処理の方法を考える。死体を樹海に埋めてしまうのも有効だが、流石に富士の麓まで死体を運ぶとなると多数の人間に目撃される恐れがある。殺るからには完全犯罪にしなければならぬ。

何より厄介なのは埋めても骨が残る事だが、生石灰で処理するのがベストだろうか？

「ならば今回は特別に会長によるデコピンという事で」

「待つてください！ 明久君は悪くないんです！ 私が、私が無理と一緒にいきたいってお願いしたんですっ！」

『会員二十名によるジャーマンスープレックスリレーだ！』

『『異議なし！』』』

グツナイ明久。先に行つて極楽ライフを楽しんでいてくれ。オレも

80年後位に多分行く。

「ひ、姫路さん！？ 気持ちは有り難いけど、今はそのフォローは逆効果で」

「ですから明久君のシャツの襟元を直してあげたりとか、歩いていたら手を触れ合ったりとかも、全部私が明久君に触れていたいと思つてやった事で、明久君が悪い訳じゃ」

『畳をどかせ。床に直接いくぞ！』

『画鋏の配置。終わりました』

『スコップの準備も万全です』

「皆落ち着いてよ！ この程度で僕を処刑したら、雄二とヒロはどうなるのさ！？ 毎日霧島さん、木下さんと一緒に登校してるじゃないか！」

『そうか。ならば坂本雄二と烏丸大貴も処刑しよう』

「……盛り上げてるところ済まないが、最近優子が毎朝登校してくるときに纏わり付くような妙な視線を感じると言っている」

『『『……ッ！？（ビクウ）』』』

静かな殺意をこめて言つと心当たりがあるのか、肩を震わせ固まった。
わかりやすい反応どうも。

「心当たりのある奴は前に出る。今なら小烏丸10往復の刑で許してやるぞ」

『『『横溝だ！』』』

『ちよ …！？ お前ら！』

「横溝くん。何か言い残す事はあるかな？」

『ま、待て烏丸！ ちよつと落ち着いて話し合おうじゃないか！』

「そつだな。頭冷やす為にOHANASIしようか」

『ぎゃあああああああああああああああああああああああああ

「……………」

「よし。害虫駆除終わり」

『『『……………』』』

『と、とりあえず坂本雄二の処刑だな。うん』

『そ、そうだな』

『よし。張り切っていつちやうぞー』

「うーっす。ふああ……………。ねみい……………」

教室のドアが開き雄二が欠伸びながら入ってきた。

「ん？ なんだ明久。また異端審問にかけられているのか？ 朝っぱらから大変だな。って、おいお前ら。何で俺の背後に回って腕をまわしてくるんだ？」

次の瞬間、雄二の体が綺麗な弧を描くように宙を舞い、床に叩きつけられた。

その様子を安全地帯から眺めながら茶を一口啜る。

「うん。茶が美味しい」

雄二の体が17回叩きつけられたところで西村先生が入ってきて騒ぎは終息。SHR始まった。

……………

「クソ、朝っぱらからヒデエ目にあつたぜ」

4時間目が終わり昼休み。いつものメンツが集まりそれぞれ昼飯を広げた。

「相変わらずと言えば相変わらずなんじゃが、心臓に悪いぞい」

「……………他人の幸せは毒の味。それが異端審問会の習わし」
「嫉妬して人を襲う前に自分を磨く方が健全だと思っただが」

「あれ？ そういえばムッツリーニは今朝処刑側に回って無かったの？」

「……………ちょっと調べ物をしていた」

「友人間で処刑側と被告側と別れること事態がおかしいと思うのじやが」

「そう？ 昨日の敵は今日の友っていうじゃない？」

「お主は敵味方の入れ替わりが激しすぎるのじゃ」

「アンタ達っていつも似たような事してるわよね」

「二年になったばかりの頃はもう少し平和なクラスだったと思いましたけど……………」

その点関しては同感だ。近くの卓袱台を移動させて弁当を置き、包みを広げた。

「あれ？ アキも今日お弁当？」

「うん。材料が余っちゃって」

「んじゃ、いつものいくか。最初はグー。ジャンケン」

「………ほい」「………」

ムッツリーニがパー。他が皆チヨキ。

「……………負けた」

「俺は烏龍茶」

「ワシは緑茶じゃ」

「僕はレモンスカッシュね」

「イチゴ牛乳」

「ウチはミルクティーで」

「すみません。私はストレートティーをお願いします」

「……………行ってくる」

ムツツリーニは百円玉を受け取ると、購買へと向かって行った。

「お主がじゃんけんで負けたところを見た事がないんじゃないか」

「オレはくじ引きで勝った事がないんだが……………」

「むう。ジャンケン」

「「ほい」」

オレグー。秀吉チヨキ。

「パーとチヨキは出す瞬間に手が開きかけるんだよ。それを見極め

て手を出してやればジャンケン」

「「ホイ」」

オレチヨキ。秀吉パー。

「簡単に勝てる」

「むう……………」

「やんのかコラアアアア!!」

「その言葉をそっくり返すわポケエエエ!!」

まーた明久と雄二の喧嘩か。まったく仲が良いのか、悪いのか。どうやら弁当のおかずの交換で揉めているらしい。

「お主らは小学生か……………」

「いや、違うんだよ。僕は大人んだけど、雄二がゲスだから」

「コイツと一緒にしないでくれ。小学生並なのはコイツの脳味噌だ

けだからな」

「……………ッ！！（ガンのくれあい）」

「そうやって喧嘩してる時点で同レベルだって事に気付け」

「まったくしょうがないのう」

そう言つて秀吉は明久、雄二、オレ、そして自分の弁当箱から一品ずつおかずをトレードした。

「ほれ、これでいいじゃろ」

「仕方ない、秀吉に免じてここは許してあげるよ」

「それはこっちのセリフだ」

そう言いつつも明久と雄二は矛を収めた。まあ、腹が減つたから弁当を食う事を優先たんだろうが。

「お主らは自前の弁当だけで我慢出来んのか？」

「そりゃ誰かに作ってもらつたのならそれでいいんだけどな」

「自分で作つてると意外性が無くて寂しいんだよね」

「そんなモンか？」

「「そんなものだ（よ）」」

やっぱりこいつ等思考回路が似たり寄つたりだ。

「ならば素直に交換したらいいじゃろうに……………」

「そんな選択肢は最初から存在しねえ！」

「何故ならそれじゃあ量が増えないから！」

「秀吉、男子高校生の脳味噌の割合は女・メシがほとんどを占めているんだ」

「う、うむ……………」

「じゃあ瑞希。今日はウチらも交換しない？」

「えっと……じゃあちよつとだけ……」

そう言つて姫路は島田のおかずと交換した。

「へえ〜。瑞希、今日は珍しいおかずね。これは鮪まぐろの 生姜焼き
?」

「ですね」

「んあ? 鮪のしょうが焼きだと?」

「ゴフアッ」

明久が嘔き出した。弁当箱の中身を見る。鮪の生姜焼きがあつた。

「んん〜?」

「ぐ、偶然だね姫路さんっ! さては姫路さんのお母さんも昨日の
簡単レシピ を見てたのかな!」

「え? 忘れちゃったんですか明久君。今日のお弁当は明久君が作
つてーモゴモゴ」

「姫路さあーん!? ちょっと向こうで僕とお話しようねーっ!」

明久はそう言つて姫路を引きずつて向こうへ行く。その後しばらく
2人でコソコソ何か話した後戻つて来た。……………怪しい。

「なんだ明久。姫路の弁当を作つてやったのか?」

「ああ、いや。それは、その…………」

「何を焦つてんだよ。この前福引きで当たった 海の幸セットの
処分を手伝つてもらつたつてただけだろ?」

「あれは相当な量じゃつたからな」

んん〜? 何やら壮絶な方向に勘違いしているようだけど、本当
にそうなんだろうか?

（材料が余ってるならお礼に何か作りますって言われる前に先手を打ったんだろ？ なかなか頭が回るじゃねえか明久）

（見直したぞい）

確かに姫路の言いそうなことだけど……なあんか引つ掛かるなあ…

…。

それだったら焦って態々隠そうとする必要ないじゃねえか？

「そうなんだよね。この前鍋をやった時はほとんど減らなかつたし」

「あの時は色々あつたからな」

「やめろ。頼むから思い出させるな」

あの時は辛さのあまり本気で舌がイカれるかと思つた。あまり思い出したくない記憶だ。第二のトラウマと言つてもいいかもしれな

「ッ！」

「どうしたのじゃ、ヒロ？」

「いや、客が来たみたいだ」

「客？」

「………ただいま」

「おかえり。それと ようこそFクラスへ。小山友香サン」

「お邪魔するわ」

ムツリーニに連れられて教室に入って来たのはCクラス代表・小山友香だった。

「………相談を受けていた」

「え？ どうして？」

「………Fクラスの試召戦争の予定を聞きたいらしい」

「僕らのクラスの予定？」

「メンテナンスも終わったみたいだし、明後日の朝にはついに試召戦争が解禁されるでしょう？ そのときにFクラスはどう動くのかを教えてもらいたいものよ」

「随分と慎重なんだな」

「それはそうでしょう？ だってFクラスは一学期にあそこまで学年全体を引っ掻き回した、言わば台風の目なんだもの。警戒して然るべきだと思わない？」

「そりゃ光栄な評価だが いいのか？ 折角二学期になって設備がリセットされたっていうのに、いきなり試召戦争なんか考えて」

確かルールブックには『戦争に負けて設備が落とされても学期が変われば設備は元に戻る』という事らしい。つまり学期末は設備ダウンというリスクを負う事なくに試召戦争を仕掛ける事の出来る期間という事になる。

「そう言えばCクラスは以前の試召戦争でAクラスに負けてDクラスの設備に落とされておつたの」

「それが二学期になって元のCクラス設備に戻っているってことですよね」

「試召戦争を考えても何も、別に私は自分たちから戦争を始める、とは言ってないわよ？ ただ、また中心になるであろうFクラスの動きが知りたいだけで」

「回りくどい言い方だな。要するに、こっちが情報を提供しないのなら、そっちも何も教えるつもりはないってことだろ？」

「まあ、そういう言い方もできるかもね」

そう言って小山は不敵に笑う。情報交換、か……。悪くない話だと思っ。

事前に相手の動きを知っていれば無駄な衝突も避けられるし、今後

の方針も定めやすくなる。

「そういうことなら、最初から雄二のところに聞きにきたらいいのに」

「あら。だって、坂本君が相手だところやっ取引になっちゃうでしょう？ こっちが情報を提供しないで済むのなら、それに越したことはないじゃない」

なるほど。道理だ。オレも小山の立場なら自分達の情報を洩らさずに相手を丸裸にする事を考える。

「んで、どうすの雄二？」

「いいだろう。その取引、乗ってやる」

「そう。それは助かるわ」

互いに利のある話だ。断る理由はない。あとはどれだけこちらの手札を見せずに相手の情報を暴くかの勝負だ。

感覚を研ぎ澄まし、相手の一挙手一頭目を見逃さず、五感の全てを掌握する。

無想。

「言うのは俺たちが目標としているクラスだけでいいのか？」

「それだけじゃダメ。攻め込む時期も教えてもらわないとね」

「Aクラスには、試召戦争解禁から一週間ー遅くとも二週間以内には攻め込む予定だ」

「……ふうん……？ なるほどね……」

明久が何か言いたそうにしていたが、肩に手を置いてそれを制した。時間を置く理由は分からないが、雄二の事だ。何か理由があるに違いない。下手について相手に余計な情報まで与える事はない。

そっちはどうなんだ。Aクラスを目指すというのなら、俺たちとの戦いになるが」

「私たちはそこまで高望みしてないわ。ただ、Bクラスには挑んでみたいけどね。あなたたちと同じように、解禁から一、二週間くらいで」

「……………」

「……………」

小山の発言から嘘は感じられない。言っている事は本当か。

「でも、いいの小山さん？ Bクラス代表の根本君って、確か小山さんの彼氏だったと」

「それ以上言ったら殺すわよ」

本物の殺意が明久に向けられた。どうやら地雷を踏んだようだ。

「私はね、頭の良い男が好きなの。お勉強ができる人って意味じゃなくてね」

「よく言っぜ。根本なんか、卑怯なだけの小物だったろうが」

「卑怯な手段って、勝つためには合理的で、有効だと思わない？

私はそういうの、結構好きなんだけど。……あの男は、もう御免だけどね。ねえ、そう思わない烏丸君？」

「さあ？ どうだろうな」

その発言の意図が気になる。オレは確かに小細工は得意だが、卑怯ではないぞ多分。

得意手段の脅迫も情報を引き出す時にしか使わねえし、最低限の筋は通しているつもりだ。

根本と一緒にされるのは正直心外だ。

『俺ってさ、じゃんけんは後出し以外したことないんだぜ』

『何を言ってるんだ、それでもいつも負けていただろ？ お前は卑怯者なんかじゃないさ。それに引き替え俺なんて、掃除当番の時はいつも腹痛のフリをしていたんだぜ？』

『いやいや。俺の方が卑怯者さ』

『そんなことはない。俺の方が卑怯者さ』

『………実は俺、同い年の従兄弟がいてさ。彼女が欲しいってそいつに相談したら、この前クラスメイトを紹介してくれたんだ』

『この卑怯者っ！ 殺してやる！』

『………そいつ、男子校に通っているはずなのにな………』

『俺のジューズ、やるよ』

『………今日の帰り、たこやき奢ってやるよ』

『………ありがとう………』

小山の発言を聞き、Fクラスの連中は揃って卑怯アピールを始めた。お前ら、女なら誰でもいいのか？ そんなだからダメなんだよ。

そうなんですか。小山さんって、頭の良い人が好きだったんですね』

『ええ、そうよ姫路さん』

『そう言えば……坂本君って頭良かったわよね？』

『………(ドスツドスツドスツ)』

各自自分の卓袱台にカッターナイフを突き立てる。殺意が一齐に雄二に向いた。

それを見て小山はほんの僅かだが笑みを深くした。まるで自分の予想通りの反応をしたFクラスを嘲笑うように。

『その発言は何かの布石か？』

「……何のことかしら？」

オレの問いに小山は腕を組み余裕の笑みを浮かべた。

「それじゃ、教えてくれてどうもありがとう。お互い目標の相手も違ってみただし、うまくやりましょ」

最後にそう結び小山はFクラスから出て行った。

「警戒するべき敵が1つ減ったね」

「いや。むしろ逆だ」

「え？」

「雄二気付いてるか？」

「ああ。小山の奴何か企んでやがる」

「ねえ、どういう事？」

「最後の質問をした時に小山は腕を組んだ。これは心理学では『人と自分との間に壁を作る』という事を表している。勿論それだけで小山が何かを企んでいると決めつけるのは早計だが、小山の発言からは嘘は感じられなかったが、ところどころに微妙な違和感を感じた」

「違和感？　どんな？」

「あくまで感覚的な話だから、理屈で説明するのは難しいな。何にしても同盟を結んだ訳じゃない以上、他のクラスは味方ではない。」

「警戒しておくにこした事はない」

「雄二、Cクラス対策は？」

「大丈夫だ。多少不利に追い込まれても勝ちに持っていける自信はある」

「油断するなよ。気を抜いて足元を掬われるのと、頭に血が上ると他に目がいかなくなるのはお前の悪い癖だ」

「わかっている。今日から情報統制を徹底する。うちのクラスなら

女子の色仕掛けでポロツと機密を洩らしちまいそうだからな」

「いよいよ試召戦争に向けて動き出すのじゃな。他のクラスも準備を始めるようじゃし」

「なんだかワクワクしてきたね」

「オレは本格的に参戦するのは初めてだから少し不安だけどな」

この時の為に召喚獣の操作技術の向上させ、学力を維持し、兵法を学び準備を整えてきた。

ここから先はオレの知らない世界だ。どれだけやれるかわからないが、出来る事を精一杯やるとしますかね！

第102話 新装備！ ……マジで？

大貴SIDE

「よろしく、宗くん（パキユ）」

「頼むぜ宗一（ペキユ）」

「教師をファーストネームで呼ぶな」

「手の骨があああああつ！！！！」

「バカ……」

呆れて掌で顔を覆った。西村先生にそんな風に頼んだらそうなる事は目に見えているだろうに……。

何故オレ達が西村先生に頼みごとをしているかという話は長くないんだが……召喚獣の新装備を確認するためだ。

よしよし。オレのポケに『短っ!!』っていつツッコミが何処かで聞こえたような気がした。ナイスツッコミ。

夏休み前の召喚システムの調整の際、装備のリセットが実行された。その装備を確認する為西村先生の召喚許可を貰いたかったのだが。

『えっとすみませんが、召喚許可『ダメだ』をお願いできま『不許可だ』せんか?』却下だ『試召戦争』断る』も解禁されるし、『諦める』新しい『無理言うな』召喚獣を確認 って断りすぎじゃないですか!? 1つをお願いを言いきる前に6回もダメだしされたのは初めてですよチクシヨウ!』

『貴様がこちらの話を聞かないからだろうが。前から言っているだろう。お前の召喚獣は簡単に喚び出してはいけないものだ』

『それは、まあ……。けど、大丈夫ですよ先生。今まで僕が問題を起こした事がありますか?』

『ありまくりだろ。オレの記憶が間違ってなけりゃオレとお前と雄二の書いた反省文の枚数は150超えるぞ』

『きつとヒロの記憶違いか、うち149枚は雄二とヒロが書いたものに違いないよ』

『いや、明久53枚、雄二54枚、オレ51枚だ』

『くだらない事覚えてるなよ!!』

『文集が作れますね』

『アンタら学校で何やってるのよ……?』

『『『『気にするな』』』』

『大体お前たちが俺を先生と呼ぶと大抵碌な事にならない。また何か企んでいるんじゃないのか?』

ここで何を考えているのか明久と雄二が西村先生の事を『宗くん』『宗一』とフランクすぎる呼び方をした為、さっきみたいな感じにな

った。

「西村先生ダメですか？　ウチらは別に悪いことに使おうと思って
いるわけじゃなくて装備を確認したいだけなんです」

「美波ちゃんの言う通りです。悪戯なんてしませんから」

「……まあ……、装備を確認したいという気持ちも、わからんでも
ないが……」

「たのむよてつつん　（パキユ）」

「宜しくててっちゃん　（ペキユ）」

「~~~~~ツ！」

無事だった左手まで握り潰され懲りる事を知らないバカ二人は悶絶
していた。

「西村先生お願いしますよ。放っておいても、どうせ雄二の腕輪で
フィールド作ってしまうんですから、目の届くところにいるところ
でやって目を光らせて置く方が効率的だと思いませんか？」

「ハア、まったくやれやれだ。やるのならさっさとしろ。俺も忙し
いのだからな」

「アザーツス」

話の分かる先生で良かった。これでダメならやりやすい先生を捕ま
えて色々説得しなければならなくなるところだった。なるべくなら
恨みを買つような行動はとりたくない。

「どんな風が変わってるんだろうな」

「ちよつと楽しみですね」

「ウチは前みたいにぬりかべなんか出てこないことを祈るわ……」

「安心しろ。出てきたら腹を抱えて大笑いしてやるよ」

「そのどこが安心できるのよ!？」

「んじゃ、喚んでみつか。せーの」
「「「^{サモン}試獣召喚っ！」「」

床にお馴染みの幾何学模様が浮かび上がりいつも通りデフォルメされた召喚獣が投影された。

「わぁ……綺麗な鎧……なんだか凛々しくなった気がします」

「ランスに鎧ってことは、ウチは騎士ってことかしら。良かった……。盾代わりにまな板とかじゃなくて、本当に良かった……！」

「ほら、見てよ雄二。学ランの裏地に龍が描いてあるよ」

「見るよ明久。俺は虎だぜ」

「刀に羽織り……。新撰組、といった体じゃな。強そうじゃ」

「……………上忍にレベルアップというところ」

「うわ……。全身真黒！ 黒スーツに黒ロングコート、十文字槍、刀に……………」

お？ 中には隠し小太刀が2本も！ 統一性なさすぎだろオイ！

「「つて、ちよつと待てiiiiiiii！」」

「なんだ吉井、坂本。うるさいぞ」

「うるさくもなりますよ！ 明らかに不公平じゃないですかこんなの！」

「そうか？」

「そうですね！ だって、姫路さんはどう変わったか見てくださいよ！」

「えっと、私は前より鎧がしっかりして、武器も長くて大きくなりましたね」

「美波は？」

「ウチは軍服から騎士鎧に、サーベルからランスに変わったわね」

「秀吉は？」

「薙刀使いから新撰組になったようじゃな」

「ムッツリーニ」

「……………下忍から上忍に出世した」

「僕と雄二」

「学ランの裏地に刺繍が入ったな」

「おかしいだろ！」

「極めつけはヒロ！　なんで武装が2つも有るんだよ！？」

実はコートの下に隠し小太刀が2本あるんだ、とは言わなかった。

こういう武器は隠してナンボだと思っし、言ったら言ったでまた明久と雄二がうるさい。

「言つとくが明久、オレの召喚獣武器が増えた代わりに防具らしい防具なんざ1つもついてないんだぞ？」

オレの召喚獣は以前あった防具が全部なくなり防御力が紙同然になつてしまつていた。

「あ、本当だ。なんで？」

「多分その分が武装にいったんだろ？」

「どうして僕と雄二の装備が前とほとんど変わらないのさ！？」

システムに嫌われてんじゃねえの？　もしくはバアサンの差し金か？

「いや。待て明久。俺のはお前と違って武器も変わっている」

「え？　そうなの？」

「メリケンサックが棒になった」

「些細な変化だ！」

「いや、その認識は間違っているぞ明久。剣道三倍段と違ってだな、無手の奴が得物を持っている奴と互角に渡り合うためには相手の三

倍の段が必要だと言われて」

「そんな言葉のマジックにはもう騙されない！」

「さあ、もう満足しただろう。許可はここまでだ」

そう言つて西村先生は召喚許可を取り下げた。投影されていた召喚獣が陽炎のように消えていく。明久と雄二が納得いかなさそうな顔をしていたが、そんな事はお構いなした。

「もうすぐ昼休みも終わる。遊んでないで次の授業の準備をしておくことだ。」

そう言つて西村先生は教室を後にした。

「アキも坂本も、成長してないってことよね」

「島田。このバカたちと一緒にするな」

「そうだよ美波。雄二や美波の胸と違って、僕は成長して（ポキユッ）」

「何か、言つたかしら？」

「なんでもありません」

「確かに、明久は成長しておらんのか……」

「雉も鳴かずに撃たれまいに……」

島田の地雷を踏んだ明久は肘関節を握り潰されて悶絶していた。

.....

「なんか、こうやって平和に帰れる日って久しぶりな感じがするな」

「言われてみればそうだな」

「ここのところはずっと補習だらけだったからね」

この学校は試召戦争によって潰れた授業の補完や点数補充の為、補習が多くなる傾向にある。特にFクラスはその他にも脱走やトラブルで補習が補習にならない事が多いからテenko盛りだ。だからこそこんなのにのんびりできる放課後は貴重なのだ。

「アンタたちは脱走しようとするから、他の人よりも更に補習時間が多いんですよ」

「……はて？ 何のことやら」「」

「……………のんびりした放課後ありがたい」

「一日が長くなって得した気分ですよね」

「折角だし、どっか寄って帰るか？」

「ううん。今日はやめとく。ちよつとスーパーに寄って夕食の買い物をしていきたいからね」

「買い物？ あの海の幸セットがまだ余ってるんじゃないのか？」

「まだ少しあるにはあるけど、今日はお肉な気分なんだ。今日安いし」

「そうか。じゃあ俺も今夜は肉にすつかな」

雪乃師匠の天然兵器防止の為、今日も雄二が食事を作るであろう雄二がそう呟いた。

「ちなみに明久。お前は何を作る気なんだ？」

「ん〜、そうだなあ……………。姫路さん、今日は何が食べたい？」

「え？ 私ですか？」

「……………」

なんだか朝抱いた『まさか』にだんだん真実味が出てくる。いや、そんなまさか……………とは思うけど……………。

いやいや、玲さんがいるし、そんな命知らずな事は　　ってちよつ

と待てよ？ あの時玲さんは『姉さんの見ている前ならある程度許容しようかと思えます』って……。
ってことは え〜〜〜〜？ いやいや。それは無理がありすぎるだろ。まだ高校生だろ？ けど、そうだと考えると明久と姫路の奇行や違和感とかに辻褄が合うし……。
うわ〜……。気付かなきゃ良かったあ……。

「私は特に好き嫌いがないので何でも……。それより、明久君は何が食べたいですか？」

「いやいやいや！ ご飯を作るのは僕の仕事だからね！ そんなこと気にしないで大丈夫だから！」

「「「……………」」」

おいおいおいおい！ 迂闊すぎるぞバカ！ 最近何か知らねえがFF団がいつもより殺気立ってる中で気付かれそうな会話を呑気にしゃがって！ 死にたいのかお前！？

「おい、明久」

「何かな雄二？」

「お前、何で姫路と夕食の相談をしているんだ？」

「「え？」」

いきなり確信突いたアアアツ！！

「そそそそれはホラ、ねえ姫路さん！」

「は、はいっ！ これはその、えっと、明久君は私の好みを参考に、自分のお家の夕飯を作ろうとしただけで、別に私に作ってくれるわけじゃありませんっ」

「「「……………」」」

その言い訳は苦しい！ 苦しすぎるぞ2人とも！

「えっとーじゃあ、僕はスーパーに寄って帰るからこの辺でっ！」
「わ、私もちよっと用事があるので失礼しますっ！」

無言の圧力に耐え切れなくなった明久と姫路は逃げるように教室から飛び出していった。

雄二達に疑問の棘を残したまま……。

「どうしたのじゃヒロ？ 先ほどから顔色が悪いぞい。何処か具合でも悪いのかの？」

「い、いや。大丈夫。ちよっと胃が痛いだけ」

.....

NO SIDE

「明久君知っていますか？」

「ん？ 何を？」

「『秋ナスは嫁に食わずな』って諺ことわざがあるんですけど……」

明久はスーパーで安くなっていたナスを買い、サッカー台の上で籠から袋に詰め替えていた。

「ああ。それは聞いたことがあるかも」

明久は固く閉じてしまっている記憶の引き出しから先ほどの諺の語源『姑が秋ナスは美味しいから嫁に食わずには勿体ない』という言葉葉を引っ張りだした。

「あんなの気にする事ないよ。古臭い考えなんだし」

「そ、そうですね。私が頑張って元気な赤ちゃんを産めばいいですもんねっ」

明久は瑞希の言っている事の意味が分からず首を捻っていると背後から補足が入った。

「『ナスには種子が少ないので子種が少なくなるから嫁には食わずな』という意味があつてだな」

「へえ、そうなんだ。雄二は物知りなんだね」

「お前が物を知らな過ぎるだけだがな」

「そっかそっか。そう言う意味も有ったんだ　　つてちよつと

待てい！　ゆ、雄二！？　キサマ、なぜここにいる！？」

「さ、坂本君っ！？　いつの間に来たんですか！？」

「いや。俺も普通に夕飯の買い物に来たんだが……。一体これほどういう事だ？」

「な、なにが？　僕と姫路さんはついさつき店の前で偶然会っただけで」

「そうですね坂本君っ。私たちは偶然一緒に買い物をしているだけなんです」

「ほほう、そうか。示し合わせて夕飯の買い物か。それはまた、随分と仲の良いことだな」

「いや、違つって！」

必死に否定するが雄二は追及の手を緩めない。元々明久と瑞希は嘘をつくのが上手くないのだ。

「それにしても一緒に買い物って話の割には随分拳動不審だな。隠してるのはそれだけじゃないって事か」

雄二のカマかけに瑞希はビクリと反応する。それを見て雄二は自分

の推理が当たりだったと確信した。雄二の探る様な視線に明久と瑞希は慌てた。必死に話題を逸らそうと、昨日のニュースの内容を思い起こす。

「そ、そう言えば、最近の世の中は色々起きてるよねっ」

「そ、そうですねっ。ニュースも盛りだくさんですよねっ」

「うんうんっ。ホント、空港でストが起きたりとかね！」

「アレは大変ですよね。空港が使えなくなっちゃって、日本に帰ってこられない人がたくさんいるそうですねっ」

しかしその話題のチョイスは拙かった。

「……………空港のスト……………一昨日の晩明久の家に残った姫路……………まさか……………！」

雄二は「謎はすべて解けた」というように目をカツと見開いた。そして明久に猛牛の如く勢いで詰め寄っていく。

「おい明久！ 正直に答えろ！ お前、まさかー」

「な、なにかな？」

「姫路と、一緒に暮らしていたりしないだろうな……………！」

雄二の結論を突き付けられ明久、瑞希の顔色が一気に青くなる。

「いいイイヤ、そんなわけあるわけないじゃないか！」

「そそそそうですね。そんなことありえないこともないこともないような気がしなくもないじゃないですか！」

2人して必死に悪あがきを試みるが、その様子は凶星を突かれて焦っている様にしか見えなかった。しつこい様だがこの2人は「嘘を

つく』という才能が完全に欠落しているのだ。

「て、テメエら……！　……！　よりによって、このタイミングでなんてことを……！　……なんてこった……！　最悪、最悪だぞ畜生……！」

自分の導きだした結論が真実であった事に頭を抱えていた。雄二のその不可解な行動にすぐさま殴りかかってくる、と思っていた明久は眼を丸くする。

「雄二、どうしたのさ？」

「どうもこうもあるか！　くそお……っ！　俺は、俺はなんてバカな話をしちまったんだ……！　あの時の自分と明久を殴り飛ばしてやりてえ……！」

「そういう時は出来れば殴るのは自分だけにしてくれないかな？」

「って、愚痴っついていても仕方ねえ。おい明久。この話はまだ誰にもバレていないよな？」

「う、うん。一応、雄二以外には誰にも」

「それは不幸中の幸いだ。バレそうになったら俺に言え。隠蔽に協力してやる」

「その代わり、絶対にバレるな。細心の注意を払って行動しろ。いいな？」

「そりゃ、できる限り頑張るけど」

「何又ルいこと言っつてやがる！　できる限りなんかじゃダメなんだ！　いいか明久。絶対に、絶対に誰にもバレるなよ……！」

「う、うん」

明久は雄二の鬼気迫る表情に気圧されながらも頷いた。

「バレたが最後、俺はお前を地獄に叩き落とさなくちゃ気が済まなくなる……！」

バレたら雄二の身に何が起るのさ、とは恐ろしくてとても聞けなかった。

「わかったよ雄二。何がなんでも秘密を守り通す事を約束するよ」

「俺だって報復攻撃なんて真似は極力したくないからな。誰にも見つからないうちにさっさと帰れ」

「了解。じゃあこれ、プレゼント」

そう言つて明久は袋の中に入っていたナスを自分の頼もしき共犯者に渡してスーパーから去つていった。大丈夫。きっとバレたりしない、と思ひながら。

「心配だが仕方ない……。バレない様に俺も最大限の協力を」

「……雄二」

「……は？」

「……『同じ学校で同棲している人がいたら私と一緒に住んでくれるっていう約束』覚えてる？」

「は……。はは、は……。翔子お前……。いつからそこに……。？」

「……最初から、ずっと。一緒に帰ってくれなかった雄二にお仕置きをするために、追いかけてきた」

「そ、そうか。それはそれは、すまなかつたな」

「ううん。それは今、どうでもいい」

「だよな。それじゃ」

「……うん」

「さらばだっ！」

「……逃がさない。絶対に」

「ちくしょおおおおおおおおっ！！ 明久あああっ！ テメエのせいだからなあああっ！！」

両目から血の涙を流しながら、明久への怨嗟の叫びを上げて、坂本

雄二は霧島翔子から逃げ出した。

.....

大貴SIDE

その日の夜。テレビをつけてさつき帰って来た静馬の食事を用意して前の居間に座る。

時計の短針は9と10の間を（やや10寄り）指しており、こんなに遅くまで遊んでいた静馬にお説教を終えたばかりだった。

『一昨日海外で起きた、国際空港の大規模なストについて、現地の中西記者がお送りします。中西さん。ストの様子はどうですか？』

『はい。こちら現地の中西です。一昨日勃発したスト騒ぎは、労働者側と経営者側の労働条件の見解に依然として大きな隔たりがあり、鎮静化の兆しは見られません。利用客の多くは周辺のホテルに滞在して空港の機能の回復を待つようですが、一部では満室で宿を取ることができず、空港で夜を明かしている人の姿も見られるなど』

「まったく、子供がこんな夜遅くまで遊んでるんじゃない。いくら連絡がしたって言っても心配するだろうが」

「ごめんなさい……」

近頃は物騒な世の中になって『知らない人について言っちゃいけません』とか人を信じる事より疑う事を教えなければいけない傾向にある。その事に抵抗を覚える親もいるらしいが、オレはそういった事に抵抗がない。（褒められた考え方ではない事は自覚しているが）幼いころから信頼できる人間なんてほんの一握りだったし、疑う事を教える事を躊躇した結果静馬に危険が及んだりなんかしたらオレ

は耐えられない。

第一、根拠もなく人を信じる奴は根っからの善人か、よほどのお人好しだ。

「一体どこで遊んでたんだ？」

「吉井さんの家に葉月ちゃんと一緒に遊びに行ってたんだけどね」

驚きのあまり飲んでいた茶を嘔き出しそうになった。

「ちよつと待て静馬。明久の家に姫路はいなかったか？」

「え？ 姫路さん？ いたよ。遊びに来てたんじゃないかなあ」

「お前それ明久に『誰にも言っちゃダメだ』とか言われなかったか？」

「？ ううん。言われなかったよ」

あのバカ口止めもしてないのか！ 迂闊すぎるぞ！

「……………もしかして僕言っちゃいけない事言ったの？」

「あゝ、いや。大丈夫。けど、明日学校で葉月ちゃんに会ったら明久の家に姫路がいた事は誰にも言わないように口止めしときなさい」

「え？ どうして？」

「……………。もし、明久の家に姫路がいたって事が周りに洩れたら」

「洩れたら？」

「明久は死ぬ」

「ええ！？」

「わかったか？」

「う、うん。わかった。葉月ちゃんにも言っておくよ！」

葉月ちゃん経由から島田に情報が洩れないかどうかが心配だが、そ

の辺はもう明久の悪運に賭けるしかない。出来ればこの不安定な時期に同士討ちなんて事は避けたい。そうなってしまったら、オレの進むべき道は1つしかなくなってしまうのだから。

そう思つて湯呑に入っている冷めて温くなつてしまった茶を口に運んだ。

まあ、最悪の場合明久が死ぬだけだしな。

第102話 新装備！ ……マジで？（後書き）

試験終わりました！

結果が出るのはまだ少し先ですが、やっと肩の荷が下りたような感じがします。

あ、流れ星。再試になってませんよ に！ 単位落ちてませんよーに！

仕事の方がお盆休みなしなので、少し忙しいですがなるべく早く更新できるよつに頑張ります！

第103話 祭りの始まり

大貴SIDE

教室の入り口をくぐるとそこはオレにとって軽く地獄だった。

憤怒、悪意、憎悪。そう言ったモノが渦巻きながらも決して表に出そうとしないクラスメート達の欺瞞に満ちた空間。

こういつた雰囲気は育った環境上『人の悪意』に敏感なオレにはかなりキツイ。

それと同時に確信する。こりゃバレたな、と。

もし雄二達が今日動く気なら、オレは計画を前倒しにしなければならぬ。

悪いが明久。オレはお前を見捨てる。

この後間違いない、明久の処刑の為にFFF団が動くだろう。一度起きた騒ぎを手っ取り早く収束させる方法は目的を達成させてやる事だ。

明久を助ける事は騒ぎを長引かせる事になる。それはFクラス全体の利益を考えて旨くない。

「あ、秀吉おはよう」

「おす、秀吉」

「おはようじゃ明久、雄二。今朝は昨日と打って違ってえらく静かじゃな」

「そりゃ毎日あんな事ばかりだったら疲れちゃうよ。ね、雄二」

「ああ。まったくその通りだな」

「むづ……。しかし、この静けさは……嵐の前の静けさ、というも

のじゃろうか……」

これから辿るべき自らの運命を知る由もない友人に心の中で合掌した。

.....

「それではHRを終わる。余計な寄り道をせず帰るように」

西村先生はそれだけ言うと教室から出ていった。

DとE……まずはどっちから行くのが効率がいいか……？

.....

.....

まずはDクラスだな。そう決めるや否や、ケータイを開き平賀に『今後の試召戦争の事で話がある。悪いが、放課後少し時間を貰えるか？』とメールを送る。

その後、そのメールを編集して『今後の試召戦争の事で話がある。悪いが、部活が終わったら少し時間を貰えるか？』という文面に变えて中林に送信。ケータイを閉じてしまう。

「さて、ワシも部活に行くとするかの」

「ごめんなさい。私も職員室に呼ばれているので、先に帰っていただきます」

秀吉、姫路もそれぞれ自分の用事がある為、足早に教室を出ていく。そして
最期の刻は訪れた。

「それじゃあ帰ろうか雄二」

「ああ。少し待ってくれ。ムッツリーニ、大丈夫か？」

「……………周辺に障害になりそうな人物の気配はなし。問題ない」

雄二は眼を閉じ、ムツツリー二の言葉に満足そうに頷いた。そして凶悪な笑みを浮かべながら教壇に向かい、全員と向き合った。

「それでは皆、待たせてすまなかったな。祭りを始めよう」

『『『 YEAH! Let's Party!!!』』』

その掛け声と共に放たれる飛び道具　というより卓袱台。それを明久は遮二無二避けて　どうにかやり過ごした。素早く起き上がり絶望に染まる表情で雄二の方を見た。

「雄二！　これは一体どういう事さ!？」

「明久……！　今日という日が貴様の命日だ！　生まれてきた事地獄で後悔しやがれ！」

『朝坂本に聞いてから今まで、待ちに待ったぜ吉井い……!』

『放課後になつたからにはもう誰の邪魔も入らねえ。たつぷりと地獄見してやるぜ吉井明久あああつ!』

『姫路と同棲とは恐れ入ったぜ。テメエのその幸せ、完膚なきまでに破壊しつくしてやるうじやねえか!』

善良な？生徒から無法者集団FFF団へと変貌したクラスメイト達は雄二の統率の元、無駄のない連携で明久を取り囲む。教室中が殺意と悪意で一杯になり寒気が全身に駆け巡る。

「何故だ!?　何故裏切つたんだ雄二!?　あれほど約束したのに!」

「残念ながらアレは俺に利がってこそその協定だ。理が無くなって俺

に害を及ぼし始めた以上、テムエにや恨みしか残らねえ……！今更テムエを殺ったところで取り返しがつくとは思えねえが、そうしないと俺の気が晴れねえんだよ……！！」

雄二の目がヤバイ光を灯している。あの光には心当たりがある。

あれは 破滅の坂道を転がり落ちていく奴の眼だ。

一体何が雄二をあそこまで追い詰めた？

「皆落ち着くんだ！ そんな話は雄二の嘘だ！ 姫路さんが僕なんかの家と一緒に暮らしている訳ないじゃないか！ これは雄二の罠なんだ！」

明久は必死に無実を証明する為、FFF団に呼びかけた。

確かに明確な証拠が何1つなく、情報を知っているのが雄二1人だったら、『雄二の狂言では？』という惚け方は有効だ。しかし、2つ目の証拠が明久の逃げ場を塞ぐ。

「そうね。ちよつと待ってみんな」

「た、助けてくれるの美波!？」

「昨日、葉月がお世話になったでしょ。だから、そのお礼」

にこやかに明久に話しかける島田。明久はそれを見て「天の助け!」と言わんばかりに眼を輝かせた。

「アキ。昨日はどうもありがとうね。お陰で葉月が風邪をひかずにすんだわ」

「いやいや。その程度何ともないよ。葉月ちゃんは僕の友達でもあるんだから助けあうのは当然のことだよ」

「うっん。本当に助かったわ。そのおかげで」

「そのおかげで？」

「そのおかげで瑞希がアンタの家にいるって話が聞けたんだから……！」

ゾクウウウ！ というような擬音が合いそうな寒気が背中に走る。島田の放つ殺気に当てられ、ドツと冷たい汗が全身から噴き出した。

「助けてみんな！ 美波の瞳に光が灯ってないんだ！」

『ちよっ……！ こっち来んな吉井！ 巻き込まれるだろうが！』

『島田！ 殺るのは吉井だけだよな！？ 俺達は何もしてないもんな！？』

静馬。残念ながらお前の口止めは間に合わなかったようだ。

「寝ぼけた葉月が瑞希と玲さんを間違えたんだと思っただけど、坂本の話聞く限り間違いなさそうね。まったくアキつてば、ウチを怒らせるのが上手いんだから」

おいおい。お前と明久の関係は今ところ『友達』だろうが。それだったら明久が姫路と同棲していた事で怒るのはちよーつと違わないか？ 矛先がこっちに向くのが怖いから口には出さねえけど。

「た、助けてええええヒロオオオオオツ！ この連中僕を殺して海に沈めてしまうつもりだああああっ！！」

「雄二、程々にしておけよ。今はこんなバカ騒ぎをしているような状況じゃないんだからな」

「安心しろ！ 今日中に始末をつけてやる……！！」

「そうか。ならいい」

「見捨てる気満々！？」

明久の叫びを無視して教室から出ていく。

自分の危機感のない行動が招いた事だと思っし、FFF団が行動を起こした以上最早一刻の猶予もない。計画を前倒しにして先手を打たなければ。

『僕はまだ死ぬわけにはいかないんだああああああっ！』

『逃げたぞ！』

『追え！』

『慌てるな。あいつを追うのは5人程度でいい。残りメンバーは学校からの出口に先回りしろ。そのまま円状に徐々に包囲網を縮めていけば、袋の鼠だ。焦るなよお前ら』

『『了解！』『了解！』『了解！』』

『雄二……！この借りは必ず返してやるからなあああああああああああっ！』

.....

「よう。平賀待たせて悪かったな」

「.....」

「そう警戒しなさんな」

「それは無理だよ。Fクラスは色々と侮れないからね」

「ははっ。まあ、光栄な評価だけど手を組んだ人間は裏切らねえよオレは」

「.....」

平賀の眉間に深い皺が刻まれている。こちらを警戒しているのがよくわかる。ところでさっきから気になっていたんだが。

「なんで清水がここにいるんだ？」

「み、美春がいたらいけないのですか!？」

「そんなに顔真っ赤にするくらい怒るなよ。聞いたただけだろ」

「……実質的にDクラスの指揮権を握っているのは清水さんだからね」

「……………」

「……………」

「……平賀」

「……なんだい？」

「心中察する」

「……………うん」

どうしてこう……優子といい、姫路といい、島田といい、小山とい……い……。

この学校の女子は強いのかねえ……。

楓の様な清楚系の大人しい普通の子が懐かしい……。

「で、単刀直入に言うとな力を貸してほしい」

「へ？」

「オレ達はCクラスの試召戦争へのカウントダウンに入った」

「まさか……！ そんな情報は……！」

「事実さ。小山の発言によると、解禁から1、2週間空けてからBクラスに宣戦布告するらしい。Cクラスの最終目標はBクラス。

コイツは間違いない。けどな、その空き期間に他のクラスに喧嘩吹っ掛ける事も出来る」

「……………」

「そのターゲットはまだ不確定だがな。この情報は役に立ったかい？」

「あ、ああ」

Cクラスの標的は十中八九Fクラスだ、という事は伏せて置く。平賀の危機感を煽っておいた方が交渉もやりやすい。

「そこで、だな。FクラスとDクラスで不可侵条約を結んでほしい」
「不可侵条約!?!」

「ああ」

「……失礼な話を承知で言わせて貰うとFクラスと結んでも僕たちにメリットが少ないんじゃないかな？ 僕たちDクラスは春の試召戦争でFクラスに負けているけど、それは僕たちが油断していたからだ。言い訳がましいとは思うけどね。けど、次にFクラスと戦う事になった場合、今度は負けの経験から『油断』なんて事は絶対にしない。正面からぶつかれば点数で上回る僕たちの方が強いよ」

「………………。本当にそう思っているのか？」

「ッ！」

「春の試召戦争、その次の試召戦争。FクラスとDクラス。戦略ではオレ達Fクラスが、点数ではDクラスがそれぞれ圧倒していた。それが今までの均衡だった」

「それは………………。どういう意味かな？」

「ウチのクラスは数ある補習を経て急速に力をつけてきている。それに今までの試召戦争でオレは本格的に参戦してないんだぜ？」

「……………」

「それでも総合点数はDクラスに及ばないだろうが、圧倒されていた点数をつめられれば、後は雄二の戦略でひっくりかえせる。どうだ？ これでもFクラスは恐れるに足らないか？」

「……………」

「お互いがお互いのクラスに戦争を仕掛けない。これで眼の前の警戒すべき敵が一つ減る。結構いい話だと思うが？」

「……………」

平賀はオレの提案に顔を伏せてしばらく思索する。そして顔を上げて

「わかった。その同盟受け」
「無理ですわ」

平賀が了承しようとした途端、清水による横槍が入った。

「どうして？ Fクラスとの同盟は悪い話ではないと思うよ？」

「いえ。確かに対Fクラス対策としては良い話だと思います。しかし 単刀直入に申し上げますとDクラスの女子は以前の覗き騒ぎ以来Fクラスに反感を持っています。そのFクラスと同盟など結べば……代表への不満へと繋がりDクラスの士気の低下へと繋がります」

「……………」
「何もチームワークを必要とする連合軍を作ろうってわけじゃない。お互いがお互いを害しないっていう契約を結ぶだけだ」

「それでも、『Fクラスと同盟を結ぶ』というだけで代表への不満の種を撒く為には十分すぎますわ」

「それがクラス全体への利潤と考えれば我慢できねえか？」

「理性と感情は別物です。『目的の為』と望まない事を割り切れる人など限られていますわ」

「……………」
「なるほど。納得いった」

「すまない」

「いや、清水の言う事も尤もだ。そこまで考えが回っていなかったしな」

「……………」
「それじゃあ、もし気が変わったらオレの携帯にメールしてくれ。じゃあな」

そう言って平賀達に背を向けてその場を立ち去ろうとすると、平賀に呼び止められた。

「烏丸君、同盟は無理だけど君にはCクラスの情報1つ分の借りが
ある。もし僕らの助けが必要な時は言ってくれ。1度だけ力を貸す
よ」

「み、美春もあなたがどうしても頼むなら力を貸して差し上げま
しょう」

「……サンキユ。どうしようもなった時は頼む」

.....

NO SIDE

「くっ！ ここにも見張りが……！」

追ってきた5人を何とか撒いて、1階に下りたものの周囲のよく見
渡せる場所にFクラスの生徒の姿があった。このままじゃ外に出ら
れない。そう判断した明久は二階に戻り、思い切って飛び降りるか
？ と、思案していた。窓を覗き込み、着地地点を見てみた。

『そっちはどうだ？ いたか？』

『ああ。さっきチラツと姿が見えた。確実に追い詰めているぞ』

『OK。それじゃあこのまま坂本の作戦を続行するぞ』

そこにはFクラスの追っ手の姿があった。

「まずい。行動が読まれてる」

ジリジリと追い詰められていく感覚。真綿で締め付けられていくよ
うな雄二の策に明久は焦燥に駆られていく。

とりあえず3階に上って廊下を走り回り脱出の為のルートを探す。だが、そんな都合のいい物は存在しなかった。

「吉井、何してるのよ？」

「ひいあつ！！」

突然背後から声を掛けられ、極限状態だった明久は情けない悲鳴を上げた。

「あれ？ 小山さん？」

「ええそうよ」

明久に声をかけたのはCクラス代表・小山友香だった。

小山は虫を見るような眼で明久を見る。話しかけること事態が嫌で仕方ない、という様子だ。

「ちょっと色々あって逃げ回ってるんだ。用がないなら先を急ぐから」

「ちょっと待って。あなたFクラスの皆に追われてるの？」

「うん、そうだけど」

小山はさつきと打って変って明久の話の食いついた。それを不思議に思いながらも、正直に答えた。

「それって原因は？」

「えっと……一言で言うなら、妬み、かな」

「妬み？ ふうん？」

明久の答えを聞き小山の眼がギラリと光った。

「（こつちが動く前に先にそうなるなんて流石はFクラスね……）」
ボソリと呟く。明久はその様子を不思議そうに眺めていると、小山は愛想のいい笑顔を浮かべた。

「わかったわ。そう言う事ならこの場を切り抜けられる様に協力してあげる」

「え？」

「勘違いしないで頂戴。ここでまたFクラスのせいで問題が起こったら、ただえさえ悪い私たち二年の評判が更に酷くなるからよ。あなたの為じゃないわ」

「本当に助けてくれるの？」

「ええ。今回は特別にね」

小山は何かを企むかのように不敵に微笑む。それに気付かず明久は協力者が出来た事を無邪気に喜んでいた。彼は（雄二以外の）人間を疑う事があまり得意ではないのだ。

「兎に角、吉井君は今クラスの連中に追われているのよね？」

「うん。しかも、徐々に追い詰められて残る逃げ場は4階と屋上くらいしかないんだ」

「烏丸君は？」

「ヒロは 処刑側には加わってないみたいだけど、積極的に助けしてくれる気はないみたい。HRが終わって早々何処かに行っちゃった」

「そう……。そういう事なら」

大貴の動向を聞き、小山は怪訝な表情をする。が、すぐに愛想よく微笑を浮かべると鞆の中を漁り、取り出したものを明久に渡した。

「着替えてウィッグでもつけければ脱出できるんじゃない？」

小山が明久に渡した物はウィッグに女子生徒の制服。いわゆる女装セット（ムツツリ商会にて今日表発売中）だった。明久はそれを受け取り、ワナワナと体を震わす。

「小山さん……！」

「なによ？ 何か文句でもあるのかしら？」

「実は男だったとか？」

「アンタどんな思考回路してるのよ！？」

屈辱のあまり震えていると思いきや、明久の予想の斜め下（斜め上に非ず）をいく思考回路に思わず大声を上げてしまう。

「私の事情なんてどうでもいいでしょう。それより着るの？ 着ないの？」

不機嫌そうに言う小山。明久としても女装は避けたいが、暴徒集団に追われている以上背に腹は代えられなかった。なにより『アキつたら何処に言ったのかしら。今ならまだ屋上から突き落とすだけで許してあげるのに。逃げ回るなら拷問してから突き落とさなきゃ気が済まなくなるじゃない』と風に乗って聞こえてくる声がその選択を後押しする。

「小山さん有り難く使わせてもらっつよ」

「まったく、最初っからそう言えばいいのよ。面倒くさいわね。はい」

小山は明久の煮え切らない態度が気に入らなかったのか、ブチブチと文句を言いながらも制服を差し出した。

「けど、コレ僕が着ちゃって良かったの？」

「いいのよ。元々アンタの為に用意した物だし」

「へ？」

「あ、いや。なんでもないわ。気にしないで」

「う、うん。とにかく、ありがとう小山さん」

小山の発言に不審な気配を感じつつも深く考えずにお礼を言った。

「旧校舎の空き教室当たりならFクラスの人達もいなかったと思うからそこで着替えたらいいんじゃない」

「うん。そうするね！」

走り去っていく明久を見送りながら小山は妖艶に笑う。

「それじゃあ頑張ってるね。色々」と

彼女のそんな言葉は明久の耳に届く事はなかった。

.....

「中林。ジャンケンしようぜ」

「な、何よいきなり？」

「ジャンケンしてオレが勝ったら今回の試召戦争　でちよっくら力貸しておくれ」

「え？ え？ 何だよ！？ 嫌よそんなの！」

「その代わり、お前が勝ったら」

「ダメダメ！ やらないからね！ 大体クラス全体に関わってくる

問題を私の勝手な」

「久保とのデートをセッティングしてやる」

「烏丸大貴！ 正々堂々私と勝負しなさい！」

「オーライ。一本勝負」

「小細工なし」

「イカサマしたら」

「ぶっ殺死！ 最初はグー！ ジャンケン ポン！！」

こうしてそれぞれの思惑を孕み、状況は加速していく。

第104話 奇人変人大魔神!?

NO SIDE

「女子の制服かぁ……。普通男子でこんなに縁のある男子なんていないよね……」

明久は空き教室で小山から受け取った女子の制服を広げて、肩を落とし悲観した。

しかし明久には選択の余地はない。こうしている間に包囲網はどんどん狭くなっている。

最早一刻の猶予もないのだ。

「えっと……どうやって着るんだっけ？」

手早く制服を脱ぎ、トランクスードに。頭の上にウィッグを乗せた所でしつかり閉めた筈の扉が突然開いた。

「アキちゃ 吉井君！」

「何奴!？」

追手かと思いい反射的に身構える明久だったが、声の主を確認して警戒を解いた。

扉を開いたのは、おっとりとした感じのみつあみの女子だった。こんな普通の女の子が異端審問会の刺客の筈がない。

「小山さんが教えてくれた通り……。本当にアキちゃ 吉井君がいてくれた……」

何やら聞き捨てならない呼び方をされたような気がした。女の子は明久に熱っぽい視線を向けてうっとりしている。

「やっぱり可愛い……」

「……………は？」

「あ、あの私Dクラスの玉野美紀って言います」

「あ、うん。僕はFクラスの吉井明久です」

美紀の名前を聞いた瞬間、明久は怪訝そうな顔をした。何処かで聞いた事のある名前だ。

確かヒロだったかな？ 随分焦燥した顔で「玉野はヤバイ。玉野はヤバすぎる。玉野はデラヤベエ」と、うわ言のように呟いていたような気が……。

「今ちょっとだけ話いいかな？」

「ご、ゴメン。僕は今狙われてる上にトランクス一丁で……。話はまた今度って事で」

「あのね、実は」

「ねえ聞いてる！？ 『命を狙われている』も『トランクス一丁』も話をするのに何1つ適さない状況だよな！？ どうしてそれでも話を切り出してるの!？」

「実は私、好きな人がいるの」

「そ、そっか。それはいい事だね。とりあえずあっち向いてくれるかな？」

「その人はね、すっごく可愛い人でね、」

「可愛い人か。それはいい事だね。とりあえずあっち向いてくれるかな？」

「それで、ちょっとだけおバカなの」

「わかったよ！ 好きな人の話は分かったからまずは僕に着替えをさせてよ!！」

明久は大貴がなんとなくこの少女を苦手としている理由がわかった気がする。

彼は理詰めの人間故に理屈が通じない人間や人の話を聞かない人間を最も苦手としているのだ。

「でもねその人毎日が楽しそうだね、」

「うん。そっかそっか」

とりあえず美紀が人の話をあまり聞かないタイプだと判断した明久は自分の要求を聞いてもらうのを諦め、着替え始める。多少の羞恥はこの際仕方がない。

「一緒にいる人を幸せにしてくれそうなそんな感じの子なの」

「へえ、そうなんだ」

適当に相槌を打ち続けて脇に置いてあったシャツを着ようとして手に取った。ところで

「そうなのっ！ すっごく可愛くて最高の子なのっ！」

ガシツと着替えをしている手を掴まれ鼻息を荒くして迫ってきた。

「ちょ、ちょっと玉野さん！？ 落ち着いて手を離して」

「可愛くて可愛くて、もう食べちゃいたいくらい可愛いの！」

一気に捲し立てると同時に手につかんでいる着替えのシャツを引っ張っていく。

明久は負けずと応戦しようとするが、美紀に掴まれたシャツはビクともしなかった。

「どのくらい可愛いかって言うとな、性別を忘れちゃうくらい!!」
語気に比例して美紀の引つ張る力は強くなり、一気にシャツを持って行かれた。

その結果に啞然とする明久。彼は女子に引つ張り合いという純粹な力比で負けた事に地味に傷ついていた。仕方なしに先ほど小山に借りた女物のシャツに手をかけようすると、美紀は獲物を前にした肉食獣を彷彿とさせる俊敏な動きで女物のシャツも奪っていく。

「それでね！ その子には校内に沢山ファンがいるの！ 男女問わずに!!」

「ちよちよちよ ツ！ 玉野さん！ どうしてもう一枚のシャツまで奪うの!? それがないと僕は物凄く困るんだけど!」

「のんびりしてたら他の皆に先を越されちゃいそうだから……! だから私勇気を出そうって決めたの!!」

「ああ上着まで！ お願いだよ玉野さん！ せめてズボンだけはズボンだけは残しておいてください!」

「こつこつというのは初めてだけど私頑張るから!」

必死に懇願する明久。しかし美紀には彼の言葉が耳に届いていない。最後の砦であるズボンにまで引つ張ろうとした。明久は必死にズボンを奪い返そうとするが、やはりビクともしなかった。諦めずに更に力を込めると、プチプチとなにやら不吉な音が聞こえてきた。

「わかった！ 協力しよう！ 何の事がよくわからないけど玉野さんに協力するから又の部分から裂けてしまいそうな程強く引つ張っている僕の制服のズボンを返してほしい!!」

明久は半ばヤケクソ気味に叫んだ。が、彼の願いは叶えられる事は

なかった。

ズボンは奪われ、明久の手の届かない場所に放り捨てられる。

「大丈夫大丈夫……。家で何度も練習したんだから……」

何やら小さく呟く美紀に明久が向ける視線には最早諦念しかなかった。

早くこの状況を終わらせるためには彼女の話を聞いて事が速そうだと。

「あの……。私の話、聞いてもらえるかな……?」

「うん。聞かせてもらうよ」

被っていたウィッグを外し、真剣に美紀と向き合う明久。聞くからには真剣に聞かなくてはならない。今の自分の格好がトランクスード丁というふざけた格好である、という事には敢えて眼を逸らしておく。そうしなければやってられない。

「良かった……。あのね、アキちゃ　吉井君」

「玉野さん。そろそろ言おうと思っていたけど、君絶対心の中で僕の事『アキちゃん』って呼んでるよね？」

「私、好きな人がいるの!」

「いや。それはさっき聞いたんだけど、とりあえず呼び方を何とか

「アキちゃ　明子ちゃん!」

「違う!　更に悪化させてほしいって言った訳じゃないんだ!　僕の名前は明久なんだ!」

美紀の真意が分からない明久を前に美紀はますますヒートアップしていく。

明久は今度こそ何も言えなくなつた。彼も年頃の男の子。異性からの告白に憧れはしていた。しかしいざ告白されてみるとこれほどに困るものだったとは予想もしていなかった。

試しに自他ともに認める足りない頭をフル回転させて彼女 玉野美紀と付き合つてみたIFの未来を想像してみる。

『やあ、待つた？』

『うづん、今来たところ って、なんて格好してるのっ！』

『へ？ 普通にジーンズとＴシャツだけど？』

『ウィッグもスカートもして来てくれないなんて酷いじゃないっ。

折角今日はアキちゃんに似合うアクセサリーのお店に行こうと思つていたのに！』

『いやいや玉野さん。僕はそういうのに興味はなくて ハッ！

殺気！？』

『吉井明久……！ 彼女を作るとは、貴様、異端審問会の掟を忘れたのか……！』

『待つて待つて！ この関係つて彼氏彼女と言えるかどうか疑問がぎにゃあああつ！』

『埋めておけ』

『ハッ』

想像して背筋冷たい汗が流れた。彼女との関係は色々と無理がありすぎる。

「ごめん玉野さん。悪いんだけど」

「わ、私頑張るから！ 頑張つて可愛い服をたくさん作るから！
毎週 うづん！ 毎日！ アキちゃんが気に入るような可愛いのを、いっぱい！」

明久が断ろうとするが、美紀は必死に食い下がる。それでも明久の決意は変わらなかった。

「そういうことじゃなくて、ゴメン。付き合えないよ」

その方向の道は、一緒に歩いていくことができそうにない。と、心の中だけで付け足しておく。

「付き合えないって、もしかして……誰か、好きな人でもいるの……？」

例え好きな人がいたとしても、彼女への返事は変わらなかっただろう。と思っただが、振った手前誠実に応えるのが筋だと考えた明久は必死に言葉を探す。

「えっと……いるにはいるんだけど……」

この気持ちはよくわからない。無理に言葉にしようとする壊れてしまいそうだ。

それでも　だとしても、目の前の少女の気持ちに応える事は出来ないまでも、報いるためにも手探りで自分の心の断片を拾い上げる。

「その、吉井君の好きな人っていうのは」

「そ、それは……」

「それは？」

フツと明久のいる旧校舎の教室の微妙に開いた窓から同盟を結んだにもかかわらず自分を裏切り、地獄に叩き落とそうとしてきた怨敵坂本雄二の姿が見えた。

先ほどまでの衝撃的な出来事が全て明久の頭から消去され、脳裏に

おるとは……。予想だにせん事態で面食らってしまったのじゃ……。

『……………??? 秀吉。何があった?』

『む、むう……。ムツリーニか……。実はじゃな、その……演劇用の小物を取りに空き教室に行ったら、大変なことを聞いてしまつて』

『……………大変なこと?』

『あまり人に話す類のものではないのじゃが、どうにも落ち着かん……。ムツリーニよ。話を聞いてもらえんじやろつか』

『……………わかった。ムツリ商会は秘密厳守』

『助かるのじゃ。実は、じゃな……』

『……………うん』

あの女子生徒は 確か、Dクラスの玉野じゃったか?

その玉野という女子生徒が、

『好きなのじゃ!』

『……………誰のことを?』

『明久のことを!』

『……………』

まさかあやつが、姫路や島田ではなく、他の生徒から告白を受けておるとは……。なんと驚きなのじゃ……。

『た、大変な事を聞いちゃった』

……………

ま、まさか部活に行こうとしている教室でムツリーニ君達があんな話をしてると思ってもみなかつたよ。

FFF団の怒号を聞き、全身から血の気が引いた。
急いで旧校舎の方へと駆けていくと、呆然としている秀吉と鉢合わせた。

「秀吉！ 一体何があった!？」

「ヒロ、ちょうどいい所に来てくれたのじゃ！ 実はこの

説明中

「と、いうわけじゃ」

「ハア？ 雄二と明久がデキてる？ んな訳あるか！」

「しかしこの耳でしかと聞いたのじゃ！」

「……………おい。その時の会話を再現してみる」

「何故じゃ？」

「いいから」

「……………??? 秀吉。何があった?」 『む、む……………。』

「ムツリーニか……………。実はじゃな、その……………演劇用の小物を取りに

空き教室に行ったら、大変なことを聞いてしまった……………」

「……………大変なこと?」 『あまり人に話す類のものではないのじゃが、ど

うにも落ち着かん……………。ムツリーニよ。話を聞いてもらえんじや

ろうか?』 『……………わかった。ムツリ商会は秘密厳守』 『助

かるのじゃ。実は、じゃな……………」 『うん……………」

『好きなのじゃ!』 『……………誰のことを?』 『明久のことを!』

……………」

「……………秀吉」

「なんじゃ?」

「その言い方だと『お前が明久に気がある』としかとれねえぞ」

「……………、やってしまったのじゃ」

「遅い！ お陰で見ろ！ これ以上悪化しようのないくらい最悪な

この状況を!」

『もうチマチマと追い詰めるなんてまどろっこしい真似はやってらんねえ！ 見つけ次第叩きのめせ！ この世のありとあらゆる』

『あの野郎……！ 姫路と同棲だけじゃ飽き足らず、玉野や木下や工藤にまで好かれていただと！？ 許せん！ 殺！』

『冗談じゃねえ！ 3年に転入してきた美形野郎だけでも大打撃なのにこれ以上俺達から何を奪おうってんだ！？ お前らみたいなクズ野郎がいるから俺に彼女が出来ねえんだよ！』

『殺っちゃうヨー 人類の思いつくありとあらゆる手段を用いて吉井明久を殺っちゃうヨー』

「むう。ワシの言った話と大分乖離しておるのじゃ……」
「伝言ゲームみたいに人から人に伝わる段階で尾鰭が付いてったんだろ。とにかくあの連中を何とかしねえと！」

『見捨てる』という選択肢は不安要素を早々に潰して、クラスを一枚岩にする、というメリットの為に選んだ方法だ。明久なら朝の段階のFFF団に制裁を喰らったとしても、1日で復活できるだけの頑丈さがある。つまり不安要素を潰したうえで、『吉井明久』という戦力をキープしたまま試召戦争の準備に入る事が出来たのだ。しかし、今のあの連中に明久を渡すと今後の試召戦争に影響が出るほどのオーバーキルされてしまうのは目に見えている。そうなれば今やFクラスは『吉井明久』という大きな戦力を欠いた状態で『奴ら』と戦わなけりやなくなる。

それは旨くない。とにかく雄二を探して、方策を練らねえと！

「む？ 雄二も誰かに追われているのじゃ」

「なにいいツ！？」

『ぐうぐう！ なんていつもいつも俺がこんな目に！』

ならよお、望み通り踊つてやるさ。ただし気をつけるよ！ オレは牙を研ぎ、隙あらばお前に噛みつくぜ？ 今日あいつらを逃がす事が出来れば、我に秘策ありつてな！

まあ、あまり気は進む方法ではないが、今回ばかりは雄二と明久の失策だからあいつらにきちんと責任を持ってもらおう。

明久と雄二がFFF団に視界から消えた事を確認してからムツツリ商会の無線の周波数に合わせる。

『こちら須川！ 吉井明久、坂本雄二兩名旧校舎裏で発見！ 至急応援を要請する！』

『横溝だ！ 新校舎の3階男子トイレで吉井と坂本を見つけた！

ぐあッ！ テメエら何をす ギャッ！』

『有働がやられた！ ターゲット兩名依然として旧校舎2階の廊下を北に進行中！ 応援を求む！』

秀吉の声真似で誤報を流しまくり、FFF団の包囲網を攪乱していく。そして1か所だけ、完全な包囲網に穴を空ける事が出来た。雄二ならこの包囲網の穴に気付くはず。

さて、やるだけの事はやった。あとはアイツら次第。

オレはオレで試召戦争に使えるような地形のチェックをしておこうか。その後、やる事全部終わらせた後、結局明久と雄二は西村先生の城。

『生活指導室』にうつかり足を踏み入れてしまい、完全下校時間まで解放される事はなかった。

『残念だネー 今日殺っちゃいたかったのにネー』

本当の正念場は明日からだ。

第104話 奇人変人大魔神！？（後書き）

半分以上は原作通りで大貴の影が薄いですが、ここを詳しく書かないと話がうまく回らないので（汗）

満を持って清水美春と並ぶ暴走娘・玉野さん登場です。

次回は いよいよ激突！ 大貴の見せ場もちゃんと用意してあります。

お楽しみに！

第105話 烏丸修兵

大貴SIDE

「さて。お前たちも知っているとは思いますが、今日から試召戦争が可能になる。一学期の学習の成果を試す良い機会になるので、積極的に参加するといいだろう」

ギリギリギリ ッ！

「また、旧校舎の一・二階の踊り場にある水道だが、本日配管工事を行うため」

イライライラ ッ！

「それと、交換留学制度のお知らせが」

『『吉井、坂本、殺す……』』

禍々しい程の殺気が教室中を包みこんでいる。いつから教室は魔界クリフォートになってしまったのだろうか？

西村先生はこの教室中を包み込む粘っこい感情の渦に気付いていないのか、気付いていて敢えて無視してるのか（恐らく後者）淡々と連絡事項だけを伝えている。奴ら一応西村先生の前では堪えるだけの理性は残っているらしい。面倒な。

とりあえず昨日はオレの介入はバレなかったようで、殺意はオレの方には向いていない。

ムツリーニが怪しんでいる節はあるが、表だって妨害しない限り

尻尾を掴まれるヘマはしてない。はずだ。

「連絡事項は以上だ。今日もしつかり勉学に励むように」

勉学に励みたいんだっいたらこの騒動なんとかしてくれって言っても無駄なんだろうなあ、きつと……。

コンコンと、教室の扉がノックされドアの向こうからCクラス代表・小山友香が姿を現した。拙いな。予想通りだが、動きが迅速だ。

「Cクラスの小山か。どうしたんだ？」

「すみません西村先生。少しFクラスに連絡事項がありました」

教壇に立ちオレ達を見回した後、薄く笑いながらゆっくりと口を開いた。

「我々Cクラスは、本日9：30より、Fクラスに対して試召戦争を申し込みます！」

「なにいつ!?!」

おいでなすった。Cクラスからの宣戦布告。予想はしていたが、外れてほしいと願っていた事態に歯噛みする。

「良いのか小山。下位クラスに対して戦争を行っても、得られるものは何もないが」

「いえ、西村先生。そんなことはありません。得るものはきちんとあります。かけがえのない経験とか 三ヶ月間の平和、とか」

小山の狙いは試召戦争のルールの1つに適用されている『負けたクラスは三ヶ月の間宣戦布告の権利を失う』という所にあるのだろ

う。目的の為にイレギュラーを早々に駆逐して、成功率を高めると
いう手は使い古されていながらも手堅い良手だと思う。

オレが小山の立場でも間違いないと思う。
しかも厄介な事に『露払い』のつもりで仕掛けてきたなら付け入る
隙はいくらでもあったが、この周到な下準備、絶妙な宣戦布告の夕
イミング……。どうやら敵さん本気で潰しにかかってきているみた
いだ。

「やってくれたな小山。良い読みしてるじゃねえか……！」

雄二は悔しそうに唸りながら小山を見る。

「どういう事さ雄二!？」

「簡単な事だ。態勢が整い次第FクラスはCクラスに宣戦布告する
予定だった」

こんな状況だから後回しにしていたがな。と、付け加える。

こんな状況を招いたのはお前らだ。というツツコミはあえてしない。
オレは空気が読める男なんだ。

Fクラスの最大の特徴である異端審問会の特性を最大限生かした作
戦。見事としか言いようがない。それと同時に相手の本気も窺い知
ることが出来る。

「異性を使ってくる作戦……。それに、こっちの動きを読んでの宣
戦布告……。小山がここまでやるヤツだって話は聞いたことがねえ
……。さては、バツクに誰かいやがるな？」

「あら、知らなかった? 私、こう見えてもね 茶道部に入っ
ているのよ」

「茶道部……!?!? あのエロい3年の先輩の差し金か!？」

「3年の、差し金……?」

引つ掛かる事があり、眉間に皺を寄せて考え込んだ。この試召戦争……なにやらキナ臭くなってきた。

「それでは、失礼します」

軽やかに一礼して、Fクラスから出て行こうとする小山。そして去り際に一言。

「坂本君。この前の話、嘘なんかついてないからね」

その一言が起爆剤となり、Fクラス殺気がさらに膨れ上がる。なんつつうか……その、居心地の悪さなら烏丸本家とタメ張れるくらいにキツイ空間だ。

『おい。今の聞いたか?』

『今のって昨日の噂の事だよな』

『許さねえ……! 試召戦争もあることだし、羨ましすぎる吉井だけ処刑したら事を終わらせてやろうかと思っていたが……』

『『もはや同情の余地はないな』』

うわあああ……。オレの当初の目論見からかなり脱線しそうな雰囲気。

この場を早々に収めて試召戦争に移る為の策は準備してあるんだけど、なるべくなら撮りたくない手段なんだよなあ……。けど、こんな事態に陥ったのは雄一と明久の責任だし、この落とし前はキツチリ付けてもらうべきだ。

「良かったなお前たち。早速試召戦争のようだ。しっかり用意をして臨むように」

西村先生はそれだけ言って、教室から出ていった。

それと同時に巻き起こる狂喜の歓声。それは狂乱の宴始まりを意味していた。

『『『これより、異端者の審問を行う！』』』
『『『ヒヤッハアアアーツツッ！』』』

.....

NO SIDE

FFF団が明久達を追いかけている間に大貴と秀吉は剣道場に走った。

いくら喧嘩の強い大貴でも流石に素手で彼らを潰すのは無理がある。剣道部に木刀を借りに行く事にした。刀さえあれば大貴は負ける事はない。

これは自惚れではない。

大貴にはそれを確信できるだけの自信がある。実力もある。鍛錬も積んでいる。

それは大貴を支え、烏丸大貴の人間性の土台を作るアイデンティティでもあった。

剣道場に一礼して入り、扉を開ける。するとそこには 上座に正座していた男がいた。男の大貴や秀吉ですら見惚れてしまうよう美しい顔立ち。完璧すぎて本当に人間なのかどうかという事すら疑ってしまうほどだ。何より異質なのは瞳。人形のような無機質さがあっ

た。

2年では見覚えがない、かといって1年の様な幼さのない。恐らく3年だろう。

と、大貴は結論付ける。

青年の無機質な瞳に寒気を感じながらも眼の前の存在に一礼して事情を話し、木刀を貸してもらえるかどうかを尋ねた。勿論剣道部の部長の許可を貰っているのも付け加える。

すると青年は無言で上座に引っかけてあった木刀を大貴に差し出した。

「どうやら貸してくれる、という意味表示らしい。」

「ありがとうございます、と言い木刀を受け取ると青年はうっすらと笑った。」

「僕は剣道部じゃないよ」

「そうなんですか。それなら何故ここに？ 3年なら剣道の授業はない筈ですよ？」

「うん。僕はね、君を待っていたんだ。烏丸大貴」

背筋に寒いものが走り、慌てて距離をとった。

「コイツを敵に回すな！」

大貴の本能が 感覚が 全身の細胞がそう告げる。

敵意でもない。憎悪でもない。殺意でもない。そんな訳のわからないただ純粋な悪意に似た何かを向けられ、ただただ戦慄した。

「自己紹介がまだだったね。僕の名は『烏丸修兵』。君の兄さ」

「ヒコの兄じゃと!？」

「ッ!?! 本家の!?!」

「そうだね。僕は烏丸本家の人間だ。けどね、この学園をどうしようなんて思っていないよ。手に入れば、かなりの利益が見込めるだろうけどね。その為の手段が烏丸本家の弱みになりえる。一言で言うなら割に合わないね」

言外に「手段を選ばなければ文月学園を手に入れるのは簡単だ」と言っている。

横で秀吉は訳のわからない、という表情をしながらも2人の間にただならぬ空気を感じ口を挟まずに事の推移を見守るにした。

「それならなんでこの学園に入って来た？ 3年のこの時期に」

「大学受験に響くのに、かい？ 問題ないよ。僕は『烏丸修兵』だ。僕がその気になれば出来ない事なんて存在しないんだよ」

穏やかに、それでもハッキリと修兵は告げる。

しかしその発言に大貴は眉間に皺を寄せあからさまに不快感を示した。

「流石は本家の人間だ。傲慢な事この上ない」

「傲慢。確かにそんな取り方も出来るね。しかし 今までは僕に出来ない事に出会った事がないのも事実さ。非難するなら僕にも出来ないという事がある事を示してくれ。天源無想流の目録を最年少で取得した天才児・烏丸大貴。出来れば僕もそれを見せてほしいんだけどね」

今まで微笑の仮面を被って感情を表に出さなかった修兵の顔に僅かに諦観が滲み出た。が、大貴はそれに気付く事はなかった。

「オレは天才じゃない。オレが目録をとれたのは、ジイサンや師範、弦馬さんの教えを受けて努力し続ける事が出来たからだ。そんな安

い言葉でオレの積み上げてきたモンを片づけるな」

「どつちでもいいさ。僕の敵と成りうる存在なら、天才でも凡才でも」

「バカバカしい。オレはアンタとやり合う気はない。やり合う理由がない」

「理由？ 了解だ。今作つてあげよう。君が僕に勝つたら 3年が2年の試召戦争に介入する本当の理由を教えてあげよう」

「ッ!？」

「どうだい？ 少しはやる気は出たかな？」

修兵は木刀を手に取りゆつくりと立ち上がった。大貴もそれに応じるようにゆつくりと構えた。試召戦争に3年が介入している。修兵はFクラスで唯一自由に動ける大貴を潰す為にここで待ち伏せていたのだらう。ならば、ここで逆に修兵を潰す事が出来れば、たとえ修兵の交わした約束が嘘でも3年側の狙いが見えてくるかもしれない。

「秀吉、少し離れてろ」

「……う、うむ。了解じゃ」

秀吉が離れたのを確認してから全ての眼を閉じて雑音を省き、自らの五感を掌握する。

無想。

木刀を正眼に構える。

対する修兵は構える様子を見せない。木刀を右手に持ち、ただ自然体で立っているだけだった。

武道における構えとは次の動作を起こしやすい体勢だ。

しかし構えといっても万能ではない。

下段の構えが上段の構えに弱い様に、必ず構えには隙や相性がある。大貴の得意とするオーソドックスな正眼の構えには乱戦には向かな

いという弱点があるし、平正眼の構えは面が空いてしまうと必ずどこかに隙がある。

だからこそ大貴は敢えて本物の隙と一緒に誘いの為の偽物の隙を混在させ、相手を攪乱する。

しかし、修兵には一切の隙がない。

構えずに自然体で立っているだけで、隙を完全に消しているのだ。少しでも武道を齧った事ある人間ならこれがどれだけ難しい事か想像する事は簡単だろう。

対峙してるだけで大貴は修兵に圧倒されそうになる。構えが無い事で次の行動が全く予想できない。

「来ないのかい？」

「……………」

ジリジリと逸る心を押さえつける。迂闊に飛び込めばやられるのは自分の方だと理解しているからだ。修兵の間合いギリギリで大貴は修兵の隙を窺っている。

「それじゃあ　こつちから行くよ！」

ドン！ と、修兵が大貴の間合いに一気に踏み込んできた。片手持ちの木刀を袈裟に振り下ろされ大貴は刃筋を立てて修兵の攻撃の軌道を変える。それとほぼ同時に面を狙おうとした瞬間　体が勝手に動いた。

カン！ という甲高い音が道場に響いた。

大貴は木刀の柄で辛うじて修兵の胴狙いの一閃を防いだ。袈裟斬りとほぼ同時に襲ってきた胴打ち。

大貴は一瞬驚きのあまり何も考えられなくなったが、すぐさま我を取り戻し後方に飛び退いた。

そこで自分が初めて滝の様な汗をかいている事に気付く。

修兵からの重圧から解放され、大貴は膝をついた。

「ふっは！ あは！ あははははははははは！ 凄い！ やっぱ君は僕の見込んだ通りだったよ！ 僕の『重ね打ち』を防いだのは君が初めてだ！」

修兵は狂ったように笑い、大貴は激しく息を切らせて片膝をついている。

秀吉には何が何だか分からなかった。辛うじて分かった事は修兵が振り下ろした木刀が一瞬消えて、大貴が辛うじて見えない一撃を防いだ事だけだった。

「『重ね、打ち』……？ なんじゃそれは……？」

「……高速で剣を振り、初撃と二撃目をほぼ同時に違う部位に打ちこむってところか？」

「その通り。初見で見破るとは凄いじゃないか。大分昔に読んだ漫画からヒントを貰ってね。流石に9回同時に斬りかかる事は出来なかったけど、最大で3回同時に斬りかかる事は出来るよ」

修兵は簡単に言うが、常人が出来る技ではない。大貴の知る限り最高の強さを持つ沖田竜馬や烏丸修介ですら『重ね打ち』と呼ばれた技を実現する事は不可能だろう。神業といってもいい。

「今の同時攻撃は二撃……。まだ上があるってか……？」

「その通り。両手でやればもっと速くなる」

最悪だ。烏丸修介の上段からの面打ち。これも見切りを最も得意とする大貴が認識するのが困難なほど速かったが、修兵の剣速はその更に上に行く。ほぼ同時に襲いかかってくる剣閃を防ぎきるなど、不可能だ。その上もし修兵が無想まで使えるとしたら

「さて　それじゃあ続きを……」
「　　ッ！」

大貴は秀吉の手を引いて道場から逃げた。
眼の前の男相手に勝ち目など存在しない。

完全敗北。その事実を噛み締め、修兵の圧倒的な実力を前に心を折られかけながらも、大貴は成すべき事を成す為。必死に。形振り構わず。ただ、逃げた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「とりあえずここに隠れるか」

「そうだね。時間も潰せそうだし」

明久と雄二はFクラスの面々の追撃をかわし、プールの男子更衣室に身を隠していた。

「時間を潰すって言っても、十分程度が限界だけだな」

「十分？　どうして？　こんな時間にプールを使う人なんていないはずだけど」

「そうじゃねえ。試召戦争のルールの一つだ」

「？　何それ？」

「試召戦争が行われている間はクラス代表は居場所を公開するって義務があるってヤツだ。うまく隠れられたら勝負の方向性が変わっちゃうからな」

「今はそのルールは完全に足枷だよな……」

「まったくだ。最悪のタイミングで試召戦争になっちまったもんだぜ……」

明久と雄二は揃って深いため息をついた。

「ところで雄二。さっき小山さんが言ってた『あの話は嘘じゃない』ってどういう事？」

「ああ、あれか。あれは一昨日に話していた『目標はBクラス』って話のことだろう」

「小山さんはBクラスを相手にするとか言っていたくせに、嘘までついて……」

「いや。嘘じゃないだろ」

「へ？」

明久は訳がわからないという表情をして雄二を見る。雄二は明久が何を分かっているのか察して説明を続けた。

「あくまでも最終的にはBクラスに勝ちたいって、それだけの話だ。その過程にFクラスがいたとしても、別に嘘ってわけじゃないだろ」

「けど雄二」

「それに俺もそう言う言い方をしたしな」

「だからこそ、Aクラスに攻め込むのは解禁から一、二週間後って言ってたのか……」

一昨日の雄二と小山の腹の探り合いの様な会話を思い出し明久は納得した。

「ああ。もっとも、その一言で小山　じゃなくて、恐らく小暮センプイとやらに、ある程度こっちの考えを見抜かれたんだろうけどな」

「でも、それだけの判断材料じゃ僕らがCクラスに攻め込むなんて確信は持てないんじゃないかな？」

「確信なんて必要ねえだろ。いずれ戦うかもしれない相手がいて、それに対応できる作戦があつて、Bクラス戦（本番）前にクラスに経験を積ませたいって目的もある。それだけあれば、開戦を躊躇う理由はないだろ。口惜しいが今回はまんまと乗せられちまった。あの程度なら向こうが作戦を練つてきても勝てるよと踏んでいたんだが……。こんな方法でクラスを崩しにかかつてくるとはな。軽率だった……」

『自分のミスが分かっているなら良かった』

「ッ!?」

突然聞こえてきた声に明久と雄二は身構えた。更衣室の扉が開き、烏丸大貴が入ってくる。

「ヒロ……。どうやってここを……?」

「無想を使えばお前らが校内の何処に隠れているのかなんて簡単に分かる。それより迅速かつ確実にこの騒動を鎮静化させる方法が1つだけある」

「え!? そんな作戦があるの!? だったらそれを」

「待て明久!」

「え?」

明久は眼を瞬かせた。味方だと信じて疑わなかった大貴が自分の喉元に木刀を突き付けている。訳がわからなかった。

「明久と雄二をこの場で潰し、次のフェーズに移行させる」

「ど、どういう……?」

「コイツは騒ぎの騒動の俺達を粛清して、さっさと試召戦争の準備に取り掛かるうとしてやがるんだ!」

「なッ……!?!? どうして!」

「お前らを異端審問会に処刑させないためだ」

「どういう 事？」

「奴らは今暴徒のように狂っている。加減なんか度外視して攻撃を仕掛けてくる。奴らが欲しいのは『雄二と明久を処刑した』結果があればいいのだから、誰が手を下そうと関係ない。それならあいつらに潰される前に『生かさず殺さず』の手加減が出来るオレがお前らを潰す。試召戦争の間に復活できるくらいにな」

「……………」

「こんな事態に陥つたのはお前らの責任だ。そしてオレの責任でもある。あの時無理にでも雄二を止めるか、明久を潰して事態の迅速な収拾を図るべきだったんだ。…………だから、オレがやる。他の誰でもないオレが…………！」

大貴の顔が苦痛に歪む。彼は必要とあらば冷酷な判断を躊躇う事なく下す現実主義者だ。

しかし決して冷酷な人間ではない。

変なところで真面目な大貴の事だ。自分で自分を相当追い詰めたのだろう。自分の友人とクラスの立場。その両方を秤にかけて、自分はどうするべきか。選ぶのべきはクラスか、それとも友か…………？ 相当な葛藤があったのだろう。雄二は己の軽率な行動を恥じた。大貴にこんな冷酷な判断を下させるほどクラスを追い詰めたのは、他ならぬ自分自身だ。

「……………ヒロ、すまなかった。お前の言うとおりだ。クラスの事を考えれば俺は明久への私怨に走るべきじゃなかった」

「……………」

「だから、1日だけチャンスをくれないか？」

「……………どうするつもりだ？」

「今日中にこの騒ぎを鎮静化して見せる」

「……………作戦は？」

「ない。だが、必ず見つけ出して見せる」
「ふざけるな。今のお前に何が出来る」
「雄二だけじゃないよ。僕もいる」

明久は覚悟を決め、大貴を真つ直ぐ見据えた。その瞳には一点も曇りもない。

大貴も明久から目を逸らさない。そして

「今日の放課後までだ。それ以上は待てない」

「ありがとう」

「オレはその間にCクラスの動きを牽制する。表だって味方する事は出来ない」

それには雄二は異論はない。大貴の策はあくまで『中立な立場の間』もしくは『異端審問会側の人間』が『異端者認定された雄二と明久』を潰すからこそ意味がある。

もし表立って自分達の味方をしてしまったら、異端審問会のメンバーに勘ぐられる事になる。

「からな

「わかつている」

「……………なるべく上手くやれよ」

「任せておけ」

「わかった」

雄二と明久が力強く頷いたのを見て、大貴は更衣室を後にする。明久と雄二は不敵に笑った。

「ま、こうなったら仕方ないか……。雄二、今だけ協力してあげるよ」

「ぬかせ。王様キングに協力するのは歩兵ポインの義務だろうが」

キンコーンカーンコーン

9時30分。試召戦争開始の合図のチャイムが鳴る。

「さて。いくぞ明久。やられたくなきゃ、全力で突っ走るんだな」

「ふんっ。言われるまでもないさ。半端な事したら、僕たちを信じて待つてくれたヒロに悪いからね！絶対にコレを切り抜けて復讐してやるから覚えてろ！」

雄二と明久は言うと同時に隠れていた更衣室から飛び出し、駆けて行った。

.....

大貴SIDE

「して、どうするのじゃ？」

「雄二達が逃げやすくなるように、Cクラスを牽制する」

「.....出来るかのう？」

「出来る、出来ないじゃない。やるんだよ。やれなければ負けるだけだ」

「むっ.....」

この試召戦争.....。なにか裏がある。

烏丸修兵との勝負に勝って、3年の真の目的を聞き出すのは現実的じゃない。悔しいが、実力が違いすぎる。

修兵の圧倒的な実力を前にして、折れかかった心を奮い立たせて自分の出来る事を探していく。

だとすれば、一番情報を引き出しやすそうな小山から当たるのが現状で最も確実な手だ。

「それまでに明久達が逃げ切ってくれるといいのじゃが……」
「あいつらならやるさ」

今オレが出来る事は雄二と明久を信じて最善の手を打つ事だけだ。
『待つ』といった以上、バックアップは全力でやる。
それでもダメなときは。

「……………頼むぜ。雄二、明久……………」

第106話 激突！ Cクラス

大貴 SIDE

「して、作戦はあるのかの？」

「ああ。堅実派を自認するオレとしては出来れば避けたい博打みたいな方法だけだな」

ホントの事を言うと、昨日の様にCクラスの連絡系統をジャック（ゲリラ戦で2、3人潰して携帯を勝手に拝借）して秀吉に誤報を流しまくらせる。という方法を探りたかったが、試召戦争では携帯電話を始め、あらゆる通信手段の使用を禁止している以上その方法はアウトだ。

良かった。昨日ルールの確認しておいてホントに良かった。

「派手に暴れる事になるから、お前にも協力してもらおうぜ？」

「了解じゃ」

.....

NO SIDE

「状況はどう？」

「代表の作戦通り、Fクラスのバカ共は仲間割れしていやがる」

「まったく、チヨロいな。一部真実とはいえ、こんな簡単に流した情報に食い付いてくれるなんて」

「ま、さっさと終わらせて本番への準備を始めるぞ」

「油断しないの。あつちにはまだ烏丸大貴がいるわ。これまでの流れであいつがなんの動きを見せていないっていうのは逆に不自然よ。何か企んでるかもしれないわ」

楽勝ムードが漂い始めるCクラスに代表の小山友香は代表として釘を刺す。出来れば烏丸大貴の方は真っ先に無力化しておきたかったが、仕方ない。

策を授けるときに『烏丸大貴には一切の小細工を使用しない事』という条件を出されている。

小山も大貴1人なら、物量で押し切ってしまう、と判断した上でその条件を呑んだ。

戦争が始まり、いの一番に大貴を討ち取ろうと搜索してみたが、何処に隠れたのか見当たらない。

ただ震えて隠れているだけなら問題ないのだが、大貴の性格からしてそれはないと断言出来る。そんなに諦めのいい性格ではない。

きつとこんな状況でも虎視眈々と勝機を伺っているに違いない。反撃の準備が整い次第、姿を現すだろう。

なら自分は烏丸大貴が動き出す前に坂本雄二とついでに吉井明久を討ち取ってしまった方がいいだけの話だ。幸いにも大貴以上の策士である雄二は既に自分達の策に嵌まっている。

討ち取るのは時間の問題だ。

「けど無理に烏丸を相手にする必要はないわ。一秒でも速くFクラス代表の坂本を討ち取るのよ！」

「流石だな。手堅い判断だ」

「当たり前よ。私は少なくともFクラスを舐めてはいな　ッ!？」

突然背後からかけられた聞き覚えのある声に固まった。

自分が知る限りで最も性質の悪い性格をしている男子の声。

恐る恐る振り返ってみるとそこにはカラスの着ぐるみがチョンと座

っていた。

「き、着ぐるみ!?!」

「ノンノンノン。オレはFクラスのマスコット! キグルミ・レイヴン丸!」

「か、可愛い! つじやなくて! アンタ烏丸でしょ!?!」

「烏丸違う。キグルミ・レイヴン丸だ。それにしてもアドリブでノリツツコミを決めるとは……。やるな小山」

「ふざけてるの!?!」

「ん? ボケの方が良かったか? ならオレはツツコミ役に回ろう」「そういう事言ってるんじゃないわよ!」

「ところで美人に突っ込むってなんかエロくねえ?」

「殺すわよ!?!」

『何故着ぐるみ!?!』

『っていつか、何処から入ってきた!?! ドアから入ってきたら流石に気付くたる!?!』

「無論、窓から」

『『『ここは3階だあああああつ!?!?!?!』』』

『何なんだアイツ!?!』

『着ぐるみ着たまま昇って来たのか!?!』

『アホだ! 今世紀最大のアホが居る!?!』

『アホな事に命を賭ける。それがオレの芸人道!?!』

『『『言い切った!?!?!』』』

ダメだ。ペースを乱されている。目の前のFクラスきつてのアホの言うことを真面目に返しても疲れるだけだ。小山は平静を取り戻すように咳払いを一つして一拍置いた。

「で、なんの用よ烏丸?」

「キグルミ・レイヴン丸だつて」

「着ぐるみでもぬいぐるみでもなんでもいいわよ。用件は？」

小山は努めて冷静にキグルミ・レイヴン丸と交渉を始めた。

端から見たらギャグにしか見えないが、当人は至って真剣だ。それがまたシリアスなギャグとなり笑いを誘う。

周りで様子を伺っていたCクラスの面々が必死に笑いを噛み殺していたのだが、小山はそれに気付く事はなかった。

「こつちの要求はFクラスと和平協定を結んでくれないか？」

「お断りよ」

キグルミ・レイヴン丸の要求を小山はバツサリ切った。

当然だ。和平協定とはあくまで対等な条件であるからこそ結ぶものであり、自分達が圧倒的有利なこの状況で攻撃の手を緩めるなど、下策中の下策だ。第一和平に応じてしまえば、自分たちの目的の『イレギュラーの排除』と『勝利して勢いをつける』の二つが達成出来なくなる。自分達にとって全くと言って良いほど利が見当たらない。

キグルミ・レイヴン丸 もとい大貴は最初から交渉が上手くいくと思っていなかったようで、平然と次のカードを切る。

「手打ちにするなら今がチャンスだと思うが？」

「どういう意味よ？」

「お前らはもう地雷原に片足突っ込んでんだよ」

「なっ ！？」

予想もしなかった大貴の言葉に笑いを噛み殺していたCクラスの生徒が騒然とした。

「このオレがなんの準備もなく、敵陣のど真ん中に交渉に来ると思

うか？　今まで理由もなく隠れていたとでも？　全部お前らを罠に嵌める為の下準備さ。あと一步。あと一步でお前らは自分達の用意した策で自滅する事になる」

『何だと！？　そんな情報入ってきてない！』

「当たり前だ。バレたら罠にならないだろ」

『ハ、ハツタリだ！　そんな事あるはずない！』

「ハツタリだと断言出来る根拠は？」

『ぐっ……………！』

「……………逆にその話が本当だって根拠もないわよね」

「痛いところついてくるな。じゃあこの話はあえて罠の存在をバラす事で『罠の存在はハツタリだ』とお前らに思い込ませて罠への警戒心を完全に無くさせるところにあるってのはどうだ？」

「けどそれって今種明かししたら、私達が警戒心を抱くじゃない。

苦しい言い逃れよ。やっぱりハツタリね」

「それならこういうのはどうだ？　そう考える事を織り込み済みで交渉に来た振りをしてお前らの背中を押し罠に追い落とそうとしてる」

「……………ッ！？」

「けど、やっぱりこれハツタリかもな。さあて……………どっちがホントかなって」

「……………」

友香はしばらく難しい顔をして考え込んだ。そして教室のドアをチラッと見てから着ぐるみ装備の大責に向き直る。

「どっちだとしても私たちのやる事は変わらないわ。Fクラスを倒し、Bクラス挑むわ！　その為に必要ならどんな罠も乗り越えてみせるー！」

「……………交渉決裂、か？」

「そうね。……そして、アンタも終わりよ！」

『代表！ 数学の船越先生を連れて来た！』

「なるほど。数学か。よく調べてある」

「当たり前よ。私はアンタ達を甘く見ていない。数学なら厄介な能力『自爆』は使えないでしょう。全力で叩き潰してあげる。坂本も吉井も捕まるのは時間の問題よ。観念しなさい」

「『甘く見ない』とか言っただけじゃねえか。……小山、一つ忠告しておいてやろう。あいつらを甘く見るな。害虫っていうのは、なかなか死なないものだ」

酷い言い様だが、説得力が有り過ぎる！！ と、Cクラス全員の心
の声が重なった。

「言っただけさ！ Cクラス！ 烏丸大貴を討ち取るわよ！」

『『『応！！！！』』』』』

「それじゃあ オレは逃げる！」

カラスの着ぐるみin烏丸大貴は教室のドアから飛び出して一目散
に逃げ出した。

「追撃部隊、烏丸を追って！ 出来れば捕獲！ 出来なければ戦闘
不能に！ とにかく絶対に逃がさないで！」

小山の檄でCクラスの陸上部所属の男子生徒5人大貴を追う。

『クソ！ なんで着ぐるみなんか着てるのにあんなに速いんだ！？』

『止まれコラ！ チキ ラーメンのパチモン野郎！』

『いや。どっちかって言うとかヤク トのパチモンだろアレ！』

『どっちでもいいから走れ！ 逃げられるぞ！』

『佐々木幸三！ 烏丸大貴に勝負を申し込みます！ 試獣^{サモン}召喚！』

『岩崎信一郎同じく勝負を申し込む！ 試獣召喚！』

『矢田浩二！ 試獣召喚！』

『塚脇大地！ 試獣召喚！』

『佐藤竜治！ 試獣召喚！』

「…………… 烏丸大貴受ける！ 試獣召喚！」

……………

数学

Cクラス 佐々木雄三 118点

Cクラス 岩崎信一郎 121点

Cクラス 矢田浩二 108点

Cクラス 塚脇大地 102点

Cクラス 佐藤竜治 104点

Fクラス 烏丸大貴 232点

……………

状況は最悪に近かった。点数でも物量でも相手に分がある。

しかし大貴は着ぐるみの中で不敵に笑う。負けるとは微塵も思っていない。

大貴の召喚獣は十文字槍を構えた。

追撃部隊の装備はオーソドックスな西洋剣とチェーンメイルを装備している。

大貴の召喚獣との間合いを計りながらギリギリと距離を詰めていく。ポッ！ と大貴は召喚獣に突きを繰り返させる。

大貴の召喚獣の放つ刺突を塚脇の召喚獣は軽いステップで避けた。

「そんな甘い突きで！」

サーベルを抜き放ち、大貴が槍を戻す前に一気に間合いを詰めて斬り掛かる。

大貴の召喚獣は旋回。振り下ろされるサーベルを回避する。

塚脇は大貴を逃がすまいと向き直ろうとする。その瞬間、大貴の召喚獣が槍を引いた。

ドスツ！ という音を立て塚脇の召喚獣は背中に刃を受け戦死する。塚脇は信じられない光景を前に酷く狼狽した。

「バ、バカな！」

「バカはお前だ。相手の武器の特徴を考えずに突っ込んでくるからアツサリやられる。この十文字槍は宝蔵院の胤栄が生み出した『突けば槍 薙げば薙刀 引けば鎌 ともかくにも外れあらまし』っていう兎に角命中率の高い武器だ。普通の槍と同じ攻撃方法で破れると思っただか？」

『こ、このー！』

塚脇がやられたことに浮き足立ち、矢田は大貴に背後から斬り掛かるが、

「あらよつと！」

コートの下に隠してあった小太刀を投擲。矢田の召喚獣の額に刃が直撃し、戦死する。

『う、嘘だろ！？ 烏丸がここまでやるなんて！』

『データでは召喚獣の扱いがドヘタだって！』

『話が違っー！』

「オレだって、いつまでも弱いままじゃいらねえんだよ」

先日の体育祭で行われた召喚野球大会。その時にはほぼ全試合出場した大貴は召喚獣の操作のコツを掴みつつあった。コツさえ掴めばあとはイメージの微調整のみ。

大丈夫だ……！ イメージしろ！ 姿勢、体重移動、足運び、武器の使い方……。すべて頭の中でより鮮明にイメージするんだ……！ そしてそのイメージを操作に ……！

「 反映させるっとおっ！」

高速の突きが岩崎の召喚獣を掠め、深手を負わせる。

「クソ！ 困め！ 相手は1人だ！」

「1人だなんて言っただけ？」

「何イ！？」

「今だ！ 秀吉！」

「『『 ツ！？』』」

大貴を取り囲んだ3人は背後の伏兵を警戒し、一斉に振り向くが自分達の後ろには誰もいない。

「バカが見る！」

「なっ！ 卑怯だぞ烏丸！！」

「5人がかりでオレをボコろうとしたお前らが言う事じゃないな、それ」

佐々木の抗議を軽く無視して、佐々木、岩崎の召喚獣を戦闘不能にしていく。

あと、ひとり！

振り返ろうとした時、既に佐藤の召喚獣の剣が大貴の召喚獣の喉元に突き付けられていた。

「……やらないのか？」

「お前をこのまま代表の前に突き出す。さっきの話が本当かどうか吐かせないとな」

「なるほど。いい判断だ。だが、まだまだ甘い。 やれ秀吉！」

「2回も同じ手に引つ掛かる訳ない」

「木下秀吉！ 試獣^{サモン}召喚じゃ！」

「んだとおおっ！？」

.....

数学

Fクラス 木下秀吉 36点

Fクラス 烏丸大貴 232点

Cクラス 佐藤竜治 104点

.....

新撰組の羽織を着た秀吉の召喚獣が刀を構える。佐藤が大貴から視線を外した一瞬の隙を見逃さず大貴の召喚獣は後ろに飛び退いた。

後ろから秀吉の刀。前から大貴の十文字槍。佐藤には成す術は無かった。

ひっくり返すだけの策、もしくは戦力があると錯覚させる事が出来る。しかもどんな方法でやられたか小山にわからない以上、慎重にならざる得ない筈だ。

「しかし、残念じゃったのう……。交渉は決裂じゃ。これから苦しくなるぞい」

「いや、交渉が決裂した事はそんなに痛手じゃない。仕込みも出来たし、なにより大事なのはFクラスが和平をCクラスが突っぱねたって事実があること。これが重要なんだ」

「???? どういう意味じゃ?」

「この交渉での狙いはいくつがある。まず1つは時間稼ぎ」

「時間稼ぎ、じゃと?」

「あからさまに一発逆転の策がある事を示唆して、Cクラスの動きの鈍化を図る。追撃部隊5人を全滅させた事も相手に二の足を踏ます材料になるはずだ」

ちなみにこれは以前雄二がDクラスとの試召戦争の戦略を踏襲している。

「して、一発逆転の策とはどんなものじゃ?」

「んなモンあるわけないだろ。全部ハツタリだ」

秀吉はずっこけた。古典的ではあるが、それ故に安定感のあるリアクションだ。

「ないモンをあるように見せかけて相手を惑わすのは兵法の基本だ。兵は詭道なりつてな」

「……そうじゃった。お主はそういう奴じゃったの……」

「話を進めるぞ。もう1つの目的はCクラスの完全無力化。及びオレ達の完全勝利。Cクラスが二度とFクラスに牙を向けられない

ようにする為にはまず代表の小山の発言力を奪う事が絶対条件。確か小山は春の試召戦争の時無策でAクラスに正面から突っ込んで大敗するなんて結果を招いているよな？」

「う、うむ。相違ない」

「今回の試召戦争も和平交渉を突っぱねたのも小山の判断……。もしそれで圧倒的有利から劣勢までひっくり返される様な事態に陥つたら？」

「まさか、お主の狙いは……！？」

「そう。いくら代表ついても何度も失敗すれば信用や求心力の失墜を招く。だからこそ判断は慎重を期す必要がある。けど小山は殆ど考える事なく、和平を拒んだ。こっちに切り札がある事を示唆しているにも関わらず、な。あの時点では手堅い判断だが、自分たちが劣勢に追い込まれると、気になり出す。『何故あのとき交渉に応じなかったのか？ あのととき和平に応じていたら、自分たちはこんなにも追い詰められることもなかったのに！』つてな。一度芽生えた疑念はそう簡単には拭えない。疑念は不信感へと変わり、やがては 組織の空中分解に繋がる」

「……………」

なまじ自分たちの完全勝利を確信しているだけに、動揺は相当デカいと思うぜ？ と、付け加える。

「よくもまあ……、そこまで悪知恵が働くものじゃな」

「状況が状況だ。手段を選んでいられない。……………軽蔑したか？」

「いや、心強いぞい」

「さよか」

そう。悪意を以て敵を排除する事はオレにしか出来ない。

雄二は性根が真っ直ぐな上に優しいからこういった『相手を貶める方法』は気乗りせず斬れ味が鈍るだろう。だけど……オレは出来る。

第107話 Fクラスの変

N O S I D E

「追撃部隊が全滅した、ですって……!?!」

予想を裏切る報告に代表の小山を始め、Cクラスの生徒達は騒然とした。

追撃部隊の数は5名。いずれも足の速さに優れ、Cクラスの数学上位者を集めた烏丸大貴を倒す為の布陣だった。

それがまさかの全滅だ。一体烏丸大貴はどんな手品を使ったのだろうか？

召喚獣の操作技術。総合点数ともに追撃部隊は大貴を上回っており負ける要素などないにも関わらず、彼らは大貴に倒された。

彼の言っていた『Cクラスを倒すための罫』の存在が現実味を帯びてくる。

口の中が緊張で渴いていくのを感じた。

それでも周りに不安を悟られる訳にはいかない。代表が迷えば、周りにも迷いは伝染していく。そうなれば、せつかくの仕掛けに乱れが生じる。

それが代表としての自分の責任だ。春の試召戦争の様な愚は二度と犯さない。

「みんな、落ち着いて」

小山はざわめくクラスメイト達を宥めるように語りかけた。

「追撃部隊全滅は確かに痛手だけど、慌てる事はないわ。そのくらいじゃ、まだ此方の優位は動かない」

「けど代表。追撃部隊が全滅したのってさっき烏丸くんが言ったたんに嵌ったからなんじゃ……」

「確かにその可能性はあるわ。だから吉井、坂本を追うのは一旦中断して情報収集に専念して。動くときは烏丸の襲撃に備えて常に三人一組で動く事。警笛を持ってアイツに遭遇したらすぐ吹くのよ。いいわね！」

「『はい!!』」

相手の手がわからない以上、迂闊に飛び込むのは自殺行為だ。ここは手堅く慎重に行動するべきだ。敵であるFクラスは試召戦争どころではない。坂本雄二の腕輪 教師の承認なしで召喚フィールドを生成できる白金の腕輪 と吉井明久の召喚獣 観察処分者仕様の物流干渉可能型 によってFクラスの生徒が同士討ちしてくれば益々好都合。

大丈夫。きっと大丈夫……。

小山は焦燥感に駆られる自分にそう言い聞かせながら情報収集の為の指示を続けた。

.....

「雄二!
アウエイクン
起動!
サモン
試獣召喚!」

雄二が腕輪を起動させ召喚フィールドを作り出す。それに呼応する

「やけに手応えが無かったな」

「まあ、戦う前から勝負はついてたようなものだしね」

逃げるルートを先読みした手腕は見事だったが、いかんせん追い詰めた後どう無力化してしまうか考えていなかった。その詰めの甘さは流石Fクラスというべきか。

「それで雄二。何か作戦は思いついた？」

「何も思いつかねえからとにかく走れ。運が良ければ協力してくれそうな奴と鉢合わせるかもしれねえ」

「そんなので大丈夫なの！？ 今日放課後までにこの事態を何とかしないと僕らヒロに処刑されちゃうんだよ！」

「そうならねえように祈つとけ！」

明久と雄二は新校舎に向かい全力で駆けこんだ。周囲に誰もいない事を確認してから膝に手を突き息を整える。

「そういえば……Cクラスの姿が見えないね」

「アイツが足止めに成功したんだろ。どんな性質の悪い方法を使ったのか……。小山の奴に同情するぜ」

2人して引き攣った笑いを浮かべる。大貴がCクラスの足止めに成功しているのなら、自分達もこの状況を何とか出来るかもしれねえ。ほんの僅かな光明が見えたような気がした。

「探したわよアキ……」

背後から掛けられた声にゾクウツ！ と明久の背中に悪寒が奔った。

神様は僕の事が嫌いに違いない。

そんな事を考えながら涙目で後ろを振り返ると、島田美波が仁王立ちをしていた。

顔は笑っているのに眼は欠片も笑っていない。

「島田か。ちようどいい」

「え？ ゆ、雄二。味方になってくれそうな人って美波の事なの？」

「ああ。その通りだ」

「で、でも」

ラスボス的な彼女が大人しく自分達の話聞いてくれるのだろうか。一抹の不安が明久の脳裏を過る。

「アキ……。瑞希と同棲つてだけでも許せないのに、ウチを差し置いて告白されたとか、木下に興味があるとか、坂本と愛し合っているとか」

ゴゴゴゴゴ……ッ！ という音と共に美波の体から黒い瘴気が立ち昇ってくる。

「許せない……！ 絶対に許せない……ッ！」

「無理！ 絶対無理！ あんな状態で話を聞いてくれるはずがないじゃないかつ！」

「いやいや。お前を殺すだけで話を聞いてくれる貴重な相手だからな。ローリスク・ハイリターン。これほど都合のいい相手はいないだろ」

「それは雄二にとってローリスクつてだけで、僕にとっては死の取引じゃないかつ……！」

「それじゃあ島田。明久を処刑した後ゆっくりと話を聞いてくれ」

「仕方ないわね」

「だ、誰かーっ！ 誰か助けてーっ！！ ここに通る魔がいますーっ！！」

「バカねアキ。こんな授業中に人なんて通る訳ないじゃない」

「み、美波落ち着いて僕の話を」

「ごちやごちやうるさいわね！ 生きたまま脳髓を引き摺りだされたくなかつたら、大人しく腰骨を砕かれなさい！」

「美波！ その発言は女子としてどころか、治安国家に暮らす人間の発言としてアウトだ！ 助けて雄二！ パートナーの最大の危機だよ！」

「生きたまま脳髓を引き摺りだされる人間を見るのは初めてだな」

「その発言も人間としてアウトだ！」

「さあ、覚悟しなさい！」

明久はこの場を切り抜ける方法を必死に模索するが、焦りと恐怖でまともに思考が働かない。迫りくるターミネーターを前に、もはや完全に手詰まりだった。

覚悟を決めて、眼を閉じ、歯を食いしばった。その時

「待つて！ 皆のアイドルアキちゃ 吉井君を放して！」

なにやら色々とおかしな台詞が遙か後方から聞こえてきた。

「た、玉野さん。なんでここに？」

色々とおかしな発言の主は2・D所属玉野美紀。昨日明久に告白した女子だ。

「アキちゃ 吉井君……。昨夜眠れなかったから朝起きられなくて、遅刻しちゃったんだけどこんな場面に出くわすなんて……」

最悪だ！！ と明久は頭を抱えた。

この状況で玉野の投入は以前自分が試験で間違えて書いた『泣き面蹴ったり』という言葉がまさに当て嵌まる状況だった。そして予想通り美紀は暴走を始める。

「アキちゃ　　吉井君！　　浮気は駄目！　　そんなの私は認めないから！」

「落ち着くんだ玉野さん！　　とりあえず君は僕の事を心の中で『アキちゃん』と呼ぶのをやめる事から始めよう！」

「大丈夫。私は落ち着いてるよアキちゃ　　総受け君！」

「ねえ君なんて呼んでるの！？　　心の中で僕の事をなんて呼んでるの！？？」

「総受け君は坂本君への永遠の愛を貫くって決まってるの！」

「よせ玉野！　　この展開に俺を巻き込むな！」

「アキ……？　　浮気ってどういう事……？？」

「僕にはサツパリ……」

「アキちゃ　　子猫ちゃんは坂本君のお嫁さんなんだもの！」

ジリジリと明久との距離を縮める美波の表情に明久は戦慄した。

「……………そこまで」

「ムツツリーニ！　　助けてくれるの！？」

Fクラス土屋康太。運動神経に定評のある彼が自分達に味方してくれるのなら100人力だ。

そう、安易に考えていた時期が明久にもありました。

「……………助け？　　勘違いするな。……………明久は俺が殺す」

「本当に味方がいないなチクショウ！！」

クラスのほとんどに追われて初めて気づく。自分にはこんなに敵が多かったのか、と。

「落ち着いてムツツリーニ！ あの噂は君にはほとんど害はないじゃないか！」

無駄だと内心悟りつつ、明久は康太の説得を試みる。

「……………害？ 笑わせるな。これはそういう問題じゃない。そう。これは以前誰かが言っていた事 俺は単純に明久の幸せがムカつくだけだ」

「雄二！ 貴様の台詞の引用だぞ！ 責任取れコンチクショウ！」
「いや。それには俺は同感だからな」

ミシミシと首にめり込む美波の指に明久は自分の命の灯が消えるのを感じる。

「アキ、結局これはどういう事なのかしら？」

聞いてはいるものの話を聞く気など微塵もないように見えるのは自分だけなのだろうか？

いや、諦めてはいけない。千里の道も一歩から。ローマは一日にして成らず。

何事も相互理解のためには対話が必要なのだ。…………時と場合にもよるが。

「あー…………。えーつと…………。とりあえず説明するから一度放してくれる？ このままじゃ呼吸が止まっちゃうよ」

「…………納得のいく説明をしてくれるんでしょっね」

渋々ながら美波は明久を締め上げている手を放す。その瞬間、明久の眼がキラリと光った。

「逃げるよ雄二！」

「なんて予想通りの行動をとるのかしら」

「ぐええええっ!!」

走りだそうとした瞬間、再び首を締めあげられた。

「さあ。覚悟はいいかしらアキ？」

嗚呼、僕は今日ここで死んでしまうんだ……。

明久は諦めて身を委ねてしまおうとしたその時だった。

『天源無想流秘奥義！ 人間砲弾清水美春！ 良い子は真似しない
でねスペシャル!!』

『いやあああああああああああああああああああああああ
っ!!!!』

「な、何!? 美春が飛んでくる!？」

『男なんて！ 男なんて男なんて男なんて~~~~~ツ!!!!』

砲弾のような勢いでDクラスの清水美春が飛んで 島田美波に抱
きついた。

「ちよ、ちよっと美春!? 離れなさい!」

「雄二達のバックアップにまわる。あいつの事だ。そろそろ逆転の策くらい思いついてるだろ」

「思いついていなければ、どうするつもりじゃ……?」

「決まっている。最初の予定通り雄二、明久を生かさず殺さずの割合でボコって事態を強制的に次のフェーズに移行させる。異端審問会の連中は『雄二と明久を肅正した』って事実があれば丸め込むのも簡単だ」

「……」
「さて、それじゃあ行こうか」

大貴が促すが、秀吉は動かず何か考え込んでいる。その様子見て訝しげに首を傾げた。

「秀吉?」

「のう、ヒロよ……。以前から思っていた事じゃが 何故なにゆえ試召戦争にそこまで真剣なのじゃ? お主は元々4月に転入してから巻き込まれただけじゃろうに。ワシの見る限りでは設備向上にそこまで関心があるように見えぬのじゃが?」

「それ聞いちゃう?」

「聞かせてほしいのう」

「……、……オレがいなくなる前にあいつらを勝たせてやりた
いってとこかな」

「いなくなる? どういう意味じゃ!？」

「オレは来年Aクラスに行く。そうしたら、お前らと一緒に試召戦争を戦う事もなくなる」

「……何故じゃ!? 何故Aクラスに入る必要があるのじゃ!
勉強ならAクラスの設備がなくとも出来るであろう! ワシは来年もお主達と一緒にいたいものじゃ!」

「……わかってるだろ秀吉。そんな事は無理だつて」

「……」

「そう言ってくれるのは素直に嬉しいけどな、人は人。自分は自分。ずっと同じ道に行くことは出来ない。オレはAクラスに入って良いところに就職したいんだ」

「就職？ お主の成績ならば進学する事も十分可能じゃろう」

「進学、か……。確かにそれも1つの道だな。けど、オレは早く大人になりたいんだ」

大貴は秀吉の目を見てはつきり告げた。

「大人になって、自立して、自分で稼げるようになって、それで今まで育ててきてくれたジイサンに恩返しをしたい。子供のままじゃ出来なかった事が大人になれば出来るようになる。進学すれば、あと最低4年はジイサンの負担になる。だから進学はしない。元々オレはそのためにこの学園に編入したんだから」

そのためだけにプライドを捨てて烏丸本家がスポンサーをしている学園に編入した。

文月学園は試験校としてありとあらゆる企業から注目を集めている。実践主義の即戦力。

これは文月学園の校風であると同時に昨今の企業が学生に求めるものでもある。

その学園内で『最低クラスからAクラスに入り、優秀な成績を収めた』という実績は大貴の商品価値を高めるには十分だろう。

そして 試召戦争での勝利は自分の凝り固まった歪んだ心を振り回してぶち壊してくれた明久達へのなよりの恩返しだ。

彼の信条は『恩も恨みも忘れない』。

恨みを買った人間への報復は決して忘れないが、同時に恩を受けた相手への助力も惜しまない。

良くも悪くもそういう人間なのだ。

だからこそ大貴はAクラス打倒を目指す。

修介への恩を返す為に。

明久達の願いを叶える為に。

自分の信条故に。

例え優子と戦う事になろうとも。

「…………寂しくなるのう」

「…………それがオレの選んだ道だ」

「…………姉上はその事を知っておるのか？」

「…………折を見て話すつもりだ」

「……………」

「さて話は終わりだ。そんじゃ、いくぞ」

「…………う、うむ」

……………

大貴SIDE

無想で明久達の気配を感知して新校舎へ走った。

明久、雄二、異端審問会のメンバーに気づかれぬようにFFF団の覆面を被り離れた場所から様子を窺った。

『アキ…………。瑞希と同棲っただけでも許せないのに、ウチを差し置いて告白されたとか、木下に興味があるとか、坂本と愛し合っているとか　許せない…………！　絶対に許せない…………ッ！』

島田の殺気に当てられて全力で逃げたしなくなったが、なんとかこらえる。

一先ず見つからないように身を隠した。

明久達が独力で切り抜けられるなら、そうした方がいい。下手に手を貸すとオレが暗躍している事にムツツリーニが勘付くかもしれない。

『無理！ 絶対無理！ あんな状態で話を聞いてくれるはずがないじゃないかっ！』

『いやいや。お前を殺すだけで話を聞いてくれる貴重な相手だからな。ローリスク・ハイリターン。これほど都合のいい相手はいないだろ』

雄二。仮にも共犯者を売るなよ。そんな事ばかりしていると、その内味方に背中を刺されるぞ？

『それじゃあ島田。明久を処刑した後ゆっくりと話を聞いてくれ』
『仕方がないわね』

『だ、誰かーっ！ 誰か助けてーっ！！ ここに通り魔がいますーっ！！』

『バカねアキ。こんな授業中に人なんて通る訳ないじゃない』

『み、美波落ち着いて僕の話』

『ごちゃごちゃうるさいわね！ 生きたまま脳髓を引き摺りだされなくなったら、大人しく腰骨を砕かれなさい！』

『美波！ その発言は女子としてどこるか、治安国家に暮らす人間の発言としてアウトだ！』

治安国家なんて難しい単語よく知ってたな。というツツコミは置い

といて、ヤバくなりそうなら、助けるか……？

『助けて雄二！ パートナーの最大の危機だよ！』

『生きたまま脳髓を引き摺りだされる人間を見るのは初めてだな』
『その発言も人間としてアウトだ！』

オレも大概悪党だって自覚はあったが、雄二には及ばない事を知る
今日この頃。

『さあ、覚悟しなさい！』

『待つて！ 皆のアイドルアキちゃ 吉井君を放して！』

「 ツ！?!?!?!? 」

「 ど、どうしたのじゃヒロ？ 顔が真っ青じゃぞ!?!? 」

『 た、玉野さん。なんでここに? 』

『 アキちゃ 吉井君……。昨夜眠れなかったから朝起きられなくて、遅刻しちゃったんだけどこんな場面に出くわすなんて……。』

「 玉野はやばい。玉野は無理。玉野は駄目だ……。ツ!?! 」

「 な、何があったのじゃヒロ!?!? 玉野がどうしたのじゃ!?!? 」

『 アキちゃ 吉井君！ 浮気は駄目！ そんなの私は認めないか

ら！」

『落ち着くんだ玉野さん！ とりあえず君は僕の事を心の中で『アキちゃん』と呼ぶのをやめる事から始めよう！』

『大丈夫。私は落ち着いてるよアキちゃ 総受け君！』

『ねえ君なんて呼んでるの！？ 心の中で僕の事をなんて呼んでるの！？』

『総受け君は坂本君への永遠の愛を貫くって決まってるの！』

『よせ玉野！ この展開に俺を巻き込むな！』

『アキ……？ 浮気ってどついう事……？』

『僕にはサツパリ……』

『アキちゃ 子猫ちゃんは坂本君のお嫁さんなんだもの！』

「落ち着いたかの？」

「あ、ああ。悪い」

「……お主と玉野の間に何があったのじゃ？ ……もしや、浮気では」

「ちよつと待とうか秀吉クウウウン！！ 根も葉もない嫌疑をオレにかけるのは止めてもらおうか！ 優子の耳に入ったら半殺しにされる！」

「つていうか、玉野が相手なんて死んでも断る！」

「尻に敷かれておるのう……」

「放っておいてくれ……。大体オレが玉野を苦手な理由の半分は優子にあるんだぞ！」

「どついう事じゃ？」

「……優子と玉野に挟まれて4時間にわたるBL談義をひたすら聞かされ続けるという悟りを開けるレベルの苦行を強いられた」

『アキ、結局これはどういう事なのかしら?』
『あー……。えーっと……。とりあえず説明するから一度放してくれる? このままじゃ呼吸が止まっちゃうよ』
『……納得のいく説明をしてくれるんでしょ?』
『逃げるよ雄二!』
『なんて予想通りの行動をとるのかしら』
『ぐええええっ!!』
『さあ。覚悟はいいかしらアキ?』

手詰まり、か……。仕方ねえ、やるか。

「清水いるんだろ?」
「清水? 何を言っておるのじゃヒロ?」
「……よくわかりましたわね」
「ツ!?!?!?!?」

突然背後から現れた清水に秀吉は眼を白黒させた。

「気配の消し方が甘い。オレを殺りたいんだったら、もっと気配を消すだけじゃなくて周りの気配に紛れる事を心掛けな」
「べ、別に美春はあなたを狙った訳では」
「まあ、それはどうでもいいとして、」
「美春の話最後まで聞きなさい!」
「昨日言ってた借りを返してもらおうか」

そう言っただけでガシツと清水の両肩を掴んだ。

「な!?!? か、烏丸大貴、美春に何を!?!?」
「何をつて、決まってるだろ」

『雄二逃げるよ!』

『チツ、生き延びたか……!』

『雄二、絶対後で殺すからね!』

その間に明久と雄二は逃走に成功し、玉野はそれを追う。

まあ、玉野は直接的な攻撃力はないから大丈夫だろう。……………精

神攻撃の方は知らんが。

あいつらはオレの数倍図太いから多分大丈夫だろ。

『玉野さん!? どうしてついてきてるの!?!』

『??? あ……。そっか、そうだよな。ごめんねアキちゃん』

『ついにアキちゃんから言い直す事すらしなくなっちゃった!?!』

『うん。坂本君と2人きりになりたいって、そういう事でしょう?』

『ごめんね気が利かなくなつて!』

『おい玉野! 頼むからこれ以上俺をそのおかしな話題に巻き込まないでくれ!』

『玉野さん! 僕と雄二は本当に何もなければね!』

『ツンデレ!? ツンデレ受けなのアキちゃん!』

『い、いや。そうじゃなくて』

『いいの! わかってるから! 世間の目は色々と厳しいかもしれないけど、私と 優子ちゃんと烏丸君は応援してるから!』

「……………」

「……………」

「……………胃が、痛くなってきた……………」

「……………ドンマイじゃ……………」

第108話 仲間割れほど不毛な争いはない

NO SIDE

文月学園3-Aの教室。烏丸修兵は鼻歌を歌いながら2年の校舎で行われている試召戦争の推移を観察していた。

「ごきげんですね」

「小暮さんか。どうだいCクラスの代表の様子は？」

ニコリと愛想のいい笑みを浮かべて同じクラスの小暮葵に聞く。彼は人と話すときは笑顔を心がける。笑顔は対人関係を築く為に必要な要素だ。例え作り笑いで、意外に分からない。修兵は物心つくまえから烏丸本家の中で次期当主として期待をかけられて育ってきた。そして修兵はその期待に応えるかのようにみるみるうちに頭角を現した。勉強もスポーツも武術も彼に敵う者などいない。周りは彼をもてはやし、そして畏怖した。そうして彼の心は周りの反応と反比例して冷めていった。

飽き飽きだ。

何度心の中でそう毒づいてきたかわからない。

望まぬ孤高。強さ故に孤独。

烏丸本家という作品を完成させる為のパーツ。それが烏丸本家で彼に課せられた役割。

次第に心は揺れず、彼の世界はモノクロへと変わっていった。

努力があるから達成感がある。しかし彼には溢れるほどの才能がある。
努力しなくても何でも出来るからこそつまらない。
皆がしゃかりきになっているものすべてがつまらなく見える。
溢れるほどの才能を持ちながら、それをぶつけられるだけの対等な
相手がいない。

ああ、退屈だ。

ここ数年心の底から笑える事なんて何もなかった。

くだらない母親の期待に応え

くだらない本家の連中に愛想を振りまき

くだらないコバンザメのような連中のおべっかの相手をして

そんな山も谷もない平坦な人生。そんな人生が続くのかと思っ
た。

しかし、出会ってしまった。烏丸大貴に。

自分の全てをぶつけられる。対等に渡り合える可能性を持った相手

に生まれて初めて出会った。世界が総天然色に切り替わった。

烏丸大貴だけではない。

Fクラスの代表であり神童の称号をあえて捨てた男・坂本雄二。

ワイルドカード・姫路瑞希。

演劇バカ・木下秀吉。

ボコデレ・島田美波。

ムツリーニ
寡黙なる性識者・土屋康太。

そして最大のイレギュラー・吉井明久。

この学園には本当に面白い人が多い。

「友香さんは Cクラスの代表は今情報収集に専念しています」
「情報収集？ 何故？ あれだけ追い込んだのなら後は彼らに追い
打ちをかけるだけでは？」

「烏丸君。彼が友香さんに何か吹き込んだみたいです。そのため友香さんは情報収集に専念せざる得ないそうです」

「なるほど。『畏がある』とでも吹き込んだのかな？ その後自軍の戦力を相手に示せばそれなりに真実味が出るはずだ。その情報はハツタリだよ」

「何故ハツタリだと？ 実際に烏丸君は昨日の夕方DクラスとEクラスに交渉に行っていたという情報もあります」

「この状況での一発逆転なんてあり得ない。仕掛けをする時間が全く足りない」

「一発弱点の策を用意するには大掛かりな仕掛けと時間が必要だ。準備に時間をかけた分だけ策は強力で派手になる。」

「だとすれば大貴の流した情報は時間稼ぎのハツタリしかないよ」
「しかし、」

「小暮さん。勘違いしてはいけないよ。大貴は超人でも無敵でも何でもない。等身大の人間だよ。準備する時間が少なければ少ないほど大貴に出来る事は限られてくる」

「……………」

葵が大貴を警戒する理由は分かる。以前行った肝試し。

そこで大貴が行ったまるでマジシャンのイリュージョンのように鮮やかな一発逆転劇。

それが鮮明に印象に残っている為、『烏丸大貴』の本来の姿を見誤らせている。

「至急Cクラスの代表にFクラスを攻めるように通達した方がいい。時間との勝負だよ。時間を与えればFクラスが持ち直すかもしれない」

「わかりました。そのように」

葵は優雅に一礼して教室から出ていった。

「さて大貴。君はここからどう動く？ ふふふ」

状況をより面白くするための雑務を終え、誰も居なくなった教室で修兵は静かに笑った。

.....

『いたぞ！ 吉井と坂本だ！』

『殺せえッ！！』

「また来たよ雄二！」

明久雄二を追つてもはやお馴染みとなった怒号が校舎で弾ける。

「2階も囲まれ始めてるし、上か下に逃げ」

「いや。ここで迎え撃つ」

「え？ どうして！」

ここで逃げなければ袋小路に追い込まれてしまうだけだ。それは明久にでもわかる。

それを雄二がわかっていない訳はなかった。遂に自棄になったのか。明久の問いに雄二は不敵な笑いで応えた。

「この勝負で勝つためだ。いいか明久。ここが正念場だ」

「正念場、ね」

このままじゃジリ貧なのは確かだ。それならコイツの考え、乗って

みるのも悪くない。

「オツケー。ここはお前の作戦を信じるよ雄二！」

「どうせ他に手が無いくせに偉そうに言うな！ 根性入れる明久！」

「そつちこそ！」

『『『死ねやボケがあアアツ！！』』』

「こんな所で死んでたまるかあアツ！！」

圧倒的物量で向かってくる相手に気圧されないように雄叫びをあげて突っ込んだ。

相手から繰り出される攻撃を明久が防御し、雄二が攻撃してクラスメイト達を倒していく。

『木下を返せ！ アイツは俺のだ！』

『さつきは島田と宜しくやってたらしいなあ吉井明久ああつ！』

『なんでデメエみたいな馬鹿に姫路が……ッ！』

床に沈めていった異端審問会のメンバーはゾンビのように何度も何度も立ちあがって来た。

そんなB級ホラー映画の様な光景を目の前に背筋に寒いものを感じる。というか怖すぎる。

「雄二いつまでこうしてればいいのさ！」

「うるせえ！」「ちや」「ちや言わずに目の前に集中してろ！」

雄二は視線を襲撃してくる相手から逸らさずにヤケクソ気味に叫んだ。

どんどん数が増えて来る敵の対応に雄二も一杯いっぱいなのだ。

「追いついたわよアキ……！ さつきはよくも恥ずかしい思いさせ

てくれたわね……ッ！」

「ええ〜……。あれは僕がやった訳じゃ」

「……さつき預けた命、貰い受ける」

「ムツツリーニ。テメエも生きてやがったのか……ッ！」

あわよくば鼻血で沈んでくれたら儲け物と考えてはいたが、まさかのノーダメージに雄二は齒噛みした。ムツツリーニこと康太は不敵に笑い肩から下げていたクーラーボックスを床に下ろして開いた。

「……既に処置済み」

「輸血パツク！ クソツ！」

『島田とムツツリーニだ！』

『離れる、巻き込まれるぞ！』

『他の連中は全員で坂本を狙え！』

ボス級^{クラス}2人の登場に狂ったように猛っていた異端審問会FFF団は道を開けて雄二にターゲットを定める。

「アキ！ アンタ馬鹿のくせにどうしてそんなにモテるのよ！？」

ウチなんて思いつきり男子に敬遠されているっていうのに……！」

「その分女子に人気があるからいいじゃないか！」

「いい訳ないでしょ！」

「……明久、お前の所為で俺まで妙な噂を……ッ！」

「うわつとッ！」

無表情で血涙を流しながら投擲したボールペンを明久は体を転がして回避。

そのままなんとか説得を試みた。

「落ち着いてムツツリーニ！ 話せばわかる！ 今流れた噂は根も葉もないデマなんだ！」

接近戦の美波と遠距離からボールペンやシャーペン、拳銃はコンパスやハサミまで投擲してくる康太の攻撃を避けながら、自分の無実を訴えるが

「根も葉もないデマって……ッ！ そんな酷いアキちゃ 吉井君！ 私本気で告白したのに！」

突然何処からともなく現れた玉野美紀の発言ですべて台無しにされた。

その上発言の内容が火に油を注ぐどころか、火に爆弾を放りこむ程の内容だ。周りが殺気立つのは無理が無かった。

「だから玉野さんはどうして必要のない所で姿を見せるの！？ 実は小山さんに頼まれて僕を狙っていたりするの！？」

「アキ、隠し事したりするから信用をなくすのよ？」

「……………殺したいほど、妬ましい」

動きが加速し、残像まで見えてきた。あな恐ろしや。嫉妬の力はここまで人の力を引き出すのか。

「はあ、はあ。追いつきましたよ明久くんっ」

「姫路さん！？」

拙い！ と明久は心の中で頭を抱えた。姫路瑞希は運動が不得意で足も速くない。むしろ遅い。その彼女がここにいるという事はフクラスのはぼすべての戦力がここに集中していると考えていい。

「充分だ明久！」

「待ってましたあつ！」

「跳ぶぞ！」

「オーケー！」

「アイ・キャン・フライイツ！！！」

楽しげに2階から飛び降りる明久と雄二。二階程度の高さなら彼らにとつて難しい事でも何でもない。

ダダンツ！ と軽く着地をこなす。足に走る衝撃が突き抜けるが怪我はせずにすんだそうだ。

『野郎！ 外に逃げるとは汚い真似を！』

『二階ならすぐに追いつく！』

『ひ、酷いです明久くん！ やつと追いついたのに！』

追いつかれないうちに走りだす。

「そろそろ放課後だよ！ どうするの雄二！？」

「このままアイツを味方に引き入れる！」

「アイツ？ ヒロは今回僕たちの味方に付かない筈じゃ」

「いや。ヒロじゃない。この騒ぎで大きな動きを見せていないアイツだ」

「つて事は」

「ああ。秀吉だ。アイツをこっちの味方に引き入れる」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「そろそろ時間だな」

「本気でやるのかの？ 少しくらい負けてやっても良いと思うのじやが……」

「それは駄目だ。雄二が事態を收拾するための方策を打ち出すまではバックアップ以上の事はしない。これはオレが自分に課したルールでもある」

今ここで大貴が彼らを助ければ事態の收拾は可能だろう。雄二、明久、大貴とFクラスきつての武道派3人が組み反対勢力を潰してしまえばいい。土屋康太にしてもこちらの味方につける為の策はあるし、美波は口車に乗せて制止させればいい。

しかしそんな戦力を削った状況でCクラスに勝てるか？ と聞かれればNO答えるしかない。小山やそのバックにいる3年はそこまで戦力を削がれた状態で勝てる程甘い相手ではない。だからこそ大貴は情に流されないように自分に縛りをかけた。

雄二が戦力を欠く事なく騒ぎを鎮静化させる手を打つまで、何があろうともバックアップだけ。出来なければ傷口が浅いうちに少ない犠牲で解決できる策を実行する。

そして秀吉には言わないが、これは坂本雄二の将として器を測るいい機会でもある。

自分で招いた危機すら解決できないようなら、自分の将として相応しくない。

自分の大将は自分が付いて行きたくなるような男であるべきだ。

逆にこの危機を乗り越えられるだけの器があるのなら、自分は何があるうともFクラスで過ごす残り時間坂本雄二を自らの大将と定め、彼の目的の為に尽くそうと。

「つと、姫路！」

「あ、烏丸くん」

走る瑞希を呼び止め、息切れしていた彼女に飲み物を差し出して落

ち着かせた。

「で、そんなに慌ててどうしたんだ？」

「あ、そうでした！ 早く行かないと明久くんが坂本くんと拳式を挙げちゃいますっ！」

大貴と秀吉の脳内でウエディングチャペルの鐘がリーンゴーンと鳴る音が。

「待て待て待て。落ち着けて。何を言っただお前？ 御覧、秀

吉。お前の所為でとんでもない誤解が発生してるぞ」

「……………（プイ）」

大貴がジト目で秀吉を見ると秀吉は罰が悪そうに顔をあさつての方向に逸らした。

溜息を一つついて瑞希に事情を説明し始めた。

「姫路、今流れてる噂なんだが、かくかくしかじか」

「まるまるつまつまですね。って漫画じゃないんですからそんな説明じゃわかりませんっ」

……………

「…ってなわけだ」

「そ、そうだったんですか……。私、明久くんが遂に目覚めちゃったのかと」

「そっち方面に目覚めてたら今頃あのバカ野郎は久保と掘った掘られたの関係になってるって」

「けど、坂本くんじゃなければダメっていう可能性も」

「ないつて。無いから。雄二のバカは霧島一筋だろ」

「そ、そうですね……」

「それでも不安なら一緒に住んでんだろ？　ちゃんと話をしてみたらどうだ？」

「は、はい」

「で。本題なんだが、あいつらが何処に向かつてるんだ？」

「あ、はい。皆の話によると、明久さんと坂本くんは教室に向かったって」

「教室、か……」

時計を見る。時刻は15時34分。タイムリミットまであと26分。

「そろそろ、か……」

「え？」

「とにかく家に帰ってからゆっくり話してみる。なんなら色仕掛けで迫った後押し倒してしまえ」

「お、押し倒　ッ!??!?」

ボシューッ！　と顔を真つ赤にする瑞希を見て大貴は微笑ましく思い、微笑を浮かべた。

「秀吉。先に教室に行っていてくれ。オレはEクラスに接触したあとに行く」

「了解じゃ」

.....

「そんなわけで秀吉。協力してくれ」

「……協力するのは構わんのじゃが、この状況は苦しいのではない

のかの？ お主らに勝ち目があるとは思えん」

「それでもだよ。例え99割不可能といわれても残された可能性で」

「それ可能性残ってないからな」

「8代生まれ変わっても不可能じゃな」

「違った。99%だ」

「まあ、この明久バカの言う事はとまかく秀吉が協力してくれるなら勝ち目はある。この騒動、クラスの連中の誤解さえ解ければ何とかなるからな」

「じゃが、誤解を解くといってもそうそう信じてもらえるものでもないじゃろっ」

「別に真実を信じさせる必要はない。要はクラスの連中が敵対しなければいいだけなんだからな」

「つまり、クラスの者が信じやすい嘘で上書きするというワケかか？」

「おう。そういうこった」

「して、ワシは何をすればいいのじゃ？」

「ああ。誤解を解く為に一方的にこっちの話を聞かせる必要があるからな。その為には」

.....

『いたぞ！ 教室に戻って来てやがる！』

『木下を誑かそうとしてやがる！ こんな状況で随分余裕じゃねえか！』

『殺っちゃうヨー 骨も残さず殺っちゃうヨー』

「ヤバイ！ もう追手が！ 何処に向かえばいいのさ雄二！？」

「クソッ！ 思ったより早えな！ 本当は二階の放送室に向かいたかったんだが」

「ここから下に向かうのは無謀じゃな」

「だよね！」

チラリと時計を見ると時刻は午後4時を過ぎていた。

大貴との約束の時間を過ぎている。と、いう事はここからは烏丸大貴という最も厄介な敵を相手に立ち回りを繰り広げなくてはならない。

「兎に角教室をでるぞ！　ここに留まっても逃げ場がなくなるだけだからな！」

「了解っ！」

カッターナイフの飛び交う廊下を明久、雄二、秀吉はひたすら走り抜けた。

廊下に置いてあった掃除用具入れやバケツ、その他諸々を倒し、足止めするが嫉妬のあまり身体能力が跳ね上がっているクラスメイト達に対して効果は薄かった。

「雄二よ、放送室を目指すという事は放送機材があればいいのじゃない？」

「ああ！　直接顔を合わせずに話を聞かすにはそれが一番だからな！」

「ならば屋上じゃ！　あそこになら放送機材がある」

「でも屋上の放送機材って前に僕と雄二が壊さなかつたっけ！？」

「体育祭の時に使っておつたから修理は終わっておる！」

そうと決まれば三段飛ばしで階段をすつ飛ばし駆け上がる。屋上まであと一階。

そこで雄二は尤も厄介な敵と対峙した。

「ヒロ……ッ！」

烏丸大貴が木刀を携えて雄二達を待ち構えていたのだ。

「……………」

「クソツ！　ここまでか……ッ！」

木刀を持っていない状況なら勝ち目はあった。しかし、本格的に剣術を納めている大貴相手に喧嘩で慣らしているだけの雄二が勝てる筈がない。

「何をボーっとしている。さっさと行け」

「……………え？」

間抜けな声を洩らしたのは明久だ。自分達は時間内に事態を收拾する事は出来なかった。

その場合、大貴が彼らを生かさず殺さずの割合で処刑する事で話についていた。

大貴の真意が分からず雄二は眼を丸くする。

「足止めしてやるって言うてんだよ」

「でも僕たちは時間内にクラスの皆を説得できなかつたし」

「オレが言ったのは『時間内に方策を打ち出せなければ』だ。目的地があるって事は何か策を思いついたんだろ？」

「ああ」

「それなら、さっさと行つてこのバカ騒ぎを終わらせて来い」

「でも、それじゃあヒロが」

『『『殺せエエエエエエッ！！』『』』』

「さっさと行け！」

「……………ッ！ わかったよ。ヒロも気を付けて！」
「頼むぞ」

振り返らず階段を駆け上がっていく明久達を見送り、大貴は困ったように笑った。

「まったく、あのお人好し共め。人の事心配している場合じゃないだろうに」

侮蔑の言葉とは裏腹にその声は優しく、表情は穏やかだった。

『烏丸あ！ そこを退きやがれっ！』

「断る。オレがあいつらに付いた以上、ここから一步たりとも先に進む事は出来ると思うな」

ゆっくりと木刀を構え、今日何度目になるかわからない無想を使う。

『いいから退　　ッ！！』

そこから先を須川が言う事は叶わなかった。大貴は一気に須川との間合いを詰め、喉元の触れてはいない、だが離れてもいない位置に木刀の切っ先を突きつけた。

須川の額に冷や汗が流れる。

これ以上ないほどの精密な太刀捌き。それは須川始め、異端審問会のメンバーを怯ませるには十分な効果を発揮した。

「どうしても通るといふのなら　それなりの覚悟をして貰おうか」

緩やかで、それでいて隙のない動き須川の喉元から木刀を引き、左手に刀身を納めながらハッキリと言う。

静まり返った廊下には大貴の声がよく響いた。

『じよ、上等だ！　まずは裏切り者として貴様から断罪してやる！』

「ハッ、出来るモンならやってみな！」

『『『裏切り者には死の制裁を！！』』』

挑戦的な物言いにFFF団のメンバーは殺気立って得物を構え、突撃した。

大貴は寄せ来る異端審問会FFF団を迎え撃つため刀身を納めたまま半身に構える。

木刀の柄と鉄パイプが交錯し、戦闘開始の狼煙となった。

第109話 ネクストステージ

NO SIDE

大貴と異端審問会が交戦を開始してから5分。その場には誰一人として倒れていなかった。

須川は荒い息を整えて鉄パイプを構えた。

大貴は静かに息を吐き、木刀を左手に納刀、体を半身にしてゆつくりと左腕を前に突き出し、ボクシングを彷彿とさせる独特の構えをとった。普段大貴が使う剣術の構えとは違う異質なものだ。大貴の放つプレッシャーに耐えかねたジリジリと下がる。

ヤケクソ気味に氣勢の声を張り上げて、凶器を力いっぱい握り締め殴りかかった。

反応。反射。踏み込み。軌道。速度。攻撃入射角。視線。体の重心。呼吸。合気。

全てを見極めて迫りくる凶器の軌道に納刀した木刀の柄を交錯させ柄を割り込ませ、相手の力を殺すことなく軌道を捻じ曲げた。

鉄パイプは大貴に当たることなく振り切られ、グリーンツ！！と須川の体が勢いそのまま廊下に転がった。防がれたなら手応えがあるはずなのだが、それすらない。

まるで相手の体をすり抜けたような不思議な感覚だった。

もう何度目かわからない感覚を前に須川は悔しさのあまり歯噛みする。

どんな強力な一撃も、幾多の連続攻撃も大貴には届かない。

大貴は素早く位置を取り直し、半身になり納刀したまま左腕を真っ直ぐに突き出した。

この構えは大貴が修めている天源無想流の中でもその異質さと他流試合に向かない為ほぼ形骸化されてしまった構え。『鞘の中の勝』

つまり『刀を抜かず、相手を殺さず制圧する事』を目的としている。その性質故に攻めよりも守りに長けており、先読みによる見切りや返し技などの守りの剣技を最も得意とする大貴はこの技を鉄壁と呼ぶに相応しいまでに昇華していた。

『『死ねええええっ！！！！』』』』

次々と繰り出される攻撃。振り下ろされる鉄パイプの軌道を捻じ曲げ、殴りかかる相手を鞘当てでやり過ごし、投げつけられる鈍器を抜刀して弾いた。

雄二と明久と秀吉が事を成す為に時間を稼ぐという目的のために攻撃は最小限にとどめる時間稼ぎの持久戦。状況は膠着状態に移行していた。

よし。このまま雄二達が状況を何とかするまで、

ツ！？

『撤退！ 撤退！ 島田が来るぞ！ 巻き込まれなくなかったら下がれっ！！』

「島田。いい加減しつこいなお前も」

「いきなりモテはじめて調子に乗ったアキを再教育するまで止まる訳ないでしょう……！」

「っていうかよ島田。お前と明久ってとどのつまりただの友達だろ？」

大貴の発言の『ただの友達』の部分で美波の表情が険しくなる。一応表情の変化には気づいていたが、敢えて無視して話を進める。

「それなのに、『姫路と同棲していた制裁』や『明久がモテているからム力つく』って理由であいつを追い回すってのはどうなんだよ

「？」

「ち、違うわよ！　ウチはただウチが学校の男子に敬遠されているのに、バカのアキがモテるのが気に入らないだけよ！」

「それ、本気で言ってるのか？」

「うう……」

「まあどつちにしても男子に敬遠されるのが嫌ならその口より先に手が出る癖を直せ。そうすれば、今より少しマシになるはずだ。それ以外のところはお前が明久に怒る権利なんかねえよ」

「なんでよー！」

「わからないのか？　お前が明久の彼女だっというなら今回の一件で怒る権利はあるだろうよ。けど友達でしかないお前に明久の恋愛事情に口を挟む資格なんてないだろ。そのくらい分かれ。嫉妬するのは勝手だ。けどな、自分の気持ちをハッキリ伝えられない奴が嫉妬心を相手にぶつける権利があると思うな」

「……………　そ、それでもウチは許せないのよっ！！」

「反省の色なしか」

最高潮に苛立った溜め息をついて右手を高らかに天に掲げてパチリと指を鳴らした。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

しかし、何も起こらない。

「何やってんのよアンタ……………」

何が起こるのか、と身構えていた美波は拍子抜けしたように肩の力

が抜けた。

大貴はがちよいちよいと人差し指で自分の後ろを指差している。美波が指の動きにつられるように後ろを振り向くと、

「オネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマ」

既にトランス状態の清水美春が美波のすぐ後ろに。これには流石の美波も本気で悲鳴を上げ、一にも二にもなく逃げ出す。清水美春も美波を追う。すれ違ったときに彼女の周りの空間が邪悪さのあまり歪んで見えたのは決して気のせいではないだろう。

「バイバーイ」

「あんだ後で覚えてなさいよおおおおおっ！！！！」

「悪い。もう忘れそう。あー、忘れた」

見送りハンカチ片手に満面の（似非臭い）笑顔で見送った直後。背中に寒いものを感じ、反射的に後ろに飛び退いた。カカカッ！！ という音と共に大貴の立っていた場所にボールペンやコンパスが突き刺さっていた。

こんな芸当ができる奴は

「第二弾はお前か、ムツツリーニ」

「……………裏切り者には死の制裁を……………！」

Fクラス指折りの実力者。ムツツリーニこと土屋康太がカッターナイフやボールペン、コンパスを構えた。裏切ったも何も最初から仲間のつもりはないけどなあ……………。と心の中で突っ込みつつもダメも

とで説得を試みてみる。

「落ち着けムツツリーニ。オレの話の聞けよ」

「……………裏切り者と交わす言葉はない！」

大貴に狙いをつけ、第二波を投擲。抜刀し攻撃を全て叩き落とす。

「やっぱりダメか」

怒涛の連続攻撃を弾き、避けつつも反撃を試みるが、康太は巧みにFFF団を壁にして大貴の接近を許さない。

飛び道具の康太。近距離の大貴。2人の相性はお互いに最悪。それゆえに一度劣勢に追い込まれると逆転は難しい。格下ならともかく、康太ほどの手練の攻撃とFFF団の攻撃の間隙を縫って間合いを詰めるのは不可能に近い。

しかし、そこは発想の転換だ。何も康太相手に勝利を納める必要など何処にもないのだ。

「ムツツリーニ！ 最近工藤とはどんな感じだ！？」

「……………??? 何の事だ？」

康太は大貴の言葉の意味がわからないと言わんばかりに首をかしげる。

それでいい。康太自身に意味がわからなくても、彼の壁の役割を果たしている須川たちが大貴の発言を邪推してくれればいい。

『どついう事だ烏丸？』

「あれ、知らねえのか？ ムツツリーニはAクラスの工藤愛子と親密な仲にあるって事を」

「……………?!?!?!?」

有罪判決が下り、FFF団は康太を取り囲み武器を構える。

「はははっ！ 四面楚歌だなムツツリーニ！」

「……………ヒロ、貴様……………ツ！！」

「選べ！ オレとコイツらを同時に相手にするか、
オレと
共闘するかっ！」

「……………ッ！……………貴様は後で殺す……………ッ！」

「出来るモンならやってみな！」

互いの死角をなくすように背中あわせに構えて再び乱戦へと突入した。

……………
……………
……………

文月学園旧校舎の屋上。烏丸修兵は薄い笑みを浮かべながら双眼鏡を使い、大貴がFクラス名物・異端審問会と交戦しているところを見物していた。

「あれが、無想か……………」

大貴の動きにキレが増している。意識する前に体が自動的に初動に入っている。

太刀筋に迷いがなく、一つひとつの技が冴えている。

天源無想流奥義無想。烏丸大貴が会得している究極の集中。
しかし。

「未完成だな」

修兵は短く嘆息しながら言う。

大貴の無想をまず見て思った事は不安定すぎる、という事だった。本物の無想はあの程度のものではない。

修兵は過去に本物の無想を見た事がある。

烏丸修介。

2年前、修兵は暇つぶしに武道を始めた。

彼は初めて2ヶ月で速くも頭角を現し、道場にいた門下生を全てこぼう抜きしてしまった。

その中で彼が出会ったのが指導に訪れていた烏丸修介だった。

地力では勝っていた。剣速。力。体捌き。全てをおいて修兵は修介を上回っていた。

しかし、完膚なきまでに叩き潰された。

初動。開始直後。修介の間合いの外から飛び込み、面を狙った。修介は自分の動きに対応できておらず、勝ちを確信していた。

次の瞬間。面を取られていたのは自分だった。

訳がわからなかった。先に動いた自分が後から動いた修介に先手を取られた。

混乱している内に彼は二本目を取られ、敗北した。

あの時、修介が使っていた技に比べれば大貴のあれは無想の紛い物だ。

完成には程遠い。

今となつては老いの所為か、かつてほどの力を失った修介に勝つ事は赤子の手を捻るほど簡単だったが、ステップを一步飛ばしたような『しこり』は修兵の中に未だに燻っている。

それゆえに無想の紛い物を使う大貴への失望感が大きかった。

そんな感情を抱きながら修兵は平坦な表情を浮かべ、何も言わずに大貴と異端審問会との戦いを眺め続けていた。

.....

.....

『殺っちゃうヨー 原型もとどめず粉々に殺っちゃうヨー』

『殺滅踏酷苛罵蹴殴折刺割斬叩縛潰打極投？轢……！』

『グルルルル……ッ！ よし、い……ッ！ さ、かもとクロス……ッ！』

「別働隊じゃと！？」

「いや、違う！ 狂戦士化した奴らが指揮系統を離れて俺達を追っているんだ！」

「放送室まであとちょっとだっていうのに……ッ！」

浅い息を吐きながら明久と雄二は秀吉を庇いながら思わず後ずさる。普段の状態なら明久、雄二が負ける事などあり得ない。

しかし、眼の前にいるのは理屈を不条理で捻じ伏せる力を持った対峙するだけで死を予感させる怪物達だ。そして、目的としている放送機材のある屋上は狂戦士の後ろのドアを潜らなければ辿り着く事は出来ない。

下では大貴が敵の足止めをしてきているが、暴徒と化した彼らを長い時間抑えるのは難しいだろう。

ならば やるしかない。

狂戦士と化した彼らを打ち倒し、ここを突破するしかない。

雄二と明久は拳を握り、幽鬼の様な足取りで迫ってくる狂戦士3人に向かい突撃した。

.....

足止めを始めてから約10分。未だに雄二、明久がFクラスの暴動を鎮静化させるための策は実行に移されていない。

足止めに専念していた大貴と康太の体力は底をつき始めており、FF団へのスタンスを『なるべく倒さず現状維持』から『殺られる前に殺れ』にシフトした。

何をやってるんだあいつら……ッ！ 長くは持たねえぞ！

苛立ちながら背後から殴りかかってくる鈴木を蹴り、鞘打ちで顎を打ち据えて行動不能にする。続けて襲いかかってくる武藤を抜刀して一閃。打ち倒す。

時刻は4時12分。

もう少し、もう少しで援軍が来る……ッ！ それまで耐えきれば勝ち目はある！

荒い呼吸。激しい鼓動。とめどなく流れ落ちる汗。鉛のように重い手足。靄のかかったような感覚。無想の効果が切れるのも時間の問題だった。

それでも

まだ、やれる……ッ！

まだ、体が動く……ッ！

まだ、動ける……ッ！

だったら諦めて、たまるかよ……ッ！

我武者羅に。遮二無二に。無我夢中に。彼らは足掻き続ける。

疲れた。苦しい。辛い。

諦めたくない！

ズキン……ッ！ と、頭部に鈍い痛みが走った。

嘘だろ……ッ！

ズキンッ！ ズキンッ！
だんだん痛みが短くなり、鈍い痛みは刺すような痛みへと変化していく。

まさか……ッ！ そんな……ッ！

ズキンッ！ ズキンッ！ ズキンッ！

あと少し！ あと少しなんだ！

ズキンッ！ ズキンッ！ ズキンッ！ ズキンッ！
ズキンッ！ ズキンッ！ ズキンッ！ ズキンッ！
大貴の想いも空しく、無情にも限界は訪れた。

「ぐ、あああああああああああああああつ！！
！！」

頭の芯から響くような激しい痛みで大貴は耐えきれず、倒れ込みのた打ち回った。
視界がぐにやぐにやに歪み、手足に力が入らず、痛みは更に加速していく。

「……………ヒロ！？」

康太は飛び道具で牽制しながら、頭を抱え苦しみながら喘ぐ大貴を庇うように立ちはだかった。

……………
……………
……………
……………

「この程度か……」

溜息をつきながら修兵は呟く。

すっかり冷めてしまった。この程度で潰れてしまふ男に自分の敵に成りうる可能性などある筈がない。

自分の見込み違いであったという失望感と怒り。

まるで長年連れ添った恋人を失ってしまったかのような胸を空く喪失感。

双眼鏡を通して大貴を見詰める眼にはそんな感情が入り混じっていた。

「烏丸大貴。君はつまらない」

遙かに開いた彼我の距離で倒れ伏す大貴に向かって修兵は吐き捨てた。

.....

「ああっ！ うあああっ！ ハッ！ ハッ！ ハッ！ が、あああ
あああああっ！！」

頭の芯から殴られ響くような痛みは大貴は悶える。

無想の限界時間。副作用の緊張型片頭痛。精神と肉体のバランスの崩壊。

苦しむ大貴を庇うように康太は立ちはだかり何人かを戦闘不能に追い込むが、雪崩のように迫る異端審問会相手には分が悪い。

「……………ッ！！」

康太は動けない大貴を引き摺って撤退の準備を始めた。もはや足止めをするどころではない。さっさと逃げないと自分達の身が危ない。

「……ツカヤロー……。見捨ててけ……。お前、だけなら、逃げられる……」

「……うるさい。同盟を結んだ以上、俺にはお前を守る義務がある。……俺は約束は守る男だ。そうでなければ経営者が務まるか」

「……この、お人好しが……」

「……お人好しはお互い様。俺を逃がす為に自分を見捨てるように言ってお前に言われたくない」

「チツ……」

「……正面から突破す」

『全員召喚準備！ 烏丸大貴を討ち取ったあと、速やかにFクラス代表、坂本雄二の首を獲りなさい！』

『『『『おお ツツ！！』』』』

「……ツ！？ 小山友香……ツ！」

Cクラス代表、小山友香がCクラスの生徒達を引き連れて大貴と康太の退路を塞ぐ。

ここでCクラスだと！？ クソツタレが……ツ！ 最悪な状況にまっしぐらじゃねえか……！ ここまで迷いなく戦力を投入してくるって事は誰かの入れ知恵か！？

ふと大貴の脳裏に烏丸修兵がよぎった。

彼なら大貴のハツタリを看破して小山を唆す事くらいの事はやりそ
うだ。

どうする？ オレはもう動けねえ。援護が来るまであと5分ちよい。ムツツリーニだけじゃ抑えきれない！

遠く離れた彼我の距離から視線を感じた。

きつと視線の主は此方の様子を見てほくそ笑んでいるに違いない。

人を見下して、掌で転がして遊びやがって……ッ！

『僕は「烏丸修兵」だ。僕がその気になれば出来ない事なんて存在しないんだよ』

沸々と腹の底から怒りが沸き上がってくる。大貴はガクガクと震える足を奮い立たせ立ち上がった。震える腕で木刀を拾い上げ、壁に体を擡げながら正眼に構える。

立ち上がったからといって、何か出来る訳じゃない。この行動は単なる痩せ我慢だ。

しかし、何もしないで終わらせるほど彼は諦めのいい性格ではない。大貴の最後の意地だった。

「終わりよ。烏丸！」

小山の言葉と同時にCクラスの生徒が一斉に自爆を封じるため数学の召喚獣を呼びだし臨戦態勢に入った。

終わり……？

……違つ。終わりじゃない。まだ終わってない。終わらせやしない。

烏丸修兵。テメエの思い通りになんてさせない。思い通りに

「 なってたまるかああアアアッ！！！」

瞬間。五感のすべてがクリアになった。

頭の芯から響く激しい頭痛は嘘のように治まり、まるで今までかかっていた視界の靄が晴れたかの様に総てが鮮明に映し出され、全身に力が漲り、体中に張り巡らされている全神経が溶け合っているかの様に体を自在に動かす事が出来る。先ほどまでの疲労困憊が嘘のように手足が軽い。

すぐさま迫りくる異端審問会に向かって突撃していく。

正面から横溝が大貴の頭を目掛けて鈍器を振り下ろす。次の瞬間。

鈍器は木刀で粉々に砕かれていた。攻撃に対する反応速度が今までの大貴とは段違いだ。

細かい初動を感知して、後に動いたにも関わらず必ず先手をとる刹那の感覚。以前祖父である修介が龍馬の道場で見せた無想の完成形。

いける……ッ！ これならいける！

大貴は勝利を確信した。

「試獣召喚！！！」
サモン

幾何学的な紋章が床に投影され、黒いロングコートを羽織ったデフォルメされた大貴が十字槍を構えCクラスの生徒達と対峙した。

『 ツー！！ 』

背後から狂戦士キョウセンシと化した会員が大貴を襲う。大貴は狂戦士の懐に踏み込み、膝、肘、肩の順に打ち込み、トドメに左の掌を顎に掠らせた。狂戦士は脳を揺らされ倒れ込む。同時に十字槍を持った召喚獣

が変幻自在に風ぎ、払い、引き、突く。槍の広い間合いを最大限に生かしてクラスの生徒達の召喚獣を寄せ付けなかった。体はただ動くままに反射に委ね、意識は召喚獣の操作に専念させる。今の大貴は暴徒と化したクラスメイトの相手をしながら召喚獣を操作するという離れ業を当たり前のようにやってみせていた。

「今までの様にはいかなえぞ!!」

.....

「ほう？ 遂に到達したか。無想の完成形に」

修兵は再び楽しそうに笑った。

まだ、つまらない。と決めつけるのは速かったかもしれない。と、己の性急な判断を少し反省する。

「いいぞ。そのままその集中を持続させる。それが出来れば、君には僕の敵となる資格を手に入れる」

その先に何がある……？

.....

大貴、康太、大貴の召喚獣。各々の獅子奮迅の働きにより、数で勝っている異端審問会FFF団とCクラスは押し返され始めた。

時間が経つにつれて、大貴、康太のコンビの動きは疲れるどころか生彩さを増していき、付け入る隙が掴めない。対して大貴の召喚獣の動きは若干荒くはあったが、一撃一撃が重く、十字槍の間合いが

抜刀して凶器を真つ二つにへし折り、納刀する。

「……………ノーコメント」

納刀の間隙を縫って襲いかかってくる会員に定規を投擲。額にマトモに喰らい、倒れ伏す。

「照れるなよ。満更でもないんだろ？」

納刀したまま鞘で突き上げ、体を旋回。回し蹴りで相手を後方に弾き出す。

「……………照れてなど……………ッ！」

無表情のまま蹴り飛ばした相手にトドメを刺して大貴と背中を合わせた。

「お前ら、傍から見ると付き合ってる様にしか見えねえけどな」

「……………俺は工藤愛子になど、興味はない」

「まあそういう事にしていてやる、よつと！」

柄で攻撃を受け流し、抜刀。肘と膝を打ち据えて中段蹴り。トドメの一刀両断。最後の一人、須川を倒した。

手加減していた為、狂戦士化していた者以外致命傷には至っていない。が、すぐに回復するほどのダメージでもない。

死屍累々となって呻き声をあげている異端審問会のメンバーを前に大貴と康太は一息をついて、その場に座り込んだ。

『か、烏丸……………ッ！ ムツツリーニ……………ッ！ 覚えている……………ッ！

異端者を庇った罪、必ず清算させてやる……………ッ！』

ボロボロになつた須川が大貴と康太を睨めつけるように見る。

「まあ待て。今回の騒動。お前らは掌で踊らされていたんだよ」

『なん……だと……？』

「今回の騒動にはいろんな奴の思惑が絡まっつていて、お前らはそれに利用されたんだ」

『そんなわけ……ッ！』

自分達がただ、良い様に使われていた事を否定したかったのか、須川が咄嗟に反論しようとした時。ザザザッ！ とスピーカーからノイズが走った。

《あー、あー……。Aクラスの工藤愛子です。Aクラスの工藤愛子です。みんな、ちょっとボクの話聞いてくれるカナ？》

工藤愛子の声がスピーカーから流れ、倒れていたFクラスの生徒達の注意がそちらに向いた。大貴は雄二の策だと当たりをつけて安堵した。

どうやらこれが状況をひっくり返す為の雄二の策略の様だ。

あのドサクサで工藤愛子と接触する事は不可能に近い。なら、これは秀吉の声真似だろう。

《ボクが吉井君の事が好きだつて噂が流れてるみたいだけど、アレは誤解だよ。ボクは吉井君のことなんてなんとも思つてないから。むしろ苦手な男の子つて感じ。だって、吉井君つて経験少なそうなんだもん。ボクの好みはもっと経験豊かで知識が豊かな男の子じゃないと眼中にないんだ。だから告白どころか、告白されても付き合えないかな。ゴメンね》

スピーカーの向こうでポコポコに精神を打ちのめされたバカな友人を哀れに思い、大貴と康太は合掌する。

《美春もあんな豚野郎は大嫌いです！ 家畜如きに恋心を抱くなんて冗談ではありませんっ！ あれならドブネズミの方がまだかわいげがありますっ！ アレに手を触れるくらいなら腐ったミミズのプールに飛び込んだ方がまだマシです！》

《私は吉井君に興味なんて全然ないのっ！ 私が好きなのはアキちゃん！ 女の子の格好をしていない吉井君なんて味のしなくなっただムより価値がないんだから！》

「もうやめてやってくれ！ 明久のライフはゼロよ！」

「……………惨い……………」

《二人とも、そんなことを言うてはいけないよ。僕は吉井君のことが大好きだ。彼の頭の悪いところも、不器用なところも、全てを受け入れよう。好きだ吉井君。大好きだ。キミが受け入れてくれるのなら、僕は政界へと赴き、この国の法律すら変えてみせよう！》

「何故だろう。明久が屋上からの飛び降りを試みてるような気が…

……………」

「……………同感……………」

《べ、別にウチだってアキのことなんかなんとも思っただかから！ ウチが好きなのは チンパンジーとかオランウータンとか、そついう野性味たっぷりのタイプで、アキなんて眼中にないのよっ！》

「あーあ……………。寝た子を起こしちゃまった……………」

「……………誰も幸せにならない……………」

《二年生、Fクラスの姫路瑞希です。私には、好きな人がいます。……でも、それは吉井明久君のことじゃありません。だって、私は小学校の頃から、ずっと他の人が好きで……初恋が、今でも続いているんですから!》

瑞希の振りをした告白を聞いた瞬間大貴の表情が険しくなった。

「あつの、バカが……ッ!」

恐らく明久の指示だろう。彼は優しい人間だ。優しすぎるが故に自分よりも常に相手を尊重しすぎて行動する悪癖がある。今回のこの放送もその結果だろうが、瑞希の事を想い過ぎて瑞希の言葉の真意を見誤らせている。

先程からフワフワと奇妙な浮遊感を感じながら、大貴は憎々しげに舌打ちする。

《Fクラス代表の坂本雄二だ。俺が小山に告白されたという話だが、アレは罠だ。Cクラスの小山がFクラスを嵌める為に流したデマだ。俺と明久の妙な噂と同様にな。だから翔子、なんでも言う事を聞くから許してくれ!》

「あ、雄二が人生の墓場へ一直線」

「……………死ねばいいのに」

《そしてFクラスの皆。ひとまずは勝利を目指そう。その後なら、俺のことは煮るなり焼くなり、好きにしてもらって構わない!》

「あ…………、あとで煮るなり、焼く、なり…………しろって、よ…………」

「……………？ どうした？ 随分辛そう」

無想の限界時間を越えた時に勝る頭痛。立ち眩み。眩暈。酷い倦怠感が付きまとい、自分の体ではないようだ。

『畏……………そういうことだったのか…………。そうだよな。そうでもなければ、アイツらがモテるわけなんかないもんな！』

『卑怯なりCクラス！ モテない坂本や吉井を弄ぶとは！』

『散々追い回され、どつき回されたアイツらの恨みを思い知れ！』

霞む視界。これまでの経験から自分が失神寸前だとどこか冷静な自分な部分が告げている。

ああ、チクシヨウ。体勢を立て直す事が出来てやっとこれからつて時に…………。オレ、ここでリタイアかよ…………。

盛り上がるFクラスの歓声を他人事のように感じながら、大貴は意識を手放した。

……………

「合格」

修兵は獰猛に笑いながら双眼鏡から眼を放す。

一度はさめてしまったが、再び燃え上がった。

最後の完成した無想。あれは良かった。

あの状態の大貴なら自分が全力で戦っても壊れる事はない。

やっつとだ。やっつと…………。可能性が確定事項になった。

烏丸大貴。彼は自分の敵としての資格を手に入れた。

「さて、大貴の器も測り終えた事だし、あとは『タカシロ』に任せようかな」

修兵の整った顔が喜悦に歪む。まるで、お楽しみはまだ終わってないと言わんばかりに。

ひとまず危機を脱したFクラスの前に立ち込める暗雲はまだ晴れる事は無かった。

第8部 完

第109話 ネクストステージ（後書き）

次回は以前依頼が逢った『原石』さん作『バカとテストともう一人の帰国子女』とのコラボをお送りします。

特別編 カラスと帰国子女（前書き）

『原石さん』作『バカとテストともう一人の帰国子女』とのコラボ
です。

それではどうぞ。

特別編 カラスと帰国子女

NO SIDE

「諸君、来るべき決戦の日が迫ってきている」

静かに、それでいて厳かに少年は告げる。

彼に召集をかけられて集結した勇士たちは黙ってその言葉を聞いていた。

「我々は勝利しなくてはならない。全世界の巨乳の為に！ ジークおっばい！！」

『『『ジークおっばい！！！！』』』

「我らの合言葉は巨乳は正義！」

『『『爆乳は神！！！！』』』

「諸君、私はおっばいが好きだ。諸君、私はおっばいが好きだ。諸君、私はおっばいが好きだ。巨乳が好きだ。隠れ巨乳が好きだ。爆乳が好きだ。小生意気なおっばいが好きだ。自己主張の強いおっばいが好きだ。我儘なおっばいが好きだ。暴れん坊なおっばいが好きだ。弾んだおっばいが好きだ。派手なおっばいが好きだ。けしからんおっばいが好きだ。ベツトで、布団で、畳で、床で、屋外で、校内で、社内で、車内で、草むらで、林で、廃墟で、ホテルで、揉んで、挟んで、擦って、吸って、埋めて、この地上に存在するあらゆる大きなおっばいを愛するのが大好きだ。戦列を並べた巨乳戦士が」

「いい加減にしるよ大貴。話が進まねえ」

「なんだよ劉真。今いい所だったんだから邪魔するなよ」

「放っておいたら美波との待ち合わせに遅れてしまうからな。効率よく行こうぜ」

「仕方ねえな。それじゃあ、挨拶代わりにジークおっぱい!!」
『『『『オールハイルおっぱい!!!!!!』』』』

彼らは文月巨乳愛好会。烏丸大貴を頭目とし、男の浪漫を追及する
為日夜妄想に励んでいる変態　　もとい紳士の集団だ。

指揮をとっている大貴の隣で苦笑している少年は『かなつぎりゆうま神無月劉真』。

自他共に認める面白い事大好きな少年であり、大貴の同志（巨乳好き）だ。

主に巨乳の事となると暴走して我を忘れる大貴のブレーキ役を担当
している。

「それでは近々行われる貧乳少女応援団との抗争に向けて作戦会議
を行う」
フリーフィンゲ

スパーン!!　机に愛用のハリセン【小烏丸】を叩きつけて会議
が始まった。

本人は裁判官の持つ木槌　ガベル　のつもりだろうが、傍から
見たらバナナの叩き売りにしか見えない。挨拶り鉢巻きをしていれ
ば完璧だ。

「今回の議題はなんだった？」

「ああ。【巨乳と貧乳。どっちが素晴らしいおっぱいであるか】だ」

抗争といっても何も殴り合いや罵り合いをする訳ではない。

くどい様だが彼らは変態　　もとい紳士なのだ。

そのような野蛮な事はしない。

彼らには彼らの闘いのルールという物がある。

大貴達の指す『抗争』とは即ち『討論会』の事だ。

暴力は御法度。

何度でも言つが彼らは変た

じゃなくて紳士なのだ。

「まずは貧乳少女応援団の展開してくるロジックを予想してみよう」

「はい」

「はい劉真君」

拳手した劉真を大貴は【小烏丸】でビシッ！と指した。

「貧乳の素晴らしさとして第一に出てくる『育てる楽しみ』というのはどうだろう？」

「ああ。そのロジックについては真っ先に考えた。そもそも『育てる楽しみ』を挙げる時点で貧乳娘が巨乳娘にクラスチェンジする事を期待している、という事になる。その時点でそのロジックは貧乳肯定派としてはアウトだ！」

何故この男はその明晰な頭脳をこんな残念な事にしか使えないのだろう、と劉真は思うが敢えて口を噤んだ。テンションの上がついている時の大貴は意外に容赦がない事を熟知しているからだ。そして以前安売りを軽んじる発言をして【小烏丸】でシバかれ倒された身としてはもう二度とあの攻撃は喰らいたくない。

「貧乳の方が感度がいいってのは？」

「いや。ムツツリー二から教えてもらったんだが、胸を揉んで気持ちいいのは『乳腺を刺激するから』だそうだ。あ、乳腺ってのは胸の付け根辺りな。だから貧乳の方が乳腺に触れる可能性が高くなるから感度が高く見える。だそうだ。」

「（なるほど。それでか……）」

「ん？ 何か言ったか」

「いいえ。なんでも」

優子による制裁を加えられ大貴はたまらず絶叫。それを傍で見ていた劉真は彼のグロテスクな惨状に顔を真っ青にして涙目になっていた。

「美波、落ちていて俺の話を」

「ねえ、リュウ」

「な、なんだいハニー？」

「生きたまま脳髓引き摺りだされるか、生きたままハラワタをぶちまけられるの、どっちがいい？」

「待ってくれ美波！俺はヒロのバカに乗せられて」

「テンメエエエエエ！オレを売る気か！ここまで来たんだ一緒に逝こうぜコンチクショ ツ！！イデデデ無理無理無理！

！優子オレの首はそっち方向には曲がらない あーっ！！」

「さあ、覚悟しなさいリュウ」

「絶望した！殺されるしかない運命に絶望し ギャアアアアアアアアアア！！」

【文月巨乳愛好会】はその日のうちに木下優子、島田美波両名の活躍により解体された。

その事件がきっかけで【貧乳少女応援団】の間で優子と美波を崇め奉られる事になるのだが、それはまた別のお話。

少し短いので没ネタ集

その1

「玄武さん！サインください！」

プロ野球選手の竜馬の兄、神無月玄武に大貴サインをもらおう。

「友達の分も頼まれたのでお願いします！」

大貴大量に色紙を取り出しサインをもらう。
玄武去る。そろばんを取り出して

「さーて、いくらで売れるかなつと」

劉真表れて

「お前、最悪だあ……」

その2

劉真くんが貧乳派だったと予想して

「ふざけんな！ 巨乳は正義！ 爆乳は神だ！」

「それが正しいとどうしていい切れる！？」

「現に多くの人が巨乳を支持している！！ ジークおっぱい！ オ
ールハイルおっぱい！」

「少数派の弾圧が悲劇を生むことだってあるとなんでわからない！
マイノリティ？」

「多数派の意見が通り、少数派の意見が棄却されるのは民主主義の
基本原理だろうが！」

「だからってより良いやり方を模索しないのは怠慢だ！」

「あの二人、凄く高尚な事を言いあってるけど……」

「要するに巨乳派と貧乳派の言い争いじゃな」

「根本にある理由を知ってたら、これ以上くだらねえ論争はねえな
……」

「ムツツリーニお前はどお思う!? 断然巨乳だよな!？」
「康太! この巨乳主義者になんとかいってやってくれ!」
「……………巨乳も貧乳も、どちらも……………甲乙つけがたい……………!」
「ムツツリーニ!」
「康太!」

終

第9部開始 第110話 カラスは舞い降りた

N O S I D E

「お前が出てきたって事はオレは揺れてるのか？」
『その通りだ』

白亜の空間で大貴は思いつめた様に虚像に問う。
大貴の問いを受けて虚像は皮肉気な笑みを浮かべた。

『お前の言う通りオレは揺れている。烏丸修兵。アイツの存在によつてな』

「……………」
『圧倒的な才能。自分が努力し続けてやっと手にしたものを修兵はいつも簡単に手に入れる。お前の胸に渦巻く修兵への感情の正体を教えてやるう。それは嫉妬と怒りだ』
「……………」、そうかもな」

少し逡巡してから大貴は虚像の言葉を受け入れた。
恐らくそうなのだろう、という予感があった。

大貴は13歳の頃に目録を取得した。天源無想流最年少の目録。
その出来事は周囲に『烏丸大貴は天才だ』という認識を与えた。
しかし、事実は違う。

確かに大貴には類稀なる剣術の才がある。
それはあくまで『秀でた才』を有していると言う事だ。
だから彼は本当の意味での天才ではない。
烏丸大貴という人間の性質上あり得ない。

元々彼はあらゆることにそれなりの才を持ち合わせている。なにをやってもそれなりの結果を残す。例えるなら十得ナイフのような存在だ。

だが、そのどれも得意分野を極めた人間には遠く及ばない。

策士として坂本雄二に及ばない様に。

勉学で姫路瑞希や霧島翔子に及ばない様に。

身体能力で土屋康太に及ばない様に。

行動力で吉井明久に及ばない様に。

剣術の才で沖田静馬や烏丸修兵に及ばない様に。

決して一番にはなれない。

万能型と言えは聞こえはいいが、要するに烏丸大貴は器用貧乏なのだ。

何でも出来る代わりにどれも極める事の出来ない根からの二番手。

自分が先頭に立つよりも先頭に立つ人間をサポートする事で真価を發揮する。

それでも剣術に関して『天才』と呼ばれるまで至る事が出来たのは沖田弦馬、烏丸修介、沖田竜馬といった優れた師の元で血反吐を吐く程の努力を重ねた結果だった。

彼は少なくとも『天才』という称号にはあまり興味がない。

言葉の意味を正しく理解しているつもりだった。

天才という言葉は努力を隠す。

天才と呼ばれる人間は須らく努力に努力を重ねて、その上に更に努力を出来る人間が大成した結果を第三者からその称号を与えられると思っていた。

しかし真の天才には及ばない事を烏丸修兵の存在によって思い知ら

された。

努力は才能を凌駕する事は出来ない。大貴はそれを他でもない静馬と修兵によって嫌というほど見せつけられている。悔しくても、それが現実だ。

「ム力つくなあ……………」

ぼそりと大貴は呟いた。

『そうだろう。だから、アイツを潰そう。それがオレがオレである為』

「ホントにム力つく。何でも思い通りになると思ってるアイツが。

……………何でも出来る癖に諦めているアイツが」

『え？』

虚像は呆気にとられる。大貴の眼にはかつてのような仄暗い光は宿っておらず、表情は穏やかなものだった。

「アイツが何でも出来るんだったら咲があんなになる前に暗闇から助け出す事だつて出来た筈だ。それでも、アイツは何もしなかった。

……………いや、出来なかった」

『……………』

恐らく烏丸本家の負の連鎖。それに囚われてしまったのだろう。

もう、終わりにしなければならぬ。

こんな悲しい事は終わりにしよう。

ずっと続いてきた負の連鎖はここで断ち切る。その為には

「オレは修兵から逃げる訳にはいかない」

すべてを変えていかなければならない。

自分には烏丸本家を変えるだけの影響力はない。

あの家を変える事が出来るのは、大貴ではなく次期当主である修兵だけだ。

正直、まだ本家を憎む気持ちはある。だが、あそこは咲の帰る場所だ。

疎まれ続けながらも、未来に向かって歩き出した彼女が安心して帰れる様に。

いつまでも過去のこと拘り続けて、また負の連鎖を続けたくない。そしてなによりも、

『どうしようもなくなってる……！ アンタは……！ 他の誰がアンタを否定しても……！ アタシはアンタの 烏丸大貴の事が好き！ 秀吉達だってそう！ そうよ！ アンタは アンタが思ってるような人間じゃない！ 人の痛み真剣に考える事が出来る人間よ！ だから……そんな悲しい事……言わないで……！ アンタは……ここにいていいの！ いてほしいのよ！』

「格好悪い所、みせたくないよな」

自分を変えてくれた優子の為に。

自分に幸せをくれた弦馬と千鶴の為に。

自分を見守ってくれた沢山の人の為に。

烏丸本家に帰る咲の為に。

これから生きる静馬の為に。

そして自分自身がその人たちと共に、これから生きる為に。

「やるぞオレ。力を貸せ」

『……………拒否権は？』

「ある訳ないだろ」

そう言つて大貴は不敵に笑う。その顔を見て虚像は儂く笑い、静かに消えていった。

そつだ。才能を理由にして諦めてたまるかよ。

大貴は知っている。

負けると結果がわかつていても挑み続けた諦めの悪い優しいバカを。例え周りの人間に無謀だ、と嘲笑われても全力で走り続ける強いバカを。

そしてそつというバカが最期に勝利を掴んだ瞬間を。

大貴は思う。

最初から高すぎる目的を『やるだけ無駄だ』と諦めてしまう事が『賢い』という事なら、自分は最期まで足掻き続ける諦めの悪い『バカ』で在りたい、と。

「さて、やるとしますか」

穏やかな笑みを浮かべたまま大貴は一步踏み出した。

.....

「おはようじゃ雄二」

「おう秀吉か。おはよう」

Fクラスの同士討ちが収束してから一夜が明けた。代表である坂本雄二は木下秀吉と共に馴染みのボロ教室へと向かった。

「それにしても雄二よ。昨日は災難じゃったな」

「ま、災難と言えは災難だが、追い回されるのは慣れていからな」
「それもどうかと思うのじゃが……」

秀吉のいたわりの言葉に雄二は苦笑しながら答える。それに釣られて秀吉も曖昧な苦笑を浮かべた。

「むしろ俺たちが追い回されたことなんかより、今日の試召戦争が心配だ。なにせ同士討ちだったから随分と戦力が削られちまった」
「同士討ちじゃったからのう……」

少ない戦力が更に削られてしまった。だが、依然苦しい状況でも雄二の眼は死んでない。

彼はこの状況でも活路を見出していた。

「今日の俺たちの勝負は我慢の状況が続くことになる」

「我慢の状況という？」

「前半はずつと守りを固める予定だ。補充と勝負を繰り返すキツい展開になるな」

「補充と勝負の繰り返し……。それは気合を入れねばならんな」

補充試験。それは精神的にも体力的にもかなりの消耗が予想される。Fクラスの生徒がどれだけモチベーションを維持できるかが勝利のカギを握る事になるだろう。そして、鍵を握るのはもう一人。

「よしお前ら、フリーファイティング作戦会議を始めろぞー！」

教室に入り雄二はよく通る低い声で呼びかけた。

.....

.....

「そついや、明久とヒロがまだ来てないな」

作戦の説明を始めようとした雄二は教室に見慣れたバカな相棒（本人否定）吉井明久と事実上副将ポジションにいる烏丸大貴がいない事に気が付き怪訝な顔をした。

「.....ヒロは昨日の騒ぎで限界まで力を使い過ぎてリタイア。今日中に復活は難しそう」

「そうか.....」

「なんだか烏丸には悪いことしちゃったわね.....」
「.....反省」

完全に自分達の引き起こした騒ぎのとはっちりを受けた形になる大貴に申し訳なさそうにする。常に損な役回りになってしまふのは彼の運の悪さとなんだかんだ言っただけで面倒見のいい所が原因なのだろう。

「あいつにはCクラス戦はゆっくり休んでもらってAクラス戦を万全の状態を迎えてもらおう事にしよう。姫路、明久はどうした？」

「えっと.....明久君は風邪を引いちゃったみたいで.....。今日はお休みなんです」

「.....、バカ野郎が。あれだけ飯には気をつけるって.....」

「断り切れんかったのじゃろうな」

「.....合掌」

あの明久が風邪程度で試召戦争を欠席する筈がない。それならば、原因は他に在ると考えるべきだ。

生憎『他の原因』に心当たりがあり過ぎる雄二、秀吉、康太の三人は星になった友人を想いそつと涙する。

「だが、明久の強みは『いなくなっても戦力が減らない』という点だ。問題ない」

「それは『いても戦力にならない』という言葉と同義じゃと思うが……」

秀吉のツツコミを華麗にスルー。

雄二は口ではそう言うが、明久がないというのはかなり痛いと内心臍を？んでいた。

彼は点数が低い為、攻撃力はあまり期待できないが『召喚獣の操作にかけては学年一の技術を持っている。普段バカにした言動が多いがなんだかんだで明久を相棒として一番信頼しているのは雄二自身なのだ。』

しかし、いないものを嘆いていても始まらない。

彼らが戦闘不能になって戦力半減していたとしても敵は待つてくれない。今ある戦力だけで凌ぐしかないのだ。

雄二は気を取り直して作戦会議を再開した。

「今日の試召戦争の肝は補充試験だ。可及的速やかに昨日の騒ぎで失った点数を補充するぞ」

昨日の同士討ちによってただでさえ差のある点数が更に落とされてしまった。これは彼らにとって由々しき事態だ。何をするにしても、点数がないことには作戦の立てようがない。

「して、具体的にはどういった作戦になるのかの？」

「おそらく敵は開幕と同時にこつちへと押し寄せてくる。そこに消耗しているこつちが対抗したところで勝ち目はない。そこで、こちらは一とまずFクラスに籠城する。戦闘区域を狭い教室出入口の

二箇所に絞ることで消耗を抑えつつ、教室内で補充を済ませるってワケだ」

敵の狙いは短期決戦。Fクラスの点数補充が終わる前に決着をつけたいと考えているだろう。それが無理ならせめて此方が身動きを取れないように動きを封じ込めようとするはずだと雄二は当たりをつける。

向こうの思惑に乗る形にはなるが、籠城戦なら時間を稼ぐのにもってこいの状況だ。

「こっちは点数もそうだが、人数減っている。向こうと同じように『消耗したから下がって補充』なんてやっていたら勝ち目はない。だから、こっちは持つている点数をギリギリまで使い切る」

「使い切るって、戦闘不能になる寸前まで戦うということかの？」

「それもある。が、それだけじゃ足りない。だから戦闘不能寸前になってもすぐに補充にうつったりはせず、勝負の科目を切り替えるようにする。そうしたら同じ人間がまた戦うことができるからな」

「科目の切り替えって、どうやって？」

雄二の言う科目の切り替え方法に見当がつかず、美波が怪訝そうに尋ねた。

勝負科目を変えるには一度その場の戦闘に決着をつけ、勝負を完結させなければならぬ。勝負が完結していないのに、召還フィールドから出ようものならその時点で敵前逃亡として強制的に補習室に連行されるだろう。

「そこで、姫路の攻撃力の出番だ。全科目において満遍なく高い点数を保持しているから、その高い点数でフィールド内の敵を一掃して即座に教師に科目の変更を要請するつもりだ。姫路、やれるか？」

「はいっ！ 任せて下さい！」

気合いの入った瑞希の返事に雄二は満足げに頷いた。このCクラス戦で勝負の鍵を握るのは彼女だろう。

満遍なく高い点数を誇る彼女には安定した強さがある。

そして、Fクラスのエースである瑞希の活躍は味方の志気を上げるのにはもってこいなのだ。

これは同じく安定した点数を持つ烏丸大貴にはない姫路瑞希にしか出来ない仕事だ。

「切り替えの時に姫路が出るということは、防衛の主体は別の者がやるというわけじゃな？」

「ああ、そうなる。開幕直後はムツリー二と島田を中心に組み立てる予定だ。前方出入り口を保健体育でムツリー二に、後方出入り口を数学で島田に防衛してもらおう」

「相手次第だけど、ウチは保って二、三十分くらいね」

「……………俺も長期戦には自信がない」

美波と康太は冷静に自分の戦力を分析して雄二に報告する。

理想を言えば、防衛の主体には明久と大貴が欲しかった。

明久は多人数相手に逃げ回り手玉に取るだけの操作技術。

大貴の召還獣の腕輪の能力【自爆】は足止めや攪乱戦でこそ真価を発揮する。

雄二は改めて彼らの不在の痛手を噛み締めた。

「私、明久君の分まで頑張ります！ そう、約束しましたから」

雄二は瑞希の眼をジッと見やる。

彼女の瞳には強い意志の光が宿っていた。それを見極めて雄二のプレッシャーが少し和らいだ。

今の姫路瑞希になら、クラスの命運を任せても大丈夫だ。だから、自分は安心して指揮をとることが出来る。

「よし。それじゃ、それぞれ持ち場についてくれ」

雄二がそう締めると、それぞれ自分の成すべき事に向けて動き始めた。

.....

遅刻届を鉄人こと西村教諭に届け出た吉井明久は激戦区になっているであろう教室へと向かって走っていた。

遅刻届の理由に『青春』と書いて『エロ本を拾っていて遅くなった』と勘違いされたのは自分の社会的名誉の為に黙っておこう、と心の中で固く誓う。

これ以上、不名誉な噂を流されてしまえば本気で心が折れてしまうかもしれない。

目的地が見えてきた。馴染みのボロ教室。Fクラスだ。

予想通り激戦地になっていた教室周辺の様子を少し離れた位置から窺って見る。

『一気に押し込み！ 所詮相手はFクラスだ！』

『補充を終えた連中が来たぞ！ 前線で消耗したヤツは入れ替われ！』

『了解！ あとはよろしく！』

遠目から見てもFクラスがCクラスの猛攻を前に押されているのが良くわかる。

当然と言えば当然だ。ただでさえ相手の方が総合点数が高いのに、

昨日の同士討ちによって点数差が更に広がっている。騒ぎを納める事が出来てもその傷跡は決して浅いものではない。自分達は、大怪我をしたままスタートラインに立ったようなものなのだ。

防衛線が崩壊しないこと事体、不思議なくらいだと彼は思う。

「た、助けてくれ福村！ 俺もうあと12点しか残ってないんだ！

このままじゃ補習室に連行されちまうよお！！」

「こつちも一杯一杯だ！ 今ある点数で何とか凌げ！」

「っていつか、お前最初から20くらいしかなかっただろうが！」

明久はFクラスの生徒達の悲鳴を聞いて悩む。

自分が今いる場所は丁度Cクラスから死角になっていて奇襲をかけるにはもってこいのベストポジションだ。

しかし、彼には昨日異端審問会に襲われた事で点数が残っていないかった。

奇襲をかけたとしてもその圧倒的物量を前に押しつぶされるだろう。様子を窺うべきか。それとも、玉砕覚悟の突撃か。

考えていると、Fクラスの仲間たちが明久の存在に気付いたようでアイコンタクトを送って来た。

きたのか吉井！

お前がこんな大事な日に休むわけないよな！

共に戦おうぜ、吉井！

彼らの眼がそう語りかけてくる。

その視線を受け止めて、明久は覚悟を決めた。

……………、別にそこまでする義理はないんじゃないかな。

よくよく考えてみれば明久の点数がここまで減少した理由は彼ら自身にある。

例えここで彼らが戦死しても、それは自業自得ではないだろうか。と明久は考える。

「よし、見捨てよう」

そう決断してからの明久の行動は速かった。回れ右して走り去る。しかし、それを許さないのが彼らFクラスの信条だ。

『吉井い！ Fクラスの吉井明久あつ！！ 助けてくれ、俺達はこちらこそ！』

『おいCクラス！ 俺達なんかにつまみついてないでそこにいる吉井を攻撃した方がいいぞ！！』

『そうだ！ ヤツは坂本から何かしらの密命を受けているぞ！ 恐らく重傷人物の筈だ！』

「ちいっ！ 流石は僕のクラスメイト達だ！」

生贄にされまいと明久はダッシュダッシュ。右足と左足を限界以上の速さで回転させてスタコラサッサと逃げていった。

.....

「さて、どうしようかな」

冷静に考えると今の状況は良くない。むしろ最悪に近いといっても過言ではない程だ。

「こんな時にヒロがいてくれたらいいんだけど……」

あの腹黒い癖に妙に義理堅い友人は自分で『最悪の状況をひっくり返すのは得意分野だ』と豪語するだけあって追い詰められれば追い詰められるほど強くなる。

こんな時には非常に頼りになる仲間だ。

「どこか他に合流できるルートは……」

敵の存在を警戒しながら慎重に先に進むある女子生徒の姿が彼の眼に飛び込んできた。

明久は反射的に彼女の死角に身を隠して様子を窺う。

間違いない。彼女はCクラス代表『小山友香』だ。

友香が空き教室に入っていったのを確認してから明久も慎重に教室の前に忍び寄る。

扉に耳を当てて中の様子を窺うと話し声が聞こえてきた。

『あの先輩、今朝相談した事なんですけど』

『Fクラス対策ですね？ 聞いてきましたよ』

『すいません。忙しいこの時期に』

『構いませんよ。今三年は自習期間になっていますからね。それで現状はどんな感じですか？』

『相手を教室まで押し込んだのはいいんですけど』

『代表までは至らない、と』

『はい。しかも学年次席レベルの女子がやけに張り切ってます、思う様に勝負が出来ていません。坂本がどういう手を打ってくるかも不安ですし、烏丸が姿を見せない事も引掛かります』

『烏丸君の事は心配しなくても大丈夫でしょう。「修兵」さんが言うには、彼は昨日の騒動で「無想」という技を使い過ぎてしばらくは動ける状態ではないだろうという事です』

『「無想」？ なんですかそれは？』

『詳しい事は分かりませんが、彼らの納めている武術の奥義だそうですね。使い過ぎれば使用者の心身のバランスを崩して、まともに動ける状況ではなくなるという弊害を併せ持っているそうです』

『……そうですか』

『学年次席クラスの女子については大きな障害となるレベルですか？』

『現状では彼女をどうかしない限り、なんの手も打てないと思います』

話を聞いている途中でふと気付く。今、小暮葵は『対策を聞いてきた』と言っていた。

まさか、彼女は黒幕ではないのではないか。という疑念が生まれる。どうにも気持ち悪い。

何か試召戦争の裏で何かが蠢いている様な、そんな感覚を明久は感じ取る。

『そうですか。では、そちらの対策は後ほど。とりあえず今は他の人達について話しましょう。具体的な案ですが』

『はい』

『他のクラスに協力して貰う、というのはどうでしょう？』

『他のクラス、ですか？』

『はい。共同戦線というものです。協力してもらえそうなクラスはありますか？』

『難しそうです。昨日のうちに烏丸がDクラス、Eクラスに根回しを済ませて不可侵条約を結んだ、という情報がありますから』

『烏丸大貴。つくづく厄介な子ですね。上手く坂本くんの足場を固めて彼が指揮に専念できるように背中を守っている。修兵さんの要望でなければ真っ先に無力化しておきたかったですか……』

『すみません』

『友香さんが謝る事ではありませんよ。……Bクラスはどうでしょう？ 確か以前代表とお付き合いをしておきましたよね？ 確か最後に唇を強引に奪われて頬を張って別れたという』

『その話は思い出させないでください』

『でも、絶交という訳ではないのですね』

『ええ。辛うじてですが』

『結構です。それではBクラスに協力をして貰いましょう』

『えっと……具体的には？』

『Bクラスにも何処かのクラスと戦争を始めてもらいます。そして、そちらでの使用科目に指示を出します』

『使用科目に指示、ですか？』

『はい。先生の人数には限りがありますから。相手が補充を終えた科目の教師は全員そちの試召戦争の立ち会いに行ってももらいます。そしたらいくら勢いがあるうとも低い点数で戦わざるを得ません』

『なるほど。こちらでもBクラスの相手が補充を終えた科目を優先的に使っていくという事でいいんですね？』

『そうなりますね。Bクラスを吹き付けるとなると、相手はやはりAクラスでしょうか。どうですか？ Bクラスにそのような動きはありますか？』

『一応そういう動きがあるような……。でもいくらなんでもBクラスの実力でAクラスに挑むのは無謀に思えるのですけど……』

『もしかしたらBクラスの代表が貴女をもう一度振り向かせたいと思っているのでは？ 「頭の良い人が好き」という話を以前したのでしよう』

『え？ まさか』

『可愛いじゃないですか。一途で』

『まあ……、悪い気はしませんけど……』

明久は悪巧みの内容を自分なりに噛み砕いて、考え、今ようやく理解して眼を見開いた。

彼女達の策はFクラス、Aクラスにとってはよくない話だ。そして、Aクラスの相手はBクラス。

まともに正面からぶつかればAクラスがBクラスに負ける事はないが、代表同士の相性が悪過ぎる。

Bクラスの代表はあの『卑怯者』と名高い根本恭二。

彼ならAクラスのアキレス腱である霧島翔子を無力化する為に彼女が何より大事にしている『坂本雄二との絆』ですらダシにして姦計を巡らせるだろう。

そうなれば雄二関係では冷静な判断が出来なくなってしまう彼女は精神的にも肉体的にも追い詰められる事になるのは火を見るよりも明らかだ。

『そしたらあなた達はFクラスに勝ち、BクラスはAクラスとの差を詰める事が出来る。双方に損のない理想的な取引ではないですか』
『確かに……』

明久はすぐに立ち上がった。Aクラスに危機を伝える為に。

しかし、ここで彼は重大なミスを犯した。

話を聞いて理解する事に意識を向けすぎて、周りの警戒を怠ってしまったのだ。

『ん？ あれは 吉井じゃないか！？ おい、吉井がいたぞ！！』

『なんだと！？ 今日休みだつて情報は嘘だったのか！？』

「しまった！」

あつという間に前から来た2人に進路を塞がれて、教室から出てきた小山と護衛の生徒1人に退路を塞がれて囲まれた。

「コイツ、今の話を聞いて ！？」

「……………拙いですね。この時間に登校してくる参加者がいるとは思いませんでした。……………つくづくイレギュラーの多い子ですね。烏丸君とは違う意味で厄介です」

「とにかくここで始末します！ 戦死すれば連絡はとれなくなりま

すから！ みんないくわよ！」

『『『『了解！』』』』』

どうやら見逃してくれる気はない様だ。明久は覚悟を決めた。

「^{サモン}試獣召喚！！」

相手より先に召喚獣を呼び出し、いつでも戦闘を行えるように木刀を構える。

『^{サモン}試獣召喚』

日本史

Fクラス 吉井明久 121点

Cクラス 榎本克彦 115点

幸いにも使用教科は彼の得意科目の日本史。それならばこの場の突破は不可能ではない。

『神戸慎も参戦します！ ^{サモン}試獣召喚！』

『同じく新沼京子いきます！ ^{サモン}試獣召喚！』

『くたばれ吉井！』

「おっと！」

神戸の召喚獣が繰り出す攻撃を明久は器用にも身を沈めてかわす。

同じく100点台の小山の召喚獣ならこの一撃で戦闘不能に出来るだろう。

木刀が小山の召喚獣の頭部に吸い込まれていく。勝った！ そう思った瞬間だった。

「いけませんよ、小山さん」

その声と同時に小山の召喚獣が突如として姿を消して、勢い余った明久の召喚獣は感性のままに地面に転がっていき顔面に激しい痛みが彼を襲う。

「な、何が……っ!？」

見れば小暮が小山の腕を引いて召喚フィールドの外に連れ出していた。

「代表は滅多な事では召喚獣を出してはいけません。どんなに優勢でも貴女が負けてしまえばそれでお終いなのですから」

やられた！ 明久は悔しさを力いっぱい拳を握る。

小山の意志で逃げた事にならない以上、敵前逃亡は適用されない。ルールのにはグレーゾーンだが、反則にはならない。

日本史

Fクラス 吉井明久 13点

瀕死になった明久の召喚獣をCクラス勢の召喚獣が抑え込む。

「すみません先輩。助かりました」

「いえ。これも可愛い後輩の為ですから」

「ありがとうございます。今後は更に慎重に行動する様に気をつけます」

小山は小暮に一礼してから明久に向き直る。

「さて、あなたには悪いけどここで退場して貰うわよ」

小山の指示で榎本が武器を振り上げる。

やられる！

そう思った直後。

「試獣召喚サマモン」

声と同時に投擲された槍が榎本の召喚獣の腹を貫き戦死させる。

明久は反射的に槍が飛んできた方向に視線を向ける。

そこには

見慣れた漆黒の吊り眼は敵である小山友香を見据えていた。

カラスの濡れ場を連想させる流麗な黒髪は勿体なくも相変わらずボサボサになっている。

そして地味ながらも整った顔立ちは不敵な笑みを浮かべている。

「よお、小山。面白そうな事やってるな」

軽い調子で声をかける彼を小山は憎々しげに睨みつけた。

「烏丸……、大貴……!!」

「オレも混ぜろよ」

カラスと呼ばれる少年は再び戦場に舞い降りた。

第9部開始 第110話 カラスは舞い降りた（後書き）

カラス再始動です。お待たせしてしまつてごめんなさい。

お詫びも兼ねて2話同時投稿です。

これからもよろしくお願いします。

第111話 レッドゾーン

N O S I D E

「オレも混ぜろよ」

日本史 Fクラス 烏丸大貴 403点

予想外だ。と小山友香は齒噛みする。

まさかここで烏丸大貴と遭遇するとは思ってもみなかった。

しかも今展開している召喚フィールドは日本史。大貴の最も得意とする科目だ。

400点オーバーの生徒のみ使えるという【金の腕輪】。

彼の腕輪の能力は【自爆】。自身の全点数と引き換えに相手の召喚獣を必ず殺傷するという極悪な能力。しかも範囲は自身の残り点数に比例する。

今この場で勝負を挑まれたら自分は確実に討ち取られる。

と、彼女の冷静な部分が告げる。

「ヒロ！」

「よう、明久。随分酷い恰好じゃないか。新しいプレイに目覚めたのか？」

「そんなわけないじゃないかっ！」

「まあ、どうでもいいや」

「よくないよ！ これ以上僕に変な噂が立つたらどうしてくれるのさ!?!」

「それこそ今更だろ。それより、ちょっと今から痛い思いするだろ

うから先に謝っとく。悪い」

「ワオ、謝罪の言葉が軽い」

会話から察するに彼は【自爆】を使う気満々だ。

彼女は急ぎ状況打開策を考えるが、大貴は待つてくれない。

「Fクラス烏丸大貴。小山友香に勝負を申し込む！」

日本刀を鞘に納めたまま胸の前に掲げた。

【鞘の中の勝】。天源無想流で大貴が納めた防御からの後の先を主体とした構え。

大貴は鉄壁の防御で近づき、自爆で一気に決めてしまつつもりだった。

「ッ！」

勝負を挑まれ受けるべきか、逃げるべきか迷い固まる小山。

勝負を受ければ自爆で決められる。逃げれば敵前逃亡でお終い。

なんとか戦闘を回避できる方法はないのか、と考えるが一向に有効な手だてが浮かばない。

その様子を見ていた明久は勝ちを確信した。

しかし、そこで邪魔が入った。

「本当に厄介な子ですね」

「どうも、小暮先輩。今回の騒動ではホントに色々お世話になってこんな所でお揃いでまた悪巧みですか？」

「勿論です。ですが、その計略を成功させるにはあなた達の存在は邪魔以外の何物でも在りませんね」

「それなら、オレをここで討ち取ればいいでしょう？ 数の利ならCクラスにありますよ？」

「ふふ。そうさせて頂きましょう」

『Cクラス神戸慎。小山の代わりに受ける!』

『同じく新沼京子、行きます!』

「このお二人が小山さんの代わりにあなたのお相手をさせて頂きます」

言うと同時に明久を押さえていた神戸の召喚獣が大貴の召喚獣に攻撃を仕掛けた。

大貴は振りろされる武器を鞘で受け止め、抜刀、
両断しようと襲いかかる。だが、

『動きが粗い!』

バックステップで居合による一閃を回避。攻撃の間隙を縫って神戸が武器を振り下ろす。

それを大貴の召喚獣は鞘で軌道を捻じ曲げて床に押さえつけた。

「チッ」

大貴の動きに精彩さがなく、苦戦を強いられる。
その間に小山と小暮は何処かに姿を消していた。
右腕一本で振るう刀を神戸はスウエーで回避。一旦距離を取った。

『ハア、ハア………』

「厄介な………」

大貴と神戸。相對して相手の隙を窺う均衡状態。
お互いに下手に動く事が出来なかった。

新沼京子もその空気に当てられ、2人から眼が離せない。
しかし、均衡を崩したのは彼女だった。いや、正確には彼女の行動

が均衡を崩す切っ掛けになった。

「緩んでるよ！」

「え？」

明久は自分を押さえつけていた新沼の召喚獣の力が緩くなったのを察知して腕をずらして巧みに脱出。木刀で滅多打ちにして彼女の召喚獣を戦死に追いやった。

「なっ！？」

「明久合わせてくれ！」

「オーケー、任せて！」

大貴は神戸に鞘を投げつけて隙を作り出す。同時に明久が駆け木刀で武器を打ち据えて体制を大きく崩す。そのまま大貴は日本刀で両断。神戸は戦闘不能にした。

「フウ、何とかなったね」

「小山には逃げられちゃったけどな」

「それでも助かったよ」

「ところで明久。お前はここで何をしていたんだ？」

「ちよっと遅刻しちゃって。ヒロは？」

「オレも遅刻だ。……………！」

「どうしたの？」

「悪い。どうにも限界みたいだ」

「え？」

大貴の体が傾き、床に倒れ伏した。

「ちよっ！？ ヒロ、どうしちゃったの！？」

明久は慌てて倒れた大貴を抱き起す。体が熱を持っており眼を見開いた。

「こんな状態で……!?」

動きに精彩さが欠けていた理由に納得がいった。寧ろこんな高熱がある状態で動いていたこと事体が滅茶苦茶な事だ。

流石大貴。あの人外一家の一員だけの事はある。と、明久は一人で納得してしてから大貴を背負ってその場を後にした。

小山が増援を送り込んでくる前に逃げなければいけない。

だが、気絶した人間1人を抱えて逃げるのは意外に難しい。案の定、明久は倒れた大貴を運ぶのに難儀していた。

息を切らせながらやっとの思いで階段を下りて新校舎まで移動した。階段を降りるときに大貴を落としてしまった事はここだけの秘密だ。

「ここからどうしよう……?」

自分にはほとんど点数が残っていない。その悪知恵　もとい明晰な頭脳をもって数々の逆境を跳ね返してきたドラ　もん　訂正。大貴は戦闘不能。

Cクラスとエンカウントしたら、確実に殺られる。

「Fクラスの皆と合流出来たらいいんだけどなあ……」

しかし、合流する為には先ほど見たあの包囲網を突破しなければならぬ。

今の状態でそれは難しい。いま自分が突撃したとしてもあの分厚い壁を突破できずに潰されてしまう事は眼に見えている。それなら今やるべき事は

「 BクラスとCクラスが手を結ぶのを防ぐことかな? 」

声に出して、やるべき事を明確にする。

Fクラスの状況は悪いが、指揮をとっているのは『坂本雄二』だ。普段は憎たらしい事この上ないが、彼の力量は自分が良く知っている。

このくらいの危機なら、何とかする筈だ。

だから、吉井明久が心配する事はそちらではない。

今、自分にしか出来ない事を全力でやる。

「 …… 吉井? 」

「 つつつ! ? 」

背後から聞こえてきた声に明久は心臓を掴まれた気分になり飛び退いた。

.....

大賣SIDE

『 つまり、Bクラスがアタシたちのところに攻めてくるってわけね? 卑怯な作戦のオマケつきで』

『 うん。そういうことなんだよ』

ああ、クソ。怠い……。

思考に霧がかかっている。

感覚が鈍い。

体に力が入らない。

けど、なにか心地よい気分だ。
まるで姉さんに抱きかかえられてるような独特の安心感。
ゆっくりと目を開く。
蛍光灯の白い光が網膜を刺激する。

「あ、起きたの？」

「……うん。おはよう、……姉さん……」

「……え？」

「……ん？」

一気に意識が覚醒した。

「え？ あれ？ ん？」

混乱。混乱。大混乱。

起き上がって視界に入って来たのは眼を真ん丸にしている優子。

見てはいけないものを見てしまったような顔でそっと眼を逸らす明久と久保。

必死に笑いをこらえている工藤。

いつも通り無表情の霧島だった。

「ええつと……、優子。オレ今……」

「ア、アタシは何も聞いていないわよ！？ うん！」

だんだんと混乱していた思考が収束し始める。

そして自分の言った事を少し遅れて理解した。

同時に顔面に血が上ってただでさえ熱い体が更に熱を持った。

「う、わ、あああああ！！」

「ぶくくくく。烏丸君可愛い」

「……意外な一面を見た」

工藤と霧島の生温かい視線が痛い、そつと眼を逸らして「僕たちは何にも見なかった」という空気を出している明久と久保の優しさも痛い！ 優しさがこんなにも人を傷つけるものだったなんて！

「いつそ殺してくれ！」

「落ち着きなさい！！」

「あべしっ！？」

ゴン！ と、頭部に衝撃が奔る。優子に拳骨を落とされた。

「話が進まないでしょ。もう！」

「そうは言うが、これは自他共に悪役が似合う男であるオレのイメージの死活問題 って待て。なんでお前らがここにいる？」

「なに寝ぼけた事を言ってるの？ ここはAクラス。アタシたちの教室よ」

グルリと周囲を見回した。

電子黒板。快適なシステムデスク。ドリンクバー。豪華な絨毯。リクライニングシート。そしてオレの寝ているフカフカのソファ。成るほど。ここは確かにAクラスだ。

ピピピピ と脇の辺りで音が鳴った。

「あ、体温計挟んでるから」

「あ、そうなのか」

首のあたりから手をつ突っ込んで体温計を取り出した。

「38度6分……。少し下がったか」

「来る時は何度だったの？」

「39度2分」

「良く動けたわね」

「オレは39度5分までなら行動可能」

フフン、と勝ち誇るオレを見て優子、明久は呆れ気味にこつちを見る。

「ヒロ、君バカでしょ……」

「お前にだけは言われたくねえよバカ。で、ここまで来た経緯と状況を教えてくれ」

「アンタそんな体でまだ無茶する気！？ 寝てなさい！」

「悪いな優子。それは出来ない。明久の様子を見るに相当拙い状況みたいだし、オレだけ寝てる訳にはいかねえ。戦力にならなくても、弾避けくらいには利用価値はあるだろうし、【自爆】を持っているオレが動いてるってだけで相手にプレッシャーを与えられる筈だ」

「……………」

「話してくれ。今の状況を」

……………

「……………、予想はしていただけど本当に拙い状況だな」

「だよね」

明久から小山と小暮先輩の悪巧みを聞かされ眉間に皺が寄る。

「と、なると有効な対抗策は　メッセンジャーを潰すこと」

「なるほど。前のDクラス戦で使った手だね？」

「そうだ。そうと決まれば早速行こう。　悪いな、世話になった」

「待つてくれ烏丸君。僕らも協力させてくれないか？」

久保が知的に眼鏡のツルを押し上げ、協力を申しでて来る。

「本当に！ 助かるよ久保く　！」

「それは駄目だ。そう言うてくれるのは本当に気持ちは有り難いが、これはFクラスの試召戦争に関わる問題だ。下手に関わったらお前らに迷惑をかけかねない」

試召戦争に他クラスが介入するのは明らかなルール違反だ。協力を取り付ける事が出来ただろうが、オレはルールの範囲でしか策をたてる事が出来ない。

どんなに不利になるうが、その申し出を受ける事は恩を受けた相手への迷惑をかける事になる。

オレの主義は『恩も恨みも忘れない』。恩を仇で返すなど、もつての外だ。

「大丈夫だよ烏丸君。ボク達がするのはあくまで手伝いだけ。実動は君たちにして貰うからルール違反にはならないよ」

「いや、けどな……」

「……私はFクラスを助けない」

「そうは言っても……。優子からも何とか言っただけでいい」

「アタシ個人の意見はヒロ寄りだけどね、代表が手伝うって言うてるんだからいいの」

「……………」

「ヒロ、手伝ってもらおう。僕達だけじゃ状況をひっくりかえせるかどうか、怪しいよ」

「……、わかった。優子、霧島、工藤、久保、……お前達に感謝を」

そう言って頭を下げた。この借りは必ず返す。心にそう誓う。
そうとも。オレは恩も恨みも忘れない男だからな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6134/>

バカとテストと召喚獣～文月学園のカラス～

2012年1月6日16時52分発行